

ワークショップ・人間と表現		前期 2 単位	1年
(子ども学コア科目) 出会いと発見 発見する身体、感受する身体 そして発信する身体へ		久保 制一 (くぼ せいいち) 廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	自由に感じ、考え、自らの問を発するという大学での学びの方法を確立する第一歩としてワークショップ形式のこの科目は、子ども学科コア科目として位置づけられている。多様な表現の可能性をさぐり、さまざまな表現の受容が出来るしなやかな身体性を獲得する。ワークショップを体験するなかでホンモノの表現との出会いを自己の頭脳と身体とところで感じ知覚し、心豊かなコミュニケーションマインドを体得することができる。		
授業の概要	第一線で活躍のゲスト講師によるオムニバス形式のワークショップ。多様な表現の基礎と方法に出会い、感性を研ぎ澄まし自らを発見し全身の感覚を駆使して身体を解放し頭脳とところの耕しをして、これからの大学での学びである耕しと種蒔きに備える。動きやすい服装を推奨。毎回ポートフォリオを作成し提出する。(講師・日程は変更となる場合がある)		
授業計画	第1回	イントロダクション 出会いと発見	久保 制一 (廣田)
	第2回	遊びとの出会いと発見	柏木 陽 (久保)
	第3回	五感との出会いと発見	和田 秀一 (久保)
	第4回	言葉との出会いと表現	小川Kenku郎 (久保)
	第5回	言葉との出会いと発見Ⅱ	小川Kenku郎 (久保)
	第6回	身体との出会いと発見	上村 なおか (久保)
	第7回	身体との出会いと表現 (身体技法)	上村 なおか (久保)
	第8回	自然との出会いと発見(別日程で学外授業)	新井 二郎 (久保)
	第9回	自然との出会いと表現(別日程で学外授業)	新井 二郎 (久保)
	第10回	ドラマとの出会いと発見	柏木 陽 (久保)
	第11回	ドラマとの出会いと発信	柏木 陽 (久保)
	第12回	空と雲との出会いと発見	廣田 道夫 (久保)
	第13回	身体と言葉との出会いと発見 (野口体操)	羽鳥 操 (久保)
	第14回	音とリズムとの出会いと発見	よしなか あつし (久保)
	第15回	アートとの出会いと発見	久保 制一 (廣田)
準備学習 (予習・復習等)	頭脳と身体とところを柔らかくしておく。		
テキスト	毎回ハンドアウトシート・ワークシートなどを配布。必ず保存しておく。 [ポートフォリオの編集と提出は試験期間中に行う]		
参考文献	適宜参考文献・ビデオなどを紹介する。		
評価方法	平常の授業への参加度:40% ポートフォリオ:60%		

子ども人間学概論		後期 2 単位	1年
子ども観の歴史的変遷 -西洋と日本-		伊藤 巳令 (いとう みれい) 鈴木 俊之 (すずき としゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義を履修した者は、1. 子どもに対するまなざしの変遷を歴史的に跡づけることによって子ども像の移り変わりとその時代背景を理解する、2. 人間的諸権利を根底にすえた現代子ども像についての多角的な考察を行い、子どもの人間的成長発達の意義を説明する、ことができるようになる。		
授業の概要	講義形式で行う。前半は伊藤が担当し、西洋絵画についての講義を行う。後半は鈴木が担当し、日本における子どもの歴史についての講義を行う。		
授業計画	第1回	オリエンテーション (鈴木・伊藤)	
	第2回	西洋美術に描かれた子ども①ギリシア・ローマ美術のなかの子ども (伊藤)	
	第3回	西洋美術に描かれた子ども②ブット (伊藤)	
	第4回	西洋美術に描かれた子ども③幼児キリストと天使 (伊藤)	
	第5回	西洋美術に描かれた子ども④ブリューゲルの「子供の遊び」 (伊藤)	
	第6回	西洋美術に描かれた子ども⑤オランダ市民社会と子ども (伊藤)	
	第7回	西洋美術に描かれた子ども⑥無垢なる子どもから普通の子どもへ (伊藤)	
	第8回	中間まとめ (鈴木)	
	第9回	日本の子ども① 古代から中世(1) (鈴木)	
	第10回	日本の子ども② 古代から中世(2) (鈴木)	
	第11回	日本の子ども③ 近世 寺子屋(1) (鈴木)	
	第12回	日本の子ども④ 近世 寺子屋(2) (鈴木)	
	第13回	日本の子ども⑤ 近世 藩校 (鈴木)	
	第14回	日本の子ども⑥ 近世 私塾 (鈴木)	
	第15回	まとめ (鈴木・伊藤)	
準備学習 (予習・復習等)	毎回次回内容に関する課題を提示する。授業後の振り返りとして小レポートの提出を求める。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:30% 試験あるいはレポート:70%		

子どもの文化と現在		前期 2 単位	2年
子どもたちは今、どのような状況を生きているのか—その豊かさ と貧しさ		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 日本ばかりでなく世界にも目を向け、子どもや若者がどんな状況に置かれ、どんなふうに住きているのかを理解できるようにする。 * 思考の幅や視野を広げ、さまざまな問題について考えるきっかけをつかむ。 * 子ども及び自分自身について、多角的にとらえることができるようになる。 		
授業の概要	絵本作家、科学の児童書専門家、シュタイナー学校の教員、詩人、新聞記者などそれぞれの分野で活躍している特別講師の方たちのお話を聞き、考える。質疑応答やミニレポートを通して、さらに理解を深める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	森山暁子 : 江戸の子どもと現代の子ども	
	第3回	池上理恵 : 子どもの好奇心がひらく世界	
	第4回	佐々波幸子 : 子どもを中心とした保育のために	
	第5回	鈴木のりたけ : 絵本作家はどうやって絵本をつくるか	
	第6回	池上理恵 : 科学の本っておもしろい!	
	第7回	アーサー・ビナード : 子どもにかかわる人の言葉	
	第8回	野坂悦子 : 紙芝居とはどういうものか。絵本との違いは何か	
	第9回	楠原彰 : 子どもとはだれか—子どもの悲しみ・怒り・喜び—	
	第10回	吉原美穂 : 雑誌「クーヨン」から見る子育てと女性	
	第11回	岩橋亜希菜 : シュタイナー教育は子どもをどう見ているか	
	第12回	おとなが子どもたちのためにできること	
	第13回	多文化社会に生きる子ども	
	第14回	世界の子どもを支えるのに必要なもの	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	ミニレポート。また各講師からテーマごとの入門書や参考文献を挙げていただくので、各自で問題意識をさらに深め、自分なりの探求をしてみることに。		
テキスト	適宜プリントを配布する。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
評価方法	平常点:20% ミニレポート:30% 定期試験:50%		

女性・環境・平和		後期 2 単位	2年
女性・環境・平和について過去から現在をふりかえり、世界に視野を広げて考える		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 地球環境が抱える諸問題を理解し、考えることができるようになる。 * 女性が生きること、働くことについて、考えることができるようになる。 * 世界の政治的・経済的状況についても把握できるようになる。 * 問題解決のためにできることを考えるきっかけにする。 		
授業の概要	<p>フォトジャーナリスト、建築家、環境活動家、江戸文化研究家、福島で子どものために働いている方など、それぞれの分野で活躍している特別講師の方たちを招き、お話を聞いて考える。質疑応答やミニレポートを通して、さらに理解を深める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	鳥居ヤス子：ソーラークッキングを楽しもう	
	第3回	落合由利子：生きること、表現すること	
	第4回	落合由利子：歴史を紡ぐ	
	第5回	楠原彰：他者・世界・宇宙—私が私になるということ—	
	第6回	アーサー・ビナード：だまされてはいけない	
	第7回	谷口由美子：アリスの奇跡	
	第8回	ウィリー・ルケパナ・トコ：アフリカへの支援と平和はどうかかわっているか	
	第9回	森山暁子：江戸の女性とエコロジー	
	第10回	吉野裕之：福島の現状と、環境から子どもを守る活動	
	第11回	山崎充哲：タマゾン川とおさかなポスト	
	第12回	岩橋亜希菜：子どもの環境として建築を考える	
	第13回	地球環境と平和	
	第14回	歴史から学ぶ姿勢	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>講義を聞きっぱなしにするのではなく、関係する本も読んでミニレポートを書く。各自で問題意識をさらに深め、自分なりの探求をしてみることに。</p>		
テキスト	適宜プリントを配布する		
参考文献	授業の中で随時紹介する		
評価方法	平常点:20% ミニレポート:30% 定期試験:50%		

いのちとケアの人間学		後期 2 単位	3年
いのちをめぐる諸問題とその本質～いのちを生かすケアを考える		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ) 横堀 昌子 (よこぼり まさこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちは単に生命を維持するだけでなく、人間らしく生きる（いのちを生かす・活かす）ことを望むが、他者とのかわりによって、かえっていのちが損なわれることもある。そこで、いのちを生かす（活かす）他者とのかわり（「ケア」のかわり）とはどのようなものか、生・老・病・死をめぐる具体的な場面を題材にしながら根源的な問いに取り組み、探究する。		
授業の概要	菅野担当の前半（パートⅠ）では、ケアの関係性を再検討する。横堀担当の授業の後半（パートⅡ）では、いのちとケアをめぐる問題を再発見し、社会的な文脈で読み解く。講義・視聴覚教材視聴・演習・ディスカッションを活用し複合的に展開するため、3年次ならではの積極的な授業参加と教師へのフィードバックを求める。		
授業計画	第1回	イントロダクション～いのちとケアをめぐる問い（菅野・横堀）	
	第2回	ケアの二面性（菅野）	
	第3回	ケアの関係性を問う（菅野）	
	第4回	ケアの関係性のなかにある権力性（菅野）	
	第5回	ケアされるという経験（菅野）	
	第6回	ケアするという経験（菅野）	
	第7回	ケアする—される関係を越えて（菅野）	
	第8回	ケアの現場が抱える課題～ケア関係とケアの成り立ち（横堀）	
	第9回	いのちの起源をめぐる諸問題（横堀）	
	第10回	いのちの価値をめぐる諸問題（横堀）	
	第11回	人間の死と喪失体験、喪失と獲得（横堀）	
	第12回	誕生と死をめぐるケア～喪失体験がもたらすグリーフ（横堀）	
	第13回	グリーフケア（グリーフワーク）の展開と、生への問い（横堀）	
	第14回	人間のいのちを生かすケアとは（横堀）	
	第15回	まとめ（横堀）	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、あらかじめ配布された資料を読みこんで、自分の意見を育てながら参加する。指示された場合には、授業の感想・考察レポートを提出する。参考文献を自分で読む努力をする。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に示す。		
参考文献	参考文献・参考資料とも、随時、授業にて紹介していく。		
評価方法	授業参加態度・感想:20% 提出物:30% レポート:50%		

教育学 I		前期 2 単位	1年
現代社会における教育とその問題		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を履修した者は、1. 教育に関する初歩的な幅広い知識を獲得する、2. その知識を用いて、現在の教育現象を簡潔に説明する、事ができるようになる。		
授業の概要	講義形式で行う。前半は教育の理論的・原理的な事柄について扱う。中間まとめではその内容を理解しているかをテストする。後半は教育の制度的・社会的事柄について扱う。毎回授業の終了後にミニツッパーパーにて授業の理解度を測る。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	教育とは何か I 教育の定義 自然環境と社会環境	
	第3回	教育とは何か II 発達 学習 社会の中の教育	
	第4回	教育の歴史 I 制度としての教育の発生	
	第5回	教育の歴史 II 公教育制度の歴史	
	第6回	教育内容 I 教育課程の歩み I (戦前～戦後初期)	
	第7回	教育内容 II 教育課程の歩み II (1960年代～2000年代)	
	第8回	教育内容 III ゆとり教育	
	第9回	中間まとめ(小テスト)	
	第10回	教育行政 I 学校教育制度	
	第11回	教育行政 II 教育を受ける権利	
	第12回	国際化と教育	
	第13回	宗教と教育	
	第14回	教育改革と現在	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回次回内容に関する課題を提示する。授業終了後は小レポートを提出してもらう。		
テキスト	特になし。		
参考文献	黒崎・大田編『学校をよりよく理解するための教育学』シリーズ、学事出版：江原・山崎編『基礎教育学』放送大学教育振興会、2007年ほか		
評価方法	試験：70% 中間まとめ：25% 平常点：5%		

教育学Ⅱ		前期 2 単位	2年
現代社会の変化と教育の課題		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を履修した者は、1. 教育社会学に関する基礎的な知識を獲得する、2. その知識を使用し、教育現象を社会的に説明する、3. ポスト工業化社会における教育問題について記述する、事ができるようになる。		
授業の概要	教育の社会的分析を通じて、現代社会における教育の諸問題について考える。内容的には教育学Ⅰよりも発展的になるため、教育と社会、経済の関係などに興味がないと履修は厳しい。講義では毎回スライドを使って講義し、ミニツ・ペーパーの提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	教育の発展と社会Ⅰ 近代国家と教育	
	第3回	教育の発展と社会Ⅱ 教育の社会的機能	
	第4回	階層と学歴	
	第5回	経済現象としての教育Ⅰ 人はなぜ学校へ行くのか	
	第6回	経済現象としての教育Ⅱ 社会的投資としての教育	
	第7回	カリキュラムと社会	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	教師はいかにして教育を行っているか	
	第10回	少年非行	
	第11回	学校の病理	
	第12回	多文化社会と教育	
	第13回	高等教育の社会学	
	第14回	教育改革の現在	
	第15回	前期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に該当テーマに関する文献を読むことが望ましい。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	天野他著『教育社会学』改訂版 放送大学教育振興会 1998年;金子・小林著 教育の政治経済学』 放送大学教育振興会 2000年など		
評価方法	試験:90% 平常点:10%		

世界の教育		後期 2 単位	2・3年
比較教育学を学ぶ		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	比較教育学とは「世界の国や文化圏における教育を、歴史的、現代的な視点から、比較し、また、それぞれのあいだのさまざまな関係や、国、文化圏における世界(地球)的な関係などを明らかにし、教育の本質的なあり方を究めようとする学問」である。本講義では様々な教育現象に対して比較教育的に考察するスキルを身につけてもらう。		
授業の概要	基本的に講義形式で行う。スライドを用いて行い、毎回ミニッツ・ペーパーの提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	日本の教育	
	第3回	アメリカの教育	
	第4回	イギリスの教育	
	第5回	韓国の教育	
	第6回	東南アジアの教育	
	第7回	中間まとめ 各国の教育制度から見えてくること	
	第8回	学力の国際比較 I PISA・TIMSSの結果より	
	第9回	学力の国際比較 II 各国の教育改革	
	第10回	いじめの国際比較 I いじめの定義 日本の現状	
	第11回	いじめの国際比較 II 英国・オランダ・ノルウェーとの比較	
	第12回	子育て支援の国際比較 I 日・米・英・韓・中の制度比較	
	第13回	子育て支援の国際比較 II 保育の質の国際比較	
	第14回	宗教教育の国際比較	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	次回に扱うテーマに関して文献を読むことが望ましい。授業終了後は小レポートを提出してもらう。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	試験あるいはレポート:90% 平常点:10%		

キリスト教と教育		前期 2 単位	2・3年
「魂の養育（はぐくみ）」としてのキリスト教幼児教育		野村 祐之（のむら ゆうし）	
授業の到達目標 及びテーマ	グローバルなスケールで既存の価値観の大転換が迫られている現代、教育の現場では人格を養い、魂を育む教育の必要性が切実に求められています。それはキリスト教教育の核心をなすものでもあります。偉大な教師イエス・キリストの「源像」を聖書にたずね、歴史を顧み、21世紀後半の世界を形づくることになる世代の子どもたちの「魂の育み」としてのキリスト教教育の現代的意義と方法論を幼児教育の現場を前提に具体的に考察します。		
授業の概要	基本的には講義あるいはプレゼンテーションで課題を提示し、ディスカッションで問題点を整理し、各自が自分なりの理解を得るようにします。この授業自体が豊かなイメージの提示をはじめ、「想像力と自由な発想をうながす創造的コミュニケーション」を「はぐくむ」時となることを願っています。		
授業計画	第1回	オリエンテーションと自己紹介。	
	第2回	復活祭（イースター）：カレンダーの日曜日はなぜ赤い	
	第3回	キリスト教の三大祝祭と降誕祭（クリスマス）	
	第4回	グレゴリオ暦＝教会暦とその一年間	
	第5回	聖書の歴史観とキリスト教：「B. C. / A. D.」	
	第6回	世界の三大宗教？ 三大世界宗教！	
	第7回	「エコ」の秘密：聖書の「世界観」と「平和」	
	第8回	聖書の「人間観」と「神の子たち」	
	第9回	「園」はパラダイス。フレーベルと「幼稚園」	
	第10回	聖母マリアとイエス。モンテッソーリと「聖母子」のイメージ。	
	第11回	イエスと子どもたち。（コミュニケーションをカギカッコでくる）	
	第12回	「教育」と「コミュニケーション」そして「コミュニティ」	
	第13回	「祈り」：神との「コミュニケーション」	
	第14回	「生命（いのち）」は「預かりもの」	
	第15回	「魂の育（はぐくみ）」としてのキリスト教教育	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の講義で自分なりに学習、獲得した内容を（疑問も含めて）復習整理し、翌週の授業開始時に提出してもらいます。		
テキスト	聖書（旧約、新約そろいのもの）は毎回必要。特定の教科書はありませんが、資料を配布あるいは指定します。		
参考文献	各回の主題に応じてプリントなどの資料を配布し、関連する参考資料等はそのつど紹介します。		
評価方法	ディスカッションへの積極的参与:30% レスポンスシート:30% レポート2回:40%		

幼児教育史		後期 2 単位	3年
歴史の中の子ども—教育と選抜		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受けた者は、1. 教育における選抜の歴史についての知識を獲得する、2. 現在の状況を歴史的観点、教育的観点から説明する、事ができるようになる。		
授業の概要	「お受験」という言葉が定着して久しいが、そもそも教育システムは選抜機能を持っているからこそ社会システムの一部として発達したといえる。本講義ではそもそも教育がいかにして近代国家に取り込まれていったのか、そしてどのように選抜システムが日本社会で学歴社会を生み出したのかについて扱う。ゼミ形式のため、予習および発言を重視する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	近代化と試験の時代	
	第3回	試験と選抜の伝統	
	第4回	教育と試験の制度化	
	第5回	小学校から中学校へ	
	第6回	高等教育と試験制度	
	第7回	資格試験制度の成立	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	官僚任用試験と学歴主義	
	第10回	帝国大学への道	
	第11回	受験の世界—一九〇〇年前後	
	第12回	試験と上昇移動の道	
	第13回	試験の近代・テストの現代	
	第14回	まとめ 1	
	第15回	まとめ 2	
準備学習 (予習・復習等)	A4一枚にこちらが指示したやり方でレポートを毎回作成してもらう。		
テキスト	『試験の社会史—近代日本の試験・教育・社会』 増補版、平凡社、2007年。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% レポートなど:30%		

保育原理 I		前期 2 単位	1年
乳幼児が育つということ、保育する（される）ということ		岸井 慶子（きしい けいこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	①子どもが育つ社会の現状や変化を知り、保育の意義について説明できる。 ②保育の歴史の変遷と現状、今後の課題について考え説明できる。 ③保育の基本原則について説明できる。		
授業の概要	この講義は、乳幼児が育つということ、保育する（される）ということについて考え、保育の本質や目的、基本原則などこれから保育者をめざす学生が理解しておくべき知識や考え方の修得を目指しています。講義が中心となりますが、視聴覚教材等も用いてできるだけ具体的に講義を進めて行くようにします。時にはグループで話し合ったりまとめたりする課題にも取り組んでいただきます。		
授業計画	第1回	保育の意義と目的	
	第2回	保育の基本・原理	
	第3回	子どもが育つさまざまな場、施設、制度 (予習課題：子どもが育つ場のレポート)	
	第4回	家庭・保育所・幼稚園における保育	
	第5回	保育内容と発達過程の理解（2, 3歳児）	
	第6回	保育内容と発達過程の理解（4, 5, 6歳児）	
	第7回	環境を通して行う教育・保育	
	第8回	遊びを通して行う教育・保育	
	第9回	保育における「養護と教育」	
	第10回	保育における「個」と「集団」	
	第11回	保育思想と保育の歴史（ヨーロッパ）	
	第12回	保育思想と保育の歴史（日本、昭和以前）	
	第13回	保育思想と保育の歴史（日本、昭和以降現代まで）	
	第14回	保育と小学校教育（幼・保・小連携を考える）	
	第15回	保育の現状と課題	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業後に、学修内容を振り返り整理してください。 ・幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説の該当関連部分を事前に読んで授業に臨んでください。 ・新聞等のニュースで関連する内容をチェックし、ファイルしておいてください。 		
テキスト	『保育用語事典』（ミネルヴァ書房）『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館）、『保育所保育指針解説』（フレーベル館）		
参考文献	授業の中で適宜紹介します。		
評価方法	ミニテスト:20% 毎回授業振り返り提出:40% 課題提出（1回）:40%		

保育原理Ⅱ		後期 2 単位	1年
保育原理Ⅱ		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「乳幼児の変化と保育の公共性」をテーマとする本講義の到達目標は、保育の理念・歴史・思想の基本的な推移を理解し、保育に関する社会的・制度的・経営的事項をめぐる現代的課題について考察することである。		
授業の概要	前期の「保育原理Ⅰ」を踏まえ、講義の前半では乳幼児の成長・発達や保育の様子を実践記録にもとづいて検討し、保育の理念・歴史・思想の理解を深める。後半では「構造改革」のなかで大きく変化している保育の実態を主に社会的・制度的・経営的側面から分析する。最後に保育の公共性の現代的意義について考える。		
授業計画	第1回	講義のねらい・内容・進め方などの説明	
	第2回	近代欧米社会と保育	
	第3回	現代欧米社会と保育	
	第4回	戦前日本社会と保育	
	第5回	戦後日本社会と保育	
	第6回	乳児保育の変遷	
	第7回	幼児保育の変遷	
	第8回	中間まとめと小レポート	
	第9回	保育施設の性格と特徴	
	第10回	戦後日本の保育行政の変遷	
	第11回	現代日本の保育行政・経営の課題	
	第12回	乳児期の保育実践の特徴と課題	
	第13回	幼児前半期の保育実践の特徴と課題	
	第14回	幼児後半期の保育実践の特徴と課題	
	第15回	後半と全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前期の「保育原理Ⅰ」の内容をよく振り返っておく。		
テキスト	講義中で配布する資料など		
参考文献	講義中に提示		
評価方法	小レポート:30% 試験:70%		

保育者論		前期 2 単位	2年
よりよい保育者とは		荘司 紀子（しょうじ のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	①「保育者とは何か」について、仕事、資格・免許、社会的役割など、基礎的知識を理解する。 ②「保育者の専門性」について、よりよい保育者のあり方や、保育者の専門性や人間性などを考察し、自分自身の見解をもつことができる。 ③「保育者の成長と課題」について、自ら目指す保育者像を描き、それに基づく具体的な課題を設定することができる。		
授業の概要	保育者とは、子どもや家族のもっとも身近な存在であり、子どもの成長を支え、子どもの最善の利益を守る専門家である。この講義では、保育者にはどのような専門性が求められているのかを制度や法令、具体的な保育の実際から知るとともに、保育者として身につけておかなければならない必要な事柄について学ぶ。幼稚園実習や保育所実習などを念頭において行う。		
授業計画	第1回	保育者を目指すということ：自分が保育職を選んだ理由	
	第2回	保育者とは何か(1)：保育職の意義と使命、倫理（教職の意義）	
	第3回	保育者とは何か(2)：幼稚園教諭の仕事と役割（職務内容、服務、役割）	
	第4回	保育者とは何か(3)：保育士の仕事と役割（職務内容、服務、役割）	
	第5回	保育者とは何か(4)：幼稚園・保育所・認定こども園での一日	
	第6回	保育者の専門性とは(1)：子ども理解の専門性	
	第7回	保育者の専門性とは(2)：保育実践の専門性	
	第8回	保育者の専門性とは(3)：保育計画・振り返りの専門性	
	第9回	保育者の専門性とは(4)：保護者と向き合う専門性	
	第10回	保育者のネットワークと研修(1)：専門性の向上のための研修	
	第11回	保育者のネットワークと研修(2)：保育者同士の協働、地域や専門機関との連携	
	第12回	子どもや保育者を守る権利と支援：子どもの権利条約、保育者の職業生活（労働環境、身分保障）	
	第13回	保育者に求められる人間性、資質	
	第14回	保育者の成長と課題：自己の適性について、進路選択について	
	第15回	まとめ よりよい保育者になるために	
準備学習 (予習・復習等)	幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領に目を通しておくこと。 自分が保育職を選んだ理由、理想とする保育者像について、考えをまとめておくこと。		
テキスト	浅見均・田中正浩編著 『幼稚園教諭・保育士のための現代保育者論』大学図書出版 2011		
参考文献	『幼稚園教育要領』フレーベル館 『保育所保育指針』フレーベル館 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館 その他、授業内で適宜紹介する		
評価方法	授業への参加態度:20% 課題提出状況:20% 試験:60%		

保育課程論		後期 2 単位	1年
幼稚園教育課程、保育所保育課程の理解と実践		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標及びテーマ	①教育課程・保育課程の編成と指導計画の作成についてその原理を理解する。 ②実態把握、計画、実践、省察と評価、改善の関係を具体的に理解し説明できる。 ③簡単な部分実習指導案が作成できる。		
授業の概要	主に幼稚園教育における教育課程について理解を深めますが、保育所における保育課程もとりあげます。教育課程と指導計画の作成、環境構成と援助、幼児理解と保育者の役割、指導要録等の記録と評価・改善等について理解を深めます。この授業は1年次後期に実施される幼稚園教育実習を念頭に行います。講義に加え課題作業によって実践のための基礎力を養います。		
授業計画	第1回	保育における「計画」の意義とさまざまな計画	
	第2回	教育・保育課程と指導計画、週日案の関係、それぞれの枠組み	
	第3回	指導案の作成と検討 (1) 部分実習指導案の考え方と組み立て	
	第4回	指導案の作成と検討 (2) 部分実習指導案の作成	
	第5回	指導案の作成と検討 (3) 部分実習指導案の作成	
	第6回	指導案の作成と検討 (4) 部分実習指導案の作成とまとめ	
	第7回	教育・保育課程の編成における基本的考え方	
	第8回	長期指導計画の作成と留意点	
	第9回	短期指導計画の作成と留意点	
	第10回	保育の省察と保育記録	
	第11回	実態把握と指導の計画 (事例検討)	
	第12回	評価と計画の改善、再編成	
	第13回	幼稚園・保育所における自己評価・第三者評価	
	第14回	保育記録・幼稚園指導要録・保育所児童保育要録	
	第15回	省察と保育の質の向上、保育者の成長	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業後に行う振り返りで、学修内容を整理してください。 ・部分実習指導案を作成、修正し、提出してください。 		
テキスト	『保育課程・教育課程総論』（ミネルヴァ書房）『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館）『保育所保育指針解説』（フレーベル館）		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	ミニテスト：60% 指導案作成（提出）：40%		

子どもと環境		前期 2 単位	1年
子どもにとっての環境とは		莊司 紀子（しょうじ のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○人間形成の基礎を築く幼児期において子どもがかかわる環境の意義を理解する。 ○子どもが自ら周囲の環境にかかわりながら発達に必要な経験を獲得しようとする心情や、意欲や、態度を育む環境について学ぶ。 ○保育者の環境への配慮や援助のあり方について理解する。 ○子どもの活動を支え一人一人の望ましい発達を促すための環境構成のあり方について 考察することができる。</p>		
授業の概要	<p>子どもが遊びを通して主体的に活動しながら、自然、ものや道具、文字や標識、遊びや生活の情報などとかかわり、様々な力が育つ望ましい保育や環境構成のあり方を考えるために、保育の現場における具体的な子どもの活動事例を取り上げながら学習する。</p>		
授業計画	第1回	保育の基本と保育内容「環境」 保育内容「環境」のねらいと内容	
	第2回	子どもの育ちと領域「環境」 子どもの発達と環境 保育環境の重要性	
	第3回	身近な自然と子ども① 自然の美しさや不思議さに触れる センス・オブ・ワンダー	
	第4回	身近な自然と子ども② 動植物に親しみをもって接し、命を大切に	
	第5回	身近な自然と子ども③ 季節の変化に気づく 自然を遊びや生活に取り入れる	
	第6回	身近な自然や子ども④ 自然探検をする フィールドワーク	
	第7回	身近なものや道具と子ども① 道具を使って遊ぶ 身近なものを使い工夫する	
	第8回	身近なものや道具と子ども② ものの性質や仕組みに気づく アフォーダンス理論	
	第9回	数・形・文字と子ども① 生活の中の数量・図形との出会い 数える・量をはかる・図形に親しむ	
	第10回	数・形・文字と子ども② 生活の中の文字・標識との出会い 文字を読む・書く・標識に親しむ	
	第11回	身近な地域の施設・行事と子ども① 身近な情報や出来事に興味をもち、遊びに取り入れる	
	第12回	身近な地域の施設・行事と子ども② 遊びと日本の文化	
	第13回	保育内容「環境」の課題と展望 現代社会における子どもと環境	
	第14回	様々な保育の展開から学ぶ 諸外国の保育環境・保育事情	
	第15回	地球環境の課題 持続可能な社会の実現に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	<p>自分の周囲にある自然をよく観察し、自然の変化に敏感になること。環境に対する子どもの興味、関心がどのような点にあるのかを考えてみる。新聞やニュースなどを見聞し、今、子どもたちがどのような環境に置かれているのか、問題意識をもって授業に臨むこと。</p>		
テキスト	<p>浅見 均編著 『子どもの育ちを支える 子どもと環境』大学図書出版</p>		
参考文献	<p>授業内で適宜紹介する</p>		
評価方法	<p>授業への参加態度:20% 課題提出状況:20% 試験:60%</p>		

子どもと人間関係		後期 2 単位	1年
保育における人間関係の探究		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」における領域「人間関係」の目指す内容を具体例を通して理解する。 ○ 乳幼児期の人間関係の発達について理解する。 ○ 保育者として乳幼児にどうかかわることが望ましいのかを理解する。 		
授業の概要	<p>教育要領、保育指針における教育の基本を把握し、領域「人間関係」のねらいや、内容について、具体的な事例や映像を交えて考えていく。その際、人間関係の発達についても概観する。さらには、保育者同士の人間関係の重要性、保育者と保護者の人間関係の重要性についても学んでいく。</p>		
授業計画	第1回	はじめに 保育の基本とは何か	
	第2回	幼稚園教育要領、保育所保育指針の領域「人間関係」とは	
	第3回	子どもの人間関係を支える保育者の役割	
	第4回	乳幼児期の発達と領域「人間関係」	
	第5回	子どもの言葉と人間関係	
	第6回	子どもの遊びと人間関係	
	第7回	個と集団の育ち（集団化へのプロセス）	
	第8回	子どもの生活と人間関係	
	第9回	子どもの活動と人間関係	
	第10回	園行事と人間関係	
	第11回	地域とのかかわり他	
	第12回	小学校との連携	
	第13回	保育者同士の人間関係	
	第14回	保護者との人間関係	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容に対応した教科書部分を読み、関連資料などを調べておくこと。毎授業後には授業内容関連レポートを提出すること。</p>		
テキスト	浅見均 編著 『子どもと人間関係』 大学図書出版 2013年(改訂版)		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』		
評価方法	授業への参加態度:10% 授業感想文:20% 試験:70%		

子どもと言葉		後期 2 単位	2年
子どもの豊かな言葉を育む保育の在り方を学び合う		生沼 晴美（おいぬま はるみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの言葉に注目し、深い関心をもつ ・子どもの言葉の育つ道筋と、言葉の育ちに関わる環境について理解する ・領域「言葉」のねらいや内容について理解する ・子どもの言葉を育む保育について学ぶ ・保育を豊かにする言語教材について学ぶ 		
授業の概要	乳幼児のことばに深い関心をもち、特に幼児のことばの発達過程や豊かなことばを育むための保育の在り方について、理論と実践事例を通して、また、グループでの話し合いや体験を通して学びを進めます。（授業内容は予定であり、多少の変更が生じる場合があります。）		
授業計画	第1回	イントロダクション 言葉とは？	
	第2回	子どもの言葉と援助、指導の変遷	
	第3回	『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』における言葉の捉え方	
	第4回	領域「言葉」のねらいと内容	
	第5回	言葉の育つ道筋（1）乳児期の言葉	
	第6回	言葉の育つ道筋（2）幼児期の言葉	
	第7回	言葉を育てる人的環境	
	第8回	言葉を育てる文化的環境	
	第9回	子どもの言葉を育む教材を知る（1）絵本など	
	第10回	子どもの言葉を育む教材を知る（2）遊具など	
	第11回	幼稚園や保育所での言葉の生活（1）環境と関わりながら	
	第12回	幼稚園や保育所での言葉の生活（2）遊びや生活の中で	
	第13回	言葉の楽しみ（絵本や素話などを通して体験する）	
	第14回	保育者の言葉と家庭連携、社会との関わり	
	第15回	まとめ 豊かな言葉を育む保育の実践とは	
準備学習 (予習・復習等)	日頃から自分自身の言葉を豊かにしよう心がけること 日常生活の中で子どもの言葉や親子の会話などに関心をもつこと 授業での課題準備（必要のある場合に提示します）		
テキスト	未定 *他に必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領』 厚生労働省『保育所保育指針』 倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』 倉橋惣三著 フレーベル館 *その他、授業の中で随時紹介します		
評価方法	授業内レポート:30% 個人・グループ発表:20% 最終課題レポート:50%		

子どもと言葉	後期 2 単位	2年
<p>子どもの育ちにおける言葉について、保育の場をはじめ生活全般における言葉の多様性への理解を深める</p>	<p>森 眞理 (もり まり)</p>	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども(乳幼児)の言葉の育つ道筋を理解する ・子どもの言葉の発達に影響する環境について理解する ・領域「言葉」の捉え方とその内容について理解する <p>【授業の概要】</p> <p>子どもの育ちにおける言葉について、①子どもの言葉の発達理論と保育内容「言葉」の理解を土台に、②子どもの生活(遊びと学び)にて繰り広げられる言葉の世界を探究する。さらに、③子どもの言葉の育ちの環境としての絵本やずばなしをはじめとする児童文化や④おとなの言葉の生活についても考える。</p> <p>【授業計画】</p> <p>第1回 イン트로ダクション・言葉との出会い・「私」の言葉考察 第2回 「言葉」と子どもの育ち ①乳児期 第3回 「言葉」と子どもの育ち ②幼児期3～4歳児 第4回 「言葉」と子どもの育ち ③幼児期4～5歳児 第5回 「言葉」をめぐる課題 ①日本の国際化とバイリンガル 第6回 領域「言葉」：「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「認定こども園保育要領」と子どもの言葉 第7回 「言葉」と環境：ヒト・モノ・コトとの関係 第8回 「言葉」と環境：文化・諸外国との関係：レτζョ・エミリア市の乳幼児教育との対話 第9回 「言葉」と児童文化財：①児童文化財の意味と意義 第10回 「言葉」と児童文化財：②児童文化財の種類と内容・グループ活動へ 第11回 「言葉」と児童文化財：③グループ活動 第12回 「言葉」と児童文化財：④グループ活動の分かち合い 第13回 「言葉」をめぐる課題 ②特別な権利(ニーズ)を持つ子ども 第14回 「言葉」をめぐる課題 ③現代の課題：幼保小連携・関係性 第15回 まとめとふりかえり・展望</p> <p>【準備学習(予習・復習等)】</p> <p>予習：授業時に出された課題について事前に学習し出席すること。 復習：授業で示された文献・研究論文・児童文化財・視聴覚教材について調べ、学ぶこと。</p> <p>【テキスト】</p> <p>授業にてプリントを配布する</p> <p>【参考文献】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小田豊・芦田宏共編『保育内容 言葉』北大路書房 2011年 ・『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』、その他、授業にて提示・紹介。 <p>【評価方法】</p> <p>授業参加態度：40% (毎授業のふりかえり・グループ活動も配点対象となります) 期末試験：60% (テキストや授業時配布のプリントの持ち込み不可。担当教員配布のまとめ用紙(後日配布)の持ち込みは可)</p>		

子どもと表現		後期 2 単位	3年
保育実践における表現（総合的芸術表現）の在り方。		吉仲 淳（よしなか あつし）	
授業の到達目標 及びテーマ	「保育は芸術なり」とも言われるが、子どもの日常そのものが芸術として捉えることができる。その子どもの生きる環境において幾重にもなった関係の中で繰り広げられる表現そのものが子どもの存在観やその宇宙を形成する。本講座では、人間としてまた保育する立場としてこれらの事柄を探索し、本来持つ根源的欲求としての表現の在り方を見つめなおす。		
授業の概要	テーマにしたがって保育実践でのエピソードなどを用いて進める。各単元での意見や考察を振り返りとして小レポートを提出する。なお保育だけに偏ることなく、今日の芸術表現にも焦点を当て、表現本来の意義を探る。講義形式で進められるが、「表現」という領域をテーマとするため、演習的な要素も導入し、表現世界を体感する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 他	
	第2回	子どもの世界と表現	
	第3回	環境と音 その表現1：秋の歌	
	第4回	環境と音 その表現2：サウンドスケープ	
	第5回	芸術表現とその教育	
	第6回	海外の表現教育について	
	第7回	芸術表現と身体の知：音からのアプローチ	
	第8回	芸術表現と身体の知：絵本を用いて	
	第9回	演習 1（制作）	
	第10回	演習 2（発表）	
	第11回	文化とその表現	
	第12回	文化とその表現 プレゼンテーション1	
	第13回	文化とその表現 プレゼンテーション2	
	第14回	まとめ	
	第15回	ディスカッション：課題レポートをもとに	
準備学習 (予習・復習等)	この授業での主なキーワードは「子ども」「音」「表現」「環境」「身体（からだ）」である。これらの事柄について、自分なりに定義づけておくこと。事前にテキストに目を通し、表現という領域の幅広さ、奥深さを感じ取っておくこと。		
テキスト	『子どもと表現』浅見均編著（日本文教出版）		
参考文献	授業時間内で紹介する。		
評価方法	レポート課題：40% コメント等の提出物：30% 取り組みや発言など：30%		

保育方法研究		後期 2 単位	2年
幼児期における保育方法の探究		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保育方法の基本として、乳幼児の特性、保育の原理、方法などについて理解する。 ○ 様々な主義や保育形態について理解し、保育の中でどう生かしていくことが望ましいのかということについて理解する。 		
授業の概要	保育の方法について、主義、形態、環境等、様々な観点からその在り方を探る。授業展開としては、授業内講演者を招いたり、映像を見たりしながら具体的に考えていくことにより、幼児にふさわしい保育の方法のあり方について理解を深めることを中心とする。尚、保育実践者を招いて話を伺う予定である。		
授業計画	第1回	保育方法研究の意義	
	第2回	保育方法の基本	
	第3回	様々な主義に基づく保育 (1) キリスト教保育など	
	第4回	様々な主義に基づく保育 (2) モンテッソーリメソッド	
	第5回	様々な保育形態による保育 (1) 自由保育形態と一斉保育形態	
	第6回	様々な保育形態による保育 (2) 森の幼稚園など	
	第7回	様々な保育の方法 ティーム保育・統合保育など	
	第8回	保育方法と保育環境 (1) レッジオエミリア市の保育に学ぶ	
	第9回	保育方法と保育環境 (2) 森の幼稚園に学ぶ	
	第10回	保育における情報機器及び教材の活用	
	第11回	保育方法とカリキュラム	
	第12回	保育方法と保育記録	
	第13回	保育方法と園行事	
	第14回	新しい保育のあり方を目指して	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容に対応した教科書部分を読み、関連資料などを調べておくこと。毎授業後には授業内容関連レポートを提出すること。		
テキスト	浅見均・田中正浩 編著『保育方法の探究』 大学図書出版 2009		
参考文献	授業の中で指示		
評価方法	授業への参加態度:20% ミニレポート:10% 試験:70%		

保育内容総論		前期 2 単位	3年
保育内容について多様な視点から理解を深め、保育内容を創意工夫する		阿部 真美子（あべ まみこ）	
授業の到達目標及びテーマ	①保育内容について総合的に理解をする（レポート、プレゼンテーションで評価） ②保育内容を創意工夫することに関心を持つ（レポート、プレゼンテーションで評価） ③グループによる作業（ディスカッション、意見をまとめる、発表する）に積極的に参加する		
授業の概要	幼稚園教育、保育所保育の基本、子どもの発達、個と集団のバランス、環境を通して行う保育、遊びによる総合的な保育、乳児保育、長時間保育、多文化共生の保育などの視点から、保育内容について考え理解を深め、保育内容を創意工夫することへの関心を持つ		
授業計画	第1回	オリエンテーション（授業の進め方、評価の観点の説明。グループ分けとグループ毎の分担、その他）	
	第2回	テーマ；保育内容と保育の基本—幼稚園教育要領と保育所保育指針	
	第3回	テーマ；保育内容の歴史の変遷	
	第4回	テーマ；子どもの発達の特性と保育内容	
	第5回	テーマ；個と集団の発達と保育内容	
	第6回	テーマ；保育における観察と記録	
	第7回	テーマ；養護と教育が一体的に展開する保育	
	第8回	テーマ；環境を通して行う保育	
	第9回	テーマ；遊びによる総合的な保育	
	第10回	テーマ；生活や発達の連続性に考慮した保育	
	第11回	テーマ；家庭・地域・小学校との連携を踏まえた保育	
	第12回	テーマ；乳児保育	
	第13回	テーマ；長時間保育と保育の現代的な課題	
	第14回	テーマ；特別な支援を必要とする子どもの保育	
	第15回	テーマ；多文化共生の保育、いのちを大切にすることをはぐくむ保育	
準備学習（予習・復習等）	他グループからの質問や意見について次回までに調べる		
テキスト	鈴木昌世編『子どもの心によりそう保育内容総論』（福村出版）		
参考文献	授業内で随時紹介します		
評価方法	ミニ・レポート:30% グループの参加、発表:20% まとめのレポート:50%		

保育内容総論		後期 2 単位	3年
子どもの育ちと保育内容のかかわりを考える		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標及びテーマ	①幼稚園教育要領、保育所保育指針等に示されている保育の基本、領域の考え方を理解する。 ②保育内容の歴史の変遷を学び、保育内容と子ども観、社会の変化との関係を理解する。 ③多様な保育実践の展開例を知り、その特徴や課題について理解する。		
授業の概要	これまでの学修を土台にして、保育内容をさまざまな視点から考えてみましょう。具体的には、意見を出し合い考え合う方法を多く取り入れてすすめます。		
授業計画	第1回	子ども理解と保育内容	
	第2回	5領域と総合的指導、領域のなりたち、遊びの意義と保育内容	
	第3回	遊びの記録と読み取り	
	第4回	保育内容の歴史の変遷	
	第5回	幼稚園・保育所の一日と保育内容	
	第6回	0-2歳児の生活と保育内容	
	第7回	3歳児の園生活と保育内容	
	第8回	4、5歳児の園生活と保育内容	
	第9回	こども園の生活と保育内容	
	第10回	規範意識の芽生え、自己抑制と保育内容	
	第11回	感性の育ち、表現の多様性と保育内容（レジヨ・エミリア・アプローチなど）	
	第12回	知的な育ちと保育内容（科学する心など）	
	第13回	保育の多様な取り組みの現状と課題（グループ発表）6グループ	
	第14回	保育の多様な取り組みの現状と課題（グループ発表）6グループ	
	第15回	まとめと講評	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・準備学習については各授業の前に告知するので、テキストを読む、まとめるなどしておくこと。 ・グループ発表は事前に発表内容のレジュメを作成し、パワーポイントなどを準備すること。 		
テキスト	幼稚園教育要領解説（文部科学省、フレーベル館）、保育所保育指針解説（厚生労働省、フレーベル館）		
参考文献	授業内で紹介します。		
評価方法	レポート:60% グループ課題発表:40%		

保育・教職実践演習（幼稚園）	後期 2 単位	3年
<p>教養豊かで魅力あふれる大人としての保育者を目指して</p>		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ） <授業の到達目標及びテーマ> 幼児の傍らに寄り添う大人としての保育者はどうあるべきかについて、様々な視点より考え、討論し、子どもにとって魅力的な存在とはどのようなものかについて気付いていく（保育者として最小限必要な資質、能力の確認）。</p> <p><授業の概要> 当該科目の意義を自覚し、保育職の意義、保育者の役割、人間関係構築、幼児理解、保育内容の検討、クラス経営などについて、教職担当教員、教科に関する科目担当教員、幼稚園現職教員、保育士科目担当教員などが協力して教養及び感性豊かで魅力ある保育者に向けて授業展開をしていく。</p> <p><授業計画> 第1回 オリエンテーション（演習の目的、計画等）（岸井） 第2回 乳幼児と音楽表現 講義・討議・レポート（小泉） 第3回 乳幼児の豊かな言語生活 講義・討議・レポート（さくま） 第4回 乳幼児の豊かな造形表現 講義と討議・レポート（久保） 第5回 乳幼児の豊かな身体表現 講義・討議・レポート（渡部） 第6回 幼児教育で大切にしたいこと パネルディスカッション・レポート（浅見、岸井・荘司・上村） 第7回 実践を通して学んだこと（1）ロールプレイ・討議・発表に向けて準備（各グループ） 第8回 実践を通して学んだこと（2）発表・レポート（浅見・岸井・荘司・上村） 第9回 保育で大切にしたいこと 講義・討議・レポート（村知） 第10回 幼児期における豊かな身体表現 講義・討議・レポート（渡部） 第11回 社会福祉の諸課題と保育 講義・討議・レポート（杉田） 第12回 児童福祉の諸課題と保育 講義・討議・レポート（横堀） 第13回 保育者になるということ1（災害から子どもの命を守る保育者 DVD視聴）（浅見、岸井・荘司・上村） 第14回 保育者になるということ2（保育の現場から 保育者との関係ほか）（和田） 第15回 まとめ 合同</p> <p><テキスト>特に指定しない <参考文献>必要に応じて適宜示す</p>		

メディアと子ども		前期 2 単位	2・3年
子どもとメディアのよりよい関係		向田 久美子（むかいだ くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代の子どもは、生後すぐからテレビやスマートフォン、ゲーム、DVD、PCなどの電子メディアに囲まれて育つ。これらのメディアは子どもの知的・情緒的・社会的発達にどのような影響を及ぼすのだろうか。また、子どもの発達を支える大人として、私たちに何ができるのだろうか。これらの点について、最新の研究成果や事例を基に、また実際に映像を視聴しながら理解を深める。		
授業の概要	毎回資料を配布し、エビデンス（データ）に基づいて、メディアのさまざまな影響力について概説する。また、関連する映像の視聴を通して、メディアの制作技法やその効果について説明する。ディスカッションやリアクション・ペーパーを通して、なるべく双方向的な形で授業を進めていきたい。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	メディア視聴の実態：乳幼児期	
	第3回	メディア視聴の実態：児童期	
	第4回	子どもがメディアに引きつけられる理由	
	第5回	メディアの影響を研究する方法	
	第6回	メディアと認知能力	
	第7回	メディアと暴力（1）短期的影響	
	第8回	メディアと暴力（2）長期的影響	
	第9回	メディアと不安心理	
	第10回	メディアと社会性	
	第11回	メディアとジェンダー	
	第12回	メディアと身体イメージ	
	第13回	メディアと健康	
	第14回	メディアとの付き合い方（1）レーティング	
	第15回	メディアとの付き合い方（2）メディア・リテラシー	
準備学習 (予習・復習等)	授業後に配布資料やノートを見直し、学んだ内容を確認しておくこと。次の授業の開始時に、何を学んだか答えられるようにしておくこと。		
テキスト	特に指定しない。資料を適宜配布する。		
参考文献	『メディアと人間の発達』（坂元章編，学文社）		
評価方法	レポート:55% 授業感想文:45%		

教育心理学 I		前期 2 単位	1年
人々との関係のなかで育つころ		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	乳幼児の心身の発達と学習について、“教え育てるー学び育つ”という関係性に注目して学ぶ。講義を通して、さまざまな人々との関係のなかで乳幼児の心身が育まれていくことを理解する。障害をもつ乳幼児の心身の発達についても同様に学び、“障害”や“遅れ”といった概念のとらえ方を考えるとともに、個々の発達障害についても具体的に理解する。		
授業の概要	講義形式で行う。まず生涯発達および関係性の観点から発達と学習をとらえ、続いて乳幼児期の人間関係がどのように形成されていくかについて明らかにする。障害に関しては、まず“障害”をどうとらえるかについて、自身の障害観を振り返りながら考えていく。具体的な子どものイメージを膨らませながら理解できるように事例を多くを用いる。		
授業計画	第1回	心理学とは、教育心理学とは	
	第2回	発達とは～生涯発達の観点から	
	第3回	生涯発達における乳幼児期	
	第4回	学習とは～関係性のなかでの学ぶ	
	第5回	関係の中で育つ（1）胎児期	
	第6回	関係の中で育つ（2）新生児期	
	第7回	関係の中で育つ（3）信頼関係の形成	
	第8回	関係の中で育つ（4）自我の芽生え	
	第9回	関係のなかで育つ（5）集団生活のはじまり	
	第10回	関係のなかで育つ（6）仲間とのかかわり	
	第11回	発達のつまづき（1）障害とは、発達の遅れとは	
	第12回	発達のつまづき（2）発達障害～自閉症スペクトラム	
	第13回	発達のつまづき（3）発達障害～ADHD、LD	
	第14回	発達のつまづき（5）障害をもつ子どもを育てること	
	第15回	まとめ：関係のなかで育つということ	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリアクションペーパーを提出する		
テキスト	岡本依子・菅野幸恵・塚田-城みちる「エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学」「エピソードで学ぶ赤ちゃんの発達と子育て」 新曜社		
参考文献	未定（授業内で随時紹介）		
評価方法	定期試験:80% 課題等の提出状況:20%		

教育心理学Ⅱ		後期 2 単位	1年
ひとりの子どもの育ちから子どもの発達を知る・考える		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	教科書に描かれる子どもの発達は、抽象的で一般的な子どもの姿である。しかし私たちが実際に出会うのは、それぞれの”いま”を生きる、一人ひとりの具体的で特定の子どもの姿である。この授業ではある子どもの誕生から小学校入学前までを記録したテキストをてがかりにして、子どもが育つ／子どもを育てるということはどのようなことか理解する。		
授業の概要	テキストを順に読み進める。各自があらかじめテキストの指定された箇所を読み授業に臨む。毎回の授業ではテキストの内容について担当者が補足説明を行い、その後それぞれがテキストについて感じたこと、考えたことを発表する。授業でのディスカッションをふまえ、毎回最後にリアクションペーパーを提出する。		
授業 計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	具体的な子どもの姿から見えてくること	
	第3回	誕生、家族になること	
	第4回	1歳前半：ものやひととのかかわる	
	第5回	1歳後半：“わたし”の芽生え	
	第6回	2歳前半：個性	
	第7回	2歳後半：自己主張の始まり、きょうだいの誕生	
	第8回	3歳前半：保育園に行くこと	
	第9回	3歳後半：知性のはじまり	
	第10回	4歳前半：競争心の芽生え	
	第11回	4歳後半：夢と死	
	第12回	5歳前半：友だち	
	第13回	5歳後半：家族	
	第14回	6歳：就学	
	第15回	まとめとふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	各自があらかじめテキストの指定された箇所を読み、投げかけられた問いに対する自分の考えをまとめて授業に臨む。毎授業後にリアクションペーパーを提出する。		
テキスト	矢野喜夫・矢野のり子「子どもの自然誌」ミネルヴァ書房		
参考文献	未定。授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への取り組み:50% 期末レポート:50%		

発達心理学 I		前期 2 単位	2年
子どもの生活世界の探究		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	乳幼児期の心身の発達および学習のプロセスについて、認知、感情、言葉、の各側面から学ぶ。授業を通して、乳幼児の認知、感情、言葉がどのようなプロセスを経て育まれるのかについて理解するとともにその世界への興味を深めていくことを目標とする。その上で、発達しつつある乳幼児を支えるおとなのかかわりについて理解を深めていく。		
授業の概要	演習形式で行う。毎回トピックに関わる事例を紹介し、具体的な保育場面での子どもの姿を通して子どもの生活世界についての理解を深める。認知に関しては他者視点の獲得のプロセスと幼児期独特の子どもの内的世界のありようを、感情に関しては表出と理解の双方について、言葉に関しては前言語期から会話が成立するまでのプロセスについて取り上げる。		
授業計画	第1回	発達とは～年齢のなぞ	
	第2回	他者の心の理解（1）三項関係の成立	
	第3回	他者の心の理解（2）他者視点の獲得	
	第4回	想像力の発達	
	第5回	子どものうそ	
	第6回	子どもの記憶	
	第7回	時間概念の発達	
	第8回	感情の発達	
	第9回	感情の理解	
	第10回	言葉の発達（1）前言語期	
	第11回	言葉の発達（2）語彙の獲得	
	第12回	言葉の発達（3）会話の成立	
	第13回	言葉の発達（4）読み書きことばの獲得	
	第14回	言葉の発達（5）障害と言葉	
	第15回	まとめ：乳幼児の発達とおとなのかかわり	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリアクションペーパーを提出する		
テキスト	岡本依子・菅野幸恵・塚田-城みちる 「エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学」「エピソードで学ぶ赤ちゃんの発達と子育て」 新曜社		
参考文献	未定（授業内で随時紹介）		
評価方法	定期試験:60% 課題等の提出状況:20% 授業への取り組み方:20%		

発達心理学Ⅱ		後期 2 単位	2年
大人になるということ		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>”大人になる”とはどのようなことか。そもそも”大人”とは何か。”子ども”と”大人”の違いは？大人は”なる”ものなのか。”なる”ものだとしたら、自然に”なる”のか、なろうとして”なる”のか。大人に”なれない””ならない”ことはあるのか。今の私は”大人”なのか、”子ども”なのか。</p> <p>”大人になること”にかかわる問いは尽きない。この授業では”大人になること”にかかわる資料（文献および映像）を共通の素材としながら、ディスカッションを行い、受講者一人ひとりが”大人になること”について考え、そのイメージを豊かにすることを目標とする。</p>		
授業の概要	<p>演習形式で進める。まずはじめに、各自の”大人になること”のイメージを共有する。そのうえで指定されたテキストを読んだり、映像を観たりしてディスカッションを行う。授業の後半ではグループワークを通して”大人になること”について考えていく。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	大人になることとは～イメージの共有	
	第3回	学校と大人になること	
	第4回	家族と大人になること	
	第5回	働くことと大人になること	
	第6回	女にとって大人になること	
	第7回	男にとって大人になること	
	第8回	メディアと大人になること	
	第9回	サブカルチャーと大人になること	
	第10回	法律の視点から見た子どもと大人	
	第11回	お金と大人	
	第12回	グループワーク①	
	第13回	グループワーク②	
	第14回	発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回指定されたテキストを事前に読む</p>		
テキスト	<p>苅谷剛彦編『いまこの国で大人になるということ』紀伊國屋書店ほか</p>		
参考文献	<p>授業内で適宜紹介する</p>		
評価方法	<p>授業への取り組み方:50% レポート:50%</p>		

生涯発達心理学		前期 2 単位	3年
親の発達心理学		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	親になることは人の生涯発達において重要な出来事の一つである。ただ生物学的に親になれば自動的に心理学的にも親になるわけではない。親としての振る舞いは一度身につければ済むものでもなく、親になるプロセスは一生続く。またそのプロセスは一筋縄ではいかず、予期せぬことに会うこともある。それは親になるプロセスが、子どもや周囲との関わりの中で進行するものだからである。 以上のことをふまえ、この授業では”親になるプロセス”を理解するとともに、”親になること”にかかわるさまざまな問題について理解していくことを目標とする。		
授業の概要	毎回「親の発達心理学」にかかわるテーマについて学ぶ。まず親になるプロセスはどのようなものであるかを学び、歴史的な観点から子育てをとらえる。さらに”親になること”にかかわるさまざまな現代の問題について取り上げる。毎回のテーマにかかわるテキストを読んでから授業に臨む。テーマにかかわる映像資料も積極的に取り入れる。授業では問題を共有したうえで、それぞれが感じ考えたことについて意見を交わす。積極的な参加を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション～親になるということ	
	第2回	子育ての担い手の歴史的変遷～誰が子育てをしてきたのか	
	第3回	今の子育てと昔の子育て	
	第4回	育児ノイローゼ、育児不安	
	第5回	モンスターペアレント	
	第6回	性役割と子育て①母性は本能か	
	第7回	性役割と子育て②”イクメン”について考える	
	第8回	不妊という経験	
	第9回	人工妊娠中絶という経験	
	第10回	子どもの死と向き合う	
	第11回	障がいをもつ子どもの親となること	
	第12回	血のつながらない子どもを育てるということ	
	第13回	障がい者が親になるということ	
	第14回	同性カップルの子育て	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめテキストの指定された箇所を読んで授業に臨む		
テキスト	授業内で適宜指定する。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:50% レポート:50%		

児童臨床心理学		前期 2 単位	3年 子ども学科
発達臨床の視座から子どもを理解する		太田 祐貴子（おおた ゆきこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	1. 臨床的に子どもの成長を捉える視点を理解する。 2. 子どもの成長に与える他者との関係性の意味を理解する。 3. 子どもへの心理臨床的かかわりを学ぶ。		
授業の概要	子どもは他者とのかかわりにおけるやりとりを通じて、成長していく。その背景となる理論や、子どもの自己の成長過程を学ぶ。また、親子の愛着形成など、親子関係について学ぶ。一方、人生初期の段階で、子どもの心の成長が損なわれたり、停滞することもある。その場合には、どのような心理臨床的援助が考えられるのかを説明する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：発達臨床心理学の視座について	
	第2回	発達臨床心理学における自己と他者との関係性	
	第3回	子どもを迎える親の心	
	第4回	新生児期：赤ちゃんの生得的な力	
	第5回	乳児期：他者との間主観的かかわりによる自己体験	
	第6回	幼児期：言葉と歩行によって広がる新たな自己感	
	第7回	幼児期後期：遊びによって開かれる子どもの心	
	第8回	乳幼児期の心理的問題と病理	
	第9回	乳幼児期の発達的問題と病理	
	第10回	乳幼児期の親子への臨床的支援①—愛着	
	第11回	乳幼児期の親子への臨床的支援②—親乳幼児心理療法	
	第12回	自閉症スペクトラムとその臨床的支援	
	第13回	児童期の発達の課題と心の病理	
	第14回	発達臨床の視座から見た心理臨床活動	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：事前に授業内で知らせた箇所について、内容を読んだり、自分なりに考えて、授業に参加する。 復習：学んだことを整理し、振り返る。		
テキスト	未定		
参考文献	授業内で紹介する。		
評価方法	リアクションペーパー：20% レポート：80%		

臨床心理学		後期 2 単位	2年
臨床心理学		富田 貴代子（とみた きよこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	臨床心理学の視点からみた、心の健康と不適応、人生の各ステージにおける心の発達課題と危機、カウンセリングの理論と技法について、基本的な知識がわかる。 それによって、日常生活における自らの心の健康増進に役立てることができるようになる。 グループワークを通して、自己理解と同時に他者に対する理解も深めることができるようになる。		
授業の概要	心の健康を考える上で必要な臨床心理学の基本的な知識を網羅的に学べるように全体が構成されている。心の健康と病理、発達、ストレス、パーソナリティ、心理療法の5つの領域について概観する。授業は、講義形式を中心とし、心理テストやグループワークなども適宜取り入れる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	心の病 1	
	第3回	心の病 2	
	第4回	乳幼児期の発達と危機	
	第5回	児童期・思春期青年期の発達と危機	
	第6回	成人期・老年期の発達と危機	
	第7回	ストレスとは～自分の状態を振り返る	
	第8回	ストレスマネジメント	
	第9回	パーソナリティの理論	
	第10回	パーソナリティの測定	
	第11回	カウンセリングの理論・技法 1	
	第12回	カウンセリングの理論・技法 2	
	第13回	カウンセリングの理論・技法 3	
	第14回	グループワーク	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後に、短いアクションペーパーを提出する。それをもとに次回授業で振り返りを行う。		
テキスト	特に定めない。プリントを適宜授業内で配布する。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	平常点（リアクションペーパー等）:30% 試験:70%		

小児保健学 I		後期 2 単位	1年
子どもの発育・発達の特徴および心身の健康を医学的に学ぶ		白子 純子（しらこ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	小児の成長発達の過程および心身の健康が理解できる。子どもの一生に影響をおよぼす養育環境と保育の意義がわかる。小児の成長発達における身体的、精神的な変化を医学的・公衆衛生学的視点で考察できる。		
授業の概要	講義が中心となるが、積極的な授業参加を求める。場合によってはグループワークなども取り入れながら進める。理解を助けるため、視聴覚教材・プリントなどを取り入れて説明する。授業の進行管理と理解度を知るために質問や意見を所定の用紙に書いてもらうこともある。		
授業 計画	第1回	はじめに：小児保健学の概要	
	第2回	小児保健学の意義・小児期の特徴	
	第3回	小児の形態的变化と保育	
	第4回	小児の身体発育の評価と保育	
	第5回	小児の発育と影響因子	
	第6回	小児の生理機能の発達と保育	
	第7回	小児の臓器・知覚等の機能発達と保育	
	第8回	小児の免疫能の発達と獲得	
	第9回	小児の基本的生活習慣 ～睡眠～	
	第10回	小児の基本的生活習慣 ～排泄～	
	第11回	小児の基本的生活習慣 ～栄養～	
	第12回	小児の基本的生活習慣 まとめ	
	第13回	小児の急性症状とその対応 ～アレルギー反応～	
	第14回	小児の体調不良とそのケア	
	第15回	小児保健学 I のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	指定したテキストの本文および参考資料、配布物などを事前に読むよう指示された場合には読んでおくこと。指定されたテキストは毎回持参すること。		
テキスト	岸井 勇雄 他著「子どもの保健」—理論と実際— 同文書院		
参考文献	随時紹介する		
評価方法	定期試験:85% 課題提出状況など:15%		

小児保健学Ⅱ		前期 2 単位	2年
子どもの心身の健康管理と安全対策の重要性の理解		白子 純子（しらこ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもの心身の健康管理と安全対策の重要性を理解する。子どもの病気や症状を学び、子どもの体調の変化に気づく保育者の観察の視点や、役割、援助の具体策を知る。子どもの生活や育児環境、保護者の精神保健や母子保健行政についての基礎知識を養う。		
授業の概要	講義中心だが、授業には積極的に参加して欲しい。理解を助けるために、視聴覚教材・プリントなどを取り入れる。小児保健学Ⅰを基礎に進めるので復習をしておくこと。実習前に小レポートを課し、実習終了後初回授業時に提出する。子どもの病気や看護の方法を学ぶとともに、自分自身の健康管理を行える知識も同時に習得する。（その他トピックスとして重要なものについては適宜取り上げる）		
授業計画	第1回	小児保健学Ⅰのおさらいと小児保健学Ⅱの概要	
	第2回	免疫について、感染症予防と予防接種	
	第3回	感染症疾患の看護・保育	
	第4回	子どもがよくかかる感染症	
	第5回	消化器系の症状別看護と保育	
	第6回	呼吸器系の症状別看護と保育	
	第7回	小児の病気と看護Ⅰ 症状とその病気の種類	
	第8回	小児の病気と看護Ⅱ くすりの管理と基本	
	第9回	保育の中の保健指導	
	第10回	小児の成長発達の課題と心の発達	
	第11回	学童期・思春期の課題と支援	
	第12回	保育環境の整備 事故防止の原則と対応	
	第13回	事故防止と安全管理	
	第14回	母子保健行政と保育との連携	
	第15回	集団保育における健康管理	
準備学習 (予習・復習等)	指定したテキストの本文および参考資料、配布物などを事前に読むよう指示された場合には読んでおくこと。指定されたテキストは毎回持参すること。 場合によっては1年次に使用したテキストの持参を求めることもある。		
テキスト	兼松百合子他著「子どもの保健実習」すこやかな育ちをサポートするために（第2版） 同文書院		
参考文献	適宜紹介する		
評価方法	定期試験:85% 課題提出状況など:15%		

小児保健実習		後期 1 単位	2年
子どもの心身の成長発達を健やかに保つための技術とその実践方法		白子 純子（しらこ じゅんこ）	
授業の到達目標及びテーマ	小児保健学Ⅰ・Ⅱで習得した知識を基礎とし、保育現場において適切に実践できる養護技術がわかる。健康観察や看護の方法、応急処置の技術および応用力を高めることができる。		
授業の概要	基本的には講義および演習・実習を中心に進める。新生児の人形を使用したり、小グループに分かれ、グループごとに演習を行うこともある。小児保健学Ⅰ・Ⅱの知識を基礎に進めるので復習をしておくこと。現場で活用できるように真剣にかつ主体的な参加を望む。		
授業計画	第1回	小児保健実習の意義	
	第2回	養護技術演習Ⅰ 乳幼児の抱き方・寝かせ方などの基本的技術	
	第3回	養護技術演習Ⅰ 衣服の着脱・おむつの交換など（沐浴事前学習）	
	第4回	養護技術演習Ⅱ 沐浴実習 グループA	
	第5回	養護技術演習Ⅱ 沐浴実習 グループB	
	第6回	小児の身体発育の測定方法とその評価	
	第7回	小児の健康状態の観察と評価～生理的機能の観察と評価～	
	第8回	基本的看護技術Ⅰ 子どもとくすり ～基本的知識とその扱い～	
	第9回	基本的看護技術Ⅰ 子どもとくすり ～与薬の実際・まとめ～	
	第10回	子どもの成長と育児不安	
	第11回	乳幼児の事故の種類、事故防止の原則、事故にあいやすい子どもの特性	
	第12回	基本的看護技術Ⅱ 乳幼児の事故と応急処置 ～止血・包帯～	
	第13回	基本的看護技術Ⅱ 緊急時の救命技術 ～心肺蘇生・AED・エビペン～	
	第14回	子どもの成長支援と社会資源	
	第15回	および小児保健の総まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	指定したテキストの本文および参考資料、配布物などを事前に読むよう指示された場合には読んでおくこと。指定されたテキストは毎回持参すること。		
テキスト	基本的には「小児保健学Ⅱ」で使用したテキストを使用するが、内容によっては「小児保健学Ⅰ」のテキストを使用することもある。（その都度事前に説明する）		
参考文献	授業時に随時紹介する		
評価方法	定期試験:80% 実習参加・課題提出:20%		

子どもと健康		前期 2 単位	2年
小さな命と健康を守り育てる		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもの命と健康を守るために保育者として必要な知識と技術を修得し、保育・幼児教育の現場で実践できるようになる。また、子どもの健やかな育ちの支援に役立つ情報を保護者や園に発信できるようになる。		
授業の概要	子どもの健康的な生活と育ちの支援に必要な知識と技術を習得する。授業での学びを確かなものにするために園や家庭での実践を視野に入れたグループ学習・発表を重視する(1グループは3名前後)。また、救命救急や応急手当では心肺蘇生法や物周りにある物を使った傷の手当が実際にできるようになることを目指す。授業の集大成として、子どもが保護者や保育者と一緒に学ぶ命と健康のビジュアル教材を作成し、発表・相互評価を行う。		
授業 計画	第1回	ガイダンス：元気な頭と体を育てる／学習・発表グループの決定	
	第2回	健康な生活のリズムを身に付け、楽しんで食事をする。発表グループ：1・2	
	第3回	身の回りを清潔にし、衣類の脱着、食事、排せつなど生活に必要な活動を自分でする。発表グループ：3・4	
	第4回	自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。発表グループ：5・6	
	第5回	自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。発表グループ：7・8	
	第6回	園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら、見通しを持って行動する。発表グループ：9・10	
	第7回	危険な場所や災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。発表グループ：11・12	
	第8回	進んで戸外で遊ぶ。発表グループ：13・14	
	第9回	いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。発表グループ：15・16	
	第10回	保育者や友達とふれあい、安定感を持って生活する。発表グループ：17・18	
	第11回	応急手当・心肺蘇生法	
	第12回	<実習の振替授業①>子どもの健康の教材①：テーマの決定と全体構成の検討	
	第13回	<実習の振替授業②>子どもの健康の教材②：教材作成	
	第14回	<実習の振替授業③>子どもの健康の教材③：教材の校正と完成	
	第15回	子どもの健康の教材④：プレゼンテーションと相互評価	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	子どもの育ちを支える 子どもと健康、編著：浅見均・渡部かなえ、大学図書出版		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	リフレクションシート:40% 子どもと健康の教材:50% 相互評価:10%		

子どものあそびと創造性		後期集中 2 単位	2・3年
<p>たくさんの遊びやゲームなど、さまざまなおもしろさに接します。すぐれた遊びを実際に体験し、おもしろさとはなにかについて考察し、人に教えられるようにもします。</p>		杉山 亮（すぎやま あきら）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>たくさんの遊びを実際に楽しみながらおぼえます。おもしろい遊びを知っていて、その場にあわせて伝えられる力があると、子どもの前に立ったとき、必ず喜ばれるし、自分も楽です。また、その幸福な実感のうちに、大人子ども共に新しい発見や成長に至るまでの時間をつなぐことができます。</p>		
授業の概要	<p>教室で少人数にわかれて、すべて実際に遊び、古今東西のたくさんの遊びが自分のレパートリーになるようにします。どうしたら、もっとおもしろくなるかということも考えます。鉛筆とノートはいつも必要。時間によっては色鉛筆と折り紙が必要。体を使う遊びではころげまわってもいい服装が必要です。</p>		
授業計画	第1回	総論。ことば遊び。文字遊びいろいろ。なぞなぞなど。	
	第2回	紙と鉛筆で机の上でするゲーム。マルバツなど。	
	第3回	紙と鉛筆で机の上でするゲーム。二人ビンゴなど。	
	第4回	紙と鉛筆で机の上でするゲーム。恋占いなど。	
	第5回	ことば遊び。文字遊びいろいろ。はやくちことばなど。	
	第6回	おえかき。ぬり絵など。	
	第7回	カードゲーム。（トランプゲーム 基礎）	
	第8回	カードゲーム。（トランプゲーム 応用）	
	第9回	体を使った二人あそび。じゃんけんなど。	
	第10回	体を使った二人あそび。手遊び指遊びなど。	
	第11回	伝統あそび。ずいずいずっころばしなど。	
	第12回	体を使って大勢でするゲームいろいろ。	
	第13回	折り紙。	
	第14回	あやとり。	
	第15回	テストとレポート書き	
準備学習 (予習・復習等)	<p>おぼえた遊びはすぐに家族や友人とやってみてください。自分ができるということと、それをじょうずに他人に教えられるというのは全然別の力ですから。</p>		
テキスト	<p>テキストは使いません。かって大きい子が小さい子に伝えたように、すべて、口伝です。ときにプリントを使用します。</p>		
参考文献	<p>なし。ただし、自分が子どもの頃、じっさいに遊んだ遊びを説明できるようにしててください。</p>		
評価方法	<p>テスト:40% レポート:60%</p>		

小児栄養学 I		後期 2 単位	2年
子どもの栄養と食生活を考える		高橋 恭子 (たかはし きょうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「食」のもつ意義を栄養摂取や精神的側面、社会的側面から考えて理解する。 2. 栄養や食品の基礎的な知識を習得して自らの食生活を改善することができる。 3. 子どもの発育・発達と食生活の関連を理解する。 4. 子どもを取り巻く日本の食の状況を知り、食育の必要性を理解する。 		
授業の概要	<p>子どもの栄養と食の体験は心身の発育・発達に大きな影響を及ぼし、生涯にわたる健康と健全な生活の基盤となるものである。「小児栄養学 I」では、まず栄養や食品についての基本的な事項を学び、望ましい食生活について考える。そのうえで、子どもの発育・発達と食生活の関連について学び、日本の食の状況について考え、3年次開講の「小児栄養学 II」と併せて発育・発達に応じた適切な食育と食を通じた保護者への支援を行う力を養っていく。視聴覚教材なども用いながら講義を進める。「小児栄養学 I」では乳児期・乳汁栄養までを扱い、離乳以降は「小児栄養学 II」で扱う。</p>		
授業計画	第1回	食生活の意義	
	第2回	栄養素の種類と機能 ①炭水化物	
	第3回	栄養素の種類と機能 ②脂質	
	第4回	栄養素の種類と機能 ③たんぱく質	
	第5回	栄養素の種類と機能 ④ミネラル	
	第6回	栄養素の種類と機能 ⑤ビタミン、水	
	第7回	望ましい食事、「日本人の食事摂取基準」とその活用	
	第8回	日本の食の現状	
	第9回	食育の基本	
	第10回	子どもの発育・発達と食生活 ①子どもの食生活の特徴	
	第11回	子どもの発育・発達と食生活 ②胎児期（妊娠期）	
	第12回	子どもの発育・発達と食生活 ③哺乳動作の発達	
	第13回	子どもの発育・発達と食生活 ④乳児期：母乳栄養	
	第14回	子どもの発育・発達と食生活 ⑤乳児期：人工乳栄養、混合栄養	
	第15回	子どもの食育と食を通じた保護者への支援	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回復習し知識を確実なものとする。 ・子どもの食育を担当するという自覚を持ち、自らの食生活を見直す。 ・他教科で学んだ子どもの発育・発達について復習しておく。 ・保育実習や教育実習の際には子どもの食事の様子や各園での食育の取り組みをよく見てきていただきたい。 		
テキスト	飯塚美和子他『最新子どもの食と栄養』学建書院、石井克枝監修『新カラーチャート食品成分表』教育図書		
参考文献	二木武他『小児の発達栄養行動』医師薬出版、幼児食懇話会編『幼児食の基本』日本小児医事出版社、坂本元子編『子どもの栄養・食教育ガイド』医歯薬出版、中村丁次監修『からだに効く栄養成分バイブル』主婦と生活社		
評価方法	筆記試験:80% 提出物:10% 学習態度:10%		

小児栄養学Ⅱ		前期 2 単位	3年
食育を実践するために		高橋 恭子 (たかはし きょうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 摂食機能や食行動の発達を理解する。 2. 子どもの発育・発達に応じた食事の支援ができる。 3. 家庭や児童福祉施設における食生活の現状と課題を理解する。 4. 食育の内容や環境について理解する。 5. 子どもの食育と食を通じた保護者の支援における保育士の役割を理解する。 		
授業の概要	<p>「小児栄養学Ⅰ」の単位取得者を対象とする。「小児栄養学Ⅰ」で学んだ内容を踏まえながら、子どもの発育・発達に応じた食のあり方や栄養特性、子どもを取り巻く社会的背景などを総合的に考え、保育士として子どもの食育と食を通じた保護者の支援を行う実践力を養っていく。実習により講義内容の理解を深める。調理実習の際にはエプロン、三角巾、ハンドタオル必携、長い爪やマニキュアは衛生の観点から禁止する。実習後にはレポート提出を課す。</p>		
授業計画	第1回	子どもの発育・発達と食生活 ①摂食機能の発達、離乳の基本	
	第2回	子どもの発育・発達と食生活 ②離乳の進め方、離乳の支援	
	第3回	子どもの発育・発達と食生活 ③幼児期の食生活の特徴	
	第4回	特別な配慮を要する子どもの食と栄養	
	第5回	乳児期の食生活：乳汁期 調乳（実習）	
	第6回	乳児期の食生活：離乳期 ①生後5～6か月頃の離乳食の調理（実習）	
	第7回	乳児期の食生活：離乳期 ②生後7～8、9～11か月頃の離乳食の調理（実習）	
	第8回	乳児期の食生活：離乳期 ③生後12～18か月頃の離乳食の調理（実習）	
	第9回	幼児期の食生活 ①1～2歳児の日常食の献立と調理（実習）	
	第10回	幼児期の食生活 ②3～5歳児の日常食の献立と調理（実習）	
	第11回	幼児期の食生活 ③間食（実習）	
	第12回	児童福祉施設における食事と栄養 行事食（実習）	
	第13回	子どもの食育 調理保育（実習）	
	第14回	学童期・思春期の食生活 学童期・思春期の日常食の献立と調理（実習）	
	第15回	まとめ・調理実習室の清掃	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・「小児栄養学Ⅰ」で学んだ事柄を復習しておく。 ・講義内容を復習し、問題意識を持って実習に臨む。 ・教育実習や保育実習で観察した子どもの活動を食育の観点で見直す。 		
テキスト	<p>「小児栄養学Ⅰ」で使用したテキスト（最新子どもの食と栄養、新カラーチャート食品成分表）や配布資料を活用する。これに加え毎回印刷教材を配布する。</p>		
参考文献	<p>保育所における食育研究会編「乳幼児の食育実践へのアプローチ」児童育成協会児童給食事業部、保育所における食育計画研究会編「保育所における食育の計画づくりガイド」児童育成協会児童給食事業部、「現代と保育」編集部・編「食事で気になる子の指導」ひとなる書房</p>		
評価方法	筆記試験：50% 実習レポート：40% 学習態度：10%		

精神保健論		前期 2 単位	3年
精神保健に関する考えの日常生活への役立て方		関 智雄（せき ともお）	
授業の到達目標 及びテーマ	「精神保健」とは何か？ 具体的にどのようなことか？ 人間の精神を、精神医学的・臨床心理学的にはどうとらえ、どう考えていくか、を講義を通して理解してもらおう。そして、学生各自が自己理解を深め、精神的、肉体的に健康を保つことに対する対策を、各自で考えていけるようになることをめざす。		
授業の概要	精神保健（精神衛生・メンタルヘルス）に関する基本的な知識、精神障害への予防、精神障害にどう対応するか、精神障害者の社会復帰などについて講義する。また、自己理解、他者理解のための概念枠をいくつか講義する。		
授業計画	第1回	精神保健とは	
	第2回	精神健康の基準について	
	第3回	基本的知識1 精神症状とは何か	
	第4回	基本的知識2 妄想・幻覚	
	第5回	基本的知識3 うつ・不安	
	第6回	児童1 知的発達 発達症	
	第7回	児童2 情緒的発達 こどもの鬱病	
	第8回	青年期・成人期 統合失調症 鬱病 双極性障害 PTSD	
	第9回	老年期 認知症 譫妄 心気症 回想法	
	第10回	治療文化 社会復帰、社会との折り合い	
	第11回	自己・他者理解1 精神分析 自我心理学 超自我・自我・イド	
	第12回	自己・他者理解2 精神分析 対象関係論 妄想分裂ポジション 抑うつポジション	
	第13回	自己・他者理解3 ユング心理学 ペルソナ 影 アニマ・アニムス	
	第14回	自己・他者理解4 認知・知能・情報処理	
	第15回	自己・他者理解5 ライフヒストリー 人生設計のために	
準備学習 (予習・復習等)	参考文献を読む。授業で学んだことを日常生活においてどう役立てるかを考える。		
テキスト	特になし		
参考文献	山上敏子監修「お母さんの学習室」（二瓶社）		
評価方法	試験:40% レポート:30% 授業感想文の内容:30%		

社会福祉論		前期 2 単位	1年
社会福祉の基本概念を理解する。		杉田 穂子 (すぎた やすこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	21世紀を迎えて社会福祉の役割は、より身近で重要になってくる。「弱者に恵み与える福祉」から「権利としてサービスを利用する福祉」への流れについて理解する。さらに「中央が与える福祉」から「地方を軸に住民が創り出す福祉」へ転換しつつある流れについて理解する。		
授業の概要	まず学生同士で経験した差別・被差別経験を出し合い、学生と福祉との関係性を探る。さらに福祉概念の変遷、中でも貧困に対する社会の見方の変化に焦点をあて、社会の見方によって支援が変化することを学ぶ。さらに、公的扶助、高齢者、児童家庭、障害の各福祉分野について焦点をあて、現状と課題を理解する。		
授業計画	第1回	シラバスについて	
	第2回	差別とは何か(1) 自らの差別・被差別経験を出し合う	
	第3回	差別とは何か(2) 差別についてのまとめ	
	第4回	社会福祉とは何か(1) 基本的な考え方と構成要素	
	第5回	社会福祉とは何か(2) 問題の特徴と援助技術	
	第6回	社会福祉とは何か(3) 援助技術の原則	
	第7回	社会福祉概念の変遷(1) 相互扶助、慈善事業、社会事業	
	第8回	社会福祉概念の変遷(2) 厚生事業、社会福祉事業	
	第9回	社会福祉概念の変遷(3) 社会福祉基礎構造改革	
	第10回	公的扶助の現状と課題	
	第11回	高齢者福祉の現状と課題	
	第12回	児童家庭福祉の現状と課題	
	第13回	障害者福祉(1) 思想の変遷	
	第14回	障害者福祉(2) 日本の現状と課題	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	次回の課題について記入すべき用紙を配布した場合はその課題を行うこと。毎回到授業内容をよく復習し、参考文献などを用いて内容の理解に努めること。		
テキスト	特になし		
参考文献	好井裕明「差別原論」平凡社新書 2007 山懸文治他「よくわかる社会福祉」ミネルヴァ書房 2002 厚生労働統計協会「国民の福祉と介護の動向」厚生労働統計協会2012/2013		
評価方法	授業後の感想:30% テスト:70%		

子ども家庭福祉論		後期 2 単位	1年
子ども家庭福祉（児童福祉）はなぜ必要か～子どもと家族への社会的支援のあり方を考える		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標及びテーマ	次代を担う子どもたちの福祉（しあわせ）とは何か、子どもの育ちの保障、家族の支援に社会的な取り組みがなぜ必要なのか理解する。子どもや家族が抱える福祉ニーズを社会的背景と文脈の中でとらえ、福祉支援のあり方、福祉サービスを支える福祉の思想を理解する。		
授業の概要	子ども家庭福祉の前提となる福祉観、子ども観、支援観に出会う。また、子どもの権利とは何か、子どもの権利保障の取り組みの意義は何かを理解する。また、さまざまな福祉ニーズを抱える子どもとその家庭を支援する仕組みについて体系的に理解する。		
授業計画	第1回	子どものいのちを守り、育ちを支えるとは	
	第2回	子ども家庭福祉の理念と、基盤となる子ども観	
	第3回	子ども家庭福祉のさまざまな取り組み	
	第4回	保育施策の現状と課題～子育て環境と福祉ニーズ	
	第5回	子ども虐待と社会的養護、家族支援の取り組み	
	第6回	子どもの権利条約の成立に至る歴史とコルチャックの思想	
	第7回	子どもの権利保障の実際と課題	
	第8回	子どものいのちをめぐる諸問題と母子保健、健全育成	
	第9回	ひとり親家庭の現状と課題	
	第10回	障がいをもつ子どもの社会的支援	
	第11回	非行問題と社会的背景、社会的支援	
	第12回	子ども家庭福祉の実施体制	
	第13回	諸外国における子ども家庭福祉の動向	
	第14回	子ども家庭福祉の今後の課題～子どもの権利条約の時代に	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、あらかじめ提示された教科書や資料を読んでから参加する。復習の意味でも、それらを読みこみ、理解を深める。提示された場合には授業への感想・考察レポートを提出する。参考文献を自分で読む努力をする。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に提示するので、確認のうえ、必ず購入のこと。		
参考文献	参考文献・参考資料とともに必要に応じ授業内で紹介する。		
評価方法	授業の感想文:10% 提出物:30% 試験:60%		

社会福祉方法論		後期 2 単位	2年
ソーシャルワーク（社会福祉援助・相談援助）の基礎を学ぶ		鈴木 敏彦（すずき としひこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) ソーシャルワーク（社会福祉援助・相談援助）に関する知識を理解する (2) 対人支援職としてのコミュニケーション技法を身につける (3) 子ども・家庭の権利擁護者としての保育士の自己覚知を図ることが出来るようになる (4) 事例検討を通して保育・児童福祉分野におけるソーシャルワークの実際を理解する		
授業の概要	児童福祉・保育実践に必要とされるソーシャルワーク（社会福祉援助・相談援助）の理論・技術等について、その基礎を演習形式により体験的に理解を深める。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス ソーシャルワークとは何か(1) 保育とソーシャルワークの関係	
	第2回	ソーシャルワークとは何か(2) ソーシャルワークの基礎理論①	
	第3回	ソーシャルワークとは何か(3) ソーシャルワークの基礎理論②	
	第4回	ソーシャルワークとは何か(4) ソーシャルワークの基礎理論③	
	第5回	対人支援の専門職をめざす私(1) 自己覚知・自己理解	
	第6回	対人支援の専門職をめざす私(2) 他者理解	
	第7回	対人支援の専門職をめざす私(3) 援助者の基本的態度	
	第8回	対人支援職のコミュニケーション技法(1) 基本スキル①	
	第9回	対人支援職のコミュニケーション技法(2) 基本スキル②	
	第10回	対人支援職のコミュニケーション技法(3) 支援すること・されること	
	第11回	ソーシャルワーク実践(1) 事例検討と発表①	
	第12回	ソーシャルワーク実践(2) 事例検討と発表②	
	第13回	ソーシャルワーク実践(3) 事例検討と発表③	
	第14回	ソーシャルワーク実践(4) 事例検討と発表④	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	【予習】 ・日頃より福祉に関する報道等に留意し、自ら福祉に関する情報を収集すること ・随時出題される事前課題に取り組むこと 【復習】 ・授業のポイントを整理すること		
テキスト	なし（授業時にプリントを配布する）		
参考文献	随時紹介する		
評価方法	平常点（小レポート等）：40% 期末レポート：60%		

社会福祉方法論		後期 2 単位	2年	
ソーシャルワーカーの力量を高める方法論		中島 洋（なかしま ひろし）		
授業の到達目標 及びテーマ	<p>老老介護の問題、社会的排除の問題、ニート・フリーターなどの就労支援問題、世代を問わない虐待問題、子育て困難の問題など、多様な社会福祉問題が今日散見されます。本授業では、対人援助専門職としての働きを堅実に遂行できるよう、実践の指針となる基本的な思考力・判断力の育成を旨とします。具体的な到達目標としては、講義で取り上げた基本的な社会福祉理論・アプローチ（10個）の各々を要約・説明できることです。</p>			
授業の概要	<p>本授業は原則、講義と演習を組み合わせた構成で展開します。学習内容としては、川村隆彦著『ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ』中央法規、2011年で取り上げられた社会福祉理論・アプローチ（10個）を分かり易く解説します。その他、適宜、グループ・ディスカッションやミニ・プレゼンテーションを取り入れたいと思います。さらに、毎回、リアクションペーパーを書くことで、内容理解の確認や質問にも応じられるように配慮します。</p>			
授業計画	第1回	オリエンテーション、クライアント中心理論・アプローチ		
	第2回	エコロジカル理論・アプローチ		
	第3回	行動理論・アプローチ		
	第4回	認知理論・アプローチ		
	第5回	危機介入理論・アプローチ		
	第6回	問題解決理論・アプローチ		
	第7回	課題中心理論・アプローチ		
	第8回	エンパワメント理論・アプローチ		
	第9回	システム（家族療法）理論・アプローチ		
	第10回	ナラティブ理論・アプローチ		
	第11回	理論・アプローチの組み合わせ——子育てに悩む母親へのアプローチ		
	第12回	理論・アプローチの組み合わせ——中途脊髄障害者へのアプローチ		
	第13回	様々な理論・アプローチⅠ——セルフエスティーム、神経言語プログラミング、経験学習		
	第14回	総まとめ——テスト対策、質疑応答		
	第15回	被災地復興支援策を保育の視点から考える		
準備学習 (予習・復習等)	<p>ニュース・新聞などから様々な社会福祉問題に対し関心をもち、主体的に理解を進めることが挙げられます。さらに、京極高宣著『社会福祉学小辞典』（ミネルヴァ書房）などにより、社会福祉の基本的用語について自主学習することをお勧めします。</p>			
テキスト	特に指定しない（毎回プリントを配布する予定）。			
参考文献	川村隆彦著『ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ』中央法規、2011年。その他、随時紹介する。			
評価方法	試験:70% リアクションペーパー:30%			

現代社会と保育		前期 2 単位	2・3年
現代社会と保育		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「戦後日本社会における保育の位置」をテーマにする本講義では、20世紀後半の日本社会における家庭養育と施設保育の変遷を理解する。そのために家族史・女性史・労働史・人口史などの成果を積極的に摂取し、隣接諸科学と対話できる基礎的能力を身につける。		
授業の概要	本年度は、乳幼児を初めとする子どもの貧困問題に関する研究成果から多くを学ぶ。1990年代中頃以降の脱戦後期に拡大した経済的・社会的・文化的格差とその結果として顕著になった貧困は相当数の子どもや家族を直撃している。この問題に主に経済学から迫った下記の新書を手がかりに、問題の出現の経過を追い、その原因や背景を見たうえで、子どもの貧困と養育・保育などとの関係について考察する。		
授業計画	第1回	本講義のねらい・内容・進め方などの説明	
	第2回	現状と測定	
	第3回	戦後史における位置	
	第4回	要因と背景	
	第5回	対象者	
	第6回	母子世帯	
	第7回	中間まとめと確認問題	
	第8回	政策	
	第9回	現金給付	
	第10回	現物給付	
	第11回	貧困と養育	
	第12回	貧困と保育	
	第13回	貧困と教育	
	第14回	貧困と就労	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	阿部彩氏の2冊の岩波新書『子どもの貧困——日本の不公平を考える』(2008年)と『子どもの貧困——解決策を考える』(2014年)を事前に購読しておく。		
テキスト	上記の新書と講義中に配布する資料など		
参考文献	講義中に提示		
評価方法	確認問題:30% 試験:70%		

社会的養護論		前期 2 単位	2年
児童福祉施設における子どもたちの生活と権利～社会的養護の意義と方法の理解		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標及びテーマ	被虐待ほか多様な家庭の事情により家族と離れ、社会的な養護・養育を必要とする子どもたちにとって必要な理解・援助内容・援助方法論を、権利保障の意義やその価値とともに体系的に理解する。主に施設での援助内容を学びながら、専門的理解やケアを必要とする子どもの自立支援の意味を、自分自身の生活とも重ねながら考える。		
授業の概要	さまざまな児童福祉施設での支援のもつ意味を構造的に理解し、ケアの現場の持つ役割や機能、専門性を理解する。施設養護および家庭養護の具体的実践事例に出会い、施設職員や養育者に求められる子ども理解、支援のあり方、今後の課題の要点を獲得する。		
授業計画	第1回	社会的養護とは～その概念と基本理念、果たす役割	
	第2回	児童福祉施設の体系・機能とソーシャルワークの活用	
	第3回	信頼関係の形成と日常生活を通しての自立支援	
	第4回	子どもたちとの生活～施設職員の役割と働き	
	第5回	養護問題の変遷と家族危機、ホスピタリズム	
	第6回	日本および海外の児童養護と里親制度、養子縁組制度	
	第7回	ケア単位の小規模化と家庭的養護の推進をめぐる課題	
	第8回	児童福祉施設最低基準と施設の生活の質（QOL）の検討	
	第9回	子どもたちの理解と援助方法論～事例研究	
	第10回	家族関係の理解・調整とファミリーソーシャルワーク	
	第11回	障がいをもつ子どもへの支援、子ども虐待の理解とケア	
	第12回	非行・思春期の諸問題とそのケア、性教育と子どもの権利	
	第13回	先人の築いた児童養護の歴史とキリスト教児童養護	
	第14回	児童福祉施設実践をめぐる今後の課題	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、あらかじめ提示された教科書や資料を読んでから参加する。復習の意味でも、それらを読みこみ、理解を深める。提示された場合には授業への感想・考察レポートを提出する。参考文献を自分で読む努力をする。提出課題に取り組む。自分の生活の身近にどのような児童福祉施設の働きがあるのか、調べたり出会ったりする努力をする。		
テキスト	開講時に提示する（必ず購入のこと）。		
参考文献	参考資料とともに授業の中で紹介していく。		
評価方法	授業感想文：10% 提出課題：30% 試験：60%		

里親養育論		後期 2 単位	2・3年
子ども支援から見る里親養育の形と家庭養護の現状を踏まえた里親家庭への支援方法の検討		長田 淳子（ちようだ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	保育でも家庭的保育が重んじられているが、さまざまな家庭の事情から家族から離れて生活する子どもたちにとって、生活の場のもつ意味、そしてその現状を理解する。それらを踏まえて、子どもが血縁を超えて出会う里親家庭での養育の意義について検討する。また、子どもを中心とした支援の方法に着目しながら、里親家庭における養育に対するの援助方法や支援体制のあり方・展望について検討する。		
授業の概要	前提となる社会的養護への理解を深めながら、子どもにとって「生活」とは何かを、自身の「生活観」をふり返りながら考察する。また、多様なニーズと課題を持つ子どもたちの特徴やその支援の方法を学ぶ。その上で、中途養育となる里親養育の難しさ・よさを確認しながら、子どもにとって里親養育とは何か、里親養育の現状や課題、支援の実際を含め理解する。事例や文献、視聴覚教材などを利用予定。		
授業計画	第1回	子どもにとって「生活」とは何か ～乳児院での子どもたちの「生活」などをとおして～	
	第2回	家庭で生活することのもつ意味～「生活観」をとおして～	
	第3回	家庭養護・家庭的養護とは～里親家庭の種類と養育の形～	
	第4回	子どもを取り巻く環境について（保護者の状況など）	
	第5回	子どもの状況① 子ども虐待・親との分離体験とその影響	
	第6回	子どもの状況② 発達障がい等の発達の課題	
	第7回	子どもの状況③ 心理治療などの支援方法	
	第8回	里親の養育力とは何か ～中途養育の難しさと大切なこと～	
	第9回	養育の実際① 血縁のない子どもとの生活の開始にあたっての課題	
	第10回	養育の実際② 実親との関係（交流や家庭復帰、実親子関係など）	
	第11回	養育の実際③ 真実告知	
	第12回	養育の実際④ 子どもの成長にともなう課題（特に自立をめぐる）	
	第13回	里親とその家族への支援 ～各関係機関との連携と支援のあり方～	
	第14回	子どもにとっての「生活」をどう支えるか～里親が求められていることは～	
	第15回	「家庭」で育つこと、これからの子ども支援	
準備学習 (予習・復習等)	次回の授業のテーマとなる箇所について、テキストより指示し、事前に一読するよう提示する。また、授業の終わりに、その授業の振り返りとなるような感想文やミニレポートなどの課題を提示する場合がある。		
テキスト	開講時に提示する。		
参考文献	参考文献・資料ともに、必要に応じて紹介していく。		
評価方法	授業への参加状況:30% 提出課題:20% レポート:50%		

人間と障害		後期集中 2 単位	2・3年 子ども学科
多様な人々による共生の可能性を障害という切り口から検討する		角田 雅昭 (かくた まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	ノーマライゼーションという理念は、障害児・者も、生まれ育った地域で共に暮らしていくことを唱っている。その実現のために必要な支援が、本来相互的な営みであるということを理解する。		
授業の概要	本講義では、ディスカッションやグループワークを中心に展開する予定である。そのため、各自積極的な発言が求められる。また、必要に応じてレポート等の提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：福祉の目的	
	第2回	人間と障害について	
	第3回	健常児・者とは？	
	第4回	健常児・者と障害児・者との歴史	
	第5回	地域福祉の思想と運動（1）施設から地域へ	
	第6回	地域福祉の思想と運動（2）当事者という概念の隆盛	
	第7回	障害児・者支援の比較（1）日本と北欧	
	第8回	障害児・者支援の比較（2）日本と北欧	
	第9回	障害児・者の当事者活動：当事者とは？	
	第10回	重度重複障害児・者の支援：コミュニケーションの可能性とその事例	
	第11回	障害者の就労：就労移行支援の事例から	
	第12回	障害者の結婚と子育て：知的障害者・発達障害者の事例から	
	第13回	障害児・者による健常児・者の支援：支援という相互的営みの意味	
	第14回	共生に向けて：共生ケアの事例から	
	第15回	講義のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時課題が指示されるので、それを行ってから講義に臨むこと		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	適宜、講義の中で紹介する		
評価方法	レポートもしくは試験：50% 平常点（提出物等）：50%		

キリスト教保育Ⅰ		後期 2 単位	1年
見えないものに目をそそぐ		松浦 浩樹（まつうら ひろき）	
授業の到達目標及びテーマ	キリスト教信仰に根差した保育の理念と実践を理解し、自分も生かされていることを知ることで子どもに関わる使命感を培う。また乳幼児を取り巻く社会や家庭の現状を踏まえつつ、キリスト教保育の実際を学び、子どもの心的・身体的な育ちに何が必要であるかを考察し、振り返ることと（省察）の重要性を理解する。		
授業の概要	毎回の講義で「幼児さんびか」を歌う。歌詞やメロディーに流れるキリスト教保育の世界観に触れる。講義の後、5名前後のグループディスカッションをし、その中で意見交換や自分なりの考えを述べ、理解できないことを明確にし、再度講義の中でまとめる。またテーマに沿って、自分で資料や教材を選んだり、収集し、学ぶ。その学んだものを発表し、共有し合う。また教会学校見学やキリスト教保育実践園での見学を通じて、キリスト教保育を理解する		
授業計画	第1回	キリスト教保育とは—キリスト教保育が大事にしてきたこと—	
	第2回	幼稚園・保育所・子ども園を取り巻く現状 —現代におけるキリスト教保育の使命—	
	第3回	子どもを取り巻く環境とキリスト教保育の使命	
	第4回	キリスト教保育の環境・保育者の役割（信頼関係）	
	第5回	見えないものに目をそそぐ —保育の実践と省察—	
	第6回	キリスト教保育の実際① 保育の理念と礼拝の意味と実際	
	第7回	キリスト教保育の実際② フレーベルの思想と恩物	
	第8回	キリスト教保育の実際③ 賛美歌と子ども	
	第9回	キリスト教保育の実際④ 遊び・生活 その1	
	第10回	キリスト教保育の実際⑤ 遊び・生活 その2	
	第11回	キリスト教保育の実際⑥ 絵本と子ども	
	第12回	キリスト教保育の実際⑦ キリスト教保育現場見学と学び	
	第13回	キリスト教保育の実際⑧ クリスマスの意味と準備	
	第14回	教会訪問・教会学校見学レポート	
	第15回	「共に歩む」「共に生きる」ということ・見えないものに目を注ぐ保育・保育者の役割 <レポート作成>	
準備学習 (予習・復習等)	分担した「子どもさんびか」・「幼児さんびか」を数名のグループで練習し、発表する。 事前に提示する授業内容について、テキスト相当箇所を読んでおく。 内容によっては、哲学的解釈が必要になるため、復習として「自分の思いや考え」とノートに記しておく。		
テキスト	『新キリスト教保育指針』『キリスト教保育 50の質問 見えないものに目をそそぐ』『幼児さんびかⅠ・Ⅱ』		
参考文献	こどもさんびか 月刊『キリスト教保育』、その他 これらの資料を随時配布		
評価方法	意欲（実技課題）：10% レポート2回分：30% 最終レポート：60%		

キリスト教保育Ⅱ		前期 2 単位	2・3年
希望への教育		松浦 浩樹（まつうら ひろき）	
授業の到達目標 及びテーマ	キリスト教信仰に根差した保育の理念と実践を理解し、自分も生かされていることを知ることで、子どもの育ちにかかわる使命感を培う。また乳幼児を取り巻く社会や家庭の現状を踏まえつつ、キリスト教保育の使命とは何かを学び、「育てる者へ」の意識の転換を喚起し、子どもの心的・身体的な育ちを促し、子どもの希望を培う大人のあり方を探究する。		
授業の概要	キリスト教保育の理念や実践の基本を理解する。また実践例や保育現場の見学を通じて、理解を深める。講義の後、5名前後のグループディスカッションをし、その中で意見交換や自分なりの考えを述べ、理解できないことを明確にし、再度講義の中でまとめる。またテーマに沿って、キリスト教保育の現場を観察し、自分で資料や教材・資料を収集し、実践的に学ぶ。学んだものを発表し、共有する。		
授業計画	第1回	キリスト教保育とは—キリスト教保育の現代的使命—	
	第2回	保育現場の動向と保育者・教育者のこれから	
	第3回	保育と祈り、省察	
	第4回	遊びを大切にする保育の理解	
	第5回	神・人のかかわりを大切にする保育の理解	
	第6回	キリスト教保育の環境の理解（歴史的取り組みの理解）	
	第7回	キリスト教保育の実際（1）ビデオ観察とカンファレンス	
	第8回	キリスト教保育の実際（2）保育現場報告	
	第9回	キリスト教保育の実際（3）保育現場報告	
	第10回	キリスト教保育の実際（4）保育現場報告	
	第11回	見えないものに目をそそぐ —保育の実践と省察の再考—	
	第12回	キリスト教保育の内容と展開	
	第13回	保育を共に創る —子ども・保護者と共に—	
	第14回	保育を共に創る —保育者と共に、地域と共に—	
	第15回	まとめ —保育者として、人として成長する—	
準備学習 (予習・復習等)	キリスト教保育Ⅰにおける基礎的な学習を復習しておくこと。 またキリスト教保育Ⅰを踏まえた上での実践的学びとディスカッションを授業の柱とする。復習として、板書されたことや授業で伝達したことのみではなく、自分なりの考えをノートに記しておくこと。		
テキスト	『新キリスト教保育指針』『キリスト教保育 50の質問 見えないものに目をそそぐ』		
参考文献	『幼児さんびか1.2』、『こどもさんびか』 月刊『キリスト教保育』、その他、これらの資料を随時配布		
評価方法	最終レポート:60% 中間レポート、発表:20% 意欲(討論):20%		

乳児保育演習		後期 2 単位	2年
乳児の発達の特徴と保育のあり方		韓 仁愛 (はん いんえい)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 乳児の成長発達に関する基礎的な知識を身に付ける。 ○ 子どもの月齢・年齢に相応しい保育の関わり方を工夫・探究する。 ○ 親の現況を理解し、サポートできる乳児保育への心構えを持てるようになる。 ○ 保育の専門性を自覚し、保育者同士の連携の必要性を認識できる。 ○ 乳児保育の歴史の変遷と現状を知り、今後の課題に気付く。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全授業はパワーポイントによるレジュメとテキストを中心に進めるが、必要に応じてDVDや参考資料を並行することで、授業内容がより深められるようにする。 ・ 実践事例や実際の映像を授業内容に取り入れ、実際の子どもの言葉や行動から乳児の成長発達について理解し、関わり方を学生自らが考える場にする。 ・ グループディスカッションでは、5～6人が1グループになり、年齢別のあそびの工夫とおもちゃ作りを行う。 		
授業計画	第1回	オリエンテーションと乳児保育の意義	
	第2回	0歳児の発達の特徴と保育	
	第3回	0歳児の生活とあそび ～実践映像を通して学ぶ～	
	第4回	1歳児の発達の特徴と保育	
	第5回	1歳児の対人関係と保育者の関わり方 ～実践事例を通して～	
	第6回	0歳児・1歳児のおもちゃづくり ～グループワーク～	
	第7回	2歳児の発達の特徴と保育	
	第8回	2歳児のあそびの理解と実践事例の検討	
	第9回	乳児保育と保育環境	
	第10回	「三歳児神話」と乳児保育のあり方	
	第11回	乳児保育の歴史と今後の課題 ～家庭的保育事業を含む～	
	第12回	記録と保育計画 ～月案・週案の作成を中心に～	
	第13回	保護者理解と子育て支援 ～実践事例検討と連絡帳の作成～	
	第14回	特別な支援が必要な子ども・家庭支援	
	第15回	保育者間の連携と保育者のあり方 乳児保育で大事にしたいこと	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次週の授業内容は各自が事前に調べたりテキストに目を通すなど予習を行う。 2. グループワークを行う前には、学生同士の話し合いを通して、計画書を作成し、グループワークに必要な資料及び教材を用意して演習に臨む。 演習後には感想を含みミニレポートを提出する。 		
テキスト	乳児保育研究会編『改訂4版 資料でわかる乳児の保育新時代』ひとなる書房、2015年。		
参考文献	実践事例は随時プリントを使用する。		
評価方法	授業態度:20% 演習課題:30% 試験:50%		

障害児保育演習（2012年度入学者）		通年（前期）	4 単位	3年
障害児保育の理論と実践を考える		角田 雅昭（かくた まさあき）		
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、保育の原点としての障害児保育を実践的に学ぶ。そのためにも、（１）障害児やその保護者のニーズ、（２）そのニーズに応じた支援・ケアのあり方、以上の２点について理解する。その際、ただ専門性を深めるばかりではなく、その専門性自体を、実践の中で反省的に捉え直すことの必要性についても説明できるようになる。			
授業の概要	本講義では、視聴覚教材視聴、ディスカッション、あるいはグループワークを活用しながら展開するため、内容に応じてリアクションペーパーあるいはレポート等の提出を求める。			
授業計画	第1回	イントロダクション：障害児との出会い		
	第2回	障害という概念について（１）保育者として何を学ぶか		
	第3回	障害という概念について（２）ニーズを理解する		
	第4回	障害児保育とは（１）障害児と生活をともにすること		
	第5回	障害児保育とは（２）ノーマライゼーションとインクルージョン		
	第6回	障害児保育とは（３）ニーズに応じた支援・ケア		
	第7回	障害児保育の歴史と理念（１）戦前の障害児保育		
	第8回	障害児保育の歴史と理念（２）優生学の興隆		
	第9回	障害児保育の歴史と理念（３）石井亮一の実践から学ぶ		
	第10回	障害児保育の制度とその実際（１）制度の誕生と実際		
	第11回	障害児保育の制度とその実際（２）個別のニーズと支援計画		
	第12回	障害児の保護者の声から学ぶ：保護者のニーズ		
	第13回	重度重複障害児の「声」から学ぶ：遷延性意識障害児・者とのコミュニケーション		
	第14回	発展途上国における障害児保育実践：制度の無い地域の支援		
	第15回	まとめ：今後の障害児保育実践について		
準備学習 (予習・復習等)	予習：参考文献をはじめとした、障害児保育関連の事例を事前に読んでおくこと			
テキスト	特になし			
参考文献	武居光 2014 『子ども相談ノート』Sプランニング			
評価方法	試験：60% 平常点（提出物等）：40%			

障害児保育演習（2012年度入学者）		通年（後期）	3年
多様な人々による共生の可能性を障害という切り口から検討する		角田 雅昭（かくた まさあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	ノーマライゼーションという理念は、障害児・者も、生まれ育った地域で共に暮らしていくことを唱っている。その実現のために必要な支援が、本来相互的な営みであるということを理解する。		
授業の概要	本講義では、ディスカッションやグループワークを中心に展開する予定である。そのため、各自積極的な発言が求められる。また、必要に応じてレポート等の提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：福祉の目的	
	第2回	人間と障害について	
	第3回	健常児・者とは？	
	第4回	健常児・者と障害児・者との歴史	
	第5回	地域福祉の思想と運動（1）施設から地域へ	
	第6回	地域福祉の思想と運動（2）当事者という概念の隆盛	
	第7回	障害児・者支援の比較（1）日本と北欧	
	第8回	障害児・者支援の比較（2）日本と北欧	
	第9回	障害児・者の当事者活動：当事者とは？	
	第10回	重度重複障害児・者の支援：コミュニケーションの可能性とその事例	
	第11回	障害者の就労：就労移行支援の事例から	
	第12回	障害者の結婚と子育て：知的障害者・発達障害者の事例から	
	第13回	障害児・者による健常児・者の支援：支援という相互的営みの意味	
	第14回	共生に向けて：共生ケアの事例から	
	第15回	講義のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時課題が指示されるので、それを行ってから講義に臨むこと		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	適宜、講義の中で紹介する		
評価方法	レポートもしくは試験：50% 平常点（提出物等）：50%		

障害児保育演習（2013年度以降入学者）		前期 2 単位	3年 子ども学科
障害児保育の理論と実践を考える		角田 雅昭（かくた まさあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、保育の原点としての障害児保育を実践的に学ぶ。そのためにも、（１）障害児やその保護者のニーズ、（２）そのニーズに応じた支援・ケアのあり方、以上の２点について理解する。その際、ただ専門性を深めるばかりではなく、その専門性自体を、実践の中で反省的に捉え直すことの必要性についても説明できるようになる。		
授業の概要	本講義では、視聴覚教材視聴、ディスカッション、あるいはグループワークを活用しながら展開するため、内容に応じてリアクションペーパーあるいはレポート等の提出を求める。		
授業計画	第1回	イントロダクション：障害児との出会い	
	第2回	障害という概念について（１）保育者として何を学ぶか	
	第3回	障害という概念について（２）ニーズを理解する	
	第4回	障害児保育とは（１）障害児と生活をともにすること	
	第5回	障害児保育とは（２）ノーマライゼーションとインクルージョン	
	第6回	障害児保育とは（３）ニーズに応じた支援・ケア	
	第7回	障害児保育の歴史と理念（１）戦前の障害児保育	
	第8回	障害児保育の歴史と理念（２）優生学の興隆	
	第9回	障害児保育の歴史と理念（３）石井亮一の実践から学ぶ	
	第10回	障害児保育の制度とその実際（１）制度の誕生と実際	
	第11回	障害児保育の制度とその実際（２）個別のニーズと支援計画	
	第12回	障害児の保護者の声から学ぶ：保護者のニーズ	
	第13回	重度重複障害児の「声」から学ぶ：遷延性意識障害児・者とのコミュニケーション	
	第14回	発展途上国における障害児保育実践：制度の無い地域の支援	
	第15回	まとめ：今後の障害児保育実践について	
準備学習 (予習・復習等)	予習：参考文献をはじめとした、障害児保育関連の事例を事前に読んでおくこと		
テキスト	特になし		
参考文献	武居光 2014 『子ども相談ノート』Sプランニング		
評価方法	試験：60% 平常点（提出物等）：40%		

保育所保育研究		前期 2 単位	3年	
保育所における乳幼児の姿から、保育所の役割、おとなの関わりを考える。		菅野 和枝 (すがの かずえ)		
授業の到達目標及びテーマ	保育所の役割を知るとともに、乳幼児の発達を、生活の営み、人との関わり双方から理解する。 また、保育所の、地域における役割を理解し、乳幼児とそれを取り巻く社会、並びに保護者への支援について理解する。			
授業の概要	乳幼児の発達を、保育所保育指針を基に講義。少人数によるバズセッション形式を取り入れ、学生が積極的に発言することも求める。			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	保育所の生活について		
	第3回	子どもとあそび I グループワーク I		
	第4回	子どもとあそび II グループワーク II		
	第5回	子どもの姿 乳児期 (誕生～1歳3か月)	生活の営み	
	第6回	子どもの姿 乳児期 (誕生～1歳3か月)	ひととの関わり	
	第7回	子どもの姿 前幼児期 (1歳3か月～3歳)	生活の営み	
	第8回	子どもの姿 前幼児期 (1歳3か月～3歳)	ひととの関わり	
	第9回	子どもの姿 幼児期 (3歳～5歳)	生活の営み	
	第10回	子どもの姿 幼児期 (3歳～5歳)	ひととの関わり	
	第11回	子どもとあそび III 環境と行事		
	第12回	子どもの食を考える		
	第13回	保護者との関わり		
	第14回	子育て支援について		
	第15回	保育園の生活を考える		
準備学習 (予習・復習等)	予習、復習ともに、授業で指示するので、それを行うこと。 復習は、レポート提出を求める。			
テキスト	「実践 保育学」日本小児医事出版社 監修 帆足英一			
参考文献	講義時に提示			
評価方法	平常点 (提出課題など) :50% 期末レポート:50%			

保育臨床相談		前期 2 単位	3年
子どもの心の理解と保育者に必要なカウンセリングマインドについて学ぶ		井上 万理子 (いのうえ まりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	授業の目標は次の4点である①保育・幼児教育の中で求められるカウンセリングマインドを理解する②発達に問題を抱える子どもの理解や対処について学ぶ③保護者対応や家族の育児支援に必要な知識と地域における連携について学ぶ④対人援助職として自己理解を深め、コミュニケーション能力を身につける。		
授業の概要	この科目では、対人援助職としての保育者に求められる心の理解や援助について、発達臨床心理学的視点から学ぶ。カウンセリングやコミュニケーションスキルについて、エクソサイズやロールプレイなど実際に体験して身につけることをめざす。また、自己理解に係わる各種の心理テストをおこなうなど、主体的な授業参加に基づく演習形式で進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：カウンセリングについて	
	第2回	エクソサイズを通して対人コミュニケーションを学ぶ	
	第3回	ロールプレイを通して傾聴、共感を体験的に理解する	
	第4回	自分の感情状態に気づく、又、自己開示の体験をする	
	第5回	心理テストを体験しその結果をもとに自己理解を深める	
	第6回	基礎的な精神病理や心理療法について学ぶ	
	第7回	発達臨床的視点から子どもの心の問題について学ぶ	
	第8回	保育や教育の場で出会う子どもの問題について自己の体験から考える	
	第9回	子どもの問題への理解と対応を考える	
	第10回	育児支援の視点から保護者との連携について考える	
	第11回	地域における各種支援機関との連携について学ぶ	
	第12回	困難事例での模擬体験を通して保護者対応を学ぶ	
	第13回	特別な支援が必要な事例について具体的な支援を検討する	
	第14回	特別な支援が必要な事例について総合的にまとめ、支援のプランを立てる	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	参考文献やプリントをもとに学習内容の補充や定着をおこなう。		
テキスト	主としてプリントを用いる。参考文献を活用する。		
参考文献	馬場禮子・青木紀久代著『保育に生かす心理臨床』 ミネルヴァ書房 青木紀久代編『いっしょに考える家族支援』明石書店 青木紀久代・矢野由佳子編『実践・発達心理学ワークブック』みらい		
評価方法	平常点(課題提出など) :40% 試験:60%		

保育臨床相談		前期 2 単位	3年
子どもの育ちを支えるために		山口 美和（やまぐち みわ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○保育の中で出会う子どもの様々な問題を多面的に理解する。 ○保育の中で出会う問題に対して様々な援助の方法を理解する。 ○自分自身で、援助方法を考えられるようになる。</p>		
授業の概要	<p>授業の前半では、子どもの発達や子どもを理解する方法を知る。 授業の後半では、様々な事例について、グループディスカッションなどしながら、仲間同士の関係も含めて、子どもを理解し、援助の方法を考えていく。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	保育における子どもの理解	
	第3回	カウンセリングマインド	
	第4回	子どもの心の発達	
	第5回	子どもの心の問題	
	第6回	子どもの発達の問題	
	第7回	他児とのトラブルが多い子どもの事例	
	第8回	1人遊びの多い子どもの事例	
	第9回	集団の活動に参加しない子どもの事例	
	第10回	場面の切り替えに時間がかかる子どもの事例	
	第11回	友達と話さない子どもの事例	
	第12回	保護者に対するカウンセリング的アプローチ	
	第13回	子育て支援	
	第14回	外部機関との連携	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に、予習・復習の課題については指示する。		
テキスト	<p>浜谷直人「保育力 子どもと自分を好きになる」（新読書社）。 その他、必要に応じて、資料等を配布する。</p>		
参考文献	<p>浜谷直人編著『仲間とともに自己肯定感が育つ保育 安心のなかで挑戦する子どもたち』（かもがわ出版）/浜谷直人編著『発達障害児・気になる子の巡回相談 すべての子どもが「参加」する保育へ』（ミネルヴァ書房）/芦澤清音『発達障がい児の保育とインクルージョン』（大月書店）その他、随時紹介する。</p>		
評価方法	授業感想文:45% 試験:55%		

家族支援論		後期 2 単位	3年
子育て家庭への家族支援の視点とそのアプローチ		宮本 和武 (みやもと かずむ)	
授業の到達目標 及びテーマ	家庭の意義とその機能について理解をする。子育て家庭を取り巻く社会的状況について理解をし、その支援体制及び子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の理解と関係機関との連携について理解をする。		
授業の概要	家族とは何か、家庭の変容と地域社会の変化と同時に子どもの育つ環境が大きく変化をしてきていることに着目し、子育て家庭への家族支援に焦点を合わせて、実施の事例をもとに考察ができるように授業を進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、家庭支援の必要性	
	第2回	家族とは、家庭とは	
	第3回	少子化と現代の子育て家庭	
	第4回	家庭支援の原理	
	第5回	男女共同参画社会とワークライフバランス	
	第6回	地域社会の変化と家庭支援の必要性	
	第7回	次世代育成支援施策と保育所・幼稚園の役割	
	第8回	保育所における子育て支援サービス①保育所入所児童の場合	
	第9回	保育所における子育て支援サービス②地域の子育て家庭の場合	
	第10回	現代社会における虐待・DVの問題とその実態	
	第11回	要保護児童及びその家族に対する支援①	
	第12回	要保護児童及びその家族に対する支援②	
	第13回	障がいのある子どもとその家族に対する支援	
	第14回	関係機関との協働と保育者の役割	
	第15回	子育て支援サービスの課題	
準備学習 (予習・復習等)	事前に配布した資料は次回の授業までに読んでおく。特に、新聞やニュースに関心を持っておくように心がける。		
テキスト	『保育者養成シリーズ 家族支援論』林邦雄・谷田貝公昭監修 (一藝社)		
参考文献	必要に応じて紹介していく。		
評価方法	定期試験:50% 課題提出:30% 授業感想文:20%		

児童福祉療育論		後期 2 単位	3年
障害のある子どもと家族の幸せを支援する療育のあり方		厚坂 幸子（あつさか さちこ）	
授業の到達目標及びテーマ	幼児期における療育システムは整備されているが、障害のある子どもと家族の、地域生活における課題は山積している。幼児期に留まらず学齢期を含めて、関係機関が果たす役割を理解する。また具体的事例を通して、障害があっても一人の子どもとして、当たり前前に生活するための望ましい環境を考察し、本人と家族に寄り添った総合的支援のあり方を理解する。		
授業の概要	講義が中心となるが、毎回授業感想や考察を記し次回授業で振り返る。障害を自分自身に引き寄せ、多様な視点で捉えられるようグループワークも随時行う。教育を含めてさまざまな障害福祉課題を取り上げながら、障害児者の生きにくさ・障害とは何かの本質に近づき療育を検証する。		
授業計画	第1回	はじめに：療育とは何か・障害とは何か	
	第2回	早期発見・早期療育—そのシステムと現状	
	第3回	障害の特性—見える障害と見えない障害	
	第4回	障害受容のプロセス—寄り添う支援のあり方	
	第5回	家族（母、父、兄弟児）の状況と求められる支援のあり方	
	第6回	幼稚園・保育園での受け止め方	
	第7回	就学期（学校選び）の対応	
	第8回	学齢期に求められる療育（学校教育編）	
	第9回	学齢期に求められる療育（放課後編）	
	第10回	障害児童入所施設の現状と課題	
	第11回	権利擁護の仕組みと福祉オンブズパーソン活動実践	
	第12回	市民活動の意義と役割—「ともいくクラブ」実践より	
	第13回	地域生活支援—暮らしを総合的に支える新たな取り組み	
	第14回	日本の障害者福祉—カンボジア知的障害者支援から学ぶ	
	第15回	特別視と配慮の違いを考察する	
準備学習 (予習・復習等)	毎学習後に資料を見直す。		
テキスト	特に定めず、随時資料を配布する。		
参考文献	必要に応じて、その都度紹介する。		
評価方法	授業感想・考察:60% 試験:40%		

養護内容演習		後期 2 単位	3年
保育者としての自分の価値観に気づき、支援内容が価値観の影響を受けていることを学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）	
授業の到達目標及びテーマ	保育や福祉の現場で利用者やその家族を支援するときには、保育者一人ひとりの価値観が、支援方法・内容を大きく左右する。一人ひとりが自分の持っている価値観を理解し、それぞれの価値観が支援のあり方にどのように影響するのかを理解する。		
授業の概要	設定されたテーマについての仲間とのディスカッションを通して、自分の価値観がどのようなものかを理解する。さらに基本的なかかわり方の技法を学んだうえで、利用者だけでなく、利用者の家族に対する対応の仕方を学ぶ。さらに実習で体験した具体的な対人援助場面を取り上げ、ロールプレーを通して、より実践的な対人援助について学ぶ。		
授業計画	第1回	シラバスの紹介、グループ分け	
	第2回	グループディスカッション1 専門性とは何か	
	第3回	グループディスカッション2 命の価値について	
	第4回	グループディスカッション3 しょうがいは個性か	
	第5回	グループディスカッション4 だれが悪かったのか	
	第6回	ディスカッションまとめ	
	第7回	かかわるための技法1 傾聴とは	
	第8回	かかわるための技法2 カウンセリングの技法	
	第9回	かかわるための技法3 葛藤場面への対応	
	第10回	かかわるための技法4 インリアル・アプローチ	
	第11回	施設実習・統合保育場面のレポートの話し合い	
	第12回	ロールプレーの発表1	
	第13回	ロールプレーでの発表2	
	第14回	統合保育についてのまとめ	
	第15回	手紙を書こう	
準備学習 (予習・復習等)	特に予習の必要はないが、毎回のグループでの話し合うという経験が大切になるので、できる限り遅刻や欠席はしないこと。また授業後は、グループのディスカッションで得た自分の意見や友達の見解、教員のまとめの意見を整理しておくこと。		
テキスト	特になし。		
参考文献	必要に応じて指示する。施設実習、保育所実習、幼稚園実習での実習ノート。		
評価方法	授業後の感想レポート:40% 施設実習・統合保育のレポート:30% まとめのレポート :30%		

家族の社会学		前期 2 単位	2・3年
家族を社会的視点から分析してみる。		井田 瑞江 (いだ みずえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	わたしたちにとって「身近で」「当たり前」で「不変である」と思われている家族を、客観的にとらえ直し、日本における家族の変化や現代の特徴、問題について理解する。		
授業の概要	時代の流れや社会の変化によって変化し続けてきた家族について、夫婦、親子といった家族関係に焦点を当て、変化や現代の特徴、問題点について解説していく。		
授業計画	第1回	家族って何だろう (家族形態、家族と世帯、家族の機能)	
	第2回	若者にとっての結婚 その1 (日本における結婚の特徴と変化)	
	第3回	若者にとっての結婚 その2 (未婚者の結婚観の特徴と変化)	
	第4回	結婚後の人生 (家族周期論)	
	第5回	標準家族の誕生と大衆化	
	第6回	日本人の人生パターン (ライフサイクルの変化、ライフコース論)	
	第7回	家族の世話をすること その1 (家事は誰の仕事?)	
	第8回	家族の世話をすること その2 (家事は楽な仕事か?)	
	第9回	家族の世話をすること その3 (老親の世話、介護)	
	第10回	夫婦の力関係 その1 (家庭内で強いのは夫?、妻?)	
	第11回	夫婦の力関係 その2 (日本における変化)	
	第12回	家族であるための条件 その1 (離婚、再婚、ステップファミリー)	
	第13回	家族であるための条件 その2 (夫婦別姓、事実婚)	
	第14回	家族であるための条件 その3 (シングルという生き方、同性婚、家族ペット)	
	第15回	これからの家族 (標準家族からの解放)	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時、課題を出す。 復習：参考文献を読んだり、インターネットで調べたりして、授業で取り上げた内容について理解を深める。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	長津美代子・小澤千穂子編著『新しい家族関係学』建帛社		
評価方法	定期試験:60% ミニレポート:40%		

子どもと法		前期 2 単位	2・3年
日本国憲法と子どもをめぐる法		村元 宏行 (むらもと ひろゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○日本国憲法の全体像を把握する。 ○教職に就くにあたっての憲法の基本的な知見を身に付ける。 ○子どもをめぐる法体系とその問題を理解する。 		
授業の概要	<p>この講義ではまず、国家の最高法規である日本国憲法について学び、次いで子どもに関する法体系とその問題点について取り上げます。日本国憲法では基本的人権が保障され、その中で教育を受ける権利が保障されています。それらの基本的人権は子どもにも当然に保障されるはずですが、現実にはさまざまな問題が横たわっています。それらについての理解を深めてほしいです。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス (受講に際しての諸注意など)	
	第2回	憲法とは何か	
	第3回	日本国憲法の誕生	
	第4回	国民主権と象徴天皇制	
	第5回	憲法9条と平和主義	
	第6回	憲法と基本的人権 (人権の種類)	
	第7回	憲法と基本的人権 (自由権・社会権・参政権)	
	第8回	憲法が定める統治の仕組み	
	第9回	憲法改正問題	
	第10回	子どもをめぐる法体系	
	第11回	子どもの権利をめぐる	
	第12回	幼稚園と法	
	第13回	幼稚園教諭に求められる法律知識	
	第14回	幼稚園教諭に求められる法律知識 (実際事例を通じて)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>憲法については、毎時限毎のテーマについて、高校社会科で学んだ内容は最低限復習しておいてください。さらに新聞等で、子ども・憲法をめぐる時事問題の状況について把握しておいてください。</p>		
テキスト	<p>レジュメを配布しますので、テキストは使用しません。予習・復習のための文献は授業で紹介します。</p>		
参考文献	<p>『解説教育六法 2015年版』(三省堂)を持参してください。</p>		
評価方法	<p>小レポート:10% テスト:90%</p>		

地域社会と子ども		後期集中 2 単位	2・3年
地域における子どもの豊かな遊びを保障するために～子育ては地域で、自分たちの手で		天野 智子（あまの ともこ）	
授業の到達目標及びテーマ	地域住民が運営する子どもの遊び場「プレーパーク（冒険遊び場）：以下、PP」の実践や親たちの手による共同の子育て「自主保育」の活動への参加（フィールドワーク：以下、FW）と考察を通して、子どもの生活と遊び環境、子どもと大人との関係、子育てと地域のつながりについて考える。		
授業の概要	9月7日（月）2～5限は学内で講義とワークショップを行う。9月9日（水）、10日（木）、11日（金）、12日（土）は午前中から夕方まで学外（世田谷区内のPP等）でのフィールドワーク（以下、FW）と現地でのふり返しを行うため、終日アルバイトなど他の予定を入れない。学内授業欠席の場合、FWへの参加は不可。履修人数は上限15名。		
授業計画	第1回	子ども時代をふり返る～ワークショップ1	
	第2回	子ども時代をふり返る～ワークショップ2	
	第3回	PPと自主保育（視覚教材視聴と講義）	
	第4回	PPと出会う～オリエンテーション	
	第5回	PPを体験する～触れる・遊ぶ・作業する	
	第6回	放課後をPPで遊ぶ子どもたち	
	第7回	活動参加のふり返しとディスカッション	
	第8回	幼児・その親たちの活動への参加	
	第9回	親たちを囲んで～子育て中の親の声を聴く	
	第10回	放課後をPPで遊ぶ子どもたち	
	第11回	活動参加のふり返しとディスカッション	
	第12回	地域社会と子ども～ふり返しとディスカッション	
	第13回	地域社会と子ども～ふり返しとディスカッション	
	第14回	私の感じる「遊び・地域・子ども・大人」	
	第15回	まとめ～地域での子どもの豊かな遊びを保障するために	
準備学習 (予習・復習等)	集中講義に向けての準備として、前期に事前レポートを提出してもらう予定。詳細は受講者に別途知らせる。		
テキスト	天野秀昭『子どもはおとなの育ての親』ゆじょんとブックレットシリーズ③, 2002年		
参考文献	遊びの価値と安全を考える会『もっと自由な遊び場を』大月書店、羽根木プレーパークの会『冒険遊び場がやってきた！』晶文社（その他は授業で紹介する）		
評価方法	授業・FWの参加態度:50% FWノート:30% 事前・事後のレポート:20%		

本・子ども・大人 I		前期 2 単位	1年
子どもの本の豊かさー絵本の世界		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 絵本の多様性や重要性を理解できるようになる。 * 絵本を子どもに手渡すときの注意点や問題点が理解できるようになる。 * 長く読み継がれてきた絵本の特徴が理解できるようになる。 * 子どもの心に届く読み聞かせができるようになる。 		
授業の概要	様々なジャンルの絵本の特徴や見るべきポイントについて実物を例に挙げながら講義する。学生には、絵本の読み聞かせを実践してもらう。		
授業計画	第1回	イントロダクション：絵本とは何か	
	第2回	絵本の歴史と現在（世界）	
	第3回	絵本の歴史と現在（日本）	
	第4回	絵本を読むとはどういうことか	
	第5回	赤ちゃん絵本と認識絵本	
	第6回	言葉の絵本（あいうえお絵本、ABC絵本、言葉あそび絵本）	
	第7回	日常の冒険を描く絵本	
	第8回	ファンタジー絵本	
	第9回	世界を知るための絵本	
	第10回	文字がない絵本	
	第11回	科学の絵本と知識の絵本	
	第12回	しかけ絵本の功罪	
	第13回	高齢者のための絵本とビブリオセラピー	
	第14回	バリアフリーの絵本	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	絵本リーディング・マラソンを行う。各テーマごとに質問や意見をミニレポート形式で提出する。		
テキスト	必要に応じてプリント配布		
参考文献	授業の中で紹介		
評価方法	平常点・授業参加度：20% ミニレポート：20% 定期試験：60%		

本・子ども・大人Ⅱ		後期 2 単位	1年
絵本について知り、絵本をつくる		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ) 那須田 淳 (なすだ じゅん)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 絵本を実際につくることによって、より深くその世界を理解できるようになる。 * すぐれた作品の特徴が理解できるようになる。 * 絵本の構成や作家の工夫に目を向けることができるようになる。 		
授業の概要	講義+ワークショップ。さくまが絵本を総合的に見る部分、那須田がストーリー作成の部分を担当し、美術の久保制一先生にも制作指導をしていただき、多方面から絵本を理解できるようにする。また絵本作家にもゲストとして来ていただき、実作の現場でのお話もうかがう。		
授業計画	第1回	イントロダクション (さくま)	
	第2回	絵本とは何か (さくま)	
	第3回	絵本の展開について：起承転結のつくり方 (那須田)	
	第4回	絵本の文章について (那須田)	
	第5回	絵本の構造・構成とダミーづくり (さくま)	
	第6回	製本：本文と扉の用紙を束ねて背固め (さくま・久保)	
	第7回	製本：本文を裁断し表紙をつくる (さくま・久保)	
	第8回	製本：本文を表紙でくるんで完成 (さくま・久保)	
	第9回	絵の展開の仕方と絵コンテ：向き、水平線の使い方、アクターとステージ、アップと引き、視点の使い方など (さくま)	
	第10回	絵本作家に聞く (さくま)	
	第11回	絵本の流れと作家の工夫 (さくま)	
	第12回	よい絵本とは何か (さくま)	
	第13回	仕上がった絵本の合評会 (さくま・那須田)	
	第14回	仕上がった絵本の合評会 (さくま・那須田)	
	第15回	各自が作った絵本のプレゼンテーションと講評。教員たちによるシンポジウム (さくま・那須田・久保)	
準備学習 (予習・復習等)	受講者は必ず絵本リーディングマラソンを少なくとも1級までは終わらせておくこと。(用紙はさくまの研究室の前に用意してある)		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	松岡享子著『えほんのせかい こどものせかい』（日本エディタースクール出版部）ほか。随時紹介する。		
評価方法	平常点・授業参加度：40% 絵本制作：60%		

子どもの文学 I		前期 2 単位	2年
子どもの文学の歴史と現在		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 児童文学の多様性や重要性について理解できるようになる。 * 子どもにとって物語や文学がどのような意味をもつかを理解できるようになる。 * 各ジャンルの著名な作品について知り、読んで、意義を把握できるようになる。 		
授業の概要	児童文学の特徴や問題点について、画像やデータを示しながら紹介する。		
授業計画	第1回	イントロダクション：児童文学とは何か？	
	第2回	子どもに本は必要か？	
	第3回	声の文化と文字の文化	
	第4回	児童文学の歴史的な変遷	
	第5回	神話・伝説・昔話	
	第6回	昔話は残酷だって？	
	第7回	ディズニーの功罪	
	第8回	児童文学と差別	
	第9回	マイノリティをめぐる児童文学	
	第10回	ハリー・ポッターは名作か？	
	第11回	ファンタジーと日常の物語	
	第12回	YA文学とタブーの消滅	
	第13回	すぐれた児童文学作品とは？	
	第14回	すぐれた作品を探す	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	紹介された児童文学作品をなるべくたくさん読む。作家と作品については、担当を決めて簡単な発表もする。		
テキスト	必要に応じてプリント配布		
参考文献	『児童文学論』（リリアン・スミス）、児童文学の教科書（川端有子）、『幼い子の文学』（瀬田貞二）ほか適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:30% 提出物・発表:30% 期末レポート:40%		

子どもの文学Ⅱ		後期 2 単位	2年
作家と作品の間、文学と映像の間		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 著名な作品を読み、作家の生涯を知る。 * 文学作品とそれを映像化した作品の違いとそれぞれの特徴を理解する。 * 作家の想像力とその背景にあるものを理解する。 		
授業の概要	英米の著名な児童文学作家の生涯と、その作品の関係を考察する。原作と映像化されたもののイメージの違いを理解し、それぞれの特徴を考える。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	『ピーターラビットのおはなし』シリーズの絵本を読む	
	第3回	ビアトリクス・ポターの生涯と創作への動機	
	第4回	映画「Miss Potter」を見て、映像と文学の違いを考える	
	第5回	バレエ表現による「ピーターラビット」シリーズ	
	第6回	『クマのプーさん』を読む	
	第7回	A. A. ミルンの生涯と創作への動機	
	第8回	ディズニー版のアニメ映画を見て、原作との違いを考える	
	第9回	『影との戦い』を読む	
	第10回	アーシュラ・K・ル＝グウィンの生涯と創作への動機	
	第11回	ジブリ映画「ゲド戦記」と原作の距離	
	第12回	『ホビットの冒険』を読む	
	第13回	トールキンの生涯と創作への動機	
	第14回	映画「ホビットの冒険」と原作の違い	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	それぞれの文学作品を、事前に読んでおく。作家と作品については、担当を決めて簡単な発表もする。		
テキスト	『ピーターラビットのおはなし』（ポター）、『クマのプーさん』（ミルン）、『影との戦い』（ル＝グウィン）、『ホビットの冒険』（トールキン）など。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
評価方法	授業参加度:30% 提出物・発表:40% 期末レポート:30%		

文学		後期 2 単位	3年
ファンタジー文学を旅する		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * ファンタジー文学について、すぐれた作品を知り、その特徴を理解する。 * ファンタジー文学の楽しさを理解する。 * 心に届くファンタジーの特徴をつかむ。 		
授業の概要	<p>絵本と読み物の両方を取り上げる。作品を読みながらファンタジーの特徴やおもしろさをつかむ。ゼミ形式。受講生は必ず作品を読むこと。本好きな学生に受講してほしい。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ファンタジーとは何か？	
	第3回	『人魚姫』と先駆者アンデルセン	
	第4回	『赤い蠟燭と人魚』と小川未明の時代	
	第5回	『ドリトル先生アフリカ行き』と動物のファンタジー	
	第6回	『星の王子さま』とさまざまな再版本	
	第7回	『かいじゅうたちのいるところ』とセンダックの魔法	
	第8回	『モモ』とドイツのファンタジー	
	第9回	『モモ』の映画と原作を比較する	
	第10回	日常の魔法	
	第11回	『精霊の守り人』と異世界	
	第12回	『ローワンと魔法の地図』にみる作者像	
	第13回	異世界の作り方	
	第14回	ファンタジー文学の評価法	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で取り上げる作品は事前に読んでおく。		
テキスト	上記にあげた作品		
参考文献	授業の中で随時紹介する		
評価方法	授業参加度:30% リアクションペーパー:40% 期末レポート:30%		

音楽		前期 2 単位	1年
音楽の基礎指導		飯田 千夏 (いいだ ちなつ)	
授業の到達目標 及びテーマ	楽譜を読むために必要な音楽の基礎的な知識を学ぶ事で、音楽の仕組みを理解する。また、様々な音楽活動を通して、歌う楽しさや喜びを経験し、幼児教育の現場で扱われる「こどものうた」を自らも楽しく歌うことができるようにする。		
授業の概要	第1回～第7回：C 1 B / 第8回～第14回：C 1 A / 第15回：A B 合同 音楽の基礎的な知識を歌唱（こどものうた）を通して身につけていく。また、歌唱においては、手・指・身体を動かしながら歌うことを体験していく。		
授業計画	第1回	うたに親しむ (楽譜についての基礎知識)	
	第2回	生活のうたを中心に歌う (ハ長調)	
	第3回	動物のうたを中心に歌う (ト長調)	
	第4回	季節のうたを中心に歌う (ヘ長調)	
	第5回	リズムや歌詞を活かして歌う	
	第6回	歌唱実技試験	
	第7回	合唱を楽しむ	
	第8回	うたに親しむ (楽譜についての基礎知識)	
	第9回	生活のうたを中心に歌う (ハ長調)	
	第10回	動物のうたを中心に歌う (ト長調)	
	第11回	季節のうたを中心に歌う (ヘ長調)	
	第12回	リズムや歌詞を活かして歌う	
	第13回	歌唱実技試験	
	第14回	合唱を楽しむ	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で演習したこどものうたについては、歌唱技術やピアノ伴奏などの技能向上に日々研鑽すること。		
テキスト	こどものうた200・続こどものうた200 (チャイルド本社)		
参考文献	特になし		
評価方法	演習姿勢:50% 試験(実技・筆記):50%		

音楽		前期 2 単位	1年
音楽の基礎		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	芸術としての音楽の基礎、理解、発表。 より良い発声のための呼吸法の理解と実践、楽譜を読みこなせるように、写譜をすることにより記譜法を学び、調の理解、移調譜に取り組む。歌詞を理解し暗譜で歌う音楽表現の発表をする。		
授業の概要	2クラスに分かれて授業を進めます。 C1A 第1回～第7回及び第15回 C1B 第8回～第14回及び第15回 授業内容は、状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方、発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（1）	
	第2回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（2）、読譜の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（1）	
	第3回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（3）、読譜の基礎（2）、	記譜法の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（2）
	第4回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（4）、読譜の基礎（3）、	記譜法の基礎（2）、歌詞を理解して歌唱（3）
	第5回	発声（呼吸法の理解と実践）（1）、記譜法の実践-写譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（4）、幼児のための音楽表現（1）
	第6回	発声（呼吸法の理解と実践）（2）、記譜法の実践-移調譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（5）。幼児のための音楽表現（2）
	第7回	発表（歌）-歌詞を理解し暗譜で歌う音楽表現の発表をする	
	第8回	授業の進め方、発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（1）	
	第9回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（2）、読譜の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（1）	
	第10回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（3）、読譜の基礎（2）、	記譜法の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（2）
	第11回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（4）、読譜の基礎（3）、	記譜法の基礎（2）、歌詞を理解して歌唱（3）
	第12回	発声（呼吸法の理解と実践）（1）、記譜法の実践-写譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（4）、幼児のための音楽表現（1）
	第13回	発声（呼吸法の理解と実践）（2）、記譜法の実践-移調譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（5）。幼児のための音楽表現（2）
	第14回	発表（歌）-歌詞を理解し暗譜で歌う音楽表現の発表をする	
	第15回	レポート試験（課題提出）	
準備学習（予習・復習等）	発声の基礎の呼吸法は毎日短時間でも実践し、歌詞についてはその歴史的背景等を調べ、歌詞を理解して歌唱する。読譜の基礎的な学びは日々の繰り返しの継続が望ましい。記譜法の基礎、記譜法の実践-写譜の実践、記譜法の実践-移調譜の実践は復習をし課題を提出。発表（歌）-歌詞を理解し暗譜で歌う、繰り返し練習し音楽表現の発表をする。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 『日本童謡名歌110曲集』1、2（全音楽譜出版社）		
参考文献	必要な場合は、指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% レポート、発表の内容:40%		

音楽表現 I		後期 1 単位	1年
「こどものうた」と「打楽器」		飯田 千夏 (いいだ ちなつ) 二ツ木 千由紀 (ふたつぎ ちゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	幼児教育の現場に必要なうたのレパートリーを広げるとともに歌唱技術の向上と表現力を養う。また、打楽器の幅広く多彩で奥深い表現力を自らの演奏を通して深めていくとともに、楽器の特徴とその奏法を理解する。うたと打楽器によるアンサンブルを通して音楽表現が豊かになることを自らの演奏を通して習得する。		
授業の概要	授業は「打楽器」「うた」「うたと打楽器」の3形態を適宜対応していく。「打楽器」の授業では様々な打楽器の基本奏法を学び、実際に楽器に触れながら演習していく。「うた」の授業では前期に引き続き、こどものうたのレパートリーを広げ演習する。また、コードネームを活かしたオリジナル伴奏の創作や、リズム楽器などを加え、自分たちでこどものうたをアレンジできるよう指導していく。		
授業計画	第1回	小物打楽器の奏法 ～タンブリン・カスタネット・トライアングル・マラカス～	
	第2回	夏・秋のうた&生活のうた	
	第3回	大物・小物打楽器の奏法 ～スネア・バスドラム・シンバル～	
	第4回	手遊びうた&わらべうた	
	第5回	ことばのリズム&ボディ・パーカッション	
	第6回	コードネームを活かしたオリジナル伴奏	
	第7回	特殊打楽器の奏法 ～ウッドブロック・ホイッスル・アゴゴ 他～	
	第8回	ラテンリズムのこどもうた&日本を感じるこどもうた	
	第9回	鍵盤打楽器の奏法 ～マリンバ・ヴィブラフォン～	
	第10回	歌い継がれるこどもうた	
	第11回	打楽器アンサンブル演習 ～ディズニー&ジブリ～	
	第12回	冬のうた&行事のうた	
	第13回	打楽器アンサンブル発表会	
	第14回	カスタネットアンサンブル ～カスタネット・アコーディオン・ピアノ・トライアングル・マリンバ～	
	第15回	創作表現付きこどもうた&合唱	
準備学習 (予習・復習等)	授業で演習したこどもうたについては、歌唱技術やピアノ伴奏などの技能向上に日々研鑽すること。		
テキスト	こどものうた200・続こどものうた200 (チャイルド本社) その他、適宜、配布資料を用いる。		
参考文献	打楽器事典：網代景介、岡田知之 共著		
評価方法	演習姿勢:80% 実技試験:20%		

音楽表現 I		後期 1 単位	1年
音楽表現の基礎		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の基礎の理解。 基礎的な音楽表現の実践、発表。コードネームの基礎を学び実践する。楽器の製作、童謡の歴史、演奏家の人生を知り、理解を深める。		
授業の概要	音楽表現、障害と音楽、楽器の製作、楽器の製作者、日本の童謡の歴史、演奏家の人生、等の理解。手作り創作楽器を発表する。 授業内容は状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	幼児のための音楽表現（1）	
	第3回	幼児のための音楽表現（2）	
	第4回	幼児のための音楽表現（3）	
	第5回	幼児のための音楽表現（4）	
	第6回	幼児のための音楽表現（5）	
	第7回	障害と音楽	
	第8回	弦楽器	
	第9回	演奏家の人生	
	第10回	発表(手作り創作楽器)	
	第11回	発表(手作り創作楽器)	
	第12回	クリスマスの音楽	
	第13回	日本の童謡	
	第14回	子守歌	
	第15回	レポート試験(課題提出)	
準備学習 (予習・復習等)	芸術としての音楽の基礎の理解のため、基礎的な音楽表現として、コードネームの基礎を日々繰り返し実践、楽器の製作で創作の力を養い、童謡の歴史、演奏家の人生を知り、資料収集し復習し、理解を深める。 音楽表現、障害と音楽、楽器の製作、楽器の製作者、日本の童謡の歴史、演奏家の人生、等の理解の為、資料収集し理解を深める。授業以外の課外製作により手作り創作楽器を製作し発表する。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 『日本童謡名歌110曲集』1、2（全音楽譜出版社）		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 発表、提出物の内容:40%		

音楽表現Ⅱ		前期 1 単位	2年
子供たちの心をひきつける		飯田 千夏 (いいだ ちなつ)	
授業の到達目標 及びテーマ	幼児教育現場の中で取り扱われているこどものうた、あそび歌、手遊びを習得し、実習や現場に出た時に必要とされる指導力を身につける。および、それらを展開するために必要な知識と技能を習得する。		
授業の概要	実習前は幼児教育現場に活かすことのできるこどものうた、あそび歌、手遊びなどを演習し、それに伴うきれいな日本語の発音、表情豊かに歌うことを身につけていく。実習後には、こどものうた、あそび歌、手遊びなどに、自ら創意工夫を凝らし、子供と共に楽しむための音楽活動を展開し、実践していく。		
授業計画	第1回	遊びを取り入れたうたを楽しむ	
	第2回	みんなの好きなうた・こどもの好きなうた	
	第3回	リズムを活かした音楽活動	
	第4回	詩を活かした音楽活動	
	第5回	楽しさをふくらませる工夫(1) パネルシアター	
	第6回	楽しさをふくらませる工夫(2) 創作や替え歌	
	第7回	楽しさをふくらませる工夫(3) 表現と動き	
	第8回	実践的な活動(1) 幼児の嗜好を探る	
	第9回	実践的な活動(2) 幼児の表現活動の特性を探る	
	第10回	実践的な活動(3) 幼児との音楽活動	
	第11回	こどもと楽しむためのコンサート～企画と選曲	
	第12回	こどもと楽しむためのコンサート～表現や動き	
	第13回	こどもと楽しむためのコンサート～簡易楽器の挿入	
	第14回	こどもと楽しむためのコンサート～合唱	
	第15回	こどもと楽しむためのコンサート リハーサル	
準備学習 (予習・復習等)	授業で演習したこどものうたについては、歌唱技術やピアノ伴奏などの技能向上に日々研鑽すること。		
テキスト	配布資料を用いる		
参考文献	「手遊びうた」(学事出版) 「うたっておどっておもちゃ箱」(教育芸術社) 「音楽広場 特別編集 1-8巻」(クレヨンハウス)		
評価方法	演習姿勢:60% 発表:40%		

音楽表現Ⅱ		前期 1 単位	2年
音楽表現の基礎と実践		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の理解。 音楽表現の基礎の理解と実践。 様々な音楽表現を通して音楽の総合的理解。		
授業の概要	発声と美しい発音の為のエクササイズ、記譜、幼児のための歌、歌唱と身体的表現、歌唱と伴奏表現。楽器の使用、身体的表現、等の、音楽表現の基礎の総合的な理解と実践。 授業内容は状況に応じて適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方、発声の基礎	
	第2回	幼児のための歌唱と身体表現 (1)	
	第3回	幼児のための歌唱と身体表現 (2)	
	第4回	歌唱と身体表現 (1)	
	第5回	歌唱と身体表現 (2)	
	第6回	幼児のための音楽表現と実践 (1)	
	第7回	幼児のための音楽表現と実践 (2)	
	第8回	音楽表現と実践 (1)	
	第9回	音楽表現と実践 (2)	
	第10回	音楽表現と実践 (3)	
	第11回	音楽表現と実践 (4)	
	第12回	音楽表現と実践 (5)	
	第13回	音楽表現と実践 (6)	
	第14回	音楽表現と実践 (7)	
	第15回	レポート試験	
準備学習 (予習・復習等)	音楽表現の基礎の理解と実践の為、発声と美しい発音の為のエクササイズは日々繰り返し、歌唱と身体的表現を深める。 記譜、幼児のための歌、歌唱と伴奏表現、楽器の使用、身体的表現を身に着けるの為、日々繰り返し復習し、様々な音楽表現を通して音楽の総合的理解を深める。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 他、一年次使用のものと同じ、配布資料も用いる。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 提出物の内容:40%		

音楽表現Ⅲ		後期 1 単位	2年
合唱・合奏		飯田 千夏 (いいだ ちなつ)	
授業の到達目標及びテーマ	音楽表現Ⅰ・Ⅱにおいて培ってきた音楽的能力を一段と高める事を目標とし、声や音を合わせて演奏する合唱・合奏を演習することで、アンサンブルの魅力・充実感・達成感を自らが体験する。また、ミュージカル・オペラなどの舞台芸術作品を通して豊かな感性と表現する力を養い、創造性を豊かにしていく。		
授業の概要	授業での演習曲については、履修者の希望を優先とし、意欲と技能により曲目や曲数について適宜対応していく。学年末には授業で手掛けてきた曲（合唱、合奏など）を取り入れた演奏会を開催。自分たちで選曲から構成まで行い、皆で音楽を作り上げ、仕上げていく。 過去の演習曲：NHK合唱コンクール課題曲、情熱大陸、ルパン三世、サウンド・オブ・ミュージック、天使のラブソングなど。		
授業計画	第1回	合唱曲・合奏曲の選曲	
	第2回	合唱（１） ～音とり・パート練習～	
	第3回	合唱（２） ～復習～	
	第4回	合唱（３） ～曲想作り・まとめ～	
	第5回	合奏（１） ～音とり・パート練習～	
	第6回	合奏（２） ～復習～	
	第7回	合奏（３） ～曲想作り・まとめ～	
	第8回	ミュージカル（１） ～歌唱・演技指導～	
	第9回	ミュージカル（２） ～動き・表現の創作～	
	第10回	ミュージカル（３） ～まとめ～	
	第11回	演奏会を企画する	
	第12回	演奏会のためのステップアップ（１） 練習	
	第13回	演奏会のためのステップアップ（２） 復習	
	第14回	演奏会のためのステップアップ（３） 全体の仕上げ	
	第15回	演奏会	
準備学習 (予習・復習等)	演奏は日々の積み重ねが大切です。できる範囲で各自、練習時間を作り、授業での合唱・合奏に臨むこと。		
テキスト	配布資料を用いる		
参考文献	特になし		
評価方法	演習姿勢:80% 発表:20%		

音楽表現Ⅲ		後期 1 単位	2年
音楽表現の理解と実践		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の理解。 音楽表現についての実践。 様々な音楽表現を通して音楽の総合的な理解と実践。		
授業の概要	発声と美しい発音の為のエクササイズ、幼児のための歌、歌唱と創作表現、歌唱と楽器を使用した身体表現、音楽表現の総合的な理解と実践。 授業内容は状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方、音の表現	
	第2回	音の表現	
	第3回	歌唱と創作表現 (1)	
	第4回	歌唱と創作表現 (2)	
	第5回	歌唱と創作表現 (3)	
	第6回	身体表現(歌唱と楽器等) (1)	
	第7回	身体表現(歌唱と楽器等) (2)	
	第8回	幼児のための音楽表現と実践 (1)	
	第9回	幼児のための音楽表現と実践 (2)	
	第10回	音楽表現と実践 (1)	
	第11回	音楽表現と実践 (2)	
	第12回	音楽表現と実践 (3)	
	第13回	音楽表現と実践 (4)	
	第14回	音楽表現と実践 (5)	
	第15回	レポート試験	
準備学習 (予習・復習等)	芸術としての音楽の理解の為、音楽表現の実践は、発声と美しい発音の為のエクササイズは日々繰り返し、幼児のための歌、歌唱と創作表現、歌唱と楽器を使用した身体表現は継続して予習、復習として日々研鑽することにより、音楽表現の総合的な理解と実践を深める。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 他、一年次使用のものと同じ、配布資料も用いる。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 提出物の内容:40%		

音楽総合表現		前期 2 単位	3年
音楽表現の実践、音楽の総合的な理解。		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の理解。 音楽表現についての理解と実践。 様々な音楽表現を通して音楽の総合的な理解。		
授業の概要	楽器の使用、身体的表現、ドキュメンタリーを通して、等、音楽表現の総合的な理解。 授業内容は状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	音楽表現と実践 (1)	
	第3回	音楽表現と実践 (2)	
	第4回	幼児のための音楽表現と実践 (1)	
	第5回	幼児のための音楽表現と実践 (2)	
	第6回	音楽表現と実践 (1)	
	第7回	音楽表現と実践 (2)	
	第8回	ドキュメンタリーを通して研究、考察 (1)	
	第9回	ドキュメンタリーを通して研究、考察 (2)	
	第10回	ドキュメンタリーを通して研究、考察 (3)	
	第11回	音楽鑑賞を通して研究、考察 (1)	
	第12回	音楽鑑賞を通して研究、考察 (2)	
	第13回	音楽表現のまとめ (1)	
	第14回	音楽表現のまとめ (2)	
	第15回	レポート試験	
準備学習 (予習・復習等)	芸術としての音楽表現についての理解と実践の為、楽器を使用してそれを、身体的表現として日々繰り返し復習し、ドキュメンタリーを通して理解し、研鑽し様々な音楽表現を通して音楽表現の総合的な理解を深める。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 他、一年次、二年次使用のものと同じ、配布資料も用いる。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 提出物の内容:40%		

音楽総合表現		前期 2 単位	3年
THE SOUND EXPLORER:実験的音（音楽）表現とその実践		吉仲 淳（よしなか あつし）	
授業の到達目標及びテーマ	オーセンティックなノーテーションを用いる音楽のみならず環境音などの生活に溢れている音や身体の動きや状態などにも注目し様々な音に対する表現の可能性を探求する。そこから見える芸術表現領域における最重要課題の発見（音楽テクニックやプラクティスの所在など）をテーマとする。それをもとに自らの音楽観の再構築を目指すこと。		
授業の概要	講義と実技の両面から進める。聴覚（Aural-Skill）が主体となる音楽的な材料だけでなく筋肉組織での音楽記憶（Musical Muscular-Memory）などの芸術表現における身体知（Kinesthetic-Skill）や空間の感覚（Spatial-Skill）などの間主観的共通感覚的な材料を検討し、聴覚だけに頼ることのない音の聴取（The Second Auditory Senses）を考える。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 他	
	第2回	音の自分史	
	第3回	音の自分史 その2	
	第4回	音環境	
	第5回	音環境 その2	
	第6回	音環境のノーテーション化	
	第7回	音にならない世界の音	
	第8回	Graphic Notation	
	第9回	Graphic Notation 2 : モーション化	
	第10回	作曲とインプロビゼーション	
	第11回	作曲とインプロビゼーション 2	
	第12回	子どものための作曲法	
	第13回	レポート課題および作品のデザイン発表	
	第14回	プレゼンテーション	
	第15回	プレゼンテーション 2 および総括	
準備学習 (予習・復習等)	本講座の名称である「音楽総合表現」を「音楽」「総合」「表現」と解体した上で、その一つ一つについて定義しておくことが望ましい。また、「総合」という意味、または「音楽」と「表現」を接続させている意義についても検討しておくこと。第一回の授業において発表してもらうことになっている。		
テキスト	マリー・シェーファー著『音さがしの本』（春秋社）		
参考文献	マリー・シェーファー著『サウンド・エデュケーション』（春秋社）ほか		
評価方法	積極的に関わる姿勢:50% 提出物その他:50%		

器楽 I	前期 1 単位	1年
楽器の演奏をする一楽器に親しむ・基礎技能を学ぶ		
<p>【担当教員】 青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、大家 百子（おおや ももこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐々木 順子（ささき じゅんこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 眞美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> ○ 音楽の表現を通して豊かな音楽性と芸術性を深めるような学びをする ○ 幼稚園・保育園をはじめとする、子どもの教育・保育にたずさわる人々に必要な「器楽の基礎技能」を習得する ○ ピアノ演奏を中心に、アコーディオン演奏も取り入れ自由に弾けるようにする</p> <p><授業概要> 幼児期から現在までの各学生における音楽経験等を配慮しながら、個々にふさわしい教材を通して音楽性と基礎技能をつけていく メトード・ローズ、バイエル、ブルグミュラー、ソナチネ、ソナタ等を通じてピアノの演奏技術を学ぶとともに、子どもの歌の伴奏、弾き歌いなどの経験を積む。保育の場で使用される比較的簡単な教材（行進曲、スキップの曲、子どもの歌の伴奏など）が演奏できるようになることが望ましい</p> <p><授業計画> 第 1回 オリエンテーション。授業の内容や進め方の説明。各学生の課題を決める 第 2回～第15回 ピアノ教則本・子どもの歌などを教材にした、個人レッスンおよび少人数制のグループレッスン 詳しい内容についてはそれぞれの進度により異なる 定期試験期間 実技試験</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は 8：45 から 19：45 まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール 2F の器楽室は 9：00 - 16：45 で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。</p> <p><進め方> 入学時に実施する「器楽履修調査票」と「自己申告票」に基づいて 13 クラスに分ける 各学生の進度に応じて原則として個人レッスンを行うが、グループレッスンを取り入れる場合もある</p> <p>※『アコーディオン・クラス』 「1クラス」だけピアノとアコーディオンの両方を学ぶクラスを設ける アコーディオンは、アンサンブルの楽しみもあり、また保育の場では子どもの状態をよく見ながら演奏できることと、園舎外で手軽に伴奏できる利点がある 前期では、ピアノの技術を身に付け音楽性を育てながら、コードの習得に努めアコーディオンの演奏能力を少しずつつけていく</p> <p><テキスト> マニアンテ アコーディオン教則本（1） トンボ アコーディオン教則本（初・中級） <参考文献> アコーディオンの本（春秋社）など</p> <p><共通テキスト> やさしく・たのしく・いきいきと弾ける『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社） 『こどものうた 200』（チャイルド本社） 『続こどものうた 200』（チャイルド本社） 『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社）</p> <p><評価方法> 担当教員が評価する。各段階に応じた課題曲が出題され実技試験を実施する 授業参加度 50%、実技試験 50% を基準とする</p>		

器楽Ⅱ	後期 1 単位	1年
楽器の演奏をする—基礎技能を学ぶ—		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、大家 百子（おおや ももこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐々木 順子（ささき じゅんこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 真美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>○ 教科課程上は、選択科目であるが、幼稚園教諭や保育士の資格取得希望者は、実習や就職につながる点で履修することが望ましい実技科目である</p> <p>11月には幼稚園実習もあるので「器楽Ⅰ」で習得した技術や弾き歌いなどの経験をさらに発展させ、より高い音楽性を養うとともに実践力を養う</p> <p>○ 人前で演奏する力を身につけるとともに、お互いの演奏を聴きあうことを目標にした発表会を行う</p>		
<p><授業の概要></p> <p>クラス分けは、原則的には前期の「器楽Ⅰ」と同じにして継続学習を基本にする</p> <p>各学生の進度に応じた個人レッスンを中心に進めるが、グループレッスンも適宜取り入れる</p> <p>ピアノとアコーディオンの併用授業も「1クラス」開講する</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回～第4回 主に発表会準備を含む個人およびグループレッスン</p> <p>第5回 発表会（予定）</p> <p>第6回～第15回 ピアノ曲、子どもの歌などを教材にした個人およびグループレッスン</p> <p>定期試験期間 実技試験</p>		
<p><準備学習（予習・復習等）></p> <p>音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00～16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。</p>		
<p><テキスト></p> <p>* 共通テキスト</p> <p>やさしく・たのしく・いきいきと弾ける『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社）</p> <p>『こどものうた200』（チャイルド本社）</p> <p>『続こどものうた200』（チャイルド本社）</p> <p>『新・幼児の音楽教育』（朝日出版）</p>		
<p><参考文献></p> <p>必要に応じ、随時紹介していく</p>		
<p>※『アコーディオンクラス』</p> <p>「1クラス」だけピアノとアコーディオンの両方を学ぶ</p> <p>アコーディオンは、アンサンブルの楽しみもある</p> <p>また保育の場では子どもの状態をよく見ながら演奏できることと園舎の外で手軽に伴奏できる利点がある</p> <p>前期に引き続きアコーディオンの演奏能力をピアノの学びをしていく</p> <p>合奏にも取り組む。</p> <p>[テキスト]</p> <p>マニアンテ アコーディオン教則本（1）</p> <p>トンボ アコーディオン教則本（初・中級）</p> <p>[参考文献]</p> <p>アコーディオンの本（春秋社）など</p>		
<p><評価方法></p> <p>担当教員が評価する。各段階に応じた課題曲が出題され実技試験を実施する</p> <p>授業参加度50%、実技試験 50% が基準となる</p>		

器楽Ⅲ	前期 1 単位	2年
楽器の演奏をする—基礎技能の習得・音楽の理解—		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほ（ちば かほ）、藤城 眞美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
<授業の到達目標及びテーマ>		
<ul style="list-style-type: none"> ○ 選択科目であるが、6月に幼稚園実習をひかえているので、初歩から始めた人は特に努めて履修することが望ましい ○ 1年次に習得した基礎技術や音楽への理解をより深め、豊かなものにしていく ○ 子どもの歌の伴奏や弾き歌いを多く経験することにより実践的な力も身に付けていく 		
<授業の内容>		
<p>2年次には、ピアノの他にアコーディオン、オルガンのクラスを設けている</p> <p>短期間の学習であるから、あまり目先のことにとらわれず、各進度に応じて、音楽的に優れた曲を弾きこみながら実際の教材も併用し、土台づくりを中心としていく</p>		
<授業の概要>		
<p>1年次同様、基本的には個人レッスンであるがグループレッスンを併用しているクラスもある</p> <p>なお、初歩的な学びの中にある履修者に対してより丁寧な手ほどきを意図する『基礎クラス』（教員の判断を総合して決める）を設ける</p> <p>また、難易度の高い曲を弾ける人も、練習をかさねて、更なる展開や応用の力を培うことがのぞまれる</p>		
<授業計画>		
<p>第1回 オリエンテーション</p> <p>第2回～第15回 個人およびグループレッスン</p> <p>定期試験期間 実技試験</p>		
<準備学習（予習・復習等）>		
<p>音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00—16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。</p>		
<テキスト>		
1年次の『共通テキスト』を続けて使用するが、進度に応じて新しい教材を加えることもある		
<参考文献>		
必要に応じ、随時紹介していく		
※『アコーディオンクラス』		
[授業内容と進め方]		
<p>実技による授業が中心になる。</p> <p>教則本を中心に、中級程度までの演奏能力をつける左手（ベース）の和音（コード）のメカニクを童謡の曲等で習得する</p>		
[テキスト]		
<p>「マニアンテ アコーディオン教則本」（1）</p> <p>「トンボ アコーディオン教則本」（初・中級）</p>		
[参考文献]		
「アコーディオンの本」（春秋社）ほか		
※『オルガンクラス』		
[授業内容と進め方]		
<p>礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ</p> <p>手鍵盤だけではなく、足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする</p> <p>同時にオルガンの構造等についての理解を深める</p>		
[テキスト]		
次の中から各自の進度に合わせて選ぶ		
<p>「オルガニスト・マニュアル」（バックスビジョン出版）、</p> <p>「教会オルガン基礎教程」（ウルフオード）、</p> <p>「J. S. Bachオルガン曲集」等</p>		
[参考文献]		
必要に応じ、随時紹介していく		
<評価方法>		
担当教員が評価する。授業参加度50%、実技試験50%を基準とする		
★付記		
この「器楽Ⅲ」は、将来の幼稚園（保育園）等の就職に必要な基礎的技能であることを踏まえて、積極的に履修することが望まれる		

器楽Ⅳ	後期 1 単位	2年
楽器を演奏する一演奏技能の習熟と音楽性の土台を築く		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かほる）、藤城 眞美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
＜授業の到達目標及びテーマ＞		
<ul style="list-style-type: none"> ○選択科目であるが、11月に保育所実習もひかえているので、初歩から始めた人を中心になるべく履修することが望ましい ○2年前期に習得した基礎技術や音楽への理解をより深め、豊かなものにしていく ○子どもの歌の伴奏や弾き歌いを数多く経験することにより実践的な力も身に付けていく ○人前で演奏する力をつけるとともに、お互いの音楽を聴き合うことを目標にした小発表会を適宜行う 		
＜授業の概要＞		
<p>2年次には、ピアノの他にアコーディオン、オルガンクラスを開講している 短期間の学習であるから、あまり目先のことにとらわれず、各進度に応じて、音楽的に優れた曲を弾きこみながら 実際の教材も併用し、土台づくりを中心としていく</p>		
＜進め方＞		
<p>1年次同様、基本的には個人レッスンであるがグループレッスンを併用しているクラスもある なお、初歩的な学びの中にある履修者に対してより丁寧な手ほどきを意図した『基礎クラス』（教員の判断を総合して決める） を 設ける</p>		
<p>また、難易度の高い曲を弾ける人も、さらに練習を重ねて、更なる展開や応用の力を培うことが望ましい 所属するクラス編成は原則として前期の「器楽Ⅲ」と同じにして継続学習を基本とする</p>		
＜授業計画＞		
<p>第 1回～第 4回 発表会準備を中心とした個人およびグループレッスン 第 5回 発表会（予定） 第 6回～第15回 個人およびグループレッスン 定期試験期間 実技試験</p>		
＜準備学習（予習・復習等）＞		
<p>音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の 学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけ て使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00ー16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵 を借りて使用すること。</p>		
＜テキスト＞ 1年次の『共通テキスト』を続けて使用するが、進度に応じて新しい教材を加えることもある		
＜参考文献＞ 必要に応じ、随時紹介していく		
※『アコーディオンクラス』		
＜授業の概要と進め方＞		
実技による授業が中心になる		
後期なので、アンサンブル（合奏）の楽しさを体験学習する		
＜テキスト＞ マニアンテ アコーディオン教則本（1）		
トンボ アコーディオン教則本（初・中級）		
＜参考文献＞ アコーディオンの本（春秋社）ほか		
※『オルガンクラス』		
＜授業の概要と進め方＞		
礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ		
手鍵盤だけではなく足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする		
同時にオルガンの構造についての理解を深める		
＜テキスト＞		
次の中から各自の進度に合わせて選ぶ。		
『オルガニスト・マニアル』（バックスビジョン出版）		
『教会オルガン基礎教程』（ウルフオード）		
『J. S. Bachオルガン曲集』等		
＜参考文献＞ 必要に応じ、随時紹介していく		
＜評価方法＞ 担当教員が評価する。授業参加度50%、実技試験50%を基準とする		
（付記）		
この「器楽Ⅳ」は、将来の幼稚園・保育所等の就職に必要な基礎的技能であることを踏まえて積極的な履修が望まれる		

器楽Ⅴ	前期 1 単位	3年
楽器の演奏 — ピアノ・アコーディオン・オルガン・ギター —		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐藤 紀雄（さとう のりお）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 真美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
<授業の到達目標及びテーマ>		
○ 受講者の進度に応じて各楽器に親しんでいくと共に、演奏技術の向上や音楽性の涵養に努める ○ 3年次の保育所や施設での実習にも配慮し、また就職試験や現場で多く取り入れられている初見や移調などにも取り組む		
<授業の概要>		
原則として、個人指導によるピアノ・アコーディオン・オルガン・ギタークラスの授業を開講している		
特にギタークラスは3年次から開講する		
各進度に応じて、音楽的に優れた曲、実際の教材、受講生の希望なども取り入れながら、曲を弾きこみんでいきよりグレードアップに努める		
<進め方>		
受講者の進度に応じた個別指導を中心に進める		
3年次での器楽Ⅴでは、各進度の違いを踏まえた混合クラスを基本にした編成で相互に刺激しあいながら学ぶ		
保育士資格取得を希望する人は、保育現場で使用する教材を優先的に学ぶことができる		
また、ピアノ連弾によるアンサンブルの経験も持つようにしたいと考えている		
パイプオルガンは、礼拝堂で授業を行う		
<授業計画>		
第1回 オリエンテーション		
第2回～第15回 それぞれの進度に応じた個人およびグループレッスン		
定期試験期間 実技試験		
<準備学習（予習・復習等）>		
音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00—16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。		
<テキスト>		
やさしく・たのしく・いきいきと弾ける『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社）		
『幼児の音楽教育—音楽的表現の指導—』（音楽教育研究協会）その他		
<参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく		
※『アコーディオンクラス』		
<授業の概要と進め方>		
実技による授業が中心になる。		
教則本を中心に、演奏能力をつける。合奏の楽しさを体験学習することにも取り組む。		
<テキスト> マニアンテ アコーディオン教則本（1）		
トンボ アコーディオン教則本（初・中級）		
<参考文献> 「アコーディオンの本」（春秋社）ほか		
※『オルガンクラス』		
<授業の概要と進め方>		
礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ		
手鍵盤だけではなく、足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする		
オルガンの構造等についての理解も深める		
<テキスト>		
次の中から各自の進度に合わせて選ぶ		
『オルガニスト・マニアル』（バックスビジョン出版）		
『教会オルガン基礎教程』ウルフオード		
『J. S. Bachオルガン曲集』等		
<参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく		
※『ギタークラス』		
<授業の進め方>		
簡単な基礎を学び、易しい曲や伴奏を実践してみる		
<テキスト>		
小原安正監修『教室用ギター教本』ギタラ社		
<評価方法> 担当教師で行う。 授業参加度50%、実技試験 50% を基準とする		
【履修条件】		
3年次からの履修も可能である。		
なお、幼稚園や保育園等の就職に必要な基礎技能となることを踏まえて積極的な履修が望まれる		

器楽Ⅵ	後期 1 単位	3年
ピアノ・アコーディオン・オルガン・ギターの演奏を学ぶ一更なる演奏技術の向上や音楽性の涵養に努める一		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐藤 紀雄（さとう のりお）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 真美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
<授業の到達目標及びテーマ> ○ 受講者の進度に応じて各楽器により一層親しんでいくと共に、更なる演奏技術の向上や音楽性の涵養に努める ○ 3年次の保育所・施設実習のアフターケアにも配慮し、また就職試験や現場で多く取り入れられている初見や移調などができるようになる		
<授業の概要> 原則として、個人指導によるピアノ・アコーディオン・オルガン・ギタークラスを開講している 各進度に応じて、音楽的に優れた曲を弾きこみながら実践的な教材も併用し、継続学習により更なるグレードアップに努める また、人前で演奏する力をつけるとともに、お互いの音楽を聴き合うことを目標にした発表会を実施する		
<進め方> 受講者の進度に応じた個別指導を中心に進める なお、3年次「器楽Ⅵ」では各進度の混合グループで相互に刺激しあいながら学ぶ 所属するクラス編成は原則として前期の「器楽Ⅴ」と同じにして継続学習を基本とする 保育士資格取得を希望する人は、保育現場で使用する教材を優先的に学ぶことができる また、ピアノ連弾によるアンサンブルの経験も持つようにする パイプオルガンは、礼拝堂で授業を行う		
<授業計画> 第 1回～第 7回 発表会準備を含む個人およびグループレッスン 第 8回 発表会（予定） 第 9回～第15回 個人およびグループレッスン 定期試験期間 実技試験		
<準備学習（予習・復習）等> 音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00ー16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。		
<テキスト> 『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社） 『幼児の音楽教育—音楽的表現の指導—』（音楽教育研究協会） その他 <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく		
※『アコーディオンクラス』 <授業の概要と進め方> 実技による授業が中心になる。教則本を中心に、演奏能力をつける 合奏の楽しさを体験学習することにも取り組む。 <テキスト> マニアンテ アコーディオン教則本（1） トンボ アコーディオン教則本（初・中級） <参考文献> 「アコーディオンの本」（春秋社） ほか		
※『オルガンクラス』 <授業の概要と進め方> 礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ 手鍵盤だけでなく、足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする オルガンの構造等についての理解も深める <テキスト> 次の中から各自の進度に合わせて選ぶ 『オルガニスト・マニュアル』（バックスビジョン出版） 『教会オルガン基礎教程』ウルフオード 『J. S. Bachオルガン曲集』等 <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく		
※『ギタークラス』 <授業の概要と進め方> 基本の技術を学びながら易しい曲や歌の伴奏付けをする <テキスト> 小原安正監修『教室用ギター教本』ギタールラ社		
<評価方法> 授業参加度50%、実技試験 50% を基準とする		
【履修条件】 3年次からの履修も可能である なお、幼稚園や保育園等の就職に必要な基礎的スキルとなることを踏まえて積極的に履修することが望まれる		

図画工作 I		前期 1 単位	1年
芸術表現の原体験 part 1 ー平面造形の制作を主体にー		金子 智香 (かねこ ちか) 久保 制一 (くぼ せいいち)	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもたちは実に自由でのびやかに絵を描きながら自在に表現する世界をひろげていく。新鮮な出会いと彷徨、冒険と実験、破壊と創造をダイナミックに展開する。誰もがかつてはこの「小さな芸術家」であった。この「小さな芸術家」と共感できる感性と創造の魂の再構築をめざし、制作する中から自由に表現するすばらしさを実感することができる。		
授業の概要	油絵を2-3枚描く。描く途上で幼い頃の自由でのびやかな魂を呼び醒まし、自分の「形」自分の「色」を発見しながら、絵を描く楽しさや創造するよろこびを体感し学んでいく。学外授業で展覧会に出掛ける場合もある。作品にはタイトルをつけ期日までに提出。絵具で汚れてもいい「仕事着」を着用。油絵具の道具の購入については4月「履修ガイドンス」で説明する。		
授業計画	第1回	なぜ油絵を描くのか 道具の準備	
	第2回	油絵の楽しみ 絵具や筆のこと	
	第3回	油絵 イントロダクション 小さな絵を描く	
	第4回	油絵を描く 1 「art work 1」何を描くか決める	
	第5回	油絵を描く 2 「art work 1」F10号キャンバスに描く	
	第6回	油絵を描く 3 「art work 1」絵の具をたっぷりと	
	第7回	油絵を描く 4 「art work 1」サインをいれて完成	
	第8回	学外授業 美術展覧会 鑑賞 (予定)	
	第9回	油絵を描く 6 「art work 2」キャンバスに下塗り	
	第10回	油絵を描く 7 「art work 2」絵の具をたっぷりと	
	第11回	油絵を描く 8 「art work 2」色を混ぜる	
	第12回	油絵を描く 9 「art work 2」かたちを見つける	
	第13回	油絵を描く 10 「art work 2」サインをいれて完成	
	第14回	合評会 1 クラス全員の油絵を鑑賞し講評を聞く	
	第15回	合評会 2 クラス全員の油絵を鑑賞し講評を聞く	
準備学習 (予習・復習等)	特になし		
テキスト	テキストではないが、絵の具、筆などの油絵の道具が必要になる		
参考文献	展覧会の絵。短大図書館の美術書コーナーの画集。 通学の車窓からの景色。隣にいる人。散歩している犬・・・		
評価方法	授業への参加度:30% 作品・レポート:70%		

図画工作Ⅱ		後期 1 単位	1年
芸術表現の原体験 part2 ー平面造形の制作をさらにー		金子 智香 (かねこ ちか) 久保 制一 (くぼ せいいち)	
授業の到達目標 及びテーマ	筆を持つ手は思うようにのびやかに動いてくれない。感性は常識と固定概念でしなやかさを失いかけている。冒険するには勇気が足りない。でも子どものように自由でのびやかに絵を描くことができれば素敵だと想う。ここで、冒険心と勇気をもって絵を描いてみるなかからいつしか自由なartの世界の中にいる自分にふと気づく時が必ず訪れるであろう。		
授業の概要	油絵を2枚描く。主に人間をテーマに油絵を自由な発想で描いていく。幼い日の自由な魂を呼び醒まし、自分のフォルムやカラーを発見しながら、ダイナミックに個性豊かな造形表現の可能性を追求し、絵を描く楽しさ・創造するよろこびをさらに深めていく。「仕事着」を着用。油絵具の追加、キャンバスの購入は第1回の授業で説明する。		
授業計画	第1回	木炭で絵を描く 「ドローイング 1」	
	第2回	木炭で絵を描く 「ドローイング 2」	
	第3回	学外授業／美術館でArtを鑑賞する	
	第4回	油絵を描く1 「art work 3」F10号キャンバスに描く	
	第5回	油絵を描く2 「art work 3」絵の具をたっぷりと	
	第6回	油絵を描く3 「art work 3」絵の具を混ぜてみる	
	第7回	油絵を描く4 「art work 3」背景とのバランスをとる	
	第8回	油絵を描く5 「art work 3」 サインを入れて制作終了	
	第9回	「アートドキュメントムービー」とワークショップ	
	第10回	油絵を描く6 「art work 4」ドローイング	
	第11回	油絵を描く7 「art work 4」F10号キャンバスに描く	
	第12回	油絵を描く8 「art work 4」カタチを見つける	
	第13回	油絵を描く9 「art work 4」色の発見	
	第14回	油絵を描く10 「art work 4」サインを入れて制作終了	
	第15回	合評会 クラス全員の油絵作品を鑑賞し講評を聞く	
準備学習 (予習・復習等)	特になし		
テキスト	特になし		
参考文献	展覧会の絵。短大図書館の美術書コーナーの画集。 森羅万象、この世界のすべてがモチーフ。		
評価方法	授業への参加度:15% 作品・レポート:85%		

造形表現 I	前期 1 単位	2年
芸術表現の原体験 part3 ー立体造形の制作を主体にー		
<p>【担当教員】 久保 制一（くぼ せいいち）、長江 眞弥（ながえ なおや）、本田 悦久（ほんだ よしひさ）</p> <p><授業の到達目標およびテーマ> 1年次の図画工作 I・II では油絵を描き平面の芸術表現に取り組んだが、ひきつづいて2年次のこの授業では、立体の造形表現の可能性を探究する。奥行きを把握することで「もの」の形を全面的・立体的に洞察することができ、それを再構成するなかで「もの」の本質理解に一步近づけることを実感しつつ、視覚だけではなく五感のすべてを稼働させてフォルムの発見をしていく。素材との出会い、道具の用法・立体としての構造など多くのことを学びながら、自分のフォルムを見つけ出していく。この工作のプロセスを通じて「手と心で考える」という芸術表現のマインドを実践的に深く感じとり学ぶことができるであろう。</p> <p><授業の概要> 立体造形の作品制作の授業。素材は主に紙を使用予定。3名の教員によるチームティーチング。受講生は「仕事着」を着用。</p> <p><授業計画> 【前期】 第1回 立体の作品をつくるということ</p> <p>第2回 2015年度のテーマを提示 デッサンを描く 1</p> <p>第3回 デッサンを描く 2</p> <p>第4回 作品のイメージスケッチ 素材との出会い</p> <p>第5回 素材の研究 素材の選択 道具の用法</p> <p>第6回 art work 制作 1「素材選択」</p> <p>第7回 art work 制作 2「素材収集」</p> <p>第8回 art work 制作 3「かたち」</p> <p>第9回 art work 制作 4「構造」</p> <p>第10回 art work 制作 5「パーツ制作1」</p> <p>第11回 art work 制作 6「パーツ制作2」</p> <p>第12回 art work 制作 7「組み立て」</p> <p>第13回 art work 制作 8「仕上げ」</p> <p>第14回 art work 作品の提出</p> <p>第15回 art worksの発表＋講評の会</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 日常生活のなかでも感覚を研ぎすませていると見えてくる何かがある。 そんな瞬間をちょっとで持つことができるといい。</p> <p><テキスト><参考文献> 森羅万象、この地球上のあらゆるものの色や形やマチエールがモチーフとなる。</p> <p><評価方法> 授業への参加度:15% レポートと作品:85%</p>		

造形表現Ⅱ	後期 1 単位	2年
芸術表現の原体験 part 4 - 立体造形の制作の更なる深化 -		
<p>【担当教員】 久保 制一（くぼ せいいち）、長江 眞弥（ながえ なおや）、本田 悦久（ほんだ よしひさ）</p> <p>＜授業の到達目標およびテーマ＞ 造形表現Ⅱは造形表現Ⅰに引き続き立体の作品を制作する。五感のすべてを稼働させて形の発見をしていく。その中で立体的な形態の把握をし再構成することが徐々に実感できてくるとその存在感やなしとげた達成感に喜びを感じることができる。生命感のある素材との出会い、素材のマチエール、道具の用法、立体の構造など多くのことを探りながら、自分のフォルムを彫り刻み出していく。この創造を究めるプロセスを通じて「手と心で考える」という芸術表現のマインドを実践的に感じとり修得していくことができる。</p> <p>＜授業の概要＞ 立体造形の課題作品の制作が主体の実技の授業。 素材は、主に木材を使う。粘土も使用する予定。 12月実施のクリスマス研究では、フレッシュグリーンのリースの制作を予定。 3名の教員によるチームティーチング。「仕事着」「作業靴」を必ず着用。</p> <p>＜授業計画＞ 【後期】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 1回 作品 2015 年度のテーマを提示 デッサンを描く 第 2回 形の研究 粘土によるテーマへの接近 第 3回 素材との出会い 素材の研究 第 4回 道具・工具の基本用法 接着の技法 第 5回 作品のイメージスケッチ 素材の選択 第 6回 art works 制作 1「素材」 第 7回 art works 制作 2「構成」 第 8回 art works 制作 3「彫る」 第 9回 art works 制作 4「刻む」 第10回 art works 制作 5「接合」 第11回 art works 制作 6「研磨」 第12回 art works 制作 7「組立」 第13回 art works 制作 8 提出 第14回 Art Works クリスマス研究 第15回 作品の発表＋講評の会 <p>＜授業計画（予習・復習等）＞ 日常生活のなかでも感覚を研ぎすませていると見えてくる何かがある。 そんな瞬間をちょっとで持つことができるといい。 作品の制作自体は、授業時間内にできる課題ではあるが、日によっては進み具合がゆっくりの日もある。そんな時は、空き時間に図工室で作業をしても構わないが、作業着に着替えることが望ましい。</p> <p>＜テキスト＞ <参考文献＞ 森羅万象、この宇宙のすべてがモチーフであり参考になる。</p> <p>＜評価方法＞ 授業への参加度:15% レポートと作品:85%</p>		

造形教育研究		前期 2 単位	3年
表現と素材・色彩と形態		原田 ロクゴー (はらだ ろくごー)	
授業の到達目標 及びテーマ	美術表現における素材のもたらす効果を考察し、多様な素材から適切なものを選択し表現できる力を養う。また、“色”を理論的に理解する。以上2点が到達目標である。 本科目は第11回～第14回の「衣の形式」「日本染織史概観」により、文化の多様性や独自性に触れることも含む講義である。		
授業の概要	造形表現に用いる素材は多種多様であるが、本講義は“繊維”と“顔料と染料”に焦点を絞って進めていく。理解を助けるために、色彩演習・紡糸/製織演習などを行う。		
授業計画	第1回	繊維とは何か 繊維の組成と歴史 絹/麻	
	第2回	繊維の組成と歴史 羊毛/綿	
	第3回	ショワの布	
	第4回	色 顔料と染料	
	第5回	演習【自分の色を作り色名をつける】	
	第6回	演習【自分の色を作り色名をつける】	
	第7回	繊維から糸に 演習【紡錘車による糸紡ぎ】	
	第8回	糸から布に 織機の構造 演習【枠機作り】	
	第9回	織物の組織 平織/綾織/縞子織	
	第10回	糸から布に 織り物の組織 演習【機織り】	
	第11回	衣の形式	
	第12回	日本の染織史概観1	
	第13回	日本の染織史概観2	
	第14回	小袖模様を読み解く	
	第15回	実習作品のポートフォリオ制作と提出	
準備学習 (予習・復習等)	復習に重きを置いてもらいたい。必要に応じて小テストを実施するが、初めて出会う基礎的な用語などはその意味も含めて覚えるのが望ましい。		
テキスト	特に定めない。適宜ハンドアウトを用いる。		
参考文献	図書館の書架にある美術/染織等の書籍すべて		
評価方法	小テスト:15% 提出物:70% 発表/質疑応答など:15%		

身体表現 I		後期 1 単位	1年
身体を自由にのびのびと使って、一人ひとりが自分の、動きの探求—表現の探求—作品の探求を行う		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標及びテーマ	子どもが身体表現を楽しむことを支援できるようになるために、まず自分達が楽しめるようになる。様々なリズムや動きを経験し、体を自由にのびのびと使って動き・表現することができるようになる。そして一人一人の創造性を高め、仲間と一緒に時間や思いを共有し、将来その創造と協力を子ども達と一緒に実現できるようになる。		
授業の概要	自分自身と将来向き合う子ども達の、自由で豊かな創造力と表現力を高めるために、既成のお遊戯や手遊びを覚えるのではなく、自分達で動きを作り出すことを目指す。実技中心で実際に動きながら学ぶ。学びのまとめとして創作と発表、その鑑賞と相互評価を行う。		
授業計画	第1回	動きの探求① 体ほぐし：自分の体と動きの再発見	
	第2回	動きの探求② クラシック：基本の動きと美しい姿勢	
	第3回	動きの探求③ モダン：身体の変現と動きの幅を広げる	
	第4回	動きの探求④ ラテン：陽気で情熱的なリズムと動き	
	第5回	動きの探求⑤ コンテンポラリー：現代的なダンス	
	第6回	表現の探求① 具象（自然現象など）を表現	
	第7回	表現の探求② 抽象（感情やイメージ）を表現	
	第8回	表現の探求③ 新聞紙を使って	
	第9回	作品の探求① 創作：グループ作り・テーマ決定と全体構想	
	第10回	作品の探求② 創作：イメージを広げる	
	第11回	作品の探求③ 創作：動きのモチーフ	
	第12回	作品の探求④ 創作：動きのモチーフからフレーズへ	
	第13回	作品の探求⑤ 創作：作品の完成	
	第14回	フォークロア・世界のダンス	
	第15回	作品の探求③ 創作：作品の発表・鑑賞	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業時に提示・配布する		
評価方法	リフレクションシート:40% 作品(創作):50% 相互鑑賞・評価:10%		

身体表現Ⅱ		前期 1 単位	2年 子ども学科
世界と日本の踊りを楽しみながら身体づくりをするとともに、身体表現力や身体感覚を身につける		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現の基礎（声・表情・姿勢など）を学ぶことによって、身体表現できる体づくりをします。 ○ 世界には数えきれないほど多くの民族舞踊（フォークダンス）があります。日本でも各地域に特徴のある民俗舞踊（芸能）があります。それぞれ特徴のある舞踊を楽しむとともに、世界と日本の衣装、リズム、踊り方など表現力の違いについても知識と理解を深めます。 ○ 踊ることによって身体感覚を養い、より洗練された表現力や踊りを楽しめる心を培います。 		
授業の概要	<p>まず、基礎的な体づくり、身体表現力アップのためのレッスンをします。つぎに、世界の踊りと日本の民俗舞踊について楽しみながら基礎を学びます。その中で衣装（スカート・浴衣）・リズム（楽器）・踊り方の特徴や違いについての知識や理解を深めていきます。さらに、本授業で扱う型のある踊りのレッスンは、自分がイメージ通りに動くことのできる体や自己表現力の獲得に有効であり、基礎体力と身体感覚を磨き知性とともに関心の獲得を目指します。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション、シャトルラン：授業実施にあたってオリエンテーションを行います。新体力テストで実施できなかったシャトルランを行います。	
	第2回	身体表現の基礎：自己表現できる体づくりのための声の出し方、表情、姿勢についてレッスンします。	
	第3回	身体表現の基礎：自己紹介で発声練習、呼吸と姿勢についてのレッスン、歌いながら踊れる子どもの曲を使い表現力を養うレッスンをします。	
	第4回	民族舞踊の基礎（フォークダンスを中心に）：スカートを着用し基本のステップの練習と簡単な踊りの練習をします。	
	第5回	民族舞踊の基礎：1、体形、動作についての説明とそれを確認しながら踊りの練習をします（スカート着用）。	
	第6回	民族舞踊の基礎：2、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第7回	民族舞踊の基礎：3、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第8回	日本の民俗舞踊：浴衣の着方を練習します。日本の踊りの特徴について説明し簡単な民俗舞踊の踊りの練習をします。	
	第9回	日本の民俗舞踊：ルール（型）のある踊りの練習によって、自分の体の特徴を確認したり癖を修正できるように練習を重ねます（浴衣着用）。	
	第10回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって、自分のイメージ通りに動くことのできる体をつくっていきます。日本の楽器についても学びます（浴衣着用）。	
	第11回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって自分の感情やイメージをちゃんと表現できる体をつくっていきます（浴衣着用）。	
	第12回	日本の民俗舞踊：基礎体力と身体感覚を身につけ、踊っていて楽しさを感じるようにさらに踊りの練習をします（浴衣着用）。	
	第13回	民族舞踊：ワルツステップを使って踊る踊りを練習をします（スカート着用）。	
	第14回	民族舞踊：各国の踊りの特徴を感じながらワルツの踊りを踊ります（スカート着用）。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	世界や日本の踊りの特徴や衣装、楽器などを調べ発表してもらいます。身体表現の方法について調べてもらいます。		
テキスト	特に定めませんが、『健やかな身体をめざして』（森下編集）を参考にしたり、プリントを用います。		
参考文献	鴻上尚史『発声と身体のレッスン』ちくま文庫/日本フォークダンス連盟発行資料や音楽など。		
評価方法	授業への積極的な参加：60% 課題提出：20% まとめのレポート：20%		

身体表現Ⅱ		後期 1 単位	2年 子ども学科
世界と日本の踊りを楽しみながら身体づくりをするとともに、身体表現力や身体感覚を身につける		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 身体表現の基礎（声・表情・姿勢など）を学ぶことによって、身体表現できる体作りをめざします。</p> <p>○ 世界には数えきれないほど多くの民族舞踊（フォークダンス）があります。日本でも各地域に特徴のある民俗舞踊（芸能）があります。それぞれ特徴のある舞踊を楽しむとともに、世界と日本の衣装、リズム、踊り方など表現力の違いについても知識と理解を深めます。</p> <p>○ 踊ることによって身体感覚を養い、より洗練された表現力や踊りを楽しめる心を培います。</p>		
授業の概要	<p>まず、基礎的な体づくり、身体表現力アップのためのレッスンをします。つぎに、世界の踊りと日本の民俗舞踊について楽しみながら基礎を学びます。その中で衣装（スカート・浴衣）・リズム（楽器）・踊り方の特徴や違いについての知識や理解を深めていきます。さらに、本授業で扱う「型」のある踊りについてのレッスンは、自分がイメージ通りに動くことのできる体や自己表現力の獲得に有効であり、基礎体力と身体感覚を磨き、知性とともて体の教養の獲得をめざします。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション、シャトルラン：授業実施にあたってオリエンテーションを行います。新体力テストで実施できなかったシャトルランを行います。	
	第2回	身体表現の基礎：自己表現できる体づくりのための声の出し方、表情、姿勢についてレッスンします。	
	第3回	身体表現の基礎：自己紹介で発声練習、呼吸と姿勢についてのレッスン、歌いながら踊れる子どもの曲を使い表現力を養うレッスンをします。	
	第4回	民族舞踊の基礎（フォークダンスを中心に）：スカートを着用し基本のステップの練習と簡単な踊りの練習をします。	
	第5回	民族舞踊の基礎：1、体形、動作についての説明とそれを確認しながら踊りの練習をします（スカート着用）。	
	第6回	民族舞踊の基礎：2、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第7回	民族舞踊の基礎：3、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第8回	日本の民俗舞踊：浴衣の着方を練習します。日本の踊りの特徴について説明し簡単な民俗舞踊の踊りの練習をします。	
	第9回	日本の民俗舞踊：ルール（型）のある踊りの練習によって、自分の体の特徴を確認したり癖を修正できるように練習を重ねます（浴衣着用）。	
	第10回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって、自分のイメージ通りに動くことのできる体をつくっていきます。日本の楽器についても学びます（浴衣着用）。	
	第11回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって自分の感情やイメージをちゃんと表現できる体をつくっていきます（浴衣着用）。	
	第12回	日本の民俗舞踊：基礎体力と身体感覚を身につけ、踊っていて楽しさを感じるようにさらに踊りの練習をします（浴衣着用）。	
	第13回	民族舞踊：ワルツステップを使って踊る踊りを練習をします（スカート着用）。	
	第14回	民族舞踊：各国の踊りの特徴を感じながらワルツの踊りを踊ります（スカート着用）。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	世界や日本の踊りの特徴や衣装、楽器などを調べ発表してもらいます。身体表現の方法について調べてもらいます。		
テキスト	特に定めませんが、『健やかな身体をめざして』（森下編集）を参考にしたり、プリントを用います。		
参考文献	鴻上尚史『発声と身体のレッスン』ちくま文庫/日本フォークダンス連盟発行資料や音楽など。		
評価方法	授業への積極的な参加：60% 課題提出：20% まとめのレポート：20%		

身体表現Ⅱ		前期 1 単位	2年 子ども学科
ミュージカルを題材に、やって楽しむ・見て楽しむ身体表現を考え、実践する		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標及びテーマ	大人も子どもも楽しめるミュージカル作品を取り上げ、子どもと一緒に身体表現を楽しみ、身体表現力を楽しんで伸ばすことを目指してミュージカルの一場面を取り上げて、自分だったらどう表現するか、どういう風にオリジナリティを出すかを考え、二次創作にチャレンジする。		
授業の概要	実技と講義演習の両方を行う。大人も子どもも楽しめるミュージカル作品を複数見て、踊ること・演じること・歌うことによる総合的な身体表現の広がりを学ぶ。そして、自分たちで作品を1つ選んで、その中の一場面を再現してミュージカル表現の基本的なことを習得し、そこに自分たちのオリジナルのストーリーや動きを加えたミュージカルの一場面をグループで作成し、相互鑑賞・評価する。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス	
	第2回	身体表現の総合芸術（ミュージカル）の鑑賞と再現① 作品Aの前盤	
	第3回	身体表現の総合芸術（ミュージカル）の鑑賞と再現① 作品Aの中盤	
	第4回	身体表現の総合芸術（ミュージカル）の鑑賞と再現① 作品Aの終盤	
	第5回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ① 作品Bの前盤	
	第6回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ② 作品Bの中盤	
	第7回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ③ 作品Bの後盤	
	第8回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ④ 作品Cの前盤	
	第9回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ⑤ 作品Cの中盤	
	第10回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ⑥ 作品Cの後盤	
	第11回	ミュージカルの創作① 全体構想、音楽を選ぶ	
	第12回	ミュージカルの創作② 動き・セリフのモチーフ作り	
	第13回	ミュージカルの創作③：動き・セリフをつなげてフレーズに	
	第14回	ミュージカルの創作④：作品の完成、歌って動く	
	第15回	ミュージカルの創作⑤：作品の発表、相互鑑賞	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートフォーマットは授業時に指示します。なお作品A・B・Cは「オペラ座の怪人」、「アイダ」、「夢から覚めた夢」、「美女と野獣」、「王様の耳はロバの耳」の中から、受講学生のキャラクターを見て授業担当教員が選んで決めます。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業時に提示・配布する		
評価方法	リフレクションシート:40% 作品（創作）:50% 相互鑑賞・評価:10%		

身体表現Ⅲ		後期 1 単位	2年
リトミックを通して幼児の音楽的表現の実際を学ぶ		伊藤 仁美 (いとう さとみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	実践的にリトミックを体験することでリズムや音楽に関わる様々な表現活動を理解する。		
授業の概要	乳幼児期の音楽的な成長や発達について理解を深め、音楽を通じた身体表現活動の実際について学習する。具体的には「ボディパーカッション」「幼児のための振り付け創作」「リトミック」「絵本・音楽・身体表現」等の様々な活動を取り上げていく。 また、幼児期の音楽的な表現を促すために必要な保育者の援助についても学んでいく。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	幼児のリトミック (1) 手を叩く	
	第3回	幼児のリトミック (2) 歩く	
	第4回	幼児のリトミック (3) ストップ&ゴー	
	第5回	幼児のリトミック (4) ギャロップ	
	第6回	幼児のリトミック (5) スキップ	
	第7回	幼児のリトミック (6) 様々なリズムパターン	
	第8回	わらべうたと身体表現 (1) 乳児編	
	第9回	わらべうたと身体表現 (2) 幼児編	
	第10回	ボディパーカッション (1) オルフ	
	第11回	ボディパーカッション (2) ロックトラップ	
	第12回	幼児のための振り付け創作	
	第13回	絵本・音楽・身体表現 (1) 乳児編	
	第14回	絵本・音楽・身体表現 (2) 幼児編	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業内容を復習し、次の授業に備えること。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	特になし。		
評価方法	授業に対する参加意欲度:70% 授業内発表:30%		

演劇表現 I		前期 1 単位	3年
演技について		松山 立 (まつやま りゅう)	
授業の到達目標 及びテーマ	演劇の基本的な構成要素、つまり俳優と観客の関係について考察する。とりわけ、演技することが両者をどう結びつけていくのかを理解、実践する。授業を通じて、自己と他者の関係について考える術を身につける。		
授業の概要	演技の仕組みについて、段階を追って理解していく。 授業の前半は実践的な演劇ワークショップで身体を動かし、後半では前半の実技から生まれたものについて理論的に考える。実技：講義＝7：3の割合で進める予定。 受講者の意欲や習熟度によって、小発表会の開催も視野に入れている。		
授業計画	第1回	ガイダンス／演技とは何か	
	第2回	演技の仕組み：舞台から客席へ	
	第3回	演技の仕組み：頭で考えることと、身体で考えること	
	第4回	演技の仕組み：感情か、理性か	
	第5回	演技のテクニック：演じることは怖いこと	
	第6回	演技のテクニック：錯覚を起こす	
	第7回	演技のテクニック：何もしない演技	
	第8回	演技のテクニック：「うまい」「へた」とは何か	
	第9回	演技の実践：「行為」について	
	第10回	演技の実践：「障害」と「目的」について	
	第11回	演技の実践：「行動」について	
	第12回	戯曲と演技：テキストを使った実践①	
	第13回	戯曲と演技：テキストを使った実践②	
	第14回	成果発表会	
	第15回	授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。動きやすい服装で臨んで下さい。		
テキスト	特になし		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	平常点：50% 課題点：50%		

演劇表現Ⅱ		後期 1 単位	3年
演劇ワークショップー演劇を作るところから考えてみるー		柏木 陽（かしわぎ あきら）	
授業の到達目標及びテーマ	演劇を作ることを通じて演劇表現、こどもの表現を考えてみる。 他の人がどう作るか、どう感じるか、自分ならどう作るかなど様々な感じる中から、自分自身がどう充足するか、自分の中にあるものをどうやったら他の人に伝えていくことが出来るかを実践してみる。		
授業の概要	集まった人たちと実際に演劇を作ってみます。 この授業は集まった人々によって進め方が異なっていきます。 その場での合意や探求が重要だと考えますのでこの授業計画も可変的な物だと思っていてください。		
授業計画	第1回	遊ぶ～遊びを通じて他者との関係を作る	
	第2回	アイデアを集める 表現方法の模索	
	第3回	題材を探す	
	第4回	一度作ってみる	
	第5回	検証	
	第6回	シナリオにしてみる 言葉以外の方法	
	第7回	シナリオにしてみる 言葉で	
	第8回	場面を作ってみる 短い場面を作る	
	第9回	場面を作ってみる 場면을工夫してみる	
	第10回	衣裳・小道具の計画を立てる	
	第11回	中間発表	
	第12回	作り直し1 全体を考えて構成を考え直す	
	第13回	作り直し2 表現方法を模索する	
	第14回	発表	
	第15回	まとめ それぞれの感想を話し合ってみる	
準備学習 (予習・復習等)	特に必要ではありません。必要な場合は授業中に提示します。		
テキスト	授業中にプリントを配布		
参考文献	必要に応じて授業中に提示		
評価方法	授業への参加:50% 発表などの内容:30% レポート:20%		

子ども学基礎論	前期 2 単位	1年
大学での学びの基礎・基本を身につける		
<p data-bbox="102 216 211 237">【担当教員】</p> <p data-bbox="102 239 1238 287">さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）</p> <p data-bbox="102 311 378 332"><授業の到達目標及びテーマ></p> <p data-bbox="102 334 1238 382">この科目は、子ども学科において、これから学習する内容の基礎・基本となるアカデミック・スキルの獲得を目指しています。</p> <p data-bbox="102 384 1259 432">この授業を通して、学ぶことの真の意味である既成の概念を疑い、自らの心と頭と身体を駆使して感じ取り、考え、洞察し、頭脳と感性を耕していく自己変革の生活への一歩となる時間を、共に創造していく機会にしたいと願っています。</p> <p data-bbox="102 455 238 477"><授業の概要></p> <p data-bbox="120 479 787 527">少人数のグループによる授業を主体にし、論文などの文章を読む、考える、論述する、発表する、討議する等を行っていきます。</p> <p data-bbox="120 529 467 550">本年度は6つのグループに分かれます。</p> <p data-bbox="120 552 728 573">また、途中で別のグループ分けによる学外見学が予定されています。</p> <p data-bbox="102 596 218 618"><授業計画></p> <p data-bbox="120 620 460 641">第 1～7回 グループによる相互学習</p> <p data-bbox="120 643 396 664">第 8回 学外見学(幼稚園)</p> <p data-bbox="120 666 609 687">第 9～14回 グループによる相互学習／第15回 まとめ</p> <p data-bbox="102 710 378 732"><準備学習（予習・復習等）></p> <p data-bbox="102 734 1259 782">毎回授業終了時に次回の授業内容についてお知らせしますので、テキストをよく読み授業に臨んでください。また、授業終了後授業を振り返りまとめておいてください。出された課題については期日を守って提出してください。</p> <p data-bbox="102 805 780 853"><テキスト> 佐藤望編著『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門 第2版』慶應義塾大学出版会 2012年</p> <p data-bbox="102 855 690 877"><参考文献> 各グループで必要に応じ、随時紹介して行きます。</p> <p data-bbox="102 879 906 900"><評価方法> 平常点70%、レポート・提出物など30%を基本として各教員が評価します。</p> <p data-bbox="102 923 1259 971">（付記）「子ども学基礎論」の学びの一環として、全クラスで午前中の半日、約10か所で幼稚園見学を予定していますが、これは幼稚園免許取得希望の有無にかかわらず、必ず全員が出席してください。</p>		

子ども学基礎演習	後期 2 単位	1年
大学での学びの基礎となる教養を深める		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この科目は、子ども学基礎論で培った学びをより深めることを目指す科目です。人間の原点である子どもを学ぶことの現代的な意義について、様々な角度から考察し、深めます。具体的には、子どもの発達、保育、教育、福祉、文化、芸術などの諸問題を中心にしなが、今日子どもがおかれている社会的・文化的状況についての理解をいっそう深めていきます。 あわせて、学ぶことの真の意味である、既成の概念を疑い、自らの心と頭と身体を駆使して感じ取り、考え、洞察し、頭脳と感性を耕していく自己変革の生活への第2段階となる時間を、共に創造していく機会にしたいと願っています。</p> <p><授業の概要> グループによる授業を主体にし、資料収集・討論・見学・ワークショップなど、グループやそのテーマごとに多様な方法で行われます。本年度は6グループに分かれます。また、途中で別のグループ分けによる学外見学が予定されています。</p> <p><授業計画> 第1～7回 グループによる相互学習 第8回 学外見学（保育所） 第9～14回 グループによる相互学習 第15回 まとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回授業終了時に次回の授業内容についてお知らせしますので、テキストをよく読み、資料を集めて授業に臨んでください。また、授業終了後授業を振り返りまとめておいてください。出された課題については期日を守って提出してください。</p> <p><テキスト> 佐藤望編著『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門 第2版』慶應義塾大学出版会 2012年</p> <p><参考文献> 各グループで必要に応じ、随時紹介して行きます。</p> <p><評価方法> 平常点70%、レポート・提出物など30%を基本として各教員が評価します。</p> <p>（付記）「子ども学基礎演習」の学びの一環として、全クラスで午前中の半日、約10か所で保育所見学を予定していますので、保育士資格取得の希望と関わりなく、必ず全員が出席してください。</p>		

子ども学特別研究Ⅰ	前期 2 単位	2年
特別研究への取り組み（その1）		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、大野 祥子（おおの さちこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、佐々木 竜太（ささき りゅうた）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）、渡辺 善忠（わたなべ よしただ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この授業は、学生が自らの知的関心と独自の視点にもとづいて研究テーマを設定し、本学科で学んでいる知見を手掛かりに、論文の作成、品の制作にとりくむもので、このことにより課題研究の体験学習を積む。 また、同じグループに属するメンバー相互の意見交換や討論により、研究テーマをできるだけ総合的に捉えることができるようにする。 これらを通して、大学教育で肝心な既成概念や先入観の再吟味、自発的で創造的な課業となることが期待される。 指導教員ならびにその指導の主要な分野・領域などは別記のとおりである。</p> <p><授業の概要> 原則として、個別テーマに即した研究内容についての助言や指導とともに、それを論文や制作として構成し、記述・表現する方法などについての個別指導やグループ指導が行なわれる。 グループ研究（制作）の場合もある。 同じグループ内での相互の意見交換や討論・批判などが次の特別研究の取り組みへとつながっていく。 この特別研究は、原則として、2年次後期「子ども学特別研究Ⅱ」、3年次前期「子ども学特別研究Ⅲ」、同後期「子ども学特別研究Ⅳ」を継続して履修するものとする。</p> <p><授業計画> 第1～15回 それぞれの研究テーマに即してその内容の深化に努め、資料収集や予備調査を行ない、後期の執筆や制作の準備を行なう。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 各教員より適宜指示。</p> <p><テキスト> それぞれのグループで適宜選択する。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく。</p> <p><評価方法> 平常点をもとにして、各種の提出物などを総合して評価される。</p>		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 I		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 論文作成の基礎・基本としての調べる、読む、討議する、書くことを身につける。 ○ 幼児及び保育における様々な課題について広範な視点より探究し、自分の言葉で発表することができる。 		
授業の概要	前半は論文作成にあたっての基礎・基本を身につけることを主眼に置き、その後、保育関連の文献を読み、ディスカッションをする。また、受講生の興味あるテーマでグループ研究をし、レポートを作成し、発表、討議する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 授業の進め方について他	
	第2回	各自の研究テーマ方向性発表	
	第3回	論文作成にあたっての資料収集の基礎（図書館）	
	第4回	論文作成の基礎 1 ワードの基礎	
	第5回	論文作成の基礎 3 エクセル及びパワーポイントの基礎	
	第6回	文献研究および討議 1	
	第7回	文献研究および討議 2	
	第8回	文献研究および討議 3	
	第9回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第10回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第11回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第12回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第13回	テーマに基づく報告・発表・討議	
	第14回	テーマに基づく報告・発表・討議	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容の関連資料などを調べておくこと。		
テキスト	授業の中で指示する。		
参考文献	なし		
評価方法	授業への参加度:50% レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
心理学とはなんだろう？		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「心理学」と聞くと、カウンセリングや犯罪心理学、心理テストであばかれる深層心理などを思い浮かべるかもしれませんが。実際には心理学とは「人が何を考え、どのように行動するか」を客観的な方法を使って確かめていく、思ったより地味な学問です。</p> <p>このゼミでは、世の中で起こる現象と関連の深い心理学の様々なトピックをとりあげていきます。心理学の基礎知識を学びながら、人間の心の働きについて考えます。同時に客観的に人の心を測定する心理学の方法についても理解を深めます。</p>		
授業の概要	<p>演習形式で進めます。文献講読、ディスカッション、実験など、色々な方法で、心理学のトピックと研究方法について学びます。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	心理学とは何だろう（心と行動の関係）	
	第3回	私たちは何を見ているのか（知覚）	
	第4回	記憶のしくみ	
	第5回	記憶の不思議	
	第6回	イメージの世界	
	第7回	対人関係の不思議	
	第8回	性格とは何か	
	第9回	性格を測る方法	
	第10回	性格は変わらないか	
	第11回	発達の可塑性	
	第12回	生涯発達	
	第13回	親子関係と発達	
	第14回	家族関係	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>文献講読の前には、事前に文献を読んで内容を理解してくること。 心理学用語を調べてくること。 授業時間内に行った実験について、レポートをまとめること。 各回の内容によってその都度指示します。</p>		
テキスト	特に使用しません。		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	プレゼンテーション:30% 授業に対する積極性:40% レポート:30%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
研究関心を広げる		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	2年間にわたる研究の最初の段階として、テーマと研究方法の関係について理解し、関心あるテーマについて考え、調べ、発表する。乳幼児の生活と発達、乳幼児の遊び、保育者について共に研究する。		
授業の概要	演習形式で進めます。各自が自分の課題やテーマを見つけ、考えたことをまとめ、発表し、話し合い、修正していくという方法で行います。		
授業計画	第1回	講義のねらい、進め方、参考文献、評価方法等の説明 (研究関心を広げる～子育て支援活動、子どもの生活と遊び、保育者像他～)	
	第2回	研究テーマ、研究目的、研究方法の関係について理解する	
	第3回	各自の関心について発表、討議	
	第4回	仮テーマ、計画について発表、討議	
	第5回	調査、検索について	
	第6回	テーマに関する資料収集	
	第7回	テーマに関する資料の発表、検討(1) 4名	
	第8回	テーマに関する資料の発表、検討(2) 4名	
	第9回	幼稚園における子どもの生活と子どもの姿(1) エピソード 作成	
	第10回	幼稚園における子どもの生活と子どもの姿(2) エピソード 発表	
	第11回	幼稚園における保育者の役割(1) エピソード 作成	
	第12回	幼稚園における保育者の役割(2) エピソード 発表	
	第13回	発表・討議(1)	
	第14回	「研究とは」(講義)	
	第15回	次の研究課題について発表・討議	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> 自分が関心のあるテーマについて、自分なりにまとめて来てください。はじめは簡単なメモ程度でかまいません。次第に、充実した内容になっていきます。頭の中で考えているだけでなく、文章だけでなくイメージ図でもかまいませんので「書いて」きてください。 先輩の卒業論文を何編か読んでみてください。 		
テキスト	特に使用しません。		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	授業への積極的参加:25% プレゼンテーション:25% レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
アート・コミュニケーション・出会い・省察・制作 ー素材の森に邂逅ー		久保 制一（くぼ せいいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	自分の中に発信したいコトはいくつもあるだろうが、どんな形でどのように表現したらいちばんその想いが人に伝わるか思い悩むことが多い。何でも良いわけではないし、いくつものイメージを編集して、何らかの素材のコトバをかりてつむぎ上げていくしかない。それには今の自分に最適な素材との出会いが決定的であるとの見点を理解することができる。		
授業の概要	いくつかのタームに分けて、素材研究と表現手段のワークショップを実施していく。素材と表現する内容とがいかに関連するかを検討していく。また、素材自体の研究・調査も各自がとりくみ、研究内容はプレゼンし、レポートにまとめる。 夏期休暇期間（2015年8月）に2泊3日で3年生と合同の特研合宿を実施予定。		
授業計画	第1回	イントロダクション 特研の展開	
	第2回	考察「ものをつくるということからartにすること」	
	第3回	素材との出会い ワークショップ 1「柔らかなもの」	
	第4回	素材との出会い ワークショップ 2「うすいもの」	
	第5回	素材との出会い ワークショップ 3「かたいもの」	
	第6回	素材との出会い ワークショップ 4「大きいもの」	
	第7回	ワークショップの編集 プレゼンテーション1	
	第8回	表現の研究 ワークショップ 1「フォト」	
	第9回	表現の研究 ワークショップ 2「ドローイング」	
	第10回	表現の研究 ワークショップ 4「壁画」	
	第11回	表現の研究 ワークショップ 5「ムービー」	
	第12回	表現の研究 ワークショップ 6「アニメーション」	
	第13回	表現の研究 ワークショップ 7「コラボレーション」	
	第14回	ワークショップの編集 プレゼンテーション2	
	第15回	夏期休暇期間の合宿 オリエンテーション	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。		
テキスト	日々の生活の中で素敵だと思えた一瞬。		
参考文献	ワークシートの配布。適宜、文献、画集、作品、資料などを紹介する。		
評価方法	平常の取り組み:50% レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
論文に向けて		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、2年後の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、調査、研究、考察を進める。		
授業の概要	資料、情報の収集、グループディスカッション、個別相談等を通して、テーマを考え、自身で決めたテーマに基づいて、調査、研究に取り組む準備をする。 課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	図書館オリエンテーション	
	第3回	資料、情報の収集、グループディスカッション (1)	
	第4回	資料、情報の収集、グループディスカッション (2)	
	第5回	資料、情報の収集、グループディスカッション (3)	
	第6回	資料、情報の収集、グループディスカッション (4)	
	第7回	資料、情報の収集、グループディスカッション (5)	
	第8回	資料、情報の収集、グループディスカッション (6)	
	第9回	経過報告 (1)	
	第10回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (1)	
	第11回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (2)	
	第12回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (3)	
	第13回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (4)	
	第14回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (5)	
	第15回	経過報告 (2)	
準備学習 (予習・復習等)	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、自身で調査、研究、考察を進める為、資料、情報の収集し準備をし、グループディスカッションに備える。個別相談等を通してテーマを考え、自身で決めたテーマに基づいて、調査、研究に取り組み執筆へ向けて準備をする。		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 発表内容を考慮:40%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
絵本を深く読む		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 長く読み継がれてきた絵本作品の成り立ちや背景について理解する。 * 文献を調べたり、自分らしい発表ができるようになる。 * 作品を総合的に評価することができるようになる。 		
授業の概要	ゼミ方式。『絵本のよろこび』についてはグループで発表したり、それについて議論したりする。それ以外に学生は児童書を取り上げたブックトークを一人ずつ行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	各自が好きな絵本を紹介しあう	
	第3回	『絵本のよろこび』を読んで具体的に考える	
	第4回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ1	
	第5回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ2	
	第6回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ3	
	第7回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ4	
	第8回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ5	
	第9回	作品の読み方、ブックトークのやり方について	
	第10回	資料の収集や検索方法について	
	第11回	客観的に読むとは	
	第12回	ブックトークのシナリオを書いてみる	
	第13回	ブックトークの実践	
	第14回	全体ディスカッション	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	担当する発表部分やブックトークについては、各自で事前に準備すること		
テキスト	松居直著『絵本のよろこび』（NHK出版）		
参考文献	授業時に紹介		
評価方法	授業参加度：30% ブックトークや発表：40% レポート：30%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
現代教育問題の歴史的・原理的研究 (1)		佐々木 竜太 (ささき りゅうた)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>今日の教育や子どもをめぐる諸問題を取り上げ、教育学的観点から歴史的・原理的に研究する。 具体的には、 ①諸問題に関する基礎的文献を読み、クリティカル・リーディングの手法を学ぶ ②教育問題に関して、自らの関心に基づいて具体的テーマを確定し、深める ③レポート・論文にまとめる際に必須となる資料探索の方法、研究方法を学ぶ という3点を目標とする。</p>		
授業の概要	<p>前期は、上記目標のうち、全員で共通の基礎的文献を精読することを通して、クリティカル・リーディングの手法を学び身につけること、各自の研究関心を深めていくこと、という2点に重点を置き、授業を展開する。</p>		
授業計画	第1回	ゼミの進め方について	
	第2回	図書館等、資料探索の方法	
	第3回	クリティカル・リーディングとは	
	第4回	文献研究 (1)	
	第5回	文献研究 (2)	
	第6回	文献研究 (3)	
	第7回	文献研究 (4)	
	第8回	文献研究 (5)	
	第9回	文献研究 (6)	
	第10回	文献研究 (7)	
	第11回	文献研究 (8)	
	第12回	各自の研究関心・テーマの発表 (1)	
	第13回	各自の研究関心・テーマの発表 (2)	
	第14回	各自の研究関心・テーマの発表 (3)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共通文献をあらかじめ読み、論点をまとめておく。 ・ 発表者においては、レジュメを作成し、報告する。 ・ 授業時のディスカッションで明らかになった論点を自身で調べ、まとめる。 		
テキスト	授業時に提示する		
参考文献	随時、授業時に提示する		
評価方法	学期末レポート:60% 授業での発表:20% 平常点:20%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
こころとその育ちについて現場（フィールド）から考える～あたりまえを疑う		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各自が日常生活のなかで感じ取った、こころとその育ちに関する問題について、論文にまとめることを目標とする。この授業では問いを立てる力を培う。具体的にはディスカッションを通して、他者の視点に気づき、自己の視点を理解する。また自らの考えを自分のことばで表現し伝える力、他者のことばに耳を傾けその考えを理解する力を培う。		
授業の概要	演習形式で進める。日常生活への素朴な問いをきっかけに、共通文献の購読やフィールドワークを通して、あたりまえと思っている日常の相対化、自己の視点の相対化を行う。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	”心理学”を問う	
	第3回	研究とは、論文とは	
	第4回	現場（フィールド）、日常生活から考えるということ	
	第5回	「人」や「こころ」に関する素朴な疑問をあげてみよう	
	第6回	血液型別性格判断や占いはあたるのか？	
	第7回	数字の落とし穴	
	第8回	相手の立場になることはできるのか？	
	第9回	映像資料視聴	
	第10回	映像資料についての振り返り	
	第11回	フィールドワークとは～みること、考えること	
	第12回	フィールドワーク①宇宙人が学食に降り立ったら？	
	第13回	フィールドワーク②自分で問いを立てる	
	第14回	フィールドワーク③報告会	
	第15回	まとめとふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	指定されたテキストを事前に読む		
テキスト	未定（授業内で指定）		
参考文献	未定（授業内で適宜紹介する）		
評価方法	授業への参加度:50% 期末レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
マイノリティ(少数派)の当事者から学ぶ。		杉田 穂子(すぎた やすこ)	
授業の到達目標及びテーマ	自分がマジョリティ(多数派)の中にいると、そのことに気付かないことがある。例えば皆さんの多くは現在「しょうがない人」が多いと思いますが、そのことにどれほど気付いているだろうか。マイノリティの人たちの語りから学び、自分たちの社会をみる視点を豊かにする。		
授業の概要	まずは、教員が提示した文献の中から購読したいものを選び、マイノリティの当事者に学ぶことの意味を理解する。さらに自分の関心あるテーマについての文献紹介をした後、論文作成に向けてテーマを設定し発表する。仲間同士の意見交換を大切にしながら、テーマを深めたり、絞ったりしていく。		
授業計画	第1回	シラバスの紹介、文献についての話し合い	
	第2回	自己紹介	
	第3回	文献購読(1)	
	第4回	文献購読(2)	
	第5回	文献購読(3)	
	第6回	文献購読(4)	
	第7回	文献購読(5)	
	第8回	関心のあるテーマの紹介	
	第9回	文献紹介(1)	
	第10回	文献紹介(2)	
	第11回	文献紹介(3)	
	第12回	関心あるテーマの発表(1)	
	第13回	関心あるテーマの発表(2)	
	第14回	関心あるテーマの発表(3)	
	第15回	まとめ	
準備学習(予習・復習等)	前半は、全員で決定した文献の購読を行う。毎回指定した章は、予め読んで考えをまとめておき、当番の場合は、その章についてのレジメを作成しておくこと。 後半は、卒業論文の作成に向けて自分のテーマを設定していくため、発表の前にはそのための文献を購読し、レジメを作成しておくこと。		
テキスト	ゼミ生と相談しながら決定する。		
参考文献	渡辺一史「こんな夜更けにバカかよ」北海道新聞社2003 浦河べてるの家「べてるの家の非援助論」医学書院2002など		
評価方法	授業後の感想レポート:50% 発表内容:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
現代における教育の諸問題の研究 I		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育的視点から考察するための基礎的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、初歩的な分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる。		
授業の概要	受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 授業方針の説明	
	第2回	受講生による討論	
	第3回	受講生による討論 第一章	
	第4回	受講生による討論 第二章	
	第5回	受講生による討論 第三章	
	第6回	受講生による討論 第四章	
	第7回	受講生による討論 第五章	
	第8回	受講生による討論 第六章	
	第9回	受講生による討論 第七章	
	第10回	受講生による討論 第八章	
	第11回	受講生による討論 教育と格差(1)	
	第12回	受講生による討論 教育と格差(2)	
	第13回	受講生による討論 教育と格差(3)	
	第14回	受講生による討論 教育と格差(4)	
	第15回	前期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートを提出してもらう。		
テキスト	広田・伊藤著『教育問題はなぜまちがって語られるのか？—「わかったつもり」からの脱却』日本図書センター、2010。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% レポートなど:30%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
子ども学特別研究 I		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「世界の保育と日本の保育」をテーマとする本ゼミナールの到達目標は、近現代日本の保育の歴史と現状に関する理解を踏まえて、それをより深くするために幾つかの先進諸国の保育の歴史と現状についての知見を得ることである。		
授業の概要	現代日本の保育を広がりのなかで捉え、その長短とそれをもたらす要因などについて考えるため、世界の国々とりわけ主要国の保育の実態や歴史について学ぶ。同時に、それらを通して、ゼミナール員が個別の学習課題をもち、卒論テーマの発見に繋がるようにする。		
授業計画	第1回	本ゼミのねらい・進め方の説明と討議	
	第2回	現代日本の保育の現状と到達点	
	第3回	戦前日本における保育の推移－19世紀後半－	
	第4回	戦前日本における保育の推移－20世紀前半－	
	第5回	戦後日本における保育の推移－1970年代中頃まで－	
	第6回	戦後日本における保育の推移－1990年中頃代まで－	
	第7回	戦後日本における保育の推移－世紀転換期以降－	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(1)－	
	第10回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(2)－	
	第11回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(3)－	
	第12回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(4)－	
	第13回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(5)－	
	第14回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(6)－	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	1年後期の「保育原理Ⅱ」の内容をよく振り返っておく。		
テキスト	ゼミナール中に配布する資料など		
参考文献	ゼミナール中に提示		
評価方法	討論への関与など:30% 発表の内容など:70%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
社会的意識と知的好奇心を耕す～人間社会の探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子ども・家族の福祉の領域をベースとしながら、さまざまな状況を生きる子ども、大人、社会の諸問題に出会い、ともに検討・考察する。とくに、いわゆるマイノリティの側を生きる人たちの生活をめぐる諸問題に着目し、「問題」を探しながら深めあうことで、考える力、発信する力、書く力を育てあう機会とする。		
授業の概要	いずれ個人研究に挑む前提として、福祉領域や関連分野からいくつか共通の文献や資料を読みこむ。発題やディスカッション、論評を重ねながら諸問題を探究する観点や人への感受性を互いに育てる。ゼミの特性を活かした演習や個人指導・提出課題に出会いながら、主体性を育て、教員との対話により研究に向かう力を獲得する。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス～福祉研究とフィールドの広がり	
	第2回	身近な問題の再発見	
	第3回	社会的な問題の発見	
	第4回	文献・資料を用いてのディスカッション（グループ1）	
	第5回	文献・資料を用いてのディスカッション（グループ2）	
	第6回	文献・資料を用いてのディスカッション（グループ3）	
	第7回	社会的問題に関するリサーチと発題（グループ1）	
	第8回	社会的問題に関するリサーチと発題（グループ2）	
	第9回	社会的問題に関するリサーチと発題（グループ3）	
	第10回	研究論文との出会い～研究に求められる要素	
	第11回	研究することの意味を考える～研究の方向性	
	第12回	考察を深めたい課題をめぐる討論（グループ1）	
	第13回	考察を深めたい課題をめぐる討論（グループ2）	
	第14回	考察を深めたい課題をめぐる討論（グループ3）	
	第15回	まとめとレポート提出・シェアリング	
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読んで理解を深めながら参加する。自ら探究したいトピックスとその周辺について、自分で調べたり、文献を読んだり、実践（具体的な取り組み）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時発表できるよう努力する。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に示す。		
参考文献	必要に応じ参考資料とともに紹介していく。基本的な福祉関連の文献も紹介する。		
評価方法	平常点・授業参加態度:50% 提出課題・レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
研究・身体表現の創作の基礎的知識と技術の修得と、研究レポートに繋がる小レポートの作成		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標及びテーマ	小児の健康または身体表現のいずれかの分野から、研究レポート・小作品に発展させることができるテーマ・モチーフを選び、そのトピックに関する文献や資料、作品を収集し、読むあるいは観て、プレゼンテーションができるようになる。また、その過程で、研究・創作を行う上で必要な知識と技術を修得できる。		
授業の概要	毎時間、課題テーマについて説明した後、学生同士で意見の発表やディスカッションを行います。毎回の授業の積み重ねの成果から選んだテーマで最終のプレゼンテーション（パワーポイント）を行う。		
授業計画	第1回	ガイダンス：子どもを学ぶ・子どもから学ぶ	
	第2回	小児の健康・子どもの身体表現の概観	
	第3回	聞き取り調査の練習①：トライアドインタビューとは	
	第4回	聞き取り調査の練習②：トライアドインタビュー実施	
	第5回	障害と認知されにくい障害：識字障害・学習障害	
	第6回	アレルギー、アトピー	
	第7回	小児がん	
	第8回	ミュージカルとオペラ	
	第9回	創造芸術としての身体表現	
	第10回	身体表現を科学する	
	第11回	プレゼンテーションの基本	
	第12回	文献の検索・収集方法	
	第13回	プレゼンテーション・ファイルの作成	
	第14回	プレゼンテーション・ファイルの完成	
	第15回	プレゼンテーション 発表と相互評価	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	授業時に提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介する		
評価方法	リフレクションシート:40% プレゼンテーション:50% 相互評価:10%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
子どもに関わる音楽についての基礎的な研究		渡辺 善忠 (わたなべ よしただ)	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を行いません。本年度は音楽の基本的な内容を学びます。制作発表・論文とも、半期ごとにレポートや制作（演奏）で研究をまとめる機会を設けて、一年間で研究の基礎的な能力を養うように学びを進めます。		
授業の概要	受講者と私の発表形式で進めます。子どもと音楽に関する音楽の基礎的な文献を読みながら、個々の研究テーマに展開する予定です。		
授業計画	第1回	ガイダンスと研究計画の相談	
	第2回	基礎文献講読①（渡辺が担当）	
	第3回	基礎文献講読②（学生が担当）	
	第4回	基礎文献講読③（学生が担当）	
	第5回	基礎文献講読④（学生が担当）	
	第6回	基礎文献講読⑤（学生が担当）	
	第7回	研究テーマの相談①	
	第8回	基礎文献講読⑥（学生が担当）	
	第9回	基礎文献講読⑦（学生が担当）	
	第10回	基礎文献講読⑧（学生が担当）	
	第11回	基礎文献講読⑨（学生が担当）	
	第12回	基礎文献講読⑩（学生が担当）	
	第13回	研究テーマの相談②	
	第14回	前期のまとめとレポート／演奏や制作の相談	
	第15回	夏休みと後期の研究計画の相談	
準備学習 (予習・復習等)	必要に応じて指示します。		
テキスト	開講時に相談して決めます。		
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。		
評価方法	発表を含む授業内評価:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅱ	後期 2 単位	2年
特別研究への取り組み（その2）		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、大野 祥子（おおの さちこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、佐々木 竜太（ささき りゅうた）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）、渡辺 善忠（わたなべ よしただ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この授業は前期の「子ども学特別研究Ⅰ」を引き継ぐものである。</p> <p>○ 学生自らの知的関心及び独自の視点に基づき研究テーマを設定し、本学科で学んでいる知見を手掛かりに、論文の作成や作品の制作にとりくむ。これにより課題研究の体験学習を引き続き積むこととなる。また、同じグループに属するメンバー相互の意見交換や討論、相互批判などにより、研究テーマを総合的に捉えられるようにする。</p> <p>○ 大学教育で肝心な既存概念や先入観の再吟味や自発的で創造的な課業とし、研究テーマについてどのように調べるか、どのような内容構成が必要かについての実践的な学びを積み重ねる。</p> <p>ここでの特研究は、原則として3年次の「子ども学特別研究Ⅲ・Ⅳ」に継承され、2年間にわたる継続学習になる。教員とその主な指導分野・領域などは別記のとおりである。</p> <p><授業の概要> 原則として、前期に引き続き履修学生の個別的な研究テーマに即した研究内容についての助言や指導とともに、それをいかに論文や制作として構成し、記述・表現するかの方法などについての個別指導やグループ指導が行われる。グループ研究（制作）の場合もある。</p> <p>また、同じグループメンバーにおける相互の意見交換や討論、相互批判などは引き続きここでの特研究の内容深化につながる。</p> <p>それぞれのグループにおいて、年度末には何らかの中間発表が考えられる。</p> <p>そして、これらの取り組みは3年次の学びへと継承される。</p> <p><授業計画> 第1～14回 前期の準備を受け、それぞれの研究テーマに即した論文の作成や作品の製作にとりくむ。 第15回 中間発表などを実施し、「子ども学特別研究Ⅲ」への準備とする。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 各教員より適宜指示。</p> <p><テキスト> それぞれのグループで適宜選択。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく。</p> <p><評価方法> 平常点をもとにして、各種の提出物や中間発表などを総合して評価する。</p> <p>（付記） 3年次「子ども学特別研究」の「論文発表会」「作品発表会」「卒展・ギャラリートーク」を2015年1月に予定しているので、必ず全員が出席のこと。</p>		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 Ⅱ		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 論文作成の基礎基本としての、資料収集、自分の考えを書く、発表する、討議する、研究テーマを深めるなどのことができるようになる。 ○ 幼児及び保育における様々な課題について多様な視点より探究する。 		
授業の概要	夏季休業中に幼児に関する課題テーマを設定して、小論文を作成し、授業の中で発表し、それに基づいて討議を中心として授業を進める。その中で、文献講読も適宜行っていく。		
授業計画	第1回	子ども学特別研究Ⅱについて	
	第2回	文献・資料収集について（図書館）	
	第3回	課題テーマに基づいての小論文発表・討議	
	第4回	課題テーマに基づいての小論文発表・討議	
	第5回	課題テーマに基づいての小論文発表・討議	
	第6回	新テーマ設定についての話し合い及びグループ分け	
	第7回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第8回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第9回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第10回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第11回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第12回	グループ別論文発表会	
	第13回	グループ別論文発表会	
	第14回	「子ども学特別研究Ⅲ」に向けて自己課題発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容に対応した、関連資料などを調べておくこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	なし		
評価方法	授業への参加度:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
心理学とはなんだろう？		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期に引き続き、心理学の基本を学びます。後期は、心理学の研究方法について、実習をとおして理解を深めます。心理学の実証的研究の文献を講読し、各自の興味あるテーマを絞り込んでいきます。		
授業の概要	実際に、分析・調査等を体験して、心理学の研究方法を学びます。さらに心理学の学術書や学会誌論文から文献を選んで講読します。全員での議論を通して、その領域の今後の課題を認識し、卒業論文のテーマ選定の手掛かりを得ることを目指します。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	心を測るということ	
	第3回	「差がある」とはどういうことか	
	第4回	文献講読とディスカッション（検定の理解）	
	第5回	「関係がある」とはどういうことか	
	第6回	文献講読とディスカッション（相関の理解）	
	第7回	調査の体験（テーマの設定）	
	第8回	調査の体験（調査票の作成）	
	第9回	調査の体験（データ分析）	
	第10回	調査の体験（結果の解釈）	
	第11回	文献講読とディスカッション（学生の発表1）	
	第12回	文献講読とディスカッション（学生の発表2）	
	第13回	文献講読とディスカッション（学生の発表3）	
	第14回	文献講読とディスカッション（学生の発表4）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	調査や実験を行うために必要な、教室外での準備作業を各自で責任を持って行うこと。 講読する文献を読みこんで、疑問点を整理して授業に臨むこと。 卒業論文に向けて、日頃から関心のあるテーマについての本を読んだり情報収集などを心がけること。		
テキスト	特に定めません。必要な文献はその都度配布します。		
参考文献	各自の関心に合わせて適宜紹介します。		
評価方法	プレゼンテーション:30% 議論への積極性:40% 課題:30%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
「興味・関心」から「問い」へ。「問い」から「研究方法」、そして「まとめる」ことへ。		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標及びテーマ	①保育に関して、自分なりの「問い」を発見する。 ②研究テーマと研究方法の関係について理解を深める。 ③資料の検索方法について理解する。 ④調べた結果を整理し、考察し、発表することができる。		
授業の概要	子ども学特別研究Ⅰ（前期）での学びを継続、発展させ、演習形式で進めます。テーマと研究方法の関係についての理解を深め、関心あるテーマについて考え、調べ、発表するとともに成果を小冊子にまとめます。		
授業計画	第1回	講義のねらい、進め方、参考文献、評価方法等の説明 保育研究テーマのひろがりについて	
	第2回	夏期休暇中の観察研究について発表：エピソードと考察（7名）	
	第3回	夏期休暇中の観察研究について発表：エピソードと考察（6名）	
	第4回	夏期休暇中の各自の研究テーマについて発表（7名）	
	第5回	夏期休暇中の各自の研究テーマについて発表（6名）	
	第6回	各自のテーマをさらに深めるための検討、討議	
	第7回	共通資料、基礎文献を検討する（1）プリントで検討	
	第8回	共通資料、基礎文献を検討する（2）図書館で実施	
	第9回	保育所における子どもの生活と子どもの姿（観察研究）	
	第10回	保育所における保育者の役割（観察研究、インタビュー）	
	第11回	発表（保育所での子どもの姿のエピソード） 4名発表	
	第12回	発表（保育者の姿のエピソード） 4名発表	
	第13回	1年間の研究のまとめ（レポートづくり）作業	
	第14回	1年間の研究のまとめ（レポートづくり）作業	
	第15回	小冊子づくり（1年間の研究のまとめ）	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・特に夏季休暇中に、保育の場で子どもや保育者を観察し、それを簡単なエピソード記録に残して下さい。 ・授業での発表に際して、資料を作成して下さい。 		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	討議への積極的な参加:20% プレゼンテーション:20% レポート:60%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
アート・コミュニケーション・実験・省察・制作 —素材の森を彷徨—		久保 制一（くぼ せいいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	自分の中の発信したいコト、伝えたい想いを編集する中で、自分に適した素材の選択をしていく。ここからの展開はまさに、自分自身と向き合うことなしには絞り込むことはできないだろう。手で思考するプロセスから、自らのアートプロジェクトのコンセプトと表現したい想いを「かたちになる」ように構築していくことができるようになる。		
授業の概要	作品のコンセプトをもとに、素材研究ワークショップ・技法講習の中から、素材のちがいが表現する内容とどのような関連性があるかをさらに検討していく。自分の表現に適した素材探しの実験、素材自体の研究・調査も各自とりくむ。学外での調査・見学も積極的に実施する。研究内容は進級制作作品としてまとめる。		
授業計画	第1回	夏期休暇期間の特研合宿の振り返り	
	第2回	イメージの編集ワークショップ	
	第3回	イメージの編集「テーマを考察」	
	第4回	イメージの編集「コンセプトを考察」	
	第5回	イメージの編集「テーマ・コンセプトを考察」 プレゼンテーション	
	第6回	アート ワークショップ 「素材研究1」	
	第7回	アート ワークショップ 「素材研究2」	
	第8回	アート ワークショップ 「素材研究3」	
	第9回	アート技法講習 「技法研究1」	
	第10回	アート技法講習 「技法研究2」	
	第11回	アート技法講習 「技法研究3」	
	第12回	進級制作作品 制作1	
	第13回	進級制作作品 制作2	
	第14回	プレゼンテーション 2 進級制作作品 仮提出	
	第15回	進級制作作品 提出	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。		
テキスト	適宜、技法講習ブック・ワークシートを配布する。		
参考文献	文献、作品、資料などを紹介する		
評価方法	平常の取り組み:40% 進級制作作品:60%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
論文作成に向けて		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、来年の学生生活の締めくくりとして論文執筆、発表に向けて、調査、研究、考察を進める。		
授業の概要	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、グループディスカッション、個別相談を通して、自身で決めたテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。 課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。		
授業計画	第1回	経過報告 (1)	
	第2回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (1)	
	第3回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (2)	
	第4回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (3)	
	第5回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (4)	
	第6回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (5)	
	第7回	経過報告 (2)	
	第8回	分析、文章化に向けて 個別相談 (1)	
	第9回	分析、文章化に向けて 個別相談 (2)	
	第10回	分析、文章化に向けて 個別相談 (3)	
	第11回	分析、文章化に向けて 個別相談 (4)	
	第12回	分析、文章化に向けて 個別相談 (5)	
	第13回	分析、文章化に向けて 個別相談 (6)	
	第14回	分析、文章化に向けて 個別相談 (7)	
	第15回	経過報告 (3)	
準備学習 (予習・復習等)	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、資料、情報の収集し、執筆の為のテーマ設定に向けて、グループディスカッション、個別相談を通し、論文執筆に向けて、調査、研究、考察を進め、自身で決めたテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、執筆に向けて取り組む。		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 論文執筆への内容:40%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
作品を客観的に評価する		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 子どもの本に関するエッセイや、文学に関する評論を読み、理解する。 * 自分の意見をもって討論に臨むことができるようになる。 * 客観的な作品紹介（ブックトーク）や評論ができるようになる。 		
授業の概要	ゼミ形式。書評の発表やビブリオバトルなどを通して視野を広げ、自分の意見を持てるようにする。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	客観的に作品を見るポイント	
	第3回	すぐれた書評とは	
	第4回	文学作品の書評を読む：新聞、書評誌など	
	第5回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ1	
	第6回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ2	
	第7回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ3	
	第8回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ4	
	第9回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ5	
	第10回	ビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループA	
	第11回	ビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループB	
	第12回	第二段階のビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループA	
	第13回	第二段階のビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループB	
	第14回	卒業論文への橋渡し	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	書評や発表の準備を各自行う		
テキスト	必要に応じて授業時にプリント配布		
参考文献	授業時に紹介		
評価方法	授業参加度：30% 書評や発表：30% レポート：40%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
現代教育問題の歴史的・原理的研究（2）		佐々木 竜太（ささき りゅうた）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>今日の教育や子どもをめぐる諸問題を取り上げ、教育学的观点から歴史的・原理的に研究する。 具体的には、 ①諸問題に関する基礎的文献を読み、クリティカル・リーディングの手法を学ぶ ②教育問題に関して、自らの関心に基づいて具体的テーマを確定し、深める ③レポート・論文にまとめる際に必須となる資料探索の方法、研究方法を学ぶ という3点を目標とする。</p>		
授業の概要	<p>後期は、上記目標のうち、①資料探索の方法や研究方法、論文作成法を学び深めること、②各自の研究テーマを絞り、より深めること、という2点に重点を置き、授業を展開する。</p>		
授業計画	第1回	ゼミの進め方について	
	第2回	資料探索の方法（1）	
	第3回	資料探索の方法（2）	
	第4回	教育学における研究方法	
	第5回	文献研究（1）	
	第6回	文献研究（2）	
	第7回	文献研究（3）	
	第8回	文献研究（4）	
	第9回	文献研究（5）	
	第10回	各自の研究テーマの発表（1）	
	第11回	各自の研究テーマの発表（2）	
	第12回	各自の研究テーマの発表（3）	
	第13回	各自の研究テーマの発表（4）	
	第14回	各自の研究テーマの発表（5）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・前期に学んだ資料探索の方法をふまえ、自身のテーマに即したより深い文献・資料探索を行い、文献リストにまとめる。 ・発表者は、自らの関心に即した文献を深く読み、レジュメにまとめ、論点と問題提起を整理する。 ・最終的に、自らのテーマを論文にまとめる際の構想（目次案、概要など）をまとめる。 		
テキスト	授業時に提示する		
参考文献	随時、授業時に提示する		
評価方法	学期末レポート:60% 授業時の発表:20% 平常点:20%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
こころとその育ちについて現場（フィールド）から考える～問いの発見		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
授業の到達目標及びテーマ	各自が日常生活のなかで感じ取った、こころとその育ちに関する問題について、論文にまとめることを目標とする。授業の前半では、実際の研究に触れながら、さまざまな研究方法を理解する。後半では自身のテーマについて探究し、学期末までに論文作成に向けての問いを立てることを目指す。		
授業の概要	演習形式で進める。前半は共通文献の講読から問いの立て方や研究方法について学ぶ。後半は各自の関心のあるテーマを探りつつ、それに関する文献を読み報告を行い、グループディスカッションをする。最終回の中間発表会では各自が次年度探究していくテーマを発表し、その後テーマについてのミニレポートを作成、提出する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	問いを探究するために	
	第3回	質問紙調査について学ぶ①質問紙の作り方、まとめ方	
	第4回	質問紙調査について学ぶ②質問紙調査の実際	
	第5回	質問紙調査について学ぶ③質問紙調査でわかること、わからないこと	
	第6回	インタビューについて学ぶ①インタビューのしかた、まとめ方	
	第7回	インタビューについて学ぶ②インタビューの実際	
	第8回	インタビューについて学ぶ③インタビューでわかること、わからないこと	
	第9回	各自の問いを探究する①テーマの探し方	
	第10回	各自の問いを探究する②文献の探し方	
	第11回	各自の問いを探究する③発表の仕方	
	第12回	各自の問いを探究する④研究報告	
	第13回	各自の問いを探究する⑤研究報告	
	第14回	各自の問いを探究する⑥研究報告	
	第15回	中間発表会	
準備学習 (予習・復習等)	研究報告の際は事前にレジュメを作成提出する		
テキスト	特になし		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	授業への取り組み方:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
マイノリティ（少数派）の当事者から学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各自が卒論のテーマを明確化させる。さらに論文作成に当たっての基本的な方法について理解する。具体的にいくつかのテーマを設定し、プレ調査を実施したり、試行的に論文を作成する。		
授業の概要	各自が関心あるテーマについて、文献研究の成果を発表する。さらに文献や先輩の論文の購読を通して、論文を作成するために必要な事柄について理解する。その後、必要に応じて調査のフィールドやインタビュー対象者を探し、プレ調査を実施したり、試行的に論文を作成する。		
授業計画	第1回	シラバスの説明	
	第2回	夏休みの成果発表（1）	
	第3回	夏休みの成果発表（2）	
	第4回	夏休みの成果発表（3）	
	第5回	論文作成方法の検討（1）	
	第6回	論文作成方法の検討（2）	
	第7回	論文作成方法の検討（3）	
	第8回	中間報告（1）	
	第9回	中間報告（2）	
	第10回	中間報告（3）	
	第11回	中間報告（4）	
	第12回	論文のテーマと関連文献の紹介（1）	
	第13回	論文テーマと関連文献の紹介（2）	
	第14回	論文テーマと関連文献の発表（3）	
	第15回	ふりかえり	
準備学習 （予習・復習等）	各自の発表に向けて、レジメを用意すること。		
テキスト	特になし。		
参考文献	必要に応じて紹介します。		
評価方法	授業後の感想レポート:50% 発表内容:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
現代における教育の諸問題の研究Ⅱ		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育的視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる。		
授業の概要	受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。		
授業計画	第1回	後期オリエンテーション	
	第2回	受講生による発表	
	第3回	受講生による発表	
	第4回	受講生による発表	
	第5回	受講生による発表	
	第6回	受講生による発表	
	第7回	受講生による発表	
	第8回	受講生による発表	
	第9回	受講生による発表	
	第10回	受講生による発表	
	第11回	受講生による発表	
	第12回	受講生による発表	
	第13回	受講生による発表	
	第14回	受講生による発表	
	第15回	後期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートを提出してもらう。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% レポートなど:30%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
子ども学特別研究Ⅱ		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「世界の保育と日本の保育」をテーマとする本ゼミナールの到達目標は、近現代日本の保育の歴史と現状に関する理解を踏まえて、それをより深くするために幾つかの先進諸国の保育の歴史と現状についての知見を得ることである。		
授業の概要	現代日本の保育を広がりのなかで捉え、その長短とそれをもたらす要因などについて考えるため、世界の国々とりわけ主要国の保育の実態や歴史について学ぶ。同時に、それらを通して、ゼミナール員が個別の学習課題をもち、卒論テーマの発見に繋がるようにする。		
授業計画	第1回	前期の反省と後期の課題	
	第2回	日本の保育に直接に影響した米国の保育	
	第3回	米国の保育の開始に影響を与えたドイツの保育	
	第4回	異なる経緯で始まったフランスの保育	
	第5回	独自の経過でスタートしたイギリスの保育	
	第6回	近年、世界的に注目されているイタリアの保育	
	第7回	ドイツの保育がその東側に影響したロシアの保育	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(1)－	
	第10回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(2)－	
	第11回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(3)－	
	第12回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(4)－	
	第13回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(5)－	
	第14回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(6)－	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前期の「子ども学特別研究Ⅰ」の内容をよく振り返っておく。		
テキスト	ゼミナール中に配布する資料など		
参考文献	ゼミナール中に提示		
評価方法	討論への関与など:30% 発表の内容など:70%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
人として育つこと・生きること・暮らすこと再発見～人間社会の探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標及びテーマ	研究の意義や研究の向かう先を考えながら、各自がテーマを設定し、構想を育て始める。福祉に連なる領域を主要な研究のフィールドとするため、さまざまな状況を生きる人たちと社会の諸問題、中でもとくに福祉的支援を必要としている子どもや大人・家族をめぐる諸問題、「私たち」の生活の内外にある課題をとらえ考察を深める。		
授業の概要	前期に続き、今こそ考えておきたい問題を探し、深めあう。個別に持ち寄る発題や共通課題による討論、論評を織りまぜて進める。個々の問題意識をふまえて研究テーマの焦点化を試み、あたためながら、研究方法論についても確認し、3年次に向けて少しずつ研究に着手する。分野の特性から実証的な研究と取り組みへの意欲を育てる。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス～夏休み中の取り組みの成果発表	
	第2回	共通素材を用いての討論と論評（グループ1）	
	第3回	共通素材を用いての討論と論評（グループ2）	
	第4回	共通素材を用いての討論と論評（グループ3）	
	第5回	先行研究に学ぶ	
	第6回	研究課題と焦点化のヒント	
	第7回	研究の意義を考える～研究に求められる視点	
	第8回	研究とは何か～研究に必要な枠組みとフィールド	
	第9回	研究方法～研究に必要な方法論と手順、留意点	
	第10回	文献を読みこむ・要約する～発題（グループ1）	
	第11回	文献を読みこむ・要約する～発題（グループ2）	
	第12回	文献を読みこむ・要約する～発題（グループ3）	
	第13回	研究課題の焦点化の発想と研究方法	
	第14回	研究計画をめぐるディスカッション	
	第15回	まとめとレポート提出・シェアリング	
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読んで理解を深めながら参加する。自ら探究したいトピックスとその周辺について、自分で調べたり、文献を読んだり、実践（具体的な取り組み）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時発表できるよう努力する。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に示すか、受講生とともに選定して使用する。		
参考文献	必要に応じ個別に、あるいは受講生全体に、参考資料とともに紹介する。		
評価方法	平常点・授業参加態度:50% レポート提出課題:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
研究の応用・発展的な知識と技術の修得と、卒業研究につながる研究レポートの作成		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	前期の、小児の健康または身体表現について調べ、作成した報告を発展させて、将来の研究論文の作成・作品の創作に繋がる研究レポートが作成できるようになる。そして、研究のバックボーンとなる文献・映像資料の調査の成果の上に、自分自身で収集したデータの解析結果・自分自身の動きや音の素材を積み上げて、3年次にオリジナルの研究・作品作りを進めるための基礎を完成させる。		
授業の概要	毎時間、課題について説明した後、収集・分析・執筆・素材作り等の作業を指示する。毎回の授業の積み重ねの成果を研究報告（文章または音と映像ファイル）にまとめる。また研究報告の内容について発表し、仲間と相互評価を行って研鑽し合い、研究論文の作成・身体表現作品の創作ができる基礎力をつける。		
授業計画	第1回	研究計画書① 研究計画書の作成方法	
	第2回	研究計画書② 作成	
	第3回	研究計画書③ 改訂・完成	
	第4回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）収集① データ収集の方法の指導	
	第5回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）収集② データ収集の方法の指導	
	第6回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）収集③ 集めたデータの検証と補足	
	第7回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）解析① データの解析方法の指導	
	第8回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）解析② 各自でデータの解析	
	第9回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）解析③ 解析方法の再検討・データの再収集	
	第10回	研究報告作成① 研究報告（レポート）の書き方・音声・映像資料のまとめ方	
	第11回	研究報告作成② 初稿の指導	
	第12回	研究報告作成③ 改訂版の指導	
	第13回	研究報告の発表	
	第14回	研究報告の相互評価	
	第15回	研究報告から研究論文・作品創作へ（研究報告の発展）	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	授業時に提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介する		
評価方法	研究計画書:20% 研究レポート:40% プレゼンテーション:40%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
子どもに関わる音楽についての研究		渡辺 善忠（わたなべ よしただ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を発展させます。後期は前期で学んだ基礎的な内容を土台として各自のテーマについて学びを展開致します。制作発表・論文とも、年度末に研究をまとめる機会を設けることを目標に研究を進めます。		
授業の概要	個人でテーマを定めて個別に研究を進めます。テーマが絞り込めない場合は、グループで音楽に関わる文献を読みながら各自のテーマを考えつつ研究を進めます。		
授業計画	第1回	研究計画の相談	
	第2回	研究発表①	
	第3回	研究発表②	
	第4回	研究発表③	
	第5回	研究発表④	
	第6回	研究発表⑤	
	第7回	中間発表	
	第8回	研究の個別指導①	
	第9回	研究の個別指導②	
	第10回	研究の個別指導③	
	第11回	研究の個別指導④	
	第12回	研究の個別指導⑤	
	第13回	論文・製作発表の準備①	
	第14回	論文・製作発表の準備②	
	第15回	論文・製作発表	
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。		
テキスト	授業時に相談して決めます。		
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。		
評価方法	発表を含む授業内評価:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅲ	通年 4 単位	3年
特別研究への取り組み（その3）		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、大野 祥子（おおの さちこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、清水 康幸（しみず やすゆき）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）、渡辺 善忠（わたなべ よしただ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 本授業は、「子ども学特別研究Ⅱ」に続くもので、特別研究の最終段階として子ども学科での学びの集大成として位置づけられる。 具体的には、年度末の論文・作品発表会でその成果を明らかにし、大学教育の締めくくりの役割を果たす。 なお、グループの編成は2年後期「子ども学特別研究Ⅱ」が継承される。 教員とその主な指導分野・領域などは別記のとおりである。</p> <p><授業の概要> それぞれのテーマに即して個人（グループ）研究が継続される。論文中心の場合は年度末の「論文発表会」に向けて、また表現領域の場合は「作品発表会」や卒展での発表を前提とした終了制作に向けてとりくむ。</p> <p><授業計画> 第1～30回 各研究テーマに即して、その内容の深化に努め、論文の作成や作品の制作にとりくみ、まとめる。その成果は提出と発表が義務づけられている。／ 論文・作品発表会で発表する。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 各教員より適宜指示。</p> <p><テキスト> それぞれのグループで適宜選択する。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく</p> <p><評価方法> 基本的には論文や作品にもとづいて評価するが、最終的には取り組みの過程を含めた総合的な視点から各教員が評価する。</p> <p><論文・作品の提出日> 後日、掲示する。日時を厳守のこと（提出先は教務課）。</p> <p><論文・作品発表会> 2015年1月。全員が発表する。</p> <p>（付記） 論文・作品の要旨を編集した「研究誌」が年度内に発行され、配布される。</p>		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 Ⅲ		浅見 均（あさみ ひとし）		
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年間の「子ども学特別研究」の学びの集大成として、受講生各自のテーマに沿った論文を作成し、完成させる。 ・ 研究テーマに沿って資料収集し、それらをもとにしながら自分の言葉で論理的に論文を作成することができる。 			
授業の概要	前半は、論文のテーマの決定、資料収集し、それらの検討や論文の書き方などについて学び合う。後半は個別指導を中心にし、論文仮提出に向けて取り組む。後に論文発表会に向けてレジュメやプレゼンの準備、ゼミ内での論文発表、討議などを行う。			
授業計画	第1回	オリエンテーション（ゼミの持ち方、計画など）		
	第2回	テーマ別資料収集の方法を学ぶ（図書館利用）		
	第3回	PCを使っの論文作成1（ワードの使い方）		
	第4回	PCを使っの論文作成2（エクセル・パワーポイントの使い方）		
	第5回	論文テーマ発表及び研究動機発表		
	第6回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第7回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第8回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第9回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第10回	論文作成中間報告及び討議		
	第11回	論文作成中間報告及び討議		
	第12回	論文作成個別指導		
	第13回	論文作成個別指導		
	第14回	論文作成個別指導		
	第15回	夏期休暇に入るにあたり課題などの検討		
準備学習 (予習・復習等)	それぞれのテーマに沿って資料収集を行い、まとめたものを授業に持ってくること。			
テキスト	論文作成のテキストを使用する。書名については授業内で指示する。			
参考文献	特になし			
評価方法	授業への参加度:40% 論文:60%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 Ⅲ		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年間の「子ども学特別研究」の学びの集大成として、受講生各自のテーマに沿った論文を作成し、完成させる。 ・ 研究テーマに沿って資料収集し、それらをもとにしながら自分の言葉で論理的に論文を作成することができる。 		
授業の概要	前半は、論文のテーマの決定、資料収集し、それらの検討や論文の書き方などについて学び合う。後半は個別指導を中心にし、論文仮提出に向けて取り組む。後に論文発表会に向けてレジュメやプレゼンの準備、ゼミ内での論文発表、討議などを行う。		
授業計画	第1回	後期の授業計画及び夏期休暇中の成果発表	
	第2回	夏期休暇中の成果発表	
	第3回	夏期休暇中の成果発表	
	第4回	夏期休暇中の成果発表	
	第5回	論文作成個別指導	
	第6回	論文作成個別指導	
	第7回	論文作成個別指導	
	第8回	論文中間発表及び検討	
	第9回	論文中間発表及び検討	
	第10回	論文中間発表及び検討	
	第11回	論文仮提出	
	第12回	プレゼン準備	
	第13回	ゼミ内論文発表会	
	第14回	ゼミ内論文発表会	
	第15回	論文発表会	
準備学習 (予習・復習等)	それぞれのテーマに沿って資料収集を行い、まとめたものを授業に持ってくること。		
テキスト	論文作成のテキストを使用する。書名については授業内で指示する。		
参考文献	特になし		
評価方法	授業への参加度:40% 論文:60%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
心理学とは何だろうか？		大野 祥子（おおの さちこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	前年度に引き続き、心理学について発展的に学びながら、各自の興味のあるテーマについての学習を進めます。前期は、各自が関心のある資料を持ち寄り、順番に発表していきます。全員でのディスカッションを通して、卒業論文のテーマを決定します。実験や調査を行う人は、具体的な調査計画を立てていきます。			
授業の概要	演習形式で進めます。毎回の発表担当を決め、自分の選んだテーマについての学習成果を発表します。全員でディスカッションをしながら卒業論文のテーマを絞り込んでいきます。			
授業計画	第1回	イントロダクション		
	第2回	文献・資料の探し方		
	第3回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第4回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第5回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第6回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第7回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第8回	発表とディスカッション（リサーチクエストの設定）		
	第9回	発表とディスカッション（リサーチクエストの設定）		
	第10回	発表とディスカッション（リサーチクエストの設定）		
	第11回	発表とディスカッション（リサーチクエストの設定）		
	第12回	発表とディスカッション（リサーチクエストの設定）		
	第13回	発表とディスカッション（研究計画の立案）		
	第14回	発表とディスカッション（研究計画の立案）		
	第15回	テーマ発表会		
準備学習 （予習・復習等）	教室では相談・指導を行うので、学習・研究のための作業は授業時間外で進めておくこと。			
テキスト	特に定めません。			
参考文献	各自の関心に応じて適宜紹介します。			
評価方法	担当の発表：20% 議論への貢献：20% 研究への取り組み：60%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
心理学とは何だろう？		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標及びテーマ	前期に引き続き、各自で設定したテーマのもと、卒業研究を進めます。実際に研究を行ってデータ分析・考察を進め、論文を作成します。各自が選んだテーマについて自分なりの意見やもの見方を構築するとともに、それを人に伝えるための学術的な表現形式・方法を学びます。		
授業の概要	演習形式で進めます。前半は順番に研究の進捗状況を発表しながら、各自の課題を明確にしていきます。後半は、論文の執筆のしかたを学び、実際に論文を完成させます。適宜、個別相談も取り入れていきます。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	発表とディスカッション	
	第3回	発表とディスカッション	
	第4回	発表とディスカッション	
	第5回	発表とディスカッション	
	第6回	発表とディスカッション	
	第7回	学術論文の書き方	
	第8回	論文作成指導	
	第9回	論文作成指導	
	第10回	論文作成指導	
	第11回	論文作成指導	
	第12回	論文作成指導	
	第13回	プレゼンテーションの技術（要旨をまとめる）	
	第14回	プレゼンテーションの技術（視覚的資料の活用）	
	第15回	まとめ	
準備学習（予習・復習等）	教室では相談・指導を行うので、研究のための学習・作業は授業時間外で進めておくこと。		
テキスト	特に定めません。		
参考文献	各自の関心に応じて適宜紹介します。		
評価方法	担当の発表：15% 議論への貢献：15% 研究への取り組み：35% 卒業論文：35%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
保育・子どもに関する「自分なりの素朴な問い」から「研究テーマ」へ		岸井 慶子（きしい けいこ）		
授業の到達目標及びテーマ	①自分の追求したい「研究テーマ」を特定する。 ②先行研究や関連文献を収集、講読し、各自の研究テーマと関連させて検討する。 ③研究計画を作成する。 ④研究論文を作成し発表する。			
授業の概要	2年次に引き続いて、自分なりに疑問に感じたり、気になったりしていることを整理し、各自が研究テーマを絞り込んでいきます。さらに研究方法を探り、研究計画の作成、論文の作成に取り組みます。学生各自の自発的な学びを積み重ね、それらを報告・発表し、討議しながら互いに刺激しあい学び合うことを大切にしていきます。			
授業計画	第1回	講義のねらい、進め方、参考文献、評価方法等の説明 論文の構想と作成について		
	第2回	研究課題の発表と討議（レジュメ作成）7名		
	第3回	研究課題の発表と討議（レジュメ作成）6名		
	第4回	資料収集の方法（講義、図書館）		
	第5回	先行研究の検討（レジュメ作成）7名		
	第6回	先行研究の検討（レジュメ作成）7名		
	第7回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第8回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第9回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第10回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第11回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第12回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第13回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第14回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第15回	まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマを明確にしてください。レジュメ作成など、主体的に、準備してください。			
テキスト	特に指定しません			
参考文献	授業内で必要に応じて紹介します			
評価方法	論文:70% 発表（内容、準備）:20% 討議への参加状況:10%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
保育・子どもに関する「自分なりの素朴な問い」から「研究テーマ」へ		岸井 慶子（きしい けいこ）	
授業の到達目標及びテーマ	①自分の追求したい「研究テーマ」を特定する。 ②先行研究や関連文献を収集、講読し、各自の研究テーマと関連させて検討する。 ③研究計画を作成する。 ④研究論文を作成し発表する。		
授業の概要	2年次に引き続いて、自分なりに疑問に感じたり、気になったりしていることを整理し、各自が研究テーマを絞り込んでいきます。さらに研究方法を探り、研究計画の作成、論文の作成に取り組みます。学生各自の自発的な学びを積み重ね、それらを報告・発表し、討議しながら互いに刺激あひ学び合うことを大切にしていきます。		
授業計画	第1回	卒業論文の作成について	
	第2回	研究論文報告と検討	
	第3回	研究論文報告と検討	
	第4回	研究論文報告と検討	
	第5回	研究論文報告と検討	
	第6回	研究論文報告と検討	
	第7回	研究論文報告と検討	
	第8回	研究論文報告と検討	
	第9回	中間発表（レジュメ、パワーポイント使用）	
	第10回	中間発表（レジュメ、パワーポイント使用）	
	第11回	修正作業（個別指導）	
	第12回	修正作業（個別指導）	
	第13回	修正作業（個別指導）	
	第14回	論文発表会にむけての準備（発表用レジュメ作成）	
	第15回	報告書レジュメ作成	
準備学習（予習・復習等）	研究テーマを明確にしてください。レジュメ作成など、主体的に、準備してください。		
テキスト	特に指定しません		
参考文献	授業内で必要に応じて紹介します		
評価方法	論文：70% 発表（内容、準備）：20% 討議への参加状況：10%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
アートコミュニケーション・実験・省察・制作 ーイメージの泉を探検し、素材の森との融合をはかるー		久保 制一（くぼ せいいち）		
授業の到達目標 及びテーマ	前期にはアートプロジェクトを立ち上げ、作品のイメージとコンセプトを徐々に明確にしなが、最もフィットすると思われる素材を決定する。その素材の情報収集と技法の研究や多様な視点からの実験を展開する。アートプロジェクトを更に深化させ広がりを持たせる為にも、イメージとコンセプトの言語化をしていく。夏期休暇中に2年生と合同の合宿を行う。後期は、各自のプロジェクトを進めて、アート作品になるように創造的に制作を取り組み、発表方法の検討もあわせて展開する。			
授業の概要	前期 素材とイメージ、表現と素材、イメージとコンセプトの言語化・・・研究と制作ワークショップ 夏期休暇 合宿（2泊3日） 後期 自由制作・・・個別にアドバイス 卒業制作作品・制作ノートの提出・・・指定された提出日 発表方法の検討・・・卒展／作品発表会			
授業計画	第1回	素材の実験 ワークショップ		
	第2回	素材の実験 ワークショップ		
	第3回	イメージの実験 ワークショップ		
	第4回	イメージの実験 ワークショップ		
	第5回	素材とイメージの実験 ワークショップ		
	第6回	素材とイメージの実験 ワークショップ		
	第7回	素材とイメージの実験 ワークショップ		
	第8回	道具の実験 ワークショップ		
	第9回	道具の実験 ワークショップ		
	第10回	イメージの編集 ワークショップ		
	第11回	イメージの編集 ワークショップ		
	第12回	イメージの編集 ワークショップ		
	第13回	イメージの編集 ワークショップ		
	第14回	イメージの編集 プレゼンテーション		
	第15回	夏期休暇中の特研合宿オリエンテーション		
準備学習 (予習・復習等)	特になし。			
テキスト	特になし。			
参考文献	特になし。			
評価方法	作品:60% 平常点:40%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
アートコミュニケーション・実験・省察・制作 ーイメージの泉を探検し、素材の森との融合をはかるー		久保 制一（くぼ せいいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期にはアートプロジェクトを立ち上げ、作品のイメージとコンセプトを徐々に明確にしなが、最もフィットすると思われる素材を決定する。その素材の情報収集と技法の研究や多様な視点からの実験を展開する。アートプロジェクトを更に深化させ広がりを持たせる為にも、イメージとコンセプトの言語化をしていく。夏期休暇中に2年生と合同の合宿を行う。後期は、各自のプロジェクトを進めて、アート作品になるように創造的に制作を取り組み、発表方法の検討もあわせて展開する。		
授業の概要	前期 素材とイメージ、表現と素材、イメージとコンセプトの言語化・・・研究と制作ワークショップ 夏期休暇 合宿（2泊3日） 後期 自由制作・・・個別にアドバイス 卒業制作作品・制作ノートの提出・・・指定された提出日 発表方法の検討・・・卒業／作品発表会		
授業計画	第1回	自由制作 マケットの制作	
	第2回	自由制作 マケットの制作	
	第3回	自由制作 プレゼンテーション	
	第4回	自由制作 作品の制作	
	第5回	自由制作 作品の制作	
	第6回	自由制作 作品の制作	
	第7回	自由制作 作品の制作	
	第8回	自由制作 作品の制作	
	第9回	自由制作 作品の制作	
	第10回	自由制作 作品の制作	
	第11回	自由制作 作品の制作	
	第12回	自由制作 作品の制作	
	第13回	作品の仮提出 プレゼンテーション	
	第14回	制作ノートの仮提出 プレゼンテーション	
	第15回	卒業制作 作品・制作ノート 提出 卒展 展示作業	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。		
テキスト	特になし。		
参考文献	特になし。		
評価方法	平常の取り組み:20% 作品:80%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
論文執筆 発表		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする。			
授業の概要	前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。			
授業計画	第1回	授業の進め方		
	第2回	図書館オリエンテーション		
	第3回	文章化に向けて ディスカッション (1)		
	第4回	文章化に向けて ディスカッション (2)		
	第5回	文章化に向けて ディスカッション (3)		
	第6回	文章化に向けて ディスカッション (4)		
	第7回	文章化に向けて ディスカッション (5)		
	第8回	文章化に向けて ディスカッション (6)		
	第9回	経過報告 (1)		
	第10回	文章化に向けて 個別相談 (1)		
	第11回	文章化に向けて 個別相談 (2)		
	第12回	文章化に向けて 個別相談 (3)		
	第13回	文章化に向けて 個別相談 (4)		
	第14回	文章化に向けて 個別相談 (5)		
	第15回	経過報告 (2)		
準備学習 (予習・復習等)	自身でテーマを決めた、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする為に、前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。			
テキスト	必要な場合は指示致します。			
参考文献	必要な場合は指示致します			
評価方法	論文執筆への積極性:60% 執筆論文の内容、発表:40%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
論文執筆 発表		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする。		
授業の概要	前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。		
授業計画	第1回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (1)	
	第2回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (2)	
	第3回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (3)	
	第4回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (4)	
	第5回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (5)	
	第6回	経過報告 (3)	
	第7回	執筆に向けて 個別相談 (1)	
	第8回	執筆に向けて 個別相談 (2)	
	第9回	執筆に向けて 個別相談 (3)	
	第10回	論文仮提出	
	第11回	執筆内容検討 個別相談 (1)	
	第12回	執筆内容検討 個別相談 (2)	
	第13回	執筆内容検討 個別相談 (3)	
	第14回	論文提出 レジュメ提出	
	第15回	発表	
準備学習 (予習・復習等)	自身でテーマを決めた、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする為に、前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 執筆論文の内容、発表:40%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
問い続け、考え続ける		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 卒業論文提出に向けて、テーマをしぼりこみ、論文の柱を立てることができるようになる。 * 考えて書く技術を磨く。 * 論文を完成させるのに必要な技術を習得する。 * 文章を推敲するポイントを理解する。 			
授業の概要	ゼミ形式。ビブリオバトルや文献講読をしながら、ディスカッションやアドバイスを通して、考える力、書く力を養っていく。			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	気になっているテーマを短文にして持ち寄り、発表、討論		
	第3回	論文の書き方について：形式と約束事		
	第4回	論文の書き方について：文献や資料の探し方		
	第5回	卒業生の論文を読んでもみる		
	第6回	研究者の論文を読んでもみる		
	第7回	各自のテーマの発表とディスカッション：グループ1		
	第8回	各自のテーマの発表とディスカッション：グループ2		
	第9回	テーマを決めてのビブリオバトルあるいはブックトーク：グループ1		
	第10回	テーマを決めてのビブリオバトルあるいはブックトーク：グループ2		
	第11回	論文の柱や構成を考える		
	第12回	論文の引用の仕方、参考文献リストの書き方を考える		
	第13回	中間発表会：グループA		
	第14回	中間発表会：グループB		
	第15回	中間発表会：グループC		
準備学習 (予習・復習等)	各自で主体的に研究したいテーマを決め、文献を探し、論文を完成させていく。			
テキスト	必要に応じてプリント配布			
参考文献	授業時に紹介			
評価方法	レポート:40% 授業時の発表:40% 授業参加度:20%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
問い続け、考え続ける		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 卒業論文提出に向けて、テーマをしぼりこみ、論文の柱を立てることができるようになる。 * 考えて書く技術を磨く。 * 論文を完成させるのに必要な技術を習得する。 * 文章を推敲するポイントを理解する。 		
授業の概要	ゼミ形式。各自の発表を中心に、ディスカッションやアドバイスを通して、考える力、書く力を養っていく。研究室での個人指導が中心だが、折に触れて全員で集まる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ1	
	第3回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ2	
	第4回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ3	
	第5回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ4	
	第6回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ5	
	第7回	中間発表：グループA	
	第8回	中間発表：グループB	
	第9回	論文仮提出	
	第10回	合評	
	第11回	個別指導（まとめ）：グループ1&2	
	第12回	個別指導（まとめ）：グループ3&4	
	第13回	個別指導（まとめ）：グループ5	
	第14回	論文提出、レジュメ提出	
	第15回	発表	
準備学習 (予習・復習等)	各自で主体的に研究したいテーマを決め、文献を探し、論文を完成させていく。		
テキスト	必要に応じてプリント配布		
参考文献	授業時に紹介		
評価方法	レポート:40% 授業時の発表:40% 授業参加度:20%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
現代教育問題の歴史的・原理的研究（3）		清水 康幸（しみず やすゆき）		
授業の到達目標及びテーマ	今日の教育や子どもをめぐる問題を取り上げ、教育学的観点から歴史的・原理的に研究する。具体的には、①基礎的文獻を読みつつ、学問研究の基礎を学ぶ、②自らの主体的関心に基づく具体的テーマを深めていく、③そのための資料探索、研究方法を学んでいく、④最終的にその成果を卒業論文としてまとめること、を目標とする。			
授業の概要	前期は、①卒業論文のテーマを決め、文献・資料目録を作成する、②それに基づき論文の章立てを決める、ところまで達成する。			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	各自の研究テーマの発表と交流①		
	第3回	各自の研究テーマの発表と交流②		
	第4回	各自の研究テーマの発表と交流③		
	第5回	各自の研究テーマの発表と交流④		
	第6回	論文の章立ての発表と交流①		
	第7回	論文の章立ての発表と交流②		
	第8回	論文の章立ての発表と交流③		
	第9回	論文の章立ての発表と交流④		
	第10回	論点整理の発表①		
	第11回	論点整理の発表②		
	第12回	論点整理の発表③		
	第13回	論点整理の発表④		
	第14回	論点整理の発表⑤		
	第15回	まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	前期は論文構想（テーマ・章立て）の確定に向け、毎週発表があるため、日々の継続的努力が必要とされる。			
テキスト	特に定めない			
参考文献	随時、授業時に提示する。			
評価方法	授業時における発表:60% レポート:40%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
現代教育問題の歴史的・原理的研究（3）		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標及びテーマ	今日の教育や子どもをめぐる問題を取り上げ、教育学的観点から歴史的・原理的に研究する。具体的には、①基礎的文獻を読みつつ、学問研究の基礎を学ぶ、②自らの主体的関心に基づく具体的テーマを深めていく、③そのための資料探索、研究方法を学んでいく、④最終的にその成果を卒業論文としてまとめること、を目標とする。		
授業の概要	後期は、卒業論文執筆が課題となるため、個別指導に重点が置かれる。前期に定めたテーマ・章立てに沿って、実際に論文を書き進め、個別指導を経て最終的に卒業論文を仕上げ、卒論発表会において発表できる水準まで研究を高めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	論文テーマと章立ての確認①	
	第3回	論文テーマと章立ての確認②	
	第4回	論文テーマと章立ての確認③	
	第5回	論文テーマと章立ての確認④	
	第6回	原稿の検討①	
	第7回	原稿の検討②	
	第8回	原稿の検討③	
	第9回	原稿の検討④	
	第10回	原稿の検討⑤	
	第11回	論文の仮提出	
	第12回	手直しの確認	
	第13回	卒論発表会にむけての準備①	
	第14回	卒論発表会にむけての準備②	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	後期は、論文執筆の段階ごとの個別指導があるため、計画的に執筆していくことが求められる。		
テキスト	特に定めない		
参考文献	随時、授業時に提示する。		
評価方法	授業時における発表:15% 卒業論文:70% 卒論発表会:15%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
こころとその育ちにかかわる問題について現場（フィールド）から考える～論文の作成		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）		
授業の到達目標 及びテーマ	各自が2年間あたためて育てたテーマを論文にしていく。それぞれのテーマに沿った研究方法を用いながら考察を深める。文献研究から見えてきたこと、調査の結果明らかになったことを、自分のことばでまとめることを目指す。それぞれのテーマを探求しつつ、グループメンバーのテーマにも関心をむけ理解し、互いに刺激を受け与えることで学びあう。 さらに論文発表会では、自分がどんなテーマについて研究をし、何がわかったのかについて、初めて話しを聞く人に対しても分かるように伝えることを目標とする。			
授業の概要	＜前期＞2年次にあたためたテーマをもとに、研究計画を立てる。研究計画に基づき、文献研究、インタビューやアンケートなどの調査を行う。授業内での報告とディスカッションを通して、グループメンバーが互いのテーマについても共有し、意見交換をしながら、考察を深めていく。期末に2年次生と合同で中間報告会を行う。 ＜後期＞前半は論文を書くことについて具体的に学びながら、論文作成にむけて、各自の研究をまとめていく。後半は個別相談を中心に行いながら、論文を作成していく。論文提出後は発表会に向けての準備を行う。			
授業計画	第1回	オリエンテーションと春休みの報告		
	第2回	研究報告とディスカッション①テーマの検討		
	第3回	研究報告とディスカッション②テーマの検討		
	第4回	研究報告とディスカッション③方法の検討		
	第5回	研究報告とディスカッション④方法の検討		
	第6回	研究報告とディスカッション⑤先行研究の検討		
	第7回	研究報告とディスカッション⑥先行研究の検討		
	第8回	研究報告とディスカッション⑦先行研究の検討		
	第9回	研究報告とディスカッション⑧先行研究の検討		
	第10回	研究報告とディスカッション⑨調査を実施するにあたって		
	第11回	研究報告とディスカッション⑩調査結果の検討		
	第12回	研究報告とディスカッション⑪調査結果の検討		
	第13回	研究報告とディスカッション⑫調査結果の検討		
	第14回	研究報告とディスカッション⑬中間報告会に向けて		
	第15回	中間報告会		
準備学習 (予習・復習等)	研究報告の際には事前にレジュメを作成する			
テキスト	授業内で適宜紹介			
参考文献	授業内で適宜紹介			
評価方法	授業への取り組み:20% 論文作成状況:30% 論文:40% 発表会での発表内容:10%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
こころとその育ちにかかわる問題について現場（フィールド）から考える～論文の作成		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
授業の到達目標及びテーマ	各自が2年間あたためて育てたテーマを論文にしていく。それぞれのテーマに沿った研究方法を用いながら考察を深める。文献研究から見えてきたこと、調査の結果明らかになったことを、自分のことばでまとめることを目指す。それぞれのテーマを探求しつつ、グループメンバーのテーマにも関心をむけ理解し、互いに刺激を受け与えることで学びあう。さらに論文発表会では、自分がどんなテーマについて研究をし、何がわかったのかについて、初めて話しを聞く人に対しても分かるように伝えることを目標とする。		
授業の概要	<p><前期>2年次にあたためたテーマをもとに、研究計画を立てる。研究計画に基づき、文献研究、インタビューやアンケートなどの調査を行う。授業内での報告とディスカッションを通して、グループメンバーが互いのテーマについても共有し、意見交換をしながら、考察を深めていく。期末に2年次生と合同で中間報告会を行う。</p> <p><後期>前半は論文を書くことについて具体的に学びながら、論文作成にむけて、各自の研究をまとめていく。後半は個別相談を中心に行いながら、論文を作成していく。論文提出後は発表会に向けての準備を行う。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	研究報告とディスカッション①	
	第3回	研究報告とディスカッション②	
	第4回	研究報告とディスカッション③	
	第5回	研究報告とディスカッション④	
	第6回	個別相談①	
	第7回	個別相談②	
	第8回	個別相談③	
	第9回	個別相談④	
	第10回	仮提出	
	第11回	仮提出をふまえての個別相談①	
	第12回	仮提出をふまえての個別相談②	
	第13回	仮提出をふまえての個別相談③	
	第14回	論文提出についての最終確認	
	第15回	レジュメの書き方、発表についての注意	
準備学習 (予習・復習等)	研究報告の際には事前にレジュメを作成する		
テキスト	授業内で適宜紹介		
参考文献	授業内で適宜紹介		
評価方法	授業への取り組み:20% 論文作成状況:30% 論文:40% 発表会での発表内容:10%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
マイノリティ（少数派）の当事者から学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	通年を通して、各自が設定したテーマに沿って、文献を購読し、さらに必要な手続きを経て、卒業論文の作成を行う。			
授業の概要	前半は、各自のテーマを発表しあい、何をどこまで、どのような方法で明らかにしたいのかを確認しあう。 後半は、論文を執筆し、作成できた力所を相互に評価しあいながら、より質の高い論文作成を目指す。			
授業計画	第1回	テーマと概要の発表（1）		
	第2回	テーマと概要の発表（2）		
	第3回	テーマと概要の発表（3）		
	第4回	研究方法の確認（1）		
	第5回	研究方法の確認（2）		
	第6回	研究方法の確認（3）		
	第7回	論文の部分発表（1）		
	第8回	論文の部分発表（2）		
	第9回	論文の部分発表（3）		
	第10回	論文の部分発表（4）		
	第11回	論文の部分発表（5）		
	第12回	論文の部分発表（6）		
	第13回	論文の部分発表（7）		
	第14回	論文の部分発表（8）		
	第15回	論文の部分発表（9）		
準備学習 (予習・復習等)	卒業論文作成にむけて各自文献を購読し、調査をし、作成した論文を発表するための準備をする。			
テキスト	適宜指定する。			
参考文献	適宜指定する。			
評価方法	論文の完成度:70% 授業での発表態度:30%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
マイノリティ（少数派）の当事者から学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	通年を通して、各自が設定したテーマに沿って、文献を購読し、さらに必要な手続きを経て、卒業論文の作成を行う。		
授業の概要	前半は、各自のテーマを発表しあい、何をどこまで、どのような方法で明らかにしたいのかを確認しあう。 後半は、論文を執筆し、作成できた力所を相互に評価しあいながら、より質の高い論文作成を目指す。		
授業計画	第1回	論文の全体概要の発表（1）	
	第2回	論文の全体概要の発表（2）	
	第3回	論文の全体概要の発表（3）	
	第4回	論文の全体概要の発表（4）	
	第5回	論文の全体概要の発表（5）	
	第6回	論文の全体発表（1）	
	第7回	論文の全体発表（2）	
	第8回	論文の全体発表（3）	
	第9回	論文の全体発表（4）	
	第10回	論文の全体発表（5）	
	第11回	論文の全体発表（6）	
	第12回	論文の全体発表（7）	
	第13回	論文発表に向けての準備（1）	
	第14回	論文発表に向けての準備（2）	
	第15回	論文発表に向けての準備（3）	
準備学習 (予習・復習等)	卒業論文作成にむけて各自文献を購読し、調査をし、作成した論文を発表するための準備をする。		
テキスト	適宜指定する。		
参考文献	適宜指定する。		
評価方法	論文の完成度:70% 授業での発表態度:30%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
現代における教育の諸問題の研究Ⅲ		鈴木 俊之（すずき としゆき）		
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育学的視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる、4. 自らが設定したテーマについて、論文としてまとめることができる。			
授業の概要	前期：受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。また卒論に向けた個人指導も行う。 後期：主に個人指導になり、卒論の完成に向けて発表をしよう。			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	受講生による発表		
	第3回	受講生による発表		
	第4回	受講生による発表		
	第5回	受講生による発表		
	第6回	受講生による発表		
	第7回	受講生による発表		
	第8回	受講生による発表		
	第9回	受講生による発表		
	第10回	受講生による発表		
	第11回	受講生による発表		
	第12回	受講生による発表		
	第13回	受講生による発表		
	第14回	受講生による発表		
	第15回	前期まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートが必要である。			
テキスト	特になし。			
参考文献	授業中に指示する。			
評価方法	平常点:30% 卒業論文:70%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
現代における教育の諸問題の研究Ⅲ		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育的視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる、4. 自らが設定したテーマについて、論文としてまとめることができる。		
授業の概要	前期：受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。また卒論に向けた個人指導も行う。 後期：主に個人指導になり、卒論の完成に向けて発表をしてみよう。		
授業計画	第1回	後期オリエンテーション	
	第2回	受講生による発表	
	第3回	受講生による発表	
	第4回	受講生による発表	
	第5回	受講生による発表	
	第6回	受講生による発表	
	第7回	受講生による発表	
	第8回	受講生による発表	
	第9回	受講生による発表	
	第10回	受講生による発表	
	第11回	受講生による発表	
	第12回	受講生による発表	
	第13回	受講生による発表	
	第14回	受講生による発表	
	第15回	受講生による発表	
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートが必要である。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:30% 卒業論文:70%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
乳幼児の家庭での養育と施設での保育の関係		村知 稔三（むらち としみ）		
授業の到達目標 及びテーマ	1990年代から「少子化」や「児童虐待」が社会問題となるのに伴い、幼稚園や保育園での保育は改革が続き、家庭での養育は難しくなっている。そこで両者の関係を実態や歴史などにもとづいて考える。			
授業の概要	少人数が短大での学習を卒業論文にまとめるゼミナールなので、「ねらい」の枠内で決めた各自の研究課題がうまく進むようにする。具体的には、①自らが解きたい課題を明らかにする、②関係する代表的な論文や本を探し、読み、ノートをとる、③データや資料を入手する、④その成果を②と比較し、①の課題に照らしてまとめる、ということになる。			
授業計画	第1回	ねらい・内容などについての提案と討議		
	第2回	教員の研究課題と研究の進め方全般についての報告と討議		
	第3回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(1)		
	第4回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(2)		
	第5回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(3)		
	第6回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(4)		
	第7回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(5)		
	第8回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(6)		
	第9回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(7)		
	第10回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(8)		
	第11回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(9)		
	第12回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(10)		
	第13回	乳幼児の養育と保育の関係(1)		
	第14回	乳幼児の養育と保育の関係(2)		
	第15回	ゼミ員の研究課題をまとめた小論集の作成		
準備学習 (予習・復習等)	2年末の春季休暇の課題を着実に進める。			
テキスト	ゼミナールのため、特に決めない。			
参考文献	文献の探し方や調査法、論文の書き方について役立つようなものを推薦する。			
評価方法	報告:30% 卒論:70%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
乳幼児の家庭での養育と施設での保育の関係		村知 稔三（むらち としみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	1990年代から「少子化」や「児童虐待」が社会問題となるのに伴い、幼稚園や保育園での保育は改革が続き、家庭での養育は難しくなっている。そこで両者の関係を実態や歴史などにもとづいて考える。		
授業の概要	少人数が短大での学習を卒業論文にまとめるゼミナールなので、「ねらい」の枠内で決めた各自の研究課題がうまく進むようにする。具体的には、①自らが解きたい課題を明らかにする、②関係する代表的な論文や本を探し、読み、ノートをとる、③データや資料を入手する、④その成果を②と比較し、①の課題に照らしてまとめる、ということになる。		
授業計画	第1回	小論集にもとづいた休暇中の進展に関する各自の短報	
	第2回	教員の研究のまとめについての報告と討議	
	第3回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(1)	
	第4回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(2)	
	第5回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(3)	
	第6回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(4)	
	第7回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(5)	
	第8回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(6)	
	第9回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(7)	
	第10回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(8)	
	第11回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(9)	
	第12回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(10)	
	第13回	卒論の完成と発表の準備(1)	
	第14回	卒論の完成と発表の準備(2)	
	第15回	卒論の発表	
準備学習 (予習・復習等)	2年末の春季休暇の課題を着実に進める。		
テキスト	ゼミナールのため、特に決めない。		
参考文献	文献の探し方や調査法、論文の書き方について役立つようなものを推薦する。		
評価方法	報告:30% 卒論:70%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
人間らしく生きることの探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	研究することの意義や目的を確認しながら、各自がテーマを設定し、主体的に内容を育てていく。福祉に連なる領域を主要な研究のフィールドとするため、さまざまな状況を生きる人たちの抱える課題、中でもとくに福祉的支援を必要としている子どもや大人・家族をめぐる諸問題、私たちの生活の内外にある社会的な課題を中心とした考察を行う。			
授業の概要	2年次の特別研究の成果をふまえ、各自がテーマ（研究課題）を構想し、研究計画を立てて深めていく。研究に求められる方法論や執筆手法については個別に助言する中で確認する。また、共通の文献・持ち寄るテーマやトピックスにそった発題・ディスカッションを重ね、仲間とともに学びあうことも重視する。論文作成とレジュメ作成、発表に至る過程において、自らの課題と向き合いながら多くの出会いや発見を重ねていくこと。			
授業計画	第1回	オリエンテーション・前期授業ガイダンス		
	第2回	研究課題に関するディスカッション		
	第3回	文献・資料活用の検討と討論		
	第4回	研究課題の検討、発表、討論		
	第5回	個別研究指導（グループ1）		
	第6回	個別研究指導（グループ2）		
	第7回	研究課題の精査、発表、討論（グループ1）		
	第8回	研究課題の精査、発表、討論（グループ2）		
	第9回	研究方法論の精査（グループ1）		
	第10回	研究方法論の精査（グループ2）		
	第11回	個人別研究指導（グループ1）		
	第12回	個人別研究指導（グループ2）		
	第13回	夏休み以後の研究計画の発表会（グループ1）		
	第14回	夏休み以後の研究計画の発表会（グループ2）		
	第15回	まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読み、理解を深めながら参加する。自ら設定したテーマとその周辺について調べたり、文献を読んだり、具体的な取り組み（実践）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時報告する努力をする。自ら主体的に研究を展開することが研究指導の前提である。行き詰ったときには必ず相談し助言を受けること。			
テキスト	開講時に指示する。			
参考文献	随時紹介する。			
評価方法	研究取り組み状況:20% 成果物（卒業論文）:50% レジュメ・発表成果:30%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
人間らしく生きることの探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	研究することの意義や目的を確認しながら、各自がテーマを設定し、主体的に内容を育てていく。福祉に連なる領域を主要な研究のフィールドとするため、さまざまな状況を生きる人たちの抱える課題、中でもとくに福祉的支援を必要としている子どもや大人・家族をめぐる諸問題、私たちの生活の内外にある社会的な課題を中心とした考察を行う。		
授業の概要	2年次の特別研究の成果をふまえ、各自がテーマ（研究課題）を構想し、研究計画を立てて深めていく。研究に求められる方法論や執筆手法については個別に助言する中で確認する。また、共通の文献・持ち寄るテーマやトピックスにそった発題・ディスカッションを重ね、仲間とともに学びあうことも重視する。論文作成とレジュメ作成、発表に至る過程において、自らの課題と向き合いながら多くの出会いや発見を重ねていくこと。		
授業計画	第1回	後期授業ガイダンス・研究の進展状況発表と課題提出	
	第2回	研究テーマと構成・研究方法に関する中間発表（グループ1）	
	第3回	研究テーマと構成・研究方法に関する中間発表（グループ2）	
	第4回	研究テーマと構成・研究方法に関する中間発表（グループ3）	
	第5回	個人別研究指導（グループ1）	
	第6回	個人別研究指導（グループ2）	
	第7回	個人別研究指導（グループ3）	
	第8回	個人別研究指導（グループ1）	
	第9回	個人別研究指導（グループ2）	
	第10回	個人別研究指導（グループ3）	
	第11回	論文仮提出	
	第12回	仮提出をふまえての助言・指導	
	第13回	論文のしあげにあたっての確認	
	第14回	レジュメ執筆・論文発表の確認	
	第15回	論文発表会における個人発表	
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読み、理解を深めながら参加する。自ら設定したテーマとその周辺について調べたり、文献を読んだり、具体的な取り組み（実践）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時報告する努力をする。自ら主体的に研究を展開することが研究指導の前提である。行き詰ったときには必ず相談し助言を受けること。		
テキスト	開講時に指示する。		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	研究取り組み状況:20% 成果物（卒業論文）:50% レジュメ・発表成果:30%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年 子ども学科
子ども学特別研究Ⅲ		渡部 かなえ（わたなべ かなえ）		
授業の到達目標 及びテーマ	3年間の「子ども学」の学びの集大成として作成する卒業論文研究・身体表現作品の卒業制作を具体的に立ち上げ、明確な方向性を定めて推し進め、完成度の高い論文・作品の作成を目指して研究を進展させることができるようになる。			
授業の概要	子ども学特別研究Ⅱで選んだ研究・制作のテーマを吟味し確定する。1年後の卒業論文研究・身体表現作品の卒業制作の完成を目指し計画的に研究を進めていくられるようにする。報告・発表は受講学生の半数が行い、残りの半数がコメントやアドバイスをするという方法で、相互協力して進めていく。各自毎回レジュメを作成して授業にその写しを持ってくる。授業終了時に提出する。			
授業計画	第1回	研究・制作のテーマの吟味と確定		
	第2回	研究・制作の計画書の作成①		
	第3回	研究・制作の計画書の作成②		
	第4回	データ・素材の収集方法		
	第5回	各自がデータ・素材を収集		
	第6回	集めたデータ・素材の検証・吟味①		
	第7回	集めたデータ・素材の検証・吟味②		
	第8回	データの解析・素材の取捨選択・統合について		
	第9回	各自がデータの解析・素材の取捨選択・統合を行う		
	第10回	解析したデータ・取捨選択・統合した素材の検証①		
	第11回	解析したデータ・取捨選択・統合した素材の検証②		
	第12回	解析データに基づく研究レポート作成方法・取捨選択・統合した素材を用いて創作することについての説明・解説		
	第13回	各自が、解析データに基づく研究レポート作成・取捨選択・統合した素材を用いての創作に取り組む		
	第14回	研究レポート（卒論研究の核となる）の発表		
	第15回	身体表現の小作品（卒論制作の核となる）の発表		
準備学習 (予習・復習等)	毎時間の最初に、1週間の自分の研究・制作の成果を、卒論ノート・卒業制作ノートをもとに報告する。			
テキスト	授業時に資料を提示、配布。			
参考文献	授業時に紹介。			
評価方法	卒論・卒業制作ノート:50% 発表・報告:50%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年 子ども学科
子ども学特別研究Ⅲ		渡部 かなえ（わたなべ かなえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	卒業論文研究・身体表現作品の卒業制作の完成と発表		
授業の概要	子ども学特別研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの前期で学んできたレポートの書き方やデータの取り方・解析、文献収集と引用、分かりやすいプレゼンテーションの仕方、身体表現の作品作りのための素材の収集・取捨選択・統合等についての知識と技術を総合的に活用し、また多様な授業や実習で得た知見を生かして研究論文・身体表現の創作作品を完成することができる。また、研究論文・作品の作成だけでなく、その成果を人に伝える技術も習得できる。		
授業計画	第1回	研究論文・卒業制作の作成と発表に向けて：テーマ決定と全体構成（計画・企画）	
	第2回	研究の学術的背景・作品の創造的背景	
	第3回	研究目的・作品の意図	
	第4回	方法：・調査／実験／データ収集 ・身体表現の創作作品の素材の収集（音・映像）	
	第5回	研究論文：結果① データの分析 卒業制作：身体表現の創作作品の素材の取捨選択	
	第6回	研究論文：結果② データのインテグレーション 卒業制作：身体表現の創作作品の素材の統合	
	第7回	研究論文：考察・議論① 結果について 卒業制作：作品創作①	
	第8回	研究論文：考察・議論② 研究目的の達成と今後の展望 卒業制作：作品創作②	
	第9回	研究論文：本文全文の作成 卒業制作：作品創作③	
	第10回	研究論文：本文の推敲・改訂、完成 卒業制作：作品創作④	
	第11回	研究論文：成果発表① 抄録作成 卒業制作：成果発表① 抄録作成	
	第12回	研究論文：成果発表② 抄録の推敲・改訂、完成 卒業制作：成果発表② 制作ノートの完成	
	第13回	研究論文：成果発表③ プレゼンテーション原稿の推敲・改訂 卒業制作：成果発表③ 舞台上演の準備	
	第14回	研究論文：成果発表④ プレゼンテーション原稿の完成・発表のリハーサル	
	第15回	卒業制作：成果発表④ 舞台上演のリハーサル	
準備学習 (予習・復習等)	毎時間、1週間の自分の研究・創作の進捗状況を、卒論ノート・制作ノートに基づいて報告する。		
テキスト	授業時に資料を提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介。		
評価方法	研究論文・創作作品：70% 卒論・制作ノート：20% 抄録：10%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
子どもに関わる音楽についての専門的な研究 j		渡辺 善忠（わたなべ よしただ）		
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を発展させます。本年度は昨年度学んだ基礎的な研究方法を土台として、各自のテーマについて専門的に研究を展開致します。制作発表・論文とも、年度末の発表を目標に研究を進めます。			
授業の概要	個人やグループごとにテーマを定めて個別に研究を進めます。テーマが定まらない場合は、基礎的な学びを継続しながらテーマを絞り込んで研究を進めます。			
授業計画	第1回	研究計画の相談		
	第2回	研究発表①		
	第3回	研究発表②		
	第4回	研究発表③		
	第5回	研究発表④		
	第6回	研究発表⑤		
	第7回	中間発表		
	第8回	グループ指導①		
	第9回	グループ指導②		
	第10回	グループ指導③		
	第11回	グループ指導④		
	第12回	グループ指導⑤		
	第13回	グループ指導⑥		
	第14回	グループ指導⑦		
	第15回	中間発表と後半の研究についての相談		
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。			
テキスト	授業時に相談して決めます。			
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。			
評価方法	研究状況等の授業評価：50% 制作／論文発表：50%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
子どもに関わる音楽についての専門的な研究 j		渡辺 善忠（わたなべ よしただ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を発展させます。本年度は昨年度学んだ基礎的な研究方法を土台として、各自のテーマについて専門的に研究を展開致します。制作発表・論文とも、年度末の発表を目標に研究を進めます。		
授業の概要	個人やグループごとにテーマを定めて個別に研究を進めます。テーマが定まらない場合は、基礎的な学びを継続しながらテーマを絞り込んで研究を進めます。		
授業計画	第1回	研究の進捗状況の確認と後半の計画	
	第2回	グループ指導①	
	第3回	グループ指導②	
	第4回	グループ指導③	
	第5回	グループ指導④	
	第6回	グループ指導⑤	
	第7回	グループ指導⑥	
	第8回	グループ指導⑦	
	第9回	グループ指導⑧	
	第10回	中間発表	
	第11回	グループ指導⑨	
	第12回	グループ指導⑩	
	第13回	グループ指導⑪	
	第14回	制作発表／論文発表	
	第15回	研究の総括と今後の課題	
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。		
テキスト	授業時に相談して決めます。		
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。		
評価方法	研究状況等の授業評価:50% 制作／論文発表:50%		

幼稚園実習ⅠA	後期 1 単位	1年
幼児理解をめざして		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、莊司 紀子（しょうじ のりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 「幼稚園実習ⅠA」は、幼稚園教諭2種免許状の取得を目指す人が、幼稚園教育の実態を知り、幼児理解を深めることをねらいとする。</p> <p><授業の概要> 幼稚園実習に向けての準備のための「事前授業」と、「幼稚園実習ⅠB」での1週間実習、そしてその成果を振り返る「事後授業」の3本立てで進めていく。 また、この授業の評価は3本を総合して行う。 なお授業は、基本的に4グループに分けて行う。</p> <p><授業計画> 後期 第1回 幼稚園実習のねらい・目的を知る 第2回 実習準備室を利用した学習 第3回 実習に向けて 幼稚園の1日を知る 第4回 実習に向けて 観察実習と参加実習その在り方 第5回 実習に向けて 実習日誌の書き方・実習の心構え等 第6回 実習に向けて1 簡単な指導案の書き方 第7回 実習に向けて2 具体的な実習準備・心構え確認 第8回 幼稚園実習（実習協力園での実習） 第9回 実習を終えて1（省察） 第10回 実習を終えて2 実習から学んだこと1（報告会） 第11回 実習を終えて3 実習から学んだこと2（報告会） 第12回 実習を終えて4 実習から学んだこと2（報告会） 第13回 「幼稚園実習Ⅱ」に向けての課題検討 第14回 「幼稚園実習Ⅱ」に向けての準備 第15回 まとめ * 幼稚園での実習は11月9日（月）～11月14日（土）の1週間行う。</p> <p>※履修上の注意： ・第1回目の授業より毎週必ず出席のこと（出席・受講態度重視）。 ・やむを得ないことでの欠席は事前に学科研究室に届け出、後日専任担当教員（浅見・岸井・莊司）を訪ねること。無断欠席者に対しては厳しい対応をとる。 ・本授業への欠席があると幼稚園での1週間の実習に行けない場合があるので注意すること。 ・「幼稚園実習ⅠA」「幼稚園実習ⅠB」の単位が取得できない場合は「幼稚園実習ⅡA」「幼稚園実習ⅡB」の履修ができない。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回次の授業で行うテキストの箇所を伝えるので必ず読んでおくこと。また、授業で行ったことに対して振り返ったり、調べたりして深めておくこと。</p> <p><テキスト> 浅見均・田中正浩編著『子どもの育ちを支える 幼稚園教育実習』 大学図書出版</p> <p><参考文献> 授業の中で適宜紹介する。</p> <p><評価方法> 授業への参加態度40%・実習日誌・評価40%・レポート20%</p>		

幼稚園実習 I B	後期集中 1 単位	1年
幼稚園実習を通して幼児理解をする		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ）</p> <p><実習の到達目標及びテーマ> 幼稚園での1週間の実習を通して、幼稚園教育や保育の実際を知り、幼児理解を深める。</p> <p><実習の概要> 実習期間：11月9日（月）～11月14日（土）</p> <p>内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、実習幼稚園の概要を知る。 2、配属クラスの1日の生活の流れを知る。 3、配属クラスの子どもの様子（発達・遊び・生活など）を知る。 4、保育者の子どもへのかかわり方などを知る。 5、簡単な部分保育実習（点呼・ピアノ・紙芝居・遊びへの参加など）。 6、保育を観察、記録し、日誌を書き、学んだことを省察する。 7、環境構成への参加（清掃、保育準備など）。 <p>※実習巡回指導には、浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、横堀昌子、村知稔三、渡部かなえの専任教員のほか、上村真理子の幼稚園実習担当講師があたる。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 翌日の実習に対して自己のねらい、目標を明確にし実習計画や指導案を作成しておくこと。また、その日の実習で学んだことや、実習担当者から指摘を受けたことなどを踏まえて、実習日誌を書き、必ず振り返っておくこと。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していく <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく <評価方法> 実習態度20%・実習日誌30%・実習評価表30%・レポート20%</p>		

幼稚園実習ⅡA	前期 1 単位	2年
幼児と保育について本質的理解を深める		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 「幼稚園実習ⅡA・B」は、幼稚園教諭2種免許状の取得をめざすが、幼稚園の現場で3週間の実習をする。特に2年生の実習は、幼児や幼稚園の実態についての理解を深めていくと同時に、具体的な経験を通して幼児教育の内容・方法や保育者の在り方などを学習し、保育者の職務についての理解を深めて、自己の適性についても考える機会とすることを目的としている。</p> <p><授業の概要> 幼稚園実習に向けて準備のために毎週行う「事前授業」、3週間の実習幼稚園における「幼稚園教育実習」、そして実習後に毎週行う「事後授業」の3本立てで進める。事前と事後の授業は、基本的に4グループの分級で行う。</p> <p><授業計画> 前期 第1回 幼稚園教育実習Ⅱの意義と目的 第2回 幼児理解を深めるために 第3回 幼児の発達と保育者のかかわり 第4回 幼児の生活と保育活動 第5回 6月実習をふまえた教材研究 第6回 保育の内容と方法 第7回 指導計画と保育方法 第8回 幼稚園における参加実習 第9回 幼稚園における参加実習と部分保育実習 第10回 幼稚園における責任実習 第11回 幼稚園実習の報告と検討 第12回 他園の保育状況を知る 第13回 合同報告会 第14回 幼児と保育の問題点を課題をさぐる 第15回 幼児と保育についての本質理解のまとめ</p> <p>◎幼稚園での実習は6月1日（月）～6月20日（土）の3週間です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回次の授業で行うテキストの箇所を伝えるので必ず読んでおくこと。また、授業で行ったことに対して振り返ったり、調べたりして深めておくこと。</p> <p><テキスト> 『子どもの育ちを支える 幼稚園教育実習』浅見均・田中正浩編著 大学図書出版</p> <p><参考文献> 『幼稚園教育要領解説』文部科学省</p> <p><評価方法> 平常点（授業への参加態度、課題レポートなど）50%、 実習点（実習評価票、実習録・提出レポートなどの総合評価）50%</p> <p>※履修上の注意： ・第1回目の授業より毎週必ず出席のこと（出席・受講態度重視）。 ・本授業への欠席があると幼稚園での3週間の実習に行けない場合があるので注意のこと。 ・やむを得ないことでの欠席は事前に学科研究室に届け出、後日担当教員（岸井・荘司・浅見）を訪ねること。無断欠席者に対しては厳しい対応をとる。 ※「幼稚園実習ⅡA・B」の履修条件 ・1年次の「幼稚園実習ⅠA・B」が履修済みであること。 ・1年次の基礎科目（1年次の教職科目）が原則として全科目履修できていること。</p>		

幼稚園実習ⅡB	前期集中 3 単位	2年
幼稚園実習を通して幼児・保育の本質理解を深める		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ） （教育実習時の幼稚園訪問指導の教員） 実習巡回指導には、浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、横堀昌子、村知稔三、渡部かなえの専任教員のほか、上村真理子の幼稚園実習担当講師があたる。</p> <p><実習の到達目標及びテーマ> 幼稚園での3週間の教育実習を通して、幼児と保育について、本質的理解を深める。</p> <p><実習授業の概要> 実習期間 2013年6月1日（月）～6月20日（土）</p> <p>（内容）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 園児の観察、保育の参観など、観察・参加実習 2. 幼児の理解を深める 3. 保育内容や保育方法の研究 4. 保育者の幼児へのかかわり方などの研究 5. 保育の計画と実践（部分実習・責任実習も含む） 6. 保育の展開と記録 7. 環境構成への参加（清掃・教材準備など） 8. 幼児・保育・自己への省察 9. 幼稚園教育の理解 <p><準備学習（予習・復習等）> 翌日の実習に対して自己のねらい、目標を明確にし実習計画や指導案を作成しておくこと。また、その日の実習で学んだことや、実習担当者から指摘を受けたことなどを踏まえて、実習日誌を書き、必ず振り返っておくこと。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していく <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく <評価方法> 実習評価票 25%・実習録 25%・実習後のレポート 25%・訪問指導教員の評価 25%</p>		

保育所実習 I A	後期 1 単位	2年
保育所保育の理解と保育士の役割の考察～保育所実習の準備とふり返し		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 保育士資格の取得を希望する学生が、保育所における体験学習（保育所実習 I B）を通して、保育所の機能と役割、保育の実際、保育士の役割などについて学習します。 そのための準備を中心に行ないながら、実習後のふり返しをあわせて総合的に学内で学びます。</p> <p><授業の概要> 保育所実習 I Aは、保育所に約2週間出向き実習する保育所実習 I Bに向けて、学内にて実習計画作成と諸準備、実習後のふり返しを行ないます。 保育所実習 I Bの実習期間は2015年11月中の2週間です。（日程など詳細は保育実習ガイダンスや授業で伝達） 実習に出るためには本講義への出席が不可欠です。 講義は担当者による4分級での授業と合同のそれを併用します。 本講義は、原則として、1年次で保育士資格取得に必要な必修科目の単位を修得をした者にも履修を認めています。</p> <p><授業計画> 第1回 保育所実習の意義・目的・内容・方法 第2回 実習先配属と進め方・留意点の確認 第3回 必要書類の準備と文献研究・実習計画書の作成 第4回 実習の心構え（保育参加に際して求められる理解と倫理） 第5回 乳幼児の生活と遊びの理解（視聴覚教材を用いて） 第6回 保育所と利用者理解・子育て支援活動の理解 第7回 学外講師による実習事前指導 第8回 実習記録とは（記録の意味・とり方・記述の留意点） 第9回 保育所実習事前オリエンテーション 第10回 実習課題の明確化（実習計画書の仕上げと提出） 第11回 実習の具体的準備と留意点の確認 第12回 実習報告会・実習報告書等の提出 第13回 実習報告書に基づくディスカッション 第14回 検討課題の発表と考察 第15回 担当教員によるフィードバックとまとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 「保育実習のしおり」や授業で配布される資料を読みこみ、実習に向けての理解を深めます。テキストその他の文献を活用し、実習計画書の作成に取り組みましょう。関連する文献を読み、保育の営み、保育者の役割、保育所保育をめぐる社会的課題、乳幼児の発達の道すじ、遊びや生活について理解を深める努力をしてください。</p> <p><テキスト> 帆足英一監修『実践 保育学』（日本小児医事出版社、2014年）。実習の事前準備および実習中の活用のために、必ず購入のこと。</p> <p><参考文献> 民秋言ほか編著『保育ライブラリ 保育所実習』（北大路書房、2009年）。</p> <p><評価方法> 講義への参加度（30%）、計画書・報告書・感想文などを含めた実習の事前・事後のとりくみの状況（70%）を基準として総合的に評価します。</p>		

保育所実習 I B	後期集中 2 単位	2年
保育士の役割の体験学習と考察～保育所保育との出会い		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p><実習の概要とテーマ> 保育所で約2週間、園児や保育者とともに生活し保育に参加することを通して、保育所保育や保育の実際を学ぶとともに、保育所の果たす社会的役割や機能・保育士の役割とあり方を理解します。 人間として日々成長する乳幼児の姿にふれ、保育者として、人としての感受性を耕すとともに、保育ニーズを有する乳幼児とその家族の支援にあたって保育所に何が求められるかについても考察する機会とします。</p> <p><実習期間> 2015年11月中の2週間（日程など詳細は保育実習ガイダンスおよび授業で伝達）</p> <p><実習の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する保育所の概要と果たす機能を理解する。 2. 配属クラスの1日の生活の流れを理解する。 3. 配属クラスの子どもの様子（発達・遊び・生活状況など）を理解する。 4. 保育者の子どもとのかかわりの意味・保育内容を理解する。 5. 保育者の保護者（親）とのかかわりと連携のあり方を考察する。 6. 保育者のチームワークと連携のとり方を理解する。 7. 保育準備・環境設定への参加を通し、保育者の意図と配慮を知る。 8. 保育の観察・参加と日誌を通しての省察。 9. 部分実習・責任実習の体験と省察。 10. 実習全体のふり返りと、成果・課題の考察。 <p>実習中の巡回指導は専任教員の浅見均、岸井慶子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、荘司紀子、鈴木俊之、杉田穂子、菅野幸恵、村知稔三、横堀昌子、渡部かなえに加え、実習担当講師の武居光、菅野和枝が行なう予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 「保育実習ガイドブック（保育実習のしおり）」、テキストを活用しながら、実習体験のもつ意味を自ら考察する努力をしてください。実習録（実習ノート）を書くことで、その日の実習テーマ・観点についてふり返り、実習場面を省察し、自己の課題と向きあう営みを重ねていきます。実習ノートに実習のまとめ、反省を記入し、ノートをしあげるまで体験とそのもつ意味を深めることを積み重ねます。</p> <p><テキスト> ガイダンス等で提示します。必ず購入し授業時に持参するとともに、実習に活用することを求めます。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介します。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習へのとりくみ（60%）と実習先からの評価（40%）を基準として総合的に評価します。</p>		

保育所実習Ⅱ A	後期 1 単位	3年
保育所保育の理解と保育士の役割の考察の深化－保育所実習の（準備と）ふり返り－	菅野 和枝（すがの かずえ） 村知 稔三（むらち としみ）	
<p><講義の到達目標・テーマ> 保育士資格の取得を希望する学生が、保育所における体験学習（保育所実習Ⅱ B）を通して、保育所の機能と役割、保育実践の実際、保育士の役割について学びます。 そのための準備を中心としながら、実習後のふり返りをあわせて行ない総合的に学ぶ学内授業です。</p> <p><講義の概要> 保育所実習Ⅱ Aは、保育所に約2週間出向き実習する保育所実習Ⅱ Bに向けて、実習計画作成と準備、保育所実習Ⅱ Bのふり返りを学内で行ないます。 保育所実習Ⅱ Bの実習期間は原則として8月24日（月）～9月5日（土）です。ただし、多少前後する場合があります。 この実習に出るためには本講義への出席が不可欠です。 もち方としては、4名の担当者によるグループ別の授業と、合同で行なうそれとを組み合わせます。 また、保育所実習Ⅱ Aと施設実習Ⅱ Aの各講義時間を相互に活用し、同時に進めていきます。</p> <p><講義計画> 第1回 保育所実習の準備（実習の枠組み理解） 第2回 保育所実習の準備（実習配属確認と準備過程） 第3回 保育所実習の準備（保育所の役割・機能理解） 第4回 保育所実習の準備（保育問題と保育ニーズの理解） 第5回 保育所実習の準備（乳幼児の発達理解） 第6回 保育所実習の準備（乳幼児の遊びの理解） 第7回 保育所実習の準備（乳幼児の生活の理解） 第8回 保育所実習の準備（保育者の役割の理解） 第9回 保育所実習の準備（保育の留意点の理解） 第10回 保育所実習の準備（事前学習のまとめ） 第11回 保育所実習の準備（実習テーマの検討） 第12回 保育所実習の準備（実習計画の作成） 第13回 保育所実習の準備（実習計画への助言） 第14回 保育所実習の準備（実習の省察） 第15回 教員からのフィードバックと全体のまとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回、次の授業で行なう内容を伝えるので、関連するテキストの箇所を必ず読んでおくこと。また、授業内容に対して振り返ったり、調べたりして、理解を深めておくこと。</p> <p><テキスト> 帆足英一監修『実践保育学』（日本小児医事出版社、2014年）。</p> <p><参考文献> 民秋言ほか編著『保育ライブラリー－保育所実習』（北大路書房、2009年）。</p> <p><評価方法> 講義への積極的関与の度合い（30%）、計画書・報告書・感想文などを含めた実習の事前・事後のとりくみの状況（70%）を基準として総合的に評価します。</p>		

保育所実習ⅡB	後期集中 2 単位	3年
保育士の役割の体験学習と考察の深化－保育所保育との出会い－	菅野 和枝（すがの かずえ） 村知 稔三（むらち としみ）	
<p><実習の概要・テーマ> 保育所で約2週間、園児や保育者とともに生活し、保育に参加することを通して、保育所保育や保育の実際を学ぶとともに、保育所の果たす社会的役割や機能、保育士の役割とあり方を理解します。 人として日々成長する子どもの姿にふれ、保育者として、人としての感受性を耕すとともに、保育需要をもつ子どもと家族の支援にあたって保育所に今、何が求められるかについても考察します。</p> <p><実習期間> 原則として2015年8月24日（月）～9月5日（土）。ただし、多少前後する場合があります。</p> <p><実習の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する保育所の概要と果たす機能を理解します。 2. 配属クラスの1日の生活の流れを理解します。 3. 配属クラスの子どもの様子（発達・遊び・生活状況など）を理解します。 4. 保育者の子どもとのかかわりの意味・保育内容を理解します。 5. 保育者の保護者（親）とのかかわりと連携のあり方を考察します。 6. 保育者のチームワークと連携のとり方を理解します。 7. 保育準備・環境設定への参加を通し、保育者の意図と配慮を知ります。 8. 保育の観察・参加と日誌を通しての省察を行ないます。 9. 部分実習・責任実習の体験と省察を行ないます。 10. 実習全体のふり返りと成果・課題の考察を行ないます。 <p>ただし、実習する保育所の状況により実習内容にちがいや変化があるので、臨機応変に対応することが求められます。 実習中の巡回指導は専任教員の浅見均、岸井慶子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、荘司紀子、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、村知稔三、横堀昌子、渡辺かなえに加え、実習担当講師の菅野和枝が行なう予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回、次の授業で行なう内容を伝えるので、関連するテキストの箇所を必ず読んでおくこと。また、授業内容に対して振り返ったり、調べたりして、理解を深めておくこと。</p> <p><テキスト> 必要に応じて随時紹介します。</p> <p><参考文献> 必要に応じて随時紹介します。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習へのとりくみ（60%）と実習先からの評価（40%）をもとに、総合的に評価します。</p>		

施設実習 I A	前期 1 単位	3年
福祉施設実践の理解と施設職員の役割の考察～施設実習の準備とふり返り		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p>＜授業の到達目標及びテーマ＞ 保育士資格の取得を希望する学生が、福祉施設における体験学習（施設実習 I B）を通して、福祉施設の機能と役割・利用者を支援する生活実践の実際・（保育士を含む）施設職員の役割について学びます。 そのための準備を中心に行いながら、実習後のふり返りとをあわせて総合的に学ぶ学内授業です。</p> <p>＜授業の概要＞ 施設実習 I Aは、福祉施設に約2週間出向き実習する施設実習 I Bに向けて、学内にて実習計画作成と諸準備、実習後のふり返りを行います。 施設実習 I Bにおける実習は、各実習施設の受け入れ状況にあわせてあらかじめ設定した実習期間にそれぞれ出向くこととなります。 実習に出るためにはこの授業への出席が不可欠となります。原則として欠席および遅刻は認めていません。 授業のもち方としては、上記担当者による4グループまたは2グループに分かれて行う授業と、合同で行う授業とを活用していきます。加えて、適宜、施設現場からの学外講師にも出講を願う予定です。 なお、この科目は、原則として2年次に保育所実習 I A・I Bの履修をし、両科目の単位の修得ができた者のみ履修を認めるガイドラインを学科として設定し、実質運用しています。</p> <p>＜授業計画＞ 第1回 施設実習の意義・目的・内容・方法について 第2回 実習先理解と事前指導等の進め方・留意点等の確認 第3回 必要書類の準備と文献研究・実習計画書の作成について 第4回 実習の心構え（生活参加に際して求められる理解と倫理） 第5回 施設における実践内容と生活参加の理解 第6回 施設機能と利用者理解・支援の実際についての理解 第7回 学外講師による実習事前指導 第8回 実習記録とは（記録の意味・とり方・記述の留意点） 第9回 施設実習事前オリエンテーション 第10回 実習課題の明確化（実習計画書のしあげと提出） 第11回 実習報告書の提出と実習報告会 第12回 実習報告会 第13回 実習報告会 第14回 検討課題の発表と考察 第15回 担当教員によるフィードバックとまとめ</p> <p>＜準備学習（予習・復習等）＞ 「保育実習のしおり」や授業で配布される資料を読みこみ、実習に向けての理解を深めます。文献や関連資料を活用し、実習計画書の作成に取り組みましょう。施設の社会的役割、利用者のニーズや家族背景、施設職員の果たす役割、支援にあたっての留意点や配慮等について理解を深める努力をしてください。</p> <p>＜テキスト＞ 開講時に提示します。</p> <p>＜参考文献＞ 民秋言他編著『保育ライブラリ 施設実習』北大路書房ほか。 ※授業でも参考文献および資料を紹介していく予定です。</p> <p>＜評価方法＞ 平常点・授業参加態度（70%）、実習計画書・実習報告書作成を含めた実習事前事後の取り組み状況、実習報告、提出物（あわせて30%）を基準として総合評価します。</p>		

施設実習 I B	後期集中 2 単位	3年
施設職員の役割の体験学習と考察～施設利用者にとって必要な支援のあり方を考える		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p><実習の概要とテーマ> 福祉施設で約2週間の実習において利用者と施設職員とともに生活することを通して、施設における実践や利用者の人権保障、支援の実際を学ぶとともに、福祉施設の果たす社会的役割と機能・（保育士を含む）施設職員の役割とあり方・利用者やその背後にいる家族への支援の実際を考察します。</p> <p>実習体験を通して、人が人として成長すること・他者とかかわりながら社会に生きることを支える福祉の営みに今後何が求められるか、その本質についても考える機会としていきます。</p> <p><実習期間> 各自の配属された時期（約2週間）に、それぞれの実習施設に出向き、原則的に宿泊での実習を行います。</p> <p><実習の到達目標> （さまざまな実習先がありますが、モデルとして以下を示します）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する施設の概要と果たす機能を理解する。 2. 施設の1日の生活の流れとその意味を理解する。 3. 利用者の様子（デイリープログラム・生活の実際・施設での活動など）を知る。 4. 施設職員の利用者へのかかわり（個別・全体）と配慮している点を理解する。 5. 施設職員の保護者（親）へのかかわりと連携のあり方を考察する。 6. 施設職員のチームワークと連携のとり方を理解する。 7. 生活への参加を通し、環境設定上の配慮と特性を知る。 8. 人間らしい成長・社会参加・暮らしの実現に何が求められるか考察する。 9. 日々の生活参加・実習内容のふり返りと日誌による省察。 10. 実習全体のふり返りと、成果・課題の考察。 <p>（※ただし、実習する施設の特性や実習時期・個別の状況により実習内容プログラムのちがいや変更がありうるので、臨機応変に対応のこと）</p> <p>実習中の巡回指導は、専任教員の浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、村知稔三、横堀昌子、渡部かなえに加え実習担当講師の武居光、菅野和枝が行う予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 「保育実習ガイドブック（保育実習のしおり）」も手がかりにしながら、実習体験のもつ意味を自ら考察する努力をしてください。実習録（実習ノート）を書くことで、その日の実習テーマ・観点についてふり返り、実習場면을省察し、自己の課題と向きあう営みを重ねていきます。実習ノートに実習のまとめ、反省を記入し、ノートをしあげるまで体験とその意味を深めることを積み重ねます。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習そのものへの取り組み状況（60%）と実習先からの評価（40%）を基準として総合評価します。</p>		

施設実習Ⅱ A	後期 1 単位	3年
福祉施設における支援活動の理解と施設職員の役割の考察～施設実習の準備とふり返り	杉田 穂子（すぎた やすこ） 横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 保育士資格の取得を希望する学生が、福祉施設における体験学習（施設実習Ⅱ B）を通して、福祉施設の機能と役割・利用者支援する生活実践の実際・（保育士を含む）施設職員の役割について学びます。 そのための準備を中心に行いながら、実習後のふり返りとをあわせて総合的に学ぶ学内授業です。</p> <p><授業の概要> 施設実習Ⅱ Aは、福祉施設に約2週間出向き実習する施設実習Ⅱ Bに向けて、学内にて実習計画作成と各施設の特性に即した諸準備、実習後のふり返りを行います。</p> <p>施設実習Ⅱ Bにおける実習は、各実習施設の受け入れ状況にあわせてあらかじめ設定した実習期間（原則として2015年8月から10月までのさまざまな時期の中から配属された約2週間）にそれぞれ出向くこととなります。 実習に出るためにはこの授業への出席が不可欠となります。原則として欠席および遅刻は認めていません。</p> <p>授業のもち方としては、施設実習Ⅱ A履修者の配属された実習先施設種別ごとに分かれて行う授業と履修者全員での授業とを活します。また、施設実習Ⅱ Aと保育所実習Ⅱ Aの各授業時間を相互に活用し同時併行的に進めていきます。 加えて、適宜、施設現場からの学外講師にも出講を願う予定です。</p> <p><授業内容> 第1回 施設実習の意義・目的・内容・方法について 第2回 実習先配属と進め方・留意点の確認 第3回 必要書類の準備と文献研究・実習計画書の作成について 第4回 実習の心構え（生活参加に際して求められる理解と倫理） 第5回 施設における実践内容と生活参加の理解 第6回 施設機能と利用者理解・支援の実際についての理解 第7回 実習記録とは（記録の意味・とり方・記述の留意点） 第8回 施設実習事前オリエンテーション 第9回 実習課題の明確化（実習計画書のしあげと提出） 第10回 実習報告書等の提出と実習報告会 第11回 実習報告会 第12回 実習報告会 第13回 実習報告書に基づくディスカッション 第14回 検討課題の発表と考察 第15回 担当教員によるフィードバックとまとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 自分が出向く実習施設における利用者・入院者のニーズや抱える状況を理解し、支援やケアにおける要点をおさえるため、文献や資料の研究・検討を行います。それらを実習計画書にまとめ、準備学習を進めます。また、実習後は、実習報告書や実習ノートを手がかりに、実習体験のもつ意味や自己の課題を考察していきます。実習報告にあたってはその準備をし、まとめます。</p> <p><テキスト> 開講時に提示します。</p> <p><参考文献> 民秋言他編著『保育ライブラリ 施設実習』北大路書房ほか。 ※なお、実習する施設種別に即した参考文献および実習事前準備のための各種資料を、適宜紹介していく予定です。</p> <p><評価方法> 平常点と授業参加態度（70%）、実習計画書・実習報告書作成を含めた実習事前事後の取り組み状況、実習報告、提出物（あわせて30%）を基準として総合評価します。</p>		

施設実習ⅡB	後期集中 2 単位	3年
施設職員の役割の体験学習と考察～施設利用者にとって必要な支援のあり方を考える	杉田 穂子（すぎた やすこ） 横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
<p><実習の概要及びテーマ> 福祉施設での約2週間の実習において利用者や施設職員とともに生活することを通して、施設実践や利用者の人権保障、支援の実際を学ぶとともに、各施設の果たす社会的役割と機能・（保育士を含む）施設職員の役割とあり方・利用者やその背後にいる家族への支援の実際を考察します。 実習体験を通して、人が人として成長すること・他者とかかわりながら社会に生きることを支える福祉の営みに今後何が求められるか、その本質についても考える機会とします。</p> <p><実習期間> 2014年5月～10月までの間の各自配属された時期（約2週間）に、それぞれの実習施設に出向き、宿泊または通いによる実習を行います。</p> <p><実習の到達目標> （さまざまな実習先があるが、モデルとして以下を示す）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する施設の概要と果たす機能を理解する。 2. 施設の1日の生活の流れを理解する。 3. 利用者の様子（デイリープログラム・生活の実際・施設での活動など）を知る。 4. 施設職員の利用者へのかかわり（個別・全体）と配慮している点を理解する。 5. 施設職員の保護者（親）へのかかわりと連携のあり方を考察する。 6. 施設職員のチームワークと連携のとり方を理解する。 7. 生活への参加を通し、環境設定上の配慮と特性を知る。 8. 人間らしい成長・社会参加・暮らしの実現に何が求められるか考察する。 9. 日々の生活参加・実習内容のふり返りと日誌による省察。 10. 実習全体のふり返りと、成果・課題の考察。 <p>（※ただし、実習する施設の特性や実習時期・個別の状況により実習内容プログラムのちがいや変更がありうるので、臨機応変に対応のこと）</p> <p>実習中の巡回指導は、専任教員の浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、村知稔三、横堀昌子、渡部かなえが行う予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 実習準備学習での成果を活かしながら、実習録を用いて実習体験を言語化し、考察していきます。記述にあたっては、その考察を深めていく努力を重ねてください。実習先から求められた場合は、実習前、実習後に課題やレポート等にも取り組みます。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習そのものへの取り組み状況（60%）と実習先からの評価（40%）を基準として総合評価します。</p>		

フィールドワーク・子ども	後期集中 1 単位	1・2・3年
子どものくらしについて考える	菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
<p><授業の到達目標およびテーマ></p> <p>子どもは”いま”を生きる存在である。子どもたちのくらしは彼らの”いま”が保障されるものでなければならない。ただ、現在の状況を改めてみると、子どもたちの”いま”が十分に保障されているかどうかかわからない、あるいは脅かされている現状が見えてくる。この授業では、乳児期から学齢期の子どもに焦点をあて、子どもたちの生活の場に自ら赴き、直接見たり聞いたりすることを通して、子どものくらしについて考えることを目的とする。</p> <p>子どもの生活の場は多岐にわたるが、この授業では正規（法制度に基づいた）の保育施設や教育機関以外の場所に注目する。認可外の施設や普段あまりなじみのない子どもたちの生活の場は、現状への違和感からできたもの、正規な保育・教育では扱いきれない子どもの生活を支えるものなどがあり、子どものくらしを考えるためのヒントがたくさんあると考えるからである。たとえば、「森のようちえん」は、園庭園舎がなく自然（森）のなかで保育を行う。森（自然）には、子どもが育つ上で大切な要素（運動、情緒、五感、創造性、社会性、集中力、健康など）があるという考えのもとデンマークで始まり、近年日本でも広まりつつある。</p> <p>授業では、まず、認可外の保育施設や学童保育など、認可の保育施設や教育機関以外に子どもたちが過ごす場所にはどのようなものがあるのかについて理解する。そのうえで、自分の居住する地域にどのような子どもの居場所があるかを調べ、実際にその場に身をおき体感することを通して理解を深める。</p> <p><授業の概要></p> <p>フィールドワークに赴くための準備として、4月と7月に授業を行う（月曜6限を予定している）。前期のうちに各自がフィールドに入るための準備を進め、7月までにフィールドワーク先を探し先方に連絡日時などを決定する。フィールドワーク先の検討にあたっては個別相談をする。夏季休業中にフィールドワークを行い、後期に報告会を行う。</p> <p>互いのフィールドワークの体験を共有しながら、子どものくらしについて考えていく。可能であれば全員で学外施設の見学を行う。</p> <p>フィールドワークでは、どこに行き、何を見るか、交渉もふくめてすべて自分で調べて進めるため、受講者には積極的な参加を求める。フィールドで見たり聞いたりしたことをフィールドノーツにまとめ、期末レポートとともに提出する。</p> <p><授業計画></p> <p>1) フィールドを探するための準備 (4月13日、20日、27日を予定) オリエンテーション フィールドを探す：フィールドエントリーのしかた 子どもの居場所を知る（フリースクール、学童保育、自主保育、森のようちえん）</p> <p>2) フィールドワーク先を決める (5月～6月に個別相談を行う)</p> <p>3) フィールドに入るための準備 (6月29日、7月6日、13日を予定) フィールドワークの実際 フィールドノーツのまとめかた フィールドの去り方</p> <p>4) 報告会 (9月下旬を予定) まとめとふりかえり</p> <p><準備学習></p> <p>4月の事前準備の後、フィールド先を決めるにあたって、ブックレポートを提出する</p> <p><テキスト></p> <p>授業内で適宜プリントを配布</p> <p><参考文献></p> <p>授業内で適宜紹介する</p> <p><評価方法></p> <p>授業への参加度：40% フィールドノーツ：40% 期末レポート：20%</p>		

キリスト教学 I		前期 2 単位	1年
聖書をどう読むか・イエスとは誰か・キリスト教は何をしているのか		荒瀬 牧彦（あらせ まきひこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>①聖書に親しむ：聖書という書物の概要を把握し、特に有名な箇所を実際読んで味わう。聖書の言葉に照らして自分の人生を考える、という経験を目指す。</p> <p>②イエスに迫る：福音書を通して、イエスが何を語り、何をを行い、何を求めているのかを探る。</p> <p>③キリスト教を考える：実際のところキリスト教信徒はどのような生き方を示してきたのか。歴史的宗教としてのキリスト教の功罪は何か。現実の問題についてどう対応しているのか。学生の抱く疑問との対話の中で考えていく。</p>		
授業の概要	毎回聖書を開き、朗読し、その内容を鑑賞する作業を行う。また、キリスト教信仰の中で大きな役割を果たしてきた賛美歌を用い、様々な賛美歌を歌ってみることを通して信仰への理解を深めたい。		
授業計画	第1回	イントロダクション 生き方としてのキリスト教	
	第2回	聖書入門1 聖書の全体像	
	第3回	聖書入門2 世界の創造	
	第4回	聖書入門3 罪という問題	
	第5回	聖書入門4 契約という思想	
	第6回	聖書入門5 預言者たち	
	第7回	聖書入門6 キリスト（メシア）の到来	
	第8回	聖書入門7 イエスの伝道	
	第9回	聖書入門8 イエスの譬え話	
	第10回	聖書入門9 十字架上の死	
	第11回	聖書入門10 復活・教会の誕生	
	第12回	キリスト教宣教の展開（パウロ）	
	第13回	キリスト教は戦争や自然破壊の元凶なのか	
	第14回	キリスト教は現代の諸問題をどう考えるのか	
	第15回	漫画『ピーナッツ』に見るキリスト教	
準備学習 (予習・復習等)	特別な課題は与えない。自分は何者であるのか。どこから来て、どこへ行くのか。どのような世界を望み、どう生きたいと願っているのか・・・といったことを追求する意欲と、自分の洞察を他者との意見交換の中で深めてゆこうとする心のしなやかさをもって授業に臨んでほしい。		
テキスト	『聖書』 毎回必ず持参すること。		
参考文献	授業の中で紹介する。		
評価方法	レスポンス・ペーパー:50% 礼拝レポート:50%		

キリスト教学 I		前期 2 単位	1年
聖書に親しむーキリスト教入門ー		清弘 剛生 (きよひろ たかお)	
授業の到達目標 及びテーマ	聖書のいくつかの物語を実際に読み、その意味するところを学ぶことによって、聖書全体に親しみ、自ら楽しみながら聖書を読んで味わうことができるようになる。また、それぞれの聖書箇所やいくつかの具体的なテーマを足がかりに、キリスト教の基礎を学び理解する。		
授業の概要	旧約聖書、新約聖書からそれぞれ五つの物語を取り上げ、その全体もしくは一部を実際に読み進めながら、そこに書かれている一つ一つの事柄が今日の私たちにとっていかなる意味を持っているかを学ぶ。さらに三回の特別講義においては、今後直面するであろう人生の様々な場面を取り上げ、聖書を開きながらその時々々の課題について考える。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	旧約聖書に親しむ(1)「天地創造物語」	
	第3回	旧約聖書に親しむ(2)「エデンの園の物語」	
	第4回	旧約聖書に親しむ(3)「アブラハムの物語」	
	第5回	旧約聖書に親しむ(4)「エジプト脱出の物語」	
	第6回	旧約聖書に親しむ(5)「ダビデ王の物語」	
	第7回	特別講義(1)「結婚式について」	
	第8回	新約聖書に親しむ(1)「イエスと出会った人々」	
	第9回	新約聖書に親しむ(2)「イエスのたとえ話」	
	第10回	新約聖書に親しむ(3)「イエスの教えた祈りの世界」	
	第11回	新約聖書に親しむ(4)「イエスの処刑と復活」	
	第12回	新約聖書に親しむ(5)「はじめの頃の教会」	
	第13回	特別講義(2)「イエスから見た『人間関係』の問題」	
	第14回	特別講義(3)「生きること・老いること・死ぬこと」	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前もって指定した聖書箇所を読んでおくこと。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会)		
参考文献	講義の中で指示		
評価方法	平常点:40% 中間レポート:20% 期末レポート:20% チャペルレポート:20%		

キリスト教学 I		前期 2 単位	1年
キリスト教学 I		宍戸 基男 (ししど もとお)	
授業の到達目標 及びテーマ	①青山学院の建学の精神であるキリスト教信仰の大筋を理解する。その際、知識としての理解で終わるのではなく、さまざまな体験学習を通してひとりひとりが聴覚的、視覚的に直接触れることによって、体感的に理解する。②キリスト教信仰とその歴史の背後に聖書の存在があることを知る。その聖書の考え方、思想の要点を解説書によってではなく、自分自身の目で直(じか)に読んでみる。その時、内容への賛成反対にかかわらず自分の受けた衝撃感覚を大切にすること。それが聖書に対する自分の理解を形成していく。授業ではキリストの教えの代表的なもののひとつである「山上の説教」をとりあげる。③自分の学んだことを人の前に立って発表する訓練を通して、受身の授業から能動的なものにする。		
授業の概要	①体験学習 キリスト教の歴史の具体的な発展として、現在の日本にどのような形で、教会や学校や病院や施設が存在しているかを知る。そこで行われている礼拝に実際に参加してみる。また諸施設のひとつを見学して、キリスト教信仰に直に触れてみる。②教室では実際に聖書を読みながら、その中核にある聖書の神観(神についての教え)、人間観(人間をどのように把握しているか)、自然観(自然についてどのように語っているか)、に触れていく。その際、聖書の言葉への導入として、黙想の時間、讃美歌を実際に歌ってみる。③自分の学んだことをプレゼンテーションすることで、自分の理解が明確になるだけでなく、相手に伝えるコミュニケーション能力、表現力を養う練習をしていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション。カルトについての注意。	
	第2回	授業課題の各項目の説明。	
	第3回	青学の歴史 キャンパス内探訪(代表的な史跡をめぐるツアー)	
	第4回	図書館ガイダンス(PCの使い方、検索方法などを図書館の先生の指導を受ける)	
	第5回	キリスト教史の概観(ローマ・カトリック、ギリシア正教、聖公会、プロテスタント諸教会)	
	第6回	聖書は人間の現実についてどう語っているか。 ①心貧しい人、悲しむ人は幸いである。	
	第7回	②なぜ人は人を殺してはならないのか。	
	第8回	学生プレゼンテーション(1回目)	
	第9回	③なぜ人は姦淫してはならないのか。	
	第10回	学生プレゼンテーション(2回目)	
	第11回	④聖書は正義についてどう語っているか。	
	第12回	学生プレゼンテーション(3回目)	
	第13回	⑤聖書は自然についてどう語っているか。震災をどう受け止めるべきか。	
	第14回	学生プレゼンテーション(4回目)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業計画に基づいて指定されている聖書の箇所を通読してくること。10分程度。また自分がプレゼンテーションするテーマの選択を早く決定して、その準備をすること。授業に対するリアクションペーパーは出席の評価になるので、毎回授業で印象に残ったこと、質問などを丁寧に記述すること。		
テキスト	聖書(中型ハンディバイブル)		
参考文献	『キーワードでたどるキリスト教の歴史』林信孝 日本キリスト教団出版局、『聖書』船本弘毅 青春出版社、『幸いへの招き』一山上の説教に学ぶ一齊藤正彦 新教出版社、『倫理の探索』関根清三 中公新書 その他随時紹介する。		
評価方法	授業出席リアクションペーパー(出席3分の2以上):25% プレゼンテーション(2回):30% 期末レポート:30% 礼拝参加レポート(5回):15%		

キリスト教学Ⅰ	前期 2 単位	1年
キリスト教概論	野田 沢 (のだ たく)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 現代のこの日本に生きる私たちが、キリスト教を意識する機会は少ない。 しかし確かに私たちは、その影響と歴史の中を生活している。 イエス・キリストという人物、2000年間キリスト教会・社会が大切にしてきたものを知り、現代社会に生きる私たちの明日に活かそう。</p> <p><授業の概要> 教員からの一方向だけの講義ではなく、双方向に求め応えあう授業の時を持ちたい。無論、新たな知識としての「キリスト教学」も必要だが、新たな感性、新たな生き方に出会う時としたい。そのためにも、できるだけ今を生きる若者の視点からキリスト教との接点を見つめたい。聖書を主体に扱うが、随時現代の問題や今と未来の自分に生きる「生きた授業」としたい。</p> <p><授業計画> 【前期】 第1回 オリエンテーション。-青山学院とキリスト教- 第2回 信仰とは、宗教とはなにか。-カルト問題や世界情勢を題材に- 第3回 聖書とは-総論と私たちとの接点- 第4回 旧約聖書①：天地創造・人間創造・エデンの園での原罪Ⅰ 第5回 旧約聖書①：天地創造・人間創造・エデンの園での原罪Ⅱ 第6回 旧約聖書②：ノアの箱舟・罪の歴史Ⅰ 第7回 旧約聖書②：ノアの箱舟・罪の歴史Ⅱ 第8回 旧約聖書③：エジプト脱出。栄華と衰退・離散、そして現代へⅠ 第9回 旧約聖書③：エジプト脱出。栄華と衰退・離散、そして現代へⅡ 第10回 イエス・キリストとは-総論：全てはこの人から始まった- 第11回 新約聖書①：4つの福音書に描かれていることⅠ 第12回 新約聖書①：4つの福音書に描かれていることⅡ 第13回 新約聖書②：イエス・キリストと弟子たちの姿Ⅰ 第14回 新約聖書②：イエス・キリストと弟子たちの姿Ⅱ 第15回 新約聖書③：使徒の働きとその手紙Ⅰ 第16回 新約聖書③：使徒の働きとその手紙Ⅱ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回の小レポート・期末レポートを課している。その為にも、授業で学んだ事を通して日々の生活・社会の出来事を見つめることが求められる。</p> <p><テキスト> 新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会）</p> <p><参考文献> 講義の中でお伝えする</p> <p><評価方法> 平常点：40% チャペルレポート：20% 小レポート：20% 期末レポート：20%</p>		

キリスト教学 I		前期 2 単位	1年
人間を生かすものは目に見えるものなのか、目に見えないものなのかをキリスト教を通して深く考察し、生きることの意味を考える。		平岡 仁子（ひらおか ひろこ）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>○青山学院の建学の精神であるキリスト教について学ぶ。</p> <p>○聖書が語る神とは誰かを知り、そして自分を知る。</p> <p>○人間としてこの世に生きる意味、真の幸せとは何かを学び、生きる力を得る。</p>		
授業の概要	聖書を一緒に読みながら、聖書が私たちに今、呼びかける声を聴いて行く。授業は講義とディスカッションが中心となるが、DVD、その他を用い、また毎回ミニクイズで復習しながら、毎回のテーマについて一緒に考えて行く。		
授業計画	第1回	宗教とは。カルトに誘われないように注意。	
	第2回	集められた人々は何をしますか。	
	第3回	目に見えるものと目に見えないもの	
	第4回	聖書は誰について書かれていますか。	
	第5回	神が与えた十の戒め	
	第6回	キリスト道と茶道	
	第7回	心からの賛美	
	第8回	約束は守るもの	
	第9回	何を信じるのか—使徒信条	
	第10回	祈りのプレゼント—主の祈り	
	第11回	人を生かす愛	
	第12回	誰かのためにする奉仕	
	第13回	条件ではない恵みとは	
	第14回	本当の幸せを求めて	
	第15回	日本人のキリスト教	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、授業の中で指定する聖書の箇所を読んでくること。また毎回のミニテストによって、学んだことを確認する。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会）		
参考文献	『21世紀の礼拝』ゴードン W. レイスロップ著 平岡仁子訳 教文館 2014 『置かれた場所で咲きなさい』渡辺和子著 幻冬舎 2012 『ナウエンと読む福音書』ヘンリ・ナウエン著 小淵春夫訳 あめんどう 2008		
評価方法	積極的参加と感想文:20% 礼拝出席レポート:10% ミニテスト:30% 期末レポート:40%		

キリスト教学 I		前期 2 単位	1年
キリスト教の世界		増田 将平 (ますだ しょうへい)	
授業の到達目標 及びテーマ	聖書やその他の著作からキリスト教の本質を学び、聖書を手がかりにして生きる力を養うことを目指す。講義全体を通してキリスト教の概要を理解する。		
授業の概要	聖書を開いて読み進めながら学び、C. S. ルイス、バスケル等の著作を用いながらキリスト教における「愛」「罪」「信仰」とは何かを考察する。内容に応じて関連した音楽、映画、絵画、文学を紹介する。期末にはレポートを提出する。大学の礼拝とキリスト教会の礼拝に合計5回以上出席してレポートを提出する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	天地創造	
	第3回	エデンの園、楽園喪失	
	第4回	カインとアベル、洪水物語、バベルの塔	
	第5回	アブラハム	
	第6回	イサクとヤコブ	
	第7回	ヤコブとその家族	
	第8回	ヨセフ物語	
	第9回	出エジプト	
	第10回	イエスの生涯	
	第11回	愛について～今道友信の『三つの愛』から	
	第12回	『ナルニア物語 ライオンと魔女』の鑑賞	
	第13回	愛について～C. S. ルイスの『四つの愛』から	
	第14回	罪について	
	第15回	信仰について	
準備学習 (予習・復習等)	講義で配布されたプリントを見直し、取り上げた聖書の箇所を再読してその意味とポイントを確認する。その上で、自らがどのように考えるかを思索する。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会）		
参考文献	講義において適宜提示する。		
評価方法	積極的な授業態度:50% 期末レポート:30% 礼拝出席レポート:20%		

キリスト教学Ⅰ		前期 2 単位	1年
キリスト教の基礎		矢田 洋子（やだ ようこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	キリスト教の基礎を理解する。キリスト教は青山学院の教育の土台であるから、キリスト教を知ることが、青山学院での学びを自分のものとするために必要である。また、キリスト教は世界の歴史と文化の重要な軸の一つであるから、キリスト教の知識は世界の中で生きていく上で重要な糧となる。それに加えて、聖書を通して語られている人間像や世界観は、わたしたち一人ひとりが今を生き生きと生きていくために役立つ。であるから、キリスト教の基礎を表面上の知識として知るだけでなく、各々が自分の今とこれからのために深く考えるきっかけにしてくれることを期待する。		
授業の概要	キリスト教とは何なのか、キリスト教の世界観と人間観を、聖書に沿って紹介していく。プリントや映像を用いた講義中心。毎週聖書を開いて読みつつ授業を進めるので、聖書を持参のこと。授業の終わりには、感想や意見を求める時間をとる予定。授業開始時にアンケートもしくは小テストを行う。出席確認をかねるので遅刻しないように。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	クリスマスとイースター	
	第3回	聖書	
	第4回	教会	
	第5回	世界のはじまりと人間の創造	
	第6回	世界のおわり（完成）	
	第7回	神からの離反・人間の罪	
	第8回	神の約束ーノア、アブラハム、モーセ（十戒）	
	第9回	中間まとめ（小テストと授業内レポート）	
	第10回	イエス・キリストの業と教え	
	第11回	イエス・キリストの祈り、私たちの祈り	
	第12回	イエス・キリストの十字架と復活	
	第13回	神の愛ー無条件の愛、応答を求める愛	
	第14回	人間の命、生と死	
	第15回	まとめ（小テストと授業内レポート）	
準備学習 (予習・復習等)	チャペル出席と教会出席を求めます。その他は基本的には課さないが、復習としてその日に読んだ聖書をもう一度じっくり読んでみてほしい。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会）		
参考文献	授業で指示する。		
評価方法	平常点:40% 中間まとめ:20% まとめ:30% チャペル・教会出席:10%		

キリスト教学 I		前期 2 単位	1年
キリスト教概論－神の前に真実に生きる		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	青山学院の教育の基礎であるキリスト教信仰について学び、神の前に真実に生きる意味を考える。聖書、キリスト教会の歴史・文化、信仰を持って生きた人々の人生を知る事とおして、神・隣人・自己との出会いを経験し、学生生活と人生の土台を築き、生きる勇気を獲得する事を目標とする。		
授業の概要	講義が中心となるが、DVD・音楽観賞、礼拝出席など様々な角度、機会からキリスト教に出会うことを目指す。		
授業計画	第1回	人は何を信じて生きるのか	
	第2回	キリスト教会とは何か	
	第3回	教会の歩み	
	第4回	青山学院で学ぶ意味	
	第5回	旧約聖書－創造・世界	
	第6回	旧約聖書－歴史・神と人間	
	第7回	新約聖書－イエス・キリスト	
	第8回	新約聖書－使徒の働き	
	第9回	文学からみるキリスト教	
	第10回	音楽からみるキリスト教	
	第11回	映画からみるキリスト教	
	第12回	聖書における人間理解	
	第13回	聖書における悪の問題	
	第14回	良く生きることは良く死ぬこと	
	第15回	死と復活	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に「青山学院今週の聖句」聖書箇所を読んでくること		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会）吉岡康子『旧約聖書の人間模様』（日本キリスト教団出版局）		
参考文献	授業の中で指示		
評価方法	平常点:40% チャペルレポート:15% 小レポート:15% 期末レポート:30%		

キリスト教学ⅡA(キリスト教倫理総論)		前期 2 単位	2・3年
キリスト教学ⅡA(キリスト教倫理概論)		吉岡 康子(よしおか やすこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちはなぜこの学校で学んでいるのか、そもそもなぜ生きているのかを考えることからはじめ、私たちが生きるうえで向き合わざるを得ない諸問題について、キリスト教の立場から考察することをとおし、自分自身と他者と神と出会い、自由で真に豊かな人生に踏み出す力を得ることが目的		
授業の概要	キリスト教倫理の基礎を講義のみならず、ワークショップ・ディスカッション等を通して学びを深めます		
授業計画	第1回	なぜ生きているのか	
	第2回	なぜ学ばなくてはならないのか	
	第3回	いのちは誰のものか①-生きる意味	
	第4回	いのちは誰のものか②-自殺・他殺	
	第5回	家族をめぐる問題①-結婚	
	第6回	家族をめぐる問題②-親子	
	第7回	家族をめぐる問題③-孤立	
	第8回	何のために働くのか①-召命としての職業	
	第9回	何のために働くのか②-「人間力」をつけるとは	
	第10回	日本の課題①-ハンセン病者の戦い	
	第11回	日本の課題②-「3.11」とは何だったのか	
	第12回	日本の課題③-原発問題	
	第13回	死とは何か	
	第14回	死を見つめる心	
	第15回	死を超えるもの	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の「青山学院今週の聖句」聖書箇所を読んでくること		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会) 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』(日本キリスト教団出版局)		
参考文献	授業中に指示		
評価方法	授業への参加態度:50% 期末レポート:50%		

キリスト教学ⅡA (キリスト教死生学)		後期 2 単位	2・3年
キリスト教死生学		吉岡 康子 (よしおか やすこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「メメント・モリ」-汝の死を憶えよ-私たちの人生にとって確実かつ最大の課題は、家族をはじめとした親しい人々の「おくりびと」とならざるを得ないこと、そしていつか必ず自分自身の死と向き合わなくてはならないことです。キリスト教の立場から死の諸問題を考察し、死を見つめる心、姿勢を整えることが目標です。		
授業の概要	講義のみならず、ワークショップやディスカッション、ゲストスピーカーとの出会い等とおして学びを深めます。		
授業計画	第1回	良く生きることはよく死ぬこと	
	第2回	日本における死-死のタブー化	
	第3回	日本における死-「おくりびと」が語ること	
	第4回	旧約聖書における生と死-アブラハム・モーセ・ダビデ	
	第5回	旧約聖書における生と死-預言者たち	
	第6回	新約聖書における生と死-イエス・キリスト	
	第7回	新約聖書における生と死-使徒たちの死生観	
	第8回	文学における生と死	
	第9回	音楽における生と死	
	第10回	映画における生と死	
	第11回	「ハンセン病」における生と死	
	第12回	グリーフワーク	
	第13回	死んだらどこに行くのか	
	第14回	生前準備-私らしい葬儀とは	
	第15回	死は終わりではない	
準備学習 (予習・復習等)	映画「おくりびと」および青木新門著『納棺師日記』(文春文庫)を授業開始までに鑑賞・講読しておくこと		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会) 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』(日本キリスト教団出版局)		
参考文献	授業中に指示		
評価方法	授業への参加態度・授業感想文:50% 期末レポート:50%		

キリスト教学ⅡB（キリスト教と平和）		後期 2 単位	2・3年
キリスト教史における平和思想		豊川 慎（とよかわ しん）	
授業の到達目標 及びテーマ	イエスは「平和を実現する人々は幸いである」（マタイ5:9）と言われましたが、果たして「平和」とは何を意味するのでしょうか。いかにして平和の実現は可能となるのでしょうか。本講義では、旧約聖書の時代から17世紀までの西欧のキリスト教の歴史と思想を概観しつつ、多様なキリスト教平和思想を学び、キリスト教史における戦争と平和の諸問題についての理解を深めることを学修目標とします。		
授業の概要	旧約聖書の時代、新約聖書の時代、古代、中世、そして宗教改革から17世紀イングランドのピューリタニズムまでのキリスト教の歴史を扱い、そこにおけるキリスト教平和思想と戦争の問題をパワーポイントやDVDなどの映像を用いながら、講義を中心に授業を進めていきます。（他宗教との比較による平和思想や現代の平和学の諸問題に関心のある方は「宗教と平和」（金5限）を合わせて受講されたい）		
授業 計画	第1回	イントロダクション—平和の神学の課題	
	第2回	旧約聖書における戦争の問題	
	第3回	旧約聖書の平和思想	
	第4回	新約聖書と平和(1)－イエス	
	第5回	新約聖書と平和(2)－パウロ	
	第6回	古代キリスト教の平和思想(1)－初代教父たちの戦争と平和観	
	第7回	古代キリスト教の平和思想(2)－アウグスティヌスの戦争と平和観	
	第8回	中世キリスト教における戦争と平和－十字軍とトマス・アクィナスの戦争観	
	第9回	新大陸の発見と征服戦争－近世スコラ学者の戦争観	
	第10回	ルターの平和思想の諸相	
	第11回	エラスムスの『平和の訴え』における平和思想	
	第12回	イングランド宗教改革とピューリタニズムの宗教思想	
	第13回	ピューリタン革命とクロムウェル—国王を処刑することは聖書的に許されるのか？	
	第14回	17世紀の宗教戦争の時代から宗教的寛容へ	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	特にありません。授業毎に紹介する参考文献をもとに各自授業内容を復習することを望みます。		
テキスト	テキストは用いません。毎回、講義レジメを配布します。		
参考文献	関西学院大学キリスト教と文化研究センター（編）『キリスト教平和学辞典』（教文館、2009年）。その他の参考文献については授業毎に指示します。		
評価方法	リアクション・ペーパー:40% 期末レポート:60%		

キリスト教学ⅡC（キリスト教と現代）		後期 2 単位	2・3年
キリスト教と現代		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちが生きるうえで向き合わざるを得ない諸問題についてキリスト教の立場から考察することをとおし、自分自身と隣人と出会い、自由で真に豊かな人生を切り開く力を得ることが目的。		
授業の概要	講義のみならず、ワークショップやディスカッション、ゲストスピーカーとの出会い等とおして学びを深めます。		
授業計画	第1回	「3.11」サバイバーとして生きる	
	第2回	いのちは誰のものか①—生きる意味	
	第3回	いのちは誰のものか②—なぜ殺してはいけないのか	
	第4回	男と女	
	第5回	女と男	
	第6回	家族をめぐる問題①—親と子	
	第7回	家族をめぐる問題②—危機と再生	
	第8回	「9.11」の問いかけ	
	第9回	神と金	
	第10回	何のために働くのか①—召命としての職業	
	第11回	何のために働くのか②—「人間力」をつけるために	
	第12回	日本人の過ち①—ハンセン病者の戦い	
	第13回	日本人の過ち②—「原発問題」をめぐる	
	第14回	死と向き合う	
	第15回	死を超えるもの	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の新聞朝刊(社は問わない)の一面と社説を読んでくること		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会） 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』（日本キリスト教団出版局）		
参考文献	授業中に指示		
評価方法	授業への参加態度・授業感想文:50% 期末レポート:50%		

キリスト教学ⅡD（キリスト教と精神医学）		後期 2 単位	2・3年
キリスト教的理念に基づく人生		ジャンセン ウェイン（JANSEN, W. A.）	
授業の到達目標 及びテーマ	キリスト教信仰をもつ人々の魂的世界について知り、そうした人々のニーズに応じていくことを目指します。とりわけ子ども達との対応の仕方や教育の方法について、キリスト教教育は一般の教育とどのように異なるのかをともに考察していきます。		
授業の概要	おもにレクチャーやケース・スタディーを通して、キリスト教の接点を指摘し、信仰の働きを考える		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	神の存在	
	第3回	自らの存在	
	第4回	神義論	
	第5回	罪意識、罪悪感、鬱	
	第6回	自殺	
	第7回	中間評価	
	第8回	DV（家庭内暴力）	
	第9回	ひきこもり問題	
	第10回	人格障害	
	第11回	薬物乱用、依存症	
	第12回	精神修養	
	第13回	危機管理	
	第14回	まとめ	
	第15回	期末評価	
準備学習 (予習・復習等)	旧約聖書、創世記第1章から第4章までお読みください。		
テキスト	『聖書』、他に必要に応じて教室でプリントを配布する。		
参考文献	「エニアグラム—あなたを知る9つのタイプ」ドン・リチャード・リソ&ラス・ハドソン（角川書店、2001.）		
評価方法	小感想文:30% ディスカッション参加:30% レポートと発表:40%		

キリスト教美術		後期 2 単位	2・3年
キリスト教美術		野村 祐之 (のむら ゆうし)	
授業の到達目標及びテーマ	人類の歴史と文化に大きな役割を果たしてきたキリスト教美術（「世界遺産」の250以上はキリスト教関連）の本来的意義の把握。キリスト教美術は信仰の視覚的表現、即ち「見える化」でもありますが、それは作者なりの信仰告白でもあります。それを読み解くのに必要な基本的知識と原理の理解、獲得を目指します。		
授業の概要	日本で「美術」というと絵画がイメージされますが、本来、美術とは建築、絵画、彫刻を含む総体をさします。講座の前半ではキリスト教美術二千年の歴史を「礼拝空間」としての聖堂の意味と形からたどり、それに伴って信仰生活を支えてきた絵画、彫刻の意味と役割を理解します。後半ではケーススタディとしてバチカン・システィーナ礼拝堂のミケランジェロの作品、最近五百年目を迎えた『天井画』と『最後の審判』を細部にわたって取り上げ、そこに秘められた時代状況とミケランジェロの意図、信仰告白とを読み解き、彼の信仰理解に迫ります。		
授業計画	第1回	オリエンテーション（←この語自体、キリスト教美術用語！）。	
	第2回	キリスト教2000年の歴史の時間と空間を明確にイメージする。	
	第3回	キリスト教美術の歴史（1）その原点：「カタコンベ」と「家の教会」	
	第4回	キリスト教美術の歴史（2）今も使われ続ける「バシリカ」大聖堂。	
	第5回	キリスト教美術の歴史（3）ローマ帝国の東西分裂とキリスト教美術の二大潮流。	
	第6回	キリスト教美術の歴史（4）東方教会の伝統：ビザンティン。	
	第7回	キリスト教美術の歴史（5）西方教会：ロマネスク・ゴシック・ルネッサンス	
	第8回	キリスト教美術の歴史（6）近現代と青山学院の建築、礼拝堂の「かたち」。	
	第9回	システィーナ礼拝堂： その「かたち」と歴史的意義。	
	第10回	ミケランジェロと日本、そしてルネッサンス。	
	第11回	システィーナ礼拝堂『天井画』（1）天地創造、アダムとエバ	
	第12回	システィーナ礼拝堂『天井画』（2）ノアと大洪水、預言者ヨナ	
	第13回	システィーナ礼拝堂『最後の審判』（1）その全体像と審判者キリスト	
	第14回	システィーナ礼拝堂『最後の審判』（2）復活、そして天国と地獄	
	第15回	日本独自の謎：「マリア観音」「踏み絵」はキリスト教美術作品か？	
準備学習 (予習・復習等)	適宜指示します。		
テキスト	特定の指定教科書はありません。ほとんど毎回、資料プリントを配布します。		
参考文献	多岐にわたるので授業時、テーマとの関連、必要に応じて書籍、資料、情報等を提示、あるいはプリントで配布します。		
評価方法	毎回提出の「レポート」(応答)シート:60% 聖堂訪問レポート:20% キリスト教美術作品研究レポート:20%		

キリスト教学ⅡF（キリスト教音楽A）		後期 2 単位	2・3年
「ことばの世界」の他に「音のせかい」がある。キリスト教はどちらの世界とも密接に関わる。		菊地 純子（きくち じゅんこ）	
授業の到達目標及びテーマ	キリスト教と「音の世界」の関係に光をあてる。日本では音楽を邦楽と洋楽に分けるが、洋楽のルーツはキリスト教の礼拝であると言って良い。そのことを古代オリエント時代から現代まで西洋音楽の歴史を追って理解する。他の学生の発表や講義を聞きながら学んでいくと、新しい「音の世界」の理解が起こり、同時に「キリスト教世界」を新たに発見することができる。		
授業の概要	古代オリエント時代すなわち聖書の音楽シーンの調査からはじまり、ヨーロッパ中世の西方キリスト教会の音楽、ルネッサンスやバロック時代の音楽とキリスト教、近代、所謂クラシック音楽とキリスト教そして現代の音楽とキリスト教の関わりについて、参加者の発表と講義とで学んでいく。楽器やCD、DVDなどで実際に音を聞きながら学ぶ。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	キリスト教と音楽概論	
	第3回	学生担当：グループ1：古代オリエント時代の音楽	
	第4回	講義：古代オリエント時代の音楽	
	第5回	学生担当：グループ2：中世西方キリスト教会の音楽	
	第6回	講義：中世西方キリスト教会の音楽	
	第7回	学生担当：グループ3：ルネッサンスの音楽とキリスト教	
	第8回	講義：ルネッサンス時代の音楽とキリスト教	
	第9回	学生担当：グループ4：バロック時代の音楽とキリスト教	
	第10回	講義：バロック時代の音楽とキリスト教	
	第11回	学生担当：グループ5：近代の音楽とキリスト教	
	第12回	講義：近代の音楽とキリスト教	
	第13回	学生担当：グループ6：現代の音楽とキリスト教	
	第14回	講義：現代の音楽とキリスト教	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前は配布されたプリントを読んでくる。自分の選択した中間発表のテーマについて調査し、発表時に使用するPPTを作成する。中間発表は個人で行ってもよいし、グループで行ってもよいので、準備は個人で行ったり、相談しながら行う。授業後にはレポートを提出する。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	オリエンテーション時にテーマごとに示し、また講義で補足する。		
評価方法	全テーマごとの感想文:20% 自分の選択テーマ発表:20% 発表時のメディア工夫:20% 礼拝音楽体験学習:20% 期末レポート:20%		

キリスト教学ⅡG（キリスト教教育）		後期 2 単位	2・3年
キリスト教から見た教育の本質、基礎、目的を探る。		古谷 正仁（ふるや まさよし）	
授業の到達目標 及びテーマ	教育とは元来、社会的な要請に基づいて営まれるが、キリスト教教育は、それとは別にキリスト教的人間観の形成を目指してなされるものである。この授業においては、学生が①キリスト教教育とは何か。②その目指すもの何か。③その実践に対して大きな責任を担う教師は、どのような役割を果たすべきかの3つの観点から学び、担い手としての基礎力を養う。		
授業の概要	この科目において学生は、①キリスト教教育とは何か。②その目指すもの何か。③その教育において教師が果たすべき課題は何か学ぶことが求められる。そこで、現代日本において問われている「教育の問題」に焦点を当てつつ、キリスト教教育理論を学び、それを通して、この問題の解決への糸口を共に考えたい。		
授業計画	第1回	リエンション。教育における共同性の回復について。	
	第2回	知識の暴力。知識の起源と行き着く先。	
	第3回	祈りのある教育。知識と学習者の人格的關係。	
	第4回	修道院教育の目指したもの。知る者と知られるものの本質。	
	第5回	教育の客観主義の問題性。隠されているカリキュラム。	
	第6回	今日の教育の原点。観察することと関係すること。	
	第7回	真理の共同性。真理の相互性。	
	第8回	真理を人格的に学ぶと言うこと。真理と倫理。	
	第9回	教育の場の開放性、境界性、受容性。	
	第10回	教室を実践練習の場とすること。コンセンサスによって学ぶ。	
	第11回	題材が発する声。題材と教師。	
	第12回	求められる教師像（1）謙遜と信念。	
	第13回	求められる教師像（2）畏敬の念を持つ。	
	第14回	求められる教師像（3）学ぶ教師。	
	第15回	求められる教師像（4）見守る教師。	
準備学習 (予習・復習等)	第一回の授業で、「自分が経験してきた学校教育や出会った教師達から何を学んできたか」について小レポートを提出して戴きます。考えをまとめてきて下さい。		
テキスト	P. J. パーマー(小見のぞみ、原 真和訳)『教育のスピリチュアリティー』日本キリスト教団出版局(2200円+税)		
参考文献	未定。		
評価方法	小レポート(作文) :60% 試験:40%		

キリスト教学ⅡH（聖書の女性）		後期 2 単位	2・3年
聖書は人間・女性とは誰かを私達に語る。異なる人生の価値観を示す聖書を通して、日本人の世界観が語る女性と聖書が語る女性を対話させつつ深く考察し、女性であることの意味を考える。		平岡 仁子（ひらおか ひろこ）	
授業の到達目標及びテーマ	○聖書が語る世界観とは何か。それがこの時代を生きる私達・女性とどのような関係があるのか。「女性」という言葉が持つ意味を聖書から理解する。 ○日本人が描く世界観と現代社会の関係をを通して、日本人女性として生きる意味を深く考えることができるようになる。		
授業の概要	聖書の様々なテキストが語る女性を日本の脈絡の中で再考し、女性である自分自身をより明らかにする。自分の知らない自分を聖書の御言葉という光の中で見つける。授業は講義と発表によって進められ、積極的な参加によって、主体的かつ実存的に理解してゆく。		
授業計画	第1回	女から見た人間とは	創世記 2章1節～25節 雅歌 8章6節～7節
	第2回	調和を壊す女	出エジプト記 1章1節～2章10節 マルコ福音書 7章24節～30節
	第3回	世界観の逆転	エレミヤ書 31章15節～22節 マルコ福音書 10章35節～52節
	第4回	「女」の意味	エレミヤ書 31章1節～25節 マタイ福音書 13章31節～35節
	第5回	土俵に上がれぬ女	レビ記 12章1節～8節 マルコ福音書 5章21節～43節
	第6回	かわいいと美しいの違い	エステル記 1章～4章 箴言 6章20節～35節
	第7回	男と女の出会い	ヨハネ福音書 4章1節～42節
	第8回	結婚のその後	ヨブ記 2章1節～10節 マタイ福音書 19章1節～12節
	第9回	不倫の行方	サムエル記下 11章1節～26節 ヨハネ福音書 8章1節～11節
	第10回	不妊が意味すること	サムエル記上 1章1節～20節 ルカ福音書 1章5節～25節
	第11回	女性の社会的役割	創世記 3章1節～24節 ルカ福音書 10章38節～42節
	第12回	聖母マリアとは誰か	マタイ福音書 1章18節～25節 ルカ福音書 1章26節～56節
	第13回	女性が描く世界観	イザヤ書 42章14節～16節 雅歌 1章と8章
	第14回	21世紀の女性たち	ヨハネ福音書 20章1節～18節 マルコ福音書 16章1節～19節
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各回に指定される聖書の箇所を読んでくること。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会）		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	授業感想文:20% 発表:30% 期末レポート:40% 礼拝出席レポート:10%		

キリスト教学Ⅱ I (キリスト教と文化)		後期 2 単位	2・3年
キリスト教の歴史を文化史との関連で概説する		深井 智朗 (ふかい ともあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) キリスト教の歴史性を理解する 2) キリスト教の歴史を文化や政治との関連で理解する 3) キリスト教の影響史を考える		
授業の概要	宗教というと、心の問題、あるいは形而上学など超越的な問題を考えてしまうことが多いが、宗教的なテキストには必ず、それを生み出した社会的なコンテキストがあり、逆にその社会的なコンテキストの形成には多くの場合宗教的なテキストが大きな影響を与えている。このコースではこの両者の相関関係に注目しながら、キリスト教の歴史を概観する。		
授業計画	第1回	講義の概要と説明	
	第2回	キリスト教の生みの母としてのユダヤ教	
	第3回	キリスト教の成立	
	第4回	エウセビオソスの政治神学	
	第5回	中世モデルのキリスト教	
	第6回	ヨーロッパの古層とキリスト教の祝祭日	
	第7回	ルターのいわゆる「宗教改革」とその終わり方	
	第8回	カルヴィニズム	
	第9回	ピューリタニズムと17世紀のイングランドの政治	
	第10回	フランス革命とキリスト教	
	第11回	ヴィルヘルム期のドイツの政治神学	
	第12回	アングロ・アメリカとキリスト教	
	第13回	ラテン・アメリカとキリスト教	
	第14回	日本とキリスト教	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	講義で紹介した参考文献をできるだけ丁寧に読んでいただきたい。		
テキスト	深井智朗『神学の起源』新教出版社		
参考文献	最初のクラスで詳細な文献表を配布する。		
評価方法	授業のコメントシート:30% 読書レポート:30% 試験:40%		

キリスト教学Ⅱ J (世界のキリスト教)		後期 2 単位	2・3年
世界のキリスト教		荒瀬 牧彦 (あらせ まきひこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	○世界各地に広がったキリスト教が、それぞれの土地の環境や文化の中で発展・変質を遂げた様を観察する。○礼拝の行為や賛美歌、また主な祝祭を通して信仰を理解する。○現代社会において命の尊厳を脅かす諸問題に対して、キリスト教がどう教え、どう行動してきたか(してこなかったか)を検討し、それを媒介として自分の考えを形成する。		
授業の概要	教派や地域によって異なる礼拝慣習や音楽については、視聴覚素材を積極的に活用する。礼拝レポートは、礼拝からできる限り多くのものを汲み取って、それを実際の人生・生活に活かせるようにすることを目的とする。現代社会の諸課題については、各自の見解を何らかの形で発表する機会を設ける。		
授業計画	第1回	イントロダクション キリスト教の多様な表情	
	第2回	正教(東方教会)の信仰	
	第3回	ローマ・カトリックの信仰	
	第4回	プロテスタントによる改革(マルチン・ルターを中心に)	
	第5回	キリスト教の祝祭(ケルトのキリスト教化とハロウィン)	
	第6回	キリスト教の祝祭(クリスマスの歴史)	
	第7回	キリスト教の祝祭(イースター・ペンテコステ)	
	第8回	アメリカ大陸に渡ったキリスト教1(植民地支配と宣教)	
	第9回	アメリカ大陸に渡ったキリスト教2(大統領と信仰)	
	第10回	M.L.キングの信仰と実践	
	第11回	マザー・テレサの信仰と実践	
	第12回	命の尊厳の危機とキリスト教(1) 自死を考える	
	第13回	命の尊厳の危機とキリスト教(2) 安楽死、出生前診断	
	第14回	命の尊厳の危機とキリスト教(3) 沖縄の基地問題	
	第15回	この世界とキリスト教 (全体のまとめ)	
準備学習 (予習・復習等)	自己の宗教意識の省察、社会における信仰の働き、時事問題への関心を、日常的に養っておいてほしい。		
テキスト	『聖書』 毎回必ず持参すること		
参考文献	教室で随時紹介する。		
評価方法	レスポンス・ペーパー:50% 礼拝レポート:50%		

キリスト教学ⅡK (キリスト教と文学)		後期 2 単位	2・3年
キリスト教と文学		樋渡 さゆり (ひわたし さゆり)	
授業の到達目標 及びテーマ	文学を通して、私たちの生活の根底にキリスト教思想があることを理解する。英文学にあらわれる風景・自然・言語をテーマとし、神話の世界と自然科学、絵画、造園、音楽などの多様な分野やエコロジーの思想、環境保全活動が有機的につながり、展開していることを理解する。現代社会にあって私たちはどう生きるのか、ともに考えられるようになる。		
授業の概要	英文学にあらわれる風景・自然・言語をテーマとする。聖書をふくめた日本語・英語のテキスト読解、絵画や写真、DVD、CD などの視聴覚資料による理解、ポエトリー・リーディングなどの演習を交えた講義である。毎回、講義内容に関する小課題を提出し、主体的にテーマを掘り下げられるようにする。毎月一回、短大礼拝のチャペルレポートを提出。短大クリスマス礼拝に参加予定。		
授業計画	第1回	文学とは？	
	第2回	秩序ある世界：音楽、詩、庭	
	第3回	神のみ言葉と自然科学：虹と洪水	
	第4回	生と死、おとなと子ども	
	第5回	言語の多様性：バベルの塔	
	第6回	人と自然	
	第7回	楽園のイメージ	
	第8回	庭と風景の創造	
	第9回	内なる楽園から環境保全活動へ	
	第10回	み言葉と音楽：聖書と讃美歌	
	第11回	み言葉と音楽：クリスマス・キャロル	
	第12回	イギリスのクリスマス	
	第13回	荒地と楽園：現代の荒地	
	第14回	荒地と楽園：現代の楽園回復	
	第15回	まとめ：現代社会にあって私たちはどう生きるのか？	
準備学習 (予習・復習等)	予習はプリントと聖書をもとに指示する。授業出席後は、毎回、シラバスに示されたテーマについて復習のこと。		
テキスト	青山学院指定の新共同訳聖書・中型ハンディバイブルを毎回持参のこと。 プリントを配布する。		
参考文献	山形孝夫『図説聖書物語 旧約篇・新約篇』河出書房新社。小池滋・青木康編『イギリス史重要人物101』新書館。 ほか		
評価方法	平常点:50% 期末試験:50%		

キリスト教学ⅡL（聖書の間論・新約）		後期 2 単位	2・3年
イエスの教えた「主の祈り」を通し、愛すること、生きること、性役割について考え、発信してみよう。		塩谷 直也（しおたに なおや）	
授業の到達目標 及びテーマ	「女らしさ」を期待され、「良い子」であることを求められ、いつも人前で演じていた私でした。しかし、そんな演技は神の前では不要。祈りとは、神の前で演技をやめる行為。「主の祈り」を学びながら、（周囲の期待にこたえる）女らしい自分になるのではなく（神の前に立つ）本来の自分になっていく「きっかけ」をつかみましよう。		
授業の概要	数々の聖書物語を取り上げ、それが私たちの課題とどうリンクするか問いつつ、そこで得たものを最終エッセイ（期末テスト）に反映していきます。なお聖書の不携帯は減点します。ほとんど毎回小テストを行います。全員にプレゼンテーションも課せられます。遅刻厳禁。常に予習、復習が必要なクラスです。以上を覚悟して履修登録をしてください。		
授業計画	第1回	イントロダクション～祈りとは何か	
	第2回	イエスと祈り	
	第3回	「主の祈り」概説	
	第4回	天の父～男と女、性って何だろう？	
	第5回	み名をあげさせたまえ～名前の大切さ	
	第6回	み国をきたらせたまえ～天国ってどんなところ？	
	第7回	プレゼンテーション①	
	第8回	みこころの天になるごとく～私たちの願いと神の願い	
	第9回	日用の糧を与えたまえ～先のことまで心配しない	
	第10回	我らに罪をおかす者を～許すということ	
	第11回	我らの罪をもゆるしたまえ～デートDVを理解しよう	
	第12回	我らを試みにあわせず～悪魔との付き合い方	
	第13回	国と力と栄とは～いつまでも続くもの	
	第14回	プレゼンテーション②	
	第15回	まとめ、質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	ほぼ毎回行われる小テストの準備が必要です。点数が基準に満たない受講生には、再テストも行われます。		
テキスト	「新共同訳聖書」（日本聖書協会） 「信仰生活の手引き 聖書」（塩谷直也著 日本キリスト教団出版局）購買で購入して出席のこと		
参考文献	特になし		
評価方法	授業・議論への参加:20% 小テスト:40% 試験:40%		

キリスト教学ⅡM（聖書の間論・旧約）		後期 2 単位	2・3年
私たちが日々考えることについて聖書は何を語るだろうか。		菊地 純子（きくち じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	聖書の3/2にあたる旧約聖書は、現在からはかけ離れた古い本ではなく、守るべき規則を羅列しているのでもなく、道徳をひたすら説いてもいない。神について語りながら、人とはなんなのかを書いている。このような本が、私たちが出会うさまざまな問題について熱く語りかけている内容に出会いながら、私たちの人間論をそれぞれ作っていく。		
授業の概要	参加する学生自身のそれぞれの問題意識に添って進める。旧約聖書は古代オリエント世界の中で書かれたが、当時の常識（現在の常識とどこが違う？）に比べて独特なところがある。それは新約聖書に受け継がれて行き、キリスト教会の人間論になった、旧約聖書の語る内容をそれぞれが理解に努める。学生の発表と講師の講義を交互にし、対話の中で学ぶ。		
授業 計画	第1回	授業のオリエンテーション	
	第2回	旧約聖書の概観についての講義	
	第3回	学生の間発表：グループ1：テーマ『人のいのち』	
	第4回	講義：テーマ『人のいのち』	
	第5回	学生の間発表：グループ2：テーマ『差別の問題』	
	第6回	講義：テーマ『人々の間にある違いと差別の問題』	
	第7回	学生の間発表：グループ3：テーマ『どう繋がるのか』	
	第8回	講義：テーマ『私たちは人とどのように繋がるのか』	
	第9回	学生の間発表：グループ4：テーマ『苦難や災害』	
	第10回	講義：テーマ『苦難や災害はどう考えるのか』	
	第11回	学生の間発表：グループ5：テーマ『生きるとは』	
	第12回	講義：テーマ『生きるとはどういうことなのか』	
	第13回	学生の間発表：グループ6：テーマ『仕事をするととは』	
	第14回	講義：テーマ『仕事をするとということ』	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前はテキストの指定箇所を読んでくる。自分の選択した中間発表テーマについて調査し、それを発表時に使用するPPTを作成する。発表は個人で行ってもよし、グループで行ってもよいので準備もそれに応じる。授業後にはレポートを提出する。		
テキスト	菊地純子『神は生きておられる』日本キリスト教会大会教育委員会		
参考文献	各テーマで紹介する。		
評価方法	全主題の個々の感想文:20% 自分のテーマの発表:20% 中間発表時のメディア:20% 期末レポート:20% 礼拝体験学習:20%		

キリスト教学ⅡN（比較宗教論）		後期 2 単位	2・3年
キリスト教と世界の諸宗教		豊川 慎（とよかわ しん）	
授業の到達目標 及びテーマ	21世紀のグローバルな社会において、自分とは異なる価値観や世界観、また信仰や宗教をもった他者との共生には他者理解や他宗教理解が不可欠です。本講義では、ユダヤ教、イスラム教、仏教など世界の諸宗教との比較を通じてキリスト教との共通点や相違点を明らかにすることにより、キリスト教の特質や独自性を深く理解し、また日本の諸宗教との比較を通じて、日本のキリスト教の歴史と思想を理解することを学修目標とします。		
授業の概要	パワーポイントやDVD映像を用いながら、講義前半は比較宗教学の観点から様々な宗教現象や制度、儀式などを講義し、講義後半では日本のキリスト教と諸宗教（仏教、神道、儒教など）を講義していきます。		
授業計画	第1回	イントロダクションー比較宗教学から考えるキリスト教	
	第2回	キリスト教世界観と神観	
	第3回	経典と教理	
	第4回	宗教的象徴	
	第5回	祈り	
	第6回	宗教儀礼と祭儀	
	第7回	修行と戒律	
	第8回	死生観	
	第9回	ジェンダー、性、結婚	
	第10回	聖と俗	
	第11回	日本のキリスト教と諸宗教(1)ーキリスト教の伝来と日本の仏教	
	第12回	日本のキリスト教と諸宗教(2)ー幕藩体制社会とキリシタン禁制	
	第13回	日本のキリスト教と諸宗教(3)ープロテスタント教会と明治政府の神道国教化政策	
	第14回	日本のキリスト教と諸宗教(4)ー戦時下の天皇制国家と信教の自由の問題	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業毎に紹介する参考文献や配布資料をもとに各自授業内容を復習してください。		
テキスト	テキストは用いません。講義レジメを毎回配布します。		
参考文献	参考文献は授業時に指示します。		
評価方法	リアクションペーパー:40% 期末レポート:60%		

キリスト教学ⅡP（キリスト教音楽B）		後期 2 単位	2・3年
キリスト教と賛美歌		飯 靖子（いい せいこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽の歴史は賛美の歴史、ともいわれます。2000年のキリスト教の歴史の中で賛美がどのように歌われ、どのような賛美歌が歌われてきたでしょうか？良く知っている旋律が実は賛美歌だったり、有名な旋律が讃美歌として歌詞が付けられ歌われていたり、讃美歌は思いがけず私たちの身近にあるものです。聖書と、礼拝とのかかわりを考えながら2000年の歴史の中で歌い続けられた賛美歌について様々な面から触れ、キリスト教と音楽のかかわりを学びます。		
授業の概要	まず、それぞれの家庭ではどんな宗教（風習）を守っているのでしょうか？日本ではどんな宗教が生活の中に根付いているのでしょうか？そんなことを考えながら、日本の中でのキリスト教、がどのような姿なのか、よく耳にする旋律が実は深い背景を持った賛美歌であったりすることなどを映像や音楽を聴きながら学びます。私たちの生活の中に知らないうちに入り込んでいるキリスト教や賛美歌に気付いてみることから始めます。また、青山学院がどのように成り立ち、今、どんな学校なのか、構内探検ツアーもします。沢山の音楽家たちが聖書を基にして作った名曲に触れてみます。		
授業計画	第1回	オリエンテーション キリスト教の常識	
	第2回	日本の宗教、日本におけるキリスト教	
	第3回	旧約聖書の世界と音楽「天地創造」Ⅰ	
	第4回	旧約聖書の世界と音楽「天地創造」Ⅱ	
	第5回	キリストの生涯と音楽 キリストの誕生「マリア」Ⅰ	
	第6回	キリストの生涯と音楽 キリストの誕生「マリア」Ⅱ マリアの賛歌 マニフィカート	
	第7回	キリストの生涯と音楽 キリストの十字架による死Ⅰ キリストの生涯と音楽 キリストの十字架による死Ⅰ	
	第8回	キリストの生涯と音楽 キリストの十字架による死Ⅱ 受難曲	
	第9回	キリスト教の結婚式	
	第10回	青山学院の成り立ち 日本のキリスト教宣教の歴史と青山学院140年の歩み	
	第11回	青山学院探検 キャンパス内の礼拝堂を訪ね、オルガンの音を聴く	
	第12回	ゴスペルソング、新しい賛美歌を知る「天使にラブソング」Ⅰ	
	第13回	ゴスペルソング、新しい賛美歌を知る「天使にラブソング」Ⅱ	
	第14回	賛美の楽器「パイプオルガン」Ⅰ東京カデラル聖マリア大聖堂のオルガンの制作を通して	
	第15回	賛美の楽器「パイプオルガン」Ⅱ礼拝の楽器を考える	
準備学習 (予習・復習等)	とくになし		
テキスト	聖書		
参考文献	「こどもさんびか改訂版」「賛美歌21」		
評価方法	礼拝レポート:20% レポートⅠ:20% レポートⅡ:20% レポートⅢ:40%		

キリスト教学実践A	後期集中 1 単位	1・2・3年
ハンセン病者と地域社会	吉岡 康子（よしおか やすこ）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> キリスト教学実践は、「青山学院教育基本方針」に明らかにされている、キリスト教信仰に基づく本学の建学の精神を実践的・体験的に学ぶことを目的とする。キリスト教学実践Aは、東京と群馬のハンセン病回復者の方々との出会いと交流により、「生きた証し」を聞くことと、地域社会との関わりを学ぶことをとおして、継承すべき課題を確認することがテーマとなる。</p> <p><授業の概要> 国立療養所多摩全生園、国立ハンセン病資料館における研修と交流 草津「旧湯の沢地区」、栗生楽泉園、重監房資料館における研修と交流 実施は2015年9月予定</p> <p><授業計画> 事前学習 3回 国立療養所多摩全生園および国立ハンセン病資料館での研修と交流 1日 草津「旧湯の沢地区」研修 1日 国立療養所栗生楽泉園および国立重監房資料館での研修と交流 2日</p> <p><準備学習> 日本におけるハンセン病の歴史と現況に関して学習してくること。 事後には詳細な報告書およびレポートを提出すること。</p> <p><注意事項> ①履修登録は教務課にて行うが、説明会等問い合わせは宗教活動センターが行う。 ②履修登録の時期は5月下旬になる予定。 ③履修登録人数は、最大7人に限定される。 ④卒業年次に当科目を履修登録する場合は、この科目以外で卒業単位を満たす前提で登録する事。 ⑤その他、①②③の詳細は履修指導時に説明する。</p> <p><テキスト> 事前学習にて指示</p> <p><参考文献> 事前学習にて指示</p> <p><評価方法> 実習への参加度合（事前・省察・報告書作成）40% レポート 60%</p>		

キリスト教学実践B	春休集中 2 単位	1・2・3年
台湾の教会と社会から学ぶ	吉岡 康子（よしおか やすこ）	
<p><授業の到達目標およびテーマ> キリスト教実践は「青山学院教育基本方針」に明らかにされている、キリスト教信仰に基づく本学の建学の精神を実践的・体験的に学ぶことを目的とする。キリスト教実践Bは、台湾の教会と社会の課題—共生・大震災からの復興・教会の社会的使命などを学ぶことをとおして、日本における私たちの使命を確認することがテーマとなる。</p> <p><授業の概要> 台湾・玉山神学校研修、「原住民」教会礼拝出席・交流、台湾学生センターでの交流他 実施は2016年2月予定</p> <p><授業計画> 事前学習 6回 5泊6日の台湾研修 省察</p> <p><準備学習> 台湾の歴史と現況に関して学習してくること。 事後には詳細な報告書およびレポートを提出すること。</p> <p><テキスト> 事前学習にて指示</p> <p><参考文献> 事前学習にて指示</p> <p><注意事項> ①履修登録は教務課で行うが、説明会等問い合わせは宗教活動センターが行う。 ②履修登録の時期は10月中旬になる予定。 ③履修登録人数は、最大7人に限定される。 ④卒業年次に当科目を履修登録する場合はこの科目以外で卒業単位を満たす前提で登録する事 ⑤その他、①②③の詳細は履修指導時に説明する。</p> <p><評価方法> 実習への参加度合(事前・省察・報告書作成)40% レポート60%</p>		

共通英語	1 単位	1年
テーマ別に英語を学ぶ		
<p>【担当教員】 井伊 順彦（いい のぶひこ）、上原 美知子（うえはら みちこ）、江崎 聡子（えざき さとこ）、木村 さなえ（きむら さなえ）、黒岩 裕（くろいわ ゆたか）、菅野 昌彦（すがの まさひこ）、杉田 弘也（すぎた ひろや）、鈴木 千加子（すずき ちかこ）、藤村 待子（ふじむら まちこ）、海琳 泰子（みたま やすこ）、矢部 寿美子（やべ すみこ）、吉田 裕子・リナ（よしだ ひろこ りな）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 自分の選んだテーマに沿って楽しみながら英語を学び、4技能、文法、語彙について大学初級レベルの能力を身につけることが「共通英語」の目標です。</p> <p><授業の概要> 学生は前期・後期それぞれに、以下の共通英語A～Gの中からどれか一つを選択・履修します。ただし、再履修の場合を除き、前期と後期に同じアルファベットの共通英語科目を選択・履修することはできません。また共通英語Gは前期のみの開講となります。</p> <p>共通英語A (Reading) 正確で深い英文読解能力を養成する。 共通英語B (Media English) 英字新聞や英語ニュースを教材として、深く世界を理解する。 共通英語C (Oral Communication) 現代社会で必要とされる基本的な英会話能力を習得する。 共通英語D (TOEIC) TOEIC Test の受験準備を行う。 共通英語E (Children's Storybooks) 英語の児童書・絵本を題材にして、英語の4技能を習得する。 共通英語F (English Movies) 英語の映画を使って、リスニング能力を養い、会話表現や英語圏文化について学ぶ。 共通英語G (Basic English Grammar) 英文法の基本を学びなおす。</p>		

共通英語 A		後期 1 単位	1年
現代社会における女性の生き方		井伊 順彦 (いい のぶひこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代の先進国社会が抱える諸問題に関する歯ごたえのある(内容・文法ともに)英文を読み、若い女性としてどう対処してゆくべきかを考える。到達目標は、英語読解力の強化を図りながら、先進諸国独特の問題点を具体的に把握し、その改善に向けての対策を自ら思案し、なんらかのかたちで発表できるようにすること。		
授業の概要	毎回、前もって指名された複数の受講者が自分の担当箇所を読んで訳す。次いで、同一箇所を読むネイティブスピーカーの発音を音声機器で確認してから、担当者に対して教員から質問や解説がなされる。担当者には必要な資料収集や説明、自分なりの所見も求められよう。 教員の側も関係資料の配布や視聴覚教材の活用等、いろいろ工夫を凝らす。		
授業計画	第1回	授業の内容紹介および受講に際しての注意事項の確認	
	第2回	ジェンダーについての基本知識の学習	
	第3回	多様なパートナーシップの考察(1) 北欧の現状(日本の現状も考えつつ)	
	第4回	多様なパートナーシップの考察(2) 米国の現状(a)	
	第5回	多様なパートナーシップの考察(3) 米国の現状(b)	
	第6回	多様なパートナーシップの考察(4) 英独仏の現状	
	第7回	女性の労働、夫婦間での家事分担(1) 日本の現状	
	第8回	女性の労働、夫婦間での家事分担(2) 米国の現状	
	第9回	女性の労働、夫婦間での家事分担(3) 英独仏の現状	
	第10回	女性の労働、夫婦間での家事分担(4) 北欧の現状	
	第11回	女性にとっての美の認識(1) 日本の現状	
	第12回	女性にとっての美の認識(2) 米国の現状(a)	
	第13回	女性にとっての美の認識(3) 米国の現状(b)	
	第14回	女性にとっての美の認識(4) 欧州諸国の現状	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	特別なことは求めない。予習については、各自が次回の授業で予定される箇所を読み、内容について考えたうえで授業に臨むという地道な作業を続けられよう。また、毎回の授業で学習した文法事項を自宅でも学び直し、配布される参考資料に目を通してれば、それで立派な復習になる。		
テキスト	こちらから印刷物を配布する。		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	平常点:20% 試験:25% レポート:20% 授業感想文:20% 授業に対する貢献度:15%		

共通英語 A (再履修者用)		前期 1 単位	2・3年
Reading		マウラー 裕子 (まうらー ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>平易なreading materialを使用し、英語を読むことに慣れる。 たくさんの文章を読むことにより、英語を読むことに自信をつける。 英語表現、語彙、文法を学び、英語の基礎の復習をする。 暗唱をして、皆の前で発表することにより、英語力、プレゼン力、自信をつける。 クラスメートの評価をrubricを使って行い、より深い理解と学習を促進する。</p>		
授業の概要	<p>クラスの始めにはice breakingのアクティビティを毎回行い、英語で話す機会を作る。ジグソーリーディングなどをして、楽しみながら読む力をつける。 教師がpre-readingをし、それを聞いてlistening力を高める。 次に学生自身が読み、その後、語彙、内容についてのdiscussionをし、その後、要約を書く。 ペアワークで文章を繰り返し音読練習し、最終的には暗唱する。 2回のプレゼンテーションを行う。クラスメートのプレゼンの評価も行うことにより、より深い学習をする。</p>		
授業計画	第1回	Self introduction, class orientation Unit 1: Give me the Money!	
	第2回	Think-Pair-Square (自己紹介アクティビティ) Unit 2: License, Please	
	第3回	TPR (Total Physical Response) activity Unit 3: Mr. Venezuela	
	第4回	English Children' s songs with gestures Unit 5: Grandfather Hada' s Favorite Soup	
	第5回	インタビューのアクティビティ Unit 6: Handsome Again?	
	第6回	Doubt (嘘を当てるゲーム) Unit 7: A Super Soaker and a Super Kid	
	第7回	Let' s find common things (グループの中の共通点を見つけるゲーム) Unit 8: The Flying Lesson	
	第8回	1st presentation	
	第9回	記憶ゲーム Unit 9: Hawaiian Vacation	
	第10回	Jigsaw reading Unit 12: The Bottle	
	第11回	Who am I? (speaking game) Unit 13: Hold On, Joe	
	第12回	Draw a picture (listening and speaking game) Unit 14: Whose Money Is It?	
	第13回	Create a story (絵の順番を考えて、ストーリーを作ろう) Unit 15: The Silver Porsche	
	第14回	Small debate (簡単なトピックについて、論理的に相手を言い負かしてみよう) Unit 16: An Easy Job	
	第15回	2nd presentation	
準備学習 (予習・復習等)	<p>宿題と復習を必ずしてくること。 宿題を必ずしてくる。(YouTubeなどを見てくる、読んで/見て、要約してくる、などその都度指示を与える。)</p>		
テキスト	All New Easy True Stories. Sandra Heyer. Pearson Longman. ISBN: 0-13-118265-X		
参考文献	特になし。		
評価方法	1st Presentation:30% 2nd Presentation:30% 宿題:20% 授業への貢献度:20%		

共通英語 A		前期 1 単位	1年
Bloomberg Businessweek で世界を読み解く。		海琳 泰子 (みたま やすこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	米国の経済週刊誌 <i>Bloomberg Businessweek</i> の記事を編集したテキストを読む。米国、欧州、日本を含むアジアの政治、経済、社会、産業と広い分野の記事で現代の様々な問題を理解する。英語で書かれた新聞、雑誌の記事から世界的情勢について正確に情報を得ることができるようになる。		
授業の概要	テキストの段落毎に番号をつけ、まず文の構造、文法をくわしく説明する。次に内容をていねいに解説する。予習で作成した段落毎の要約を修正し、授業中に新たな要約を作成する。内容をしっかり理解したうえで、音読する。音声と内容把握を分離しないこと。内容設問に答えるときは起立し大きな声で発表する。		
授業計画	第1回	A Mom-to-Be in the Corner Office 講読	
	第2回	女性の職場での立場について 内容設問	
	第3回	In Defence of Affirmative Action 講読	
	第4回	アメリカ、ヨーロッパ各国、日本での差別について 内容設問	
	第5回	Keeping the Internet Safe from Rogue Regimes 講読	
	第6回	インターネットの危険性について 内容設問	
	第7回	Fighting Hacks with National Security Standards 講読	
	第8回	サイバー攻撃について 内容設問	
	第9回	Raise the Minimum Wage 講読	
	第10回	米国、日本の最低賃金について 内容設問	
	第11回	America's Real Immigration Crisis 講読	
	第12回	米国の経済政策と移民問題について 内容設問	
	第13回	France's Fleeing Billionaire 講読	
	第14回	所得税アップで周辺国へ移住するフランス人について 内容設問	
	第15回	印象に残ったトピック 理解度の確認	
準備学習 (予習・復習等)	予習：テキストの予習は、ノートに段落番号を書き、かなりのスペースをあげ、単語の他、固有名詞、地名なども調べて、箇条書きにメモを残し、その下にその段落の要約を作成しておくこと。 BBC World, CNNのオンライン版のニュースを毎日チェックし、ヘッドラインをノートに手書きして置くこと。 復習：段落毎の文法・構文の説明、内容要約をノートにまとめ、疑問点は次回の授業のはじめに質問すること。 次回の授業の内容設問に答えられるように復習しておくこと。		
テキスト	村上直久著 <i>BusinessWeek: Eye on Japan and the World</i> 南雲堂		
参考文献	特になし		
評価方法	試験:60% 授業中の発表 解答:40%		

共通英語 A		後期 1 単位	1年
イギリス人ジャーナリストの「イギリスふしぎ再発見」		海琳 泰子 (みたま やすこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現役イギリス人ジャーナリストの生きた英語で「イギリスふしぎ再発見」を読む。著者は元デイリーテレグラフ紙の東京特派員で日本（英語教師としての経験あり）、ニューヨークに滞在経験がある。英語学習に不可欠な日、英、米の風土、文化について日常生活、習慣など細かな点も理解する。英文を読むとき、英語を日本語に置き換えるのではなく、内容を立体的にイメージできるようになる。		
授業の概要	テキストのパラグラフ毎に番号をつけ、まず文の構造、文法をくわしく説明する。次に内容をていねいに解説する。予習で作成したパラグラフ毎の要約を修正し、授業中に新たな要約を作成する。内容をしっかり理解したうえで、音読する。音声と内容把握を分離しないこと。内容設問に答えるときは起立し大きな声で発表する。		
授業計画	第1回	Shakespeare 講読	
	第2回	イギリスの若者にとってのShakespeare 内容設問	
	第3回	British Food 講読	
	第4回	イギリスのカリスマシェフ 人気の外国料理 内容設問	
	第5回	A Complicated Country 講読	
	第6回	イングランドとイギリス 内容設問	
	第7回	The Quite Fab Four 講読	
	第8回	イギリスの音楽事情 内容設問	
	第9回	A Vulgar Custom 講読	
	第10回	入れ墨文化 内容設問	
	第11回	The "Invention" of Sport 講読	
	第12回	イギリス発祥のスポーツ 内容設問	
	第13回	Changing Classes 講読 内容設問	
	第14回	The Little Plane That "Won" the War 講読 内容設問	
	第15回	印象に残ったイギリスのふしぎ 理解度の確認	
準備学習 (予習・復習等)	予習：テキストの予習は、ノートにパラグラフ番号を書き、かなりのスペースをあげ、単語の他、固有名詞、地名なども調べて、箇条書きにメモを残し、その下にそのパラグラフの要約を作成してこること。 BBC World, CNNのオンライン版のニュースを毎日チェックし、ヘッドラインをノートに手書きしてくること。 復習：パラグラフ毎の文法・構文の説明、内容要約をノートにまとめ、疑問点は次回の授業のはじめに質問すること。次回の授業の内容設問に答えられるように復習しておくこと。		
テキスト	Colin Joyce 著 真野泰編注 <i>Realise Britain</i> 金星堂		
参考文献	特になし		
評価方法	試験：60% 授業中の発表 解答：40%		

共通英語B		前期 1 単位	1年
Media English		上原 美知子（うへはら みちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>目標：英語で発信される情報を効率よくキャッチし、深く世界を理解する。</p> <p>テーマ：政治や歴史といった大きなテーマから、若者文化、女性問題、スポーツといったごく日常的な話題までを素材とし、現代世界を理解するグローバルな視点を養うことを目的とする。</p>		
授業の概要	<p>メディアに頻繁に現れる語彙や文法表現、構文に親しみ、正確にニュースの内容を理解しそのメイン・アイデアを素早く把握する訓練をする。</p> <p>同時に、最新のニュースの背景や興味深い記事に触れ、自分の問題として世界情勢への関心を高めるため、情報収集スキルも身につける。</p>		
授業計画	第1回	授業方針説明，英語で自己紹介を書く	
	第2回	Lesson 1 Psychology 語彙テスト	
	第3回	Lesson 1 復習テスト 関連記事	
	第4回	Lesson 2 Women 語彙テスト	
	第5回	Lesson 2 復習テスト 関連記事	
	第6回	Lesson 3 Young people 語彙テスト	
	第7回	Lesson 3 復習テスト 関連記事	
	第8回	中間テスト， Lesson 1, 2, 3,	
	第9回	Lesson 4 The environment 語彙テスト	
	第10回	Lesson 4 復習テスト 関連記事	
	第11回	Lesson 5 Politics 語彙テスト	
	第12回	Lesson 5 復習テスト 関連記事	
	第13回	Lesson 6 History 語彙テスト	
	第14回	Lesson 6 復習テスト 関連記事	
	第15回	Lesson 8 A world of ideas 1	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回のLessonに入る前にその課の単語，イディオムについてテストするので予習しておくこと。</p> <p>復習テストでは、本文内容に関するT.F.問題（聞き取り）及び構文の問題を出すので復習しておくこと。</p> <p>なお、進度、内容について変更の場合もありえる。</p>		
テキスト	<p>A World of Ideas 南雲堂</p> <p>第一回目の授業から持参してください。当日、予習復習の方法を詳しく説明します。</p>		
参考文献	<p>背景理解用に映像資料，プリントを適宜使用します。</p>		
評価方法	<p>定期試験:60% 平常点:30% 提出物:10%</p>		

共通英語B		後期 1 単位	1年
Media English		上原 美知子 (うへはら みちこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>目標：英語で発信される情報を効率よくキャッチし、深く世界を理解する。</p> <p>テーマ：政治や歴史といった大きなテーマから、若者文化、女性問題、スポーツといったごく日常的な話題までを素材とし、現代世界を理解するために必要とされるグローバルな視点を養うことを目的とする。</p>		
授業の概要	<p>メディアに頻繁に現れる語彙や文法表現、構文に親しみ、正確にニュースの内容を理解しそのメイン・アイデアを素早く把握する訓練をする。</p> <p>同時に、最新のニュースの背景や興味深い記事に触れ、自分の問題として世界情勢への関心を高めるため、情報収集スキルも身につける。</p>		
授業計画	第1回	授業方針、英語で自己紹介を書く	
	第2回	Lesson 9 Food 語彙テスト	
	第3回	Lesson 9 復習テスト 関連記事	
	第4回	Lesson 10 Space 語彙テスト	
	第5回	Lesson 10 復習テスト 関連記事	
	第6回	Lesson 11 Language 語彙テスト	
	第7回	Lesson 11 復習テスト 関連記事	
	第8回	中間テスト Lesson 9, 10, 11	
	第9回	Lesson 12 Reading 語彙テスト	
	第10回	Lesson 12 復習テスト 関連記事	
	第11回	Lesson 13 Family 語彙テスト	
	第12回	Lesson 13 復習テスト 関連記事	
	第13回	Lesson 15 Education 語彙テスト	
	第14回	Lesson 15 復習テスト 関連記事	
	第15回	Lesson 16 A world of ideas 2	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回のLessonに入る前にその課の単語、イディオムについてテストするので予習しておくこと。 復習テストでは、本文内容に関するT.F.問題(聞き取り)及び構文の問題を出すので復習しておくこと。 なお、進度、内容について変更の場合もありえる。</p>		
テキスト	<p>A World of Ideas 南雲堂 第一回目の授業から持参すること。 当日、予習復習の方法を詳しく説明します。</p>		
参考文献	<p>背景理解用にオンライン映像資料、プリントを適宜使用します。</p>		
評価方法	<p>定期試験:60% 平常点:30% 提出物:10%</p>		

共通英語B		後期 1 単位	1年
日本は世界でどのように報じられているか		杉田 弘也 (すぎた ひろや)	
授業の到達目標 及びテーマ	新聞やニュースで使われている英語を理解する。 現在の日本が、海外（主としてオーストラリアなど）でどのように報じられているか、英語のニュース報道を読み、また映像からも理解する。		
授業の概要	日本の政治状況や戦争責任について報じたオーストラリアのテレビ番組のトランスクリプトや、ニューヨークタイムズ、アルジャジーラなどの報道を読みます。テレビ番組は、映像があるのでそれも観る予定にしています。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	Return of Samurai: 導入部	
	第3回	Return of Samurai: 自衛隊	
	第4回	Return of Samurai: 反戦活動家	
	第5回	Return of Samurai: 防衛大学校	
	第6回	Return of Samurai: 集団的自衛権	
	第7回	Historian demands Japanese apology for POWs: サンダカン	
	第8回	Historian demands Japanese apology for POWs: 遺族の声	
	第9回	Japanese right targets liberal media: NHK	
	第10回	Japanese right targets liberal media: 朝日新聞	
	第11回	In Textbook Fight, Japan Leaders Seek to Recast History: Japan' s perspective	
	第12回	In Textbook Fight, Japan Leaders Seek to Recast History: reactions from overseas	
	第13回	In Textbook Fight, Japan Leaders Seek to Recast History: repercussions	
	第14回	Shinzo Abe' s Unhelpful Shrine Visit	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	英語のリーディングの授業です。名簿順に指名し日本語訳を発表していただきますので、次回進むところは入念に予習し発表できるようにしておいてください。 また、テキストの背後にこめられたメッセージについて考えてください。		
テキスト	授業ごとに読む材料を配布します。		
参考文献	最初の授業で指示します。		
評価方法	授業への参加:20% テキストの要約と感想:40% 期末レポート:40%		

共通英語B（再履修者用）		後期 1 単位	2・3年
メディア英語と音楽		矢部 寿美子（やべ すみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、メディア英語の発音・文法・構文を総復習する。教材はインタビュー、ニュース、歌を使用し、学生の英語コミュニケーション基礎力を構築する。		
授業の概要	毎回の授業でひとつのテーマを扱い、動画や音声を使用し、リスニング、文法を確認すると共に、毎回授業の終わりに課題の英文を提出する。		
授業計画	第1回	Introduction Will You Still Love Me Tomorrow (1960),	
	第2回	Hound Dog (1956) Be 動詞、形容詞的用法、Martin Luther King Jr. のスピーチ	
	第3回	Be My Baby (1963), 過去、現在、現在完了形、使役動詞 I Wanna Hold Your Hand (1964), 副詞、副詞節	
	第4回	Blowing in the Wind (1963), 現在進行形、過去進行形、比喩 Civil Rights Movement	
	第5回	Turn, Turn, Turn (1965) 不定詞、Be 動詞	
	第6回	Hey Jude (1968), 命令形、比喩 She's Leaving Home (1969), 過去、現在、現在進行形	
	第7回	Imagine (1971), 形容詞、形容詞的用法、助動詞 Vietnam War	
	第8回	Test 1	
	第9回	Someone Like You (2011), 倒置法	
	第10回	We Are Never Ever Getting Back (2012) 動詞の時制総復習	
	第11回	I Saw Mommy Kissing Santa Claus (1963), 感嘆文 Last Christmas (1984), 仮定法	
	第12回	All I Want For Christmas Is You (1994), 分詞構文 Holidays in the World	
	第13回	Let It Go (2014), 使役動詞、形式主語、比喩	
	第14回	Interviews, News around the World	
	第15回	Test 2	
準備学習 (予習・復習等)	毎回プリントや動画を使用し、課題提出もあるので、必ず出席すること。		
テキスト	プリント使用		
参考文献	特に定めない		
評価方法	授業時の感想、課題:30% テスト:70%		

共通英語C		前期 1 単位	1年
Oral Communication		マウラー 裕子 (まうらー ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>クラスアクティビティを通して、能動的/積極的に英語でのoral communicationをできるようにする。 そのためには、クラスの時間はたくさん英語を使い、speakingに慣れていくようにする。 色々な語彙、表現の自然な使い方を学ぶ。</p>		
授業の概要	<p>英語は英語をたくさん使用しながら学ぶ。 クラスメートと英語を使用して、リアルなコミュニケーションを経験する。 自分の考えを言えるようにする。話す前に考え、どのように言うかを訓練する。 宿題を出すので、毎回必ず終わってくること。 ポスタープレゼンテーションは1回目のプレゼンテーション。 英語スキットをクラスの前で演じるのが、2回目のプレゼンテーション。</p>		
授業計画	第1回	Introducing yourself, greeting people, exchanging information	
	第2回	Describing clothing, talking about fashion	
	第3回	Giving advice	
	第4回	Giving directions	
	第5回	Describing objects and uses	
	第6回	Talking about the future	
	第7回	Talking about the past	
	第8回	Students presentation - 1 (poster presentation)	
	第9回	Comparing and contrasting	
	第10回	Talking about abilities	
	第11回	Expressing likes and dislikes	
	第12回	Talking about rules	
	第13回	Hearing and telling stories	
	第14回	Students presentation - 2 (skit presentation)	
	第15回	Review	
準備学習 (予習・復習等)	<p>テキストを事前に読んで、準備してくること。 復習も毎回、次のクラスまでに終わっておくこと。</p>		
テキスト	<p>English Firsthand - Success. Marc Helgesen, Steven Brown, John Wiltshire. Pearson Longman. ISBN 978-988-00-3058-1</p>		
参考文献	<p>特になし</p>		
評価方法	<p>1st presentation:30% 2nd presentation:30% 授業中の貢献度:20% 宿題:20%</p>		

共通英語C		後期 1 単位	1年
Oral Communication		マウラー 裕子 (まうらー ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>クラスアクティビティを通して、能動的に英語でのoral communicationをできるようにする。そのためには、クラスの時間はたくさん英語を使い、speakingに慣れていくようにする。</p> <p>色々な語彙、表現の自然な使い方を学ぶ。</p>		
授業の概要	<p>英語は英語をたくさん使用しながら学ぶ。</p> <p>クラスメートと英語を使用して、リアルなコミュニケーションを経験する。</p> <p>自分の考えを言えるようにする。話す前に考え、どのように言うかを訓練する。</p> <p>宿題は毎回必ず終えてくること。</p> <p>1回目のプレゼンテーションは、poster presentation (グループで選んだトピックに関して)</p> <p>2回目のプレゼンテーションは、skit presentation (英語スキットを皆の前で演じる)</p>		
授業計画	第1回	Introducing yourself, greeting people, exchanging information	
	第2回	Describing clothing, talking about fashion	
	第3回	Giving advice	
	第4回	Giving directions	
	第5回	Describing objects and uses	
	第6回	Talking about the future	
	第7回	Talking about the past	
	第8回	Students presentation - 1 (poster presentation)	
	第9回	Comparing and contrasting	
	第10回	Talking about abilities	
	第11回	Expressing likes and dislikes	
	第12回	Talking about rules	
	第13回	Hearing and telling stories	
	第14回	Students presentation - 2 (skit presentation)	
	第15回	Review	
準備学習 (予習・復習等)	<p>テキストを事前に読んで、準備してくること。</p> <p>復習も毎回、次のクラスまでに終えておくこと。</p>		
テキスト	English Firsthand Success. Marc Helgesen, Steven Brown, John Wiltshire. Pearson Longman. ISBN 978-988-00-3058-1		
参考文献	特になし。		
評価方法	1st presentation:30% 2nd presentation:30% 授業中の貢献度:20% 宿題:20%		

共通英語D		前期 1 単位	1年
TOEICの英語入門		江崎 聡子 (えざき さとこ)	
授業の到達目標及びテーマ	この講座はTOEIC TESTの受験準備を目的とする。受講生が、授業中にリーディング、リスニングの両セクションの問題を実際に解き、それぞれのパート別の解法や対策を十分に理解できるようになることが目標である。予習や復習はもちろんのこと、受講生の授業中の積極的な取り組みを大いに期待する。		
授業の概要	テキストに沿ってすすめる。毎回ごとに、Part 1から7にわたって、それぞれの問題形式の類似問題を受講生に解いてもらい、問題を解く上で必要な基礎的な文法事項の確認や解説を教員が行う。二章に一回の割合で、単語も含めた簡単な復習テストをおこなう。なお、交通機関の遅延による場合も含めて、遅刻は一切認めない。遅刻は欠席とみなすので、注意すること。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	Unit1:Restaurant	
	第3回	Unit1の文法、リーディング	
	第4回	Unit2:Hotel	
	第5回	Unit2の文法、リーディング	
	第6回	Unit3:Shopping	
	第7回	Unit3の文法、リーディング	
	第8回	Unit4:Financing	
	第9回	Unit4の文法、リーディング	
	第10回	Unit 5:Hospital	
	第11回	Unit5の文法、リーディング	
	第12回	Unit6:Airport	
	第13回	Unit6の文法、リーディング	
	第14回	Unit 7:Transportation	
	第15回	総復習	
準備学習 (予習・復習等)	予習としてはテキストの該当箇所の練習問題を解き、単語や表現を調べておくことを要求する。復習としては付属のCDを使用し、リスニング問題をもう一度解きなおい、文法事項を確認し、単語や表現を暗記することを勧める。		
テキスト	Takayuki Ishii, Overall Skills for the TOEIC Test (Seibido, 2014).		
参考文献	授業時に適宜紹介する。		
評価方法	授業の課題:35% 平常点:15% 定期試験:50%		

共通英語D		後期 1 単位	1年
TOEICの英語入門		江崎 聡子 (えざき さとこ)	
授業の到達目標及びテーマ	この講座はTOEIC TESTの受験準備を目的とする。受講生が、授業中にリーディング、リスニングの両セクションの問題を実際に解き、それぞれのパート別の解法や対策を十分に理解できるようになることが目標である。予習や復習はもちろんのこと、受講生の授業中の積極的な取り組みを大いに期待する。		
授業の概要	テキストに沿ってすすめる。毎回ごとに、Part 1から7にわたって、それぞれの問題形式の類似問題を受講生に解いてもらい、問題を解く上で必要な基礎的な文法事項の確認や解説を教員が行う。二章に一回の割合で、単語も含めた簡単な復習テストをおこなう。なお、交通機関の遅延による場合も含めて、遅刻は一切認めない。遅刻は欠席とみなすので、注意すること。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	Unit8: Sightseeing	
	第3回	Unit8の文法、リーディング	
	第4回	Unit9: Office Issues	
	第5回	Unit9の文法、リーディング	
	第6回	Unit 10: Business	
	第7回	Unit 10の文法、リーディング	
	第8回	Unit 11: Sports Events	
	第9回	Unit11の文法、リーディング	
	第10回	Unit 12: Computers	
	第11回	Unit12の文法、リーディング	
	第12回	Unit 13: Personnel	
	第13回	Unit13の文法、リーディング	
	第14回	Unit 14: Hiring and Training	
	第15回	総復習	
準備学習 (予習・復習等)	予習としてはテキストの該当箇所の練習問題を解き、単語や表現を調べておくことを要求する。復習としては付属のCDを使用し、リスニング問題をもう一度解きなおい、文法事項を確認し、単語や表現を暗記することを勧める。		
テキスト	Takayuki Ishii, Overall Skills for the TOEIC Test (Seibido, 2014)		
参考文献	授業時に適宜紹介する。		
評価方法	授業の課題:35% 平常点:15% 定期試験:50%		

共通英語D		前期 1 単位	1年
数学的英文解釈		菅野 昌彦 (すがの まさひこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	構造面から英語をシステムティックに理解できるようにする。		
授業の概要	我々が使用する言語は約70%が構造で決まっていると言われている。 その構造と言う観点から英文を理解する上で勘の入る余地を無くしシステムとして理解できるようにしていく。		
授業計画	第1回	guidance	
	第2回	post-position	
	第3回	pre-position	
	第4回	word-order	
	第5回	case-marking	
	第6回	phrase	
	第7回	noun-phrase	
	第8回	adjective-phrase	
	第9回	adverbial-phrase	
	第10回	noun-clause	
	第11回	adjective-clause	
	第12回	adverbial-clause	
	第13回	conjunction	
	第14回	cohesion	
	第15回	term end review	
準備学習 (予習・復習等)	やること自体は非常に基本的なことであるので、まず前週のクラスでやったことを必ず復習してから授業に参加すること。		
テキスト	自作プリント		
参考文献	特に無し		
評価方法	期末試験:80% 授業内小テスト:10% 平常点:10%		

共通英語D		後期 1 単位	1年
数学的解釈の実践		菅野 昌彦 (すがの まさひこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	TOEICまたはTOEFLの問題を解く上でのシステムティックな方法を得る。		
授業の概要	すべての言語に共通する普遍文法を英語と日本語、二つの言語に焦点を当て言語そのものを理解できるようにトレーニングしていく。		
授業計画	第1回	guidance	
	第2回	structure of word	
	第3回	structure of phrase	
	第4回	structure of clause	
	第5回	structure of sentence	
	第6回	what is a good sentence?	
	第7回	how to make a good sentence	
	第8回	what is a wrong sentence?	
	第9回	how to find a wrong sentence	
	第10回	read a sentence correctly	
	第11回	speed up reading skill	
	第12回	language as system	
	第13回	analyze phrase systematically	
	第14回	analyze sentence systematically	
	第15回	term end review	
準備学習 (予習・復習等)	前週のクラスで学んだことを必ず復習してから、授業に参加すること。		
テキスト	自作プリント		
参考文献	特に無し		
評価方法	期末試験:80% 授業内小テスト:10% 平常点:10%		

共通英語E		前期 1 単位	1年
児童文学、YA文学の楽しみ方		杉田 弘也 (すぎた ひろや)	
授業の到達目標 及びテーマ	いくつかの児童文学、YA(ヤングアダルト)文学の抜粋を原書で読むことを通じ英語を理解する。 児童文学やYA文学は、どのように読むことができるのか、「大人になって読む児童文学」や「深読み」の面白さを理解する。 「多文化主義」や「世代間の正義」の問題について理解を深める。		
授業の概要	Emily Rodda著 The Key to Rondo、同 The Sister of the South、Jackie French著 Hitler' s Daughterから一部を選んで読んでいきます。お話の内容を理解するとともに、著者の意図について議論ができればと思います。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	The Key to Rondo: Chapter 17 前半	
	第3回	The Key to Rondo: Chapter 17 中盤	
	第4回	The Key to Rondo: Chapter 17 後半	
	第5回	The Key to Rondo: Chapter 17 まとめと感想	
	第6回	The Key to Rondo: discussion	
	第7回	Hitler' s Daughter: Chapter 8	
	第8回	Hitler' s Daughter: Chapter 9	
	第9回	Hitler' s Daughter: Chapter 11	
	第10回	Hitler' s Daughter: discussion	
	第11回	The Sister of the South: Chapter 18	
	第12回	The Sister of the South: Chapter 19	
	第13回	The Sister of the South: Chapter 20	
	第14回	The Sister of the South: discussion	
	第15回	課題の解説	
準備学習 (予習・復習等)	英語のリーディングの授業です。名簿順に指名し日本語訳を発表していただきますので、次回進むところは入念に予習し発表できるようにしておいてください。 また、テキストの背後にこめられたメッセージについて考えてください。		
テキスト	授業時に配布します。		
参考文献	最初の授業で指示します。		
評価方法	授業への参加:20% テキストの要約と感想:40% 学期末レポート:40%		

共通英語E		前期 1 単位	1年
Children' s Storybooks		鈴木 千加子 (すずき ちかこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語で書かれた児童文学の解説を読むことで、各々の物語に慣れ親しみ、英語の理解力を深めていくと共に、英語特有の表現も合わせて習得する。		
授業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. よく知られている子供向け物語の解説を読んで、英語の読解力を養う。 2. 英語の文法的構造を理解し、英文理解力をより向上させる。 3. 内容に関する問題を解いたり、作文したりすることによって、英語の習得度を確認する。 4. 各章ごとに小テストを受けて、内容理解の再確認をする。 		
授業計画	第1回	Orientation 英語を学ぶ上での注意点、発音記号の読み方、英語発音の特徴等。	
	第2回	Peter Pan (Reading)	
	第3回	Peter Pan (Grammar&Composition)	
	第4回	Winnie-the-Pooh (Reading)	
	第5回	Winnie-the-Pooh (Grammar&Composition)	
	第6回	Treasure Island (Reading)	
	第7回	Treasure Island (Grammar&Composition)	
	第8回	Anne of Green Gables (Reading)	
	第9回	Anne of Green Gables (Grammar&Composition)	
	第10回	The Call of the Wild (Reading)	
	第11回	The Call of the Wild (Grammar&Composition)	
	第12回	Huckleberry Finn (Reading)	
	第13回	Huckleberry Finn (Grammar&Composition)	
	第14回	Presentation	
	第15回	Review	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. プリントにある練習問題は必ず前もって解いておきましょう。 2. 本文の音読練習をしておいて下さい。 3. 毎回辞書を忘れずに持参して下さい。 4. 6話のうちの1話について、英語で Presentation が出来るようにしておきましょう。 		
テキスト	プリント配布		
参考文献	「Oak Collection (オークコレクション図録)」 青山学院女子短期大学図書館 その他開講時指定		
評価方法	小テスト:80% 発表:10% 質疑応答:10%		

共通英語E		後期 1 単位	1年
Children' s Storybooks		鈴木 千加子 (すずき ちかこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語で書かれた児童文学の解説を読むことで各々の物語に慣れ親しみ、英語の理解力を深めていくと共に、英語特有の表現も合わせて習得する。		
授業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. よく知られている児童向け物語の解説を読んで、英語の読解力を養う。 2. 英語の文法的構造を理解し、英文理解力をより向上させる。 3. 内容に関する問題を解いたり、作文したりすることによって、英語の習得度を確認する。 4. 各章ごとに小テストを受けて、内容理解の再確認をする。 		
授業計画	第1回	Orientation 英語を学ぶ上での注意点、発音記号の読み方、英語発音の特徴等。	
	第2回	Peter Rabbit (Reading)	
	第3回	Peter Rabbit (Grammar&Composition)	
	第4回	The Snowman (Reading)	
	第5回	The Snowman (Grammar&Composition)	
	第6回	Father Christmas (Reading)	
	第7回	Father Christmas (Grammar&Composition)	
	第8回	James and the Giant Peach (Reading)	
	第9回	James and the Giant Peach (Grammar&Composition)	
	第10回	Matilda (Reading)	
	第11回	Matilda (Grammar&Composition)	
	第12回	Paddington (Reading)	
	第13回	Paddington (Grammar&Composition)	
	第14回	Review	
	第15回	Presentation	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. プリントにある練習問題は必ず前もって解いておきましょう。 2. 本文の音読練習をしておいて下さい。 3. 毎回辞書を忘れずに持参して下さい。 4. 6話のうちの1話について、英語で Presentation が出来るようにしておきましょう。 		
テキスト	プリント配布		
参考文献	「Oak Collection (オークコレクション図録)」青山学院女子短期大学図書館 その他開講時指定		
評価方法	質疑応答:10% 発表:10% 小テスト:80%		

共通英語E		後期 1 単位	1年
C. S. Lewisの <i>The Lion, the Witch and the Wardrobe</i> (『ライオンと魔女』) を読む		藤村 待子 (ふじむら まちこ)	
授業の到達目標及びテーマ	<i>The Chronicles of Narnia</i> の <i>The Lion, the Witch and the Wardrobe</i> を読みながら、英文法についての知識を確認し、英語で書かれた文章を正確に理解することができるようになることを目指します。作品中でキリスト教にどのように言及がなされているのかも見ていき、さまざまな角度から作品を楽しむことができるようになることも目標とします。		
授業の概要	授業では、本文中で使われている大切な英語表現や文法、キリスト教への言及などを中心に、プリントで丁寧に確認していきます。また、映像資料を視聴したり、感想などを書いていただく機会をほぼ毎回少しずつ作りたと思います。ただ、受講者の興味、理解度に応じて、柔軟に修正していきたいと思っています。		
授業計画	第1回	To Lucy Barfield	
	第2回	The House of an Old Professor	
	第3回	Lucy and a Wardrobe	
	第4回	A Daughter of Eve	
	第5回	The House of Mr. Tumnus	
	第6回	A Strange Little Flute	
	第7回	Lucy's Handkerchief	
	第8回	Turkish Delight	
	第9回	Into the Forest	
	第10回	A Robin and Beavers	
	第11回	After Dinner	
	第12回	Aslan	
	第13回	Christmas in Narnia	
	第14回	Deep Magic from the Dawn of Time	
	第15回	Before the Dawn of Time	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業の前に、教科書の該当箇所を読んで、分からない単語の意味を調べて、文意を推測してから、授業に臨むようにしてください。また、授業後は、教科書と補足プリントを復習してください。		
テキスト	C. S. Lewis, <i>The Lion, the Witch and the Wardrobe</i> (HarperCollins、本の統一のため教科書売り場で購入してください)、またプリントを配布します。		
参考文献	『ライオンと魔女』(瀬田貞二訳、岩波書店)、その他は授業中に適宜紹介いたします。		
評価方法	毎回の短い授業感想文:30% 課題の提出:10% 期末試験:60%		

共通英語E		前期 1 単位	1年
English using Children' s Storybooks		吉田 裕子・リナ (よしだ ひろこ リナ)	
授業の到達目標 及びテーマ	This 4–skills course looks at various elements, especially language features used in English children' s storybooks. The final project of the course is for each student to create her original children' s storybook using the language features learned, and present to the class.		
授業の概要	<p>◆この授業は英語で行われます。</p> <p>英語の児童書、絵本を使用して4技能（話・聞・書・読）を磨くユニークな英語授業です。最終課題は授業内で紹介された“language features”をもとにして、英語のオリジナル児童絵本を各自で作成し、発表します。</p> <p>◆出席重視のクラスです。最低限必要な出席率： 2/3</p>		
授業計画	第1回	Class orientation	
	第2回	Rhyme: rhyming part of a word	
	第3回	Rhyme: creating poems that rhyme	
	第4回	Alliteration: short alliteration examples	
	第5回	Alliteration: creating tongue twisters	
	第6回	Onomatopoeia: English vs. Japanese	
	第7回	Onomatopoeia: Effective use of onomatopoeia	
	第8回	Poem presentation	
	第9回	Usage of Articles	
	第10回	Writing style: purpose & audience	
	第11回	Story writing	
	第12回	Review activities	
	第13回	Preparation for final project	
	第14回	Storybook presentation	
	第15回	Peer Book Look & Course feedback	
準備学習 (予習・復習等)	<p>“Mini Research” will be assigned on a weekly basis. Students will be asked to find and create examples of each language feature they go over in class.</p> <p>Towards the end of the semester, students will be focusing on creating their original storybooks.</p>		
テキスト	Information will be given in class.		
参考文献	Information will be given in class.		
評価方法	Mini research:20% Poem presentation:20% Storybook project:30% Effort & Participation:30%		

共通英語E		後期 1 単位	1年
English using Children's Storybooks		吉田 裕子・リナ（よしだ ひろこ リナ）	
授業の到達目標 及びテーマ	This 4–skills course looks at various elements, especially language features used in English children's storybooks. The final project of the course is for each student to create her original children's storybook using the language features learned, and present to the class.		
授業の概要	<p>◆この授業は英語で行われます。</p> <p>英語の児童書、絵本を使用して4技能（話・聞・書・読）を磨くユニークな英語授業です。最終課題は授業内で紹介された“language features”をもとにして、英語のオリジナル児童絵本を各自で作成し、発表します。</p> <p>◆出席重視のクラスです。最低限必要な出席率： 2/3</p>		
授業計画	第1回	Class orientation	
	第2回	Rhyme: rhyming part of a word	
	第3回	Rhyme: creating poems that rhyme	
	第4回	Alliteration: short alliteration examples	
	第5回	Alliteration: creating tongue twisters	
	第6回	Onomatopoeia: English vs. Japanese	
	第7回	Onomatopoeia: Effective use of onomatopoeia	
	第8回	Poem presentation	
	第9回	Usage of Articles	
	第10回	Writing style: purpose & audience	
	第11回	Story writing	
	第12回	Review activities	
	第13回	Preparation for final project	
	第14回	Storybook presentation	
	第15回	Peer Book Look & Course feedback	
準備学習 (予習・復習等)	<p>“Mini Research” will be assigned on a weekly basis. Students will be asked to find and create examples of each language feature they go over in class.</p> <p>Towards the end of the semester, students will be focusing on creating their original storybooks.</p>		
テキスト	Information will be given in class.		
参考文献	Information will be given in class.		
評価方法	Mini research:20% Poem presentation:20% Storybook project:30% Effort & Participation:30%		

共通英語 F		前期 1 単位	1年
Visits to the World Heritage Sites		木村 さなえ (きむら さなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	To improve your skills in English, you will have to prepare a lot before you come to the classroom. However, by doing so, you will realize all of a sudden you are getting better in understanding information given in English.		
授業の概要	In each lesson, we will see one area from the World Heritage Sites. As an activity outside the classroom, you are to watch three films and hand in reports on them. (Most of the films are in our library.) Review in the form of a vocabulary quiz is given one week after the end of each unit. Then an overall vocabulary test at the end of the term is to be given.		
授業 計画	第1回	the Orientation	
	第2回	Unit 11 Shirakawa-Go (Japan) *Note: we start with this unit and not 'Unit 1' .	
	第3回	Unit 1 Statue of Liberty (U.S.A.)	
	第4回	Unit 2 Forbidden City (China)	
	第5回	Unit 3 Bath (England)	
	第6回	Unit 4 Canadian Rockies (Canada)	
	第7回	Unit 5 The Pyramids (Egypt)	
	第8回	Unit 6 Ayutthaya (Thailand)	
	第9回	Unit 7 Edinburgh Castle (Scotland)	
	第10回	Unit 8 Machu Picchu (Peru)	
	第11回	Unit 9 Taj Mahal (India)	
	第12回	Unit 10 Te Wahipounamu (New Zealand)	
	第13回	Unit 12 Cappadocia (Turkey)	
	第14回	Unit 13 Blue Mountains (Australia)	
	第15回	Unit 14 Overall Review	
準備学習 (予習・復習等)	Read each unit before you come to the classroom and check the unknown words for you in the main text. Watch the attached DVD at home. Do the exercises of each unit. In the classroom, checking answers should be done immediately. Your attendance is also important. You need to attend at least 2/3 of the entire classes. 3 tardies are counted as one absence. If you are absent more than 4 times, you will lose your seat to write the final vocabulary test.		
テキスト	World Heritage on DVD		
参考文献	None		
評価方法	participation :30% scores of quizzes:30% reports on films :40%		

共通英語 F		後期 1 単位	1年
Visits to the World Heritage Sites		木村 きなえ (きむら きなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	To improve your skills in English, you will have to prepare a lot before you come to the classroom. However, by doing so, you will notice all of a sudden you are getting better in understanding information given in English.		
授業の概要	In each lesson, we will see one area from the World Heritage Sites. As an activity outside the classroom, you are to watch three films and hand in reports on them. (Most of the films are in our library.) Review in the form of a vocabulary quiz is given one week after the end of each unit. Then overall vocabulary test at the end of the term is to be given.		
授業 計画	第1回	the Orientation	
	第2回	Unit 11 Shirakawa-Go (Japan) *Note: we start with this unit and not 'Unit 1' .	
	第3回	Unit 1 Statue of Liberty (U.S.A.)	
	第4回	Unit 2 Forbidden City (China)	
	第5回	Unit 3 Bath (England)	
	第6回	Unit 4 Canadian Rockies (Canada)	
	第7回	Unit 5 The Pyramids (Egypt)	
	第8回	Unit 6 Ayutthaya (Thailand)	
	第9回	Unit 7 Edinburgh Castle (Scotland)	
	第10回	Unit 8 Machu Picchu (Peru)	
	第11回	Unit 9 Taj Mahal (India)	
	第12回	Unit 10 Te Wahipounamu (New Zealand)	
	第13回	Unit 12 Cappadocia (Turkey)	
	第14回	Unit 13 Blue Mountains (Australia)	
	第15回	Unit 14 Overall Review	
準備学習 (予習・復習等)	Read each unit before you come to the classroom and check the unknown words for you in the main text at home. Watch the attached DVD at home and try the dictation section in the textbook. Do the exercises of each unit. In the classroom, checking answers should be done immediately. Your attendance is also important. You need to attend at least 2/3 of the classes. If you are late for the class three times, that would be counted as one absence. If you are absent more than 4 times, you will lose your seat to write the final vocabulary test.		
テキスト	World Heritage on DVD		
参考文献	None		
評価方法	participation:30% scores of quizzes:30% reports on films:40%		

共通英語 F		後期 1 単位	1年
映画で英語を学ぶ		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	英米の映画を題材として、英語のリスニング能力を養う。さらに、英語の会話表現や映画の背景にある文化事情や社会事情を学ぶ。		
授業の概要	毎回映画のワンシーンを使って、リスニングの穴埋めを行う。また、スクリプト（映画の脚本）の中の重要な語彙・文法を取り上げて説明し、会話表現や映画の背景について解説する。今年度は「ワーキング・ガール」と「ゴースト」の2つの映画を取り上げる予定。		
授業計画	第1回	イントロダクション：英語のリスニングについて	
	第2回	ワーキング・ガール テスの英語	
	第3回	ワーキング・ガール キャサリンの英語	
	第4回	ワーキング・ガール Middle Class とWorking Class	
	第5回	ワーキング・ガール 日本語と英語の音声の違い	
	第6回	ワーキング・ガール 英語の発音の注意点	
	第7回	ワーキング・ガール New Feminism とキャリア	
	第8回	前半のまとめとテスト	
	第9回	ゴースト 映画の背景	
	第10回	ゴースト 臨死体験	
	第11回	ゴースト 女性の台詞	
	第12回	ゴースト 英語は中性的な言語なのか？	
	第13回	ゴースト 黒人の英語	
	第14回	ゴースト ヒスパニック系アメリカ人	
	第15回	後半のまとめとテスト	
準備学習 (予習・復習等)	授業で取り上げられる映画を、自分で一度通して観ておくことをおすすめします。配布されたプリントの中の重要な文法事項や語彙を復習して下さい。		
テキスト	毎回プリントを使用する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	課題：20% テスト1：40% テスト2：40%		

共通英語 F		前期 1 単位	1年
映画で英語を学ぶ		矢部 寿美子 (やべ すみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	映画の教材を通して多様な英語の表現・発音を学び、英語圏文化とその歴史的・社会的背景に対する知識と理解を深めながらコミュニケーション能力を強化する。特に1960年代以降の現代アメリカ社会に焦点を当て、様々な地域・時代・文化・民族の中での英語表現の違いを理解する。		
授業の概要	映画の教材として Forrest Gump を取り上げる。授業のはじめに映画の一部を見て、概要を掴む。その後、発音・語彙・表現（非言語を含む）・文法を確認する。当時の時代背景なども明らかにしながら、英語表現を習得する。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	Forrest Gump - Scene 1	
	第3回	Forrest Gump - Scene 2	
	第4回	Forrest Gump - Scene 3 発表 Group 1	
	第5回	Forrest Gump - Scene 4 発表 Group 2	
	第6回	Forrest Gump - Scene 5 発表 Group 3	
	第7回	Test 1	
	第8回	Forrest Gump - Scene 6 発表 Group 4	
	第9回	Forrest Gump - Scene 7 発表 Group 5	
	第10回	Forrest Gump - Scene 8 発表 Group 6	
	第11回	Forrest Gump - Scene 9 発表 Group 7	
	第12回	Forrest Gump - Scene 10 発表 Group 8	
	第13回	Review 発表 Group 9, Group 10	
	第14回	レポート提出	
	第15回	Test 2	
準備学習 (予習・復習等)	授業内では映画の場面を抜粋して紹介するので、学生は各自、映画を全部通して観ておくこと。学期末に各自が選んだ映画をレポートにまとめて提出する。レポートの途中経過を指定された日に2分ほど発表するので、早めに映画を選ぶこと。		
テキスト	配布資料を用いる。		
参考文献	特に定めない		
評価方法	授業感想・課題:10% レポート:15% 発表:5% テスト:70%		

共通英語 F		後期 1 単位	1年
映画で英語を学ぶ		矢部 寿美子 (やべ すみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	映画の教材を通して多様な英語の表現・発音を学び、英語圏文化とその歴史的・社会的背景に対する知識と理解を深めながらコミュニケーション能力を強化する。特に1960年代以降の現代アメリカ社会に焦点をあて、様々な地域・時代・文化・民族の中での英語表現の違いを理解する。		
授業の概要	映画の教材として Burlesque, Stand By Me, Transamerica, The Devil Wears Prada の4本を取り上げる。授業のはじめに映画の一部を見て、概要を掴む。その後、発音・語彙・表現（非言語を含む）・文法を確認する。当時の時代背景なども明らかにしながら英語表現を習得する。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	Burlesque : Scene 1	
	第3回	Burlesque : Scene 2 発表 Group 1	
	第4回	Burlesque : Scene 3 発表 Group 2	
	第5回	Stand By Me : Scene 1 発表 Group 3	
	第6回	Stand By Me : Scene 2 発表 Group 4	
	第7回	Test 1	
	第8回	Transamerica : Scene 1 発表 Group 5	
	第9回	Transamerica : Scene 2 発表 Group 6	
	第10回	Transamerica : Scene 3 発表 Group 7	
	第11回	The Devil Wears Prada : Scene 1 発表 Group 8	
	第12回	The Devil Wears Prada : Scene 2 発表 Group 9	
	第13回	The Devil Wears Prada : Scene 3 発表 Group 10	
	第14回	Review レポート提出	
	第15回	Test 2	
準備学習 (予習・復習等)	授業内では映画の場面を抜粋して紹介するので、学生は各自、映画を全部通して観ておくこと。学期末に各自が選んだ映画をレポートにまとめて提出する。レポートの途中経過を指定された日に2分ほど発表するので、早めに映画を選ぶこと。		
テキスト	配布資料を用いる。		
参考文献	特になし		
評価方法	授業感想・課題:10% レポート:15% 発表:5% テスト:70%		

共通英語 F (再履修者用)		前期 1 単位	2・3年
映画と歌で英語を学ぶ		矢部 寿美子 (やべ すみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	映画の教材と歌を通して、多様な英語の表現・発音を学び、日本と英語文化の違い、表現の違い、文の構成の違いなどに着目しながらコミュニケーション能力を強化する。		
授業の概要	アメリカの60年代からの映画と歌を通して、発音、語彙、表現、文法を確認する。社会背景や文化を理解すると共に、英語表現を習得する。		
授業計画	第1回	Introduction, Rock and Clock (1955), 発音 (子音) の確認	
	第2回	End of the World (1963), 現在形、副詞／副詞節 What a Wonderful World (1968), 感嘆文	
	第3回	Can' t Buy Me Love (1964), 基本構文 (SVC, SV0) You Really Got a Hold on Me (1963), 動詞／動詞句、命令形	
	第4回	Stand By Me (1956), 命令形、仮定法、比喩	
	第5回	Chapel of Love (1964), 未来形、現在進行形 Hey Paula (1963), 基本構文 復習	
	第6回	A Change Is Gonna Come (1964), 過去、現在、現在進行、未来形 Civil Rights Movement について	
	第7回	Test - 1	
	第8回	Let It Be (1970), 使役動詞、分詞構文 Hippies Movement について	
	第9回	Girls Just Wanna Have Fun (1983) 副詞節、現在形	
	第10回	Ebony and Ivory (1982), 名詞節、比喩 Interview : Michael Jackson	
	第11回	Luca (1987), 接続詞、前置詞 Family and children	
	第12回	Born This Way (2011), 比喩 Happy (2013)	
	第13回	Shake It Off (2013), 仮定法 Let It Go (2014)	
	第14回	映画のまとめ	
	第15回	Test 2	
準備学習 (予習・復習等)	授業ではプリントを使用するので、初回から必ず出席すること。		
テキスト	配布資料を活用する。		
参考文献	特になし		
評価方法	授業感想・課題:30% テスト:70%		

共通英語 F		前期 1 単位	1年
English through Movies		吉田 裕子・リナ (よしだ ひろこ リナ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>This course is designed to improve students' communication skills through watching and discussing English movies. It will help students:</p> <p>1) develop confidence and fluency in communicating at a basic level in English</p> <p>2) deepen knowledge of communication by understanding the social, cultural and historical background of the English speaking world</p>		
授業の概要	<p>The class will use the movie "The Devil Wears Prada" as the main text. After watching each section of the movie, students will be involved in a variety of activities focusing on their four skills (listening, speaking, reading, writing).</p> <p>☆ この授業は英語で行われます。</p> <p>☆ 「ブラダを着た悪魔」等の映画を使用して4技能(話・聞・書・読)を磨く英語授業です。</p> <p>☆ 出席重視のクラスです。最低限必要な出席率: 2/3</p>		
授業計画	第1回	Class Orientation: English listening	
	第2回	The Job Interview	
	第3回	The First Day	
	第4回	The Dragon Lady	
	第5回	Andy's Makeover	
	第6回	The Book	
	第7回	Time for a Promotion	
	第8回	Miranda's Choice	
	第9回	Midterm Assignment	
	第10回	Paris	
	第11回	The New Runway	
	第12回	A Secret Smile	
	第13回	Final Assignment: Preparation	
	第14回	Final Assignment: Presentation	
	第15回	Course feedback	
準備学習 (予習・復習等)	<p>Students will be expected to do review work and prepare for the quiz held every week.</p> <p>☆ Classwork is important!</p> <p>☆ Active participation is a must!</p>		
テキスト	Information will be given in class.		
参考文献	Information will be given in class.		
評価方法	Weekly Quizzes:25% Participation:25% Midterm Assignment:25% Final Assignment:25%		

共通英語 F		後期 1 単位	1年
English through Movies		吉田 裕子・リナ (よしだ ひろこ リナ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>This course is designed to improve students' communication skills through watching and discussing English movies. It will help students:</p> <p>1) develop confidence and fluency in communicating at a basic level in English</p> <p>2) deepen knowledge of communication by understanding the social, cultural and historical background of the English speaking world</p>		
授業の概要	<p>The class will use the movie "The Devil Wears Prada" as the main text. After watching each section of the movie, students will be involved in a variety of activities focusing on their four skills (listening, speaking, reading, writing).</p> <p>☆ この授業は英語で行われます。</p> <p>☆ 「ブラダを着た悪魔」等の映画を使用して4技能(話・聞・書・読)を磨く英語授業です。</p> <p>☆ 出席重視のクラスです。最低限必要な出席率: 2/3</p>		
授業計画	第1回	Course Orientation: English listening	
	第2回	The Job Interview	
	第3回	The First Day	
	第4回	The Dragon Lady	
	第5回	Andy's Makeover	
	第6回	The Book	
	第7回	Time for a Promotion	
	第8回	Miranda's Choice	
	第9回	Midterm Assignment	
	第10回	Paris	
	第11回	The New Runway	
	第12回	A Secret Smile	
	第13回	Final Assignment: Preparation	
	第14回	Final Assignment: Presentation	
	第15回	Course Feedback	
準備学習 (予習・復習等)	<p>Students will be expected to do review work and prepare for the quiz held every week.</p> <p>☆ Classwork is important!</p> <p>☆ Active participation is a must!</p>		
テキスト	Information will be given in class		
参考文献	Information will be given in class		
評価方法	Weekly Quizzes:25% Participation:25% Midterm Assignment:25% Final Assignment:25%		

共通英語G		前期 1 単位	1年
英文法を一から学び直す		井伊 順彦 (いい のぶひこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英文法の基礎中の基礎から始めて、関係代名詞の初歩まで理解できるようにする。今まであいまいだった諸概念を根本から見直す作業を地道に続けてゆき、気づいたときには実力が大きく上がっている。そんな授業をめざしたい。		
授業の概要	文法項目ごとに解説を聴き、練習問題を解いてゆく。学んでいるさなかの文法事項が入った英文を、前もって指名された担当者が読んで訳するという作業も取り入れる。		
授業計画	第1回	授業の内容紹介および受講に関する注意事項の確認	
	第2回	英語の要素、品詞、人称の説明	
	第3回	第1、2文型および自動詞の説明	
	第4回	第3、4文型および他動詞の説明	
	第5回	第4および5文型の説明	
	第6回	第1～5文型の復習	
	第7回	助動詞、接続詞の説明	
	第8回	to付き不定詞の名詞的用法および形容詞的用法の説明	
	第9回	to付き不定詞の副詞的用法およびtoなし不定詞の説明	
	第10回	分詞および動名詞の説明	
	第11回	受動態および進行形の説明	
	第12回	完了形の説明	
	第13回	関係代名詞の説明(1) 制限用法	
	第14回	関係代名詞の説明(2) 非制限用法	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	特別なことは求めない。はじめのうちは予習しなくてよいから、各回の授業で学んだ内容を自宅ですべて確かめてほしい。勉強方法などについては、おいおい教室で説明する。		
テキスト	とくには定めない。こちらから印刷物を配布する。		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	平常点:20% 試験:25% 小テスト:10% レポート:10% 授業感想文:20% 授業に対する貢献度:15%		

共通英語G		前期 1 単位	1年
英文法の基礎を学ぶ		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) 品詞、5文型、修飾と被修飾の関係について理解する。 2) 時制、助動詞、動名詞、不定詞、現在分詞、過去分詞、受動態、比較、関係代名詞、関係副詞、仮定法など、重要な文法事項を正確に理解する。		
授業の概要	毎回のテーマにそって、講義を中心に授業を進める。 必要に応じて授業内容に関連する課題を提出してもらう。		
授業計画	第1回	イントロダクション 英語の基礎とは？	
	第2回	5文型：第1文型、第2文型、第3文型	
	第3回	5文型：第4文型、第5文型	
	第4回	時制	
	第5回	助動詞	
	第6回	動名詞	
	第7回	現在分詞	
	第8回	中間試験	
	第9回	過去分詞	
	第10回	受動態	
	第11回	不定詞	
	第12回	比較	
	第13回	関係代名詞	
	第14回	関係副詞	
	第15回	仮定法	
準備学習 (予習・復習等)	授業で取り上げる章の英文を読んで、英文の意味を考えておくこと。Exercise の一部は課題としますので、復習として、自分で解答を考えること。		
テキスト	Basic English Grammar with Short Readings (読むための基礎英文法) (朝日出版)		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	課題:20% 中間試験:40% 期末試験:40%		

共通英語 G		前期 1 単位	1年
英文法と英文読解の基礎		藤村 待子 (ふじむら まちこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語をさまざまな角度から、読み解くための手掛かりを理解すること、特に英文読解の前提となる文法の基礎を理解することを目指します。また、それによって、英語で書かれた文章を正確に読んでいくことができるようになることを目標とします。		
授業の概要	教科書とプリントに沿って、英文法を丁寧に確認していきます。補足プリントの例文では、Peter Rabbitやナルニア物語などの引用も用いる予定ですが、授業内容は、なるべく受講者の興味、理解度などで柔軟に修正していきたいと思っています。また、もしも時間があれば、世界の子どもたちと人権の二つに関連して書かれた短い英文も読みたいと思います。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	文型	
	第3回	代名詞(1) itのさまざまな用法	
	第4回	代名詞(2) それ以外の代名詞について	
	第5回	時制	
	第6回	助動詞	
	第7回	態(1) コミュニケーションのために受動態が好まれる場合	
	第8回	態(2) さまざまな文の受動態	
	第9回	不定詞	
	第10回	動名詞	
	第11回	分詞	
	第12回	関係詞(1) 関係代名詞	
	第13回	関係詞(2) 関係副詞	
	第14回	比較	
	第15回	仮定法	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業の前に、教科書の該当箇所を読んで、分からない単語の意味を調べて、文意を推測してから、授業に臨むようにしてください。また、授業後は、教科書と補足プリントを復習してください。		
テキスト	Keiichiro Fukui and Chikara Kato, <i>Basic English Grammar with Short Readings</i> (『読むための基礎英文法』朝日出版社)、プリントも配布します。		
参考文献	授業中に適宜紹介いたします。		
評価方法	授業中の課題への取組:30% 提出物:10% 期末試験:60%		

応用英語 I A		前期 1 単位	1年
Talking and learning about Japanese culture through English		ウィルソン (WILSON, J. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) to deepen students' understanding of Japanese culture 2) to learn to explain effectively about Japanese culture in English to non-Japanese people		
授業の概要	Before class students read assigned materials and complete weekly worksheets; they share their answers in class in English with other students, interact with the teacher and listen to short lectures.		
授業計画	第1回	Course introduction & Kabuki I	
	第2回	Koinobori	
	第3回	Boys' Day	
	第4回	Kimono	
	第5回	Take	
	第6回	National Holidays	
	第7回	Japanese Religion I	
	第8回	Tanuki, Kappa, Tengu & Maneki Neko	
	第9回	Kabuki II	
	第10回	Kekkon & Omiai	
	第11回	Washi	
	第12回	Ikebana	
	第13回	Geisha	
	第14回	Miso, Shoyu & Tofu	
	第15回	Review	
準備学習 (予習・復習等)	Before students attend class, they must read the assigned portions of the textbook and other written materials, and complete weekly worksheets. After class, students must review and remember the information studied.		
テキスト	Introduction to Japanese Culture, edited by Daniel Sosnoski, pub. Tuttle, ISBN 978-4-8053-1095-3		
参考文献	None		
評価方法	Worksheets :60% Class participation:10% Quizzes:30%		

応用英語 I B		前期 1 単位	1年
American Culture I		オクマ (OKUMA, G. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	1. To introduce students to the events that have resulted in the present culture of America. 2. To introduce students to the term 'multicultural' . 3. To give students an opportunity to think about their own roots.		
授業の概要	This English-only, semester-long course will explore the questions: What is the nature of American culture? Is America a multicultural country?		
授業計画	第1回	Course Introduction	
	第2回	Native Americans	
	第3回	Colonial Period	
	第4回	European Immigration (Old Immigrants)	
	第5回	European Immigration I (New Immigrants)	
	第6回	Effects of Immigration	
	第7回	Presentations A	
	第8回	Midterm Examination	
	第9回	African Americans (Slave Trade)	
	第10回	African Americans (Slavery)	
	第11回	African Americans (Civil Rights Movement I)	
	第12回	African Americans (Civil Rights Movement II)	
	第13回	Racism in America	
	第14回	Presentations B	
	第15回	Final Examination	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to hand in homework on time and prepare for the presentations.		
テキスト	Handouts will be provided by the instructor.		
参考文献	Information will be given in class.		
評価方法	Tests:50% Presentations:30% Homework:20%		

応用英語 I C		前期 1 単位	1年
Giving presentations in English		ウィルソン (WILSON, J. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) to help students understand the structure of speeches and how to write them 2) to build students' confidence in giving oral presentations effectively in front of others.		
授業の概要	Students listen to model speeches, practice them in pairs, write original speeches, and present them in class. They also learn pronunciation, posture, eye contact, vocal techniques and gestures, and use of visual aids.		
授業計画	第1回	Course introduction	
	第2回	Self-introduction/study	
	第3回	Self-introduction/practice	
	第4回	Self-introduction/preparation	
	第5回	Self-introduction/presentation	
	第6回	Introducing someone/study	
	第7回	Introducing someone/practice	
	第8回	Introducing someone/preparation	
	第9回	Introducing someone/presentation	
	第10回	Demonstration speech/study	
	第11回	Demonstration speech/practice	
	第12回	Demonstration speech/preparation	
	第13回	Demonstration speech/preparation of visual aids	
	第14回	Demonstration speech/pronunciation and gestures	
	第15回	Demonstration speech/presentation	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to prepare for class by reviewing previous lesson content and by practicing pronunciation. After class, students must complete all homework assignments, which include researching their speech topics and writing their speeches.		
テキスト	Getting Ready For Speech by Charles LeBeau / David Harrington, pub. Language Solutions Inc. ISBN 1-929274-45-9		
参考文献	None		
評価方法	Presentations:80% Class Participation:20%		

応用英語 I D		前期 1 単位	1年
English Through Drama I		オクマ (OKUMA, G. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	1.To introduce students to drama techniques. 2.To give students an opportunity to express themselves in English in front of an audience.		
授業の概要	Students in this semester-long course will learn English through drama techniques. This informal, fun, and non confrontational method will increase their confidence in communicating in English inside and outside the classroom. Games, short sketches, role plays and other activities will be brought into the classroom.		
授業計画	第1回	Course Introduction	
	第2回	Games & Physical Warm-ups	
	第3回	Voice Warm-up Activities	
	第4回	Role-Plays	
	第5回	Sketches	
	第6回	Sketch Assignments A	
	第7回	Rehearsals A	
	第8回	Mini-Sketch Presentations	
	第9回	Evaluations	
	第10回	Mini-Activities	
	第11回	Body Language	
	第12回	Sketch Assignments B	
	第13回	Video Clip/Discussion	
	第14回	Rehearsals B	
	第15回	Final Presentations	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to hand in homework on time and prepare for the presentations.		
テキスト	Handouts will be provided by the instructor.		
参考文献	Information will be given in class.		
評価方法	Presentations :50% Participation :25% Homework:25%		

応用英語Ⅱ A		後期 1 単位	1年
Talking and learning about Japanese culture through English		ウィルソン (WILSON, J. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) to deepen students' understanding of Japanese culture 2) to learn how to explain effectively about Japanese culture in English to non-Japanese people.		
授業の概要	Before class students read assigned materials and complete weekly worksheets; they share their answers in class in English with other students, interact with the teacher and listen to short lectures.		
授業計画	第1回	Course Introduction & Mata Tabi	
	第2回	Enka	
	第3回	Soba & Udon	
	第4回	Japanese Writing	
	第5回	Japanese Names	
	第6回	Geta	
	第7回	Shichi-Go-San	
	第8回	Japanese Religion II	
	第9回	Kabuki III	
	第10回	Ocha & Chanoyu	
	第11回	Japanese Games/ Hanafuda & Hyakunin Isshu	
	第12回	Hagoita	
	第13回	Shogatsu	
	第14回	Wagashi	
	第15回	Review	
準備学習 (予習・復習等)	Before students attend class, they must read the assigned portions of the textbook and other written materials, and complete weekly worksheets. After class, students must review and remember the information studied.		
テキスト	Introduction to Japanese Culture, edited by Daniel Sosnoski, pub. Tuttle, ISBN 979-4-8053-1095-3		
参考文献	None		
評価方法	Worksheets:60% Class participation:10% Quizzes:30%		

応用英語ⅡB		後期 1 単位	1年
American CultureⅡ		オクマ (OKUMA, G. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>1.To introduce students to the events that have resulted in the present culture of America. 2.To introduce students to the term 'multicultural' .</p>		
授業の概要	<p>This English-only, semester-long course follows American Culture I. Students will continue to examine the different changes which each ethnic group brought to America.</p>		
授業計画	第1回	Course Introduction	
	第2回	Asian and Pacific Americans	
	第3回	Chinese Americans	
	第4回	Korean Americans	
	第5回	Japanese Americans (Immigration and Assimilation)	
	第6回	Japanese Americans (Incarceration, War, Redress)	
	第7回	Presentations A	
	第8回	Midterm Examination	
	第9回	Latinos	
	第10回	Hispanics	
	第11回	Illegal Immigration	
	第12回	Refugees	
	第13回	Contemporary Immigration	
	第14回	Presentations B	
	第15回	Final Examination	
準備学習 (予習・復習等)	<p>Students are expected to hand in homework on time and prepare well for their presentations.</p>		
テキスト	<p>Handouts will be provided by the instructor.</p>		
参考文献	<p>Information will be given in class.</p>		
評価方法	<p>Tests:50% Presentations:30% Homework :20%</p>		

応用英語ⅡC		後期 1 単位	1年
Giving presentations in English		ウィルソン (WILSON, J. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) to help students understand the structure of speeches and how to write them 2) to build students' confidence in giving oral presentations effectively in front of others.		
授業の概要	Students listen to model speeches, practice them, write original speeches and present them in class. Students also learn pronunciation, posture, eye contact, vocal techniques and gestures, and use of visual aids.		
授業計画	第1回	Course introduction/Layout speech/study	
	第2回	Layout speech/practice	
	第3回	Layout speech/preparation	
	第4回	Layout speech/preparation of visual aids	
	第5回	Layout speech/presentation	
	第6回	Book & movie review/study	
	第7回	Book & movie review /practice	
	第8回	Book & movie review/preparation	
	第9回	Book & movie review/preparation of visual aids	
	第10回	Book & movie review/presentation	
	第11回	Show and tell speech/study	
	第12回	Show and tell speech/practice	
	第13回	Show and tell speech/preparation	
	第14回	Show and tell speech/preparation of visual aids	
	第15回	Show and tell speech/presentation	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to prepare for class by reviewing previous lesson content and by practicing pronunciation. After class, students must complete all homework assignments, which include researching their speech topics and writing their speeches.		
テキスト	Getting Ready For Speech by Charles LeBeau / David Harrington, pub. Language Solutions Inc. ISBN 1-929274-45-9		
参考文献	None		
評価方法	Presentations:80% Class participation:20%		

応用英語Ⅱ D		後期 1 単位	1年
English Through Drama II		オクマ (OKUMA, G. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	1.To introduce students to drama techniques. 2.To give students an opportunity to express themselves in English in front of an audience.		
授業の概要	This semester-long course follows English Through Drama I. Students will continue to learn and enjoy using English using drama techniques.		
授業計画	第1回	Course Introduction	
	第2回	Drama Techniques	
	第3回	Expressions	
	第4回	Emotions/Role plays	
	第5回	Sketch I	
	第6回	Preparation/Practice/Presentations I	
	第7回	Sketch II	
	第8回	Preparation/Practice/Presentations II	
	第9回	Sketch III	
	第10回	Preparation/Practice/Presentations III	
	第11回	Sketch IV	
	第12回	Preparation/Practice/Presentations IV	
	第13回	Rehearsals	
	第14回	Final Performance	
	第15回	Evaluations	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to participate enthusiastically and prepare well for their presentations.		
テキスト	Handouts will be provided by the instructor.		
参考文献	Information will be given in class.		
評価方法	Final Performance:50% Participation:25% Homework:25%		

フランス語 I		前期 1 単位	1年
日常のコミュニケーション能力を獲得するために		加藤 行男 (かとう ゆきお)	
授業の到達目標 及びテーマ	毎回の授業を通してフランス語の綴り字と発音の対応関係をしっかりと身につける。基本動詞の現在形の活用を学習し、それに基づいて、疑問の表し方、あるいは答え方などを習得し、必要な情報を獲得し、また発信できるようになること。		
授業の概要	毎回の授業で音読の練習を行う。初めてのフランス語であるから、フランス語の仕組み＝文法に関しては教員が少しずつ説明していくが、その他の練習などは受講生各自にやってもらう。各課が終わる毎に小テストを行う。毎回、必ず辞書を持参すること。授業中にスマートフォン等を使用することは認めない。		
授業計画	第1回	UNITÉ préliminaire : アルファベ、入国カード、月の名、数詞	
	第2回	UNITÉ 1 : 私たちは一緒にパリを訪れます ことばの形 : 1. 名詞の性と数 2. 定冠詞と不定冠詞 3. 主語人称代名詞	
	第3回	UNITÉ 1 : 私たちは一緒にパリを訪れます ことばの形 : 4. 現在形 5. -er規則動詞の現在形 6. イントネーションによる疑問文	
	第4回	UNITÉ 1 : 私たちは一緒にパリを訪れます 練習問題と聞き取り練習	
	第5回	UNITÉ 2 : 部屋はありますか ことばの形 : 1. 不定冠詞 2. 不規則動詞の現在形 (1) être, avoir	
	第6回	UNITÉ 2 : 部屋はありますか ことばの形 : 3. 形容詞の変化と一致 4. 疑問文 (2)	
	第7回	UNITÉ 2 : 部屋はありますか 練習問題と聞き取り練習	
	第8回	UNITÉ 3 : 両替所はどこですか ことばの形 : 1. 所有形容詞 (1) あなたの 2. 指示代名詞 この あの その 3. -ir規則動詞の現在形	
	第9回	UNITÉ 3 : 両替所はどこですか ことばの形 : 4. 不規則動詞の現在形 (2) aller 5. 前置詞 à と定冠詞 le, les の縮約 6. 疑問副詞 où, combien	
	第10回	UNITÉ 3 : 両替所はどこですか 練習問題と聞き取り練習	
	第11回	UNITÉ 4 : ルーブル美術館へはどのように行きますか ことばの形 : 1. 不規則動詞の現在形 (3) savoir, prendre, descendre 2. 否定文	
	第12回	UNITÉ 4 : ルーブル美術館へはどのように行きますか ことばの形 : 3. 前置詞 de と定冠詞 le, les の縮約 4. 疑問副詞	
	第13回	UNITÉ 4 : ルーブル美術館へはどのように行きますか 練習問題と聞き取り練習	
	第14回	UNITÉ 5 : UNITÉ 1 ～ 4 の復習問題	
	第15回	UNITÉ 5 : UNITÉ 1 ～ 4 の発展問題	
準備学習 (予習・復習等)	意味の分からない単語や熟語は必ず辞書で調べておく。練習問題は授業前に一通り自分でやっておくこと。辞書は紙の辞書を使用するのが望ましい。		
テキスト	三訂版『やさしく学ぶ旅のフランス語』中村敦子著 (第三書房)		
参考文献	特になし		
評価方法	小テスト:30% 定期試験:70%		

フランス語 I		前期 1 単位	1年
フランス語での日常的コミュニケーションー基礎		杉山 友一（すぎやま ゆういち）	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語の基礎的な文法と会話表現を修得し、使えるようになる。特に規則動詞を中心とする基本的な動詞を、主に1人称及び2人称の現在形で用いた単文、及びそれによって作られている短い会話の理解と発話ができるようになることを重視する。		
授業の概要	テキスト付属のCDを使い、発音を聞きそのまねをして、音に親しむようにする。できる限り1人1人が発音し、フランス語を発音する行為自体に慣れると共に、2人での対話練習も行う。自分で発話するメカニズムとしての文法を重視し、文法を当初から丁寧に学習する。各課ごとに小テスト（主に単語テスト）を行って学習成果を確認する。		
授業計画	第1回	自己紹介（日本語）、フランスについての基礎知識、文字と発音	
	第2回	文字と発音の復習、第1課：タクシーに乗る（国籍や職業を伝える）－主語人称代名詞と動詞êtreを使う。	
	第3回	文法の復習と会話、練習問題	
	第4回	第1課Lecture、第2課：ホテルにチェックインする－動詞avoirと不定冠詞、名詞の性・数	
	第5回	文法の復習と会話、練習問題	
	第6回	第2課Lecture、第3課：友達に会う－規則動詞、所有形容詞、疑問文	
	第7回	文法の復習と会話、練習問題	
	第8回	ビデオ（フランスの地理）、第3課Lecture	
	第9回	第4課：カフェで話す（自分の感想を言う）－形容詞、否定文	
	第10回	文法の復習と会話、練習問題	
	第11回	第4課Lecture、第5課：電話で話す（希望と予定を伝える）－指示形容詞、近い未来	
	第12回	文法の復習と会話、練習問題	
	第13回	第5課Lecture、第6課：道を尋ねる－疑問文	
	第14回	文法の復習と会話、練習問題	
	第15回	第6課Lecture、半年間の復習	
準備学習 (予習・復習等)	単語の意味を調べておくことは、最低限度の準備として必要です。また、テキストに付属のCDを良く聴いておくこと。		
テキスト	新・彼女は食いしん坊！ 1 （朝日出版社）		
参考文献	東京-パリ、フランス語の旅（藤田祐二他：駿河台出版社）、フランス文法の入門（島岡茂：白水社）		
評価方法	試験：80% 授業中の問題：10% 小テスト：10%		

フランス語 I		前期 1 単位	1年
初めてのフランス語		檜垣 嗣子 (ひがき つぎこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語とは異なるフランス語の音・綴りを理解し、知らない単語でも発音を推測できるようになる。 ・ 挨拶などの初歩的な表現を身につける。 		
授業の概要	<p>教科書にそって、フランス語を最初の一步から学んでいきます。 発音練習やフランス語での受け答えを頻繁におこなうため、授業中は積極的な姿勢が求められます。 簡単な挨拶や会話ができるようになることを目指し、普段の生活で無意識に接しているフランス語にも気づけるようになりましょう。 また、習ったことが確実に身につくよう、授業のはじめに必ず小テストをおこないます。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス：フランス語のアルファベット、綴り字記号	
	第2回	あいさつの表現、フランス語のつづりの読み方	
	第3回	自己紹介、主語の代名詞、動詞êtreの現在形	
	第4回	職業・国籍をあらわす表現	
	第5回	自分・他人を紹介する（応用）	
	第6回	「これはなんですか?」、名詞の性と数	
	第7回	冠詞（不定冠詞・定冠詞）	
	第8回	冠詞のつづき（部分冠詞）と色々な名詞	
	第9回	er動詞の現在形、疑問文	
	第10回	問いと答え、まとめと復習	
	第11回	avoirの現在形、数字（～20）	
	第12回	否定文、曜日と月	
	第13回	形容詞の使い方、数字（21～30）	
	第14回	特殊な形容詞	
	第15回	総まとめと復習	
準備学習 (予習・復習等)	第3回目以降は、毎回授業のはじめに小テストをおこないます。前回の授業内容をよく復習してきてください。		
テキスト	松本伊瑛子、内田智秀、下村武、フランク・デルパール（著）『iConos（イコノス）—初心者のためのフランス語入門』（アシェット・ジャポン）		
参考文献	必要に応じ授業で紹介。仏和辞典の購入については初回にアドバイスします。		
評価方法	小テスト・宿題:20% 定期試験:80%		

フランス語 I		前期 1 単位	1年
フランス語入門		二川 佳巳 (ふたがわ よしみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語入門のクラスとして、フランス語を正しく発音し、コミュニケーションに必要な基本的表現や文法規則を理解する。		
授業の概要	演習形式で授業をすすめる。まず必要な文法事項を解説し、スケッチを参考にしてやさしい会話表現を学び、最後に練習問題を解いて理解度を確認する。必要に応じて小テストを行い、中間テストと期末テストを行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション、アルファベ	
	第2回	フランス語の音	
	第3回	綴り字の読み方	
	第4回	主語代名詞、リエゾン・アンシェーヌマン・エリズィオン	
	第5回	自己紹介、動詞 être	
	第6回	名詞の性と数、不定冠詞	
	第7回	指示代名詞、形容詞の性・数一致	
	第8回	-er 動詞、定冠詞	
	第9回	疑問文、中間テスト	
	第10回	動詞 avoir、形容詞の位置	
	第11回	否定文、人称代名詞強勢形	
	第12回	指示形容詞、動詞 aller、faire	
	第13回	近接未来、所有形容詞	
	第14回	動詞 pouvoir、疑問形容詞、数詞 1~30	
	第15回	疑問代名詞	
準備学習 (予習・復習等)	各課のスケッチを学んだら、次回にすらすら読めるように復習しておくこと。また、すでにその課の文法事項の説明が終わっている場合は、練習問題を予習しておくこと。		
テキスト	藤田祐二・東海麻衣子『タルト・タタン』（駿河台出版社）		
参考文献	最初の授業で指示		
評価方法	中間・期末テスト:60% 小テストを含む平常点:40%		

フランス語Ⅱ		後期 1 単位	1年
コミュニケーションの幅を広げよう		加藤 行男 (かとう ゆきお)	
授業の到達目標 及びテーマ	綴り字と発音の対応関係の習得度をより確かなものとする。現在形だけでなく過去形を用いた表現、あるいは比較級や代名詞などを用いた幅広い表現を理解し、自らもこれらを使用できるようになること。		
授業の概要	毎回、音読の練習を行う。文法事項の説明は教員が行うが、その他の練習問題や訳読は受講生各人にやってもらうので、受け身の学習にならないように積極的に取り組んでもらいたい。各課が終わる毎に小テストを実施する。毎回、必ず辞書を持参すること。授業中にスマートフォン等を使用することは認めない。		
授業計画	第1回	フランス語Ⅰの復習	
	第2回	UNITÉ 6 : 支払いはどうしますか ことばの形 : 1. 目的語になる人称代名詞 2. 近接過去 3. 関係代名詞 (1) que / qu'	
	第3回	UNITÉ 6 : 支払いはどうしますか ことばの形 : 4. 形容詞の比較級 5. 不規則動詞の現在形 (4) mettre, venir, pouvoir	
	第4回	UNITÉ 6 : 支払いはどうしますか 練習問題と聞き取り練習	
	第5回	UNITÉ 7 : 急いでください ことばの形 : 1. 命令文 2. 代名動詞 3. 近接未来	
	第6回	UNITÉ 7 : 急いでください ことばの形 : 4. 関係代名詞 (2) qui 5. 不規則動詞の現在形 (5) partir, faire 6. 疑問形容詞	
	第7回	UNITÉ 7 : 急いでください 練習問題と聞き取り練習	
	第8回	UNITÉ 8 : お決まりですか ことばの形 : 1. 複合過去 (1) 助動詞 avoir 2. 部分冠詞 3. 疑問代名詞	
	第9回	UNITÉ 8 : お決まりですか ことばの形 : 4. 強勢形の人称代名詞 5. 不規則動詞の現在形 (6) vouloir	
	第10回	UNITÉ 8 : お決まりですか 練習問題と聞き取り練習	
	第11回	UNITÉ 9 : 私たちはエッフェル塔に登りました ことばの形 : 1. 複合過去 (2) 助動詞 être	
	第12回	UNITÉ 9 : 私たちはエッフェル塔に登りました ことばの形 : 2. 関係代名詞 (3) dont, où 3. 所有形容詞 (2) 私の 君の その他	
	第13回	UNITÉ 9 : 私たちはエッフェル塔に登りました 練習問題と聞き取り練習	
	第14回	UNITÉ 10 : UNITÉ 6 ~ 9 の復習問題	
	第15回	UNITÉ 10 : UNITÉ 6 ~ 9 の発展問題	
準備学習 (予習・復習等)	意味の分からない単語や熟語は必ず辞書で調べておく。練習問題は授業前に一通り自分の力で答えを出しておくこと。		
テキスト	三訂版『やさしく学ぶ旅のフランス語』中村敦子著 (第三書房)		
参考文献	特になし		
評価方法	小テスト:30% 定期試験:70%		

フランス語Ⅱ		後期 1 単位	1年
フランス語での日常的コミュニケーションー基礎（続）		杉山 友一（すぎやま ゆういち）	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語の基礎的な文法と会話表現を修得する。比較や未来などフランス語より複雑な構造を取り入れて、次第に複雑な内容の会話ができるようになる。		
授業の概要	フランス語Ⅰから引き続き、基礎的な文法と表現を学習するが、知識の正確さ、多様さを重視する。そのため、Ⅱでは筆記のウェイトを増やし、学生が板書する機会を増やす。		
授業計画	第1回	7月の試験の解説	
	第2回	フランス語Ⅰの簡単な復習、第7課：買い物ー数量の表現	
	第3回	文法の復習と会話、練習問題	
	第4回	第8課：サッカー観戦ー疑問形容詞、非人称	
	第5回	文法の復習と会話、練習問題	
	第6回	第8課Lecture, 仏検の問題	
	第7回	第9課：デパートでの買い物ー比較の表現	
	第8回	文法の復習と会話、練習問題	
	第9回	第9課Lecture, 第10課：紹介するー補語と代名動詞	
	第10回	文法の復習と会話、練習問題	
	第11回	ビデオ（パリのクリスマス）、第10課Lecture	
	第12回	第11課：旅の話ー過去を表す表現	
	第13回	文法の復習と会話、練習問題	
	第14回	第11課Lecture、第12課：別れを言うー未来を表す表現	
	第15回	文法の復習と会話、練習問題、定期試験前の復習	
準備学習 (予習・復習等)	単語の意味調べは必ず必要です。動詞の活用がだんだんと多様化するので、新出動詞の活用を授業の後でしっかり復習すること。		
テキスト	新・彼女は食いしん坊！1（藤田祐二、朝日出版社）		
参考文献	東京ーパリ、フランス語の旅（藤田祐二他：駿河台出版社）、フランス文法の入門（島岡茂：白水社）		
評価方法	試験：80% 授業中の問題：10% 小テスト：10%		

フランス語Ⅱ		後期 1 単位	1年
フランス語の基礎を学ぶ		檜垣 嗣子 (ひがき つぎこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	初歩的なフランス語の文章を理解し・使えるようになる。 自分の好みや生活など、フランス語で自分について表現できるようになる。		
授業の概要	教科書にそってフランス語の基礎を学びます。 綴り字の発音や基本文は何度もくり返し、着実に身につけられるよう練習します。 また、授業のはじめには前回の内容について小テストをおこないます。		
授業計画	第1回	問いと答え方のまとめ、ir動詞の現在形	
	第2回	指示形容詞と所有形容詞	
	第3回	「どのように、なぜ、いつ、どこ？」	
	第4回	時間の表現、疑問形容詞	
	第5回	天気表現、非人称構文	
	第6回	「～できる」、動詞allerの現在形	
	第7回	〈à+定冠詞〉の縮約、近接未来	
	第8回	「～したい、ほしい」、動詞venirの現在形	
	第9回	〈de+定冠詞〉の縮約、近接過去	
	第10回	命令形、復習	
	第11回	過去分詞の作り方、複合過去の形	
	第12回	動詞voirとprendre	
	第13回	色々な動詞の複合過去	
	第14回	練習問題	
	第15回	総まとめと復習	
準備学習 (予習・復習等)	第2回目からは、授業のはじめに毎回小テストをおこないます。前回の授業内容をよく復習してきてください。		
テキスト	松本伊瑛子、内田智秀、下村武、フランク・デルパール (著) 『iConos (イコノス) —初心者のためのフランス語入門』 (アシェット・ジャポン)		
参考文献	必要な場合は授業中に紹介します。		
評価方法	小テスト・宿題:20% 定期試験:80%		

フランス語Ⅱ		後期 1 単位	1年
フランス語の初級		二川 佳巳 (ふたがわ よしみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語Ⅰに続く初級のクラスとして、さまざまな動詞や時制を学び、やさしいフランス語の文を理解し表現できるようになる。		
授業の概要	演習形式で授業をすすめる。必要な文法事項を解説した後、スケッチを通してやさしい会話表現を学び、練習問題で理解度を確認する。必要に応じて動詞活用の小テストや書き取りを行い、中間試験・定期試験を行う。		
授業計画	第1回	定冠詞の縮約、疑問副詞	
	第2回	動詞 vouloir, prendre、部分冠詞	
	第3回	特殊な形容詞、数量表現	
	第4回	動詞 venir、第2群規則動詞	
	第5回	補語人称代名詞	
	第6回	中性代名詞	
	第7回	中間テスト、動詞 savoir, connaître	
	第8回	複合過去形	
	第9回	半過去形	
	第10回	非人称構文、感嘆文	
	第11回	代名動詞	
	第12回	比較級、最上級	
	第13回	指示代名詞	
	第14回	単純未来形	
	第15回	命令文、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	すでに学んだスケッチをすらすら読めるように復習しておくこと。 文法事項の説明が終わっている場合は、練習問題を予習しておくこと。		
テキスト	藤田祐二・東海麻衣子「タルト・タタン」(駿河台出版社)		
参考文献	特になし		
評価方法	定期試験:60% 小テストを含む平常点:40%		

ドイツ語 I		前期 1 単位	1年
ドイツ語入門		飯田 道子 (いいた みちこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	ドイツ語文法の基礎、簡単な文章を理解する力、ドイツ語で表現できる力をつけていきます。		
授業の概要	パートナー練習と練習問題をとおして文法の基礎固めをしていきます。ほかにも映像資料などを使って、ドイツ語圏の文化に親しむようにしていきたいと思います。		
授業計画	第1回	導入 簡単なあいさつから	
	第2回	自己紹介 アルファベットと発音の基礎知識	
	第3回	お互いに知り合う	
	第4回	動詞の現在人称変化 (規則変化)	
	第5回	動詞の現在人称変化 (sein)	
	第6回	動詞の現在人称変化 (haben 不規則変化動詞)	
	第7回	名詞の性	
	第8回	冠詞 ~好きな食べ物	
	第9回	冠詞類	
	第10回	不規則な変化をする動詞	
	第11回	分離動詞 ~週末の予定、一日の行動など	
	第12回	話法の助動詞 ~「～したい」という表現	
	第13回	非人称 ~天気表現	
	第14回	「夏休みは何をする？」	
	第15回	前期の総まとめ、試験	
準備学習 (予習・復習等)	学習した事柄はしっかり復習しておいてください。		
テキスト	アプファール<ノイ> スキットで学ぶドイツ語 (三修社) 飯田道子・江口直光 著		
参考文献	授業のはじめに独和辞典を紹介しますので、必携のこと		
評価方法	授業への出席と積極性:20% 授業内課題:20% 筆記試験:60%		

ドイツ語 I		前期 1 単位	1年
ドイツ語入門		大谷 美奈 (おおたに みな)	
授業の到達目標 及びテーマ	読む、書く、聴く、話すという多角度で、実際のドイツ語の初歩ができるようになる。		
授業の概要	「最初の日からドイツ語を使ってコミュニケーション」を想定して作られたテキストに沿って、文法説明後、キーセンテンスとそれを踏まえた会話や文章を、付属CDを聴き、声を出して読み、覚えていきます。各課に付いている練習問題では、表現や文法事項を書いて確認します。		
授業計画	第1回	授業の概要説明、アルファベット	
	第2回	発音	
	第3回	自己紹介	
	第4回	1課の練習	
	第5回	動詞	
	第6回	語順	
	第7回	2課の練習	
	第8回	パーティーで	
	第9回	3課の練習	
	第10回	大学の食堂で	
	第11回	4課の練習	
	第12回	市電内で	
	第13回	5課の練習	
	第14回	不規則変化動詞、数字	
	第15回	他人紹介	
準備学習 (予習・復習等)	授業で出てきたドイツ語表現を、テキスト付属CDで聴き、声に出して読み、手で書いて、覚える練習を繰り返し行ってください。		
テキスト	小黑びるぎった・日野安昭・佐藤方代『ともかく話そうドイツ語 - CD付き』(郁文堂)		
参考文献	独和辞書(最初の時間に紹介。毎時間携帯してくこと)		
評価方法	試験:50% 授業参加度:50%		

ドイツ語Ⅱ		後期 1 単位	1年
ドイツ語基礎		飯田 道子 (いいだ みちこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	前の学期に学習したことをふまえて、さらに複雑な文法を学んでいきます。		
授業の概要	パートナー練習を多用して、文法の定着をはかります。適宜作文練習もいれていきます。		
授業計画	第1回	前期の復習	
	第2回	「夏休みは何をした？」など過去のできごとを表現する	
	第3回	動詞の三基本形を学ぶ	
	第4回	前置詞を使って、位置や場所に関する表現を学ぶ	
	第5回	過去形と現在完了	
	第6回	受動文 ～修理や家事・料理に関する表現	
	第7回	再帰表現 ～趣味や楽しみにしていることなど	
	第8回	ふたつの文をひとつにする方法	
	第9回	比較・最上級	
	第10回	zu不定詞を使って表現	
	第11回	従属の接続詞と副文	
	第12回	非現実の表現	
	第13回	「もしも～だったら」という表現	
	第14回	総復習	
	第15回	一年のまとめ、試験	
準備学習 (予習・復習等)	これまでに学習した内容をしっかり復習してください。		
テキスト	アプファールト<ノイ> スキットで学ぶドイツ語 (三修社) 飯田道子・江口直光 著		
参考文献	辞書は必携のこと		
評価方法	出席と授業内の課題:40% 学期末筆記試験:60%		

ドイツ語Ⅱ		後期 1 単位	1年
ドイツ語初級		大谷 美奈 (おおたに みな)	
授業の到達目標 及びテーマ	入門ドイツ語をさらに深めて、初級ドイツ語を一通り理解し、実践的運用ができるようになる。		
授業の概要	「最初の日からドイツ語を使ってコミュニケーション」を想定して作られたテキストに沿って、文法説明後、キーセンテンスとそれを踏まえた会話や文章を、付属CDを聴き、声を出して読み、覚えていきます。各課に付いている練習問題では、表現や文法事項を書いて確認します。後半はキーセンテンス練習とテキストおよび文法項目の説明で進める予定です。		
授業 計画	第1回	名詞	
	第2回	冠詞	
	第3回	7課の練習	
	第4回	名詞の1格と4格、所有冠詞	
	第5回	8課の練習	
	第6回	時刻、曜日	
	第7回	9課の練習	
	第8回	分離動詞	
	第9回	話法の助動詞	
	第10回	10課の練習	
	第11回	買い物での表現	
	第12回	11課の練習	
	第13回	名詞の3格、クリスマスや誕生日での表現	
	第14回	過去についての表現、副文	
	第15回	美容院での表現	
準備学習 (予習・復習等)	授業で出てきたドイツ語表現を、テキスト付属CDで聴き、声に出して読み、手で書いて、覚える練習を繰り返し行ってください。		
テキスト	小黑びるぎった・日野安昭・佐藤方代『ともかく話そうドイツ語 - CD付き』(郁文堂)		
参考文献	独和辞書(最初の時間に紹介。毎時間携帯してくこと)		
評価方法	試験:50% 授業参加度:50%		

中国語 I		前期 1 単位	1年
初めの中国語		孔 令敬（こう れいけい）	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座を通して、習得した発音要領による正確な発音と発音記号の運用、および基礎文型を使った簡単な表現に熟練する上で、修飾語の的確な使用による実用的なコミュニケーションができ、前期と後期を通して中検4級の語彙の習得を目指す。		
授業の概要	前期は中国語の発音要領と発音表記の規則をしっかりと理解させた上で、その正確な運用と簡単な文型の学習に重点を置き、後期はより複雑な文型と正しい修飾語の使用による豊かな表現を中心に授業を展開していく。		
授業計画	第1回	ガイダンス 中国語とは	
	第2回	母音と声調について	
	第3回	子音について	
	第4回	鼻母音と特殊母音について	
	第5回	音節と軽声	
	第6回	発音と発音表記のまとめ	
	第7回	動詞述語と形容詞が述語の表現について	
	第8回	疑問文の作り方について	
	第9回	まとめと復習	
	第10回	所在と存在を表す表現について	
	第11回	動作の進行と状態の持続を表す表現について	
	第12回	まとめと復習	
	第13回	前置詞による構文を使う表現について	
	第14回	動作の完了と過去を表す表現について	
	第15回	まとめと復習 筆記テスト	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配布したドリルとまとめのプリントはきちんとやってくること。		
テキスト	「始めの中国語」（基礎漢語）・オリジナル私家版・頒価：¥1,000		
参考文献	「やさしくくわしい中国語文法の基礎」・発行所： 東方書店、定価：¥2100		
評価方法	宿題の完成度：25% 授業への参加度：25% 筆記試験：50%		

中国語 I		前期 1 単位	1年
中国語で簡単な会話をする		本間 由香利（ほんま ゆかり）	
授業の到達目標及びテーマ	ピンイン（発音記号）を読めるようにすることと、発音練習を重視し、単語単位ではなく文章を「中国語らしく」読めるよう訓練します。次に、必要最小限の文法を学び、シンプルな文を自分で組み立てられるようになることを目指します。		
授業の概要	比較的簡単なテキストを用いてゆっくりと授業を進めます。次々に新しい事を学ぶのではなく、十分に理解した上で反復訓練を行なうことを中心にします。学生諸君には大きな声で発音すること、進んで質問すること等、積極的に授業に参加して頂くことを期待します。また第三の言語を学び、日本語・英語を見る別の視線を身につける事にも配慮します。		
授業計画	第1回	私達が学ぶ「中国語」とは何か	
	第2回	発音記号について	
	第3回	発音練習（基礎）	
	第4回	発音練習（応用）	
	第5回	第1課「動詞“是”、否定文、疑問文」	
	第6回	復習と練習問題	
	第7回	第2課「形容詞の文」	
	第8回	復習と練習問題	
	第9回	第3課「疑問詞の文」	
	第10回	復習と練習問題	
	第11回	第4課「助動詞、副詞」	
	第12回	復習と練習問題	
	第13回	第5課「数詞、量詞」	
	第14回	復習と練習問題	
	第15回	前期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめテキスト付属CDを聞き、中国語の発音に慣れておくこと		
テキスト	『1冊めの中国語』喜多山幸子 他著 白水社		
参考文献	授業内で指示する		
評価方法	平常点:60% 定期テストの平均:40%		

中国語 I		前期 1 単位	1年
初修中国語		劉 書明 (りゅう しよめい)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>初心者に中国語の基礎を教える。</p> <p>①中国語の基礎発音、基礎文法、基礎句型等の知識を正確に理解し、確実に身につける。</p> <p>②凡そ単語1000語、基本文法、句型20個を目指す。</p> <p>③日常挨拶、簡単な会話ができる。</p>		
授業の概要	<p>まず、中国語の発音を母音、子音、声調の3回に分けて授業を進め、練習と復習を念入りに繰り返して行う。</p> <p>次に、簡単な会話文と文章を中心に基礎文法、句型を習うと同時に、発音の復習も重ねて行う。</p> <p>尚、授業の一環として宿題、小テストも行う。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	第1課 発音1、母音	
	第3回	母音の練習、復習	
	第4回	第2課 発音2、子音	
	第5回	子音の練習、復習	
	第6回	第3課 発音3、声調	
	第7回	声調の練習、復習 発音の小テスト	
	第8回	第4課 夏休み	
	第9回	本文の練習、復習 小テスト	
	第10回	第5課 外国語学習	
	第11回	本文の練習、復習 小テスト	
	第12回	第6課 どこから来たの？	
	第13回	本文の練習、復習 小テスト	
	第14回	1課から3課までの発音の総合復習	
	第15回	4課から6課までの総合復習	
準備学習 (予習・復習等)	必ず、授業前に予習、授業後に復習する。予習は、単語の発音、意味及び課文の読み方。復習は、文法、作文、課文の意味。そして、小テストに備える。		
テキスト	初修中国語テキスト 標準中国語 総合編		
参考文献	中日辞典、日中辞典（小学館）、その他、随時配布。		
評価方法	練習:20% 宿題:20% 小テスト:10% 定期試験:40% その他:10%		

中国語Ⅱ		後期 1 単位	1年
初めの中国語		孔 令敬（こう れいけい）	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座を通して、習得した発音要領による正確な発音と発音記号の運用、および基礎文型を使った簡単な表現に熟練する上で、修飾語の的確な使用による実用的なコミュニケーションができ、前期と後期を通して中検4級の語彙の習得を目指す。		
授業の概要	前期は中国語の発音要領と発音表記の規則をしっかりと理解させた上で、その正確な運用と簡単な文型の学習に重点を置き、後期はより複雑な文型と正しい修飾語の使用による豊かな表現を中心に授業を展開していく。		
授業計画	第1回	助動詞を使う表現	
	第2回	経験と実現ずみのことを表わす表現	
	第3回	慣用句を使う表現	
	第4回	まとめと練習	
	第5回	動詞を連用する構文による表現	
	第6回	行為の程度を表す表現	
	第7回	動作の結果を表す表現	
	第8回	まとめと練習	
	第9回	動作の方向を表わす表現	
	第10回	未来表現と処置を表わす表現	
	第11回	比較を表わす表現	
	第12回	まとめと練習	
	第13回	使役を表わす表現	
	第14回	受け身を表わす表現	
	第15回	総まとめと筆記試験	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配布したドリルとまとめはきちんとやってくること。		
テキスト	「始めの中国語」（基礎漢語）・オリジナル私家版・頒価：¥1,000		
参考文献	「やさしくくわしい中国語文法の基礎」・発行所： 東方書店、定価：¥2100		
評価方法	宿題の完成度：25% 授業への参加度：25% 筆記試験：50%		

中国語Ⅱ		後期 1 単位	1年
中国語で簡単な会話をする		本間 由香利（ほんま ゆかり）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期に学んだ文法事項の理解と反復練習を通じて、自分のこと、身の回りの事柄について、簡単な中国語で会話ができるようになることを目標とします。		
授業の概要	比較的簡単なテキストを用いてゆっくりと授業を進めます。次々に新しい事を学ぶのではなく、十分に理解した上で反復訓練を行なうことを中心にします。学生諸君には大きな声で発音すること、進んで質問すること等、積極的に授業に参加して頂くことを期待します。また第三の言語を学び、日本語・英語を見る別の視線を身につける事にも配慮します。		
授業計画	第1回	前期の内容復習 第6課「動詞“有”と“在”」	
	第2回	復習と練習問題	
	第3回	第7課「連動文」	
	第4回	復習と練習問題	
	第5回	第8課「前置詞」	
	第6回	復習と練習問題	
	第7回	第9課「助動詞“会”、“能”、“可以”」	
	第8回	復習と練習問題	
	第9回	第10課「過去の経験」	
	第10回	復習と練習問題	
	第11回	第11課「比較の文」	
	第12回	復習と練習問題	
	第13回	第12課「結果補語、二重目的語文」	
	第14回	復習と練習問題	
	第15回	後期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ付属CDを聞き、中国語の発音に慣れておくこと		
テキスト	『1冊めの中国語 会話クラス』喜多山幸子 他著 白水社		
参考文献	授業内で指示する		
評価方法	平常点:60% 定期テストの平均:40%		

中国語Ⅱ		後期 1 単位	1年
初修中国語		劉 書明（りゅう しょめい）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>前期に引き続き、中国語の基礎を学ぶ。</p> <p>①すでに習った中国語の発音、基礎文法、基礎句型を復習し、更に単語1000語、句型20個を増やす。</p> <p>②日常会話、簡単な文章を書けることを目指す。</p>		
授業の概要	<p>始めに、前期の発音、文法、挨拶、会話等の復習を行う。それを基礎にスキルアップを図る。</p> <p>次に、中級の難易度にレベルアップし、会話と文章の学習を行うと同時に、作文の訓練も行う。</p> <p>前期同様、授業の一環として課題、小テストを行う。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	前期の復習	
	第3回	復習の練習、小テスト	
	第4回	第7課 部屋探し	
	第5回	本文の練習、復習	
	第6回	第8課 北京と上海	
	第7回	本文の練習、復習 小テスト	
	第8回	第9課 アルバイト	
	第9回	本文の練習、復習	
	第10回	第10課 レポート	
	第11回	本文の練習、復習 小テスト	
	第12回	第11課 計画と目標	
	第13回	本文の練習、復習 小テスト	
	第14回	7課から9課までの総合復習	
	第15回	10課から11課までの総合復習	
準備学習 (予習・復習等)	必ず、授業前に予習、授業後に復習する。予習は単語の発音、意味及び課文の読み方。復習は、文法、作文、課文の意味。そして、小テストに備える。		
テキスト	初修中国語テキスト 標準中国語 総合編 （朝日出版社）		
参考文献	中日辞典、日中辞典（小学館）。その他は、随時配布。		
評価方法	練習:20% 宿題:20% 小テスト:10% 定期試験:40% その他:10%		

韓国語 I		前期 1 単位	1年
韓国語と韓国の文化・社会 1		川村 受映 (かわむら じゅえい)	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座では、韓国語の基礎をマスターすることを目的とする。韓国語の読み書きをはじめ、文章の作り方など基本的な文法を指導するが、全体的に会話に重点を置く。具体的には授業中二人一組のペアを組み、会話の練習を繰り返すことで簡単な日常会話ができるようにする。なお、韓国関係のDVD映画などを用いることで、韓国の現代社会や文化にもふれる。インターネットを活用して授業を進めると同時にコンピューターでハングルのやり取りができるようになる。		
授業の概要	講義形式 教科書に沿って講義をすすめる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び韓国語についての全般的な説明	
	第2回	基本母音 基本子音 (読み、書き)	
	第3回	複合母音 終音	
	第4回	単語の発音	
	第5回	第1課 「・・・はです (か)」の表現	
	第6回	第1課 会話練習	
	第7回	第2課 名詞+です	
	第8回	第2課 会話練習	
	第9回	第3課 時間言い方	
	第10回	第3課 会話練習	
	第11回	第4課 助詞	
	第12回	第4課 会話練習	
	第13回	第5課 指示代名詞	
	第14回	第5課 会話練習	
	第15回	第5課 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習内容：毎授業後宿題を提出すること。 予習内容：次回の授業内容を読んでくること。		
テキスト	「かんたん！ 韓国語」 金殷模著 朝日出版社		
参考文献	未定		
評価方法	授業態度:20% 宿題:30% 期末試験:50%		

韓国語 I		前期 1 単位	1年
韓国語の発音と会話と文化		金 元恵 (きむ うおんへ)	
授業の到達目標 及びテーマ	言語はコミュニケーション及びその国の文化理解のために大切な手段です。一番近い外国である韓国の言葉を楽しく身につけ、新しい世界を発見することを目指す。基礎的ハングルの読み書き、簡単な会話、口頭での自己紹介ができるようになることを目標とし、ビデオを見ながら聞き取りの練習をします。		
授業の概要	テキストが中心になります。練習問題を宿題として出します。同時にテキスト以外のものも多く学びます。文法を習得して短文作成を学ばせる。充分練習した自己紹介を発表することによって、自信感を持たせます。「friends」のビデオを見せつつ言葉、会話、文化を学びます。		
授業計画	第1回	ハングルの由来と文化	
	第2回	文字について、母音について、単語の発音と書く練習	
	第3回	文字について、子音について、単語の発音と書く練習	
	第4回	文字について、濃音について、単語の発音と書く練習	
	第5回	文字について、終声（パッチム）の練習	
	第6回	日常生活の基本的な単語の意味と発音練習（TESTのため）	
	第7回	自己紹介の文をつくる。発音の練習（発表のため）	
	第8回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。現在形、過去形の表現	
	第9回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。用言の否定表現	
	第10回	単語TEST, 自己紹介の練習	
	第11回	日韓合作ドラマ「friends」感想	
	第12回	日韓合作ドラマ「friends」感想と、言葉を学ぶ	
	第13回	ビデオに出て来る韓国の文化を学ぶ	
	第14回	自己紹介の発表TEST	
	第15回	自己紹介の発表と日・韓合作ドラマの感想文の提出	
準備学習 (予習・復習等)	毎回のテキストに出る単語の内5つを復習すること。		
テキスト	「韓国語の初歩」、白水社、著者：嚴基珠 金三順 金天鶴 甲鉉竣 吉川知文		
参考文献	特に定めず授業時に紹介する。		
評価方法	発音のTEST:20% 自己紹介のTEST:30% 単語TEST:30% 宿題:20%		

韓国語 I		前期 1 単位	1年
韓国語（初級） I		富所 明秀（とみどころ みよんす）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 朝鮮語の文字と音価を学び、発音の変化を理解する。 ・ 助詞の使い方と「ですます」形の活用ができるようにする。 		
授業の概要	<p>授業の初めに前回の復習を行い、小テストをします。 欠席はなるべくしないようにしてください。 欠席する場合には休んだ部分の自習を行い、 理解できない部分について質問してください。</p>		
授業計画	第1回	第1課 基本母音字, 第2課 子音字その1	
	第2回	第3課 子音字その2	
	第3回	第4課 子音字その3	
	第4回	第5課 7つの終声	
	第5回	第6課 用言の「ですます形」	
	第6回	第7課 激音	
	第7回	第8課 合成母音字	
	第8回	第9課 濃音	
	第9回	第10課 連音化	
	第10回	第11課 疑問形と否定形	
	第11回	第12課 平音の濃音化	
	第12回	第13課 日本語のハングル表記	
	第13回	第14課 激音化・鼻音化・口蓋音化	
	第14回	復習その1	
	第15回	復習その2	
準備学習 (予習・復習等)	毎回小テストを行うので、必ず復習をしてください。		
テキスト	内山政春著『しくみで学ぶ初級朝鮮語』（白水社）		
参考文献	適宜紹介する		
評価方法	小テスト:30% 期末試験:70%		

韓国語Ⅱ		後期 1 単位	1年
韓国語と韓国の文化、社会 2		川村 受映 (かわむら じゅえい)	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座では、韓国語 1 で身につけた韓国語をさらに深めることを目的とする。会話を中心に進めることで会話能力を高めることができるようになる。		
授業の概要	講義形式 教科書に沿って講義をすすめる。		
授業計画	第 1 回	第 6 課 助詞「～に」	
	第 2 回	第 6 課 会話練習	
	第 3 回	第 7 課 助詞「～を」	
	第 4 回	第 7 課 会話練習	
	第 5 回	第 8 課 場所を表す助詞「～で」	
	第 6 回	第 8 課 会話練習	
	第 7 回	第 9 課 助詞「～も」	
	第 8 回	第 9 課 会話練習	
	第 9 回	第 10 課 用言の「～です/～ます」形	
	第 10 回	第 10 課 会話練習	
	第 11 回	第 11 課 不規則用言体	
	第 12 回	第 11 課 会話練習	
	第 13 回	第 12 課 名詞文の過去表現	
	第 14 回	第 12 課 会話練習	
	第 15 回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習内容：毎授業後宿題を提出すること。 予習内容：次回の授業の内容を読んでくること。		
テキスト	「かんたん！ 韓国語」金殷模著 朝日出版		
参考文献	未定		
評価方法	授業態度:20% 宿題:30% 期末試験 :50%		

韓国語Ⅱ		後期 1 単位	1年
書いて覚える韓国語		金 元恵 (きむ うおんへ)	
授業の到達目標 及びテーマ	多くの日常生活の単語と文法を覚えて、年末年始の生活ぶりに関する内容が書けることを目指す。テキストの各テーマに従って会話ができるようになる。文法に従って様々な長目の文章づくりができるようになる。		
授業の概要	テキストが中心になり、練習問題を宿題として出す。同時にテキスト以外のものも多く学ぶ。形容詞と動詞の語尾の変化を学び、「お正月」のテーマで手紙を書くことを目指します。		
授業計画	第1回	発音の復習	
	第2回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。(～しているー進行、～したいー願ひ、の表現)	
	第3回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。(～するためにー目的、の表現)	
	第4回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ① テキスト15課	
	第5回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ② テキスト16課	
	第6回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ③ テキスト18課	
	第7回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ④ テキスト19課	
	第8回	日常生活の基本的な形容詞の意味と発音	
	第9回	形容詞の発音と単文づくりを学ぶ	
	第10回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ⑤ テキスト20課	
	第11回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ⑥ テキスト21課	
	第12回	形容詞のTEST 「かえるの物語」	
	第13回	動詞の語幹にどんな語尾がつかがるかを学ぶ テキスト23課	
	第14回	韓国のお正月用語と手紙の書き方、お料理の紹介	
	第15回	総まとめと復習	
準備学習 (予習・復習等)	毎回のテキストの文法と単語5つを復習すること。		
テキスト	「韓国語の初歩」、白水社 著者：巖基珠 金三順 金天鶴 甲鉉竣 吉川知文		
参考文献	特に定めず、授業時に紹介する。		
評価方法	発音のTEST:20% 単語TEST:30% 「お正月」の手紙:30% 宿題:20%		

韓国語Ⅱ		後期 1 単位	1年
韓国語（初級）Ⅱ		富所 明秀（とみどころ みよんす）	
授業の到達目標 及びテーマ	さまざまな語尾について学び、自在に活用できるようにする。		
授業の概要	授業の初めに復習を行い、小テストをします。 前期に学んだ「ですます」形からドラマで見聞きする「ですます」形を学びます。		
授業計画	第1回	前期の復習 第15課 子音語幹用言	
	第2回	第16課 複数の用言をつなぐ	
	第3回	第17課 動詞の進行形と連体形	
	第4回	第18課 固有数字とその単位	
	第5回	第19課 過去形その1	
	第6回	第20課 過去形その2	
	第7回	復習	
	第8回	中間試験	
	第9回	第21課 あいさつと尊敬形	
	第10回	第22課 指定詞の否定形・用言の活用と語基	
	第11回	第23課 形容詞ともうひとつの否定形	
	第12回	私家版テキストその1（パンマルとヘヨ体）	
	第13回	私家版テキストその2（ヘヨ体の尊敬形）	
	第14回	復習その1	
	第15回	復習その2	
準備学習 (予習・復習等)	毎回小テストを行うので、必ず復習してください。 前期に比べ、文法の理解力が必要とされるので、わからない箇所は必ず質問してください。		
テキスト	内山政春著『しくみで学ぶ初級朝鮮語』（白水社）		
参考文献	適宜紹介する		
評価方法	小テスト:20% 中間試験:40% 期末試験:40%		

TOEIC I		前期 1 単位	1・2・3年
Listeningと基本文法の確認を中心としたTOEIC対策演習		江連 和章（えづれ かずあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	TOEICテスト全般に向けての演習授業だが、特に、Listeningと最も基本的な文法事項の復習に焦点を当てる。（文法全般とReadingについては後期開講のTOEIC II で扱う。）TOEICで求められる基礎レベルの英語の課題に対応できるようにする。		
授業の概要	補足説明を加えながらのListening演習と、TOEICテスト全般に対応するための素地となる基本的文法の確認を中心に行う。更に、語彙の補強や簡単なReadingの演習も行う。教科書とプリントを併用した講義と演習からなる授業であり、毎回の予習と復習が重要である。		
授業計画	第1回	授業の進め方、TOEICテストとテキストの紹介	
	第2回	Listening : Daily Life 、基本5文型	
	第3回	Listening : Eating Out & Leisure Activities、修飾	
	第4回	Listening : Cooking & Purchasing 、修飾	
	第5回	演習（文法、語彙）	
	第6回	Listening : Traffic & Travel、品詞	
	第7回	Listening : Advertising & ICT、形容詞、副詞	
	第8回	Listening : Production & Logistics、接続詞	
	第9回	演習（文法、語彙、Reading）	
	第10回	Listening : Business & Economics、時制	
	第11回	Listening : Employment & Personnel、時制	
	第12回	演習（文法、語彙、Reading）	
	第13回	Listening : Office Work & Correspondence Listening : Health & the Environment	
	第14回	Listening : Finance & Banking Listening : Law & Administration	
	第15回	総合演習、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	インターネットから無料でダウンロードできる音声ファイルを活用しながら、復習と予習、語彙の確認を毎回着実におこない、疑問点を整理して授業に参加すること。		
テキスト	1. 『Seize the Core of the TOEIC Test』安丸雅子他（著）、金星堂 2. 文法解説資料と補足演習問題（授業時に配布）		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	授業への参加度:20% 試験:80%		

TOEIC I		前期 1 単位	1・2・3年
TOEICへの挑戦— TOEIC試験の正体とは？		佐久間 晶子（さくま あきこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	TOEICは日常生活やビジネスという具体的な場面での「より実際的な英語の能力」を客観的に測るテストです。TOEIC対策には出題形式を熟知すること、英語のシャワーを浴びること、これが大事です。国内外のニュースも英語で聞いたり、小テストにも取り組みます。英語圏の文化に親しみをもちTOEICに挑戦しつづける実践力を身につけていくことを前期の主要テーマとします。		
授業の概要	初回から9回目までの授業はListeningを中心に学習します。Listeningでは「言えたこと・読めた英語は聞こえてくる」を基本に、音読の練習もたくさん行います。聞く作業に語彙力は不可欠です。音読によって単語の発音を確認し、小テストによって語彙の増強をねらいます。 Readingに専念する10回目以降の授業では、Sense Group ReadingやParagraph readingのスキルを確認し、制限時間内に英文を的確に読み取れるよう訓練していきます。TOEICの問題をあらかじめ取り組んで授業に出席してください。疑問・質問の解決の場としてこの授業は機能することになります。		
授業 計画	第1回	Introduction	
	第2回	PART 1 : Photographs 1	
	第3回	PART 1 : Photographs 2	
	第4回	PART 2 : Question-Response 1	
	第5回	PART 2 : Question-Response 2	
	第6回	PART 3 : Conversations 1	
	第7回	PART 3 : Conversations 2	
	第8回	PART 4 : Short Talks 1	
	第9回	PART 4 : Short Talks 2	
	第10回	PART 5 : Incomplete Sentences 1	
	第11回	PART 5 : Incomplete Sentences 2	
	第12回	Part 7 : Reading Comprehension 1	
	第13回	PART 7 : Reading Comprehension 2	
	第14回	Part 6 : Text Completion	
	第15回	まとめと試験	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で扱う章に目を通し、未知語の意味を確認し、解説についてもあらかじめ読んでくる。		
テキスト	TOEIC TEST リスニング ベーシックマスター Philip Griffin, 松井こずえ、妻鳥千鶴子 著 Jリサーチ出版		
参考文献	授業中に紹介します		
評価方法	積極的な授業参加:30% 小テスト:30% 期末テスト:30% TOEIC受験結果:10%		

TOEIC II		後期 1 単位	1・2・3年
文法とReadingを中心としたTOEIC対策演習		江連 和章（えづれ かずあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	TOEICテストの演習授業だが、特に、文法とReadingに焦点を当てる。前期開講のTOEIC I と合わせて、TOEICで求められる英語の課題全般に対応できるようになる。		
授業の概要	TOEICテストで求められる文法事項全般についての整理、語彙の補強そしてReadingの演習を中心に行う。（補足的にListening演習も行い、自習へとつなげる。）教科書とプリントを併用した講義と演習からなる授業であり、毎回の予習と復習が重要である。		
授業計画	第1回	授業の進め方、TOEICテストとテキストの紹介	
	第2回	基本5文型と修飾、演習（文法）	
	第3回	時制、演習（文法）	
	第4回	演習（文法、語彙、Reading）	
	第5回	接続詞、演習（文法、語彙、Reading）	
	第6回	前置詞、演習（文法、語彙、Reading）	
	第7回	助動詞、演習（文法、語彙、Reading）	
	第8回	演習（文法、語彙、Reading）	
	第9回	受動態、演習（文法、語彙、Reading）	
	第10回	分詞・分詞構文、演習（文法、語彙、Reading）	
	第11回	不定詞・動名詞、演習（文法、語彙、Reading）	
	第12回	演習（文法、語彙、Reading）	
	第13回	代名詞、関係詞、演習（文法、語彙、Reading）	
	第14回	比較構文、演習（文法、語彙、Reading）	
	第15回	総合演習、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習と予習、語彙の確認を毎回着実におこない、疑問点を整理して授業に参加すること。Listeningについては、インターネットから無料でダウンロードできる音声ファイルを活用して自習し、適宜疑問点を教員に質問、確認すること。		
テキスト	1. 『Seize the Core of the TOEIC Test』安丸雅子他（著）、金星堂 2. 文法解説資料と補足演習問題（授業時に配布）		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	授業への参加度:20% 試験:80%		

TOEIC II		後期 1 単位	1・2・3年
TOEICへの挑戦— コミュニケーション能力を磨く		佐久間 晶子（さくま あきこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	TOEICは日常生活やビジネスという具体的な場面での「より実際的な英語の能力」を客観的に測るテストです。前期に引き続き、授業中ならびに授業外に課題をこなす集中力と努力が要求される。就職活動や社会人としてのキャリアアップにおいてもTOEICの高得点が求められる時代だからこそ、切磋琢磨を学生に求めたい。		
授業の概要	初回から7回目までの授業はListeningを中心に学習します。Listeningでは「言えたこと・読めた英語は聞こえてくる」を基本に、音読の練習もたくさん行います。聞く作業に語彙力は不可欠です。音読によって単語の発音を確認し、小テストによって語彙の増強をねらいます。 Readingに専念する8回目以降の授業では、Sense Group ReadingやParagraph readingのスキルを確認し、英文を的確に読み取れるよう訓練していきます。TOEICの問題をあらかじめ取り組んで授業に出席してください。疑問・質問の解決の場としてこの授業は機能することになります。		
授業 計画	第1回	Introduction	
	第2回	PART 1: Photographs 1	
	第3回	Part 2: Question-Response 1	
	第4回	PART 2: Question-Response 2	
	第5回	PART 3: Conversations 1	
	第6回	PART 3: Conversations 2	
	第7回	PART 4: Short Talks 1	
	第8回	Part 5: Incomplete Sentences 1	
	第9回	Part 5: Incomplete Sentences 2	
	第10回	Part 7: Reading Comprehension 1	
	第11回	Part 7: Reading Comprehension 2	
	第12回	Part 6: Text Completion 1	
	第13回	Part 6: Text Completion 2	
	第14回	まとめと試験 1	
	第15回	まとめと試験 2	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業で扱う章に目を通し、未知語の意味を確認し、テキストの解説もあらかじめ読んでくる。		
テキスト	TOEIC TEST 日本人が必ず間違えるひっかけ問題100選 西浦美枝子著 JRリサーチ出版		
参考文献	授業中に指示します。		
評価方法	積極的な参加:30% 小テスト:30% 期末テスト:30% TOEIC試験結果:10%		

英語演習 I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
基本的な学術的英語能力を修得する		江連 和章（えづれ かずあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	編入に必要な文法や文章読解を中心とする基本的な学術的英語技能を修得し、編入全般に共通して求められる基礎レベルの英語の課題に対応できるようになる。		
授業の概要	講義と演習を通じて、文法、読解、和訳、作文を中心とした基礎レベルの学術的英語技能の修得に重点を置く。また、編入英語の一般的傾向を理解し、実際の試験問題を用いた実践的演習を通じて、編入英語全般に対応できる基礎力を身につける。そのためには、授業毎回の予習と復習が重要である。（初回の授業時に、受講者の英語能力を把握するための簡単な英語力調査をおこなう。）		
授業計画	第1回	導入 編入に求められる英語能力と学習、授業の進め方、英語力調査	
	第2回	英文の読み方（基本方針）、品詞と句型	
	第3回	英文読解（基礎、前半）、修飾	
	第4回	英文読解（基礎、後半）、時制	
	第5回	英文読解（応用、前半）、代名詞	
	第6回	英文読解（応用、後半）、不定詞と動名詞	
	第7回	英文和訳（基礎）、分詞	
	第8回	英文和訳（応用）、関係詞	
	第9回	英文の内容説明（基礎）、比較	
	第10回	英文の内容説明（応用）、仮定法	
	第11回	英作文（基礎）、倒置と省略	
	第12回	総合演習1（基礎）	
	第13回	総合演習2（応用、前半）	
	第14回	総合演習2（応用、後半）	
	第15回	総合演習3、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習と予習、テキスト内の語彙の確認を毎回着実におこない、疑問点を整理して授業に参加すること。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	授業への参加度:20% 試験:80%		

英語演習 I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
社会・人文系の論説を読み解くための基礎訓練		輪島 達郎（わじま たつろう）	
授業の到達目標 及びテーマ	社会系（政治・社会・経済・法律など）および人文系（哲学・教育・心理・言語・文化など）のアカデミックな論説文をていねいに解読しながら基礎的な文法事項を修得することによって、曖昧な部分を残さずに英文を論理的に読む力を身につけ、編入学試験に求められる英文読解力を養成する。		
授業の概要	論説文のテキストを逐語的に解読する作業を基本としながら、良質な例文を数多く提示することによって文法事項を説明し、訳読にあたっての留意点を示していく。		
授業計画	第1回	授業計画と進め方の説明	
	第2回	テキスト第1課の訳読	
	第3回	テキスト第1課の文法事項説明	
	第4回	テキスト第1課の問題演習	
	第5回	テキスト第2課の訳読	
	第6回	テキスト第2課の文法事項説明	
	第7回	テキスト第2課の問題演習	
	第8回	テキスト第3課の訳読	
	第9回	テキスト第3課の文法事項説明	
	第10回	テキスト第3課の問題演習	
	第11回	テキスト第4課の訳読	
	第12回	テキスト第4課の文法事項説明	
	第13回	テキスト第4課の問題演習	
	第14回	編入学過去問演習（社会系）	
	第15回	編入学過去問演習（人文系）	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に指示する方法でテキストを予習しておくことが求められる。		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

英語演習Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
実践的な学術的英語能力を修得する		江連 和章（えづれ かずあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	編入で求められる文章読解を中心とする実践的な学術的英語技能を修得し、専門的な英語の課題にも対応できるようにする。		
授業の概要	受講者数にもよるが、受講者の目指す分野に合わせた編入試験問題を主な教材として、読解、和訳、内容説明、要約、作文を中心とした実践的演習を行う。また、各分野の英語に特徴的な表現や語彙についても補い、それぞれの編入英語に対応できる力を養う。授業毎回の予習と復習が重要である。（初回の授業時に、受講者の英語能力を把握するための簡単な英語力調査をおこなう。）		
授業計画	第1回	導入 編入に求められる英語能力と学習、授業の進め方、英語力調査	
	第2回	総合演習（基礎）、前期「編入の英語Ⅰ」の復習とまとめ	
	第3回	英文読解（基礎、応用）	
	第4回	英文読解（発展）	
	第5回	英文和訳（基礎、応用）	
	第6回	英文和訳（発展）	
	第7回	英文の内容説明（基礎、応用）	
	第8回	英文の内容説明（発展）	
	第9回	英文の要約	
	第10回	英作文（基礎）	
	第11回	英作文（応用、発展）	
	第12回	総合演習1（受講者志望分野1）	
	第13回	総合演習2（受講者志望分野2）	
	第14回	総合演習3（受講者志望分野3）	
	第15回	総合演習4、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習と予習、テキスト内の語彙の確認を毎回着実におこない、疑問点を整理して授業に参加すること。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	授業への参加度:20% 試験:80%		

英語演習Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
社会・人文系の論説を読み解くための文脈理解力の養成		輪島 達郎(わじま たつろう)	
授業の到達目標及びテーマ	編入学を目指す学生を対象に、基本的な文法事項の修得は完了していることを前提として、やや高度な社会系（政治・社会・経済・法など）および人文系（哲学・歴史・教育・心理・言語・文化など）の論説文を読み、さまざまな知識を動員しながら、より深いところに行ける文脈を探り当てる力を養成する。		
授業の概要	論説文のテキストを逐語的に解読する作業を行っていくが、そのさいに、センテンス単位だけで英文を理解するのではなく、パラグラフや文章全体の構造を把握することに重点をおく。さらに、文脈理解のための背景知識を動員する力—歴史認識、社会認識、人間理解の力—を同時に養っていく。		
授業計画	第1回	授業計画と進め方の説明	
	第2回	テキスト第1課の訳読	
	第3回	テキスト第1課の文法事項説明	
	第4回	テキスト第1課の問題演習	
	第5回	テキスト第2課の訳読	
	第6回	テキスト第2課の文法事項説明	
	第7回	テキスト第2課の問題演習	
	第8回	テキスト第3課の訳読	
	第9回	テキスト第3課の文法事項説明	
	第10回	テキスト第3課の問題演習	
	第11回	テキスト第4課の訳読	
	第12回	テキスト第4課の文法事項説明	
	第13回	テキスト第4課の問題演習	
	第14回	編入学過去問演習（社会系）	
	第15回	編入学過去問演習（人文系）	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に指定する方法での予習が毎回求められる。		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

編入の英語 I		前期 1 単位	1・2・3年
基本的な学術的英語能力を修得する		江連 和章（えづれ かずあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	編入に必要な文法や文章読解を中心とする基本的な学術的英語技能を修得し、編入全般に共通して求められる基礎レベルの英語の課題に対応できるようになる。		
授業の概要	講義と演習を通じて、文法、読解、和訳、作文を中心とした基礎レベルの学術的英語技能の修得に重点を置く。また、編入英語の一般的傾向を理解し、実際の試験問題を用いた実践的演習を通じて、編入英語全般に対応できる基礎力を身につける。そのためには、授業毎回の予習と復習が重要である。（初回の授業時に、受講者の英語能力を把握するための簡単な英語力調査をおこなう。）		
授業計画	第1回	導入 編入に求められる英語能力と学習、授業の進め方、英語力調査	
	第2回	英文の読み方（基本方針）、品詞と文型	
	第3回	英文読解（基礎、前半）、修飾	
	第4回	英文読解（基礎、後半）、時制	
	第5回	英文読解（応用、前半）、代名詞	
	第6回	英文読解（応用、後半）、不定詞と動名詞	
	第7回	英文和訳（基礎）、分詞	
	第8回	英文和訳（応用）、関係詞	
	第9回	英文の内容説明（基礎）、比較	
	第10回	英文の内容説明（応用）、仮定法	
	第11回	英作文（基礎）、倒置と省略	
	第12回	総合演習1（基礎）	
	第13回	総合演習2（応用、前半）	
	第14回	総合演習2（応用、後半）	
	第15回	総合演習3、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習と予習、テキスト内の語彙の確認を毎回着実におこない、疑問点を整理して授業に参加すること。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	授業への参加度:20% 試験:80%		

編入の英語 I		前期 1 単位	1・2・3年
社会・人文系の論説を読み解くための基礎訓練		輪島 達郎(わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	社会系(政治・社会・経済・法律など)および人文系(哲学・教育・心理・言語・文化など)のアカデミックな論説文をていねいに解読しながら基礎的な文法事項を修得することによって、曖昧な部分を残さずに英文を論理的に読む力を身につけ、編入学試験に求められる英文読解力を養成する。		
授業の概要	論説文のテキストを逐語的に解読する作業を基本としながら、良質な例文を数多く提示することによって文法事項を説明し、訳読にあたっての留意点を示していく。		
授業計画	第1回	授業計画と進め方の説明	
	第2回	テキスト第1課の訳読	
	第3回	テキスト第1課の文法事項説明	
	第4回	テキスト第1課の問題演習	
	第5回	テキスト第2課の訳読	
	第6回	テキスト第2課の文法事項説明	
	第7回	テキスト第2課の問題演習	
	第8回	テキスト第3課の訳読	
	第9回	テキスト第3課の文法事項説明	
	第10回	テキスト第3課の問題演習	
	第11回	テキスト第4課の訳読	
	第12回	テキスト第4課の文法事項説明	
	第13回	テキスト第4課の問題演習	
	第14回	編入学過去問演習(社会系)	
	第15回	編入学過去問演習(人文系)	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に指示する方法でテキストを予習しておくことが求められる。		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

編入の英語Ⅱ		後期 1 単位	1・2・3年
実践的な学術的英語能力を修得する		江連 和章（えづれ かずあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	編入で求められる文章読解を中心とする実践的な学術的英語技能を修得し、専門的な英語の課題にも対応できるようにする。		
授業の概要	受講者数にもよるが、受講者の目指す分野に合わせた編入試験問題を主な教材として、読解、和訳、内容説明、要約、作文を中心とした実践的演習を行う。また、各分野の英語に特徴的な表現や語彙についても補い、それぞれの編入英語に対応できる力を養う。授業毎回の予習と復習が重要である。（初回の授業時に、受講者の英語能力を把握するための簡単な英語力調査をおこなう。）		
授業計画	第1回	導入 編入に求められる英語能力と学習、授業の進め方、英語力調査	
	第2回	総合演習（基礎）、前期「編入の英語Ⅰ」の復習とまとめ	
	第3回	英文読解（基礎、応用）	
	第4回	英文読解（発展）	
	第5回	英文和訳（基礎、応用）	
	第6回	英文和訳（発展）	
	第7回	英文の内容説明（基礎、応用）	
	第8回	英文の内容説明（発展）	
	第9回	英文の要約	
	第10回	英作文（基礎）	
	第11回	英作文（応用、発展）	
	第12回	総合演習1（受講者志望分野1）	
	第13回	総合演習2（受講者志望分野2）	
	第14回	総合演習3（受講者志望分野3）	
	第15回	総合演習4、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習と予習、テキスト内の語彙の確認を毎回着実におこない、疑問点を整理して授業に参加すること。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	授業への参加度:20% 試験:80%		

編入の英語Ⅱ		後期 1 単位	1・2・3年
社会・人文系の論説を読み解くための文脈理解力の養成		輪島 達郎(わじま たつろう)	
授業の到達目標及びテーマ	編入学を目指す学生を対象に、基本的な文法事項の修得は完了していることを前提として、やや高度な社会系（政治・社会・経済・法など）および人文系（哲学・歴史・教育・心理・言語・文化など）の論説文を読み、さまざまな知識を動員しながら、より深いところに流れる文脈を探り当てる力を養成する。		
授業の概要	論説文のテキストを逐語的に解読する作業を行っていくが、そのさいに、センテンス単位だけで英文を理解するのではなく、パラグラフや文章全体の構造を把握することに重点をおく。さらに、文脈理解のための背景知識を動員する力—歴史認識、社会認識、人間理解の力—を同時に養っていく。		
授業計画	第1回	授業計画と進め方の説明	
	第2回	テキスト第1課の訳読	
	第3回	テキスト第1課の文法事項説明	
	第4回	テキスト第1課の問題演習	
	第5回	テキスト第2課の訳読	
	第6回	テキスト第2課の文法事項説明	
	第7回	テキスト第2課の問題演習	
	第8回	テキスト第3課の訳読	
	第9回	テキスト第3課の文法事項説明	
	第10回	テキスト第3課の問題演習	
	第11回	テキスト第4課の訳読	
	第12回	テキスト第4課の文法事項説明	
	第13回	テキスト第4課の問題演習	
	第14回	編入学過去問演習（社会系）	
	第15回	編入学過去問演習（人文系）	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に指定する方法での予習が毎回求められる。		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

Communication Skills I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
Effective Communication		ホワイト (WHYTE, D. W.)	
授業の到達目標 及びテーマ	In this course, enjoyable and controversial topics will be covered to help students increase their awareness of everyday important issues, help students create meaning using their imagination, pictures, charts, sharing their ideas and experiences while working in groups or pairs. Students will learn to answer more socially sensitive and provoking questions.		
授業の概要	This course is designed for students having basic English speaking abilities who are eager to build up their discussion skills, explore the world around us, and learn how to think critically. Students will analyze new information and express opinions on interesting topics like- family, justice, prejudice, professionalism and environmental issues.		
授業計画	第1回	Course overview. Eating Well 1	
	第2回	Eating Well 2	
	第3回	Personality Types 1	
	第4回	Personality Types 2	
	第5回	Presentation and Vocabulary	
	第6回	Sports/Music 1	
	第7回	Sports/Music 2	
	第8回	Animal Rights 1	
	第9回	Animal Rights 2	
	第10回	Presentation and Vocabulary	
	第11回	Lifestyles 1	
	第12回	Lifestyles 2	
	第13回	Drinking/Smoking 1	
	第14回	Drinking/Smoking 2	
	第15回	Presentation and Vocabulary	
準備学習 (予習・復習等)	Attend classes regularly and try to participate actively even if your English is not perfect. Do your homework, and always bring your textbook to class. Late homework will not be accepted. If you are absent due to sickness, bring a medical certificate.		
テキスト	My Opinion, Your Opinion by Paul McLean, Macmillan ISBN 978-4-7773-6029-1		
参考文献	None.		
評価方法	Participation & Classwork:20% Homework & preparation:20% Oral presentation & Vocabulary:60%		

Communication Skills II		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
Effective Communication		ホワイト (WHYTE, D. W.)	
授業の到達目標 及びテーマ	In this course, enjoyable and controversial topics will be discussed to help students--- increase their awareness of everyday important issues; create meaning using their imagination, pictures, charts and experiences. Students will learn critical thinking and demonstrate their success by speaking English.		
授業の概要	This course is excellent for students who can converse in English, and who are eager to build up their presentation skills and think critically. Students will analyze new information and express opinions on interesting topics like cultural ideas on aging, homelessness and welfare, justice systems and environmental problems.		
授業計画	第1回	Executive Salaries	
	第2回	Endangered Species	
	第3回	Abstract Art/Movies	
	第4回	Man`s Best Friend	
	第5回	Presentation and Vocabulary	
	第6回	Gun Control/The Death Penalty 1	
	第7回	Gun Control/The Death Penalty 2	
	第8回	Population Control 1	
	第9回	Population Control 2	
	第10回	Presentation and Vocabulary	
	第11回	The Influence of Television 1	
	第12回	The Influence of Television 2	
	第13回	Summer or Winter 1	
	第14回	Summer or Winter 2	
	第15回	Presentation and Vocabulary	
準備学習 (予習・復習等)	Attend classes regularly and try to participate actively. Bring textbook to class and do your homework. Late homework will not be accepted. If you are absent due to sickness, bring a medical certificate.		
テキスト	My Opinion, Your Opinion by Paul McLean published by Macmillan ISBN 978-4-7773-6029-1		
参考文献	None		
評価方法	Participation & Classwork:20% Homework & preparation:20% Oral presentation & Vocabulary:60%		

フランス語Ⅲ		前期 1 単位	2・3年
確実な理解を目指して		加藤 行男 (かとう ゆきお)	
授業の到達目標 及びテーマ	1年次に学習したことを復習するとともに、話し言葉でも書き言葉でも最もよく用いられる複合過去形の運用を確実なものにする。また自分自身について、しっかりとした情報を発信できるようになる。		
授業の概要	文法事項の学習と練習問題、簡単な会話文の理解や作文が授業の中心的な作業である。新しい文法事項の説明は教員が行うが、練習問題や訳読、作文は受講生各自にやってもらう。したがって積極的な取り組みが望まれる。毎回、必ず辞書を持参すること。授業中にスマートフォン等を使用することは認めない。2課ごとに小テストを実施する。		
授業計画	第1回	綴り字の読み方の復習	
	第2回	限定詞（冠詞、指示形容詞、所有形容詞） 基本問題	
	第3回	聞き取り：人物選択	
	第4回	直説法現在（規則動詞、不規則動詞）、命令形 基本問題	
	第5回	作文：自己紹介	
	第6回	代名動詞 基本問題	
	第7回	作文：一日の過ごし方	
	第8回	人称代名詞、代名詞 on 基本問題	
	第9回	読解：短い手紙を読む	
	第10回	疑問詞 基本問題	
	第11回	インタビュー：あなた自身について	
	第12回	直説法複合過去、近接過去 基本問題	
	第13回	インタビュー：夏休みについて	
	第14回	比較級、最上級 基本問題	
	第15回	読解：ハチミツの効能	
準備学習 (予習・復習等)	意味の分からない単語や熟語は必ず辞書で調べておくこと。練習問題や訳読、作文などは授業前に一通り自分でやっておくこと。		
テキスト	三訂版『クリック！クリケ！2年目のフランス語』中村敦子・加藤行男著（第三書房）		
参考文献	特になし		
評価方法	小テスト:30% 定期試験:70%		

フランス語Ⅳ		後期 1 単位	2・3年
フランス語の全体像をつかみ、基礎を完成させよう		加藤 行男 (かとう ゆきお)	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語基礎学習の最終段階である。未来形やさまざまな代名詞を学習し、フランス語の全体像を理解する。同時に語彙力をつけて、検定試験などに対応できるようになる。		
授業の概要	文法事項の学習と練習問題、会話文等の理解や作文が授業の中心的作業である。新しい文法事項の説明は教員が行うが、練習問題や会話文等の訳読、作文は受講生各自にしてもらう。毎回、必ず辞書を持参すること。授業中にスマートフォン等を使用することは認めない。2課ごとに小テストを実施する。		
授業 計画	第1回	性・数の一致 基本問題	
	第2回	作文：人物描写	
	第3回	直説法単純未来、近接未来、非人称表現 基本問題	
	第4回	作文：ツアー旅行の日程	
	第5回	直説法半過去 基本問題	
	第6回	文の完成：昔と今	
	第7回	関係代名詞 基本問題	
	第8回	読解：アルファベットの起原	
	第9回	直説法複合過去と半過去 基本問題	
	第10回	読解：国境なき医師団	
	第11回	指示代名詞、所有代名詞 基本問題	
	第12回	会話文：ショッピング	
	第13回	中性代名詞 基本問題	
	第14回	会話文：青果店での買物	
	第15回	フランス語の全体像	
準備学習 (予習・復習等)	意味の分からない単語や熟語は必ず辞書で調べておくこと。練習問題や訳読、作文などは授業前に一通り自分でやっておくこと。		
テキスト	三訂版『クリック！クリケ！2年目のフランス語』中村敦子・加藤行男著（第三書房）		
参考文献	特になし		
評価方法	小テスト:30% 定期試験:70%		

ドイツ語Ⅲ		前期 1 単位	2・3年
中級へのステップアップ		飯田 道子 (いいた みちこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	1年次に学んだ文法を復習しながら、未習の文法事項を学び完成させることで、初級から中級へのステップアップをはかります。		
授業の概要	1年次の文法を復習・強化しながら、さらに未習の文法を学びます。パートナー練習を多用しながら実践力をつけていきます。文法の復習順序は参加者のレベルと照らし合わせながら決めていきますが、以下のような内容を考えています。文法学習以外にも、映画を観たりしたいと思います。		
授業計画	第1回	導入 自己紹介	
	第2回	現在完了の復習	
	第3回	過去のことを語る	
	第4回	副文	
	第5回	副文を使って表現	
	第6回	助動詞の構文	
	第7回	ニュアンスのある表現	
	第8回	受動文	
	第9回	歴史のことを読む	
	第10回	関係文	
	第11回	再帰表現	
	第12回	接続法	
	第13回	非現実の表現	
	第14回	夏休みの予定	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	1年次に学習した内容を復習しておくことが望ましい。		
テキスト	参加者と話し合って決定します。		
参考文献	授業内に適宜指示します。		
評価方法	授業での積極性:20% 授業内課題:20% レポート:60%		

ドイツ語Ⅳ		後期 1 単位	2・3年
総合的な力をつけよう		飯田 道子 (いいだ みちこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	これまでに学習したドイツ語文法を使って、高度な内容の文章を読み、聴き取り、自ら発信していく力を養います。		
授業の概要	ドイツについてのさまざまなテーマを選んで、これまでより高度な内容の文章を読んでいます。ドイツの歴史や文化についての理解を深められるよう、映像資料を取り入れたり、パソコンを使った授業も行っていきたいと思っています。テーマごとのプレゼンテーションも行いたいと思っています。		
授業計画	第1回	夏休みはなにをした？	
	第2回	ドイツとは	
	第3回	ドイツの歴史的、地理的理解	
	第4回	ヨーロッパにおけるドイツ	
	第5回	ドイツのことを調べる	
	第6回	ドイツのことを調べて発表する	
	第7回	ドイツ現代史	
	第8回	ベルリンの壁	
	第9回	壁崩壊	
	第10回	東西ドイツの問題点	
	第11回	メルヒェンを読む—Part. 1	
	第12回	メルヒェンを読む—Part. 2	
	第13回	メルヒェンの発表	
	第14回	メルヒェンの受容史	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	これまでに学習した文法事項を復習しておくことが望ましい。		
テキスト	適宜コピーを配布します。		
参考文献	授業内に適宜指示します。		
評価方法	授業での積極性:20% 授業内課題:20% レポート:60%		

中国語Ⅲ		前期 1 単位	2・3年
役に立つ中国語のために		呉 秀月（ご しゅうげつ）	
授業の到達目標 及びテーマ	授業は、中級の中国語履修者を対象とし、中国語のリスニング、会話力、作文及び読解力の向上を目的とする。実際の授業の進め方は、全員参加を原則とし、一人ずつの会話練習、朗読をくり返すとともに、作文練習によって文法の習熟度を高めていくことができるようになる。リスニングについては、CDやビデオ等の教材を用いて練習し、実際に学生それぞれの中国語聞き取り能力を高めていくことができるようになる。また、受講生の興味に合わせて、中国、台湾、華僑等の文化事情についても随時解説することで、学生の学習意欲を高めていくことができるようになる。		
授業の概要	一年間の履修を通じて中国語のリスニング、会話、作文、読解力の総合的レベルアップを目指します。授業の進め方は、学生に表現力を身につけさせるため、テキスト以外の文例を学生一人一人に作らせます。さらに学生に自分が作った文例を暗記させ、実際に会話する練習をくりかえすことにより、より高度の表現力や聴き取り能力を身につけさせます。また、ビデオ等を使って、現在の中国社会のあり方と変化についての理解を深めていくことです。		
授業計画	第1回	初級の復習1：基本動詞・基本形容詞をチェック	
	第2回	初級の復習2：基本形容詞をチェック	
	第3回	初級の復習3：基本文型をチェック	
	第4回	第1課：助動詞の学習	
	第5回	第1課：主述述語文の学習	
	第6回	第1課：目的語が主述句の学習	
	第7回	第2課：「原因・理由」を表す表現の学習	
	第8回	第2課：「逆接」を表す「可是」の学習	
	第9回	第3課：文末の助詞連動文の学習	
	第10回	第3課：「是…的」の文・疑問詞の学習	
	第11回	第4課：「了」の3つの用法	
	第12回	第4課：副詞「就」	
	第13回	第5課：結果補語(1)の学習	
	第14回	第5課：副詞「有点儿」・「假定」を表す「要是」の学習	
	第15回	授業内容の理解	
準備学習 (予習・復習等)	テキストの予習と復習すること。		
テキスト	尹景春・竹島毅著「中国語 さらなる一歩」（白水社、2013）		
参考文献	特になし		
評価方法	授業参与:30% 試験:70%		

中国語Ⅳ		後期 1 単位	2・3年
役に立つ中国語のために		呉 秀月（ご しゅうげつ）	
授業の到達目標 及びテーマ	本授業は、中級の中国語履修者を対象とし、中国語のリスニング、会話力、作文及び読解力の向上を目的とする。実際の授業の進め方は、全員参加を原則とし、一人ずつの会話練習、朗読をくり返すとともに、作文練習によって文法の習熟度を高めていくことができるようになる。リスニングについては、CDやビデオ等の教材を用いて練習し、実際に学生それぞれの中国語聞き取り能力を高めていくことができるようになる。また、受講生の興味に合わせて、中国、台湾、華僑等の文化事情についても随時解説することで、学生の学習意欲を高めていく。		
授業の概要	中国語Ⅳは、前期の中国語Ⅲに引き続き、一年間の履修を通じて中国語のリスニング、会話、作文、読解力の総合的レベルアップを目指します。一年間の履修を通じて中国語のリスニング、会話、作文、読解力の総合的レベルアップを目指します。授業の進め方は、学生に表現力を身につけさせるため、テキスト以外の文例を学生一人一人に作らせます。さらに学生に自分が作った文例を暗記させ、実際に会話する練習をくりかえすことにより、より高度の表現力や聞き取り能力を身につけさせます。また、ビデオ等を使って、現在の中国社会のあり方と変化についての理解を深めていく。		
授業計画	第1回	第6課：存現文・主語がブレイズのときの学習	
	第2回	第6課：「又…又」の用法の学習	
	第3回	第7課：「状態の持続」を表す「着」の学習	
	第4回	第7課：副詞「再」・部分否定の学習	
	第5回	第8課：方向補語の学習	
	第6回	第8課：「使役」を表す疑問詞の不定用法の学習	
	第7回	第9課：可能補語の学習	
	第8回	第9課：強調表現の学習	
	第9回	第10課：「目的」を表す学習	
	第10回	第10課：「推測」を表す「会」・「～了～」の用法の学習	
	第11回	第11課：結果補語(2)の学習	
	第12回	第11課：「受身」を表す「被」の学習	
	第13回	第12課：「快～了」の用法の学習	
	第14回	第12課：介詞「把」の学習	
	第15回	授業内容の理解	
準備学習 (予習・復習等)	テキストの予習と復習をすること。		
テキスト	尹景春・竹島毅著「中国語 さらなる一歩」（白水社、2014）		
参考文献	特になし		
評価方法	授業参与:30% 試験:70%		

韓国語Ⅲ		前期 1 単位	2・3年
もっと知りたい韓国語・韓国文化		川村 受映 (かわむら じゅえい)	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座では、韓国語初級を学んだ学生を対象に、一年目に習った文法、語彙、表現を復習しながら、韓国語のコミュニケーション技能（聞く、話す、読む、書く）を一層高めることができるようになる。		
授業の概要	聞き取り、会話発表、パートナー学習などを取り入れた練習を行う。具体的には授業中二人でペアを組み、会話の練習を繰り返すことである程度の日常会話ができるようにする。なお、韓国関係のDVDや映画などを用いることで、韓国の現代社会や文化にもふれる。		
授業計画	第1回	第1課 お会いできて嬉しいです。(尊敬)	
	第2回	第1課 練習問題	
	第3回	第1課 会話練習	
	第4回	第2課 空港電車に乗っていきます(動詞の名詞化)	
	第5回	第2課 練習問題	
	第6回	第2課 会話練習	
	第7回	第3課 ここが有名な韓国料理屋です(形容詞の現在連体形)	
	第8回	第3課 練習問題	
	第9回	第3課 会話練習	
	第10回	第4課 ゆっくり休んでください(確認を表す)	
	第11回	第4課 練習問題	
	第12回	第4課 会話練習	
	第13回	第5課～することにしました(決心・約束)	
	第14回	第5課 練習問題	
	第15回	第5課 会話練習	
準備学習 (予習・復習等)	復習内容：毎授業後宿題を提出すること。 予習内容：授業前に次回の内容を読んでくること。		
テキスト	「かんたん韓国語 実践会話編」 金殷模著 朝日出版社		
参考文献	未定		
評価方法	授業態度:20% 課題:30% 期末試験:50%		

韓国語Ⅳ		後期 1 単位	2・3年
もっと知りたい韓国語・韓国社会		川村 受映 (かわむら じゅえい)	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座では、韓国語Ⅲを学んだ学生を対象に、文法、語彙、表現を復習しながら、韓国語のコミュニケーション技能（聞く、話す、読む、書く）を一層高めることができるようになる。		
授業の概要	講義形式 教科書に沿って講義をすすめる。		
授業計画	第1回	6課 したことがありますか（過去の経験を表す）	
	第2回	6課 練習問題	
	第3回	6課 会話練習	
	第4回	7課 写真撮ってください（条件や仮定を表す）	
	第5回	7課 練習問題	
	第6回	7課 会話練習	
	第7回	8課 歩いて行けますか（可能を表す）	
	第8回	8課 練習問題	
	第9回	8課 会話練習	
	第10回	9課 駅で降りて乗り換えます（先行する動作を表す）	
	第11回	9課 練習問題	
	第12回	9課 会話練習	
	第13回	10課 人が多いでしょう（意思や推量を表す）	
	第14回	10課 練習問題	
	第15回	10課 会話練習	
準備学習 (予習・復習等)	復習内容：毎授業後宿題を提出すること。 予習内容：授業前に次回の内容を読んでくること。		
テキスト	「かんたん韓国語 実践会話編」 金殷模著 朝日出版社		
参考文献	未定		
評価方法	授業態度:20% 課題:30% 期末試験:50%		

フランス語（初級） I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
日常のコミュニケーション能力を獲得するために		加藤 行男（かとう ゆきお）	
授業の到達目標 及びテーマ	毎回の授業を通してフランス語の綴り字と発音の対応関係をしっかりと身につける。基本動詞の現在形の活用を学習し、それに基づいて、疑問の表し方、あるいは答え方などを習得し、必要な情報を獲得し、また発信できるようになること。		
授業の概要	毎回の授業で音読の練習を行う。初めてのフランス語であるから、フランス語の仕組み＝文法に関しては教員が少しずつ説明していくが、その他の練習などは受講生各自にやってもらう。各課が終わる毎に小テストを行う。毎回、必ず辞書を持参すること。授業中にスマートフォン等を使用することは認めない。		
授業計画	第1回	UNITÉ préliminaire：アルファベ、入国カード、月の名、数詞	
	第2回	UNITÉ 1：私たちは一緒にパリを訪れます ことばの形：1. 名詞の性と数 2. 定冠詞と不定冠詞 3. 主語人称代名詞	
	第3回	UNITÉ 1：私たちは一緒にパリを訪れます ことばの形：4. 現在形 5. -er規則動詞の現在形 6. イントネーションによる疑問文	
	第4回	UNITÉ 1：私たちは一緒にパリを訪れます 練習問題と聞き取り練習	
	第5回	UNITÉ 2：部屋はありますか ことばの形：1. 不定冠詞 2. 不規則動詞の現在形（1） être, avoir	
	第6回	UNITÉ 2：部屋はありますか ことばの形：3. 形容詞の変化と一致 4. 疑問文（2）	
	第7回	UNITÉ 2：部屋はありますか 練習問題と聞き取り練習	
	第8回	UNITÉ 3：両替所はどこですか ことばの形：1. 所有形容詞（1） あなたの 2. 指示代名詞 この あの その 3. -ir規則動詞の現在形	
	第9回	UNITÉ 3：両替所はどこですか ことばの形：4. 不規則動詞の現在形（2） aller 5. 前置詞 à と定冠詞 le, les の縮約 6. 疑問副詞 où, combien	
	第10回	UNITÉ 3：両替所はどこですか 練習問題と聞き取り練習	
	第11回	UNITÉ 4：ルーブル美術館へはどのように行きますか ことばの形：1. 不規則動詞の現在形（3） savoir, prendre, descendre 2. 否定文	
	第12回	UNITÉ 4：ルーブル美術館へはどのように行きますか ことばの形：3. 前置詞 de と定冠詞 le, les の縮約 4. 疑問副詞	
	第13回	UNITÉ 4：ルーブル美術館へはどのように行きますか 練習問題と聞き取り練習	
	第14回	UNITÉ 5：UNITÉ 1 ～ 4 の復習問題	
	第15回	UNITÉ 5：UNITÉ 1 ～ 4 の発展問題	
準備学習 (予習・復習等)	意味の分からない単語や熟語は必ず辞書で調べておく。練習問題は授業前に一通り自分でやっておくこと。辞書は紙の辞書を使用するのが望ましい。		
テキスト	三訂版『やさしく学ぶ旅のフランス語』中村敦子著（第三書房）		
参考文献	特になし		
評価方法	小テスト:30% 定期試験:70%		

フランス語（初級） I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
フランス語での日常的コミュニケーションー基礎		杉山 友一（すぎやま ゆういち）	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語の基礎的な文法と会話表現を修得し、使えるようになる。特に規則動詞を中心とする基本的な動詞を、主に1人称及び2人称の現在形で用いた単文、及びそれによって作られている短い会話の理解と発話ができるようになることを重視する。		
授業の概要	テキスト付属のCDを使い、発音を聞きそのまねをして、音に親しむようにする。できる限り1人1人が発音し、フランス語を発音する行為自体に慣れると共に、2人での対話練習も行う。自分で発話するメカニズムとしての文法を重視し、文法を当初から丁寧に学習する。各課ごとに小テスト（主に単語テスト）を行って学習成果を確認する。		
授業計画	第1回	自己紹介（日本語）、フランスについての基礎知識、文字と発音	
	第2回	文字と発音の復習、第1課：タクシーに乗る（国籍や職業を伝える）－主語人称代名詞と動詞êtreを使う。	
	第3回	文法の復習と会話、練習問題	
	第4回	第1課Lecture、第2課：ホテルにチェックインする－動詞avoirと不定冠詞、名詞の性・数	
	第5回	文法の復習と会話、練習問題	
	第6回	第2課Lecture、第3課：友達に会う－規則動詞、所有形容詞、疑問文	
	第7回	文法の復習と会話、練習問題	
	第8回	ビデオ（フランスの地理）、第3課Lecture	
	第9回	第4課：カフェで話す（自分の感想を言う）－形容詞、否定文	
	第10回	文法の復習と会話、練習問題	
	第11回	第4課Lecture、第5課：電話で話す（希望と予定を伝える）－指示形容詞、近い未来	
	第12回	文法の復習と会話、練習問題	
	第13回	第5課Lecture、第6課：道を尋ねる－疑問文	
	第14回	文法の復習と会話、練習問題	
	第15回	第6課Lecture、半年間の復習	
準備学習 (予習・復習等)	単語の意味を調べておくことは、最低限度の準備として必要です。また、テキストに付属のCDを良く聴いておくこと。		
テキスト	新・彼女は食いしん坊！ 1 （朝日出版社）		
参考文献	東京-パリ、フランス語の旅（藤田祐二他：駿河台出版社）、フランス文法の入門（島岡茂：白水社）		
評価方法	試験：80% 授業中の問題：10% 小テスト：10%		

フランス語（初級） I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
初めてのフランス語		檜垣 嗣子（ひがき つぎこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語とは異なるフランス語の音・綴りを理解し、知らない単語でも発音を推測できるようになる。 ・ 挨拶などの初歩的な表現を身につける。 		
授業の概要	<p>教科書にそって、フランス語を最初の一步から学んでいきます。 発音練習やフランス語での受け答えを頻繁におこなうため、授業中は積極的な姿勢が求められます。 簡単な挨拶や会話ができるようになることを目指し、普段の生活で無意識に接しているフランス語にも気づけるようになりましょう。 また、習ったことが確実に身につくよう、授業のはじめに必ず小テストをおこないます。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス：フランス語のアルファベット、綴り字記号	
	第2回	あいさつの表現、フランス語のつづりの読み方	
	第3回	自己紹介、主語の代名詞、動詞êtreの現在形	
	第4回	職業・国籍をあらわす表現	
	第5回	自分・他人を紹介する（応用）	
	第6回	「これはなんですか?」、名詞の性と数	
	第7回	冠詞（不定冠詞・定冠詞）	
	第8回	冠詞のつづき（部分冠詞）と色々な名詞	
	第9回	er動詞の現在形、疑問文	
	第10回	問いと答え、まとめと復習	
	第11回	avoirの現在形、数字（～20）	
	第12回	否定文、曜日と月	
	第13回	形容詞の使い方、数字（21～30）	
	第14回	特殊な形容詞	
	第15回	総まとめと復習	
準備学習 (予習・復習等)	第3回目以降は、毎回授業のはじめに小テストをおこないます。前回の授業内容をよく復習してきてください。		
テキスト	松本伊瑛子、内田智秀、下村武、フランク・デルパール（著）『iConos（イコノス）—初心者のためのフランス語入門』（アシェット・ジャポン）		
参考文献	必要に応じ授業で紹介。仏和辞典の購入については初回にアドバイスします。		
評価方法	小テスト・宿題:20% 定期試験:80%		

フランス語（初級） I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
フランス語入門		二川 佳巳（ふたがわ よしみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語入門のクラスとして、フランス語を正しく発音し、コミュニケーションに必要な基本的表現や文法規則を理解する。		
授業の概要	演習形式で授業をすすめる。まず必要な文法事項を解説し、スケッチを参考にしてやさしい会話表現を学び、最後に練習問題を解いて理解度を確認する。必要に応じて小テストを行い、中間テストと期末テストを行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション、アルファベ	
	第2回	フランス語の音	
	第3回	綴り字の読み方	
	第4回	主語代名詞、リエゾン・アンシェーヌマン・エリズィオン	
	第5回	自己紹介、動詞 être	
	第6回	名詞の性と数、不定冠詞	
	第7回	指示代名詞、形容詞の性・数一致	
	第8回	-er 動詞、定冠詞	
	第9回	疑問文、中間テスト	
	第10回	動詞 avoir、形容詞の位置	
	第11回	否定文、人称代名詞強勢形	
	第12回	指示形容詞、動詞 aller、faire	
	第13回	近接未来、所有形容詞	
	第14回	動詞 pouvoir、疑問形容詞、数詞 1~30	
	第15回	疑問代名詞	
準備学習 (予習・復習等)	各課のスケッチを学んだら、次回にすらすら読めるように復習しておくこと。また、すでにその課の文法事項の説明が終わっている場合は、練習問題を予習しておくこと。		
テキスト	藤田祐二・東海麻衣子『タルト・タタン』（駿河台出版社）		
参考文献	最初の授業で指示		
評価方法	中間・期末テスト:60% 小テストを含む平常点:40%		

フランス語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
コミュニケーションの幅を広げよう		加藤 行男（かとう ゆきお）	
授業の到達目標 及びテーマ	綴り字と発音の対応関係の習得度をより確かなものとする。現在形だけでなく過去形を用いた表現、あるいは比較級や代名詞などを用いた幅広い表現を理解し、自らもこれらを使用できるようになること。		
授業の概要	毎回、音読の練習を行う。文法事項の説明は教員が行うが、その他の練習問題や訳読は受講生各人にやってもらうので、受け身の学習にならないように積極的に取り組んでもらいたい。各課が終わる毎に小テストを実施する。毎回、必ず辞書を持参すること。授業中にスマートフォン等を使用することは認めない。		
授業計画	第1回	フランス語Ⅰの復習	
	第2回	UNITÉ 6 : 支払いはどうしますか ことばの形 : 1. 目的語になる人称代名詞 2. 近接過去 3. 関係代名詞 (1) que / qu'	
	第3回	UNITÉ 6 : 支払いはどうしますか ことばの形 : 4. 形容詞の比較級 5. 不規則動詞の現在形 (4) mettre, venir, pouvoir	
	第4回	UNITÉ 6 : 支払いはどうしますか 練習問題と聞き取り練習	
	第5回	UNITÉ 7 : 急いでください ことばの形 : 1. 命令文 2. 代名動詞 3. 近接未来	
	第6回	UNITÉ 7 : 急いでください ことばの形 : 4. 関係代名詞 (2) qui 5. 不規則動詞の現在形 (5) partir, faire 6. 疑問形容詞	
	第7回	UNITÉ 7 : 急いでください 練習問題と聞き取り練習	
	第8回	UNITÉ 8 : お決まりですか ことばの形 : 1. 複合過去 (1) 助動詞 avoir 2. 部分冠詞 3. 疑問代名詞	
	第9回	UNITÉ 8 : お決まりですか ことばの形 : 4. 強勢形の人称代名詞 5. 不規則動詞の現在形 (6) vouloir	
	第10回	UNITÉ 8 : お決まりですか 練習問題と聞き取り練習	
	第11回	UNITÉ 9 : 私たちはエッフェル塔に登りました ことばの形 : 1. 複合過去 (2) 助動詞 être	
	第12回	UNITÉ 9 : 私たちはエッフェル塔に登りました ことばの形 : 2. 関係代名詞 (3) dont, où 3. 所有形容詞 (2) 私の 君の その他	
	第13回	UNITÉ 9 : 私たちはエッフェル塔に登りました 練習問題と聞き取り練習	
	第14回	UNITÉ 10 : UNITÉ 6 ~ 9 の復習問題	
	第15回	UNITÉ 10 : UNITÉ 6 ~ 9 の発展問題	
準備学習 (予習・復習等)	意味の分からない単語や熟語は必ず辞書で調べておく。練習問題は授業前に一通り自分の力で答えを出しておくこと。		
テキスト	三訂版『やさしく学ぶ旅のフランス語』中村敦子著（第三書房）		
参考文献	特になし		
評価方法	小テスト:30% 定期試験:70%		

フランス語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
フランス語での日常的コミュニケーションー基礎（続）		杉山 友一（すぎやま ゆういち）	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語の基礎的な文法と会話表現を修得する。比較や未来などフランス語より複雑な構造を取り入れて、次第に複雑な内容の会話ができるようになる。		
授業の概要	フランス語Ⅰから引き続き、基礎的な文法と表現を学習するが、知識の正確さ、多様さを重視する。そのため、Ⅱでは筆記のウェイトを増やし、学生が板書する機会を増やす。		
授業計画	第1回	7月の試験の解説	
	第2回	フランス語Ⅰの簡単な復習、第7課：買い物ー数量の表現	
	第3回	文法の復習と会話、練習問題	
	第4回	第8課：サッカー観戦ー疑問形容詞、非人称	
	第5回	文法の復習と会話、練習問題	
	第6回	第8課Lecture, 仏検の問題	
	第7回	第9課：デパートでの買い物ー比較の表現	
	第8回	文法の復習と会話、練習問題	
	第9回	第9課Lecture, 第10課：紹介するー補語と代名動詞	
	第10回	文法の復習と会話、練習問題	
	第11回	ビデオ（パリのクリスマス）、第10課Lecture	
	第12回	第11課：旅の話ー過去を表す表現	
	第13回	文法の復習と会話、練習問題	
	第14回	第11課Lecture、第12課：別れを言うー未来を表す表現	
	第15回	文法の復習と会話、練習問題、定期試験前の復習	
準備学習 (予習・復習等)	単語の意味調べは必ず必要です。動詞の活用がだんだんと多様化するので、新出動詞の活用を授業の後でしっかり復習すること。		
テキスト	新・彼女は食いしん坊！1（藤田祐二、朝日出版社）		
参考文献	東京ーパリ、フランス語の旅（藤田祐二他：駿河台出版社）、フランス文法の入門（島岡茂：白水社）		
評価方法	試験：80% 授業中の問題：10% 小テスト：10%		

フランス語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
フランス語の基礎を学ぶ		檜垣 嗣子（ひがき つぎこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	初歩的なフランス語の文章を理解し・使えるようになる。 自分の好みや生活など、フランス語で自分について表現できるようになる。		
授業の概要	教科書にそってフランス語の基礎を学びます。 綴り字の発音や基本文は何度もくり返し、着実に身につけられるよう練習します。 また、授業のはじめには前回の内容について小テストをおこないます。		
授業計画	第1回	問いと答え方のまとめ、ir動詞の現在形	
	第2回	指示形容詞と所有形容詞	
	第3回	「どのように、なぜ、いつ、どこ？」	
	第4回	時間の表現、疑問形容詞	
	第5回	天気表現、非人称構文	
	第6回	「～できる」、動詞allerの現在形	
	第7回	〈à+定冠詞〉の縮約、近接未来	
	第8回	「～したい、ほしい」、動詞venirの現在形	
	第9回	〈de+定冠詞〉の縮約、近接過去	
	第10回	命令形、復習	
	第11回	過去分詞の作り方、複合過去の形	
	第12回	動詞voirとprendre	
	第13回	色々な動詞の複合過去	
	第14回	練習問題	
	第15回	総まとめと復習	
準備学習 (予習・復習等)	第2回目からは、授業のはじめに毎回小テストをおこないます。前回の授業内容をよく復習してきてください。		
テキスト	松本伊瑛子、内田智秀、下村武、フランク・デルパール（著）『iConos（イコノス）—初心者のためのフランス語入門』（アシェット・ジャポン）		
参考文献	必要な場合は授業中に紹介します。		
評価方法	小テスト・宿題:20% 定期試験:80%		

フランス語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
フランス語の初級		二川 佳巳（ふたがわ よしみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	フランス語Ⅰに続く初級のクラスとして、さまざまな動詞や時制を学び、やさしいフランス語の文を理解し表現できるようになる。		
授業の概要	演習形式で授業をすすめる。必要な文法事項を解説した後、スケッチを通してやさしい会話表現を学び、練習問題で理解度を確認する。必要に応じて動詞活用の小テストや書き取りを行い、中間試験・定期試験を行う。		
授業計画	第1回	定冠詞の縮約、疑問副詞	
	第2回	動詞 vouloir, prendre、部分冠詞	
	第3回	特殊な形容詞、数量表現	
	第4回	動詞 venir、第2群規則動詞	
	第5回	補語人称代名詞	
	第6回	中性代名詞	
	第7回	中間テスト、動詞 savoir, connaître	
	第8回	複合過去形	
	第9回	半過去形	
	第10回	非人称構文、感嘆文	
	第11回	代名動詞	
	第12回	比較級、最上級	
	第13回	指示代名詞	
	第14回	単純未来形	
	第15回	命令文、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	すでに学んだスケッチをすらすら読めるように復習しておくこと。 文法事項の説明が終わっている場合は、練習問題を予習しておくこと。		
テキスト	藤田祐二・東海麻衣子「タルト・タタン」（駿河台出版社）		
参考文献	特になし		
評価方法	定期試験:60% 小テストを含む平常点:40%		

ドイツ語（初級）Ⅰ		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
ドイツ語入門		飯田 道子（いいた みちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	ドイツ語文法の基礎、簡単な文章を理解する力、ドイツ語で表現できる力をつけていきます。		
授業の概要	パートナー練習と練習問題をとおして文法の基礎固めをしていきます。ほかにも映像資料などを使って、ドイツ語圏の文化に親しむようにしていきたいと思います。		
授業計画	第1回	導入 簡単なあいさつから	
	第2回	自己紹介 アルファベットと発音の基礎知識	
	第3回	お互いに知り合う	
	第4回	動詞の現在人称変化（規則変化）	
	第5回	動詞の現在人称変化（sein）	
	第6回	動詞の現在人称変化（haben 不規則変化動詞）	
	第7回	名詞の性	
	第8回	冠詞 ～好きな食べ物	
	第9回	冠詞類	
	第10回	不規則な変化をする動詞	
	第11回	分離動詞 ～週末の予定、一日の行動など	
	第12回	話法の助動詞 ～「～したい」という表現	
	第13回	非人称 ～天気表現	
	第14回	「夏休みは何をする？」	
	第15回	前期の総まとめ、試験	
準備学習 (予習・復習等)	学習した事柄はしっかり復習しておいてください。		
テキスト	アプファール<ノイ> スキットで学ぶドイツ語 （三修社） 飯田道子・江口直光 著		
参考文献	授業のはじめに独和辞典を紹介しますので、必携のこと		
評価方法	授業への出席と積極性:20% 授業内課題:20% 筆記試験:60%		

ドイツ語（初級）Ⅰ		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
ドイツ語入門		大谷 美奈（おおたに みな）	
授業の到達目標 及びテーマ	読む、書く、聴く、話すという多角度で、実際のドイツ語の初歩ができるようになる。		
授業の概要	「最初の日からドイツ語を使ってコミュニケーション」を想定して作られたテキストに沿って、文法説明後、キーセンテンスとそれを踏まえた会話や文章を、付属CDを聴き、声を出して読み、覚えていきます。各課に付いている練習問題では、表現や文法事項を書いて確認します。		
授業計画	第1回	授業の概要説明、アルファベット	
	第2回	発音	
	第3回	自己紹介	
	第4回	1課の練習	
	第5回	動詞	
	第6回	語順	
	第7回	2課の練習	
	第8回	パーティーで	
	第9回	3課の練習	
	第10回	大学の食堂で	
	第11回	4課の練習	
	第12回	市電内で	
	第13回	5課の練習	
	第14回	不規則変化動詞、数字	
	第15回	他人紹介	
準備学習 (予習・復習等)	授業で出てきたドイツ語表現を、テキスト付属CDで聴き、声に出して読み、手で書いて、覚える練習を繰り返し行ってください。		
テキスト	小黑びるぎった・日野安昭・佐藤方代『ともかく話そうドイツ語 - CD付き』（郁文堂）		
参考文献	独和辞書（最初の時間に紹介。毎時間携帯してくこと）		
評価方法	試験:50% 授業参加度:50%		

ドイツ語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
ドイツ語基礎		飯田 道子（いいだ みちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	前の学期に学習したことをふまえて、さらに複雑な文法を学んでいきます。		
授業の概要	パートナー練習を多用して、文法の定着をはかります。適宜作文練習もいれていきます。		
授業計画	第1回	前期の復習	
	第2回	「夏休みは何をした？」など過去のできごとを表現する	
	第3回	動詞の三基本形を学ぶ	
	第4回	前置詞を使って、位置や場所に関する表現を学ぶ	
	第5回	過去形と現在完了	
	第6回	受動文 ～修理や家事・料理に関する表現	
	第7回	再帰表現 ～趣味や楽しみにしていることなど	
	第8回	ふたつの文をひとつにする方法	
	第9回	比較・最上級	
	第10回	zu不定詞を使って表現	
	第11回	従属の接続詞と副文	
	第12回	非現実の表現	
	第13回	「もしも～だったら」という表現	
	第14回	総復習	
	第15回	一年のまとめ、試験	
準備学習 (予習・復習等)	これまでに学習した内容をしっかり復習してください。		
テキスト	アプファールト<ノイ> スキットで学ぶドイツ語（三修社） 飯田道子・江口直光 著		
参考文献	辞書は必携のこと		
評価方法	出席と授業内の課題:40% 学期末筆記試験:60%		

ドイツ語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
ドイツ語初級		大谷 美奈（おおたに みな）	
授業の到達目標 及びテーマ	入門ドイツ語をさらに深めて、初級ドイツ語を一通り理解し、実践的運用ができるようになる。		
授業の概要	「最初の日からドイツ語を使ってコミュニケーション」を想定して作られたテキストに沿って、文法説明後、キーセンテンスとそれを踏まえた会話や文章を、付属CDを聴き、声を出して読み、覚えていきます。各課に付いている練習問題では、表現や文法事項を書いて確認します。後半はキーセンテンス練習とテキストおよび文法項目の説明で進める予定です。		
授業 計画	第1回	名詞	
	第2回	冠詞	
	第3回	7課の練習	
	第4回	名詞の1格と4格、所有冠詞	
	第5回	8課の練習	
	第6回	時刻、曜日	
	第7回	9課の練習	
	第8回	分離動詞	
	第9回	話法の助動詞	
	第10回	10課の練習	
	第11回	買い物での表現	
	第12回	11課の練習	
	第13回	名詞の3格、クリスマスや誕生日での表現	
	第14回	過去についての表現、副文	
	第15回	美容院での表現	
準備学習 (予習・復習等)	授業で出てきたドイツ語表現を、テキスト付属CDで聴き、声に出して読み、手で書いて、覚える練習を繰り返し行ってください。		
テキスト	小黑びるぎった・日野安昭・佐藤方代『ともかく話そうドイツ語 - CD付き』（郁文堂）		
参考文献	独和辞書（最初の時間に紹介。毎時間携帯してくこと）		
評価方法	試験:50% 授業参加度:50%		

中国語（初級） I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
初めの中国語		孔 令敬（こう れいけい）	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座を通して、習得した発音要領による正確な発音と発音記号の運用、および基礎文型を使った簡単な表現に熟練する上で、修飾語の的確な使用による実用的なコミュニケーションができ、前期と後期を通して中検 4 級の語彙の習得を目指す。		
授業の概要	前期は中国語の発音要領と発音表記の規則をしっかりと理解させた上で、その正確な運用と簡単な文型の学習に重点を置き、後期はより複雑な文型と正しい修飾語の使用による豊かな表現を中心に授業を展開していく。		
授業計画	第 1 回	ガイダンス 中国語とは	
	第 2 回	母音と声調について	
	第 3 回	子音について	
	第 4 回	鼻母音と特殊母音について	
	第 5 回	音節と軽声	
	第 6 回	発音と発音表記のまとめ	
	第 7 回	動詞述語と形容詞が述語の表現について	
	第 8 回	疑問文の作り方について	
	第 9 回	まとめと復習	
	第 10 回	所在と存在を表す表現について	
	第 11 回	動作の進行と状態の持続を表す表現について	
	第 12 回	まとめと復習	
	第 13 回	前置詞による構文を使う表現について	
	第 14 回	動作の完了と過去を表す表現について	
	第 15 回	まとめと復習 筆記テスト	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配布したドリルとまとめのプリントはきちんとやってくること。		
テキスト	「始めの中国語」（基礎漢語）・オリジナル私家版・頒価：¥1,000		
参考文献	「やさしくくわしい中国語文法の基礎」・発行所： 東方書店、定価：¥ 2 1 0 0		
評価方法	宿題の完成度：25% 授業への参加度：25% 筆記試験：50%		

中国語（初級）Ⅰ		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
中国語で簡単な会話をする		本間 由香利（ほんま ゆかり）	
授業の到達目標 及びテーマ	ピンイン（発音記号）を読めるようにすることと、発音練習を重視し、単語単位ではなく文章を「中国語らしく」読めるよう訓練します。次に、必要最小限の文法を学び、シンプルな文を自分で組み立てられるようになることを目指します。		
授業の概要	比較的簡単なテキストを用いてゆっくりと授業を進めます。次々に新しい事を学ぶのではなく、十分に理解した上で反復訓練を行なうことを中心にします。学生諸君には大きな声で発音すること、進んで質問すること等、積極的に授業に参加して頂くことを期待します。また第三の言語を学び、日本語・英語を見る別の視線を身につける事にも配慮します。		
授業計画	第1回	私達が学ぶ「中国語」とは何か	
	第2回	発音記号について	
	第3回	発音練習（基礎）	
	第4回	発音練習（応用）	
	第5回	第1課「動詞“是”、否定文、疑問文」	
	第6回	復習と練習問題	
	第7回	第2課「形容詞の文」	
	第8回	復習と練習問題	
	第9回	第3課「疑問詞の文」	
	第10回	復習と練習問題	
	第11回	第4課「助動詞、副詞」	
	第12回	復習と練習問題	
	第13回	第5課「数詞、量詞」	
	第14回	復習と練習問題	
	第15回	前期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめテキスト付属CDを聞き、中国語の発音に慣れておくこと		
テキスト	『1冊めの中国語』喜多山幸子 他著 白水社		
参考文献	授業内で指示する		
評価方法	平常点:60% 定期テストの平均:40%		

中国語（初級） I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通	
初修中国語		劉 書明（りゅう しょめい）		
授業の到達目標 及びテーマ	<p>初心者に中国語の基礎を教える。</p> <p>①中国語の基礎発音、基礎文法、基礎句型等の知識を正確に理解し、確実に身につける。</p> <p>②凡そ単語1000語、基本文法、句型20個を目指す。</p> <p>③日常挨拶、簡単な会話ができる。</p>			
授業の概要	<p>まず、中国語の発音を母音、子音、声調の3回に分けて授業を進め、練習と復習を念入りに繰り返して行う。</p> <p>次に、簡単な会話文と文章を中心に基礎文法、句型を習うと同時に、発音の復習も重ねて行う。</p> <p>尚、授業の一環として宿題、小テストも行う。</p>			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	第1課 発音1、母音		
	第3回	母音の練習、復習		
	第4回	第2課 発音2、子音		
	第5回	子音の練習、復習		
	第6回	第3課 発音3、声調		
	第7回	声調の練習、復習	発音の小テスト	
	第8回	第4課 夏休み		
	第9回	本文の練習、復習	小テスト	
	第10回	第5課 外国語学習		
	第11回	本文の練習、復習	小テスト	
	第12回	第6課 どこから来たの？		
	第13回	本文の練習、復習	小テスト	
	第14回	1課から3課までの発音の総合復習		
	第15回	4課から6課までの総合復習		
準備学習 (予習・復習等)	必ず、授業前に予習、授業後に復習する。予習は、単語の発音、意味及び課文の読み方。復習は、文法、作文、課文の意味。そして、小テストに備える。			
テキスト	初修中国語テキスト 標準中国語 総合編			
参考文献	中日辞典、日中辞典（小学館）、その他、随時配布。			
評価方法	練習:20% 宿題:20% 小テスト:10% 定期試験:40% その他:10%			

中国語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
初めの中国語		孔 令敬（こう れいけい）	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座を通して、習得した発音要領による正確な発音と発音記号の運用、および基礎文型を使った簡単な表現に熟練する上で、修飾語の的確な使用による実用的なコミュニケーションができ、前期と後期を通して中検4級の語彙の習得を目指す。		
授業の概要	前期は中国語の発音要領と発音表記の規則をしっかりと理解させた上で、その正確な運用と簡単な文型の学習に重点を置き、後期はより複雑な文型と正しい修飾語の使用による豊かな表現を中心に授業を展開していく。		
授業計画	第1回	助動詞を使う表現	
	第2回	経験と実現ずみのことを表わす表現	
	第3回	慣用句を使う表現	
	第4回	まとめと練習	
	第5回	動詞を連用する構文による表現	
	第6回	行為の程度を表す表現	
	第7回	動作の結果を表す表現	
	第8回	まとめと練習	
	第9回	動作の方向を表わす表現	
	第10回	未来表現と処置を表わす表現	
	第11回	比較を表わす表現	
	第12回	まとめと練習	
	第13回	使役を表わす表現	
	第14回	受け身を表わす表現	
	第15回	総まとめと筆記試験	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配布したドリルとまとめはきちんとやってくること。		
テキスト	「始めの中国語」（基礎漢語）・オリジナル私家版・頒価：¥1,000		
参考文献	「やさしくくわしい中国語文法の基礎」・発行所： 東方書店、定価：¥2100		
評価方法	宿題の完成度：25% 授業への参加度：25% 筆記試験：50%		

中国語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
中国語で簡単な会話をする		本間 由香利（ほんま ゆかり）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期に学んだ文法事項の理解と反復練習を通じて、自分のこと、身の回りの事柄について、簡単な中国語で会話ができるようになることを目標とします。		
授業の概要	比較的簡単なテキストを用いてゆっくりと授業を進めます。次々に新しい事を学ぶのではなく、十分に理解した上で反復訓練を行なうことを中心にします。学生諸君には大きな声で発音すること、進んで質問すること等、積極的に授業に参加して頂くことを期待します。また第三の言語を学び、日本語・英語を見る別の視線を身につける事にも配慮します。		
授業計画	第1回	前期の内容復習 第6課「動詞“有”と“在”」	
	第2回	復習と練習問題	
	第3回	第7課「連動文」	
	第4回	復習と練習問題	
	第5回	第8課「前置詞」	
	第6回	復習と練習問題	
	第7回	第9課「助動詞“会”、“能”、“可以”」	
	第8回	復習と練習問題	
	第9回	第10課「過去の経験」	
	第10回	復習と練習問題	
	第11回	第11課「比較の文」	
	第12回	復習と練習問題	
	第13回	第12課「結果補語、二重目的語文」	
	第14回	復習と練習問題	
	第15回	後期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ付属CDを聞き、中国語の発音に慣れておくこと		
テキスト	『1冊めの中国語 会話クラス』喜多山幸子 他著 白水社		
参考文献	授業内で指示する		
評価方法	平常点:60% 定期テストの平均:40%		

中国語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
初修中国語		劉 書明（りゅう しょめい）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>前期に引き続き、中国語の基礎を学ぶ。</p> <p>①すでに習った中国語の発音、基礎文法、基礎句型を復習し、更に単語1000語、句型20個を増やす。</p> <p>②日常会話、簡単な文章を書けることを目指す。</p>		
授業の概要	<p>始めに、前期の発音、文法、挨拶、会話等の復習を行う。それを基礎にスキルアップを図る。</p> <p>次に、中級の難易度にレベルアップし、会話と文章の学習を行うと同時に、作文の訓練も行う。</p> <p>前期同様、授業の一環として課題、小テストを行う。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	前期の復習	
	第3回	復習の練習、小テスト	
	第4回	第7課 部屋探し	
	第5回	本文の練習、復習	
	第6回	第8課 北京と上海	
	第7回	本文の練習、復習 小テスト	
	第8回	第9課 アルバイト	
	第9回	本文の練習、復習	
	第10回	第10課 レポート	
	第11回	本文の練習、復習 小テスト	
	第12回	第11課 計画と目標	
	第13回	本文の練習、復習 小テスト	
	第14回	7課から9課までの総合復習	
	第15回	10課から11課までの総合復習	
準備学習 (予習・復習等)	必ず、授業前に予習、授業後に復習する。予習は単語の発音、意味及び課文の読み方。復習は、文法、作文、課文の意味。そして、小テストに備える。		
テキスト	初修中国語テキスト 標準中国語 総合編 （朝日出版社）		
参考文献	中日辞典、日中辞典（小学館）。その他は、随時配布。		
評価方法	練習:20% 宿題:20% 小テスト:10% 定期試験:40% その他:10%		

韓国語（初級）Ⅰ		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
韓国語と韓国の文化・社会 1		川村 受映（かわむら じゅえい）	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座では、韓国語の基礎をマスターすることを目的とする。韓国語の読み書きをはじめ、文章のつくり方など基本的な文法を指導するが、全体的に会話に重点を置く。具体的には授業中二人一組のペアを組み、会話の練習を繰り返すことで簡単な日常会話ができるようにする。なお、韓国関係のDVD映画などを用いることで、韓国の現代社会や文化にもふれる。インターネットを活用して授業を進めると同時にコンピューターでハングルのやり取りができるようになる。		
授業の概要	講義形式 教科書に沿って講義をすすめる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び韓国語についての全般的な説明	
	第2回	基本母音 基本子音（読み、書き）	
	第3回	複合母音 終音	
	第4回	単語の発音	
	第5回	第1課 「・・・はです（か）」の表現	
	第6回	第1課 会話練習	
	第7回	第2課 名詞＋です	
	第8回	第2課 会話練習	
	第9回	第3課 時間言い方	
	第10回	第3課 会話練習	
	第11回	第4課 助詞	
	第12回	第4課 会話練習	
	第13回	第5課 指示代名詞	
	第14回	第5課 会話練習	
	第15回	第5課 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習内容：毎授業後宿題を提出すること。 予習内容：次回の授業内容を読んでくること。		
テキスト	「かんたん！ 韓国語」 金殷模著 朝日出版社		
参考文献	未定		
評価方法	授業態度：20% 宿題：30% 期末試験：50%		

韓国語（初級） I		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
韓国語の発音と会話と文化		金 元恵（きむ うおんへ）	
授業の到達目標 及びテーマ	言語はコミュニケーション及びその国の文化理解のために大切な手段です。 一番近い外国である韓国の言葉を楽しく身に付け、新しい世界を発見することを目指す。基礎的ハングルの読み書き、簡単な会話、口頭での自己紹介ができるようになることを目標とし、ビデオを見ながら聞き取りの練習をします。		
授業の概要	テキストが中心になります。練習問題を宿題として出します。同時にテキスト以外のものも多く学びます。 文法を習得して短文作成を学ばせる。充分練習した自己紹介を発表することによって、自信感を持たせます。 「friends」のビデオを見せつつ言葉、会話、文化を学びます。		
授業計画	第1回	ハングルの由来と文化	
	第2回	文字について、母音について、単語の発音と書く練習	
	第3回	文字について、子音について、単語の発音と書く練習	
	第4回	文字について、濃音について、単語の発音と書く練習	
	第5回	文字について、終声（パッチム）の練習	
	第6回	日常生活の基本的な単語の意味と発音練習（TESTのため）	
	第7回	自己紹介の文をつくる。発音の練習（発表のため）	
	第8回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。現在形、過去形の表現	
	第9回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。用言の否定表現	
	第10回	単語TEST, 自己紹介の練習	
	第11回	日韓合作ドラマ「friends」感想	
	第12回	日韓合作ドラマ「friends」感想と、言葉を学ぶ	
	第13回	ビデオに出て来る韓国の文化を学ぶ	
	第14回	自己紹介の発表TEST	
	第15回	自己紹介の発表と日・韓合作ドラマの感想文の提出	
準備学習 (予習・復習等)	毎回のテキストに出る単語の内5つを復習すること。		
テキスト	「韓国語の初歩」、白水社、著者：嚴基珠 金三順 金天鶴 甲鉉竣 吉川知文		
参考文献	特に定めず授業時に紹介する。		
評価方法	発音のTEST:20% 自己紹介のTEST:30% 単語TEST:30% 宿題:20%		

韓国語（初級）Ⅰ		前期 1 単位	1・2年 2 学科共通
韓国語（初級）Ⅰ		富所 明秀（とみどころ みよんす）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 朝鮮語の文字と音価を学び、発音の変化を理解する。 ・ 助詞の使い方と「ですます」形の活用ができるようにする。 		
授業の概要	<p>授業の初めに前回の復習を行い、小テストをします。 欠席はなるべくしないようにしてください。 欠席する場合には休んだ部分の自習を行い、 理解できない部分について質問してください。</p>		
授業計画	第1回	第1課 基本母音字, 第2課 子音字その1	
	第2回	第3課 子音字その2	
	第3回	第4課 子音字その3	
	第4回	第5課 7つの終声	
	第5回	第6課 用言の「ですます形」	
	第6回	第7課 激音	
	第7回	第8課 合成母音字	
	第8回	第9課 濃音	
	第9回	第10課 連音化	
	第10回	第11課 疑問形と否定形	
	第11回	第12課 平音の濃音化	
	第12回	第13課 日本語のハングル表記	
	第13回	第14課 激音化・鼻音化・口蓋音化	
	第14回	復習その1	
	第15回	復習その2	
準備学習 (予習・復習等)	毎回小テストを行うので、必ず復習をしてください。		
テキスト	内山政春著『しくみで学ぶ初級朝鮮語』（白水社）		
参考文献	適宜紹介する		
評価方法	小テスト:30% 期末試験:70%		

韓国語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
韓国語と韓国の文化、社会 2		川村 受映（かわむら じゅえい）	
授業の到達目標 及びテーマ	この講座では、韓国語 1 で身につけた韓国語をさらに深めることを目的とする。会話を中心に進めることで会話能力を高めることができるようになる。		
授業の概要	講義形式 教科書に沿って講義をすすめる。		
授業計画	第 1 回	第 6 課 助詞「～に」	
	第 2 回	第 6 課 会話練習	
	第 3 回	第 7 課 助詞「～を」	
	第 4 回	第 7 課 会話練習	
	第 5 回	第 8 課 場所を表す助詞「～で」	
	第 6 回	第 8 課 会話練習	
	第 7 回	第 9 課 助詞「～も」	
	第 8 回	第 9 課 会話練習	
	第 9 回	第 10 課 用言の「～です/～ます」形	
	第 10 回	第 10 課 会話練習	
	第 11 回	第 11 課 不規則用言体	
	第 12 回	第 11 課 会話練習	
	第 13 回	第 12 課 名詞文の過去表現	
	第 14 回	第 12 課 会話練習	
	第 15 回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	復習内容：毎授業後宿題を提出すること。 予習内容：次回の授業の内容を読んでくること。		
テキスト	「かんたん！ 韓国語」金殷模著 朝日出版		
参考文献	未定		
評価方法	授業態度:20% 宿題:30% 期末試験 :50%		

韓国語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
書いて覚える韓国語		金 元恵（きむ うおんへ）	
授業の到達目標 及びテーマ	多くの日常生活の単語と文法を覚えて、年末年始の生活ぶりに関する内容が書けることを目指す。テキストの各テーマに従って会話ができるようになる。文法に従って様々な長目の文章づくりができるようになる。		
授業の概要	テキストが中心になり、練習問題を宿題として出す。同時にテキスト以外のものも多く学ぶ。形容詞と動詞の語尾の変化を学び、「お正月」のテーマで手紙を書くことを目指します。		
授業計画	第1回	発音の復習	
	第2回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。（～している—進行、～したい—願い、の表現）	
	第3回	基本的な文法を習得。単文づくりを学ぶ。（～するために—目的、の表現）	
	第4回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ① テキスト15課	
	第5回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ② テキスト16課	
	第6回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ③ テキスト18課	
	第7回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ④ テキスト19課	
	第8回	日常生活の基本的な形容詞の意味と発音	
	第9回	形容詞の発音と単文づくりを学ぶ	
	第10回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ⑤ テキスト20課	
	第11回	テキストに従ってpointとなる日常会話を学ぶ⑥ テキスト21課	
	第12回	形容詞のTEST 「かえるの物語」	
	第13回	動詞の語幹にどんな語尾がつかがるかを学ぶ テキスト23課	
	第14回	韓国のお正月用語と手紙の書き方、お料理の紹介	
	第15回	総まとめと復習	
準備学習 (予習・復習等)	毎回のテキストの文法と単語5つを復習すること。		
テキスト	「韓国語の初歩」、白水社 著者：巖基珠 金三順 金天鶴 甲鉉竣 吉川知文		
参考文献	特に定めず、授業時に紹介する。		
評価方法	発音のTEST:20% 単語TEST:30% 「お正月」の手紙:30% 宿題:20%		

韓国語（初級）Ⅱ		後期 1 単位	1・2年 2 学科共通
韓国語（初級）Ⅱ		富所 明秀（とみどころ みよんす）	
授業の到達目標 及びテーマ	さまざまな語尾について学び、自在に活用できるようにする。		
授業の概要	授業の初めに復習を行い、小テストをします。 前期に学んだ「ですます」形からドラマで見聞きする「ですます」形を学びます。		
授業計画	第1回	前期の復習 第15課 子音語幹用言	
	第2回	第16課 複数の用言をつなぐ	
	第3回	第17課 動詞の進行形と連体形	
	第4回	第18課 固有数字とその単位	
	第5回	第19課 過去形その1	
	第6回	第20課 過去形その2	
	第7回	復習	
	第8回	中間試験	
	第9回	第21課 あいさつと尊敬形	
	第10回	第22課 指定詞の否定形・用言の活用と語基	
	第11回	第23課 形容詞ともうひとつの否定形	
	第12回	私家版テキストその1（パンマルとヘヨ体）	
	第13回	私家版テキストその2（ヘヨ体の尊敬形）	
	第14回	復習その1	
	第15回	復習その2	
準備学習 (予習・復習等)	毎回小テストを行うので、必ず復習してください。 前期に比べ、文法の理解力が必要とされるので、わからない箇所は必ず質問してください。		
テキスト	内山政春著『しくみで学ぶ初級朝鮮語』（白水社）		
参考文献	適宜紹介する		
評価方法	小テスト:20% 中間試験:40% 期末試験:40%		

短期語学留学A	後期集中 2 単位	1・2・3年
ニュージーランドで英語を学ぶ（夏期）	黒岩 裕（くろいわ ゆたか）	
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ニュージーランドのオークランド大学付属英語学校における3週間の英語研修で、英語の4技能を向上させる。 2. ホームステイ、他国の学生との交流、現地での生活を通して、日本では経験できない英語使用の機会をもつ。 3. ニュージーランドの文化と社会に関する理解を深める。 <p><授業の概要></p> <p>平日は習熟度別の少人数クラスで世界各地からの留学生と英語を学ぶ。週末は自由行動、現地での見学旅行など。宿泊はホームステイになる。</p> <p><授業計画> 現地の英語学校のスケジュール通りとする。</p> <p><準備学習> 現地の英語学校の指示に従うこと。</p> <p><テキスト> 現地の英語学校のテキストを用いる。</p> <p><参考文献> 適宜紹介する。</p> <p><評価方法> 現地の英語学校での成績を基に判定する。</p>		

短期語学留学B	春休集中 4 単位	1・2年 1年（現代教養、
オーストラリアで英語を学ぶ（春期）	黒岩 裕（くろいわ ゆたか）	
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オーストラリアのアデレード大学における5週間の英語研修で英語の4技能を向上させる。 2. ホームステイ、他国の学生との交流、現地での生活を通して、日本では経験できない英語使用の機会を持つ。 3. オーストラリアの文化と社会に関する理解を深める。 <p><授業の概要></p> <p>平日は習熟度別の少人数クラスで世界各地からの留学生と英語を学ぶ。週末は自由行動、現地での見学旅行など。宿泊はホームステイ。</p> <p><授業計画> 現地の英語学校のスケジュール通りとする。</p> <p><準備学習> 現地の英語学校の指示に従うこと。</p> <p><テキスト> 現地の英語学校のテキストを用いる。</p> <p><参考文献> 適宜紹介する。</p> <p><評価方法> 現地の英語学校での成績を基に判定する。</p>		

日本語 I		通年（前期）	2 単位	1年
アカデミック・ジャパニーズ入門編（大学で求められる日本語力の養成）		南口 順子（みなみぐち じゅんこ）		
授業の到達目標及びテーマ	専門書を読むための基礎的技術、講義を聞いてノートを取る技術、レポート・小論文作成など論理的文章を書く際に必要な表現技術の基礎と口頭表現の技術（特にインタビューとスピーチ等）、大学で学ぶ留学生が必要とされ、求められる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）の基礎力養成を目指す。			
授業の概要	上記到達目標を目指し、大学で学ぶ留学生が必要とされ求められるアカデミック・ジャパニーズの基礎力養成を日本語の「話す・聞く・読む・書く」の4技能にわたり総合的に伸ばしていく授業である。学生の自律的取り組みを促しつつ、個々の学生の日本語力や学習目的に応じて指導、サポートしていく。			
授業計画	第1回	文章表現（表記）/読解演習/自己紹介		
	第2回	文章表現（文体）/読解（指示語）他者紹介		
	第3回	文章表現・読解（事実関係）/インタビュー技術導入		
	第4回	文章表現・読解（意味解釈）/インタビュー実施		
	第5回	文章表現・読解（展開予測）/インタビューまとめ		
	第6回	文章表現・読解（推理）/テーマインタビュー導入		
	第7回	文章表現・読解（理由・根拠）/テーマインタビュー実施		
	第8回	小論文（段落）/読解（内容）/テーマインタビュー発表		
	第9回	小論文（要約文）/読解（意見）/自由インタビュー導入		
	第10回	小論文（要約練習）/読解（資料）/自由インタビュー実施		
	第11回	小論文（感想文）/読解（手紙）/自由インタビュー発表		
	第12回	小論文（感想文練習）/読解（メール）/インタビュー総括		
	第13回	小論文（説明文）/読解まとめ（前半）		
	第14回	小論文（説明文練習）/読解まとめ（後半）		
	第15回	前期試験前の総復習		
準備学習（予習・復習等）	①毎回授業で問題演習を（読解、文法等）をテスト形式で実施するため、各自間違った箇所を復習し、自分の弱点を意識化し、補強しておくこと。②授業時に出す課題（全体及び個別）に自律的に取り組むことが求められる。			
テキスト	授業時に指示する。			
参考文献	授業時に適宜指示する。			
評価方法	平常点:30% 小課題等の成果:20% 最終試験の成績:50%			

日本語 I		通年（後期）	1年
アカデミック・ジャパニーズ入門編（大学で求められる日本語力の養成）		南口 順子（みなみぐち じゅんこ）	
授業の到達目標及びテーマ	専門書を読むための基礎的技術、講義を聞いてノートを取る技術、レポート・小論文作成など論理的文章を書く際に必要な表現技術の基礎と口頭表現の技術（特にインタビューとスピーチ等）、大学で学ぶ留学生が必要とされ、求められる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）の基礎力養成を目指す。		
授業の概要	上記到達目標を目指し、大学で学ぶ留学生が必要とされ求められるアカデミック・ジャパニーズの基礎力養成を日本語の「話す・聞く・読む・書く」の4技能にわたり総合的に伸ばしていく授業である。学生の自律的取り組みを促しつつ、個々の学生の日本語力や学習目的に応じて指導、サポートしていく。		
授業計画	第1回	小論文技術（意見文導入）/スピーチ導入	
	第2回	小論文技術（意見文練習）/コメントの仕方	
	第3回	小論文技術（引用の仕方導入）/方法説明前半	
	第4回	小論文技術（引用の仕方練習）/方法説明後半	
	第5回	読解&文章表現（解説）/情報提供スピーチ準備	
	第6回	読解&文章表現（論説前半）/情報提供スピーチ実施	
	第7回	読解&文章表現（論説後半）/意見提供スピーチ準備	
	第8回	読解&文章表現（随筆前半）/意見提供スピーチ実施	
	第9回	読解&文章表現（随筆後半）/提言スピーチ準備	
	第10回	読解&文章表現（小説前半）/提言スピーチ実施	
	第11回	読解&文章表現（小説後半） - 要約・意見文作成へ	
	第12回	読解&文章表現（紀行文） - 要約・意見文作成へ	
	第13回	読解&文章表現（ルポ） - 要約・意見文作成へ	
	第14回	読解&文章表現まとめ - 要約・意見文作成へ	
	第15回	後期試験前の総復習	
準備学習（予習・復習等）	①毎回授業で問題演習を（読解、文法等）をテスト形式で実施するため、各自間違った箇所を復習し、自分の弱点を意識化し、補強しておくこと。②授業時に出す課題（全体及び個別）に自律的に取り組むことが求められる。		
テキスト	授業時に指示する。		
参考文献	授業時に適宜指示する。		
評価方法	平常点:30% 小課題等の成果:20% 最終試験の成績:50%		

日本語Ⅱ		通年（前期）	2 単位	2年
アカデミック・ジャパニーズ応用編（大学で求められる日本語力の養成）		南口 順子（みなみぐち じゅんこ）		
授業の到達目標及びテーマ	入門編で身に付けた日本語力を更に実践的に伸ばしていく。			
授業の概要	前期では、論文の書き方と口頭発表・討論の技術の習得を目指して授業を行う。学生の自律的な取り組みを促しつつ、個々の学生の日本語力や学習目的に応じて進めていく。			
授業計画	第1回	文章表現前の知識確認1/ニュース概要説明・意見		
	第2回	文章表現前の知識確認2/ニュース概要説明・意見		
	第3回	論理的文章の書き方1/ニュース概要説明・意見		
	第4回	論理的文章の書き方2/ニュース概要説明・意見		
	第5回	論理的文章の書き方3/ニュース概要説明・意見		
	第6回	論理的文章の書き方4/討論の方法		
	第7回	論理的文章の書き方5/討論練習1		
	第8回	論理的文章の書き方6/討論練習2		
	第9回	論理的文章の書き方7/討論フィードバック		
	第10回	論理的文章の書き方8/ディベート方法		
	第11回	論理的文章の書き方9/ディベート練習		
	第12回	論理的文章の書き方10/ディベートフィードバック		
	第13回	論理的文章の書き方11/		
	第14回	前期まとめ（予備）		
	第15回	前期試験		
準備学習（予習・復習等）	授業で扱う内容に関して、事前学習を進めて欲しい。毎回、授業時に小課題を出すので、やってくること。			
テキスト	プリントを配布			
参考文献	授業時に適宜指示する。			
評価方法	授業時取り組み:30% 小課題等の成果:20% 小論文及び発表の成績:50%			

日本語Ⅱ		通年（後期）	2年
アカデミック・ジャパニーズ応用編（大学で求められる日本語力の養成）		南口 順子（みなみぐち じゅんこ）	
授業の到達目標及びテーマ	入門編で身に付けた日本語力を更に実践的に高めていくことを目的に授業を進めていく。前期で身に付けた論文作成の技術を活用し、小論文作成を行う。		
授業の概要	後期では、日本について各自テーマを選び、資料を集め、調査（インタビュー又はアンケート）を実施し、その結果を分析し小論文を作成、最後に口頭発表を行う予定。 学生の自律的取り組みを促しつつ、個々の学生の日本語力や学習目的に応じて指導していく方針である。		
授業計画	第1回	小論文作成の手順について、アウトラインとは	
	第2回	テーマ設定、小論文計画書作成	
	第3回	資料収集1、調査方法について	
	第4回	資料収集2、調査表作成	
	第5回	資料収集3、調査実施1	
	第6回	資料分析1、調査実施2	
	第7回	資料分析2、調査結果集計、分析	
	第8回	小論文作成1（序論）	
	第9回	小論文作成2（本論）	
	第10回	小論文作成3（本論）	
	第11回	小論文作成4（本論）	
	第12回	小論文作成5（結論）	
	第13回	小論文作成6（結論）、参考文献、要約文作成	
	第14回	発表原稿作成	
	第15回	小論文提出、発表、口頭試問	
準備学習（予習・復習等）	授業以外にも小論文作成の作業を各自のペースで自律的に進めていくこと。		
テキスト	授業時に指示する		
参考文献	授業時に指示する		
評価方法	授業時の取り組み:30% 小課題等の成果:20% 小論文及び発表の成績:50%		

健康科学A		前期 2 単位	1・2・3年
ライフステージにおける健康と運動		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 女性の健康について幅広く知識を得るとともに理解を深めます。</p> <p>○ 健康を維持するために運動は欠かせません。なぜ日常生活には運動が必要かについて理解を深めます。</p> <p>○ 長寿社会にあって、なぜ若い時の健康の心がけが年老いての健康の在り方と関連するかについて理解を深めます。若い時からの心がけによって、年老いても健康で心豊かな人生を送ることができるよう目指します。</p>		
授業の概要	<p>私たちにあって健康は何にも益して大切であること、そのために食事・睡眠・運動など生活習慣の大切さを理解しています。しかし、具体的な取り組みとなると、意外と知らないことが多いのではないのでしょうか。本授業では、女性の立場から、健康を維持し体力や気力を持って積極的に日常生活を送ることができるように知識と運動の必要性を学びます。内容は授業計画に沿って行います。</p>		
授業計画	第1回	健康と運動について：少子高齢化、核家族化、地域社会の崩壊、テクノロジーの発達など、さまざまに現代社会は変化してきています。そのような中で、健康と運動についての問題と課題について考えます。	
	第2回	健康とは：「健康」という言葉はいつ頃から使われるようになったのでしょうか。現代につながる健康について歴史上ではどう考えられてきたのでしょうか。	
	第3回	スポーツとジェンダー：女性のスポーツと男性のスポーツ、社会的な女性スポーツの位置づけの現在とこれまで、を取り上げます。	
	第4回	フィットネスブームとダイエットブーム：日本社会におけるフィットネスブームやダイエットブームはどのように流行していったのでしょうか。ダイエットは必要ですか、ダイエットについて考えます。	
	第5回	推定エネルギー必要量と運動強度：一人ひとりが日常生活を送るために必要な推定エネルギー必要量と運動強度（身体活動量）を計算します。それを踏まえて生活の質を検討します。	
	第6回	運動と栄養：日常的にバランスのとれた栄養摂取を調べるとともに、必要な栄養素をサービング数で計算してみます。	
	第7回	女性の体と健康：女性は自らの健康だけでなく、次世代の命と健康をつなぐ存在でもあります。その立場から、妊娠、出産、発育発達、子育て、依存症（アルコール・パッチテストなど）について取り上げます。	
	第8回	測定：骨密度、BMI、体脂肪、背筋力、閉眼片脚立ち、エクササイズ・ウォーキングなどの測定を行います。体育館スポーツホールで行います。回は前後するかもしれませんが。	
	第9回	運動と筋肉：筋肉の衰えは日常生活の質に関係します。円滑な日常生活に必要な運動量と効果的な鍛え方について、その内容を検討します。	
	第10回	運動と骨：女性が年老いても健康で自立した生活を送るためには、丈夫な骨を維持していくことが重要です。そのためには、適度な運動と栄養が必要です。その運動と栄養とはどのようなものかを検討します。	
	第11回	健康維持のための有酸素運動：運動の仕方にはさまざまありますが、有酸素運動とはどのような運動のことかを理解します。運動と呼吸：呼吸は生命維持に不可欠ですが、胸式呼吸と腹式呼吸について理解します。	
	第12回	運動と疲労：一言で疲労といってもその内容はさまざまですが、疲労回復のために栄養補給をしたり、睡眠・休息を取ったりします。疲労は、運動によっても生じます。運動によって生じた疲労の効果的な疲労回復について考えます。	
	第13回	運動と睡眠：睡眠は円滑な日常生活に欠かせませんが、運動によって睡眠の質は変わるのか変わらないのか、について検討します。	
	第14回	スポーツ傷害と応急処置：身近な怪我や傷害の応急処置の方法やAEDについて取り上げます。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	一日の食事の内容、運動の内容を記録したり、調べたりします。測定のときには、測定できる服装でスポーツホールに来て下さい。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』森下春枝編著、共栄出版株式会社		
参考文献	北澤『健康の日本史』平凡社、貝原『養生訓』中央公論社、辻『スポーツ選手なら知っておきたい「からだ」のこと』大修館書店、和田『ミス日本式ダイエット』サンクチュアリ出版、若林『からだの教養12ヵ月』技術評論社、深代・長田『スポーツのできる子どもは勉強もできる』幻冬舎、山田『「老けない体」は骨で決まる』青春出版社		
評価方法	授業への積極的な参加:60% リアクションペーパー・感想文:20% 課題:20%		

健康科学A		後期 2 単位	1・2・3年
ライフステージにおける健康と運動		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 女性の健康について幅広く知識を得るとともに理解を深めます。</p> <p>○ 健康を維持するために運動は欠かせません。なぜ日常生活に運動が必要かについて理解を深めます。</p> <p>○ 長寿社会にあって、なぜ若い時の健康の心がけが年老いての健康の在り方と関連するかについて理解を深めます。若い時からの心がけによって、年老いても健康で心豊かな人生を送ることができるよう目指します。</p>		
授業の概要	<p>私たちにあって健康は何にもまして大切であること、そのために食事・睡眠・運動など生活習慣の大切さを理解しています。しかし、具体的な取り組みとなると意外と知らないことが多いのではないのでしょうか。本授業では、女性の立場から、健康を維持し体力や気力を持って積極的に日常生活を送ることができるように知識と運動の必要性について学びます。内容は授業計画に沿って行います。</p>		
授業計画	第1回	健康と運動について：少子高齢化、核家族化、地域社会の崩壊、テクノロジーの発達、さまざまに現代社会は変化してきています。そのような中で、健康と運動の問題と課題について考えます。	
	第2回	健康とは：「健康」という言葉はいつ頃から使われるようになったのでしょうか。現代につながる健康について歴史上ではどう考えられてきたのでしょうか。	
	第3回	スポーツとジェンダー：女性のスポーツと男性のスポーツ、社会的な女性スポーツの位置づけの現在とこれまで、を取り上げます。	
	第4回	フィットネスブームとダイエットブーム：日本社会におけるフィットネスブームやダイエットブームはどのようにして流行していったのでしょうか。ダイエットは必要ですか、ダイエットについて考えます。	
	第5回	推定エネルギー必要量と運動強度：一人ひとりが日常生活を送るために必要な推定エネルギー必要量と運動強度（身体活動量）を計算します。それを踏まえて生活の質を検討します。	
	第6回	運動と栄養：日常的にバランスのとれた栄養摂取かを調べるとともに、必要な栄養素をサービング数で計算してみます。	
	第7回	女性の体と健康：女性は自らの健康だけではなく、次世代の命と健康をつなぐ存在でもあります。その立場から、妊娠、出産、発育発達、子育て、依存症（パッチテストなど）について取り上げます。	
	第8回	測定：骨密度、BMI、体脂肪、背筋力、閉眼片脚立ち、エクササイズ・ウォーキングなどの測定を行います。体育館スポーツホールで行います。回は前後するかもしれませんが。	
	第9回	運動と筋肉：筋肉の衰えは日常生活の質に関係します。円滑な日常生活に必要な運動量と効果的な鍛え方について、その内容を検討します。	
	第10回	運動と骨：女性が年々老いても健康で自立した生活を送るためには、丈夫な骨を維持していくことが重要です。そのためには、適度な運動と栄養が必要です。その運動と栄養とはどのようなものかを検討します。	
	第11回	健康維持のための有酸素運動：運動の仕方にはさまざまありますが、有酸素運動とはどういう運動のことかを理解します。運動と呼吸：呼吸は生命維持に不可欠ですが、胸式呼吸と腹式呼吸について理解します。	
	第12回	運動と疲労：一言で疲労といってもその内容はさまざまですが、疲労回復のために栄養補給したり、睡眠・休息を取ったりします。疲労は、運動によっても生じます。運動によって生じた疲労の効果的な疲労回復について考えます。	
	第13回	運動と睡眠：睡眠は円滑な日常生活に欠かせませんが、運動によって睡眠の質は変わるのか変わらないのか、について話し合います。	
	第14回	スポーツ傷害と応急処置：身近な怪我や傷害の応急処置の方法やAEDについて取り上げます。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	一日の食事の内容、運動の内容を記録したり、調べたりします。測定のときには、測定できる服装でスポーツホールに来て下さい。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』森下春枝編著、共栄出版株式会社		
参考文献	北澤『健康の日本史』平凡社、貝原『養生訓』中央公論社、辻『スポーツ選手なら知っておきたい「からだ」のこと』大修館書店、和田『ミス日本式ダイエット』サンクチュアリ出版、若林『からだの教養12ヵ月』技術評論社、深代・長田『スポーツのできる子どもは勉強もできる』幻冬舎、山田『「老けない体」は骨で決まる』青春出版社		
評価方法	授業への積極的な参加:60% リアクションペーパー感想文:20% 課題:20%		

健康科学B		前期 2 単位	1・2・3年
女性の健康と運動		昆野 まり子（こんの まりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	女性らしく生きいきとした生活を送るために、健康とは何か、運動の必要性、思春期の女性として身につけておきたい知識を、講義と演習を通して理解する。		
授業の概要	前半は講義中心で行う。後半は、測定やストレッチなどを交えたワークショップ、ライフスタイルチェック等、健康が自分自身の身体、生活習慣と深く結びついていることを再確認する為、演習的な内容も含みながら進める。講義ではあるが、出席を重視する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	健康と身体の知識	
	第3回	運動と骨・筋肉	
	第4回	運動と食事	
	第5回	運動と呼吸・睡眠	
	第6回	運動とダイエット① あなたは本当に太っていますか？	
	第7回	運動とダイエット② ダイエットのために大切なこと	
	第8回	測定とワークショップ① あなたの数値を知りましょう	
	第9回	女性のライフスタイル	
	第10回	女性の病気	
	第11回	様々な依存症	
	第12回	測定とワークショップ② 1か月後のあなたは？	
	第13回	障害者とスポーツ	
	第14回	自己実現	
	第15回	応急手当 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業内で扱う骨・筋肉、食事、ダイエット、女性特有の病気（子宮頸がん、乳がん等）、依存症等に関連するニュースに、積極的に目を通しておくことが望ましい。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝編著 共栄出版株式会社		
参考文献	授業中、適宜紹介する。		
評価方法	授業への積極的な参加:60% リアクションシート:20% 最終時のレポート内容:20%		

健康科学B		後期 2 単位	1・2・3年
女性の健康と運動		昆野 まり子 (こんの まりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	女性らしく生きいきとした生活を送るために、健康とは何か、運動の必要性、思春期の女性として身につけておきたい知識を、講義と演習を通して理解する。		
授業の概要	前半は講義中心で行います。後半は、測定や、ストレッチ等を交えたワークショップ、ライフスタイルチェック等、健康が自分自身の身体、生活習慣と深く結びついていることを再確認する為、演習的な内容も含みながら進める。講義ではあるが、出席を重視する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	健康と身体の知識	
	第3回	運動と骨・筋肉	
	第4回	運動と食事	
	第5回	運動と呼吸・睡眠	
	第6回	運動とダイエット① あなたは本当に太っていますか？	
	第7回	運動とダイエット② ダイエットのために大切なこと	
	第8回	測定とワークショップ① あなたの数値を知りましょう	
	第9回	女性のライフスタイル	
	第10回	女性の病気	
	第11回	様々な依存症	
	第12回	測定とワークショップ② 1か月後のあなたは？	
	第13回	障害者とスポーツ	
	第14回	自己実現	
	第15回	応急処置 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業内で扱う骨・筋肉、食事、ダイエット、女性特有の病気（子宮頸がん・乳がん等）、依存症等に関連するニュースに、積極的に目を通しておくことが望ましい。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝編著 共栄出版株式会社		
参考文献	授業中適宜紹介する。		
評価方法	授業への積極的な参加:60% リアクションシート:20% 授業最終レポート:20%		

健康科学C		前期 2 単位	1・2・3年
健康のための運動とスポーツ		武井 大輔 (たけい だいすけ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「健康とは何か？」について、多角的な面からアプローチをし、からだや健康・運動に関する知識を習得する。スポーツの有効性や運動の必要性を認識し、自発的に自分の健康をどのように保持増進させるのか、実践的な考えを習得することができるようになる。</p> <p>傷病に対する応急手当の基礎知識を習得する。</p>		
授業の概要	<p>自分の健康を保持増進させるための講義。</p> <p>自分の健康観や健康実践を発表することも求められる。</p> <p>座学が中心だが、「レクリエーションスポーツの実践」等、実習形式の場合もある。</p>		
授業計画	第1回	健康の考え方	
	第2回	身体の基礎知識	
	第3回	体カトレーニングの基礎知識①有酸素運動	
	第4回	体カトレーニングの基礎知識②無酸素運動	
	第5回	ストレッチングの効用 (実習形式を予定)	
	第6回	健康のための生涯スポーツ	
	第7回	健康のためのレクリエーションスポーツ (実習形式を予定)	
	第8回	スポーツとスポーツマンシップ① (映像視聴)	
	第9回	スポーツとスポーツマンシップ② (スポーツマンシップについて考える)	
	第10回	スポーツとアンガーマネージメント① (アンガーマネージメントとは?)	
	第11回	スポーツとアンガーマネージメント② (アンガーマネージメントの活用)	
	第12回	スポーツ傷害	
	第13回	応急手当① (心肺蘇生法及びAEDの基礎知識)	
	第14回	応急手当② (三角巾の使用法・実習形式を予定)	
	第15回	①まとめ (あらためて健康とは?) ②総合テスト	
準備学習 (予習・復習等)	<p>授業時に提示する実践のヒントをもとに、日々の身体活動を心掛ける。</p> <p>前回授業時の内容を意識した、健康のための活動実践を報告できるようにしておくこと。</p>		
テキスト	『健やかな身体をめざして』森下春枝編著；共栄出版		
参考文献	授業時に資料配付 (適宜)		
評価方法	毎回の確認テスト:70% 総合テスト:30%		

健康科学C		前期 2 単位	1・2・3年
運動と健康		藤原 裕子（ふじわら ゆうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会を健康に生きていくために必要な様々な知識を習得する。		
授業の概要	運動と健康の関わりについて理解を深め、今後のライフステージを輝いて生きていくための方策を探究する。講義を中心とするが、自分のからだを知るためのワークショップ（実践体験）も実施する。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション・健康度チェック	
	第2回	健康の基礎知識① 睡眠と健康	
	第3回	健康の基礎知識② 食事（栄養）と健康	
	第4回	運動と健康の関わり① 疲労と運動	
	第5回	運動と健康の関わり② 代謝と運動	
	第6回	運動と健康の関わり③ 生活習慣病と運動	
	第7回	運動と健康の関わり④ 骨・筋肉の連携と運動	
	第8回	骨密度測定・ストレッチング・エクササイズ	
	第9回	女性のからだと病気	
	第10回	測定（自分のからだを知る）・ストレッチング・エクササイズ	
	第11回	危険なダイエット	
	第12回	健康的なダイエット	
	第13回	ストレッチング・体幹トレーニング	
	第14回	スポーツ障害の予防と応急手当	
	第15回	まとめ、小テスト	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に提示する実践のヒントをもとに、日々の身体活動を心掛ける。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』森下春枝編著；共栄出版		
参考文献	授業時に資料配付（適宜）		
評価方法	授業への積極的な参加：60% リアクションペーパー：20% 小テスト：20%		

健康科学D		前期 2 単位	1・2・3年
健康と運動（スポーツ）		高橋 宏文（たかはし ひろぶみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	生涯の健康について運動を中心とした観点から考えていく。また、身体の様々な機能などを理解すること、そして運動することで身体にはどのような変化が起こるかなどと合わせ健康作りへの知識を深めることが課題となる。		
授業の概要	授業では、現代人の（私たちの）生活習慣や健康への課題を整理し、運動（スポーツ）による身体への影響や変化、そしてその効果と運動の仕方について講義する。		
授業 計画	第1回	現代のスポーツ	
	第2回	私たちにとって「健康」とは？	
	第3回	生活習慣と健康	
	第4回	運動の行い方	
	第5回	運動による影響と効果	
	第6回	運動と体脂肪の関係	
	第7回	運動とダイエット	
	第8回	有酸素運動	
	第9回	運動と栄養	
	第10回	運動と骨や筋肉の関係	
	第11回	骨密度測定	
	第12回	スポーツと傷害（障害）予防	
	第13回	成長と運動	
	第14回	運動プログラムの組み立て方	
	第15回	スポーツの魅力	
準備学習 (予習・復習等)	テキストの該当ページを読むこと。 関連する情報を集め整理すること。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 共栄出版（株）		
参考文献	特になし		
評価方法	テスト :70% 平常点:30%		

健康科学D		後期 2 単位	1・2・3年
健康と運動（スポーツ）		高橋 宏文（たかはし ひろぶみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	生涯の健康について運動を中心とした観点から考えていく。また、身体のような機能などを理解すること、そして運動することで身体にはどのような変化が起こるかなどと合わせ健康作りへの知識を深めることが課題となる。		
授業の概要	授業では、現代人の（私たちの）生活習慣や健康への課題を整理し、運動（スポーツ）による身体への影響や変化、そしてその効果と運動の仕方について講義する。		
授業計画	第1回	現代のスポーツ	
	第2回	私たちにとって「健康」とは？	
	第3回	生活習慣と健康	
	第4回	運動の行い方	
	第5回	運動による影響と効果	
	第6回	運動と体脂肪の関係	
	第7回	運動とダイエット	
	第8回	有酸素運動	
	第9回	運動と栄養	
	第10回	運動と骨や筋肉の関係	
	第11回	骨密度測定	
	第12回	スポーツと傷害（障害）予防	
	第13回	成長と運動	
	第14回	運動プログラムの組み立て方	
	第15回	スポーツの魅力	
準備学習 (予習・復習等)	テキストの該当箇所を読むこと。 関連する情報を集め、整理する。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 共栄出版（株）		
参考文献	特になし		
評価方法	テスト：70% 平常点：30%		

健康科学E		前期 2 単位	1・2・3年
こころの健康		鈴木 幹夫 (すずき みきお)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>身体の健康に比べ、心の健康について、日常我々は、さほど気にとめないように思われます。それは、心が自らを見つめるとき、その当の心自身の不健康さには気づきにくいという、心の構造上の事情があるのかも知れません。眼は、自らを直接視ることができず、おれを視るためには鏡を要するように、です。そんな心の健康、不健康について考えます。</p>		
授業の概要	<p>講義が中心となります。解らないこと疑問があれば、随時その場で質問をしてください。イメージし易いように、なるべく具体的な例を挙げ、解りやすく説明するよう心がけます。下記の授業計画は、おおよその予定であり、多少前後する場合があります。</p>		
授業計画	第1回	総論 1	こころの発達 1 (フロイトの発達理論 その1)
	第2回	総論 2	こころの発達 2 (フロイトの発達理論 その2)
	第3回	総論 3	こころの発達 3 (発達論的性格類型)
	第4回	各論 1	性格の形成、神経症総論
	第5回	各論 2	女性に多い神経症 (ヒステリーについて)
	第6回	各論 3	男性に多い神経症 (強迫症について)
	第7回	各論 4	小児期の問題 1 (妊娠中注意すべきことなど)
	第8回	各論 5	小児期の問題 2 (発達障害など)
	第9回	各論 6	青年期のこころの健康 1 (神経性食思不振症など)
	第10回	各論 7	青年期のこころの健康 2 (薬物依存など)
	第11回	各論 8	気分障害 1 (うつ病性障害と双極性障害)
	第12回	各論 9	気分障害 2 (うつ病の精神病理)
	第13回	各論10	統合失調症 1 (成因、症状と経過)
	第14回	各論11	統合失調症 2 (分類、治療)
	第15回	周辺領域	司法精神医学と創造の精神医学 (精神鑑定と病跡学)
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回、講義の前に、テキスト『コメディカルのための精神医学』の該当する部分を読み、あらかじめ予備的知識を得てから、授業に臨むことが望ましい。なお、講義ではテキスト以上に詳しい内容を話します。</p>		
テキスト	鈴木幹夫著 『コメディカルのための精神医学』 DTP出版		
参考文献	図書館カウンターにある2015年度指定参考図書を参照のこと。他は、授業時に随時紹介します。		
評価方法	平常点:50% 期末提出のレポート:50%		

健康科学E		後期 2 単位	1・2・3年
こころの健康		鈴木 幹夫 (すずき みきお)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>身体の健康に比べ、心の健康について、日常我々は、さほど気にとめないように思われます。それは、心が自らを見つめるとき、その当の心自身の不健康さには気づきにくいという、心の構造上の事情があるのかも知れません。眼は、自らを直接視ることができず、おれを視るためには鏡を要するように、です。そんな心の健康、不健康について考えます。</p>		
授業の概要	<p>講義が中心となります。解らないことがあれば、随時その場で質問をしてください。イメージし易いように、なるべく具体的な例を挙げ、解りやすく説明するよう心がけます。下記の授業計画は、おおよその予定であり、多少前後する場合があります。</p>		
授業計画	第1回	総論 1 こころの発達 1 (フロイトの発達理論 その1)	
	第2回	総論 2 こころの発達 2 (フロイトの発達理論 その2)	
	第3回	総論 3 こころの発達 3 (発達論的性格類型)	
	第4回	各論 1 性格の形成、神経症総論	
	第5回	各論 2 女性に多い神経症 (ヒステリーについて)	
	第6回	各論 3 男性に多い神経症 (強迫症について)	
	第7回	各論 4 小児期の問題 1 (妊娠中注意すべきことなど)	
	第8回	各論 5 小児期の問題 2 (発達障害など)	
	第9回	各論 6 青年期のこころの健康 1 (神経性食思不振症など)	
	第10回	各論 7 青年期のこころの健康 2 (薬物依存など)	
	第11回	各論 8 気分障害 1 (うつ病性障害と双極性障害)	
	第12回	各論 9 気分障害 2 (うつ病の精神病理)	
	第13回	各論10 統合失調症 1 (成因、症状と経過)	
	第14回	各論11 統合失調症 2 (分類、治療)	
	第15回	周辺領域 司法精神医学と創造の精神医学 (精神鑑定と病跡学)	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回、講義の前に、テキスト『コメディカルのための精神医学』の該当する部分を読み、あらかじめ予備的知識を得てから、授業に臨むことが望ましい。なお、講義では、テキスト以上に詳しい内容を話します。</p>		
テキスト	鈴木幹夫著 『コメディカルのための精神医学』 DTP出版		
参考文献	図書館カウンターにある2015年度指定参考図書を参照のこと。他は、授業中に随時紹介します。		
評価方法	定常点:50% 期末提出のレポート:50%		

体育実技A（コンディショニング）		前期 1 単位	1・2・3年
自身の体を知り、コンディションを整えていくために		功刀 梢（くぬぎ こずえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	日々変化する体の状況を捉え、自らコーディネートしていく意義と方法を習得する。また、自己だけでなく他者の体への気づきを高め、適切なコミュニケーションを図ることができるようになる。さらには、体を通して心の変化にも気づくまなざしを持ち、心身ともに調和のとれた心地よい体へと導く、運動習慣の意義について理解する。		
授業の概要	自身の体の状態を知る活動を行ったのちに実技へと入っていく。実技の内容は、ヨガ、ピラティス、エアロビクス等を用い、日常的にも行えるエクササイズとして提示していく。自身とじっくり向き合うボディワークと、他者と一緒に楽しみながら活動するワークをミックスしながら授業を進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、20mシャトルラン	
	第2回	自身の体を知る(1)	
	第3回	自身の体を知る(2)、骨盤矯正	
	第4回	ウォーキングエクササイズ、バレエエクササイズ(1)	
	第5回	バレエエクササイズ(2)	
	第6回	ボールを使ったワーク(1)	
	第7回	ボールを使ったワーク(2)	
	第8回	映像を使ったワーク	
	第9回	ピラティスエクササイズ&筋コンディショニング(1)	
	第10回	ピラティスエクササイズ&筋コンディショニング(2)	
	第11回	ヨガエクササイズ&リラクゼーション(1)	
	第12回	ヨガエクササイズ&リラクゼーション(2)	
	第13回	エアロビクス基本ステップ	
	第14回	エアロビクス基本ステップ&コンビネーション	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業内容は日常生活に反映できるものが多くあるので、日常生活に習慣化する工夫をすること。日頃から自分の心身の状態を観察する習慣をもち、変化を意識すること。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝編著 共栄出版株式会社		
参考文献	授業中適宜紹介する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 授業内レポート:10% 最終レポート:20%		

体育実技A (バレエエクササイズ)		前期 1 単位	1・2・3年
基礎的なバレエテクニックの習得と、バランスのよい身体づくり		功刀 梢 (くぬぎ こずえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	バレエの基礎を楽しく身につけながら、自身の体と向き合い、歪みの補正と筋力強化を目指す。自身の体とともに心の変化にも気づくまなざしを持ち、総合的な身体のバランスを高めることを目標とする。		
授業の概要	毎回ゆっくりとしたストレッチから始め、バーレッスン、フロアレッスンへと移行する。バレエのテクニックは基礎的なものを中心にじっくりと練習しながら身につけていき、最終的には音楽によって短いフレーズが踊れるようになることを目指す。エクササイズ中は必ず左右ともに練習をし、体のバランスを整えるよう進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、20mシャトルラン	
	第2回	ストレッチ、足と手のポジション	
	第3回	バーレッスン①プリエ、ルルヴェ	
	第4回	バーレッスン②タンジュ、デガジェ	
	第5回	バーレッスン③フォンデュ	
	第6回	バーレッスン④ロンデジャンプ・アテール	
	第7回	バーレッスン⑤グランバットマン	
	第8回	VTR鑑賞	
	第9回	フロアレッスン①ウォーキング	
	第10回	フロアレッスン②シェネ、ピルエット	
	第11回	フロアレッスン③ワルツ	
	第12回	フロアレッスン④ワルツ	
	第13回	振付け	
	第14回	最終発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で行うストレッチを、半期を通して継続的に行うことが望ましい。 また、自身の体への意識を高め、日々変化する体の状態を確認しながら授業に臨むこと。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝編著 共栄出版株式会社		
参考文献	授業中適宜紹介する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 授業内レポート:10% 最終レポート:20%		

体育実技A（ピラティス）		前期 1 単位	1・2・3年
ピラティス		昆野 まり子（このん まりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	ジョセフ・ピラティスにより考案されたエクササイズを行いながら、しなやかで美しく、バランスのとれた身体作りの方法を学ぶ。週1度ピラティスを行うことにより、日頃抱えている身体の問題（腰痛、肩こり、冷え症、生理痛等）を解消し、身体の機能を高めることが出来るようになる。		
授業の概要	ピラティスでは、呼吸とコアの意識が非常に重要となる。まず、呼吸とコアの意識を持つことを丁寧に行い、次第にアクティブなエクササイズへと移行していく。回を重ねるごとに身体への意識が高まるよう促していく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション／シャトルラン	
	第2回	自分の身体を知ろう 測定 ストレッチ	
	第3回	ブレ・ピラティス①呼吸	
	第4回	ブレ・ピラティス②Cカーブ	
	第5回	スモールボール ストレッチ	
	第6回	スモールボール 腹筋群	
	第7回	スモールボール 背筋群	
	第8回	VTR鑑賞	
	第9回	セラバンド 四肢	
	第10回	セラバンド 肩関節肩甲骨周辺	
	第11回	ビッグボール 骨盤回り	
	第12回	ビッグボール 背筋腹筋	
	第13回	ビッグボール ダイナミックな動き	
	第14回	マットピラティス まとめ 測定	
	第15回	マットピラティス まとめ レポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	授業内で行うストレッチを、半期を通し行うことが望ましい。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝編著 共栄出版株式会社		
参考文献	授業中適宜紹介する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 授業内レポート:10% 授業最終レポート:20%		

体育実技A (バレーボール)		前期 1 単位	1・2・3年
バレーボール		高橋 宏文 (たかはし ひろぶみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	生涯スポーツの1つでもあるバレーボールについてゲームを中心としたプログラムで取り組む。内容としては、ゲームの簡単な構造を理解した上でチームとして一体感を持ってプレーすることを実践し、楽しんで身体を動かしていく。		
授業の概要	はじめに、バレーボールの基礎技術であるスパイク、トス、レシーブetcについて、練習を通して技術の確認と調整を行う。次に、その個人の基礎技術を連係プレーに発展させていき、チームプレーとして一体感を発揮しゲームに活かしていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20mシャトルラン	
	第2回	ボールヒッティング	
	第3回	スパイク	
	第4回	オーバーハンドパスとアンダーハンドパス	
	第5回	トス	
	第6回	レシーブ	
	第7回	基本的な連係プレー	
	第8回	応用的な連係プレー	
	第9回	ゲーム① サーブレシーブのフォーメーションを知る	
	第10回	ゲーム② サーブレシーブのフォーメーションを活用する	
	第11回	ゲーム③ カバーリング	
	第12回	ゲーム④ ラリー中の動き方1	
	第13回	ゲーム⑤ ブロック	
	第14回	ゲーム⑥ 状況判断の仕方	
	第15回	ゲームのまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	テキストや参考文献を読み、予備知識を持って取り組む。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』 共栄出版 (株)		
参考文献	基礎からのバレーボール ナツメ社		
評価方法	平常点:60% レポート課題:40%		

体育実技A (バドミントン)		前期 1 単位	1・2・3年
バドミントンを楽しむために		武井 大輔 (たけい だいすけ)	
授業の到達目標 及びテーマ	バドミントンという、比較的安全及び簡易に行なえるスポーツを体験・習得することにより、今後の人生における「生涯スポーツの実践」に役立てることを目指す。 スポーツにおける身体活動を通じて、コミュニケーション能力の向上を目指す。		
授業の概要	ゲームを安全に、楽しく実施できるようになることが目的なので、ゲーム及びゲーム形式の練習が中心となる。同時にルールについても習得していく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20mシャトルラン	
	第2回	①ラケットの握り方及びラケットワークの基本	
	第3回	①ハイクリアーの練習 ②サーブの練習 ③簡易ゲーム	
	第4回	①ドロップの練習 ②サーブの練習 ③簡易ゲーム	
	第5回	①ヘアピンの練習 ②ドライブの練習 ③簡易ゲーム	
	第6回	①スマッシュ&レシーブの練習 ②簡易ゲーム	
	第7回	シングルのゲーム予選	
	第8回	シングルのゲーム決勝	
	第9回	ダブルスのゲーム予選	
	第10回	ダブルスのゲーム決勝	
	第11回	団体戦 1班vs6班 2班vs5班 3班vs4班	
	第12回	団体戦 5班vs6班 2班vs3班 1班vs4班	
	第13回	団体戦 3班vs6班 1班vs5班 2班vs4班	
	第14回	団体戦 4班vs5班 2班vs6班 1班vs3班	
	第15回	団体戦 4班vs6班 3班vs5班 1班vs2班	
準備学習 (予習・復習等)	授業前は十分な睡眠と適切な食事をとり、体調管理に努めること。 ルールを理解しておくこと。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』 共栄出版(株)		
参考文献	特になし		
評価方法	実技テスト:80% 提出物(レポート等):20%		

体育実技A（ゴルフ）		前期 1 単位	1・2・3年
ゴルフに挑戦！		夏目 麻子（なつめ あさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	歩くことができれば生涯スポーツとして、何歳になっても楽しむことができる「ゴルフ」。いつか雄大な自然に囲まれたコースでプレーすることを目標に、授業では基本的な打ち方と共にルール・エチケット・マナーなども身につけていきます。		
授業の概要	クラブの握り方から始まり、構え・振り方等基本動作を反復します。その後アイアンを使ってフルスイングやアプローチの練習、更にはパターを使ってパッティングの練習など盛り沢山です。最終的にゴルフ場（千葉県内ショートコース）で実習を行います。コースデビューに向けてしっかり目標を持って、楽しみながら技術を習得していきましょう。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、20mシャトルラン	
	第2回	用具の説明・スイングしてみよう	
	第3回	スナッグゴルフ体験① ランチャー	
	第4回	スナッグゴルフ体験② ローラー	
	第5回	7番アイアンを使ってみよう	
	第6回	9番アイアンを使ってみよう	
	第7回	アプローチショット① 基礎練習	
	第8回	アプローチショット② 実践練習	
	第9回	パッティング① 基礎練習	
	第10回	パッティング② ロングパットに挑戦	
	第11回	総合練習① ビデオ撮影でフォーム確認	
	第12回	総合練習② 実践練習	
	第13回	コースデビューに向けてのルール・マナー解説	
	第14回	コース実習（千葉県内ショートコース）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	体調不良では授業に参加できません。睡眠・食事をしっかりとって参加してください。		
テキスト	未定		
参考文献	未定		
評価方法	授業への積極的取組み:50% 理解力、技能:40% 提出物:10%		

体育実技A (バドミントン)		前期 1 単位	1・2・3年
バドミントンで楽しく体を動かそう！		夏目 麻子 (なつめ あさこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	バドミントンの正しいルールを覚え、ゲームに必要な基礎的な技術を習得・向上を目指します。クラスの中で多くの人と交流を深め、スポーツをする楽しさや喜びを実感してください。		
授業の概要	ゲームを中心に進めていきます。色々な人と対戦したり、ダブルスのパートナーまたは団体戦のチームメートになってもらいます。多くの人とバドミントンを通して交流を深めてください。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、20mシャトルラン	
	第2回	用具・グリップ・ストロークの説明・実践	
	第3回	色々なショットの説明・実践、簡易ゲーム	
	第4回	スマッシュ・ドロップに挑戦、簡易ゲーム	
	第5回	サービスの説明・練習、シングルスゲームの進め方	
	第6回	ダブルスゲームの進め方	
	第7回	基本練習、ゲーム（団体戦の進め方など）	
	第8回	基本練習、ゲーム（団体戦リーグ戦など）	
	第9回	チーム練習、ゲーム（団体戦リーグ戦など）	
	第10回	基本練習、ゲーム（団体戦トーナメントなど）	
	第11回	基本練習、ゲーム（ダブルス、パートナー固定など）	
	第12回	基本練習、ゲーム（ダブルス、パートナー毎回交代など）	
	第13回	基本練習、ゲーム（シングルス・ダブルス）	
	第14回	ゲーム（シングルス・ダブルス）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	体調不良では授業に参加できません。睡眠・食事をしっかりとって参加してください。		
テキスト	未定		
参考文献	未定		
評価方法	授業への積極的取組み:50% 理解力・技能:40% 提出物:10%		

体育実技A (バスケットボール)		前期 1 単位	1・2・3年
バスケットボール		藤原 裕子 (ふじわら ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	自らの健康を考えつつ、生涯に渡りスポーツを楽しむための技術の習得とゲームなどの運営ができるようになる。		
授業の概要	バスケットボールを楽しむために必要な個人技術・集団技術・ルール及びゲーム運営を習得する。授業はゲームを中心に進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20Mシャトルラン	
	第2回	個人技術 (ハンドリング・各種シューティング)	
	第3回	速攻パターン	
	第4回	対人攻防① (2対1)	
	第5回	対人攻防② (3対2)	
	第6回	対人攻防③ (2対2, 3対3)	
	第7回	ルール・審判法の理解	
	第8回	ルール・審判法の練習	
	第9回	マン・ツー・マン・ディフェンス (方法と理解)	
	第10回	マン・ツー・マン・ディフェンス (ミニゲーム)	
	第11回	ゾーン・ディフェンス (方法と理解)	
	第12回	ゾーン・ディフェンス (ミニゲーム)	
	第13回	リーグ戦① (審判・運営)	
	第14回	リーグ戦② (攻防の戦術)	
	第15回	リーグ戦③ (レポート提出)	
準備学習 (予習・復習等)	前回の授業のフィードバックをし、次回の授業に活かせるようにしておく。尚且つ、毎回授業に出席出来るように、体調管理を整えておくこと。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』 共栄出版 (株)		
参考文献	特になし		
評価方法	レポート課題:20% 理解力・技能:30% 授業への積極的な参加:50%		

体育実技 A (世界と日本の踊り)		前期 1 単位	1・2・3年
世界と日本の踊りを楽しみながら身体づくりをするとともに、身体表現力や身体感覚を身につける		森下 春枝 (もりした はるえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現の基礎 (声・表情・姿勢など) を学ぶことによって、身体表現できる体づくりをします。 ○ 世界には数えきれないほど多くの民族舞踊 (フォークダンス) があります。日本でも各地域に特徴のある民俗舞踊 (芸能) があります。それぞれ特徴のある舞踊を楽しむとともに、世界と日本の衣装、リズム、踊り方など表現力の違いについても知識と理解を深めます。 ○ 踊ることによって身体感覚を養い、より洗練された表現力や踊りを楽しめる心を培います。 		
授業の概要	<p>まず、基礎的な体づくり、身体の表現力アップのためのレッスンをします。つぎに、世界の踊りと日本の民俗舞踊について楽しみながら基礎を学びます。その中で衣装 (スカート・浴衣) ・リズム (楽器) ・踊り方の特徴や違いについての知識や理解を深めていきます。さらに、本授業で扱う型のある踊りのレッスンは、自分がイメージ通りに動くことのできる体や自己表現力の獲得に有効であり、基礎体力と身体感覚を磨き知性ととも体の教養の獲得を目指します。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション、シャトルラン：授業実施にあたってオリエンテーションを行います。新体力テストで実施できなかったシャトルランを行います。	
	第2回	身体表現の基礎：自己表現できる体づくりのための声の出し方、表情、姿勢についてレッスンをします。	
	第3回	身体表現の基礎：自己紹介で発声練習、呼吸と姿勢についてのレッスン、歌いながら踊れる子どもの曲を使い表現力を養うレッスンをします。	
	第4回	民族舞踊の基礎 (フォークダンスを中心に)：スカートを着用し基本のステップの練習と簡単な踊りの練習をします。	
	第5回	民族舞踊の基礎：1、体形、動作についての説明とそれを確認しながら踊りの練習をします (スカート着用)。	
	第6回	民族舞踊の基礎：2、世界各国の基本の踊りを楽しみます (スカート着用)。	
	第7回	民族舞踊の基礎：3、世界各国の基本の踊りを楽しみます (スカート着用)。	
	第8回	日本の民俗舞踊：浴衣の着方を練習します。日本の踊りの特徴について説明し簡単な民俗舞踊の踊りの練習をします。	
	第9回	日本の民俗舞踊：ルール (型) のある踊りの練習によって、自分の体の特徴を確認したり癖を修正できるように練習を重ねます (浴衣着用)。	
	第10回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって、自分のイメージ通りに動くことのできる体をつくっていきます。日本の楽器についても学びます (浴衣着用)。	
	第11回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって自分の感情やイメージをちゃんと表現できる体をつくっていきます (浴衣着用)。	
	第12回	日本の民俗舞踊：基礎体力と身体感覚を身につけ、踊っていて楽しさを感じることでできるようにさらに踊りの練習をします (浴衣着用)。	
	第13回	民族舞踊：ワルツステップを使って踊る踊りを練習をします (スカート着用)。	
	第14回	民族舞踊：各国の踊りの特徴を感じながらワルツの踊りを踊ります (スカート着用)。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	世界や日本の踊りの特徴や衣装、楽器などを調べ発表してもらいます。身体表現の方法について調べてもらいます。		
テキスト	特に定めませんが、『健やかな身体をめざして』(森下編集)を参考にしたり、プリントを用います。		
参考文献	鴻上尚史『発声と身体のレッスン』ちくま文庫/日本フォークダンス連盟発行資料や音楽など。		
評価方法	授業への積極的な参加：60% 課題提出：20% まとめのレポート：20%		

体育実技 A (日本の民俗舞踊)		前期 1 単位	1・2・3年
日本の伝統芸能 (民俗舞踊)		吉野 由布子 (よしの ゆふこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>〈身体で〉学び、〈身体を〉学び、〈身体が〉学ぶ。 日本各地に古くから伝承されている舞踊を習得することを通して、日本の舞踊の特徴や欧米のダンスとの違いを学習する。たんに舞踊を覚えるだけでなく、その芸能の歴史的・社会的な背景をも含めて、総合的に理解できるようにする。</p>		
授業の概要	<p>日本の踊りを習得することによって「和の身体技法」を知る。前期は優美な手振りで知られる盆踊り（西馬音内盆踊り）をとりあげる。授業は基本的に着物（浴衣）で行い、着物を着て動くことで、洋服や靴などを身につけて動くときとの違いを考える。また、いくつかの日本の踊りの映像を通して、広く日本の伝統芸能についての理解を深める時間を設ける。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーションおよびシャトルラン	
	第2回	西馬音内盆踊り（1）：口唱歌を知ろう	
	第3回	西馬音内盆踊り（2）：立つ・歩く	
	第4回	西馬音内盆踊り（3）：浴衣の着付けを覚える	
	第5回	西馬音内盆踊り（4）：和の身体技法と洋の身体技法を知る	
	第6回	映像鑑賞	
	第7回	西馬音内盆踊り（5）：ナンバについて学ぶ	
	第8回	西馬音内盆踊り（6）：私たちの身体の歴史を知る	
	第9回	西馬音内盆踊り（7）：日本のはきものについて知る	
	第10回	西馬音内盆踊り（8）：日本のかぶりものについて知る	
	第11回	映像鑑賞	
	第12回	西馬音内盆踊り（9）：衣装を身につける	
	第13回	西馬音内盆踊り（10）：全体の流れをつかむ	
	第14回	西馬音内盆踊り（11）：仕上げに向けて	
	第15回	発表とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>ふだん自分が行っている身体の動かし方と舞踊のそれとを、日常生活の中で比較してみる。また、機会があれば劇場や祭などに足を運んで、伝統芸能やさまざまな舞踊にふれる時間を作る。</p>		
テキスト	<p>とくになし。必要な資料は授業のときに配布する。</p>		
参考文献	<p>谷田部英正『たたずまいの美学—日本人の身体技法』中央公論新社、2004。 内田樹・三砂ちづる『身体知—身体が教えてくれること』バジリコ株式会社、2006。</p>		
評価方法	<p>授業の平常点:50% 最終日の発表:30% 小レポート（授業時）:20%</p>		

体育実技B（バレエエクササイズ）		後期 1 単位	1・2・3年
基礎的なバレエテクニックの習得と、バランスのよい身体づくり		功刀 梢（くぬぎ こずえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	バレエの基本を楽しく身につけながら、自身の体と向き合い、歪みの補正と筋力強化を目指す。自身の体とともに心の変化にも気づくまなざしを持ち、総合的な身体のバランスを高めることを目標とする。		
授業の概要	毎回ゆっくりとしたストレッチから始め、バーレッスン、フロアレッスンへと移行する。バレエのテクニックは基本的なものを中心にじっくりと練習しながら身につけていき、最終的には音楽によって短いフレーズが踊れるようになることを目指す。エクササイズ中は必ず左右ともに練習をし、体のバランスを整えるよう進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、20mシャトルラン	
	第2回	ストレッチ、足と手のポジション	
	第3回	バーレッスン①プリエ、ルルヴェ	
	第4回	バーレッスン②タンジュ、デガジェ	
	第5回	バーレッスン③フォンデュ	
	第6回	バーレッスン④ロンデジャンプ・アテール	
	第7回	バーレッスン⑤グランバットマン	
	第8回	VTR鑑賞	
	第9回	フロアレッスン①ウォーキング	
	第10回	フロアレッスン②シェネ、ピルエット	
	第11回	フロアレッスン③ワルツ	
	第12回	フロアレッスン④ワルツ	
	第13回	振付け	
	第14回	最終発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で行うストレッチを、半期を通して継続的に行うことが望ましい。 また、自身の体への意識を高め、日々変化する体の状態を確認しながら授業に臨むこと。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝編著 共栄出版株式会社		
参考文献	授業中適宜紹介する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 授業内レポート:10% 最終レポート:20%		

体育実技B（ピラティス）		後期 1 単位	1・2・3年
ピラティス		昆野 まり子（この まりこ）	
授業の到達目標及びテーマ	ジョセフ・ピラティスにより考案されたエクササイズを行いながら、しなやかで美しく、バランスのとれた身体作りの方法を学ぶ。週1度ピラティスを行うことにより、日頃抱えている身体の問題（腰痛、肩こり、冷え症、生理痛等）も解消し、身体の機能を高めていけるようになる。		
授業の概要	ピラティスでは、呼吸とコアの意識が非常に重要である。まず、呼吸とコアの意識を持つことを丁寧に行い、次第にアクティブなエクササイズへと移行していく。回を重ねるごとに身体への意識が高まるよう促していく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション / シャトルラン	
	第2回	自分の身体を知ろう 測定 ストレッチ	
	第3回	ブレ・ピラティス① 呼吸	
	第4回	ブレ・ピラティス① Cカーブ	
	第5回	スモールボール ストレッチ	
	第6回	スモールボール 腹筋群	
	第7回	スモールボール 背筋群	
	第8回	VTR鑑賞	
	第9回	セラバンド 四肢	
	第10回	セラバンド 肩関節・肩甲骨周辺	
	第11回	ビッグボール 骨盤回り	
	第12回	ビッグボール 腹筋・背筋群	
	第13回	ビッグボール ダイナミックな動き	
	第14回	マットピラティス まとめ 測定	
	第15回	マットピラティス まとめ レポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	授業内で行うストレッチを、半期を通じて行うことが望ましい。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝編著 共栄出版株式会社		
参考文献	授業中適宜紹介する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 授業内レポート:10% 授業最終レポート:20%		

体育実技B (バレーボール)		後期 1 単位	1・2・3年
バレーボール		高橋 宏文 (たかはし ひろぶみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	生涯スポーツの1つでもあるバレーボールについてゲームを中心としたプログラムで取り組む。内容としては、ゲームの簡単な構造を理解した上でチームとして一体感を持ってプレーすることを実践し、楽しんで身体を動かす。		
授業の概要	はじめに、バレーボールの基礎技術であるスパイク、パス、レシーブetcについて、練習を通して技術の確認と調整を行う。次に、その個人の基礎技術を連係プレーに発展させていき、チームプレーとして一体感を発揮しゲームに活かしていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20mシャトルラン	
	第2回	ボールヒッティングとスパイク1	
	第3回	スパイク2	
	第4回	オーバーハンドパスとトス	
	第5回	アンダーハンドパスとレシーブ	
	第6回	基本的な連係プレー	
	第7回	ゲームにおける連係プレー	
	第8回	ゲームのルールを覚える	
	第9回	ゲーム① サーブレシーブのフォーメーションを知る	
	第10回	ゲーム② サーブレシーブのフォーメーション	
	第11回	ゲーム③ ラリー中の動き方1	
	第12回	ゲーム④ ラリー中の動き方2	
	第13回	ゲーム⑤ ブロック	
	第14回	ゲーム⑥ カバーリングの活用	
	第15回	ゲームのまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	テキストや参考図書を読み、予備知識を持って取り組む。		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 共栄出版 (株)		
参考文献	基礎からのバレーボール ナツメ社		
評価方法	平常点:60% レポート課題:40%		

体育実技B (バドミントン)		後期 1 単位	1・2・3年
バドミントンを楽しむために		武井 大輔 (たけい だいすけ)	
授業の到達目標 及びテーマ	バドミントンという、比較的安全及び簡易に行なえるスポーツを体験・習得することにより、今後の人生における「生涯スポーツの実践」に役立てることを目指す。 スポーツにおける身体活動を通じて、コミュニケーション能力の向上を目指す。		
授業の概要	ゲームを安全に、楽しく実施できるようになることが目的なので、ゲーム及びゲーム形式の練習が中心となる。 同時にルールについても習得していく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20mシャトルラン	
	第2回	①ラケットの握り方及びラケットワークの基本	
	第3回	①ハイクリアーの練習 ②サーブの練習 ③簡易ゲーム	
	第4回	①ドロップの練習 ②サーブの練習 ③簡易ゲーム	
	第5回	①ヘアピンの練習 ②ドライブの練習 ③簡易ゲーム	
	第6回	①スマッシュ&レシーブの練習 ②簡易ゲーム	
	第7回	シングルのゲーム予選	
	第8回	シングルのゲーム決勝	
	第9回	ダブルスのゲーム予選	
	第10回	ダブルスのゲーム決勝	
	第11回	団体戦 1班vs6班 2班vs5班 3班vs4班	
	第12回	団体戦 5班vs6班 2班vs3班 1班vs4班	
	第13回	団体戦 3班vs6班 1班vs5班 2班vs4班	
	第14回	団体戦 4班vs5班 2班vs6班 1班vs3班	
	第15回	団体戦 4班vs6班 3班vs5班 1班vs2班	
準備学習 (予習・復習等)	授業前は十分な睡眠と適切な食事をとり、体調管理に努めること。 ルールを理解しておくこと。		
テキスト	『 健やかな身体をめざして』 共栄出版 (株)		
参考文献	特になし		
評価方法	実技テスト:80% 提出物 (レポート等) :20%		

体育実技B（フットサル）		後期 1 単位	1・2・3年
フットサルを楽しむために		武井 大輔（たけい だいすけ）	
授業の到達目標 及びテーマ	フットサルという、比較的安全及び簡易に行なえるスポーツを体験・習得することにより、今後の人生における「生涯スポーツの実践」に役立てることを目指す。 また、集団スポーツにおける身体活動を通じて、コミュニケーション能力の向上を目指す。		
授業の概要	ゲームを安全に、楽しく実施できるようになることが目的なので、ゲーム及びゲーム形式の練習が中心となる。同時にルールについても習得していく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20mシャトルラン	
	第2回	基本技術①ボールを蹴る（キック）・止める（トラップ）	
	第3回	基本技術②ボールを運ぶ（ドリブル）	
	第4回	基本戦術 1 対 1	
	第5回	グループ戦術① 2 対 2	
	第6回	グループ戦術② 3 対 3	
	第7回	チーム戦術①守備の戦術	
	第8回	チーム戦術②攻撃の戦術	
	第9回	簡易ゲーム①ノーゴールキーパーゲーム	
	第10回	簡易ゲーム②ダブルゴールゲーム	
	第11回	ゲームリーグ戦①A vs F B vs E C vs D	
	第12回	ゲームリーグ戦②E vs F B vs C A vs D	
	第13回	ゲームリーグ戦③C vs F A vs E B vs D	
	第14回	ゲームリーグ戦④D vs E B vs F A vs C	
	第15回	ゲームリーグ戦⑤D vs F C vs E A vs B	
準備学習 (予習・復習等)	授業前は十分な睡眠と食事をとり、体調管理に努めること。 基本的なルールを理解しておくこと。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』 共栄出版（株）		
参考文献	特になし		
評価方法	実技テスト:80% 提出物（レポート等）:20%		

体育実技B（テニス）		後期 1 単位	1・2・3年
テニスで楽しく体を動かそう！		夏目 麻子（なつめ あさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	硬式テニスの正しいルールを覚え、ゲームに必要な基礎的な技術を習得・向上を目指します。クラスの中で多くの人と交流を深め、スポーツをする楽しさや喜びを実感してください。		
授業の概要	ダブルスのゲームを中心に進めていきます。色々な人と対戦したり、パートナーまたは団体戦のチームメートになってもらいます。多くの人とテニスを通して交流を深めてください。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、20mシャトルラン	
	第2回	用具の説明・基本練習	
	第3回	基本練習（グランドストローク）	
	第4回	基本練習（サーブの説明と実践）	
	第5回	基本練習（サーブとサーブレシーブ）	
	第6回	基本練習（ボレーとスマッシュ）	
	第7回	総合練習	
	第8回	ゲームの説明・簡易ゲーム	
	第9回	ゲーム（ダブルス、パートナー固定等）	
	第10回	ゲーム（ダブルス、パートナー毎回交代等）	
	第11回	ゲーム（ダブルス、トーナメント戦等）	
	第12回	ゲーム（ダブルス、入れ替え戦等）	
	第13回	ゲーム（団体戦）	
	第14回	チーム練習・ゲーム（団体戦）	
	第15回	まとめ	
準備学習 （予習・復習等）	体調不良では授業に参加できません。睡眠・食事をしっかりとって参加してください。		
テキスト	未定		
参考文献	未定		
評価方法	授業への積極的取組み:50% 理解力・技能:40% 提出物:10%		

体育実技B（バドミントン）		後期 1 単位	1・2・3年
バドミントンで楽しく体を動かそう！		夏目 麻子（なつめ あさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	バドミントンの正しいルールを覚え、ゲームに必要な基礎的な技術を習得・向上を目指します。クラスの中で多くの人と交流を深め、スポーツをする楽しさや喜びを実感してください。		
授業の概要	ゲームを中心に進めていきます。色々な人と対戦したり、ダブルスのパートナーまたは団体戦のチームメートになってもらいます。多くの人とバドミントンを通して交流を深めてください。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、20mシャトルラン	
	第2回	用具・グリップ・ストロークの説明・実践	
	第3回	色々なショットの説明・実践、簡易ゲーム	
	第4回	スマッシュ・ドロップに挑戦、簡易ゲーム	
	第5回	サービスの説明・練習、シングルスゲームの進め方	
	第6回	ダブルスゲームの進め方	
	第7回	基本練習、ゲーム（団体戦の進め方など）	
	第8回	基本練習、ゲーム（団体戦リーグ戦など）	
	第9回	チーム練習、ゲーム（団体戦リーグ戦など）	
	第10回	基本練習、ゲーム（団体戦トーナメントなど）	
	第11回	基本練習、ゲーム（ダブルス、パートナー固定など）	
	第12回	基本練習、ゲーム（ダブルス、パートナー毎回交代など）	
	第13回	基本練習、ゲーム（シングルス・ダブルス）	
	第14回	ゲーム（シングルス・ダブルス）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	体調不良では授業に参加できません。睡眠・食事をしっかりとって参加してください。		
テキスト	未定		
参考文献	未定		
評価方法	授業への積極的取組み:50% 理解力・技能:40% 提出物:10%		

体育実技B (バスケットボール)		後期 1 単位	1・2・3年
バスケットボール		藤原 裕子 (ふじわら ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	自らの健康を考えつつ、生涯に渡りスポーツを楽しむための技術の習得とゲームなどの運営ができるようになる。		
授業の概要	バスケットボールを楽しむために必要な個人技術・集団技術・ルール及びゲーム運営を習得する。授業はゲームを中心に進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20Mシャトルラン	
	第2回	個人技術 (ハンドリング・各種シューティング)	
	第3回	速攻パターン	
	第4回	対人攻防① (2対1)	
	第5回	対人攻防② (3対2)	
	第6回	対人攻防③ (2対2, 3対3)	
	第7回	ルール・審判法の理解	
	第8回	ルール・審判法の練習	
	第9回	マン・ツー・マン・ディフェンス (方法と理解)	
	第10回	マン・ツー・マン・ディフェンス (ミニゲーム)	
	第11回	ゾーン・ディフェンス (方法と理解)	
	第12回	ゾーン・ディフェンス (ミニゲーム)	
	第13回	リーグ戦① (審判・運営)	
	第14回	リーグ戦② (攻防の戦術)	
	第15回	リーグ戦③ (レポート提出)	
準備学習 (予習・復習等)	前回の授業のフィードバックをし、次回の授業に活かせるようにしておく。尚且つ、毎回の授業に出席出来るように体調管理を整えておくこと。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』 共栄出版 (株)		
参考文献	特になし		
評価方法	レポート課題:20% 理解力・技能:30% 授業への積極的な参加:50%		

体育実技B (バドミントン)		後期 1 単位	1・2・3年
バドミントン		藤原 裕子 (ふじわら ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	自らの健康を考えつつ、生涯に渡りスポーツを楽しむための技術の習得とゲームなどの運営ができるようになる。		
授業の概要	バドミントンのゲームを楽しむ為に必要な基礎知識・ルール及び審判法を習得する。授業はゲームを中心に進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及び20Mシャトルラン	
	第2回	基本技術 (サービス・ストローク)	
	第3回	基本技術 (ハイクリヤー、スマッシュ) ・ミニゲーム	
	第4回	基本技術 (ドロップ、ヘアピン、ドライブ) ・ミニゲーム	
	第5回	シングルのルールと審判法の理解	
	第6回	シングルスゲーム① (審判と運営)	
	第7回	シングルスゲーム② (リーグ戦)	
	第8回	シングルスゲーム③ (レベル別)	
	第9回	ダブルスのルールと審判法の理解	
	第10回	ダブルスゲーム① (審判と運営)	
	第11回	ダブルスゲーム② (戦術・トップ&バック)	
	第12回	ダブルスゲーム③ (戦術・サイド by サイド)	
	第13回	ダブルスゲーム④ (レベル別)	
	第14回	リーグ戦 (団体) ① (審判と運営)	
	第15回	リーグ戦 (団体) ②・・・レポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	前回の授業のフィードバックをし、次回の授業に活かせるようにしておく。尚且つ、毎回の授業に出席できるように、体調管理を整えておくこと。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』 共栄出版 (株)		
参考文献	特になし		
評価方法	レポート課題:20% 理解力・技能:30% 授業への積極的な参加:50%		

体育実技B（世界と日本の踊り）		後期 1 単位	1・2・3年
世界と日本の踊りを楽しみながら身体づくりをするとともに、身体表現力や身体感覚を身につける		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 身体表現の基礎（声・表情・姿勢など）を学ぶことによって、身体表現できる体作りをめざします。</p> <p>○ 世界には数えきれないほど多くの民族舞踊（フォークダンス）があります。日本でも各地域に特徴のある民俗舞踊（芸能）があります。それぞれ特徴のある舞踊を楽しむとともに、世界と日本の衣装、リズム、踊り方など表現力の違いについても知識と理解を深めます。</p> <p>○ 踊ることによって身体感覚を養い、より洗練された表現力や踊りを楽しめる心を培います。</p>		
授業の概要	<p>まず、基礎的な体づくり、身体表現力アップのためのレッスンをします。つぎに、世界の踊りと日本の民俗舞踊について楽しみながら基礎を学びます。その中で衣装（スカート・浴衣）・リズム（楽器）・踊り方の特徴や違いについての知識や理解を深めていきます。さらに、本授業で扱う「型」のある踊りについてのレッスンは、自分がイメージ通りに動くことのできる体や自己表現力の獲得に有効であり、基礎体力と身体感覚を磨き、知性ととも体の教養の獲得をめざします。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション、シャトルラン：授業実施にあたってオリエンテーションを行います。新体力テストで実施できなかったシャトルランを行います。	
	第2回	身体表現の基礎：自己表現できる体づくりのための声の出し方、表情、姿勢についてレッスンします。	
	第3回	身体表現の基礎：自己紹介で発声練習、呼吸と姿勢についてのレッスン、歌いながら踊れる子どもの曲を使い表現力を養うレッスンをします。	
	第4回	民族舞踊の基礎（フォークダンスを中心に）：スカートを着用し基本のステップの練習と簡単な踊りの練習をします。	
	第5回	民族舞踊の基礎：1、体形、動作についての説明とそれを確認しながら踊りの練習をします（スカート着用）。	
	第6回	民族舞踊の基礎：2、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第7回	民族舞踊の基礎：3、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第8回	日本の民俗舞踊：浴衣の着方を練習します。日本の踊りの特徴について説明し簡単な民俗舞踊の踊りの練習をします。	
	第9回	日本の民俗舞踊：ルール（型）のある踊りの練習によって、自分の体の特徴を確認したり癖を修正できるように練習を重ねます（浴衣着用）。	
	第10回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって、自分のイメージ通りに動くことのできる体をつくっていきます。日本の楽器についても学びます（浴衣着用）。	
	第11回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって自分の感情やイメージをちゃんと表現できる体をつくっていきます（浴衣着用）。	
	第12回	日本の民俗舞踊：基礎体力と身体感覚を身につけ、踊っていて楽しさを感じることでできるようにさらに踊りの練習をします（浴衣着用）。	
	第13回	民族舞踊：ワルツステップを使って踊る踊りを練習をします（スカート着用）。	
	第14回	民族舞踊：各国の踊りの特徴を感じながらワルツの踊りを踊ります（スカート着用）。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	世界や日本の踊りの特徴や衣装、楽器などを調べ発表してもらいます。身体表現の方法について調べてもらいます。		
テキスト	特に定めませんが、『健やかな身体をめざして』（森下編集）を参考にしたり、プリントを用います。		
参考文献	鴻上尚史『発声と身体のレッスン』ちくま文庫/日本フォークダンス連盟発行資料や音楽など。		
評価方法	授業への積極的な参加:60% 課題提出:20% まとめのレポート:20%		

体育実技B（エアロビック・ダンス）		後期 1 単位	1・2・3年
エアロビック・ダンス		吉宇田 和泉（よしうだ いずみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	本講では、エアロビック・ダンスを通して運動の楽しさ、重要性、安全かつ効果的に運動を遂行するための能力を、実践のおよび理論的に理解する。また、自分の心身への気づきから、日常生活において自分の状態に適した運動を選択して実行できるようにする。		
授業の概要	ベーシックなエアロビック・ダンスからダンス要素が入ったものまで幅広く取り扱う。全員が一斉に行うグループ学習であるが、受講者が自分の体力や技術に合わせて調整できるように展開する。エアロビック・ダンスの前後にストレッチやコンディショニングエクササイズを行う。ダンスの技術や運動の出来（完成度）を競うわけではなく、いかに自分の体に気づきながら体を動かせるかということが重要である。本講は、「ダンスエアロ」に比べてよりベーシックなエアロビクスを中心に扱う。		
授業計画	第1回	ガイダンス、運動強度の設定、シャトルラン	
	第2回	腹圧の重要性と姿勢、基本的なステップ（主にマーチとステップタッチ）と短いコンビネーション、腹部のエクササイズ（ドローイン）	
	第3回	基本的なステップ（主にニーアップやシャッセ等）と短いコンビネーション、腹部のエクササイズ（クランチ）	
	第4回	基本的なステップを中心とした4×8コンビネーション、腹部のエクササイズ（ツイストクランチ）	
	第5回	前回より強度を高めた4×8コンビネーション、背部のエクササイズ（バッククロスチ）	
	第6回	ミドルインパクト（軽く弾む動作）が入るコンビネーション、背部のエクササイズ（ローイング）	
	第7回	ターンがあるコンビネーション、下肢のエクササイズ（スクワット）	
	第8回	強度の確認（再設定）、進行方向に変化のあるコンビネーション、下肢のエクササイズ（スプリットスクワット）	
	第9回	ハイインパクト（弾む動作）が入るコンビネーション、上肢のエクササイズ（プッシュアップ）	
	第10回	ステップエクササイズの基本ステップ、上肢のエクササイズ（リバースプッシュアップ）	
	第11回	ステップエクササイズの基本ステップを用いたコンビネーション軸を作るエクササイズ（ブローンブリッジ）	
	第12回	ステップ台の左右や向こう側を多く用いたコンビネーション、軸を作るエクササイズ（四股スクワット）	
	第13回	ダンスエアロ（ラテン）の基本エクササイズとコンビネーション、軸を作るエクササイズ（カーフレイズ）	
	第14回	ダンスエアロ（ヒップホップ）の基本エクササイズとコンビネーション、肩甲骨のコンディショニング	
	第15回	ボクシングエクササイズ（構えとパンチ、防御、キック）股関節のコンディショニング、まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	体調を整えて参加すること。睡眠不足、朝食抜きは十分に体を動かさないだけでなく、けがにつながる可能性もある。授業内容は日常生活で実践できることが多いので、積極的に取り入れて心身の健康への影響について自分で感じるこ		
テキスト	「健やかな身体をめざして」 森下春枝著 共栄出版		
参考文献	特になし。		
評価方法	課題レポート:30% 授業参加状況:70%		

体育実技B（ダンスエアロ）		後期 1 単位	1・2・3年
ダンスエアロで基礎体力アップ		吉宇田 和泉（よしうだ いずみ）	
授業の到達目標及びテーマ	本講では、エアロビック・ダンスを通して運動の楽しさ、重要性、安全にかつ効果的に運動を遂行するための能力を、実践のおよび理論的に理解する。また、自分の心身への気づきから、日常生活において自分の状態に適した運動を選択して実行できるようにする。		
授業の概要	ベーシックなエアロビック・ダンスからダンス要素が入ったものまで幅広く取り扱う。全員が一斉に行うグループ学習であるが、受講者が自分の体力や技術等に合わせて調整できるように展開する。エアロビック・ダンスの前後にストレッチやコンディショニングエクササイズなどを行う。授業は受講者の状況に合わせて展開する。ダンスの技術や運動の出来（完成度）を競うわけではなく、自分の体に気づきながら体を動かせるかということが重要である。基本的な展開は「エアロビック・ダンス」と同様であるが、本講は運動量を確保し、よりバリエーションに富んだ内容となる。		
授業計画	第1回	ガイダンス、運動強度の設定、シャトルラン	
	第2回	基本的なステップ（主にマーチとステップタッチ）と短いコンビネーション、姿勢の確認、腹部のエクササイズ（ドロイン）	
	第3回	基本的なステップ（主にニーアップやシャッセ等）と短いコンビネーション、腹部のエクササイズ（クランチ）	
	第4回	基本的なステップを中心とした4×8コンビネーション、腹部のエクササイズ（ツイストクランチ）	
	第5回	前回より強度を高めた4×8コンビネーション、背部のエクササイズ（バッククロスチ）	
	第6回	アクセントやリズムに変化のあるコンビネーション、背部のエクササイズ（ローイング）	
	第7回	ターンや方向変換のあるコンビネーション、上肢のエクササイズ（プッシュアップ）	
	第8回	強度の再設定、ステップエクササイズの基本ステップ上肢のエクササイズ（リバースプッシュアップ）	
	第9回	ステップエクササイズのコンビネーション、下肢のエクササイズ（スクワット）	
	第10回	ダンスエアロ（ラテン系）の基本エクササイズとそのコンビネーション、下肢のエクササイズ（スプリットスクワット）	
	第11回	ダンスエアロ（ラテン系）の特徴を取り入れたコンビネーション、軸を作るエクササイズ（四股スクワット）	
	第12回	ダンスエアロ（ストリート系）の基本エクササイズとそのコンビネーション、軸を作るエクササイズ（カーフレイズ）	
	第13回	ダンスエアロ（ストリート系）の特徴を取り入れたコンビネーション、軸を作るエクササイズ（プロンプブリッジ）	
	第14回	ボクシングエクササイズ（構えとパンチ、防御、キック）、肩甲骨周辺のコンディショニング	
	第15回	ボクシングエクササイズ（パンチ、キック、防御のコンビネーション）、股関節周辺のコンディショニング	
準備学習（予習・復習等）	体調を整えて参加すること。睡眠不足、朝食抜きは十分なパフォーマンスが出来ないだけでなく、思わぬケガにつながる。授業内容は日常生活で実践できることが多いので、積極的に取り入れて心身の健康との関連について実感し、要因を考えること。		
テキスト	『健やかな身体をめざして』森下春枝編著；共栄出版		
参考文献	特になし。		
評価方法	課題レポート:30% 授業参加状況:70%		

体育実技B（日本の民俗舞踊）		後期 1 単位	1・2・3年
日本の伝統芸能（民俗舞踊）		吉野 由布子（よしの ゆふこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>〈身体で〉学び、〈身体を〉学び、〈身体が〉学ぶ。 日本各地に古くから伝承されている舞踊を習得することを通して、日本の舞踊の特徴や欧米のダンスとの違いを学習する。たんに舞踊を覚えるだけでなく、その芸能の歴史的・社会的な背景をも含めて、総合的に理解できるようにする。</p>		
授業の概要	<p>日本の踊りを習得することによって「和の身体技法」を知る。後期はリズムカルな動きの輪踊り（さんさ踊り）をとりあげる。踊りで使われる楽器（太鼓と笛）についても学習する。授業は基本的に着物（浴衣）で行い、着物を着て動くことで、洋服や靴などを身につけて動くときとの違いを考える。また、いくつかの日本の踊りの映像を通して、広く日本の伝統芸能についての理解を深める時間を設ける。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーションおよびシャトルラン	
	第2回	さんさ踊り（1）：口唱歌を知る	
	第3回	さんさ踊り（2）：太鼓と笛について知る	
	第4回	さんさ踊り（3）：浴衣の着付けを覚える	
	第5回	さんさ踊り（4）：和の身体技法と洋の身体技法の違いを考える	
	第6回	映像鑑賞	
	第7回	さんさ踊り（5）：列で踊る	
	第8回	さんさ踊り（6）：輪で踊る	
	第9回	さんさ踊り（7）：組んで踊る（二人）	
	第10回	さんさ踊り（8）：組んで踊る（四人）	
	第11回	映像鑑賞	
	第12回	さんさ踊り（9）：衣装を身につける	
	第13回	さんさ踊り（10）：全体の流れをつかむ	
	第14回	さんさ踊り（11）：仕上げに向けて	
	第15回	発表とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>ふだん自分が行っている身体の動かし方と舞踊のそれとを、日常生活の中で比較してみる。また、機会があれば劇場や祭などに足を運んで、伝統芸能やさまざまな舞踊にふれる時間を作る。</p>		
テキスト	<p>とくになし。必要な資料は授業時に配布する。</p>		
参考文献	<p>谷田部英正『たたずまいの美学—日本人の身体技法』中央公論新社、2004。 内田樹・三砂ちづる『身体知—身体が教えてくれること』バジリコ株式会社、2006。</p>		
評価方法	<p>授業の平常点：50% 最終日の発表：30% 小レポート（授業時）：20%</p>		

体育実技C (ボウリング)		夏休集中 1 単位	1・2・3年
ボウリング		森下 春枝 (もりした はるえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	単に投球して楽しむだけではなく、ボウリングの正しい知識と基本技術を習得し、社会人となった後もライフタイムスポーツ、コミュニティスポーツとして楽しむことができるよう目指します。		
授業の概要	夏休み期間8月初旬の4日間(予定)、短大体育館ブレイルームとシブヤボウリング場において集中授業を行います。詳細は事前オリエンテーションを行い、その中で説明します。実習費(年度初頭行事参照)が必要です。体育実技履修登録時に登録することによって実習に参加できます。定員は40名です。定員を超えるときには抽選になります。1日に5ゲームを目安にします。		
授業 計画	第1回	事前オリエンテーション：前期授業内の昼休み時間を使って、事前オリエンテーションを行います。実習費は事前に納入してもらいます。	
	第2回	1日目の午前はブレイルームで体づくりと基本的なフォーム練習を行います。午後からボウリング場に移動して、実践によって基本練習を行います。	
	第3回	2日目も同様、午前はブレイルームで体づくりと基本的なフォーム練習を行います。午後からボウリング場に移動して、実践によって基本練習を行います。	
	第4回	初心者のための基本：ボウリング学習の意義・質、守りたいルールとマナー、ボールの選び方、スタンディングポジションを決める、スコアの付け方	
	第5回	初心者の基本：アプローチを練習、基本はアドレスから、スイングを練習する、アプローチとスイングを一緒に行う、きれいなフィニッシュをマスターする	
	第6回	初心者のための基本：一番ピンを狙ってみる、スペアを狙う	
	第7回	ボウリング用語、ボウリングの歴史	
	第8回	脱初級者を目指す：リストアイでリリースを安定、いろいろな球種を理解する、フックボールのメカニズム、球質を学ぶ	
	第9回	フォームチェックでスキルアップ：フォームチェック、自分のスタイルを探す	
	第10回	ストライクを取るために：狙って投げる、レーンを読む、アジャストを楽しむ	
	第11回	確実にスペアを取る：基本的な狙い方	
	第12回	スペアを取るためのテクニック：3-6-9システムを理解する	
	第13回	リーグ戦第1回	
	第14回	リーグ戦第2回	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	夏休み中の実習であることから、体力を維持し健康に配慮してください。事前にボウリングの基礎知識があると上達も早くなります。		
テキスト	特に定めませんが印刷物を配布します。		
参考文献	矢野金太監修『劇的にスコアが伸びる！ボウリング絶対上達』実業之日本社		
評価方法	積極的な授業への参加:60% レポート課題:30% スコアシート:10%		

体育実技C (スキー)		春休集中 1 単位	1・2・3年
「スキー」を楽しめる技術の習得と野外スポーツの魅力を経験する		森下 春枝 (もりした はるえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学友と合宿形式の実習を通して、学外で共に生活する体験や楽しみ方を知るとともに、コミュニケーション能力を培う場にします。 ○ 実習での経験が生涯スポーツとしても楽しめるよう、幅広いスキーの知識の習得と技術の向上をめざします。 ○ 大自然の中での「スキー」実習を通して、スポーツをすることの意義を探る機会にします。 		
授業の概要	<p>学内で昼休み時間を使って事前オリエンテーションを行います。その際、スキー実習のための手続き（事前の実習費を納入）と、スキーの基礎についての講義を行います。実習は、新潟県越後湯沢駅から15分ほど車で行った岩原スキー場において2月初旬の3泊4日で集中で授業を行います。宿泊施設はスキー場内にあります。それぞれの技術のレベルによって班をつくり各班ごとに練習します。夕食後には、講義を行います。毎日日誌をつけてもらいます。</p>		
授業計画	第1回	事前オリエンテーションと講義：実習の概要を説明します。	
	第2回	事前オリエンテーションと講義：基礎知識についてと実習費の納入などについて説明します。	
	第3回	開講式、班分け、それぞれの班で基礎練習を行います。	
	第4回	基礎練習1、スキー技術の説明、講義その1	
	第5回	基礎練習1、各班ごとにスキー技術の練習	
	第6回	基礎練習2、ブルークボーゲン、シュテムターン	
	第7回	基礎練習2、ブルークボーゲン、シュテムターンの応用	
	第8回	基礎練習3、小まわり、シュテムターン、講義その2	
	第9回	基礎練習3、小まわり、シュテムターンの応用	
	第10回	応用練習1、大まわり、パラレルターン	
	第11回	応用練習1、大まわり、パラレルターン、講義その3	
	第12回	応用練習2、斜面、斜度の変化に対応する練習	
	第13回	応用練習2、技術を駆使した応用練習	
	第14回	実技と理論のテスト、日誌と課題提出	
	第15回	実技（応用練習）、閉講式、現地解散	
準備学習 (予習・復習等)	スキーは体力がいるスポーツです。風邪を引いたり体調不良に陥らないよう、健康には気を付け、できれば体力アップをして参加するのが望ましいです。		
テキスト	オリエンテーションで指示します。		
参考文献	全日本スキー連盟が出版しているスキーのテキストがあります。		
評価方法	授業への積極的な参加:60% 日誌・課題:20% テスト:20%		

体育実技C (フラ)		後期集中 1 単位	1・2・3年
ハワイの文化「フラ」		森下 春枝 (もりした はるえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「フラ」は、ハワイに伝承されている民族舞踊です。「フラ」の練習を通してハワイの文化に触れ、また身体表現の豊かさやその背景にも思いをはせながら、自らの身体感覚も磨きます。品性とハッピーな心で踊ることができるようめざします。		
授業の概要	まず、ハワイってどこの国か、ハワイってどんなところか、歴史、表現、古典やモダンなど踊りを通して、「フラ(アロハの心)」ってどんなダンスなのかを理解し知識を深めます。基本ステップなどベーシックな踊りの練習をし、次にアウアナ(モダン)の踊りの練習をします。グループごとに踊って発表し、鑑賞しあいます。		
授業計画	第1回	昼休み時間を使って事前オリエンテーションと講義を行います。	
	第2回	ダンスウォーミングアップ、ハワイと「フラ」の基礎知識についての講義と実習を行います。	
	第3回	さあ踊りましょう：ベーシックの練習をします。	
	第4回	音楽によって；ハワイアン曲で練習をします。	
	第5回	歴史、フラの表現、古典(カヒン)とモダン(アウアナ)について説明をし、その踊りの練習をします。	
	第6回	音楽にのり、カホロ、カオ、ヘラ、アミなどのステップの練習を行うとともに、曲に乗って踊りの練習をします。	
	第7回	新しいステップ、カラカウア、レレウエへの練習をします。	
	第8回	アウアナ(モダン)の曲に乗って踊りの練習をします。	
	第9回	「フラ」のメレ(歌)、ベーシック練習を行います。	
	第10回	楽器、リズム、道具についての説明とベーシック練習を行います。	
	第11回	正しいステップで音楽にのり、繰り返しベーシックの練習をします。	
	第12回	グリーンローズフラを踊りましょう。歌詞の意味について説明します。	
	第13回	ベーシック、グリーンローズフラ(アウアナ)の練習をします。	
	第14回	グリーンローズフラの練習(1番から5番まで)をします。	
	第15回	グループ別に踊って鑑賞しあいます。	
準備学習 (予習・復習等)	夏休み期間での集中授業です。夏バテなどせず、健康には十分気を付けて授業に参加してください。		
テキスト	印刷物で資料の配布します。		
参考文献	授業内で紹介します。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 提出物(レポート等):30%		

情報処理 I	前期 2 単位	1・2・3年
コンピューター・リテラシー		
<p>【担当教員】 飯田 千代（いいた ちよ）、齋藤 真弓（さいとう まゆみ）、宮田 雅智（みやた まさのり）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 コンピューターは通信技術の進歩によって、私達の生活に大きな影響を与えている。本講座は、講義とパーソナル・コンピューターを使っての実習を通して、情報のデジタル化、文書処理、インターネットの利用、プレゼンテーション技術等、基礎的な知識と技術を習得することを目的とする。</p> <p>【授業の概要】 コンピューターの基礎知識に関して講義した後実習に入る。実習では機能及び使い方の解説をしながら実際に操作して動作を確認する。続いて課題を仕上げることにより、IT技術を確実に身につける。</p> <p>【授業計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 1 回 ガイダンス 第 2 回 講義：コンピューターの基礎知識 第 3 回 コンピューターの基本操作 第 4 回 ワープロ（1）文字入力の基本、ファイル操作、印刷環境 第 5 回 ワープロ（2）文字修飾、文字の位置、インデント 第 6 回 ワープロ（3）課題演習 第 7 回 インターネット実習（1）インターネットの基礎、ブラウザの利用 第 8 回 インターネット実習（2）e-mail（基本操作、添付ファイル、署名） 第 9 回 ワープロ（4）罫線処理 第 10 回 ワープロ（5）画像処理 第 11 回 ワープロ（6）図形処理 第 12 回 パワーポイント（1）基本操作 第 13 回 パワーポイント（2）アニメーションの設定 第 14 回 パワーポイント（3）画像の挿入、図形処理 第 15 回 パワーポイント（4）課題演習 <p>【準備学習（予習・復習等）】 授業で解説したIT技術は基礎的な事項なので確実に身に付けるよう反復練習すること。</p> <p>【テキスト】 『情報基礎講義(Office2010版)』宮田雅智・宮治裕 DTP出版</p> <p>【参考文献】 必要に応じて紹介する</p> <p>【評価方法】 課題演習:60% 平常点:40%</p>		

情報処理 I	後期 2 単位	1・2・3年
コンピューター・リテラシー		
<p>【担当教員】 飯田 千代（いいた ちよ）、齋藤 真弓（さいとう まゆみ）、宮田 雅智（みやた まさのり）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 コンピューターは通信技術の進歩によって、私達の生活に大きな影響を与えている。本講座は、講義とパーソナル・コンピューターを使っての実習を通して、情報のデジタル化、文書処理、インターネットの利用、プレゼンテーション技術等、基礎的な知識と技術を習得することを目的とする。</p> <p>【授業の概要】 コンピューターの基礎知識に関して講義した後実習に入る。実習では機能及び使い方の解説をしながら実際に操作して動作を確認する。続いて課題を仕上げることにより、IT技術を確実に身につける。</p> <p>【授業計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 1 回 ガイダンス 第 2 回 講義：コンピューターの基礎知識 第 3 回 コンピューターの基本操作 第 4 回 ワープロ（1）文字入力の基本、ファイル操作、印刷環境 第 5 回 ワープロ（2）文字修飾、文字の位置、インデント 第 6 回 ワープロ（3）課題演習 第 7 回 インターネット実習（1）インターネットの基礎、ブラウザの利用 第 8 回 インターネット実習（2）e-mail（基本操作、添付ファイル、署名） 第 9 回 ワープロ（4）罫線処理 第 10 回 ワープロ（5）画像処理 第 11 回 ワープロ（6）図形処理 第 12 回 パワーポイント（1）基本操作 第 13 回 パワーポイント（2）アニメーションの設定 第 14 回 パワーポイント（3）画像の挿入、図形処理 第 15 回 パワーポイント（4）課題演習 <p>【準備学習（予習・復習等）】 授業で解説したIT技術は基礎的な事項なので確実に身に付けるよう反復練習すること。</p> <p>【テキスト】 『情報基礎講義（office2010版）』宮田雅智、宮治祐 DTP出版</p> <p>【参考文献】 必要に応じて紹介する</p> <p>【評価方法】 課題演習：60% 平常点：40%</p>		

情報処理Ⅱ	前期 2 単位	1・2・3年
表計算と統計／集計処理	宮田 雅智 (みやた まさのり)	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】 事務的処理等でよく利用される表計算について、実際にパソコンを利用しながら操作方法を習得するとともに、統計やデータベースの基礎概念を理解することを目的とします。</p> <p>【授業の概要】 例題を用いて基本的な操作を解説したのち、演習課題にとりかかります。実際の操作を繰り返すことによって技能を身につけていきます。課題演習の中で随時、統計的な概念を説明していきます。</p> <p>【授業計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 1回 ガイダンス 第 2回 Excelの基本操作 第 3回 式と関数の基礎 第 4回 表示形式と表の清書 第 5回 グラフ作成 第 6回 課題演習 第 7回 関数 (1) 条件付き書式、IF、COUNTIF 第 8回 課題演習 (関数IF) 第 9回 課題演習 (関数COUNTIF) 第10回 関数 (2) LEN、LEFT、RIGHT、MID、課題演習 第11回 関数 (3) SUMIF、VLOOKUP、課題演習 第12回 データベース (1) ピボットテーブル、課題演習 第13回 データの並べ替え (数値データ、文字データ) 第14回 データベース (2) 入力規則の設定他 第15回 課題演習 <p>【準備学習 (予習・復習等)】 授業で解説した例題や課題を復習し、扱ったスキルは確実に身につけてください。</p> <p>【テキスト】 『情報基礎講義 (office2010版)』宮田雅智、宮治裕 DTP出版</p> <p>【参考文献】 必要に応じて紹介します。</p> <p>【評価方法】 課題演習:60% 平常点:40%</p>		

情報処理Ⅱ	後期 2 単位	1・2・3年
表計算と統計／集計処理		
<p>【担当教員】 飯田 千代（いいた ちよ）、齋藤 真弓（さいとう まゆみ）、宮田 雅智（みやた まさのり）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 事務的処理等でよく利用される表計算について、実際にパソコンを利用しながら操作方法を習得するとともに、統計やデータベースの基礎概念を理解することを目的とします。</p> <p>【授業の概要】 例題を用いて基本的な操作を解説したのち、演習課題にとりかかります。実際の操作を繰り返すことによって技能を身につけていきます。課題演習の中で随時、統計的な概念を説明していきます。</p> <p>【授業計画】</p> <p>第 1回 ガイダンス 第 2回 Excelの基本操作 第 3回 式と関数の基礎 第 4回 表示形式と表の清書 第 5回 グラフ作成 第 6回 課題演習 第 7回 関数（1）条件付き書式、IF、COUNTIF 第 8回 課題演習（関数IF） 第 9回 課題演習（関数COUNTIF） 第10回 関数（2）LEN、LEFT、RIGHT、MID、課題演習 第11回 関数（3）SUMIF、VLOOKUP、課題演習 第12回 データベース（1）ピボットテーブル、課題演習 第13回 データの並べ替え（数値データ、文字データ） 第14回 データベース（2）入力規則の設定他 第15回 課題演習</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 授業で解説した例題や課題を復習し、扱ったスキルは確実に身につけてください。</p> <p>【テキスト】 第1回目の授業で指示します。</p> <p>【参考文献】 必要に応じて紹介します。</p> <p>【評価方法】 課題演習：60% 平常点：40%</p>		

情報処理Ⅲ		後期 2 単位	1・2・3年
プログラミングの初歩		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>コンピューター利用というワープロや表計算などの既存のソフトウェアを使う場合が多いが、そういったものに頼らず、作業することも可能です。本講義は、プログラミングに関してまったくの初心者を対象に、プログラミング言語 Visual Basic を使って簡単なソフトウェアを作り、コンピューター上で動作させることを体験します。</p>		
授業の概要	<p>例題を用いて基本的な操作を解説したのち、演習課題にとりかかります。実際の操作を繰り返すことによって技能を身につけていきます。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	プログラムの概念、Visual Basicとは	
	第3回	フォーム、ボタン、ファイルの保存	
	第4回	変数と変数名、四則演算、代入文	
	第5回	四則演算の課題演習	
	第6回	日付関数、課題演習	
	第7回	処理の分岐（1）IF～THEN、課題演習	
	第8回	処理の分岐（2）IF～THEN～ELSE、課題演習	
	第9回	繰り返し処理（1）FOR～NEXT、課題演習	
	第10回	繰り返し処理（2）2重の繰り返し、課題演習	
	第11回	グラフィックス（1）PictureBox、Line、課題演習	
	第12回	グラフィックス（2）DrawとBrush 課題演習	
	第13回	グラフィックス（3）Ellipse、課題演習	
	第14回	グラフィックス（4）Polygon、課題演習	
	第15回	まとめの課題演習	
準備学習 (予習・復習等)	<p>プログラミング言語は言葉（命令）の意味を正確に理解することが重要です。たくさんの例題を提示しますから、復習を中心に言葉の意味を正確に理解し、次の授業に備えてください。</p>		
テキスト	資料を配布します。		
参考文献	必要に応じて紹介します。		
評価方法	課題演習:60% 平常点:40%		

ライフ・キャリア・デザイン I		前期 2 単位	1年 2 学科共通
キャリア論、キャリア形成上の諸問題		宇田 美江 (うだ みえ) 奈良 堂史 (なら たかし)	
授業の到達目標 及びテーマ	①キャリアを取り巻く環境の変化を理解する。②自分と向き合い、どのように人生を送りたいのか、社会で活躍したいのか、どのような心構えを持つべきかを真剣に考える。③大まかな将来の方向性や卒業後の進路をイメージする。最終的には、1年～2年の短期目標の設定と行動計画を立てる。		
授業の概要	内容を、①外部環境理解、②自己理解（キャリアに関する理論を含む）、③キャリア・デザインに大きく分ける。講義だけでなく、ビデオ等の視聴覚教材を使用する予定である。原則として、講義内容に対する意見や感想、課題を提出してもらう。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	キャリアの環境要因① 産業構造や雇用の変化	
	第3回	キャリアの環境要因② 女性を取り巻く環境変化	
	第4回	キャリアの環境要因③ 女性労働に関する法律等	
	第5回	キャリアの環境要因④ 女性の仕事の質の変化	
	第6回	キャリアの環境要因⑤ 女性のさまざまなライフコース	
	第7回	キャリアとは何か？	
	第8回	キャリアの節目とは？ 節目の意味と重要性	
	第9回	キャリア・アンカー① キャリアのこだわりとは何か？	
	第10回	キャリア・アンカー② キャリア・アンカーを知る	
	第11回	キャリア形成における他者との関係とは？	
	第12回	自己理解 自己の振り返りと他者からの視点	
	第13回	外部環境理解と自己理解を結びつける	
	第14回	具体的目標と行動計画	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、予習をしてあることを前提に行います。「ただ読むだけ」ではなく、内容を把握することを目的意識を持って、予習をしてきてください。また、教科書の該当部分を事前に読み、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	宇田美江 (2012) 『女子学生のためのキャリア・デザイン』中央経済社		
参考文献	齊藤毅憲責任監修、菊地達昭・合谷美江編著 (2007) 『キャリア開発論』文真堂。その他、随時紹介する。		
評価方法	感想および課題提出:50% 期末レポート:50%		

ライフ・キャリア・デザイン I		後期 2 単位	2年 子ども
現代女性のライフコースについて考える		大野 祥子 (おおの さちこ) 鈴木 俊之 (すずき としゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代女性のライフコースについて、働くことと家族を持つことの両面から学びます。自分の近い将来について、具体的なイメージをもち、知識に基づいて考えることを目指します。		
授業の概要	前半 (2~8回) はキャリア・ライフ・デザインに関する講義、後半 (9~14回) は幼稚園・保育園その他で働いている外部講師などから直接働くということに関して話を聴きます。		
授業計画	第1回	オリエンテーション (鈴木・大野)	
	第2回	「家族」とは何か 家族の標準型として頭に浮かぶ「夫婦と子ども二人」という家族イメージが多数派ではなくなっていることを知る。(大野)	
	第3回	現代の家族 各種統計データを通して、クイズ形式で現代の家族の多様性を知る。(大野)	
	第4回	女性のライフコース 自分の人生に仕事と家庭を組み込むうえで女性が直面しやすい問題について学ぶ。生涯発達という視点を知ることを通して、ライフキャリアの多様性・可塑性を知る。(大野)	
	第5回	子どもを持つということ 3歳児神話、母性神話の検証。子どもが家庭外でも豊富な対人関係を持つことの積極的な意義について学ぶ。(大野)	
	第6回	家族を営むということ 夫婦の間での役割分担によって夫婦関係がどう異なるか、夫婦関係が親子関係にも影響する家族システム論の考え方を学び、他者と共生する「家族」という関係について考える。(大野)	
	第7回	仕事とお金の話 働くことにまつわる経済(税金や社会保障)と労働者の権利について学ぶ。結婚後の家計費の分担についても、現実的なイメージを持つ。(大野)	
	第8回	男性の生き方を考える 働いて家族を養うことを期待される男性の心理や生き方の問題を知る。男性の視点から日本の家族や夫婦の関係を見直すことで、ジェンダーの問題に気づく。(鈴木)	
	第9回	働くということ (鈴木)	
	第10回	幼稚園で働くということ (大野)	
	第11回	保育園で働くということ (鈴木)	
	第12回	施設で働くということ (鈴木)	
	第13回	企業で働くということ (鈴木)	
	第14回	進路を考えるにあたって (鈴木)	
	第15回	まとめとふりかえり (鈴木・大野)	
準備学習 (予習・復習等)	毎回次回のテーマに関する課題を提示し、予習をしてもらいます。授業終了後には授業内容をまとめたレポートなどを提出してもらいます。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:30% レポート:70%		

ライフ・キャリア・デザインⅡ		後期 2 単位	1・2年 2 学科共通
労働市場の変化とその影響、企業における人材育成、従業員のキャリア形成		宇田 美江（うだ みえ）	
授業の到達目標及びテーマ	個人と企業組織の調和のために、個人が企業組織でどのようにキャリア形成していくかを人材マネジメントの観点から理解できるようにする。そこから、将来どのように企業組織で働くかのイメージと心構えをつくることのできるようになる。		
授業の概要	働く個人が企業においてキャリアを形成する流れに沿って、人材の獲得、人材育成、配置や異動、昇進、評価や処遇といった内容について取り上げる。具体的なイメージを持つために、ビデオ等の視聴覚教材を使用する。また、自己理解を深めるための課題への取り組み等を実施する。原則として、講義内容に対する意見や感想を毎回書いて提出してもらう。また、グループに分かれて、ワークや議論をすることもあります。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 企業におけるキャリア形成とは？	
	第2回	人材の獲得① 労働市場の変化、雇用の多様化	
	第3回	人材の獲得② 求職と求人、就職活動	
	第4回	人材育成① 人材育成の目的	
	第5回	人材育成② OJTとOff-JT、キャリア・パス	
	第6回	人材フロー 配置と異動	
	第7回	管理職の役割の変化	
	第8回	管理職の早期選抜と育成	
	第9回	人材の評価 評価制度の変化	
	第10回	人材の処遇 賃金管理の変化	
	第11回	人材の尊重① 働く環境の整備	
	第12回	人材の尊重② 福利厚生、労働組合	
	第13回	転職・失業・定年退職	
	第14回	変化する企業と個人の関係	
	第15回	まとめ さまざまなキャリア形成	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、予習をしてあることを前提に行います。「ただ読むだけ」ではなく、内容を把握することを目的意識を持って、予習をしてきてください。また、教科書の該当部分を事前に読み、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	開講時に指示する		
参考文献	阿部正浩、松繁寿和（2014）『キャリアのみかた 図で見る110のポイント改訂版』有斐閣 守島基博（2004）『人材マネジメント入門』日本経済新聞社		
評価方法	感想及び課題提出:50% 期末レポート:50%		

キャリア・ライフ・デザインⅡ		後期 2 単位	1・2・3年
労働市場の変化とその影響、企業における人材育成、従業員のキャリア形成		宇田 美江（うだ みえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	個人と企業組織の調和のために、個人が企業組織でどのようにキャリア形成していくかを人材マネジメントの観点から理解できるようにする。そこから、将来どのように企業組織で働くかのイメージと心構えをつくることのできるようになる。		
授業の概要	働く個人が企業においてキャリアを形成する流れに沿って、人材の獲得、人材育成、配置や異動、昇進、評価や処遇といった内容について取り上げる。具体的なイメージを持つために、ビデオ等の視聴覚教材を使用する。また、自己理解を深めるための課題への取り組み等を実施する。原則として、講義内容に対する意見や感想を毎回書いて提出してもらう。また、グループに分かれて、ワークや議論をすることもあります。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 企業におけるキャリア形成とは？	
	第2回	人材の獲得① 労働市場の変化、雇用の多様化	
	第3回	人材の獲得② 求職と求人、就職活動	
	第4回	人材育成① 人材育成の目的	
	第5回	人材育成② OJTとOff-JT、キャリア・パス	
	第6回	人材フロー 配置と異動	
	第7回	管理職の役割の変化	
	第8回	管理職の早期選抜と育成	
	第9回	人材の評価 評価制度の変化	
	第10回	人材の処遇 賃金管理の変化	
	第11回	人材の尊重① 働く環境の整備	
	第12回	人材の尊重② 福利厚生、労働組合	
	第13回	転職・失業・定年退職	
	第14回	変化する企業と個人の関係	
	第15回	まとめ さまざまなキャリア形成	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、予習をしてあることを前提に行います。「ただ読むだけ」ではなく、内容を把握することを目的意識を持って、予習をしてきてください。また、教科書の該当部分を事前に読み、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	開講時に指示する		
参考文献	阿部正浩、松繁寿和（2014）『キャリアのみかた 図で見る110のポイント改訂版』有斐閣 守島基博（2004）『人材マネジメント入門』日本経済新聞社		
評価方法	感想及び課題提出：50% 期末レポート：50%		

ライフ・キャリア・デザインⅢ A		後期 2 単位	1・2年 2 学科共通
キャリア論、志望業界・職種・企業の分析		奈良 堂史 (なら たかし)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、自身の志望する業界・職種・企業について、講義を通じてその研究方法を理解・習得し、「業界研究シート」「職種研究シート」「企業研究シート」の3点を作成させる。		
授業の概要	(1) 業界研究 (2) 職種研究 (3) 企業研究の3部で構成される。それぞれを通じて、自身の希望進路に関して、どのような業種・企業があり、どのような職種や働き方があるのかを理解する。さらに、それぞれについて研究シートにまとめることで、習得した知識や情報を“見える化”することができる。		
授業計画	第1回	ガイダンス (講義の進め方、受講者アンケートなど)	
	第2回	就職活動と「業界研究」「職種研究」「企業研究」	
	第3回	第1部「業界研究」 (1) 業界研究の手順、進め方	
	第4回	(2) 業界情報の収集① 本、資料からの情報収集	
	第5回	(3) 業界情報の収集② インターネットからの情報収集、その他の情報収集法	
	第6回	(4) 業界研究に役立つ分析フレームワーク	
	第7回	(5) 業界研究シートの完成	
	第8回	第2部「職種研究」 (1) 自己分析・適性と職種	
	第9回	(2) 職種の調べ方	
	第10回	第3部「企業研究」 (1) 企業研究の重要性とその手順	
	第11回	(2) 企業情報の収集	
	第12回	(3) 企業プロフィール・企業特性の分析	
	第13回	(4) 企業の経営戦略の分析	
	第14回	(5) 企業研究シートの完成	
	第15回	半期のまとめと基礎理解確認テスト	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で課される宿題に取り組み、次回の講義で提出する。これを通じて、受講者が講義内で業界・職種・企業研究を完成できるように指導する。必ず提出されたい。		
テキスト	特になし (毎回の講義内にて担当者作成のプリント等を配布する)		
参考文献	■友岡賛編, 齊藤博・紺野喜文・中山重穂 (2012) 『就活生のための企業分析』八千代出版. ■森田松太郎 (2009) 『経営分析入門 (第4版)』日本経済新聞出版社		
評価方法	平常点:60% 小テスト (基礎理解確認テスト):30% レポート:10%		

キャリア・ライフ・デザインⅢA		後期 2 単位	1・2・3年
キャリア論、志望業界・職種・企業の分析		奈良 堂史（なら たかし）	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、自身の志望する業界・職種・企業について、講義を通じてその研究方法を理解・習得し、「業界研究シート」「職種研究シート」「企業研究シート」の3点を作成させる。		
授業の概要	(1) 業界研究 (2) 職種研究 (3) 企業研究の3部で構成される。それぞれを通じて、自身の希望進路に関して、どのような業種・企業があり、どのような職種や働き方があるのかを理解する。さらに、それぞれについて研究シートにまとめることで、習得した知識や情報を“見える化”することができる。		
授業計画	第1回	ガイダンス（講義の進め方、受講者アンケートなど）	
	第2回	就職活動と「業界研究」「職種研究」「企業研究」	
	第3回	第1部「業界研究」 (1) 業界研究の手順、進め方	
	第4回	(2) 業界情報の収集① 本、資料からの情報収集	
	第5回	(3) 業界情報の収集② インターネットからの情報収集、その他の情報収集法	
	第6回	(4) 業界研究に役立つ分析フレームワーク	
	第7回	(5) 業界研究シートの完成	
	第8回	第2部「職種研究」 (1) 自己分析・適性と職種	
	第9回	(2) 職種の調べ方	
	第10回	第3部「企業研究」 (1) 企業研究の重要性とその手順	
	第11回	(2) 企業情報の収集	
	第12回	(3) 企業プロフィール・企業特性の分析	
	第13回	(4) 企業の経営戦略の分析	
	第14回	(5) 企業研究シートの完成	
	第15回	半期のまとめと基礎理解確認テスト	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で課される宿題に取り組み、次回の講義で提出する。これを通じて、受講者が講義内で業界・職種・企業研究を完成できるように指導する。必ず提出されたい。		
テキスト	特になし（毎回の講義内にて担当者作成のプリント等を配布する）		
参考文献	■友岡賛編、齊藤博・紺野喜文・中山重穂（2012）『就活生のための企業分析』八千代出版。 ■森田松太郎（2009）『経営分析入門（第4版）』日本経済新聞出版社		
評価方法	平常点:60% 小テスト（基礎理解確認テスト）:30% レポート:10%		

ライフ・キャリア・デザインⅢB		後期 2 単位	1・2年 2学科共通
キャリア論、社会人としての基礎力（コミュニケーション力、チームで働く力など）の養成		奈良 堂史（なら たかし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>どのような企業の、どのような職種においても「自己を表現し、他者とのコミュニケーションを図る」ことは、共通に求められる社会人の能力・スキルである（一般的に「社会人基礎力」や「就業力」と呼ばれる）。本講義では、プレゼンテーションとグループワークを通じて、「自己表現力」「コミュニケーション能力」「関係調整力」「チームマネジメント力」などの諸力の養成を目標とする。コミュニケーション能力や主体性・協調性といった就業力を向上させたい学生の受講を歓迎する。</p>		
授業の概要	<p>(1) プレゼンテーション、(2) グループディスカッション (3) プロジェクト学習の3部で構成される。各回の授業は、講義と（学生による）作業や討論、発表などが中心となる。積極的に出席し、他の受講生とコミュニケーションを図る意欲をもった学生の受講を歓迎する。なお、下記のプロジェクト学習の内容は、クラスサイズ（履修者の人数）などにより、適宜変更することがある（講義内で指示する）。</p>		
授業計画	第1回	本講義の進め方、履修上の注意、受講者アンケートなど	
	第2回	社会人基礎力（就業力）とコミュニケーション能力	
	第3回	プレゼンテーションの知識①——目的・機能・種類	
	第4回	プレゼンテーションの知識②——内容と構成	
	第5回	プレゼンテーションの知識③——技術・ツール	
	第6回	プレゼンテーションの知識④——事前準備の内容と方法	
	第7回	自己紹介プレゼンテーション（前半）	
	第8回	自己紹介プレゼンテーション（後半）	
	第9回	就職活動におけるグループディスカッション実践	
	第10回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」① （テーマについては、受講生の要望やクラスサイズ等を考慮して設定する）	
	第11回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」②	
	第12回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」③	
	第13回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」④	
	第14回	プロジェクト学習の成果発表会	
	第15回	半期のまとめ——再び、社会人基礎力とは何か？	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回、授業の最後に課される宿題に取り組み、次回の講義で提出する。なお、宿題は、①個人で取り組むもの、②グループで取り組むものの2種類があり、全15回の講義の前半では①を、後半では②を課す予定である。</p>		
テキスト	特になし（毎回の講義内にて担当者作成のプリント等を配布する）		
参考文献	<p>■上村和美・内田充美（2008）『プラクティカル・プレゼンテーション（改訂版）』くろしお出版 ■竹田茂生・藤木清編（2006）『大学生と新社会人のための知のワークブック』くろしお出版</p>		
評価方法	平常点:75% プロジェクト学習の成果物:15% 自己紹介プレゼンテーション:10%		

キャリア・ライフ・デザインⅢB		後期 2 単位	1・2・3年
キャリア論、社会人としての基礎力（コミュニケーション力、チームで働く力など）の養成		奈良 堂史（なら たかし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>どのような企業の、どのような職種においても「自己を表現し、他者とのコミュニケーションを図る」ことは、共通に求められる社会人の能力・スキルである（一般的に「社会人基礎力」や「就業力」と呼ばれる）。本講義では、プレゼンテーションとグループワークを通じて、「自己表現力」「コミュニケーション能力」「関係調整力」「チームマネジメント力」などの諸力の養成を目標とする。コミュニケーション能力や主体性・協調性といった就業力を向上させたい学生の受講を歓迎する。</p>		
授業の概要	<p>(1) プレゼンテーション、(2) グループディスカッション (3) プロジェクト学習の3部で構成される。各回の授業は、講義と（学生による）作業や討論、発表などが中心となる。積極的に出席し、他の受講生とコミュニケーションを図る意欲をもった学生の受講を歓迎する。なお、下記のプロジェクト学習の内容は、クラスサイズ（履修者の人数）などにより、適宜変更することがある（講義内で指示する）。</p>		
授業計画	第1回	本講義の進め方、履修上の注意、受講者アンケートなど	
	第2回	社会人基礎力（就業力）とコミュニケーション能力	
	第3回	プレゼンテーションの知識①——目的・機能・種類	
	第4回	プレゼンテーションの知識②——内容と構成	
	第5回	プレゼンテーションの知識③——技術・ツール	
	第6回	プレゼンテーションの知識④——事前準備の内容と方法	
	第7回	自己紹介プレゼンテーション（前半）	
	第8回	自己紹介プレゼンテーション（後半）	
	第9回	就職活動におけるグループディスカッション実践	
	第10回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」① （テーマについては、受講生の要望やクラスサイズ等を考慮して設定する）	
	第11回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」②	
	第12回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」③	
	第13回	プロジェクト学習「商品企画書を作成してみよう」④	
	第14回	プロジェクト学習の成果発表会	
	第15回	半期のまとめ——再び、社会人基礎力とは何か？	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回、授業の最後に課される宿題に取り組み、次回の講義で提出する。なお、宿題は、①個人で取り組むもの、②グループで取り組むものの2種類があり、全15回の講義の前半では①を、後半では②を課す予定である。</p>		
テキスト	特になし（毎回の講義内にて担当者作成のプリント等を配布する）		
参考文献	<p>■上村和美・内田充美（2008）『プラクティカル・プレゼンテーション（改訂版）』くろしお出版 ■竹田茂生・藤木清編（2006）『大学生と新社会人のための知のワークブック』くろしお出版</p>		
評価方法	平常点:75% プロジェクト学習の成果物:15% 自己紹介プレゼンテーション:10%		

現代教養コア入門（2014年度以降入学者）	前期集中 1 単位	1年 2 学科共通
現代教養学科で学ぶ基本姿勢を身につけよう		
<p>【担当教員】 阿久津 光子（あくつ みつこ）、梅垣 千尋（うめがき ちひろ）、河見 誠（かわみ まこと）、小林 瑞乃（こばやし みずの）、齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）、鈴木 直子（すずき なおこ）、趙 慶姫（ちょう きょんひ）、森下 春枝（もりした はるえ）、吉岡 康子（よしおか やすこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 現代教養学科での学びの基盤となるのは「現代教養コア科目」である。この授業は、「現代教養コア科目」とはどのような内容でありそこで何を学ぶのかということを理解し、これから始まる現代教養学科での学びに向けた基本姿勢を身につけることを目標とする。</p> <p><授業の概要> 現代教養コア科目の三つの科目群である「女性と現代(自分を知る)」「共生(他者とつながる)」「表現(発信しコミュニケーションする)」について、それぞれの科目群の学びを通して体得してもらいたい姿勢、視座がどのようなものを、映像資料や体験談、また学生間の討議なども交えながら、考えていく。専攻ごとの授業として進められる。</p> <p><授業計画> ・女性と現代(専攻ごとの授業) (1) 歴史に学ぶ「女性と現代」 (2) 女性の〈私〉が大学で学ぶ意味（グループ討議） (3) 世界に学ぶ「女性と現代」（映像資料を通して） (4) 現代日本に生きる〈私〉が学ぶ意味（グループ討議） ・共生(専攻ごとの授業) (1) 「共生」で何を学ぶのか：共生社会実習等を例に (2) 人はなぜ共生を求めるのか（映像資料等を通して） (3) 共に生きるーキリスト教の視点から (4) グループ討議、全体討論 ・表現(専攻ごとの授業) (1) 表現／造形：視覚伝達の効果について ワークショップ、グループ討議 (2) 表現／造形：グループ討議の全体発表／まとめ：「表現」を何のために学ぶのか (3) 表現／身体・技術：身体文化・表現の在り方を探る (4) 表現／創作：物語世界を創造してみよう</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 「女性と現代」「共生」「表現」を学ぶことが自分にとってどのような意味があるのかを、各科目群に関する授業を受ける前に予め考えておくこと。そして授業を受けたあとには、新たに気づきが与えられたこと、考えさせられたことをまとめること。</p> <p><テキスト> 特になし。</p> <p><参考文献> 特になし。</p> <p><評価方法> 授業参加度合い(討議、リアクションペーパー含む) 50% レポート 50%</p>		

現代教養コア入門（2013年度以前入学者）	前期集中 2 単位	1年
現代教養学科で学ぶ基本姿勢を身につけよう	河見 誠（かわみ まこと）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 現代教養学科での学びの基盤となるのは「現代教養コア科目」である。この授業は、「現代教養コア科目」とはどのような内容でありそこで何を学ぶのかということを理解し、これから始まる現代教養学科での学びに向けた基本姿勢を身につけることを目標とする。</p> <p><授業の概要> 現代教養コア科目の三つの科目群である「女性と現代(自分を知る)」「共生(他者とつながる)」「表現(発信しコミュニケーションする)」について、それぞれの科目群の学びを通して体得してもらいたい姿勢、視座がどのようなものかを、映像資料や体験談、また学生間の討議なども交えながら、考えていく。専攻ごとの授業として進められる。</p> <p><授業計画> ・女性と現代(専攻ごとの授業) (1) 歴史に学ぶ「女性と現代」 (2) 女性の〈私〉が大学で学ぶ意味(グループ討議) (3) 世界に学ぶ「女性と現代」(映像資料を通して) (4) 現代日本に生きる〈私〉が学ぶ意味(グループ討議) ・共生(専攻ごとの授業) (1) 「共生」で何を学ぶのか：共生社会実習等を例に (2) 人はなぜ共生を求めるのか(映像資料等を通して) (3) 共に生きるーキリスト教の視点から (4) グループ討議、全体討論 ・表現(専攻ごとの授業) (1) 表現／造形：視覚伝達の効果について ワークショップ、グループ討議 (2) 表現／造形：グループ討議の全体発表／まとめ：「表現」を何のために学ぶのか (3) 表現／身体・技術：身体文化・表現の在り方を探る (4) 表現／創作：物語世界を創造してみよう</p> <p><注意事項> 2013年度以前入学者に関しては、特別授業や特別課題を課すことがある。個別に指示をする。</p> <p><準備学習(予習・復習等)> 「女性と現代」「共生」「表現」を学ぶことが自分にとってどのような意味があるのかを、各科目群に関する授業を受ける前に予め考えてくること。そして授業を受けたあとには、新たに気づきが与えられたこと、考えさせられたことをまとめること。</p> <p><テキスト> 特になし。</p> <p><参考文献> 特になし。</p> <p><評価方法> 授業参加度合い(討議、リアクションペーパー含む) 50% レポート 50%</p>		

女性と現代A		前期 2 単位	1・2・3年
女性が主体的に生きることを考える		柚木 理子 (ゆき まさこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義は、現代日本社会において、女性が主体的に生きる力を養成することを目的とする。 長期的視野に立って自分自身のライフデザインを考える上で、日本社会における女性を取り巻く社会環境を理解する。		
授業の概要	就職活動、職業選択、結婚、家族形成など、各ライフステージにおいて女性が直面するであろう諸問題を、男性の変容を視野に入れつつ、把握していく。		
授業計画	第1回	統計でみる女性の一生：進学・就職・仕事編	
	第2回	統計でみる女性の一生：結婚・家族編	
	第3回	就職とキャリア形成	
	第4回	ジェンダーと職業選択	
	第5回	ジェンダー規範と自己形成	
	第6回	女性のライフコースの変化	
	第7回	性別役割分業意識の変容	
	第8回	経済変動と結婚の変容	
	第9回	結婚の現代的意味を考える	
	第10回	未婚化・非婚化の進行	
	第11回	現代日本の夫婦関係再考	
	第12回	出産と子育て	
	第13回	マタニティ・ハラスメント	
	第14回	少子化問題を考える	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	新聞あるいはニュースなど、社会で起こっていることにアンテナをはることに。		
テキスト	授業時にプリントを配布する。		
参考文献	川口章、2013、『日本のジェンダーを考える』、有斐閣選書；吉田あけみ編、2014、『ライフスタイルからみたキャリア・デザイン』、ミネルヴァ書房など、その他授業時に適宜紹介する。		
評価方法	ミニペーパー:30% 試験:70%		

女性と現代B		後期 2 単位	1・2・3年
現代家族のかたち		原 葉子（はら ようこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>(1) 「家族」を社会的な視角からとらえ、私たちが日常的に当たり前だと思っているごく身近な問題を改めて問い直すことの重要性を理解する。</p> <p>(2) 家族を考えるための基礎的な概念や枠組みを習得し、具体的なテーマについて自ら考えることができるようになる。</p>		
授業の概要	<p>この授業では、現代の家族をめぐる具体的なテーマ、とくに普段は当たり前だと思ったり、見過ごしたりしているような家族をめぐる問題について、さまざまな視角から問い直していく。その際、家族を考えるときに切り離すことのできないジェンダーの問題も、中心的なテーマとして考察する。受講者は、発言やリアクションペーパーの記入を通じて、授業に積極的に参加していくことが求められる。</p>		
授業計画	第1回	「家族」を考えるための基礎知識	
	第2回	「近代家族」とは何か	
	第3回	家族とジェンダー（1）性別役割分業	
	第4回	家族とジェンダー（2）「家」と「家族」	
	第5回	配偶者選択の現在	
	第6回	少子化の要因	
	第7回	女性の労働をめぐる問題	
	第8回	育児と親役割	
	第9回	変わる父親像	
	第10回	親密な関係性における暴力	
	第11回	出産の医療化と家族	
	第12回	格差社会と家族	
	第13回	社会的養護	
	第14回	非血縁家族	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>家族にはさまざまな形があり、またさまざまな課題があります。そしてそれらは、国や社会のあり方とも密接に関連しています。日ごろから新聞等に目を通し、家族に関する問題がいま社会でどのように議論されているのか、関心をもっておいってください。</p>		
テキスト	なし。毎回プリントを配布する。		
参考文献	講義の中で適宜紹介する。		
評価方法	期末試験：70% リアクションペーパー：30%		

女性と文学		後期 2 単位	1・2・3年
宝塚歌劇団の100年		津金 規雄 (つがね のりお)	
授業の到達目標及びテーマ	2014年に創立100年を迎えた宝塚歌劇団は、未婚の女性のみで構成された世界的にも大変ユニークなミュージカル劇団です。その歴史は近代日本の歩みと共にありました。それはまた女性の社会的な地位・位置づけの変遷でもありました。宝塚100年の足跡をたどることで、近代史のなかの女性について理解できるようにします。		
授業の概要	講義を中心に進めます。基本的には宝塚歌劇団の歴史をたどりながら、時代背景・思潮などについて触れていきます。各回ごとに個別のテーマを掲げてあるので、それぞれ1回完結の授業形態となります。そしてそれらをつなげることで、全体像が見えてくるようにします。		
授業計画	第1回	宝塚歌劇団の現況	
	第2回	100年間の歴史	
	第3回	創立者・小林一三	
	第4回	レビューの構成	
	第5回	日本におけるオペラの移入	
	第6回	宝塚とレビュー	
	第7回	白井鉄造の業績	
	第8回	戦争・軍隊と宝塚歌劇	
	第9回	「源氏物語」の上演と女優の輩出	
	第10回	「ベルサイユのばら」の上演	
	第11回	「風と共に去りぬ」と男役	
	第12回	歌舞伎と宝塚歌劇	
	第13回	学校組織としての宝塚歌劇団	
	第14回	フィナーレについて	
	第15回	まとめと今後の展望	
準備学習 (予習・復習等)	受講に際しては、20世紀を中心にした日本の近代史についての基礎的な知識を持つことが前提となります。受講後は、各回のテーマについて紹介された参考文献などをもとにさらに理解を深め、テストに備えます。		
テキスト	プリントを用意します。		
参考文献	「すみれ花歳月(とし)を重ねて」(宝塚歌劇団)、川崎賢子「宝塚 消費社会のスペクタクル」(講談社)ほか。授業の中でも随時紹介していきます。		
評価方法	テスト:70% 平常点:30%		

女性と歴史		前期 2 単位	1・2・3年
女性の視点から歴史をみる		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○女性の視点から歴史をとらえる方法を理解する。</p> <p>○現代の女性の生き方を、歴史的に広い視野から相対化できるようになる。</p> <p>○歴史上の女性にかんする評伝の執筆に取り組み、ひとりの女性の人生から歴史をつかみとる方法を習得する。</p> <p>○ひとりの女性の人生についてのプレゼンテーションや自由な討論を行うことで、豊かなコミュニケーションの力を身につける。</p>		
授業の概要	<p>前半を女性史にかんする講義に、後半を女性評伝の執筆準備にあてる。前半では、西洋近代史を中心として、フェミニズム思想の成立、女性の政治参加の歩み、性的自己決定権の確立などの女性史の流れについて講義を行う。後半では、学生全員がそれぞれの選んだ歴史上の女性にかんするプレゼンテーションを行い、女性評伝の執筆を進めていく。履修者の人数によって、後半のプレゼンテーションのスケジュールは変更することもありうる。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	歴史のなかの女性を可視化する	
	第3回	女性史の視点から（1）女性というカテゴリーの形成	
	第4回	女性史の視点から（2）近代フェミニズムの理論と歴史	
	第5回	女性史の視点から（3）女性の性的自己決定権	
	第6回	女性史の視点から（4）女性と身体表現	
	第7回	女性評伝の執筆にむけて（1）評伝の書き方・図書館ガイダンス	
	第8回	女性評伝の執筆にむけて（2）個別相談（その1）	
	第9回	女性評伝の執筆にむけて（3）個別相談（その2）	
	第10回	女性評伝のプレゼンテーション（1）グループ1	
	第11回	女性評伝のプレゼンテーション（2）グループ2	
	第12回	女性評伝のプレゼンテーション（3）グループ3	
	第13回	女性評伝のプレゼンテーション（4）グループ4	
	第14回	女性評伝のプレゼンテーション（5）グループ5	
	第15回	女性評伝のプレゼンテーション（6）グループ6	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○前半の講義では、あらかじめ調べてきたことを発表してもらい、それを導入として授業を進めていく場合もある。</p> <p>○後半の女性評伝（プレゼンテーション、評伝の執筆）では、授業時間外にみずから対象とする歴史上の女性についての調査を進めてもらう。できれば早い段階から、評伝を書いてみたい歴史上の女性を具体的に考えておいてほしい。</p>		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	必要に応じて授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% レポート（女性評伝）:40%		

女性と芸術		後期 2 単位	1・2・3年
創作の実作者の観点から興味深い女性美術家、デザイナー、作品等を取り上げ、芸術表現と女性について考察する		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標及びテーマ	芸術表現は男女を問わず人間にとって根源的なものであるが、本講では女性というキーワードで、生活との結びつきが強い分野における活動を含め、芸術表現、芸術活動と女性について考察する。生活や社会全般の芸術環境といかに関わり続けてきたかについて、自ら考察することを目的とする。		
授業の概要	19世紀後半に生まれ20世紀に活躍した女性から現代まで、各回1〜3名の女性を順に取り上げ、それぞれの作品や関連画像などを示しながら授業をすすめる。時代背景と合わせて考察する。画像を中心としたパワーポイントや画集を用いた講義の他、ビデオ、DVDなどの映像資料の鑑賞、芸術家の自伝などテキストの読み合わせなども行う。		
授業計画	第1回	自己紹介／人間と芸術表現活動について／女性の表現活動について	
	第2回	ファッション・デザイナー：ココ・シャネル	
	第3回	画家、服飾芸術家：ソニア・ドローネ	
	第4回	ダダ／画家、他：ゾフィー・トイバー・アルプ、ハンナ・ヘーヒ	
	第5回	画家：ジョージア・オキーフ	
	第6回	バウハウスの女性達：グンタ・シュテルツル、アンニ・アルバース、他	
	第7回	陶芸家：ルーシー・リー	
	第8回	画家：フリーダ・カーロ（DVD鑑賞）	
	第9回	彫刻家：ルイース・ブルジョア「Women in the Art」（ビデオ鑑賞）	
	第10回	染織家：志村ふくみ（DVD鑑賞）	
	第11回	繊維造形、彫刻家：マグダレーナ・アヴァカノヴィッチ	
	第12回	オブ・アート 画家：ブリジット・ライリー	
	第13回	デザイナー：石岡瑛子（VTR鑑賞）	
	第14回	写真家：石内都 「hiroshima」（VTR鑑賞）	
	第15回	まとめ	
準備学習（予習・復習等）	参考図書、AV資料など授業で紹介するので、授業時間外に図書館などで画集や関連図書、AV資料などを見てほしい。随時、関連またはお薦めの展覧会を紹介するので、本物にじかに触れる機会として、個別に展覧会鑑賞をしてほしい。		
テキスト	特に定めず、授業レジュメや作家の言葉などの資料、プリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点：60% レポート：40%		

女性とキリスト教		後期 2 単位	1・2・3年
文学・聖書・美術から学ぶ〈キリスト教と女性〉		安藤 公美 (あんど う まさみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	キリスト教を、特に聖書や文学・美術における〈女性〉に注目し、新しい視点から理解していく。それぞれの時代、地域によって〈女性〉の宗教的社会的役割はいかに変容し、またその表象はいかに多様化したのか。聖書、文学、美術などに直接触れる機会を授業の中でもち、読む力、聴く力、観る力を養うことで、世界に偏在するキリスト教文化と現代とのかかわりを積極的に発見できる視点を獲得する。現代日本を生きる女性として、その歴史的文化的基盤を見据えることで、より豊かな可能性をもてるようになる。また、自ら気付いたことや意見、思考を言語化する習慣がつくようになる。		
授業の概要	男性中心の世界観に彩られたキリスト教理解に対して、近年フェミニスト神学から積極的な女性性の優位が唱えられてきた。創世記におけるアダムとエヴァや旧約聖書中の傑作といわれるルツ記、新約聖書の聖母マリアやマグダラのマリアなど、聖書に描かれた女性たちには多様な地位と役割が与えられてきた。授業ではまず聖書の中の女性たちを、文字や絵画テキストに如何に表象されてきたかを概括する。その上で、固定化する像・女性観を脱構築しながら、その複雑さ・多様性を明らかにしていく。さらに、日本文学の中に引用されたキリスト教を指摘し、テキストを重層的に読み解いていく。異文化としてキリスト教を受容した日本の文学も講読し、日本人の宗教観、女性観も抽出する。		
授業計画	第1回	〈女性とキリスト教〉の現在 多様性を問う グローバル・ジェンダー・フェミニズム	
	第2回	聖書が語る女性たち1 旧約篇(1) 楽園のエヴァ 人間存在誕生のドラマ	
	第3回	誘惑と楽園追放の文学 芥川龍之介「三つの宝」のユートピア	
	第4回	聖書が語る女性たち2 旧約篇(2) 友愛のルツ 異文化をどう受容するか	
	第5回	キリスト教と日本 芥川「神神の微笑」にみる日本と西洋の神と女神	
	第6回	旧約聖書における女性の宗教的・社会的役割と現在	
	第7回	聖書が語る女性たち3 新約篇(1) 聖母マリア 受胎告知と無原罪・ピエタ	
	第8回	偏在するマリアの図像(アイコン) 絵画・文学・映画・漫画の引用関係	
	第9回	レポート作成の基本 テーマの選定、文献検索、引用の方法、アウトラインの計画 文章表現の注意点	
	第10回	聖書が語る女性たち4 新約篇(2) マグダラのマリア 聖と俗の往還	
	第11回	〈祈り〉と十字架 芥川「南京の基督」にみる中国・作家・少女	
	第12回	エロスとアガペーの塑型 映画《南京の基督》を観る	
	第13回	聖書が語る女性たち5 新約篇(3) マルタとマリア 活動か黙想か	
	第14回	象徴の姉妹 太宰治「駆込み訴へ」「雪の夜の物語」を読む	
	第15回	まとめ 〈キリスト教と女性〉を現代に問う 固定化された女性像／多様化・複数の人間性	
準備学習 (予習・復習等)	今までに享受した物語(文学、映画、漫画など)の記憶の再生を随時行う。 文学館、美術館などでの各自による積極的な観覧。 図書館や研究資料館、国会図書館でのデータ収集を必要に応じて行う。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	竹下節子『聖母マリア』講談社、岡田温司『マグダラのマリア』中公新書、安藤公美「『雪の夜の物語』を読む」『キリスト教文学研究』、「三つの宝」『芥川龍之介年誌』など。その他、随時紹介する。		
評価方法	レポート:60% 授業のコメント・講評:40%		

女性と法律		前期 2 単位	1・2・3年
女性の一生に関係する法律について学ぶ		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	法律は日常生活において人の行動に関連するものであるが、女性が一生のライフステージを通して関係し、知っておかなくては困ることになる法律について理解することを授業の到達目標とする。		
授業の概要	学生が一番興味のある恋愛関係に関する法律から講義を始め、結婚と離婚に関する法律、家族の介護・相続に関する法律、女性が働くことに関する法律の順に講義を行う。学生の将来のライフプラン・キャリア形成に役に立つ授業となっている。		
授業計画	第1回	イントロダクション 女性と法律学の関係	
	第2回	性暴力（レイプ・痴漢）と法律	
	第3回	恋愛・婚約と法律	
	第4回	不倫・セクハラと法律	
	第5回	結婚 事実婚と法律婚	
	第6回	ドメスティックバイオレンス・国際結婚	
	第7回	児童虐待	
	第8回	離婚 破綻婚主義	
	第9回	離婚 財産分与と慰謝料請求	
	第10回	親の介護	
	第11回	相続と遺言	
	第12回	働く女性の法律 雇用機会均等法	
	第13回	働く女性の法律 産休・育休	
	第14回	働く女性の法律 パート・アルバイト・派遣	
	第15回	女性と法律 総括	
準備学習 (予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともに授業に興味深くなるであろう。授業を受けた後は、忘れないうちにノートをまとめておこう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	副田隆重他著『ライフステージと法』有斐閣アルマ		
参考文献	六法があると便利ですが、必要な条文はインターネットでダウンロードできます。		
評価方法	授業への積極的参加:7% テスト:93%		

生活管理学		前期 2 単位	1・2・3年
高齢社会を考える		原 葉子 (はら ようこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>少子高齢化が進むなか、私たちは社会の一員として、家族として、また自分自身の問題として「高齢社会」に向き合っていかなければならない。「高齢社会」への理解を深めるため、この講義では以下のことを目標として設定する。</p> <p>(1) 日本社会が直面している高齢社会の現状や基本的な問題点を理解する。 (2) どのような社会を築いていけばよいのかを、自ら考え議論できるようになる。</p>		
授業の概要	<p>授業は講義形式で行う。人口統計、歴史、国際比較などを通じて高齢社会の特徴を立体的に概観するとともに、高齢者と家族との関係性に焦点をあて、映像をまじえながら家族介護やケアワークについて考察していく。また、現代日本の福祉政策や社会保障制度のもつ課題についても、一緒に考えていく。受講者は、毎回リアクションペーパーの記述を通じて、テーマへの考察を深めることが期待される。</p>		
授業計画	第1回	「高齢社会」とは何か	
	第2回	高齢社会の人口学的側面	
	第3回	社会は「老人」をどう見てきたか	
	第4回	高齢者と家族	
	第5回	介護の戦後史	
	第6回	「恍惚の人」から見えるもの	
	第7回	認知症の現在	
	第8回	どこまで家で暮らせるか	
	第9回	男性とケアワーク	
	第10回	高齢社会の国際比較 (1) アジア	
	第11回	高齢社会の国際比較 (2) 北欧	
	第12回	高齢期の格差	
	第13回	高齢期のネットワークと社会的孤立	
	第14回	高齢者の社会的位置付け	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>高齢社会の問題は、若い皆さんにとっても避けて通ることのできない問題です。はじめは馴染みにくい主題かもしれませんが、現実の動きと重ね合わせながら考えていくことで、少しずつ理解が深まっていくと思います。そのためにも、日ごろから新聞報道などに触れ、高齢化する社会の課題に関心をもつ心がけてください。</p>		
テキスト	なし。毎回プリントを配布する。		
参考文献	講義のなかで適宜紹介する。		
評価方法	リアクションペーパー:30% 期末試験:70%		

女性と労働		後期 2 単位	1・2・3年
女性が働くことを考える		袖木 理子 (ゆき まさこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、女性が労働者として自立的に社会参画する力を養成することを目的とする。 現代日本社会の変化の著しい雇用状況を理解した上で、女性のキャリアをデザインできるようにする。		
授業の概要	激変する雇用環境の中で、若者や女性が就職活動や職場でいかなる問題に直面するかを理解し、働く際に必要となる社会的知識を身につけ、問題解決の方法や能力を養っていく。		
授業計画	第1回	働く女性をめぐる問題の諸相	
	第2回	現代の就職事情	
	第3回	若者の雇用状況	
	第4回	日本の雇用システムの変化	
	第5回	求められる人材とは？	
	第6回	正規・非正規で働くこと	
	第7回	バイト・パート・派遣で働くこと	
	第8回	女性の働き方と生涯賃金	
	第9回	ワーキング・プア／貧困の女性化	
	第10回	給与・社会保障の仕組み	
	第11回	男女雇用機会均等法	
	第12回	セクシュアル・ハラスメント	
	第13回	パワー・ハラスメント	
	第14回	ブラック企業対策	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	新聞あるいはニュースなど、社会で起こっていることにアンテナをはること。		
テキスト	授業時にプリントを配布する。		
参考文献	川口章、2013、『日本のジェンダーを考える』、有斐閣選書；上野千鶴子、2013、『女たちのサバイバル作戦』、文春新書など、その他授業時に適宜紹介する。		
評価方法	ミニペーパー:30% 試験:70%		

女性と健康		後期 2 単位	1・2・3年
女性と健康・命・長寿社会		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 女性の健康は、自ら生きがいを持って充実した生活をおくるために大切であり、また、次世代の命と健康を支える存在でもあります。女性の健康の問題や課題について様々な観点からとらえます。 ○ 世界の女性と健康と境遇や教育の問題などについて、知識や理解を深めます。日本女性として世界で果たせる役割なども模索します。 ○ 世界の中で有数の長寿国日本ですが、健康で自立して幸せに長生きしている人だけではありません。この点について、個人、家族、組織、国家のレベルからその解決策はあるのか、未来の行方について考えます。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 長寿と健康、女性とスポーツ、スポーツとジェンダー、女性と体力、暴力とジェンダーなど、女性ならではの健康の問題を取り上げます。 ○ 生命科学・医療の進歩による命の問題を取り上げます。 ○ 家族のあり方や地域社会の変化などから人とのつながりが希薄になる中で、健康や生きがいについて取り上げます。高齢化が進む中で、自らの健康や家族の健康、他人の健康とどう向きあっていくのか模索します。 		
授業計画	第1回	授業の概要	
	第2回	長寿社会と健康：健康に長生きをして生活を楽しんでいる方々がいます。どのような生活をしていくことが長生きにつながり、100歳の壁を越えられるのでしょうか。そのような方を参考に授業を進めます。	
	第3回	女性のスポーツから見るジェンダー：現代まで女性が行えるスポーツは限られてきました。しかし、近年のオリンピックでは女性が活躍し、男性と対等になってきました。これまでの経緯をオリンピックを参考にみていきます。	
	第4回	女性とスポーツ：日常生活に運動やスポーツは欠かせません。しかし、運動のし方を間違えると怪我や病気を引き起こしてしまう場合もあります。健康のために行う運動やスポーツについて考えます。	
	第5回	女性と体力：体力は、老化によって確実に低下していきます。加齢とともに低下する体力を維持するためにはどうしたらいいのか考えます。	
	第6回	女性と健康1：生命科学や再生医療などの健康と関連する技術の進歩があります。その基礎的な知識について理解します。	
	第7回	女性と健康2：身体・医療とジェンダーについて。	
	第8回	女性と健康3：妊娠・出産・子育てについて。	
	第9回	女性と健康4：妊娠してもダイエットをしている方がいますが、ダイエットは必要ですか。	
	第10回	暴力とジェンダー：恋人同士、家族、社会の中に存在する暴力とジェンダーについて、具体例を挙げながら考えます。	
	第11回	近代の家族のかたち：家族のあり方が時代とともに変わってきました。その中での、女性の健康と関連させて考えてみます。	
	第12回	現代の家族のかたち：現代における家族のあり方と女性の健康と関連させて考えてみます。	
	第13回	老い・生きがい1：近年、年老いてからの一人暮らしによって孤独死するなど孤立化する高齢者が増えています。健康と寿命、生きがいの問題について考えます。	
	第14回	老い・生きがい2：行き場所のない高齢者が増えています。高齢社会を生きるとは、について考えます。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	女性と健康に関連する問題を調べてもらいます。		
テキスト	印刷物を中心に映像を参考にします。		
参考文献	柳澤桂子『命と放射能』ちくま文庫、NHK『無縁社会』文春文庫、笹本恒子『好奇心ガール、いま97歳』小学館、斎藤孝『身体感覚を取り戻す』NHKブックス、人見絹枝『人見絹枝炎のスプリンター』日本図書センター、室生・棚橋『きんさんぎんさんが丈夫で長生きできたワケ』あけび書房、吉田溪『働く女のスポーツ処方箋』グラフ社		
評価方法	授業への積極的な参加:60% リアクションペーパー・感想文:20% 課題:20%		

生活デザイン		前期 2 単位	1・2・3年
道具やシステムの理解と使いこなす工夫		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> 生活のさまざまな場面に登場する道具の基本的な働きを再確認し、デザインのあり方を問い直せるようになる。 道具やシステムの扱い方によってものが変わっていくプロセスを理解する。 個々の道具をライフスタイルの中でとらえる必要性を理解する。 		
授業の概要	身近な道具と専門的なシステムを交互に紹介しながら、設計とデザイン、使い方の基本を示していく。また、生活の一場面についてどのように工夫・改善できるかを考えてもらい、集まった考えを比較評価する。生活を快適にする手段である道具やシステムについて、別の角度からも考える視点を紹介していく。		
授業計画	第1回	イントロダクション:人と道具の関係	
	第2回	生活行動の観察 (1) 道具を使う目標と使った結果	
	第3回	生活行動の観察 (2) 自分ですべきこと・人に任せること	
	第4回	生活行動の観察 (3) 動物と人間を比べる	
	第5回	デザインの方針 (1) 空間を移動する楽しみ・道具を使う楽しみ	
	第6回	デザインの方針 (2) 実用性に留まらないデザイン	
	第7回	デザインの方針 (3) 合理的な生活のデザインとは	
	第8回	事例の比較観察 (1) 道具とのつきあい方	
	第9回	事例の比較観察 (2) わかりにくい道具やシステム	
	第10回	事例の比較観察 (3) 大切な記憶と道具	
	第11回	比較考察 (1) 安全性	
	第12回	比較考察 (2) 自動化	
	第13回	比較考察 (3) アシスト	
	第14回	比較考察 (4) デザインの寿命	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	人はなぜこれほど多くの道具やシステムに支えられているのだろうかという問いを持ってください。これに関して各自が見聞きする情報はすべて参考になります。 ・参考書はプロダクトデザインや「インダストリアルデザインの歴史」など歴史の図書を探してください。 ・TV番組ではNHK朝「おはよう日本」の中にある「まちかど情報室」の数分間、NHK日曜日朝の「サキどり」などが参考になります。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% レポート:70%		

女性と現代特論 A		前期 2 単位	1・2・3年
女性とエスニシティ：宗教と民族から世界の女性を考える		岩本 裕子（いわもと ひろこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	エスニシティつまり民族や宗教をキーワードに世界の女性の状況を知ることがをテーマとする。自分のことだけでなく、様々な状況に置かれた女性を理解でき、自らが何をなしえるかを考えられるようになることを目標とする。知識を得て、寛容性を身につけ、考える力をつけることに期待する。 戦後70年を迎える今年、世界情勢は大変緊張状態にあり、日本国内でも多くの問題を抱えている。宗教と民族から世界の女性のことを考える力がつければ、国内外の問題に関しても、自分自身の考え方を確立することができるだろう。		
授業の概要	毎回の講義テーマに即して、講義形式で行う。指定されたテキストの予習部分をしっかり読み込んで参加することを前提に講義を進めるので、自分らしいノートを作りながら講義に臨んでほしい。毎回の講義で自分の理解度を確かめながら「考える」力を身につけてほしい。 ドキュメンタリーを始めとして、映画などの映像や、講義に関連する音楽は、毎回教材とするので、耳目を刺激しつつ理解を深められるだろう。女性特有の第六感を発達させるためにも、五感を鋭敏にして、思考能力を高められるような講義をしていきたい。		
授業計画	第1回	はじめに（講義内容紹介）	
	第2回	2015年春のニュースから世界を学ぶー春休み中に起こったニュース、特に女性をめぐる世界中の出来事に気付き、学ぶきっかけを作る	
	第3回	女性と暴力① 黒人社会のDVを考えるー映画『カラー・パープル』『ティナ』『プレシャス』を手がかりに	
	第4回	女性と暴力② 従軍慰安婦問題を考えるー日韓関係、日本の政治家たちの意識、竹島・尖閣諸島問題など、現在につながる過去を学ぶ	
	第5回	女性と暴力③ FGMを考えるーアフリカ社会の女性たちの状況を知る＋黒柳徹子ユニセフ親善大使の足跡をたどる（その1）	
	第6回	オキナワ慰霊の日に沖縄の女性たちのことを知るー普天間基地問題などの日米安保問題、日本国憲法第9条修正議論を自分自身の問題として考える	
	第7回	宗教と女性① ユダヤ教と女性観	
	第8回	宗教と女性② キリスト教とアメリカ女性	
	第9回	宗教と女性③ イスラム文化圏の女性（1）ーイスラム教が規定した女性の状況をノーベル平和賞受賞者、パキスタン少女、マララ・ユスフザイの発言から学ぶ	
	第10回	「9月11日」以降の世界を考えるー映画『マーシャルロー』で知るテロリストの意図、「イスラム国」の存在、「黒い未亡人」と呼ばれる女性たち	
	第11回	民族と女性① イスラム文化圏の女性（2）ーアフリカ社会の女性たちの状況を知る＋黒柳徹子ユニセフ親善大使の足跡をたどる（その2）	
	第12回	民族と女性② 世界中の先住民女性のことを知るーオーストラリアのアボリジニ女性を描いた映画『ソウルガールズ』を手がかりに	
	第13回	民族と女性③ 日本女性の「先輩」たちに学ぶー市川房枝、加藤シズエ、平塚雷鳥、緒方貞子など多くの先達に続く	
	第14回	核廃絶への遠い道のりーマンハッタン計画からヒロシマ・ナガサキ、フクシマまで：戦後70年を迎えた現在を考える	
	第15回	学期末試験（自筆ノートのみ持ち込み）	
準備学習 (予習・復習等)	初回講義で配布される詳細なシラバスには、テキストの予習頁が記載されている。必ずその部分を読んだ上で講義に参加する。講義終了後は、できるだけ早く復習の意味で自分自身のノートを完成させる。次週の講義を受けるまでには自筆ノートを完成させ、次週に臨むように努力する。毎週毎週の積み重ねで講義への理解が深まるはずである。		
テキスト	岩本裕子『スクリーンに投影されるアメリカ』（メタ・ブレーン、2003年）		
参考文献	各項目によって、講義中に参考文献は提示するが、以下は学期を通して参考文献とする。岩本裕子『語り継ぐ黒人女性ーミシェル・オバマからビヨンセまでー』（メタ・ブレーン、2010年）『物語 アメリカ黒人女性史(1619-2013)ー絶望から希望へー』（明石書店、2013年）		
評価方法	積極的な授業参加：20% 学期途中のレポート：20% 学期末試験：60%		

女性と現代特論B		後期 2 単位	1・2・3年
女性とマイノリティ：アメリカ黒人女性の視点から女性を考える		岩本 裕子（いわもと ひろこ）	
授業の到達目標及びテーマ	アメリカ女性、特にマイノリティということで、黒人女性をテーマに現代社会を考える。1619年に初めて「運ばれた」アフリカ人20人のうち3人が女性だった。この年から390年目で初めて黒人女性のファーストレディが誕生した。奴隷解放宣言から152年、ワシントン大行進から52年が過ぎた現在、黒人大統領二期目のアメリカ合衆国の黒人女性たちのことを考える。		
授業の概要	毎回の講義テーマに即して、講義形式で行う。指定されたテキストの予習部分をしっかり読み込んで参加することを前提に講義を進めるので、自分らしいノートを作りながら講義に臨んでほしい。毎回の講義で自分の理解度を確かめながら「考える」力をつけてほしい。映像や音楽は、毎回教材とするので、耳目を刺激しつつ理解を深められるだろう。		
授業計画	第1回	はじめに（講義内容紹介）	
	第2回	2015年夏のニュースから世界を学ぶ＋『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）－絶望から希望へ－』出版意図を聞く	
	第3回	オバマ大統領誕生の立役者 オブラ・ウィンフレイ：ミュージカル『カラーパープル』（2005）を手がかりに＋黒人で最初のファーストレディ ミシェル・オバマ：民主党大会（2012）での演説を聴く	
	第4回	アメリカ社会における黒人女性の位置づけ＋アメリカ黒人女性の歴史概観	
	第5回	6つのコラム（映画10本＋小説2冊）を読む－実話に基づく映画や小説を通して、黒人女性の現実イメージをつかむ	
	第6回	第1章 奴隷制時代の黒人女性	
	第7回	第2章 アンテベラム期の黒人女性	
	第8回	第3章 奴隷解放から自由人としての抵抗	
	第9回	第4章 「二級市民」への抵抗と活躍	
	第10回	第5章 社会運動のうねりの中での活躍	
	第11回	第6章 「ウーマニスト」のディレンマと希望（1）：黒人社会の性差別問題	
	第12回	黒人教会でクリスマス会！：黒人教会は黒人女性歌手の「ゆりかご」 誕生の地＋『天使の贈りもの』でホイットニー・ヒューストンのゴスペルを聴く	
	第13回	第6章 「ウーマニスト」のディレンマと希望（2）：黒人ファーストレディの誕生と21世紀への展望	
	第14回	おわりに（講義まとめ） 「私たちは強かったわけじゃない。強くならざるをえなかっただけ」「あなたにできたのだから私にもできるわね」	
	第15回	学期末試験（自筆ノートのみ持ち込み）	
準備学習（予習・復習等）	初回講義で配布される詳細なシラバスには、テキストの予習頁が記載されている。必ずその部分を読んだ上で講義に参加する。講義終了後は、できるだけ早く復習の意味で自分自身のノートを完成させる。次週の講義を受けるまでには自筆ノートを完成させ、次週に臨むように努力する。毎週毎週の積み重ねで講義への理解が深まるはずである。		
テキスト	岩本裕子『物語 アメリカ黒人女性史（1619-2013）－絶望から希望へ－』（明石書店、2013年）		
参考文献	岩本裕子『スクリーンに見る黒人女性』（メタ・ブレーン、1999年）『語り継ぐ黒人女性』（メタ・ブレーン、2010年） 「黒人社会におけるドメスティック・バイオレンス－文学とブルースと映画を手がかりに」『立教アメリカン・スタディーズ』第28号（2006年3月）pp. 103-126.		
評価方法	積極的な授業参加：20% 冬休み中のレポート：20% 学期末試験：60%		

女性と現代特論C		後期 2 単位	1・2・3年
性暴力と性の商品化		藤田 和美 (ふじた かずみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・女性に対する性暴力と被害者支援の現状を学び、今後の支援のありかたや性暴力をなくすための問題点を理解する。 ・性の商品化の問題点や議論の対立点を学び、性の自己決定及び、主体的な性と生について理解する。 		
授業の概要	<p>全体を①歴史②性暴力③性の商品化にわける。①では性差別、性暴力に関する学問の成立の歴史的経緯とその成果を学ぶ。②では、現在の痴漢、強姦、ストーカー、セクシャル・ハラスメント、DVなどの性暴力の実態と被害者心理や支援を学ぶ。③では性産業やメディアにおける性表現や情報を検討し、女性の主体的な性と生のあり方を探る。</p>		
授業計画	第1回	ジェンダーとは何か	
	第2回	性暴力と女性運動	
	第3回	女性運動と学問研究	
	第4回	セクシャル・ハラスメント	
	第5回	ストーカー	
	第6回	ちかん・強姦	
	第7回	性暴力の被害者支援	
	第8回	DVの構造と実態	
	第9回	DV被害者の生活再建	
	第10回	DV加害者の更生	
	第11回	性の商品化 現状と問題点	
	第12回	メディアにおける性表現①新聞、雑誌	
	第13回	メディアにおける性表現②映像	
	第14回	性の自己決定	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業後に感想文を提出する。		
テキスト	特に定めない。資料を配布する。		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	レポート:50% 授業感想文:50%		

現代女性特別演習		前期 2 単位	1・2年 2 学科共通
ライフヒストリー探究 ～自覚的に生きるために～		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	自分自身や家族、そして他者など身近な生活の中に存在している諸問題を自覚的に捉え直すための授業である。戦前の女性をめぐる状況（家制度、公娼制度、女工、炭坑労働など）、戦後の民主化、さらに現在の様々なライフヒストリーの世界史的考察を通して、現代女性をめぐる諸状況を理解する。また各自が発見した今後の課題を自身のテーマとし、調査・分析の実践を積み重ね、その結果を報告する。		
授業の概要	まず、フィールドワークや聞き取りなど調査・研究の方法とその課題を確認する。その後、具体的事例を通して現代女性をめぐる現状と問題を明らかにする。活発なディスカッションによって各自の問題意識を明確にし、日本、アジア、欧米諸国の女性の生き方を考察し、各自の調査対象や研究目標を決定する。後半では、調査研究の報告と議論を重ねて検証を深め、その成果を口頭発表及びレポートにまとめる。		
授業 計画	第1回	ライフヒストリーとは何か	
	第2回	調査・研究の方法：現状と課題	
	第3回	事例研究（1）文献・資料を中心に	
	第4回	事例研究（2）聞き取り・フィールドワークを中心に	
	第5回	事例研究（3）映像資料を中心に	
	第6回	調査・研究課題の設定（1）グループディスカッション	
	第7回	調査・研究課題の設定（2）全体報告	
	第8回	調査・研究課題の設定（3）方法の検討	
	第9回	各自の課題と研究計画の発表	
	第10回	調査・研究の経過報告（1）グループ①	
	第11回	調査・研究の経過報告（2）グループ②	
	第12回	調査・研究の経過報告（3）グループ①	
	第13回	調査・研究の経過報告（4）グループ②	
	第14回	調査・研究の完成報告会	
	第15回	まとめ：問題の所在とその歴史的意義について	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する記述シートに講義の概要とテキストの要点等をまとめ、次回の授業で提出すること。		
テキスト	テキストを配布する		
参考文献	法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』（御茶の水書房、2009年）など、随時紹介する。		
評価方法	記述シート:30% 調査・研究報告:30% レポート:40%		

現代女性特別演習 A		前期 2 単位	1・2・3年
ライフヒストリー探究 ～自覚的に生きるために～		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	自分自身や家族、そして他者など身近な生活の中に存在している諸問題を自覚的に捉え直すための授業である。戦前の女性をめぐる状況（家制度、公娼制度、女工、炭坑労働など）、戦後の民主化、さらに現在の様々なライフヒストリーの世界史的考察を通して、現代女性をめぐる諸状況を理解する。また各自が発見した今後の課題を自身のテーマとし、調査・分析の実践を積み重ね、その結果を報告する。		
授業の概要	まず、フィールドワークや聞き取りなど調査・研究の方法とその課題を確認する。その後、具体的事例を通して現代女性をめぐる現状と問題を明らかにする。活発なディスカッションによって各自の問題意識を明確にし、日本、アジア、欧米諸国の女性の生き方を考察し、各自の調査対象や研究目標を決定する。後半では、調査研究の報告と議論を重ねて検証を深め、その成果を口頭発表及びレポートにまとめる。		
授業 計画	第1回	ライフヒストリーとは何か	
	第2回	調査・研究の方法：現状と課題	
	第3回	事例研究（1）文献・資料を中心に	
	第4回	事例研究（2）聞き取り・フィールドワークを中心に	
	第5回	事例研究（3）映像資料を中心に	
	第6回	調査・研究課題の設定（1）グループディスカッション	
	第7回	調査・研究課題の設定（2）全体報告	
	第8回	調査・研究課題の設定（3）方法の検討	
	第9回	各自の課題と研究計画の発表	
	第10回	調査・研究の経過報告（1）グループ①	
	第11回	調査・研究の経過報告（2）グループ②	
	第12回	調査・研究の経過報告（3）グループ①	
	第13回	調査・研究の経過報告（4）グループ②	
	第14回	調査・研究の完成報告会	
	第15回	まとめ：問題の所在とその歴史的意義について	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する記述シートに講義の概要とテキストの要点等をまとめ、次回の授業で提出すること。		
テキスト	テキストを配布する		
参考文献	法政大学大原社会問題研究所編『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』（御茶の水書房、2009年）など、随時紹介する。		
評価方法	記述シート:30% 調査・研究報告:30% レポート:40%		

共生論A		前期 2 単位	1・2・3年
共生ケア論		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	我々が「共に生きる」生活・社会を豊かに形成していく基盤として、「ケア」の姿勢と関わりは不可欠である。本講義では第一に、ケアとはどのようなものであるのかを学ぶ。第二に、ケアが共生をどのように生み出すのかについて学ぶ。そして第三に、自らの他者への向き合い方を「共生とケア」という観点から問い直し、深く考えることを目標とする。		
授業の概要	まず身近な家庭や地域という観点から「障がい者と共生」「認知症高齢者とケア」を、そしてグローバル社会という観点から「世界の子どもたちと共生」を課題とする。これらを切り口にして、映像等を用いつつ、授業では「共生とは?」「ケアとは?」という問いを常に投げかけ、皆さんの「共生」観「ケア」観を深めていってもらう。		
授業計画	第1回	はじめに：共生とは？	
	第2回	＜障がい者と共生＞ 障がい者の観点到立つこと	
	第3回	ノーマライゼーション、バリアフリー	
	第4回	障がい者との共生とは？	
	第5回	＜世界の子どもたちと共生＞ バングラデシュの子どもたち	
	第6回	貧困の現場	
	第7回	構造的暴力と平和	
	第8回	私たちは何をすべき？何ができる？	
	第9回	＜認知症高齢者とケア＞ 認知症とは？	
	第10回	認知症ケアの問題点は？	
	第11回	ケアの理想と現実	
	第12回	寄り添うケアの試み	
	第13回	本人に寄り添うことの難しさ	
	第14回	寄り添うケアは可能か	
	第15回	まとめ：共生ケアの視座がどれだけ深められたか	
準備学習 (予習・復習等)	前回の授業で扱った事柄に基づき、「共生とは何か」「ケアとは何か」について、自分なりに考えたことをまとめて、次の授業に臨むこと。これが復習であり、予習となる。なお、同様の問いに対する各自の考えを、授業後、何度か小レポートとして提出してもらう予定。		
テキスト	指定しない。		
参考文献	河見誠『現代社会と法原理』（成文堂） その他、適宜指示する。		
評価方法	期末レポート：80% 授業参加（提出物含）：20%		

共生論B		前期 2 単位	1・2・3年
平和的な共生の方法ートランセンド理論を手掛かりとして		竹内 久顕 (たけうち ひさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・コンフリクト（対立・紛争）の態様・原因を理解する。 ・トランセンド理論について理解する。 ・トランセンド理論を活用してコンフリクトを解決する方法を習得する。 ・トランセンド理論を活用して共生する方法と展望を探求する。 		
授業の概要	<p>私たちは、日常生活から国家・民族間にいたる様々なレベルで、コンフリクト（対立・紛争）を経験しながらも、多様な人々と共生する道を模索して生きています。その際のキーワードは「非暴力」です。どうすれば、コンフリクトに直面した者同士が、暴力を用いずに平和的に共生できるのでしょうか。そのための方法・指針の一つが「トランセンド」という理論です。だれもが平和的に共生できる社会をつくる方法を、「トランセンド」理論から学んでいきましょう</p>		
授業計画	第1回	「平和」の意味ー平和学入門	
	第2回	コンフリクトと平和・共生	
	第3回	コンフリクトの解決方法 1ー桃太郎に学ぶ	
	第4回	コンフリクトの解決方法 2ー桃次郎に学ぶ * 『桃次郎の冒険』（劇団四季ミュージカル）視聴	
	第5回	コンフリクトの解決方法 3ーアートの方法に学ぶ * 『The Pearl of Africa』（カズン）視聴	
	第6回	コンフリクトの解決方法 4ーカウンセリングの技法に学ぶ * アニメ『ジョニー&パーシー』視聴	
	第7回	コンフリクトの解決方法 5ートランセンドに学ぶ	
	第8回	トランセンドの基礎理論	
	第9回	トランセンド演習ーマイクロレベル * アニメ『Happyになる5つの方法』視聴	
	第10回	トランセンド演習ーメゾレベル 1（利害対立に気付く） * アニメ『鬼退治をしたくない桃太郎』視聴	
	第11回	トランセンド演習ーメゾレベル 2（偏見に気付く）	
	第12回	トランセンド演習ーメガレベル	
	第13回	平和的なたたかひの方法 * 『リーガル・ハイ』（フジテレビ）視聴	
	第14回	日本国憲法の平和主義	
	第15回	まとめートランセンドと平和・共生	
準備学習 (予習・復習等)	次回までに調べておく事項や読んでおくプリントを、各回の授業時に指示するので、それらの課題に取り組むこと。		
テキスト	指定しない		
参考文献	竹内久顕編『平和教育を問い直す』（法律文化社）/ヨハン・ガルトウング『ガルトウング紛争解決学入門』（法律文化社）/平和教育7メーションプロジェクト『みんながHappyになる方法ー関係をよくする3つの理論』（平和文化）/井上孝代『あの人と和解するー仲直りの心理学』（集英社）		
評価方法	期末レポート:40% 授業中の提出課題:60%		

手話 I		前期 2 単位	1・2年 2 学科共通
日本手話を学ぶ		松尾 美幸 (まつお みゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>手話は、皆さんが日ごろ話している日本語とは異なる体系を持った言語です。 手話は「日本語を手の動きに置き換えた記号」ではなく、むしろ英語などの外国語のようなもの。 手話は、文法的な動きをもつ顔の表情や視線などで発せられたメッセージを目（視覚）で受け取る「視覚言語」です。 目を使ってるう者とコミュニケーションできるようになる。</p>		
授業の概要	<p>{ナチュラル・アプローチの基本原則} いくつかある原則の中でも、特に重要な二つをあげておきます。 1、先生は手話だけで授業をすすめます。日本語の話し言葉による説明はしません。 2、先生は学生に手話の文を話すことをあまり強制しません。大切なのは手話で話されることを「理解する」ことです。</p>		
授業計画	第1回	講義 (手話とは)	
	第2回	自己紹介 (名前 色 数字)	
	第3回	自己紹介 (自分の家族)	
	第4回	自己紹介 (出身地 現住所)	
	第5回	自己紹介の会話-1 (今までの学んだ範囲)	
	第6回	自己紹介 (職業 学生)	
	第7回	略歴 カレンダー	
	第8回	タイムテーブル-1 (朝の過ごし方)	
	第9回	タイムテーブル-2 (一日の過ごし方)	
	第10回	通学 (通学方法 電車 バス 自転車など)	
	第11回	自己紹介の会話-2 (今までの学んだ範囲)	
	第12回	スポーツ (部活動など)	
	第13回	旅行 (修学旅行 旅行)	
	第14回	食習慣 (ご飯 パンなど)	
	第15回	今までの復習	
準備学習 (予習・復習等)	学んだ語彙を復習して覚えておくこと		
テキスト	特になし		
参考文献	「はじめての手話」 (木村晴美・市田康弘共著、日本文芸社、定価1200円)		
評価方法	試験:40% レポート:40% 出席:20%		

共生の言語 I		前期 2 単位	1・2・3年
日本手話を学ぶ		松尾 美幸 (まつお みゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>手話は、皆さんが日ごろ話している日本語とは異なる体系を持った言語です。 手話は「日本語を手の動きに置き換えた記号」ではなく、むしろ英語などの外国語のようなもの。 手話は、文法的な動きをもつ顔の表情や視線などで発せられたメッセージを目（視覚）で受け取る「視覚言語」です。 目を使ってるう者とコミュニケーションできるようになる。</p>		
授業の概要	<p>{ナチュラル・アプローチの基本原則} いくつかある原則の中でも、特に重要な二つをあげておきます。 1、先生は手話だけで授業をすすめます。日本語の話し言葉による説明はしません。 2、先生は学生に手話の文を話すことをあまり強制しません。大切なのは手話で話されることを「理解する」ことです。</p>		
授業計画	第1回	講義 (手話とは)	
	第2回	自己紹介 (名前 色 数字)	
	第3回	自己紹介 (自分の家族)	
	第4回	自己紹介 (出身地 現住所)	
	第5回	自己紹介の会話-1 (今までの学んだ範囲)	
	第6回	自己紹介 (職業 学生)	
	第7回	略歴 カレンダー	
	第8回	タイムテーブル-1 (朝の過ごし方)	
	第9回	タイムテーブル-2 (一日の過ごし方)	
	第10回	通学 (通学方法 電車 バス 自転車など)	
	第11回	自己紹介の会話-2 (今までの学んだ範囲)	
	第12回	スポーツ (部活動など)	
	第13回	旅行 (修学旅行 旅行)	
	第14回	食習慣 (ご飯 パンなど)	
	第15回	今までの復習	
準備学習 (予習・復習等)	学んだ語彙を復習して覚えておくこと		
テキスト	特になし		
参考文献	「はじめての手話」 (木村晴美・市田康弘共著、日本文芸社、定価1200円)		
評価方法	試験:40% レポート:40% 出席:20%		

手話Ⅱ		後期 2 単位	1・2年 2学科共通
日本手話を学ぶⅡ		伊藤 美緒 (いとう みお)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>手話は、皆さんが日ごろ話している日本語とは異なる体系を持った言語です。 手話は「日本語を手の動きに置き換えた記号」ではなく、むしろ英語などの外国語のようなもの。 手話は、文法的な動きをもつ顔の表情や視線などで発せられたメッセージを目（視覚）で受け取る「視覚言語」です。 目を使ってるう者とコミュニケーションできるようになる。</p>		
授業の概要	<p>{ナチュラル・アプローチの基本原則} いくつかある原則の中でも、特に重要な二つをあげておきます。 1、先生は手話だけで授業をすすめます。日本語の話し言葉による説明はしません。 2、先生は学生に手話の文を話すことをあまり強制しません。大切なのは手話で話されることを「理解する」ことです。</p>		
授業計画	第1回	前期の復習（自己紹介）	
	第2回	夏休みの過ごし方	
	第3回	趣味	
	第4回	買い物	
	第5回	会話ー1（今まで学んだ範囲）	
	第6回	休日の過ごし方	
	第7回	ペット	
	第8回	勉強	
	第9回	会話ー2（今まで学んだ範囲）	
	第10回	クリスマスについて	
	第11回	お正月について	
	第12回	冬休みの過ごし方	
	第13回	バイト	
	第14回	総復習	
	第15回	試験	
準備学習 (予習・復習等)	学んだ語彙を復習して覚えておくこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	「はじめての手話」（木村晴美・市田康弘共著、日本文芸社 定価1200円）		
評価方法	試験:40% レポート:40% 出席:20%		

共生の言語Ⅱ		後期 2 単位	1・2・3年
日本手話を学ぶⅡ		伊藤 美緒 (いとう みお)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>手話は、皆さんが日ごろ話している日本語とは異なる体系を持った言語です。 手話は「日本語を手の動きに置き換えた記号」ではなく、むしろ英語などの外国語のようなもの。 手話は、文法的な動きをもつ顔の表情や視線などで発せられたメッセージを目（視覚）で受け取る「視覚言語」です。 目を使ってるう者とコミュニケーションできるようになる。</p>		
授業の概要	<p>{ナチュラル・アプローチの基本原則} いくつかある原則の中でも、特に重要な二つをあげておきます。 1、先生は手話だけで授業をすすめます。日本語の話し言葉による説明はしません。 2、先生は学生に手話の文を話すことをあまり強制しません。大切なのは手話で話されることを「理解する」ことです。</p>		
授業計画	第1回	前期の復習（自己紹介）	
	第2回	夏休みの過ごし方	
	第3回	趣味	
	第4回	買い物	
	第5回	会話ー1（今まで学んだ範囲）	
	第6回	休日の過ごし方	
	第7回	ペット	
	第8回	勉強	
	第9回	会話ー2（今まで学んだ範囲）	
	第10回	クリスマスについて	
	第11回	お正月について	
	第12回	冬休みの過ごし方	
	第13回	バイト	
	第14回	総復習	
	第15回	試験	
準備学習 (予習・復習等)	学んだ語彙を復習して覚えておくこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	「はじめての手話」（木村晴美・市田康弘共著、日本文芸社 定価1200円）		
評価方法	試験:40% レポート:40% 出席:20%		

共生の文学		前期 2 単位	1・2・3年
他者と共に生きるためには何が必要か？現代アメリカ女性文学を通じて考える。		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標及びテーマ	①日本の狭い常識を異化し、自明視してきた自己像や世界観を批判的に見直すための「鏡」として、外国文学の魅力を理解する。②真に他者と共生するために、人種民族・国籍・階級・性別等の狭量で単一のカテゴリーに閉じこもる本質主義的アイデンティティ観を脱し、未知や異質との接触を成長の糧にできるしなやかで耐性に富む生き方を理解する。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・メールリポート講評 ・キーワード解説 ・テキスト読解と自由討議 		
授業計画	第1回	イントロ：〈判断〉と〈理解〉～映画鑑賞	
	第2回	『ヘルプ』1～3章、キーワード集Ⅰ＆Ⅱの概説（事実≠認識、異化・相対化）	
	第3回	4～6章、キーワード集Ⅰより講義と自由討議（同化主義）	
	第4回	7～10章、キーワード集Ⅰより講義と自由討議（イデオロギー、ヘゲモニー）	
	第5回	11～14章、キーワード集Ⅰより講義と自由討議（腐った弱者、創られた伝統）	
	第6回	15～18章、小まとめ（本質主義vs構築主義）、中間レポート概要	
	第7回	社会と時代の背景、キーワード集Ⅱ導入（文化や社会制度内に構造化された差別・抑圧・暴力）	
	第8回	19～22章、キーワード集Ⅱより講義と自由討議（複眼思考、周縁から境域へ）	
	第9回	23～26章、キーワード集Ⅱより講義と自由討議（批判精神、自己政治化、リテラシー）	
	第10回	27～28章、キーワード集Ⅱより講義と自由討議（等価交換からギフト交換へ、ホスピタリティ=歓待の精神とは？）	
	第11回	29～33章、キーワード集Ⅱより講義と自由討議（区別≠差別）	
	第12回	34章～訳者あとがき、キーワード集Ⅱより講義と自由討議	
	第13回	キーワード集Ⅰ＆Ⅱのまとめ	
	第14回	資料紹介、期末レポート概要	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習：指定された箇所を直線と波線をつけて事前に読んでおく 2. 復習：メールリポート 前回までの授業内容に関連する質問・コメント・事例紹介などを200字前後で自由記述 		
テキスト	キャスリン・ステケット『ヘルプ』（上巻・下巻）集英社文庫、他配布プリント		
参考文献	鴻上尚史『「空気」と「世間」』講談社現代新書 他授業で紹介		
評価方法	中間レポート:30% 期末レポート:30% メールリポート:20% 自由討議参加度:20%		

共生の倫理		後期 2 単位	1・2・3年
いのちの法と倫理		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代は、技術発展により数多くの選択肢を我々に提供してくれる一方、逆にどのような選択をすればよいのか見えにくくなっている時代でもある。この授業は、特に「いのち」にまつわる医療に焦点を当てて、我々の選択が自らを生かすと共に他者をも生かす「共に生きる」選択となるための「共生の倫理」を身につけることを目標とする。		
授業の概要	人工生殖、人間のクローン、人工妊娠中絶、ガン告知等に関する法的規制と倫理的課題を取り上げる。その中で、親子・夫婦関係を貫く原理、子産みの人格的意味について考える。そして患者・家族と医療者・社会の関わりも取り上げ、共に生きる人間関係について自分の課題として考えていく。皆さんに質問を投げかけ、応答しながら展開する授業となる。		
授業 計画	第1回	はじめに：自律した個人と、共に生きる家族・社会	
	第2回	代理出産と家族	
	第3回	代理出産をどう考えるか	
	第4回	代理出産と正義・ケア・いのちの尊厳	
	第5回	人工生殖の法と倫理	
	第6回	生殖の人格的意味と家族関係	
	第7回	人間のクローニング：技術はどこまで進んでいるか	
	第8回	人間のクローニングが問いかける家族関係の在り方	
	第9回	人工妊娠中絶：プロチョイスとプロライフ	
	第10回	中絶の法的規制とその倫理的根拠	
	第11回	選別中絶について考える	
	第12回	中絶からみた家族と国家、家族の権利、女性の権利	
	第13回	医療現場における家族と患者	
	第14回	患者を支える家族、看護、医療、社会	
	第15回	「共に生きる」家族・社会。そして私はどう生きる？	
準備学習 (予習・復習等)	各テーマを扱う前に、皆さんに「あなたならどう考えるか」を問う質問を提示する。次の授業までに考えて授業に臨むこと(順番を決めて割り振りし、全学生に少なくとも一回は小レポートを提出してもらう。提出が当たっていない学生も、自分の答えをまとめてくること)。授業後は、自分の答えが授業を通してどのように変化したかをまとめること。		
テキスト	葛生・河見・伊佐『新・いのちの法と倫理』（法律文化社）		
参考文献	指定しない。		
評価方法	期末試験：80% 授業参加（提出物含）：20%		

宗教と平和		後期 2 単位	1・2・3年
宗教と平和		豊川 慎（とよかわ しん）	
授業の到達目標 及びテーマ	時に「宗教」は戦争や争い、憎しみの連鎖の原因に挙げられます。しかし、はたして「宗教」は「平和」と相容れないものなのでしょうか。本授業ではキリスト教の平和思想に焦点を合わせながら、ユダヤ教、イスラム教、仏教などの世界宗教との比較を通じて、各宗教伝統における平和思想を深く理解するとともに、現代社会における宗教と平和の諸問題を様々な事例を通して理解することを学修目標とします。		
授業の概要	パワーポイントやDVD映像などを用いつつ、講義を中心とする授業を下記の授業計画に沿って進めていきます。宗教がもたらす負の側面と同時に、宗教が平和構築の原動力となり得る要件の探究、そして諸宗教の平和的共存を保障する社会の形成という21世紀のグローバルな平和学の課題を共に考えたいと思います。（聖書の時代から17世紀までのキリスト教史における平和思想に関心のある方は「キリスト教学ⅡB」（キリスト教と平和）を合わせて受講されたい）		
授業計画	第1回	イントロダクション—世界の諸宗教と平和学の課題	
	第2回	ユダヤ教における戦争と平和	
	第3回	キリスト教における戦争と平和	
	第4回	イスラム教における戦争と平和	
	第5回	日本におけるキリスト教と仏教の平和思想の比較	
	第6回	日本におけるキリスト教の平和思想—内村鑑三、新渡戸稲造、河井道を中心に	
	第7回	核兵器廃絶とキリスト教—アメリカの宗教事情と平和	
	第8回	赦しと和解の宗教思想(1)—クワイ河捕虜収容所の事例から	
	第9回	赦しと和解の宗教思想(2)—戦争罪責と歴史認識	
	第10回	ガンディーの非暴力の平和思想	
	第11回	キング牧師の愛と非暴力の平和思想—人権の実現としての平和	
	第12回	ヒンドゥー社会とマザー・テレサの平和思想—女性の権利擁護と人間の尊厳	
	第13回	ユダヤ・パレスチナ問題から考える宗教と平和	
	第14回	「白バラ運動」から考える平和と抵抗思想	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業毎に紹介する参考文献や配布資料をもとに各自授業内容を復習してください。		
テキスト	テキストは用いません。講義レジメを毎回配布します。		
参考文献	関西学院大学キリスト教と文化研究センター（編）『キリスト教平和学辞典』（教文館、2009年）。その他の参考文献については授業毎に指示します。		
評価方法	リアクションペーパー：40% レポート：60%		

政治と共生		後期 2 単位	1・2・3年
共生への政治的合意形成に向けて		松本 高明（まつもと たかあき）	
授業の到達目標及びテーマ	本講座は、「基礎知識を充実」と「政治的自我を確立」を目標とし、来るべき共生社会へ参画していくために必要な政治意識の確立と実践力の基礎を養ってもらう予定である。そのために（１）政治の原理と民主主義制度、（２）現代日本政治の成り立ちと課題、（３）地域社会の諸変動と地方自治について理解する。		
授業の概要	原論では、政治が身近で誰でも関わっているものであることを理解し、政治参加と民主主義制度、および有権者の政治行動を考える。また政治史では、政治史を学ぶことで日本政治の持つ特質を理解する。さらに地方自治論で、中央集権の下で整備された地方自治体について基礎を知り、現代における社会変動に対応するために必要な思考を養う。		
授業計画	第1回	原論（１）政治とは何か？	
	第2回	原論（２）正当性とリーダーシップ	
	第3回	原論（３）市民社会と政治意識	
	第4回	原論（４）民主主義を支える政治制度	
	第5回	原論（５）選挙制度と政治心理	
	第6回	政治史（１）中央集権制と地方自治体の整備	
	第7回	政治史（２）55年体制と中央地方関係	
	第8回	地方自治論（１）現代地方自治体制度	
	第9回	地方自治論（２）地方自治体と財政	
	第10回	地方自治論（３）新しい中央地方関係への胎動	
	第11回	社会変動と地方自治（１）少子高齢化と地域社会	
	第12回	社会変動と地方自治（２）交通網整備と自治体	
	第13回	社会変動と地方自治（３）労働力移動と地域自治	
	第14回	社会変動と地方自治（４）災害と地域の復興	
	第15回	社会変動と地方自治（５）政治的合意形成に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の講義への準備として次の二項目を作業してもらう。1. テキストの指定項目を読み、講義の基礎となる知識を得る。2. 新聞などを利用し、指定の書式に従って国際情勢をまとめる。さらに数回に一度、講義後に示したテーマについて調査し、レポートをまとめる。		
テキスト	北山俊哉他著『はじめて出会う政治学 構造改革の向こうに』有斐閣アルマ また必要に応じてプリントにて配布。		
参考文献	高島通敏著「政治学への道案内」三一書房 山口道昭編著「[入門]地方自治第1次改訂版」学陽書房		
評価方法	課題:60% まとめレポート:30% 講義への参加度:10%		

共生の国際政治学		前期 2 単位	1・2年 2 学科共通
共生という視点から国際政治を見る目を鍛える		松本 高明 (まつもと たかあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	「自分の常識を疑い、各々が持つ異なった価値観とそれを超えて追求される普遍的な価値についてヒントを得る」ことが目標である。具体的には、1. 毎回の講義準備及び復習課題を通じて、継続的に国際社会観察への目を養っていくとともに、講義にて実証と理論化を行う。2. 国際社会の構成主体とその行動原理を知る。3. 東アジア諸国と日本の関わりについて、その同行を知る。4. 国際的紛争の初携帯とその解決について知ることを目指している。		
授業の概要	現代国際社会は主体の多様化や相互依存の進化により、より共生を志向する観点を必要とするようになってきた。そこで個人として国際政治を見る目を涵養するため、以下の方針で進めていく。1. 日本と全く異なる社会秩序を持つ地域を知る。2. その地域を調べるとともに、日本との関わりについて知る。3. その中で日本における行為主体とその活動分野を知る。4. それらの持つ限界と国家体系の関係を知る。5. 国家体系の形成と仕組みを、東アジア地域に例を求めて学ぶ。6. 日本を取り巻く国際問題について、具体例を通じて学ぶ。		
授業計画	第1回	導入 国際政治の場としての国際社会 国際社会という空間、構成員、特質	text: 1-4, 24, 25
	第2回	構成する主体の実際を知る (1) 地理・歴史・社会制度から	text: 1-25, 26 3-5
	第3回	構成する主体の実際を知る (2) 近代化と途上国の持つ課題	text: 1-16, 3-6, 4-12
	第4回	非国家主体とその広がり (1) NGOの成果と課題	text: 6-3, 4, 10
	第5回	非国家主体とその広がり (2) 「非政府」と「非国家」	text: 6-22, 23, 24
	第6回	相互依存とグローバル化 (1) 富の不均衡と経済のグローバル化	text: 4-5, 11, 14, 15
	第7回	相互依存とグローバル化 (2) 国際機関と地域主義への動き	text: 3-7, 4-21, 24, 25, 26 6-12
	第8回	なぜ国境は存在する? 現代中国の国家建設 (1) 中国共産党主導による国家建設	text: 2-6, 13, 14, 21, 3-20
	第9回	なぜ国境は存在する? 現代中国の国家建設 (2) 国民の創出と近代化への模索	text: 3-21, 22, 23, 26
	第10回	なぜ国境は存在する? 現代中国の国家建設 (3) 大国化と勃興するナショナリズム	text: 5-1, 10, 6-16, 17, 18
	第11回	海洋から見た国際社会 東アジア地域という最前線	text: 4-11, 5-16, 17, 20, 21
	第12回	国民国家という主体と外交 均質な国民と硬い殻 (国境)	text: 1-3, 5, 10, 23
	第13回	Powerとは国家だけのものか? 民衆から国家へ	text: 6-11, 14, 21
	第14回	transnationalからglobalへ 地域や世界規模でのガバナンス	text: 5-9, 6-1, 2, 9
	第15回	まとめ 共生実現への国際政治とは	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の講義への準備として次の二項目を作業してもらおう。1. テキストの指定項目を読み、講義の基礎となる知識を得る。2. 新聞などを利用し、指定の書式に従って国際情勢をまとめる。さらに数回に一度、講義後に示したテーマについて調査し、レポートをまとめる。		
テキスト	田中明彦・中西寛編「新・国際政治経済の基礎知識 [新版]」有斐閣ブックス		
参考文献	高原明生・服部龍二編著「日中関係史 1972-2012 I 政治、II 経済、III 文化」東京大学出版会 岡部達味著「国際政治の分析枠組み」東京大学出版会 美根慶樹編著「グローバル化・変革主体・NGO 世界におけるNGOの行動と理論」新評論社		
評価方法	課題:50% まとめレポート:40% 講義への参加度:10%		

国際社会と共生		前期 2 単位	1・2・3年
共生という視点から国際政治を見る目を鍛える		松本 高明（まつもと たかあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	「自分の常識を疑い、各々が持つ異なった価値観とそれを超えて追求される普遍的な価値についてヒントを得る」ことが目標である。具体的には、1. 毎回の講義準備及び復習課題を通じて、継続的に国際社会観察への目を養っていくとともに、講義にて実証と理論化を行う。2. 国際社会の構成主体とその行動原理を知る。3. 東アジア諸国と日本の関わりについて、その同行を知る。4. 国際的紛争の初携帯とその解決について知ることを目指している。		
授業の概要	現代国際社会は主体の多様化や相互依存の進化により、より共生を志向する観点を必要とするようになってきた。そこで個人として国際政治を見る目を涵養するため、以下の方針で進めていく。1. 日本と全く異なる社会秩序を持つ地域を知る。2. その地域を調べるとともに、日本との関わりについて知る。3. その中で日本における行為主体とその活動分野を知る。4. それらの持つ限界と国家体系の関係を知る。5. 国家体系の形成と仕組みを、東アジア地域に例を求めて学ぶ。6. 日本を取り巻く国際問題について、具体例を通じて学ぶ。		
授業計画	第1回	導入 国際政治の場としての国際社会 国際社会という空間、構成員、特質	text: 1-4, 24, 25
	第2回	構成する主体の実際を知る（1） 地理・歴史・社会制度から	text: 1-25, 26 3-5
	第3回	構成する主体の実際を知る（2） 近代化と途上国の持つ課題	text: 1-16, 3-6, 4-12
	第4回	非国家主体とその広がり（1） NGOの成果と課題	text: 6-3, 4, 10
	第5回	非国家主体とその広がり（2） 「非政府」と「非国家」	text: 6-22, 23, 24
	第6回	相互依存とグローバル化（1） 富の不均衡と経済のグローバル化	text: 4-5, 11, 14, 15
	第7回	相互依存とグローバル化（2） 国際機関と地域主義への動き	text: 3-7, 4-21, 24, 25, 26 6-12
	第8回	なぜ国境は存在する？ 現代中国の国家建設（1） 中国共産党主導による国家建設	text: 2-6, 13, 14, 21, 3-20
	第9回	なぜ国境は存在する？ 現代中国の国家建設（2） 国民の創出と近代化への模索	text: 3-21, 22, 23, 26
	第10回	なぜ国境は存在する？ 現代中国の国家建設（3） 大国化と勃興するナショナリズム	text: 5-1, 10, 6-16, 17, 18
	第11回	海洋から見た国際社会 東アジア地域という最前線	text: 4-11, 5-16, 17, 20, 21
	第12回	国民国家という主体と外交 均質な国民と硬い殻（国境）	text: 1-3, 5, 10, 23
	第13回	Powerとは国家だけのものか？ 民衆から国家へ	text: 6-11, 14, 21
	第14回	transnationalからglobalへ 地域や世界規模でのガバナンス	text: 5-9, 6-1, 2, 9
	第15回	まとめ 共生実現への国際政治とは	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の講義への準備として次の二項目を作業してもらおう。1. テキストの指定項目を読み、講義の基礎となる知識を得る。2. 新聞などを利用し、指定の書式に従って国際情勢をまとめる。さらに数回に一度、講義後に示したテーマについて調査し、レポートをまとめる。		
テキスト	田中明彦・中西寛編「新・国際政治経済の基礎知識 [新版]」有斐閣ブックス		
参考文献	高原明生・服部龍二編著「日中関係史 1972-2012 I 政治、II 経済、III 文化」東京大学出版会 岡部達味著「国際政治の分析枠組み」東京大学出版会 美根慶樹編著「グローバル化・変革主体・NGO 世界におけるNGOの行動と理論」新評論社		
評価方法	課題:50% まとめレポート:40% 講義への参加度:10%		

共生生活の経済		前期 2 単位	1・2・3年
平和をもたらす「豊かさ」と「共生生活の経済」		石戸 充 (いしど みつる)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>情報通信技術の発展により、新しいグローバル経済の時代が到来しています。これは、地球の裏側にいる「隣人」との緊密な共生関係が必要となっていることを意味します。自然との共生、多文化共生、成熟社会での共生、など、現場に即したテーマから平和に生きる経済について学びます。</p> <p>到達目標は、文献や資料から学び、考えること、感じること、表現すること</p>		
授業の概要	<p>授業では資料を提示して学びます。 問いかけ学ぶこと 各回ごとのテーマについて、考える、表現することを重視します。 毎回自由な意見交換をしますので、積極的に講義に参加してください。</p>		
授業 計画	第1回	導入 共生生活の経済 視点と関心	
	第2回	現代のグローバル市場経済の課題 ～市場経済と新自由主義	
	第3回	世界の諸地域と豊かさ 経済尺度と多様性	
	第4回	途上国経済の課題とBOPビジネス	
	第5回	経済発展と通貨 信用創造の行方	
	第6回	世界各国の経済社会基盤 失業と対応	
	第7回	日本経済の概況と経済環境	
	第8回	世界各国の経済環境と労働力率曲線	
	第9回	世界各国の社会保障制度と労働環境	
	第10回	生活者の視点と経済の視点	
	第11回	共生生活とは何か グローバル経済社会での共生	
	第12回	共生生活とは何か 平和と正義の関係	
	第13回	共生と自由 センの視点から	
	第14回	共生と正義 ロールズの視点から	
	第15回	共生と平和 共に生きる多分化共生	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習として、新聞やニュースなど経済と共生に関する関心を持ち、問いかける姿勢を養っておくこと。 復習として、配付資料の読み直し 関連事項を 調べたりまとめたり、考えたりすること 自主レポートの提出も歓迎します</p>		
テキスト	『平和と国際情報通信』（早稲田大学出版）加納貞彦・本間勝・石戸充編著）		
参考文献	東條隆進著『よい社会とは何か』（成文堂）		
評価方法	平常点と発言:30% 課題・レポート:30% 試験:40%		

生態学 A		前期 2 単位	1・2・3年
生態系を理解し、その一員としての人間について生態学的認識を深める		高坂 宏一（たかさか こういち）	
授業の到達目標 及びテーマ	生態系がひとつのシステム（系）であること、さまざまな生物種が相互に依存していること、それぞれの生物種は環境の制約を受けることなどを具体的に学び、生態系の構造と機能を理解する。また、生態系の一員である人間について生態学的理解を深めると同時に、人間が生態系に及ぼした影響について人類史的視点から理解する。		
授業の概要	食物連鎖などを取上げ、生態系の構造と機能を明らかにする。あわせて生物濃縮など食物連鎖に関連して生じた問題を取り上げ、人間の諸活動が生態系に及ぼした影響を環境問題として把握する。同時にそうした問題を引起すに到った人間の特性を進化的に概観する。また生態学の基本事項であるポピュレーション（個体群、人口）について講じる。インドネシアやボリビアなどでの現地調査の映像を使用する。		
授業 計画	第1回	序論	
	第2回	生態系とは	
	第3回	生態系の構造と機能	
	第4回	自然生態系と人間化された生態系	
	第5回	食物連鎖と生物濃縮	
	第6回	環境問題と健康問題	
	第7回	生態系におけるヒトの特異性	
	第8回	人類の起源をめぐって	
	第9回	人類の進化と多様化	
	第10回	人間の生存様式の推移とその生態系への影響	
	第11回	個体群の生態学	
	第12回	個体群の成長	
	第13回	個体群の抑制	
	第14回	人口（ヒト個体群）の推移—過去・現在・将来	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	環境問題など生態学に関連する事項や諸問題に関心を持つ。また、毎回の授業後にその内容を理解しているかを確認し、理解が不十分であれば次回の授業時に質問するか自分で調べる。		
テキスト	大塚柳太郎他『人類生態学』東京大学出版会。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	試験：70% 平常点：30%		

生態学B		後期 2 単位	1・2・3年
人間の生態学的理解をめざし、人類史を踏まえ適応・文化・人口を考える		高坂 宏一（たかさか こういち）	
授業の到達目標及びテーマ	人間が世界中に暮らしているのは移動・拡散し、さまざまな異なる地域環境にそれぞれ適応することができた結果であることを踏まえ、文化をもつ生物である人間の適応について生態学的視点から理解する。それは人間の適応には生物学的適応と文化的適応があること、適応を考える上で環境や人びとの生活様式を知ることが極めて重要であることを理解することでもある。		
授業の概要	世界のさまざまな環境に暮らす人間は、他の生物と同様にそれぞれの暮らす環境に生物学的に適応すると同時に、文化を適応の手段とすることについて考える。前半は主に生物学的適応を取り上げ、後半はポリビア・アンデス高地の環境と人々とその暮らしを具体例として紹介しながら、特に彼らの食物加工や育児様式を取り上げて、その文化的適応の意味を講じる。ポリビアなどでの現地調査の映像を使用する。		
授業計画	第1回	序論：適応と人間の生態学について	
	第2回	環境と適応	
	第3回	生物学的適応について（その1）	
	第4回	生物学的適応について（その2）	
	第5回	生物学的適応のメカニズム	
	第6回	文化的適応について	
	第7回	世界の農耕文化	
	第8回	アンデス高地の自然環境	
	第9回	アンデス高地の人と暮らし	
	第10回	アンデス高地の農耕とジャガイモ加工	
	第11回	アンデス高地におけるジャガイモ加工の適応的意味	
	第12回	アンデス高地の育児様式（スウォドリング）	
	第13回	スウォドリングを文化的適応の視点から考える	
	第14回	育児と人口再生産	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	私たちの現在は長い過去の産物であること、世界にはさまざまな環境のもとでさまざまな生活を営んでいるさまざまな人がいることに思いを馳せる。また、毎回の授業後にその内容を理解しているかを確認し、理解が不十分であれば次回の授業時に質問するか自分で調べる。		
テキスト	大塚柳太郎他『人類生態学』東京大学出版会。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	試験：70% 平常点：30%		

環境と共生		後期 2 単位	1・2・3年
環境問題を通して、社会との関わりを考え、国際的な日本の位置付けも考察する。		牧 昌次郎（まき しょうじろう）	
授業の到達目標及びテーマ	1. 環境保護を意識するあまり、現状を否定しがちである。なぜ、科学技術を発展させたのか、その視点も含めた思考力を養う。2. 化石燃料を利用しない社会は、健康弱者に厳しい状況となることを理解し、他者への配慮を確かな知識で説明できるような思考力を養う。3. 環境問題を考えることで、社会へ貢献する意識を再認識する。		
授業の概要	テキストに沿って、ポイントをチェックし、解説を加える形式で授業を進めます。授業の最後に、環境問題に関わる視点をパワーポイントで紹介するので、異なった視点や考え方・思考方法を学んでください。単に知識の暗記や記憶を勉強と考えている方には不向きな授業です。科学政策にも触れますので、総合力をつけたい方には絶好の内容と考えます。		
授業計画	第1回	概要説明と総論 環境問題の概要の理解	
	第2回	持続可能な社会をめざして1 20世紀の環境問題	
	第3回	持続可能な社会をめざして2 自然とどう向き合うか	
	第4回	地球の自然環境と生物1 地球の資源について考える	
	第5回	地球の自然環境と生物2 水について考える	
	第6回	地球の自然環境と生物3 物質循環について考える	
	第7回	地球規模の環境問題1 環境問題と国際社会を考える	
	第8回	地球規模の環境問題2 酸性雨と大気汚染を考える	
	第9回	地球規模の環境問題3 その他の環境問題を考える	
	第10回	水と食と環境1 飲料水と環境を考える	
	第11回	水と食と環境2 食品の安全性を考える	
	第12回	水と食と環境3 これからの方向性を考える	
	第13回	住まいと環境1 住まいと化学物質	
	第14回	住まいと環境2 室内空気を汚染する化学物質	
	第15回	住まいと環境3 住環境と化学物質の総合的理解	
準備学習 (予習・復習等)	事前に授業予定の テキストの箇所を読んで、疑問点や考察ポイントを考えておくこと。		
テキスト	暮らしと環境科学（日本化学会編：東京化学同人）		
参考文献	台所からの地球環境（環境総合研究所）		
評価方法	テスト：70% レポート（課題）：30%		

共生社会実習A（2014年度以降入学者用）	後期集中 2 単位	1・2年 2 学科共通
共働学舎での実習を通して「共生」について考える	菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
<p><授業の到達目標およびテーマ> 共生社会実習は、「共に生きる」ためのエトスを実際に体得するための実習である。共生社会実習Aは、「自然」との共生の体験的理解とともに、「自然」「共生」という概念について再考することを目標とする。</p> <p><授業の概要> 「信州共働学舎」における実習（9月4日～10日を予定）を中核にして、事前学習、事後のふりかえり学習によって構成する。「信州共働学舎」は長野県にある、いろいろなハンディをもつ人びとが自給自足の生活を指しながら、ともに働き、ともに生きるコミュニティである。共働学舎の人たちと農作業や生活をともにすることを通して、自然とともに、他者とともに生きることにについて考える。</p> <p><授業計画> 1) 事前学習（5月～7月：4、5回） ・自然との共生とは（自然と人間、いのちをいただくということ） ・共生とは（他者とともに生きるということ） ・「共働学舎」について ・実習に行くにあたって *事前学習の一環として、5月に行われる信州共働学舎代表宮嶋信氏の講演に参加する予定 2) 実習（9月上旬：6泊7日） 3) 事後学習（9月後半から10月：1、2回） ・ふりかえり</p> <p><準備学習> 事前学習の前に「共働学舎の構想」（履修者に配布）を読んでおくこと。</p> <p><テキスト> 授業内で適宜紹介する。</p> <p><参考文献> 授業内で適宜紹介する。</p> <p><注意事項> ・事前学習にすべて参加することが実習参加の条件となること。 ・体力に自信があること。 ・実習にあたっては別途費用が必要であること。 ・「共生論A」「共生論B」「共生の倫理」「環境と共生」のいずれかを履修していることが望ましい。 ・人数制限科目であること。 ・日時や内容の詳細、登録の仕方については、年度初頭行事における説明・配付資料によって確認のこと。</p> <p><評価方法> 実習への参加度合い（事前・事後学習、報告書作成等を含む）：70% レポート：30%</p>		

共生社会実習A（2013年度以前入学者用）	後期集中 1 単位	1・2・3年
共働学舎での実習を通して「共生」について考える	菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
<p><授業の到達目標およびテーマ> 共生社会実習は、「共に生きる」ためのエトスを実際に体得するための実習である。共生社会実習Aは、「自然」との共生の体験的理解とともに、「自然」「共生」という概念について再考することを目標とする。</p> <p><授業の概要> 「信州共働学舎」における実習（9月4日～10日を予定）を中核にして、事前学習、事後のふりかえり学習によって構成する。「信州共働学舎」は長野県にある、いろいろなハンディをもつ人びとが自給自足の生活を目指しながら、ともに働き、ともに生きるコミュニティである。共働学舎の人たちと農作業や生活をともにすることを通して、自然とともに、他者とともに生きることにについて考える。</p> <p><授業計画> 1) 事前学習（5月～7月：4、5回） ・自然との共生とは（自然と人間、いのちをいただくということ） ・共生とは（他者とともに生きるということ） ・「共働学舎」について ・実習に行くにあたって *事前学習の一環として、5月に行われる信州共働学舎代表宮嶋信氏の講演に参加する予定 2) 実習（9月上旬：6泊7日） 3) 事後学習（9月後半から10月：1、2回） ・ふりかえり</p> <p><準備学習> 事前学習の前に「共働学舎の構想」（履修者に配布）を読んでおくこと。</p> <p><テキスト> 授業内で適宜紹介する。</p> <p><参考文献> 授業内で適宜紹介する。</p> <p><注意事項> ・事前学習にすべて参加することが実習参加の条件となること。 ・体力に自信があること。 ・実習にあたっては別途費用が必要であること。 ・「共生論A」「共生論B」「共生の倫理」「環境と共生」のいずれかを履修していることが望ましい。 ・人数制限科目であること。 ・日時や内容の詳細、登録の仕方については、年度初頭行事における説明・配付資料によって確認のこと。</p> <p><評価方法> 実習への参加度合い（事前・事後学習、報告書作成等を含む）：70% レポート：30%</p>		

共生社会実習B	後期集中 1 単位	1・2・3年 2学科共通
ワークキャンプを通して共生を考える	河見 誠 (かわみ まこと)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 共生社会実習は、「共に生きる」ためのエトスを実際に体得するための実習である。共生社会実習Bは、「アジア・アフリカとの共生」の体験的理解を目標とする。</p> <p><授業の概要> SCF（学生キリスト教友愛会）が企画するアジア学院ワーク・キャンプ参加（8月中旬から9月上旬のうち3泊4日の予定。農作業、研修学生との交流等。）を中核にして、事前学習、事後の振り返り学習によって構成される。アジア学院は、アジア・アフリカから若者を研修学生として招いて草の根の「農村指導者」を養成している栃木県那須郡にあるキリスト教NGO学校である。</p> <p><準備学習（予習、復習等）> アジア・アフリカ、有機農業、当該NGOについてよく調べてワークに臨むこと。ワーク中は体験したことを毎日記録し、「共に生きる」という観点から学んだことをまとめること。</p> <p><テキスト> 指定しない。</p> <p><参考文献> 指定しない。</p> <p><注意事項> a) 指定されたワーク・キャンプへの申し込みと、履修登録は別個である。ツアー申し込みはSCFに対して直接行うが、それによって自動的に履修登録されるわけではないことに留意すること。 b) ワーク・キャンプへの申し込み、及び履修登録の時期は、学期途中である（いずれも5－7月の間の指定された期間となる予定）。この点も、他の授業とは異なるので、各自、ポータル、掲示等で確認すること。 c) 履修登録人数は、当該ワーク・キャンプ参加可能人数に伴い、限定される。 d) 諸般の事情により、当該ワーク・キャンプが中止となる場合がある。その場合にはこの授業も閉講となる。 e) その他、詳細は履修指導時に説明する。</p> <p><評価基準> 実習への参加度合い(事前・事後学習・報告書作成等を含む) 50% レポート 50%</p>		

共生社会実習C	後期集中 1 単位	1・2・3年
国際協力への理解を通して共生を考える	趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】 共生社会実習は「共に生きる」ためのエートスを実際に体得するための実習である。共生社会実習Cは、「グローバル社会での共生」の体験的理解を目標とする。国際的な知見を養うとともに、自らが出来ることを参加者同士で議論しながら課題解決能力を身につけることを目指す。</p> <p>【授業の概要】 Cは国際理解教育に携わっている組織による3日間程度のワークショップへの参加を実習内容とする。今回、対象となるプログラムは、国際協力塾等を展開しているNPOのGLMiによる「国際協力プランナー入門～今日からあなたも国際協力プランナー」（9月中旬【夏期休暇期間内】に、本学内にて開催予定）である。</p> <p><プログラム例> 1日目 ○イントロダクション ○ワークショップ「おいしいチョコレートの真実」 ○プロジェクト企画会議「なぜ学校に行けない子どもたちがいるのだろう」-問題解決の糸口を探る ○国際協力の取り組み-NPO編-：ゲストスピーカーによる講義 2日目 ○講義「ようこそ国際協力の世界へ」 ○プロジェクト企画会議-アクションプラン作成 ○国際協力の取り組み-国際機関編-：国連機関の見学 ○国際協力の取り組み-フェアトレードショップ編-：ショップの訪問 3日目 ○プロジェクト企画会議-アクションプラン完成 ○ゲストスピーカー（在日アフリカ人）による講義 ○発表会</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 7月下旬にオリエンテーションを行なう。そこで提示されたテーマについて、プログラムが始まる前に調べて「事前学習シート」にまとめる。 授業終了後にレポートを提出すること。また9月下旬に事後学習として振り返りを行なう。</p> <p>【注意事項】 ・この科目は人数制限科目となる。 ・日時や内容の詳細、登録の仕方については、年度初頭行事における説明・配付資料によって確認のこと。</p> <p>【テキスト】 プリントを配布する。</p> <p>【参考文献】 授業中に紹介する。</p> <p>【評価方法】 実習への参加度合い（事前・事後学習を含む）：40% レポート：60%</p>		

共生社会実習D (1)	後期集中 2 単位	1・2・3年
アジアのスタディ・ツアーを通して共生を考える	河見 誠 (かわみ まこと)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 共生社会実習は、「共に生きる」ためのエートスを実際に体得するための実習である。共生社会実習Dは、「アジアとの共生」の体験的理解を目標とする。</p> <p><授業の概要> 国際NGO等が企画する国外スタディ・ツアー参加を中核にして、事前学習、事後の振り返り学習によって構成される。 D (1) の対象となるスタディ・ツアーは、ACEF (アジアキリスト教教育基金) 主催・夏期バングラデシュ・スタディ・ツアー (8月に2週間程度。寺子屋小学校訪問等) である。</p> <p><準備学習 (予習、復習等) > 訪問国、当該NGOについてよく調べてツアーに臨むこと。ツアー中は体験したことを毎日記録し、「共に生きる」という観点から学んだことをまとめること。</p> <p><テキスト> 指定しない。</p> <p><参考文献> 指定しない。</p> <p><注意事項> a) 指定されたスタディ・ツアーへの申し込みと、履修登録は別個である。ツアー申し込みはACEFに対して直接行うが、それによって自動的に履修登録されるわけではないことに留意すること。 b) スタディ・ツアーへの申し込み、及び履修登録の時期は、学期途中である (いずれも5-6月の間の指定された期間となる予定)。この点も、他の授業とは異なるので、各自、ポータル、掲示等で確認すること。 c) なお、対象となるスタディ・ツアーは本学の特別奨学金給付対象となる可能性があるが、その奨学金応募についても、学生自身が別途行うことになる。 d) 履修登録人数は、当該スタディ・ツアー参加可能人数に伴い、限定される。 e) 諸般の事情により、当該スタディ・ツアーが中止となる場合がある。その場合にはこの授業も閉講となる。 f) D (1) とD (2) をともに履修することはできない。 g) その他、詳細は履修指導時に説明する。</p> <p><評価基準> 実習への参加度合い (事前・事後学習・報告書作成等を含む) 50% レポート 50%</p>		

共生社会実習D (2)	後期集中 2 単位	1・2・3年
アジアのスタディ・ツアーを通して共生を考える	河見 誠 (かわみ まこと)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 共生社会実習は、「共に生きる」ためのエートスを実際に体得するための実習である。共生社会実習Dは、「アジアとの共生」の体験的理解を目標とする。</p> <p><授業の概要> 国際NGO等が企画する国外スタディ・ツアー参加を中核にして、事前学習、事後の振り返り学習によって構成される。 D (2)の対象となるスタディ・ツアーは、MAKE THE HEAVEN主催・冬期カンボジア・スタディ・ツアー (12月下旬に1週間程度。孤児院訪問等) である (別のツアーになる可能性もある。その場合、時期も変更となりうる)。</p> <p><準備学習 (予習、復習等) > 訪問国、当該NGOについてよく調べてツアーに臨むこと。ツアー中は体験したことを毎日記録し、「共に生きる」という観点から学んだことをまとめること。</p> <p><テキスト> 指定しない。</p> <p><参考文献> 指定しない。</p> <p><注意事項> a) 指定されたスタディ・ツアーへの申し込みと、履修登録は別個である。ツアー申し込みはMAKE THE HEAVEN (予定) に対して直接行うが、それによって自動的に履修登録されるわけではないことに留意すること。 b) スタディ・ツアーへの申し込み、及び履修登録の時期は、学期途中である (いずれも10-11月の間の指定された期間となる予定)。この点も、他の授業とは異なるので、各自、ポータル、掲示等で確認すること。 c) なお、対象となるスタディ・ツアーは本学の特別奨学金給付対象となる可能性があるが、その奨学金応募についても、学生自身が別途行うことになる。 d) 履修登録人数は、当該スタディ・ツアー参加可能人数に伴い、限定される。 e) 諸般の事情により、当該スタディ・ツアーが中止となる場合がある。その場合にはこの授業も閉講となる。 f) D (1) とD (2) をともに履修することはできない。 g) その他、詳細は履修指導時に説明する。</p> <p><評価基準> 実習への参加度合い (事前・事後学習・報告書作成等を含む) 50 % レポート 50 %</p>		

共生社会実習E	後期集中 1 単位	1・2年
子どものくらしについて考える	菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
<p><授業の到達目標およびテーマ></p> <p>子どもは”いま”を生きる存在である。子どもたちのくらしは彼らの”いま”が保障されるものでなければならない。ただ、現在の状況を改めてみると、子どもたちの”いま”が十分に保障されているかどうかかわからない、あるいは脅かされている現状が見えてくる。この授業では、乳児期から学齢期の子どもに焦点をあて、子どもたちの生活の場に自ら赴き、直接見たり聞いたりすることを通して、子どものくらしについて考えることを目的とする。</p> <p>子どもの生活の場は多岐にわたるが、この授業では正規（法制度に基づいた）の保育施設や教育機関以外の場所に注目する。認可外の施設や普段あまりなじみのない子どもたちの生活の場は、現状への違和感からできたもの、正規な保育・教育では扱いきれない子どもの生活を支えるものなどがあり、子どものくらしを考えるためのヒントがたくさんあると考えるからである。たとえば、「森のようちえん」は、園庭園舎がなく自然（森）のなかで保育を行う。森（自然）には、子どもが育つ上で大切な要素（運動、情緒、五感、創造性、社会性、集中力、健康など）があるという考えのもとデンマークで始まり、近年日本でも広まりつつある。</p> <p>授業では、まず、認可外の保育施設や学童保育など、認可の保育施設や教育機関以外に子どもたちが過ごす場所にはどのようなものがあるのかについて理解する。そのうえで、自分の居住する地域にどのような子どもの居場所があるかを調べ、実際にその場に身をおき体感することを通して理解を深める。</p> <p><授業の概要></p> <p>フィールドワークに赴くための準備として、4月と7月に授業を行う（月曜6限を予定している）。前期のうちに各自がフィールドに入るための準備を進め、7月までにフィールドワーク先を探し先方に連絡し日時などを決定する。フィールドワーク先の検討にあたっては個別相談をする。夏季休業中にフィールドワークを行い、後期に報告会を行う。</p> <p>互いのフィールドワークの体験を共有しながら、子どものくらしについて考えていく。可能であれば全員で学外施設の見学を行う。</p> <p>フィールドワークでは、どこに行き、何を見るか、交渉もふくめてすべて自分で調べて進めるため、受講者には積極的な参加を求める。フィールドで見たり聞いたりしたことをフィールドノーツにまとめ、期末レポートとともに提出する。</p> <p><授業計画></p> <p>1) フィールドを探するための準備 (4月13日、20日、27日を予定) オリエンテーション フィールドを探す：フィールドエントリーのしかた 子どもの居場所を知る（フリースクール、学童保育、自主保育、森のようちえん）</p> <p>2) フィールドワーク先を決める (5月～6月に個別相談を行う)</p> <p>3) フィールドに入るための準備 (6月29日、7月6日、13日を予定) フィールドワークの実際 フィールドノーツのまとめかた フィールドの去り方</p> <p>4) 報告会 (9月下旬を予定) まとめとふりかえり</p> <p><準備学習></p> <p>4月の事前準備の後、フィールド先を決めるにあたって、ブックレポートを提出する</p> <p><テキスト></p> <p>授業内で適宜プリントを配布</p> <p><参考文献></p> <p>授業内で適宜紹介する</p> <p><評価方法></p> <p>授業への参加度：40% フィールドノーツ：40% 期末レポート：20%</p>		

共生社会特別演習	春休集中 2 単位	1・2・3年
沖縄を学ぶ旅	輪島 達郎（わじま たつろう）	
<p>この科目は、学内で行われる4回のワークショップと、沖縄への3泊4日の研究旅行を組み合わせたものです。</p> <p>11月に参加者を公募し、12月から1月にかけて、5限終了後に3回のワークショップを行い、2月中旬に3泊4日の沖縄への研修旅行を行います。また、旅行終了後、2月中に1回のワークショップを行い、所定のレポートを提出します。</p> <p>おもな訪問先は、ひめゆり平和祈念資料館、平和の礎、首里城、海軍司令部壕跡、佐喜真美術館、国立療養所沖縄愛楽園（ハンセン病療養施設）、億首川マングローブ林、名護市辺野古地区、道の駅かでな、シムクガマ、チビチリガマ、です（前年度の例）。</p> <p>高校までの修学旅行や、観光旅行での訪問と異なり、事前に十分に学習を行い、訪問先ではさまざまな方にじっくり話をうかがい、質疑応答の時間をとって、それぞれの参加者の問題意識を深めていきます。</p> <p>沖縄は豊かな自然と文化と生活が息づく島である一方、いまなお続く日本による植民地的な支配、沖縄戦、米軍基地問題など、日本について考えるべき多くの問題を提起している場所です。沖縄について現地では対話しながら学ぶことによって、日本について、自己について、深く思索していく機会となります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すべてのプログラムに参加することが、単位取得の条件となります。 ・参加者には5万5千円前後の旅行費用を負担していただきます。 ・履修者数は12人に制限します。応募者が多数の場合は抽選します。 ・人数制限科目であるため、専攻科生は本科生の履修希望者が12人に満たなかった場合のみ履修することができます。 <p><準備学習> 普天間基地の移設問題など、沖縄の米軍基地問題について、新聞記事をよくチェックしておくことが求められます。</p> <p><評価基準> 平常点80% レポート20%</p>		

ヴィジュアルコミュニケーション基礎演習A		前期 2 単位	1・2・3年
造形表現の基礎である「造形の3要素（色彩、形、素材・質感）」を、講義と演習を通して学ぶ		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会で求められるコミュニケーション能力の中でも重要な視覚伝達力を高めるために、基礎演習Aでは、造形の3要素（色彩、形、素材・質感）について学ぶ。講義と演習により、デザイン・造形における基本を理解し、デザイン・造形表現の基礎力を身につけることを目的とする。また、プレゼンテーション力を高めることを目的として、最終講評会では、学生一人ずつ、全作品について各自の言葉で説明する機会を設ける。作品制作が個人だけのモノではなく、発信することで双方向に共有、コミュニケーションできるということを学ぶ。その他、短大ギャラリーでの学生作品展示により、学生が客観的に自他の作品を見ることが出来る機会を設ける。		
授業の概要	造形の3要素である「色彩、形、素材・質感」のそれぞれについて理解、習得できるよう課題を出す。講義は各テーマにそった様々な図版など例を示しながら解説し、テーマに合わせた課題演習を行う。導入のエスキース等で課題を理解できるように個別指導をする。課題制作終了後に、パワーポイントを用いた講義で関連する画像を見ることで、各自が取り組んだ課題を振り返るとともに、展開された幅広いデザイン・芸術の世界との関わりについて知識を深める。		
授業計画	第1回	講義と作図：ヴィジュアルコミュニケーションとは／造形の3要素とは／作図（B4ケントボード）	
	第2回	講義：色彩について／演習1：色相環とグレースケール（3原色の羊原毛の混色による色相環の作成と、白と黒の2色の羊原毛の混色によるグレースケール作成）	
	第3回	演習1：続き	
	第4回	演習1：続き、作品提出	
	第5回	演習2：色彩によるストライプ／色彩研究として、画集より好きな作品を選び、その美しい配色を色系を用いてストライプとして表現する。	
	第6回	演習2：続き	
	第7回	演習2：続き	
	第8回	演習2：作品提出／講義：形（点・線・面）について／演習3：点による構成課題説明／導入：スタンプングによる点のイメージ表現	
	第9回	演習3：B4ケントボードに作図（ルート2矩形）／点による構成のアイデア・チェック（個別指導）後、各自の作品制作に入る。	
	第10回	演習3：続き	
	第11回	演習3：作品提出／講義：素材・質感（テクスチャー）／演習4：フロッターージュによる質感表現コラージュ課題説明／フロッターージュによる素材集め／B4ケントボードに作図（黄金矩形）	
	第12回	演習4：集めたフロッターージュ素材で画面構成をし、矩形内に貼り込む。	
	第13回	演習4：続き、作品提出	
	第14回	パワーポイントによる講義	
	第15回	総合講評会：演習1～4／授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題は時間内に出来るよう設定しているが、作業が遅れた場合は必ず早めに授業時間外に実習室にて続きを行っておくこと。日常的に造形への関心を高めるために、図書館で画集などを見ることや、適宜、展覧会を紹介するので、展覧会場へ足を運び、実際の作品に多く触れ、造形センスを磨き、自分の取り組んでいる課題との関連を考えてみるように。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。作図縮小版（ルート2矩形、黄金矩形）、アイデア・スケッチ及びエスキース用紙などを課題に併せて配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題演習作品:50% レポート :20%		

ヴィジュアルコミュニケーション基礎演習B		前期 2 単位	1・2・3年
造形表現の基礎を講義と演習を通して学ぶ		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標及びテーマ	現代社会で求められるコミュニケーション能力の中でも重要な視覚伝達力を高めるために、基礎演習Bでは、造形の3要素(色彩、形体、素材・質感)について、特に「形体」に重点をおいて学ぶ。講義と演習(課題制作)を通して造形要素の基本を理解し、デザイン、造形表現の基礎力を身につけることを目標とする。		
授業の概要	3要素について、図版、画像を用いた講義を交え、演習としてテーマにそった課題制作(紙や色材を用いた抽象形体による平面構成)を行う。課題ごとの講評会で学生が自らの作品について発表し、教員と学生、また学生相互の意見交換を行う。		
授業計画	第1回	ガイダンス：ヴィジュアルコミュニケーションとは／講義：色彩について	
	第2回	演習：色彩<明暗対比・無彩色> グレートーンの色紙を用いて、明暗のバランスを考える色面構成を行なう。	
	第3回	演習：色彩<明暗対比・有彩色> 1 無彩色の構成に用いたグレーと同じ明度の有彩色の色紙を、色相のバランスを考えて選ぶ。	
	第4回	演習：色彩<明暗対比・有彩色> 2 無彩色の明度にそろえて有彩色を構成し、二つを並べて配置し比較する。	
	第5回	講評会：色彩<明暗対比> 講義：形体について	
	第6回	演習：形体<線による構成・直線と曲線> 1 (課題説明、エスキース) 直線または曲線のみで「動」「静」のイメージを表す。まず色鉛筆によるラフスケッチでイメージを固める。	
	第7回	演習：形体<線による構成・直線と曲線> 2 (制作) 色テープによる作品制作。	
	第8回	演習：形体<線による構成・直線と曲線> 3 (制作) 色テープによる作品制作(続き)。	
	第9回	講評会：形体<線>/演習：形体<面による構成・地と図> 1 (課題説明、エスキース) 白い円を黒い地にレイアウトすることで、地と図の関係を把握する。	
	第10回	演習：形体<面による構成・地と図> 2 (制作) 構図を決めて下描きを作成する。	
	第11回	演習：形体<面による構成・地と図> 3 (制作) 下描きを黒い紙に写し、白い円を貼って作品を完成させる。	
	第12回	講評会：形体<面による構成> 講義：素材・質感について	
	第13回	演習：素材・質感<コラージュ> 1 (課題説明、制作) 素材・質感を表す写真による視覚的な質感のコラージュ。	
	第14回	演習：素材・質感<コラージュ> 2 (制作) 切り抜いた写真を台紙に接着し、作品を完成させる。	
	第15回	講評会：素材・質感<コラージュ> まとめ	
準備学習(予習・復習等)	課題制作の進捗状況によっては、授業前に作品の構想を練るなどの準備や、課題の締切に間に合わせるための時間外制作が必要になる。また「演習：素材・質感<コラージュ>」においては、各自があらかじめ素材・質感を表す写真を集めて提出する。 課題ごとの講評会で制作に関するコメントを提出し、最後に授業での気づき、考えたことをレポートにまとめる。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:30% レポート:20% 課題作品:50%		

ヴィジュアルコミュニケーション基礎演習C		前期 2 単位	1・2・3年
造形表現の主に視覚効果と色彩計画について		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会で求められるコミュニケーション能力の中でも重要な視覚伝達力を高める。基礎演習Cでは、造形の3要素（色、形、素材・質感）のうち主に色彩について学ぶ。色彩のもつ基本的な視覚効果を理解し、身近な色彩計画に含まれる要素が指摘できるようになることを目標とする。		
授業の概要	色は隣り合う色によって見え方が変わるので、色紙を組み合わせさせてサンプルを作り、色彩の相互の影響を確認する。印象的で美しいデザインを制作する。色彩計画や視覚効果の身近な事例を観察する。		
授業計画	第1回	ガイダンス：ヴィジュアルコミュニケーションとは	
	第2回	色の3属性について 色彩効果のサンプル制作（1）：背景色の明度と主体色の見え方	
	第3回	色彩の組み合わせによって生じる効果 色彩効果のサンプル制作（2）：対比効果と同化作用	
	第4回	色彩効果のサンプル制作（3）：色彩の微調整	
	第5回	課題1：シンプルな形と色による構成	
	第6回	課題1：シンプルな形と色による構成（続き）	
	第7回	課題1：シンプルな形と色による構成（続き）	
	第8回	課題1：シンプルな形と色による構成（講評）	
	第9回	課題2：イメージに基づく視覚表現	
	第10回	課題2：イメージに基づく視覚表現（続き）	
	第11回	課題2：イメージに基づく視覚表現（続き）	
	第12回	課題2：イメージに基づく視覚表現（講評）	
	第13回	課題3：身近な色彩と形の比較観察：サンプルの収集と傾向の把握	
	第14回	課題3：身近な色彩と形の比較観察：個々のサンプルの比較	
	第15回	課題3：身近な色彩と形の比較観察：代表例の色を取り出して再現	
準備学習 (予習・復習等)	身近でさまざまなデザインに見られる色彩と形の用い方を、あるいは生活の場面で人が好む環境や対象などを注意深く見つめる日常観察が最も大切です。		
テキスト	テキスト：『デザインの色彩』（日本色研）		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 課題提出物:70%		

ヴァジュアルコミュニケーション演習A		後期 2 単位	1・2・3年
造形表現の基礎である「造形の3要素（色彩、形、素材・質感）」から、後期では主に「素材・質感」を中心に講義と演習を通して学び、さらに表現へと展開する。		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会で求められるコミュニケーション能力の中でも重要な視覚伝達力を高めるために、演習Aでは、基礎演習の応用として、色彩や形体との統合における「素材・質感」の視覚効果について学び、造形においてバランスのとれた力を養うことを目指す。講義による解説と応用演習課題を通して、デザイン・造形表現の幅を広げることを目的とする。また、プレゼンテーション力を高めることを目的として、最終講評会では、学生一人ずつ、全作品について各自の言葉で説明する機会を設ける。学生相互の意見交換をし、作品制作が個人だけのモノではなく、発信することで双方向に共有、コミュニケーションできるということを学ぶ。		
授業の概要	講義では参考となる芸術、デザインの作品を紹介し、「素材・質感」の効果がどのように用いられているかを学ぶ。演習では、色彩における質感の違いによる平面構成や、雑誌など印刷物を用いたコラージュにより視覚的テクスチャーを理解し、さらに素材の加工による質感表現など、造形表現への可能性を探る。授業後半でのパワーポイントによる様々な画像を通して、テクスチャーによる造形表現やデザインなどへの応用について、課題との関連を含めて理解を深める。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス／講義1：造形の3要素、素材・質感（テクスチャー）について／講義2：素材と色彩について／演習1：色と質感 「黒のコラージュ」課題導入：カラーチップ用A4ケント紙を分割、切り離れたカードを作成。	
	第2回	講義：美しいプロポーションについて／作図：黄金矩形（B4ケントボード）／「黒」のサンプル・カードを作成。黒の色彩、例えば、鉛筆、マジック、ボールペン、コンテ、墨、水彩絵具など、様々な黒色をカード1枚に1色塗る。	
	第3回	演習1のアイデア・スケッチ：画面分割のアイデアを練り、そのエスキースをもとにケントボードの作図内を鉛筆で分割し、各面の黒の色彩を選ぶ。準備ができ次第、1つの分割面に1色をなるべく平らに塗ること。	
	第4回	演習1：黒のコラージュ続き	
	第5回	演習1：続き	
	第6回	演習1：続き、寸評／提出（右下に氏名シールを貼り、タイトルなどを記入する）	
	第7回	講義：視覚的テクスチャーについて／演習2課題説明／作図：黄金矩形（B4ケントボード）／持参した印刷物から視覚的テクスチャーを感じる部分を切り出しながら、全体の構成を考える。	
	第8回	演習2：「視覚的テクスチャー」印刷物コラージュの続き（ペーパーセメントの使い方など、作業をスムーズにする方法について）	
	第9回	演習2：続き、提出／作品のモノクロコピーにより色に影響されない視覚的テクスチャーを確認した上で、作品と共に提出する。	
	第10回	講義：「触覚的テクスチャー」について／演習3課題説明／課題導入：3種類の糸（綿、麻、レーヨン）で、それぞれ質感の違いを工夫してケント紙に貼り、その中から任意の糸1種類を選びだす。	
	第11回	演習3：作図：ルート2矩形（B4ケントボード）／両面シートを同じ矩形サイズに切り、ケントボードの矩形に合わせて貼る。／エスキース用紙にどのようなデザインにするか、分割線を引き画面構成のアイデアを練る。	
	第12回	演習3：画面構成のエスキースをチェック（個別指導）後、ケントボードの両面シートの表紙を外し、エスキースに基づき、それぞれの選んだ糸を用い、矩形内に貼り込んでいく。	
	第13回	演習3：続き／提出	
	第14回	パワーポイントによる講義「テクスチャー」：課題を振り返りながら「素材・質感」の視覚的効果について再確認。	
	第15回	総合講評会：演習1～3（全3点）の講評会：学生によるプレゼンテーションと講評（1人ずつ）：演習3・作品提出／授業のまとめ	
準備学習 （予習・復習等）	課題は時間内に出来るよう設定しているが、作業が遅れた場合は必ず早めに授業時間外に実習室にて続きを行っておくこと。日常的に造形への関心を高めるために、図書館で画集などを見ることや、適宜、展覧会を紹介するので、展覧会場へ足を運び、実際の作品に多く触れ、造形センスを磨き、自分の取り組んでいる課題との関連を考えてみるように。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。作図縮小版（ルート2矩形、黄金矩形）、アイデア・スケッチ及びエスキース用紙などを課題に併せて配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。本学図書館の蔵書やAV資料などを紹介し参考にしてみよう。		
評価方法	平常点：30% 課題演習作品：50% レポート：20%		

ヴァジュアルコミュニケーション演習B		後期 2 単位	1・2・3年
造形要素の一つ「形体」について講義と演習を通して学び、さらに表現へと展開する		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標及びテーマ	現代社会で求められるコミュニケーション能力の中でも重要な視覚伝達力を高めるために、演習Bでは、基礎演習の応用として、色彩や素材・質感との統合による「形体」の視覚効果について学び、バランスのとれた造形力を養うことを目指す。講義による解説と応用演習課題を通して、デザイン・造形表現の幅を広げることを目標とする。		
授業の概要	まず基本となる幾何形体のモチーフを着彩で平面構成し、形体と色彩のバランスを学ぶ。次に四季をテーマとする色面構成でイメージの抽象化を経験する。さらに紙によるレリーフ制作で、素材の特質を形体に生かすことと光による視覚効果を学ぶ。課題ごとの講評会で学生が自らの作品について発表し、教員と学生、また学生相互の意見交換を行う。		
授業計画	第1回	ガイダンス／講義：形体について／演習：平面構成＜幾何形体の構成＞1（課題説明） 円・正三角形・正方形を1つずつ用いて色面構成し、形体と色彩のバランスを学ぶ。	
	第2回	演習：平面構成＜幾何形体の構成＞2（エスキース） 画面の中に3つの形をどう配置するか、案をラフスケッチし、色鉛筆で色彩プランを練る。	
	第3回	演習：平面構成＜幾何形体の構成＞3（下描き、着彩） 正確に作図し、アクリルガッシュによる平塗りで着彩する。	
	第4回	演習：平面構成＜幾何形体の構成＞4（着彩） 着彩し、作品を完成させる。	
	第5回	講評会：平面構成＜幾何形体の構成＞ 講義：抽象表現について	
	第6回	演習：平面構成＜四季のイメージ表現＞1（課題説明、エスキース） 四季の中から1つを選んで表現する。イメージの抽象化を学ぶ。	
	第7回	演習：平面構成＜四季のイメージ表現＞2（エスキース、下描き） 形、構図を考え、色鉛筆で色彩のイメージをつかむ。	
	第8回	演習：平面構成＜四季のイメージ表現＞3（下描き、着彩） エスキースを元に下描きし、アクリルガッシュによる平塗りで着彩する。	
	第9回	演習：平面構成＜四季のイメージ表現＞4（着彩） 着彩し、作品を完成させる。	
	第10回	講評会：平面構成＜四季のイメージ表現＞ 講義：空間の把握	
	第11回	演習：立体構成＜紙によるレリーフ＞1（課題説明、試作） 光の陰影の効果を考えたレリーフ制作。ケント紙の特質の理解、加工方法の練習。	
	第12回	演習：立体構成＜紙によるレリーフ＞2（試作） 造形効果を考えながら、表現手法を絞り込む。	
	第13回	演習：立体構成＜紙によるレリーフ＞3（試作、構成） 作品としてどう空間を構成するかを考える。	
	第14回	演習：立体構成＜紙によるレリーフ＞4（制作） 作品の制作、仕上げ。	
	第15回	講評会：立体構成＜紙によるレリーフ＞ まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題制作の進捗状況によっては、授業前に作品の構想を練るなどの準備や、課題の締切に間に合わせるための時間外制作が必要になる。 課題ごとの講評会で制作に関するコメントを提出し、最後に授業での気づき、考えたことをレポートにまとめる。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業の参加度:30% レポート:20% 課題作品:50%		

ヴィジュアルコミュニケーション演習C		後期 2 単位	1・2・3年
画面表示の視覚効果を用いたデザイン		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	演習Cでは、基礎演習の応用として、情報伝達や自己表現などコミュニケーションの手段としての視覚表現に発展させる。PCのPowerPointを用いてさまざまな視覚効果を調整しながら、目的を明確に伝える基本を把握することを目的とする。		
授業の概要	画像表示のデザインについて、いくつかの基本的な視覚効果を実際に作って確認する。遊びの要素を含んだ操作と表示の組み合わせをPCで編集する。		
授業計画	第1回	ガイダンス：ヴィジュアルコミュニケーションとは	
	第2回	目的に応じた基本的な視覚表現を紹介	
	第3回	色彩の対比効果と残像効果のサンプル制作	
	第4回	文字情報の配置と配色について試作と比較	
	第5回	図形パターンを組み合わせる実験	
	第6回	錯視の図形と補正のサンプル制作	
	第7回	課題1：図形パズルの制作	
	第8回	課題1：図形パズルの制作（講評）	
	第9回	フェードイン・フェードアウトの練習	
	第10回	動き・変化を用いる練習	
	第11回	動き・変化を用いる練習 続き	
	第12回	課題2：リンクを用いた視覚デザインの制作	
	第13回	課題2：リンクを用いた視覚デザインの制作（続き）	
	第14回	課題2：リンクを用いた視覚デザインの制作（続き）	
	第15回	課題2：リンクを用いた視覚デザインの制作（講評）	
準備学習 (予習・復習等)	電子メディアで優れた情報案内があれば、紹介から各部分に至るまでの連なり方（案内の選択肢や階層構造）を把握すること。 短時間に内容を知らせるニュースやマスメディアの紹介手順を把握すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 課題作品:70%		

造形特論A		前期 2 単位	1・2・3年
人間の多様な造形表現活動と出会い、人間と造形芸術について考察する		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標及びテーマ	コア科目・表現「ビジュアルコミュニケーション」及び「造形ワークショップ」における演習、作品制作を深める一助として、また多様な造形表現と出会うことで、人間と造形芸術、創造力と表現について理解を深め、自ら考察することを目的とする。		
授業の概要	創作の実作者の観点から興味深い美術家やデザイナー、作品などをとりあげ、画集やパワーポイントを用い、作品図版や関連画像、映像などを示しながら授業をすすめる。他に、学内の美術作品を探訪し鑑賞する。ビデオ、DVD鑑賞の他、関連する展覧会などがあれば随時紹介する。		
授業計画	第1回	イントロダクション、人間にとって表現とは／自己紹介	
	第2回	自己との対話：アール・ブリュットを取り上げる。アール・ブリュットの歴史を振り返り、制作者により作品の生まれる現場を映像により知る。DVD「日本のアウトサイダーアート」、他。	
	第3回	具象と抽象：何人かの画家、彫刻家の作品を例に、作品画像を見ながら、「具象」「抽象」について考える。	
	第4回	学内の美術作品探訪：短大の構内に設置された芸術作品のリストに沿って、作品を観て歩き、日常生活の中で美術とふれあう環境について考える。	
	第5回	形態と表現：「形」をキーワードにした作品画像のパワーポイントの他、プロポーションについての講義を行う。他に第6回の授業用「色彩についてのアンケート」を行う。	
	第6回	色彩と表現：色彩についてその基本的事項を講義後、パワーポイントを用いて造形作品を紹介する。第5回のアンケート集計結果。	
	第7回	素材と表現：様々な造形素材と形態の関係、表現について、作品画像を見ながら考える。	
	第8回	素材と表現：「布」という素材を表現に用いる”梱包の作家” クリストを取り上げる。ビデオ「クリスト-制作中」鑑賞。	
	第9回	自然との対話：人類は自然に学び様々な創造活動を行ってきたが、現代の多様な造形作品やアース・ワーク等まで、比較しながら考えていく。パワーポイントによる講義。	
	第10回	生活と芸術：「ファッション」というと身近で、「オートクチュール」というと縁遠く感じるかもしれない。DVD「サイン・チャンネル」の映像を通して、確かな手の仕事に裏付けられたモノづくりとファッションについて考える。	
	第11回	環境と芸術：画家フンデルトヴァッサーが提案した自然との共生世界、作品や建築を紹介する。（ppt講義、ビデオ鑑賞）	
	第12回	環境と芸術：イサム・ノグチ 彫刻から照明器具のデザイン、公園の設計まで、その幅広い造形活動をみる。	
	第13回	社会と芸術：アニメーション「Lost Things」鑑賞。制作者ショーン・タンのインタビュー映像もあわせて見ることで、作者が細部にどのような考えを込めて制作したかを知る。また絵本とアニメーションの違いについても考える。	
	第14回	ドキュメンタリー映画 DVD「ハーブ&ドロシー アートの森の小さな巨人」鑑賞：芸術家という発信者の立場ではなく、芸術の受け手について考えてみる。	
	第15回	授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	参考図書やAV資料などを授業で紹介するので、授業時間外に図書館などで画集や関連図書などを見たり、調べたりしてほしい。随時、関連またはお薦めの展覧会を紹介するので、本物にじかに触れる機会として、個別に展覧会鑑賞してほしい。		
テキスト	特に定めず、プリントを配布する。		
参考文献	基本的に図書館に所蔵する書籍とAV資料について、配付資料や授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:60% レポート :40%		

造形特論B		後期 2 単位	1・2・3年
色彩と形態の視覚効果を追究する		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>視覚的なコミュニケーションに欠かせない表現力を養うため、日常的なデザインから芸術表現に至るまで造形の視覚的な効果に関わる事例を取り上げて観察し考察していく。おもに色彩と形態についてどのように計画的にあるいは感覚的に用いているのかを探求し、私たちが快適な社会生活を送るための美意識、造形感覚を高めることを目標とする。</p> <p>造形表現は、時代やローカリティの中で感じられる範囲とそれらを超えた根源的な感覚の間で捉えることができ、日常性を多角的に感じられるようになることも目標とする。</p>		
授業の概要	<p>最初の数回はおもに色彩の客観的な把握方法と視覚感覚について学ぶ。</p> <p>中程からは、日常的に慣れ親しんだ対象から非日常的なものまで、視覚表現と視覚効果の要素を毎回限った中でいろいろな対象を見ながら造形の方針や効果をたどっていく。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	造形の3要素とその中の色彩について	
	第3回	光と色の性質	
	第4回	色彩の対比効果	
	第5回	色彩の同化作用	
	第6回	同系色の調和	
	第7回	反対色の調和	
	第8回	形への考察	
	第9回	色彩の連なり	
	第10回	シンボルマーク、ピクトグラフについて	
	第11回	絵画における表現	
	第12回	環境の表現	
	第13回	紋様の構造	
	第14回	形を味わう	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>私たちは日常的な対象をただ識別するのではなく、対象を味わう感覚を大切にしている。どのように認知し、何に対して感覚が働くのかという日常観察が重要である。</p>		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:70%		

造形特論C		後期 2 単位	1・2・3年
映像を読み解く力をつけて、映像表現の基礎的な知識を身につける。		濱崎 好治（はまさき こうじ）	
授業の到達目標 及びテーマ	映像を見ながら、時代及び社会的な背景と技法、主題、記録、表現、技法、作家性を考察する。映像を見て、批評的に読み解き、内容を分析する力を身につける。映像の表現方法、脚本、構成など、制作、演出するための基礎的な技法を理解できるようにする。		
授業の概要	映像とは何か、幅広いジャンルの映像を、毎回、授業で見えていきます。映像を多く見ると、カメラの動かし方、表現方法、構成などを理解できるようになります。ニュース、ドキュメンタリーの記録性、名作映画、'60年代の日本のCM、'90年代の海外のCM、アニメーションやビデオアートなどの、すぐれた表現が、どのようにつくられるか、その技法と演出を探りだします。		
授業計画	第1回	映像とは何か？ 絵画と写真の違い。映画とは何か。テレビとは何か。	
	第2回	写真の技法と写真の読み方	
	第3回	映画の誕生と動く映像の特性	
	第4回	ニュース映画と歴史的な出来事の記録性	
	第5回	映画の文法（カメラワーク）	
	第6回	映画の文法（フレームサイズ）	
	第7回	映画の文法（モンタージュ）	
	第8回	映画・テレビドラマの脚本	
	第9回	ドラマ・劇的な表現	
	第10回	テレビドキュメンタリーとテレビ的表現	
	第11回	CMの表現と説得の手法	
	第12回	日本のCM表現	
	第13回	海外CMの表現	
	第14回	アニメーションの表現と影響	
	第15回	映像の芸術性とネット動画	
準備学習 (予習・復習等)	これまで、写真、キャラクター、映画、テレビ番組、ゲーム、ネットは、どのくらい見てきたのか、列挙しておいて下さい。		
テキスト	特に指定はない。授業時間内に印刷物を配布する。		
参考文献	授業時間内に紹介する。		
評価方法	平常点:15% 質疑応答:20% レポート:65%		

造形ワークショップ I A		前期 1 単位	1・2・3年
繊維による表現として「織」の基礎技法を学び、制作を通して表現力を高め、人間の手の可能性を知る		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	1本の線である経糸と緯糸が交差することにより布という面を構成する「織」の基礎を学ぶことにより、生活空間から造形表現にまで及ぶ繊維造形世界の理解を深める。織の構造と素材や道具との関係を学び、自らの手を使い制作し表現することで、人間の根源的な喜びを知ると共に、繊維が何を発信し現代まで語りかけてきたかを考える。授業の中でトルコ絨毯、ペルシャ絨毯、インカ製の断片、遊牧民や少数民族、アフリカの染織品などを紹介し、世界の様々な地域の染織芸術の多様性の理解を深めてもらう。		
授業の概要	色系による絵織物表現・タピスリーの基礎技法（平面効果とレリーフ効果）を習得する。また色彩では中間混色となる色系のミックスによる色彩効果を学ぶ。課題制作を通して織の構造と制作工程、表現効果等を学ぶ。授業では講義、ビデオ鑑賞等により、繊維素材を用いた表現の可能性について理解を深める。		
授業計画	第1回	ガイダンス、織・繊維造形について／課題導入：木枠に経糸を張る。	
	第2回	タピスリー技法・平面効果（基礎技法1）：緯糸はウール 色系 2/5.5×3本どりを基準にする。ノトワイニング、織り出し、無地	
	第3回	平面効果（基礎技法2）：無地、横ストライプ、2色1本交互	
	第4回	平面効果（基礎技法3）：斜線、ヨコぼかし	
	第5回	平面効果（基礎技法4）：垂直線、スリット	
	第6回	平面効果（基礎技法5）：シングルインターロック	
	第7回	平面効果（基礎技法6）：段ぼかし（グラデーション表現）、曲線	
	第8回	平面効果（基礎技法7）：段ぼかし（グラデーション表現）、曲線	
	第9回	タピスリー技法・レリーフ効果（基礎技法1）：ノッティング	
	第10回	レリーフ効果（基礎技法2）：スマック	
	第11回	レリーフ効果（基礎技法3）：続き、無地	
	第12回	経糸始末	
	第13回	作品の仕上げ /完成	
	第14回	「貴婦人と一角獣」タピスリーについての映像鑑賞	
	第15回	講評会 /授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題は時間内に出来るよう設定しているが、作業が遅れた場合は必ず早めに授業時間外に実習室にて続きを行っておくこと。技法テキストに沿って解説するので必要なメモをとって理解を確実にすること。合わせて図書館の染織関係の書籍を読み理解を深め、手の仕事と創造力について考えること。		
テキスト	実寸下絵、技法プリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題作品:50% レポート :20%		

造形ワークショップ I B		前期 1 単位	1・2・3年
版を用いた造形表現 I		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	造形ワークショップBでは版画を中心とした作品制作を通して、表現力＝積極的に自ら発信する力を高めること、技法を理解し、表現にどう活かすかを考えて計画的に取り組む姿勢を身につけることを目標とする。偶然性、反転の意外性と版画の技法特徴から、造形表現の魅力を感じることがねらいである。		
授業の概要	身近な材料のコラージュを版にする「コラグラフ」を学ぶ。材料実験から版制作、同じ版の凸版刷りと凹版刷り、フロッタージュ制作など、様々な技法による表現を試みる。I、IIを重ねての履修も可とする。		
授業計画	第1回	ガイダンス／版画の技法、作品資料鑑賞 材料実験（テスト版）：版制作	
	第2回	材料実験（テスト版）：凸版刷り	
	第3回	材料実験（テスト版）：凹版刷り	
	第4回	作品1：エスキース、版制作	
	第5回	作品1：凸版刷り	
	第6回	作品1：凹版刷り	
	第7回	作品1：フロッタージュ	
	第8回	作品1：講評会／作品2：エスキース	
	第9回	作品2：版制作	
	第10回	作品2：凸版刷り1	
	第11回	作品2：凸版刷り2（バリエーション：2版刷りなど）	
	第12回	作品2：凹版刷り1	
	第13回	作品2：凹版刷り2（バリエーション：多色刷りなど）	
	第14回	作品2：フロッタージュ	
	第15回	作品2：講評会	
準備学習 (予習・復習等)	作品の構想を練るために、図書館などで絵画・版画の作品集などの資料を見たり、作品制作の進捗状況によっては、授業時間外にエスキースを描くなどの準備が必要になる。 最後に授業での気づき、考えたことをレポートにまとめる。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:20% 課題作品:50%		

造形ワークショップ I C		前期 1 単位	1・2・3年
写真を介した観察力と写真を用いた表現力を養う。		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・写真画像を比較観察することにより、テーマやそこに生じた特徴を感じ取り評価ができるようになる。 ・写真を撮影し、表現に結び付いた機材の操作を習得する。 ・撮影後の画像を編集・加工し、目的や意図の伝わりやすい表現力を養う。 		
授業の概要	<p>日常化している写真について、事例をもとに詳細な比較観察を促す。写真を通してものごとの価値観にも触れる。また、写真撮影の課題を数回行い、各自の作例を持ち寄って意見交換をする。PCを使った写真の編集方法もあわせて紹介する。I、IIを重ねての履修も可とし、その場合は制作の内容をさらに発展させることを課する。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション／写真の機能	
	第2回	お気に入り写真の紹介	
	第3回	写真の補正	
	第4回	写真のダイナミックレンジ	
	第5回	コントラストの高い写真	
	第6回	レンズの焦点距離と写り方	
	第7回	光の当たり方を意識した写真	
	第8回	光の当たり方を意識した写真（講評）	
	第9回	トリミングによる構図の調整	
	第10回	カットアンドペーストによる画像の編集加工	
	第11回	カットアンドペーストによる画像の編集加工（続き）	
	第12回	鮮明ではない画像での表現	
	第13回	多重露光による画像制作	
	第14回	多重露光による画像制作の続き	
	第15回	多重露光による作品発表	
準備学習 (予習・復習等)	新聞、雑誌、TVなど身近なメディアで目にする写真画像について、目的（狙い）とその表現方法を制作・編集する側になって観察すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 課題作品:70%		

造形ワークショップⅡ A		後期 1 単位	1・2・3年
繊維による表現として「織」の基礎技法を学び、制作を通して表現力を高め、人間の手の可能性を知る		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標及びテーマ	1本の線である経糸と緯糸が交差することにより布という面を構成する「織」の基礎を学ぶことにより、生活空間から造形表現にまで及ぶ繊維造形世界の理解を深める。織の構造と道具との関係を学び、自らの手を使い制作し表現することで、人間の根源的な喜びを知ると共に、繊維が何を発信し現代まで語りかけてきたかを考える。		
授業の概要	身近にある簡単な道具（割り箸、段ボール、定規など）を使って、羊の原毛から糸を手紡ぎし、その糸を用いて布を織る技術を習得する。色の原毛を自由に選び混色することで、オリジナルの色彩の糸を紡ぐことができる。課題制作を通して織の構造と制作工程、色彩表現効果等を学ぶ。授業では講義、参考資料等により、繊維素材を用いた様々な表現の可能性について理解を深める。		
授業計画	第1回	ガイダンス：織・繊維造形について／課題説明／糸を紡ぐ：デモンストレーション（割り箸、スピンドル、紡ぎ車）	
	第2回	講義：繊維から糸へ、糸から布へ／課題導入：各自がこれから制作するマフラー用の色のミックスを決める。（色原毛2～5種類を手でミックスして糸サンプルを作成）	
	第3回	原毛をハンドカーダーにかける／糸を紡ぐ（割り箸を利用した糸紡ぎ）	
	第4回	原毛から糸を紡ぐ／ドラムカーダーの使用法	
	第5回	続き	
	第6回	続き	
	第7回	紡ぎ糸の総上げ、撚り止め加工	
	第8回	製織準備（総の糸を玉に巻き、重さを量り記録する。）経糸：緯糸 = 6：4 に糸を分ける。	
	第9回	段ボール紙の簡易織機に経糸をかける。（重量の60%を経糸として使用）／糸綜絨をつけ、織り出す。	
	第10回	織りの続き	
	第11回	織りの続き	
	第12回	続き、織り上がり	
	第13回	経糸始末、房づくり、仕上げ（縮絨加工、起毛）	
	第14回	仕上げ／完成	
	第15回	講評会／授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題は時間内に出来るよう設定しているが、作業が遅れた場合は必ず早めに授業時間外に実習室にて続きを行っておくこと。合わせて図書館の染織関係の書籍を読み理解を深め、手の仕事と創造力について考えること。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題作品:50% レポート :20%		

造形ワークショップⅡB		後期 1 単位	1・2・3年
版を用いた造形表現Ⅱ		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	造形ワークショップBでは版画を中心とした作品制作を通して、表現力=積極的に自ら発信する力を高めること、技法を理解し、表現にどう活かすかを考えて計画的に取り組む姿勢を身につけることを目標とする。偶然性、反転の意外性など版画の技法特徴から、造形表現の魅力を感じることがねらいである。		
授業の概要	身近な材料のカラーズを版にする「コラグラフ」を学ぶ。材料実験から版制作、同じ版の凸版刷りと凹版刷り、フロッタージュ制作など、様々な技法による表現を試みる。Iと重ねて履修する者は「ドライポイント」技法を学ぶ。		
授業計画	第1回	ガイダンス／版画の技法、作品資料鑑賞 材料実験（テスト版）：版制作	
	第2回	材料実験（テスト版）：コラグラフ凸版刷り／ドライポイント試刷り、版制作続き	
	第3回	材料実験（テスト版）：コラグラフ凹版刷り／ドライポイント刷り	
	第4回	作品1：エスキース、版制作	
	第5回	作品1：コラグラフ凸版刷り／ドライポイント試刷り、版制作続き	
	第6回	作品1：コラグラフ凹版刷り／ドライポイント刷り1、版加筆	
	第7回	作品1：コラグラフフロッタージュ／ドライポイント刷り2	
	第8回	作品1：講評会／作品2：エスキース	
	第9回	作品2：版制作	
	第10回	作品2：コラグラフ凸版刷り1／ドライポイント試刷り1、版制作続き	
	第11回	作品2：コラグラフ凸版刷り2／ドライポイント試刷り2、版加筆	
	第12回	作品2：コラグラフ凹版刷り1／ドライポイント刷り1	
	第13回	作品2：コラグラフ凹版刷り2／ドライポイント刷り2	
	第14回	作品2：コラグラフフロッタージュ／ドライポイント刷り3	
	第15回	作品2：講評会	
準備学習 (予習・復習等)	作品の構想を練るために、図書館などで絵画・版画の作品集などの資料を見たり、作品制作の進捗状況によっては、授業時間外にエスキースを描くなどの準備が必要になる。 最後に授業での気づき、考えたことをレポートにまとめる。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:20% 課題作品:50%		

造形ワークショップⅡC		後期 1 単位	1・2・3年
写真を介した観察力と写真を用いた表現力を養う。		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・写真画像を比較観察することにより、テーマやそこに生じた特徴を感じ取り評価ができるようになる。 ・写真を撮影し、表現に結び付いた機材の操作を習得する。 ・撮影後の画像を編集・加工し、目的や意図の伝わりやすい表現力を養う。 		
授業の概要	<p>日常化している写真について、事例をもとに詳細な比較観察を促す。写真を通してものごとの価値観にも触れる。また、写真撮影の課題を数回行い、各自の作例を持ち寄って意見交換をする。PCを使った写真の編集方法もあわせて紹介する。Ⅰ、Ⅱを重ねての履修も可とし、その場合は制作の内容をさらに発展させることを課する。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション／写真をくわしく観る	
	第2回	お気に入りの写真	
	第3回	写真の階調を比較する	
	第4回	クイズ写真の準備	
	第5回	クイズ写真の制作	
	第6回	クイズ写真の発表	
	第7回	写真の合成	
	第8回	写真の合成（続き）	
	第9回	写真の合成（講評）	
	第10回	瞬間を意識させる写真の選択・調整	
	第11回	瞬間を意識させる写真の対象をさらに広げる	
	第12回	瞬間を意識させる写真の発表	
	第13回	組み写真の制作	
	第14回	組み写真の制作の続き	
	第15回	組み写真の発表と講評	
準備学習 (予習・復習等)	新聞、雑誌、TVなど身近なメディアで目にする写真画像について、目的（狙い）とその表現方法を制作・編集する側になって観察すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 課題作品:70%		

創作入門B		前期 2 単位	1・2・3年
小説を書くための方法を学ぶ		増田 みず子（ますだ みずこ）	
授業の到達目標及びテーマ	小説を書くための基礎力を養うことを目的とする。まず言葉と文字のなりたちを理解する。続いて小説文学の歴史的な流れを理解する。さらに、どんな人々がどんなテーマでどんなふうに関心を持って小説を書いたのかを会得する。その上で、学生一人ずつが自分の書きたいテーマと方法を発見する。		
授業の概要	講義を中心とする。近現代の日本の代表的な小説作品のいくつかを紹介する過程で、描写、説明、会話のための文章の書き方を練習する。またテーマと構成方法を会得する。各段階で課題作文を書き、添削と個人面談を繰り返すことによって、学生一人ずつが自身の個性を発揮できるように小説の概念を体得する。		
授業計画	第1回	小説の概念	
	第2回	文字と言葉	
	第3回	世界の小説	
	第4回	日本の小説	
	第5回	日本女性小説家の個性	
	第6回	小説の文章 ①描写文	
	第7回	小説の文章 ②描写文の創作	
	第8回	小説の文章 ③会話文	
	第9回	小説の文章 ④説明文	
	第10回	小説の種類と構造	
	第11回	小説のテーマ	
	第12回	小説の書き始め方	
	第13回	習作 ①書き始める	
	第14回	習作 ②展開	
	第15回	習作 ③書き終える	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後に講義の概要についてノートを整理し、次回の授業で確認すること。課題作文は返却後に推敲し、再提出すること。		
テキスト	特に定めない。授業内で指示、またはプリントを配布する。		
参考文献	必要に応じて指示する。		
評価方法	課題作品提出率:30% 課題作品評価:70%		

創作基礎演習B		後期 2 単位	1・2・3年
小説を書く		増田 みず子 (ますだ みずこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	小説を書く基礎力を養うことを目的とする。実際に小説作品を書き進めながら、より深い観察力、より豊かな想像力、力強い文章力を身につけてゆく。達成感を体得する。		
授業の概要	実作の個別学習が中心となる。自ら発見したテーマと方法をもとにオリジナルの小作作品の執筆に取り組み、完成をめざす。創作を進めながら、テーマのより深い探究と執筆技術の向上を体得する。		
授業計画	第1回	課題作文①テーマA	
	第2回	課題作文②テーマB	
	第3回	実作のための個人面談① テーマなど	
	第4回	実作のための個人面談② 人物設定など	
	第5回	実作の開始	
	第6回	実作と添削指導① 書き出しなど	
	第7回	実作と添削指導② 物語の運びなど	
	第8回	実作と添削指導③ 文章など	
	第9回	実作と添削指導④ 描写など	
	第10回	実作と添削指導⑤ 説明など	
	第11回	実作と添削指導⑥ 会話など	
	第12回	実作と添削指導⑦ まとめ方など	
	第13回	実作と添削指導⑧ 終わり方など	
	第14回	作品提出 著作権と個人情報	
	第15回	作品返却と個人面談	
準備学習 (予習・復習等)	授業後に執筆内容を検討し、次回までに推敲すること。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	必要に応じて指示する。		
評価方法	課題作品提出率:20% 作品評価:80%		

創作演習 I A		前期 2 単位	2・3年
童話・児童文学～ファンタジー・ラノベ・YA小説を書いて、創作の基礎を学ぶ		那須田 淳 (なすだ じゅん)	
授業の到達目標及びテーマ	広い意味で文学は、社会や人間を映し出す鏡でもあります。童話・児童文学～ミステリー・ファンタジー・ラノベ・YA小説、小説、エッセイなどを実際書きながら、創作を通じて、自分と向き合い、よりゆたかな心を培っていくことをめざしましょう。		
授業の概要	幅広いジャンルの作品に触れ、演習から創作法を学びつつ、ワークショップのプレゼンテーションや合評会を通じて、互いに意見や感想を交換し、自己表現としての創作の意味を考え、理解を深めるよう図っていきましょう。		
授業計画	第1回	創作ノート「物語の法則」1 空想と現実	
	第2回	創作ノート「物語の法則」2 物語の構造 起承転結の確認	
	第3回	創作ノート「物語の法則」3 着想 新聞記事を読んで物語のアイデアを得る。	
	第4回	創作ノート「物語の法則」4 テーマとキャラクター 新聞記事を読んで、作品のテーマをみつけ、キャラクターを掘り下げる。	
	第5回	新聞記事を使って合評会	
	第6回	演習として自分の物語の制作を始める(演習課題①) 物語の骨格(シノップス)を考え、テーマを決めてあらすじを書く。	
	第7回	物語の骨格(シノップス)とあらすじを発表し、合評し、修正する。	
	第8回	ワークショップ・ラジオ劇の脚本に挑戦① 物語の構築とキャラクターづくり、会話文を、ラジオ劇を通して学ぶ	
	第9回	ワークショップ・ラジオ劇の脚本に挑戦② グループで書いてみる。	
	第10回	ワークショップ・ラジオ劇の脚本に挑戦③ グループで書いてみる。	
	第11回	ワークショップのプレゼンテーション 物語の構築	
	第12回	ワークショップのラジオ劇のプレゼンテーション 会話表現について	
	第13回	合評会 演習課題① 創作した作品の読み合わせ	
	第14回	合評会 演習課題① 創作した作品の読み合わせ	
	第15回	合評会 演習課題① 創作した作品の読み合わせ	
準備学習(予習・復習等)	授業ごとに提示される課題に取り組み、提出すること。		
テキスト	とくに定めない。		
参考文献	自分の好きな作品を選ぶ。		
評価方法	授業への取り組み:40% ワークショップ:20% 課題の内容:40%		

創作演習 I B		前期 2 単位	2・3年
小説の書かれ方を学ぶ		増田 みず子 (ますだ みずこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	小説をくわしく読むことによって、ものの見方、感じ方、考え方を深めることができる。		
授業の概要	先人の小説作品を念入りに読みながら、作品と作者の個性とテーマ等を理解する。また1つのテーマを、各種の文体で書き分ける練習をくり返すことで、小説に必要な言葉と文章がどのようなものであるかを会得する。		
授業計画	第1回	小説の概念	
	第2回	大庭みな子作品を読む	
	第3回	河野多恵子作品を読む	
	第4回	高橋たか子作品を読む	
	第5回	文章を書く①日記	
	第6回	文章を書く②手紙	
	第7回	文章を書く③エッセイ	
	第8回	文章を書く④1人称小説	
	第9回	文章を書く⑤3人称小説	
	第10回	精密な文章を書く①「空」について詳述する	
	第11回	精密な文章を書く②「時間」について詳述する	
	第12回	精密な文章を書く③「化粧」について詳述する	
	第13回	小品創作①空	
	第14回	小品創作②時間	
	第15回	小品創作③化粧	
準備学習 (予習・復習等)	授業後に執筆内容を検討し、推敲して次の授業で提出すること。		
テキスト	特に定めない。図書館の本を利用する。		
参考文献	必要に応じて指示する。		
評価方法	課題作品提出率:50% 作品評価:50%		

創作演習Ⅱ A		後期 2 単位	2・3年
童話・児童文学～ファンタジー・ラノベ・YA小説・エッセイを書いて、創作の理解を深める		那須田 淳 (なすだ じゅん)	
授業の到達目標及びテーマ	童話・児童文学～ファンタジー・ラノベ・YA小説・エッセイに親しみながら、演習を通じて、童話～文学全般から社会へ興味を広げ、よりゆたかな心を培っていきましょう。		
授業の概要	童話・児童文学～ファンタジー・ラノベ・YA小説・小説・エッセイを書き、添削や合評会を通して作品を見直し、きちんと仕上げていく。その中で創作理論を学びつつ、自己を表現する意味を再確認していきましょう。		
授業計画	第1回	エッセイを読んで、書き方を学ぶ。自分の日常で感じたことを、一つのキーワードからエッセイとして書いてみる。	
	第2回	物語・小説を読んで、童話・児童文学～ファンタジー・ラノベ・YA小説・小説・エッセイの文体の違いについて考える。	
	第3回	物語・小説を読んで、ホラーとミステリー・サスペンスの物語構造を考える。	
	第4回	エッセイの発表 合評会	
	第5回	エッセイの発表 合評会	
	第6回	物語・児童文学～ファンタジー・ラノベ・YA小説～エッセイまで、好きなジャンルを選んで作品制作の準備。取材や下調べについても考える。	
	第7回	作品を書く 個人指導	
	第8回	作品を書く 個人指導	
	第9回	作品を書く 個人指導	
	第10回	第一回目の合評会	
	第11回	第一回目の合評会	
	第12回	作品の修正 個人指導	
	第13回	作品の修正 個人指導	
	第14回	第二回目の合評会	
	第15回	第二回目の合評会まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ各自、好きな童話～児童文学・ファンタジー・YA・ラノベ・小説やエッセイなどを選び、親しんでおくこと。		
テキスト	とくに定めない		
参考文献	とくに定めない		
評価方法	授業への取り組み:40% プレゼンテーション:20% 課題の内容:40%		

創作演習ⅡB		後期 2 単位	2・3年
小説作品を完成させる		増田 みず子 (ますだ みずこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	完成させることを目的に小説を書く努力をする。その過程で、判断力、忍耐力を養い、豊かな表現力を体得する。書きあげた満足感は想像以上の幸福です。		
授業の概要	実作の個別学習が中心となる。作品完成をめざし、執筆と添削指導及び個人面談をくり返す。自分の創作意欲を実感し、技術の向上と熱意の持続を体得する。		
授業計画	第1回	小説の書き方、実作へ向けての準備 テーマなど	
	第2回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談① 登場人物など	
	第3回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談② 背景など	
	第4回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談③ 文章など	
	第5回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談④ 物語の展開など	
	第6回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談⑤ 描写など	
	第7回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談⑥ 説明など	
	第8回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談⑦ 会話など	
	第9回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談⑧ 場面の盛りあげ方など	
	第10回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談⑨ 構造のことなど	
	第11回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談⑩ まとめ方など	
	第12回	実作に集中、適宜添削指導と個人面談⑪ 終わり方など	
	第13回	仕上げ。作品提出	
	第14回	著作権と個人情報保護法	
	第15回	作品返却・講評	
準備学習 (予習・復習等)	授業後に執筆内容を検討し、次の授業までに推敲すること		
テキスト	特に定めない		
参考文献	必要に応じて指示する		
評価方法	作品執筆の態度:20% 作品評価:80%		

創作特論A		前期 2 単位	1・2・3年
自己発見としての俳句入門		上野 一孝（うえの いっこう）	
授業の到達目標 及びテーマ	俳句の鑑賞を通じて日本文学の伝統の諸局面に触れることで、多様な感受性を身につけ、かつ、俳句の創作を通じて自然を観察し、自分自身を凝視することで自己開発を試み、かつ連中との交歓を通じて相互啓発に挑戦する。		
授業の概要	日々の生活に俳句の鑑賞や創作に取り組むことで、思索を深めて、感動を自覚して、新たな自己を発見する。また、句会を通じて互いに啓発する。		
授業計画	第1回	「俳句とは何か」について、複層的な視点から考察する。【講義】（前半）	
	第2回	「俳句とは何か」について、複層的な視点から考察する。【講義】（後半）	
	第3回	春の季語を詠んだ俳句作品の鑑賞。【演習】（前半）	
	第4回	春の季語を詠んだ俳句作品の鑑賞。【演習】（後半）	
	第5回	春の季語を詠んだ俳句作品（有季定型・歴史的仮名遣い）を創作する。【演習】	
	第6回	新作の俳句を提出して、句会を行う。【演習】（前半）	
	第7回	新作の俳句を提出して、句会を行う。【演習】（後半）	
	第8回	著名な俳人の作品を取り上げ、批評する。【演習】（前半）	
	第9回	著名な俳人の作品を取り上げ、批評する。【演習】（後半）	
	第10回	夏の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】（前半）	
	第11回	夏の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】（中盤）	
	第12回	夏の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】（後半）	
	第13回	題詠の作品で句会をする。【演習】（前半）	
	第14回	題詠の作品で句会をする。【演習】（後半）	
	第15回	まとめ。【講義】	
準備学習 (予習・復習等)	俳句の実作、俳句の鑑賞。 特に後者は、しばしば、短い鑑賞文の提出を求める。		
テキスト	歳時記を必ず持参すること。また、各種の辞書を持参することが望ましい。 歳時記を持っていない者は、下記のことを勧めておく。		
参考文献	角川文庫『今はじめる人のための俳句歳時記・新版』。		
評価方法	出席し、発言:20% 鑑賞文や俳句の提出:40% 期末レポート:40%		

創作特論B	前期 2 単位	1・2・3年
童話・児童文学(絵本からヤングアダルト小説まで)を通じて、創作表現の基礎を学ぶ	那須田 淳 (なすだ じゅん)	
授業の到達目標及びテーマ	童話の源流としての「子どもの心」の意味を考えながら、絵本、童話、ミステリー、ファンタジー、ジュニア小説、ライトノベル、ヤングアダルト小説などの広い範囲の児童文学を学び、物語創作のために必要な基礎的な技術の習得をめざしましょう。また創作を通じて、想像力や物事を総合的に考える力、感性を養い、表現することの意味を再確認しましょう。	
授業の概要	絵本からヤングアダルト小説までの幅広い児童文学に触れ、親しみながら、それぞれの特徴を明らかにし、課題の実作やワークショップ、合評会を交えて、物語の構造や創作の基礎的な文章表現技術の会得を図っていきます。書くことは自らと向き合い、同時に他者を知ることでもあります。授業の全体を通して、自己表現としての創作についてあらためて理解を深めていきましょう。	
授業計画	第1回	イントロダクション：創作をするということ。物語主人公としての「私」。物語の書き方 課題「一枚絵を使って」について
	第2回	ファンタジーへの招待① 神話や自然からその骨格となる精神世界を探る。
	第3回	ファンタジーへの招待② 異世界とキャラクター
	第4回	ワークショップ グループで物語作り ファンタジーワールド
	第5回	ワークショップ グループで物語作り ファンタジーワールド2
	第6回	ワークショップ プレゼンテーション
	第7回	ワークショップ プレゼンテーション
	第8回	絵本へのアプローチ① 絵本の構造
	第9回	絵本へのアプローチ② 場面の展開
	第10回	マンガと子どもの本・子ども文化の源流について
	第11回	ジュニア小説～ラノベとヤングアダルト小説 自分探しについて
	第12回	課題「一枚絵を使って」の合評会
	第13回	課題「一枚絵を使って」の合評会
	第14回	課題「一枚絵を使って」の合評会
	第15回	まとめ
準備学習 (予習・復習等)	授業ごとに提示されるテーマに従って課題やワークショップに取り組み、指示に従って提出すること。	
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。	
参考文献	那須田淳著の『星空ロック』(あすなる書房)、『願かけネコの日』(学研)、『少年のころ』(小峰書店)、那須田淳・木本栄共訳『ちいさなちいさな王様』(講談社)など。その他、随時紹介する。	
評価方法	授業への取り組み:40% ワークショップ:20% 課題の内容:40%	

創作実践A		後期 2 単位	1・2・3年
自己開発としての俳句入門		上野 一孝 (うえの いっこう)	
授業の到達目標 及びテーマ	俳句の鑑賞を通じて日本文学の伝統の諸局面に触れることで、多様な感受性を身につけ、かつ、俳句の創作を通じて自然を観察したり、自分自身を凝視し、さらに連衆と交歓する。		
授業の概要	日々の生活で俳句の鑑賞や創作に取り組むことで、思索を深めて、感動を自覚して、新たな自己を開発する。また、句会を通じて互いに啓発する。		
授業計画	第1回	「俳句とは何か」について、複層的な視点から考察する。【講義】 (前半)	
	第2回	「俳句とは何か」について、複層的な視点から考察する。【講義】 (後半)	
	第3回	秋の季語を詠んだ俳句作品の鑑賞。【演習】 (前半)	
	第4回	秋の季語を詠んだ俳句作品の鑑賞。【演習】 (後半)	
	第5回	秋の季語を詠んだ俳句作品 (有季定型・歴史的仮名遣い) を創作する。【演習】	
	第6回	新作の俳句を提出して、句会を行う。【演習】 (前半)	
	第7回	新作の俳句を提出して、句会を行う。【演習】 (後半)	
	第8回	著名な俳人の作品を取り上げ、批評する。【演習】 (前半)	
	第9回	著名な俳人の作品を取り上げ、批評する。【演習】 (後半)	
	第10回	冬の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】 (前半)	
	第11回	冬の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】 (中盤)	
	第12回	冬の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】 (後半)	
	第13回	新年の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】 (前半)	
	第14回	新年の季語を詠んだ俳句作品を創作し、句会を行う。【演習】 (後半)	
	第15回	まとめ。【講義】	
準備学習 (予習・復習等)	俳句の実作、俳句の鑑賞。 特に後者は、しばしば、短い鑑賞文の提出を求める。		
テキスト	歳時記を必ず持参すること。また、各種の辞書を持参することが望ましい。 歳時記を持っていない者は、下記のことを勧めておく。		
参考文献	角川文庫『今は始める人のための俳句歳時記・新版』		
評価方法	出席し、発言:20% 鑑賞文や俳句の提出:40% 期末レポート:40%		

創作実践B		後期 2 単位	1・2・3年
童話・児童文学(絵本からヤングアダルト小説まで)の創作を通じて、表現の意味を学ぶ		那須田 淳 (なすだ じゅん)	
授業の到達目標及びテーマ	童話・児童文学(絵本からヤングアダルト小説まで)の創作を通じ、発想力を高め、考える力を深めていきましょう。また、創作には、感性とともに、現代への問題意識や理想の追求も必要で、そのためにも教養や広い視野を持つことの重要性を理解していきましょう。		
授業の概要	幼年から十代後半までの「子ども」をキーワードに物語や小説の創作演習を行い、最終的にオリジナル作品を一つ仕上げていきます。優れた物語や小説を通じて、文章の構造を学び、ワークショップや合評会で他者の考えを聞いたり、読んだりすることを通じ、創作のための文章技術の習得に留まらず、物事に対する多様な思考を深めるきっかけになればと思います。		
授業計画	第1回	イントロダクション：テーマの発見と創作の意味について 課題①『空想日記』 「わたしはだれ？」	
	第2回	登場人物とキャラクターの設定① ストックキャラクターについて	
	第3回	登場人物とキャラクターの設定② 自分のオリジナルキャラクターを作る	
	第4回	課題①の合評会と批評 1 作品をどう読むか？	
	第5回	課題①の合評会と批評 2 自分の作品の問題点	
	第6回	物語の構造・ストーリーの組み立て方	
	第7回	会話文・地の文・描写文の書き方 課題②『オリジナル作品』を書き始める。	
	第8回	グループ・ワークショップ「物語のつづき」を考える-その1。既出の物語を読んで、さらに自分たちで続きの世界を考える。	
	第9回	グループ・ワークショップ「物語のつづき」を考える-その2。自分たちで続きの世界を膨らませる。	
	第10回	ワークショップのプレゼンテーション	
	第11回	ワークショップのプレゼンテーション	
	第12回	課題②『オリジナル作品』の最終チェック 自分の作品を見直し、疑問点を考える	
	第13回	課題②『オリジナル作品』 合評会① 発表をきき、感想を書く	
	第14回	課題②『オリジナル作品』 合評会② 発表をきき、感想を書く	
	第15回	課題②『オリジナル作品』 合評会③とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業ごとに取り組む課題に対し、指示に従ってその都度提出すること。		
テキスト	特に定めない。必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	那須田淳著『星磨きウサギ』『一億万年光先に住むウサギ』(理論社)、森絵都著『宇宙のみなしご』(角川文庫)など、随時紹介する。他に絵本や童話、青春小説など図書館の蔵書も活用する。		
評価方法	授業への取り組み:40% ワークショップ:20% 課題やレポートの内容:40%		

表現演習A		後期 2 単位	1・2・3年
身体文化や身体表現についての知識を広げるとともに自己表現の基礎的身体表現能力を身につける		森下 春枝 (もりした はるえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 身体表現の基礎を学ぶことによって知識を広げるとともに、身体表現できる体づくりをします。</p> <p>○ 日本と西洋の身体表現形式の違いについて演習形式で学び、その身体レッスンの中で、表現できる体とは何か、身体の教養とは何か、身体文化とは何かを模索しながら、知識と理解を深めます。</p> <p>○ 基礎体力や身体感覚を身につけ、表現できる「からだ」を獲得するために、西洋の踊りや日本の踊りの練習をし、自分のイメージ通りに動くことのできる体、自分の感情やイメージを表現できる体づくりをめざします。</p>		
授業の概要	<p>まず、基礎的な体づくり、身体表現力アップのための身体（声・表情・姿勢・呼吸など）のレッスンをします。つぎに、表現力を培うための発声、遊び、呼吸法などを組み合わせながら自己表現力を高めます。さらに、身体のレッスンのために、コンテンポラリーダンス、日本の民俗舞踊、日本舞踊についての基本的な知識と理解を深めます。ワークショップ（例えば、アイヌの踊りなど）も、行う予定です。</p>		
授業計画	第1回	体育館測定室で授業概要の説明をします（着替えは不用です。第2回からは運動できる服装で出席してください）。	
	第2回	表現の基礎1：声を出す練習や鬼ごっこなどで体ほぐしをしながら表現力の高め方を模索します。	
	第3回	表現の基礎2：呼吸（腹式呼吸、座禅など）を中心に、声の出し方や正しい姿勢を意識しながら体づくりをします。	
	第4回	表現の基礎3：感嘆語や擬態語によって表現する力を身につけ、皆の前で表現することに慣れ、自己表現能力を高めます。	
	第5回	コンテンポラリーダンスとは1：歴史的背景の解説と実践を行います。	
	第6回	コンテンポラリーダンスとは2：基本の練習を行うことによって、コンテンポラリーダンスの特徴をつかみます。	
	第7回	日本の民俗舞踊1：日本の民俗舞踊・芸能とは、について解説します。浴衣の着方の練習をし、慣れます。	
	第8回	日本の民俗舞踊2：西馬音内盆踊りの基本（浴衣を着ます）。	
	第9回	日本の民俗舞踊3：西馬音内盆踊りの練習（浴衣を着ます）。	
	第10回	日本の民俗舞踊4：西馬音内盆踊りの練習（浴衣を着ます）。	
	第11回	ワーク・ショップ：外部講師によるワークショップ（例えば、アイヌの踊りなど）を行う予定です。実施日は前後するかもしれません。	
	第12回	日本舞踊の基礎1：「日本舞踊」とは、について解説します。日本舞踊の基礎（礼儀作法・立ち居振る舞いについて）と身体動作、踊りの練習をします（浴衣を着ます）	
	第13回	日本舞踊の基礎2：日本舞踊の基礎（身体作りに大切な、首を三つに振る、極める、すべる、拍子に合わせて足を踏み動かすなど）と身体動作、踊りの練習をします（浴衣を着ます）。	
	第14回	日本舞踊の基礎3：日本舞踊の基礎（扇子についてなど）と身体動作、踊りの練習をします（浴衣を着ます）。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	それぞれの担当について調べ発表すると共に、皆にも教え全員で表現活動を行ったりします。		
テキスト	特に定めませんが、参考図書を活用したり、プリントを用います。		
参考文献	花柳千代『日本舞踊の基礎』東京書籍、渡辺保『日本の舞踊』岩波新書、鴻上尚史『発声と身体のレッスン』ちくま文庫、佐々木涼子『バレエの宇宙』文春新書、野村雅一『しぐさの世界』NHKブックス、斎藤孝『呼吸入門』角川書店、坂東三津五郎『坂東三津五郎踊りの愉しみ』岩波書店、野村雅一『身振りとしぐさの人類学』中公新書		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 提出物（レポート等）:30%		

表現演習 I C		前期 2 単位	1・2・3年
コミュニケーション力を身につける		堤 信子（つつみ のぶこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	表現演習では、表現力における自分の長所と欠点を知ることにより、長所を伸ばし欠点を改善する。伝えたいことをわかりやすく伝える方法を身につける。人の話をちゃんと理解して、社会に出て不可欠のコミュニケーション力を向上させる。		
授業の概要	表現力をアップさせていくことが、人間としての魅力を増すことに繋がるということを実感できるよう、話す力を様々な方法で訓練していく。授業では、高校の授業までではあまり教わることもなかった、声の出し方、表情、挨拶、姿勢、仕草など、伝える力を左右する表現力をも磨いていく。なるべく実習に重点を置き、就職活動の面接や、社会生活において自分の力を十分に発揮できる表現力を養う。		
授業計画	第1回	導入オリエンテーション 自分自身の目標や、課題についての考察	
	第2回	表現力とは何か 声、表情、仕草などの表現ポイントの重要性について学ぶ	
	第3回	表現力の基本 他人に与える自分の第一印象をチェック、表情のトレーニングをする	
	第4回	発声法の基礎を学ぶ	
	第5回	声のトーン、ボリューム、スピードをコントロールする方法を学ぶ	
	第6回	自己紹介などで、短い1分スピーチの基礎を学ぶ	
	第7回	他者紹介などで、人の話をまとめて発表する	
	第8回	敬語の基本を学ぶ	
	第9回	モノについての表現力を学ぶ	
	第10回	ランダムスピーチの実践で、瞬発力の訓練	
	第11回	チェンスピーチの実践で、瞬発力と聞く力の訓練	
	第12回	課題テーマについて、制限時間内で話す練習	
	第13回	課題テーマについて、グループ発表	
	第14回	スピーチ実技試験	
	第15回	まとめ一質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	予習として、次回のテーマについての話す内容を考えておくなど。 復習として、発声練習や、授業で教わった表現の技術を意識して取り入れておく。		
テキスト	特になし 適宜プリントを配付。		
参考文献	「100人中99人に好かれるありがとう上手の習慣」ディスカヴァー21		
評価方法	スピーチ実技試験:60% レポート提出:40%		

表現演習 I D		前期 2 単位	1・2・3年
話し合いを通じて伝える力・聴く力を伸ばす		柳田 直美（やなぎだ なおみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの実践・評価を通して、意見の異なる人々とのコミュニケーションの力を高める。 ・一つのテーマについて多面的に考えられるようになる。 ・話し合いの特徴を知り、話し合いを効果的に進められるようになる。 ・話し合いの実践の成果として、よりよいプレゼンテーションができるようになる。 		
授業の概要	<p>全15回の授業は、次のように、大きく二つに分かれています。また、全授業を通して、日本語の話し合いの特徴を知り、話し合いを効果的に進める技術を学びます。</p> <p>前半：グループで話し合いの練習を行いながら、コミュニケーションの基礎力を養う。</p> <p>後半：グループでテーマを選び、調べてまとめ、発表する作業を通して、物事を多面的に考える力を養う。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	ディスカッション練習：前半1回目	
	第3回	ディスカッション練習：前半2回目	
	第4回	コミュニケーションスキルのトレーニング1	
	第5回	ディスカッション練習：後半1回目	
	第6回	ディスカッション練習：後半2回目	
	第7回	プレゼンテーションに向けてのブレインストーミング	
	第8回	グループ作業1：テーマを決める	
	第9回	グループ作業2：調査する	
	第10回	中間プレゼンテーション	
	第11回	コミュニケーションスキルのトレーニング2	
	第12回	グループ作業3：調査結果をまとめる	
	第13回	グループ作業4：発表資料を作成する	
	第14回	プレゼンテーション	
	第15回	全体ふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	<p>以下のような課題を授業時間外に課します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業のふりかえり ・プレゼンテーションに向けたグループ作業 		
テキスト	特に定めず、適宜資料を配布する。		
参考文献	特に定めず、適宜資料を配布する。		
評価方法	平常点:20% 課題:30% プレゼンテーション:30% 授業への参加度:20%		

表現演習ⅡB		後期 2 単位	1・2・3年
さまざまな表現をやってみる - おもに演劇を中心に -		柏木 陽（かしわぎ あきら）	
授業の到達目標 及びテーマ	主に演劇を作ることを通じてさまざまな表現について考えてみる。 人のふるまいがどのように受け止められるのか、自分ならどうふるまうか、ほかの人がどのようにするか演劇を作ることを通じて考えていく。自分の中にあることをどうやったら他の人に伝えていくことが出来るかを実践してみる。		
授業の概要	集まった人たちと実際に演劇を作ったり様々な方法でやり取りをしてみます。 この授業は集まった人々によって進め方が異なっていきます。 その場での合意や探求が重要だと考えますのでこの授業計画も可変的な物だと思っていてください。		
授業計画	第1回	あそぶ～他者との関係を探る	
	第2回	あそぶ～変化を見つけていく	
	第3回	あそぶ～楽しい時間は何をもちたらずか	
	第4回	つくる～場面をつくってみる	
	第5回	つくる～言葉のないもの	
	第6回	つくる～言葉から作ってみる	
	第7回	かえる～同じ内容を違う方法で表す	
	第8回	かえる～どうやったら意図が伝わるか	
	第9回	かえる～伝わらないけど魅力的なものに	
	第10回	みせる～見せてみてその反応を知る	
	第11回	みせる～同じ内容で方法を変えてみる	
	第12回	みせる～どう見えているか伝え合う	
	第13回	まとめる～自分たちの合意点を探す	
	第14回	まとめる～何かと結び付けてみる	
	第15回	まとめる～分け合うための方法を考える	
準備学習 (予習・復習等)	授業中に提示します。		
テキスト	必要に応じて授業中にプリントを配布		
参考文献	必要に応じて授業中に提示		
評価方法	授業への参加:50% 発表などの内容:30% レポート:20%		

表現演習ⅡC		後期 2 単位	1・2・3年
プレゼンテーション力を身につける、朗読を学ぶ		堤 信子（つつみ のぶこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期で身につけた基本をベースにして、よりよい発声や発音ができるようになる。 プレゼンテーションの基礎の講義を通して、自信をもって人前で話すことができるようになる。 また朗読の基本を学び、日本語のリズムや美しさを理解することで、朗読を通して表現することの楽しさを学ぶ。		
授業の概要	後期の授業では、前期同様発声の基礎を練習しつつ、口頭でのプレゼンテーション、自分の意見や情報を第三者に伝え、納得させる技術を実践を通して学んでいく。さらに、朗読の授業では、絵本や文学作品、エッセイなどを声に出して読むことで、日本語の表現の特徴を理解し、より豊かな表現力をつける。前期後期を通して、個別のアドバイスにも重点を置きながら、個々の人間力の向上を目指す。		
授業計画	第1回	後期オリエンテーション 表現の基本ともなる発声法の復習。またプレゼンテーションの課題についても考える	
	第2回	プレゼンテーションの定義などの基本を学ぶ	
	第3回	身近なテーマでのプレゼンを練習する	
	第4回	身近なテーマでのプレゼンを発表する	
	第5回	表情筋トレーニングと1分プレゼン	
	第6回	滑舌トレーニングと1分プレゼン	
	第7回	新聞や雑誌の記事をまとめる練習と発表	
	第8回	課題テーマについてのプレゼン練習と発表	
	第9回	朗読の基本を学ぶ	
	第10回	絵本の朗読の基本と練習	
	第11回	文学作品の朗読練習	
	第12回	エッセイの朗読練習	
	第13回	朗読の実技試験	
	第14回	プレゼンの実技試験	
	第15回	まとめ一質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	予習として、次回のテーマについてのプリントを配布する。学生は、配布された内容について自分なりの意見を持って次回の授業に臨む。 復習として、プレゼン発表や朗読における自分の改善点を意識しながら練習する。		
テキスト	特になし 適宜プリントを配付する		
参考文献	「手袋を買いに」新美南吉などの絵本数冊		
評価方法	朗読・プレゼンの実技:60% リポート提出:40%		

表現演習ⅡD		後期 2 単位	1・2・3年
日本語の基礎トレーニング		津島 知明（つしま ともあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本語表現力の向上を目指して、実践的なトレーニングを行う。独りよがりではなく、きちんと相手に伝わるような表現力を身につけてゆく。		
授業の概要	演習形式で行う。文章の推敲・添削などを通して、各自が自身の表現をより高めてゆけるよう個別指導してゆく（ただし、指導回数は受講者数による）。敬語の使い方、コメントの仕方など、実生活における様々な局面を想定することで、確実なスキルアップにつなげたい。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	自己紹介文	
	第3回	テーマを選ぶ	
	第4回	推敲と再構成	
	第5回	タイトルと書き出し	
	第6回	他人の表現に学ぶ	
	第7回	文章の縮約	
	第8回	文章の添削	
	第9回	相手の立場を考えたコメント	
	第10回	同音異義語の区別	
	第11回	改まった手紙文	
	第12回	自己アピール文	
	第13回	敬語のまとめ	
	第14回	誤りやすい漢字	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	配布プリント、返却された課題は各自で見直しておくこと。		
テキスト	「日本語リテラシー」（新典社）		
参考文献	特になし。		
評価方法	課題の提出:90% 特別課題:10%		

表現演習ⅢD		後期 2 単位	1・2年 2 学科共通
話し合いを通じて伝える力・書く力を伸ばす		柳田 直美（やなぎだ なおみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いの実践・評価を通して、意見の異なる人々とのコミュニケーションの力を高める。 ・一つのテーマについて多面的に考えられるようになる。 ・話し合いの特徴を知り、話し合いを効果的に進められるようになる。 ・日本語の文章表現力を高める 		
授業の概要	<p>全15回の授業は、次のように、大きく二つに分かれています。また、全授業を通して、話し合いを効果的に進める技術及び文章表現の技術を学びます。</p> <p>前半：グループで話し合いを行いながら、コミュニケーションの基礎力と文章表現力を養う。</p> <p>後半：グループでテーマを選び、調べてまとめ、発表する作業を通して、物事を多面的に考える力と表現力を養う。</p>		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	書き換え練習1回目	
	第3回	書き換え練習2回目	
	第4回	コミュニケーションスキルのトレーニング1	
	第5回	書き換え練習3回目	
	第6回	書き換え練習4回目	
	第7回	プレゼンテーションに向けてのブレインストーミング	
	第8回	グループ作業1：テーマを決める	
	第9回	グループ作業2：調査をする	
	第10回	中間プレゼンテーション	
	第11回	コミュニケーションスキルのトレーニング2	
	第12回	グループ作業3：調査結果をまとめる	
	第13回	グループ作業4：発表資料を作成する	
	第14回	プレゼンテーション	
	第15回	全体ふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	<p>以下のような課題を授業時間外に課します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業のふりかえり ・文章表現力を養うための課題 ・プレゼンテーションに向けたグループ作業 		
テキスト	特に定めず、適時資料を配布する。		
参考文献	特に定めず、適時資料を配布する。		
評価方法	平常点:20% 課題:30% プレゼンテーション:30% 授業への参加度:20%		

書道 I		前期 2 単位	1・2・3年
書を楽しむ		長谷川 耕史 (はせがわ こうし)	
授業の到達目標 及びテーマ	書の実用性と芸術性を書作を通して学ぶ。基本を身につけることに主眼をおく。手書きのぬくもりに触れあいながら、古典をふまえた自己表現を追求する。		
授業の概要	毎回課題を用意する。楷書・行書・草書体を、いろはうたを通して基本を学ぶ。 有名法帖の古典を臨書し書の奥深さを学んでいく。 毎時間、実習を中心に進め、随時、清書を提出する。		
授業計画	第1回	講義 (書道とは)	
	第2回	漢字の基礎 (永字八法)	
	第3回	楷書の練習 (いろはうたの練習・概要)	
	第4回	楷書の練習 (いろはうた) (転折、波法、布置、章法)	
	第5回	行書の練習 (いろはうた・行書概要)	
	第6回	行書の練習 (いろはうたのまとめ)	
	第7回	草書の練習 (いろはうた・草書概要)	
	第8回	草書の練習 (いろはうたのまとめ)	
	第9回	臨書楷書 (九成宮醜泉銘・概要)	
	第10回	臨書楷書 (九成宮醜泉銘・波法の練習)	
	第11回	臨書行書 (蘭亭叙・概要)	
	第12回	臨書行書 (蘭亭叙・遅速緩急の練習)	
	第13回	臨書草書 (千字文・概要)	
	第14回	臨書草書 (千字文・まとめ)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	自分の名前の硬筆練習をしておくこと。 前向きな気持ちで授業が臨めるように、ぶつかってきてください。 初回は書道用具不要。 筆記用具のみ持参すること。		
テキスト	随時資料を配布する		
参考文献	教場にて随時指示する		
評価方法	提出物の平均点:50% 積極性:30% 平常点 (忘れ物他):20%		

書道Ⅱ		後期 2 単位	1・2・3年
書の美		長谷川 耕史（はせがわ こうし）	
授業の到達目標 及びテーマ	書の実作を通して、書の実用性と芸術性を理解して習得出来るようにする。 社会生活において即役立つ様、仮名の基本を身につけたうえで、自己表現としての書を追求していけるようにする。		
授業の概要	小筆をメインに、仮名の基礎からはじめ、有名法帖の臨書を行う。 実用書道では毛筆以外にも硬筆を取り入れて実践的に使用出来るものも取り入れる。 毎時間実習を中心に進め随時清書を提出する。		
授業計画	第1回	仮名とは（講義） 硬筆にて名前の練習	
	第2回	平仮名（いろは）	
	第3回	平仮名（いろは）	
	第4回	変体仮名（単体）	
	第5回	変体仮名（二字連綿）	
	第6回	変体仮名（多字連綿）	
	第7回	臨書（高野切第3種）連綿を生かす	
	第8回	臨書（高野切第3種）散らし方の練習	
	第9回	臨書（高野切第3種）まとめ	
	第10回	実用語（贈答用語の練習）	
	第11回	葉書の練習 宛名書き	
	第12回	葉書の練習 手紙	
	第13回	創作年賀状	
	第14回	書き初め（創作書道）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	鑑賞眼を高められるように、筆文字の看板等に目を向けて、目習いをしておくこと。 前向きな気持ちで授業が臨めるように、 ぶつかってきてください。		
テキスト	特に定めない、主としてプリントを用いる。		
参考文献	特になし。		
評価方法	提出物の平均点:50% 積極性:30% 平常点（忘れ物他）:20%		

読解トレーニングA		前期 2 単位	1年
小説という窓から社会と歴史を学ぶ		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	小説をさまざまな角度から読み、討論することを通じて、読解力を養います。小説を読むことは、現代とは異なる時代・文化・社会に生きる人間の内面を深く理解することです。今回は戦争・暴力・平和をテーマに、テキストをとりまく社会的文化的背景に理解を深めつつ読み進めます。		
授業の概要	芥川賞を受賞した現代沖縄の小説から、映画化されるなど話題の作品を選び、参加者全員でいっしょに読み進めながら、戦争と女性、沖縄と日本とアメリカ、平和と暴力、などのテーマについて理解を深めます。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	小説で読む戦争 目取真俊「風音」準備	
	第3回	小説で読む戦争 (同上) 初読	
	第4回	小説で読む戦争 (同上) 精読	
	第5回	小説で読む戦争 (同上) 発展	
	第6回	小説で読む戦争 (同上) 参考資料	
	第7回	小説で読む戦争 (同上) まとめ	
	第8回	小説で読む暴力 又吉栄喜「ジョージが射殺した猪」準備	
	第9回	小説で読む暴力 (同上) 初読	
	第10回	小説で読む暴力 (同上) 精読	
	第11回	小説で読む暴力 (同上) 発展	
	第12回	小説で読む暴力 (同上) 参考資料	
	第13回	小説で読む暴力 (同上) まとめ	
	第14回	まとめ1 沖縄と日本	
	第15回	まとめ2 戦争と平和	
準備学習 (予習・復習等)	配布された小説を読んで、論点を考えます。 期末レポートに向けて、様々な小説を各自読み進めます。		
テキスト	授業時に配布します。		
参考文献	『現代沖縄文学作品選』(講談社文芸文庫)、岡本恵徳他編『沖縄文学選 日本文学のエッジからの問い』(勉誠出版)		
評価方法	発言、コメントカード:50% 期末レポート:50%		

読解トレーニングC		前期 2 単位	1年
社会と歴史		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	文章読解の基礎を確認した後、継続的に新聞を読むためのコツを学ぶ。内容の正確な理解、問題点、自分の見解を明らかにすることを軸に、読み込む力を修得する。さらに現状をより深く理解するため、事柄の原因と結果を歴史的経緯の中で考える力を養う。これらの作業を通して自ら検証・考察する力、総合的な読解力を鍛えていく。		
授業の概要	毎回最新かつ重要なニュースを詳細に検討し現在の社会状況を理解する。新聞記事の内容を正確に理解し、何が問題なのか、自分はどのような意見なのかを簡潔にまとめる作業を習慣化する。トレーニングシートを使って文章力を鍛え、ディスカッションで様々な見方を知り、自分の意見を自覚し、さらに発展させるといった作業に慣れていく。実践的な読解力を培い、知的発見の楽しさを共有したい。		
授業計画	第1回	ガイダンスと自己紹介	
	第2回	文章読解の基礎を学ぶ(1) まずは腕試し	
	第3回	文章読解の基礎を学ぶ(2) 「いいたいこと」をつかむ	
	第4回	新聞を読む(1) 案外楽勝!?	
	第5回	新聞を読む(2) ポイントはどこ?	
	第6回	新聞読解の方法論: 三つの〇で考えよう	
	第7回	グループワークに慣れる(その1) 問題の提示	
	第8回	グループワークに慣れる(その2) 議論を深める	
	第9回	読解とディスカッション(1) テーマの理解	
	第10回	読解とディスカッション(2) 問題の発見	
	第11回	読解とディスカッション(3) 情報の整理	
	第12回	読解とディスカッション(4) どう読むか	
	第13回	読解とディスカッション(5) どう考えるか	
	第14回	読解とディスカッション(6) 着地点はどこか?	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する記述シートに講義やテキストの要点等をまとめ、次回の授業時に提出すること。		
テキスト	毎回資料プリントを配布する		
参考文献	テーマに合わせて随時紹介する		
評価方法	トレーニングシート等:60% レポート:40%		

読解トレーニングD		後期 2 単位	1年
論説文読解を中心に実践的読解力を養う		渡邊 良智 (わたなべ よしとも)	
授業の到達目標 及びテーマ	読む力を養うことを目標とする授業である。この授業では、論説文の読解トレーニングを中心に、文章を読みこなす訓練を行う。参加者が、現代文の試験に取り上げられた論説文の読解を繰り返し試みることにより、読解力養成に努める。訓練を通して複雑難解な論説文についても出題者の意図を推測し、設問に対して正しく解答できるようになることを目標とする。さらに、あたらしい考え方・ものの見方についても知ることができる。		
授業の概要	論説文問題の「解き方の公式」を学んでから、過去に出題された中学校、高校、大学の入試問題、そして就職試験問題に挑戦する。試験問題を解いてみて、出題者の要求する解答と自分のそれとのずれを知り、読解のポイントをつかむ。キーワードの意味の解説も行う。このトレーニングを繰り返すことによって論説文の読解力を養成する。さらに新聞記事の読み方についても学ぶ。		
授業計画	第1回	読解入門：論説文を読むとはどういうことか	
	第2回	中学校入試問題に挑戦する（1）思想・哲学	
	第3回	中学校入試問題に挑戦する（2）言語・社会	
	第4回	高校入試問題に挑戦する（1）言語・文化	
	第5回	高校入試問題に挑戦する（2）思想・哲学	
	第6回	高校入試問題に挑戦する（3）科学・学問	
	第7回	大学入試問題に挑戦する（1）言語・文化	
	第8回	大学入試問題に挑戦する（2）思想・哲学	
	第9回	大学入試問題に挑戦する（3）科学・学問	
	第10回	大学入試問題に挑戦する（4）芸術・芸能	
	第11回	大学入試問題に挑戦する（5）政治・経済	
	第12回	大学入試問題に挑戦する（6）社会・歴史	
	第13回	就職試験問題に挑戦する	
	第14回	新聞の記事を読む	
	第15回	全体まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	次回取り上げる試験問題を準備して配布するので、必ず事前に解答を試みてから次回の授業に参加してもらいたい。		
テキスト	とくになし。資料・試験問題のプリントを配布する。		
参考文献	斎藤哲也編『読解評論文キーワード』（筑摩書房）		
評価方法	授業参加度：35% 準備学習度：15% 期末レポート：50%		

読解トレーニングE		前期 2 単位	1年
『修紫田舎源氏』一室町御所の光源氏・須磨明石篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○<発言力>自分の言葉で発言する能力が錬成できる。</p> <p>○<ミメシス>物語と挿絵との関係性・差異について探究できる。</p> <p>○<源氏物語>パロディの探究を通じて原典『源氏物語』にも親炙できる。</p>		
授業の概要	<p>『修紫田舎源氏』は、『源氏物語』の全享受史において、冠絶した翻案である。国貞描く挿絵も絶品との定評あり。架空の室町將軍家の御書司・光氏(みつうじ)。柳亭種彦が奔筆を振るったこの佳作は、將軍家齊の大奥を諷しているとの廉により、水野忠邦の弾圧下、天保13年6月に発禁、同7月19日に種彦の死没に至る。『源氏物語』真木柱巻に相当する第40編までが違った。半期の教材・第19～20編は、歌川国貞の挿絵を各見開きを含み、『源氏物語』明石巻に相当。だが、『修紫田舎源氏』は原作に滞留せず、須磨明石流離を応仁の乱に絡め、光氏の女性軍団を起用するなど、新たな物語の力線を張り巡らしている。『源氏物語』への入門書としても推奨したい。</p>		
授業計画	第1回	授業説明と情報交換。	
	第2回	母花桐の出現と夢のお告げ。解析・考察・意見交換。	
	第3回	花桐、明石入道の夢でお告げ。解析・考察・意見交換。	
	第4回	明石転居に向けて。解析・考察・意見交換。解析・考察・意見交換。	
	第5回	明石への船出。解析・考察・意見交換。	
	第6回	明石上陸と入道の出迎え。解析・考察・意見交換。	
	第7回	明石の館。解析・考察・意見交換。	
	第8回	明石の地から光氏指示。解析・考察・意見交換。	
	第9回	手巻の注進、須磨戦線の情報。解析・考察・意見交換。	
	第10回	須磨への寄手壊滅、手巻の帰京。解析・考察・意見交換。	
	第11回	入道の由来譚。解析・考察・意見交換。	
	第12回	入道の出家事情と願望。解析・考察・意見交換。	
	第13回	入道、娘朝霧の離邸へ。解析・考察・意見交換。	
	第14回	朝霧と光氏腹心千鳥。解析・考察・意見交換。	
	第15回	音楽の交響へ。解析・考察・意見交換。	
準備学習 (予習・復習等)	[予習ワークシート]見開き(挿絵+本文=計2頁分)を範囲とした予習。A4版1枚の指定ワークシートを使用する。授業参加の大前提である。		
テキスト	コピー一括配布		
参考文献	特になし		
評価方法	事前ワークシート:25% 授業中メモ記入:10% 発言の蓄積:35% 5分間テスト:25% 最終総括表:05%		

日本語学A		後期 2 単位	1・2年
日本語の分析力向上をめざして		南口 順子 (みなみぐち じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	母語である日本語を客観的に見つめ直し、分析していく力を伸ばしていくことを大きな目標として掲げ、現代日本語の研究に必要な基本的知識獲得を目指していく。		
授業の概要	日本語はどのような性格と構造を持った言語なのか。日本語学全般にわたり、必要にして十分なことがらを学んでいく。外国語との対照という視点を取り入れ、日本語を客観的に分析していく力を伸ばしていく。日本語そのものについて科学的知識を身に付けるべく日本語を外から、内から見つめ直し、現代日本語の実態に迫っていききたい。		
授業計画	第1回	日本語学と国語学：国語と日本語、国際化と日本語、日本語学と言語学	
	第2回	日本語概説：日本語の環境と系統、日本語の構造と性格	
	第3回	文法1：形態、構文	
	第4回	文法2：ヴォイス	
	第5回	文法3：アスペクト	
	第6回	文法4：テンス	
	第7回	語彙1：基本語・基礎語、語彙の計量、語構成	
	第8回	語彙2：語種・語の位相、語義	
	第9回	音声1：音声器官、子音・母音の分類等	
	第10回	音声2：音韻・韻律	
	第11回	文字・表記1：平仮名・カタカナ・ローマ字	
	第12回	文字・表記2：漢字	
	第13回	表現：待遇表現・慣用表現	
	第14回	日本語史1：音韻史・文法史1	
	第15回	日本語史2：文法史2、語彙史	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱うテーマに関して、毎回事前学習を義務付ける。教科書を読んで分からないことがあれば、分かる範囲で調べておくこと。授業には目的意識を持って臨むこと。授業後は各課の研究課題に主体的に取り組むこと。疑問に思ったこと、関心を持ったことについては参考文献などに当たり、更に学習を進めていくこと。自律的な学習態度が望まれる。		
テキスト	授業時に指示する		
参考文献	授業時に指示する		
評価方法	授業への取り組み:20% 課題への取り組み:30% 最終レポートの成績:50%		

日本語学B	後期 2 単位	1・2年
言語科学としての日本語のあつかいかたの応用面を研究するちからを身につける。	岡崎 和夫（おかざき かずお）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「日本語学A」の学習上の基盤のうえに、言語科学の応用領域をあつかい、日本語と古代から近代・現代におよぶ日本文化を読み解くskillの獲得をめざし、次下三つの到達目標をたてる。 ①主観を離れて言語を科学的にあつかう力量の養成。 ②用例dataの意義をたたく理解し、その集収にあたる力量の養成。 ③該当のdataからあらたな知見を導き求める力量の養成。</p> <p><授業の概要> 日本語について深く考えたい学生が、下記<授業計画>に明記したような日本語学の応用面にのりだして、論理性、客観性、科学性を養うための学生発表中核型の授業である。おおよそ、平均的に、講義者の講義および発表割合1に対し、参加学生1.5の調査、思考、発表活動をあてて進行する。 あくまでも、意欲的な学生のための応用言語学的な講座である。 評価は、下記「評価方法」の三つの基準に従って自己評価の申告を原則とする。ただし、著しい思い違いなどのある場合は試験によって客観測定する予定。 なお、この講義は、申し出によって父母の参加が可能である。ただし、そのばあい、すくなくとも連続する週の2コマ以上に亘ってまると参加することが要請されます。</p> <p><授業計画> 第1回 introduction→印鑑持参。 第2回 文学を読み解く言語学 第3回 文豪たちを読み解く言語学 第4回 夏目漱石と森鷗外についての科学的観察。 第5回 J-popの文化を読み解く言語学・アーティストの歌詞を繙く科学的思考 第6回 鬼束ちひろと中島みゆきを読み解く 第7回 Musicianを読みとくちから 第8回 課題発見レポートの提出日（とくに、課題の新鮮さ・創見性を重視） 第9回 たとえば、古典文学作品をみつめる言語学……発展自由領域…… 第10回 たとえば、わらべ唄を読み解く……発展自由領域…… 第11回 たとえば、わらべ唄を読み解く言語学……発展自由領域…… 第12回 好きなテーマについて読み解く……発展自由領域…… 第13回 好きなテーマについての文化的側面にせまる言語学……発展自由領域…… 第14回 社会のできごとを読み解く言語学……発展自由領域…… 第15回 まとめて、まとめてwords&culture</p> <p><準備学習（予習・復習等）> ①主として講義中に指示する文献の検索と収集（コピー）と読み込み。 ②前回講義演習内容への質問の提示（質問票の提出、当該授業開始10分前に教卓へ）</p> <p><テキスト> 日本語学A使用のものの継続のほか、いま、参加学生の興味と力量を認め得ないまま決めることを憂慮し、第1～第3回の試問時に、言語および言語以前の課題にかかわるテキストを選定する。</p> <p><参考文献> 図書館文献を中心に講義中の質疑また雑談に応じて指示する。</p> <p><評価方法> ノートの展開的作成力 言語data収集力 収集dataからみちすじをたてて考える力の度合い 授業貢献の度合 各25% 上記方式によって評価し得ないばあいは、50分程度の定期試験を行うことにします。なお、「毎回静かに出席した」「学友と雑談した」などは、どの評価ポイントにも属しません。 ※なお、提出用のノート（当然ながらルーズリーフ、紙束は不可）は受講ノートとは別物ですので、返却はしません。また、コピー資料の貼付、添付はできません。</p>		

日本語論A		前期 2 単位	1・2年
日本語の音声・音韻		増田 斐那子 (ますだ ひなこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>【テーマ】日本語の音声・音韻 【到達目標】普段何気なく使っている「日本語」に関する様々な音声現象を理論的に分析し、言語の規則性について理解できるようになる。</p>		
授業の概要	<p>この授業では、日本語の様々な音声現象について解説する。言語学の基本概念に始まり、日本語の音声現象の小さな単位(一つ一つの音)から大きな単位(リズムやアクセント)まで幅広くカバーする。講義は基本的にパワーポイントのスライドを用いて進める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション、言語学の基本概念	
	第2回	音声学とは	
	第3回	調音音声学：母音	
	第4回	調音音声学：子音	
	第5回	母音と子音の有標性	
	第6回	音の獲得	
	第7回	日本語の音素	
	第8回	連濁と音声素性	
	第9回	連濁の規則	
	第10回	モーラとは	
	第11回	音節とは	
	第12回	アクセント	
	第13回	イントネーションとリズム	
	第14回	音声学と社会 効果測定試験	
	第15回	効果測定試験の解説 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の講義後、必ず復習すること。		
テキスト	未定。		
参考文献	『日本語音声学入門（改訂版）』 斎藤純男（三省堂） 『日本語の音声』 窪園晴夫（岩波書店）		
評価方法	リアクションペーパー:40% 学期末の効果測定試験:60%		

日本語論B	後期 2 単位	1・2年
国語辞典および古語辞典をのりこえる ——文学作品の新たな読み、言語表現の新しい理解へ——	岡崎 和夫（おかざき かずお）	
<p><テーマ> ひごろ使い慣れている辞書、辞典を、言語科学の視点から客観的、論理的に見つめ直す。あわせて、その記述を追い、たしかめながら、語の来歴をも学びつつ、古代語から中世語を経て現代語へいたる日本語の歴史的な遷り変わりのありようをも具体的に学びそのおおきな転換点のダイナミックな構造的性質についての科学的知見にふれる。</p> <p><到達目標> ・辞書、辞典の言語の記述を客観的に観察する力の養成。また文章読解との関連性に気づく力の養成 ・おおくの辞書、辞典の記述を比べ読み、それらの語のあつかいの差異を論理的にみさだめ、妥当性を批評する力の養成。 ・辞書、辞典の歴史を理解し、あわせて日本語の歴史的な変遷の知見を得てゆく力の養成。</p> <p><授業の概要> ふだん特別の課題また研究の意欲などをもたずに引き、日本語のありようをたしかめ便利に活用している国語辞典の記述の内容について、あらためて読み、点検し、みずから、またみずからの世代の言語感覚、言語認識のありかたを問い、さらに父母、さらに祖父母、祖父母たちの世代との段階差を認識し、さらさらにそのもつと根源的な言語の時代差のありようを論理的、科学的に見つめる眼をやしないながら、学生の調査・発表を交えつつ古代語から現代語への歴史的な変遷の視点を具体的、有機的に理解するねらいの、「学習」と「研究」との間位的な講座である。申し出によって父母、祖父母参加が可能。その場合、2コマ以上の参加が要請されます。 評価は、下記「評価方法」の三つの基準に従って自己評価の申告を原則とします。ただし、著しい思い違いのあるときは、試験によって判定します。</p> <p><授業計画> 第1回 導入篇 先入観をとりのぞく（印鑑を持参） 第2回 国語辞典・古語辞典を持ち寄る 第3回 ささまざまな記述を観察する 第4回 辞書、辞典をあげわう→くらべる 第5回 辞書、辞典を「ひく」から「考える」へ 第6回 辞書、辞典を「考える」から「超える」へ 第7回 課題レポート提出の日（とくに、課題の新鮮さ・創見性を重視） 第8回 父母の言葉と私の言葉一言語の世代差 第9回 祖父母の言葉と私の言葉一言語の世代差 第10回 曾祖父母たちの言語を観察する一言語の世代差 第11回 辞書、辞典の記述と言語の時代差・明治時代以前～ 第12回 辞書、辞典の記述と言語の時代差・江戸時代以前～ 第13回 辞書、辞典の記述と言語の時代差・鎌倉、室町時代 第14回 辞書、辞典の記述と言語の時代差・奈良以前、平安時代 第15回 まとめて、まとめて、辞書史学 定期試験</p> <p>なお、上記それぞれの回にて、講義題目サブタイトルの実現をはかります。国語辞典、古語辞典の編集作業も体験します。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> ①主として講義中に指示する文献の検索と収集（コピー）と読み込み。 ②前回講義演習内容への質問の提示（質問票の提出、当該授業開始10分前に教卓へ）</p> <p><テキスト> 高校時代までに用いた国語辞典および古語辞典。図書館ほかからの借用は不可。</p> <p><参考文献> 講義中の質疑、コミュニケーションにあわせて図書館資料を中心に指示。</p> <p><評価方法> ノートの創造的作成度：25% 論理的思考力養成度：50% 授業貢献度：25% 上記方式によって評価し得ないばあいは、50分程度の定期試験を行うことにします。なお、「毎回静かに出席した」「学友と雑談した」などは、どの評価ポイントにも属しません。 ※なお、提出用のノート（当然ながらルーズリーフ、紙束は不可）は受講ノートとは別物ですので、返却はしません。また、コピー資料の貼付、添付はできません。</p>		

日本文化研究B		後期 2 単位	1・2年
文学・文化分析を通して、文化の脱中心的で協同的な未来を考える		辻 吉祥（つじ よしひろ）	
授業の到達目標及びテーマ	日本文化を単一的で一枚岩のものとするのではなく、複層的で多様な社会的アクセント（M・バフチン）が交差する力学の中に捉えられるようにする。文学、文化、思想……テキストに制限を設けず、わたしたちの文化のあり方が協同的で脱中心的な未来の文化生産へ繋がれるはずの「現在」として把握し直せるような、視座と分析力と感性を獲得する。		
授業の概要	講義および討議の形式。具体的な文献資料などを共に読み進め、時に映像・マンガも交えながら考える。講義、各人の読み取り作業と討議を通じて、文化の単なる享受主体であることから、文化を歴史過程のなかで分析し、創造的に意味づけられる主体へと転換を図る。主として多数者の利益のためにそぎ落とされてきた個々の声・感性に基づくものをテーマとする。		
授業計画	第1回	導入——文化研究とは何か	
	第2回	いのちと文学について（宮沢賢治の童話の検討Ⅰ）	
	第3回	いのちと文学について（宮沢賢治の童話の検討Ⅱ）	
	第4回	テロリズムと文学について（宮沢賢治の童話の検討Ⅲ）	
	第5回	ふたたびいのちと文学について（宮沢賢治の童話の検討Ⅳ）	
	第6回	名づけをめぐる戦争の技術と文化	
	第7回	言語の個性・地域性（方言）と文学	
	第8回	野蛮としての文化——W・ベンヤミンほか	
	第9回	帝国と文学——感性の政治学（表現について）	
	第10回	帝国と文学——感性の政治学（プロパガンダについて）	
	第11回	戦争と文学——感性の政治学（文学に対抗する文学）	
	第12回	エネルギー権力の歴史と文学	
	第13回	まなざしの文化とその支配——現代音楽の展開にみる	
	第14回	「桃太郎」の歴史的考察——ものがたりのイデオロギー	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各回ごとに示される文献を読んでくること。		
テキスト	プリントを配布します。		
参考文献	随時指示します。		
評価方法	レポート（調査・考察・文の巧拙）：70% 授業内での考察シート作成：15% 授業での討議：15%		

日本文化研究 C		前期 2 単位	1・2年
日本近現代文学の思潮を捉える		井上 明芳 (いのうえ あきよし)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本近代文学史について把握できる。 作家ひとりひとりの思索を理解できる。 文学における「私」の意義が説明できる。		
授業の概要	日本近代文学の思潮を捉えることを目標とする。日本の明治期以降の文学思潮の中でも重要な問題として「私」をどう描くかということがあった。これを作品を取り上げ、「私」問題の変遷を捉えていきたい。具体的には、「小説神髓」からはじめ、私小説に取り組む。そしてどのように継承され、発展したかを芥川龍之介や横光利一などを講義形式で取り上げ検討する。		
授業 計画	第1回	ガイダンス 講義の進め方、成績等の説明	
	第2回	日本近代文学の始まりについて	
	第3回	自然主義文学 1 リアリズムについて	
	第4回	自然主義文学 2 国木田独歩・田山花袋など	
	第5回	自然主義文学 3 島崎藤村・徳田秋声など	
	第6回	白樺派の文学 1 概要	
	第7回	白樺派の文学 2 志賀直哉を中心に	
	第8回	芥川龍之介について 1 他者の発見	
	第9回	芥川龍之介について 2 「私」の発見 「歯車」を中心に	
	第10回	プロレタリア文学について	
	第11回	新感覚派の文学 1 概要	
	第12回	新感覚派の文学 2 川端康成など	
	第13回	新感覚派の文学 3 横光利一など	
	第14回	森敦「月山」 物語構造について	
	第15回	まとめ 近代文学に表れた「私」をめぐって	
準備学習 (予習・復習等)	文学史的ジャンルについて、その区切りの授業時にレポートを作成し、提出すること。また授業時に配布する文学作品について批評を書いて提出すること。		
テキスト	講義で取り上げる作品は入手可能な文庫を使用する。また、資料等はプリント配布する。		
参考文献	中村光夫「日本の近代小説」(岩波新書) 奥野健男「日本文学史」		
評価方法	学期末試験:60% 講義時の小レポート:25% 提出課題等:15%		

日本文化研究D		後期 2 単位	1・2年
想像／創造される物語とジェンダー		上戸 理恵 (うえと りえ)	
授業の到達目標及びテーマ	やおい・BL (ボーイズラブ) と称される、女性によって読み書きされる男性同士の恋愛ものというジャンルの成立過程を理解し、ジェンダー研究の領域にこれらの表象を位置づけることができるようになる。また、このジャンルに特有の物語構造を明らかにし、物語を生成する機構について理解する。		
授業の概要	講義形式。現在の研究動向を整理し、やおい・BLのジェンダー表象がどのように位置づけられているのかを検討する。やおい・BLの系譜にある作品を取り上げ、ジェンダーの表象や創作のプロセスなどを具体的に考察する。原則として小課題を毎回提出する。また、テーマごとに議論を整理する時間を設けグループワークを実施する。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	やおい・BLの歴史の変遷 (1) やおい・BL前史	
	第3回	やおい・BLの歴史の変遷 (2) やおい・BLの展開	
	第4回	ジェンダー論における評価	
	第5回	森茉莉の少年愛小説 (1) 「恋人たちの森」を中心に	
	第6回	森茉莉の少年愛小説 (2) 「月の光の下で」の特異性	
	第7回	森茉莉の少年愛小説 (3) 議論の整理 I グループワーク	
	第8回	24年組の少女漫画家たち (1) 竹宮恵子と萩尾望都	
	第9回	24年組の少女漫画家たち (2) 大島弓子	
	第10回	24年組の少女漫画家たち (3) 議論の整理 II グループワーク	
	第11回	栗本薫／中島梓と『JUNE』	
	第12回	やおい的想像力の広がり	
	第13回	少年マンガとやおい	
	第14回	ボーイズラブというジャンル	
	第15回	講義のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に配布資料や指定テキストがある場合は必ず読んでから授業に参加するようにすること。また、配布資料の全文 (授業時に読み上げなかった箇所も含む) をよく読み、その内容について説明できるようにしておく。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを配布しそれを用いる。		
参考文献	『ユリイカ』2007年6月臨時増刊号・2007年12月臨時増刊号、永久保陽子『女性のためのエロス表現 やおい小説論』専修大学出版会など。その他、随時紹介し、必要に応じてプリントを用意する。		
評価方法	小課題の提出状況:30% グループワーク:20% レポート課題:50%		

日本文化特論		前期 2 単位	1・2年
文化を体験し、分析的な考察を試みる		辻 吉祥（つじ よしひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	文化に関する調査・実地体験を通して、「文化」と称されているものの現在的な姿のあり方を分析的に考える。歌舞伎・能にとどまらず、「日本文化」と称されてきたものを実地に検証しつつ、その制度化、「文化」化、階級性、政治性、排他性、異種混交性などの要素と経緯を、客観的に見つめられる視座と分析力を獲得する。		
授業の概要	「国文学実地研究」を引き継ぐ本授業は「教室」を市街に拡張します。歌舞伎や能、演劇、映画、美術・博物館、文学館……「文化」を実際に出かけて調査・見聞することを課します。もちろん表参道も、多国籍資本による多彩な消費文化の地であり、分析の対象です。体験を歴史的に検証する、その作業を繰り返し、文化分析の報告書に厚みを加えていきます。		
授業計画	第1回	導入—この授業の意味について	
	第2回	報告書の作成法について（基礎）	
	第3回	報告書の作成法について（実習）	
	第4回	実地研修 I 文献調査	
	第5回	実地研修 II 下調べ	
	第6回	実地研修 III 訪問	
	第7回	実地研修 IV 報告書作成	
	第8回	各自の成果発表	
	第9回	文化の歴史的な意味を考える	
	第10回	実地研究 I 文献調査	
	第11回	実地研究 II 下調べ	
	第12回	実地研究 III 訪問	
	第13回	実地研究 IV 報告書作成	
	第14回	各自の成果発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各自のテーマに合わせた諸方面にわたる調査を毎回少しずつ蓄積していくこと。		
テキスト	プリントを配布。		
参考文献	『創られた伝統』E. ホブズボウム他編 紀伊国屋書店 『芸術の規則』I・II P. ブルデュー 藤原書店 『啓蒙の弁証法』M. ホルハイマー、T. W. アドルフ 岩波文庫		
評価方法	レポート（調査力・分析力）：70% 授業内での報告・討議：30%		

日本古典文学史 I	前期 2 単位	1・2年
古代・平安篇—百人一首と源氏物語・源氏絵を中心に	小林 正明（こばやし まさあき）	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <p>○古代から平安末期までの文学史を理解することができる。 ○『源氏物語』などの古典文学を原文で読むことができるようになる。 ○源氏絵を識別することができるようになる。</p> <p>【授業の概要】</p> <p>○[形態] 講義科目であるが、学生参加、問題発見を重視する。 ○[5分間短問テスト] 数回、実施する予定。 ○[期末テスト・期末レポート] 実施しない。 ○[主要な内容] <百人一首><源氏物語・源氏絵>が中心。随時、いくつかの古典文学作品を紹介する。</p> <p>【授業計画】</p> <p>第1回 ガイダンス：授業説明、情報交換。 *リサーチ I（百人一首）割り当て——割り当ての総項目数は履修登録者の人数しだい。 #『百人一首』リスト・書式配布</p> <p>第2回 万葉秀歌選、天智・天武・持統の皇統群像 *リサーチ II（源氏絵）[1人1場面]割り当て——割り当ての総場面数は履修登録者の人数しだい。 #源氏絵、約40場面一括配布。</p> <p>第3回 百人一首篇 i：*リサーチ I 学生発表。 #『百人一首・学生リサーチ集』冊子一括配布。 □5分試験（範囲／第2回万葉秀歌選）</p> <p>第4回 百人一首篇 ii：*リサーチ I 学生発表。</p> <p>第5回 百人一首篇 iii：*リサーチ I 学生発表。</p> <p>第6回 平安日記・平安物語</p> <p>第7回 源氏物語・源氏絵篇 i：*リサーチ II 学生発表。 #『源氏絵総覧・学生リサーチ集』冊子、一括配布。 □5分試験（範囲／第4・5回百人一首篇）</p> <p>第8回 源氏物語・源氏絵篇 ii：*リサーチ II 学生発表。</p> <p>第9回 源氏物語・源氏絵篇 iii：*リサーチ II 学生発表。</p> <p>第10回 源氏物語・源氏絵篇 iv：*リサーチ II 学生発表。</p> <p>第11回 源氏物語篇—石山伝説・古注釈・地図。□5分試験（源氏絵）</p> <p>第12回 平安京篇、京都文学地図。□5分試験（第11回古注釈等）</p> <p>第13回 古代文学補遺。□5分試験（範囲／第12回平安京篇）</p> <p>第14回 平安文学補遺総復習。</p> <p>第15回 古代・平安文学篇総復習。</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】</p> <p>①[リサーチ]計2回の分担リサーチ。ワークシート使用。 ②[前期総括表]前期における発言・発表等の自己評価を配布書式1枚に記入。</p> <p>【テキスト】</p> <p>プリント配布。</p> <p>【参考文献】 特になし。</p> <p>【評価方法】</p> <p>リサーチ・シート提出：20% リサーチ発表：10% 発言の蓄積：30% 小テスト：40%</p>		

日本古典文学史Ⅱ	後期 2 単位	1・2年
中世・近世篇—平家物語群像名鑑・中近世群像名鑑を中心に	小林 正明 (こばやし まさあき)	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <p>○対象範囲として中世から江戸末期までの日本古典文学史を理解する。 ○古典作品の名称・作者・時代・ジャンルを記憶することができる。 ○日本古典文学の著名群像に親しむことができるようになる</p> <p>【授業の概要】</p> <p>○[形態]学生参加・発見学習を重視する。 ○[5分間短問テスト]何回か実施する予定。 ○[期末試験・期末レポート] 実施しない。 ○[時代の順序]必ずしも時系列とせず。 ○[主要な対象]『平家物語群像名鑑』『中近世群像名鑑』が中心。後者には、中世・近世の主系列をなす、語り物・御伽草子・謡曲(能)・西鶴・近松・浄瑠璃名作・秋成・馬琴など諸ジャンル・諸大家の代表的な人物・物語説話。</p> <p>【授業計画】</p> <p>第1回 中世政治主系列篇：『東西南北赤心己崩—私家版』寸劇。学生参加型・発声の身体学習、発言習慣に向けて。 *リサーチⅠ『中近世群像名鑑』1人1項目—崇徳院・弁慶・静御前・志水冠者・悪七兵衛景清・阿古屋・朝比奈三郎義秀・大磯虎・西明寺入道／二条・塩谷判官・大塔宮護良親王・高師直／石堂丸・俊徳丸・安寿姫・小栗判官 /万寿姫・鉢かつぎ姫・猿源氏・酒吞童子／蟬丸(逆髪)・中将姫・梅若丸・玉藻の前／おまん・八百屋お七・大経師おさん・吉野太夫／和藤内・天満屋お初・紙屋治兵衛妻おさん・夕霧太夫／桜姫・安部保名・松玉丸／真女兒(まなご)・伏姫・船虫・白縫姫。</p> <p>第2回 室町文化論—文化・政治・経済・都市・ジャンルの情報交換。 *リサーチⅡ『平家物語群像名鑑』割り当て</p> <p>第3回 西行・実朝論—和歌史で特異な位置を占める両歌人。 ◆『中近世群像名鑑』篇ⅰ学生発表：□5分試験(範囲／第2回室町文化論)</p> <p>第4回 世阿弥能楽理論—『世阿弥十六部集』紹介。 ◆『中近世群像名鑑』篇ⅱ学生発表：□5分試験(範囲／西行・実朝論)</p> <p>第5回 女人往生論—『梁塵秘抄』『源氏物語』『法華経—提婆品』 ◆『中近世群像名鑑』篇ⅲ学生発表：□5分試験(範囲／『中近世名鑑』学生発表ⅰ・ⅱ分)</p> <p>第6回 藤原定家論—古典研究史、和歌史、『明月記』 ◆『中近世群像名鑑』篇ⅳ学生発表：</p> <p>第7回 縁切り寺沿革史—東慶寺歴代住職と縁切り法□5分試験(第6定家論) ◆『中近世群像名鑑』篇ⅴ学生発表：</p> <p>第8回 中世語り物篇：小栗・刈萱など五説経、『義経記』『曾我物語』。 □5分間試験(範囲／『中近世群像名鑑』学生発表ⅲ・ⅳ・ⅳ・ⅳ・ⅳ) ◆『平家物語群像名鑑』篇ⅴ学生発表：</p> <p>第9回 西鶴論Ⅰ—俳諧、矢数俳諧。 ◆『平家物語群像名鑑』篇ⅴ学生発表：□5分試験(第7回女人往生論)</p> <p>第10回 西鶴論Ⅱ—好色物、町人物、武家物 ◆『平家物語群像名鑑』篇ⅴ学生発表：□5分試験(『平家物語群像名鑑』範囲／発表ⅰ・ⅱ)</p> <p>第11回 近松門左衛門篇Ⅰ—元禄文学対照略史。近松世話物。 ◆『平家物語群像名鑑』篇ⅴ学生発表：□5分試験(西鶴)</p> <p>第12回 近松門左衛門篇Ⅱ—世話物・歴史物。 ◆『平家物語群像名鑑』篇ⅴ学生発表：</p> <p>第13回 近松以降—近松以降の浄瑠璃・歌舞伎名作。□5分試験(範囲／『平家物語群像名鑑』学生発表ⅲ・ⅳ・ⅳ・ⅳ・ⅳ)。</p> <p>第14回 『南総里見八犬伝篇』：八犬伝の世界、挿絵、馬琴の他作品など。□5分試験(近松)</p> <p>第15回 中近世篇文学史の総括・展望 □5分試験(八犬伝)</p> <p>【準備学習(予習・復習等)】</p> <p>①[リサーチ]計2回の分担リサーチ・資料作成・発表。 ②[半期総括表]半期における発言・発表の自己総括を配布書式1枚に記入。</p> <p>【テキスト】 配布教材使用。</p> <p>【参考文献】 特になし。</p> <p>【評価方法】</p> <p>小試験 : 45% 発言の実績 : 25% リサーチ・発表 : 30%</p>		

日本芸能史 I		前期 2 単位	1・2年
中世から近世初期までの日本芸能		大木 京子（おおき きょうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	中世から近世初期に至る日本芸能の歴史を俯瞰する。		
授業の概要	中世の語り物の「平曲」や演劇芸能である「能楽」・「狂言」について、その成立背景や特徴を知る。さらにこれらを母体として生まれた近世（江戸時代）初期の諸芸能について、映像・音源資料をもとに講義する。授業を通じて、日本の「芸能」に関する理解と知識を深めていく。		
授業計画	第1回	古代の芸能	
	第2回	大陸系芸能の渡来・伎楽（消えてしまった仮面劇）	
	第3回	雅楽・舞楽	
	第4回	雑芸・白拍子など・散楽（猿楽）	
	第5回	公家から武家へ（延年舞曲）	
	第6回	田楽（田楽能）	
	第7回	猿楽（能楽）	
	第8回	観阿弥と世阿弥	
	第9回	能と狂言	
	第10回	平曲	
	第11回	幸若舞曲	
	第12回	説経	
	第13回	浄瑠璃	
	第14回	傾き者たち	
	第15回	そして庶民へ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に指示された参考書やプリントを読んでおく。		
テキスト	プリントを配付する。		
参考文献	『演劇百科大事典』（平凡社）、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）、『日本芸能史』（法政大学出版局）、『日本演劇史』（おうふう）、『日本古典芸能史』（武蔵野美術大学出版局）など		
評価方法	授業への積極的参加:30% レポートとテスト:70%		

日本芸能史Ⅱ		後期 2 単位	1・2年
江戸時代から明治中期までの日本芸能		大木 京子（おおき きょうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代庶民の最大の娯楽であった「歌舞伎」を中心に講義を進める。		
授業の概要	出雲の阿国から女歌舞伎、若衆歌舞伎、そして野郎歌舞伎の順に発生期の諸相を明らかにした後、上方と江戸の芸風の違い、また隣接する人形浄瑠璃との相互影響などについて講義する。さらに、明治維新後、西洋の影響を受けて、これらの芸能がどのように変化したのかについても言及していく。		
授業計画	第1回	阿国歌舞伎	
	第2回	女歌舞伎の禁止	
	第3回	若衆歌舞伎から野郎歌舞伎へ	
	第4回	離れ狂言と続き狂言	
	第5回	市川團十郎と坂田藤十郎（荒事と和事）	
	第6回	芳沢あやめ（女形について）	
	第7回	近松門左衛門（歌舞伎と浄瑠璃と）	
	第8回	竹本座・竹田座・豊竹座	
	第9回	三大浄瑠璃について	
	第10回	浄瑠璃と歌舞伎	
	第11回	上方歌舞伎と江戸歌舞伎	
	第12回	鶴屋南北について	
	第13回	河竹黙阿弥について	
	第14回	江戸から現代へ	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に指示された参考書やプリントを読んでおく。		
テキスト	プリントを配付する。		
参考文献	『演劇百科大事典』（平凡社）、『日本古典文学大辞典』（岩波書店）、『日本芸能史』（法政大学出版局）、『日本演劇史』（おうふう）、『日本古典芸能史』（武蔵野美術大学出版局）、『江戸演劇史』（講談社）など		
評価方法	授業への積極的参加:30% レポートとテスト:70%		

日本近代文学史 I		前期 2 単位	1・2年
文学史の諸問題と思想		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治・大正期を主に、日本の近代文学について通覧する。加えて、「日本」「近代」「文学(とその歴史)」とは何であるか、メタ・レベルの考察も平行して取り扱う。個々の名作史に文学史を還元せず、貧民窟ルポ、大逆事件、「青鞥」の意義、関東大震災と文学者の対応などの重要テーマとともに、文学を歴史過程のなかで考察できる力を身につけてゆく。		
授業の概要	講義形式。「日本」が自明の地理・国家概念ではないこと、「近代性」「文学性」をめぐる論議、芸術性は前史との連続よりもその否定によって担保されるものであることなどを見定めつつ、各回の重要テーマについて考察を深めてゆきます。必要な資料はプリントにして配布します。具体的な作品の場面、歴史の資料などを一緒に読みながら考えていきます。		
授業計画	第1回	導入	
	第2回	近代文学の成立期 坪内逍遙「当世書生気質」——優勝劣敗の近代	
	第3回	近代への懐疑1 石川啄木——挫折の近代	
	第4回	近代への懐疑2 正宗白鳥——弱い身体の近代	
	第5回	近代への失望 島崎藤村「破戒」——あぶりだす近代	
	第6回	近代の貧困 松原岩五郎「最暗黒の東京」 横山源之助「日本の下層社会」	
	第7回	暴力の近代1 大逆事件と文学	
	第8回	暴力の近代2 植民地の獲得と新しい女の近代	
	第9回	生殖をめぐる近代1 「青鞥」	
	第10回	生殖をめぐる近代2 「青鞥」と女たち	
	第11回	近代への叛乱1 大杉栄——生と相互扶助	
	第12回	近代への叛乱2 大杉栄——生と無政府	
	第13回	生命の近代1 宮沢賢治の生命思想	
	第14回	生命の近代2 宮沢賢治と暴力／非暴力	
	第15回	中野重治の詩 金時鐘の唾蟬の声	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業時に言及される諸文献について読み進めてくること。		
テキスト	プリントを配布します。		
参考文献	随時指示します。		
評価方法	レポート(調査・考察・文の巧拙):70% 授業への積極的な参加:30%		

日本近代文学史Ⅱ		後期 2 単位	1・2年
日本近現代文学とジェンダー		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本近現代文学をジェンダーとナショナリズムの視点から歴史的に概観します。 ・諸外国とのせめぎあいの中の明治期の文学・文化政策や、明治期女性が切り拓いた表現領域を概観し、漱石・花袋・芥川・太宰・安部公房から現代女性文学まで、さまざまな作品を時代状況に照らして理解します。 		
授業の概要	ジェンダー的視点を軸に、明治以降現代までの歴史社会状況と文学の関わり、とくに女性の置かれた社会的状況や、植民地時代の力学に配慮しつつ、主要な作品を具体的に紹介していきます。		
授業計画	第1回	イントロダクション 植民地主義と啓蒙主義	
	第2回	明治文学1 近代の黎明 清水紫琴「こわれ指環」と女子教育	
	第3回	明治文学2 田辺花圃と樋口一葉 その明暗	
	第4回	明治文学3 「女学生」はどうか描かれたか 田山花袋「蒲団」	
	第5回	大正文学1 良妻賢母たちの憂鬱 『青鞥』と漱石	
	第6回	大正文学2 少女たちの対抗文化 吉屋信子『花物語』	
	第7回	大正文学3 女中・娼婦・プロレタリア 格差社会にむきあう	
	第8回	昭和文学1 モダンガール・都市・映画の誘惑 乱歩・谷崎	
	第9回	昭和文学2 総力戦下の抵抗、女性、検閲	
	第10回	昭和文学3 アラサー男たちの戦争体験 野間宏、田村泰次郎	
	第11回	現代文学1 家族のかたち 島尾敏雄、大庭みな子	
	第12回	現代文学2 女性身体・身体加工・ダイエット 倉橋由美子、松本侑子	
	第13回	現代文学3 妊娠・出産・母娘の葛藤 小川洋子、笠野頼子	
	第14回	日本語文学の現在 多和田葉子のドイツ、シリル・ネザマフィの日本	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う文学作品や、その時代状況に関する文献を読み、自分なりの考えを深めます。		
テキスト	授業時にプリントを配布します。		
参考文献	齊藤美奈子『モダンガール論』文春文庫、一柳廣孝他編『文化のなかのテキスト』双文社出版、前田愛『近代読者の成立』岩波現代文庫		
評価方法	コメントカード:50% 期末レポート:50%		

古典文学A		前期 2 単位	1・2年
『萬葉集』額田王の歌をよむ		金澤 和美 (かなざわ かずみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	1、『萬葉集』における基礎的な事項および歌人額田王について学び、歌への理解を深める。2、歌に用いられている語句の意味や、上代の文法、歌の修辞法などを学び、みずから歌の内容を把握し鑑賞できるようにする。3、歌の構造や、歌にあらわされた額田王の心情、その意図などを理解し、歌が成り立たせているものを捉える。4、額田王の歌を『萬葉集』という歌集の中にあるものとして捉え、『萬葉集』の個々の歌が構築する「世界」について考える。		
授業の概要	『萬葉集』は日本における現存最古の歌集である。この授業では、その中から額田王の歌を主に取り上げる。彼女は古代の皇族のひとりであり、『萬葉集』に印象的かつ華やかな歌を残した歌人として知られている。額田王の歌を鑑賞しながら、それぞれの歌がかかえる問題について考える。また、『萬葉集』は単に古代の歌を集めた歌集というのではなく、その配列やまとまりによってさまざまな「世界」を成り立たせている。従って額田王の歌も『萬葉集』というテキストの中にあるものとして見る事がもとめられていると言える。『萬葉集』は額田王の歌をどのようにあらわしているのか。歌集としての『萬葉集』の中にある歌という視点を持ちながら、額田王の歌を読み解いていく。		
授業計画	第1回	ガイダンス (『萬葉集』入門)	
	第2回	額田王をめぐって (『萬葉集』概略と額田王)	
	第3回	『萬葉集』巻一のはじまりをよむ (①1・2番歌)	
	第4回	額田王の登場 (①7・8番歌)	
	第5回	宮廷歌人としての額田王 (①16番歌)	
	第6回	『萬葉集』の歌があらわす「歴史」 (①17・18番歌)	
	第7回	額田王の宴席歌 (①20・21番歌)	
	第8回	額田王の贈答歌 (②111～113番歌)	
	第9回	額田王の挽歌①…天智天皇崩御時挽歌群・前半 (②147～150番歌)	
	第10回	額田王の挽歌②…天智天皇崩御時挽歌群・後半 (②151～155番歌)	
	第11回	『萬葉集』巻一・巻二の問題①…額田王周辺の男性達の歌	
	第12回	『萬葉集』巻一・巻二の問題②…額田王周辺の女性達の歌	
	第13回	額田王の相聞歌 (④488・489番歌)	
	第14回	歌集としての『萬葉集』…額田王以降	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習については、各回の講義で取り上げる歌を熟読し、自分なりの現代語訳や歌にあらわされた額田王の心情、意図などについて考察しておくこと。復習については、小レポートを定期的に課すので(3回の予定)、講義を聞いて学んだ事を予習の内容と併せてまとめて提出できるようにしておく。また、小レポートをもとにした発言等も必要に応じて求めるので、答えられるよう準備をしておくこと。		
テキスト	・中西進『万葉集 全訳注原文付』(一)講談社文庫・講談社(必ず購入すること) ・その他、プリントを配布する。		
参考文献	・神野志隆光編『必携・万葉集を読むための基礎百科』別冊国文学(學燈社) ・梶川信幸『額田王と初期万葉歌人』(コレクション日本歌人選021/笠間書院)		
評価方法	期末レポート:50% 小レポート:30% 授業への積極的参加:20%		

古典文学B		後期 2 単位	1・2年
古代における「旅」を考える		今井 俊哉 (いまい としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	古代（上代・中古）における人々の暮らしの中で、その時代の「文学」が担ってきた意味を考えます。現代とは社会システムも生活環境も異なる時代では、人々の考えかたや、またその考えかたの表しかた、即ち言葉による表現のしかたにも違いが表れます。そうした古代における言語表現を学び、理解することがこの授業での目標であり、テーマとなります。		
授業の概要	古代の人々にとって「旅」とはどのようなものだったのでしょうか。旅にあるとき、また親しい人を旅に送り出したとき、人はその際の心情をどう言葉にあらわしてきたのでしょうか。また、その旅じたいを、言葉でどう表現してきたのでしょうか。この授業では、そうした古代における「旅」のありかたを、和歌を中心に眺めていきます。		
授業計画	第1回	『万葉集』における旅の歌1・旅をするもの	
	第2回	『万葉集』における旅の歌2・送り出す側	
	第3回	『万葉集』太宰帥大伴旅人1・律令官人としての旅	
	第4回	『万葉集』太宰帥大伴旅人2・妻の死と帰京	
	第5回	『万葉集』巻十五 遣新羅使一行の歌1・古代の外交	
	第6回	『万葉集』巻十五 遣新羅使一行の歌2・旅先での障害	
	第7回	『万葉集』における「地方」・東歌、防人歌ほか	
	第8回	『古今和歌集』の旅の歌	
	第9回	紀貫之の『土佐日記』1・旅の表現—漢文日記とかな日記	
	第10回	紀貫之の『土佐日記』2・子供の死と帰京	
	第11回	『うつほ物語』・清原俊隆の大冒険	
	第12回	番外編1：渋沢龍彦『高岳親王航海記』	
	第13回	『伊勢物語』・昔男の東下り	
	第14回	『源氏物語』・光源氏の須磨退去	
	第15回	番外編2：そして西行、芭蕉へ	
準備学習 (予習・復習等)	プリントに指示された質問事項の復習・整理		
テキスト	各回予習用としてテキストのプリントを配布します。		
参考文献	適宜指示します。		
評価方法	定期試験:70% 平常点(授業態度等):30%		

古典文学C		前期 2 単位	1・2年
あなたの知らない『枕草子』の魅力		津島 知明 (つしま ともあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	清少納言の枕草子から、主に日記回想段を取り上げて、政治背景などを詳しく解説しつつ、知られざる作品の真髄、面白さを理解してもらいます。同時に古典文学を学ぶ上で必要な基礎知識も身につけてもらいます。		
授業の概要	講義形式。日本文学史において、平安時代とはいかなる時代だったのか。当時の女性は、どのような環境で、何に悩み、何を生きがいとしていたのか。現代との差異や共通点を確認しながら、丁寧に枕草子を読解していきます。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	テキストについての概説	
	第3回	写本と活字本	
	第4回	摂関政治について（背景）	
	第5回	本文を精読する（1）6段を読む	
	第6回	本文を精読する（2）7段を読む	
	第7回	本文を精読する（3）6段と7段の間	
	第8回	写本を読む（1）初段	
	第9回	本文を精読する（4）21段を読む	
	第10回	本文を精読する（5）21段の背景	
	第11回	本文を精読する（6）84段を読む	
	第12回	本文を精読する（7）84段の背景	
	第13回	本文を精読する（8）84段の享受	
	第14回	写本を読む（2）跋文	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	返却されたコメントは、よく見直しておくこと。		
テキスト	「新編 枕草子」（おうふう）		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	課題（コメントなど）:60% まとめレポート:40%		

古典文学D	後期 2 単位	1・2年
『平家物語』の世界—日本文化の基層として—	清水 眞澄（しみず ますみ）	
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>本授業は、『平家物語』という古典文学と、日本文化との関わりを学ぶ。『平家物語』は、語り物文芸として800年余り伝えられて来た。その間、演劇や様々な文学作品に取り入れられて、現代もお重要な文化コンテンツでもある。日本人が、なぜこのような戦を主題とした作品を大事にしてきたのかを考え、作品の世界から動乱の時代に生きた人々の心情に触れる。さらに、『平家物語』を伝えた琵琶法師について学ぶことで、芸能と障害者の歴史にも視野を広げ、人間についての理解を深める。また本講義の特色として、丁寧なレポート指導で、進学や社会に出るための力—調べまとめる力を養う。文法や暗記の古典ではないので、歴史や文化を自分から学びつかみ取る意欲のある人を歓迎する。</p> <p><授業の概要></p> <p>講義形式を基本とするが、『平家物語』は語り物として伝えられただけではなく、能、浄瑠璃、歌舞伎、現代演劇などに取り入れられて、後世の文芸に大きな影響を与えた。従って必要に応じてAV資料を活用する。毎回、受講票を通じて質疑を行い、講義の理解を深める。学生と教員とが、『平家物語』という共通の作品に向き合い、相互コミュニケーションの中から「生きる」意義や、女性としての誇りを見い出すことを目指したい。</p> <p><授業計画></p> <p>第1回 『平家物語』入門—文学史の整理 第2回 巻第一「祇園精舎」—平氏政権の誕生と無常観 第3回 巻第一「祇王」—白拍子と尼 第4回 巻第三「足摺」—俊寛の悲劇 第5回 巻第五「宮御最期」—以仁王の挙兵と宇治川合戦 第6回 巻第六「入道死去」—清盛悪行者像の真実 第7回 巻第九「宇治川先陣」—名馬争いと頼朝 第8回 巻第九「木曾最期」—巴の行方 第9回 巻第十一「敦盛最期」—武士の罪業 第10回 巻第十一「那須与一」—弓の技と義経の真実 第11回 巻第十一「内侍所都入」—平家滅亡と三種の神器 第12回 灌頂巻「大原御幸」—女院の祈り 第13回 琵琶法師と芸能—中世・近世芸能史 第14回 レポートの書き方 第15回 まとめ</p> <p><準備学習></p> <p>各授業に先立ち、『図説 平家物語』を用いて講義内容の予習を行う。また、授業ごとに受講票で質疑を行うが、内容によって、課題（宿題）が出される。次の出席時に提出すること。</p> <p><テキスト></p> <p>『図説 平家物語』 鈴木彰・出口久徳・樋口州男・錦昭江・松井吉昭 編 河出書房新社</p> <p>◎必要に応じて、本文のプリントを配ります。</p> <p><参考文献> 授業中に紹介します。</p> <p><評価方法></p> <p>平常点（毎回、受講票を提出すること）50%、レポート50%</p>		

古典文学E		前期 2 単位	1・2年
江戸のラブストーリー		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の文学の長い歴史で、最初に女性読者を対象に商品化された恋愛小説、人情本の代表作に触れることにより、女性が小説を読むことの原初的意味を理解する。		
授業の概要	江戸後期の恋愛小説、人情本の代表作「春色梅児誉美（しゅんしよくめごよみ）」「春色辰巳園（しゅんしよくたつみのその）」を読むことを通して、現代のサブカルチャー・自己啓発本・広告・雑誌にも通じる、女性の読書をめぐる根源的な諸問題を考える。		
授業計画	第1回	女性向け恋愛小説誕生の事情	
	第2回	プロダクションシステムの作家為永春水	
	第3回	江戸と近代の恋愛観の相違	
	第4回	擬似恋愛行為としての読書	
	第5回	演技としての恋愛1 恋愛の儀礼性	
	第6回	演技としての恋愛2 冷静と情熱の間	
	第7回	演技としての恋愛3 感情の再現と提示	
	第8回	恋愛の会話を成り立たせるもの1 繰り返し	
	第9回	恋愛の会話を成り立たせるもの2 リズム	
	第10回	「いき」の美学1 媚態	
	第11回	「いき」の美学2 意気地	
	第12回	「いき」の美学3 諦観	
	第13回	女の涙 不幸と恋愛のカタルシス	
	第14回	物語の面影・歌心の引用	
	第15回	恋のふるまいと女の願い 美と道徳の調和	
準備学習 (予習・復習等)	事前にテキストを読んでおくこと。紹介された参考文献でノートを補うこと。		
テキスト	井上泰至『恋愛小説の誕生 ロマンズ・消費・いき』（笠間書院）		
参考文献	『日本古典文学大系 春色梅児誉美』（岩波書店）		
評価方法	授業への積極的参加:30% 期末にノート提出:70%		

古典文学F		後期 2 単位	1・2年
サムライの文学		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標 及びテーマ	東アジア世界の中でも、日本は長らくサムライの国だった。江戸文学に現れたサムライ像を追いかけて、日本人のヒーロー像やその背景について知る。		
授業の概要	江戸時代のサムライ達が、自己および自己の分身に言及した物語・言説を、いくつかのタイプに分けて紹介し、リーダーのためのモラル・カリスマ性を産むもの、あるいはその語りの方針について分析する。		
授業計画	第1回	サムライ階層 東アジアにおける日本の特異性	
	第2回	ヒーローの語り方 講談的方法	
	第3回	平和な時代のサムライへ 戦う者からリーダーへ	
	第4回	死生観 スイッチとしての禅	
	第5回	武士の旅 心の遍歴と情報蒐集	
	第6回	ヒーロー像の膨らみ方 娯楽化	
	第7回	家意識 武士のアイデンティティー	
	第8回	仇討1 暴力的解決の美学	
	第9回	仇討2 リーダー像の理想	
	第10回	自伝1 子孫たちへ	
	第11回	自伝2 名誉・決断・修養・志	
	第12回	武家文人1 心身一致の教育	
	第13回	武家文人2 読書階級の自覚	
	第14回	志士 武士像のファッション化	
	第15回	武士道 世界の中の日本のアイデンティティー	
準備学習 (予習・復習等)	事前にテキストを読んでおくこと。紹介された参考文献でノートを補うこと。		
テキスト	井上泰至『サムライの書齋 江戸武家文人列伝』(ペリかん社)		
参考文献	『新編日本古典文学全集 井原西鶴集4』(小学館)。		
評価方法	授業への積極的参加:30% リアクションペーパー:70%		

近代文学A		前期 2 単位	1・2年
原稿で読む昭和文学		宗像 和重 (むなかた かずしげ)	
授業の到達目標 及びテーマ	おもに戦前から戦後の昭和期の小説を対象として、近代文学の作品を一般の活字のテキストではなく、作家の原稿を通して読み解く。明治・大正期とは異なる大きな時代の変動期のなかで、昭和期の作家がそれぞれの時代をどのように生き、どのように表現したかを、肉筆の原稿を通して考え、時代と文学・作家とのかかわりを具体的に理解する。		
授業の概要	昭和文学の作家と作品をいくつか選び、その原稿を写真版や複製などで紹介しながら、表現や文体、視点や方法、時代背景や作者との関わりなどに眼を向けて、読み解いてみる。戦争の暗い谷間をくぐり抜けた昭和の文学は、時代と人間との切実なかかわりを教えてくれるだろう。受講生の発表も予定し、下記の授業計画は変更することもある。		
授業計画	第1回	はじめにー授業の概要と進め方	
	第2回	芥川龍之介の原稿	
	第3回	志賀直哉の原稿ー「暗夜行路」前編	
	第4回	志賀直哉の原稿ー「暗夜行路」後編	
	第5回	宮沢賢治の原稿ー「銀河鉄道の夜」冒頭部	
	第6回	宮沢賢治の原稿ー「銀河鉄道の夜」末尾部	
	第7回	宮沢賢治の原稿ー「雨ニモマケズ」	
	第8回	横光利一の原稿ー「花園の思想」	
	第9回	横光利一の原稿ー「旅愁」	
	第10回	谷崎潤一郎の原稿ー「蘆刈」	
	第11回	谷崎潤一郎の原稿ー「春琴抄」	
	第12回	太宰治の原稿ー「人間失格」	
	第13回	川端康成の原稿ー「雪国抄」	
	第14回	詩歌の原稿	
	第15回	まとめー昭和文学と現代	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、その時間にとりあげた原稿についての感想を提出してもらう予定。また、その作品を実際に読んでくるなどの予習・復習を課すことがある。		
テキスト	プリントを配布する予定。具体的には教室で指示する。		
参考文献	その都度、教室で指示する。		
評価方法	授業感想文等の評価:30% 学期末レポート:70%		

近代文学B		後期 2 単位	1・2年
樋口一葉の作品と日記を読む		宗像 和重 (むなかた かずしげ)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治期の女性作家として知られる樋口一葉は、明治5年に生れ、明治28年にわずか23歳で亡くなった。残された作品も20編余りに過ぎないが、明治期の作家としては、夏目漱石と並んで、今日まで広く読み継がれている。その魅力はどこにあるのか、作品と日記を通して一葉の文学に理解を深めるとともに、近代において女性が表現することの意味や、時代を越えて読み継がれ、人々の心に訴える文学の意味についても理解を深めたい。あわせて、文語体の文章を読み解けるようになることを目標とする。		
授業の概要	樋口一葉が短い生涯のなかで残した詳しい日記は、それ自体がすぐれた文学作品として今日でも知られている。その日記も織りませながら、一葉の生涯をたどるとともに、代表作である「大つごもり」「たけくらべ」「にごりえ」「十三夜」などを読み解いていきたい。受講生による発表も予定し、学習効果を高めるために、下記の授業計画は変更することがある。		
授業計画	第1回	導入 全15回の概要、授業の進め方等	
	第2回	樋口一葉の生い立ちをめぐって	
	第3回	作家志望とその背景	
	第4回	下谷龍泉寺町での生活の意味	
	第5回	「大つごもり」(1) ――その空間をめぐって	
	第6回	「大つごもり」(2) ――その文体と表現をめぐって	
	第7回	「たけくらべ」(1) ――作品の舞台とその意味	
	第8回	「たけくらべ」(2) ――子どもたちの時間	
	第9回	「たけくらべ」(3) ――作品がもたらしたもの	
	第10回	「にごりえ」(1) ――新開地の物語	
	第11回	「にごりえ」(2) ――「出世」の意味をめぐって	
	第12回	「十三夜」(1) ――前半部の読解	
	第13回	「十三夜」(2) ――後半部の読解	
	第14回	一葉の晩年の日記	
	第15回	全回のまとめと振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、その時間の内容についての感想を提出してもらおう予定。また、授業で指定したテキストを読んでくるなどの予習・復習を課すことがある。		
テキスト	文庫本をテキストとして私用し、また随時プリントを配布する予定ですが、詳しくは教室で説明します。		
参考文献	必要に応じて授業時に指示します。		
評価方法	授業中の発表や提出物:30% 学期末のレポート:70%		

近代文学C		前期 2 単位	1・2年
芥川龍之介文学の展開と可能性		岡崎 直也（おかざき なおや）	
授業の到達目標及びテーマ	日本における近代小説の高度な到達点を示し、国語教育の教材としても周知の芥川龍之介の代表作を精読する。西洋文化と東洋文化との狭間で揺れ動き、近代の終焉を身をもって告げた芥川が現代文学へ受け渡した諸問題について、小説の具体的な読解のなかで考察できる。		
授業の概要	グループごとの演習発表（本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞など）を想定しているが、受講者数によっては講読形式とすることもある。どちらの場合も活発な質疑応答のなかで、近・現代文学の研究方法を修得し、あわせて多角的思考を養うものとする。		
授業計画	第1回	授業概説・演習形式か講読形式かの選択〔講義〕	
	第2回	明治小説史概説〔講義〕	
	第3回	大正小説史概説〔講義〕	
	第4回	芥川龍之介「大川の水」1〔研究史・注釈〕	
	第5回	芥川龍之介「大川の水」2〔分析・鑑賞〕	
	第6回	芥川龍之介「羅生門」1〔研究史・注釈〕	
	第7回	芥川龍之介「羅生門」2〔分析・鑑賞〕	
	第8回	芥川龍之介「鼻」1〔研究史・注釈〕	
	第9回	芥川龍之介「鼻」2〔分析・鑑賞〕	
	第10回	芥川龍之介「奉教人の死」1〔研究史・注釈〕	
	第11回	芥川龍之介「奉教人の死」2〔分析〕	
	第12回	芥川龍之介「奉教人の死」3〔鑑賞〕	
	第13回	芥川龍之介「蟹気楼」1〔研究史・注釈〕	
	第14回	芥川龍之介「蟹気楼」2〔分析・鑑賞〕	
	第15回	芥川龍之介文学の概括	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う前に作品ごとに小レポートを作成する。演習の発表担当回は、本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞などを整理したレジュメも作成し、受講者に配付する。		
テキスト	宮坂 覺〔編〕『芥川龍之介一人と作品』翰林書房、文庫本・プリント併用		
参考文献	『芥川龍之介全作品事典』関口安義・庄司達也〔編〕勉誠出版/『芥川龍之介新事典』関口安義〔編〕翰林書房/『芥川龍之介大事典』志村有弘〔編〕勉誠出版/『日本文学史—近代から現代へ—』奥野健男 中公新書/『批評理論入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』廣野由美子 中公新書		
評価方法	発表・小レポート:40% 単位レポート:40% 質疑応答:20%		

近代文学D		後期 2 単位	1・2年
昭和文学の成立—短編小説を中心に—		岡崎 直也（おかざき なおや）	
授業の到達目標 及びテーマ	急激な科学の進歩と社会の合理化とによって精神を蝕まれ、国家間の対立や世界的な大恐慌などの危機を経験した人々は〈現実〉に不信を抱き、客観小説を支える文学観は崩壊した。そうした状況下で関東大震災の衝撃を受けて出発した昭和文学の様々な文学表現の特質と可能性とを理解できる。		
授業の概要	グループごとの演習発表（本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞など）を想定しているが、受講者数によっては講読形式とすることもある。どちらの場合も、活発な質疑応答のなかで、近・現代文学の研究方法を修得し、あわせて多角的思考を養うものとする。		
授業計画	第1回	授業概要・演習発表方法の紹介〔講義〕	
	第2回	近代小説史概説・坪内逍遙〔講義〕	
	第3回	近代小説史概説・二葉亭四迷〔講義〕	
	第4回	横光利一「蠅」1（研究史・注釈）	
	第5回	横光利一「蠅」2（分析・鑑賞）	
	第6回	葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」1（研究史・注釈）	
	第7回	葉山嘉樹「セメント樽の中の手紙」2（分析・鑑賞）	
	第8回	梶井基次郎「闇の絵巻」1（研究史・注釈）	
	第9回	梶井基次郎「闇の絵巻」2（分析・鑑賞）	
	第10回	堀 辰雄「聖家族」1（研究史・注釈）	
	第11回	堀 辰雄「聖家族」2（分析）	
	第12回	堀 辰雄「聖家族」3（鑑賞）	
	第13回	太宰 治「ヴィヨンの妻」1（研究史・注釈）	
	第14回	太宰 治「ヴィヨンの妻」2（分析）	
	第15回	太宰 治「ヴィヨンの妻」3（鑑賞）	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う前に作品ごとに小レポートを作成する。演習の発表担当回は、本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞などを整理したレジュメも作成し、受講生に配付する。		
テキスト	プリント使用		
参考文献	『近代文学・現代文学 論文・レポート作成必携』学燈社/『日本文学史—近代から現代へ—』奥野健男 中公新書/『批評理論入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』廣野由美子 中公新書		
評価方法	発表・小レポート:40% 単位レポート:40% 質疑応答:20%		

近代文学特論A		前期 2 単位	1・2年
近現代女性作家が描くと人と人の関係を物語や伝説との関連から探る		佐々木 さよ (ささき さよ)	
授業の到達目標及びテーマ	この日本という国の近代のかたちとその時代を生きた人間の姿を文学作品を通して読み、現代を生きている私たち自身、私たちの社会のありようについて考えを深めていけるようになる。人間とは何か、人間と社会との関わりはどのようなものか、といった普遍的な問いに対する答えを文学の中に探究することを理解する。		
授業の概要	近現代の小説には伝説や説話などを取り入れたものが数多くある。それらが近現代における親子や男女、兄弟姉妹等の関係とどのような関連付けられているのかを読んでみよう。書き手はなぜ既存の古典文学作品や手法を利用するのか、読み手はどのようなテキストから何を連想させて読み取っていくのかということを考えてみたい。		
授業計画	第1回	導入—全15回の予定、授業の進め方など	
	第2回	近代女性作家と和歌文学の伝統 ——岡本かの子の場合	
	第3回	歌枕的手法による「旅」の文学① ——岡本かの子『東海道五十三次』の場合 (1) 関連事項の抽出	
	第4回	歌枕的手法による「旅」の文学① ——岡本かの子「東海道五十三次」の場合 (2) 関連事項の整理と意見交換	
	第5回	歌枕的手法による「旅」の文学① ——岡本かの子「東海道五十三次」の場合 (3) 具体的分析	
	第6回	歌枕的手法による「旅」の文学② ——津島佑子の場合	
	第7回	歌枕的手法による「旅」の文学② ——津島佑子「厨子王」の場合 (1) 関連事項の抽出	
	第8回	歌枕的手法による「旅」の文学② ——津島佑子「厨子王」の場合 (2) 関連事項の整理と意見交換	
	第9回	歌枕的手法による「旅」の文学② ——津島佑子「厨子王」の場合 (2) 具体的分析	
	第10回	近代女性作家と古代神話 ——大庭みな子と津島佑子を例に	
	第11回	近代女性作家と古代神話 ——『古事記』と津島佑子「おろち」の場合 (1) 関連事項の抽出	
	第12回	近代女性作家と古代神話 ——『古事記』と津島佑子「おろち」の場合 (2) 具体的分析	
	第13回	近代女性作家と古代神話 ——『古事記』と大庭みな子「寂兮寥兮 (かたちもなく)」の場合 (1) 関連事項の抽出と整理	
	第14回	近代女性作家と古代神話 ——『古事記』と大庭みな子「寂兮寥兮 (かたちもなく)」の場合 (2) 意見交換と具体的分析	
	第15回	全体のまとめと振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	適宜、ミニレポートを授業内または自宅学習として課す。提出された報告は受講者全員で共有し、その報告の中から論点を抽出していく場合がある。この提出物は評価項目の一部とする。		
テキスト	岡本かの子『老妓抄』(新潮文庫) 大庭みな子『寂兮寥兮 (かたちもなく)』(河出文庫) 津島佑子『逢魔物語』(講談社文芸文庫)を基に、参考資料のプリントを配布する。		
参考文献	研究書ではないが瀬戸内晴美(瀬戸内寂聴)『かの子繚乱』(講談社文庫) 研究書・論文は進行状況に合わせて紹介する。また、一部を印刷し配付する場合がある。		
評価方法	レポート:55% ミニ・レポート:45%		

近代文学特論B		後期 2 単位	1・2年
夏目漱石『永日小品』『硝子戸の中』を読む		佐々木 さよ (ささき さよ)	
授業の到達目標及びテーマ	夏目漱石の作品の中では大きく扱われることが少ないが、『永日小品』や『硝子戸の中』には味わい深いものがある。『永日小品』には小説ともエッセイともつかないものもある。そうした「渋い」作品を通して、その独特の表現世界や人間が生きることの意味を問い、向き合う姿勢に触れることができる。		
授業の概要	講義形式と演習的形式とを組み合わせる。必要に応じて、適宜、課題に対する意見を求めていく。それらの意見は授業内で活用するので、グループワークの形式は取らないが、他の学生の意見に対する自分なりの取り組みを期待する。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	夏目漱石『永日小品』『硝子戸の中』の史的評価、位置づけ	
	第3回	「小品」というジャンルと夏目漱石	
	第4回	『永日小品』を読む① ——概説	
	第5回	『永日小品』を読む② ——数編の詳読、鑑賞（1） 意見提出	
	第6回	『永日小品』を読む③ ——数編の精読、鑑賞（2） 意見交換と論点抽出	
	第7回	『永日小品』を読む③ ——数編の精読、鑑賞（3） 意見交換と講義	
	第8回	『文鳥』を読む① ——概説と意見提出	
	第9回	『文鳥』を読む② ——精読、鑑賞、意見交換と論点抽出	
	第10回	『文鳥』を読む③ ——精読、鑑賞、意見交換と講義	
	第11回	『硝子戸の中』を読む① ——概説	
	第12回	『硝子戸の中』を読む② ——数編の精読、鑑賞（1）	
	第13回	『硝子戸の中』を読む③ ——数編の精読、鑑賞（2） 意見提出と講義	
	第14回	『硝子戸の中』を読む④ ——数編の精読、鑑賞（3） 意見交換と講義	
	第15回	全体のまとめと振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	取り上げる各編はどれも短くかつ内容的にも随想やそれに近い。「夢十夜」のように深い読みが進んでいる作品ではないので、自宅あるいは授業内での提出物には丁寧にじっくりと取り組んでもらいたい。		
テキスト	夏目漱石『文鳥・夢十夜』（新潮文庫）、同『硝子戸の中』（新潮文庫）		
参考文献	授業時に指示する。必要に応じてプリントを配付する。		
評価方法	レポート:60% ミニレポート:40%		

映像と文学A		後期 2 単位	1・2年
差別・戦争と文学		辻 吉祥（つじ よしひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	映像メディアと文学、それらの作品が構成し、また問いかけている「問題」を熟考する。なかでもこの日常世界からは一見、ないものであるかのように見紛いがちな「差別」、さまざまな意図の下に正体が隠される「戦争」をテーマとし、屈折し、微妙で、秘められつつ顕れるような表現の世界を読み解けるようになることを主眼とする。		
授業の概要	映像は、文学理解の単純な補助手段ではありません。ここでは文学作品による印象世界と、映像メディアによるそれとを混同せずに、それぞれが独自に持ちえた意義について考え、その二つのメディアが指し示すところを考えることにします。「問題と私」ではなく、「問題の中に生きる私」「問題を構成する私」に出会う創造的な機会を提供します。		
授業 計画	第1回	導入——宮沢賢治『よだかの星』	
	第2回	ハンセン病（文学）についての理解（映像・日本）	
	第3回	ハンセン病（文学）についての理解（映像・朝鮮半島）	
	第4回	ハンセン病（文学）についての理解（映像・現在の日本）	
	第5回	ハンセン病（文学）についての理解（テキスト）	
	第6回	原一男の映画——戦争の傷痕（映像）	
	第7回	原一男の映画——戦争の傷痕（映像とテキスト）	
	第8回	武田泰淳『ひかりごけ』——映像と考察	
	第9回	武田泰淳『ひかりごけ』——映像・テキストと考察	
	第10回	井上光晴『地の群れ』——映像と考察	
	第11回	井上光晴『地の群れ』——映像・テキストと考察	
	第12回	井上ひさし『父と暮らせば』——映像と考察	
	第13回	井上ひさし『父と暮らせば』——映像・テキストと考察	
	第14回	戦場の女たち——映像と考察	
	第15回	戦場の女たち——映像・テキストと考察	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業時に言及される諸文献について各自読み進めてくること。		
テキスト	授業中に多く配布するほか、各自の探究に必要なものは随時案内します。		
参考文献	北條民雄『いのちの初夜』角川文庫 滝尾英二『朝鮮ハンセン病史—日本植民地下の小鹿島』未来社		
評価方法	レポート（調査・考察・文の巧拙）：70% 授業内での考察シート作成：15% 授業への積極的な参加：15%		

映像と文学B		前期 2 単位	1・2年
文学と映画		中澤 弥（なかざわ わたる）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本映画の歴史の中で文学作品が重要な素材となるのは、1930年代に当時のベストセラー小説を映画化した「文芸映画」に始まります。その後、1950年代の映画黄金期を経てメディアが多様化した現代にいたるまでの文学と映画の関係を理解できるようにします。		
授業の概要	文学と映画は互いに刺激を受けながら作品を生み出してきました。この授業では、映像化された文学作品を検討することで、両者の関係をその発生から変質まで追ってみたいと思います。それはまた、ジャンルを超えての芸術の交流を考えることにもなります。		
授業計画	第1回	文芸映画というジャンルの成立	
	第2回	豊田四郎の登場	
	第3回	成瀬巳喜男「浮雲」の世界	
	第4回	森田芳光「家族ゲーム」	
	第5回	リメイク映画についてー「伊豆の踊子」など	
	第6回	安部公房と勅使河原宏	
	第7回	寺山修司と映像の実験	
	第8回	鈴木清順 大正ロマン三部作	
	第9回	大林宣彦「廃市」の世界	
	第10回	モスラと中村真一郎たち	
	第11回	鈴木清順 大正ロマン三部作	
	第12回	黒沢清のホラー映画	
	第13回	青山真治と岩井俊二	
	第14回	演劇から映像へー松尾スズキなど	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	取り上げる映画の原作小説を事前に読んでおくことが望ましい。また、講義後に映画の全体を鑑賞すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	レポート:70% 平常点:30%		

漢文入門A		後期 2 単位	1・2年
中国古典詩の世界—白楽天「長恨歌」を読む		坂口 三樹（さかぐち みき）	
授業の到達目標及びテーマ	中国古典を読むために必要な基礎学力の習得を目指す。特に、われわれ日本人が漢文を読むために生み出した漢文訓読の基礎知識を整備し、あわせて作品読解に必要な語彙・語法や歴史・文化に対する理解を深めることで、独力でも原典が読解できるようにする。		
授業の概要	中唐の白居易、字は楽天（772-846）の「長恨歌」は、唐の玄宗と楊貴妃との悲劇に終わった恋愛に取材した長篇の物語詩である。授業では、唐詩についての概説の後、全120句からなるこの詩をいくつかの段に分けて読解・鑑賞する。その際、時代背景などにもできる限り言及しながら、作者の表現意識や作品の特色について考察を加える。		
授業計画	第1回	唐詩概説—時代区分と形式分類	
	第2回	傾国の美女（第1～8句）	
	第3回	早春の華清池（第9～16句）	
	第4回	寵愛の独占と一門の栄華（第17～26句）	
	第5回	安史の乱の勃発（第27～32句）	
	第6回	馬嵬の悲劇（第33～42句）	
	第7回	蜀地流寓（第43～50句）	
	第8回	長安還御（第51～60句）	
	第9回	寂寥の日々（第61～74句）	
	第10回	道士の異界行脚（第75～88句）	
	第11回	仙女太真との対面（第89～100句）	
	第12回	玄宗への思い（第101～112句）	
	第13回	永遠の愛の誓い（第113～120句）	
	第14回	「長恨歌」と日本文学	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で取り扱う段落については、あらかじめ参考書等を利用して訓読と意味を調べたうえで授業に臨むこと。		
テキスト	特になし。プリントを用意する。		
参考文献	川合康三訳注『白楽天詩選』上（岩波文庫）、川合康三著『白楽天』（岩波新書）、村山吉廣著『楊貴妃』（中公新書）。その他、授業中に随時紹介する。		
評価方法	授業時の課題:40% 定期試験:60%		

漢文入門B		前期 2 単位	1・2年
漢文訓読の基礎		古田島 洋介（こたじま ようすけ）	
授業の到達目標 及びテーマ	漢文を訓読するための基礎知識を習得することを目標とする。「対象としての漢文」と「方法としての訓読」を明確に意識し、最終的には、与えられた書き下し文に従って、白文に対して正確に「返り点」「送り仮名」が付けられるようになる。		
授業の概要	「対象としての漢文」と「方法としての訓読」を踏まえ、訓読の基礎知識すなわち発音としての「音読み」「訓読み」および特殊な発音を持つ「再読文字」「置き字」について認識を深め、「漢文法」の基礎事項をも確認したうえで、最も主要な訓点たる「返り点」について十分な練習作業を課す。		
授業計画	第1回	対象としての漢文	
	第2回	方法としての訓読	
	第3回	発音（1）音読み	
	第4回	発音（2）訓読み	
	第5回	特殊な発音を持つ文字（1）再読文字	
	第6回	特殊な発音を持つ文字（2）置き字	
	第7回	漢文法の基礎事項（1）文型	
	第8回	漢文法の基礎事項（2）語間連結構造	
	第9回	返り点概説（1）符号の体系	
	第10回	返り点概説（2）用法の原則	
	第11回	返り点演習（1）基礎事項確認問題1：レ点・一二点	
	第12回	返り点演習（2）基礎事項確認問題2：上下点・甲乙点・天地人点	
	第13回	返り点演習（3）連読符号（ハイフン）応用問題	
	第14回	返り点演習（4）例外措置を必要とする問題	
	第15回	まとめ＋質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、授業に臨む前にテキストの関係部分を一読して、十全に理解できない箇所を質問項目として用意し、授業を受けても理解が行き届かない場合は、必ず質問して授業中に疑問点を解消すること。つまり質問ではないかと懸念する必要はまったくない。		
テキスト	古田島洋介・湯城吉信『漢文訓読入門』（明治書院）		
参考文献	古田島洋介『これならわかる返り点』（新典社《新典社新書》25）；古田島洋介『これならわかる漢文の送り仮名』（新典社《新典社選書》46）		
評価方法	学期末筆記試験：90% 積極性：10%		

漢文特殊講義		後期 2 単位	1・2年
「赤い糸」原話講読		古田島 洋介（こたじま ようすけ）	
授業の到達目標 及びテーマ	〔唐〕李復言「定婚店」（訓点付き）を精読することにより、漢文の読解力を養成することを目標とする。当該説話は、日本の殊に若い女性のあいだに広まっている「赤い糸」の伝説の原話と推定され、漢文の読解力を向上させるためにも恰好の素材であり、訓点付きの漢文が平易に読めるようになる。		
授業の概要	〔唐〕李復言「定婚店」（訓点付き）を精読する。訓点すなわち「返り点」「送り仮名」はもとより、文型や助字その他についても詳細な解説を加えつつ講読してゆく。受講者は積極的に質問を提出すること。 なお、平常レポート（複数回）として書き下し文の作成を、学期末レポートとして全訳の作成を課す。		
授業計画	第1回	概要の説明：教材の説明＋書き下し文の作成要領	
	第2回	「定婚店」講読（1）固有名詞の処理法	
	第3回	「定婚店」講読（2）基本構文	
	第4回	「定婚店」講読（3）疑問文	
	第5回	「定婚店」講読（4）反語文	
	第6回	「定婚店」講読（5）会話文の処理法	
	第7回	「定婚店」講読（6）音読みと訓読み	
	第8回	「定婚店」講読（7）副詞に関する注意点	
	第9回	「定婚店」講読（8）多義語への対処法	
	第10回	「定婚店」講読（9）語間連結構造の把握	
	第11回	「定婚店」講読（10）話型：Predestined Wife の特徴	
	第12回	「赤い糸」の日本への伝来（1）中世	
	第13回	「赤い糸」の日本への伝来（2）近世	
	第14回	「赤い糸」の日本への伝来（3）近現代	
	第15回	まとめ＋質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、読めない漢字を調べて必ず読めるようにし、文意を考えておくこと。 授業後に、理解が十全でない箇所を質問項目として用意し、次回の授業を受けても理解が行き届かない場合は、必ず質問して疑問点を解消すること。つまらぬ質問ではないかと懸念する必要はまったくない。		
テキスト	ナシ。必要な教材は、すべてプリントで配付する。		
参考文献	古田島洋介『「縁」について――中国と日本』（新典社）；古田島洋介・湯城吉信『漢文訓読入門』（明治書院）		
評価方法	学期末筆記試験：50% 平常レポート：25% 学期末レポート：15% 積極性：10%		

日本史 A I		前期 2 単位	1・2年
日本古代・中世史		関口 崇史（せきぐち たかし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>歴史とは何かを理解する。 日本の成立から古代日本の政治と文化を理解する。 古代日本と東アジアとの関係を理解する。 武士の成立から日本の中世（鎌倉時代）の政治と文化を理解する。</p>		
授業の概要	<p>全体を大きく古代史と中世史（鎌倉時代）にわけるとして、中国文献の日本に関する記事に注目しながら古代日本と東アジア世界の関係を明らかにする。古代の政治の流れと仏教を中心として古代日本の文化を明らかにする。中世史（鎌倉時代）について鎌倉幕府と朝廷の関係を踏まえつつ当時の政治状況を明らかにする。鎌倉仏教の特色を中心とした当該期の文化を明らかにする。</p>		
授業計画	第1回	歴史と時代区分	
	第2回	縄文・弥生時代の日本列島 [準備学習] 土器について調べる	
	第3回	古代東アジア世界と日本 [準備学習] 卑弥呼について調べる	
	第4回	大和王権の成立 [準備学習] 大和朝廷とは何かを調べる	
	第5回	飛鳥時代の政治と文化 [準備学習] 飛鳥時代とはいつか調べる	
	第6回	奈良時代の政治と文化 [準備学習] 奈良時代とはいつか調べる	
	第7回	平安時代の政治 [準備学習] 平安時代とはいつか調べる	
	第8回	平安貴族のライフスタイル [準備学習] 貴族について調べる	
	第9回	平安時代の文化 [準備学習] 極楽往生について調べる	
	第10回	院政と平氏政権 [準備学習] 平清盛について調べる	
	第11回	鎌倉時代の政治 [準備学習] 鎌倉時代とはいつか調べる	
	第12回	鎌倉時代の裁判 [準備学習] 三問三答について調べる	
	第13回	鎌倉時代の仏教 [準備学習] 鎌倉新仏教とは何か調べる	
	第14回	鎌倉幕府の滅亡 [準備学習] 後醍醐天皇について調べる	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	<p>歴史は時間の流れをしっかりと把握することが理解を深めます。 各時代の始まりと終りについて事前に調べ、出席して下さい。</p>		
テキスト	特になし。プリントを配布する予定		
参考文献	<p>五味文彦編『もういちど読む 山川日本史』（山川出版社）など。 その他、随時紹介する。</p>		
評価方法	授業感想文:20% レポート:80%		

日本史 A II		後期 2 単位	1・2年
日本中世（南北朝～戦国時代）・近世史		関口 崇史（せきぐち たかし）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>歴史とは何かを理解する。 南北朝動乱（中世史）から、近世史の政治と文化を理解する。 貴族・武士・庶民など各階層の動向を理解し、日本の中世・近世の歴史を理解する。</p>		
授業の概要	<p>全体を中世・近世史に分ける。 室町時代について政治の流れを明らかにし、将軍と天皇・貴族との関係、北山文化・東山文化を中心とした当時の文化を明らかにする。 惣村、町衆を手がかりに当時の民衆の動向を明らかにする。 江戸幕府の政治と江戸幕府による改革、そして滅亡までの流れを明らかにする。 町人文化を中心とした江戸時代の文化を明らかにする。</p>		
授業計画	第1回	歴史と時代区分	
	第2回	南北朝の動乱 [準備学習] 観応の擾乱について調べる	
	第3回	室町時代の政治と文化（1） 北山文化 [準備学習] 足利義満について調べる	
	第4回	恐怖の世一室町貴族の日常 [準備学習] 足利義教について調べる	
	第5回	室町時代の政治と文化（2） 東山文化 [準備学習] 足利義政について調べる	
	第6回	惣村の発展 [準備学習] 惣村について調べる	
	第7回	町衆の活動 [準備学習] 町衆について調べる	
	第8回	戦国時代の政治 [準備学習] 織田信長について調べる	
	第9回	戦国時代の宗教 [準備学習] 日蓮宗・浄土真宗について調べる	
	第10回	江戸時代の政治一武断政治から文治政治へ [準備学習] 徳川家康について調べる	
	第11回	江戸時代の宗教 [準備学習] 檀家制について調べる	
	第12回	江戸時代の出版文化 [準備学習] 貸本屋について調べる	
	第13回	近世村落の生活 [準備学習] 五人組について調べる	
	第14回	江戸幕府の滅亡 [準備学習] 尊皇攘夷運動について調べる	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	<p>歴史は時間の流れをしっかりと把握することが理解を深めます。 各時代の始まりと終りについて事前に調べ、出席して下さい。</p>		
テキスト	特になし。プリントを配布する予定		
参考文献	<p>五味文彦編『もう一度読む 山川日本史』（山川出版社）など。 その他、随時紹介する。</p>		
評価方法	授業感想文:20% レポート:80%		

日本史 B I		前期 2 単位	1・2年
私たちと近代史		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治以降の変化について、社会・思想・政治・経済など様々な角度から考察する。第1に人々の思いや生活といった観点から歴史を解くと何が見えてくるのか。第2に国家と社会、国際問題、アジアとの関係など現在の課題を歴史的経緯の中で理解すると何が見えてくるのか。この2つの問いを軸に、近代日本の歩みを身近な視点かつグローバルな視野から通観できるようにする。		
授業の概要	重要なテーマを中心に時代状況と問題を探求し、歴史の推移やその特質を多面的に考察する。文献や映像など様々な資料を用いて学びを深め、今日的課題を考えていく。毎回授業の感想や意見等を所定用紙に記入・提出し、参加意欲や理解度をみながら授業を進める。後半に1回レポート提出を課す。		
授業 計画	第1回	序論：歴史・社会・人間	
	第2回	世界史の中の明治維新	
	第3回	文明開化と民衆	
	第4回	自由民権運動	
	第5回	国境の確定と周辺諸国	
	第6回	蝦夷から〈北海道〉へ	
	第7回	琉球から〈沖縄〉へ	
	第8回	日清・日露戦争	
	第9回	韓国併合①	
	第10回	韓国併合②	
	第11回	第一次世界大戦	
	第12回	大戦期の日本とアジア	
	第13回	国際協調の時代へ	
	第14回	大正デモクラシー	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業の前には配布資料などを熟読し事柄の推移や要点がどこにあるかをあらかじめ考えておくこと。		
テキスト	毎回資料プリントを配布する		
参考文献	講義のテーマに合わせて随時紹介する		
評価方法	平常点:40% レポート:30% 試験:30%		

日本史BⅡ		後期 2 単位	1・2年
私たちの近現代史		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標及びテーマ	大正から昭和の歴史について、社会・思想・政治・経済など様々な角度から考察する。第1に人々の思いや生活といった観点から歴史を解くと何が見えてくるのか。第2に国家と社会、国際問題、アジアとの関係など現代的課題を歴史的推移の中で理解すると何が見えてくるのか。この2つを軸に、近現代史を身近な視点かつグローバルな視野から通観できるようにする。		
授業の概要	重要なテーマを中心に時代状況とその問題を探求し、歴史の推移やその特質を知る。文献や映像など様々な資料を手がかりに歴史をみる力を養い、今日的課題を考える。毎回授業の感想や意見等を所定用紙に記入・提出し、参加意欲や理解度をみながら授業を進める。後半に1回レポート提出を課す。		
授業計画	第1回	明治から大正へ 大きな流れをつかむ	
	第2回	民衆運動の展開	
	第3回	植民地支配の諸問題	
	第4回	世界恐慌と日本経済	
	第5回	関東大震災と虐殺事件	
	第6回	満州事変と軍部の台頭	
	第7回	国家主義教育と子どもたち	
	第8回	日中戦争から太平洋戦争へ	
	第9回	戦線の拡大と「大東亜共栄圏」	
	第10回	戦争と人間①「健康」の推進	
	第11回	戦争と人間②戦場の兵士たち	
	第12回	戦争の終結と占領政策	
	第13回	戦後日本の出発	
	第14回	現代社会の中で	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業の前には配布資料などを熟読し事柄の推移や要点がどこにあるかをあらかじめ考えておくこと。		
テキスト	毎回資料プリントを配布する		
参考文献	講義のテーマに合わせて随時紹介する		
評価方法	平常点:40% レポート:30% 試験:30%		

日本思想研究 A		前期 2 単位	1・2年
近代天皇制と現代日本		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	歴史を参照しつつ、現代の私たち自身の問題を考えるための材料と思考力を獲得することが目標です。教育、植民地主義、戦争、ジェンダー、差別、といった事柄に即しながら、私たちの「内なる天皇制」を見出すことをテーマとします。		
授業の概要	天皇制は、日本社会を奥深いところで規定しています。日本国憲法下の象徴天皇制であってもなおそうであると言えます。というより、私たちの社会や心のありようが天皇制を必要としていると言ったほうがよいでしょう。それはどのような社会や心のありようなのか。天皇制を通して、日本の社会と精神状況について考えます。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	近代天皇制の成立と教育勅語(1)―「教育勅語体制」の成立	
	第3回	近代天皇制の成立と教育勅語(2)―教育勅語の社会的機能	
	第4回	宗教装置としての天皇制	
	第5回	靖国神社問題(1)―靖国問題とは何か	
	第6回	靖国神社問題(2)―靖国問題の争点	
	第7回	天皇制・日本精神・キリスト教(1)―キリスト教と天皇制	
	第8回	天皇制・日本精神・キリスト教(2)―キリスト教の戦争協力	
	第9回	天皇制とジェンダー(1)―女性皇族のメディア報道	
	第10回	天皇制とジェンダー(2)―皇位継承問題	
	第11回	天皇制とハンセン病差別(1)―ハンセン病問題の歴史と現在	
	第12回	天皇制とハンセン病差別(2)―ハンセン病問題と天皇制	
	第13回	天皇制と沖縄(1)―沖縄の皇民化	
	第14回	天皇制と沖縄(2)―「天皇メッセージ」と沖縄の基地化	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	日頃から天皇制に関する報道に触れ、読書を行い、関連する事跡を訪問すること。		
テキスト	授業時にプリントを配布します。		
参考文献	授業時に指示します。		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

日本思想研究B		後期 2 単位	1・2年
女性の生き方からたどる近代とその思想～性差別・貧困・格差・いのちをめぐる現在～		小林 瑞乃（こばやし みずの）	
授業の到達目標及びテーマ	恋愛・結婚・子育て・仕事など多くの選択肢がある現代女性の自由で多様な生き方は、強い制限に縛られていた過去の女性達の願望や行動によって獲得されたものである。国民国家の形成、世界情勢の変転、繰り返される戦争など近代以降激変していく時代状況を（女であること）を通して考察し、性差別、他民族支配、障がい者、病者、いのちの選別などを焦点に、近現代の思想を多角的に深く理解できるようにする。		
授業の概要	近代以降の日本について文献や映像など様々な資料を読み解き、女性の生活や社会的変化の歴史的動向を生身の人間の試行錯誤＝思想を軸に理解する。特に性差別、病と健康、優生思想、貧富といった重層的な支配と差別の実態とその特質を検証する。さらに国内の状況だけでなく欧米やアジアとの比較など世界的視野から諸問題を取り上げ、国際社会における現代日本女性の置かれている位相を明らかにする。		
授業計画	第1回	序論	
	第2回	明治国家と「家」制度	
	第3回	自由民権運動と女性	
	第4回	「良妻賢母」主義の教育	
	第5回	産業革命と「女工」の労働環境	
	第6回	農村女性の実状	
	第7回	「専業主婦」の誕生	
	第8回	女性解放運動の担い手とその思想：〈私〉はどう生きる？	
	第9回	「母性保護論争」：人生にとって大切なこと	
	第10回	重層的な支配構造：アジア民族、病者、障がい者への差別と偏見	
	第11回	戦争と女性① 代替労働力として	
	第12回	戦争と女性② 〈いのち〉をめぐる	
	第13回	敗戦と民主化	
	第14回	現代社会と女性① 諸問題の確認	
	第15回	現代社会と女性② 未来に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	授業の前にはテキスト・参考文献・関連資料などを熟読し、事柄の推移や要点はどこにあるか等をあらかじめ考えておくこと。		
テキスト	毎回資料プリントを配布する		
参考文献	脇田晴子他編『日本女性史』、歴史教育者協議会編『学びあう女と男の日本史』、日韓共通歴史教材『学び、つながる日本と韓国の近現代史』他、授業時に随時紹介する		
評価方法	平常点:40% レポート:30% 試験:30%		

近代日本社会論		前期 2 単位	1・2年
近代日本社会を複眼的に見る		高 成鳳（こう そんぼん）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本の近現代史を、同時代の周辺アジア諸国の歴史と比較しながら読み解き、歴史を動かす要因と、歴史が持つ今日的意味について考えます。</p> <p>○歴史と社会を複眼的、多面的に捉えることを通して、あらゆる情報に対し自分で考え理解するための視座を養います。</p>		
授業の概要	<p>この授業では、近代日本社会の歩みについて、社会・経済・文化など多方面で起こった近代固有の変化と、日本と近隣アジア地域との関係を軸に考察します。</p> <p>明治期以降、国家の近代化で他のアジア諸国に先んじた日本は、周辺アジア諸国・地域とどのように関わってきたのか、日本の社会・経済の仕組みは近代においてどう変化し、これらはどのような今日的意味を持っているのかを受講者とともに考えながら、日本の近代史を読み解いてゆきます。なお取り上げるテーマ・題材については、時事的な事案も含め受講者の関心に沿って出来るだけ柔軟に対応したいと考えています。授業への積極的な参加と提案を期待します。</p>		
授業計画	第1回	はじめに-歴史を複眼的に見る	
	第2回	近代を考える-世界史からの視点	
	第3回	近代を考える-日本史からの視点	
	第4回	近代を考える-アジア史からの視点	
	第5回	植民地と日本-台湾・朝鮮・「満洲」	
	第6回	日本の植民地支配、その特殊性	
	第7回	近代日本と沖縄	
	第8回	近代日本の都市化・工業化	
	第9回	近代日本の「自画像」-観光の眼差し	
	第10回	日本と東アジア-共有する近代	
	第11回	日本版ファシズムと総力戦体制	
	第12回	第二次大戦と日本、東アジア	
	第13回	戦前と戦後-連続と断絶	
	第14回	現代へと連なる近代の記憶	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各回の授業終了時に、次回授業で取り上げる内容とポイントについて説明します。受講者はこれらについての自身の理解や考えを簡単に整理の上、授業に臨んでください。		
テキスト	テキストは特に定めず、資料を配付します。		
参考文献	授業内で随時紹介します。		
評価方法	授業感想文:40% ミニレポート:20% レポート試験:40%		

現代日本社会論		後期 2 単位	1・2年
現代日本社会を複眼的に見る		高 成鳳（こう そんぼん）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本の近現代史を、同時代の周辺アジア諸国の歴史と比較しながら読み解き、歴史を動かす要因と、歴史が持つ今日的意味について考えます。</p> <p>○歴史と社会を複眼的、多面的に捉えることを通して、あらゆる情報に対し自分で考え理解するための視座を養います。</p>		
授業の概要	<p>この授業では、現代日本社会の歩みについて、第二次大戦終結から現在に至るまで日本の社会・経済・文化など各方面で起こった変化と、同時代の日本と近隣アジア地域との関係を軸に考察します。第二次大戦終結後、日本と周辺アジア諸国はどのような社会を形作ってきたのか、そこでは日本と周辺諸国との間にいかなる利害や対立が存在し、それらがどう変化してきたのか、二〇世紀後半から今日まで日本の社会と人々の暮らしはどのように変わり続けてきたのかを受講者とともに考えたどりながら、時事的な事案についての分析や未来への展望も交えつつ、日本の現代史を読み解いてゆきます。授業への積極的な参加と提案を期待します。</p>		
授業計画	第1回	はじめに-戦後日本の始動	
	第2回	講和と東アジア冷戦	
	第3回	冷戦と日本、東アジア-日韓条約をめぐって	
	第4回	冷戦と日本、東アジア-日中国交回復と台湾	
	第5回	戦後日本の対外イメージ変遷	
	第6回	高度経済成長の光と影	
	第7回	東アジアの経済成長と日本	
	第8回	アジアの民主化と日本	
	第9回	メディアと世論について考える	
	第10回	国際化と在日外国人問題について考える	
	第11回	沖縄と基地問題を考える	
	第12回	歴史認識問題を考える	
	第13回	「3.11」以後-地方から考える	
	第14回	日本と東アジア、世界のこれから	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各回の授業終了時に、次回授業で取り上げる内容とポイントについて説明します。受講者はこれらについての自身の理解や考えを簡単に整理の上、授業に臨んでください。		
テキスト	テキストは特に定めず、資料を配付します。		
参考文献	授業内で随時紹介します。		
評価方法	授業感想文:40% ミニレポート:20% レポート試験:40%		

日本社会と国家		後期 2 単位	1・2年
近代沖縄の歴史と思想——植民地化と抵抗		輪島 達郎（わじま たつろう）	
授業の到達目標 及びテーマ	琉球王国が日本に編入された琉球処分(1872～9年)以降の沖縄の歴史・文化・思想を学びながら、日本が沖縄に行ってきた「植民地化」および「軍事要塞化」と、それにたいする沖縄の「抵抗」について考えます。 沖縄を学ぶことを通して、植民者としての日本と日本人、という視点を獲得することが目標です。		
授業の概要	近代以降の沖縄の歴史に沿って進めますが、多文化主義や少数民族論など、つねに現代社会の課題を念頭に置きます。また、「沖縄の植民地化と抵抗」という課題に、政治・経済だけでなく、言語、生活習慣、芸能など文化的な面からもアプローチしますので、沖縄芸能の鑑賞や沖縄語の学習も随所に織り交ぜていきます。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	沖縄に何を学ぶか	
	第3回	琉球処分と沖縄の植民地化(1)—琉球処分の経過	
	第4回	琉球処分と沖縄の植民地化(2)—旧慣温存策とその転換	
	第5回	沖縄差別と自由民権運動	
	第6回	沖縄の音楽と演劇(1)—民謡と沖縄芝居	
	第7回	日本化・皇民化と方言論争	
	第8回	沖縄戦と住民	
	第9回	沖縄の音楽と演劇(2)—現代の沖縄芸能	
	第10回	米軍統治と復帰運動	
	第11回	歴史教科書問題	
	第12回	自立への課題(1)—基地と経済	
	第13回	沖縄の音楽と演劇(3)—組踊と古典芸能	
	第14回	自立への課題(2)—文化とアイデンティティー	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	沖縄に関する報道によく注意を払ってください。		
テキスト	授業時にプリントを配布します。		
参考文献	新崎盛暉『現代日本と沖縄』（山川出版社、2001年） 沖縄歴史教育研究会『改訂版 高等学校 琉球・沖縄の歴史と文化』（編集工房 東洋企画、2009年）		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

日本社会と家族		前期 2 単位	1・2年
家族の法と倫理		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	まず第一に、現代日本社会において家族関係がどのような特徴を持っており、どのような課題を抱えているかを把握することを目標とする。そして第二に、自己決定の尊重を旨としている現代において、家族は個人の生き方にどのように関わるものとされているかを吟味し、各人の生き方を支え合う家族関係の在り方を見出すことを目標とする。		
授業の概要	重要な社会的課題を題材にして、個人の生き方と家族の関わりについて考えていく。テーマとして、脳死・臓器移植、安楽死・尊厳死、夫婦別氏論議などを取り上げる。その際、学生自身が現在持っている家族観を探っていく形で授業を進めていく。		
授業 計画	第1回	はじめに：人間関係の原理と家族	
	第2回	＜臓器移植から考える＞ 脳死・臓器移植と自己決定	
	第3回	脳死・臓器移植と家族	
	第4回	臓器は誰のものか	
	第5回	個人の自由と家族の役割	
	第6回	＜家族の法と倫理＞ 現代日本社会における家族問題の諸相	
	第7回	家族法における家族関係、夫婦関係の原則	
	第8回	夫婦別氏論議から考える家族	
	第9回	＜安楽死から考える＞ 生命の尊重と安楽死と家族	
	第10回	なぜ人を殺してはいけないのか：具体例から考える	
	第11回	あなたならどうする？医療と家族とケア	
	第12回	東海大学安楽死事件から考える家族	
	第13回	三つのモデルから考える家族	
	第14回	家族関係における自由・平等・福祉	
	第15回	まとめ：生き方を支え合う家族関係のために必要なこと	
準備学習 (予習・復習等)	各テーマを扱う前に、皆さんに「あなたならどう考えるか」を問う質問を提示する。次の授業までに考えて授業に臨むこと。次の授業までに小レポートを提出してもらうことも数回ある。授業後は、自分の答えが授業を通してどのように変化したかをまとめること。		
テキスト	河見誠『現代社会と法原理』（成文堂）		
参考文献	指定しない。		
評価方法	期末レポート：80% 授業参加（提出物含）：20%		

日本社会とメディア		前期 2 単位	1・2年
ニュースのメカニズムと影響について学ぶ		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>私たちが毎日接触しているニュースはどのようにして出来上がっているのか。また、それはどのように受け止められ、どのような影響を私たちに及ぼしているのか。これらについて理解を深めることで情報・メディアリテラシーを高めることを目指したい。時事的なニュースに主体的に向き合い、批判的に読解することができるようになる。</p>		
授業の概要	<p>講義形式の授業である。まず、コミュニケーション、マス・コミュニケーション、日本のマスコミの特徴、ニュースのメカニズムについて概観する。次に、国際報道、災害報道、犯罪報道の現状と問題点について検討する。さらに、マスコミの報道の影響について具体的事例を取り上げて、批判的に考察する。</p>		
授業計画	第1回	コミュニケーションとマス・コミュニケーション	
	第2回	日本のマスコミの特徴	
	第3回	ニュースとジャーナリズム	
	第4回	国際報道（1）ニュースの流れと格差	
	第5回	国際報道（2）アジア報道	
	第6回	災害報道（1）震災報道	
	第7回	災害報道（2）報道と防災	
	第8回	犯罪報道（1）報道の問題	
	第9回	犯罪報道（2）取材の問題	
	第10回	犯罪報道（3）人権侵害とその救済	
	第11回	誤報	
	第12回	マスコミ報道の影響（1）健康と食	
	第13回	マスコミ報道の影響（2）選挙	
	第14回	マスコミ報道の影響（3）自殺	
	第15回	マスコミ報道の影響（4）パニック	
準備学習 (予習・復習等)	<p>とくにないが、時事的なニュースに興味をもち理解するためには、日本や世界の日々の出来事に関心をもつことが期待される。</p>		
テキスト	<p>とくになし。関連資料を適宜配布する。</p>		
参考文献	<p>早川善治郎編『新版概説マス・コミュニケーション』（学文社）河野義行『「疑惑」は晴れようとも』（学春文庫）読売新聞社『「人権」報道』（中央公論新社）梓澤和幸『報道被害』（岩波新書）</p>		
評価方法	<p>平常点:20% 定期試験:80%</p>		

マス・コミュニケーション論A		後期 2 単位	1・2年
これからの情報化社会：ブロードバンドとユビキタス時代		川村 受映（かわむら じゅえい）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>私達は今「インターネット」や「ブロードバンド」「モバイル通信」「ユビキタス」など、情報通信ネットワークと切り離せない社会に生きている。「情報化社会」とはどんな社会なのか、私たちの生活は以前とどのように変わり、これからどのような未来に向かっていくのかを探求し、理解できるようになる。</p>		
授業の概要	<p>毎回パワーポイントやインターネットを使い、講義形式で授業を進める。学生がどれだけ理解しているのかを確認するため、授業の最後に小レポートを作成してもらう。皆で共有した方がいいと判断される意見や質問などは次回の授業で発表する。</p>		
授業計画	第1回	情報化社会	
	第2回	IT情報技術の進歩	
	第3回	世界のメディア統計	
	第4回	メディアの歴史	
	第5回	インターネットの世界	
	第6回	ブロードバンド	
	第7回	ソーシャルネットワークサービス(SNS)	
	第8回	ブログ フェースブック ツイッター	
	第9回	モバイル通信	
	第10回	情報通信の未来	
	第11回	ユビキタス社会	
	第12回	ユビキタスと私たちの生活	
	第13回	ソーシャルメディア	
	第14回	オンライン・ジャーナリズム	
	第15回	これからの世界	
準備学習 (予習・復習等)	授業中提示する参考文献を基に予習、復習をしてもらう。		
テキスト	特になし		
参考文献	授業中に提示する		
評価方法	授業中の小レポート:50% 期末レポート:50%		

マス・コミュニケーション論B		前期 2 単位	1・2年
マス・メディアの意味をその成り立ちから考える		長谷川 倫子（はせがわ ともこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	メディア・コミュニケーション論の視点から、マス・メディアの成り立ちから現状までを概観します。コミュニケーションの道具としてのメディアがいかにマス・メディアとなり、それが、私たちの社会生活の中で、どのような立ち位置にあるのかを一緒に考えます。これは私たちが享受しているマス・メディアの存在意義を問うことを意味します。マス・メディアへの理解をより深めるのがこの講義の目標です。		
授業の概要	マス・メディアは近代化とともに登場しました。書物、新聞、ラジオ、テレビ、映画などの成り立ちをたどることで、それらが社会生活の中でどのような役割を果たしているのかをいろいろな資料を用いてわかりやすく解説します。講義ではパワーポイントや映像資料も使用します。		
授業計画	第1回	メディア・コミュニケーションとマス・メディア	
	第2回	メディア・コミュニケーションの歴史	
	第3回	近代化と印刷メディアの登場	
	第4回	グーテンベルグがもたらしたもの	
	第5回	新聞王ピュリッツァー	
	第6回	書物の歴史：写本から電子書籍へ	
	第7回	通信の歴史：遠距離通信の夢	
	第8回	放送局の誕生：ラジオの登場と人びと	
	第9回	高度経済成長とテレビ	
	第10回	視覚メディアの歴史：洞窟から絵画へ	
	第11回	映画の日本上陸：輸入・定着からトーキーへ	
	第12回	プロパガンダ映画と戦争	
	第13回	音楽メディアと聴衆	
	第14回	若者文化と音楽：J-Popとその時代	
	第15回	社会生活とマス・コミュニケーション	
準備学習 (予習・復習等)	日頃から身近にあるコミュニケーションの道具を意識して過ごすこと。とりわけ新聞や書物などの活字メディアに慣れ親しみ、要約や感想など、自分の言葉で表現してみることが心掛けてください。映像資料についても同じです。それらのテキストにはどのようなメッセージが含まれているのか考えるようにしましょう。講義の課題に取り組むときにこのような日頃の積み重ねの大切さがわかります。		
テキスト	未定		
参考文献	春原昭彦他編著『【ゼミナール】日本のマス・メディア』（日本評論社、2015年）		
評価方法	平常点（積極的参加）：30% 課題や感想文の内容：30% レポートか試験：40%		

マス・コミュニケーション論C		後期 2 単位	1・2年
マス・メディアの社会的役割を理解する		長谷川 倫子（はせがわ ともこ）	
授業の到達目標及びテーマ	この講義で主に学ぶのはマス・メディアの影響や効果をめぐる学説ですが、まずは日本のマス・メディアを概観します。アメリカの研究を紹介しながらマス・メディアと個人との関係を理解し、身近な事例をクリティカルな視点から見直すことで、マス・コミュニケーションとは何かをより深く理解できるようになります。		
授業の概要	最初は日本のマス・メディアを解説します。続いてアメリカの先行研究から導き出された仮説を中心に、これまでのマス・メディアの影響や効果をめぐるさまざまな考えを紹介します。マス・コミュニケーション研究がどのような学問で、どのような領域や問題意識をカバーしているのかを紹介したうえで、その詳しい事例も取り上げ一緒に考えます。講義ではパワーポイントや映像資料も用います。		
授業計画	第1回	マス・コミュニケーションとは：情報の流れと擬似環境	
	第2回	歴史から見た日本のマス・メディア	
	第3回	日本のマス・メディア産業	
	第4回	マス・コミュニケーション研究の流れ：影響と効果の視点から	
	第5回	プロパガンダとは：ナチス・ドイツを事例として	
	第6回	火星からの侵入/大衆説得	
	第7回	アメリカの大統領選挙とは	
	第8回	2段の流れの仮説/ロジャーズのイノベーション理論	
	第9回	世論とは何か	
	第10回	利用と満足の研究	
	第11回	議題設定機能/沈黙のらせん	
	第12回	ニュースの国際的な流れを考える：ジャーナリズムの視点から	
	第13回	災害・事故とマス・メディア	
	第14回	広告と広報とは何か	
	第15回	オリンピックとマス・メディア	
準備学習 (予習・復習等)	日頃から新聞やテレビのニュース番組などで紹介される国内外の出来事に関心を持つこと。さまざまなマス・メディアやソーシャル・メディアに慣れ親しみ、どのような使われ方をしているのかを意識しておくこと。関心を持った出来事の記事やニュース・テキストの要約や感想を自分の言葉で書いてみるのをおすすめします。このような積み重ねがとても役に立ちます。		
テキスト	春原昭彦他編著『【ゼミナール】日本のマス・メディア』（日本評論社、2015年）		
参考文献	講義にて紹介します。		
評価方法	平常点（積極的参加）：30% 課題や感想文の内容：30% レポートか試験：40%		

メディア論A		前期 2 単位	1・2年
編集の意義と実態 I		高橋 至（たかはし いたる）	
授業の到達目標 及びテーマ	書籍、雑誌、新聞など活字文化の重要性を理解し、活字に親しむことの楽しさがわかる。具体的には、企画、原稿依頼、校正、印刷、宣伝など、一冊の本が世に出るまでに編集者がいかに関わっているのか？ 企画立案から校了まで、編集の本質と実態を理解する。また、現代文学のおおまかな見取り図がわかる。		
授業の概要	講義を中心とし、編集の持つ意義と方法についての理解を深めることに重点を置く。企画から校了までの手順とその意味を明らかにする。出席カードを利用し、必要に応じて質問、提案等を受け、次回に回答する。希望者に対して、出版社への見学会を予定している。		
授業計画	第1回	ガイダンス（編集者24時）	
	第2回	編集者への多様な道筋について	
	第3回	企画から校了までについて	
	第4回	本、活字、用紙について	
	第5回	印刷、製本について	
	第6回	著者と編集者との具体的な関わりについて	
	第7回	著者への原稿依頼について	
	第8回	企画の立て方の基本と応用について	
	第9回	企画書の基本について	
	第10回	企画書の具体的な作成について	
	第11回	校正の基本について	
	第12回	校正の具体的な方法について	
	第13回	掌編小説とは何かについて	
	第14回	掌編小説の具体的な分析について	
	第15回	編集者が見た戦後の文学のおおまかな流れについて	
準備学習 (予習・復習等)	前回の講義内容に関して、次回の講義との連続性を理解すべくノートを熟読すること。		
テキスト	なし。必要に応じてプリント等を配布する。		
参考文献	なし。必要に応じて授業内で提示する。		
評価方法	課題レポート:70% 授業内レポート:30%		

メディア論B		前期 2 単位	1・2年
2010年代の電子メディア環境について実践的に考える		榎本 正樹 (えのもと まさき)	
授業の到達目標 及びテーマ	デジタルメディア全般について、その歴史や特性や機能や長所・短所など幅広い知識を習得するとともに、自分の視点で同時代のメディア環境について深く思考できるようになる。また、最新のデジタル機器を使いこなすための実践的な方法や、アプリやツールなどのソフトウェアによって情報発信を行う際の手続きや方法や留意点について理解する。		
授業の概要	私たちは多種多様な電子メディアを活用して情報を収集し、同時に情報発信しています。現在の電子メディア環境の中軸にあるのは、このようなインタラクティブィティ（情報の相互流通性）であり、ユーザー同士がメディアによって結びつくソーシャルの機能です。本授業では、「メディア」「ネット」「デジタル」をキーワードとする最新のニュース、トピックス、業界動向、事象などに注目し、分析と解説を加えていきます。授業は、視聴覚機材を活用した講義形式で行います。		
授業 計画	第1回	イントロダクション～授業内容についての説明	
	第2回	インタラクティブ・メディアとはどのような概念か～一方向的なメディアから双方向的なメディアへ	
	第3回	コンピュータについて考える～パーソナルコンピュータの歴史	
	第4回	コンピュータについて考える～本とコンピュータの相関性	
	第5回	ゲームについて考える～コンピュータRPGの歴史	
	第6回	ゲームについて考える～ソーシャル化するゲーム環境	
	第7回	ネットについて考える～Twitter、Facebook、Youtube、ニコニコ動画	
	第8回	ネットについて考える～Googleが目指すもの	
	第9回	キャラクターとメディアミックスの行方～初音ミク、艦これ	
	第10回	スマホとタブレットがもたらしたもの～2010年代の端末環境	
	第11回	電子書籍の歴史～90年代から現在まで	
	第12回	電子書籍の現在～Kindle、Kobo、iPadについて	
	第13回	電子書籍をつくる～電子書籍の製作方法と配信方法	
	第14回	電子メディアの未来～来たるべきメディアの未来を预言する	
	第15回	授業のまとめとレポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	事前準備は必要ありませんが、日常的にメディア全般のニュースに関心をもつように心がけてください。		
テキスト	特になし。		
参考文献	参考文献は教室で指示します。また、必要な資料は適宜、配付します。		
評価方法	授業へのレスポンス:20% レポート:80%		

メディア演習 A		後期 2 単位	1・2年
編集の意義と実態 II		高橋 至（たかはし いたる）	
授業の到達目標 及びテーマ	実践を通してより深く活字文化とそれを生み出す仕組みを理解し、習得した内容を検証できるようになる。具体的には、編集者の存在意義と編集の持つ本質を把握し、また現代文学の持つ意味合いも充分にわかる。		
授業の概要	テーマに沿った具体的な作業に携わり、編集の意義についてより深く理解し、実践的な適応が可能なまでに高める。出席カードを利用し、必要に応じて質問、提案等を受け、次回に回答する。		
授業計画	第1回	ガイダンス（編集者24時）	
	第2回	本が出来る道筋について	
	第3回	企画案の作成の方法について	
	第4回	企画案の作成について	
	第5回	企画案の分析と講評	
	第6回	原稿依頼の手紙について	
	第7回	原稿依頼の手紙を書く具体的な方法について	
	第8回	校正の意味と実態について	
	第9回	校正の実習作業について	
	第10回	校正の分析と講評	
	第11回	掌編小説を分析し、創作化する方法について	
	第12回	創作化の分析とその講評	
	第13回	与えられたテーマから創作に挑む	
	第14回	創作の分析と講評	
	第15回	近年の新人賞の動向などについて	
準備学習 (予習・復習等)	授業内レポートと講評を吟味し、自己の達成度を常に検証すること。		
テキスト	なし。必要に応じプリントなどを配布する。		
参考文献	なし。必要に応じ授業内で提示する。		
評価方法	課題レポート:50% 授業内レポート:50%		

メディア演習B		後期 2 単位	1・2年
デジタルコンテンツ製作		榎本 正樹 (えのもと まさき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・コンピュータを使って情報発信を行うための方法を学ぶ。 ・コンピュータを使って自分の関心に応じたデジタルコンテンツを制作できるようになる。 ・どのようなプロセスを経てデジタルコンテンツができていくのかを理解する。 ・コンテンツ制作のためのアプリケーションやツールを使いこなせるようになる。 ・デジタル時代のコミュニケーションの仕方を理解する。 ・高度なネットの活用術と情報収集・処理能力を身につける。 		
授業の概要	<p>コンピュータ端末を使って「何か」をつくってみましょう。どんなものでも構いません。HPを制作したり、写真や動画や音楽の制作に挑戦したり、ソーシャルメディアを極めたり、電子書籍をつくったり、自分の「目標」を設定し、コンピュータを使って実現可能なジャンルにチャレンジしてみてください。この演習は情報処理関係の教室で行います。ちなみに昨年度は、LINEスタンプ、イラストレーション、電子書籍、イメージポスター、ショートムービー、プロモーションビデオ、アーティストのファンページなど幅広いコンテンツが制作されました。アドビ系のソフト（Photoshop、Illustrator、InDesign、Premiereなど）も使用可能です。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション～演習の説明	
	第2回	コンピュータを使ってどのようなコンテンツが制作可能なのか？～制作例の紹介	
	第3回	制作コンテンツの決定と、スケジュールのプランニング	
	第4回	コンテンツ制作のための事前準備～情報収集	
	第5回	コンテンツ制作のための事前準備～素材の準備	
	第6回	コンテンツ制作作業(1) *以下、各自の制作内容によって手順や方法が異なってくるので、個別に指導します	
	第7回	コンテンツ制作作業(2)	
	第8回	コンテンツ制作作業(3)	
	第9回	コンテンツ制作作業(4)	
	第10回	コンテンツ制作作業(5)	
	第11回	中間報告	
	第12回	コンテンツ制作作業(6)	
	第13回	コンテンツ制作作業(7)	
	第14回	コンテンツ制作作業(8)	
	第15回	コンテンツの提出	
準備学習 (予習・復習等)	授業内ですべての作業を行うことがむずかしい場合は、自宅などで適宜、作業を行うようにしてください。		
テキスト	特になし。		
参考文献	参考文献は教室で指示します。また、必要な資料は適宜、配付します。		
評価方法	目標の達成度:50% 授業への参加度:50%		

メディア演習C		前期 2 単位	1・2年
広告・広報・報道の基本と現状を理解し、メディア・リテラシーを修得する。		井上 雅義 (いのうえ まさよし)	
授業の到達目標及びテーマ	メディアの構造転換や多様化など、変化するメディアの全体像を理解する。情報のグローバル化やデジタル化を踏まえたうえで(1)「メディアとコミュニケーション」の関係を把握する。(2) 広告・広報・報道の共通性と差異を考察し、多角的な視点から批判する精神を養う。(3) メディアを効果的に組み合わせて情報を発信する方法を修得する。		
授業の概要	授業の進行方法はテーマごとの基礎を学習した後、事例となる動画・写真・音楽を視聴する。広告映像や国連・国際NGOの広報ビデオ、報道のウェブサイトなど最新のコンテンツを分析し、世界の多様な映像表現や言語表現を学習する。メディアによるメッセージの理解力を養う。		
授業計画	第1回	メディア概論。メディア・リテラシー	
	第2回	広告・広報・報道の現状と課題	
	第3回	物語の構造分析と表現方法	
	第4回	映像表現の構造と分析	
	第5回	動画編集の基本: Windows Live movie makerを使い動画編集を学習する	
	第6回	映像の表現テクニック	
	第7回	音楽・音響・音声による表現方法	
	第8回	テレビ・ラジオによる広告・広報	
	第9回	新聞・雑誌による広告・広報	
	第10回	都市空間とメディア: 疑似体験(映像)・商業施設・イベント	
	第11回	インターネット・メディアによるメッセージ	
	第12回	ソーシャルメディアの現状と課題	
	第13回	メディアの社会性(1): 途上国支援事業の広告・広報	
	第14回	メディアの社会性(2): 国連、国際NGOの広告・広報	
	第15回	メディアに関する批判	
準備学習(予習・復習等)	「メディアとは人間の身体から始まり、歴史社会的に生成されてきたものである。メディアは絶えず変容する。私たちはメディアと人間の関係を主体的に形作り、組み替えていく責任がある」上記「MELL Project(東京大学大学院情報環)」の定義を踏襲して授業を進めます。MELL Project のURL参照。 http://www.mell.jp/symposium/2002/eduNet/mdlit2001/mdlit62.html		
テキスト	特に定めない。資料のコピーを配布する。		
参考文献	「ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』精読」 多木浩二 著 岩波現代文庫 「映像の修辞学」 ロラン・バルト 著 蓮實 重彦・杉本 紀子 翻訳 ちくま学芸文庫		
評価方法	レポート:50% 平常点(課題など):50%		

メディア演習C		後期 2 単位	1・2年
広告・広報・報道の基本と現状を理解し、メディア・リテラシーを修得する。		井上 雅義 (いのうえ まさよし)	
授業の到達目標及びテーマ	メディアの構造転換や多様化など、変化するメディアの全体像を理解する。情報のグローバル化やデジタル化を踏まえ、(1)「メディアとコミュニケーション」の関係を把握する。(2) 広告・広報・報道の共通性と差異を考察し、多角的な視点から批判する精神を養う。(3) メディアを効果的に組み合わせて情報を発信する方法を修得する。		
授業の概要	授業の進行方法はテーマごとの基礎を学習した後、事例となる動画・写真・音楽を視聴する。広告映像や国連・国際NGOの広報ビデオ、報道のウェブサイトなど最新のコンテンツを分析し、世界の多様な映像表現や言語表現を学習する。メディアによるメッセージの理解力を養う。		
授業計画	第1回	メディア概論。メディア・リテラシー	
	第2回	広告・広報・報道の現状と課題	
	第3回	物語の構造分析と表現方法	
	第4回	映像表現の構造と分析	
	第5回	都市空間とメディア：疑似体験（映像）・商業施設・イベント。	
	第6回	動画編集の基本：Windows Live movie makerを使い動画編集を学習する	
	第7回	映像の表現テクニック	
	第8回	テレビ・ラジオによる広告・広報	
	第9回	新聞・雑誌による広告・広報	
	第10回	都市空間とメディア：疑似体験（映像）・商業施設・イベント	
	第11回	インターネット・メディアによるメッセージ	
	第12回	ソーシャルメディアの現状と課題	
	第13回	メディアの社会性（1）：途上国支援事業の広告・広報	
	第14回	メディアの社会性（2）：国連、国際NGOの広告・広報	
	第15回	メディアに関する批判	
準備学習 (予習・復習等)	「メディアとは人間の身体から始まり、歴史社会的に生成されてきたものである。メディアは絶えず変容する。私たちはメディアと人間の関係を主体的に形作り、組み替えていく責任がある」 上記「MELL Project（東京大学大学院情報環）」の定義を踏襲して授業を進めます。 MELL Project のURL参照。 http://www.mell.jp/symposium/2002/eduNet/mdlit2001/mdlit62.html		
テキスト	特に定めない。資料のコピーを配布する。		
参考文献	「ベンヤミン『複製技術時代の芸術作品』精読」 多木浩二 著 岩波現代文庫 「映像の修辞学」 ロラン・バルト 著 蓮實 重彦・杉本 紀子 翻訳 ちくま学芸文庫		
評価方法	レポート:50% 平常点（課題など）:50%		

メディア特論	後期 2 単位	1・2年
ジャーナリズムの領域／ジャーナリストの立ち位置／伝える言葉へのデリカシーと的確さを身につける。出版、編集作業の実際を理解する。	林 佳恵（はやし よしえ）	
授業の到達目標及びテーマ	楽しいことを増やすことも大切ですが、嫌なこと、不快なことがそのまま、解決されない社会が続くとしたらどうでしょう。まずは、あなたの不快なことを社会化してみませんか。自分だけの特別なことと思っていたものが、実は多くの人の悩みだと気付くことをスタートラインにおいて、誰に何をどう伝えるのか、届く言葉を獲得します。企画、立案の編集会議から、著者との交渉、スケジュールの作り方、編集作業の工程、造本（装幀＝ブックデザイン）の依頼、印刷所、製本屋さんとのやりとり、取次店、書店との交渉まで、ノウハウを学びます。	
授業の概要	林が関わった仕事——装幀(ブックデザイン)を柱に、暦、座談会、町おこし事業、業界新聞コラム連載、企画立案した著書などもテキストに使用します。町の広告、ポスター、テレビのCM、雑誌、新聞等、目や耳に触れた情報で感動したものの、不愉快だったものも取り上げ、その原因を探します。女性ならではの気付きを論の出発点にして、個人の問題をどう社会化して表現できるのか、その道筋を探ります。編集・デザインのプロセス、造本、企画書の書き方等を具体的に示します。	
授業計画	第1回	林の歩き方、出版社設立から、執筆まで。「あなたはすでに編集長！」編集とは何か。
	第2回	本、雑誌ができるまでの工程。企画をたてることから販売、返品までの流れ。取次店の役割。
	第3回	「じゃなかしゃば」への希求から、ルポルタージュ『橋の上の殺意』鎌田慧へ。
	第4回	これを毎日続ければ、あなたもジャーナリスト。企画書の作り方、想いを現実にする方法。
	第5回	雑誌、書籍が店頭に並ぶまで。編集、制作、営業は楽しい！ 書店の店員さんと仲良くなるう！
	第6回	目に留まる広告の作り方・届く言葉とは。書評等、マスコミへの依頼のポイント。
	第7回	対談・座談会・インタビューで心がけること。
	第8回	ジャーナリストとしての足元、戦争と女性史。
	第9回	フェミニズムとは……。 「言葉」から見える女性・「わたくし」からのスタート。
	第10回	失礼のない、書きたいと思ってもらえる依頼書。とりあえず話を聞きたいと言われた時。スケジュール表の用意ほか。
	第11回	本のサイズ、製本（並製・上製）、割り付け（字体、字数、行数、行間、位置）、ゲラと文字校正、カバー、表紙、ヘッドバンド、花切れ、etc. 装幀者（ブックデザイナー）林の装幀論。
	第12回	装幀のワークショップ。あなたのブックデザイン。
	第13回	アナウンサー、出演者の言葉の？と！を探す。しのぎをけずるCM。
	第14回	言葉を届ける、竹内敏晴さんの「からだ」と「ことば」のレッスン。 林から送る言の葉
	第15回	これまでのまとめ。
準備学習 (予習・復習等)	各回を参照して行なうこと。	
テキスト	そのつど用意します。	
参考文献	鹿野政直『現代日本女性史—フェミニズムを軸として』有斐閣 『吉武輝子対話集「私」が「わたくし」であることへ』パド・ウィメンズ・オフィス	
評価方法	積極的な授業参加:30% 作業:20% レポート:50%	

異文化間コミュニケーション論A		前期 2 単位	1・2年
近代の文学者たちの異文化体験から学ぶ		長島 裕子 (ながしま ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治時代の日本には、欧米の各国に留学し、帰国後さまざまな分野で活躍した人々が多数いる。「異文化」にふれ、日本との違いに直面し、自国の文化と異国の文化との「間」で、格闘した人々であった。この授業では、日本近代の文学者たちの作品、日記、書簡などを読み、異文化に接した体験が、どのように受けとめられ、問題意識となり、表現されてきたのかを検討し、理解する。異文化間コミュニケーションの先駆者ともいえる人々の言葉を通して、その時代を知ると共に、時代を超えて現代にも共通する問題を見出し理解する。そこで学んだことから、各自が異文化に接したときの対応やコミュニケーションに活かすことができるようになる。		
授業の概要	日本近代の文学者たちの滞欧体験にもとづく作品、日記、書簡などを読み、そこにあらわれた問題点をとらえていく。現代とは異なる当時の日本、および文学者たちの訪れた国々の、文化の特色や時代背景について考える。講義を通して各自が理解したこと、考えたことについてコメントを提出する。各自の問題意識にそってテーマを決め、発表する場を設けることも考えている。計画している作品等は、必要に応じて変更することがある。		
授業計画	第1回	「異文化間コミュニケーション論」とは	
	第2回	明治の文学者に学ぶということ	
	第3回	漱石の『三四郎』の「一」を、異文化間コミュニケーションの観点から読む	
	第4回	漱石の『三四郎』の「二」を、異文化間コミュニケーションの観点から読む	
	第5回	漱石のパリ エッフェル塔と万国博覧会 漱石の日記や手紙を読む	
	第6回	漱石のロンドン 「倫敦消息」を読む	
	第7回	漱石にとっての異文化体験	
	第8回	鷗外のドイツ留学 「航西日記」「独逸日記」を読む	
	第9回	鷗外の『舞姫』を読む	
	第10回	帰国後の鷗外	
	第11回	鷗外にとっての異文化体験	
	第12回	永井荷風のフランス 『ふらんす物語』を読む	
	第13回	与謝野晶子のフランス 女性の生き方を考える	
	第14回	さまざまな異文化体験	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に指定する作品をあらかじめ読んでおく。 配布したプリントを、再度、精読する。		
テキスト	授業時にプリントで配布する。		
参考文献	授業時に適宜紹介する。		
評価方法	授業コメント:40% レポート:20% 試験:40%		

異文化間コミュニケーション論B		後期 2 単位	1・2年
日本国内の異文化間コミュニケーション		柳田 直美（やなぎだ なおみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・日本国内の多文化化の現状を知る ・異文化に接した時の自らの感情および行動パターンを知る ・外国人と日本語でコミュニケーションする方法がわかる 		
授業の概要	日本国内の多文化化の現状を知り、異文化間コミュニケーションで起こる問題などについて考えると同時に、外国人と日本語でコミュニケーションする方法を学ぶ。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	データから見る日本国内の多文化化①訪日・在住外国人	
	第3回	データから見る日本国内の多文化化②留学・就職	
	第4回	データから見る日本国内の多文化化③就労・日本社会	
	第5回	ディスカッション：日本国内の多文化化	
	第6回	異文化間コミュニケーション①カルチャーショック	
	第7回	異文化間コミュニケーション②アサーティブ、DIE法	
	第8回	異文化間コミュニケーション③コンフリクトマネジメント	
	第9回	ディスカッション：異文化間コミュニケーション	
	第10回	外国人とのコミュニケーション①やさしい日本語とは	
	第11回	外国人とのコミュニケーション②やさしい日本語（書き言葉）	
	第12回	外国人とのコミュニケーション③やさしい日本語（話し言葉）	
	第13回	外国人とのコミュニケーション④やさしい日本語に対する評価	
	第14回	ディスカッション：外国人とのコミュニケーション	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	1テーマごとに行うディスカッションの準備及びミニレポート提出		
テキスト	特に定めず、配布資料を活用する。		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	試験：40% 提出物：40% 授業への貢献度：20%		

比較社会論 A		前期 2 単位	1・2年
国家と権力——20世紀における国家システムの形成		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	20世紀の前半に、強力に人間を支配するものとして成立した「国家」という巨大システムを、さまざまな観点から検討します。私たちが普段はあまり意識していない国家権力を、歴史を振り返ることをとおして、また私たちの身近にある権力作用の分析をとおして意識化していくことがこの授業の目標です。		
授業の概要	あらゆる階層の人々を「国民」に変え、国家のために動員していく際に、どのような仕掛けが使われたか、まず教育と公衆衛生という観点から考察します。つぎに、おもにメディア支配という視点から、国家が国民をどのように操作していったかを検討します。さらに、家族制度は、国家権力によってどのように構築され、利用されてきたかを考察します。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	教育と国民の形成(1)—国民国家と国民の形成	
	第3回	教育と国民の形成(2)—教育と国民の動員	
	第4回	公衆衛生と優生思想(1)—優生思想の登場とその背景	
	第5回	公衆衛生と優生思想(2)—ハンセン病問題	
	第6回	公衆衛生と優生思想(3)—優生保護法と母体保護法	
	第7回	全体主義と国民の動員(1)—第一次世界大戦と世界史の転換	
	第8回	全体主義と国民の動員(2)—全体主義の思想と行動	
	第9回	全体主義と国民の動員(3)—日本の全体主義・歴史と現代	
	第10回	メディア支配と世論操作(1)—メディア寡占の構造	
	第11回	メディア支配と世論操作(2)—世論操作の実際	
	第12回	家族制度と労働の再生産(1)—近代家族の形成	
	第13回	家族制度と労働の再生産(2)—生殖にたいする国家の支配	
	第14回	家族制度と労働の再生産(3)—社会保障制度の抱える問題	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う事柄についての新聞報道に関心を払うようにしてください。		
テキスト	授業時にプリントを配布します。		
参考文献	授業時に指示します。		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

比較社会論B		後期 2 単位	1・2年
グローバル化と生活世界		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	「グローバルな資本の支配」という観点から現代社会を分析し、私たちの生活のさまざまな側面に及んでいる「グローバル化」の力を意識化しながら、望ましい社会や生を構想する思考力を養うことがこの授業の目標です。		
授業の概要	まず、グローバル化の構造を決定づけてきた16世紀からはじまるヨーロッパ諸国の植民地支配の構造から検討し、現代における先進国と大企業による世界支配の構図を見ていきます。つぎに、私たちの具体的な生活領域にたいして、この支配がどのように及んでいるかを考察することへと進みます。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	植民地支配の歴史と構造(1)—プランテーションと奴隷貿易	
	第3回	植民地支配の歴史と構造(2)—多国籍企業と途上国の貧困化	
	第4回	途上国支援の課題(1)—ODAの諸問題	
	第5回	途上国支援の課題(2)—市民活動の課題	
	第6回	グローバル化と食生活(1)—食生活のリスク	
	第7回	グローバル化と食生活(2)—アグリビジネスの農業支配	
	第8回	グローバル化と食生活(3)—日本における食の課題	
	第9回	グローバル化とジェンダー(1)—ジェンダーと無償労働	
	第10回	グローバル化とジェンダー(2)—売春と人身売買	
	第11回	グローバル化とジェンダー(3)—女性たちの抵抗運動	
	第12回	グローバル化と文化(1)—文化の多様化? 画一化?	
	第13回	グローバル化と文化(2)—文化の商品化	
	第14回	グローバル化と平和	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う事柄について、新聞報道に関心を払うようにしてください。		
テキスト	授業時にプリントを配布します。		
参考文献	授業時に指示します。		
評価方法	期末試験:80% 平常点:20%		

世界の中の日本 A		前期 2 単位	1・2年
『竹取物語』と世界の中の「日本」		上原 作和（うえはら さくかず）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本文学ならびに日本文化を代表する言語藝術『竹取物語』。このテキストを生み出した世界の政治制度や文化、藝術について、比較文化学と言う視点からアプローチします。そこで、日本の古代文化は中国文明およびシルクロード文明と密接な関係にあることを遣唐使ならびに日中交流史に学びつつ、『竹取物語』成立の背景を明らかにしたいと思います。		
授業の概要	導入の5回で日本古代史を遣唐使や日中交流史を中心に学びます。ついで、古代日本語の成立から平安朝文学の成立までを概説します。こののち、『竹取物語』のテキストを講義します。講義では、芸能、音楽、宗教、年中行事、政治制度のテーマを念頭に、古代日本語テキストに見られる「世界の中の日本」について考えて行くこととします。		
授業計画	第1回	王朝人の見た世界 ガイダンス	
	第2回	日中交流史① 漢字、仏教の伝来と遣隋使	
	第3回	日中交流史② 遣唐使と鑑真	
	第4回	日中交流史③ 正倉院御物と唐物	
	第5回	日中交流史③ 王朝人と唐人 付・日宋貿易と平清盛	
	第6回	日本古代文学史 漢字の伝来と記紀、万葉、浦島、白氏文集	
	第7回	『竹取氏物語』精読①「かぐや姫誕生」	
	第8回	『竹取氏物語』精読②「妻問い」「仏の御石の鉢」	
	第9回	『竹取氏物語』精読③「蓬莱の玉の枝」	
	第10回	『竹取氏物語』精読④「火鼠の皮衣」	
	第11回	『竹取氏物語』精読⑤「龍の首の玉」	
	第12回	『竹取氏物語』精読⑥「燕の子安貝」	
	第13回	『竹取氏物語』精読⑦「御門の御行」	
	第14回	『竹取氏物語』精読⑧「天の羽衣」「富士の煙」	
	第15回	日本古典文学と世界の文学	
準備学習 (予習・復習等)	『竹取物語』は、アニメ『かぐや姫の物語』に代表される日本人なら誰でも知っている物語です。児童向けに書き下ろされた絵本等でこの物語に触れた人も多いはずですが、これらを本来の古典に戻って、世界の中に位置づけるために再読するのが、本講義の目的となります。ぜひ、本棚から、かつて親しんだかぐや姫の物語を再読してから臨んで下さい。		
テキスト	上原作和・安藤徹・外山敦子校注『かぐや姫と絵巻の世界 一冊で読む『竹取物語』訳注付』武蔵野書院		
参考文献	上原作和編集『うつほ物語引用漢籍註疏』新典社、Website 物語学の森		
評価方法	授業態度:15% タームペーパー:30% 試験:55%		

世界の中の日本B		後期 2 単位	1・2年
日本と世界—柔軟な思考と発言を求めて		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○日本と世界の文化遺産について知識をえることができる。 ○日本・世界について図像的な知識を持つことができる。 ○日本と世界について言語的な考察をすることができる。 ○日本と世界について都市論的な情報を提示できる。 		
授業の概要	<p>日本・世界について、観光・図像・言語・都市・神話の観点から、個別具体的に学習を重ねていく。半期で2回程度、事前ワークシートを集約して、数分間の簡単な学生発表を実施する。学生参加を促進するために、授業中に随時発言を求める。日本専攻以外の受講者の人数によりけりだが、簡単な英文資料を配布して短時間の解説をすることもありえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○[期末試験・期末レポート]実施しない。 ○[5分テスト]数回実施する予定。 		
授業計画	第1回	授業案内と情報交換。	
	第2回	観光篇：日本の世界文化遺産。	
	第3回	観光篇：日本の観光スポット、名産と土産。	
	第4回	図像篇：古典的・伝説的有名人。	
	第5回	図像篇：古典的・伝説的有名人—補遺。	
	第6回	図像篇：タロットカードの紹介。	
	第7回	図像篇：タロットカードの応用。	
	第8回	言語篇：日本の格言。	
	第9回	言語篇：英語の格言。	
	第10回	言語篇：日本語の身体喩。	
	第11回	言語篇：日本語の動物喩。	
	第12回	世界都市篇：都市記述の要件探究。	
	第13回	世界都市篇：世界都市の紹介。	
	第14回	神話篇：神話と昔話。	
	第15回	神話篇：世界の神話。	
準備学習 (予習・復習等)	○ワークシート、最低2件、作成して簡単な発表に備える。		
テキスト	配布資料。		
参考文献	特になし。		
評価方法	発言の回数・水準:50% ワークシート・発表:20% 小試験:30%		

日本語教育 A		前期 2 単位	1・2年
日本語教育の基礎知識の習得		南口 順子 (みなみぐち じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	外国人に日本語を教える「日本語教育」の理論と実践に基づき、以下の①～③の能力を育成することを大きなねらいとして授業を進める。 ①日本語の言語的特徴の基礎を理解する能力②自己の言語生活を内省する能力③日本語をより適切に運用する能力		
授業の概要	言語としての日本語の特徴を音声、文字表記、語彙、社会言語学(待遇表現を中心に)の面からつかみ、日本語教育の基礎知識の習得を目指すと同時に、日本語運用能力を高めるためのトレーニングも適宜行なっていく予定。		
授業計画	第1回	日本語教育と国語教育、日本語の系統、類型	
	第2回	日本語の特性、日本語の音声(音、音節、リズム)	
	第3回	日本語の音声(母音、子音)	
	第4回	日本語の音声(子音、調音点、調音法他)	
	第5回	日本語の音声(アクセント、イントネーション)	
	第6回	日本語の文字・表記(常用漢字表、筆順、送り仮名)	
	第7回	日本語の文字・表記(仮名遣い、外来語の表記)	
	第8回	日本語の文字・表記(ローマ字、文字の歴史)	
	第9回	日本語の語彙(語彙と語、語種)	
	第10回	日本語の語彙(語構成、体系)	
	第11回	日本語の語彙(数え方、位相)	
	第12回	社会言語学①(待遇表現を中心に)	
	第13回	社会言語学②(待遇表現を中心に)	
	第14回	前期のまとめ(前半)	
	第15回	前期のまとめ(後半)	
準備学習 (予習・復習等)	次回扱う授業内容を事前に配布するプリントを用い、教科書を読んで確認しておくこと。 分からないことがあれば調べられる範囲で調べ、目的意識を持って授業に臨むこと。用語を整理し体系的に覚えていくこと。講義を聞いて疑問点、関心を持った項目について自分で更に調べて、学習を進めていくこと。自分自身の使っている日本語を客観的に見つめ直し、意識化を図っていく手立てとしたい。授業で扱った項目について、自分の学んでい る外国語と日本語をあらゆる角度から対照、比較してみよう。		
テキスト	高見澤孟他著『新・はじめての日本語教育・I 日本語教育の基礎知識』アスク		
参考文献	授業時に随時紹介する。		
評価方法	授業参加度:30% 小課題等評価:20% 最終試験:50%		

日本語教育B		後期 2 単位	1・2年
日本語教授法入門（教授法の知識の実践的活用を目指して）		南口 順子（みなみぐち じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本語教育（現状と歴史を中心に）を概観し、日本語教授法の基礎知識を得ると同時に日本語を外国語としてとらえることで、客観的に日本、日本語を見直す視点を養っていくことを大きなねらいとする。		
授業の概要	日本語を教える上で必要となる文法的知識を整理、確認しながら、実際に外国語として日本語を教える際の具体的な方法について考察していく。後半、時間的に可能であれば模擬授業を導入し、今まで習ってきた日本語教育の知識を実践的に活用できたらと考えている。		
授業計画	第1回	国内の日本語教育事情/日本語教師の役割	
	第2回	海外の日本語教育事情/日本語教育史（明治期以前）	
	第3回	日本語教育史（明治期以降）/コースデザイン、シラバス	
	第4回	日本語教育史（戦後）/カリキュラム	
	第5回	外国語教授法（中世・近世）/教室活動について	
	第6回	オーディオリンガルアプローチ/教材・教具について	
	第7回	新しい外国語教授法/評価法について	
	第8回	日本語文法と国文法（文法用語、品詞分類、活用）	
	第9回	日本語のテンス、アスペクト、ムード	
	第10回	初級文法の指導法（名詞文）	
	第11回	初級文法の指導法（指示詞）	
	第12回	授業の実際（教材分析、教案の立て方）	
	第13回	授業の実際（模擬授業前半）	
	第14回	授業の実際（模擬授業後半）	
	第15回	後期試験前の総復習	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う内容について、教科書を事前に読んで、分からないことがあれば、調べられる範囲で調べておくこと。授業には目的意識を持って臨むこと。日本語の表現文型が生きた日本語のコミュニケーション場面でどのような機能で使われているか用例を採集する課題を課す。講義を聞いて、疑問に思ったこと、関心を持ったことがあれば、更に参考文献等を調べ、学習を進めていくこと。自律的な学習態度が期待される。分からないことがあれば授業後、質問すること。		
テキスト	高見澤孟他著『新・はじめての日本語教育2日本語教授法入門』アスク		
参考文献	授業時に随時紹介する。		
評価方法	授業参加度:30% 小課題、模擬授業等:20% 最終試験:50%		

日本語事情A		前期 2 単位	1・2年
日本語コミュニケーションにおける言語問題		南口 順子 (みなみぐち じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	文化庁による『国語に関する世論調査』の結果をもとに、日本語コミュニケーションにおける言語問題について考察し、これからの時代に求められる日本人の言語能力について考えていくことを大きな授業のねらいとする。		
授業の概要	教室内でのアンケート調査結果と文化庁の調査結果を照らし合わせながら考察を加えていく。実際のコミュニケーション場面から用例を採集し分析したり、アンケートやインタビュー調査の実施結果を発表しレポートにまとめる。学生主体の自律的取り組みを重視し、ディスカッションやディベート等の教室活動も適宜取り入れ授業を進めていく予定である。		
授業 計画	第1回	アンケート調査実施、気になる言い方について	
	第2回	若者言葉、言葉遣いの乱れに対する意識①前半発表	
	第3回	若者言葉、言葉遣いの乱れに対する意識②後半発表	
	第4回	外来語、カタカナ語の使用状況についての意識①前半発表	
	第5回	外来語、カタカナ語の使用状況についての意識②後半発表	
	第6回	日本語コミュニケーションにおける敬語①前半発表	
	第7回	日本語コミュニケーションにおける敬語②後半発表	
	第8回	携帯電話、電子メールの言語生活への影響について	
	第9回	共通語と方言について	
	第10回	男女の言葉遣いに対する意識	
	第11回	日本語の国際化、日本語を学ぶ外国人の増加について	
	第12回	向上させたい日本語能力、美しい日本語とは	
	第13回	これからの時代に求められる日本人の言語能力	
	第14回	最終レポート内容について口頭発表①前半	
	第15回	最終レポート内容について口頭発表②後半	
準備学習 (予習・復習等)	この授業は学生が講義を聞き、教師から知識を得るという一方向的な受身の授業ではない。毎回取り上げるテーマ（日本語の言語問題について）自分で調べ、問題意識を持って自律的に授業に臨む姿勢が求められる。授業ではグループディスカッションや発表を通して、各自が調べたことを発表し、情報を共有しながら、意見交換し、自分なりの考えをレポートにまとめる。その他、生きたコミュニケーション場面から用例を採集し記録することを日常的な課題とし、学期末に提出することを義務付ける（言葉を観察し、日本語の意識化を図ることを目的とする）		
テキスト	調査結果データなどを資料として配布予定		
参考文献	授業時に適宜紹介する		
評価方法	授業参加度:20% 小課題、発表の成果:30% 最終レポートの成績:50%		

日本語事情B		後期 2 単位	1・2年
第二言語としての日本語の習得研究入門		南口 順子 (みなみぐち じゅんこ)	
授業の到達目標及びテーマ	日本語を母語としない人たちが、日本語をどのように習得していくのか、その過程をたどることにより、無意識に習得した自分自身の日本語の意識化を図っていく。母語でない言語の習得過程に焦点を当てた研究「第二言語習得研究」の基礎を学ぶことを大きな狙いとした授業である。		
授業の概要	第二言語習得研究の基礎を学ぶことを中心として授業を進めていくが、第二言語習得の前提として、第一言語（母語）習得において、子供がどのように言語を獲得していくのか、脳のメカニズムについても触れ、自分自身がどのように母語を習得してきたのか、それが第二言語、外国語の習得とどのように関わっていくのかも探っていく。		
授業計画	第1回	第二言語習得研究とは/第一言語習得研究（脳の発達）	
	第2回	第一言語習得研究（子供のことばの発達過程）	
	第3回	第二言語習得研究の流れ（対照分析研究）	
	第4回	第二言語習得研究の流れ（誤用分析研究、中間言語研究）	
	第5回	第二言語習得理論（普遍文法理論）	
	第6回	第二言語習得理論（モニター・モデル）	
	第7回	第二言語習得にかかわる要因（言語転移他）	
	第8回	第二言語習得にかかわる要因（学習者のストラテジー）	
	第9回	言語接触とバイリンガリズム（敷居理論他）	
	第10回	言語接触とバイリンガリズム（バイリンガル教育）	
	第11回	第二言語習得研究の方法	
	第12回	日本語の第二言語習得研究（文法）	
	第13回	日本語の第二言語習得研究（語彙、文字・表記等）	
	第14回	日本語の第二言語習得研究（年少者の日本語習得）	
	第15回	後期の総復習	
準備学習 (予習・復習等)	第二言語習得に関する専門用語が毎回沢山出てくるため、用語の定義付けが自分の言葉で出来るように整理し、まとめておくこと。基本的な用語を体系的に覚えていくこと。復習を中心に学習を進め、第二言語習得研究の流れをつかんでいくこと。授業で扱った内容、項目について疑問、関心のあることは自分で参考文献に当たって調べ、更に学習を進めていくこと。		
テキスト	適宜プリントを使用		
参考文献	授業時に随時紹介する		
評価方法	授業参加度:30% 小課題:20% 最終レポート又は試験:50%		

日本美術研究 A		前期 2 単位	1・2年
日本美術史における動物表現の系譜		石田 佳也 (いしだ よしや)	
授業の到達目標 及びテーマ	屏風絵や絵巻、掛軸などの画面形式に代表される日本絵画には、山水画や花鳥画、物語絵や風俗画など、様々なテーマがある。この講義では日本美術史における動物表現に着目し、日本美術史の基礎事項を習得すると共に、同時代の文学や芸能とも関連づけながら考察し、個々の動物がどのように表現されて来たのかについて文化史的な背景と併せて理解する。		
授業の概要	毎回、特定の動物をテーマに取り上げ、日本の近世絵画を中心に、漆工や染織などの工芸作品も含めて関連する作例を画像で紹介する。その過程で、個々の作品の作者や流派、技法などに関する基礎事項を確認し、日本美術史における位置づけや文化史的背景を明らかにする。		
授業 計画	第1回	イントロダクション 動物表現の概要	
	第2回	日本美術史の基礎事項(1) 絵画と工芸の分野について	
	第3回	日本美術史の基礎事項(2) 画面形式について	
	第4回	日本美術史の基礎事項(3) 画家と流派について	
	第5回	日本美術史における動物表現(1) 鳥獣戯画について	
	第6回	日本美術史における動物表現(2) 鹿と兎と猪をめぐる	
	第7回	日本美術史における動物表現(3) 犬と猫をめぐる	
	第8回	日本美術史における動物表現(4) 象の表現の系譜	
	第9回	日本美術史における動物表現(5) ライオンの表現の系譜	
	第10回	日本美術史における動物表現(6) 鳳凰と花鳥画	
	第11回	日本美術史における動物表現(7) 牛と馬をめぐる	
	第12回	日本美術史における動物表現(8) 龍と空想の動物の系譜	
	第13回	日本美術史における動物表現(9) 虎と豹について	
	第14回	日本美術史における動物表現(10) 動物表現の可能性	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、授業時に可能な限り参考文献を提示するので可能な範囲で参照すること。 また開催中の展覧会を適宜紹介し推薦するので可能な範囲で鑑賞すること。 なお、授業のテーマの順番や内容、回数を変更する場合がある。		
テキスト	とくに定めない。主としてプリントを毎回配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業感想文:40% 期末レポート:60%		

日本美術研究B		後期 2 単位	1・2年
家族の姿から日本の絵巻を読み解く		成原 有貴 (なりはら ゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○美術作品の見方の基本を学び、絵巻の代表的作品の内容や制作背景が理解できるようになる。また、絵巻の鑑賞によって、ヴィジュアル・イメージの社会的意義と機能について考える力を養う。</p> <p>○教室でのパワーポイントによる画像の映写(毎回)や、キャンパス近隣の美術館の展示見学(授業時間内を利用し、1~2回実施予定)を通して、日本美術に親しみ、作品に対する理解を深めることができる。</p> <p>○グループ学習(数回を予定)を通して、作品鑑賞の体験を受講者どうしで分かち合うことができるようになる。</p>		
授業の概要	<p>平安時代から江戸時代までの絵巻の代表的作品をとりあげ、それらに表わされた家族の姿を詳しく見て、作品の意味や制作事情について講義します。絵巻は詞書と絵から構成されていますが、絵は詞書の理解を助けるための補助的存在ではありません。絵は、視覚的方法によって、鑑賞者に独自のメッセージを伝達しています。授業ではそのメッセージを、絵巻が制作された当時の社会状況をふまえながら、とくに家族の表現に焦点をあてて読み解きます。あわせて、描かれた家族の絆やそのほころび、別離や再会といったありようが、現代の私たちに何を問いかけているかについても考えます。</p>		
授業計画	第1回	平安時代 「源氏物語絵巻」主題と表現	
	第2回	平安時代 「源氏物語絵巻」—父・夫としての源氏—	
	第3回	平安時代 「源氏物語絵巻」—父と娘：朱雀院と女三の宮—	
	第4回	自分で絵巻を動かしてみよう—絵巻の複製を使った鑑賞—	
	第5回	平安時代 「信貴山縁起絵巻」主題と表現	
	第6回	平安時代 「信貴山縁起絵巻」—弟を探す姉—	
	第7回	美術館見学	
	第8回	美術館見学の感想とグループ学習	
	第9回	平安時代 「伴大納言絵巻」主題と表現	
	第10回	平安時代 「伴大納言絵巻」—怒る家族と泣く家族—	
	第11回	鎌倉時代 「男衾三郎絵巻」主題と表現	
	第12回	鎌倉時代 「男衾三郎絵巻」—描かれた「醜い妻と子」の意味—	
	第13回	江戸時代 「山中常盤物語絵巻」主題と表現	
	第14回	江戸時代 「山中常盤物語絵巻」—母の死と家族の思い—	
	第15回	まとめ：絵巻はわたしたちに何を語りかけているか	
準備学習 (予習・復習等)	美術館見学の際には、作品鑑賞の感想を提出すること。授業時の配布プリントや参考文献の該当箇所などを読み、復習すること。		
テキスト	特に指定しません。毎回、授業の要点を記したプリントを配布します。		
参考文献	『新修日本絵巻物全集』角川書店、『日本絵巻大成』中央公論社、『続日本絵巻大成』中央公論社。該当巻などは授業時に指示します。		
評価方法	授業感想文:50% 期末試験:50%		

日本芸能研究 A		前期 2 単位	1・2年
歌舞伎の魅力を探る		津金 規雄 (つがね のりお)	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代に生まれた古典的な演劇でありながら、現代もなお私たちの娯楽のひとつとして生き続けている歌舞伎の魅力とその歴史を、実際の舞台に即しつつ探っていきます。 現代の役者のトピックなども積極的に取り上げていく予定です。青山学院出身の歌舞伎役者も数多くいます。		
授業の概要	歌舞伎の歴史を辿りつつ授業を進めます。 また、国立劇場の6月の歌舞伎教室の公演を見て、レポートを提出してもらいます。 チケットの購入・料金負担は学生各自が行います。 上演される演目については、事前に授業で取り上げ、詳しく解説します。		
授業計画	第1回	総論と阿国歌舞伎	
	第2回	女歌舞伎・若衆歌舞伎・野郎歌舞伎	
	第3回	元禄歌舞伎(1) 市川團十郎と荒事	
	第4回	元禄歌舞伎(2) 坂田藤十郎と和事	
	第5回	近松門左衛門	
	第6回	国立劇場6月の歌舞伎教室公演の演目の台本精読	
	第7回	国立劇場6月の歌舞伎教室公演の演目の解説・鑑賞	
	第8回	歌舞伎と人形浄瑠璃	
	第9回	舞踊と三味線音楽	
	第10回	鶴屋南北と怪談芝居	
	第11回	河竹黙阿弥(1) 江戸期の作品	
	第12回	河竹黙阿弥(2) 明治期の作品	
	第13回	歌舞伎の近代化	
	第14回	新歌舞伎と呼ばれるジャンル	
	第15回	現代の歌舞伎	
準備学習 (予習・復習等)	歌舞伎は江戸の庶民にとって最大の娯楽でした。 その意味で予習は、各作品・各役者の背景となっている時代について、予備知識を持つようにしておいて下さい。 また復習は、授業で扱ったことがらについて、さらに理解を深めるために台本を読み、歌舞伎の専門事典に当たるなどして下さい。		
テキスト	プリントを中心にこちらで用意します。		
参考文献	『歌舞伎オン・ステージ』(白水社)、『名作歌舞伎全集』(東京創元新社)の各巻。 服部幸雄『絵で読む歌舞伎の歴史』(平凡社)など。		
評価方法	観劇レポート:70% 平常点:30%		

日本芸能研究B		後期 2 単位	1・2年
古典演劇「能・狂言（能楽）」の理解と鑑賞		三浦 裕子（みうら ひろこ）	
授業の到達目標及びテーマ	室町時代に演劇の基礎を固めた能・狂言（能楽）は、音楽・舞踊・美術・文学・演劇などの諸要素が不可分に融合した総合芸術である。本講義では、このような特徴を持つ能・狂言に関して、さまざまなアプローチを試みつつ、とくに文学的な価値を理解する。		
授業の概要	能・狂言の基本的知識および演劇的・文学的特徴を概説する。そのうえで、狂言〈附子〉〈蚊相撲〉〈悪太郎〉、能〈黒塚〉のテキストを丁寧に講読し、映像資料による鑑賞を行う。能・狂言をより深く理解するため能舞台の見学を行う予定。		
授業計画	第1回	総合芸術としての能・狂言を概説する	
	第2回	狂言〈附子〉前半の講読と鑑賞	
	第3回	狂言〈附子〉後半の講読と鑑賞	
	第4回	狂言〈蚊相撲〉前半の講読と鑑賞	
	第5回	狂言〈蚊相撲〉後半講読と鑑賞	
	第6回	狂言〈蚊相撲〉の講読と鑑賞～大名・太郎冠者を考える	
	第7回	狂言〈悪太郎〉の講読と鑑賞	
	第8回	狂言〈悪太郎〉の講読と鑑賞～悪人正機説を考える	
	第9回	狂言〈蝸牛〉の講読と鑑賞	
	第10回	能〈黒塚〉前半の講読と鑑賞	
	第11回	能〈黒塚〉中盤の講読と鑑賞	
	第12回	能〈黒塚〉後半の講読と鑑賞	
	第13回	能〈黒塚〉の広がり～映画〈蜘蛛巣城〉の紹介と鑑賞	
	第14回	能舞台・能楽堂の特徴を考える	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	なるべく実際の能・狂言を鑑賞するようつとめてほしい。講義時に、鑑賞にふさわしい公演を紹介する予定。		
テキスト	三浦裕子著『能・狂言』（シリーズ「学校で教えない教科書」、日本文芸社） 竹本幹夫著『対訳でたのしむ安達原 黒塚』（檜書店）		
参考文献	必要に応じて講義時に提示する。		
評価方法	平常点（集中度）：40% 講義時のアンケート等：10% 定期試験：50%		

日本民俗研究 A		前期 2 単位	1・2年
日本の年中行事と季節の暮らし（春と夏）		持田 叙子（もちだ のぶこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本にはゆたかな緑、水、季節があります。海にちらばる何百もの列島が、私たちの国のすがたです。その中で私たちの祖先はどのように暮らし、どのような神々を信仰し、何を恐れ何にあこがれて生きてきたのでしょうか。どのように季節を感じたのでしょうか。たとえば春三月。女性にとって大切な年中行事<雛祭り>があります。ひしもちを供え、桃の花をかざり、はまぐりの貝でおつゆを作ります。雛祭りは男の人は入れません。本来はお祭りがおわると、人形たちを川や海へ流します。ふしぎですね、なぜなのでしょう。こんな所にも日本人の古い信仰や、春を迎える喜びの由来が隠れています。年中行事や季節のしきたりを通し、日本文化について学びます。伝統食についても学びます。		
授業の概要	講義が主となります。季節の草木や花、それらをうたう美しい詩歌も紹介します。季節をいどる沢山の年中行事について、神秘的なしきたりやハレの日につくる伝統的な食べもの、それをお供えする神さまたちについてお話しします。季節の伝説や昔話もよみます。学生のみなさんにも授業に参加していただき、楽しい時間になりたいと思います。一人一回、身のまわりで気づいた古風な暮らしのことや神社について好きなお話をさせていただきます。ときどき季節にあう俳句や和歌もつくってみましょう。基礎的な日本文化にかんする教養とともに、じっさいに私たちの生活を楽しくする季節を迎えるセンスや工夫、心くばりを身につけます。		
授業計画	第1回	（雛まつり）について：ひな人形をかざる女の子の行事。この日は女の子だけ。男の子は入れません。それがおひな様のルール。	
	第2回	（雛まつり）について：雛まつりを受する文学者は多いです。泉鏡花や芥川龍之介の名作をよんでみましょう。日本人と人形の文化史についても学びましょう。	
	第3回	（お花見）について：今でもさかんな春の花見は、日本の歴史のいつごろから始まったのでしょうか。桜の花はなぜ、家に植えることがないのでしょうか。	
	第4回	（お花見）について：桜の花の美しさは、多くの歌人たちの心を狂わせてきました。桜の花への愛のこぼれをよみます。	
	第5回	（卯月の花まつり）について：つつじの花やれんげの花を長いさおの先に結びつけ、家ごとに立てる春の行事です。	
	第6回	（端午の節供）について：鯉のぼりを立て、家の軒に菖蒲やヨモギをかざるのは、何のためでしょう。ちまきはなぜ、三角形なのでしょう。	
	第7回	（田植え）について：田植えはたんなる農作業ではなく、田の神さまがやってくる大切な神祭りです。早おとめという巫女が、神をおもてなしします。	
	第8回	（京都の祇園祭）について：稚児、山車、御霊信仰	
	第9回	（水無月の夏越）について：梅雨から夏へのきよめの儀式	
	第10回	（水にケガレを流す）：祓えの信仰 日本の古代の水の信仰	
	第11回	（七夕）について：牽牛と織姫の恋、七夕の竹、水うらない	
	第12回	（七夕）について：星祭り、恋祭り 宮廷で行われた七夕について	
	第13回	（お盆）について：盆のちょうちん、高灯籠、盆棚、おはぎ、鯖	
	第14回	（お盆）について：生者と死者の交流、お盆のごちそう	
	第15回	まとめ：ハレの日とケの日について	
準備学習 (予習・復習等)	授業後に必ず、配布資料を自分でよんで下さい。		
テキスト	特にありません。授業時に資料を配布します。		
参考文献	未定		
評価方法	授業時感想等発表:20% レポート:80%		

日本民俗研究B		後期 2 単位	1・2年
日本の年中行事と季節の暮らし（秋と冬）		持田 叙子（もちだ のぶこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>秋から冬にかけての大切な年中行事と季節のしきたりについて学びます。 たとえば、冬ということばは何に由来するのでしょうか？冬は、ふゆ。ふえるということばを語源とすると言われます。冬は寒く、草木も枯れます。太陽も光がよわくなり、万物が冷えます。だからこそ、人間は自分の魂をゆたかに増強し、魂をふやし、卵の中にじっとこもるようにして復活の春を待ちます。 枯れてしまったものが再生する春。それを迎えるのが、今でも最も大きな年中行事である（正月）の本当の意味であるとされます。なぜ、<おめでとうございませ>なのか、こうした機会にあらためて学んでみましょう。</p>		
授業の概要	<p>講義が主となります。季節の草木や花、それらをうたう美しい詩歌も紹介します。季節をいどる沢山の年中行事について、神秘的なしきたりやハレの日につくる伝統的な食べもの、それをお供えする神さまたちについてお話しします。季節の伝説や昔話もよみます。学生のみなさんにも授業に参加していただき、楽しい時間になりたいと思います。一人一人、身のまわりで気づいた古風な暮らしのことや神社について好きなお話をさせていただきます。ときどき季節にあう俳句や和歌もつくってみましょう。基礎的な日本文化にかんする教養とともに、じっさいに私たちの生活を楽しくする季節を迎えるセンスや工夫、心くばりを身につけます。</p>		
授業計画	第1回	（十五夜の月見）について：月の名まえ 月とうさぎ 月から来たかぐや姫 月を追う女の行事	
	第2回	（月と日本人）：月と不死の水、月は不吉？ 芋名月と豆名月 観月会の伝統 宮古島の月の伝統	
	第3回	（菊花の呪術）：菊枕、菊酒、菊の節句、菊の宴、菊人形 謡曲「菊慈童」	
	第4回	（神無月）：神のいない月、神々は出雲へ集合 古代の多くの神々 古事記について	
	第5回	（紅葉の錦）：紅葉の感染呪術、紅葉の山は死後の世界 手にもつ紅葉の呪術	
	第6回	（紅葉狩）：<狩>の意味 紅葉の生気をもろう 紅葉の名歌名句 紅葉と鬼女 紅葉と道にいる神	
	第7回	（七五三の祝い）：子どもの通過儀礼 はかま着 帯祝い うぶすな神 子どもの民俗 子どもを守る神	
	第8回	（七歳までは神のうち）：神の依りましとしての子ども 子どもと神がかり 子どもの遊びのルーツ	
	第9回	（歳暮の起源）：古代のプレゼント のしの謎 魂のやりとり	
	第10回	（冬至とクリスマス）：太陽の死と復活の祭 一陽來復 冬至と柚子 クリスマスツリーの意味	
	第11回	（花祭り、雪祭り）：山間地方の冬の神秘的祭 生まれ清まりの儀式 花と雪の意味	
	第12回	（ホトホト、コトコトの来訪）：ハロウィーンに似た子どもたちの仮面祭り 家々を訪れる妖怪	
	第13回	（大正月）：松迎え、年棚づくり、もちつき 年玉の意味 大みそかの吉夢	
	第14回	（小正月）：成木責め もぐらたたき 鳥小屋づくり 鏡びらき どんど焼き くるみうらない	
	第15回	まとめ：神をもてなす日本の文化について	
準備学習 (予習・復習等)	授業後に必ず、配布資料を自分でよんで下さい。		
テキスト	特にありません。授業時に資料を配布します。		
参考文献	未定		
評価方法	授業時発表：20% レポート：80%		

日本研究特論 A		前期 2 単位	1・2年
現代女性文学と〈核〉		上戸 理恵 (うえと りえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代日本の女性作家による文学作品の分析を通じて、〈核〉がもたらした惨事の記憶がどのような形で言語化されているのかを理解する。作品の読解を現代の日本社会をめぐる諸問題へと開いていく回路を持つことができるようになる。核エネルギーが喚起する欲望やその暴力性にかに対峙し得るかという問題に当事者意識をもって応答する姿勢を獲得する。		
授業の概要	講義形式。配布プリント（具体的な作品・評論）を用いて、作品読解の枠組みを示す。〈原爆の記憶と表象〉では、女性作家による文学作品において原爆の記憶がどのように表象されているのかを読み解く。〈3.11以降の文学〉では、2011年3月11日以降の言説空間において女性作家による文学作品がどのようなことを問題化してきたのかを検討する。原則として小課題を毎回提出する。また、議論を整理する時間を設けグループワークを実施する。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	文化遺産の社会学	
	第3回	原爆の記憶と表象（1）	林京子の原爆体験
	第4回	原爆の記憶と表象（2）	林京子「九日の太陽」
	第5回	原爆の記憶と表象（3）	大庭みな子の原爆体験
	第6回	原爆の記憶と表象（4）	大庭みな子「浦島草」
	第7回	原爆の記憶と表象（5）	議論の整理Ⅰ グループワーク
	第8回	エネルギー史と想像力	
	第9回	3.11以降の文学（1）	震災後文学という枠組み
	第10回	3.11以降の文学（2）	川上弘美「神様」「神様2011」
	第11回	3.11以降の文学（3）	津島佑子「ヤマネコ・ドーム」
	第12回	3.11以降の文学（4）	小林エリカ「マダム・キュリーと朝食を」
	第13回	3.11以降の文学（5）	多和田葉子「献灯使」
	第14回	3.11以降の文学（6）	議論の整理Ⅱ グループワーク
	第15回	講義のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に配布資料がある場合は必ず読んでから授業に参加するようにすること。また、配布資料の全文（授業時に読み上げなかった箇所も含む）をよく読み、その内容について説明できるようにしておく。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを配布しそれを用いる。		
参考文献	岡真理『思考のフロンティア 記憶／物語』岩波書店、黒古一男『原爆文学論—核時代と想像力—』彩流社、木村朗子『震災後文学論 新しい日本文学のために』青土社、水田宗子『大庭みな子 記憶の文学』平凡社。その他随時紹介し、必要に応じてプリントを用意する。		
評価方法	小課題の提出状況:30% グループワーク:20% レポート課題:50%		

日本研究特論B		後期 2 単位	1・2年
現代女性作家の研究——書くこととジェンダー		上戸 理恵（うえと りえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代日本の女性作家の小説を取り上げ、書くこととジェンダーの問題がどのように表れているのかを検討する。小説の読解を通じてジェンダーや文学という枠組みを問い直す視点を獲得し、自らの作品観および文学観を再構成することができるようになる。		
授業の概要	講義形式。森茉莉、金井美恵子、長野まゆみ、笹野頼子などの作品をとりあげ、それらの作品において書くこととジェンダーの問題がどのように表れているのかを検討する。それぞれの作品固有の問題を考えるとともに、それらをゆるやかにつないでいる問題意識についての理解を深める。原則として小課題を毎回提出する。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	森茉莉（1） 作家イメージとしての〈父の娘〉	
	第3回	森茉莉（2） 男性同士の恋物語 「恋人たちの森」	
	第4回	森茉莉（3） 部屋を細述すること 「贅沢貧乏」	
	第5回	森茉莉（4） 小説のメタテキスト性 「薔薇くひ姫」	
	第6回	金井美恵子（1） 森茉莉への視線と〈少女〉という主題	
	第7回	金井美恵子（2） パロディという戦略 「兎」	
	第8回	金井美恵子（3） メタフィクション 「声」「プラトンの恋愛」	
	第9回	長野まゆみ（1） 〈少年〉という主題 「少年アリス」	
	第10回	長野まゆみ（2） 宮沢賢治と稲垣足穂	
	第11回	長野まゆみ（3） 少年たちの恋愛 「白屋堂々」シリーズ	
	第12回	笹野頼子（1） 書くこととジェンダー 「胸の上の前世」	
	第13回	笹野頼子（2） 森茉莉への共鳴 「幽界森娘異聞」	
	第14回	笹野頼子（3） 文学の実験 「居場所もなかった」	
	第15回	講義のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に配布資料がある場合は必ず読んでから授業に参加するようにすること。また、配布資料の全文（授業時に読み上げなかった箇所も含む）をよく読み、その内容について説明できるようにしておく。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを配布しそれを用いる。		
参考文献	『森茉莉—総特集（KAWADE夢ムック）』河出書房新社、『ユリイカ 特集=森茉莉』青土社、菅聡子編『〈少女小説〉ワンダーランド 明治から平成まで』明治書院、『現代女性作家読本』シリーズ（鼎書房）、『現代女性作家読本』鼎書房など。		
評価方法	課題提出状況:50% レポート課題:50%		

学問入門演習	前期 2 単位	1年
大学での学び方を習得しよう		
<p>【担当教員】 河見 誠（かわみ まこと）、小林 正明（こばやし まさあき）、小林 瑞乃（こばやし みずの）、鈴木 直子（すずき なおこ）、辻 吉祥（つじ よしひろ）、森下 春枝（もりした はるえ）、吉岡 康子（よしおか やすこ）、輪島 達郎（わじま たつろう）、渡邊 良智（わたなべ よしとも）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 テーマ：大学での学び方を習得しよう 大学での学びは、学生自らの主体的な関心と意欲が基本になっています。この学びを実りあるものにするためには、一定の約束事やスキルを身につける必要があります。この演習では、大学での「学び方」の初歩を修得し、大学生生活のスタートを上手に切っていただくことを期待しています。具体的には、次のような力の修得をめざします。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①大学での学びの特徴を理解する。 ②基礎的な学習スキルを身につける。 ③基礎的な情報検索・文献探索能力を身につける。 ④基礎的な文章読解力を身につける。 ⑤基礎的な口頭発表能力と討論の仕方を身につける。 ⑥基礎的な文章作成能力を身につける。 <p>【授業の概要】 各グループ十数名の少人数による発表や討論が中心になります。授業の進め方は担当教員によって異なりますが、例えば、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○互いの関心を発表し合い、大学で何を学びたいか交流する、 ○共通のテキストを読み、レジュメを作り、発表し、討論する、 ○テーマを決め、関連する文献や資料を探し、まとめて発表する、 ○テーマにもとづき作品を完成させ、互いに批評し合う、 ○身体活動やロールプレイ、ワークショップなどを通じ、多様な自己表現を試みたり体験的認識を深める、 ○レポートを作成することを通じて、わかりやすく自分の考えを他人に伝えられるようにする、 <p>などを組み合わせたものとなるでしょう。</p> <p>どのような形であれ、自ら問いを発し、自分と他人の関心や意見を突き合わせることから、物事の新しい見方が開かれてきます。</p> <p>【授業計画】 グループごとに授業計画は異なります。</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 演習では事前学習が決定的に重要です。とりわけ指定された文献やテーマに沿って十分な下調べをしておく必要があります。報告者はもちろんだが、報告に当たっていない回であっても、十分な事前学習なしに内容を理解することはできないと心得てください。</p> <p>【テキスト】 グループごとにテキストは異なります。</p> <p>【参考文献】 各教員より適宜指示。</p> <p>【評価方法】 平常点50%、提出課題50%</p>		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
江戸から東京へ		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代の風俗・文化・文学について様々なアプローチを試みる。		
授業の概要	江戸（近世）という時代を知るために様々な文献、芸能、また現在に残る当時の遺物などを調査する。そうすることによって、この時代の風俗・文化・文学について考察し、さらには現代につながる「江戸」を見ていく。		
授業計画	第1回	江戸時代について（フリー・ディスカッション）	
	第2回	各々のテーマの設定準備	
	第3回	各々のテーマの確定	
	第4回	レファレンス調査指導	
	第5回	レファレンス調査準備	
	第6回	レファレンス調査実戦	
	第7回	レファレンス調査完成	
	第8回	各自レポート準備（個別指導あり）	
	第9回	各自レポート完成（個別指導あり）	
	第10回	Aグループのレポート発表（20分程度）	
	第11回	Bグループのレポート発表（20分程度）	
	第12回	Cグループのレポート発表（20分程度）	
	第13回	Dグループのレポート発表（20分程度）	
	第14回	江戸から東京につながるもの（フリーディスカッション）	
	第15回	次なるテーマを求めて・・・	
準備学習 (予習・復習等)	江戸期の文芸について、できるだけ興味をひろげて接する		
テキスト	井上泰至「雑食系書架記」(学芸みらい社)		
参考文献	その都度、指定する		
評価方法	授業参加:50% レポート内容:50%		

専攻基礎演習	後期 2 単位	1年
<p>日本語=日本文化を調べる=古都学～京都学入門。Words and culture の観点から日本文化と日本語文化について広域的な知見をやしない、科学的研究の論理的、客観的な姿勢を身につける。</p>	<p>岡崎 和夫（おかざき かずお）</p>	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 日本特有のわび・さびが深く知られて、あらためて高く評価され、また包丁のすばらしさが注目され、和食の文化がユネスコの世界文化遺産に登録されるなど、cool japan、日本文化への世界的な関心が高まり、和服の世界文化遺産登録も近いように考えられる昨今である。</p>		
<p>そのようななか、このゼミでは、神話の時代から、京都学、sub culture論まで日本人・日本民族・日本文化をとりあげた学びをテーマとし、いつも、ひろい観点にたつて、古代日本と現近代日本の連続と不連続を見だし、見直し、下記十五回の演習の中のテーマの具体的なありよう、また付随している文化事象を掘り下げの知見をつみかさねることを目標とする。</p>		
<p><授業の概要></p>		
<p>はじめ、文献学的な学びを主としつつ、たとえば日本の国作り神話と聖書、また「七夕」「お月見」「七五三」「十三詣り」「初詣」「お雛まつり」などの伝承文化、また「お弁当」「おむすび」「鮎」「味噌」「味噌汁」「一汁三菜」などの合理的な食文化のうちに、日本人のどのようなところが込められているか考えます。また、みずからの食文化や〈お節供(旬)〉体験ほかを披歴しながら、授業計画・第1回～第8回（総授業の前半部）のように、既知と未知をきりわけて、先行の諸研究を学んでください。日本人の身体は、ヨーロッパ、アメリカ人達の脂肪の多い、4000キロカロリーを超えるような食事などを必要としない遺伝子に培われきた事実などについても、多くの統計的資料から考察してみましょう。口頭発表は、持ちまわりとし、欠席がちの人は第1回、2回の早期のうちに済ませて責を果たし、順番をくずさないように進めてください。後の資料発表ほど、当然ながらレベルアップするはずなのですが、しばしば本学では不思議なことも起きています。</p>		
<p>このうち、下記の記述内容のほか、後半部の進行において、わが国の独特の庭園様式、日本画の様式、神仏の礼拝の様式、喫茶の文化ほかほかについて、そこに、日本人のどのようなところが蔵われているか、すでに公表されている調査や知見を、みずからの創見とはことなるものとして識別する姿勢を得させることに意を用いながら、科学的研究の論理的・客観的ありようを学んで、総合レポートをつくりあげます。この総合レポートには、神話の研究から第6回、第7回の学習を基底にして、説話というジャンルのおもしろさにめざめて、たとえば「今昔物語集の世界」「宇治拾遺物語の研究」を取り上げるような関心の広がり推奨します。</p>		
<p>なお、後半部の計画進行において、これら15回の内容に強く関連する企画によせて「雅叙園」「根津美術館」「山種美術館」「新国立美術館」「森美術館」、あるいは「とらや文庫」（前期、学問入門演習で出向いたばあいは、「とらや文庫」を除く）ほかいくつかの近隣の資料館へ出向き、知見をふかめる予定（午前～午後にわたるため土曜か日曜を予定）。</p>		
<p><授業計画></p>		
<p>【後期】</p>		
<p>第1回 月の文化からのIntroduction。神話という文化。神話のなかの文化。-----コント・漫才のなかの文化 第2回 神話と伝承-----民話・童話へのふれはばを読む。-----高畑勲作品の研究。 第3回 古代日本語と日本民族の形象-----ふたつのモンゴロイド 第4回 縄文と弥生-----歴史と文化の段差 第5回 アイヌ語と琉球語。方言にのこる古代文化。 第6回 古語と方言、あるいは奈良学と京都学-----[漢字から仮名へ]を始発として 第7回 古代歌謡・万葉集から八代集へ-----「歌垣」を始発として、習俗とスピリチュアル。 第8回 雅楽の研究。神楽・声明・猿楽と能楽一能の研究。 雛まつり行事の原型。 第9回 能楽一狂言の研究 日本女性のちから。調査と学習から〈研究〉の道へ……初歩をふみだす。テーマ決定。 第10回 驚異の和食。とくに、タンパク質源の研究。「味噌」「味噌汁」「一汁三菜」の研究。 第11回 和食・和服・日本画の研究。 日本的な行事文化の研究。調査と学習から〈研究〉の道へ…… 第12回 竹の研究。 調査と学習から〈研究〉の道へ……dataはどこに？神仏の文化 第13回 水の研究。お茶・庭園・和菓子の研究。 調査と学習から〈研究〉の道へ 第14回 神さまの文化・お寺の文化 神仏の礼拝様式。神との交流とスピリチュアル論。 総合のためのmeetingをこころみる。 第15回 総合レポート=『研究総合ノート』の提出。※ルーズリーフや紙束でなく一冊のノートです。</p>		
<p><準備学習（予習・復習等）></p>		
<p>主として、グループメンバー同志の発表準備。</p>		
<p><テキスト></p>		
<p>発表、基礎的知見のありようを確かめて、第3講義ごろまでに決定する。</p>		
<p><参考文献></p>		
<p>進行に合わせて、図書館資料を適宜に指示する。</p>		
<p><評価方法></p>		
<p>授業への貢献の度合い：50% 科学的な思考力の養成の度合い：25% 調査する力・data収集力：25% 上記方式によって評価し得ないばあいは、50分程度の定期試験を行うことにします。</p>		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
生命倫理・社会倫理と法		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	「日本社会はどうあるべきか」「日本社会にどう向き合うべきか」「日本社会の中でどのように生きていくべきか」ということについて、いわゆる生命倫理の課題を通して検討していく。日本社会が「いのち」にどんな関わり方をしていくかを学ぶこと、日本社会における倫理と法の傾向性を把握することを通して、社会倫理的検討の基礎を学ぶ。		
授業の概要	「人工生殖」「安楽死・尊厳死」「脳死・臓器移植」などをテーマとし、学生の報告と討論によって進めていく。(1)前半はテキストを分担報告して、生命倫理の内容理解を深める。(2)後半は各自が重要と考える課題に関してそれぞれ報告し、話し合っていく(下記授業計画における記載は、あくまで参考のための、課題「例」である)。		
授業計画	第1回	はじめに：生命倫理と現代社会・日本社会	
	第2回	<内容理解> 1-1 脳死	
	第3回	1-2 臓器移植	
	第4回	1-3 安楽死	
	第5回	1-4 尊厳死	
	第6回	1-5 人工授精・体外受精	
	第7回	1-6 代理出産	
	第8回	<課題検討> 2-1 脳死と日本人の死生観(例)	
	第9回	2-2 臓器移植と人間の死(例)	
	第10回	2-3 安楽死の是非(例)	
	第11回	2-4 現代的課題としての尊厳死(例)	
	第12回	2-5 人工生殖の現在と未来(例)	
	第13回	2-6 代理出産を法規制すべきか(例)	
	第14回	まとめ1：生命倫理から見る現代日本社会の課題	
	第15回	まとめ2：いのちを生かす日本社会に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	教科書・文献を熟読し、報告に向けて準備しレジュメ作成を行うこと。また、報告後は、報告時に質問を受けた事柄を調べて、次の報告または期末レポートを練り上げること。		
テキスト	葛生・河見・伊佐『新・いのちの法と倫理』（法律文化社） （最初の授業から使用するので必携のこと。）		
参考文献	適宜指示する。		
評価方法	期末レポート：75% 授業での報告・討論：25%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
『南総里見八犬伝』入門—伏姫物語を中心に		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○[本文進捗] 『南総里見八犬伝』本文を読み進めることができる。</p> <p>○[発言力] 演習の場で実践的な発言力を錬成することができる。</p> <p>○[記述力] ワークシート記入によって簡潔な記述力を体得することができる。</p>		
授業の概要	<p>仁・義・禮・智・忠・信・孝・悌とそれぞれ彫られた八顆の靈玉の宿命やいかに——世間には令名ばかりは高いが実際に通読したことのある人は稀という書物がある。曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』もその例外ではない。その他ならぬ『八犬伝』の導入部である伏姫物語を、訳知りの概説や粗筋でなく、まさしく本文で読む。馬琴の文体は、くねくねとうねる和文脈ではなく、漢字（ほとんど総仮名付き）を多用した直截的なものなので、主語述語等が明快である。半期で扱う範囲は、伏姫の出生・命名由来譚から八顆の水晶玉が自害する伏姫の襟元から燦然と蒼天に飛散するまで（岩波文庫、約85頁分）。</p>		
授業計画	第1回	授業説明。伏姫出生から須崎明神（役行者）出現譚。	
	第2回	八房（犬）の出生事情（遠い玉梓怨霊の由来）。	
	第3回	南総分立と安西景連の違約。	
	第4回	八房、敵将の首級を献上する。	
	第5回	里見公の苦衷。	
	第6回	異類婚姻譚。	
	第7回	伏姫、八房を伴い、富山入り。	
	第8回	故金碗八郎・同息金碗大輔の物語。	
	第9回	禁忌の富山。里見義実、富山訪問を決意。	
	第10回	伏姫母の重病。里見公の夢に仙翁出現。	
	第11回	畜生菩提心。伏姫、物類相感で、懐妊。	
	第12回	法華経堤婆達多品、女人往生の巻。	
	第13回	里見公、微行して富山入り。金碗大輔の接近。	
	第14回	八房の殺害、と伏姫の自害。靈玉、飛散。	
	第15回	総集予告篇。八犬士と『南総里見八犬伝』の世界。	
準備学習 (予習・復習等)	[予習書式への記入] A 4版1枚のワークシート記入		
テキスト	プリンター一括配布		
参考文献	特になし		
評価方法	発表の蓄積:40% 本文の理解:30% ワークシート:30%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
自分のなかの「歴史」を知る		小林 瑞乃（こばやし みずの）	
授業の到達目標及びテーマ	社会と歴史について様々な角度から学ぶ。世界と日本、アジアとの関係、戦争と貧困、格差、差別、エネルギーなど重要な問題を〈今を・共に・生きる〉という視点から考えていく。また新聞を読む習慣をつけて記事について議論し合い、日本、世界、そして自分と未来を切り開く構想力を養っていく。		
授業の概要	テキストと新聞読解によって、内容を正確に理解し、各自の関心や問題意識を深め、現代の諸問題を歴史的な流れを踏まえて考察できるようにする。個別報告や討論、新聞記事のワークシート作成などによって学問的な基礎を体得する。		
授業計画	第1回	ガイダンスと自己紹介	
	第2回	世界ランキングから見えてくる〈世界〉	
	第3回	読むこと・書くこと・話すこと	
	第4回	個別報告と討論（1）	
	第5回	個別報告と討論（2）	
	第6回	個別報告と討論（3）	
	第7回	個別報告と討論（4）	
	第8回	個別報告と討論（5）	
	第9回	個別報告と討論（6）	
	第10回	個別報告と討論（7）	
	第11回	ワークショップ（1）	
	第12回	ワークショップ（2）	
	第13回	ワークショップ（3）	
	第14回	ワークの報告と討論会	
	第15回	まとめ 問題の検証とこれからの課題	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業で配布する記述シートに授業やテキストの要点等をまとめ、次回の授業時に提出すること。授業前にはテキストや配布資料を読み要点を押さえておくこと。		
テキスト	日本の現状や国際問題、経済格差など社会の様々な問題に関する文献の中から、履修者の関心に合わせ、相談の上で決定する。		
参考文献	課題にあわせて適宜紹介する		
評価方法	記述シート、報告等:50% レポート:50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
近現代の小説を読んでみよう		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	近現代の小説を読む訓練をし、卒業論文に備えます。読んで考え、資料を調べ、レジュメにまとめ、発表し、討論する、というゼミ発表の方法に即して、読解力・思考力・調査力を養います。また、皆で共に考え、意見交換することでより理解が深まるという経験をぜひもってほしいと思います。		
授業の概要	それぞれ深く読んでみたい作品を自分で選び（下記は一例です）、熟読してレジュメを作り、発表準備をします。テーマに合わせて図書館で資料を探し、読んでまとめます。発表とディスカッションを通じて、作品についてさらに理解を深めます。		
授業計画	第1回	イントロダクション 発表する作品を決める	
	第2回	発表する作品を読み、文献を調べる	
	第3回	発表とディスカッション 太宰治	
	第4回	発表とディスカッション 芥川龍之介	
	第5回	発表とディスカッション 志賀直哉	
	第6回	発表とディスカッション 葉山嘉樹	
	第7回	発表とディスカッション 江戸川乱歩	
	第8回	発表とディスカッション 宮沢賢治	
	第9回	発表とディスカッション 三島由紀夫	
	第10回	発表とディスカッション 安部公房	
	第11回	発表とディスカッション 吉屋信子	
	第12回	発表とディスカッション 倉橋由美子	
	第13回	発表とディスカッション 山田詠美	
	第14回	発表とディスカッション シリン・ネザマフィ	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・担当する作品を深く読み、考察してノートを作る。 ・担当する作品について文献を集め、読んでノートを作る。 ・調べたこと、考えたことを発表レジュメにまとめる。 ・発表後、さらに補足してレポートを作成する。 		
テキスト	授業時に配布します。		
参考文献	その都度指示します。		
評価方法	発表:40% 発言、コメントカード:30% 期末レポート:30%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
フィクションとノンフィクション——生活と生命の表現を読む		辻 吉祥（つじ よしひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	〈帝国〉システムの世界的な破綻後、1%vs99%の貧富のいびつな両極分解は、震災ショックをも存分に活用しながら進行されています。深まる凄惨な事態を捉える小説、ルポ、なかでも「災害」「貧困」「戦争」をテーマに、さまざまな作品を読みます。この作業を通して、他ならぬ自分自身の「生きる現在」を解読し、照らしだせるようにします。		
授業の概要	各自が前期「学問入門演習」で学習したことを基礎にしたうえで、それぞれのテーマについて、教員の提示する作品リスト（多量な素材があり、どれを選んでもかまいません（授業計画はそのごく一例）。もちろん自分で探してきて可）から選んだ作品について、発表・討議します——たのしく、深く、そしてなにより、現在の自分をのり越えるために。		
授業計画	第1回	導入—文献案内	
	第2回	ルポ ルタージ ュ1—鎌田慧『自動車絶望工場—ある季節工の手記』	
	第3回	ルポ ルタージ ュ2—石牟礼道子『苦海浄土—わが水俣病』	
	第4回	ルポ ルタージ ュ3—荒畑寒村『谷中村滅亡史』	
	第5回	戦争の表現1—芥川龍之介『奇怪な再会』	
	第6回	戦争の表現2—武田泰淳『ひかりごけ』	
	第7回	戦争の表現3—大岡昇平『野火』	
	第8回	学生による発表と質疑応答（Aグループ）	
	第9回	学生による発表と質疑応答（Bグループ）	
	第10回	学生による発表と質疑応答（Cグループ）	
	第11回	学生による発表と質疑応答（Dグループ）	
	第12回	学生による発表と質疑応答（Eグループ）	
	第13回	学生による発表と質疑応答（Fグループ）	
	第14回	学生による発表と質疑応答（Gグループ）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、各人が自ら設定する課題について、その動機づけ、考察が深まるような作業を蓄積していくこと。		
テキスト	授業時にプリントで配布します		
参考文献	ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン』上下（岩波書店） ルポの本は文庫本で入手できます。必読。		
評価方法	レポート（調査・考察・文の巧拙）:50% 発表:30% ディスカッション参加度:20%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
生きること・愛すること・死ぬこと		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	健康でお金があればそれで幸せか、恋と愛はどこがちがうのか、結婚して子どもを産むのは「当たり前」か、家族は仲良くできるのか、「ドナーになってほしい」と言われたらどうするか、人は死んだらどこに行くのか-人生における疑問・課題をキリスト教信仰を基礎にしつつ、様々な角度から検討し、発表、討論を通して思索を深めることを目標とする。		
授業の概要	それぞれのテーマについて担当者が発表をした後、ディスカッション。		
授業計画	第1回	生きている・生かされているいのち	
	第2回	いのちをめぐる発表とディスカッション①	
	第3回	いのちをめぐる発表とディスカッション②	
	第4回	いのちをめぐる発表とディスカッション③	
	第5回	4つの愛	
	第6回	親子をめぐる発表とディスカッション	
	第7回	友をめぐる発表とディスカッション	
	第8回	恋愛をめぐる発表とディスカッション	
	第9回	結婚・離婚・シングルをめぐる発表とディスカッション	
	第10回	アガペーをめぐる発表とディスカッション	
	第11回	死を見つめるころ	
	第12回	なぜ死は怖いのかをめぐる発表とディスカッション	
	第13回	死んだらどこに行くのかをめぐる発表とディスカッション	
	第14回	死別体験をめぐる発表とディスカッション	
	第15回	本当の幸せとは何か	
準備学習 (予習・復習等)	授業日当日の「青山学院今週の聖句」聖書箇所と新聞朝刊(社は問わない)一面と社説を読んでくること		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会)		
参考文献	授業のなかで指示		
評価方法	発表:40% ディスカッション参加:20% 期末レポート:40%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
日本を社会科学の領域から考察していくための基礎演習		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	社会科学の著作や論文を読み、社会科学の思考をしていくための、基礎的な教養を獲得し、方法を学ぶことが目標です。		
授業の概要	日本社会についての著作、あるいは日本社会を分析するために応用できる著作をいくつかセレクトし、内容を正確に読み解き、それを実際の社会分析に応用する練習を積み重ねていきます。また、社会諸科学においては正解のない問題も数多くあります。そのような問題について、読み、話し、書くことを通して探求する意味を体得したいと思います。		
授業計画	第1回	オリエンテーションと自己紹介	
	第2回	社会科学の著作の読解の技法(1)	
	第3回	社会科学の著作の読解の技法(2)	
	第4回	現代社会科学の論点(1)—生命と福祉	
	第5回	現代社会科学の論点(2)—ジェンダーとセクシュアリティ	
	第6回	現代社会科学の論点(3)—グローバル化と格差	
	第7回	現代社会科学の論点(4)—高齢化と地域社会	
	第8回	現代社会科学の論点(5)—民主主義とテロ	
	第9回	現代社会科学の論点(6)—差別と人権	
	第10回	現代社会科学の論点(7)—国家と安全保障	
	第11回	社会科学分野のレポート作成指導(1)—先行研究調査	
	第12回	社会科学分野のレポート作成指導(2)—中心命題の策定	
	第13回	社会科学分野のレポート作成指導(3)—論理の展開	
	第14回	社会科学分野のレポート作成指導(4)—結論の導出	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、輪読するテキストを綿密に読解し、疑問点や論争点を抽出して、分析することが求められます。		
テキスト	授業時に配布します。		
参考文献	授業時に指示します。		
評価方法	平常点:50% 期末レポート:50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
日本社会についての理解を深める		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標 及びテーマ	学問入門演習で学んだスキルを応用し、日本社会の様々な問題について、文献・資料を共に読みながら理解を深める演習である。あわせて2年次の卒業研究のためのテーマを模索する。日本社会について深く学ぶことで読解力を身につけ、さらに調査力を養うことにより主体性とコミュニケーション力を身につけることができる。		
授業の概要	本年度は、日本社会・日本人にとって避けることのできない災害を取り上げ、災害問題や日本人の自然観を中心に日本社会・日本人について考える。具体的には、災害に関する共通テキストを輪読した後で、各自がテーマをたてて調査研究した結果をレジュメにまとめて発表し、それに基づいて討論を行い、共通理解を深める。		
授業計画	第1回	日本社会論、日本人論とは何か	
	第2回	日本人と災害	
	第3回	テキストの輪読（1）	
	第4回	テキストの輪読（2）	
	第5回	テキストの輪読（3）	
	第6回	テキストの輪読（4）	
	第7回	テキストの輪読（5）	
	第8回	発表と討論（1）	
	第9回	発表と討論（2）	
	第10回	発表と討論（3）	
	第11回	発表と討論（4）	
	第12回	発表と討論（5）	
	第13回	発表と討論（6）	
	第14回	発表と討論（7）	
	第15回	全体まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	発表者はテキストの分担箇所の要約レジュメを用意する。他の学生もテキストのその箇所を読んでくる必要がある。		
テキスト	広瀬弘忠『人はなぜ逃げおくれるのか』（集英社新書） 広瀬弘忠『巨大災害の世紀を生き抜く』（集英社新書）		
参考文献	テーマに応じて適宜紹介する。		
評価方法	授業参加度：50% 期末レポート：50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
江戸時代文化・文芸・芸能・風俗・歴史の研究		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代の「文学・文化・芸能・風俗・歴史など」に関するテーマで卒業論文を作成する学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。		
授業の概要	まず、学生各人が関心を持つ分野について、基礎的な資料を探索することから始める。その資料を基に、さらに深くその分野を知り、自己の論文の主題を決定する。また、周辺資料も広くあたり、テーマの深化を計る。論文そのものの構成と内容、文献あるいは絵画資料、場合によっては音声資料などの用い方についても具体的に指示する。		
授業計画	第1回	課題（テーマ）・研究ノートの作成	
	第2回	5枚程度の概略文の作成	
	第3回	上記概略文を元にした個別指導 ①	
	第4回	上記概略文を元にした個別指導 ②	
	第5回	上記概略文を元にした個別指導 ③	
	第6回	10枚程度の発表原稿用意（個別指導）①	
	第7回	10枚程度の発表原稿用意（個別指導）②	
	第8回	10枚程度の発表原稿用意（個別指導）③	
	第9回	研究発表①	
	第10回	研究発表②	
	第11回	研究発表③	
	第12回	各発表者による討議・検討①	
	第13回	各発表者による討議・検討②	
	第14回	総評（さらに発展させるために）	
	第15回	15枚程度のレポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	個々のテーマを追究するための資料・参考文献の読解・要約。		
テキスト	個人各々の「テーマ」により、それぞれに指示します。		
参考文献	「テーマ」に応じて、指示するとともに、各々が作成した「研究ノート」が参考文献となります。		
評価方法	過程報告:50% レポート:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
生命倫理・社会倫理と法		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	「日本社会はどうあるべきか」「日本社会にどう向き合うべきか」「日本社会の中でどのように生きていくべきか」ということについて、生命倫理の課題を中心に深く検討する。そのなかで社会倫理的探究における自らのスタンスを形成していくと共に、基本的方法論を身に付けていく。そして、その成果を卒業論文にまとめるための準備を行う。		
授業の概要	授業は討論、話し合いが中心となる。まず、共通の文献を読んで医療と家族とケアについて話し合っていく。そのうえで、各自、ケアについて文献を調べて報告をする。期末には卒業論文の準備としてのレポートの提出がある。なお夏休みに、卒業論文の中間報告に向けたゼミ合宿を行う可能性もある。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	『病院で死ぬということ』を巡る話し合い(医療の問題点)	
	第3回	”	(家族の苦しみ)
	第4回	”	(患者の苦しみ)
	第5回	”	(医療がなすべきこと)
	第6回	”	(社会がなすべきこと)
	第7回	「ケア」についての発表・討論(グループ1)	
	第8回	「ケア」についての発表・討論(グループ2)	
	第9回	「ケア」についての発表・討論(グループ3)	
	第10回	「ケア」についての発表・討論(グループ4)	
	第11回	ホスピスの理念と実際:「いのちを支える」ことを話し合う	
	第12回	在宅ホスピスの試み:「いのちを支える」ことを話し合う	
	第13回	卒論準備レポートの発表と話し合い(グループ1)	
	第14回	卒論準備レポートの発表と話し合い(グループ2)	
	第15回	前期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予め指示された課題(文献を読んでくる、報告を用意する、卒業論文に関して指示されたことについてまとめてくる、など)を準備して授業に臨むこと。また授業後は、授業を通して得たことを各自、まとめること。		
テキスト	最初に、山崎章郎『病院で死ぬということ』(文春文庫)。他のテキストは随時指定する。		
参考文献	適宜指示する。		
評価方法	授業への参加度合い:75% 卒論準備期末レポート:25%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒業論文 I—日本古典文学篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標及びテーマ	<p>○卒業論文の対象作品を読書計画に従って読み進めることができる。</p> <p>○ワークシート記入蓄積などを、継続指導の中で、実行することができる。</p> <p>○全体会、グループ授業の中で、積極的に役割を果たすことができる。</p>		
授業の概要	<p>○前期は、どこまで多く原文を読み進めるか、これが大きな勝負である。ワークシートとそれに立脚した発言によって、各自の着眼は必ず浮かび上がってくるはず。現段階で研究文献のリサーチは、重要でない(特殊テーマ=仏教・漢籍・古注釈など知識系で立論したいなら話は別だが)。</p> <p>○下記の[授業計画]欄に[A①全体授業②作品グループ授業/B個別面談]と分類して各週2コマの形態を示す。分類A①は全体への年間日程連絡等。A②の時間帯・形態は主として本文読書の進捗指導や着眼のみに充てたい。Bは、半期予定表に基き個人別面談を実施する。</p>		
授業計画	第1回	A：①授業案内と面談予定表配布。情報交換、希望する作品・テーマを全体授業で口頭発表。 B：個人別、テーマ・作品の相談。	
	第2回	A：①決定済テーマ・作品の全体発表。テキスト注文・現物入手の確認。②作品別グループ集合、読書ワーク・シート配布。	
	第3回	A：②グループ会、ワーク・シート集約。意見交換。 B：個人面談。	
	第4回	A：②グループ会。グループ別面談。 B：個人面談。計画シートの提示、読書進捗に関する口頭チェック。	
	第5回	A：②グループ会。グループ別面談。 B：個人面談、読書計画の修正相談。	
	第6回	B：個人面談。読書進捗の確認。小中項目の着想聞き取り。小項目カードの取り方練習指導。	
	第7回	B：個人面談。小中項目カード束の点検と聞き取り。	
	第8回	B：個人面談。読書進捗の強化相談。発展項目の探究、指導。	
	第9回	B：個人面談、読書進捗の増加量測定。読書計画の再修正、指示。	
	第10回	A：②グループ別面談。読書進捗と着想報告。相互アドバイス。	
	第11回	B：個人面談。小中項目カード束の増加確認と分類再検討。立論の方向付け・補強、暫定的目次の模索に向けて。	
	第12回	B：個人面談。着想断草群の箇条書き→〈テーマ〉記述にむけて。	
	第13回	A：①全体会。夏期草稿の諸注意と指示。下記読書計画書式・前期自主総括表書式の配布。 B：個人面談。夏期草稿の構想相談。〈テーゼ〉点検と相談指導。	
	第14回	B：個人面談。夏期草稿目次案の相談指導。夏期読書計画書の提出。	
	第15回	A：①全体会、前期成果の各自総括を口頭発表。自主総括表の提出。 B：夏期草稿のテーゼ・メモ提出。夏期草稿目次の提出。	
準備学習(予習・復習等)	<p>○[読書の遂行]半期全期間を通じて、実行。</p> <p>○[ワークシート]記入して蓄積。</p> <p>○[夏期草稿]400字詰め原稿用紙×15枚=換算プリントアウト(学期外だが夏休み明けに提出)</p>		
テキスト	<p>○自前の文庫本を、研究対象が確定した段階(第2回目)で早急に購入。</p> <p>○『源氏物語』のように何冊もあるばあいは、分割入手でよい。古本やアマゾン等で格安文庫を買うこともできる。</p>		
参考文献	個別面接にて指示する。		
評価方法	ワークシートの蓄積:25% 進捗本文の蓄積:25% グループ分科会発言:25% 面談実績:25%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
歴史を知り社会を学び自己をみつめる		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会の諸問題を歴史的経過と共に考察する。女性の自立、経済格差、アジア、日米関係、教育、食、エネルギー、戦争と平和などのテーマを中心に学びを深める。文献だけでなく映像や実習、アニメなど様々な素材がテキストとなる。新聞は必読。毎週各自の選択した記事を議論し、認識を深めあう。史料の読解・調査・分析・報告の方法を体得しつつ現代社会で生き抜く実践力と〈自己〉を鍛えていきたい。		
授業の概要	日本社会の様々な現状を理解し分析力をつける。テキストを講読し、分担して発表を行い、読解の方法・報告の仕方等について体得する。その後、各自のテーマを決めて研究の準備を行う。テキスト講読や問題の分析などの結果について、活発に議論し、各自のテーマを深めることに還元していく。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	現状の分析と問題の確認①	
	第3回	現状の分析と問題の確認②	
	第4回	現状の分析と問題の確認③	
	第5回	テキスト講読と討論①	
	第6回	テキスト講読と討論②	
	第7回	テキスト講読と討論③	
	第8回	テキスト講読と討論④	
	第9回	テキスト講読と討論⑤	
	第10回	テキスト講読と討論⑥	
	第11回	テキスト講読と討論⑦	
	第12回	テキスト講読と討論⑧	
	第13回	研究課題に取り組む①	
	第14回	研究課題に取り組む②	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業で配布する記述シートに授業やテキストなどの概要・要点をまとめ、次回授業時に提出すること。授業の前にはテキストや配布資料を熟読し問題点等を押さえておくこと。		
テキスト	小熊英二『日本という国』、鹿野政直『日本の近代思想』、岩田重則『〈いのち〉をめぐる近代史』、ひろたまさき『差別の視線』等から選択する。新聞は各自必読。		
参考文献	課題にあわせて適宜紹介する		
評価方法	記述シート、報告など:50% レポート:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
近現代小説研究 1		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	研究対象を各自の問題関心に沿って調査研究する方法および、長い文章を論理的に構築しわかりやすく適切に表現する力を身につけます。テーマは一葉・漱石・賢治・太宰から戦争・沖縄・現代女性文学まで文学研究の他、ジェンダー・社会問題・性・サブカルチャーなど現代文化論からも選択可。		
授業の概要	各自、対象作品等の分析、参考文献調査・読破を経て、ゼミ発表をします。 ゼミ発表に参加し、さまざまな研究に触れ、ディスカッションで理解を深めます。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	研究テーマを決め、計画を立てる 1	
	第3回	研究テーマを決め、計画を立てる 2	
	第4回	文献調査法を学ぶ	
	第5回	個人研究中間報告	
	第6回	発表とディスカッション 1	
	第7回	発表とディスカッション 2	
	第8回	発表とディスカッション 3	
	第9回	発表とディスカッション 4	
	第10回	発表とディスカッション 5	
	第11回	発表とディスカッション 6	
	第12回	発表とディスカッション 7	
	第13回	発表とディスカッション 8	
	第14回	前期の研究成果を振り返る	
	第15回	夏休み以降の研究計画を立てる	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・研究対象の作品について考察を深める。 ・各自のテーマに沿い、文献を集め、読みこなす。 ・発表レジュメを作成する。 		
テキスト	とくになし		
参考文献	授業中に指示		
評価方法	発表:60% 発言とコメントカード:40%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
近現代文学・評論の研究		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標及びテーマ	明治期以降の小説、ルポルタージュ、評論などを主として対象とし、みずからの問題意識を大切に育てながら、総合的な「論」を形作る。その過程で、先行研究の調査、他の分野で行なわれている発想・研究方法との比較をすること、論理的な説得の手順、自分自身の文体を見つけることなどを学習する。		
授業の概要	論文は、わかりやすい比喻で言えば、建築です。ヴィジョンを練り、よい材料を時間をかけて集め、柱と梁をしっかりと構築し、(論理的)不整合の無いようにブロックを組んでいきます。どうか雨漏りのしないように、ひとりひとりの大切な問題意識が、その中で育ち、成長できている建築でありますように。そのために必要な技術を順次指導します。		
授業計画	第1回	論文作成に先立つ問題意識について	
	第2回	テーマ、問題意識を固める I (序)	
	第3回	テーマ、問題意識を固める II (図書館の利用)	
	第4回	テキストの確定	
	第5回	先行研究を収集する	
	第6回	調査研究・論文作成と7P ^o ロフ法の指導 I (先行研究の系統化)	
	第7回	調査研究・論文作成と7P ^o ロフ法の指導 II (筋立ての作成)	
	第8回	調査研究・論文作成と7P ^o ロフ法の指導 III (テーマの追究)	
	第9回	調査研究・論文作成と7P ^o ロフ法の指導 IV (テーマの深化)	
	第10回	概要の発表 I (グループ A)	
	第11回	概要の発表 II (グループ B)	
	第12回	概要の発表 III (グループ C)	
	第13回	概要の発表 IV (グループ D)	
	第14回	概要の発表 V (グループ E)	
	第15回	夏季の課題を確認	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、各自の論文の進み具合に応じて適切な次のステップを与え、課題とします。		
テキスト	各自の対象とするテキストとノート		
参考文献	各自のテーマに応じて適宜紹介します。		
評価方法	論文内容:70% 中間報告など作成過程における達成:30%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
身体・健康論、日本の舞踊文化		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	健康・身体文化・身体表現全般・日本の舞踊文化を中心に、各自の関心に沿って調査・研究を進め、論文の作成をめざします。		
授業の概要	テーマに応じてグループを作ります。グループでの話し合いを重ねるとともに、途中経過報告と質疑応答、ミニレクチャーを行います。発表と活発な討論によって互いに視野を広げるとともに、自らの必要な作業は何なのかを明確にし、独自性や妥当性を論証する具体的な研究方法を身につけていきます。		
授業計画	第1回	本演習の進め方の解説を行います。自己紹介をし合い、信頼関係を築けるようにします。	
	第2回	研究テーマをどう模索していくのか検討します。	
	第3回	調査・研究の進め方を検討します。	
	第4回	研究テーマの絞り込みを行います。	
	第5回	研究テーマを紹介し合い、アドバイスし合います。	
	第6回	研究計画の発表 1	
	第7回	研究計画の発表 2	
	第8回	研究計画の発表 3	
	第9回	発表とディスカッション 1	
	第10回	発表とディスカッション 2	
	第11回	個別指導 1	
	第12回	個別指導 2	
	第13回	個別指導 3	
	第14回	前期のまとめ	
	第15回	下書き作成上の注意点（夏休み中の作業について）	
準備学習 (予習・復習等)	書籍選びと参考資料集めを行います。調査（インタビュー・市場調査・観劇などによる検討など）が必要な場合には、その準備を行います。		
テキスト	特に定めませんが、論文の書き方など参考となる書籍・資料等、その都度紹介します。		
参考文献	テーマや内容によって、その都度紹介します。		
評価方法	論文執筆過程:50% 論文:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒業演習・卒業論文		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各自のテーマをキリスト教を基に考察することとおし、自分自身と他者を新たに発見し、真に自由で豊かな人生を切り開く力をつけるための演習。聖書・キリスト教文化・文学・教会史・比較宗教・「3・11」・死生学等をとおして学ぶ。		
授業の概要	講義、ディスカッション、ワークショップ等により考察を深め、各自のテーマ設定を行い、研究・論文作成へと向かう。夏期休暇中に卒論中間報告のためゼミ合宿を行う予定。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ワークショップ①	
	第3回	ワークショップ②	
	第4回	グループ面談①	
	第5回	グループ面談②	
	第6回	グループ面談③	
	第7回	発表とディスカッション①	
	第8回	発表とディスカッション②	
	第9回	発表とディスカッション③	
	第10回	発表とディスカッション④	
	第11回	発表とディスカッション⑤	
	第12回	ワークショップ③	
	第13回	個別指導①	
	第14回	個別指導②	
	第15回	前期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	ゼミ当日の「青山学院今週の聖句」聖書箇所と新聞朝刊(社は問わない)一面と社説を読んでくること		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会） 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』（日本キリスト教団出版局）		
参考文献	各自に指示		
評価方法	授業への参加態度:50% 論文執筆の過程:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
政治学・社会思想・沖縄学にかんする専門的研究手法の獲得		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	社会科学的領域から日本という対象にアプローチしていくために、研究の方法や、論理の構築方法を学ぶ。		
授業の概要	共通の研究書や論文を読み解き、たがいに議論しながら、粘り強く、論理的に思考する訓練を行うと同時に、メンバーそれぞれの個性から豊かに学ぶことができる空間を作っていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーションと自己紹介(1)	
	第2回	オリエンテーションと自己紹介(2)	
	第3回	テキストの読解と討論(1)	
	第4回	テキストの読解と討論(2)	
	第5回	テキストの読解と討論(3)	
	第6回	テキストの読解と討論(4)	
	第7回	テキストの読解と討論(5)	
	第8回	資料探索の手法	
	第9回	テキストの読解と討論(6)	
	第10回	テキストの読解と討論(7)	
	第11回	テキストの読解と討論(8)	
	第12回	テキストの読解と討論(9)	
	第13回	卒業論文のテーマ設定のために(1)—学術論文のテーマとは	
	第14回	卒業論文のテーマ設定のために(2)—先行研究の調査	
	第15回	卒業論文のテーマ設定のために(3)—テーマの絞り方	
準備学習 (予習・復習等)	輪読するテキストの綿密な読解、疑問点、論争点の抽出などの分析を事前に行っておくことが求められます。		
テキスト	授業時に指示		
参考文献	授業時に指示		
評価方法	平常点:80% 振り返りレポート:20%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
日本の社会やメディアについての理解を深める。		渡邊 良智 (わたなべ よしとも)	
授業の到達目標及びテーマ	2年後期の卒業演習Ⅱの準備段階として、日本の社会やメディアについての共通理解を深めるとともに、将来社会人として要求される学生の諸能力を少人数授業の中で養成する。学生は、問題発見力、調査力、分析力、討議力、表現力および発表力を合わせたコミュニケーション能力、これらを身に着けることができる。		
授業の概要	授業の前半は、災害という切り口から日本社会についての理解を深めるため、共通テキストを輪読する。後半は、各自自由に現代日本社会に関するテーマを選択して調査研究を行い、分析結果をレジュメにまとめて発表し、それに基づいて討議を行い、現代日本社会についての理解を深める。		
授業計画	第1回	導入と今後のスケジュール	
	第2回	テキストの輪読（1）	
	第3回	テキストの輪読（2）	
	第4回	テキストの輪読（3）	
	第5回	テキストの輪読（4）	
	第6回	テキストの輪読（5）	
	第7回	テキストの輪読（6）	
	第8回	発表と討議（1）	
	第9回	発表と討議（2）	
	第10回	発表と討議（3）	
	第11回	発表と討議（4）	
	第12回	発表と討議（5）	
	第13回	発表と討議（6）	
	第14回	発表と討議（7）	
	第15回	全体まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	発表者はテキスト分担箇所を要約してレジュメを作る。他の学生もテキストのその箇所を読んできて討議に参加する。		
テキスト	寺田寅彦『天災と日本人』（角川ソフィア文庫）寺田寅彦『天災と国防』（講談社文庫）		
参考文献	必要に応じて適宜指示する。		
評価方法	演習参加度:30% 中間発表:30% 最終レポート:40%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
江戸時代文化・文芸・芸能・風俗・歴史の研究論文の作成		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標及びテーマ	江戸時代の「文学・文化・芸能・風俗・歴史など」に関するテーマで卒業論文を作成する学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。江戸という時代を俯瞰し、学生各人が持つ「江戸時代」に関する課題について、歴史的な位置づけを考察し、各々の知識の充実を図る。		
授業の概要	江戸時代の地域的差異にも着目して論文作成を進めていく。京坂（上方）と江戸の差異、「都市」と「地方」の差異などの観点なども各人のテーマに合わせて探っていく。また、先行研究や他の学説への言及も含め、主張の一貫性、説得性、論理性、言語表現の適切性などを確認し、「論文」を完成させることを目的とする。		
授業計画	第1回	「卒業演習Ⅰ」で作成したレポートを読み直す	
	第2回	上記レポートを元に論文構成を考える	
	第3回	個別指導Ⅰ	
	第4回	個別指導Ⅱ	
	第5回	個別指導Ⅲ	
	第6回	中間発表Ⅰ	
	第7回	中間発表Ⅱ	
	第8回	中間発表Ⅲ	
	第9回	相互意見交換	
	第10回	論文下書き期間Ⅰ	
	第11回	論文下書き期間Ⅱ	
	第12回	個別指導（添削）Ⅰ	
	第13回	個別指導（添削）Ⅱ	
	第14回	個別指導（自己申告）	
	第15回	卒業論文提出	
準備学習 (予習・復習等)	個々のテーマを追究するための参考文献・資料の読解・要約。		
テキスト	各個人の「テーマ」に応じて、それぞれ指示します。		
参考文献	卒業演習Ⅰで作成したレポート・「研究ノート」・その他、各々に指示します。		
評価方法	過程報告:40% 論文内容:60%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
生命倫理・社会倫理と法		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	「日本社会はどうあるべきか」「日本社会にどう向き合うべきか」「日本社会の中でどのように生きていくべきか」ということについて、生命倫理の課題を中心に深く検討する。卒業演習Ⅰでなされた準備をもとに、学びの集大成として卒業論文を作成する。		
授業の概要	授業は卒業論文に関する討論、話し合いと卒業論文指導が中心となる。卒業論文作成後、発表会を行う。		
授業計画	第1回	卒業論文中間報告	
	第2回	卒論に関連するテーマを選んだ報告と討論（グループ1）	
	第3回	卒論に関連するテーマを選んだ報告と討論（グループ2）	
	第4回	章立てに関する報告と討論（グループ1）	
	第5回	章立てに関する報告と討論（グループ2）	
	第6回	第一章相当部分に関する報告と討論（グループ1）	
	第7回	第一章相当部分に関する報告と討論（グループ2）	
	第8回	第二章相当部分に関する報告と討論（グループ1）	
	第9回	第二章相当部分に関する報告と討論（グループ2）	
	第10回	第三章相当部分に関する報告と討論（グループ1）	
	第11回	第三章相当部分に関する報告と討論（グループ2）	
	第12回	卒論全体に関する報告と討論（グループ1）	
	第13回	卒論全体に関する報告と討論（グループ2）	
	第14回	卒論要旨の作成	
	第15回	卒業演習のふりかえり・卒論発表会の準備	
準備学習 (予習・復習等)	予め指示された課題(文献を読んでくる、報告を用意する、卒業論文原稿を指示されたところまで書いてくる、など)を準備して授業に臨むこと。授業後は、質問されたり指摘された点について、より詳しく調べ、より深く考えていくこと。		
テキスト	特になし。		
参考文献	卒業論文のテーマごとに指示する。		
評価方法	卒業論文:75% 授業への参加度合い:25%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒業論文Ⅱ—日本古典文学篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○卒業論文を計画・指導に従って完成することができる。 ○卒業論文の前提となる作品に習熟することができる。 ○卒業論文に必要な方法論を体得することができる。 		
授業の概要	<p>後期は、自分の書きたいことが何なのか、そのことを常に根源的に問い続ける試練の時である。あれもだめ、これもだめ、という否定の日々もあるだろう。その彷徨のさなか、突然、視路が一挙にひらける瞬間があるはずだ。論文の書き方・論述のスタイルは、人さまざま。マルクスならマルクス、吉本隆明なら吉本隆明の書き方があるではないか。だから、文学論のばあい、『論文の書き方』の類はくだらない。授業A/Bの分類は、前期に同じ。夏期草稿をタタキ台としながらも、さらに更新した読書・着眼メモ束を資本として、あなただけの精髓エックスを書き綴ること。その結果として、ひとりでにアガリの高い卒業論文が出現すること、間違いなし。</p>		
授業計画	第1回	A：①後期日程の配布。夏休み草稿、論旨を教室で音読発表。 B：草稿提示・解説。	
	第2回	B：個人面談。草稿、講評。方向性を相談、指導。本文読書の計画書相談。	
	第3回	B：個人面談。読書計画書の提示。追加着眼カードの点検。	
	第4回	B：個人面談。読書計画の実行と軌道確認。	
	第5回	B：呼び出し個人面談（進捗・面談実行に問題ありの学生）。	
	第6回	B：個人面談。予定卒論（以下「卒論」と表記）の後半部および全体構成についての相談・指導。	
	第7回	B：個人面談。卒論の暫定目次。卒論の未着手箇所、指導相談。	
	第8回	B：個人面談。未着手箇所の新規増加の点検。	
	第9回	B：個人面談。現状の卒論、仮提出（完成・未完成とも）。	
	第10回	A：卒論提出の諸注意と日程再確認。論集原稿の諸注意と日程。 B：個人面談、仮提出草稿の修正指示。	
	第11回	B：個人面談。提出予定原稿の修正確認。	
	第12回	A：卒論提出の済・未済を確認。論集草稿・発表会資料草稿の年内提出、確認・指示。B、個人面談、提出未済者の予定確認。	
	第13回	B：個人面談、論集草稿の点検と修正指示。発表会資料草稿の点検と助言、年明けの原稿集約にむけて。	
	第14回	A：論集・発表会の打ち合わせNo.1。 B：論集草稿の修正確認。発表会資料の修正確認→修正クリア原稿の集約。不適原稿の再提出日程指示。	
	第15回	A：論集・発表会の打ち合わせNo.2。 発表資料集の冊子配布（予定）。	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ○[本文読書]後期10月末くらいまで追加本文読書を継続する。面談で点検。 ○[ワークシート]後期、10月末くらいまで蓄積追加。 ○[卒論草稿]卒論提出の認定ができる12月中旬まで継続。 ○[学生卒論文集草稿推敲]1月中旬の入稿まで準備が続く。 ○[発表会資料作成・発表会参加]1月下旬発表会、論集原稿と並行作業。 		
テキスト	卒業演習Ⅰに同じ。『源氏物語』文庫本など複数分冊の作品は、追加分冊を購入してもよい（各自によりけり）。		
参考文献	個別に指示する。		
評価方法	完成論文の水準:25% 夏期草稿の水準:20% 面談の活用・参加:30% 雑誌原稿の日程管理:25%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
歴史を学び社会を知り自己をみつめる		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標及びテーマ	各自が興味をもったテーマについて問題の所在を探り、調査・研究する。研究と報告を積み重ねることで学問的方法を習得し、オリジナリティのある卒業論文を完成する。また、毎週各自の選んだ新聞記事について議論し、現代社会の諸状況を歴史的背景とともに理解する。		
授業の概要	毎週新聞記事の記入シート作成と議論を行う。また分担して論文のテーマ研究の報告を行い、全体で活発に議論しあいながら次の課題や問題点を探り、各自の研究を深めていく。先行研究や史料読解、論文の書き方など、論文完成に向けた全般的な指導を行う。		
授業計画	第1回	テーマ研究の結果報告①	
	第2回	テーマ研究の結果報告②	
	第3回	問題点の確認①	
	第4回	問題点の確認②	
	第5回	各自の研究報告と討論①	
	第6回	各自の研究報告と討論②	
	第7回	各自の研究報告と討論③	
	第8回	各自の研究報告と討論④	
	第9回	卒論中間報告会①	
	第10回	卒論中間報告会②	
	第11回	各自の研究報告と討論⑤	
	第12回	各自の研究報告と討論⑥	
	第13回	各自の研究報告と討論⑦	
	第14回	完成直前！対策	
	第15回	卒論完成報告会	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業で配布する研究報告シートに調査研究の概要と今後の課題、問題点等をまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	適宜資料を配布する		
参考文献	授業中に随時紹介する		
評価方法	報告、シート記述など:50% 卒業論文:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
近現代小説研究 2		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	研究対象を各自の問題関心に沿って調査研究する方法および、長い文章を論理的に構築しわかりやすく適切に表現する力を身につけます。テーマは一葉・漱石・賢治・太宰から戦争・沖縄・現代女性文学まで文学研究の他、ジェンダー・性・サブカルチャーなど現代文化論からも選択可。		
授業の概要	前期の成果と夏期中の研究をまとめた夏期レポートを提出します。各自、新たに設定した研究テーマをさらに研究し、ゼミ発表します。論理的で分かりやすい文章作法を学び、論文を作成します。相互に添削しあうことを通して、「伝わる文章」を目指します。		
授業計画	第1回	後期イントロダクション	
	第2回	発表とディスカッション 1	
	第3回	発表とディスカッション 2	
	第4回	発表とディスカッション 3	
	第5回	発表とディスカッション 4	
	第6回	発表とディスカッション 4	
	第7回	文章作成法 1	
	第8回	文章作成法 2	
	第9回	論文執筆と添削 1	
	第10回	論文執筆と添削 2	
	第11回	論文執筆と添削 3	
	第12回	論文執筆と添削 4	
	第13回	ふりかえりと共有 1	
	第14回	ふりかえりと共有 2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・各自のテーマに沿って、対象研究、文献調査。 ・卒業論文の作成。 		
テキスト	とくになし		
参考文献	授業中に指示		
評価方法	夏期レポート:10% ディスカッション:20% 卒論制作過程:30% 卒論:40%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
近現代文学・評論の研究		辻 吉祥（つじ よしひろ）	
授業の到達目標及びテーマ	明治期以降の小説、ルポルタージュ、評論などを主として対象とし、みずからの問題意識を大切に育てながら、総合的な「論」を形作る。その過程で、先行研究の調査、他の分野で行なわれている発想・研究方法との比較をすること、論理的な説得の手順、自分自身の文体を見つけることなどを学習する。		
授業の概要	論文は、わかりやすい比喩で言えば、建築です。ヴィジョンを練り、よい材料を時間をかけて集め、柱と梁をしっかりと構築し、（論理的）不整合の無いようにブロックを組んでいきます。どうか雨漏りのしないように、ひとりひとりの大切な問題意識が、その中で育ち、成長できている建築でありますように。そのために必要な技術を順次指導します。		
授業計画	第1回	草稿を提出	
	第2回	課題の修正、追補	
	第3回	論文推敲Ⅰ（テーマ・構成について）	
	第4回	論文推敲Ⅱ（章ごとの内容について）	
	第5回	論文推敲Ⅲ（部分と全体の関係について）	
	第6回	論文推敲Ⅳ（序論と結論について）	
	第7回	論文推敲Ⅴ（注について）	
	第8回	グループごとの指導A	
	第9回	グループごとの指導B	
	第10回	グループごとの指導C	
	第11回	グループごとの指導D	
	第12回	グループごとの指導E	
	第13回	口頭試問面接（グループⅠ）	
	第14回	口頭試問面接（グループⅡ）	
	第15回	口頭試問面接（グループⅢ）	
準備学習 （予習・復習等）	毎回、各自の論文の進み具合に応じて適切な次のステップを与え、課題とします。		
テキスト	各自の対象とするテキストとノート		
参考文献	各自のテーマに応じて適宜紹介します。		
評価方法	論文内容:70% 中間報告など作成過程における達成:30%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
身体・健康論、日本の舞踊文化		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	健康・身体文化・身体表現全般・日本の舞踊文化を中心に、各自の関心に沿って調査・研究を進め、卒業論文の作成をめざします。		
授業の概要	それぞれ具体的にテーマを決め、論文作成のために各自に必要な作業を行っていきます。途中経過報告を行い、それに対する質疑応答やミニレクチャーを行います。発表と活発な討論によって互いに視野を広げるとともに、自らの必要な作業は何なのかを明確にし、独自性や妥当性を論証する具体的な方法を身につけていきます。最終的には、卒業論文を完成させます。		
授業計画	第1回	中間報告提出と今後の予定等を発表してもらいます。	
	第2回	中間報告をもとに個別指導 1	
	第3回	中間報告をもとに個別指導 2	
	第4回	Aグループ面談指導 1	
	第5回	Bグループ面談指導 1	
	第6回	Cグループ面談指導 1	
	第7回	Aグループ面談指導 2	
	第8回	Bグループ面談指導 2	
	第9回	Cグループ面談指導 2	
	第10回	個人面談 1	
	第11回	個人面談 2	
	第12回	論文提出前の指導	
	第13回	最終報告 1	
	第14回	最終報告 2	
	第15回	最終報告 3	
準備学習 (予習・復習等)	書籍選びと参考資料集めを行います。調査（インタビュー・市場調査・観劇などによる検討など）が必要な場合には、その準備を行います。		
テキスト	テーマに沿って、その都度紹介します。		
参考文献	その都度紹介します。		
評価方法	論文執筆過程：50% 論文：50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒業演習・卒業論文		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	ディスカッションやワークショップ、ゼミ生間の交流等をおして各自の研究テーマを深め「自分にとって納得のできる」卒論を完成させ、また「青山学院で学んで良かった」と喜んで卒業の日を迎えることが目標。		
授業の概要	ディスカッションやワークショップ、グループ、個人指導を重ねつつ、論文完成を目指す。		
授業計画	第1回	後期イントロダクション	
	第2回	ワークショップ①	
	第3回	ワークショップ②	
	第4回	個別指導①	
	第5回	個別指導②	
	第6回	個別指導③	
	第7回	個別指導④	
	第8回	発表とディスカッション①	
	第9回	発表とディスカッション②	
	第10回	発表とディスカッション③	
	第11回	発表とディスカッション④	
	第12回	発表とディスカッション⑤	
	第13回	発表とディスカッション⑥	
	第14回	発表とディスカッション⑦	
	第15回	最終発表とシェアリング	
準備学習 (予習・復習等)	ゼミ当日の「青山学院今週の聖句」聖書箇所と、新聞朝刊(社は問わない)一面と社説を読んでくること		
テキスト	新共同訳聖書『ハンディバイブル』（日本聖書協会）		
参考文献	各自に指示		
評価方法	授業参加態度:40% 卒業論文:60%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
政治学・社会思想・沖縄学にかんする卒業論文の作成		輪島 達郎（わじま たつろう）	
授業の到達目標及びテーマ	前期に社会科学の領域から日本という対象にアプローチするための研究手法を獲得していくと同時に、各自のテーマに沿って卒業論文を作成する。		
授業の概要	メンバーそれぞれが研究発表を行い、それについて全員で討論していく。たがいにおおいに学び合うことが、内容の濃い卒業論文に結実していくので、教室ではとことん議論することを重んじる。卒業論文の具体的な作成の仕方の指導も行う。		
授業計画	第1回	卒業論文作成のための研究発表と討論(1)	
	第2回	卒業論文作成のための研究発表と討論(2)	
	第3回	卒業論文作成のための研究発表と討論(3)	
	第4回	卒業論文作成のための研究発表と討論(4)	
	第5回	卒業論文作成のための研究発表と討論(5)	
	第6回	卒業論文作成のための研究発表と討論(6)	
	第7回	卒業論文の論理構築法(1)	
	第8回	卒業論文の論理構築法(2)	
	第9回	卒業論文の論理構築法(3)	
	第10回	卒業論文作成指導(1)	
	第11回	卒業論文作成指導(2)	
	第12回	卒業論文作成指導(3)	
	第13回	卒業論文作成指導(4)	
	第14回	卒業論文発表会に向けた指導	
	第15回	卒業論文発表会	
準備学習 (予習・復習等)	各自の研究を進展させておくことが毎回の前提となる。		
テキスト	なし		
参考文献	なし		
評価方法	平常点:50% 卒業論文:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
日本社会論・日本人論のテーマで卒業論文を書く。		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本社会論・日本人論の枠内で大きくテーマを設定し、自主的に文献やデータを収集し分析する。過去の研究を参考に、自分のテーマを絞り込み、討議および教員のアドバイスを受けて修正をくわえ、最終的に、平常の授業レポートを量と質で上回るレベルの卒業論文を完成させる。演習授業によって、学生は、問題発見力、文献探索力、発表力、文章表現力を養成し、総合的なコミュニケーション能力を高めることができる。		
授業の概要	まず各自が卒業論文の大きなテーマを決め、論文の構想を立てる。それに必要な文献およびデータを収集し、分析する。さらに、これまでの研究を参考に追求すべき論点を絞り込むことによりテーマを決める。目次を立てて論文を作成し、修正を加えつつ論文を完成する。論文作成途中で中間報告、進行状態の報告を行い、お互いの理解を深める。		
授業計画	第1回	導入と今後の予定	
	第2回	大きなテーマの選択	
	第3回	論文の構想（1）	
	第4回	論文の構想（2）	
	第5回	文献やデータの収集（1）	
	第6回	文献やデータの収集（2）	
	第7回	これまでの研究のレビュー（1）	
	第8回	これまでの研究のレビュー（2）	
	第9回	これまでの研究のレビュー（3）	
	第10回	論文の構想（3）	
	第11回	論文の構想（4）	
	第12回	論文の概要の決定	
	第13回	論文の作成（1）	
	第14回	論文の作成（2）	
	第15回	論文の完成	
準備学習 (予習・復習等)	各自、卒業論文のテーマを設定して、関連する文献の調査、データの収集を行い、報告するためのレジュメを作る。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	各人の選択したテーマごとに指示する。		
評価方法	授業参加度:30% 中間報告:20% 卒業論文:50%		

Introductory College English I A (英語講義)	前期 1 単位	1年
Listening and Speaking		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)、ホワイト (WHYTE, D. W.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 By the end of this course, students will be able to carry out conversations, discussions and presentations on a range of topics, at the same time students will have mastered a vocabulary of high-frequency words.</p> <p>【授業の概要】 In order to reach the goals listed above, each week, students will practice the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Listening to extended conversations and checking comprehension 2. Discussion dictation 3. Rapid-speech dictation 4. Form-focused dictation 5. TOEIC Quizzes 6. Vocabulary Quizzes 7. Group conversations and discussions 8. Presentations <p>Each week, students will practice dictation, listening comprehension and discussion with a partner and in small groups. In addition, they will do homework each week consisting of dictation and listening exercises. Most listening and dictation exercises will be set as homework, and classroom time will concentrate on oral skills.</p> <p>【授業計画】 First Semester Week 1 Course Goals and Objectives Week 2 Unit 1: Talking about Introductions Week 3 Unit 2: Talking about Family Week 4 Unit 3: Talking about Movies Week 5 Unit 4: Talking about Directions Week 6 Preparing a three-minute Presentation; Prepare for Test 1 Week 7 Test 1: Dictation, Listening Comprehension and Discussion Week 8 Test Feedback; preparing a three-minute presentation Week 9 Three-minute presentation Week 10 Unit 5: Talking about Travel Week 11 Unit 6: Talking about Recipes Week 12 Unit 7: Talking about Health Week 13 Unit 8: Talking about Making a Speech Week 14 Test 2 Dictation, Listening Comprehension and Discussion Week 15 Three-minute presentation</p> <p>Please note that the final test for ICE IA will take place on July 28 during the examination period and will consist of a 3-minute speech on a topic chosen by your teacher. 重要：7月28日(定期試験期間中)に最後の試験があります。内容は3分間スピーチ(講師指定のトピックスについて)となります。</p> <p>【テキスト】 Booklet</p> <p>【参考文献】 なし</p> <p>【評価方法】 Your grade for this course will be based on the following: Tests and Final 3-minute speech 50% テストとスピーチの点数は、2回のテストと1回のスピーチ結果を高得点順にして、その上位2つの平均点になります。 Participation/Homework 20% Vocabulary Quizzes 15% Three-minute Presentations (Weeks 9 and 15) 15%</p> <p>授業には出席しなければなりません。欠席すると成績は下がります。授業に20分以上遅刻すると「欠席」の扱いになります。20分未満の遅れは「遅刻」になります。「遅刻」を3回すると1回の「欠席」の扱いになります。出席が全授業回数の3分の2に満たない場合はこの授業の成績は「不合格」となります。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Most listening should be done at home so that more classroom time can be spent on speaking. Note that Participation and Homework make up 20% of the grade. Failure to do homework will result in inability to participate and will result in a low score.</p>		

Introductory College English I B (英語講義)	前期 1 単位	1年
Writing		
<p>【担当教員】 カリガン (CULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、タイラ (TAIRA, Naomi M. O.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)、ホワイト (WHYTE, D. W.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <p>By the end of this course, students will be able to write paragraphs following an academic writing model.</p> <p>【授業の概要】 In order to reach the goals listed above, students will practice the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Brainstorming 2. Outlining 3. Topic Sentences 4. Supporting Sentences 5. Concluding Sentences 6. Types of Paragraph: Listing Order; Time Order (2); Space Order 7. Providing evidence and Support/ Citing Facts <p>Students will write paragraphs and outlines for homework and hand these in to teachers. Teachers will correct these paragraphs and hand them back to students, who will then rewrite their paragraphs based on the teachers' corrections.</p> <p>【授業計画】 Week 1 Teacher and Course Introduction; Introduction to Paragraph Writing (Three Parts of a Paragraph) Week 2 Paragraph Format, Titles, and Capitalization / Introduction to Listing Order Paragraphs Week 3 Supporting Sentences and Outlining Week 4 Unity / Concluding Sentence / Outline Practice Week 5 From Outline to Paragraph / Paragraph 1 - Listing Order Week 6 Test One: Outlines Week 7 Paragraph 1 Rewrite Week 8 Test 1 Feedback / Time Order (a) - Experiences Week 9 Time Order (b) - Giving Instructions Week 10 Paragraph 2 - Time Order (b) Week 11 Paragraph 2 Rewrite Week 12 Test Two: Time Order Paragraph Week 13 Introduction to Comparison/Contrast Paragraphs / Outline for Paragraph 3 Week 14 Feedback on Test 2 / Paragraph 3 - Comparison/Contrast Week 15 Paragraph 3 Rewrite</p> <p>【テキスト】 Booklet Longman Academic Writing Series - Level 2 (3rd Edition)</p> <p>【参考文献】 A4 Aoyama Report Pad Paper</p> <p>【評価方法】 Your grade for this course will be based on the following: Tests 40% テストの点数は、3回のテスト結果を高得点順にして、その上位2つの平均点になります。3回目の最後のテストは、定期試験の期間に行います。 Paragraph Assignments 40% Homework and Class Participation 20% 授業には出席しなければなりません。欠席すると成績は下がります。授業に20分以上遅刻すると「欠席」の扱いになります。20分未満の遅れは「遅刻」になります。「遅刻」を3回すると1回の「欠席」の扱いになります。出席が全授業回数の3分の2に満たない場合はこの授業の成績は「不合格」となります。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Weekly homework paragraphs must be handed in on time. Late paragraphs may receive a grade of zero. Note that 40% of the grade for this course is made up of Paragraph Assignments.</p>		

Introductory College English I C (英語講義)	前期 1 単位	1年
Reading		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)、ホワイト (WHYTE, D. W.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 By the end of this course, students will be able to utilize a range of reading skills in order to achieve the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Find specific information in a text easily 2. Read more quickly 3. Read short books (e.g. graded readers) 4. Discuss and write about books you have read 5. Understand texts written in natural English. <p>Without limiting the foregoing, students will be expected to master the following specific reading skills:</p> <p>Identifying the topic Skimming Scanning Predicting Identifying patterns of organization Making inferences</p> <p>In addition, students will be expected to at least double their reading speed by the end of the course.</p> <p>Finally, students will be expected to read at least one graded-reader per week.</p> <p>【授業の概要】 In order to reach the goals listed above, you will practice three different types of reading methods, as follows:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Extensive Reading 2. Speed Reading 3. Reading Skills <p>【授業計画】 Week 1 Introduction to the Course - Extensive Reading Week 2 Speed Reading & Skimming Week 3 Scanning & Thinking Skills Week 4 Previewing and Predicting Week 5 Making Predictions & Guessing Word Meaning Week 6 Review of Speed Reading and Reading Skills Week 7 Reading Test 1 - Including Speed Reading, Reading Comprehension and Thinking Skills Week 8 Reading Discussion Week 9 Looking for the Topic Week 10 Skimming - Review Week 11 Pronouns & Synonyms Week 12 Synonyms & Reading Comprehension Week 13 What is a Paragraph? Week 14 Review for Test 2 - Preparing Book Report Oral Presentation Week 15 Reading Test 2 - Book Report Oral Presentation Note that Test 3 will include Speed Reading, Reading Comprehension and Thinking Skills and will take place in the examination period.</p> <p>【テキスト】 Booklet Cries from the Heart 【参考文献】なし 【評価方法】 TESTS 60%</p> <p>There will be three tests. Tests 1 and 3 will include speed-reading, reading-skills exercises, and a short story. You will need to answer comprehension questions about the story you read. Test 2 will be an oral presentation about one of the books you read during the semester. Please see your course schedule for the dates. テストの点数は、3回のテスト結果を高得点順に並べて、その上位 2 つの平均点になります。3回目の最後のテストは、定期試験の期間に行います。</p> <p>GRADED READERS 20% (Short stories that you will read at home) You will be asked to give brief summaries of and comments on the books you have read. Your comments will be given in written, oral, or written and oral form. HOMEWORK and CLASS PARTICIPATION 20%</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Note that 20% of the grade for this course is made up of homework and class participation. Note also that part of each week's homework is to read a graded reader. This is for YOUR benefit. The only way to become good at reading is to READ A LOT. The weekly graded reader assignment should be considered a minimum. You are encouraged to read as much as you can.</p>		

Introductory College English I D	前期 1 単位	1年
語彙・文法・速読・精読		
<p>【担当教員】 井伊 順彦（いゐ のぶひこ）、後藤 千織（ごとう ちおり）、高野 嘉明（たかの よしあき）、松村 伸一（まつむら しんいち）、山田 美穂子（やまだ みほこ）、湯本 久美子（ゆもと くみこ）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 この科目では、Introductory College English I A・B・Cの学習内容の復習と再確認を踏まえつつ、そこで学習したリーディング・ライティング・リスニング・スピーキングの四技能をより有機的に総合し、大学レベルで必要な語彙力・読解力・思考力・表現力を身につけることを到達目標とする。</p> <p>【授業の概要】 語彙・文法・速読・精読の四分野に焦点を当てた教材に沿って、問題練習とその解説を行う。これを通して、より正確に語義や構文を理解し、パラグラフや文章全体の論理構成を把握し、その内容を要約したり、自分の言葉で言い換えたり、批評的な読みに基づいてコメントしたりする実践的訓練を積む。</p> <p>【授業計画】 第1回 イン트로ダクション 第2回 “Introductions”の語彙・速読 第3回 “Family”の語彙・速読 第4回 “Movies”の語彙・速読 第5回 “Directions”の語彙・速読 第6回 4ユニット分の語彙・文法の復習 第7回 発展読解素材の精読：“Introductions” “Family” 第8回 発展読解素材の精読：“Movies” “Directions” 第9回 “Travel”の語彙・速読 第10回 “Recipes”の語彙・速読 第11回 “Health”の語彙・速読 第12回 “Making a Speech”の語彙・速読 第13回 4ユニット分の語彙・文法の復習 第14回 発展読解素材の精読：“Travel” “Recipes” 第15回 発展読解素材の精読：“Health” “Making a Speech”</p> <p>【準備学習】 必ずExercisesを指示通り解答した上で授業に臨むこと。授業後には、不明箇所が残っていないか確認したり、Web上に配信予定の音声で聞き取り練習を行ったりすること。</p> <p>【テキスト】 プリント。ほかは担当者の指示による。</p> <p>【参考文献】 必要に応じ、随時紹介していく</p> <p>【評価方法】 テスト：50% 平常点：50%</p>		

Introductory College English II A (英語講義)	後期 1 単位	1年
Listening and Speaking		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、テラダ (TERADA, Betsy)、 ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)、ホワイト (WHYTE, D. W.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 By the end of this course, students will be able to carry out conversations, discussions and presentations on a range of topics, at the same time students will have mastered a vocabulary of high-frequency words.</p> <p>【授業の概要】 In order to reach the goals listed above, each week, students will practice the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Listening to extended conversations and checking comprehension 2. Discussion dictation 3. Rapid-speech dictation 4. Form-focused dictation 5. TOEIC Quizzes 6. Vocabulary Quizzes 7. Group conversations and discussions 8. Presentations <p>Each week, students will practice dictation, listening comprehension and discussion with a partner and in small groups. In addition, they will do homework each week consisting of dictation and listening exercises.</p> <p>Most listening and dictation exercises will be set as homework, and classroom time will concentrate on oral skills.</p> <p>【授業計画】 Week 1 Unit 9: Talking about Music Week 2 Three-minute presentation 1 (Summer Vacation) Week 3 Unit 10: Talking about Friends Week 4 Unit 11: Talking about Money and Jobs Week 5 Unit 12: Talking about Superstitions Week 6 Preparing a three-minute presentation; Preparing for Test 1 Week 7 Test 1: Dictation, Listening Comprehension and Discussion Week 8 Three-minute presentation 2 on Units 9-12 Week 9 Speech Contest Week 10 TOEIC - IP Week 11 Unit 13: Talking about Sports Week 12 Unit 14: Talking about the News Week 13 Unit 15: Talking about Fashion Week 14 Unit 16: Talking about the Past and Future Week 15 Test 2: Dictation, Listening Comprehension and Discussion</p> <p>【テキスト】 Booklet</p> <p>【参考文献】 なし</p> <p>【評価方法】 Your grade for this course will be based on the following: Tests and Final 3-minute speech 50%、テストと最終のプレゼンテーションの点数は、2回のテストと1回のプレゼンテーション結果を高得点順にして、その上位2つの平均点になります。Participation/Homework 20% Vocabulary Quizzes 15% Three-minute Presentations (Weeks 2 and 8) 15%</p> <p>Please note that the final test for ICE IIA will take place on January 20 during the examination period and will consist of a 3-minute speech on a topic chosen by your teacher. 重要：1月20日(定期試験期間中)に最後の試験があります。内容は3分間スピーチ(講師指定のトピックスについて)となります。</p> <p>授業には出席しなければなりません。欠席すると成績は下がります。授業に20分以上遅刻すると「欠席」の扱いになります。20分未満の遅れは「遅刻」になります。「遅刻」を3回すると1回の「欠席」の扱いになります。出席が全授業回数の3分の2に満たない場合はこの授業の成績は「不合格」となります。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Most listening should be done at home so that more classroom time can be spent on speaking. Note that Participation and Homework make up 20% of the grade. Failure to do homework will result in inability to participate and will result in a low score.</p>		

Introductory College English II B (英語講義)	後期 1 単位	1年
Writing		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、タイラ (TAIRA, Naomi M. O.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)、ホワイト (WHYTE, D. W.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 By the end of this course, students will be able to write paragraphs following an academic writing model.</p> <p>【授業の概要】 In order to reach the goals listed above, students will practice the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Brainstorming 2. Outlining 3. Topic Sentences 4. Supporting Sentences 5. Concluding Sentences 6. Types of Paragraph: Listing Order; Time Order (2); Space Order 7. Providing Evidence and Support, and Citing Facts <p>Students will write paragraphs and outlines for homework and hand these in to teachers. Teachers will correct these paragraphs and hand them back to students, who will then rewrite their paragraphs based on the teachers' corrections.</p> <p>【授業計画】 Week 1 Introduction to Space Order Paragraphs / Prepositions of Location and Descriptive Adjectives Week 2 Outline and Paragraph 1 - Space Order Week 3 Paragraph 1 Rewrite Week 4 Space Order/ Complex Sentences Week 5 Test One: Space Order Paragraph / Introduction to Giving Reasons and Examples Week 6 Giving Opinions with Reasons / Outline 2 Week 7 Supporting Your Reasons with Evidence Week 8 Paragraph 2 - Opinion Paragraph with Supporting Evidence / Paraphrasing Exercises Week 9 Paragraph 2 Rewrite / Paraphrasing Exercises Week 10 Test Two: Opinion Paragraph with Reasons and Supporting Evidence Week 11 Citing Facts and Giving Reaction(s) in an Opinion Paragraph Week 12 Test Two Feedback / Outline 3 Week 13 Paragraph 3 - Opinion with Cited Facts Week 14 Paragraph 3 Rewrite / Adding Cited Facts to Paragraph 2 Week 15 Introduction to INCH / Overview: Using Graphs in a Presentation with Facts</p> <p>【テキスト】 Booklet Longman Academic Writing Series - Level 2 (3rd Edition)</p> <p>【参考文献】 A4 Aoyama Report Pad Paper</p> <p>【評価方法】 Your grade for this course will be based on the following: Tests 40% テストの点数は、3回のテスト結果を高得点順にして、その上位2つの平均点になります。3回目の最後のテストは、定期試験の期間に行います。 Paragraph Assignments 40% Homework and Class Participation 20% 授業には出席しなければなりません。欠席すると成績は下がります。授業に20分以上遅刻すると「欠席」の扱いになります。20分未満の遅れは「遅刻」になります。「遅刻」を3回すると1回の「欠席」の扱いになります。出席が全授業回数の3分の2に満たない場合はこの授業の成績は「不合格」となります。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Weekly homework paragraphs must be handed in on time. Late paragraphs may receive a grade of zero. Note that 40% of the grade for this course is made up of Paragraph Assignments.</p>		

Introductory College English II C (英語講義)	後期 1 単位	1年
Reading		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)、ホワイト (WHYTE, D. W.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 By the end of this course, students will be able to utilize a range of reading skills in order to achieve the following:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Find specific information in a text easily 2. Read more quickly 3. Read short books (e.g. graded readers) 4. Discuss and write about books you have read 5. Understand texts written in natural English. <p>Without limiting the foregoing, students will be expected to master the following specific reading skills:</p> <p>Identifying the topic Skimming Scanning Predicting Identifying patterns of organization Making inferences</p> <p>In addition, students will be expected to at least double their reading speed by the end of the course. Finally, students will be expected to read at least one graded-reader per week.</p> <p>【授業の概要】 In order to reach the goals listed above, you will practice three different types of reading methods, as follows:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Extensive Reading 2. Speed Reading 3. Reading Skills <p>【授業計画】 Week 1 Book Presentations Week 2 What is the Topic and Main Idea? Week 3 Patterns of Organization Week 4 Paragraph Pattern - Listing Order Week 5 Paragraph Pattern - Cause & Effect Week 6 Skimming & Scanning -Review Week 7 Test 1 - Including Speed Reading, Reading Comprehension and Thinking Skills Week 8 Paragraph Pattern: Time Order Week 9 TOEIC Test Reading or listening Week 10 Paragraph Patterns: Comparison/Contrast Week 11 Making Inferences Week 12 Reading Discussion Week 13 Making Inferences (continued) Week 14 Review for Test 2 - Preparing Book Report Oral Presentation Week 15 Reading Test 2- Book Report Oral Presentation</p> <p>Note that Test 3 will include Speed Reading, Reading Comprehension and Thinking Skills and will take place in the examination period. 3回目の最後のテストは、定期試験の期間に行います。</p> <p>【テキスト】 Booklet Cries From the Heart</p> <p>【参考文献】 なし</p> <p>【評価方法】 TESTS 60% There will be three tests. Tests 1 and 3 will include speed-reading, reading-skills exercises, and a short story. You will need to answer comprehension questions about the story you read. Test 2 will be an oral presentation about one of the books you read during the semester. Please see your course schedule for the dates. テストの点数は、3回のテスト結果を高得点順に並べて、その上位 2 つの平均点になります。 GRADED READERS 20% (Short stories that you will read at home) You will be asked to give brief summaries of and comments on the books you have read. Your comments will be given in written, oral, or written and oral form. HOMEWORK and CLASS PARTICIPATION 20%</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Note that 20% of the grade for this course is made up of homework and class participation. Note also that part of each week's homework is to read a graded reader. This is for YOUR benefit. The only way to become good at reading is to READ A LOT. The weekly graded reader assignment should be considered a minimum. You are encouraged to read as much as you can.</p>		

Introductory College English II D	後期 1 単位	1年
語彙・文法・速読・精読		
<p>【担当教員】 井伊 順彦（いゐ のぶひこ）、後藤 千織（ごとう ちおり）、高野 嘉明（たかの よしあき）、松村 伸一（まつむら しんいち）、山田 美穂子（やまだ みほこ）、湯本 久美子（ゆもと くみこ）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 この科目では、Introductory College English II A・B・Cの学習内容の復習と再確認を踏まえつつ、そこで学習したリーディング・ライティング・リスニング・スピーキングの四技能をより有機的に総合し、大学レベルで必要な語彙力・読解力・思考力・表現力を身につけることを到達目標とする。</p> <p>【授業の概要】 語彙・文法・速読・精読の四分野に焦点を当てた教材に沿って、問題練習とその解説を行う。これを通して、より正確に語義や構文を理解し、パラグラフや文章全体の論理構成を把握し、その内容を要約したり、自分の言葉で言い換えたり、批評的な読みに基づいてコメントしたりする実践的訓練を積む。</p> <p>【授業計画】 第1回 イン트로ダクション 第2回 “Music”の語彙・速読 第3回 “Friends”の語彙・速読 第4回 “Money and Jobs”の語彙・速読 第5回 “Superstitions”の語彙・速読 第6回 4ユニット分の語彙・文法の復習 第7回 発展読解素材の精読：“Music” “Friends” 第8回 発展読解素材の精読：“Money and Jobs” “Superstitions” 第9回 “Sports”の語彙・速読 第10回 “the News”の語彙・速読 第11回 “Fashion”の語彙・速読 第12回 “the Past and Future”の語彙・速読 第13回 4ユニット分の語彙・文法の復習 第14回 発展読解素材の精読：“Sports” “the News” 第15回 発展読解素材の精読：“Fashion” “the Past and Future”</p> <p>【準備学習】 必ずExercisesを指示通り回答した上で授業に臨むこと。授業後には、不明箇所が残っていないか確認したり、Web上に配信予定の音声で聞き取り練習を行ったりすること。</p> <p>【テキスト】 プリント。ほか担当者の指示による。</p> <p>【参考文献】 必要に応じ、随時紹介していく</p> <p>【評価方法】 テスト：50% 平常点：50%</p>		

Intermediate College English IA (英語講義)	前期 1 単位	2年																														
Reading and Discussion																																
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、タイラ (TAIRA, Naomi M. O.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 In this course students will continue to develop the reading and discussion skills they learned last year. During the semester, students will focus on two broad topics that are important in the world today (environmental issues and moral issues). For each unit students will learn new vocabulary, do a dictation exercise, read articles, answer comprehension questions about the article, and have an opportunity to discuss the issues in pairs or small groups and express their opinions.</p> <p>【授業の概要】 There are a number of goals for this content-based course. The first three are English language use goals, and the other three are intellectual and personal development goals. Please see the course booklet for details.</p> <p>【授業計画】 (前期)</p> <table border="0"> <tr><td>Week 1</td><td>Introduction to the Course</td></tr> <tr><td>Week 2</td><td>Environmental Issues 1: Our Planet – Endangered Animals</td></tr> <tr><td>Week 3</td><td>Environmental Issues 1: Our Planet – Endangered Animals cont.</td></tr> <tr><td>Week 4</td><td>Environmental Issues 2: Water</td></tr> <tr><td>Week 5</td><td>Environmental Issues 3: Food and Water</td></tr> <tr><td>Week 6</td><td>Environmental Issues 4: Fast Food</td></tr> <tr><td>Week 7</td><td>Environmental Issues 4: Fast Food cont. Vocabulary Quiz 1</td></tr> <tr><td>Week 8</td><td>Test 1: Environmental Issues 1 – 4</td></tr> <tr><td>Week 9</td><td>Moral Issues 1: A Moral World: Equality</td></tr> <tr><td>Week 10</td><td>Moral Issues 1: A Moral World: Equality cont.</td></tr> <tr><td>Week 11</td><td>Moral Issues 2: Parasite Singles</td></tr> <tr><td>Week 12</td><td>Moral Issues 3: Charity – What is Charity?</td></tr> <tr><td>Week 13</td><td>Moral Issues 3: Charity – What is Charity? cont.</td></tr> <tr><td>Week 14</td><td>Moral Issues 4: Health</td></tr> <tr><td>Week 15</td><td>Moral Issues 5: The World' s Biggest Killers; Vocabulary Quiz 2</td></tr> </table> <p>【テキスト】 Booklet</p> <p>【参考文献】 An English-English Dictionary (electronic or otherwise) is recommended.</p> <p>【評価方法】 Test 1:25% Test 2:25% ; Vocabulary Quiz 1:10%; Vocabulary Quiz 2:10%; Participation:20%; Homework 10%. Note: Test 2 will take place in the end-of-term test period.2回目の最後のテストは、定期試験の期間に行います。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Note that 30% of the grade for this course is made up of homework and class participation. Students who fail to do the homework will find it difficult to participate and are likely to receive a low score for both. Think about the topics before class and come to class ready to participate in a lively discussion.</p>			Week 1	Introduction to the Course	Week 2	Environmental Issues 1: Our Planet – Endangered Animals	Week 3	Environmental Issues 1: Our Planet – Endangered Animals cont.	Week 4	Environmental Issues 2: Water	Week 5	Environmental Issues 3: Food and Water	Week 6	Environmental Issues 4: Fast Food	Week 7	Environmental Issues 4: Fast Food cont. Vocabulary Quiz 1	Week 8	Test 1: Environmental Issues 1 – 4	Week 9	Moral Issues 1: A Moral World: Equality	Week 10	Moral Issues 1: A Moral World: Equality cont.	Week 11	Moral Issues 2: Parasite Singles	Week 12	Moral Issues 3: Charity – What is Charity?	Week 13	Moral Issues 3: Charity – What is Charity? cont.	Week 14	Moral Issues 4: Health	Week 15	Moral Issues 5: The World' s Biggest Killers; Vocabulary Quiz 2
Week 1	Introduction to the Course																															
Week 2	Environmental Issues 1: Our Planet – Endangered Animals																															
Week 3	Environmental Issues 1: Our Planet – Endangered Animals cont.																															
Week 4	Environmental Issues 2: Water																															
Week 5	Environmental Issues 3: Food and Water																															
Week 6	Environmental Issues 4: Fast Food																															
Week 7	Environmental Issues 4: Fast Food cont. Vocabulary Quiz 1																															
Week 8	Test 1: Environmental Issues 1 – 4																															
Week 9	Moral Issues 1: A Moral World: Equality																															
Week 10	Moral Issues 1: A Moral World: Equality cont.																															
Week 11	Moral Issues 2: Parasite Singles																															
Week 12	Moral Issues 3: Charity – What is Charity?																															
Week 13	Moral Issues 3: Charity – What is Charity? cont.																															
Week 14	Moral Issues 4: Health																															
Week 15	Moral Issues 5: The World' s Biggest Killers; Vocabulary Quiz 2																															

Intermediate College English IB (英語講義)	前期 1 単位	2年
Listening, Writing and Presentation Skills		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、カーン (KERN, D. L.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 In this course, you will make use of the English you already know and continue to develop the listening, writing and presentation skills you learned last year.</p> <p>【授業の概要】 You will concentrate on different issues that face the world today. You will also have to conduct some research in order to prepare for your presentations.</p> <p>【授業計画】</p> <p>Week 1 Introduction to the Course Week 2 Unit 1: Health Part 1 Week 3 Unit 1: Health Part 2 Week 4 Unit 2: Animals Part 1 Week 5 Unit 2: Animals Part 2 Week 6 Unit 3: Fashion Part 1 Week 7 Unit 3: Fashion Part 2 Week 8 Presentation 1 Week 9 Presentation 1 Week 10 Unit 4: Family Week 11 Unit 4: Family Week 12 Unit 5: Culture Week 13 Unit 5: Culture Week 14 Presentation 2 Week 15 Presentation 2</p> <p>【テキスト】 Booklet Topic Talk Issues (Second Edition), Kirsty McLean, EFL Press, 2009</p> <p>【参考文献】 An English-English Dictionary (electronic or otherwise) is recommended</p> <p>【評価方法】 Presentation 1: 20% Presentation 2: 20% Written Test: 20% Classwork/Active Participation: 25% Homework: 15% Note: The written test will take place during the end-of-term test period. ライティングのテストは、定期試験の期間に行います。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Note that 40% of the grade for this course is made up of homework and class participation. Students who fail to do the homework will find it difficult to participate and are likely to receive a low score for both. Students must use critical thinking skills in conducting research and preparing and making presentations. In addition, the key to a good presentation is preparation. In order to get a good score, you will have to practice your presentations many times at home or with classmates.</p>		

Intermediate College English II A (英語講義)	後期 1 単位	2年
Reading and Discussion		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、タイラ (TAIRA, Naomi M. O.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 In this course students will continue to develop the reading and discussion skills they learnt last year. During the semester, students will focus on two broad topics that are important in the world today (Health issues and World issues). For each unit students will learn new vocabulary, do a dictation exercise, read articles, answer comprehension questions about the article, and have an opportunity to discuss the issues in pairs or small groups and express opinions.</p> <p>【授業の概要】 There are a number of goals for this content-based course. The first three are English language use goals, and the other three are intellectual and personal development goals.</p> <p>【授業計画】 (後期)</p> <p>Week 1 Introduction to the Course Week 2 Health Issues 1: The Meaning of Health Week 3 Health Issues 1: The Meaning of Health cont. Week 4 Health Issues 2: Smoking Week 5 Health Issues 2: Smoking cont. Week 6 Health Issues 3: Organ Transplants Week 7 Health Issues 3: Organ Transplants cont. Week 8 Health Issues 4:Cloning Week 9 Health Issues 4:Cloning cont. Vocabulary Quiz 1 Week 10 Vocabulary and multiple Choice Test 1 Week 11 TOEIC Week 12 World Issues 1: Crime and Punishment Week 13 World Issues 2: Fair Trade Week 14 World Issues 3: Rich and Poor Week 15 Review of World Issues; Vocabulary Quiz 2</p> <p>【テキスト】 Booklet</p> <p>【参考文献】 An English-English Dictionary (electronic or otherwise) is recommended.</p> <p>【評価方法】 Test 1:25% Test 2:25% ; Vocabulary Quiz 1:10%; Vocabulary Quiz 2:10%; Participation:20%; Homework 10%. Note: Test 2 will take place in the end-of-term test period.2回目の最後のテストは、定期試験の期間に行います。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Note that 30% of the grade for this course is made up of homework and class participation. Students who fail to do the homework will find it difficult to participate and are likely to receive a low score for both. Think about the topics before class and come to class ready to participate in a lively discussion.</p>		

Intermediate College English II B (英語講義)	後期 1 単位	2年
Listening, Writing and Presentation Skills		
<p>【担当教員】 カリガン (GULLIGAN, B. A.)、カーン (KERN, D. L.)、グリック (GLICK, J.)、サノ (SANO, K. M.)、シミズ (SHIMIZU, M. M.)、テラダ (TERADA, Betsy)、ハンドイエヴァウエラー (HANDJEVA-WELLER,)、ピンター (PINTER, B.)、フィリップス (PHILLIPS, J. R.)</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 In this course, you will make use of the English you already know and continue to develop the listening, writing and presentation skills you learned last year.</p> <p>【授業の概要】 You will concentrate on different issues that face the world today. You will also have to conduct some research in order to prepare for your presentations.</p> <p>【授業計画】</p> <p>Week 1 Introduction to the Course Week 2 Unit 6: Love and Marriage Part 1 Week 3 Unit 6: Love and Marriage Part 2 Week 4 Unit 7: Jobs Week 5 Unit 8: Shopping Part 1 Week 6 Unit 8: Shopping Part 2 Week 7 Unit 8: Review and Presentation Preparation Week 8 Presentation 1 Week 9 Presentation 1 Week 10 TOEIC Week 11 Unit 9: School Week 12 Unit 10: TV and Movies Week 13 Unit 11: Nature Week 14 Presentation 2 Week 15 Presentation 2</p> <p>【テキスト】 Booklet Topic Talk Issues (Second Edition), Kirsty McLean, EFL Press, 2009</p> <p>【参考文献】 An English-English Dictionary (electronic or otherwise) is recommended.</p> <p>【評価方法】 Presentation 1: 20% Presentation 2: 20% Written Test: 20% Classwork/Active Participation: 25% Homework: 15% Note: The written test will take place during the end-of-term exam period. ライティングのテストは、定期試験の期間に行います。</p> <p>【準備学習】 Students must do the assigned homework each week. Note that 40% of the grade for this course is made up of homework and class participation. Students who fail to do the homework will find it difficult to participate and are likely to receive a low score for both. Students must use critical thinking skills in conducting research and preparing and making presentations. In addition, the key to a good presentation is preparation. In order to get a good score, you will have to practice your presentations many times at home or with classmates.</p>		

総合英語基礎A		前期 1 単位	1年
基礎から学ぶ英語の仕組み		水澤 祐美子 (みずさわ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	なんとなく理解できた気になっている英語の仕組み(文法)を基礎から学びます。英語の仕組みに慣れ、英語を使いこなす基礎を固めましょう。徐々に纏まった英文を読んで行きます。		
授業の概要	英語の仕組みを理解する上で重要な要素を毎週学びながら、練習問題を解いていき、定着を図ります。小テストを行いますので、授業内外での積極的な参加が望まれます。		
授業計画	第1回	Literacy Education	
	第2回	Sustainable City	
	第3回	Friendly Robots	
	第4回	Understanding Your Personality	
	第5回	Amazing Hotels	
	第6回	Culture and Religion	
	第7回	The Ideal Workplace	
	第8回	Future Food	
	第9回	The Ideal Wedding	
	第10回	How to Stay Young and Healthy	
	第11回	Space Age	
	第12回	The Future of Medical Science	
	第13回	Uncontacted Tribes	
	第14回	Future Computers	
	第15回	Review (まとめ)	
準備学習 (予習・復習等)	予習：該当ユニットの英文を読み、分からない単語を調べる。 復習：該当ユニットの英文を音読筆写する。		
テキスト	初回授業時に提示します。		
参考文献	授業内で適宜紹介します。毎回必ず英和・和英辞書を持参してください。		
評価方法	期末試験:50% 小テスト:20% 授業参加:30%		

総合英語基礎B		後期 1 単位	1年
英語の発音に慣れる		水澤 祐美子 (みずさわ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語でコミュニケーションを図る上で、スピーキング・リスニングは欠かせません。英語の発音に必要な知識を学びながら、英語をナチュラルスピードで聞き、憶測を交えることなく理解すると同時に、発話していく力を身につけましょう。		
授業の概要	英語に特有な母音や子音、様々な音の規則を中心に学習します。ディクテーション、音読筆写等を行いながら、演習形式で進めていきます。受講生は授業内外での積極的な参加が求められます。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	日本語にない音	
	第3回	音の連結 (1) (子音+母音)	
	第4回	音の脱落 (1) (doin' etc.)	
	第5回	注意すべき母音	
	第6回	音の同化 (did you etc.)	
	第7回	音の脱落 (2) (破裂音)	
	第8回	音声変化の複合	
	第9回	音の弱化	
	第10回	音の連結 (2) (make you etc.)	
	第11回	音の脱落 (3) (曖昧な母音)	
	第12回	短縮形の音 (1) (助動詞+have)	
	第13回	短縮形の音 (2) (ストレスパターン)	
	第14回	音の脱落 (4) (似た子音の繋がり)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：該当のユニットを見て分からない単語を調べる。 復習：分からなかった箇所を確認する。		
テキスト	Kadoyama, T. & Capper, S. (2011) <i>English with Hit Songs. 4th Ed.</i> Seibido		
参考文献	授業中に適宜紹介します。毎回、必ず英和・和英辞書を持参してください。		
評価方法	期末試験:50% 課題:30% 授業参加:20%		

言語科学A		前期 2 単位	1・2年
日英語の音		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講座では言語を科学的に研究する第一歩として、日英語の音声を取り上げ、受講生自身の口の動き、耳の働きをデータとして発音の仕組み・音韻構造の「なぜ」を明らかにしていく。毎回自身で課題と取り組むことにより、観察から仮説構築、そして仮説検証という一連の研究方法を習得する。加えて、英語の母音発音及び音変化の習得も目標とする。		
授業の概要	毎回、担当者のイントロダクションに引き続き、課題について各自の考察またはグループ毎によるディスカッションを行い、その結果を発表するという形で授業を進める。課題に取り組むことにより、受講者自らがデータを分析し、そこからメカニズムを導き出すという手法を習得する。毎回クイズを実施し、理解を確認し、期末には全課題のレポートの提出を求める。		
授業計画	第1回	Introduction : 音声器官・調音の仕組み	
	第2回	日本語の母音の発音のメカニズム	
	第3回	英語の母音の発音のメカニズム	
	第4回	英語の母音発音練習: 前舌母音と後舌母音・高母音と低母音	
	第5回	英語の母音発音練習: 緊張母音と弛緩母音	
	第6回	日本語の連母音と英語の二重母音	
	第7回	開音節構造とモーラ	
	第8回	日本語の50音図: 母音の歴史的変化とハ行転呼	
	第9回	日本語の音変化 (連濁・促音・撥音)	
	第10回	音素と異音	
	第11回	音節と聞こえ度	
	第12回	英語の音変化 (短縮・消失・連結) : メカニズムと聞き取り練習	
	第13回	英語の音変化 (脱落・同化・弱化) : メカニズムと聞き取り練習	
	第14回	日英語のアクセント	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業で行う各自またはグループによる課題考察の結果 (上述) を完成させ期末に提出。		
テキスト	特定のテキストを用いず担当者によるプレゼンテーションで進め、プリントを配布する。発音記号の記載のある学習用英語辞書・A4サイズのバインダーを必ず持参。		
参考文献	風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健. 2009. 『言語学第2版』東京大学出版会		
評価方法	期末試験:70% クイズ・課題レポート:30%		

言語科学B		後期 2 単位	1・2年
日英語の構造		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講座では、日英語の語彙(形態)・文の仕組み(統語)・意味(意味)の「なぜ」を取り上げる。受講生自らがデータを分析することにより、「なぜ」に対して説明を与えられるようにするのが目標である。また、母語である日本語と英語を対照することにより、英語の仕組みの理解を深めることも目標である。		
授業の概要	毎回、担当者のイントロダクションに引き続き、課題を提示する。各自の分析またはグループ毎のディスカッションを行い、その結果を発表するという形で授業を進める。課題に取り組むことにより、受講者自らがデータを分析し、そこからメカニズムを導き出すことを学ぶ。毎回クイズを行い、3回の課題レポートの提出を求める。		
授業 計画	第1回	Introduction	
	第2回	語の仕組み：拘束形態素・派生形態素	
	第3回	語の仕組み：転換・複合語・日本語複合動詞と英語表現	
	第4回	語の仕組み：逆形成・短縮・略語・頭文字語	
	第5回	文の仕組み：日本語の格助詞・英語の動詞と文型	
	第6回	文の仕組み：構造的曖昧性・構成素	
	第7回	文の仕組み：英語文の分析	
	第8回	生成文法概説・認知言語学概説	
	第9回	意味の仕組み：多様な意味	
	第10回	意味の仕組み：多義語・同意語・反意語・類義語・上位語	
	第11回	意味の仕組み：意味変化	
	第12回	意味の仕組み：メタファー・メトニミー	
	第13回	意味の仕組み：日英語語彙対照分析 「走る」"run"	
	第14回	意味の仕組み：日英語語彙対照分析 「借りる」"borrow"	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業で行う各自またはグループによる課題考察の結果(上述)を完成させ提出。		
テキスト	特定のテキストは用いず、担当者によるプレゼンテーションで進め、プリントを配布する。学習用英語辞書・A4サイズのバインダーを必ず持参。		
参考文献	風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健. 2009. 『言語学第2版』東京大学出版会. 三原健一・高見健一. 2013. 『日英対照英語学の基礎』くろしお出版. その他授業中に適宜紹介する。		
評価方法	期末試験:70% クイズ・課題レポート:30%		

文法理論A		前期 2 単位	1・2年
文法理論：形態論		狩野 郁子 (かのう いくこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	形態論に焦点を当て、講義を展開する。形態論を学習することで、語彙力の強化に繋がり、同時に母国語に関する知識をも深めてもらうこととなる。		
授業の概要	英語のmorphemesに関する認識を深めた後、affixes, free/bound morphemes, derivational / inflectional morphemesを把握、判別しながら、形態論を習得していく。次に、word coinageと題して、新単語生成の過程を学習する。最後には、英語の形態論の概念を基に、世界の様々な言語においても同様の分析を行い、言語の普遍文法の一部を知ってもらう。		
授業計画	第1回	Introduction to Morphology	
	第2回	Classes of words: lexical content/function words	
	第3回	Morphemes in English: free/bound morphemes	
	第4回	Morphemes in English: prefix and suffix	
	第5回	Morphemes : derivational and inflectional morphemes	
	第6回	Review of morphemes	
	第7回	Quiz on morphemes	
	第8回	Word coinage: compounds and blends	
	第9回	Acronyms and back-formations	
	第10回	Other types of word coinage	
	第11回	Review of word coinage	
	第12回	Morphosyntax	
	第13回	Morphosyntax in other languages: Dutch and Russian	
	第14回	Morphosyntax in other languages: Zulu and Swahili	
	第15回	Wrap-up on morphology and morphosyntax	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to review previous classes each time.		
テキスト	Hand-outs		
参考文献	They will be introduced in class.		
評価方法	In-class tasks:20% Homework and a quiz:20% Term examination:60%		

文法理論B		後期 2 単位	1・2年
文法理論：統語論		狩野 郁子 (かのう いくこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語の統語論を展開する。高校までの学校文法で学習してきたであろうtraditional grammarに関する知識を駆使しながら、transformational grammarを紹介し、知識を深めてもらう。		
授業の概要	まずは、phrase structure rulesを適用しtree diagramを作成していく方法を学ぶ。これにより、文章がphrasesの結合による立体構造をもつものであると認識してもらう。その後、日本語の文章構造との対照分析を行い、母語に関する知識も定着させていく。統語論の学習を通して、TOEIC問題を活用しながらlistening, speaking, reading, writingの4技能の向上を図る。		
授業計画	第1回	Introduction to Syntax	
	第2回	Grammatical or ungrammatical?	
	第3回	Sentence structure: syntactic categories	
	第4回	Phrase structure trees	
	第5回	Lexical categories	
	第6回	Phrases and clauses	
	第7回	Conjunctions	
	第8回	Gerunds and present participles	
	第9回	Present and past participles	
	第10回	Infinitives	
	第11回	Relatives	
	第12回	Conditionals	
	第13回	Analysis of phrases	
	第14回	Analysis of clauses	
	第15回	Review of classes and individual study	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to review previous classes each time.		
テキスト	Hand-outs		
参考文献	English Syntax and Argumentation by Bas Aarts / Transformational Grammar by Andrew Radford		
評価方法	In-class tasks:20% Homework and a quiz:20% Term examination:60%		

英語学A		前期 2 単位	1・2年
英語を通して言葉の科学を学ぶ		水澤 祐美子 (みずさわ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	言葉の様々な側面を科学的視点から捉えていきながら、英語学について基本的な事項を理解していきます。		
授業の概要	慣れ親しんだ日本語と対照しながら英語学を学び、身近な事柄をテーマに授業を進めます。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	What is English linguistics? (英語学ってなんだろう?)	
	第3回	What is language? (ことばってなんだろう?)	
	第4回	History of English1 (様々な言語)	
	第5回	History of English2 (英語の歴史)	
	第6回	Phonetics and Phonology1 (発話のメカニズム)	
	第7回	Phonetics and Phonology2 (音の分類)	
	第8回	Phonetics and Phonology3 (イントネーションとリズム)	
	第9回	Morphology1 (語の特徴)	
	第10回	Morphology2 (語の形成)	
	第11回	Morphology3 (語の変化)	
	第12回	Syntax1 (句の構造)	
	第13回	Syntax2 (文の構造)	
	第14回	Syntax3 (情報の構造)	
	第15回	Review (まとめ)	
準備学習 (予習・復習等)	予習：教科書の該当箇所を読む。 復習：新しく学んだ知識や専門用語を確認する。		
テキスト	長谷川瑞穂(編) (2014) 『はじめての英語学』(改訂版) 研究社		
参考文献	授業内に随時指示します。		
評価方法	期末試験:50% 中間テスト:30% 授業参加:20%		

英語学B		後期 2 単位	1・2年
英語を通して言葉の科学を学ぶ		水澤 祐美子 (みずさわ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	言葉の様々な側面を科学的視点から捉えていきながら、英語学について基本的な事項を理解していきます。		
授業の概要	慣れ親しんだ日本語と対照しながら英語学を学び、身近な事柄をテーマに授業を進めます。		
授業計画	第1回	Semantics1 (ことばの意味)	
	第2回	Semantics2 (さまざまな意味関係)	
	第3回	Semantics3 (メタファー)	
	第4回	Pragmatics1 (談話のしくみ)	
	第5回	Pragmatics2 (ことばと文脈)	
	第6回	Pragmatics3 (発話行為)	
	第7回	Pragmatics4 (ポライトネス)	
	第8回	Sociolinguistics1 (ことばと社会)	
	第9回	Sociolinguistics2 (ことばと文化)	
	第10回	Sociolinguistics3 (ことばの違い)	
	第11回	Psycholinguistics1 (心とことば)	
	第12回	Psycholinguistics2 (ことばの習得)	
	第13回	Neurolinguistics (ことばと脳)	
	第14回	Other issues (ことばを取り巻く諸問題)	
	第15回	Review (まとめ)	
準備学習 (予習・復習等)	予習：教科書の該当箇所を読む。 復習：新しく学んだ知識や専門用語を確認する。		
テキスト	長谷川瑞穂(編) (2014) 『はじめての英語学』(改訂版) 研究社		
参考文献	授業内で随時指示します。		
評価方法	期末試験:50% レポート:30% 授業参加:20%		

音声学A		前期 2 単位	1・2年
英語音声学：子音		狩野 郁子（かのう いくこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	英語子音の分析を中心に講義を展開する。日本語音との対照考察・分析しながら、共通点、相違点を学習し理解する。発音記号の習得、判別、認識は必須。適切な英語子音の発音ができるようになる。		
授業の概要	毎回の講義で、学生による発音練習、実践を繰り返し、英語子音の習得を図る。また、一つ一つのphoneを習得した上で、音のつながりによって起こるphonesの変化を観察し、音韻論を導入した講義展開へと移行する。		
授業計画	第1回	Introduction to Phonetics	
	第2回	Articulatory phonetics	
	第3回	Bilabial stops	
	第4回	Alveolar and velar stops	
	第5回	Labiodental fricatives	
	第6回	Interdental fricatives	
	第7回	Alveolar fricatives	
	第8回	Alveo-palatal and palatal fricatives	
	第9回	Liquids	
	第10回	Glides/semi-vowels	
	第11回	Review of consonants through exercises	
	第12回	Review of consonants through a quiz	
	第13回	Prosodic suprasegmental feature	
	第14回	Tone and intonation	
	第15回	Review	
準備学習 (予習・復習等)	There are many technical terms in the course. Students are expected to become familiar to them, defining what they are.		
テキスト	Sounds Right! Sounds Good!		
参考文献	An Introduction to Language / A Linguistics Workshop		
評価方法	In-class tasks:20% Homework and a quiz:20% Term examination:60%		

音声学B		後期 2 単位	1・2年
英語音声学：母音		狩野 郁子（かのう いくこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	英語母音の分析を中心に講義を展開する。日本語音との対照考察・分析しながら、共通点、相違点を見だし、どうすれば適切な英語母音が生み出せるかを学習する。発音記号の習得、判別、認識は必須となる。		
授業の概要	毎回の講義で、学生による発音練習、実践を繰り返し、英語母音の習得を図る。また、一つ一つのphoneを習得した上で、音のつながりによって起こるphonesの変化を観察し、音韻論を導入した講義展開へと移行する。		
授業計画	第1回	Introduction to Phonetics	
	第2回	Classification of vowels	
	第3回	High/front vowels	
	第4回	Mid/front vowels	
	第5回	Low/front and central vowels	
	第6回	Central vowels	
	第7回	High/back vowels	
	第8回	Mid/back vowels	
	第9回	Review of vowels through exercises	
	第10回	Review of vowels through a quiz	
	第11回	Introduction to Phonology	
	第12回	Classes of words	
	第13回	Rhythm and intonation	
	第14回	Assimilation	
	第15回	Review	
準備学習 (予習・復習等)	Students will encounter many technical terms in the course. They need to become familiar to the terms and to define them.		
テキスト	Sounds Right! Sounds Good!		
参考文献	An Introduction to Language / A Linguistics Workshop		
評価方法	In-class tasks:20% Homework and a quiz:20% Term examination:60%		

対照言語学		後期 2 単位	1・2年
日本語と英語の比較対照		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	音声、文字、文法、発想法、語彙・意味などの観点から見た日本語と英語の違いについて、実例を参照しながら具体的に観察することにより、日本語と英語の言語的な特徴や相違をよりよく、より深く理解することを目標とします。また、誤った「日本語特殊論」についても考察します。		
授業の概要	授業に必要な資料はプリントにして配布し、基本的には講義形式で授業を進めることとなりますが、受講者の積極的な授業参加も期待されます。必要な事柄はしっかりノートを取るようして下さい。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	序論：世界の諸言語の中の日本語と英語	
	第3回	音声の日英語比較(母音)	
	第4回	音声の日英語比較(子音)	
	第5回	音節に関する日英語比較	
	第6回	アクセント・リズムに関する日英語比較	
	第7回	日本語と英語の文字体系	
	第8回	文法的類型からみた日本語と英語	
	第9回	文法の日英語比較(名詞・動詞)	
	第10回	文法の日英語比較(代名詞)	
	第11回	日本語の助詞と英語の冠詞、日本語の敬語体系	
	第12回	日本語と英語の発想法	
	第13回	語彙・意味の日英語比較	
	第14回	日本語と英語の造語法	
	第15回	補足とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業で扱う範囲を指定しますので、配布プリントの該当部分によく目を通しておいて下さい。		
テキスト	特には使用せず、プリントを配布します。		
参考文献	必要に応じて授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業参加度:25% 試験:50%		

社会言語学		前期 2 単位	1・2年
社会の諸相と言語の関係		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語を対象言語として、主に音声・語彙・文法に関する言語変種の特徴について詳細に観察することにより、社会の諸側面と言語の関係に関する基本的な概念を理解することを目標とします。言い換えれば、社会に存在する言語使用および言語使用者、という観点からみた場合の言語の諸側面について考察することになります。		
授業の概要	基本的には講義形式で授業を進めますが、受講者の積極的な授業参加も期待されます。また、授業内容は英語に関するものですが、日本社会と日本語の関係について考えてみることも期待されます。必要な資料は配付しますが、ノートもしっかり取って下さい。		
授業計画	第1回	社会言語学の全体像	
	第2回	社会言語学の歴史と周辺領域	
	第3回	地域と言語(概論)	
	第4回	地域と言語(アメリカ)	
	第5回	地域と言語(イギリス)	
	第6回	地域と言語(その他の国々)	
	第7回	階級と言語(アメリカ)	
	第8回	階級と言語(イギリス)	
	第9回	人種・民族と言語	
	第10回	性別と言語	
	第11回	年齢層と言語	
	第12回	言語使用領域	
	第13回	言語の格式度	
	第14回	伝達媒体(話し言葉と書き言葉)	
	第15回	補足とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回の授業で扱う範囲を指定しますので、配布プリントの該当部分によく目を通しておいて下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要に応じてプリントを配布します。		
参考文献	必要に応じて授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業参加度:25% 試験:50%		

コミュニケーション論A		前期 2 単位	1・2年
異文化間コミュニケーションの理解		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	異文化間のコミュニケーションに関する基本的な仕組みについて観察することにより、外国語(この授業では英語)によるメッセージの発信から受信までの全体像を把握することを目標とします。言語を用いるコミュニケーションはもとより、ジェスチャーや顔の表情などのような非言語的コミュニケーション、異文化の影響などについて理解することを目指すこととなります。		
授業の概要	基本的には講義形式で授業を行いますが、受講者の積極的な授業参加も期待されます。各授業の終わりに翌週扱う事柄に関して考えておくべき課題を提示し、翌週の授業はその課題に対して考えておいてもらった事柄を含めて展開されます。		
授業計画	第1回	(異文化間)コミュニケーションの全体像	
	第2回	コミュニケーション・モデル(情報の発信・受信)	
	第3回	コミュニケーション・モデル(情報の記号化)	
	第4回	コミュニケーション・モデル(情報伝達の媒体)	
	第5回	コミュニケーション・モデル(情報の解読)	
	第6回	コミュニケーションに対する異文化の影響	
	第7回	日本語圏と英語圏の文化比較	
	第8回	異文化間コミュニケーションのモデル	
	第9回	非言語コミュニケーション(ジェスチャーと姿勢)	
	第10回	非言語コミュニケーション(顔の表情)	
	第11回	非言語コミュニケーション(空間の捉え方)	
	第12回	非言語コミュニケーション(時間の捉え方)	
	第13回	非言語コミュニケーション(身体接触)	
	第14回	非言語コミュニケーション(外見的特徴)	
	第15回	補足とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業で扱う範囲と検討課題を指定しますので、配布プリントの該当部分によく目を通し、課題についてよく考えておいて下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要に応じてプリントを配布します。		
参考文献	必要に応じて授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業参加度:25% 試験:50%		

コミュニケーション論B		後期 2 単位	1・2年
様々なコミュニケーションにおける言葉を考える		田中 弥生 (たなか やよい)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○コミュニケーションの種類を理解する。 ○コミュニケーションにかかわる理論を理解する。 ○生活の中の様々な場面におけるコミュニケーションについて考え、主に言葉に焦点をあてて、その特徴を理解する。</p>		
授業の概要	<p>コミュニケーションの理論を紹介しながら、日常生活の中の実例によってコミュニケーションを考える。メールやLINEなどは対面のコミュニケーションとどう同じでどう違うのか、相手による違いはあるのか、TV番組やCMの言語・非言語コミュニケーションで私達は何を受け取っているか、医療現場や裁判に関わる場面など専門家・非専門家間のコミュニケーションではどのような問題があるか、「笑い」はコミュニケーションの観点からどう考えられるか、といったことを考える。毎回グループワークやグループディスカッションを行うため、積極的な参加が求められる。なお、受講者数等によって内容を取り上げる順序や授業形式を変更することもある。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	コミュニケーションの種類・要素	
	第3回	インターネットにおけるコミュニケーション（1）概要	
	第4回	インターネットにおけるコミュニケーション（2）言語・非言語コミュニケーション	
	第5回	インターネットにおけるコミュニケーション（3）まとめとグループ発表	
	第6回	TVのコミュニケーション（1）TV番組における言語・非言語コミュニケーション	
	第7回	TVのコミュニケーション（2）CMにおける言語・非言語コミュニケーション	
	第8回	TVのコミュニケーション（3）広告における言語・非言語コミュニケーション	
	第9回	TVのコミュニケーション（4）まとめとグループ発表	
	第10回	専門家と非専門家のコミュニケーション（1）裁判におけるコミュニケーション	
	第11回	専門家と非専門家のコミュニケーション（2）医療におけるコミュニケーション	
	第12回	専門家と非専門家のコミュニケーション（3）まとめとグループ発表	
	第13回	笑いのコミュニケーション（1）落語における言語・非言語コミュニケーション	
	第14回	笑いのコミュニケーション（2）まとめとグループ発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	1つのテーマを複数回の授業で取り上げるので、次の授業にスムーズにつながるよう復習することが望ましい。		
テキスト	特になし。必要に応じてプリントを配布します。		
参考文献	末田清子・福田浩子(2011)『コミュニケーション学/その展望と視点(増補版)』松柏社 その他、講義にて適宜紹介する。		
評価方法	授業感想文:20% 提出物:20% レポート:60%		

世界の諸英語A		前期 2 単位	1・2年
世界の諸英語A		江田 優子 (こうだ ゆうこ)	
授業の到達目標及びテーマ	現代英語は国際的普及とそれに伴う英語の多様化という側面を持つ。本講ではNative Englishと、いわゆる正統派英語の流れを受け継ぐオーストラリア、カナダなどの英語の特徴を知り、英語の歴史、未来についての考察を行い、国際英語への理解を深める。		
授業の概要	前半は映像、音声などを随時使用しNative Englishの特徴を学び、リスニングなどの演習を行っていく。後半は、学生の発表（使用言語は英語、または日本語が選択できます）を中心に授業を進めていく。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	世界の諸英語という考え方	
	第3回	American English	
	第4回	British English	
	第5回	Scottish English	
	第6回	Australian English	
	第7回	Canadian English	
	第8回	History of English	
	第9回	Future of English	
	第10回	Preparation for Presentation	
	第11回	Student Presentation 1	
	第12回	Student Presentation 2	
	第13回	Student Presentation 3	
	第14回	Student Presentation 4	
	第15回	予備日	
準備学習 (予習・復習等)	授業内容に関連した宿題を随時課します。		
テキスト	資料配布		
参考文献	<i>World Englishes</i> , Andy Kirkpatrick著, ケンブリッジ大学出版, 2007 <i>World Englishes : a resource book for students</i> , Jenifer Jenkins著, Routledge出版, 2003		
評価方法	宿題、授業参加度:40% プレゼンテーション:30% プレゼン提出物:30%		

世界の諸英語B		後期 2 単位	1・2年
世界の諸英語B		江田 優子 (こうだ ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講では、英語を公用語、外国語として位置付けている諸国の英語の特徴を扱う。シンガポール、ブラジル、インド、中国、日本では、人々はどのような英語を話し、どのように活用しているのだろうか。会話やドキュメンタリー映像、TEDを通じて、各国の英語変種(English Varieties)を分かりやすく学び、新しい言語観を身に付ける。		
授業の概要	前半は各国の英語変種について、講義、リスニングなどの演習を行いながらNon-Native Englishの特徴をつかんでいく。後半は、学生の発表(使用言語は英語または日本語から選択可)を中心に授業を進めていく。		
授業計画	第1回	イントロダクション、TED鑑賞	
	第2回	国際英語とは？	
	第3回	English in Singapore - シンガポール英語の歴史	
	第4回	English in Singapore - シングリッシュの特徴、英語キャンペーン	
	第5回	サビア・ウォーフの仮説(言語と文化の密接な関係について)	
	第6回	English in Brasil	
	第7回	English in India	
	第8回	English in China	
	第9回	English in Japan	
	第10回	Preparation for Presentation	
	第11回	Student Presentation 1	
	第12回	Student Presentation 2	
	第13回	Student Presentation 3	
	第14回	Student Presentation 4	
	第15回	予備日	
準備学習 (予習・復習等)	授業内容に関連した宿題を随時課します。		
テキスト	資料配布		
参考文献	『多言語社会の言語政治学』 ひつじ書房		
評価方法	宿題、授業参加度:40% プレゼンテーション:30% プレゼン提出物:30%		

児童英語教育論A		前期 2 単位	1・2年
児童に英語を教えるために必要な、英語教授法、発達心理学と文部科学省の小学校英語の理念を学ぶ。		榑 まゆみ (つばき まゆみ)	
授業の到達目標及びテーマ	①英語教授法・言語習得の基礎を自分自身の英語学習体験の分析を通して理解する。 ②心理学の観点からの児童はどのように英語を学ぶべきかわかる。③文部科学省の小学校学習指導要領外国語活動の理念や実践を理解する。		
授業の概要	児童英語教育に関するさまざまな理論を、講義および学生参加型共同学習により理解・考察する。具体的には、英語教授法、心理学の分野からの理論や文部科学省での学習指導要領での小学校外国語活動の理念の理解を主眼とし、自身の学習体験や教育実践を考慮しながら理論と実践の関連についても考えていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	小学校学習指導要領 外国語活動の理論と実践	
	第3回	英語圏以外で英語を学ぶ学習者のため英語教育	
	第4回	英語教授法：インプットの役割	
	第5回	英語教授法：アウトプットの役割	
	第6回	英語教授法：モチベーション	
	第7回	テスト1 一般の英語教授法	
	第8回	子供のための英語教授法	
	第9回	発達心理学：ヴィゴツキー、ピアジェ	
	第10回	World Englishes & Asian Englishes	
	第11回	多重知能理論	
	第12回	小学校英語の理論と実践	
	第13回	小学校英語の実際	
	第14回	まとめ	
	第15回	テスト2、子供に英語を教えるための理論の応用	
準備学習 (予習・復習等)	授業前には、テキストを読んで、理解してくる。 授業後には、学習内容を復習し、理解を深める。		
テキスト	アレン玉井光江 (2010) 『小学校英語の教育法—理論と実践』 大修館書店		
参考文献	アレン玉井光江 (2011) 『ストーリーを中心とした小学校英語』 小学館プロダクション 白井恭弘 (2012) 『教師のための第二言語習得論入門』 大修館		
評価方法	クラス参加:20% テスト・小テスト:50% 課題:30%		

児童英語教育論B		後期 2 単位	1・2年
児童英語教育理論と実践をつなぐ		榎 まゆみ (つばき まゆみ)	
授業の到達目標及びテーマ	①前期で学んだ児童英語教育に必要な英語教授法、発達心理学の知識を含めて新しい内容を理解する。②理論と実践（教育現場での実際の指導）をどのように結びつけるか考え、伝えることができるようになる。③理論に基づいた指導を計画し、模擬授業を行うことができるようになる。		
授業の概要	前期で学んだ英語教授法、発達心理学の知識を深めると共に、それらの教育現場での実践を考える。具体的には、グループでそれらの理論や児童英語教育のありかたについて話し合い、理論に基づいた指導案作成や物語や歌などを題材としたミニレクソンを実施する。これにより、理論を実践にどのように応用するか考察する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	小学校「外国語活動」の実際	
	第3回	Hi Friends 1, 2（文部科学省作成教材）を使った英語教育の実践（1）	
	第4回	Hi Friends 1, 2（文部科学省作成教材）を使った英語教育の実践（2）	
	第5回	Hi Friends 1, 2 を使った英語教育 模擬授業	
	第6回	ストーリーと活動を中心とした英語教育	
	第7回	ストーリーと活動を中心とした英語教育の実践（1）	
	第8回	ストーリーと活動を中心とした英語教育の実践（2）	
	第9回	ストーリーと活動を中心とした英語教育 模擬授業	
	第10回	内容を中心とした英語教育理論	
	第11回	内容を中心とした英語教育の実践（1）	
	第12回	内容を中心とした英語教育の実践（2）	
	第13回	内容を中心とした英語教育 模擬授業 1	
	第14回	理論と実践と繋ぐ英語教育	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に理論を理解し、実践面での応用を考える。 授業後に、授業では何を行えばよいか考え、模擬授業について計画を立てる。		
テキスト	アレン玉井光江（2010）『小学校英語の教育法—理論と実践』 大修館書店		
参考文献	アレン玉井光江（2011）『ストーリーと活動を中心とした小学校英語』 小学館 アレン玉井光江（2013）『Story Trees ストーリーと活動を中心とした小学校英語』 小学館 本名信行（2006）『英語はアジアを結ぶ』 玉川大学出版部		
評価方法	授業への参加:40% テスト・小テスト:20% 課題:40%		

翻訳の理論と実践A		前期 2 単位	1・2年
翻訳理論から翻訳実践を考える		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	参考文献に挙げたマンデイとピムによる二書の内容を（日本で英語を学習する立場から再解釈しつつ）紹介するので、それを通して翻訳理論（Translation Studies）の概要を知る。英日／日英の翻訳のさまざまなあり方に触れることで、翻訳とは何かについての考えを深める。また自分自身で提出課題に取り組むことによって言語感覚を鍛える。		
授業の概要	翻訳理論の概要に関する講義。随時ワークショップ形式も取り入れ、何らかの形で〈翻訳〉に関わる課題に取り組んでもらい、それについてグループ内で発言することも求められる。		
授業計画	第1回	はじめに：身の回りのさまざまな「翻訳」	
	第2回	翻訳の歴史：イギリスと日本を中心に	
	第3回	等価に基づく翻訳へのアプローチ～語彙	
	第4回	等価に基づく翻訳へのアプローチ～イディオムなど	
	第5回	等価に基づく翻訳へのアプローチ～文法・談話	
	第6回	等価の方向性と等価仮説の限界	
	第7回	翻訳への談話分析的アプローチ1（ハリデイ）	
	第8回	翻訳への談話分析的アプローチ2（プラハ派）	
	第9回	目的による翻訳へのアプローチ	
	第10回	記述による翻訳へのアプローチ	
	第11回	不確定性に基づく翻訳へのアプローチ	
	第12回	ローカリゼーションとしての翻訳～国際化とテクノロジー	
	第13回	文化翻訳～翻訳への社会学的アプローチ	
	第14回	翻訳者の役割と「使命」	
	第15回	まとめ：改めて翻訳とは	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時提出課題が指示されるので、それを行うこと。 復習：参考文献を自分なりに読んでみる。身の回りの「翻訳」に留意し、授業中に学んだ事柄を適用してみる。		
テキスト	プリントを配布する		
参考文献	ジェレミー・マンデイ『翻訳学入門』（みすず書房）、アンソニー・ピム『翻訳理論の探求』（みすず書房）、鳥飼玖美子編著『よくわかる翻訳通訳学』ミネルヴァ書房		
評価方法	平常点（提出課題など）:50% 期末レポート:50%		

翻訳の理論と実践B		後期 2 単位	1・2年
実践を通して「翻訳」を考える		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標及びテーマ	詩と短編小説を題材に、毎回指定された一定量の英文を翻訳し、訂正する訓練を積むことで、英文読解力と日本語表現力のふたつを総合的に高めることを目指す。またその実践を通して、翻訳という作業の難しさと面白さを体験する。最終的な成果として、小さな翻訳ブックレットを作成する。		
授業の概要	インターネットからアクセスできる授業支援システムを利用して、毎回250語程度の英文の訳文を提出。授業時間の前半では、ウェブ上の解説や他の学生の訳文を参考に、自分の訳文を修正・推敲。後半には、解説を参考に、次回指定箇所までの物語展開を確認する。自宅からもインターネットに接続可能であることが望ましい。それが難しい場合は、空き時間に短大情報処理室を利用できることが必須。なお、取り上げる作品は、下の授業計画から変更される可能性もある。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：コンピュータ利用方法の確認など	
	第2回	課題 1：Tim Burton, “Anchor Baby”	
	第3回	課題 2：Ursula K. Le Guin, “The Wife’ s Story” (1)	
	第4回	課題 3：Ursula K. Le Guin, “The Wife’ s Story” (2)	
	第5回	課題 4：Ursula K. Le Guin, “The Wife’ s Story” (3)	
	第6回	課題 5：Diana Wynne Jones, “The Girl Jones” (1)	
	第7回	課題 6：Diana Wynne Jones, “The Girl Jones” (2)	
	第8回	課題 7：Diana Wynne Jones, “The Girl Jones” (3)	
	第9回	課題 8：Diana Wynne Jones, “The Girl Jones” (4)	
	第10回	課題 9：Jean Rhys, “Mannequin” (1)	
	第11回	課題10：Jean Rhys, “Mannequin” (2)	
	第12回	課題11：Jean Rhys, “Mannequin” (3)	
	第13回	課題12：Jean Rhys, “Mannequin” (4)	
	第14回	最終課題の作成方法について	
	第15回	課題発表と相互評価	
準備学習 (予習・復習等)	予習：指定された課題文を翻訳し、授業支援システムから提出する。 復習：解説サイトを参考に、推敲する。課題箇所以外の英文も、解説サイトを参考に読んでみて、気に入った文章などは翻訳してみる。		
テキスト	翻訳課題となる詩1篇と現代英米女性作家の短編小説3作品を、プリントで配布する。		
参考文献	斉藤兆史『翻訳の作法』、柴田元幸『翻訳教室』、真野泰『英語のしくみと訳しかた』ほか。		
評価方法	毎回の提出課題:60% 期末課題の小冊子:40%		

アメリカの歴史A		前期 2 単位	1・2年
女性の視点からみたアメリカ史—植民地期から南北戦争まで—		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	植民地時代から南北戦争にいたるまでの、人種・エスニシティ・階級・セクシュアリティを異にする女性のアメリカでの経験を理解する。アメリカ史の大きな流れを把握し、女性の視点からアメリカの歴史を考える意義を理解する。		
授業の概要	植民地時代から南北戦争までのアメリカの歴史を扱う。まず、女性史・ジェンダー史という学問領域がどのように発達したのかを確認する。その後、植民地建設・奴隷制の確立・アメリカ革命・連邦共和国の成立・市場革命・南北戦争などアメリカ史の様々な出来事を、女性の経験からたどる。英語の一次資料も使用する。		
授業 計画	第1回	「新世界」の女性たち①先住民女性	
	第2回	「新世界」の女性たち②南部植民地	
	第3回	「新世界」の女性たち③ニューイングランド・中部植民地	
	第4回	18世紀のアメリカ	
	第5回	アメリカ革命	
	第6回	革命の遺産	
	第7回	銃規制の歴史	
	第8回	市場革命と女性	
	第9回	民主制の発達	
	第10回	南部奴隷制社会と女性	
	第11回	映画でアメリカ史を学ぶ	
	第12回	南北戦争前の改革運動	
	第13回	「明白な運命」と領土膨張	
	第14回	南北対立の激化	
	第15回	南北戦争	
準備学習 (予習・復習等)	授業で使用した一次史料（日本語・英語）を各自で読んで復習すること。		
テキスト	特にテキストは使用せず、レジュメを配布する。		
参考文献	授業時に配布するレジュメの参考文献を参照。		
評価方法	授業への参加姿勢:20% レスポンス・ペーパー:30% 期末試験:50%		

アメリカの歴史B		後期 2 単位	1・2年
女性の視点からみたアメリカ史—19世紀後半から現代まで—		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	南北戦争後から現代にいたるまでの、人種・エスニシティ・階級・セクシュアリティを異にする女性のアメリカでの経験を理解する。アメリカ史の大きな流れを把握し、女性の視点からアメリカの歴史を考える意義を理解する。		
授業の概要	南北戦争後から現代までのアメリカの歴史を扱う。産業社会の発展・革新主義改革・世界大戦・大恐慌・冷戦・公民権運動などアメリカ史の様々な出来事を、女性の経験からたどる。最後に女性の視点から歴史を学ぶ意義を考える。		
授業計画	第1回	再建期の政治	
	第2回	西部併合	
	第3回	金びか時代	
	第4回	海外膨張：大国アメリカの登場	
	第5回	女性の労働と労働文化（1890年～1930年）	
	第6回	革新主義	
	第7回	第一次世界大戦	
	第8回	繁栄の1920年代	
	第9回	大恐慌とニューディール	
	第10回	第二次世界大戦中の女性	
	第11回	冷戦と「フェミニン・ミスティーク」	
	第12回	公民権運動の高揚	
	第13回	ウーマンリブの時代	
	第14回	ニューライトの台頭	
	第15回	冷戦の終結、グローバル化、テロリズム	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に使用した一次史料（日本語・英語）を各自で読んで復習すること。		
テキスト	特にテキストは使用せず、レジュメを配布する。		
参考文献	授業時に配布するレジュメの参考文献を参照。		
評価方法	授業への参加姿勢:20% レスポンス・ペーパー:30% 期末試験:50%		

イギリスの歴史A		前期 2 単位	1・2年
イギリスの歴史をつくった女性たち——古代から近世まで		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	○古代から近世にいたるまで、イギリスのさまざまな時代を生きてきた女性たちの姿をつうじて、イギリス史の流れをつかみ、イギリス社会の成り立ちを理解する。 ○それぞれの女性たちがどのようにして自分の人生を意味あるものにしていったのかを学ぶことにより、女性の生き方についての考察を深められるようになる。		
授業の概要	近世までのイギリス史を取り上げる。イギリスが島国国家として統一される16世紀までの歴史を概説したのち、16世紀以降の各時代に活躍した歴史上の女性に焦点を合わせながら、国教会体制の成立、連合王国の成立、科学革命、名誉革命、議会制度の形成、出版文化の繁栄などのイギリス史の流れをたどる。		
授業計画	第1回	イントロダクション：イギリスの歴史を学ぶ意味	
	第2回	概説：16世紀までのイギリス	
	第3回	エリザベス1世：英国国教会体制の確立	
	第4回	『エリザベス』：宗教対立の時代	
	第5回	メアリ・ステュワート：連合王国の成立過程	
	第6回	マーガレット・キャヴェンディッシュ：17世紀の科学革命	
	第7回	『ハリー・ポッター』から：魔術とジェンダー	
	第8回	メアリ・アステル：18世紀の啓蒙と宗教	
	第9回	フィリス・ウィートリー：アメリカ独立と奴隷貿易	
	第10回	『アメイジング・グレイス』：奴隷貿易廃止運動の展開	
	第11回	デヴォンシャー公爵夫人：議会政治の形成過程	
	第12回	『ある公爵夫人の生涯』：貴族の政治と文化	
	第13回	メアリ・ウルストンクラフト：革命の時代とフェミニズム	
	第14回	ジェイン・オースティン：近代小説の成立過程	
	第15回	『いつか晴れた日に』：女性にとっての結婚	
準備学習 (予習・復習等)	○各回でテーマとする女性について、できれば授業前に簡単な情報を集めておくことが望ましい。 ○初回に参考文献一覧を配布するので、各回で取り上げた女性について、各自の関心に合わせて授業後に文献を読んで、さらに理解を深めていくことが期待される。		
テキスト	特に使用せず、授業中に配布するプリント（パワーポイントのスライド・コピー）を教材にする。		
参考文献	授業中に配布する参考文献一覧表を参照のこと。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% 定期試験:60%		

イギリスの歴史B		後期 2 単位	1・2年
イギリスの歴史をつくった女性たち——近代から現代まで		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	○近代から現代にいたるまで、イギリスのさまざまな時代を生きてきた女性たちの姿をつうじて、イギリス史の流れをつかみ、イギリス社会の成り立ちを理解する。 ○それぞれの女性たちがどのようにして自分の人生を意味あるものにしていったのかを学ぶことにより、女性の生き方についての考察を深められるようになる。		
授業の概要	イギリスの近現代史を取り上げる。19世紀から21世紀までの各時代を代表する女性の活躍に迫りながら、イギリスが大英帝国として世界各地に勢力を広げていく過程と、その時期の国内の政治、社会、文化の動き、さらに帝国支配終焉後のイギリスの独自の発展の過程を跡づける。		
授業計画	第1回	イントロダクション：近代イギリスの歴史を学ぶ意味	
	第2回	概説：19～20世紀における大英帝国の拡大	
	第3回	ヴィクトリア女王：大英帝国の繁栄	
	第4回	シャーロット・ブロンテ：ヴィクトリア時代の道徳規範	
	第5回	『ジェイン・エア』：ガヴァネスとしての女性	
	第6回	フローレンス・ナイティンゲール：戦争と看護の専門化	
	第7回	アンナ・レオノーウェンス：大英帝国とその周縁	
	第8回	『アンナと王様』：オリエンタリズムと帝国主義	
	第9回	ミリセント・フォーセット：女性参政権運動の展開	
	第10回	ビアトリクス・ポター：工業化と自然保護	
	第11回	『ミス・ポター』：ヴィクトリア時代の家庭	
	第12回	ヴァージニア・ウルフ：戦間期イギリス社会の変容	
	第13回	マーガレット・サッチャー：新自由主義の功罪	
	第14回	『マーガレット・サッチャー』：女性政治家の生き方	
	第15回	ヴィヴィアン・ウエストウッド：ファッションと文化創造	
準備学習 (予習・復習等)	○各回でテーマとする女性について、できれば授業前に簡単な情報を集めておくことが望ましい。 ○初回に参考文献一覧を配布するので、各回で取り上げた女性について、各自の関心に合わせて授業後に文献を読んで、さらに理解を深めていくことが期待される。		
テキスト	特に使用せず、授業中に配布するプリント（パワーポイントのスライド・コピー）を教材にする。		
参考文献	授業中に配布する参考文献一覧表を参照のこと。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% 定期試験:60%		

アメリカ文学史A		前期 2 単位	1・2年
アメリカ文学史A		遠藤 恵子（えんどう けいこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	文学を理解するためには背景となる歴史、社会を理解することが必須である。授業ではアメリカ文学史を学ぶ過程でアメリカという国について考えていく。歴史的背景を確認しながら、アメリカ社会の特徴である多民族性、地域による違いを作品を通して学ぶ。主として植民地時代から19世紀末までの小説を中心に、アメリカ社会とそれを映し出すアメリカ文学に対する理解を深めることを目的とする。		
授業の概要	文学史の講義と同時に作品鑑賞を積極的に行う。授業では作品の解説を行うと同時にビデオ教材も活用し、作品の背景となる時代、地域について映像を通して理解を深める。必要な基本知識を確認するために小テストを行う。また実際に作品を読んでレポートを書くこと、作品に親しむ目的で指示したテキストを原文で読むことを行う。		
授業 計画	第1回	アメリカ文学史Aについて説明	
	第2回	植民地時代（ニューイングランドとピューリタニズム）	
	第3回	独立戦争から「アメリカンルネッサンス」へ	
	第4回	フロンティアとは	
	第5回	ロマン主義について（エマソン）	
	第6回	ソロー	
	第7回	南北戦争とその意味	
	第8回	リアリズムについて	
	第9回	マーク・トゥエイン（金ぴか時代）	
	第10回	ヘンリ・ジェイムズ	
	第11回	地方の興隆	
	第12回	シカゴルネッサンス（中西部の発展）	
	第13回	シャーウッド・アンダーソン	
	第14回	自然主義について	
	第15回	今までのまとめ アメリカ社会と文学の関わり	
準備学習 (予習・復習等)	小テストを行って知識の確認をするため、復習を行い授業の理解・確認をする。また事前に参考図書を読むことが求められる。（授業中指示する）		
テキスト	プリント配布		
参考文献	授業中に指示する		
評価方法	小テスト:60% レポート:30% 授業感想文:10%		

アメリカ文学史B		後期 2 単位	1・2年
アメリカ文学史B		遠藤 恵子（えんどう けいこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	時代によって強弱をつけながらアメリカ文学を「文学」という視点から学ぶ。文学を理解するためにその背景となる歴史、社会についての知識は必須である。主として19世紀以降の文学に焦点を当て、第一次世界大戦の意味、狂乱の20年代、ロストジェネレーション、公民権運動についての知識を得る。また1970年代に「正典」とされた作品や黒人文学を紹介し、アメリカ文学の多様性を理解する。		
授業の概要	文学史の講義と同時に作品鑑賞を積極的に行う。ビデオ教材も活用し、作品の背景となる時代、地域、アメリカ社会について映像を通して理解を深めていく。必要な知識の確認のための小テストを適時行う。また作品に親しむことを目的に、実際に作品を読んでレポート書くことが求められる。		
授業計画	第1回	アメリカ文学史Bについて説明	
	第2回	植民地時代	
	第3回	独立戦争から「アメリカンルネッサンス」	
	第4回	南北戦争とその意味	
	第5回	リアリズムの時代	
	第6回	アメリカ文学の地方への広がり	
	第7回	マーク・トウェイン（作品の紹介）	
	第8回	第一次世界大戦 金ぴか時代とは	
	第9回	20世紀の文学	
	第10回	ロストジェネレーションとは	
	第11回	多民族の文学	
	第12回	女性文学について	
	第13回	黒人文学	
	第14回	ユダヤ系作家	
	第15回	人種の垣根から人種のサラダボウルへ	
準備学習 (予習・復習等)	授業では知識の確認のために小テストを適時行う。そのため復習で授業の理解・確認が必要とされる。単に作者、作品名を覚えるのではなく、前もって実際に作品を読む（原文を含む）ことが求められる。（作品については授業中指示する）		
テキスト	プリント配布		
参考文献	授業中に必要に応じて指示する		
評価方法	小テスト:60% レポート:30% 授業感想文:10%		

イギリス文学史A		前期 2 単位	1・2年
イギリス文学一国の創生から近代社会誕生まで		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	イギリス連邦の言語、人種、宗教の多重性を確認したのち、いわゆる英文学の創成期にあたる8世紀あたりから近代社会が確立する19世紀初頭までを通史的に概観する。		
授業の概要	各時代のイギリスの社会背景と文化的思潮を並行して解説しながら文学作品を紹介する。取り上げる予定の作品は『ベオウルフ』、チョーサー『カンタベリー物語』、シェイクスピアの諸作品、ジョン・ミルトン『失樂園』、形而上詩人の作品、デフォー『ロビンソン・クルーソー』、オースティン『分別と多感』等。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	古英語の時代『ベオウルフ』	
	第3回	国民創生の伝説群 アーサー王伝説・ロビンフッド伝説	
	第4回	中世文学 チョーサー『カンタベリー物語』	
	第5回	シェイクスピア 歴史劇	
	第6回	シェイクスピア 喜劇	
	第7回	シェイクスピア 悲劇	
	第8回	シェイクスピア ロマンズ劇	
	第9回	宗教革命とピューリタン文学	
	第10回	ミルトン『失樂園』	
	第11回	王政復古期の文学	
	第12回	近代社会の成立とジャーナリズム・小説の誕生	
	第13回	デフォー『ロビンソン・クルーソー』	
	第14回	スウィフト『ガリヴァー旅行記』	
	第15回	近代小説の成長 オースティン『分別と多感』	
準備学習 (予習・復習等)	授業前には各時代に関して「世界史」参考書等の該当箇所を読み、また各回に取り上げる予定の作品がある場合は日本語でよいから読んでおく。 授業後には、参考文献として挙げた研究書や映像作品を図書館で調べる。		
テキスト	未定		
参考文献	授業内に適宜指導。		
評価方法	授業内コメント提出:40% 各期末レポート提出:60%		

イギリス文学史B		後期 2 単位	1・2年
イギリス文学ー19世紀から現代まで		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	大英帝国として世界に君臨した19世紀イギリスの多面性を文学作品を通じて学び、世界大戦を経て変容してゆくイギリスの現在までの道のりを小説や戯曲、詩を紹介しながら概観する。		
授業の概要	18世紀末からわき起こったロマン派運動と社会改革の精神の運動を軸に、ヴィクトリア朝文学、主に詩作品と小説、幾つかの戯曲を読む。続けて20世紀の文学作品の多様化を、主に小説を扱いながら学ぶ。取り上げる予定の作家はブロンテ姉妹、ディケンズ、ルイス・キャロル、ワイルド、ウルフ、カズオ・イシグロ等。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	社会改革とロマン派詩人	
	第3回	メアリー・シェリーと「ゴシック」の系譜	
	第4回	ヴィクトリア朝の小説 ブロンテ姉妹	
	第5回	ディケンズ	
	第6回	ルイス・キャロル	
	第7回	世紀末の華 ワイルドとショーの戯曲	
	第8回	大英帝国の世紀末 コナン・ドイルとキプリング	
	第9回	「意識の流れ」と女性の自立 ヴァージニア・ウルフ	
	第10回	1920年代 第一次大戦の影響 ミステリーとファンタジー	
	第11回	1930年代 不安の時代 ジョージ・オーウェル	
	第12回	1950年代 第二次大戦の影響 C. S. ルイス	
	第13回	現代イギリスのファンタジー J. R. R. トールキン	
	第14回	多文化時代のイギリス文学 カズオ・イシグロ	
	第15回	21世紀のイギリス文学 ヘレン・フィールディング他	
準備学習 (予習・復習等)	授業前には、各時代に関して「世界史」の参考書等の該当箇所を読み、取り上げる予定の作品があれば日本語でよいかから読んでおく。 授業後には、参考文献の研究書や映像作品を図書館で調べる。		
テキスト	未定		
参考文献	授業内に適宜指導。		
評価方法	授業内コメント提出:40% 期末レポート提出:60%		

アメリカの文化と社会A		前期 2 単位	1・2年
現代アメリカ社会を知る		後藤 千織 (ごとう ちおり)	
授業の到達目標 及びテーマ	アメリカ合衆国の成り立ちや、現代アメリカ社会が直面する諸問題を理解する。アメリカに関する情報を理解し、議論できるようにする。また、アメリカ社会の経験と比較することで、私たちが生きる日本社会の特徴や問題を考える視点を身につける。		
授業の概要	多文化社会・政治・経済・外交という4つのテーマに分けて、現代アメリカ社会の特徴と諸問題を明らかにする。講義にくわえて、アメリカの社会問題に関する映像資料を見て、自分の考えをまとめてもらう。		
授業計画	第1回	イントロダクション：移民国家アメリカ	
	第2回	アメリカの地理的多様性	
	第3回	多文化社会①「人種」とは何か？	
	第4回	多文化社会②アフリカ系アメリカ人の運動の軌跡	
	第5回	多文化社会③アメリカ先住民	
	第6回	多文化社会④アジア系アメリカ人	
	第7回	多文化社会⑤ラティーノ・ヒスパニック	
	第8回	多文化社会⑥セクシュアリティ	
	第9回	多文化社会⑦宗教	
	第10回	多文化社会⑧国民統合の仕組み	
	第11回	アメリカ政治①アメリカの民主主義	
	第12回	アメリカ政治②大統領	
	第13回	アメリカ政治③保守／リベラル	
	第14回	格差社会アメリカ	
	第15回	アメリカ外交	
準備学習 (予習・復習等)	授業中に配布する参考資料を各自で読んで復習すること。		
テキスト	特にテキストは使用せず、レジュメを配布する。		
参考文献	授業時に配布するレジュメの参考文献を参照。		
評価方法	授業への参加姿勢:20% レスポンス・ペーパー:30% 期末試験:50%		

アメリカの文化と社会B		後期 2 単位	1・2年
映画から見るアメリカ社会		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	20世紀初頭から現代にいたるまで、アメリカ映画のなかでアメリカの人種／エスニシティ・階級・ジェンダー・セクシュアリティがどのように描かれてきたかを理解する。また、映画の中のイメージと「現実の世界」がどのように関係しているのかを考える視点を身につける。		
授業の概要	最初の2回でハリウッドの歴史と文化理論を概観し、人種／エスニシティ、階級、ジェンダー、セクシュアリティの4つのテーマに沿って、アメリカ映画の中で多様性がどのように表象されてきたかをたどる。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ハリウッドの歴史	
	第3回	人種・エスニシティ①映画の中の白人性	
	第4回	人種・エスニシティ②アフリカ系アメリカ人	
	第5回	人種・エスニシティ③アメリカ先住民	
	第6回	人種・エスニシティ④アジア系アメリカ人	
	第7回	人種・エスニシティ⑤ラティーノ	
	第8回	階級①初期の階級の表象	
	第9回	階級②大恐慌以降の階級表象	
	第10回	ジェンダー①女性らしさの表象	
	第11回	ジェンダー②見るということ	
	第12回	ジェンダー③男性らしさの表象	
	第13回	ジェンダー④1960年代以降のジェンダー表象	
	第14回	セクシュアリティ①異性愛／同性愛	
	第15回	セクシュアリティ②性革命以降	
準備学習 (予習・復習等)	講義のテーマに関連する映画などを各自で観て講義内容を復習すること。		
テキスト	特にテキストは使用せず、レジュメを配布する。		
参考文献	授業時に配布するレジュメの参考文献を参照。		
評価方法	授業への参加姿勢:20% レスポンス・ペーパー:30% 期末試験:50%		

イギリスの文化と社会A		前期 2 単位	1・2年
イギリス社会の諸問題——階級、福祉国家、家族		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○イギリスが直面してきた問題を学ぶことで、現代日本のあり方を相対化できるようになる。</p> <p>○イギリスにおける階級の成り立ちと構造、階級に根ざした文化のかたちを理解する。</p> <p>○イギリスにおける福祉国家体制の成立と解体、新自由主義の台頭とその葛藤を理解する。</p> <p>○イギリスにおける近代家族の成立と変容、現代の家族の多様化とその問題を理解する。</p>		
授業の概要	<p>「社会階級」「福祉国家」「家族と女性」という3つのテーマからイギリスの文化と社会の諸特徴を明らかにする。各テーマにつき、3回の授業と1回のディベートを行い、イギリスが直面してきたさまざまな問題にたいする複眼的な思考の習得を促す。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	イギリス社会を生きる人びと	
	第3回	社会階級（1）階級社会イギリスの成り立ちと構造	
	第4回	社会階級（2）『マイ・フェア・レディ』	
	第5回	社会階級（3）階級にねざした文化のかたち	
	第6回	社会階級（4）ディベート・小レポート	
	第7回	福祉国家（1）福祉国家イギリスの変容	
	第8回	福祉国家（2）『ナビゲーター』	
	第9回	福祉国家（3）社会民主主義と新自由主義の相克	
	第10回	福祉国家（4）ディベート・小レポート	
	第11回	家族と女性（1）近代家族モデルの形成と変容	
	第12回	家族と女性（2）『Dear フランキー』	
	第13回	家族と女性（3）家族の多様化と女性の「自己決定」	
	第14回	家族と女性（4）ディベート・小レポート	
	第15回	まとめ：『リトル・ダンサー』	
準備学習 (予習・復習等)	<p>各テーマの締め括りとなる回の授業では、グループに分かれてディベートを行ったのち、それぞれのテーマにかんする小レポートを書いてもらう。この準備として、授業時間外に各自が参考文献などをもとに、みずからの考えをまとめておく作業が求められる。</p>		
テキスト	<p>特に使用せず、授業中に配布するプリントを教材とする。</p>		
参考文献	<p>必要に応じて授業中に適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>授業への参加姿勢:15% 小レポート（3回分）:45% 定期試験:40%</p>		

イギリスの文化と社会B		後期 2 単位	1・2年
イギリス社会の諸問題——帝国、植民地、多文化主義		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○イギリスが直面してきた問題を学ぶことで、現代日本のあり方を相対化できるようになる。</p> <p>○イギリスによるインド支配の事例から、帝国支配の歴史の功罪を理解する。</p> <p>○北アイルランド紛争の事例から、植民地問題の解決の難しさとその可能性を理解する。</p> <p>○イギリスにおける移民社会の成り立ち、多文化共生にむけた取り組みとその葛藤を理解する。</p>		
授業の概要	<p>「帝国支配」「北アイルランド問題」「多文化主義」という3つのテーマからイギリスの文化と社会の諸特徴を明らかにする。各テーマにつき、3～4回の授業と1回のディベート（またはロールプレイング）を行い、イギリスが直面してきたさまざまな問題にたいする複眼的な思考の習得を促す。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	帝国支配（1）大英帝国としてのイギリス	
	第3回	帝国支配（2）イギリスのインド支配	
	第4回	帝国支配（3）植民地支配の功罪とグローバリゼーション	
	第5回	帝国支配（4）ディベート・小レポート	
	第6回	北アイルランド問題（1）イギリスのアイルランド支配	
	第7回	北アイルランド問題（2）北アイルランド紛争の展開	
	第8回	北アイルランド問題（3）『ナッシング・パーソナル』	
	第9回	北アイルランド問題（4）ロールプレイング・小レポート	
	第10回	北アイルランド問題（5）和解にむけた取り組み	
	第11回	多文化主義（1）移民社会イギリスの成り立ちと構造	
	第12回	多文化主義（2）『ぼくの国、パパの国』	
	第13回	多文化主義（3）多文化共生の模索	
	第14回	多文化主義（4）ディベート・小レポート	
	第15回	多文化主義（5）イスラム原理主義の深層	
準備学習 (予習・復習等)	<p>各テーマの締め括りとなる回の授業では、グループに分かれてディベートを行ったのち、それぞれのテーマにかんする小レポートを書いてもらう。この準備として、授業時間外に各自が参考文献などをもとに、みずからの考えをまとめておく作業が求められる。</p>		
テキスト	<p>特に使用せず、授業中に配布するプリントを教材とする。</p>		
参考文献	<p>必要に応じて授業中に適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>授業への参加姿勢:15% 小レポート（3回分）:45% 試験:40%</p>		

英語圏の文化と社会A		前期 2 単位	1・2年
現代オーストラリア社会		杉田 弘也 (すぎた ひろや)	
授業の到達目標 及びテーマ	アジア・太平洋地域にある英語圏の国であるオーストラリアについて、その現代社会を多面的に理解する。オーストラリアにおける先住民と非先住民との関係や、多文化主義社会を学ぶことにより、マイノリティが置かれている立場を理解する。 オーストラリアの教育制度を学ぶことで、日本以外の教育制度を理解する。		
授業の概要	導入部として、オーストラリア社会の概要と歴史的背景を把握した後、オーストラリアにおける先住民について、先住民ではないオーストラリア人とのかかわりを中心に学ぶ。後半では、オーストラリアの多文化主義政策、教育・社会政策を中心に学び、日本とは異なった社会があることを認識し、日本が何を学ぶことができるかを考える。		
授業計画	第1回	イントロダクション・オーストラリアの概要	
	第2回	オーストラリアAの歴史の流れ	
	第3回	オーストラリアの先住民に何が起きたか	
	第4回	先住民社会の現在	
	第5回	Stolen Generations と先住民への謝罪	
	第6回	先住民の権利	
	第7回	オーストラリア人戦争捕虜の問題	
	第8回	オーストラリアに住む人々	
	第9回	多文化主義とは？	
	第10回	オーストラリアはどのように多文化主義社会を実現したか	
	第11回	オーストラリアにとって多文化主義とは何か	
	第12回	オーストラリアの教育制度 (1) 就学前・初等・中等教育	
	第13回	オーストラリアの教育制度 (2) 高等教育	
	第14回	オーストラリアの社会保障(福祉)制度	
	第15回	まとめ：日本はオーストラリアから何を学ぶか	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ読んでもらいたい資料があれば配布しますので、読んでおくようにしてください。授業ごとにハンドアウトを配布しますので、授業後はそれを見て内容を振り返ってください。		
テキスト	特に定めない。授業ごとにハンド・アウトを配布する		
参考文献	竹田いさみ、森健、永野隆行(編著)『オーストラリア入門第2版』など、最初の授業でリストを配布する。		
評価方法	授業へのコメント:33% 期末試験orレポート:67%		

英語圏の文化と社会B		後期 2 単位	1・2年
カナダの歴史		木野 淳子 (きの じゅんこ)	
授業の到達目標及びテーマ	同じ北米大陸のアメリカ合衆国と共通点の多いカナダが、どのようにして今日の国家となったのか、また、大国アメリカの隣国として、時にアメリカと対峙し、あるいは強調しつつ、どのようにさまざまな問題に対処してきたのかについて、先住民と白人の接触から、現代にいたるまでのカナダの歴史を学ぶ。		
授業の概要	講義が中心となるが、視覚的な資料も使用して、カナダのイメージを構築していく。授業内で、提出課題を出す予定である。授業では、プリントを配布するが、プリントには書き込み用のスペースは特に設けていないので、各自ノートを用意すること。初回の授業において、説明する。		
授業計画	第1回	以下の内容を予定しているが、学生の理解度により、進度には変更がある可能性がある。 イントロダクション—授業の進め方、参考文献紹介など	
	第2回	カナダの先住民と対先住民政策	
	第3回	ヨーロッパがカナダに求めたもの—毛皮と鱈	
	第4回	フランス領時代のカナダ	
	第5回	イギリス領時代のカナダ（1）アメリカとの二つの戦い—アメリカ独立革命	
	第6回	イギリス領時代のカナダ（2）アメリカとの二つの戦い—1812年戦争	
	第7回	イギリス領時代のカナダ（3）責任政府の樹立	
	第8回	コンフェデレーション（1）二つの会議	
	第9回	コンフェデレーション（2）カナダの建国	
	第10回	「海から海へ」—版図の拡大とその問題	
	第11回	北大西洋三角形—外交権の獲得へ	
	第12回	第二次世界大戦と日系カナダ人	
	第13回	第二次世界大戦後のカナダ	
	第14回	多文化主義国家カナダへ	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ参考文献に目を通して、大まかな授業内容をつかんでおくこと。		
テキスト	特定のテキストは使用しない。		
参考文献	木村和男編 『カナダ史』 山川出版社、1999年。日本カナダ学会編 『新版 史料が語るカナダ』 有斐閣、2008年。飯野雅正子、竹中豊編 『現代カナダを知るための57章』 明石書店、2010年。その他、授業時に指示する。		
評価方法	授業時に指示する課題:40% 試験:40% 出席:20%		

英米児童文学A		前期 2 単位	1・2年 現代教養学科国際
イギリス児童文学：ファンタジーの黄金時代（1860年代～1930年代）		成瀬 俊一（なるせ しゅんいち）	
授業の到達目標及びテーマ	1) ファンタジー黄金時代（1860年代～1930年代）の作家・作品の特質を理解する。 2) 物語の読み方を学ぶ（人物・舞台・出来事の描き方から作品のテーマとメッセージを読みとる）。		
授業の概要	イギリス児童文学におけるファンタジーの誕生・発展の軌跡を、1860年代から1930年代の代表的な作品に焦点を当ててたどります。授業は作品原文冒頭の講読・解説、作家・作品の背景・読み方に関する講義、受講者によるレポート発表で構成されます。各作品の映画版の部分的な視聴も行います。学期中3回のレポート発表と期末テストを実施します。		
授業計画	第1回	イントロダクション：「イギリス児童文学の誕生」講義	
	第2回	「ファンタジーの誕生と発展」講義	
	第3回	『不思議の国のアリス』（1865年）講義	
	第4回	『不思議の国のアリス』レポート発表	
	第5回	『お姫さまとゴブリンの物語』（1872年）講義	
	第6回	『砂の妖精』（1902年）講義	
	第7回	『ピーターラビットのおはなし』（1902年）講義	
	第8回	『たのしい川べ』（1908年）講義	
	第9回	『たのしい川べ』レポート発表	
	第10回	『ピーター・パン』（1911年）講義	
	第11回	『ピーター・パン』レポート発表	
	第12回	『ピーター・パン』映画研究	
	第13回	『クマのプーさん』（1926年）講義	
	第14回	『風によってきたメアリー・ポピンズ』（1934年）講義	
	第15回	まとめ：「ファンタジー黄金時代の背景とテーマ」講義	
準備学習 (予習・復習等)	予習) 授業で扱う作品（レポート課題対象作品以外を含む）を読み、授業時に発する質問（気づいたこと・疑問に思ったことなど）を用意しておく。 復習) 教科書とプリント（授業時に配付）を再読する。		
テキスト	本多英明・桂宥子・小峰和子編著『たのしく読める英米児童文学』ミネルヴァ書房		
参考文献	レポート課題対象作品を地元図書館で借りるか、地元書店で購入してください（原書・翻訳のどちらでも可）。		
評価方法	レポート（3回）：15% 期末試験：85%		

子どもと英米文学 I		前期 2 単位	1・2年
イギリス児童文学：ファンタジーの黄金時代（1860年代～1930年代）		成瀬 俊一（なるせ しゅんいち）	
授業の到達目標及びテーマ	1) ファンタジー黄金時代（1860年代～1930年代）の作家・作品の特質を理解する。 2) 物語の読み方を学ぶ（人物・舞台・出来事の描き方から作品のテーマとメッセージを読みとる）。		
授業の概要	イギリス児童文学におけるファンタジーの誕生・発展の軌跡を、1860年代から1930年代の代表的な作品に焦点を当ててたどります。授業は作品原文冒頭の講読・解説、作家・作品の背景・読み方に関する講義、受講者によるレポート発表で構成されます。各作品の映画版の部分的な視聴も行います。学期中3回のレポート発表と期末テストを実施します。		
授業計画	第1回	イントロダクション：「イギリス児童文学の誕生」講義	
	第2回	「ファンタジーの誕生と発展」講義	
	第3回	『不思議の国のアリス』（1865年）講義	
	第4回	『不思議の国のアリス』レポート発表	
	第5回	『お姫さまとゴブリンの物語』（1872年）講義	
	第6回	『砂の妖精』（1902年）講義	
	第7回	『ピーターラビットのおはなし』（1902年）講義	
	第8回	『たのしい川べ』（1908年）講義	
	第9回	『たのしい川べ』レポート発表	
	第10回	『ピーター・パン』（1911年）講義	
	第11回	『ピーター・パン』レポート発表	
	第12回	『ピーター・パン』映画研究	
	第13回	『クマのプーさん』（1926年）講義	
	第14回	『風にのってきたメアリー・ポピンズ』（1934年）講義	
	第15回	まとめ：「ファンタジー黄金時代の背景とテーマ」講義	
準備学習 (予習・復習等)	予習) 授業で扱う作品（レポート課題対象作品以外を含む）を読み、授業時に発する質問（気づいたこと・疑問に思ったことなど）を用意しておく。 復習) 教科書とプリント（授業時に配付）を再読する。		
テキスト	本多英明・桂宥子・小峰和子編著『たのしく読める英米児童文学』ミネルヴァ書房		
参考文献	レポート課題対象作品を地元図書館で借りるか、地元書店で購入してください（原書・翻訳のどちらでも可）。		
評価方法	レポート（3回）：15% 期末試験：85%		

英米児童文学B		後期 2 単位	1・2年 現代教養学科国際
イギリス児童文学：現代のファンタジー（1930年代～1990年代）		成瀬 俊一（なるせ しゅんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>1) 二つの世界大戦後のファンタジー（1930年代～1990年代）の作家・作品の特質を理解する。 2) 物語の読み方を学ぶ（人物・舞台・出来事の描き方から作品のテーマとメッセージを読みとる）。</p>		
授業の概要	戦後イギリス児童文学におけるファンタジーの発展の軌跡を、1930年代から1990年代の代表的な作品に焦点を当ててたどります。授業は作品原文冒頭の講読・解説、作家・作品の背景・読み方に関する講義、受講者によるレポート発表で構成されます。各作品の映画版の部分的な視聴も行います。学期中3回のレポート発表と期末テストを実施します。		
授業計画	第1回	イントロダクション：「ファンタジーの誕生と発展」講義	
	第2回	『ホビットの冒険』（1937年）講義	
	第3回	『人形の家』（1947年）講義	
	第4回	『ライオンと魔女』（1950年）講義	
	第5回	『ライオンと魔女』レポート発表	
	第6回	『床下の小人たち』（1952年）講義	
	第7回	『トムは真夜中の庭で』（1958年）講義	
	第8回	『トムは真夜中の庭で』レポート発表	
	第9回	『くまのパディントン』（1958年）講義	
	第10回	『チャーリーとチョコレート工場』（1964年）講義	
	第11回	『風が吹くとき』（1982年）講義	
	第12回	『風が吹くとき』映画研究	
	第13回	『ハリー・ポッターと賢者の石』（1997年）講義	
	第14回	『ハリー・ポッターと賢者の石』レポート発表	
	第15回	まとめ：「現代ファンタジーの背景とテーマ」	
準備学習 (予習・復習等)	予習) 授業で扱う作品（レポート課題対象作品以外を含む）を読み、授業時に発する質問（気づいたこと・疑問に思ったことなど）を用意しておく。 復習) 教科書とプリント（授業時に配付）を再読する。		
テキスト	本多英明・桂宥子・小峰和子編著『たのしく読める英米児童文学』ミネルヴァ書房		
参考文献	レポート課題対象作品を地元図書館で借りるか、地元書店で購入してください（原書・翻訳のどちらでも可）。		
評価方法	レポート（3回）：15% 期末試験：85%		

子どもと英米文学Ⅱ		後期 2 単位	1・2年
イギリス児童文学：現代のファンタジー（1930年代～1990年代）		成瀬 俊一（なるせ しゅんいち）	
授業の到達目標及びテーマ	1) 二つの世界大戦後のファンタジー（1930年代～1990年代）の作家・作品の特質を理解する。 2) 物語の読み方を学ぶ（人物・舞台・出来事の描き方から作品のテーマとメッセージを読みとる）。		
授業の概要	戦後イギリス児童文学におけるファンタジーの発展の軌跡を、1930年代から1990年代の代表的な作品に焦点を当ててたどります。授業は作品原文冒頭の講読・解説、作家・作品の背景・読み方に関する講義、受講者によるレポート発表で構成されます。各作品の映画版の部分的な視聴も行います。学期中3回のレポート発表と期末テストを実施します。		
授業計画	第1回	イントロダクション：「ファンタジーの誕生と発展」講義	
	第2回	『ホビットの冒険』（1937年）講義	
	第3回	『人形の家』（1947年）講義	
	第4回	『ライオンと魔女』（1950年）講義	
	第5回	『ライオンと魔女』レポート発表	
	第6回	『床下の小人たち』（1952年）講義	
	第7回	『トムは真夜中の庭で』（1958年）講義	
	第8回	『トムは真夜中の庭で』レポート発表	
	第9回	『くまのパディントン』（1958年）講義	
	第10回	『チャーリーとチョコレート工場』（1964年）講義	
	第11回	『風が吹くとき』（1982年）講義	
	第12回	『風が吹くとき』映画研究	
	第13回	『ハリー・ポッターと賢者の石』（1997年）講義	
	第14回	『ハリー・ポッターと賢者の石』レポート発表	
	第15回	まとめ：「現代ファンタジーの背景とテーマ」	
準備学習 (予習・復習等)	予習) 授業で扱う作品（レポート課題対象作品以外を含む）を読み、授業時に発する質問（気づいたこと・疑問に思ったことなど）を用意しておく。 復習) 教科書とプリント（授業時に配付）を再読する。		
テキスト	本多英明・桂宥子・小峰和子編著『たのしく読める英米児童文学』ミネルヴァ書房		
参考文献	レポート課題対象作品を地元図書館で借りるか、地元書店で購入してください（原書・翻訳のどちらでも可）。		
評価方法	レポート（3回）：15% 期末試験：85%		

英語圏の文学		前期 2 単位	1・2年
アイルランドについて学ぶ		舟橋 美香 (ふなはし みか)	
授業の到達目標 及びテーマ	アイルランドの歴史、社会、文学と演劇を含む文化について、旅行ガイドの英文から、現代の短編小説や詩をふくむ、さまざまなジャンルの英語による文を読み、また、映画や上演された劇などの映像を見る事で理解を深める。		
授業の概要	アイルランドは長い歴史と豊かな文化をもつ国であり、近年経済的にも大きな発展を遂げたが、ここ数年は経済状況の悪化がニュースとなっている。アイルランドの作品を読むときに必要と思われるアイルランドの歴史的背景や社会について解説、講義し、文化を紹介し、講義の途中からは、実際に作品を読んだり観たりし、ディスカッションにつなげる。		
授業計画	第1回	Introduction to Ireland: 地理と領土	
	第2回	アイルランドの基礎知識- 中世〜大飢饉〜現在 & スポーツ	
	第3回	イースター蜂起から内乱までの映画 (前半) 対英戦争まで	
	第4回	映画 (後半) 条約と分割 & 北アイルランド問題	
	第5回	ジェームス・ジョイスの短編を読む (ディスカッション)	
	第6回	ジェームス・ジョイスの短編を読む (再考)	
	第7回	アイルランド現代詩を読む-1 泥炭とじゃがいも	
	第8回	アイルランド現代詩を読む-2 中世の聖人	
	第9回	アイルランド語	
	第10回	アラン諸島とシング	
	第11回	アイルランド演劇を観る-1 幕の悲劇 (英語上演)	
	第12回	アイルランド演劇を観る-笑いと風刺 (英語上演)	
	第13回	アイルランド演劇を観る-笑いを再考	
	第14回	アイルランドのアニメーション映画を英語字幕で見る	
	第15回	詩のまとめ&アイルランドの料理	
準備学習 (予習・復習等)	予習・復習: 授業で指示するテキストを読んでおく。		
テキスト	上野格・アイルランド文化研究会編著『図説アイルランド』河出書房新社 配布プリント		
参考文献	授業で随時指示する。		
評価方法	授業での姿勢と提出物:40% 期末レポート:60%		

マイノリティ文化論		後期 2 単位	1・2年
米国黒人女性文学を通じて、有色女性のエンパワーメント（自律・自尊・自立）の方向性を考える		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標及びテーマ	①肌の色、貧富の差、性差などをめぐる二重三重の差別と抑圧に立ち向かう米国少数派女性文学の魅力を理解する。②強さを求めた白人中流女性のフェミニズムから、「弱さ」を怖れずに、それを「南」の女性たちと連帯するための契機に読み替える有色女性のフェミニズムへの展開を押さえ、マイノリティ文化の可能性へつなげて理解する。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・メールレポート講評 ・キーワード解説 ・テキスト読解と自由討議 		
授業計画	第1回	歴史という表象の政治学～『青い目がほしい』導入、エンパワーとは？（cf. 低い自己評価と自尊感情）	
	第2回	同 pp. 15-88（事実≠認識、有徴化・スティグマ化によって普遍化された常識・スタンダード、異化・相対化）	
	第3回	同 pp. 91-138（イデオロギーとは？racism, classism, sexism、北部黒人のマイノリティ・コミュニティ）	
	第4回	同 pp. 141-194（国民国家ナショナリズム・るつぽ論＝同化主義、包摂と排除の境界画定が生むアイデンティティの対他性）	
	第5回	同 pp. 195-240（一般欲望と固有欲望）	
	第6回	同 pp. 241-304（承認・評価をめぐる政治、周縁・少数派であることを怖れない）	
	第7回	小まとめ～中間レポート概要（論理的思考の三角形）	
	第8回	『カラーパープル』導入～映画前半部上映	
	第9回	同 pp. 7-80（南部黒人コミュニティに見るracism, classism, sexism）	
	第10回	同 pp. 80-162（資本主義・帝国主義・コロニアリズム・ポストコロニアリズム）	
	第11回	同 pp. 162-246（同化主義の主張と問題点、強さを求めた白人中流のフェミニズム）	
	第12回	同 pp. 246-313（多文化主義の主張と問題点、弱さを怖れない有色女性のフェミニズム）	
	第13回	同 pp. 314-361（混血化・雑種化・カテゴリー越境的な生成するアイデンティティと複眼思考）	
	第14回	小まとめ（区別≠差別、パープル＝個の固有性・単独性）～期末レポート概要	
	第15回	まとめ（マイノリティ文化の条件とは？ 同じ＝和・善でなく多様性＝生成・調和・活力へ、寛容＝他者の他者性へのリスペクト）	
準備学習（予習・復習等）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習：指定された箇所を直線と波線を引いて読んでおく 2. 復習：メールレポート 前回までの授業内容に関連した質問・コメント・事例紹介などを200字程度で自由記述 		
テキスト	トニ・モリスン『青い目がほしい』ハヤカワepi文庫 A・ウォーカー『カラーパープル』集英社文庫 他配布プリント		
参考文献	随時紹介		
評価方法	中間レポート:30% 期末レポート:30% メールレポート:20% 自由討議参加度:20%		

ヨーロッパの文化と社会A		前期 2 単位	1・2年
ドイツ語圏の文化と社会		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	ドイツ語圏の思想、文学、芸術について、時代背景を踏まえつつ、理解を深める。 社会と文化の関連を理解する。 思想や文学の文章、美術や音楽の作品を直接味わい、理解する。 日本とヨーロッパの文化の共通性と異質性を考える。		
授業の概要	講義を中心とするが、学生が直接、テキストや作品にふれて、考察することを重視する。 美術の画像や音楽作品を鑑賞する。 考えたこと、コメントを文章にして提出する。 小レポートを数回提出する。		
授業計画	第1回	ドイツ語圏の風土、ドイツ語、現代のドイツについて。	
	第2回	中世とルネサンスの社会と文化	
	第3回	中世とルネサンスの自然観	
	第4回	ルターと宗教改革	
	第5回	デューラーやクラナッハの絵画	
	第6回	プロテスタント教会とバッハの音楽	
	第7回	バロック時代の詩と美術と音楽	
	第8回	ドイツ啓蒙思想と日本	
	第9回	ゲーテ時代の思想	
	第10回	ゲーテの文学	
	第11回	ドイツロマン派の文学とメルヘン	
	第12回	グリム兄弟とグリム童話	
	第13回	20世紀のドイツとオーストリアとスイス	
	第14回	1945年以後のドイツ語圏	
	第15回	21世紀ドイツ語圏の社会と文化	
準備学習 (予習・復習等)	予習・復習のための課題を出す。 文学や美術や音楽の作品を鑑賞し、感想を提出することなど。		
テキスト	授業時間内に配布する。		
参考文献	図書館の蔵書の中から紹介する。		
評価方法	講義コメント:40% レポート:30% 試験:30%		

ヨーロッパの文化と社会B		後期 2 単位	1・2年
中世フランスの近代化と民衆		長谷川 宜之 (はせがわ よしゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業の目標は2つある。まず、私たちが抱きがちなヨーロッパへの一方的なイメージを一度相対化することである。次に、歴史的に形成されるヨーロッパ社会の特徴を受講者が具体的にイメージし、ヨーロッパの文化を自分の言葉で説明できるようにすることである。この授業のテーマは、千年に及ぶ中世ヨーロッパ社会の考察をつうじて、現代社会が直面する様々な課題について歴史的に考察する技術を習得することにある。		
授業の概要	一体どれくらいの方が読んでいいのか深い謎に包まれている古典的名著『法の精神』。それを書いたモンテスキューによると、「フランス王は魔術師」である。「えっ、まじ?」。フランス王が魔術師だった頃、フランス各地で豚が人間と同じやり方の裁判に掛けられ、処刑されていた。「えっ、まじ?」。また同じ頃、宗教書の余白には、化け物やうんこをする少年などが描かれていた。「えっ、まじ?」。そう、これらはすべて「まじ」である。どうやら中世ヨーロッパ人は私たち現代人と違った感覚で生きていたようである。この授業では、こうした違いに焦点を当て、当時の人たちの社会や世界観を具体的にイメージしたいと思う。なお、授業は講義形式である。		
授業計画	第1回	イントロダクションー中世ヨーロッパって、何だ?	
	第2回	中世から近代までを概観するー中央集権化を進めるフランス王	
	第3回	研究史ー「西洋史」を学ぶ意義と「ヨーロッパ史」を学ぶ意義の違い	
	第4回	近代化①ーなぜ民衆は王様と認めたの?:カペー朝の王様の秘密	
	第5回	近代化②ー百年戦争と病気治し	
	第6回	近代化③ーフランス革命期の王様:魔術師ではなくなったルイ16世	
	第7回	民衆の世界①ー動物裁判:被告は豚のぶーちゃん(メス3歳)です	
	第8回	民衆の世界②ー動物を裁判に掛ける人びとの意識:ミミズも裁判の対象です	
	第9回	民衆の世界③ー周辺には化け物が:これは妖怪のせい?	
	第10回	民衆の世界④ー本の余白には排便する少年の絵	
	第11回	民衆の世界⑤ー「聖女と悪女」:それって、男の都合でしょ?	
	第12回	民衆の世界⑥ー一体この人たちの世界観はどうなってるの?	
	第13回	近代化④ーああ、栄光のフランス革命:でも、なんで「栄光」なの?	
	第14回	近代化⑤ーフランス革命期の地下活動:時代を動かすのはやっぱり下衆な欲望なの?	
	第15回	授業全体のまとめと試験指示	
準備学習 (予習・復習等)	予習:次回の内容に関する時代について自分なりに調べてみる。 復習:授業内容をまとめて、自分なりの疑問点を挙げてみる。		
テキスト	授業内に適宜指示する。		
参考文献	詳細な参考文献は授業中に適宜指示する。服部良久ほか『大学で学ぶ西洋史』ミネルヴァ出版。		
評価方法	授業への取り組み:30% 試験:70%		

ヨーロッパの文化と社会C		前期 2 単位	1・2年
ヴィジュアル・テキストに見るロシアの歴史と文化		坂内 徳明 (ばんない とくあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	現在の日本でのロシア・イメージは「寒い」「暗い」といった言葉に示されるように、必ずしも良いとは言えません。しかし、ロシアの人々はこれまでも、そして今も厳しい自然と社会の中で多くの困難と格闘しながら「明るく」「楽しく」そして「誠実に」生きています。そうしたロシア文化の諸相をヴィジュアル・テキストを通して知ってもらい、異文化を理解する方法を学びます。		
授業の概要	さまざまなヴィジュアル・テキスト（絵画、写真、DVD、ビデオ等）を提示しますが、基本的には講義形式で行います。毎回、コメントシートを書いてもらう予定です。		
授業計画	第1回	オリエンテーションとして、講義の全体、目的とねらい等	
	第2回	ロシア概観① 地誌	
	第3回	ロシア概観② 歴史	
	第4回	ロシア概観③ 民俗・時空間	
	第5回	ロシア美術史概説	
	第6回	ヴィジュアル・テキストの意義	
	第7回	年間歳時・農耕暦（ビデオ「ロシア歳時暦と祭り」を見ながら）	
	第8回	春の祝祭	
	第9回	都市・広場・人形（バレエ「ペトルーシュカ」を見ながら）	
	第10回	20世紀初頭バレエ・リュス（ロシア・バレエ団）	
	第11回	キリスト教と異教	
	第12回	ロシア女性史概説	
	第13回	魔女の文化史（昔話「ヤガー婆さん」を読みながら）	
	第14回	食卓・供応（絵本「三匹のクマ」を見る＝読む）	
	第15回	ロシア文化の諸相とそこから見える世界	
準備学習 (予習・復習等)	特別な予習はありませんが、次回の講義に関連し資料を配布して事前に目を通し、簡単なコメントを書いてもらうことがあります。また、毎授業後に講義内容のアウトラインと感想をまとめたコメントシートを書き、提出してください。具体的には、第一回目の授業時にそのやり方について指示します。		
テキスト	特定の教科書は使用しません。毎時間、プリントを用意、配布します。		
参考文献	各回授業中に配布される資料プリントに参考文献を明示します。また、授業中に、ロシアだけでなく関連する日本や欧米の参考文献を紹介します。		
評価方法	上記コメント:50% 期末レポート:50%		

アジアの文化と社会A		前期 2 単位	1・2年
考古学から見た東アジアの文化と社会		高浜 侑子（たかはま ゆうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	近年、東アジアでは多くの考古遺跡が発掘調査され、新資料が続々と発見されている。この講義ではこうした実際に出土した考古資料を通して、さまざまなテーマから東アジアの文化や社会、生活について、より具体的に理解することを目的とする。		
授業の概要	初めに衣食住に関する遺跡、出土品を通して文化、社会、生活について考察し、さらに戦争、祭祀、墓制、娯楽、文書、交流などからも考察を進めたい。扱う時代は古代～中世にかけて、地域は中国が中心となるが、関わりや影響のある朝鮮、日本などについても合わせて紹介したい。		
授業計画	第1回	初めに：東アジアの歴史と文化の概略紹介	
	第2回	身なり（男性の衣服の変遷）	
	第3回	身なり（女性の衣服の変遷）	
	第4回	身なり（髪型、装身具などの変遷）	
	第5回	食文化（石器時代～孔子の食卓など）	
	第6回	食文化（漢代の貴族夫人の食生活など）	
	第7回	飲酒文化（酒造りや酒器などから）	
	第8回	住文化（古代～中世の集落・都市）	
	第9回	住文化（宮殿・住居）	
	第10回	戦争（武器、戦車、秦の始皇帝の兵馬俑坑など）	
	第11回	祭祀から見た社会と文化	
	第12回	墓と副葬品から見た社会と文化	
	第13回	娯楽（スポーツ、音楽、舞踏、ゲームなど）	
	第14回	文書（文字の歴史、印章制度）	
	第15回	東西文化交流と東アジアの文化と社会	
準備学習 (予習・復習等)	復習：参考文献を読むなど、自分なりに講義内容の理解に努めること。また復習のために小レポートを提出してもらう。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを配布する。		
参考文献	松丸道雄・永田英正『中国文明の成立』（《ビジュアル版》世界の歴史5 講談社）、尾形勇『東アジアの世界帝国』（《ビジュアル版》世界の歴史8 講談社）		
評価方法	レポート:70% 平常点（小レポート）:30%		

アジアの文化と社会B		後期 2 単位	1・2年
異文化としてのアジア社会を理解するために		菅野 美佐子 (かんの みさこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○アジア社会を、南アジアを中心に宗教、民族、伝統、経済、教育、開発などの多角的な視点でとらえ、多様な価値観や思考様式を受容する感性を身につける。</p> <p>○日本の社会・文化をアジアという大きな枠組みに位置づけ、アジアの国や人々が、日本社会や日本人の生活と密接に結びついていることを理解する。</p>		
授業の概要	<p>授業前半は、民族、宗教、伝統の多様性について、中盤から後半にかけては、格差問題やジェンダー、開発などをめぐる現代的諸問題について、南アジアを中心にアジア社会を幅広く概観する。それらを踏まえつつ、最後に日本のアジアにおける位置づけとアジアへの貢献の可能性を検討する。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション：アジア社会への接近	
	第2回	多様な世界観①家族・親族とライフサイクル	
	第3回	多様な世界観②宗教と精神世界	
	第4回	多様な世界観③人びとの暮らしの変化	
	第5回	民族の多様性とナショナリズム／エスニシティ	
	第6回	伝統／近代の接触とグローバリゼーション	
	第7回	アジアの諸問題①急速な経済発展と貧困・格差の拡大	
	第8回	アジアの諸問題②アジアの教育と子どもの人権	
	第9回	アジアの諸問題③沸騰する教育熱のゆくえ	
	第10回	アジアの諸問題④ジェンダー/セクシュアリティと暴力	
	第11回	アジアの諸問題⑤女性差別とエンパワーメントへの取り組み	
	第12回	グループ発表／ディスカッション①	
	第13回	グループ発表／ディスカッション②	
	第14回	アジアのなかの日本①戦争の歴史と日本の責任	
	第15回	アジアのなかの日本②日本の位置づけと貢献の可能性	
準備学習 (予習・復習等)	指定図書と配布資料の熟読		
テキスト	とくに定めない。授業毎にレジュメを配布する。		
参考文献	片山隆裕編『アジアから観る、考える—文化人類学入門』カニヅ出版、信田敏宏ほか編『東南アジア・南アジア開発の人類学』明石書店。ほか授業時に提示。		
評価方法	授業感想文：20% 発表：40% レポート：40%		

アジアの文化と社会C		後期 2 単位	1・2年
東南アジア—身近な異文化・社会の理解のために		木口 由香 (きぐち ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○自然環境、社会・文化・政治・経済、また、食事など身近なものから現地の人々の暮らしを理解し、日本とは異なる多様な社会の存在について知る。</p> <p>○日本との関係や日本が東南アジアに与える影響について知る。</p> <p>○以上の理解を通じ、自らの暮らしを客観的にみる視点を持ち、社会を複眼的に捉え直すことで、異文化に対する理解を深める。</p>		
授業の概要	<p>(1) 東南アジアの大陸部の国々を主な事例に、それぞれの国の多様な成り立ちと、社会の複雑さを明らかにする。</p> <p>(2) 日本の援助や経済活動が東南アジアの国々に与えている影響について概観する。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション／オリエンテーション	
	第2回	日本で暮らす私たちのものの見方を縛るもの	
	第3回	東南アジアの多様性—自然・人びと・歴史	
	第4回	新しい国の苦悩—国民国家・紛争	
	第5回	ここで暮らしたい—東南アジアの居住権	
	第6回	映画からみえる生き方の多様性	
	第7回	タイの田舎暮らしの今	
	第8回	ラオス・食べられる森	
	第9回	カンボジア・森と湖とひとびとの暮らし	
	第10回	ベトナムの暮らしと日本の援助	
	第11回	最後のフロンティア？—ミャンマー（ビルマ）と日本	
	第12回	大河メコンと流域開発・日本の関わり	
	第13回	日本の中の東南アジア（1）—木材・パーム油	
	第14回	日本の中の東南アジア（2）—新しい付き合い方を模索して	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	配布したプリントを読んで復習し、次の授業に備えること。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	プリントの中で随時紹介する。		
評価方法	授業感想文:40% レポート:60%		

アフリカの文化と社会		後期 2 単位	1・2年
現代アフリカの多様な人々の暮らしと文化		椎野 若菜 (しいの わかな)	
授業の到達目標 及びテーマ	アフリカの特徴的な自然環境、人間集団、社会、文化、経済活動、国民国家群の様相を、歴史的変遷とともに現代的な社会問題に至るまで幅広く知識を蓄積。いま、アフリカで何がおこっているのか。アフリカとはどのような土地か。どのような人々が暮らしているのか。人々の視点からみて、世界情勢との関係を双方から捉えられるようになることが目標。		
授業の概要	アフリカ大陸が、西洋列強による植民地化から脱するのは1960年代。その「アフリカの年」から約半世紀がたった現在、またアフリカは急速に変化する新たな時代に入っている。本講義では、人類学視点から、多様なアフリカ人の社会と文化とその変化を具体的事例から映像を交え学ぶ。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	狩猟採集民 ブッシュマンの食べ物	
	第3回	狩猟採集民 森の暮らし	
	第4回	農牧漁撈民ルオの民族誌：ジェンダーの視点から	
	第5回	牧畜民 バンナの民族誌、通過儀礼（男子）	
	第6回	通過儀礼（女子）	
	第7回	アフリカの結婚の多様性	
	第8回	牧畜民 トウルカナの結婚	
	第9回	一夫多妻の運営の方法	
	第10回	寡婦の暮らし	
	第11回	ルオにおける子育て	
	第12回	アフリカの植民地期と今	
	第13回	シングルをはじく村、うけいれる都市ナイロビ	
	第14回	都市：ナイロビ・スラムと開発の問題	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業の始まりに、前回のレスポンスペーパーの優れた記述、質問をとりあげる。採用されるように毎回の記述を努力すること。また、前回の復習の議論についていけるように個々人で授業の概要をまとめておくこと。		
テキスト	『文化人類学のレッスン 増補版 フィールドからの出発』奥野克巳・花淵馨也共編、学陽書房 『アフリカ社会を学ぶ人のために』松田素二編、世界思想社、2014年		
参考文献	『FENICS100万人のフィールドワーカーシリーズ1巻 フィールドに入る』椎野若菜・白石壮一郎編、古今書院。 『FENICS100万人のフィールドワーカーシリーズ11巻 衣食住からの発見』佐藤靖明・村尾るみこ編、古今書院。 『「シングル」で生きる—人類学者のフィールドから』椎野若菜編、御茶の水書房。ほか授業時に提示。		
評価方法	レスポンスペーパー：20% レポート：80%		

イスラームの文化と社会		前期 2 単位	1・2年
イスラームの文化と社会：ムスリム社会の女性をとりまく環境、地位に注目して		椎野 若菜（しいの わかな）	
授業の到達目標 及びテーマ	2010年末にチュニジアを筆頭に始まった「アラブの春」。その後も中東、アフリカにおけるイスラームの動きが国際ニュースを賑わせている。その社会的背景や、時事の流れをおえるようにする。またイスラームの人々に起きている変化とは何か、当該文化と社会の歴史的文化的背景をみながら、とくに女性の地位、境遇に注目して迫り生活者の視点からの理解を深め語れるようになることが目標。		
授業の概要	現在イスラーム社会は10億人以上の人口を抱え急成長している。2001年の9.11米国同時多発テロ事件以降、一部の原理主義者たちの活動によりイスラームの暴力性が強調され、誤解を生んでいることは周知の事実だ。本講義では、日本人にとり未だ理解しづらいイスラームの文化と社会の人々の生活について、映像を用いながらアフリカ大陸を中心にみていく。		
授業 計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	アラブの春：チュニジアの場合	
	第3回	アラブの春：エジプトの場合	
	第4回	イスラム国の台頭について	
	第5回	欧米におけるイスラーム	
	第6回	イスラームの親族家族、結婚、女性の地位（1）	
	第7回	イスラームの親族家族、結婚、女性の地位（2）	
	第8回	北アフリカの場合：チュニジアの女性たち	
	第9回	結婚生活：スーダンの場合	
	第10回	イスラームのセクシュアリティ	
	第11回	ムスリム社会の女性解放	
	第12回	イスラームにおけるファッション、ビジネス	
	第13回	イスラームにおけるシングル	
	第14回	コモロの女性：結婚・離婚とシングルの生き方	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業の始まりに、前回のレスポンスペーパーの優れた記述、質問をとりあげる。採用されるように毎回の記述を努力すること。また、前回の復習の議論についていけるように個々人で授業の概要をまとめておくこと。		
テキスト	授業時に紹介する		
参考文献	授業時に紹介する		
評価方法	レスポンスペーパー：20% レポート：80%		

ラテンアメリカの文化と社会		後期 2 単位	1・2年
ラテンアメリカについて、私たちが知らなかったこと		後藤 雄介（ごとう ゆうすけ）	
授業の到達目標 及びテーマ	高校段階までに必ずしも十分に学ばれてこなかったラテンアメリカの歴史を通じて、同地域の文化と社会に関する理解を深め、より豊かな世界認識を持てるようになることを目標とします。		
授業の概要	ラテンアメリカの歴史を、コロンブスによる「新大陸発見」から今日までトピックごとに振り返るなかで、それらがいかに現代の文化と社会の形成に影響を与えているかを、米国（アメリカ合州国）との関係、日本と比較を交えながら明らかにしていきます。		
授業計画	第1回	なぜ「ラテン」アメリカなのか—ラテンアメリカの基礎知識	
	第2回	すべては1492年に始まった—アメリカ大陸「発見」の持つ意味	
	第3回	植民地時代の「空白」—身体と魂の征服	
	第4回	ラテンアメリカ「独立」の語られ方	
	第5回	アメリカ大陸の奴隷解放「ネットワーク」	
	第6回	米西戦争の「影」のラテンアメリカ	
	第7回	2つの大戦の「狭間」のラテンアメリカ—「大衆」の登場／への応答	
	第8回	冷戦下のラテンアメリカ1—「キューバ革命」のインパクト	
	第9回	冷戦下のラテンアメリカ2—「チリの実験」から軍政へ	
	第10回	冷戦下のラテンアメリカ3—中米紛争と平和の萌芽	
	第11回	現代のラテンアメリカ1—民主化の潮流	
	第12回	現代のラテンアメリカ2—新自由主義の光と影	
	第13回	現代のラテンアメリカ3—「反米大陸」化するラテンアメリカ	
	第14回	ラテンアメリカと日本1—「日系人」からの／「日本人」への問い	
	第15回	ラテンアメリカと日本2—プレイバック・ペルー日本大使公邸占拠事件	
準備学習 (予習・復習等)	レポートの準備も兼ねて、授業各回で紹介する参考文献のなかで興味を覚えたものを自発的に読んで予習・復習するようにしましょう。		
テキスト	未定。		
参考文献	授業時に随時紹介します。		
評価方法	レポート:90% 授業へのコメント:10%		

国際関係論A		前期 2 単位	1・2年
国際関係論入門I 国際関係の歴史と国際政治学・国際関係論の基本概念		芝崎 厚士（しばさき あつし）	
授業の到達目標及びテーマ	本講義の到達目標は、（１）近代主権国家体系の成立から21世紀前半に至る国際関係の歴史の基本的な流れを理解すること（２）国際関係を分析するさまざまな理論や分析概念を、古典的なものから最新のものまで幅広く理解すること、（３）2015年現在の国際関係の動きを（１）（２）に基づいて分析する考え方を身につけること、である。		
授業の概要	グローバル社会で生きていく上で学んでおくべき、国際関係論・国際政治学の基本的な歴史と理論、考え方を初学者にわかりやすく教えます。授業はテスト形式で、（１）報道を分析するニュースウォッチ（２）小論文のリーディング（３）映像や音楽を分析するメディアウォッチで構成されます。毎回答案用紙を提出して、成績評価を行います。		
授業計画	第1回	イントロダクション：世界と自分、自分と世界の関わり	
	第2回	学問としての国際関係論・国際政治学とは何か	
	第3回	国際関係の歴史1 17世紀から19世紀まで	
	第4回	国際関係の歴史2 20世紀 2つの世界大戦と冷戦	
	第5回	映像分析1 20世紀とは何だったのか	
	第6回	国際関係の歴史3 21世紀 冷戦崩壊から現在まで	
	第7回	国際関係論の基本概念1 主権国家	
	第8回	国際関係論の基本概念2 多国籍企業・NGO	
	第9回	国際関係論の基本概念3 国際関係におけるパワー	
	第10回	映像分析2 グローバルな世界と日本のかかわりを考える	
	第11回	国際関係の理論1 リアリズムと勢力均衡	
	第12回	国際関係の理論2 リベラリズムと相互依存	
	第13回	国際関係の理論3 コンストラクティビズムと社会変化	
	第14回	映像分析3 21世紀の世界を考える	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習は不要ですが、インタラクティブで能動的な参加型の授業ですので、授業を受けたことで、自分から進んで学び取るモチベーションが高まっていきます。そこで、自分が「もっと知りたい」と思ったことを自主的に調べ、考えていくことをおすすめします。そのために必要な情報は授業内で提供します。		
テキスト	テキストは、毎回配布された教材を使用する。		
参考文献	特に指定しないが、毎回の講義に関連する参考文献をその都度指示する。		
評価方法	平常点:50% 試験:50%		

国際関係論B		後期 2 単位	1・2年
国際関係論入門I グローバル社会の現状と課題		芝崎 厚士（しばさき あつし）	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義の到達目標は、（１）21世紀前半のグローバルな社会が抱える諸問題を基礎から理解する（２）それらの問題を解決するためになされている取り組みを幅広く理解する（３）それらの問題を解決するために必要な考え方や物の見方を習得することである。		
授業の概要	前期の「国際関係論A」では基礎的な知識を学び、後期の「国際関係論B」では現在のグローバル社会で生じている環境問題、グローバル資本主義、格差、貧困、援助、子どもや女性の人権、紛争といった諸問題を取りあげます。ニュースウォッチ、リーディング、メディアウォッチを組み合わせたテスト形式で行い、多様なメディア・リテラシーを養います。		
授業計画	第1回	ガイダンス：君たちはどういう世界に生きているか	
	第2回	グローバリゼーションとは何か	
	第3回	国際関係からグローバル関係へ	
	第4回	グローバル資本主義	
	第5回	映像分析1：グローバル経済の功罪	
	第6回	地球環境問題	
	第7回	子ども・女性と人権	
	第8回	紛争とナショナリズム	
	第9回	映像分析2：紛争の中の弱者達	
	第10回	紛争解決と平和構築	
	第11回	貧困と開発	
	第12回	グローバルな安全保障	
	第13回	映像分析3：マルチチユードの挑戦	
	第14回	グローバル市民社会	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習は不要ですか、インタラクティブで能動的な参加型の授業です。授業を受けたことで、自分から進んで学び取るモチベーションが高まっていきます。そこで、自分か「もっと知りたい」と思ったことを自主的に調べ、考えていくことをおすすめします。そのために必要な情報は授業内で提供します。		
テキスト	テキストは、毎回配布された教材を使用する。		
参考文献	特に指定しないが、毎回の講義に関連する参考文献をその都度指示する。		
評価方法	平常点:50% 試験:50%		

国際協力		前期 2 単位	1・2年
国際協力と民衆協力へ協力のありかたを考える～		長瀬 理英 (ながせ りえい)	
授業の到達目標 及びテーマ	グローバル化が進む中、一国では解決できない経済、社会および環境問題が生じており、様々なアクター、すなわち政府や国際機関だけでなく、民間企業や非政府（営利）組織による協力が広がっている現状について理解する。貧困への取り組みに関し、協力する側がどのようなアプローチをとっているか、なぜ異なるアプローチをとるのが分かる。具体的な協力の事例を検討することで、各々のアプローチの特徴、有効性および課題について考えることができる。		
授業の概要	<p>○様々な問題が凝縮されたテキスト（映像）から「貧困とは何か」について考える。</p> <p>○貧困に対する様々なアプローチを紹介し、貧困に対する考え方の違いを示すとともに、具体的な事例から有効性と課題について理解を深める。</p> <p>○視聴覚資料や現実の問題に直面する現地の一とひとの視点を通じて、国際協力をより身近なものとして理解するとともに、どのようなあり方が望ましいか考える。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション：授業の進め方とねらい／「貧困とは何か」(1)：グローバル化とアフリカ・ヴィクトリア湖周辺住民の生活－輸出産業と環境・社会	
	第2回	「貧困とは何か」(2)：グローバル化とアフリカ・ヴィクトリア湖周辺住民の生活－漁民、ジェンダー、HIV/エイズ、ストリートチルドレン	
	第3回	所得アプローチの視点と取り組み(1)：「貧困の罌」とミレニアム・ビレッジ・プロジェクト	
	第4回	所得アプローチの視点と取り組み(2)：マイクロファイナンスとソーシャルビジネス	
	第5回	所得アプローチの視点と取り組み(3)：マイクロファイナンスと非営利組織（NPO）	
	第6回	ケイパビリティ・アプローチの視点と取り組み(1)：貧困に関する新しい考え方とそれにもとづく「人間開発」	
	第7回	ケイパビリティ・アプローチの視点と取り組み(2)：「人間の安全保障」および日本政府の取り組み	
	第8回	国連ミレニアム開発目標（MDGs）：2015年までの開発目標とパートナーシップ	
	第9回	開発協力の実際(1)：メコン河流域住民の生活	
	第10回	開発協力の実際(2)：大メコン圏(GMS)地域経済協力プログラム	
	第11回	開発協力の実際(3)：メコン河流域開発と日本の関わり	
	第12回	開発協力の実際(4)：さまざまな住民の視点に立った開発の評価	
	第13回	非営利組織による企業へのアドボカシー：企業の社会的責任（CSR）	
	第14回	非営利組織と企業との競合・協働：フェアトレード	
	第15回	非営利組織と社会運動：世界社会フォーラム（WSF）	
準備学習 (予習・復習等)	配布したプリントを読んで復習し、次の授業に備えること。		
テキスト	毎回プリントを配布		
参考文献	授業時に提示		
評価方法	平常点:30% 期末レポート:70%		

文化人類学A		前期 2 単位	1・2年
ツーリズム文化／社会論		土井 清美（どい きよみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	ツーリズム（旅・観光・巡礼）について①実用的②社会科学的③哲学的な視点から学ぶ。また、これらをふまえ、理解した内容をレポートの適切な書き方に即して説得的にまとめる方法を学ぶ。		
授業の概要	文化人類学の関心領域は、異文化に詳しくなることだけではありません。扱うトピックは多彩ですが、できるだけ具体的かつ包括的に、自分のものの見方を豊かにすることを目指す学問です。そのことを念頭におきつつ、この授業では、ツーリズムを主な題材として、事例や関連知識、ものごとの背景の読み解き方、思考の深め方を学びます。授業中にグループまたは各自で発表してもらう機会を設けます。		
授業 計画	第1回	イントロダクション ——文化人類学とは？	
	第2回	現代観光の構造	
	第3回	観光という商品の作られ方	
	第4回	ユネスコの世界遺産 ——その理念と実際	
	第5回	観光イメージと観光写真	
	第6回	「聖地巡礼ツーリズム」概説	
	第7回	レポートの書き方 ——ツーリズムの事例を素材に（1）レポートの種類と議論の組み立て方	
	第8回	レポートの書き方 ——ツーリズムの事例を素材に（2）論証型レポートの場合	
	第9回	レポートの書き方 ——ツーリズムの事例を素材に（3）表現のコツと引用の作法	
	第10回	世界の巡礼ツーリズム（1）スペインの事例	
	第11回	世界の巡礼ツーリズム（2）スペインの事例	
	第12回	労働と余暇	
	第13回	観光による地域活性	
	第14回	「居場所がない／ある」とはどういうことか	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	自分の発表の回に備えて、教科書を読み、ウェブサイトなどで関連情報を検索し、理解した内容をメモして整理しておくこと。授業で扱った教科書の内容について、授業後に目を通しておくこと。		
テキスト	星野英紀・山中弘・岡本亮輔編（2014）『聖地巡礼ツーリズム』弘文堂		
参考文献	授業の中で紹介します。		
評価方法	口頭発表:30% リアクションペーパー:20% レポート:50%		

文化人類学B		後期 2 単位	1・2年
生の多様なあり方を知る		土井 清美 (どい きよみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○幅広い題材を用いて、文化人類学に特徴的な考え方、とりわけ「ものごとを丁寧に見ること・考えること」を学ぶ</p> <p>○文化人類学で扱う多彩なトピックのなかでも、(ストーリーや登場人物の心理を追うだけではない)映像理解の仕方 や、現代的トピックをより自由な視点から具体的に理解する方法を学ぶ。</p> <p>○当講座内容に関連したレポートの書き方(作法、議論、構成の仕方)を身につける</p>		
授業の概要	<p>扱うトピックは各回ごとに異なるが、具体的な内容から少しずつ抽象度の高い内容へと移行しながら授業をすすめる。 文化人類学においては「客観的にみて正しい／間違った答え」というものはない。なので、授業の参加者からの積極的 な発言を期待する。ペアワークを取り入れたり課題を課すことがある。</p>		
授業 計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	フィールドワークとは(1)調査の仕方と目的	
	第3回	フィールドワークとは(2)対話することと参加すること	
	第4回	民族誌的映像の見方(1)極北における生	
	第5回	民族誌的映像の見方(2)周産期医療	
	第6回	民族誌的映像の見方(3)ジプシーという暮らし方	
	第7回	民族誌的映像の見方(4)老人の生きる時空	
	第8回	民族誌的映像の見方(5)宗教的生活と信仰をもたない生活	
	第9回	ドメスティック・バイオレンス——空間・関係論的な見方	
	第10回	リスク——責任と個人化	
	第11回	場所——ランドマーク・進路・手掛かり	
	第12回	男と女と——より複雑で多様なジェンダー像	
	第13回	親族関係・大人・子ども——西アフリカを事例に	
	第14回	新しい巡礼のスタイル	
	第15回	まとめ—文化人類学的な見方とは	
準備学習 (予習・復習等)	<p>次回の授業に向けて予め読み物を配布することがあるので、一度読み通し、内容をまとめておくこと。</p>		
テキスト	<p>特に定めない。必要に応じてプリントを配布する。</p>		
参考文献	<p>授業のなかで紹介する。</p>		
評価方法	<p>授業参加貢献度:20% リアクションペーパーと提出物:20% レポート:60%</p>		

比較文化論A		前期 2 単位	1・2年
自然と芸術		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「自然と芸術」をめぐる思想を歴史的背景を考慮しつつ理解する。 「自然に学ぶ」ということの多様なあり方を考える。 ヨーロッパと中国・日本の芸術思想を比較する。</p>		
授業の概要	<p>講義を中心とする。講義を踏まえて、考えたことをコメントとして提出する。 「芸術と自然」に関する文章を読む。 画像やDVD、図書館の画集などを実際に見る。</p>		
授業計画	第1回	「自然と芸術」について	
	第2回	美術のはじまり～先史時代の美術	
	第3回	神話における自然と芸術	
	第4回	ギリシアの古代哲学における自然	
	第5回	キリスト教の自然観と芸術	
	第6回	中国の自然哲学と山水画	
	第7回	レオナルド・ダ・ヴィンチにおける自然と芸術	
	第8回	近世オランダにおける自然と芸術～DVD「オランダの光」	
	第9回	ロマン主義自然哲学と芸術	
	第10回	ロマン主義の絵画	
	第11回	ゴッホと日本	
	第12回	パウル・クレーにおける自然と芸術～クレーの日記	
	第13回	クレーにおける自然と芸術～作品	
	第14回	抽象絵画と自然	
	第15回	現代美術における自然	
準備学習 (予習・復習等)	次週に読むテキストを配り、各人それについてのコメントを書いてくることを課題とする。		
テキスト	文章を配布する。 画像、DVDを教室で鑑賞する。		
参考文献	図書館の蔵書のなかから紹介する。		
評価方法	コメント:40% レポート(複数回):30% 試験:30%		

比較文化論B		後期 2 単位	1・2年
ヨーロッパ文化と日本文化		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	来日したヨーロッパ人の眼に映った日本文化を考察する。 ヨーロッパ文化と日本文化の出会いの時代背景を理解する。 現代文明と伝統的な日本文化・ヨーロッパ文化を比較する。 日本人のヨーロッパ理解について考える。 日本文化の魅力や特徴を発見する。		
授業の概要	時代背景や文化の背景を講義する。 来日ヨーロッパ人の日本紀行・旅行記や手紙を直接読み、理解する。 ほぼ毎回、講義を聴いて考えたことについてコメントを提出する。		
授業計画	第1回	ヨーロッパ文化と日本文化の比較について	
	第2回	マルコ・ポーロと「東方見聞録」	
	第3回	大航海時代～コロンブスとラス・カサス	
	第4回	ロヨラとイエズス会	
	第5回	フランシスコ・ザビエルと日本	
	第6回	フロイスの「日欧文化比較」	
	第7回	さまざまなイエズス会士と日本	
	第8回	「南蛮文化」	
	第9回	キリスト教と日本人～キリシタン	
	第10回	江戸時代とヨーロッパ～ケンペルの日本論	
	第11回	ツェンペリーの日本旅行記	
	第12回	新井白石と「世界」	
	第13回	蘭学について～「蘭学事始」を読む	
	第14回	雨森芳洲と朝鮮通信使	
	第15回	幕末明治の来日欧米人の見た日本	
準備学習 (予習・復習等)	各人が配布テキストについてのコメントを書くことを準備学習とする。		
テキスト	授業時間内に配布する。		
参考文献	図書館蔵書のなかから紹介する。		
評価方法	授業コメント:40% レポート(複数回):30% 試験:30%		

比較芸術論		前期 2 単位	1・2年
美術と文学		矢野 陽子 (やの ようこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	古くから絵画と文学は比較して論じられてきたが、美術作品には聖書や神話などの文学作品に主題をとったものが数多くある。どのような文学作品が参照され、美術作品としてどのように造形化されたのを考察することによって、美術と文学の類似と相違を理解する。重要な主題についてはその知識を習得し、多くの作品を見ることを通じて美術作品の見方を学ぶ。		
授業の概要	文学に主題をとった美術作品を画像で見ながら、ことばで語られた内容がどのような形をとって表現されているかを考察する。物語をイメージによって語ることの限界と可能性を考える。また同じひとつの主題が、異なる時代や地域で取り上げられた場合、その表現の仕方に違いがあるのかどうかも検証する。		
授業計画	第1回	イントロダクション：講義の概要、参考文献の紹介	
	第2回	聖書と美術(1) 天地創造の物語とモーセ	
	第3回	聖書と美術(2) 旧約聖書の物語	
	第4回	聖書と美術(3) キリストの誕生と布教活動	
	第5回	聖書と美術(4) キリストの受難と復活	
	第6回	マリアと美術	
	第7回	聖人たちと美術	
	第8回	神話と美術(1) ユピテルの物語	
	第9回	神話と美術(2) ウェヌスの物語	
	第10回	神話と美術(3) アポロの物語	
	第11回	神話と美術(4) ディアナの物語	
	第12回	神話と美術(5) その他の神々	
	第13回	日本の美術(1) 絵巻について	
	第14回	日本の美術(2) 絵巻の時間表現	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	次回の授業に関する小課題を出すので、授業時に提出すること。		
テキスト	教科書は特に使用しない。		
参考文献	講義のなかで紹介する。		
評価方法	授業への取り組み:40% レポート:60%		

文化交流		後期 2 単位	1・2年
旅と芸術		金沢 文緒 (かなざわ ふみお)	
授業の到達目標 及びテーマ	ヨーロッパの芸術の展開にもたらした旅の意義について考える。本講義では、17～19世紀における旅を取りあげ、主に美術の伝播の実態を明らかにする。芸術の中心地であるイタリア、フランスとの関係に注目し、中心地への旅と中心地からの旅、という二つの移動ベクトルを設定することで、この時代における各国の文化交流のあり方を見ていく。		
授業の概要	授業は講義を中心に進め、各種視覚教材を用いて解説を行う。本授業において「旅」として扱う人的・物的移動について理解を深めたうえで、旅から創作上の影響を受けた画家や、旅に関わる芸術現象を具体的に取り上げ、その社会背景や時間的推移を論じていく。また、展覧会見学や学期末のグループ発表の機会も予定している。		
授業 計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	クロード・ロラン	
	第3回	ニコラ・ブッサン	
	第4回	ベラスケス	
	第5回	ヴァン・ダイク	
	第6回	グランド・ツアー①：ヴェネツィアと祝祭	
	第7回	グランド・ツアー②：18世紀ヴェネツィア絵画	
	第8回	グランド・ツアー③：ローマと風景	
	第9回	グランド・ツアー④：ローマと新古典主義	
	第10回	グランド・ツアー⑤：ナポリと自然	
	第11回	辺境の地への旅：ドイツ、オーストリア、ポーランド	
	第12回	19世紀：新たな旅のあり方	
	第13回	グループ発表会	
	第14回	美術館見学（展覧会の会期に応じて日程を決定）	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習の必要はないが、講義内容の理解を深めるために、毎回講義の最後に感想の提出を課す。この作業が学期末の発表及びレポート作成につながることを期待する。		
テキスト	特になし（適宜プリントを配布）		
参考文献	授業の中で随時紹介		
評価方法	平常点:40% グループ発表:20% レポート:40%		

美術史 A		前期 2 単位	1・2年
西洋美術史概説 I : 古典古代からルネサンスまで		金沢 文緒 (かなざわ ふみお)	
授業の到達目標 及びテーマ	ヨーロッパを中心とした西洋美術の流れを、古代ギリシア・ローマ時代からルネサンスにかけて概観する。絵画、彫刻、建築など、ヨーロッパの美術の歴史的展開に重要な役割を果たした様々な作品を取りあげ、個々の特徴を把握すると同時に、それらの関連性を検討することで、現代に至る美術の流れを有機的に理解することを目指す。		
授業の概要	本授業は講義を中心に進める。毎回スライドを中心とする各種視覚教材を通して多数の作品を鑑賞し、当時の時代背景に個々の作品を位置づけることを学ぶ。また、展覧会見学の機会も予定している。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	古代ギリシア美術	
	第3回	古代ローマ美術	
	第4回	初期キリスト教美術、ビザンティン美術	
	第5回	ロマネスク美術、ゴシック美術	
	第6回	ジョットの革新：14世紀イタリア絵画	
	第7回	初期ルネサンス美術	
	第8回	レオナルド・ダ・ヴィンチ	
	第9回	ラファエッロ	
	第10回	ミケランジェロ	
	第11回	ファン・エイクと北方美術	
	第12回	ティツィアーノとヴェネツィア美術	
	第13回	マニエリスム	
	第14回	美術館見学（展覧会の会期に応じて日程を決定）	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習の必要はないが、講義内容の理解を深めるために、毎回講義の最後に感想の提出を課す。また、復習として、講義で取りあげた作品を参考図版によって確認し、講義で得た文字情報を視覚情報と統合する作業を行っておくことが望ましい。		
テキスト	特になし		
参考文献	授業の中で適宜紹介		
評価方法	平常点:40% レポート:60%		

美術史B		後期 2 単位	1・2年
西洋美術史概説Ⅱ：バロックから印象派へ		金沢 文緒（かなざわ ふみお）	
授業の到達目標 及びテーマ	ヨーロッパを中心とした西洋美術の流れを、バロックから印象派まで概観する。絵画、彫刻、建築など、ヨーロッパの美術の歴史的展開に重要な役割を果たした様々な作品を取りあげ、個々の特徴を把握すると同時に、それらの関連性を検討することで、現代に至る美術の流れを有機的に理解することを目指す。		
授業の概要	本授業は講義を中心に進める。対象とする時代としては、前期の授業「西洋美術史概説Ⅰ：古典古代からルネサンスまで」の続きとなるが、後期の授業を単独で受講することも可能である。毎回スライドを中心とする各種視覚教材を通して多数の作品を鑑賞し、当時の時代背景に個々の作品を位置づけることを学ぶ。また、展覧会見学の機会も予定している。		
授業 計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	バロック美術Ⅰ	
	第3回	バロック美術Ⅱ	
	第4回	ロココ美術	
	第5回	新古典主義：ダヴィッドとアングル	
	第6回	ドラクロワとロマン主義	
	第7回	ターナーとフリードリヒ	
	第8回	クールベとマネ	
	第9回	第1回印象派展	
	第10回	モネとルノワール	
	第11回	象徴主義	
	第12回	ゴッホとゴーギャン	
	第13回	セザンヌ	
	第14回	美術館見学（展覧会の会期に応じて日程を設定）	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習の必要はないが、講義内容の理解を深めるために、毎回講義の最後に感想の提出を課す。また、復習として、講義で取りあげた作品を参考図版によって確認し、講義で得た文字情報を視覚情報と統合する作業を行っておくことが望ましい。		
テキスト	特になし		
参考文献	授業の中で適宜紹介		
評価方法	平常点:40% レポート:60%		

世界のデザイン		前期 2 単位	1・2年
デザイン史に学ぶ		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代はものが豊かにあふれており、それらは全てデザインされている。近代以降の西洋における産業の発達の中で、時代や社会の諸相を反映してきたデザインの歴史を学ぶことを通じて、現代の社会が直面している問題に関心を持ち、考える視座を得ることを目標とする。また良い作品をみて感性を磨くこと、見る目を養うことを目指す。		
授業の概要	19世紀半ばから20世紀半ばまでのヨーロッパ、アメリカ、日本を中心に、特徴のある優れた作品をスライドで見ながら、地域、時代ごとのデザインの変遷を学んでいく。また受講者が日常生活の中でデザインを意識することを目的とするアンケートや授業の内容に対するコメント提出により、コミュニケーションをはかりながら進めていきたい。		
授業計画	第1回	導入／産業革命と19世紀のイギリス：「デザイン」とは／美術と応用美術／産業革命／19世紀イギリスの美術・デザイン状況／ロンドン万国博覧会	
	第2回	ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動：モリスの活動／デザインの特徴／モリスの矛盾と功績／アーツ・アンド・クラフツ運動の特徴と影響	
	第3回	アール・ヌーヴォー1：ベルギー・ブリュッセルの新しい動き／フランス・パリ／フランス・ナンシー／アール・ヌーヴォーの特色と成果、流行と消滅／世界への広がり	
	第4回	アール・ヌーヴォー2：グラスゴー派／ユーゲント・シュティル 19世紀のメディア環境：マス・コミュニケーション社会の実現／グラフィック・メディアの成長	
	第5回	ウィーン工房：ワグナー／分離派／ウィーン工房 ドイツ工作連盟：芸術と産業の統合／連盟設立／ケルン連盟展／ペーター・ベーレンス	
	第6回	バウハウス1：創立宣言と理念／教育の特徴／第1期（予備教育を中心に）／第2期（バウハウス展）／第3期（デュッセルドルフ市立としての再出発）	
	第7回	バウハウス2：ビデオ鑑賞 デ・スティール：オランダの近代運動（モンドリアン、ドースブルフ、リートフェルト）	
	第8回	ロシア・アヴァンギャルド：革命以前のアートの動き、革命と芸術 アール・デコ：アール・デコの時代背景／アール・デコの諸相／アメリカのアール・デコ	
	第9回	コルビュジェとインターナショナルスタイル アメリカの近代化：近代化の背景／サリヴァン／ライト	
	第10回	アメリカのインダストリアルデザイン：アメリカのマスプロダクション／インダストリアルデザイナーの活躍／アメリカのインダストリアルデザインの特徴	
	第11回	ミッドセンチュリー：コンテンポラリースタイル／ミッドセンチュリーのデザイナー／カリフォルニア・モダニズム グッドデザイン運動（ニューヨーク近代美術館、ウルム造形大学、他）	
	第12回	イタリアのデザイン：ミラノトリエンナーレ／オリベッティ社のデザイン／イタリア近代デザイン発展の背景 北欧のデザイン：スウェーデン／デンマーク／フィンランド／北欧デザインの特徴	
	第13回	日本のデザイン（明治～昭和初期）：工芸の歴史／明治政府の美術振興策／民藝運動／国家富強のための産業政策 日本のデザイン（戦後の復興）：アメリカを目標に／インダストリアルデザイン誕生・確立／日本デザインの自立	
	第14回	日本のデザイン（高度成長期）：日本のモータリゼーション／家庭の電化／クラフト運動／Gマーク／世界市場における日本製品の成功／グラフィックデザイン	
	第15回	世界の現代デザインの諸相と日本のデザイン：60年代～90年代 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	デザインに関するアンケート、授業に対するコメント提出を中間で3～4回課すので、次の週までに書いて提出すること。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布		
参考文献	授業中に適宜紹介		
評価方法	平常点:20% 提出物:30% 定期試験:50%		

世界の宗教		前期 2 単位	1・2年
現代の宗教・民族問題の諸相		杉本 隆司（すぎもと たかし）	
授業の到達目標 及びテーマ	現在のニュースで話題になることの多い世界の宗教・民族問題の基本的な歴史的・文化的背景について授業する。主に宗教をめぐるヨーロッパの過去と現在を扱うが、グローバル化が進む中、今後は日本でも問題関心が高まるものと予想される。世界にはどのような問題があるのか、具体的事例や歴史を通じてその諸要因を理解し、私たちの問題として共有することを目的とする。		
授業の概要	21世紀に入り西欧とイスラムに象徴されるように宗教的価値の摩擦に注目が集まり、政治的にも世俗化・政教分離の問題はなお解決の努力が続いている。だが純粋に信仰上の問題というより、その背景には人種・民族・政治等の問題も控えている。授業の前半では現代の問題を考える上で欠かせない近代社会や宗教・民族の基本理論を学ぶ。後半では映像も交え、具体的な地域や歴史を取り上げて多文化主義等の視点から西欧が抱える諸問題を検討する。		
授業 計画	第1回	イントロダクション：授業の概要と進め方	
	第2回	現代世界の宗教問題：アメリカのイスラム教徒を例に	
	第3回	国民国家と宗教：近代は宗教が民族や国家と結びついた	
	第4回	人種概念と宗教：近代は宗教の違いが人種と結びついた	
	第5回	近代社会と宗教：世俗化論は宗教復興を説明できるか	
	第6回	近代科学と宗教：宗教学は神学からどのように成立したか	
	第7回	世界宗教と民族宗教（1）：世界三大宗教とユダヤ教	
	第8回	世界宗教と民族宗教（2）：ユダヤ教からキリスト教へ	
	第9回	宗教と地域（キリスト教1）：キリスト教世界の歴史	
	第10回	宗教と地域（キリスト教2）：旧体制からフランス革命へ	
	第11回	宗教と地域（キリスト教3）：ライシテ政策と多文化主義	
	第12回	宗教と地域（イスラム教1）：イスラム世界の歴史	
	第13回	宗教と地域（イスラム教2）：神の法と政教分離	
	第14回	宗教と地域（イスラム教3）：西欧とイスラムの現在	
	第15回	まとめー私たちのなかの異文化（アイヌを例に）	
準備学習 (予習・復習等)	前の授業で配布したプリントや新聞記事などに目を通しておくことが望ましい。中間の小テストや期末試験前に予習のためのキーワードをあらかじめ出します。		
テキスト	特に定めない。毎回プリントを配布する。		
参考文献	内藤正典『ヨーロッパとイスラーム：共生は可能か』岩波新書／梶田孝道編『新・国際社会学』名古屋大学出版／伊達聖伸『ライシテ、道徳、宗教学』勁草書房		
評価方法	中間小テスト:30% 期末試験:70%		

学問入門演習	前期 2 単位	1年
大学での学び方を習得しよう		
<p>【担当教員】 阿久津 光子（あくつ みつこ）、梅垣 千尋（うめがき ちひろ）、奥村 健一（おくむら けんいち）、黒岩 裕（くろいわ ゆたか）、後藤 千織（ごとう ちおり）、齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）、高野 嘉明（たかの よしあき）、武田 美亜（たけだ みあ）、趙 慶姫（ちょう きょんひ）、中井 章子（なかい あやこ）、松村 伸一（まつむら しんいち）、宮内 華代子（みやうち かよこ）、山田 美穂子（やまだ みほこ）、湯本 久美子（ゆもと くみこ）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 テーマ：大学での学び方を習得しよう 大学での学びは、学生自らの主体的な関心と意欲が基本になっています。この学びを実りあるものにするためには、一定の約束事やスキルを身につける必要があります。この演習では、大学での「学び方」の初歩を修得し、大学生生活のスタートを上手に切っただけを期待しています。具体的には、次のような力の修得をめざします。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①大学での学びの特徴を理解する。 ②基礎的な学習スキルを身につける。 ③基礎的な情報検索・文献探索能力を身につける。 ④基礎的な文章読解力を身につける。 ⑤基礎的な口頭発表能力と討論の仕方を身につける。 ⑥基礎的な文章作成能力を身につける。 <p>【授業の概要】 各グループ十数名の少人数による発表や討論が中心になります。授業の進め方は担当教員によって異なりますが、例えば、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○互いの関心を発表し合い、大学で何を学びたいか交流する、 ○共通のテキストを読み、レジュメを作り、発表し、討論する、 ○テーマを決め、関連する文献や資料を探し、まとめて発表する、 ○テーマにもとづき作品を完成させ、互いに批評し合う、 ○身体活動やロールプレイ、ワークショップなどを通じ、多様な自己表現を試みたり体験的認識を深める、 ○レポートを作成することを通じて、わかりやすく自分の考えを他人に伝えられるようにする、 <p>などを組み合わせたものとなるでしょう。 どのような形であれ、自ら問いを発し、自分と他人の関心や意見を突き合わせることから、物事の新しい見方が開かれてきます。</p> <p>【授業計画】 グループごとに授業計画は異なります。</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 演習では事前学習が決定的に重要です。とりわけ指定された文献やテーマに沿って十分な下調べをしておく必要があります。報告者はもちろんだが、報告に当たっていない回であっても、十分な事前学習なしに内容を理解することはできないと心得てください。</p> <p>【テキスト】 グループごとにテキストは異なります。</p> <p>【参考文献】 各教員より適宜指示。</p> <p>【評価方法】 平常点50%、提出課題50%</p>		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
Peace Studies		オクマ (OKUMA, G. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	This is an English-only course. This will be an overview of peace education which will touch upon human rights, nonviolence, environmental ethics and gender equality. You will read texts and participate in activities pertaining to peace studies. You will also research and write about one of the topics covered.		
授業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. To think and talk about peace. 2. To research and write about the topic which moved your heart. 		
授業計画	第1回	Course Introduction	
	第2回	What is Peace?	
	第3回	Human Rights I	
	第4回	Human Rights II	
	第5回	Writing exercise	
	第6回	War & Peace	
	第7回	Democracy	
	第8回	Writing exercise	
	第9回	Gender Equality I	
	第10回	Gender Equality II	
	第11回	Writing Exercise	
	第12回	Environmental Ethics I	
	第13回	Environmental Ethics II	
	第14回	Writing Exercise	
	第15回	Oral Presentations	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to keep up with the readings and come to class prepared.		
テキスト	Handouts will be provided by the instructor		
参考文献	Information will be given in class		
評価方法	Attendance/Participation :20% Final Report:50% Oral Presentation:30%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
Welcome to the Anthropocene		フィリップス (PHILLIPS, J. R.)	
授業の到達目標 及びテーマ	For the first time in the history of our planet, a single species is creating effects that are planet-wide and may result in the mass extinction of life. That species is us; for that reason, the present era is coming to be known as the Anthropocene. This course will explore the evidence behind this idea. By the end of this course, students will be able to use research and critical thinking skills to investigate, discuss, present and report on the implications thereof.		
授業の概要	The lecturer will lead a seminar style discussion, and students are expected to actively participate in this discussion. The course will be conducted mainly in English.		
授業計画	第1回	Introduction to the class: how this class will be run, what are the teacher's responsibilities and what are the students' responsibilities.	
	第2回	The Fermi Paradox	
	第3回	Climate Change - The Evidence	
	第4回	Climate Change - Controversy	
	第5回	Climate Change - Implications - Quiz 1	
	第6回	Population Demographics - The Facts	
	第7回	Population Demographics - The North-South Problem	
	第8回	Population Demographics and Japan - Quiz 2	
	第9回	Energy - A Historical Overview - Peak Oil	
	第10回	Energy - Tragedy of the Commons	
	第11回	Energy - Sustainability - Quiz 3	
	第12回	What Can Be Done?	
	第13回	Making a Presentation	
	第14回	Oral Presentations 1	
	第15回	Oral Presentations 2	
準備学習 (予習・復習等)	The lecturer will provide handouts and online links as a starting point for research each week. Students will explore those handouts and links in detail in order to participate in a discussion in the next class.		
テキスト	Handouts and online links		
参考文献	Libraries and the Internet		
評価方法	Class Participation:25% Quizzes:25% Oral Presentation:25% Written Presentation:25%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
「世界を知る力」を身につける		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○外国の文化や社会について学ぶ意義を理解する。</p> <p>○外国との「比較」と「関係」のなかで、日本のあり方をとらえる視点を身につける。</p> <p>○国際的な視野にたつて、身近な暮らしのなかに「問題」を発見することができるようになる。</p>		
授業の概要	前半では全員でテキストを輪読し、分担箇所にかんするプレゼンテーションとディスカッションをつうじて、外国との「比較」と「関係」のなかで日本をとらえ返す方法を学ぶ。後半は、国際的な視野をもつと身近な暮らしのなかにどのような「問題」を見つけることができるのかを各自が考え、プレゼンテーションを行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション：外国の文化や社会を学ぶ意義	
	第2回	テキスト（1）時空を超える視界（1）	
	第3回	テキスト（2）時空を超える視界（2）	
	第4回	テキスト（3）相関という知（1）	
	第5回	テキスト（4）相関という知（2）	
	第6回	テキスト（5）相関という知（3）	
	第7回	テキスト（6）世界潮流のなかの日本（1）	
	第8回	テキスト（7）世界潮流のなかの日本（2）	
	第9回	テキスト（8）世界を知る力	
	第10回	プレゼンテーションにむけた個別指導	
	第11回	問題発見プレゼンテーション（1）グループ1	
	第12回	問題発見プレゼンテーション（2）グループ2	
	第13回	問題発見プレゼンテーション（3）グループ3	
	第14回	問題発見プレゼンテーション（4）グループ4	
	第15回	問題発見プレゼンテーション（5）グループ5	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○前半のテキストの輪読では、全員がその回で読むテキストの章全体をあらかじめよく読んでくること。また、各自が合計2回、担当するテキストの箇所にかんするレジюмеを作成し発表を行う。それとは別に、書評レポートを2回執筆してもらう。</p> <p>○後半の問題発見プレゼンテーションでは、教員との個別相談をもとに、各自がみずからの発見した問題についてのプレゼンテーションの準備を授業時間外に進めていく。このプレゼンテーションをもとに、最終レポートをまとめてもらう。</p>		
テキスト	寺島実郎『世界を知る力』（PHP新書、2009年）		
参考文献	必要に応じて授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% 書評レポート（2本）:20% 最終レポート:20%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
アメリカ研究入門		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標及びテーマ	1) アメリカの光と影について学び、アメリカをより正確に理解すること。 2) アメリカ関係の新聞記事や論文を読んで、内容を正確に理解する力と批判的に考える力を養うこと。 3) 自分の考えや調べたことを分かりやすく発表する力を養うこと。		
授業の概要	学生は、アメリカに関する新聞記事や論文を読み、その内容、自分の見方や疑問、調べたことなどを発表する。教員はアメリカに関する以下のテーマについて解説し、学生の発表に関する補足説明を行う。授業で取り上げるテーマに関連するビデオも紹介する。今年度は以下のテーマを取り上げる予定だが、新聞記事の紹介や論文レポートの際は他のテーマを取り上げても構わない。		
授業計画	第1回	イントロダクション：アメリカの光と影	
	第2回	解説1 多民族社会アメリカ	
	第3回	ビデオとディスカッション1	
	第4回	新聞記事の紹介A アメリカの民族問題	
	第5回	新聞記事の紹介B その他の問題	
	第6回	解説2 マイノリティと差別	
	第7回	ビデオとディスカッション2	
	第8回	紀要論文のレポートA アフリカ系アメリカ人	
	第9回	紀要論文のレポートB 日系アメリカ人、その他	
	第10回	解説3 アメリカの社会問題	
	第11回	ビデオとディスカッション3	
	第12回	紀要論文のレポートC アメリカの教育	
	第13回	紀要論文のレポートD アメリカの経済	
	第14回	紀要論文のレポートE アメリカの言語問題	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	発表担当者は、発表する記事や論文を精読し、その内容に関連するリサーチを行うこと。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	授業中適宜紹介する。		
評価方法	授業参加:20% 新聞記事の発表:20% 論文レポート ①:30% 論文レポート ②:30%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
日本社会のなかの「アメリカ」		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>☆「平和」をキーワードに、アメリカと日本の外交を考える。 ☆ディズニーランドに埋め込まれたアメリカの自己イメージを理解する。また、日本におけるディズニーランドの受容から、現代の<帝国>アメリカの性質を考える。</p>		
授業の概要	<p>「平和」に関連する9つの視点から、アメリカと日本の外交政策の問題点とこれからを考える。最後の2回はディズニーランドを題材に、アメリカ史と<帝国>アメリカの性質を学ぶ。全員でテキストを輪読し、発表者はテキストの議論を大まかにまとめ、論点や疑問点をあげる。参加者はディスカッションに積極的に貢献すること。</p>		
授業計画	第1回	はじめに／個人面談	
	第2回	個人面談	
	第3回	新しい戦争の時代	
	第4回	国連による平和	
	第5回	平和のための法	
	第6回	人間のための平和	
	第7回	人道的介入	
	第8回	平和のためのアクター	
	第9回	フィールドワーク	
	第10回	殲滅の思想	
	第11回	絶望から和解へ	
	第12回	隣人との平和	
	第13回	ディズニーランドのアメリカ性	
	第14回	日常生活のディズニーランド化	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>☆必ずテキストを読んで、自分の意見や疑問点をまとめてくる。 ☆関心を持ったテーマを各自で調査し、授業時に共有する。</p>		
テキスト	<p>最上敏樹『いま平和とは一人権と人道をめぐる9話』（岩波新書） その他の文献は授業時に指示する。</p>		
参考文献	<p>授業中適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% 期末レポート:40%</p>		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
原書で触れる米文学の魅力：チカーナ（メキシコ系アメリカ人女性）の少女が語る「自分探し」の物語		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標及びテーマ	①シカゴのスラム街で思春期を生きるラティーナ少女の成長物語を通じ、人種民族、貧富の差、性差等の格差に満ちた多文化社会アメリカの実情に触れながら、差別・抑圧のメカニズムを理解する。②引用や要約のスキルを身につけることで、自分の考えを段落構成に基づく論理的な文章で伝えたり、実のある対話ができるコミュニケーション力を身につける。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・メールリポート講評、キーワード説明、レポートやプレゼンテーションの指導 ・チカーノ・シネマ倶楽部：指定映画からグループごとに作品を一つ選びプレゼン ・作者朗読AV資料の鑑賞とレジュメに基づくリポーター中心のテキスト読解（スタディクイズ含む）&自由討議 		
授業計画	第1回	イントロ～1章("The House on Mango Street")	
	第2回	2章("Hairs")、3章("Boys & Girls")、4章("My Name")	
	第3回	5章("Cathy Queen of Cats")、6章("Our Good Day")	
	第4回	11章("Marin")、12章("Those Who Don't")、シネマ倶楽部発表1	
	第5回	14章("Alice Who Sees Mice")、18章("A Rice Sandwich")、シネマ倶楽部発表2	
	第6回	21章("The First Job")、22章("Papa Who Wakes Up")、シネマ倶楽部発表3	
	第7回	25章("Geraldo No Last Name")、28章("Sire")、シネマ倶楽部発表4、中間レポート要項	
	第8回	29章("Four Skinny Trees")、30章("No Speak English")、シネマ倶楽部発表5、中間レポート締め切り	
	第9回	32章("Sally")、33章("Minerva Writes Poems")	
	第10回	34章("Bums in the Attic")、35章("Beautiful & Cruel")	
	第11回	36章("A Smart Cookie")、38章("The Monkey Garden")	
	第12回	39章("Red Clowns")、40章("Linoleum Roses")	
	第13回	41章("The Three Sisters")、42章("Alicia & I Talking")	
	第14回	43章("A House of My Own")、44章("Mango Says Goodbye Sometimes")	
	第15回	まとめ～期末レポート要項	
準備学習(予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習：次回読む章を精読しスタディクイズを解きつつ質問コメント準備 2. 復習：メールリポート 前回までの授業内容に関連した質問・コメント等、あるいはこちらで指定したテーマについて1パラグラフ（200～300字）で自由記述 3. リポーターはレジュメ含む発表準備 4. シネマ倶楽部 グループごとにレジュメとプレゼン準備 		
テキスト	Sandra Cisneros, <i>The House on Mango Street</i> , New York: Vintage Books, 1989		
参考文献	『マンゴー通り、ときどきさよなら』サンドラ・シスネロス（くぼたのぞみ訳）、晶文社、1996年 他随時紹介		
評価方法	中間・期末レポート:50% 担当者レポート:10% プレゼンテーション:10% メールリポート:20% 討議貢献度など平常点:10%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
効果的な英語学習法を探る		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の英語産業界・教育界に多く存在する誤った英語観・英語教育観に関して、それらのどこがどのように間違っているのか、ということについて詳細に究明し、それによって正しい効果的な英語学習法を身に付け、それを実践することができるようになることを目標とします。		
授業の概要	基本的には最初に各授業のテーマに関する資料を読み、それについてグループに分かれてディスカッションし、各グループごとに意見をまとめてプレゼンテーションする(略して「ディスプレ」)、次に教員が解説する、というやり方で授業を進めます。		
授業計画	第1回	ガイダンス(日本は英語ができない国か)	
	第2回	学校の英語教育は間違っているか(ディスプレ)	
	第3回	学校の英語教育は間違っているか(解説)	
	第4回	赤ん坊と同じやり方で英語習得が可能か(ディスプレ)	
	第5回	赤ん坊と同じやり方で英語習得が可能か(解説)	
	第6回	英語習得に文法は不要か(ディスプレ)	
	第7回	英語習得に文法は不要か(解説)	
	第8回	英語学習に発音記号は不要か(ディスプレと解説)	
	第9回	単語を知っているとはどういうことか(ディスプレ)	
	第10回	単語を知っているとはどういうことか(解説)	
	第11回	英語の読解には何語知っている必要があるか(意見発表と解説)	
	第12回	自分の語彙力をどうやって測るか(グループワーク)	
	第13回	自分の語彙力をどうやって測るか(解説)	
	第14回	最も効果的な単語の覚え方とは(ディスプレ)	
	第15回	最も効果的な単語の覚え方とは(解説)	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業で扱うテーマと考えておくべき課題を提示しますので、それについてよく考えておいて下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要に応じてプリントを配布します。		
参考文献	必要に応じて授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:30% 授業参加度:30% レポート:40%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
近世の日本とヨーロッパの比較文化論		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	来日した欧米人の日本旅行記をとおして、日本とヨーロッパの文化について比較し、考察する。 自然と文化の関係、現代文明と伝統文化の関わりについても考えることとする。		
授業の概要	渡辺京二『逝きし世の面影』を共通のテキストとして、担当者の発表を踏まえ、議論する。 要約(レジュメ)、まとめ、レポートなどの書き方をしっかり身につける。		
授業計画	第1回	日本とヨーロッパの近世と近代と現代	
	第2回	人びとの気質	
	第3回	「簡素とゆたかさ」	
	第4回	マナー	
	第5回	「雑多と充溢」	
	第6回	「労働と身体」	
	第7回	「身分と自由」	
	第8回	裸と性の問題	
	第9回	女性の位置	
	第10回	子ども	
	第11回	自然観と風景	
	第12回	動物の位置	
	第13回	信仰	
	第14回	心のあり方	
	第15回	現代の日本とかつての日本	
準備学習 (予習・復習等)	テキストを読み、あらかじめコメントを提出する。 レジュメ、記録、感想などを提出する。		
テキスト	渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー		
参考文献	図書館蔵書の中から適宜紹介する。		
評価方法	発表・議論・まとめ:50% レポート:50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
シェイクスピアに学ぶ〈学び〉の楽しみ		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	1)シェイクスピアの主要作品の内容や有名なセリフなどを知り、それが現在もしばしば引用されることに気づけるようになる。2)初期近代イギリスの言語と文化について概要を知る。3)自宅の書棚に複数回読んだシェイクスピア作品のコレクションを作る。4)翻訳やさまざまな批評の手助けを借りつつ、400年以上昔の外国で書かれた戯曲を心から楽しむ。		
授業の概要	最初に講義形式で時代背景等を説明した後は、ゼミ形式。毎回シェイクスピア作品を翻訳で一冊、発表担当者を決めて、読み進めていく。発表では、あらずじや人物関係をまとめ、有名なセリフを原文で読むほか、ビデオ鑑賞なども取り入れて作品を紹介する。発表者以外の参加者も、発表者からの問題提起に対して、積極的に発言することが求められる。		
授業計画	第1回	シェイクスピアとその時代	
	第2回	『タイタス・アンドロニカス』	
	第3回	『リチャード三世』	
	第4回	『ロミオとジュリエット』	
	第5回	『夏の夜の夢』	
	第6回	『ヴェニス商人』	
	第7回	『から騒ぎ』	
	第8回	『ヘンリー五世』	
	第9回	『恋の骨折り損』	
	第10回	『ハムレット』	
	第11回	『十二夜』	
	第12回	『オセロー』	
	第13回	『マクベス』	
	第14回	『あらし（テンペスト）』	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：次回取り上げる作品を自分なりに読んでみる。 復習：授業中に指示された、作品や演劇・文化に関するキーワードについて調べる。		
テキスト	各自できる限り全ての作品の文庫版（ちくま文庫を推奨）を購入すること。新本の場合一冊500～800円程度（古書でも可）。ある程度の投資が求められる。		
参考文献	阿刀田高『シェイクスピアを楽しむために』、高田康成他編『シェイクスピアへの架け橋』、ブライソン『シェイクスピアについて僕らが知りえたすべてのこと』ほか		
評価方法	平常点（発表・発言）：50% 期末レポート：50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
ビデオで学ぶアメリカン・ドリーム		宮内 華代子 (みやうち かよこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>英文エッセイの読み方、英文読解、文章作成の基本的なスキルを習得する。 さらに、研究書や資料を読みこなすのに必要な英語力の増強を図る。 2年次の卒論作成・卒業演習発表の準備として、自らテーマを設定して研究する面白さ、楽しさを知る。</p>		
授業の概要	<p>授業では毎回、英語運用能力向上をめざす練習を行う。 食文化、ディズニー映画、音楽などのアメリカ文化を紹介するドキュメントTV番組の映像を楽しみながら、英文テキストに収録されたエッセイを音読、和訳、要約し、内容を正確に理解する。それぞれのトピックに関して、情報を集め、なんらかの自分の意見を持ち、発表する。授業は講義、発表、質疑応答、ディスカッションによって進める。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	食文化とワイン	
	第3回	ディズニーの世界	
	第4回	ハリウッド (その1)	
	第5回	ハリウッド (その2)	
	第6回	自由の女神 (その1)	
	第7回	自由の女神 (その2)	
	第8回	メルティング・ポット (その1)	
	第9回	メルティング・ポット (その2)	
	第10回	ジャズ、ゴスペル、ブルース、ロック&ロール (その1)	
	第11回	ジャズ、ゴスペル、ブルース、ロック&ロール (その2)	
	第12回	車、飛行機 (その1)	
	第13回	車、飛行機 (その2)	
	第14回	インディアン	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>読む面白さ、研究の楽しさがわかるようになるまで、主体的に深く読むように心がける。 積極的に発言、質問ができるように充分復習・予習をしたうえで授業に臨むこと。 レポート作成のためにテーマをさだめ、自らすすんで研究にとりくむこと。</p>		
テキスト	<p>ビデオで学ぶアメリカ文化 (朝日出版) 英語表現構文 (南雲堂)</p>		
参考文献	授業中に随時紹介		
評価方法	平常点:40% 発表:20% レポート:40%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
美術史の文献と研究		矢野 陽子（やの ようこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	美術作品が制作されるにあたっては、作者の個性や技術のみならず、その時代と地域の文化・宗教・政治状況などさまざまな要因が関係している。この授業では美術について書かれた文献を読むことによって、作者や作品の分析や考察だけでなく、作品の受容のされ方や作品が生み出された時代の精神も理解することをめざす。文献を正確に読むことを身につけ、レポートのまとめ方も学ぶ。		
授業の概要	美術について書かれた文章を題材にして、まず文献を正確に読むことを行い、言及されている美術作品を見る。次に関連する別の文献を探して、ひとつのテーマを深めていく方法を学ぶ。講読する文献は最初の授業で全体の意見を聞いて決める。実際に美術作品を鑑賞するために展覧会見学も行う予定である。		
授業計画	第1回	イントロダクション：講義の概要説明、文献の選択	
	第2回	第一文献講読：短い文章を読む	
	第3回	第一文献講読：内容について討議、まとめ	
	第4回	第二文献講読：ルネサンス美術に関する文献を読む(1)	
	第5回	第二文献講読：ルネサンス美術に関する文献を読む(2)	
	第6回	第二文献講読：内容について討議、まとめ	
	第7回	第三文献講読：近代美術に関する文献を読む(1)	
	第8回	第三文献講読：近代美術に関する文献を読む(2)	
	第9回	第三文献講読：近代美術に関する文献を読む(3)	
	第10回	第三文献講読：内容について討議、まとめ	
	第11回	第四文献講読：絵画のジャンルに関する文献を読む(1)	
	第12回	第四文献講読：絵画のジャンルに関する文献を読む(2)	
	第13回	第四文献講読：絵画のジャンルに関する文献を読む(3)	
	第14回	第四文献講読：内容について討議、まとめ	
	第15回	展覧会見学：講義のなかで期日を指定する	
準備学習 (予習・復習等)	講読する文献を配布するので、必ず前もって読んでくること。わからない言葉は調べておくこと。		
テキスト	教科書は用いない。文献はコピーを配布する。		
参考文献	講義のなかで紹介する。		
評価方法	授業への取り組み:40% レポート:60%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
20世紀初頭イギリス小説を読む		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代の読者にも比較的読みやすい20世紀初頭のイギリスのユーモア小説を読み、文学の味わいかたを知るとともに、今後大学で学ぶために必要な精読や情報収集、プレゼンテーションなどの基礎的な技能を修得することを目指す。		
授業の概要	前半では小説の抜粋を輪読しながら、エドワード朝イギリスの社会背景や文化的思潮について講義する。美術館訪問をはさんだ後半では、担当発表を通じて情報収集と発信の方法について学ぶ。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	映画鑑賞	
	第3回	講義① 20世紀初頭イギリスの社会背景	
	第4回	講義② 20世紀初頭イギリスの階級社会	
	第5回	講義③ 20世紀初頭イギリスの女性の変容	
	第6回	講義④ 20世紀初頭イギリスの「英国性」	
	第7回	美術館訪問	
	第8回	担当発表 第1回	
	第9回	担当発表 第2回	
	第10回	担当発表 第3回	
	第11回	担当発表 第4回	
	第12回	担当発表 第5回	
	第13回	担当発表 第6回	
	第14回	担当発表 第7回	
	第15回	「専攻基礎演習」まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前には各回に取り上げるエピソードを各自読み、講読担当者はあらすじ・みどころ・疑問点をA4用紙一枚にまとめておく。 復習としては、授業時に配布する参考プリントを読み、参考文献や映像を通じて理解を深める。原語テキストとの対比参照を行うなど。		
テキスト	P. G. ウッドハウス 『ジーヴズの事件簿—才智縦横の巻』 岩永正勝・小山太一訳（文春文庫）		
参考文献	授業内に適宜指導。		
評価方法	授業内コメント提出:30% 発表担当:30% 期末レポート:40%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
ことばの世界へのいざない		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語と日本語の諸相を概観することにより、言語研究の様々な分野を紹介するとともに（比較言語学・英語史・社会言語学・対照言語学・意味論・語用論・言語の特徴・理論言語学）ことばの世界の楽しさを知る。		
授業の概要	担当者による講義と受講生との議論で授業を進める。DVDやプリント等の補助教材を用いて、これまでの英語学習や日常の言語使用において「なぜ」と疑問に思っていたことを一緒に楽しく明らかにしていくことにより言語研究の世界へ案内する。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	A 「ことばと音」DVD 『日本語の音声に耳を傾けると』 国立国語研究所	
	第3回	コミュニケーションとことば → コミュニケーション論・言語学	
	第4回	日英語の言語音 → 音声学・音韻論	
	第5回	B 「ことばと人」DVD 『相手を理解する：言葉の背景を見つめると』 国立国語研究所 → コミュニケーション論	
	第6回	DVD『コミュニケーションの「丁寧さ」：「ほめる」というはたらきかけ』 国立国語研究所 → 語用論	
	第7回	日英語の意味を比べると：色・Juiceと「ジュース」・「焼く」→ 対照言語学	
	第8回	文化庁「国語に関する世論調査」→ 日本語の変化	
	第9回	C 「ことばと歴史」DVD Story of English 『異文化との出会い』 BBC → 英語史・比較言語学	
	第10回	DVD Story of English 『シェイクスピアの時代』	
	第11回	D 「ことばと社会」DVD Story of English 『千年の歴史と五大陸への展開』 BBC	
	第12回	共通語としての英語 → 社会言語学	
	第13回	言語と貧困 → 言語政策	
	第14回	英語教授・習得 → 英語教育	
	第15回	期末課題発表・まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	DVD視聴時：サマリーの提出を求める 課題発表		
テキスト	特定のテキストは用いず、担当者によるプレゼンテーション・DVD等で進める。英語辞書・A4サイズのバインダーを持参のこと。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	期末レポート：60% 議論・課題レポート：40%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
American History I		オクマ (OKUMA, G. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	This is an English-only course. The textbook has readings on U.S. cultural history. Besides learning about American history from a cultural perspective, you will be expected to share about Japanese history and culture. You are required to write a thesis in English. Knowledge gained from this course plus research in your own particular aspect of cultural interest will form the foundation of your thesis.		
授業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. To learn about American history and culture. 2. To think and share about Japanese history and culture. 3. To learn to write a thesis in English. 		
授業計画	第1回	Course Introduction	
	第2回	Early Years of the United States	
	第3回	Colonial America	
	第4回	Important Documents	
	第5回	The Early 1800s	
	第6回	Factories and Cotton	
	第7回	Mid-1800s	
	第8回	Urbanization	
	第9回	Underground Railroad	
	第10回	The Late 1800s	
	第11回	Women Settlers	
	第12回	Identity Crisis	
	第13回	Early 1900s	
	第14回	Crusade for Social Reform	
	第15回	Examination	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to keep up with the readings and come to class prepared.		
テキスト	American Roots by K. Blanchard & C. Root		
参考文献	Information will be given in class.		
評価方法	Attend/Participation :40% Thesis Groundwork:30% Examination :30%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
The History and Culture of Canada I		フィリップス (PHILLIPS, J. R.)	
授業の到達目標 及びテーマ	This course will provide an overview of the history and culture of Canada. Emphasis will be placed on the way in which Canadian history and culture has evolved in a way distinct from that of the United States, resulting in superficially similar but deeply different societies. In addition, this course will provide an introduction to the principles of research and thesis writing.		
授業の概要	Each week, there will be a reading or research assignment set for homework. In class there will be one period consisting of a lecture and/or presentation followed by discussion and/or student presentations in the second period. The lecture and discussion will be based on the reading or research assignment. The reading assignments will be in English and Japanese. The lectures and presentations will be in English, but students are welcome to ask questions or make comments in Japanese.		
授業計画	第1回	Introduction to the course	
	第2回	What is History?	
	第3回	First Nations: Origins	
	第4回	First Nations: Diversity	
	第5回	Early European Exploration: When Worlds Collide	
	第6回	The Columbian Exchange	
	第7回	Thesis Writing Tutorial 1	
	第8回	The First Colonies	
	第9回	Westward Expansion for Fashion and Faith: The Rise of New France	
	第10回	Struggle between France and Britain: The Fall of New France	
	第11回	The American Revolution and the Loyalists	
	第12回	The War of 1812: Manifest Destiny Denied	
	第13回	Failed Rebellion	
	第14回	The Roads to Confederation	
	第15回	Canadian History Quiz - Thesis Writing Tutorial 2	
準備学習 (予習・復習等)	Students are strongly encouraged to do the reading and research assignments before coming to class in order to participate in the discussions. If students are unable to participate, their participation grade will be reduced.		
テキスト	なし		
参考文献	References will be provided		
評価方法	Participation and Homework:50% History Quiz (Class 15):50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
織表現におけるデザインから作品完成まで、そのプロセスを学ぶ		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	イメージをどのように「織」で表現するか、デザインから機ごしらえ等の準備、製織、作品完成までの工程を、課題制作を通して学び習得することを目指す。また様々な織物や繊維造形など図版の紹介により、イメージと表現、素材、道具や技術についての理解を深め、さらに人間と繊維と創造力の関わりを考察することを目的とする。		
授業の概要	テーマ：季節のイメージを、課題1「色系を用いた経ストライプ・デザインの組織織り」（経系と緯系による表現技法）及び、課題2「タビスリー技法」（色緯系による絵織り技法）で表現する。デザイン画、織機のセッティング、製織、仕上げ、完成までの工程を2つの課題制作を通して学び、糸による表現の可能性を研究する。		
授業計画	第1回	ガイダンス／講義：織の組織について／色系を用いたストライプのデザイン	
	第2回	課題1：経ストライプ：経系の準備（整経）：経糸密度と緯糸の関係、経糸密度の違いによるストライプの変化などを学べるように、数種類の異なる素材と経糸密度に設定する。	
	第3回	課題1：足踏み織機へ経糸をセッティングする。（機ごしらえ：1人1台）	
	第4回	課題1：機ごしらえの続き／織り出し／製織（交替で経糸密度の異なる織機で順次織り、数種類のサンプルを製織する。）	
	第5回	課題1：製織続き	
	第6回	課題1：織り上がり／経糸始末／作品の仕上げ	
	第7回	課題2：タビスリー（つづれ織）：デザイン演習（イメージドローイング）／経糸の準備（整経）	
	第8回	課題2：織機へ経糸をセッティングする。（機ごしらえ：卓上堅機：1人1台）	
	第9回	課題2：実寸下絵 作成／織り出し	
	第10回	課題2：製織 -1	
	第11回	課題2：製織 -2	
	第12回	課題2：製織 -3	
	第13回	課題2：続き、織り上がり、経糸始末	
	第14回	課題2：作品の仕上げ	
	第15回	講評会、まとめ（卒業制作にむけて）	
準備学習 (予習・復習等)	織では様々な技術や計算が必要となり、ほぼ毎回新しいことを学びます。説明を受け実際にやってみる、その繰り返しで毎回新しいことを重ねて習得していきます。必ずメモをとって学んだことを整理していくことが必要です。単なる”How To”としての技術ではなく、そこから原理を学ぶこと、何故そうするのかを考えることが重要です。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題作品:50% レポート :20%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
視覚芸術と社会		伊藤 巳令 (いとう みれい)	
授業の到達目標 及びテーマ	視覚芸術を通じて、作品や芸術家の特質、それらが生み出された社会や文化のしくみについて探求する。前期には、いくつかの論文を講読し、論文の書き方、テーマに対するアプローチの手法を学び、卒論の執筆につなげる。		
授業の概要	学期のはじめに、個々の関心に応じて、テーマを相談しながら決めます。その後、日本語の論文を講読しながら、論文の形式に慣れ、論文の文章や註などの表記などの具体的な書き方を学びます。また、自分の資料や視点についてプレゼンテーションを重ね、論文の完成にむけて着実に歩を進めていきます。 テーマについては、視覚文化に関わるものなら、美術以外のジャンルから選んでもかまいません。		
授業計画	第1回	ガイダンス テーマの選び方	
	第2回	論文とは 参考文献の調べ方	
	第3回	論文講読①	
	第4回	論文講読②	
	第5回	論文講読③	
	第6回	論文講読④	
	第7回	個別テーマに関する発表①	
	第8回	個別テーマに関する発表②	
	第9回	論文講読⑤	
	第10回	論文講読⑥	
	第11回	論文講読⑦	
	第12回	論文講読⑧	
	第13回	個別テーマに関する発表③	
	第14回	個別テーマに関する発表④	
	第15回	夏休み中の研究計画について	
準備学習 (予習・復習等)	前期の論文講読のゼミは、実際に卒論を書く上で重要なので、必ず出席すること。授業前に課題論文を読み、授業中に、論の組み立て、資料の扱い方、註や参考文献の表記などの執筆上の手法を学びます。 課題の配布や、レポートの提出、発表の順番などは、CoursePowerを使って告知するので、必ずチェックすること。		
テキスト	CoursePowerで配布する。授業前にプリントアウトして必ず読んでおくこと。		
参考文献	授業中に指示する		
評価方法	出席点:50% 期末レポート:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
イギリス文化を題材にアカデミックな思考力を身につける		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○プレゼンテーションや自由な討論を通じて、アカデミックな思考力を鍛えるとともに豊かなコミュニケーションの力を身につける。</p> <p>○イギリス文化の多層性・ダイナミズムの理解を通じて、現代世界を多角的・複眼的に把握できるようになる。</p> <p>○卒業論文執筆にむけた準備のなかで、身近な事柄を時間的にも空間的にも広い視野からとらえることができるようになる。</p>		
授業の概要	<p>テキストの輪読を中心に、学んだ内容にかんするディスカッションを行う。授業と並行するかたちで、卒業論文のテーマ設定にむけての個別指導も行う。授業の終わりの数回では卒業論文への導入として、自分が読んだ本についての読書レポートを発表してもらう。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	イギリス3分スピーチ／発表の方法	
	第3回	『知的複眼思考法』の輪読（1）グループ1	
	第4回	『知的複眼思考法』の輪読（2）グループ2	
	第5回	『知的複眼思考法』の輪読（3）グループ3	
	第6回	卒論を書くために／イギリスの基礎知識	
	第7回	『「イギリス社会」入門』の輪読（1）グループ1	
	第8回	『「イギリス社会」入門』の輪読（2）グループ2	
	第9回	『「イギリス社会」入門』の輪読（3）グループ3	
	第10回	卒論にむけての個人面談	
	第11回	『知的複眼思考法』の輪読（4）グループ4	
	第12回	『知的複眼思考法』の輪読（5）グループ5	
	第13回	読書レポート発表（1）グループ1	
	第14回	読書レポート発表（2）グループ2	
	第15回	読書レポート発表（3）グループ3	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○テキストの輪読では、全員がその回で読むテキストの章全体をあらかじめよく読んでくること。また、各自が合計2回、担当するテキストの箇所にかんしてパワーポイントを用いたプレゼンテーションを行う。</p> <p>○前期のうちに卒業論文のテーマを決めておくことが望ましいので、自分が考えたい問いや取り上げたい対象について授業時間外によく吟味すること。それと関連して、読書レポート発表では、自分が読んでみて多くの発見があった本や、卒論のベースになると考えられる本を1冊取り上げ、詳しくその内容を説明してもらう。</p>		
テキスト	<p>① 荻谷剛彦『知的複眼思考法：誰でも持っている創造力のスイッチ』（講談社プラスアルファ文庫、2002年版）</p> <p>② コリン・ジョイス『「イギリス社会」入門：日本人に伝えたい本当の英国』（NHK出版新書、2011年）</p>		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% プレゼンテーション:30% 読書レポート発表:30%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
道具のデザインを比較考察し試作する。		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道具やシステムのデザインとその働きを観察し、日常からさらに一歩踏み込んだヒトとモノのとの関係をより深く理解する。 ・ 生活行動に見受けられる問題や可能性の中から目標を設定し、デザインの提案に至る構想力を養う。 		
授業の概要	<p>共通の課題を数種類行う。いずれも、対象や与条件を把握すること、目標設定に向けた実現方法の選択肢を広く持つこと、さらに構想や試行錯誤を経て考察のまとめやデザインの提案を行う。</p> <p>生活観察の課題では計画やレポートにまとめて発表する。デザイン制作の課題では試行錯誤の段階で目標や条件を確認し、模型制作や図示によって構想をまとめる。</p> <p>毎回の経過について制作物の記録と各自の考察メモを残していく。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス：日常にあるテーマの発見・研究の進め方	
	第2回	研究事例の紹介・共通課題の決定	
	第3回	課題（1）色彩・形体・空間の観察とデザインの目標設定	
	第4回	課題（1）目標に沿ったサンプルの試作・模型の制作	
	第5回	課題（1）制作の続き	
	第6回	課題（1）発表と講評	
	第7回	課題（2）生活観察：課題説明、各自が対象を設定	
	第8回	課題（2）生活観察：対象のようすを収集	
	第9回	課題（2）生活観察：各自の対象について観察と考察	
	第10回	課題（2）観察・考察のまとめ	
	第11回	課題（3）実験的なデザイン：課題説明、試作開始	
	第12回	課題（3）試作と制作の続き	
	第13回	課題（3）制作の続き	
	第14回	課題（3）制作の続き	
	第15回	課題（3）発表と講評	
準備学習 (予習・復習等)	道具やシステムのデザインが効果的である場面や、逆に不足している状況を把握するために、ニュースや世界各地を紹介する番組を視聴するように。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 課題提出物:70%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
多民族社会アメリカ I		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標及びテーマ	1) 多民族社会アメリカの光と影について理解を深め、アメリカを多面的、批判的に見る力を養うこと。 2) 幅広くリサーチを行い、前期の終わりまでに卒業論文のテーマを決めること。 3) 自分の言葉で分かりやすく発表する力を養うこと。		
授業の概要	移民の歴史、日系アメリカ人、アメリカ先住民、アフリカ系アメリカ人を主要テーマとして、講義を中心に授業を進める。関連するビデオ・DVDや新聞記事も利用する。学生による発表も行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション：アメリカを見る視点	
	第2回	移民の歴史（植民地時代）	
	第3回	移民の歴史（旧移民）	
	第4回	移民の歴史（新移民）	
	第5回	移民の歴史（現代の移民）	
	第6回	日系アメリカ人（初期の日系移民）	
	第7回	日系アメリカ人（日系移民排斥運動）	
	第8回	日系アメリカ人（太平洋戦争と強制収容）	
	第9回	アメリカ先住民（歴史）	
	第10回	アメリカ先住民（同化政策）	
	第11回	アメリカ先住民（今日のアメリカ先住民）	
	第12回	アフリカ系アメリカ人（奴隷貿易と奴隷制度）	
	第13回	アフリカ系アメリカ人（公民権運動と現状）	
	第14回	学生による発表：グループ1	
	第15回	学生による発表：グループ2	
準備学習 (予習・復習等)	授業内容に関連する新聞・雑誌記事、論文、本などに目を通し、前期を通じて卒業論文のテーマ探しを行うこと。		
テキスト	明石紀雄、飯野正子著『エスニック・アメリカ[第3版]』有斐閣、2011年		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業参加:20% 論文レポート:40% 課題:40%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
アメリカの成り立ちを知る／ジェンダー研究		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標及びテーマ	文献講読（英語・日本語）を通じて、アメリカ合衆国の成り立ちやジェンダー研究のトピックを学びます。また、資料の検索・収集方法、資料の読み方、議論の組み立て方など、卒業論文の作成に必要な技術を学びます。夏休み前までに卒業論文のテーマを各自決定します。		
授業の概要	1時間目は英文講読を通じて、現代アメリカの成り立ちを学びます。2時間目はジェンダー研究の文献を読み、ディスカッションします。また、卒論のテーマについて調べたことを発表する個人報告も並行して進めます。		
授業計画	第1回	イントロダクション：卒論執筆に向けて	
	第2回	英文講読／図書館ガイダンス	
	第3回	個人面談	
	第4回	英文講読／ジェンダー研究①	
	第5回	英文講読／ジェンダー研究②	
	第6回	英文講読／ジェンダー研究③	
	第7回	フィールド・ワーク	
	第8回	英文講読／ジェンダー研究④	
	第9回	英文講読／ジェンダー研究⑤	
	第10回	英文講読／ジェンダー研究⑥	
	第11回	英文講読／ジェンダー研究⑦	
	第12回	英文講読／個人報告①	
	第13回	英文講読／個人報告②	
	第14回	英文講読／個人報告③	
	第15回	英文講読／個人報告④	
準備学習 (予習・復習等)	文献を読んで予習する。卒業論文のテーマを決定し、調査を進める。		
テキスト	Jack Brajcich, Toshihiro Tanioka 『Eye on American Culture』（英宝社）；林博史・中村桃子・細谷実編著『連続講義 暴力とジェンダー』（白澤社、2009年）		
参考文献	授業時に適宜紹介します。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% プレゼンテーション:30% 期末レポート:30%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒論入門と近現代のアメリカ詩を読む		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標及びテーマ	①近現代アメリカ詩の代表作を読み、生の様々な局面を鋭く切り取った英語詩の魅力に触れ、社会や文化を批判的に思考するリテラシー(critical thinking)を磨くことで、日常の自明性に麻痺した私たちの認識世界を刷新する過程を理解する。②口頭や文章で疑問や考えを論理的に表現する力を磨き、卒論の基礎的スキルを身につけつつ、英米文学・文化から各自卒論のテーマを絞り込む。		
授業の概要	卒論の心構え・リサーチ法や情報カード術習得・パラグラフ作文練習・リポーターによるレジュメを用いた詩や資料の読解報告と自由討議・メールレポート講評・キーワード解説・プレゼンテーション		
授業計画	第1回	導入～19Cアメリカ詩1 (Dickinson) ; 戦後アメリカ詩1 (Ginsberg)	
	第2回	卒論入門1 (心構え) 、19Cアメリカ詩2 (Dickinson) ; 戦後アメリカ詩2 (Ginsberg)	
	第3回	卒論入門2 (テーマの選び方) 、19Cアメリカ詩3 (Whitman) ; 戦後アメリカ詩3 (Snyder)	
	第4回	卒論入門3 (テーマの選び方) 、19Cアメリカ詩(Whitman) 4 ; 戦後アメリカ詩4 (Snyder)	
	第5回	卒論入門4 (テーマ決定) 、20C前半アメリカ詩1 (モダニズム導入) ; 現代アメリカ詩1 (女性詩人導入)	
	第6回	卒論入門5 (テーマ決定) 、20C前半アメリカ詩2 (Pound) ; 現代アメリカ詩2 (Plath)	
	第7回	卒論入門6 (リサーチの仕方・情報カード) 、20C前半アメリカ詩3 (H.D) ; 現代アメリカ詩3 (Rich)	
	第8回	卒論入門7 (リサーチ報告) 、20C前半アメリカ詩4 (Williams) ; 現代アメリカ詩4 (マイノリティ詩導入)	
	第9回	卒論入門8 (パラグラフ作文導入・論理の三角形・引用要約のスキル) 、20C前半アメリカ詩5 (Stevens) ; 現代アメリカ詩5 (マイノリティ男性詩人たち)	
	第10回	卒論入門9 (パラグラフ作文実践) 、20C前半アメリカ詩6 (Cumings) ; 現代アメリカ詩6 (マイノリティ男性詩人たち)	
	第11回	卒論入門10 (パラグラフ作文実践) 、20C前半アメリカ詩7 (他の詩人たち) ; 現代アメリカ詩7 (マイノリティ女性詩人入門)	
	第12回	卒論入門11 (ブレインストーミング) 、現代アメリカ詩8 (マイノリティ女性詩人たち)	
	第13回	卒論入門12 (マインドマップ) 、現代アメリカ詩9 (マイノリティ女性詩人たち)	
	第14回	プレゼンテーション (前期取り上げた詩から各自テーマを絞って発表) 1	
	第15回	プレゼンテーション2～まとめ	
準備学習(予習・復習等)	1. 予習: 次回読む作品や資料を精読し質問・コメント準備。リサーチ報告やパラグラフ作文(下書き)準備他 2. 復習: メールレポート 前回までの授業内容に関連する質問・コメント等をパラグラフで自由記述 3. レポーターはレジュメを準備し報告準備 4. プレゼンターはレジュメを準備し発表準備		
テキスト	榎木伸明『卒論を書こう』(三修社) 詩や必読資料をこちらでプリント準備		
参考文献	随時紹介		
評価方法	プレゼンテーション:40% リポーター回数:20% 討議への参加度:10% メールレポート:10% パラグラフ作文提出:10% 小報告:10%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
異文化間コミュニケーション		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では音声言語、身体言語、文化の観点から異文化間コミュニケーションの性質と問題点、その克服法に関する理解を深めることを目標とします。前期は日米間での英語によるコミュニケーションを想定し、まず(異文化間)コミュニケーションのモデルについて考察し、次に母語の日本語と外国語としての英語の言語的な相違について検討します。		
授業の概要	基本的には上記の事柄に関する文献をグループワークの形で読み、それを各グループの代表者が発表する、という形式で授業を進めます。また、二人一組(単独も可)で前期に学習する範囲内の事柄から1つテーマを決め、資料に当たり、それをまとめて発表することも行います。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	異文化間コミュニケーションの重要性と現状	
	第3回	コミュニケーション・モデル(情報発信者の観点)	
	第4回	コミュニケーション・モデル(情報受信者の観点)	
	第5回	コミュニケーションに対する文化の影響	
	第6回	コミュニケーションの断絶	
	第7回	異文化間コミュニケーション・モデル	
	第8回	異文化間コミュニケーションの問題点	
	第9回	音声言語による異文化間コミュニケーションの問題点	
	第10回	異文化間コミュニケーションにおける音声上の問題	
	第11回	異文化間コミュニケーションにおける文法上の問題	
	第12回	異文化間コミュニケーションにおける語彙・意味の問題	
	第13回	異文化間コミュニケーションの非言語的側面	
	第14回	異文化間コミュニケーションにおける文化の問題	
	第15回	まとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業で扱うテーマと課題を提示しますので、それについてよく考えておいて下さい。		
テキスト	テキストは使用せず、プリントを配布します。		
参考文献	必要に応じて授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業参加度:25% 発表:25% レポート:25%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
デザイン造形による表現演習		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	デザインは社会と密接に関わることから、普遍的な造形美が求められる。このデザイン造形の研究により、他者とコミュニケーションする社会性をもった表現力を身につけることを目標とする。I 作では課題制作を通して参考作品から多様な表現を学び、卒業制作のテーマの決定を目指す。		
授業の概要	共通の課題として着彩による平面構成を行い、この間に各自の方向性を探り、最後に卒業制作のテーマを絞る。早い段階で卒業制作を平面構成以外に絞り込んだ者は、後半の課題をテーマに応じた個別の内容に変更する。制作は各自が授業外の時間も使って進め、授業ごとに経過の確認、個別の指導を行う。		
授業計画	第1回	ガイダンス 課題1：ストライプによる構成・課題説明、エスキース1	
	第2回	課題1：ストライプによる構成・エスキース2	
	第3回	課題1：ストライプによる構成・制作1（下描き）	
	第4回	課題1：ストライプによる構成・制作2（着彩）	
	第5回	課題1：ストライプによる構成・制作3（着彩）	
	第6回	課題1：ストライプによる構成・制作4（着彩）	
	第7回	講評会／講義（アルバースの『色彩構成』を用いて） 課題2：色彩研究・課題説明	
	第8回	課題2：色彩研究・エスキース1	
	第9回	課題2：色彩研究・エスキース2（色彩試作）	
	第10回	課題2：色彩研究・制作1（下描き）	
	第11回	課題2：色彩研究・制作2（着彩）	
	第12回	課題2：色彩研究・制作3（着彩）	
	第13回	課題2：色彩研究・制作4（着彩）	
	第14回	講評会 卒業制作のテーマ設定について	
	第15回	卒業制作のテーマ絞り込み まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題作品の構想を練るために、図書館などで資料を見たり、作品制作の進捗状況によっては、授業時間外にエスキースを描くなどの準備、制作が必要になる。 課題ごとの講評会でコメントを提出し、最後に前期の制作を通じて気付いたこと、考えたことについてレポートをまとめる。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:20% 課題作品:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
比較文化論、来日した欧米人の目に映った日本文化		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	16世紀から19世紀に来日した欧米人の旅行記をとおして、異文化交流、日本文化とヨーロッパ文化の比較について学ぶ。 卒業論文のテーマを各自が決め、研究方法を学び、実践する。 英語のテキストを読む。 参加者が相互に理解し、自分の意見を述べ、議論することを身につける。 現代世界のなかの日本文化について考える。		
授業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 共通のテキストを決め、要約し、ディスカッションし、報告を書く。 2. 卒業論文については、各自で決めたテーマに基づき、文献を収集する。 3. 現代世界における日本文化について考える。 		
授業計画	第1回	演習の進め方、卒業論文について	
	第2回	現代世界のなかの日本	
	第3回	世界の中の日本文化	
	第4回	来日したヨーロッパ人の背景 (1)	
	第5回	来日したヨーロッパ人の背景 (2)	
	第6回	来日したヨーロッパ人さまざま (1)	
	第7回	来日したヨーロッパ人さまざま (2)	
	第8回	来日したヨーロッパ人の旅行記・書簡 (1)	
	第9回	来日したヨーロッパ人の旅行記・書簡 (2)	
	第10回	卒業論文に関する文献リストの作成	
	第11回	卒業研究の進め方	
	第12回	レポートを書く	
	第13回	レポートについての話し合い	
	第14回	研究計画について	
	第15回	研究の進め方	
準備学習 (予習・復習等)	課題に関して、文章を提出する。		
テキスト	渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー、ほか。		
参考文献	演習の中で紹介する		
評価方法	演習での発表・議論:35% 英語:30% 卒論のためのレポート:35%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒業論文作成に向けて		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標及びテーマ	卒業論文の作成方法について概要を知る。卒業論文のテーマを決める。関係する本を自主的に読み進める。卒業論文のためのメモを継続的に書き続ける。要約とパラフレーズの練習を積む。英語文献を読み解く語学力を磨く。夏休みに読むべき文献のリストを作る。		
授業の概要	卒業論文の作成に向けて、19世紀イギリス文化に関する、指定されたテーマに関するブックレポートと発表が課される。並行して、ヴィクトリア朝の文学作品および関連資料（英文）の輪読を進める。輪読の導入には入門的文学作品を用意するが、その後は参加者の希望を考慮して素材を選定する。		
授業計画	第1回	ガイダンス：卒業論文作成心得と19世紀イギリス史概論	
	第2回	<i>The Happy Prince</i> 講読1とブックレポート（階級1）	
	第3回	<i>The Happy Prince</i> 講読2とブックレポート（階級2）	
	第4回	<i>The Happy Prince</i> 講読3とブックレポート（階級3）	
	第5回	選択文献1の講読とブックレポート（進化と退化1）	
	第6回	選択文献2の講読とブックレポート（進化と退化2）	
	第7回	選択文献3の講読とブックレポート（女性1）	
	第8回	選択文献4の講読とブックレポート（女性2）	
	第9回	選択文献5の講読とブックレポート（女性3）	
	第10回	選択文献6の講読とブックレポート（宗教と中世主義1）	
	第11回	選択文献7の講読とブックレポート（宗教と中世主義2）	
	第12回	選択文献8の講読とブックレポート（心霊術）	
	第13回	選択文献9の講読とブックレポート（帝国1）	
	第14回	選択文献10の講読とブックレポート（帝国2）	
	第15回	まとめとブックリスト作成	
準備学習 (予習・復習等)	予習：講読課題の下読み（単語調べや不明箇所の確認）、キーワードに関する下調べ（辞典類とインターネットを併用のこと）、要約とパラフレーズの課題作成 復習：講読課題の再読と批評的解釈に向けたメモの作成、追加キーワードに関する調査		
テキスト	英文はプリントを用意する。ブックレポートを割り当てられた本は各自で用意すること。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	ブックレポート:20% 発表:20% 平常の提出課題:30% 期末レポート:30%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
アメリカ1920年代 (Jazz Age) とロスト・ジェネレーションの作家たち		宮内 華代子 (みやうち かよこ)	
授業の到達目標及びテーマ	アメリカ1920年代 (Jazz Age) 又はロスト・ジェネレーションの作家たちに関する卒業論文執筆の準備。テーマ例：ロスト・ジェネレーション/フィッツジェラルド/ヘミングウェイ/ジャズ・エイジ/ディズニー/映画・自動車・ジャズの流行/ファッション (モラル) 革命/禁酒法/カポネとギャング/大強気相場/『グレート・ギャツビー』と村上春樹		
授業の概要	配布プリント (英文) の和訳・内容理解/テキスト輪読/担当者の発表/随時課題に対する記述式答案作成/毎回個別論文指導		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	＜図書館ガイダンス 資料・文献検索方法＞、Jazz Age	
	第3回	Lost Generation, (H) Indian Camp	
	第4回	Fitzgerald & Hemingway, (F) Winter Dreams	
	第5回	The Big Bull Market	
	第6回	Life & Work as an Artist	
	第7回	Hard-boiled Style, 小説の技法	
	第8回	＜卒論「目次」、テーマに関する文献リスト完成＞	
	第9回	The Revolution in Manners and Morals	
	第10回	Alcohol and Al Capone, (H) Indian Camp	
	第11回	＜論文題目 (仮) 届出・研究調査開始＞he Big Bull Market	
	第12回	Crash!, 作家と時代背景	
	第13回	＜論文作成進行状況発表＞	
	第14回	＜DVD鑑賞＞ The Great Gatsby	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	読む面白さ、研究の楽しさがわかるようになるまで、日ごろから作品を深く読むように心がける。授業でとりあげる作品の該当箇所を前もって丁寧に予習して読んでから授業に出席すること。授業中に発表、質問ができるように充分予習して授業に臨むこと。 自らテーマをさだめ、積極的に研究にとりくむこと。		
テキスト	Winter Dreams (研究社) Indian Camp and Other Stories (成美堂)		
参考文献	F. L. Allen, <i>Only Yesterday</i> . Harper and Row S. Beach, <i>Shakespeare & Company</i> . Univ. of Neb. A. Turnbull, <i>Scott Fitzgerald</i> . Scribner's		
評価方法	平常点:40% 発表:20% レポート:40%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
20世紀イギリス小説精読 『眺めのいい部屋』		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標及びテーマ	E. M. フォースターのよく知られた教養小説を通じて20世紀初頭イギリスの社会背景と思潮の動向を探り、現代につづくさまざまな問題（ジェンダー、ナショナルリティ、女性の自立、社会階級、経済）を考える契機をつくる。また、小説を原語で味わい、翻訳の問題点と面白さを知ることを目指す。		
授業の概要	数回の講義ののち、担当分担を決めて学生によるテキスト輪読を行う。適宜映画や美術作品の鑑賞で作品理解を深める。		
授業計画	第1回	イントロダクション 小説の読みかた	
	第2回	講義 1 映画作品鑑賞	
	第3回	講義 2 時代背景	
	第4回	講義 3 20世紀初頭イギリスの諸問題	
	第5回	テキスト輪読 1	
	第6回	テキスト輪読 2	
	第7回	テキスト輪読 3	
	第8回	美術館鑑賞	
	第9回	テキスト輪読 4	
	第10回	テキスト輪読 5	
	第11回	テキスト輪読 6	
	第12回	テキスト輪読 7	
	第13回	テキスト輪読 8	
	第14回	テキスト輪読 9	
	第15回	テキスト輪読 10	
準備学習 (予習・復習等)	授業前には各自がテキストを読み、講読担当者はあらすじ・みどころ・疑問点などをレジュメにまとめて準備する。授業後には各回の理解を深め、年度末に提出する卒業論文作成のためのテーマを探す。		
テキスト	E. M. Forster, <i>A Room with a View</i> (Penguin Books)		
参考文献	授業内で適宜指導。		
評価方法	授業での担当発表:40% 期末課題の提出:60%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
日英語語用論		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	ことばは私たちの考え・捉え方に形を与え、そして人と人との結びつきを作り上げてくれます。本講座では、「あることばが使われるとき、それはどのような捉え方が反映されているのだろうか」という角度から、様々な言語事象を日本語と英語を比較しながら考え、「ことば」のおもしろさを一緒に楽しんでいきたいと思います。		
授業の概要	本講座ではことばの意味を話し手と聞き手がいる使用場面で考えていきます。担当者の講義と受講生の議論によって様々な「なぜ」を解き明かしていきます。前期後半には卒業論文についてのガイダンスを行います。 卒業論文執筆準備：①課題設定・②参考文献選択		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	人称代名詞：あなた・わたし・彼・彼女・私達	
	第3回	人称代名詞：You・I・He・She・We	
	第4回	人称代名詞：歴史的変化	
	第5回	指示詞：これ・それ・あれ	
	第6回	指示詞・冠詞・代名詞：This・That・A・The・It	
	第7回	情報構造：That・It	
	第8回	卒業論文ガイダンス	
	第9回	ポライトネス（発話の力と丁寧さ）：日本語の敬語	
	第10回	ブラウン・レビンソンによるポジティブポライトネス	
	第11回	ブラウン・レビンソンによるネガティブポライトネス	
	第12回	リーチによるポライトネス	
	第13回	Language and Thought：サピア・ウォーフの仮説	
	第14回	Fashion of Speech：するべき英語・なるべき英語	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各テーマごとに出される課題について考察を行い、ゼミにて発表をしレポートの形で提出。 卒業論文執筆準備として、課題設定・参考文献についてレポートを提出。		
テキスト	特定のテキストは用いず、担当者のプレゼンテーション・資料配布で進める。英語辞書とA4サイズのバインダーを持参のこと。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	議論・課題：70% 卒業論文準備：30%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
American History II		オクマ (OKUMA, G. S.)	
授業の到達目標 及びテーマ	This is an English-only course. The textbook has readings on U.S. cultural history. Besides learning about American history from a cultural perspective, you will be expected to share about Japanese history and culture. You are required to write a thesis in English. Knowledge gained from this course plus research in your own particular aspect of cultural interest will form the foundation of your thesis.		
授業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. To learn about American history and culture. 2. To think and share about Japanese history and culture. 3. To learn to write a thesis in English. 		
授業計画	第1回	Second Semester Introduction	
	第2回	Prosperity and Depression	
	第3回	The Automobile Industry	
	第4回	Demand for End to Segregation	
	第5回	Harlem Renaissance	
	第6回	War and Prosperity	
	第7回	The Baby Boomers	
	第8回	Television/Rock and Roll	
	第9回	The 1970s and 1980s	
	第10回	Outer Space	
	第11回	Counter Culture	
	第12回	Battle for Women' s Equality	
	第13回	End of the 20th Century	
	第14回	The Internet and Growing Technology	
	第15回	Examination	
準備学習 (予習・復習等)	Students are expected to keep up with the readings and come to class prepared.		
テキスト	American Roots by K. Blanchard & C. Root		
参考文献	Information will be given in class		
評価方法	Attend/Participation:20% Thesis :60% Examination:20%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
The History and Culture of Canada II		フィリップス (PHILLIPS, J. R.)	
授業の到達目標 及びテーマ	This course will continue an overview of the history and culture of Canada. Emphasis will again be placed on the way in which Canadian history and culture has evolved in a way distinct from that of the United States, resulting in superficially similar but deeply different societies. In addition, this course will continue an introduction to the principles of research and thesis writing and culminate with research presentations and submission of formal written theses by students.		
授業の概要	Each week, there will be a reading or research assignment set for homework. In class there will be one period consisting of a lecture and/or presentation followed by discussion and/or student presentations in the second period. The lecture and discussion will be based on the reading or research assignment. The reading assignments will be in English and Japanese. The lectures and presentations will be in English, but students are welcome to ask questions or make comments in Japanese.		
授業計画	第1回	Rupert' s Land, Riel and Railways	
	第2回	Western Expansion	
	第3回	World War 1	
	第4回	The Great Depression and World War 2	
	第5回	Thesis Writing Tutorial 1	
	第6回	The Rise of Quebec Nationalism	
	第7回	Constitutional Reform and Referendums	
	第8回	Thinking about Culture: Canada vs. US	
	第9回	Immigration and Multiculturalism	
	第10回	Japanese in Canada	
	第11回	Thesis Writing Workshop	
	第12回	Thesis Writing Workshop	
	第13回	Thesis Presentation 1	
	第14回	Thesis Presentation 2	
	第15回	Thesis Presentation 3	
準備学習 (予習・復習等)	Students are strongly encouraged to do the reading and research assignments before coming to class in order to participate in the discussions. If students are unable to participate, their participation grade will be reduced.		
テキスト	なし		
参考文献	References will be provided		
評価方法	Participation and Homework:25% Presentations:25% Written Thesis:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
「織」による卒業作品の制作		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	卒業制作において各自のテーマを「織」で表現する。前期までの経験をふまえた表現の集大成の作品制作となる。前期で学んだデザインから機ごしらえ等の準備、製織、作品完成までの工程をしっかりと自分のものとする。完成作品を学年末の卒業展で展示発表、現代教養学科発表会にはギャラリートークとして、一人ずつ作品のプレゼンテーションを行う。発信すること、共に鑑賞しあうことで多くの他者とコミュニケーションすることを目指す。		
授業の概要	テーマは自由だが抽象表現を原則とし、相談の上、決定する。デザイン、素材、技法、工程表など、自分で計画し実行、作品を制作する。学年末の卒業展の展示も各自で行うことで、作品の見せ方、展示準備などの共同作業や制作意図を伝える発信方法など、制作だけでなく総合的に学ぶこととなる。		
授業計画	第1回	各自のテーマ、デザイン、作品内容、計画の発表	
	第2回	各自の計画にそって、制作準備に入る : 経糸整経、サンプル織	
	第3回	機ごしらえ、実寸下絵	
	第4回	機ごしらえ、織り出し	
	第5回	製織-1	
	第6回	製織-2	
	第7回	製織-3、中間チェック	
	第8回	製織-4	
	第9回	製織-5	
	第10回	製織-6	
	第11回	製織-7、織り上がり	
	第12回	経糸始末、作品仕上げ	
	第13回	続き、完成／作品撮影	
	第14回	講評会	
	第15回	卒業展の作品展示	
準備学習 (予習・復習等)	作品制作には膨大な時間がかかる。授業時間だけでは作品は出来ない、悔いのない卒業制作作品を完成させるために、空き時間を利用して制作時間を確保すること。特に製織中は、静かに自分と向き合うことになるので、自分の表現したいことについて、繰り返しよく考え、自分の言葉で作品について語れるようにすること。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 卒業制作作品:50% レポート :20%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
視覚芸術と社会		伊藤 巳令 (いとう みれい)	
授業の到達目標及びテーマ	視覚芸術を通じて、作品や芸術家の特質、それらが生み出された社会や文化のしくみについて探求する。後期には、自分の定めたテーマに従って、実際に論文を執筆し、完成させる。1月には卒業演習発表会でプレゼンテーションを行う。		
授業の概要	後期は、夏休み中に書き溜めた下書きにもとづいて、個人指導によって卒論を仕上げていきます。仕上げた論文は印刷して配布するので、最後の校正まできちんと仕上げてください。		
授業計画	第1回	夏休みの進捗状況の発表と、個人指導スケジュールの決定	
	第2回	個人指導①	
	第3回	個人指導②	
	第4回	個人指導③	
	第5回	個人指導④	
	第6回	個人指導⑤	
	第7回	個人指導⑥	
	第8回	個人指導⑦	
	第9回	個人指導⑧	
	第10回	個人指導⑨	
	第11回	個人指導⑩	
	第12回	卒論の提出について①	
	第13回	卒論の提出について②	
	第14回	卒業演習発表会について①	
	第15回	卒業演習発表会について②	
準備学習 (予習・復習等)	個人指導の際は、それまでに書いたものをプリントアウトして、資料とともに持参すること。時間には遅れないこと。やむを得ず欠席するときは、必ず連絡してください。 また、進捗状況の確認や事務連絡、最終入稿原稿の確認など、重要な通知があるときは、全員を招集します。とくに11月末以降は、全員のゼミがあるので、CoursePowerをよく確認してください。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	出席点:50% 卒業論文:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒業論文の完成にむけて		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>○これまでの授業で学んだことをもとに、自分自身にとっての「問題」をつかみとる。</p> <p>○自分自身が設定した「問題」を探求し、文献を用いて調査を進めることができるようになる。</p> <p>○自分自身の考えを的確に文章化し、卒業論文を完成させる。</p>		
授業の概要	前半は、卒業論文の個別指導を交えつつ、読書レポート発表を行う。後半は、全員が卒業論文の準備にあたり、中間報告での意見交換や個別指導を踏まえて、それぞれが卒業論文の作成を進めていく。		
授業計画	第1回	後期イントロダクション	
	第2回	卒業論文を書くための文献調査法／卒業論文の「作法」	
	第3回	卒業論文の調査・執筆にむけた個人面談	
	第4回	読書レポート発表（1）グループ1	
	第5回	読書レポート発表（2）グループ2	
	第6回	読書レポート発表（3）グループ3	
	第7回	読書レポート発表（4）グループ4	
	第8回	卒業論文中間発表（1）グループ1	
	第9回	卒業論文中間発表（2）グループ2	
	第10回	卒業論文中間発表（3）グループ3	
	第11回	卒業論文中間発表（4）グループ4	
	第12回	卒業論文中間発表（5）グループ5	
	第13回	卒業論文の形式の確認	
	第14回	卒業論文個別リライト指導	
	第15回	卒業研究発表会にむけての準備	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○読書レポート発表では、卒業論文のベースとなると考えられる本を1冊取り上げ、詳しくその内容を説明してもらう。</p> <p>○卒業論文中間発表では、自分がテーマとする問題や対象についてのまとまった報告を行うので、その準備を進めていく。</p> <p>○卒業論文の出来具合は、授業時間外でどれほど調査や執筆に力を入れたかによって決まってくるので、各自がそれぞれ計画的に取り組んで、納得できるものに練り上げていくこと。</p>		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:20% 読書レポート発表:10% 卒業論文中間報告:10% 卒業論文制作過程:20% 卒業論文:40%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
道具のデザインを比較考察し試作する。		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 道具やシステムのデザインとその働きを観察し、日常からさらに一歩踏み込んだヒトとモノのとの関係をより深く理解する。 ・ 生活行動に見受けられる問題や可能性の中から目標を設定し、デザインの提案に至る構想力を養う。 		
授業の概要	各自がテーマを決めて研究を進めていく。テーマの範囲として、身近な生活環境にある問題点に対処する工夫、生活にプラスアルファとなる道具のデザインの提案、視覚効果を楽しむ遊びのデザインなどがある。作品制作または論文にまとめる。状況に応じて実現方法を選び、質疑応答を経て進める。		
授業計画	第1回	ガイダンス：研究事例の紹介・研究の進め方	
	第2回	各自のテーマの絞り込み	
	第3回	各自のテーマとスケジュールを確認、コンセプトを記述	
	第4回	各自の研究の構想段階①：各自のテーマによる研究開始。情報収集、試作、または完成予想から	
	第5回	各自の研究の構想段階②：情報収集の見通し、試作の感触、または完成予想や要求仕様の追究	
	第6回	各自の研究の構想段階③：困難な部分や不明な見通しなどの感触も含めて、方針の確認と修正	
	第7回	中間チェック：コンセプトと構想段階の確認、具体化に向けての到達目標の絞り込みと実現方法の選択	
	第8回	各自の研究の具体化①：具体化の可能性をできるだけ広げる	
	第9回	各自の研究の具体化②：構想の中で具体化の位置づけ、具体化の範囲の絞り込み	
	第10回	中間チェックと具体化③：これまでの経過の振り返り、コンセプトと目標設定の再確認	
	第11回	各自の研究の具体化④：具体化の限界の把握	
	第12回	各自の研究：具体化⑤：最も大切な部分は何か	
	第13回	最終チェック：最終段階の補いとまとめを確認	
	第14回	各自の研究：補いとまとめ	
	第15回	発表と講評	
準備学習 (予習・復習等)	道具やシステムのデザインが効果的である場面や、逆に不足している状況を把握するために、ニュースや世界各地を紹介する番組を視聴するように。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 研究テーマ提出物:70%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
多民族社会アメリカⅡ		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) 多民族社会としてのアメリカを多面的に理解すること。 2) 卒業論文のテーマに関する文献を読み、卒業論文の原稿を書き進め、経過報告を行うこと。 3) 教員の論文指導を参考にしながら卒業論文を完成させること。		
授業の概要	同化、社会的格差、差別の歴史、アメリカの音楽、アメリカの言語事情などを主要なテーマとして講義を行う。また、卒業論文の書き方について解説し、卒業論文のテーマに関連するビデオ・DVDも適宜紹介する。受講者は、卒業論文に関連する文献について報告し、卒業論文の経過報告を行う。		
授業計画	第1回	卒業論文の書き方：リサーチの方法、論文の構成、過去のテーマなど	
	第2回	卒論のテーマ報告と論文レポート：グループ1	
	第3回	卒論のテーマ報告と論文レポート：グループ2	
	第4回	映画およびディスカッション1：同化	
	第5回	同化と人種民族間の社会的格差	
	第6回	映画およびディスカッション2：差別	
	第7回	アメリカの差別の歴史	
	第8回	卒論経過報告：グループ1	
	第9回	卒論経過報告：グループ2	
	第10回	映画およびディスカッション3：音楽	
	第11回	アメリカの音楽：黒人音楽の歴史など	
	第12回	映画およびディスカッション4：言語	
	第13回	多言語社会アメリカの言語事情	
	第14回	卒論発表：グループ1	
	第15回	卒論発表：グループ2	
準備学習 (予習・復習等)	卒業論文に関する発表の準備を行うこと。 卒業論文のテーマに関連する文献を読みながら、論文を書き進めること。		
テキスト	明石紀雄、飯野正子著『エスニック・アメリカ[第3版]』有斐閣、2011年		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業参加:20% 論文経過報告:20% 卒業論文:60%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
現代アメリカの社会と文化を学ぶ		後藤 千織 (ごとう ちおり)	
授業の到達目標 及びテーマ	文献講読（英語・日本語）や映像鑑賞を通じて、現代アメリカの社会と文化を学びます。資料の検索・収集方法、資料の読み方、議論の組み立て方など、論文作成に必要な技術を身につけ、中間報告での議論を組み込んで、卒業論文を完成させます。		
授業の概要	1時間目は、英文講読を通じて現代アメリカの社会や文化について学びます。2時間目は、アメリカや日本をはじめ、世界各国が多様性にどのように向き合っているのか学びます。並行して、それぞれの卒論の中間報告を行います。最後に、卒業演習発表会に向けて発表・質疑応答の練習をします。		
授業計画	第1回	英文講読／夏休みの研究成果の報告	
	第2回	英文講読／文献講読①	
	第3回	英文講読／文献講読②	
	第4回	英文講読／文献講読③	
	第5回	英文講読／卒論中間報告①	
	第6回	英文講読／卒論中間報告②	
	第7回	英文講読／卒論中間報告③	
	第8回	英文講読／卒論中間報告④	
	第9回	英文講読／卒論中間報告⑤	
	第10回	英文講読／文献講読④	
	第11回	卒論提出前の個別指導①	
	第12回	卒論提出前の個別指導②	
	第13回	卒論提出前の個別指導③	
	第14回	卒論発表会の準備／フィールド・ワーク	
	第15回	卒論発表の練習	
準備学習 (予習・復習等)	卒業論文の調査・執筆を各自で進め、隔週で下書きを提出する。		
テキスト	Christopher J. Armstrong/Anthony Piccolo/板倉巖一郎『Reading Contemporary America: 15 Critical Views of Culture and Society』（松柏社）；師岡康子『ヘイト・スピーチとは何か』（岩波書店、2013年）		
参考文献	授業時に適宜紹介します。		
評価方法	授業への参加姿勢:50% 卒業論文:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒論実践指導		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標 及びテーマ	入学後の英米文学・文化体験を振り返り、前期の演習で学んだ卒論スキルをもとに、各自テーマを決め、リサーチ、問い、パラグラフ作文を用いた構想、論証、推敲等の論文作成の課題に実践的に取り組む。またレジュメを使いながら進捗状況や中間報告、最終プレゼンテーションを行うことで、口頭での表現力や対話力も身につけてもらう。		
授業の概要	リポーターによるレジュメを用いたテキスト・資料報告、論文書式習得、パラグラフ作文推敲、メールレポート講評、論文構想、自由討議		
授業計画	第1回	導入～卒論テーマの候補報告1	
	第2回	メールレポート（パラグラフ作文）講評、テーマ候補2	
	第3回	メールレポート（パラグラフ作文）講評、リサーチ報告1	
	第4回	メールレポート（パラグラフ作文）講評、リサーチ報告2	
	第5回	テーマ決定・構想指導1、書式説明1	
	第6回	テーマ決定・構想指導2、書式説明2	
	第7回	テーマ決定・構想指導3、書式説明3	
	第8回	テーマ決定・構想指導4、書式説明4	
	第9回	中間報告1	
	第10回	中間報告2	
	第11回	中間報告3	
	第12回	中間報告4	
	第13回	提出指導	
	第14回	文集仕上げ1・合評会準備1	
	第15回	文集仕上げ2・合評会準備2	
準備学習 (予習・復習等)	1. メールレポートによるパラグラフ作文下書き&推敲 2. 卒論構想案 3. 中間報告用レジュメと報告準備 4. 卒論推敲		
テキスト	榎木伸明『卒論を書こう』（三修社）		
参考文献	随時紹介		
評価方法	卒業論文・合評会:60% メールレポート:10% リポーター:20% 小報告:5% 討議への参加度:5%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
異文化間コミュニケーション		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では音声言語、身体言語、文化の観点から異文化間コミュニケーションの性質と問題点、その克服法に関する理解を深めることを目標とします。後期も日米間での英語によるコミュニケーションを想定し、まず最初にジェスチャーや時間、空間などに関する非言語的要素、次に自己認識や欲求、価値観、役割などの文化的側面について検討します。		
授業の概要	基本的には上記の事柄に関する文献をグループワークの形で読み、各グループの代表者がその内容を発表する、という形式で授業を進めます。また、通年の範囲内の事柄から卒業論文のテーマを決め、それに関する口頭発表も行います。卒業論文の執筆に関する相談・指導も随時行います。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	非言語的要素の役割と問題点	
	第3回	動作	
	第4回	外見	
	第5回	身体接触／口頭発表	
	第6回	空間／口頭発表	
	第7回	時間／口頭発表	
	第8回	周辺言語／口頭発表	
	第9回	異文化の影響と問題点／口頭発表	
	第10回	知覚・認識	
	第11回	自己認識	
	第12回	欲求	
	第13回	価値観・信念・態度	
	第14回	役割	
	第15回	まとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく考えておいて下さい。		
テキスト	テキストは使用せず、プリントを配布します。		
参考文献	必要に応じて授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:20% 授業参加度:20% 中間発表:10% 卒業論文:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
デザイン造形による作品制作		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標及びテーマ	デザインは社会と密接に関わることから、普遍的な造形美が求められる。このデザイン造形の研究により、他者とコミュニケーションする社会性をもった表現力を身につけることを目標とする。Ⅱでは鑑賞にたえる完成度の高い作品制作を目指し、発表によりプレゼンテーション力を養う。		
授業の概要	前期に絞り込んだテーマに合わせた表現技法、素材を各自で選択する。エスキース・試作の段階での発表と中間講評を経て本制作にとりかかる。制作は各自が授業外の時間も使って進め、授業ごとに経過の確認、個別の指導を行う。		
授業計画	第1回	各自のテーマの確認／表現技法・素材の選択	
	第2回	エスキース 1	
	第3回	エスキース 2	
	第4回	構想の決定 (平面の場合: 画面サイズの決定／立体の場合: 素材とサイズの決定)	
	第5回	試作 1 (平面の場合: 色彩試作／立体の場合: 制作方法試作)	
	第6回	試作 2 (平面の場合: 色彩試作／立体の場合: 制作方法試作)	
	第7回	試作の提示 (平面の場合: 色彩の決定／立体の場合: 制作方法の決定)	
	第8回	作品制作 1 (平面の場合: 下描き／立体の場合: 材料準備)	
	第9回	作品制作 2 (平面の場合: 下描き／立体の場合: 材料加工)	
	第10回	作品制作 3 (平面の場合: 着彩／立体の場合: 材料加工)	
	第11回	作品制作 4 (平面の場合: 着彩／立体の場合: 組立て)	
	第12回	作品制作 5 (平面の場合: 着彩、仕上げ／立体の場合: 組立て、仕上げ)	
	第13回	講評会、まとめ	
	第14回	卒業展展示準備および発表会準備	
	第15回	卒業展展示	
準備学習 (予習・復習等)	後期の授業が始まる前に、テーマに合わせた表現技法、素材などを検討しておく。 エスキースの段階では授業時間外に参考資料の収集を行なっておく。 授業時間は経過の確認と指導にあてるので、時間外に制作を進めることが必要になる。 最後に作品についてのレポートをまとめ、発表のレジュメを作成し、準備する。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:20% 卒業制作作品:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
比較文化論に関連する卒業論文を書く		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	(卒業論文の作成) 前期から決めたテーマに関する卒業論文を書く。文献の集め方、論文の構成、論文の書き方を学ぶ。 研究の口頭発表の仕方を学ぶ。 (英語) 比較文化に関連する英語のテキストを読み、話し合う。 以上の二つを並行して進める。		
授業の概要	卒業論文に関しては、適宜、各自の研究を途中で報告しつつ、卒業論文を完成させる。 英語のテキストを決め、輪読する。 現代社会における比較文化について考え、議論する。		
授業計画	第1回	卒論に関する報告	
	第2回	卒論の進め方、書き方について検討する	
	第3回	卒論に必要な文献についての報告(1)	
	第4回	卒論に必要な文献についての報告(2)	
	第5回	卒論に必要な文献についての報告(3)	
	第6回	卒論に必要な文献についての報告(4)	
	第7回	卒論の中間発表(1)	
	第8回	卒論の中間発表(2)	
	第9回	論文の形式について(1)	
	第10回	論文の形式について(2)	
	第11回	論文の仮提出	
	第12回	論文の改訂	
	第13回	論文の提出	
	第14回	論文についての口頭発表	
	第15回	論文の評価	
準備学習 (予習・復習等)	卒業論文の一部を文書で提出する。 論文に関する研究、執筆を各人がすすめる。		
テキスト	授業時間中に指示する		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	演習での発表・議論:25% 英語:25% 卒業論文:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒業論文の完成		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	卒業論文を完成させる。		
授業の概要	卒業論文の作成に向けた個別指導と、邦文文献のブックレポートと英文資料の輪読・講読を行う。個別指導では、隔週で論文メモを提出してもらう。輪読の素材としては、卒業論文のテーマと関連する文学作品や関連資料を適宜選定し、共同で読み進める。当然ながら、指示されたプロセスを経なければ、卒業論文として受理しない（むしろプロセスのほうを重視する）。また、卒業論文提出後には、口頭でのプレゼンテーションの準備を行う。		
授業計画	第1回	夏休み中の進行状況についての報告	
	第2回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（主要文献の要約）	
	第3回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（参考文献の要約）	
	第4回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（論旨の骨格と章立てを検討）	
	第5回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（引用箇所を検討）	
	第6回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（直接引用やパラフレーズなど、引用方法の検討）	
	第7回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（論旨主要部分）	
	第8回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（論旨サポート部分）	
	第9回	文献講読とブックレポート、論文メモの提出（序と結び）	
	第10回	論文草稿のチェック（論旨の骨格と章立ての決定）	
	第11回	論文草稿のチェック（注の付け方などの検討）	
	第12回	論文草稿のチェック（表記統一などの確認）	
	第13回	本文最終チェックから卒業論文完成へ	
	第14回	プレゼンテーションの準備（発表原稿の作成）	
	第15回	プレゼンテーションの準備（Power Point原稿の作成）	
準備学習 (予習・復習等)	予習：必要な資料を読み、論文メモを作成する。指定された英文資料を自分なりに読んでみる。 復習：授業中に受けたコメントを参考に、論文メモを書き直す。講読した資料が自分のテーマとどのように関わるかを考える。		
テキスト	英語文献はプリントとして配布する。ブックレポートで取り上げる本は各自で用意すること。		
参考文献	論文の進行状況に応じて個別に指示する。		
評価方法	平常点（課題提出）：50% 卒業論文：40% 口頭発表：10%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
アメリカ1920年代 (Jazz Age) とロスト・ジェネレーションの作家たち		宮内 華代子 (みやうち かよこ)	
授業の到達目標及びテーマ	アメリカ1920年代 (Jazz Age) 又は「失われた世代」の作家たちに関する卒業論文の完成。テーマ例：ロスト・ジェネレーション/フィッツジェラルド/ヘミングウェイ/ジャズ・エイジ/映画・ジャズ・自動車の流行/ファッション (道徳) 革命/アメリカン・ドリーム/禁酒法/フラッパー/カポネとギャング/大強気相場/『グレート・ギャツビー』と村上春樹		
授業の概要	卒業論文原稿作成・添削指導/配布プリント (英文) の講読・内容理解/テキスト輪読/担当者の発表/随時課題に対する記述式答案作成/毎回個別論文指導		
授業計画	第1回	<卒論目次決定・参考文献・論文執筆開始>	
	第2回	Back to Normalcy, (F) Babylon Revisited	
	第3回	The Big Red Scare	
	第4回	America Convalescent,	
	第5回	<論文進捗状況発表と質疑応答>	
	第6回	The Revolt against the Accepted American Order	
	第7回	Harding and the Scandals, Maxwell Perkins	
	第8回	Coolidge Prosperity, Gertrude Stein & Sylvia Beach	
	第9回	The Ballyhoo Years, Shakespeare & Company	
	第10回	The Revolt of the Highbrows	
	第11回	Aftermath:1930-31	
	第12回	DVD鑑賞 ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』	
	第13回	<卒論発表会その1>	
	第14回	<卒論発表会その2>	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	読む面白さ、研究の楽しさがわかるようになるまで、作品を深く読むように心がける。 授業でとりあげる作品の該当箇所を前もって丁寧に予習して読んでから授業に出席すること。 授業内で発表・質問ができるように充分予習して授業に臨むこと。 積極的に研究を深め、卒業論文の原稿執筆をすすめてから授業に出席すること。		
テキスト	以下、「卒業演習Ⅰ」と同じ Winter Dreams (研究社) Contemporary American Short Stories (3) (南雲堂) Indian Camp and Other Stories (成美堂)		
参考文献	F. L. Allen, <i>Only Yesterday</i> , Harper and Row S. Beach, <i>Shakespeare & Company</i> , Univ. of Neb. A. Turnbull, Scott Fitzgerald. Scribner's		
評価方法	卒業論文:40% 卒業演習発表:20% 平常点:40%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
20世紀イギリス小説精読・続 『眺めのいい部屋』		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期に引き続き、E. M. フォースターの作品を題材に20世紀初頭イギリスの社会とその問題への理解を深め、現代日本の自分に引きつけて考察し、期末には卒業論文を作成する。		
授業の概要	前半は教室にて教員による解説を加えながら、卒業論文・レポートの書き方に関する文献を読む。後半では各学生に対するチュートリアル（個人指導）を行い、ディスカッションをまじえつつ卒業論文作成に向けて段階的に準備する。論文の方向性や作成の技術についても同時に指導する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 卒業論文作成スケジュール確認	
	第2回	講義① アカデミック・ライティングとは	
	第3回	講義② 論文の書き方 テーマ編	
	第4回	講義③ 論文の書き方 技術編	
	第5回	講義④ 実際に論文を読む	
	第6回	講義⑤ アウトライン作成指導	
	第7回	美術館訪問	
	第8回	チュートリアル①	
	第9回	チュートリアル②	
	第10回	チュートリアル③	
	第11回	チュートリアル④	
	第12回	論文提出前最終確認	
	第13回	卒業論文提出	
	第14回	卒業論文の講評	
	第15回	卒業演習発表会の準備	
準備学習 (予習・復習等)	年度末の論文提出に向けて各自執筆準備を進める。講義内容の理解を深め、図書館などを利用して各自が参考文献のリストを作成する。段階的に草稿（ドラフト）を提出し、教員の添削を受ける。		
テキスト	学生の関心に合わせて各自で選定。		
参考文献	授業内で適宜指導。		
評価方法	中間発表:20% 卒業論文:60% 卒業演習発表会参加:20%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
日英語意味論		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	ことばは私たちの考え・捉え方に形を与え、そして人と人との結びつきを作り上げてくれます。本講座では、「あることばが使われるとき、それはどのような捉え方が反映されているのだろうか」という角度から、様々な言語事象を日本語と英語を比較しながら考え、「ことば」のおもしろさを一緒に楽しんでいきたいと思います。		
授業の概要	本講座では「意味論」と呼ばれる範疇でのさまざまな日英語の意味を分析していきます。担当者の講義と受講生の議論を進めます。 卒業論文執筆に関しては、前期の①卒業論文題目提出に続き、②研究計画、③中間報告、④最終報告を経て⑤提出というプロセスを踏みます。①～④のプロセスは⑤の必須要件。		
授業計画	第1回	卒業論文研究計画発表・卒業論文執筆ガイダンス・後期イントロダクション	
	第2回	英語テンス：現在形・過去形	
	第3回	英語完了相	
	第4回	英語進行相：ペンドラーによる分析	
	第5回	日本語テンス	
	第6回	日本語進行相：金田一による分析	
	第7回	卒業論文中間報告	
	第8回	受動態：英語受動態の機能	
	第9回	受動態：英語受動態の歴史	
	第10回	受動態：日本語受動態 直接受け身	
	第11回	受動態：日本語受動態 間接受け身	
	第12回	英語二重目的語構文	
	第13回	英語二重目的語構文	
	第14回	卒業論文最終報告	
	第15回	卒業論文発表・試問	
準備学習 (予習・復習等)	各テーマごとに出される課題を考察し、ゼミにて発表、レポートという形で提出。 卒業論文研究計画書・中間報告・最終報告を行ったうえで、卒業論文を提出。		
テキスト	特定のテキストは用いず、担当者によるプレゼンテーションで進める。英語辞書・A4サイズのバインダーを持参のこと。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	議論課題・授業貢献:50% 卒業論文②～⑤:50%		

人間社会研究	後期 2 単位	1年
先端技術（スマホ）と学問		
<p>【担当教員】</p> <p>植月 美希（うえつき みき）、宇田 美江（うだ みえ）、宇都宮 由佳（うつのみや ゆか）、清水 康幸（しみず やすゆき）、武田 美亜（たけだ みあ）、谷本 信也（たにもと しんや）、信澤 久美子（のぶさわ くみこ）、橋本 典子（はしものりこ）、廣田 道夫（ひろた みちお）、堀川 照代（ほりかわ てるよ）、宮田 雅智（みやた まさのり）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ></p> <p>人間社会研究は現代の諸問題とそれぞれの学問との関わり、またその物が、あるいは概念が学問にどのような新しい視点を提示したのか、更にその新たなものは学問にどのような利点をもたらし発展させたのか、学問の弱点を人々に意識させたのか、それぞれの学問の相違や考え方の方法論等を考察し、学生の皆様に講義を通してそれぞれの学問がどのようなものなのか、どこに特徴があるかを知ってもらうことを目的とする。今年は最先端技術でありながら、道具として我々の手中にあり、現在では小学生も持つ「スマホ」をそれぞれの学問の視点から考察する。指で触れることによって最新のニュースや必要な情報が入り、友達と簡単に連絡を取ることが出来る便利な道具（スマホ）を中心に考える。</p> <p><授業の概要></p> <p>人間社会専攻の11名の先生方がそれぞれ自分の専門分野の視点から「スマホ」を考え、オムニバス形式で授業を行う。今年は同時に人の話を聞きながらそれをまとめる「マップ」、企業内でも「マップ」をいかに描くかが問われているので、その経験をしてもらうつもりで「マップの制作」も課題とする。</p> <p><授業計画></p> <p>第1回 インTRODクシヨン：「マップ（MAP）」の説明 堀川 第2回 スマホ×社会心理学 武田 第3回 スマホ×哲学、美学、倫理学 橋本 第4回 スマホ×教育学 清水 第5回 スマホ×経営学 宇田 第6回 スマホ×法律学 信澤</p> <p>第7回 まとめ（1） レポート提出、マップ提出</p> <p>第8回 スマホ×食文化 宇都宮 第9回 スマホ×情報科学 宮田 第10回 スマホ×栄養・食品科学 谷本 第11回 スマホ×心理学 植月 第12回 スマホ×環境科学 廣田 第13回 スマホ×人間社会学問連関 橋本</p> <p>第14回 まとめ（2）</p> <p>第15回 スマホの将来 （対話）堀川 橋本</p> <p><準備学習（予習・復習等）></p> <p>適宜指示する。</p> <p><テキスト></p> <p>それぞれの先生が指示する。プリントを配布する。</p> <p><参考文献></p> <p>必要に応じ授業の際に示す。また授業の際に教室にもって行って示す。</p> <p><評価方法></p> <p>レポート2回 まとめ（1）（2）の際に提出 各A4、1枚 マップ 計2枚 以上計70%</p> <p>平常点 30%</p>		

現代社会と倫理A		前期 2 単位	1・2年
代表的な倫理的立場について考察することで「善いとはどういうことか」について考える。		福田 敦史 (ふくだ あつし)	
授業の到達目標 及びテーマ	倫理的な立場・考え方が異なると「あることが倫理的に善いとみなされるのはどうしてか」という問いに対する回答が、どのように異なってくるのかについて理解する。そして、いくつかの倫理的な立場の検討を通して「善いとはどういうことか」という問題について考えることができるようになる。		
授業の概要	授業では、さまざまな倫理的立場のうちから、「地域や文化が異なれば善悪の基準も違ってくる(相対主義)」という立場と「善悪とは客観的な事柄ではない(主観主義)」という立場を主にとりあげます。講義を中心に進めますが、期間中に数回、講義内容についての簡単なペーパーを書いてもらい、検討したり回答したりする時間を設けます。		
授業計画	第1回	イントロダクション：倫理について考えること	
	第2回	文化的相対主義（1）：ヘロドトスが伝えたいこと	
	第3回	文化的相対主義（2）：文化ごとの生活習慣などの違い	
	第4回	文化的相対主義（3）：文化や習俗に優劣はない	
	第5回	道徳相対主義（1）：相対主義を道徳にあてはめてみるとどうなるか	
	第6回	道徳相対主義（2）：あなたはFGMを許容するか否か	
	第7回	道徳相対主義（3）：隠された共通性に目を向けること	
	第8回	倫理的な主観主義（1）：客観的事実ではない道徳	
	第9回	倫理的な主観主義（2）：主体の感情に基づいた道徳	
	第10回	情緒主義（1）：道徳判断とは何をしていることなのか	
	第11回	情緒主義（2）：感情の表れとしての道徳判断	
	第12回	情緒主義（3）：態度を報告すること・表明すること	
	第13回	指令主義（1）：命令としての道徳判断	
	第14回	指令主義（2）：道徳の客観性・普遍性	
	第15回	まとめ：倫理についての立場の違いから見えてくること	
準備学習 (予習・復習等)	その日の授業で取り上げたことについて、自分が理解できたことと、疑問に思ったこと（理解できなかったことやおかしいと思ったこと）とを確認してください。疑問に思ったことはそのままにせず、授業後のペーパーに書いたり実際に質問をするなどして、自分の考察を深める契機とするようにしましょう。		
テキスト	特になし。代わりにハンドアウトを配布することがあります。		
参考文献	ジェームズ・レイチェルズ『現実をみつめる道徳哲学』小牧徳生・次田憲和訳、晃洋書房、2003年。 坂井昭宏・柏葉武秀（編）『現代倫理学』ナカニシヤ出版、2007年。 赤林朗（編）『入門・医療倫理Ⅱ』勁草書房、2007年。		
評価方法	試験 or レポート:70% リアクションペーパー:30%		

現代社会と倫理B		後期 2 単位	1・2年
代表的な倫理学的立場について考察することで「善いとはどういうことか」について考える。		福田 敦史 (ふくだ あつし)	
授業の到達目標及びテーマ	倫理的な立場・考え方が異なると「あることが倫理的に善いとみなされるのはどうしてか」という問いに対する回答が、どのように異なってくるのかについて理解する。そして、いくつかの倫理学的な立場の検討を通して「善いとはどういうことか」という問題について考えることができるようになる。		
授業の概要	授業では、「自分がすべきことは自分が一番よく知っている(利己主義)」という立場、「多くの人が幸せになることが善いことだ(功利主義)」という立場、「すべきことは端的にしなければならない(義務論)」という立場を主にとりあげます。講義を中心に進めますが、期間中に数回、講義内容についての簡単なペーパーを書いてもらいます。		
授業計画	第1回	イントロダクション：倫理について考えること	
	第2回	心理的利己主義（1）：自分の利益になることをする	
	第3回	心理的利己主義（2）：行動を利己的に解釈する	
	第4回	心理的利己主義（3）：心理的利己主義の問題点	
	第5回	倫理的利己主義（1）：ふたつの利己主義の違い	
	第6回	倫理的利己主義（2）：利己主義から利他主義を考える	
	第7回	功利主義（1）：最も多くの人が最も幸せになるように	
	第8回	功利主義（2）：結果がよければいいのだろうか	
	第9回	行為功利主義と規則功利主義：ふたつの功利主義	
	第10回	規則功利主義（1）：何が功利的であるのか	
	第11回	規則功利主義（2）：功利主義から考える道徳的普遍性	
	第12回	義務論（1）：どんなときでも嘘をついてはいけないか	
	第13回	義務論（2）：端的にすべきである	
	第14回	義務論（3）：義務論から考える道徳の個別性	
	第15回	まとめ：倫理についての立場の違いから見えてくること	
準備学習 (予習・復習等)	その日の授業で取り上げたことについて、自分が理解できたことと、疑問に思ったこと（理解できなかったことやおかしいと思ったこと）とを確認してください。疑問に思ったことはそのままにせず、授業後のペーパーに書いたり実際に質問をするなどして、自分の考察を深める契機とするようにしましょう。		
テキスト	特になし。代わりにハンドアウトを配布することがあります。		
参考文献	ジェームズ・レイチェルズ『現実をみつめる道徳哲学』小牧徳生・次田憲和訳、晃洋書房、2003年。 児玉聡『功利主義入門』ちくま新書、2012年。 田中朋弘『文脈としての規範倫理学』ナカニシヤ出版、2012年。		
評価方法	試験 or レポート:70% リアクションペーパー:30%		

哲学A		前期 2 単位	1・2年
古代・中世の自然観・人間観・世界観		橋本 典子（はしもと のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>哲学的術語の意味を理解し、哲学の知的基礎をしっかりと身につける。古代からの本来的知恵を確認し、哲学的に考察することを可能にする。西洋の古代、中世、ルネサンスの自然観、人間観、世界観を中心に論じ、現代社会で「よく生きること」とは何か、哲学史に登場した哲学者達の考えから導出する。</p>		
授業の概要	<p>講義を中心に進める。哲学史の基本的な知識を確実なものとするべく、哲学のダイナミックな展開を明確にし、哲学的考えを理解したうえで、時々それまでのまとめと問題点を明らかにする。対話形式を実践し、哲学に於ける「対話」の重要性を経験できるように努力する。必ず事前にテキストを読んでくること、また授業後に「まとめ」をしておくこと。提出を課することがある。</p>		
授業計画	第1回	序論、哲学の基礎知識と現代社会での意味	
	第2回	ソクラテス以前の哲学、東の自然観と西の宗教的特質	
	第3回	哲学の始まり、アルケーについての問い	
	第4回	パルメニデースとエムペドクレース、「物」についてと「神」について	
	第5回	人間を哲学の根本問題とする、ソクラテスについて	
	第6回	プラトーン初期対話篇—倫理的問い	
	第7回	プラトーンの二世界説—イデア論	
	第8回	プラトーンの『国家』と宇宙論の展開	
	第9回	アリストテレスの学問体系と形而上学	
	第10回	徳論、幸福論、「よく生きること」とポリスの学	
	第11回	実践哲学、混乱の時代の哲学、コスモポリタンの意味	
	第12回	宗教と哲学、ユダヤ思想とキリスト教	
	第13回	教父哲学、ギリシア教父とラテン教父—グレゴリウスとアウグスティヌス—	
	第14回	大学の精神、アベラール、中世哲学の特徴	
	第15回	トマス『神学大全』とルネサンスの哲学—神と人間	
準備学習 (予習・復習等)	<p>事前にテキストを読んで授業に出席すること。次回までに読んでくるところは事前に指示する。適宜プリントを配布するのでそれらを理解し、ノートを作ること。必要に応じ、それらについてのレポートの提出を課する。</p>		
テキスト	<p>今道友信『西洋哲学史』（講談社学術文庫） 必要に応じてプリントを配布する。</p>		
参考文献	<p>必要に応じて紹介し使用する 『プラトン全集』『アリストテレス全集』『アウグスティヌス著作集』他</p>		
評価方法	<p>学期末試験：60% 授業への参加及び貢献：20% レポート：20%</p>		

哲学B		後期 2 単位	1・2年
近世から現代までの世界観の変遷		橋本 典子（はしもと のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	近世、近代、現代の世界観の変遷を、人間と社会の連関を中心に理解することを目的とする。それぞれの時代の知的文化を形成し、これを支えてきた基本的考えを的確にとらえる。時代を牽引した哲学を論じ、それらの哲学の現代への影響と現在の我々の在り方を考察する。		
授業の概要	講義を中心に進めるが、哲学のダイナミックな展開を明確にし、それぞれの哲学者の考えを互いの影響関係を軸に体系的に考える努力をする。時々まとめと問題点を明らかにすることによって哲学史の流れを的確に捉えられるようにする。対話形式を実践し、哲学における「対話」の重要性を実感できるようにする。事前テキストを読み、また授業後「まとめ」をしておくこと。時に提出を課する。		
授業計画	第1回	Humanism の考えとピコー人間の尊厳について	
	第2回	エラスムスとモーア—理想と現実	
	第3回	自我の発見、デカルト『方法序説』	
	第4回	デカルトの方法論、神の存在証明、心身二元論	
	第5回	ホッブスの社会思想、国家論	
	第6回	考える葦—パスカルの人間論と神の問題	
	第7回	ライプニッツ—二つの真理と汎神論	
	第8回	イギリス経験論—ロック、ヒューム、バークリ	
	第9回	カント、理論と実践の関係—道徳論の位置づけ	
	第10回	超越論—カントの立場と『永遠平和のために』	
	第11回	ドイツ観念論—ロマン主義と芸術	
	第12回	シェリング、同一性の哲学とその克服としてのヘーゲル	
	第13回	ヘーゲル、弁証法と歴史の展開	
	第14回	ニーチェ、キルケゴール、現代哲学の始まり	
	第15回	象徴論と宗教学—リクールとレヴィナス	
準備学習 (予習・復習等)	事前テキストを読んで授業に出席すること。次回までに読んでくる箇所は指示する。適宜プリントを配布するのでそれらを理解し、ノートを作成すること。必要に応じてそれらについてのレポートの提出を課する。		
テキスト	今道友信『西洋哲学史』（講談社学術文庫）		
参考文献	講義の際に紹介し参照する。『カント全集』、『ヘーゲル全集』等の全集 その他、哲学者たちの著作集、研究書等必要に応じて使用する。		
評価方法	学期末試験:55% 授業への参加及び貢献:35% レポート:10%		

数学A		前期 2 単位	1・2年
一筆書きの数理／魔方陣の数理		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	比較的身近な題材を通して数学を学びます。2つのテーマ（一筆書き、魔方陣）をとりあげ、数学的な意味を理解するとともに、数学的思考力を身につけます。		
授業の概要	2つのテーマを数回の授業で完結するように進めていきます。一方的に講義を聞くだけでなく、演習を通して、問題の本質がどこにあるかを考え、その意味を明らかにし、数学の面白さを体験したいと思います。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	一筆書きの数理：ケーニヒスベルグの橋渡り	
	第3回	グラフの定義、次数、偶点と奇点	
	第4回	数学的帰納法	
	第5回	一筆書きの条件	
	第6回	イリテーションパズルと彩色グラフ	
	第7回	順列グラフと有向グラフ	
	第8回	重畳彩色グラフ	
	第9回	魔方陣の数理：魔方陣の定義、行列	
	第10回	色々な魔方陣	
	第11回	自然方陣の性質	
	第12回	自然方陣と魔方陣	
	第13回	汎魔方陣とは	
	第14回	汎魔方陣の条件	
	第15回	汎魔方陣の作成	
準備学習 (予習・復習等)	配布資料を熟読し、特に復習を確実に行ってください。また、授業中に課すレポートは必ず提出してください。		
テキスト	資料を配布します。		
参考文献	必要に応じて紹介します。		
評価方法	レポート:60% 平常点:40%		

数学B		後期 2 単位	1・2年
二進法／素数		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	比較的身近な題材を通して数学を学びます。2つのテーマ（二進法、素数）をとりあげ、数学的な意味を理解するとともに、数学的思考力を身につけます。		
授業の概要	2つのテーマを数回の授業で完結するように進めていきます。一方的に講義を聞くだけでなく、演習を通して、問題の本質がどこにあるかを考え、その意味を明らかにし、数学の面白さを体験したいと思います。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	二進法の数理：スイッチの形	
	第3回	二進法と十進法	
	第4回	倍加法と逆倍加法	
	第5回	二進数の演算	
	第6回	数当てゲーム、二進カードの分類	
	第7回	情報のデジタル化（1）文字のデジタル化	
	第8回	情報のデジタル化（2）音と画像のデジタル化	
	第9回	素数：素数の定義、エラトステネスのふるい	
	第10回	素数は無限にあるか	
	第11回	素因数分解の一意性	
	第12回	約数の和	
	第13回	完全数	
	第14回	メルセンヌ数とユークリッド型完全数	
	第15回	素数と暗号	
準備学習 (予習・復習等)	配布資料を熟読し、特に復習を確実に行ってください。また、授業中に課すレポートは必ず提出してください。		
テキスト	資料を配布します。		
参考文献	必要に応じて紹介します。		
評価方法	レポート:60% 平常点:40%		

芸術人間学		前期 2 単位	1・2年
芸術創造と人間		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	21世紀の人間の在り方や芸術の在り方を追究するためには、芸術を、環境を形成する壮大なプロジェクトと見る「新しい芸術観」に基づく考察が必要である。芸術人間学は20世紀後半からの新しい学問で、個別の芸術作品や様々な芸術現象の考察をとおして人間を論ずるものである。西洋と東洋の比較芸術、芸術現象の様々な歴史的事実を多角的に理解する。		
授業の概要	講義形式で行うので必ず出席すること。必要に応じてレポートを課する。芸術の諸問題をテーマに即して論ずるが、現代に於ける芸術の重要性を常に考えながら授業を進める。事前にプリントを配布したり、課題を与えるのでそれらを予習として目を通しておくこと、更に授業後「まとめ」をしておくこと。提出を課することがある。		
授業計画	第1回	序論、芸術人間学の定義	
	第2回	西洋に於ける創造論—「創世記」光あれ！	
	第3回	人間の創造—芸術家の創造行為、Instauration (創建)	
	第4回	artの概念—動物のartと芸術家のart	
	第5回	現代の環境—技術連関と芸術 (コンピューターアーツ)	
	第6回	靈感説—プラトンの『イオン』磁石の説	
	第7回	超越—孔子の芸術段階説	
	第8回	芸術作品の層構造—スーリオの美学	
	第9回	模倣と表現—逆現象の同時展開、東西の芸術論比較	
	第10回	ルネサンスの芸術観—絵画科学	
	第11回	東洋の芸術論—書道論に於ける制作論	
	第12回	抽象芸術の提出した問題	
	第13回	技術時代に於ける人間の存在—マルセルの芸術論	
	第14回	時間と芸術表現—ラオコーン群像	
	第15回	芸術人間学の将来	
準備学習 (予習・復習等)	事前にプリントを配布するのでそれを読んだり、他に指示する書物を読んで予習をすること。授業後「まとめ」を作成すること。提出を課することもある。		
テキスト	『講座美学』1ー5。(東京大学出版会)から問題に応じてテキストを配布する。また必要に応じてプリントを使用する。		
参考文献	必要に応じて授業中に紹介する。またプリントにして配布する。		
評価方法	試験:60% コミュニケーション力:35% レポート:5%		

美学		後期 2 単位	1・2年
美の学 (Calonologia) 研究		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	美は真・善と並んで重要な価値である。美は芸術作品だけが具現する価値なのか。否。人間は芸術ばかりでなく、自然、技術的な機械、人間の行為などにも美を見出す。講義では、古代からヘーゲルまでの美学の緒論を紹介し、最後に、現代に於ける美学をカロノロジア (Calonologia) として、その方向性を論じる。美の価値の現代的意味を理解する。		
授業の概要	古典古代のプラトーンは超越的なイデアを目指す“美 (ト・カロン) の学”を最高の学とした。つまり18世紀の“美学”成立以前に美を論じた“美の学”はあった。講義では古代から現代までの美についての緒論を紹介し、最後に現代の美学をカロノロジアとして論ずる。講義形式で行うが、レポートも必要に応じて課する。		
授業計画	第1回	序論、美学の定義	
	第2回	美学の始まりーバウムガルテンの感性学	
	第3回	日本に於ける美学ー「美学」の語の翻訳の問題ー西周	
	第4回	ギリシア悲劇ー3大悲劇詩人	
	第5回	プラトーンの「美の学」と靈感説	
	第6回	アリストテレスの『詩学』	
	第7回	中世美学の特徴ー典礼、超越と光	
	第8回	象徴の美学ー象徴と解釈の問題	
	第9回	トマスの超越論ーキリスト教的美学	
	第10回	フランスの合理主義美学ー数と「真実らしさ」	
	第11回	カント美学ー崇高論と天才論ー自然美	
	第12回	ロマン主義の芸術観ー詩、絵画、音楽	
	第13回	ドイツ観念論の美学ーシェリングとヘーゲルー自然美と芸術美	
	第14回	日本の美学ー詩歌論、間の問題	
	第15回	カロノロジアと芸術の学	
準備学習 (予習・復習等)	事前にプリントを配布するのでそれを読んだり、課題を出すのでそれを調べて予習をすること。更に授業後「まとめ」をしておくこと。提出を課することがある。		
テキスト	今道友信『講座美学』1 美学の歴史 (東京大学出版会)、絶版のためプリントを使う		
参考文献	今道友信『美について』 (講談社現代新書) 必要に応じて授業中に紹介をする。		
評価方法	試験:60% コミュニケーション力:35% レポート:5%		

芸術鑑賞		前期 2 単位	1・2年
西洋近現代美術史と鑑賞方法		阿部 真弓（あべ まゆみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・19世紀末から1960年代までの西洋近現代美術史の基礎を理解する。 ・絵画、彫刻を主とした美術作品の鑑賞方法を身につける。 ・美術作品の鑑賞を通して、芸術や文化の普遍的問題についての考察を深める。 ・現代社会における美術鑑賞や展覧会の多様な可能性について知識を得る。 ・芸術鑑賞と市民社会や地域社会の関係をめぐり、欧米および日本における理念と実践を学ぶ。 ・鑑賞した作品について表現する文章力を鍛える。 		
授業の概要	<p>1) 西洋近現代美術の歴史の基礎：作品図版をスライドで見ながら講義を進める。重要作品に焦点を当て、様式、技法、文学的背景、宗教、社会、異文化、都市、技術など多様な文脈において説明する。コメントカードにフォローする時間を設け、質問に答える。2) 芸術鑑賞の歴史、理念、実践：近年、芸術鑑賞の可能性はいつその多様性を拡げている。「享受」型から「参加」型に注目が集まる、芸術鑑賞の「いま」について、世界の美術館や美術のさまざまな現場における諸例を取り上げ、芸術と市民・地域社会との関係について多面的に把握してもらう。3) 作品鑑賞：国立西洋美術館の常設展を見学する。鑑賞レポートを提出してもらい、文章表現の指導を行う。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション——西洋近現代美術の作品鑑賞にあたって	
	第2回	印象派	
	第3回	ポスト印象派	
	第4回	象徴主義	
	第5回	フォーヴィスム	
	第6回	セザンヌからキュビズムへ	
	第7回	未来派とダダイスム	
	第8回	抽象絵画の誕生	
	第9回	シュルレアリスムと古典回帰	
	第10回	抽象表現主義とポップ・アート	
	第11回	マルセル・デュシャンからコンセプチュアル・アートへ	
	第12回	現代美術の鑑賞方法	
	第13回	現代社会における芸術鑑賞（1） 芸術と市民社会、地域社会	
	第14回	現代社会における芸術鑑賞（2） 近現代美術と展示空間	
	第15回	美術館の見学（講義中に期日を指定する）	
準備学習 (予習・復習等)	講義中に紹介する展覧会を積極的に見学し、参考図書を読むことが望ましい。		
テキスト	毎回、レジュメおよび関連テキストを配布する。		
参考文献	講義の中で基本文献およびテーマ毎の参考文献を紹介する。		
評価方法	授業態度・熱心さ:25% レポート:50% 小テスト:25%		

歴史学		前期 2 単位	1・2年
歴史学入門		原 賢治 (はら けんじ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、歴史学とはいかなる学問であるのかを知り、それを通じて受講者が先入観にとらわれずに自分なりの歴史認識・歴史像を得るための手がかりを身につけることを目標とします。		
授業の概要	本講義では、これまでに受講生が学んできた「歴史」や身の周りにある過去の出来事から一步踏み込んで、学問として歴史学とはいかなるものかを説明してゆきます。とくに、歴史研究の材料（史料）、隣接分野との関わり、研究方法などを中心に歴史学の現状を学びつつ、今日歴史学にどのような役割があるのかを展望します。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	「世界史」とは	
	第3回	時代区分	
	第4回	教科書と歴史学	
	第5回	物語と歴史学	
	第6回	史料	
	第7回	史実	
	第8回	比較	
	第9回	歴史家の視点	
	第10回	人文学と歴史学：大衆	
	第11回	人文学と歴史学：構造主義	
	第12回	社会史	
	第13回	女性史	
	第14回	歴史学の役割	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：特になし 復習：講義の内容をまとめる		
テキスト	特になし		
参考文献	講義の際に紹介する		
評価方法	定期試験：80% 受講態度：20%		

西洋史 A		前期 2 単位	1・2年
西洋古代史		原 賢治 (はら けんじ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、西洋古代の社会や文化などの特徴とともに、西洋史全体における古代の位置づけを学ぶことを通じて、西洋古代とはいかなる時代であったのかについて知見を得ることを目標とします。		
授業の概要	<p>本講義は西洋古代史(古典古代、ギリシア・ローマ史)を対象とします。都市(ポリス、キヴィタス)とその市民たちの生活、王・皇帝たち支配者のありかた、文化や宗教といった古代の特徴があらわれる諸相に焦点を置きつつ、ギリシアでの都市の出現から古代世界がその姿を変え、中世世界に移行してゆくまでの古代の地中海地域の歴史を年代順に扱ってゆきます。</p> <p>また、それに併せて古代が中世から現代までの西洋の社会においてどのように位置づけられ、どのような意味をもっていたのかも考えてゆきます。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	地中海世界	
	第3回	ギリシアとオリエント	
	第4回	アテナイの民主政	
	第5回	アテナイ市民の家族	
	第6回	ギリシアの文化	
	第7回	アレクサンドロスとヘレニズム王権	
	第8回	ヘレニズム時代のポリス	
	第9回	共和政ローマの政治制度と社会	
	第10回	共和政ローマの拡大と対外支配	
	第11回	共和政ローマの危機と「内乱の一世紀」	
	第12回	ローマ皇帝の支配	
	第13回	ローマ人の生活と文化	
	第14回	ローマ社会とキリスト教	
	第15回	古代末期の世界	
準備学習 (予習・復習等)	予習：特になし 復習：授業の内容の全体と受講者自身が特に興味深いと感じた人物・事物についてまとめる		
テキスト	毎回の授業時にプリントを配布する		
参考文献	特になし		
評価方法	定期試験:80% 受講態度:20%		

西洋史B		後期 2 単位	1・2年
西洋中世から近代の歴史		原 賢治（はら けんじ）	
授業の到達目標及びテーマ	本講義では、中世から近代にかけてのヨーロッパの歴史を学ぶことを通じて、各時代におけるキリスト教の影響や国家・社会の在り方を理解し、どのようにして近代国家が成立したのかを知ることを目標とします。また、併せて現代ヨーロッパの社会や政治的統合につながる政治的・社会的背景を学んでゆきます。		
授業の概要	本講義は西洋中世史および近代史の一部を対象とします。ヨーロッパ世界の誕生から近代国家の確立までの歴史の中で、とくにキリスト教の影響・役割や政治制度に焦点を置きつつ、現代ヨーロッパにも通じる西洋の政治的・社会的諸特徴が形成されていった歴史的経緯を説明してゆきます。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	民族移動と国家建設	
	第3回	中世の国家と社会	
	第4回	十字軍	
	第5回	キリスト教世界	
	第6回	中世都市と市民	
	第7回	中世の文化	
	第8回	中世世界の変質	
	第9回	ルネサンス	
	第10回	宗教改革	
	第11回	近世国家	
	第12回	市民革命	
	第13回	国民国家と帝国主義	
	第14回	近代社会の中のキリスト教	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：特になし 復習：授業の内容の全体と受講者自身が特に興味深いと感じた人物・事物についてまとめる		
テキスト	毎回の授業時にプリントを配布する		
参考文献	特になし		
評価方法	定期試験：80% 受講態度：20%		

東洋史A		前期 2 単位	1・2年
アジアは歴史的にどのように形成されていったのか？		小池 求（こいけ もとむ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>私たちが現在アジアと呼んでいる地域やそれを構成する国家はどのように形成されていったのだろうか。この問題を考えることは、現在のアジアを理解するために重要な作業である。</p> <p>本講義はこうした問題意識のもとに、中国を中心に、イスラーム地域の歴史にも目を配りながら、古代から近代のアジアの歴史を学ぶことを通じて、それに関する基礎的な知識を身につけ、その全体像を把握し、自分の言葉で説明できるようになることを目標とする。</p>		
授業の概要	<p>本講義では、アジアの東に位置する中国と西に位置するイスラーム地域を中心にアジアの歴史を古代から近代までを対象としてわかりやすく解説する。その際、①その地域が歴史的にどのように形成されていったのか、②周辺地域および西洋諸国とどのような関係にあったのか、などの問題を設定して考えていきたい。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	殷・周の成立から春秋・戦国時代へ	
	第3回	秦・漢帝国の成立と崩壊	
	第4回	南北朝時代と隋唐帝国	
	第5回	7～8世紀の東アジアの国際秩序	
	第6回	イスラーム帝国の成立と拡大	
	第7回	宋と北方	
	第8回	ユーラシア帝国の形成：モンゴル帝国～元へ	
	第9回	明の成立と北虜南倭	
	第10回	オスマン帝国の成立と拡大	
	第11回	大清帝国の繁栄	
	第12回	植民地化されるアジア：インドを事例に	
	第13回	中国と西洋の接触：アヘン戦争～アロー戦争	
	第14回	中華的国際秩序の崩壊：日清戦争	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>高校の世界史教科書などを事前に読んで、基礎知識を持ち、全体的な流れを把握しておくこと、講義の内容を理解しやすくなる。</p> <p>事前に授業で使用するプリントを配布するので、授業前に読んでおくこと。</p>		
テキスト	プリントを毎回配布する。		
参考文献	<p>尾形勇・岸本美緒編『新版世界各国史3 中国史』山川出版社、1998年</p> <p>並木頼壽、杉山文彦編著『中国の歴史を知るための60章』明石書店、2010年</p> <p>『世界の歴史』（全30巻）中央公論新社の中の該当する巻</p>		
評価方法	リアクションペーパー:30% 期末定期試験:70%		

東洋史B		後期 2 単位	1・2年
20世紀のアジアの歴史を考える		小池 求（こいけ もとむ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現在アジアに関する情報が氾濫している。そのような状況はアジアの重要性が世界的に高まってきたことを反映している一方で、歴史問題をめぐる対立が存在していることも無関係ではない。だからこそ、現在のアジアを理解し、氾濫する情報を判断するためにも、現在に直結する100年間のアジアの歴史を知ることが必要となる。 本講義では、そのような現状を鑑みて、20世紀のアジアの歴史に関する基礎的な知識を身につけ、その全体像を把握し、自分の言葉で説明できるようになることを目標とする。		
授業の概要	本講義では、①20世紀のアジアにおいて何が起こっていたのか、また、②世界的事件がアジアにどのような影響を与えたのか、そして、③それらがわれわれが生きる現在にどのような影響を与えたのか、という3つの問題関心を設定し、東アジアを中心にアジアの歴史をわかりやすく解説していく。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	崩壊へと向かう多民族帝国Ⅰ：大清帝国	
	第3回	崩壊へと向かう多民族帝国Ⅱ：オスマン帝国	
	第4回	第一次世界大戦：新しい時代へ	
	第5回	中東の再編：西洋諸国とアラブ	
	第6回	日本の植民地支配：台湾と朝鮮を事例に	
	第7回	国民革命に向かう中国	
	第8回	満洲事変～アジア太平洋戦争	
	第9回	中華人民共和国の成立と朝鮮戦争	
	第10回	独立していくアジア諸国：インドとインドネシアを事例に	
	第11回	ベトナム戦争	
	第12回	社会主義化する中国	
	第13回	戦後の日中関係	
	第14回	21世紀のアジア	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	高校の世界史教科書などを事前に読んで、基礎知識を持ち、全体的な流れを把握しておくこと、講義の内容を理解しやすくなる。 事前に授業で使用するプリントを配布するので、授業前に読んでおくこと。		
テキスト	プリントを毎回配布する。		
参考文献	並木頼壽、杉山文彦編著『中国の歴史を知るための60章』明石書店、2010年 『世界の歴史』（全30巻）中央公論新社の中の該当する巻 各回に関連する参考文献は随時紹介する		
評価方法	リアクションペーパー：30% 期末定期試験：70%		

心理学A		前期 2 単位	1・2年
世界を捉えるところのしくみ		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>心が世界を認識するための基本的なしくみについて理解することを目標とする。具体的には以下の通り。</p> <p>(1) 心理学的な現象、概念を適切に理解する。</p> <p>(2) 心理学の研究方法の特徴や限界を理解する。</p> <p>(3) 自分の経験や日常に見られる出来事などを、単なる経験則としてではなく、心理学の知識と適切に関連づけて説明できるようになる。</p>		
授業の概要	<p>授業は基本的に講義形式で進めるが、適宜、簡単な調査や実験も取り入れる。最初に心理学の基本的な前提や研究方法を解説し、その後、知覚（主に視覚）、学習、認知などの研究領域について、2〜3回かけて解説する。小テスト解説や中間まとめも適宜入れる。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス／学問としての心理学とは	
	第2回	現実の世界とところが捉える世界	
	第3回	視知覚1：形の知覚，空間の知覚	
	第4回	視知覚2：運動の知覚，恒常性と錯覚	
	第5回	視知覚3：色の知覚／中間まとめ	
	第6回	その他の知覚，知覚の統合	
	第7回	注意とパタン認識	
	第8回	イメージと心的操作	
	第9回	記憶1：記憶のしくみ	
	第10回	記憶2：忘却と記憶の変容／中間まとめ	
	第11回	学習1：学習についての考え方	
	第12回	学習2：条件づけ	
	第13回	学習3：社会的学習，技能の学習	
	第14回	概念と言語	
	第15回	思考と推論／全体まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>各回授業後に再度配付資料やノートを見直し，次回冒頭の確認問題に備えておくこと。わからないことは面倒臭がらずにまず自分で調べてみる（検索ツールなどを活用しよう）。</p> <p>任意で実際の研究への協力を求めることもある。これは心理学の知見をより深く理解する大変よい機会となるので，ぜひ積極的に参加してほしい。</p>		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	<p>田山・須藤（2012）『基礎心理学入門』培風館／御領謙ほか（1993）『最新 認知心理学への招待』（ともにサイエンス社）／このほか授業中に適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>期末試験：60％ 小テスト（2回予定）：40％</p>		

心理学B		後期 2 単位	1・2年
「わたし」と「あなた」とその間に見るころ		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	自己、他者、他者との関係や相互作用について理解する。具体的には以下の点を目標とする。 (1) 心理学的な現象、概念を適切に理解する。 (2) 心理学の研究方法の特徴や限界を理解する。 (3) 自分の経験や日常に見られる出来事などを、単なる経験則としてではなく、心理学の知識と適切に関連づけて説明できるようになる。		
授業の概要	授業は基本的に講義形式で進めるが、適宜、簡単な調査や実験も取り入れる。最初に心理学の基本的な前提や研究方法を解説し、その後、自己、パーソナリティ、対人コミュニケーションなどの研究領域について、3〜4回かけて解説する。小テスト解説や中間まとめも適宜入れる。		
授業計画	第1回	ガイダンス／心理「学」の研究対象	
	第2回	パーソナリティ1：自己とは何か	
	第3回	パーソナリティ2：パーソナリティと性格	
	第4回	パーソナリティ3：遺伝と環境の影響	
	第5回	対人心理学1：他者の認知、他者への欲求／中間まとめ	
	第6回	対人心理学2：対人関係の進展	
	第7回	対人心理学3：対人関係の崩壊	
	第8回	対人心理学4：様々な対人関係	
	第9回	コミュニケーション1：対人コミュニケーションとは	
	第10回	コミュニケーション2：非言語コミュニケーション／中間まとめ	
	第11回	コミュニケーション3：言語コミュニケーション	
	第12回	説得、広告のコミュニケーション	
	第13回	専門家によるコミュニケーション	
	第14回	オンラインコミュニケーション	
	第15回	他者の心の推測／全体まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各回授業後に再度配付資料やノートを見直し、次回冒頭の確認問題に備えておくこと。わからないことは面倒臭がらずにまず自分で調べてみる（検索ツールなどを活用しよう）。任意で実際の研究への協力を求めることもある。これは心理学の知見をより深く理解する大変よい機会となるので、ぜひ積極的に参加してほしい。		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	戸田ほか（2005）『グラフィック性格心理学』サイエンス／深田（1999）『コミュニケーション心理学』北大路書房／このほか授業中に適宜紹介する。		
評価方法	期末試験：60% 小テスト（2回予定）：40%		

臨床心理学A		前期 2 単位	1・2年
臨床心理学A（心の理解と心理療法）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>主要な人格論、発達論、心理療法について理解し、臨床心理学的な人間の捉え方を踏まえ、自己や他者の心の問題に適切に対応できるようにする。また、演習を通じてカウンセリングの技法に触れる。</p>		
授業の概要	<p>近年、臨床心理学やカウンセリングという言葉が耳にする機会が増えている。この講義では、これらの用語について理解するとともに、心の発達や人格に関する理論、心理的な問題とはどのようなことか、どのようなメカニズムで生じるのかといったことについての理解を深める。 前半は主に講義形式で授業を進める。後半では、演習を通じて、カウンセリングの技法に触れる。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション・臨床心理学とは	
	第2回	臨床心理学の歴史・背景 正常と異常	
	第3回	人格論	
	第4回	臨床心理学的発達論1 様々な発達理論	
	第5回	臨床心理学的発達論2 乳児期・幼児期1	
	第6回	臨床心理学的発達論3 乳児期・幼児期2	
	第7回	臨床心理学的発達論4 児童期・思春期・青年期・成人期・老年期	
	第8回	臨床心理学的査定 面接・心理テスト・行動観察法1 心理テストを体験してみよう！（質問紙法）	
	第9回	臨床心理学的査定 面接・心理テスト・行動観察法2 心理テストを体験してみよう！（投影法）	
	第10回	臨床心理学の理論と技法1 プレイセラピー	
	第11回	臨床心理学の理論と技法2 精神分析・来談者中心療法	
	第12回	臨床心理学の理論と技法3 行動療法・認知行動療法・自律訓練法・森田療法・内観療法	
	第13回	カウンセリングワーク1	
	第14回	カウンセリングワーク2	
	第15回	カウンセリングワーク3・まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所や、ルーチェフオリオにアップされた講義資料等を読んでおくこと。講義資料は必要に応じて印刷し、授業に持参すること。 事後学習 講義内容を振り返りながら、テキストや講義資料を熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。</p>		
テキスト	平木典子・巖岩（ほろいわ） 秀章 「カウンセリングの基礎」 北樹出版		
参考文献	下山晴彦 「よくわかる臨床心理学」 ミネルヴァ書房		
評価方法	課題・小テスト:20% 授業参加態度:20% 定期試験又は最終課題:60%		

臨床心理学B		後期 2 単位	1・2年
臨床心理学B（メンタルヘルスと精神障害）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	脳の働きやメンタルヘルス、主要な精神障害について理解し、自己や他者の精神的な問題に適切に対応できるようになることを目指す。		
授業の概要	この講義では、脳の働き、ライフステージと心の問題、メンタルヘルス、そして、アメリカ精神医学会の基準に基づいた主要な精神障害について、事例を交えながら、理解を深める。 主に講義形式で授業を進めるが、視聴覚教材を適宜活用しながら様々な精神障害について紹介する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション・脳のはたらき	
	第2回	メンタルヘルス・ライフステージと心の問題1	
	第3回	ライフステージと心の問題2	
	第4回	心理的な問題とその対応1 抑うつ症候群・双極性障害および関連障害群1	
	第5回	心理的な問題とその対応1 抑うつ症候群・双極性障害および関連障害群2（事例紹介）	
	第6回	心理的な問題とその対応3 不安症群・強迫症および関連症群・心的外傷およびストレス因関連障害群	
	第7回	心理的な問題とその対応4 食行動および摂食障害・パーソナリティ障害群	
	第8回	心理的な問題とその対応5 神経認知障害群1	
	第9回	心理的な問題とその対応6 神経認知障害群2（事例紹介）	
	第10回	心理的な問題とその対応7 神経発達症群／神経発達障害群1	
	第11回	心理的な問題とその対応8 神経発達症群／神経発達障害群2（事例紹介）	
	第12回	心理的な問題とその対応9 統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群1	
	第13回	心理的な問題とその対応10 統合失調症スペクトラム障害および他の精神病性障害群2（事例紹介）	
	第14回	現代社会で見られる様々な現象の裏に潜む人間の心理	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所や、ルーチェフオリオにアップされた講義資料等を読んでおくこと。講義資料は必要に応じて印刷し、授業に持参すること。 事後学習 講義内容を振り返りながら、テキストや講義資料を熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	American Psychiatric Association 「DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引」 医学書院 下山晴彦 「よくわかる臨床心理学」 ミネルヴァ書房		
評価方法	課題・小テスト:20% 授業参加態度:20% 定期試験:60%		

発達心理学A		前期 2 単位	1・2年
生涯発達心理学		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	人間はその誕生から死に至るまで、一生涯発達し続ける存在です。 この科目では生涯発達心理学の基礎的な理論と知識を学びます。 環境との相互作用を通して自分を形成していく「発達」というプロセスについて理解し、人間について、自己について考えます。		
授業の概要	講義形式で授業を進めますが、子どもの発達については具体的なイメージをつかむために視聴覚教材を多用する計画です。青年期の発達については、現在の自分の問題と照らし合わせた理解を助けるようなワークを取り入れます。		
授業計画	第1回	生涯発達心理学とは何か	
	第2回	赤ちゃんの有能さ	
	第3回	赤ちゃんの社会性	
	第4回	他者を知る・自分を知る	
	第5回	言葉の発達	
	第6回	考える力の発達	
	第7回	養育者との絆	
	第8回	発達の可塑性	
	第9回	対人ネットワークの中での発達	
	第10回	エリクソンの発達理論（乳児期から幼児期まで）	
	第11回	エリクソンの発達理論（学童期から青年期まで）	
	第12回	青年期の心理	
	第13回	エリクソンの発達理論（成人期から老年期まで）	
	第14回	年をとるとはどういうことか	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、講義で出てきた心理学用語や概念を理解したかどうか確認し、理解が不十分な場合は紹介された参考文献で復習すること。 学んだ発達的な事象について、自分や家族など身近な人の場合はどうであったかを考えてみること。 町の中や知り合いの子どもを観察して、授業で学んだ現象を確認してみること。		
テキスト	テキストは指定せず、資料を配布します。		
参考文献	授業中に紹介します。		
評価方法	リアクションペーパー:40% 試験:60%		

発達心理学B		後期 2 単位	1・2年
女性のライフコースと発達		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「働くこと」と「家族を持つこと」は個人の発達の上で大きなテーマですが、特に女性は個人としての人生選択と家庭生活が葛藤する場面に多く遭遇します。</p> <p>この授業では、ジェンダーを切り口に、青年期以降の発達心理学と家族心理学を学びます。成人発達とジェンダーについての知識を身につけるとともに、家族システムのダイナミズムについて理解を深めます。近い将来の自分の生き方について考えます。</p>		
授業の概要	<p>主に講義形式で授業を進めます。</p> <p>一般的・抽象的な存在としての人間の発達でなく現代を生きる自分の問題として考えることができるよう、現実の社会現象や社会制度とも関連づけながら学びます。</p>		
授業計画	第1回	家族とは何か	
	第2回	現代の家族	
	第3回	母性神話を考える	
	第4回	育児ストレス（ビデオ視聴）	
	第5回	育児ストレスのメカニズム	
	第6回	家族役割分担	
	第7回	結婚・夫婦関係の心理	
	第8回	働くことと家族を持つこと	
	第9回	家族ストレス	
	第10回	親子関係の心理	
	第11回	子離れ・親離れ	
	第12回	家族システム論	
	第13回	家族カウンセリング	
	第14回	新しい家族のかたち	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>テキストの当該箇所を読んでおくこと。</p> <p>教室で指示する課題に取り組んでおくこと。</p> <p>学んだテーマについて、自分や自分の家族はどうであるかを考えてみること。</p>		
テキスト	<p>柏木恵子・大野祥子・平山順子『家族心理学への招待（第2版）』ミネルヴァ書房</p>		
参考文献	<p>授業中に紹介します。</p>		
評価方法	<p>リアクションペーパー:20% 授業中の小課題:30% 試験:50%</p>		

教育心理学A		前期 2 単位	1・2年
子供の個性に応じる		宮脇 郁（みやわき かおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・子供の個性、特に性格を理解するための知識と方法を理解する。 ・学校生活において生じやすい問題を知る。 ・カウンセリングの基礎を理解し、子供とのコミュニケーションに生かす方法を考案する。 		
授業の概要	<p>本講では、さまざまな個性を持つ子供を理解し、子供がしばしば抱える問題に対処する方法を考える。まず子供の個性の把握に役立てるために、性格の理論と測定方法を学ぶ。さらに、学校における問題（不応）の種類およびその対処方法としてのカウンセリングを概観する。また、学級集団内の人間関係についても学ぶ。講義が中心だが、体験的な理解も目指すため、演習や映像教材の視聴も折に触れて行う。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	子供の個性の把握① 性格の理論	
	第3回	子供の個性の把握② 性格をとらえる	
	第4回	適応と不応	
	第5回	学校における不応① 概論	
	第6回	学校における不応② 不登校	
	第7回	学校における不応③ いじめ	
	第8回	学校における不応④ 心の病気	
	第9回	学校における不応⑤ その他	
	第10回	学校におけるカウンセリング① クライアント中心療法	
	第11回	学校におけるカウンセリング② コミュニケーションの技法	
	第12回	学校におけるカウンセリング③ 認知行動療法など	
	第13回	学校におけるカウンセリング④ 教育相談	
	第14回	学級集団の心理	
	第15回	まとめと振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	<p>各回で扱うテーマは、誰もが学校生活において目にしたり、あるいは新聞やニュースなどで取り上げられたりすることがあるものである。よって、各回で取り上げたテーマの具体例を自らの経験の中から見つけ、学んだことを具体例に当てはめて理解すること。さらに、対処法も考えてみること。</p>		
テキスト	未定		
参考文献	服部 環（監修） 『「使える」教育心理学 <増補改訂版>』 北樹出版		
評価方法	定期試験:70% 授業への積極的参加度:30%		

教育心理学B		後期 2 単位	1・2年
子供の学びをサポートする		宮脇 郁（みやわき かおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	・人間の知的能力の仕組みを理解し、学習指導場面に当てはめることができる。		
授業の概要	効果的な学習指導を行うためには、子供の知的な側面を正しく把握する必要がある。そこで本講では、子供の知的能力の理解に役立つトピックである学習、記憶と認知、知能などについて基礎的な知識を学び、教育場面への応用を考える。講義が中心だが、体験的な理解も目指すため、演習や映像教材の視聴も折に触れて行う。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	学習の仕組み① 条件づけの理論	
	第3回	学習の仕組み② 条件づけを教育に応用する	
	第4回	学習意欲① 学習意欲の種類	
	第5回	学習意欲② 学習意欲を高めるには	
	第6回	記憶と認知① 概論、記憶の種類	
	第7回	記憶と認知② 知識の持つ力	
	第8回	記憶と認知③ 知識構造	
	第9回	記憶と認知④ 自ら学ぶ力	
	第10回	記憶と認知⑤ 知的な能力の発達	
	第11回	学習指導法と子供の個性	
	第12回	教育における評価	
	第13回	知能① 知能とは何か	
	第14回	知能② 遺伝か環境か	
	第15回	まとめと振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	各回で扱うテーマは、誰もが経験したことがあるもの、あるいは誰もが能力として持つものである。よって、各回で取り上げたテーマの具体例を自らの経験の中から見つけ、学んだことを具体例に当てはめて理解すること。		
テキスト	未定		
参考文献	柏崎秀子編著 『教職ベーシック 発達・学習の心理学』（北樹出版 2011年）		
評価方法	定期試験:70% 授業への積極的参加度:30%		

社会心理学A		前期 2 単位	1・2年
社会に生きる個人のこころ		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>社会心理学（特に個人内過程および対人行動）の研究知見の理解を目標とする。具体的には、以下の通り。</p> <p>(1) 社会心理学の用語、概念などを適切に理解、説明できるようになる。</p> <p>(2) 社会心理学の研究方法の特徴や限界を理解する。</p> <p>(3) 自分の経験や日常に見られる出来事などを、社会心理学の知識と適切に関連づけて説明できるようになる。</p>		
授業の概要	<p>授業は基本的に講義形式で進めるが、適宜、簡単な調査や実験も取り入れる。最初に社会心理学の基本的な前提や研究方法を解説し、その後、対人認知、自己、社会的推論、態度、対人行動などの研究領域について解説する。小テスト解説や中間まとめも適宜入れる。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス／社会心理学の研究の視点と研究方法	
	第2回	対人認知1：印象形成	
	第3回	対人認知2：対人情報の処理	
	第4回	社会的推論1：帰属過程	
	第5回	社会的推論2：推論の方略とバイアス／中間まとめ	
	第6回	社会的推論3：情報処理の自動性	
	第7回	感情と認知の関係	
	第8回	態度1：認知的斉合性の観点から	
	第9回	態度2：情報処理の観点から	
	第10回	自己1：自己概念、自己評価／中間まとめ	
	第11回	自己2：他者との比較	
	第12回	自己3：自己に関する動機づけ	
	第13回	対人行動1：自己呈示、自己開示	
	第14回	対人行動2：援助行動	
	第15回	対人行動3：攻撃行動／全体まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>各回授業後に再度配付資料やノートを見直し、次回冒頭の確認問題に備えておくこと。わからないことは面倒臭がらずにまず自分で調べてみる（検索ツールなどを活用しよう）。</p> <p>任意で実際の研究への協力を求めることもある。これは心理学の知見をより深く理解する大変よい機会となるので、ぜひ積極的に参加してほしい。</p>		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	池上・遠藤（2009）『グラフィック社会心理学第2版』ナカニシヤ／山田ら（2007）『よくわかる社会心理学』ミネルヴァ書房／その他適宜紹介する。		
評価方法	期末試験：60% 小テスト（2回予定）：40%		

社会心理学B		後期 2 単位	1・2年
個人のあつまりと社会		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>社会心理学（特に対人関係および集団・集合過程）の研究知見の理解を目標とする。具体的には、以下の通り。</p> <p>(1) 社会心理学の用語、概念などを適切に理解、説明できるようになる。</p> <p>(2) 社会心理学の研究方法の特徴や限界を理解する。</p> <p>(3) 自分の経験や日常に見られる出来事などを、社会心理学の知識と適切に関連づけて説明できるようになる。</p>		
授業の概要	<p>授業は基本的に講義形式で進めるが、適宜、簡単な調査や実験も取り入れる。最初に社会心理学の基本的な前提や研究方法を解説し、その後、対人関係、集団行動、集団間関係、集合行動などの研究領域について解説する。小テスト解説や中間まとめも適宜入れる。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス／社会心理学の前提と研究法	
	第2回	対人関係1：対人魅力と親密化	
	第3回	対人関係2：親密な関係	
	第4回	対人関係3：社会的交換	
	第5回	相互依存関係／中間まとめ	
	第6回	社会的影響1：他者の存在による影響	
	第7回	社会的影響2：集団規範と同調	
	第8回	社会的影響3：多数派・少数派の影響	
	第9回	集団での活動1：集団での問題解決と意思決定	
	第10回	集団での活動2：集団内の人間関係とリーダーシップ／中間まとめ	
	第11回	集団間関係1：集団間差別とその解消	
	第12回	集団間関係2：社会的ジレンマ	
	第13回	集合・群集1：集合行動	
	第14回	集合・群集2：マス・コミュニケーション	
	第15回	文化と人のこころ／全体まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>各回授業後に再度配付資料やノートを見直し、次回冒頭の確認問題に備えておくこと。わからないことは面倒臭がらずにまず自分で調べてみる（検索ツールなどを活用しよう）。</p> <p>任意で実際の研究への協力を求めることもある。これは心理学の知見をより深く理解する大変よい機会となるので、ぜひ積極的に参加してほしい。</p>		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	池上・遠藤（2009）『グラフィック社会心理学第2版』ナカニシヤ／山田ら（2007）『よくわかる社会心理学』ミネルヴァ書房／その他適宜紹介する。		
評価方法	期末試験：60% 小テスト（2回予定）：40%		

教育学A		前期 2 単位	1・2年
ヒトが人になるとはどういうことか		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	I. 教育の本質について、種の保存という観点から、「ヒトが人になるとはどういうことか」について考え、人間にとっての教育の根源的意味を理解する。II. 日本における近代教育の歴史的展開をたどることで、教育が国家や社会のあり方、文化や価値観の変遷と密接な関連を持つことを理解する。		
授業の概要	全体を本質編と歴史編に分ける。本質編では、教育という営みの人類史的意味を明らかにする。歴史編では、近世における教育の習俗を明らかにしつつ、それが明治以降の近代教育へどのように転換していったかを明らかにする。近代国家と教育の関係、学歴社会の成立、戦争と教育、戦後教育改革の展開、など。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	種の持続と人間の子育て・・・動物と人間を分かちもの	
	第3回	人間の子育ての特徴	
	第4回	子育ての習俗①・・・通過儀礼など	
	第5回	子育ての習俗②・・・子供組、若者組など	
	第6回	商人の教育、女子の教育	
	第7回	寺子屋と藩校	
	第8回	文明開化と教育・・・近代学校のはじまり	
	第9回	試験制度の始まり	
	第10回	国家と教育	
	第11回	学歴社会の成立	
	第12回	「教育する家族」の登場	
	第13回	戦争と教育	
	第14回	戦後教育改革の展開	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	○授業の予告にそって、必要な文献をあらかじめ読んでおく。 ○授業後は授業の内容に即して感想や疑問を整理すること。 ○レポートテーマや文献が決まったら、早めに読了し論点を整理し、必要な関連文献・資料を収集し、レポートを作成すること。		
テキスト	特に定めない		
参考文献	ポルトマン『人間はどこまで動物か』（岩波新書）、大田堯著『教育とは何か』（岩波新書）、その他随時紹介する。		
評価方法	授業感想文:20% レポート:80%		

教育学B		後期 2 単位	1・2年
現代の教育問題を問う		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標及びテーマ	I 戦後から今日にいたる「教育問題」を取り上げ、その歴史的背景やそれぞれに内在する教育学的論点を理解する。 II 世界の教育改革動向に目を向け、日本の教育問題の特殊性や普遍性に気づくことで、自らの教育観の基礎を培う。		
授業の概要	教育における「競争」「管理主義」「早期教育」「いじめ」「学級崩壊」「少年非行」等の諸問題を取り上げ、それらの内在的な関連を、近代教育の歴史的特質や社会構造の変化との関連で明らかにしていく。さらに「子どもの権利条約」や外国の教育改革動向との関連で、日本の教育問題の解決の方向を国際的視野から考える。		
授業計画	第1回	序論	
	第2回	戦後における学歴競争：「競争」の性格変化	
	第3回	学歴・資格の社会的意味	
	第4回	「管理主義教育」の実態：校則と体罰	
	第5回	「管理主義教育」をどう考えるか	
	第6回	早期教育の実態と論点：ビデオ視聴	
	第7回	早期教育をどう考えるか：討論	
	第8回	「いじめ」の構造と対応	
	第9回	「学級崩壊」とは何か	
	第10回	少年非行の実態と対策	
	第11回	児童虐待の実態と対応	
	第12回	欧米における教育改革①：育児支援と子ども観	
	第13回	欧米における教育改革②：学力観	
	第14回	「子供の権利条約」が提起するもの：新しい子ども観	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業中に提示する文献につき、あらかじめ目を通しておくことが望ましい。		
テキスト	特に定めない		
参考文献	尾木直樹『子どもの危機をどう見るか』（岩波新書）、その他、随時紹介する。		
評価方法	授業感想文：20% レポート：80%		

保育学A		前期 2 単位	1・2年
子どもの健やかな発達と大人のかかわり		浅野 葉津子（あさの なつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○誕生から思春期までの子どもの心身の発達や生活について理解し、子どもの健やかな成長に必要な知識と対応について理解できるようになる。</p> <p>○講義だけでなく、育児に必要な技術を実習して学んでいくことで、子育てが身近に感じられるようになる。</p>		
授業の概要	<p>現代、育児のあり方は社会の変化とともにさまざまな問題が生じているが、子どもの発達を正しく理解することで育児の不安を解消し、喜びへと変えていくことができる。本授業では、子どもの発達や育児の実践を映像や事例で取り上げることで、将来への具体的実践に結びつく学びを目指していく。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション 保育学とは	
	第2回	自らの育ちを振り返る ビデオ視聴	
	第3回	子どもの発達（1）人間の発達の方向性	
	第4回	子どもの発達（2）妊娠～出産	
	第5回	子どもの発達（3）新生児期の発達の特性と育児	
	第6回	子どもの発達（4）乳児期の発達の特性と育児	
	第7回	子どもの発達（5）幼児期の発達の特性と育児	
	第8回	子どもの発達（6）学童期～思春期の発達の特性	
	第9回	子どもの発達（7）特別支援を要する子どものかかわり	
	第10回	子どもの生活（1）食事、排泄、睡眠	
	第11回	子どもの生活（2）疾病とその予防	
	第12回	子どもの生活（3）事故と安全	
	第13回	子どもの生活（4）遊びの意味と意義	
	第14回	子どもの生活（5）絵本の意味と意義	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	子どもを取り巻く現状や問題に関心を持ち、授業に臨んでほしい。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	授業内で随時紹介する。		
評価方法	筆記試験:60% 課題:20% リアクションペーパー:20%		

保育学B		後期 2 単位	1・2年
現代における「子育て」の現状と課題		浅野 葉津子（あさの なつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○子どもを取り巻く社会環境の変化とともに浮かび上がる、子育ての現状と課題を理解する。</p> <p>○現代の子育て事情や課題に対する法的制度の変遷と現状を学び、これからの子育ての在り方と方向性について考える。</p>		
授業の概要	現代の子どもが育つ、あるいは、子どもを育てる社会環境は複雑で様々な問題を抱えている。授業の到達目標に向けて、講義及び情報収集やグループディスカッションを行い、現代の子育てに必要な社会的制度を探求し、将来への子育ての具体的実践に結びつく学を目指していく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション どんな子どもに育ってほしいですか	
	第2回	社会環境の変化と子育て（1）子どもを産むということ	
	第3回	社会環境の変化と子育て（2）母親の育児不安	
	第4回	社会環境の変化と子育て（3）虐待の背景にあるもの	
	第5回	社会環境の変化と子育て（4）子育て支援施策の動向	
	第6回	社会環境の変化と子育て（5）子育て支援の情報収集	
	第7回	社会環境の変化と子育て（6）子育て支援の課題と方向性	
	第8回	社会環境の変化と子育て（7）色々な家族の在り方	
	第9回	保育現場の今（1）幼稚園、保育園、認定こども園	
	第10回	保育現場の今（2）発達観の今、昔	
	第11回	保育現場の今（3）ぶつかり合いの中で育つもの	
	第12回	保育実技（1）手作り玩具	
	第13回	保育実技（2）触れ合い遊び	
	第14回	保育実技（3）手作り絵本	
	第15回	後期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	子どもや子育てを取り巻く現状を情報収集したり、保育実技の準備など予習の時間を必要とする。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	授業内で随時紹介する。		
評価方法	レポート:60% 課題:20% リアクションペーパー:20%		

家族社会学		前期 2 単位	1・2年
家族社会学の基礎		平岡 佐智子（ひらおか さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会における家族をめぐる意識と行動、その変化と持続性を理解することを一般目標とし、社会の変化と個人の生き方、家族のあり方に関して、次の内容がわかるようになる。①社会学の分野での家族研究に基づき家族と家族関係について基礎から学習する。②隣接諸社会科学における家族論の成果から学ぶことができ、家族についての理解を深める。		
授業の概要	家族の研究のための視角や理論的枠組みを説明し、社会学的アプローチによる現代家族の特質や変動の方向性が理解できるように、以下の4点を中心に講義を進める。①歴史的・比較文化的な観点からみた家族をめぐる意識と行動②家族の機能と自己組織化のメカニズム③家族とその他の社会関係との関連④家族形成のプロセスと人間発達		
授業計画	第1回	家族について学ぶ意義	
	第2回	家族を対象とした社会学的研究の射程	
	第3回	家族変動をとらえる分析視角	
	第4回	その1 構造機能論	
	第5回	その2 システム論	
	第6回	その3 相互作用論	
	第7回	現代家族の特質に焦点を当てた分析視角	
	第8回	家族周期論とライフコース論	
	第9回	社会的ネットワーク論	
	第10回	家族ストレス論	
	第11回	現代社会における家族変動の方向性	
	第12回	現代社会に生きる個人と家族	
	第13回	現代社会のかかえる問題とこんにちの家族	
	第14回	現代社会の変容と家族の特性	
	第15回	現代社会学の展開における「家族」	
準備学習 (予習・復習等)	授業の進展に伴って、レポート形式の課題をいくつか出すので、定められた各課題毎の提出日に提出すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて、紹介する。		
評価方法	定期試験:60% 平常点(課題提出等):40%		

教育社会学	後期 2 単位	1・2年
教育格差の社会学—近代学校論の視座から	山田 哲也（やまだ てつや）	
①授業の到達目標及びテーマ		
<p>本講義のテーマは、近代以降の社会における教育や学校の特有の性格とそれに内在する問題を社会学的な視座から理解することにある。</p>		
<p>到達目標は次の3つである。</p>		
<p>(1) 教育社会学の基本的な知識の学習を通じて、自らの教育経験とそこで培われた「常識」を相対化できるようになる。</p> <p>(2) 学校知識、教師—生徒関係、学歴社会とメリトクラシーに関する教育社会学理論・実証研究の知見を理解する。</p> <p>(3) これらの知識を習得したうえで、教育の格差をめぐる現代的な諸問題に関する議論を組み立てられるようになる。</p>		
②授業の概要		
<p>本講義では、教育社会学、とりわけ「近代学校論」の知見をもとに、近代以降の社会で学校が果たす役割とその独特な性格について学ぶ。</p>		
<p>講義の前半では、近代学校が社会のなかで果たす機能を概観した後に、学校それ自体をひとつの小社会として捉え、その特質について学ぶ。</p>		
<p>後半は「教育格差の社会学」と題して、前半で論じた知見を応用しつつ、教育の格差をめぐる現代的な諸問題について学び、議論する。</p>		
③授業計画		
<p>第 1回 教育の「常識」を問い直す（ガイダンスを含む）</p> <p>第 2回 近代学校の特質とその人間形成作用：近代学校の登場（1）</p> <p>第 3回 教職の誕生と教師—生徒関係の独特な難しさ：近代学校の登場（2）</p> <p>第 4回 教員文化と学校知識：学校文化とはなにか（1）</p> <p>第 5回 生徒文化論の射程と今日的変容：学校文化とはなにか（2）</p> <p>第 6回 学校とふたつの社会移動：階級・階層問題と学校（1）</p> <p>第 7回 再生産装置としての学校と社会的排除：階級・階層問題と学校（2）</p> <p>第 8回 前半のまとめ：近代学校論の到達点と課題</p> <p>第 9回 学力格差の社会学</p> <p>第10回 カリキュラムと学力</p> <p>第11回 教育機会の均等</p> <p>第12回 学校から職業への移行</p> <p>第13回 ジェンダーと教育</p> <p>第14回 国際教育開発の社会学</p> <p>第15回 教育格差と福祉</p>		
④授業準備（予習・復習等）		
<p>各回の講義で、授業の感想や講義テーマに即した課題を記入・提出してもらう。</p>		
<p>前半の講義では、各回の講義テーマに関連する課題を終了時に提示するので、次の回までにその課題に取り組むこと。</p>		
<p>後半の講義では、テキストとして指定した『教育格差の社会学』のうち、第1章～4章、6章～8章を取り上げる。講義の前に該当する章を事前に読了し、印象に残った点、分からない点、疑問を感じる点を整理しておくこと。</p>		
⑤テキスト		
<p>前半（第1回～第8回）は、自作の講義資料を配付する。</p>		
<p>後半（第9回～第15回）は、耳塚寛明編『教育格差の社会学』有斐閣、2014年をテキストに指定し、自作の補足資料と併用して講義を行う。受講者人数によっては、グループに分かれてテキストの内容について議論する時間を設ける。</p>		
<p>★受講者は 耳塚寛明編『教育格差の社会学』有斐閣、2014年 を事前に購入しておくこと。</p>		
<p><参考文献（テキストとして指定はしないが、読むことを推奨する文献）></p> <p>久富善之・長谷川裕編『教育社会学』学文社、2008年</p> <p>若槻健・西田芳正編『教育社会学への招待』大阪大学出版会、2010年</p> <p>石戸教嗣・今井重孝編『システムとしての教育を探る』勁草書房、2011年</p> <p>石戸教嗣編『新版 教育社会学を学ぶ人のために』世界思想社、2013年</p>		
<評価方法>		
<p>平常点（授業感想文／課題を示したワークシートの内容をもとに評価します：50%）、期末テスト（50%）をもとに評価します。</p>		

法学（日本国憲法）A		前期 2 単位	1・2年
日本国憲法を中心とした法学の基礎		村元 宏行（むらもと ひろゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本国憲法の全体構造を把握する。 ○教職に就くにあたって必要とされる憲法の知見を身に付ける。 ○憲法学習を通じて、法学の基本的な考え方を理解する。</p>		
授業の概要	<p>この学校でみなさんがどの分野を学ぶにせよ、社会制度の多くは法によって定められています。そして憲法は国の最高法規ですから、どんな分野の法であっても、憲法に違反するものは効力を有しません。したがって、法学・憲法を学ぶことは、どんな分野を学ぶにしても、重要な関わりがあります。また、現実に生起している憲法問題を学ぶことによって、さまざまな社会問題と向き合うことは、皆さんがこれから一市民として生活していくにあたって、重要なことと思います。よって、この講義では憲法の重要論点を中心に扱いますが、特に現実に生起している問題を取り上げる事によって、皆さんに法学・憲法について考える機会をもってもらおうこととします。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス（受講に際しての諸注意など）	
	第2回	憲法とは何か	
	第3回	日本国憲法の誕生	
	第4回	国民主権と象徴天皇制	
	第5回	憲法9条と平和主義	
	第6回	基本的人権（基本的人権とは）	
	第7回	基本的人権（基本的人権の類型と限界）	
	第8回	基本的人権（自由権）	
	第9回	基本的人権（社会権）	
	第10回	基本的人権（参政権）	
	第11回	統治のしくみ	
	第12回	憲法改正	
	第13回	現代社会と法：子どもと法	
	第14回	現代社会と法：教育と法	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎時限毎のテーマについて、高校社会科で学んだ内容は最低限復習しておいてください。さらに新聞等で、憲法をめぐる時事問題の状況について把握しておいてください。</p>		
テキスト	<p>レジュメを配布しますので、テキストは使用しません。予習・復習のための文献は授業で紹介します。</p>		
参考文献	<p>『デイリー六法 平成27年版』（三省堂）を持参してください。</p>		
評価方法	<p>小レポート:10% テスト:90%</p>		

法学（日本国憲法）B		後期 2 単位	1・2年
日本国憲法と法学の基礎を学ぶ		信澤 久美子（のぶさわ くみこ）	
授業の到達目標及びテーマ	法学の基礎と憲法を学ぶ。法学に接したことのない者を対象として、法とは何か、法の歴史、裁判の方法、近代国家と近代憲法、明治憲法、現代国家と日本国憲法の概要を教えることによって、良き市民としてのリーガルマインドを涵養し、教員となる者に対して必要な知識と法的判断能力、そして、人権に関する感覚を醸成することを目的とする。		
授業の概要	基本的な教科書にそって、講義形式で進める。法学と憲法に関する基礎的な知識をしっかりと教える。一方的な講義にならないように、適宜講義中に指名し、対話を通してソクラテス方式で進める。特別な予習はいらぬが、必ず、教科書を持参し、ノートをしっかりとして欲しい。公務員試験や法学部への編入を目指す人は本講義をとって欲しい。		
授業計画	第1回	イントロダクション 法学と憲法について	
	第2回	法学を学ぶにあたって	
	第3回	法とは何か 社会と規範	
	第4回	法とは何か 日本法と外国法	
	第5回	法の発展 法の発展と社会の発展	
	第6回	法の発展 封建社会・近代社会・現代社会の法	
	第7回	法と裁判 裁判制度	
	第8回	裁判の基準 制定法と判例法	
	第9回	法の解釈 概念法学と自由法学	
	第10回	近代国家と憲法 近代憲法の理念	
	第11回	明治憲法と日本国憲法 自由権と社会権	
	第12回	権力分立 違憲立法審査権	
	第13回	基本的人権 法の下での平等など	
	第14回	基本的人権 表現の自由・情報プライバシー	
	第15回	基本的人権 思想・良心・心境の自由など	
準備学習 (予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともに授業に興味深くなるであろう。授業を受けた後は、忘れないうちにノートをまとめておこう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	末川博編『法学入門』有斐閣双書		
参考文献	六法があると便利ですが、必要な条文はインターネットでダウンロードできる。		
評価方法	授業への積極的参加:7% テスト:93%		

法学（日本国憲法）		前期 2 単位	1・2年
日本国憲法を中心とした法学の基礎		村元 宏行（むらもと ひろゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本国憲法の全体構造を把握する。 ○教職に就くにあたって必要とされる憲法の知見を身に付ける。 ○憲法の学習を通じて、法学の基本的な考え方を理解する。</p>		
授業の概要	<p>この学校でみなさんがどの分野を学ぶにせよ、社会制度の多くは法によって定められています。そして憲法は国の最高法規ですから、どんな分野の法であっても、憲法に違反するものは効力を有しません。したがって、法学・憲法を学ぶことは、どんな分野を学ぶにしても、重要な関わりがあります。また、現実には生起している憲法問題を学ぶことによって、さまざまな社会問題と向き合うことは、皆さんがこれから一市民として生活していくにあたって、重要なことと思います。よって、この講義では憲法の重要論点を中心に扱いますが、特に現実に生起している問題を取り上げる事によって、皆さんに法学・憲法について考える機会をもってもらおうこととします。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス（受講に際しての諸注意など）	
	第2回	憲法とは何か	
	第3回	日本国憲法の誕生	
	第4回	国民主権と象徴天皇制	
	第5回	憲法9条と平和主義	
	第6回	基本的人権（基本的人権とは）	
	第7回	基本的人権（基本的人権の類型と限界）	
	第8回	基本的人権（自由権）	
	第9回	基本的人権（社会権）	
	第10回	基本的人権（参政権）	
	第11回	統治のしくみ	
	第12回	憲法改正	
	第13回	現代社会と法：子どもと法	
	第14回	現代社会と法：教育と法	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎時限毎のテーマについて、高校社会科で学んだ内容は最低限復習しておいてください。さらに新聞等で、憲法をめぐる時事問題の状況について把握しておいてください。</p>		
テキスト	<p>レジュメを配布しますので、テキストは使用しません。予習・復習のための文献は授業で紹介します。</p>		
参考文献	<p>『デイリー六法 平成27年版』（三省堂）を持参してください。</p>		
評価方法	<p>小レポート:10% テスト:90%</p>		

法学（日本国憲法）		後期 2 単位	1・2年
日本国憲法と法学の基礎を学ぶ		信澤 久美子（のぶさわ くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	法学の基礎と憲法を学ぶ。法学に接したことのない者を対象として、法とは何か、法の歴史、裁判の方法、近代国家と近代憲法、明治憲法、現代国家と日本国憲法の概要を教えることによって、良き市民としてのリーガルマインドを涵養し、教員となる者に対して必要な知識と法的判断能力、そして、人権に関する感覚を醸成することを目的とする。		
授業の概要	基本的な教科書にそって、講義形式で進める。法学と憲法に関する基礎的な知識をしっかりと教える。一方的な講義にならないように、適宜講義中に指名し、対話を通してソクラテス方式で進める。特別な予習はいらぬが、必ず、教科書を持参し、ノートをしっかりとして欲しい。公務員試験や法学部への編入を目指す人は本講義をとって欲しい。		
授業計画	第1回	イントロダクション 法学と憲法について	
	第2回	法学を学ぶにあたって	
	第3回	法とは何か 社会と規範	
	第4回	法とは何か 日本法と外国法	
	第5回	法の発展 法の発展と社会の発展	
	第6回	法の発展 封建社会・近代社会・現代社会の法	
	第7回	法と裁判 裁判制度	
	第8回	裁判の基準 制定法と判例法	
	第9回	法の解釈 概念法学と自由法学	
	第10回	近代国家と憲法 近代憲法の理念	
	第11回	明治憲法と日本国憲法 自由権と社会権	
	第12回	権力分立 違憲立法審査権	
	第13回	基本的人権 法の下での平等など	
	第14回	基本的人権 表現の自由・情報プライバシー	
	第15回	基本的人権 思想・良心・心境の自由など	
準備学習 (予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともに授業に興味深くなるであろう。授業を受けた後は、忘れないうちにノートをまとめておこう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	末川博編『法学入門』有斐閣双書		
参考文献	六法があると便利ですが、必要な条文はインターネットでダウンロードできる。		
評価方法	授業への積極的参加:7% テスト:93%		

現代社会と法律A		前期 2 単位	1・2年
現代社会と法律の基本を学ぶ		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	法律を初めて学ぶ者を対象として、法律の基礎を教える。憲法については、法学として他の講義が開講されているので、それ以外の法律の基礎が中心となる。刑法と刑事法、民法の家族法と財産法の基礎的知識を習得することを目標とする。		
授業の概要	現代社会には多くの社会問題があり、法律はこれらの社会問題を解決するためにある。本講義では、法律の基礎的知識を教えつつ、現代社会に特有の社会問題を取りあげて、講義を進める。講義はなるべく一方的にならないように、受講者と議論をしながら進めたい。積極的参加を希望する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 法律学とはなにか	
	第2回	法律学基礎の基礎 民事法・刑事法	
	第3回	法律学基礎の基礎 裁判制度 条文と判例 要件事実論	
	第4回	犯罪と刑罰 刑事責任と刑事訴訟法 逮捕から裁判まで	
	第5回	犯罪と刑罰 刑事責任と刑法 構成要件から責任まで	
	第6回	民法と家族法 家族をめぐる法律の歴史	
	第7回	民法と家族法 結婚と離婚	
	第8回	民法と家族法 親子関係と相続	
	第9回	契約法 契約とはなにか 契約の成立と効力	
	第10回	契約法 契約の当事者・内容・意思表示	
	第11回	契約法 現代の契約の諸問題	
	第12回	損害賠償法 不法行為 交通事故	
	第13回	損害賠償法 過失責任と厳格責任	
	第14回	環境法 世界的気候変動と法律	
	第15回	情報法 インターネットに関する法律	
準備学習 (予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともに授業に興味深くなるであろう。授業を受けた後は、忘れないうちにノートをまとめておこう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	末川博『法学入門』有斐閣双書		
参考文献	六法があると便利ですが、必要な条文はインターネットでダウンロードできます。		
評価方法	授業への積極的参加 :7% テスト:93%		

現代社会と法律B		後期 2 単位	1・2年
現代社会と法律の応用編を学ぶ		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会と法律Aでは基礎的な法律的知識を扱ったが、更に発展的に現代における社会問題を学ぶことを目標とする。労働法、消費者法、情報法、環境法など、特別法を中心に現代社会における最先端の法律を学ぶ。		
授業の概要	現代社会には多くの社会問題があり、法律はこれらの社会問題を解決するためにある。本講義では、教科書を使って、労働法、消費者法などに関して現代社会に生じている諸問題に関する法律に関して講義を行う。講義はなるべく一方的にならないように、受講者と議論をしながら進めたい。積極的参加を希望する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 法律学を学ぶために	
	第2回	法律学の基礎の確認	
	第3回	働くことに関する法律 労働法とは？	
	第4回	働くことに関する法律 雇用機会均等法	
	第5回	働くことに関する法律 間接差別	
	第6回	働くことに関する法律 同一労働同一賃金の原則	
	第7回	働くことに関する法律 子育てに関する法律	
	第8回	働くことに関する法律 アルバイト・派遣の問題点	
	第9回	民法・消費者法 民法における契約とは？	
	第10回	民法・消費者法 悪徳商法のあれこれ	
	第11回	民法・消費者法 クーリングオフ	
	第12回	民法・消費者法 民法における保護の規定 消費者契約法	
	第13回	民法・消費者法 クレジットカードと三者関係	
	第14回	民法・環境法 公害 環境アセスメント 地球環境問題	
	第15回	民法・情報法 インターネットと名誉毀損・プライバシー	
準備学習 (予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともに授業が興味深くなるであろう。授業を受けた後は、忘れないうちにノートをまとめておこう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	副田隆重他著『ライフステージと法』有斐閣アルマ		
参考文献	六法があると便利ですが、必要な条文はインターネットでダウンロードできます。		
評価方法	授業への積極的参加:7% テスト:93%		

現代社会と政治A		前期 2 単位	1・2年
現代政治とリベラリズム		村田 玲（むらた あきら）	
授業の到達目標 及びテーマ	政治と権力をめぐる現代政治学の議論を瞥見することで、諸々の政治学の基本的概念とその用法を理解する。ついで、近世ヨーロッパにおけるリベラリズム（自由主義）の発生と変容の歴史展開を理解する。さらに広義の「リベラリズム」の多様性を把握することで、現代政治のひとつの重大な対立軸を理解する。		
授業の概要	本講義は、現代政治を理解し、これに参加するにあたって有用な思考の枠組みを受講生に提供することを期する。講義は、おおむねテキストに沿って進行する。「現代社会と政治A」においては、リベラリズムに関わる諸々の問題とその起源を概説する。諸論点をより根本的に考察するために、随時、政治学史上の諸々の古典にも言及する。		
授業 計画	第1回	序論および授業概要	
	第2回	リベラリズムの岐路	
	第3回	グローバリゼーションの展開	
	第4回	政治権力の諸形態	
	第5回	政治権力の正当性	
	第6回	リベラリズムの歴史：17世紀～19世紀	
	第7回	リベラリズムの歴史：19世紀～20世紀	
	第8回	福祉国家の性格	
	第9回	福祉国家批判の諸相	
	第10回	ロールズの正義論	
	第11回	ロールズ批判の諸相	
	第12回	リベラル・コミュニタリアン論争	
	第13回	リベラリズムの問題点	
	第14回	リベラリズムと規範理論	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	テキストの指定した個所を、授業に先立って一読しておくこと。		
テキスト	川崎修・杉田敦編著『【新版】現代政治理論』（有斐閣、2012年）		
参考文献	随時、授業時に指定する。		
評価方法	定期試験:50% レポート:30% 平常点・授業参加度:20%		

現代社会と政治B		後期 2 単位	1・2年
現代政治とデモクラシー		村田 玲（むらた あきら）	
授業の到達目標 及びテーマ	デモクラシー（民主主義）に関連する基本的概念とその用法を理解する。ついで、古典古代におけるデモクラシーの発生とその後の近代ヨーロッパにおける歴史的展開を理解する。さらに現代デモクラシーが直面している諸々の問題を瞥見することで、現代政治の若干の重大な争点を理解する。		
授業の概要	本講義は、現代政治を理解し、これに参加するにあたって有用な思考の枠組みを受講生に提供することを期する。講義は、おおむねテキストに沿って進行する。「現代社会と政治B」においては、デモクラシーに関わる諸々の問題とその起源を概説する。諸論点をより根本的に考察するために、随時、政治学史上の諸々の古典にも言及する。		
授業 計画	第1回	序論および授業概要	
	第2回	戦前日本政治	
	第3回	戦後日本政治	
	第4回	デモクラシーの歴史：古代～近代	
	第5回	デモクラシーの歴史：近代～現代	
	第6回	現代デモクラシー論の諸相	
	第7回	市民社会論	
	第8回	デモクラシーと公共性：アレント	
	第9回	デモクラシーと公共性：ハーバーマス	
	第10回	ネーションとエスニシティ	
	第11回	フェミニズム	
	第12回	グローバリゼーションと政治	
	第13回	グローバリゼーション批判の諸相	
	第14回	デモクラシーと規範理論	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	テキストの指定した箇所を、授業に先立って一読しておくこと。		
テキスト	川崎修・杉田敦編著『【新版】現代政治理論』（有斐閣、2012年）		
参考文献	随時、授業中に指定する。		
評価方法	定期試験:50% レポート:30% 平常点・授業参加度:20%		

社会学 A		前期 2 単位	1・2年
ミクロ社会学を学んで現代社会についての理解を深める		渡邊 良智 (わたなべ よしとも)	
授業の到達目標 及びテーマ	授業の到達目標は、現代社会についての理解を深めることであるが、社会学の基本的な考え方・視点を会得することによって、その目的を達成する。私たちの生きている現代社会の構造と機能、現代人の社会心理について、多角的、批判的に見るができるようになる。		
授業の概要	講義形式の授業であるが、何回かは参考資料を配布する。講義の対象とする社会学の分野は、個人と社会、家族社会学、うわさの社会心理といったミクロ社会学である。毎回、これらの分野の中で異なるテーマやトピックスを取り上げて講義を行う。		
授業計画	第1回	社会学の性格および社会とは何か	
	第2回	個人と社会 (1) 社会的ジレンマ	
	第3回	個人と社会 (2) 社会化	
	第4回	個人と社会 (3) 地位と役割	
	第5回	個人と社会 (4) 社会的性格	
	第6回	個人と社会 (5) 近代人の誕生と資本主義の成立	
	第7回	個人と社会 (6) 社会統制と逸脱	
	第8回	家族社会学 (1) 家族と親族	
	第9回	家族社会学 (2) 結婚と離婚	
	第10回	家族社会学 (3) 家族の機能	
	第11回	家族社会学 (4) シングル化社会と家族の将来	
	第12回	うわさの社会心理 (1) 流言・ゴシップ・都市伝説・デマ	
	第13回	うわさの社会心理 (2) 流言	
	第14回	うわさの社会心理 (3) ゴシップと都市伝説	
	第15回	うわさの社会心理 (4) うわさの伝達と対策	
準備学習 (予習・復習等)	とくにないが、現代社会で起きている出来事、それらを伝えるニュースに対して関心をもつことが望ましい。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	A・ギデンズ (松尾精文他訳) 『社会学 (第5版)』 (而立書房) 森下伸也 『社会学がわかる事典』 (日本実業出版社)		
評価方法	平常点:20% 定期試験:80%		

社会学B		後期 2 単位	1・2年
マクロ社会学を学んで現代社会についての理解を深める		渡邊 良智 (わたなべ よしとも)	
授業の到達目標 及びテーマ	授業の到達目標は、現代社会についての理解を深めることであり、社会学の基本的な考え方・視点を会得することによってその目標達成を目指したい。私たちの生きている現代社会の構造と機能、および現代人の社会心理について、多角的、批判的に見ることができるようになる。		
授業の概要	授業は講義形式でおこなう。講義の対象とする社会学の主要な分野は、マクロ社会学の階級・階層論と現代社会論であるが、毎回、これらの分野に含まれる異なるテーマを取り上げて、講義する。参考資料として、社会調査データ、関連統計データ等を配布する。		
授業計画	第1回	社会の構造と変動	
	第2回	社会階級	
	第3回	社会階層と社会移動	
	第4回	エリート	
	第5回	学歴社会	
	第6回	中流社会から格差社会へ	
	第7回	近代社会としての産業社会	
	第8回	近代社会から現代社会へ	
	第9回	現代社会論（1）大衆社会	
	第10回	現代社会論（2）情報化社会	
	第11回	現代社会論（3）消費社会	
	第12回	現代社会論（4）再帰的近代	
	第13回	現代社会論（5）リスク社会	
	第14回	現代社会論（6）グローバル化社会	
	第15回	現代社会論（7）監視社会	
準備学習 (予習・復習等)	とくにないが、現代社会で生じている様々な出来事、それらを伝えるニュースにたいして関心をもつことが望ましい。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	原純輔・盛山和夫『社会階層』（東京大学出版会） A・ギデンズ（松尾精文・小幡正敏訳）『近代とはいかなる時代か？』（而立書房） 井上俊・伊藤公雄編『社会の構造と変動（社会学リーディングス2）』（世界思想社）		
評価方法	平常点:20% 定期試験:80%		

社会福祉論A		前期 2 単位	1・2年
社会福祉入門		山内 陽子（やまうち ようこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	社会福祉の理念、歴史、サービスの成り立ちについて概観するとともに、基礎的な知識を身につけることが目標である。		
授業の概要	社会福祉は私たちの生活と関わりが深く、身近である。本講義では、社会福祉を第三者的に学ぶのではなく、社会的関心の高いさまざまな福祉の問題を挙げ、学生自身の生活と結びつけて考え、現在の社会状況および、福祉サービスについて基礎的な理解を深めていく。講義中心だが、学生同士のディスカッション等の学習形態も取り入れる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	社会福祉の理念と概念	
	第3回	社会福祉の歴史	
	第4回	社会福祉の法制度	
	第5回	子ども虐待問題と対策	
	第6回	ドメスティック・バイオレンス	
	第7回	社会的養護 1 施設養護（乳児院）	
	第8回	社会的養護 2 施設養護（児童養護施設）	
	第9回	社会的養護 3 家庭養護（里親制度）	
	第10回	少年非行問題とその対策	
	第11回	貧困問題と生活保護制度	
	第12回	障害児・者福祉制度	
	第13回	高齢者福祉制度	
	第14回	介護保険制度	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	社会福祉に関わるできごとに関心を持ち、情報収集しておくこと。		
テキスト	特に定めない。プリント等資料を配布する。		
参考文献	鈴木力「あたらしい社会的養護とその内容」青踏社／山縣文治「よくわかる社会福祉」ミネルヴァ書房／「国民の福祉の動向」厚生労働統計協会 随時紹介する		
評価方法	リアクションペーパー:10% 中間レポート:40% 試験:50%		

社会福祉論B		前期 2 単位	1・2年
社会問題と福祉サービス		山内 陽子（やまうち ようこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	社会的関心の高い福祉問題を取り上げ、学生自身が主体的に社会問題を適切に理解し、福祉、サービスについて深く考察できるようになることが目標である。		
授業の概要	従来の「最低限度の保障」に重きをおいた「福祉」の考え方から、近年「すべての人が自分らしくよりよく生きる」ことができるように支援を展開していくことが「福祉」であるという考え方への転換が求められている。その視点に立ち、本講義では、福祉問題を取り上げて映像資料等を用いた学び、ディスカッションを行い、学生主体で課題の検討、発表を行う。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	社会福祉とは	
	第3回	子ども虐待問題	
	第4回	貧困問題(子ども中心に)	
	第5回	ドメスティック・バイオレンス	
	第6回	社会的養護 1 施設養護（乳児院）	
	第7回	社会的養護 2 施設養護（児童養護施設）	
	第8回	社会的養護 3 家庭的養護（グループホーム）	
	第9回	社会的養護 4 家庭養護（里親）	
	第10回	子育て支援	
	第11回	ひとり親家庭	
	第12回	障害児・者問題 1（生活支援）	
	第13回	障害児・者問題 2（就労支援）	
	第14回	高齢者問題	
	第15回	まとめと振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	社会福祉の問題に関心をもち、情報収集をしておくこと。		
テキスト	特に定めない。プリント等資料を配布する。		
参考文献	山縣文治「よくわかる社会福祉」ミネルヴァ書房 「国民の福祉の動向」厚生労働統計協会 その他、随時紹介する		
評価方法	授業内での課題:50% 中間レポート:50%		

人文地理学A		前期 2 単位	1・2年
人文地理学の基礎		齋藤 元子（さいとう もとこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	人文地理学の基本を理解する。人文地理学の主要分野である地理教育・歴史地理学・文化地理学などを取り上げ、主に日本国内の事例を用いて、それぞれの研究対象ならびに研究の方法を理解する。人文地理学の基本ツールである地図があらゆる分野の研究に活用されていることを理解し、様々な時代やスケールの地図を解読できるようになる。		
授業の概要	地理教育では、教科書の歴史に焦点を当て、特に掲載された地図に着目する。歴史地理学では、東京の歴史地理をテーマとし、江戸時代から現在に至る空間的な変遷を多様なスケールの地図を用いて検証する。文化地理学では、宗教・国際交流・ジェンダーなどの問題を地理学的な視点から考察する。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	人文地理学の研究対象と方法	
	第3回	地理教育史 1：初等教育	
	第4回	地理教育史 2：中等教育	
	第5回	地理教育史 3：社会教育	
	第6回	東京の歴史地理 1：江戸から東京へ	
	第7回	東京の歴史地理 2：東京の移り変わり	
	第8回	東京の歴史地理 3：青山学院の地を遡る	
	第9回	東京の歴史地理 4：東京の離島	
	第10回	日本の宗教地理1：富士山信仰	
	第11回	日本の宗教地理 2：隠れキリシタン	
	第12回	国際姉妹都市 1：友好活動のケーススタディ	
	第13回	国際姉妹都市 2：地理教育への活用	
	第14回	ジェンダーの日本地図	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で取り上げる場所を地図帳で確認すること		
テキスト	特になし 高校で使用したものでも構わないので、世界と日本を網羅した地図帳を一冊用意すること 例えば『新詳高等地図』帝国書院		
参考文献	授業中に適宜指示		
評価方法	授業コメントシート:30% 試験:70%		

人文地理学B		後期 2 単位	1・2年
人文地理学の実践		齋藤 元子（さいとう もとこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	人文地理学の実践として、観光地理学・宗教地理学・民族地理学などを取り上げ、主に海外の事例を用いて、その研究の対象と方法を理解する。人文地理学の基本ツールである地図が、それぞれの調査や研究にいかんにか活用できるかを理解する。		
授業の概要	前半は、幕末・明治期に書かれた旅行案内書や海外探訪記などの地理書を読み、開国直後の日本人が西欧社会のどのような情報や知識を求めていたかを考察する。後半は、宗教集団や民族集団が形成した景観や空間を分析することを通して、文化の固有性を学ぶとともに、自然環境や歴史的環境が生み出した地域性に着目する。考察対象としては、アメリカのキリスト教集団アーミッシュ、英国北アイルランドのカトリックとプロテスタントを取り上げる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	人文地理学の研究対象と方法	
	第3回	幕末・明治期の地理書1：『西洋旅案内』	
	第4回	幕末・明治期の地理書2：『世界国尽』	
	第5回	幕末・明治期の地理書3：『米欧回覧実記』アメリカ編	
	第6回	幕末・明治期の地理書4：『米欧回覧実記』ヨーロッパ編	
	第7回	アーミッシュの社会	
	第8回	アーミッシュの地域差	
	第9回	アーミッシュの観光化	
	第10回	北アイルランドの歴史地理	
	第11回	ベルファストの都市構造	
	第12回	ピースラインとミューラル	
	第13回	紛争地観光の展開	
	第14回	和平と地理教育	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で取り上げる場所を地図帳で確認すること 配布した資料を読んでおくこと		
テキスト	特になし 高校で使用したもので構わないので、世界と日本を網羅した地図帳を一冊用意すること 例えば『新詳高等地図』帝国書院		
参考文献	授業中適宜指示		
評価方法	授業コメントシート：30% 試験：70%		

経済学		前期 2 単位	1・2年
経済学概論		藤森 裕美 (ふじもり ひろみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	経済学の基本的な考え方やしくみについて説明します。経済学的なものの方の見方や考え方の基礎を身に付けて、私たちが生きている現代社会を経済学的な立場から理解することを目標とします。		
授業の概要	ミクロ経済学・マクロ経済学の基礎について説明します。この授業はテキストに沿って講義形式で行います。スライド資料を使用し、説明を行い、設問を解き、解説するという一連の流れで、理解度を確認しながら進めていきます。後期の科目「現代社会と経済B」では、皆さんの身近な問題を題材として、実験手法を用いることでミクロ経済学・マクロ経済学の理解を深めていきます。「現代社会と経済B」を履修予定の方は、まず、この科目を履修することをお勧めします。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	経済学の予備知識1 経済学と希少性	
	第3回	経済学の予備知識2 選択・機会費用・インセンティブ	
	第4回	需要と供給について考える1 需要	
	第5回	需要と供給について考える2 供給	
	第6回	需要と供給について考える3 均衡	
	第7回	市場について考える1 分業	
	第8回	市場について考える2 資本主義社会のしくみ	
	第9回	政府について考える1 市場の失敗	
	第10回	政府について考える2 財政のしくみと財政政策	
	第11回	お金について考える1 貨幣	
	第12回	お金について考える2 金融政策	
	第13回	経済全体について考える1 経済成長とGDP	
	第14回	経済全体について考える2 国際収支	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	指定された箇所について事前学習をしてください。新たな知識の習得には、時間がかかります。毎回の予習・復習の積み重ねで、一步一步、前進していきましょう。学問に対する興味を持ち、自主的に学ぶ姿勢を期待します。		
テキスト	グレゴリー・マンキュー 『マンキュー入門経済学』 (第2版) 東洋経済新報社 2014年		
参考文献	グレゴリー・マンキュー 『マンキューミクロ経済学』 (第3版) 東洋経済新報社2013年 グレゴリー・マンキュー 『マンキューマクロ経済学』 (第3版) 東洋経済新報社2014年		
評価方法	平常点:30% 期末試験又はレポート:70%		

現代社会と経済A		前期 2 単位	1・2年
日本銀行は何をしているか—金融政策と経済活動		小栗 誠治（おぐり せいじ）	
授業の到達目標 及びテーマ	世界金融危機やアベノミクスなど経済の世界はダイナミックに変貌を遂げつつあります。本講義では、日本の中央銀行である日本銀行について、改めてその原点に立ち返り、中央銀行の本質を探るとともに、日本銀行の制度や仕組み、最近の金融政策の動き等を現実と理論、具体と抽象を巧みに織り交ぜて説明し、もって日本の金融経済の動きを正しく理解することを目標とします。		
授業の概要	アベノミクスの第1の矢として、日本銀行の大胆な金融政策が注目を集めています。そもそも日本銀行は日々何をしている組織なのか、その業務の実態や金融政策の内容、経済活動への影響などについて説明するとともに、これから日本銀行はどこに向かおうとしているのか、21世紀における中央銀行のあり方について考えます。		
授業計画	第1回	日本銀行の役割・目的（1） —中央銀行の役割・目的とは何か、物価・金融システム・為替・成長の関係	
	第2回	日本銀行の役割・目的（2） —新しいフレームワーク	
	第3回	日本銀行の独立性 —独立性とは何か、日銀法での規定	
	第4回	銀行券の発行（1） —銀行券は中央銀行の債務か、政府紙幣との違い	
	第5回	銀行券の発行（2） —シーニョレッツとは何か、中央銀行に自己資本は必要か	
	第6回	金融政策の理論と実際（1） —金融調節の手段と方法、通貨論争	
	第7回	金融政策の理論と実際（2） —伝統的政策と非伝統的政策、経済活動への影響	
	第8回	金融システム安定化政策（1） —「最後の貸し手」機能、考査	
	第9回	金融システム安定化政策（2） —マクロ・ブルーデンス政策	
	第10回	政府との関係（1） —「政府の銀行」	
	第11回	政府との関係（2） —対政府取引、国庫業務	
	第12回	国際金融業務（1） —中央銀行の国際金融業務の変遷	
	第13回	国際金融業務（2） —日銀法での規定、為替介入	
	第14回	アベノミクスと日本銀行（1） —アベノミクス「第1の矢」としての金融政策	
	第15回	アベノミクスと日本銀行（2） —アベノミクスにおける金融政策の評価	
準備学習 (予習・復習等)	事前に予習の上、講義に積極的に参加するよう努めてください。事後学習については講義中に言及します。		
テキスト	講義資料を配布します。		
参考文献	日本銀行金融研究所編『日本銀行の機能と業務』有斐閣、2011年。 その他、講義の中で適宜紹介します。		
評価方法	試験:70% 平常点:30%		

現代社会と経済B		後期 2 単位	1・2年
現代経済の問題を実験経済学の手法を用いて考察する		藤森 裕美 (ふじもり ひろみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「経済学」の授業で取り上げた基礎知識とあわせて、「現代社会と経済B」では、実験経済学の手法を用いることで、経済学の理論を現代経済の問題に応用する力を養います。		
授業の概要	現代社会において皆さんは、選択のトレードオフに直面しています。では、どのようにしてこの問題を解決していくのでしょうか。仮に、自己の利益を最大化する「合理的な経済人」がいるとして、その行動原理を学ぶことで、一つの解決策を見つけることができると考えます。そこで、皆さんは、合理的な経済人になったつもりで、数々の経済問題を解決してみましょう。第14回は、事前に皆さんから実験アイデアを募り、コンテスト形式で発表をしてもらいます。示唆に富むオリジナル作品を期待します。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	企業行動	
	第3回	市場均衡	
	第4回	消費者行動	
	第5回	不確実性	
	第6回	異時点間の選択	
	第7回	情報の経済学	
	第8回	ファイナンス	
	第9回	外部性	
	第10回	一般均衡モデル	
	第11回	消費関数	
	第12回	紙幣とインフレーション	
	第13回	金融政策の決定	
	第14回	実験アイデア・コンテスト	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回実験を行いますので、事前に授業の準備学習をしてください。各章の基礎概念の箇所には目を通しておいてください。事後学習については授業中に言及します。		
テキスト	小川一仁・川越敏司・佐々木俊一郎「実験ミクロ経済学」東洋経済新報社 2012年 川越敏司・小川一仁・佐々木俊一郎「実験マクロ経済学」東洋経済新報社 2014年		
参考文献	授業の中で紹介します。		
評価方法	平常点:30% 期末試験又はレポート:70%		

現代社会と経済C		後期 2 単位	1・2年
金融の基礎を学びます。		小栗 誠治（おぐり せいじ）	
授業の到達目標 及びテーマ	急激な変貌を遂げつつある金融の世界（通貨、金融市場、金融システム、金融政策、金融行政、国際金融等）について総合的な理解を深め、身近に起きている金融問題を理解する力を身につけます。		
授業の概要	金融の世界はダイナミックに変貌を遂げつつあります。講義では、金融の制度や仕組み、現実の金融の諸問題を理解するとともに、こうした動きを基本的な金融理論と有機的に結びつけることを目的とします。“Cool Heads but Warm Hearts”（アルフレッド・マーシャル）の精神をもって、金融の本質に迫ります。		
授業 計画	第1回	通貨の基本と本質	
	第2回	金融機関の種類と機能	
	第3回	金融市場の構造と金利	
	第4回	金融取引の意義と様式	
	第5回	決済システム	
	第6回	銀行の信用創造	
	第7回	中央銀行の目標	
	第8回	金融政策の実際	
	第9回	金融政策の効果	
	第10回	資産価格とバブル	
	第11回	日本の企業統治	
	第12回	金融革新とデリバティブ・証券化	
	第13回	金融行政の理論と実際	
	第14回	金融危機後の規制監督	
	第15回	国際金融と外国為替相場	
準備学習 (予習・復習等)	事前に予習の上、講義に積極的に参加するよう努めてください。事後学習については講義中に言及します。		
テキスト	池尾和人『現代の金融入門（新版）』筑摩書房、2010年。 必要に応じて講義資料を配付します。		
参考文献	鹿野嘉昭『日本の金融制度（第3版）』東洋経済新報社、2013年。		
評価方法	試験：70% 平常点：30%		

経営学 A		前期 2 単位	1・2年
初めて学ぶ経営学		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	経営学を初めて学習する学生を対象にしている。まずは経営学の全体像を理解できるようにする。「経営学とは何か」「企業とは何か」から出発し、経営学の歴史的な発展をとらえつつ、モチベーション理論やリーダーシップ理論などの基礎論を講義する。また、企業とは社会の中でどのような存在であるべきか、企業の社会的責任等も合わせて考える。		
授業の概要	講義が中心であるが、理解を深めるために、視聴覚教材や新聞・雑誌等の資料を使用しながら進める。また、企業の具体的な事例をなるべく多数取り入れる予定である。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	企業の役割とは何か	
	第3回	企業を理解する 企業というシステム	
	第4回	会社の種類とは	
	第5回	企業は誰のものか コーポレート・ガバナンス	
	第6回	企業の社会的責任とは	
	第7回	経営学の考え方と発展	
	第8回	大企業の生成、テイラーシステム、フォードシステム	
	第9回	管理過程論、人間関係論	
	第10回	モチベーション理論	
	第11回	リーダーシップ理論	
	第12回	経営における意思決定	
	第13回	行政およびNPOとの関係	
	第14回	起業はどのようにして行われるのか	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、予習をしてあることを前提に行います。「ただ読むだけ」ではなく、内容を把握することを目的意識に持って、予習をしてきてください。また、教科書の該当部分を事前に読み、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	齊藤毅憲編著 (2012) 『経営学を楽しく学ぶ Version3』中央経済社		
参考文献	必要に応じて随時紹介する。		
評価方法	定期試験:70% 課題やレポート等:30%		

経営学B		後期 2 単位	1・2年
初めて学ぶ経営学		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標及びテーマ	経営学を初めて学習する学生を対象にしている。経営資源、戦略、組織形態、マネジャーの仕事、さらに、企業の各職能として、情報管理、研究開発、生産管理、マーケティング等についての基礎を理解できるようにする。教科書の前半部分は経営学Aで講義するため、経営学Aと合わせて受講することが望ましい。		
授業の概要	講義が中心であるが、理解を深めるために、視聴覚教材や新聞・雑誌等の資料を使用しながら進める。また、企業の具体的な事例をなるべく多数取り入れる予定である。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	経営者の仕事とは	
	第3回	企業の仕組みとは	
	第4回	企業間関係とは	
	第5回	経営戦略① 戦略とは 多角化	
	第6回	経営戦略② 競争戦略	
	第7回	組織構造とは	
	第8回	企業を取り巻く環境とは	
	第9回	経営資源とは	
	第10回	情報管理・研究開発管理とは	
	第11回	生産管理とは	
	第12回	マーケティングとは マーケティング戦略	
	第13回	財務管理とは	
	第14回	企業の国際経営	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、予習をしてあることを前提に行います。「ただ読むだけ」ではなく、内容を把握することを目的意識に持って、予習をしてきてください。また、教科書の該当部分を事前に読み、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	齊藤毅憲編著 (2012) 『経営学を楽しく学ぶ Version3』中央経済社		
参考文献	必要に応じて随時紹介する。		
評価方法	定期試験:70% 課題やレポート等:30%		

商品学・流通論A		前期 2 単位	1・2年
消費者への価値創造・伝達過程としての流通と企業活動		伊藤 匡美 (いとう まさみ)	
授業の到達目標及びテーマ	大ヒット商品や人気のお店が生まれるのはなぜか。その背後では、どんな企業がどのような活動を行っているのか。わたしたちが日頃目にする現象やその仕組みについて、流通・マーケティングの見地から論理的に考え、理解する力を養っていく。		
授業の概要	講義形式の授業形態で行い、流通に関する論点を軸に取り上げていく。 生産と消費の間をつなぐ流通があるからこそ、われわれは日々近隣の店舗で商品を買ひ、豊かで便利な生活を送ることができるのである。当講義では流通のもつ基本的役割や特質、昨今の環境変化の方向性について論じていきたい。		
授業計画	第1回	流通の位置づけと構造	
	第2回	流通とは何か	
	第3回	流通と商業	
	第4回	商業の存立根拠	
	第5回	流通機構の規程要因	
	第6回	消費構造とその変化	
	第7回	消費者行動と店舗・商品選択	
	第8回	小売業の機能と役割	
	第9回	日本の小売業の構造変化	
	第10回	小売業態の発展	
	第11回	アメリカ小売業の変遷	
	第12回	日本の小売業の歴史と現状—百貨店—	
	第13回	日本の小売業の歴史と現状—チェーンストア—	
	第14回	日本の小売業の歴史と現状—コンビニエンスストア—	
	第15回	インターネット時代の流通	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、指定されたテキストの該当箇所について熟読してから授業に臨むとよい。また、流通やマーケティングは、街歩きや日ごろの買い物からも学ぶところが大きいにある。授業内でも、実際の企業の事例がたくさん出てくる。社会で起きている出来事に好奇心を持って生活することが、すべて準備学習に相当する。		
テキスト	住谷宏編著『流通論の基礎（第2版）』中央経済社		
参考文献	講義の中で随時紹介する。		
評価方法	定期試験:95% 小レポート:5%		

商品学・流通論B		後期 2 単位	1・2年
消費者への価値創造・伝達過程としての流通と企業活動		伊藤 匡美 (いとう まさみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	大ヒット商品や人気のお店が生まれるのはなぜか。その背後では、どんな企業がどのような活動を行っているのか。わたしたちが日頃目にする現象やその仕組みについて、流通・マーケティングの見地から論理的に考え、理解する力を養っていく。		
授業の概要	講義形式の授業形態で行い、流通に関する論点を軸に取り上げていく。 生産と消費の間をつなぐ流通があるからこそ、われわれは日々近隣の店舗で商品を買ひ、豊かで便利な生活を送ることができるのである。当講義では流通のもつ基本的役割や特質、昨今の環境変化の方向性について論じていきたい。		
授業計画	第1回	日本の流通の特徴	
	第2回	卸売業の機能と役割	
	第3回	日本の卸売業の構造と特徴	
	第4回	卸売業のタイプ	
	第5回	マーケティングとは何か	
	第6回	生産者と流通	
	第7回	マーケティング・チャネルについて	
	第8回	マーケティング・チャネルのタイプと選択基準	
	第9回	流通系列化	
	第10回	流通近代化政策	
	第11回	大型小売業と中小小売業をめぐる調整政策	
	第12回	まちづくりと地域商業	
	第13回	環境に関する政策と流通	
	第14回	特殊な販売方法に関する規制	
	第15回	流通・商業と公正競争	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、指定されたテキストの該当箇所について熟読してから授業に臨むとよい。また、流通やマーケティングは、街歩きや日ごろの買い物からも学ぶところが大きいにある。授業内でも、実際の企業の事例がたくさん出てくる。社会で起きている出来事に好奇心を持って生活することが、すべて準備学習に相当する。		
テキスト	住谷宏『流通論の基礎（第2版）』中央経済社		
参考文献	講義の中で随時紹介する。		
評価方法	定期試験:95% 小レポート:5%		

家庭経済学		後期 2 単位	1・2年
家計・消費者・女性		岩下 好美 (いわした よしみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代の社会経済情勢を踏まえて、家計や家庭経済の活動とは企業や政府と密接な関係を保ちながら、非常に重要な意味を有していることを理解するとともに、自分なりの家庭経済のあり方を考えることを目標とする。		
授業の概要	「一家の生計」および「経済の主体」である家計について学ぶと同時に、個人と賃金労働、そして家族をめぐる問題について多角的な議論が行える場としたい。授業は講義だけではなく、グループディスカッションやDVD視聴などを行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション 家庭経済学とは	
	第2回	現代社会と家庭経済 家庭経済を取り巻く問題	
	第3回	家計のしくみと家計研究	
	第4回	消費者問題	
	第5回	個人と家庭経済 ライフコースと家計	
	第6回	現代社会と家族 子どもをめぐる問題	
	第7回	現代社会と就業	
	第8回	女性の働き方 機会費用と生涯収入	
	第9回	男性の働き方 日本型雇用慣行における問題	
	第10回	労働と家族 賃金労働と夫婦間家事・子育て分担	
	第11回	海外におけるワーク・ライフ・バランス	
	第12回	日本におけるワーク・ライフ・バランス	
	第13回	社会保障のしくみ	
	第14回	循環型社会と家庭経済	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業の中で翌週のテキストの該当章を紹介するので、事前に読んだ上でそのテーマに関する自分の意見を考える。		
テキスト	臼井和恵 編著, 2007, 『21世紀の生活経営 自分らしく生きる 第三版』同文書院		
参考文献	授業の中で紹介する		
評価方法	平常点:30% 期末試験又はレポート:70%		

簿記原理A		前期 2 単位	1・2年
簿記の基本を学ぶ		福井 由実 (ふくい ゆみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	授業では日商簿記3級程度の内容を扱い、複式簿記の基本概念及び簿記一巡の手続きを理解する。具体的には、資産、負債、資本（純資産）、収益、費用における概念の説明から始まり、簿記上の取引の仕訳、総勘定元帳への転記、さらには試算表の仕組み、6桁精算表の作成方法を理解する。		
授業の概要	簿記とは、企業の日々の経営活動を記録・計算・整理して企業の経営成績と財政状態を明らかにするためのものである。本講義においては簿記初学者を対象とし、複式簿記に関する基本的な知識・記帳方法を学習していく。講義はテキストと毎回配布するプリントを中心に進め、授業の中では毎回練習問題も取り入れていく予定である。授業進度は学生の理解度を勘案して調節していきたい。		
授業計画	第1回	簿記の意義とその目的	
	第2回	資産・負債・資本および貸借対照表	
	第3回	収益・費用・純損益及び損益計算書	
	第4回	取引	
	第5回	勘定・勘定記入の法則・貸借平均の原理	
	第6回	仕訳・転記・仕訳帳	
	第7回	総勘定元帳・試算表	
	第8回	決算 6桁精算表	
	第9回	現金・預金	
	第10回	有価証券	
	第11回	商品売買に関する処理・商品に関する補助簿	
	第12回	売掛金・買掛金	
	第13回	手形に関する処理	
	第14回	その他の債権・債務	
	第15回	前期のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	特になし		
テキスト	簿記の基本を学ぶ(第3版) 八田進二・橋本尚著		
参考文献	特になし		
評価方法	試験:90% 平常点:10%		

簿記原理B		後期 2 単位	1・2年
簿記の基本を学ぶ		福井 由実 (ふくい ゆみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	授業では日商簿記3級程度の内容を扱い、複式簿記の基本概念及び簿記一巡の手続きを理解する。簿記原理Bでは主に決算の仕組み、8桁精算表の作成方法及び貸借対照表・損益計算書の作成方法を理解する。		
授業の概要	簿記とは、企業の日々の経営活動を記録・計算・整理して企業の経営成績と財政状態を明らかにするためのものである。本講義においては簿記初学者を対象とし、複式簿記に関する基本的な知識・記帳方法を学習していく。講義はテキストと毎回配布するプリントを中心に進め、授業の中では毎回練習問題も取り入れていく予定である。授業進度は学生の理解度を勘案して調節していきたい。 簿記原理Bを受講する人は必ず前期の簿記原理Aを受講すること。		
授業計画	第1回	前期のおさらい	
	第2回	固定資産	
	第3回	資本金	
	第4回	引出金	
	第5回	個人企業の税金	
	第6回	貸倒れの処理と貸倒引当金	
	第7回	費用・収益の繰延	
	第8回	費用・収益の見越	
	第9回	消耗品の整理	
	第10回	訂正仕訳	
	第11回	帳簿と伝票	
	第12回	決算 決算予備手続	
	第13回	決算 決算本手続	
	第14回	決算 決算報告手続	
	第15回	8桁精算表	
準備学習 (予習・復習等)	特になし		
テキスト	簿記の基本を学ぶ(第3版) 八田進二・橋本尚著		
参考文献	特になし		
評価方法	試験:90% 平常点:10%		

統計学A		前期 2 単位	1・2年
記述統計、確率の基礎		佐藤 浩志 (さとう ひろし)	
授業の到達目標 及びテーマ	統計学Aでは統計学の基礎、確率の基礎を学びます。例題を通じて自らがデータ処理、分析および考察を重ねることで、データ分析手法を身に付けることを目標とします。		
授業の概要	私たちの身の回りには、テレビや新聞、インターネットなどのメディアを通じて、さまざまなデータがあふれています。本講義では、統計学の基本的な考え方、データの統計的活用 の理論と方法を解説していく予定である。この統計学Aでは、記述統計および確率の基礎を学んでいく。		
授業計画	第1回	統計学Aの進め方、記述統計とは	
	第2回	データの種類と集計方法	
	第3回	さまざまなグラフ表現	
	第4回	時系列データ	
	第5回	度数分布表とヒストグラム	
	第6回	分布の位置を表す代表値	
	第7回	箱ひげ図と5数要約	
	第8回	分散と標準偏差	
	第9回	観測値の標準化と外れ値	
	第10回	相関と散布図	
	第11回	相関係数	
	第12回	確率の基本性質	
	第13回	反復試行と条件付き確率	
	第14回	標本調査	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各回の講義内容に関連性があるため、断片的な出席では授業内容が十分に理解できないことに注意してください。また前回までの内容を復習してから授業に参加されることを期待しています。		
テキスト	配布プリント。ただし、 $\sqrt{\quad}$ (ルート・平方根) 演算のできる電卓 (パソコン等も可) を用意してください。		
参考文献	日本統計学会編『データの分析』, 東京図書 (2012年) 東京大学教養学部統計学教室編『統計学入門』, 東京大学出版会 (1991年) 稲葉由之『プレステップ統計学 I - 記述統計学 -』, 弘文堂 (2012年)		
評価方法	小テスト:30% 第1回レポート:35% 第2回レポート:35%		

統計学B		後期 2 単位	1・2年
推測統計の基礎		佐藤 浩志 (さとう ひろし)	
授業の到達目標 及びテーマ	統計学Bでは推測統計学の基礎を学びます。例題を通じて自らがデータ処理、分析および考察を重ねることで、データ分析手法を身に付けることを目標とします。		
授業の概要	私たちの身の回りには、テレビや新聞、インターネットなどのメディアを通じて、さまざまなデータがあふれています。本講義では、統計学の基本的な考え方、データの統計的活用の理論と方法を解説していく予定である。この統計学Bでは、推測統計の基礎を学んでいく。		
授業計画	第1回	統計学Bの進め方、推測統計とは	
	第2回	標本空間と事象	
	第3回	確率と確率変数	
	第4回	中心極限定理と正規分布	
	第5回	母集団からの標本抽出	
	第6回	母平均の区間推定	
	第7回	母分散の区間推定	
	第8回	仮説検定の考え方	
	第9回	仮説検定の手順	
	第10回	t 検定	
	第11回	カイ2乗検定, F検定	
	第12回	回帰分析とは	
	第13回	単回帰分析	
	第14回	重回帰分析	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	統計学Aを履修していることが望ましい。 各回の講義内容に関連性があるため、断片的な出席では授業内容が十分に理解できないことに注意してください。また前回までの内容を復習してから授業に参加されることを期待しています。		
テキスト	配布プリント。ただし、 $\sqrt{\quad}$ (ルート・平方根) 演算のできる電卓 (パソコン等も可) を用意してください。		
参考文献	日本統計学会編『統計学基礎』, 東京図書 (2012年) 東京大学教養学部統計学教室編『統計学入門』, 東京大学出版会 (1991年) 稲葉由之『プレステップ統計学Ⅱ－推測統計学－』, 弘文堂 (2013年)		
評価方法	小テスト:30% 第1回レポート:35% 第2回レポート:35%		

現代社会と生活A		前期 2 単位	1・2年
衣生活文化		根本 由香 (ねもと ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代の生活は物質的に豊かになり、私たちは短い周期で流行が移り変わる多様な衣服を着ているが、本当に豊かな衣生活とはどのようなものかについて、衣服と人に関わる文化を多角的に理解することを通して考えを深める。		
授業の概要	日本の「きもの」文化の特色と、明治以降に導入された洋服が定着し衣生活が近代化する経緯を概説し、現代の衣生活との関わりを学ぶ。 さらに、衣服に込める思い、衣服を大切にするあり方、衣服の社会的な性格などについても事例を挙げ解説し、衣生活を考える視点を示す。 授業は講義形式で行い、絵画や写真など図像資料を使用する。		
授業計画	第1回	イントロダクション：現代の衣生活への視点	
	第2回	衣服の近代化 1 洋服との出会い	
	第3回	衣服の近代化 2 洋風摂取による衣生活の変化	
	第4回	衣服の近代化 3 洋装の定着	
	第5回	衣服の近代化 4 百貨店と流行	
	第6回	伝統と現代 1 着物の美	
	第7回	伝統と現代 2 文様に込められた意味	
	第8回	伝統と現代 3 「ゆかた」のうつりかわり	
	第9回	伝統と現代 4 色彩の文化	
	第10回	制服と個性 1 「学生」の誇りの記号	
	第11回	制服と個性 2 服装の自由とは	
	第12回	成長と衣服 祝い着の慣習	
	第13回	衣服に託した心	
	第14回	衣服と環境 リサイクル・アップサイクル	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で使用するプリントを事前配布する場合には、指示した個所を予習しておく。 プリント・ノートの整理・復習をする。		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	授業時に随時紹介する。		
評価方法	試験：70% 授業感想文：30%		

現代社会と生活B		後期 2 単位	1・2年
食料生産と食生活での食料の意義		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標及びテーマ	食料が、どのようなもので、どう生産され人がどのように利用しているのかを理解できるようにし、自身でも栽培・繁殖ができるように、また食そのものが我々の社会生活をどのように支えているのかを、理解できるようにする。全体として食生活をどのように捉えればよいのかを考え、自分なりに答えを出せるようにする。		
授業の概要	栽培に重要な土を理解する。栽培・繁殖に必要な肥料・飼料を学ぶ。生態系から生産と消費を考察する。さらに食が人体に与える影響を、栄養素から体が組み立てられ各組織とクロストークして動いてゆくのかを見る。流通面からも食の人体への貢献を学ぶ。また、好ましい食材と危険な食材なども理解できるようにする。		
授業計画	第1回	奇跡のリンゴも土作りから。土・土壌を作る	
	第2回	耕す、肥料を知る、農薬	
	第3回	作物栽培、	
	第4回	飼料を知る、家畜飼育、水産	
	第5回	食糧生産効率の歴史・エネルギー消費	
	第6回	品種改良、工場生産	
	第7回	生産流通消費の食糧供給の現状を食生活との関係から見る	
	第8回	よい食べ物、悪い食べ物 食構成成分の人体への影響を栄養素から概観するⅠ エネルギー源とメタボリックシンドローム	
	第9回	食構成成分の人体への影響を栄養素から概観するⅡ 体を作るたんぱく質と運動	
	第10回	食構成成分の人体への影響を栄養素から概観するⅢ 体を動かすビタミン、ミネラルなど	
	第11回	よい食べ物、悪い食べ物 食の人体への影響を栄養素以外から概観するⅠ 繊維などと腸内細菌	
	第12回	食の人体への影響を栄養素以外から概観するⅡ 活性酸素とその消去	
	第13回	食の人体への影響を栄養素以外から概観するⅢ アレルギー、老化	
	第14回	食の人体への影響を栄養素以外から概観するⅣ 毒性物質と人体	
	第15回	行政側からの対応	
準備学習(予習・復習等)	予習として、初回配布の全体の概要説明文に沿って関連事項を思い出しておいてほしい。復習は、毎回配布の資料を読みなおし自分で問題点の整理と解決策を考えておいてほしい。		
テキスト	使用せず。		
参考文献	生物学から文化へ(みすず書房)、食品大百科事典(朝倉)、農芸化学の事典(朝倉書店)、自然栽培ひとすじに(創森社)、土と食糧(朝倉)、自然農への道(創森社)		
評価方法	理解を期末試験で判断:70% 授業への取組みの評価:30%		

現代社会と生活C		後期 2 単位	1・2年
現代日本における家族と住居		松本 真澄（まつもと ますみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	少子高齢社会に向けて大きく変容しつつある現代日本の住居をめぐる様々な問題を認識し、これからの住居のあり方を考えるための基本的な知識と判断力を養うことを目指す。「社会のなかの住宅」、「家族と住居」、「住環境と地域」、「住居経済」、「住宅のマネジメント」などをテーマにとりあげ、生活の器である住居の現状や社会背景を理解する。		
授業の概要	授業は毎回テーマごとに講義を中心に進め、理解を助けるために写真などのビジュアルデータや、映像などを適宜取り入れる。また、理解を深めるために授業中に簡単な課題を行うことがある。		
授業計画	第1回	住居学について	
	第2回	日本の住宅事情	
	第3回	住宅政策	
	第4回	住まいの変遷（1）：戦前の住まい	
	第5回	住まいの変遷（2）：戦後の住まい	
	第6回	生活様式と間取り	
	第7回	統計からみる住宅と世帯	
	第8回	住宅関係費と家計	
	第9回	不動産としての住宅：住情報と消費者問題	
	第10回	都市計画と住まい	
	第11回	住まいの維持管理	
	第12回	高齢者と居住環境	
	第13回	住まいのインテリア	
	第14回	住宅のストック活用	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業のテーマ毎に理解を深めるため、随時課題を出すので、それを行うこと。		
テキスト	特に定めない。主として配布資料を用いる。		
参考文献	授業時に随時紹介する。		
評価方法	授業中感想・課題:40% レポート:60%		

現代社会と環境		後期 2 単位	1・2年
環境科学への招待ー環境問題を学際的に考えるー		内山 弘美 (うちやま ひろみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○環境問題を解決し持続可能な社会を構築するために、自然科学・社会科学・人文科学の枠を超えて、学際的に考えることが必要であることを理解する。また市民・科学技術者・行政・企業等による学際的なコミュニケーションが必要であることを理解する。</p> <p>○環境の専門家の仕事を理解すると同時に、グローバルな視点で環境問題を考える力を育成する。</p> <p>○実験実習を通して、身近な環境と私たちの生活について理解する。</p>		
授業の概要	<p>授業の大きな流れは、(1)世界と日本の環境問題の歴史を概観する。(2)環境倫理と環境に関する科学技術者・専門家の社会的責任について考える。(3)大学周辺の環境関連施設(国際機関)の見学を行う。その上で、(4)本学の廣田教授をゲスト講師として、気象観測実習を行う。(5)相模原キャンパスにおける環境への取り組みについて学ぶ。(6)最後に、これまで学んだ環境に関する知識を、STS(科学・技術・社会)の視点から整理する。</p> <p>参加体験型学習を重視し、グループ・ディスカッション、ロールプレイを行う。適宜、映像教材を用いる。文系の学生にもわかりやすく説明する。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクションー環境科学とは何か？ー	
	第2回	世界の環境問題の歴史ーレイチェル・カーソンの時代からー	
	第3回	地球環境問題と国際社会	
	第4回	日本の環境問題の歴史ー公害と政府・自治体・科学者ー	
	第5回	持続可能な発展へ向けてー環境科学の教育と研究ー	
	第6回	環境倫理と環境に関する科学技術者の社会的責任	
	第7回	環境に関する科学技術者の社会的責任ー企業の視点からー	
	第8回	環境に関する科学技術者の社会的責任ーグループ・ディスカッションー	
	第9回	事前学習(環境関連施設の見学)	
	第10回	環境関連施設の見学	
	第11回	事後学習(環境関連施設の見学)	
	第12回	青山キャンパスにおける気象観測実習	
	第13回	大学の環境への取り組みー相模原キャンパスにおけるサステナビリティー	
	第14回	森林と社会、生物多様性	
	第15回	STS(科学・技術・社会)の視点から環境を考える	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時の最後に、リアクション・ペーパーに、講義の概要と感想を記入して提出してください。		
テキスト	基本的に、毎授業時に、プリントを配布します。		
参考文献	随時、紹介します。		
評価方法	リアクションペーパー:30% 平常点:10% 提出物:30% レポート:30%		

自然と人間A		前期 2 単位	1・2年
科学の社会史		河野 俊哉 (この としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	東日本大震災及びそれに伴う原発問題をみればわかるように、文・理を問わず多くの人々にとっても、科学研究やその結果の持つ意味について通じていること（科学リテラシー）が、必須となりつつあります。そのことをふまえて、本講義では、「科学」とは何かについて歴史的に考察し、「科学」と「技術」の違いを理解した上で、「科学・技術」と上手に付き合っていくための科学リテラシーの修得を目標とします。		
授業の概要	高校までの「科学（または理科）」は、主に「理論」を中心に学んできましたが、科学の歴史は単に科学の理論や概念の歴史だけではなく、科学という人間の営みの歴史でもあります。その営みには、様々な社会的要素が含まれており、本講義ではこのような科学と社会の相互作用、科学の社会的・文化的側面の歴史に焦点をあてて講義を進めます。細かい科学知識は必要としませんが、各自の関心分野（経済学、社会学、英文学、芸術、教育学等）から積極的に「科学」との関連を模索して下さい。そのことによって、良い意味で皆さんの科学観が変わることを願っています。		
授業計画	第1回	ガイダンス：講義の概要、成績評価について説明します。アンケートを実施しますので、必ず出席して下さい。	
	第2回	「科学」の誕生：「歴史観」について説明します。	
	第3回	「古代ギリシアの自然観」：アリストテレスの「世界観（宇宙論）」、「運動論」、「物質観（四元素説）」について説明します。	
	第4回	「錬金術と絵画」：「錬金術とは何か？」を概観した上で、「錬金術と絵画」についても理解を深めましょう。『ハリ・ポッターと賢者の石』の鑑賞と解釈。	
	第5回	「12世紀ルネサンス」と「大学の誕生」：西洋における「大学の誕生」を「12世紀ルネサンス」との関連から概観します。『薔薇の名前』鑑賞。	
	第6回	「科学革命論」再考Ⅰ：「科学革命論」とは何かを概観した上で、その問題点を考察していきます。	
	第7回	「科学革命論」再考Ⅱ：「中国の科学」を概観することで、「西洋中心主義」になりがちな我々の思考を相対的な観点から再考してみましょう。	
	第8回	「科学革命論」再考Ⅲ：「魔術的自然観」とは何か？、「機械論的自然観」とは何か？について概観していきましょう。	
	第9回	「科学革命論」再考Ⅳ：「化学革命とは何か？」を近年の社会史研究の成果をもとに検討していきましょう。『パヒューム』の鑑賞。	
	第10回	「酸素の発見」と「パラダイム論」：「酸素の発見」を事例に「パラダイム論」について説明します。あわせて「絵画と科学」についても理解を深めましょう。	
	第11回	啓蒙主義と聖俗革命：「啓蒙主義と聖俗革命」について概観しながら、「百科事典と学問分類」についても理解を深めましょう。	
	第12回	科学技術社会論入門Ⅰ：BSE(狂牛病)問題を事例に、科学コミュニケーション論について説明します。	
	第13回	科学技術社会論入門Ⅱ：「原発問題」とを事例にして、「リスク社会」、「科学リテラシー」について説明します。	
	第14回	科学技術社会論入門Ⅲ：理研やSTAP細胞の事例を通して、研究倫理について理解を深めましょう。『論文捏造』鑑賞：シェーン事件	
	第15回	本講義のまとめ：「大学の誕生（日本の場合）」：日本の大学の特殊性を踏まえて、「教養教育の再構築」について一緒に考えてみましょう。	
準備学習 (予習・復習等)	配布資料や指定教科書の該当箇所を指示しますので、授業の前に目を通してきて下さい。また、「授業外レポート」の執筆を通して、「調べて、書く」ための基本作法（場合によっては、就職活動や卒業論文執筆等にも必要な知識）をマスターしていきましょう。		
テキスト	河野俊哉他共著『科学の真理は永遠に不変なのだろうか』（ベレ出版、2009年）。および授業時に適宜プリントを配布します。		
参考文献	古川安『科学の社会史[増訂版]』（南窓社、2000年）。 井山弘幸・金森修『現代科学論』（新曜社、2000年）。その他適宜授業中に紹介します。		
評価方法	平常点（小レポート）：60% 授業外レポート：40%		

自然と人間B		後期 2 単位	1・2年
科学の社会史		河野 俊哉 (この としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	東日本大震災及びそれに伴う原発問題をみればわかるように、文・理を問わず多くの人々にとっても、科学研究やその結果の持つ意味について通じていること（科学リテラシー）が、必須となりつつあります。そのことをふまえて、本講義では「科学」とは何かについて歴史的に考察し、「科学」と「技術」の違いを理解した上で、科学・技術と上手に付き合っていくための科学リテラシーの修得を目標とします。		
授業の概要	高校までの「科学（または理科）」が、主に「理論」を中心に学んでいたのに対し、本講義では科学の社会的・文化的側面の歴史に焦点をあてて講義を進めます。本講義の前半では「科学」を歴史的観点から考察することにします。さらに「科学と英文学」、「科学と絵画」、「ジェンダーと科学」等のテーマを考察し、最終的には、現代における科学・技術の諸問題を科学技術社会論的観点から考察します。細かな科学知識は必要としませんが、各自の関心分野（英文学、芸術、教育等）から積極的に「科学」との関連を模索して下さい。		
授業計画	第1回	ガイダンス：講義の概要、成績評価について説明します。 ダーウィンと進化論：概要と衝撃について説明します。	
	第2回	「社会ダーウィニズム」と「日本における進化論の受容」について説明します。	
	第3回	「科学とイギリス文学」に関する研究を概観します。	
	第4回	ダーウィニズムとウェルズ：『タイムマシン』や『宇宙戦争』を当時の英国社会の状況と共に、考察してみましよう。	
	第5回	『フランケンシュタイン』を科学的に考察し、電気の歴史、ゴシック小説、プロメテウス伝説などについて理解を深めましよう。	
	第6回	絵画と科学：フェルメールの絵画等を例にして、「絵画と科学」研究の可能性を考察してみましよう。	
	第7回	戦争と科学：フリッツ・ハーバーの生涯と業績を事例にして、「戦争と科学」について考えてみましよう。	
	第8回	レイチェル・カーソン：科学・文学・環境：DDTの功罪を、カーソンの観点からだけでなく、DDTの開発者ミュラーの営為との対比から考察してみましよう。	
	第9回	日本人と近代科学Ⅰ：長州ファイブ、山尾庸三、御雇い外国人ダイアラー 映画『長州ファイブ』の鑑賞	
	第10回	日本人と近代科学Ⅱ：『JIN』：病気の文化史：「江戸における病気と医学」について、『JIN』を入りに、華岡青洲等についても理解を深めましよう。	
	第11回	ジェンダーと科学：マリー・キュリーを題材に、「放射線の歴史」および「ジェンダーと科学」について理解を深めましよう。	
	第12回	科学技術社会論入門Ⅰ：『あいのり』を通して、「緑の革命」やGMO（遺伝子組み換え作物）について理解を深めましよう。	
	第13回	科学技術社会論入門Ⅱ：「原発問題」を題材に、「科学コミュニケーション」、「リスク社会」、「科学リテラシー」について理解を深めましよう。	
	第14回	科学技術社会論入門Ⅲ：理研やSTAP細胞の事例を通して、研究倫理について理解を深めましよう。	
	第15回	本講義のまとめ：「教養教育の再構築」について一緒に考えてみましよう。	
準備学習 (予習・復習等)	配布資料や指定教科書の該当箇所を指示しますので、授業の前に目を通してきて下さい。また、「授業外レポート」の執筆を通して、「調べて、書く」ための基本作法（場合によっては、就職活動や卒業論文執筆等にも必要な知識）をマスターしていきましよう。		
テキスト	河野俊哉他共著『科学の真理は永遠に不変なのだろうか』（ベレ出版、2009年）。および授業時に適宜プリントを配布します。		
参考文献	古川安『科学の社会史[増訂版]』（南窓社、2000年）。 井山弘幸・金森修『現代科学論』（新曜社、2000年）。 他の文献については授業時に紹介します。		
評価方法	平常点（小レポート）：60% 授業外レポート：40%		

科学と社会A		前期 2 単位	1・2年
情報科学と社会		小山 俊士 (こやま しゅんし)	
授業の到達目標 及びテーマ	情報社会と的確につきあっていくための、基礎教養を身につけることを目的とする講義である。情報処理技術や通信技術は現代社会のあらゆる場面で使われており、その基本は誰もが知っていなければならない。コンピュータやインターネットの誕生と基本原理を学び、社会での有効な利用法やトラブルへの対処方法などを考えていく。		
授業の概要	情報科学の考え方を解説し、情報技術が社会でどのように使われているかといったことを紹介するための講義を行う。講義の中で提示する資料を読み、関連する事項について自ら調べ、考えたことをレポートにするかまたは発表することも求める。コンピュータや情報科学に関する基礎知識は必要としないが、ホームページを検索し、参照することは求められる。		
授業計画	第1回	情報科学とは	
	第2回	計算の原理	
	第3回	汎用コンピュータとプログラム	
	第4回	コンピュータはどのように生まれたか	
	第5回	半導体と集積回路	
	第6回	シリコンバレーと情報産業	
	第7回	パーソナル・コンピュータ	
	第8回	インターネット	
	第9回	携帯電話	
	第10回	コンピュータでの日本語処理	
	第11回	音楽のデジタル化と著作権	
	第12回	Googleの検索技術	
	第13回	Amazonとネットビジネス	
	第14回	情報倫理とセキュリティ	
	第15回	情報リテラシーと情報モラル	
準備学習 (予習・復習等)	前回のプリントを読み直す。未知の用語をインターネット等で調べる。		
テキスト	特に指定しない。 講義でプリントを配布する。		
参考文献	毎回の講義の中で指示する。		
評価方法	毎講の小テスト:60% レポート:40%		

科学と社会B		後期 2 単位	1・2年
現代の科学・技術と社会の関係についての諸問題について、代表的事例をとりあげてそれらを歴史的視点で検討する。		栗原 岳史（くりはら たけし）	
授業の到達目標 及びテーマ	科学・技術は、現代の私たちの生活に欠かすことのできない必須の要素であるが、同時に、様々な諸問題を引き起こしてきた。本授業では、科学・技術が、どのような問題を、どのように引き起こしてきたのかについて、代表的な事例を取り上げて、それらを歴史的に検討する。それらを通じて、科学や技術の専門家でない者が、科学・技術に関する諸問題について、より広い視野で考えられるようになることが授業の目標である。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・講義形式で進める。 ・20世紀における科学や技術に関する代表的なトピックとして、主として核エネルギー、戦争と科学、公害、環境問題を事例として取り上げる。 ・時事的な問題を取り入れるため授業の内容を変更する場合もある。 ・初回の授業で授業の進め方や評価方法を説明するので、可能な限り出席すること。 		
授業計画	第1回	授業のガイダンスとイントロダクション ～現代社会における科学・技術を考える～	
	第2回	原子爆弾の誕生とその影響 (1) 原子爆弾構想の起源 ～核エネルギー発見の歴史～	
	第3回	原子爆弾の誕生とその影響 (2) 原子爆弾開発の「決定」 ～いつ・どこで・誰が・どのようにして「決定」したのか～	
	第4回	原子爆弾の誕生とその影響 (3) 原子爆弾使用の正当化 ～なぜ原子爆弾を使用したのか？～	
	第5回	日本の核開発 (1) 日本の原子力開発のはじまり ～第二次世界大戦期における日本の核開発の歴史～	
	第6回	日本の核開発 (2) 日本の原子力開発体制の成立 ～被爆国・日本がどのようにして原子力開発をはじめたのか～	
	第7回	日本の核開発 (3) 日本の原子力開発体制の特質 ～原子力基本法と日米原子力協定について～	
	第8回	日本の公害問題 (1) 水俣病とは？ ～水俣病の原因と社会への影響について～	
	第9回	日本の公害問題 (2) 歴史としての水俣病 ～企業と技術者の責任について考える～	
	第10回	日本の公害問題 (3) イタイイタイ病とは？ ～イタイイタイ病の原因と社会への影響について～	
	第11回	日本の公害問題 (4) 歴史としてのイタイイタイ病 ～「未知のリスク」にどのように立ち向かえばよいのか～	
	第12回	現代社会における科学と技術 (1) 戦争と科学について ～20世紀の戦争は科学とどのような関係にあったのか～	
	第13回	現代社会における科学と技術 (2) 現代の環境問題 (1) ～オゾン層破壊の発見とフロンガスの規制について～	
	第14回	現代の社会における科学と技術 (3) 現代の環境問題 (2) ～地球温暖化が「発見」されるまでの歴史から考える～	
	第15回	講義全体のまとめ ～科学・技術の諸問題について、私たちはどのように考えていけばいいのか～	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業終了時に、その日の授業に対する感想、意見、質問や、授業中に出した質問に対する答えを「小レポート」として提出する。 ・小レポートを提出したことでその日の授業に出席したとみなす。 ・小レポートの内容を講義に反映させるので、積極的な意見や質問を希望する。 		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	各講義毎に提示する。		
評価方法	講義時の小レポート(必須):30% 期末レポート(必須):60% 中間レポート(任意):10%		

科学文化史 A		前期 2 単位	1・2年
文化としての科学・教養としての科学		河野 俊哉 (この としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	歴史的事例を題材に、「科学」と「技術」の違いを理解した上で、「文化としての科学」の側面から科学に対する理解を深め、最終的には「リスク社会」とも呼ばれる現代社会の特質をも理解し、科学・技術と上手に付き合っていくための「科学リテラシー」の習得を目標とします。		
授業の概要	科学の歴史は単に科学の理論や概念の歴史だけではなく、科学という人間の営みの歴史でもあります。その営みには、様々な社会的要素や文化的要素が含まれており、本講義ではこのような科学と社会の相互作用、科学の社会的・文化的側面の歴史に焦点をあてて講義を進めます。細かな科学知識は必要としませんが、各自の関心分野（経済学、社会学、英文学、教育学等）から積極的に「科学」との関連を模索して下さい。そのことによって、良い意味で皆さんの科学観が変わることを願っています。		
授業計画	第1回	ガイダンス：講義の概要、成績評価について説明します。アンケートを実施しますので、必ず出席して下さい。	
	第2回	「科学」と「技術」：「歴史観」についても説明します。	
	第3回	古代ギリシアの自然観：「女性哲学者ヒュパティア」を事例に、古代ギリシアの科学観、「ジェンダーと科学」について理解を深めましょう。	
	第4回	「錬金術と絵画」Ⅰ：錬金術の基礎理解とその表象：プラントによる「賢者の石」製造の現代科学者による再現実験を鑑賞し、理解を深めましょう。	
	第5回	「錬金術と絵画」Ⅱ：ブリュゲルから『ハリー・ポッター』までを概観し、錬金術に対する理解を深めましょう。	
	第6回	図書館と科学：12世紀ルネサンス：『薔薇の名前』を鑑賞しながら、当時の図書館の意味を再考してみましょう。	
	第7回	ガリレオの斜塔：ガリレオの営為を事例に、科学とキリスト教・文学・音楽等について理解を深めましょう。	
	第8回	ケプラーと世界の調和：ケプラーを事例に、科学・音楽・占星術等について理解を深めましょう。	
	第9回	ニュートンの光と影：「錬金術師としてのニュートン」を事例に、当時の自然研究についての理解を深めましょう。	
	第10回	ラヴォワジエとプリーストリ：「酸素の発見」を巡る両者の営為をについて理解を深めましょう。『パヒューム』の鑑賞。	
	第11回	ジェンダーと科学：マリー・ラヴォワジエ：ダヴィドの絵画を通して、「ジェンダーと科学」について理解を深めましょう。	
	第12回	百科事典と科学：ベーコンの学問分類、『百科全書』、『ブリタニカ』等の18世紀における百科事典の考察を通して、理解を深めましょう。	
	第13回	コーヒーハウスと科学：18世紀におけるコーヒーハウスを事例にして、「公共圏と科学」、サイエンス・カフェについて理解を深めましょう。	
	第14回	原発問題とリスク社会：原発問題を事例に、科学コミュニケーションについて、理解を深めましょう。	
	第15回	本講義のまとめ：「科学リテラシー」と「教養教育の再構築」について、一緒に考えてみましょう。	
準備学習 (予習・復習等)	配布資料や指定教科書の該当箇所を指示しますので、授業の前に目を通してきて下さい。また、「授業外レポート」の執筆を通して、「調べて、書く」ための基本作法（場合によっては、就職活動や卒業論文執筆等にも必要な知識）をマスターしていきましょう。		
テキスト	河野俊哉他共著『科学の真理は永遠に不変なのだろうか』（ベレ出版、2009年）。および授業時に適宜プリントを配布します。		
参考文献	古川安『科学の社会史[増訂版]』（南窓社、2000年）。 井山弘幸・金森修『現代科学論』（新曜社、2000年）。その他適宜授業中に紹介します。		
評価方法	平常点（小レポート）：60% 授業外レポート：40%		

科学文化史B		後期 2 単位	1・2年
文化としての科学・社会における科学		河野 俊哉 (この としや)	
授業の到達目標及びテーマ	歴史的事例を題材に、「科学」と「技術」の違いを理解した上で、「文化としての科学」の側面から科学に対する理解を深め、最終的には「リスク社会」とも呼ばれる現代社会の特質をも理解し、科学・技術と上手に付き合っていくための「科学リテラシー」の習得を目標とします。		
授業の概要	本講義では科学と社会の相互作用、科学の社会的・文化的側面の歴史に焦点をあてて講義を進めます。さらに、科学哲学の視点からアプローチし、理論と事実、仮説と法則等のテーマを考察し、疑似科学とどう対峙していくかを学び、最終的には現代における科学・技術の諸問題を科学技術社会論的観点から考察することになります。細かな科学知識は必要としませんが、各自の関心分野（経済学、社会学、英文学、教育学等）から積極的に「科学」との関連を模索して下さい。そのことによって、良い意味で皆さんの科学観が変わることを願っています。		
授業計画	第1回	ガイダンス：講義の概要、成績評価について説明します。アンケートを実施しますので必ず出席して下さい。	
	第2回	ダーウィンと進化論：「科学とキリスト教」～「社会進化論」について概観します。	
	第3回	モンキー裁判再考：「創造論」、「創造科学」、「インテリジェント・デザイン」について概観し、優生学についても理解を深めましょう。	
	第4回	科学哲学入門Ⅰ：「理論と事実」、「仮説と法則」とは何か？について、概観します。	
	第5回	科学哲学入門Ⅱ：「疑似科学と反証条件」、「実験と観察」について、理解を深めましょう。	
	第6回	フェルメールと科学：「フェルメールと科学」を事例にして、「合成染料の歴史」や「パーキンとモーブ」について、理解を深めましょう。	
	第7回	日本人と近代科学Ⅰ：『JIN』を入り口に、微生物学の歴史（レーウェンフック、パスツール、コッホ等）について理解を深めましょう。	
	第8回	日本人と近代科学Ⅱ：『JIN』：緒方洪庵を事例に、江戸の病気の文化史（吉原、梅毒等）について、理解を深めましょう。	
	第9回	日本における「ジェンダーと科学」：「津田梅子と科学」：津田梅子を事例にして「ジェンダーと科学」について理解を深めましょう。山川捨松。津田仙。	
	第10回	エジソン発明会社の没落：エジソンを事例に、「技術」について理解を深めましょう。ニコラ・テスラ。	
	第11回	戦後日本の科学観：アトムとゴジラ：手塚治虫と科学：『アトム』や『ゴジラ』が表象していたものについて考察し、日本人の科学観の理解を深めましょう。	
	第12回	高木仁三郎と市民の科学：高木仁三郎の営為を事例に、科学コミュニケーションについての理解を深めましょう。	
	第13回	原発問題とリスク社会：「大石又七と大江健三郎との対話」をもとに、原発問題に対する理解を深めましょう。	
	第14回	科学の不確実性：「科学の不確実性」の理解を通して、「科学リテラシー」の重要性を理解しましょう。	
	第15回	本講義のまとめ：「教養教育の再構築」について一緒に考えましょう。	
準備学習 (予習・復習等)	配布資料や指定教科書の該当箇所を指示しますので、授業の前に目を通してきて下さい。また、「授業外レポート」の執筆を通して、「調べて、書く」ための基本作法（場合によっては、就職活動や卒業論文執筆等にも必要な知識）をマスターしていきましょう。		
テキスト	河野俊哉他共著『科学の真理は永遠に不変なのだろうか』（ベレ出版、2009年）。および授業時に適宜プリントを配布します。		
参考文献	古川安『科学の社会史[増訂版]』（南窓社、2000年）。 井山弘幸・金森修『現代科学論』（新曜社、2000年）。その他適宜授業中に紹介します。		
評価方法	平常点（小レポート）：60% 授業外レポート：40%		

生物学		前期 2 単位	1・2年
ヒトの生物学：最新の分子生物学の成果を含むヒトの生活にかかわる生物学。		大塚 讓（おおつか ゆずる）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○地球上の生命の発生からのヒトまでの進化を理解する。</p> <p>○ヒトの体の構造と機能を、分子、遺伝子、細胞、臓器、個体のレベルで理解し、男女の違いを認識する。</p> <p>○ヒト（特に女性）の一生をライフステージ別に理解する。また、ヒトの生老病死を理解する。</p> <p>○ヒトと地球上の生物とのかかわりを理解しヒトの生活を考える。</p> <p>○後期『生理学』も合わせて履修することが望ましい。</p>		
授業の概要	<p>ヒトが4000万種といわれる生物の1つの種にすぎないことを忘れがちである。</p> <p>講義は、DNA分子から細胞へ、細胞から器官系（体の構造と機能）、遺伝、生殖と発生、進化などを通して生物界の一員としてのヒトの特徴を理解させる。</p> <p>最後に、植物や昆虫とのかかわりを講義する。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション：生命科学の最前線、二重らせん、遺伝子組換え、組換え食品、遺伝子診断、生命倫理、研究倫理。	
	第2回	進化1 化学進化～植物・昆虫の上陸：元素原子の生成、分子の生成、生命と細胞の発生、多細胞生物への進化、器官の発達などが地球・大気環境の変化特に酸素濃度の上昇とのかかわりを理解する。	
	第3回	オルドビス紀～現代人：「ヒトの命」は、ほかの生物が絶滅していく中、何度も危機を乗り越えながら、辛うじてDNAを子孫に伝えてつながってきた貴重な存在だということを理解する。	
	第4回	ヒトの進化：哺乳類の中から臼歯が多くなり、高エネルギーを摂取できるようになり脳幹、古皮質、新皮質と発達分化した脳を持つ新人類ホモサピエンスの登場について理解する。	
	第5回	生命の設計図遺伝子1：自己複製、遺伝情報の伝達、突然変異などの能力を持つ物質としてDNAが遺伝子の本体であることを理解する。	
	第6回	生命の設計図遺伝子2：形質発現、遺伝情報の蓄積、などの能力を持つ物質としてDNA・RNAの役割を理解する。	
	第7回	生命の設計図遺伝子3：DNA・RNAの分析、組換え、組換え生物、遺伝子の多型特にアルコール代謝の遺伝子多型などを理解する。	
	第8回	細胞・組織・器官・個体：細胞が集合して組織を形成し、そして数種の組織が集合して器官となり、さらに多くの器官系が集合して個体となり、それに応じて複雑な機能が発現されることを理解する。	
	第9回	内分泌（ホルモン）系：各器官系の発達におけるホルモンの役割を女性ホルモンと女性の身体の構造と機能の関係を通して理解する。	
	第10回	生殖・発生（妊娠）：卵と精子という雌雄の生殖細胞が合体（受精）して新個体になるまで（妊娠）を理解する。また、発生過程と進化の過程の関連を理解する。	
	第11回	周産期・授乳期：この時期の母子双方における注意事項を理解する。また科学の進歩とともに行われるようになった出生前診断の種類、問題点を理解する。	
	第12回	男と女の違い：性染色体の役割、ホメオティック遺伝子、マスターキー遺伝子（雄性決定SRY遺伝子）、男性ホルモン（アンドロゲン）の役割を理解する。	
	第13回	なぜ老いるかなぜ死ぬか：有性生殖を行う生物（ヒトを含む）は、個体を必要なだけ生かし、必要がなくなれば死なせる仕組みを発達させた。加齢に伴って起こる退行的変化の原因と予防法を理解する。	
	第14回	ヒトと自然／地球生物圏は持続しうるか：人類の環境収容力を決める因子の一つである食糧生産力と植物について特おいしいお米とワインはどうしてできるか等を理解する。	
	第15回	ヒトと自然／地球生物圏は持続しうるか：人類の環境収容力を決める因子の一つである資源供給力や環境汚染物質浄化能力と昆虫や動物について理解する。	
準備学習 (予習・復習等)	復習を望む。次回までに、CoursePowerなどを利用して、プリントの空欄部分を埋めるなどして、完成させておくこと		
テキスト	スターら 「スター生物学」東京化学同人2900円 不足するところはプリントを配布。		
参考文献	東京化学同人新スタンダード栄養・食物シリーズ「生化学」その他、図書館カウンターにある2015年度指定参考図書目録を参照のこと。		
評価方法	レポート:30% 授業中のミニテスト:30% 期末試験:40%		

生理学		後期 2 単位	1・2年
人体の構造と機能：人体の各器官がどのような構造をし、どのように働き、外部環境や内部環境の変化にどのように対応するかを学ぶ		大塚 讓（おおつか ゆずる）	
授業の到達目標及びテーマ	○生理学は人体の各臓器の機能の研究から、それを構成する細胞の構造や機能の研究(細胞生物学)さらにタンパク質・糖質・脂質などの代謝の研究(生化学)そして遺伝情報を伝えるDNAなどの研究(分子生物学)へと発展を遂げたことを理解する。○遺伝子、細胞、組織、器官の各レベルの構造と機能を理解する。○食欲を通して味覚・嗅覚、食の好みに対する記憶などの脳の高次神経機能の一端を理解する。○ヒトの生存に必要な食物の主要成分である糖質・脂質・タンパク質の消化吸収、体内動態、代謝、排泄の機構を理解する。○個体の恒常性の維持に必要な神経機能やホルモンなどの内分泌機能を理解する。生理的変化として現れる老化について、遺伝要因や環境因子から理解する。		
授業の概要	細胞とその内部の構造と機能を解説したのち細胞の集団である組織と器官の働き成長について述べる。食物として摂取する「糖質」「脂質」「タンパク質」「ミネラル」「ビタミン」の消化吸収代謝を概説し、過剰・欠乏(外部環境の変化)に対して、体内の環境を維持するために、生体がどのように応答するかを諸臓器の機能を通して講義する。生理的変化として現れる老化について、遺伝要因や環境因子から説明する。		
授業計画	第1回	細胞と細胞内小器官の構造と機能。組織と器官の構造と機能。組織と個体の発生と分化、生育。	
	第2回	内分泌系・自律神経系概説：生命維持に必要な種々の機能を無意識のうちに調節するホルモン系と自律神経系の機能を血糖値と血圧を例として理解する。	
	第3回	脳の感覚・記憶機構・一般感覚系と皮膚：空腹と食欲、圧覚、触覚、温度感覚、痛覚などの感覚および位置の感覚を理解する。	
	第4回	特殊感覚：食物選択を決める手段のうち味と匂いの感覚を理解する。さらに”美味しさ”に関与する要素を理解する。	
	第5回	摂食の仕組み：歯の機能・虫歯予防、唾液の機能と効用および嘔吐効用を理解する。さらに嚥下機構および死因になりかねない誤嚥を理解する。	
	第6回	栄養素の消化吸収機能：生存するために五大栄養素を体内に取り込むための消化吸収過程を消化管、消化酵素の働きを通して理解する。	
	第7回	酸素の役割と外呼吸：生存するために酸素を体内に取り込むための外呼吸(二酸化炭素の排出を含む)を肺泡・赤血球(ヘモグロビン)の働きを通して理解する。	
	第8回	循環系/心臓・血液：栄養素、酸素などを消化管、肺から運搬する機構と貧血および血漿内容物濃度を理解する。さらに、酸・塩基平衡、体液量の維持などを理解する。	
	第9回	栄養素の代謝・内呼吸/肝臓：エネルギー(ATP)生成のための栄養素の代謝機構、身体形成機構を肝臓の働きを通して理解する。	
	第10回	筋肉系：肝臓と異なる栄養素の代謝および最後の糖質源(糖新生系)としての役割を理解する。さらに有酸素・無酸素運動におけるエネルギー代謝を理解する。	
	第11回	エネルギー代謝・肥満とやせ、ダイエットと神経性食欲不振症：代謝を化学エネルギーレベルで理解し、肥満とやせを脂肪組織・細胞を通して理解する。ダイエット法と神経性食欲不振の予防を理解する。	
	第12回	生体リズム/時間生物・栄養学：時々刻々移り変わる自然環境に順応するために体内時計があり、その役割を説明する。	
	第13回	骨格系/泌尿器系：骨格がカルシウムの貯蔵庫であることを骨粗鬆症を通して理解する。生体機能におけるカルシウムの働きの重要性を理解する。代謝の水溶性最終産物の排泄機構および血圧調整機構を腎臓の働きを通して理解する。	
	第14回	感染症と免疫：微生物はあらゆるところに存在するがヒトに病気を起こす微生物は免疫系によって排除される。三次防御としての免疫システム(自己と非自己の認識)を理解する。	
	第15回	免疫システムの変調：自己免疫疾患やアレルギー(抗原抗体反応の結果、障害的な過剰症状を示すもの)の種類、とくに食物アレルギーを理解する。	
準備学習(予習・復習等)	復習を望む。次回までに、CoursePowerなどを利用して、プリントの空欄部分を埋めるなどして、完成させておくこと。		
テキスト	飯田ら「解剖・生理学-人体の構造と機能」新スタンダード栄養・食物シリーズ3巻 東京化学同人。不足するところはプリントを配布。		
参考文献	「スター生物学」東京化学同人2900円 その他、図書館カウンターにある2015年度指定参考図書目録を参照のこと。		
評価方法	レポート:30% ミニテスト:30% 期末試験:40%		

地球科学		前期 2 単位	1・2年
気象学入門		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	地球温暖化、異常気象、集中豪雨、あるいはオゾン層の破壊等の問題を通して、また各種リモートセンシング技術の進歩により、気象現象や地球大気そのものがごく身近に意識されるようになってきました。ここでは大気中の種々の気象現象・大気現象の基礎を理解できるよう講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。気象の広範囲な内容 ー大気の組成・構造、高気圧と低気圧、風、雲の種類、雨と雲、光の散乱などー について、主に観測や実験に基づいた基本的な事柄を説明します。また日本の気候についても解説します。		
授業計画	第1回	大気の温度構造	
	第2回	大気の組成 (平均組成・鉛直分布)	
	第3回	低気圧と高気圧、台風	
	第4回	風ー大気の大循環	
	第5回	風ー局地風	
	第6回	雲の種類とでき方	
	第7回	雨と雪	
	第8回	梅雨と降雪	
	第9回	太陽放射	
	第10回	地球の熱収支	
	第11回	大気の光学現象	
	第12回	気象観測技術 (地上観測・高層観測)	
	第13回	気象観測技術 (気象衛星・リモートセンシング)	
	第14回	日本の気候 (二十四節気)	
	第15回	日本の気候 (気温・雨量等)	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	山岸照幸「理科のおさらい 気象」(自由国民社)、山岸米二郎「気象学入門」(オーム社)、古川武彦・大木勇人「図解気象学入門」(講談社)		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

環境科学A		前期 2 単位	1・2年
環境科学の基礎		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標及びテーマ	環境と調和した社会を築くためには、環境問題の科学的な理解が不可欠です。ここでは大気汚染、水質汚濁、土壌汚染の化学的メカニズム、健康被害、浄化対策、また一般廃棄物、産業廃棄物、特に化学物質の処理、リサイクル等について、その基礎を理解できるよう講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。はじめに環境問題の背景にある急速な人口増加、食料や資源・エネルギー確保といった問題について説明し、ついで主に我が国の公害・環境問題を具体例として大気、水質、土壌汚染について、そのメカニズム、健康被害、浄化対策を、また廃棄物問題とその対策について説明します。		
授業計画	第1回	環境科学入門	
	第2回	人口問題、食糧問題	
	第3回	資源・エネルギーと環境	
	第4回	自然の浄化作用	
	第5回	環境汚染物質	
	第6回	大気汚染 (ガス)	
	第7回	大気汚染 (エアロゾル)	
	第8回	大気汚染 (二次汚染質)	
	第9回	水質汚濁 (河川・湖沼)	
	第10回	水質汚濁 (海洋)	
	第11回	水質汚濁 (上水・下水)	
	第12回	土壌汚染 (農薬など)	
	第13回	土壌汚染 (重金属)	
	第14回	廃棄物とリサイクル	
	第15回	化学物質の健康影響・安全管理	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	日本化学会編「暮らしと環境科学」(東京化学同人)、世良力「環境科学要論(第三版)」(東京化学同人)		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

環境科学B		後期 2 単位	1・2年
地球環境問題の基礎		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	産業革命以後、人間活動は際限なく拡大し、地球全体に影響を及ぼすようになってきました。そして我々は地球温暖化、海洋汚染、希少生物の絶滅等地球規模の環境問題に直面しています。ここでは個々の地球環境問題に関するメカニズム、影響、対策、将来予測等について、その基礎を理解できるよう講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。まず地球大気の構造について説明し、その上で地球温暖化・オゾン層破壊について説明します。また酸性雨、海洋汚染、熱帯雨林の減少等について説明するとともに、それらに関連する化学物質の観測方法、データの見方等についても説明します。		
授業計画	第1回	大気の鉛直構造	
	第2回	大気の組成、鉛直分布	
	第3回	地球温暖化の現状・温室効果	
	第4回	地球温暖化の将来予測	
	第5回	二酸化炭素の観測・監視	
	第6回	オゾン層破壊－オゾンの生成・消滅反応	
	第7回	オゾン層破壊－フロンガスの影響、オゾンホール	
	第8回	酸性雨－生成のメカニズム・現状	
	第9回	PM2.5問題	
	第10回	海洋汚染－浮遊汚染物質・化学物質	
	第11回	放射能汚染	
	第12回	熱帯雨林の破壊・砂漠化	
	第13回	生物多様性の保全	
	第14回	環境と調和した暮らし方	
	第15回	新しいエネルギー、省エネルギー	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	世良力「環境科学要論（第三版）」（東京化学同人）、小島次雄・川平浩二・藤倉良「これからの環境科学」（化学同人）		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

環境デザイン論A	前期 2 単位	1・2年
私たちの生活を取り巻く環境としての建築・都市空間を「視る」	禅野 靖司（ぜんの やすし）	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <p>私たちの「環境」を構成している建築や都市空間を意識的に視る、そして楽しむための眼を養い、そのためのテクニックを学び、また見たものを自分の言葉で分析して表現する力をつける。そこでまずは、身近な住宅の持つ特性を論じることからはじめ、そこから寺社など歴史的な建築にまで観察の範囲を広げて、日本建築の一般的特徴を、中国・朝鮮半島の伝統建築や、西洋のゴシック建築などとも比較することで理解していく。さらにキャンパスの建物や都心の超高層ビルなどに注目して、建築デザインから何を読み取ることができるかを考える。そうした「読解力」は一度身に付けたら、一生モノです。</p> <p>【授業の概要】</p> <p>毎回いくつもの建物や街並みの写真を見せるので、皆さんにはそれぞれの写真を自分の眼で観察し、自分の言葉で分析してもらいます。毎回の授業で習ういろいろな言葉や表現をノートに記録し、またそれに関する自分の考察を記録することでポキャブラリーを増やし、次回の授業では、それに基づいてより多くの、そしてより豊かな言葉で建築や都市空間を表現できるようになっていきます。</p> <p>【授業計画】</p> <p>第 1 回 イントロダクション（日本家屋の縁側とベランダについて考える） 第 2 回 日本の伝統建築の主な特徴（1）素木の建築、木に対する精霊崇拜 第 3 回 日本の伝統建築の主な特徴（2）自然環境との調和 第 4 回 日本の伝統建築の主な特徴（3）水平性の強調 第 5 回 日本の伝統建築の主な特徴のまとめ＋ミニクイズ 第 6 回 古代中国から渡来した進んだ建築技術と構造（1） 縄文・弥生時代の日本の建築技術と古代中国の建築技術 第 7 回 古代中国から渡来した進んだ建築技術と構造（2） 日本における中国建築技術の受容と変容 第 8 回 構造から見た日本建築と西洋建築の違い＋中間試験 第 9 回 ヨーロッパの石造建築（1）ロマネスクとゴシック 第 10 回 ヨーロッパの石造建築（2）ゴシックリバイバル 第 11 回 キャンパスゴシック 第 12 回 コスプレ建築としてのゴシック調建築 第 13 回 都市空間の特性（1）：キャンパスと都市に見られるバロック空間 第 14 回 都市空間の特性（2）：ランドマーク 第 15 回 総復習</p> <p>【準備学習（予習・復習）】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学期中、小テストを数回、随時行うので、いつも前回の内容を復習して授業に臨むこと。 <p>【テキスト】教科書はありませんが、随時プリントしたものを渡します。 【参考文献】なし</p> <p>注意点： この授業には教科書がありません。プリントを随時配布しますが、基本は授業中に見せる写真と私の説明が全てですから、欠席したり居眠りしていると授業についていけなくなってしまいます。十分注意して下さい。</p> <p>【評価方法】</p> <p>中間試験の結果（全体の30%）と期末試験の結果（全体の50%）によって成績をつけます。残りの20%は出席点です。出席は毎回とするわけではありませんが、一学期で大体8回前後（もしくはそれ以上）チェックしますから、たまたま出席をとった週に欠席した人の場合は、欠席1回分としマイナス4点にカウントされます。もし5回欠席したら、マイナス20点（100点中）となりますから、その場合は試験で満点を取ったとしても、総合点は80点（30点＋50点＋0点）となります。もちろん全回出席していれば、総合点は100点（30点＋50点＋20点）です。中間および期末試験の時に欠席した場合は、基本的にあとから受けることはできません。もし病気でやむを得ず欠席した場合は、必ず医師の診断書を提出して下さい。</p>		

環境デザイン論B		後期 2 単位	1・2年
持続可能な市民社会を考える～身近な環境をより豊かにしていくためのコミュニケーション		狩野 三枝 (かりの みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>私たちを取り巻く環境は、地球レベルの話から人間関係に至るまで、すべて切り離すことのできないつながりを持っています。</p> <p>ここでは、そのつながりを意識し、社会の中で市民一人一人が、当事者として主体的に、誰もが自分らしく生きられる環境づくりを考え実践するために、革新的な仕組みや考え方を知り、自らが課題を発見し・掘り下げ・解決する姿勢とその方法を様々な調査や現場での体験を通して学びます。</p>		
授業の概要	<ol style="list-style-type: none"> 1. 海外及び日本における社会の革新的な仕組みや考え方を事例から学ぶ。 2. グループワークにおける話し合いや合意形成の方法を学ぶ。 3. 課題は5名ほどのグループで取り組む。その過程を通して協働の可能性を体験し、社会の課題に対して一人一人が主体的に関わることの意味と楽しさを学ぶ。 		
授業計画	第1回	コミュニケーションの技術（1）～グループディスカッションは楽しい	
	第2回	新しい世界を知り発想力を磨く～持続可能な社会の仕組みとは	
	第3回	コミュニケーションの技術（2）～対話のレッスン	
	第4回	新しい世界を知り発想力を磨く～自由な子どもの世界を知ろう	
	第5回	新しい世界を知り発想力を磨く～コレクティブハウジング	
	第6回	新しい世界を知り発想力を磨く～日本のコミュニティ	
	第7回	課題説明～誰もが自分らしく暮らせる まち・コミュニティの秘密を発見しよう！	
	第8回	テーマのディスカッション	
	第9回	グループ決め・テーマ決めと課題スケジュール計画	
	第10回	グループで調査・議論～仮説を立てる	
	第11回	グループで調査・議論～考えを広める	
	第12回	グループで調査・議論～考えを深める	
	第13回	グループで調査・議論～現場を見る	
	第14回	グループでまとめ作業	
	第15回	発表と評価	
準備学習 (予習・復習等)	<p>家族や友人、ご近所やアルバイト先など、自分の身近な環境で起こっている問題や疑問は、どこか社会の仕組みの不備とつながっていないだろうか。誰もが自分らしく生きられる社会になっているだろうか。そんな視点を持って新聞やニュースを見聞きし、考え、感じてみて下さい。</p>		
テキスト	<p>特に使いません。必要な資料は随時配付。</p> <p>課題のまとめに必要な記録用写真やコピー代、地図・交通費等の費用は随時個人負担とします。</p>		
参考文献	<p>僕たちの街づくり作戦/マイケル・ノートン著（都市文化社）</p> <p>参加するまちづくり（OM出版）</p> <p>コレクティブハウジングで暮らそう（丸善） など</p>		
評価方法	<p>平常点:30% レポート:30% グループ課題:40%</p>		

情報学	後期 2 単位	1・2年
情報の生産と利用	堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	本科目は、情報の歴史や情報の性質を知り、現代の社会において情報がどのように生産され利用されているのかを理解し、受講生自身が情報を使う力（情報リテラシー）を高めることを目的としている。	
授業の概要	まず、情報とは何か、情報を使う力とは何かを押さえ、コンピュータやインターネットの歴史を概観する。そして、社会のデジタル化をSNS、ビッグデータ、著作権などの面から考える。また、教育や文化におけるデジタル化の現状や課題を考え、情報リテラシーやメディア・リテラシーについて触れる。そのほか、グループで本学紹介のスライドを作成し発表する。	
授業 計画	第1回	情報を使う力について
	第2回	社会の情報化の歴史
	第3回	コンピュータの歴史
	第4回	インターネットの歴史
	第5回	情報の入手と利用（1）SNS
	第6回	情報の入手と利用（2）ビッグデータ
	第7回	情報の入手と利用（3）著作権
	第8回	教育のデジタル化
	第9回	文化のデジタル化
	第10回	発表 グループ1
	第11回	発表 グループ2
	第12回	発表 グループ3
	第13回	メディアと報道
	第14回	情報リテラシーの理論
	第15回	まとめ
準備学習 (予習・復習等)	講義では、情報の受け手・利用者の側に立った説明が多いと思われるが、発表では、送り手としての体験を楽しんでいただきたい。常に「目の前の情報の送り手・作成者」を意識してほしい。	
テキスト	特になし。	
参考文献	授業のなかで紹介する。	
評価方法	課題:50% レポート:50%	

生活文化A		前期 2 単位	1・2年
着ることの意味を文化史的に問う		野口 ひろみ (のぐち ひろみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○人間生活に欠くことのできない衣服について、機能と同時に人間の表現の意味も担うものであることを理解する。</p> <p>○時代や文化によって違うかたちであられたさまざまな衣服を知る。</p> <p>○衣服の表現のあり方を考察する力を持つ。</p>		
授業の概要	<p>まず、衣服が人間にとってどんな意味をもって成立しているのかを分析し、衣服が実用的な存在であるのと同時にさまざまな意味において人間の表現を担うものであることを理解する。次に、古今東西の文化の中で多様な形で現れた衣服を知り、人体をどのように包むかをきっかけに整理することにより、表現のあり方を考察する。生活文化としての現代ファッションの魅力についても触れる。</p>		
授業計画	第1回	はじめに 生活文化を生み出す美意識について 美術館見学のすすめ	
	第2回	着るものを表す言葉 衣服の意味 表現としての衣服	
	第3回	服飾の形態1 ギリシャの衣服	
	第4回	服飾の形態1 中世のマント、天衣など	
	第5回	服飾の形態2 ビザンチンの衣服 平安の衣服の和様化	
	第6回	服飾の形態2 小袖の表衣化	
	第7回	服飾の形態3 近世以降の洋服の変遷	
	第8回	服飾の形態3 袴 袴	
	第9回	形態の表現1 ドレープ	
	第10回	形態の表現2 面	
	第11回	形態の表現3 形態感の強調	
	第12回	形態の表現4 装飾部分① 襟・曳き裾	
	第13回	形態の表現4 装飾部分② 袖・帯	
	第14回	現代服飾デザインと郷土性	
	第15回	服飾の表現 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>ノートとプリントを整理しておいてほしい。</p> <p>試験は自筆ノート持込み可とする予定である。</p>		
テキスト	特に定めない。画像資料のプリントを配布する。		
参考文献	<p>谷田関次・石山彰『服飾美学・服飾意匠学』（光生館）</p> <p>その他図書館にある服飾事典の類を参考にするとよい</p>		
評価方法	試験:70% レポート:20% 平常点:10%		

生活文化B		前期 2 単位	1・2年
食文化		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>目標：①様々な食文化が形成される要因を理解する。②食を通して異文化について、理解を深めると共に自らのアイデンティティを確立する。③日本の食文化について、歴史の変遷を概観することで、未来の食について考える力を身につける。</p> <p>テーマ：世界の食生活ならびに、日本の伝統的な食文化の成り立ちについて学ぶ。</p>		
授業の概要	<p>食文化は、それぞれの地域の風土、宗教、政治、経済など社会背景により大きく異なる。本授業では、人類の主要な食糧の栽培と伝播、各地域の食べ方、また食事のマナーや宗教上のタブーについて、なぜそうなったのか、その背景を理解する。特に日本の食文化について、歴史的側面から各時代の特徴を踏まえながら、現在の食に至る過程を学ぶ。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス 食文化の成り立ち	
	第2回	ムギの食文化：ムギの栽培と伝播、ヨーロッパとアジアのムギの食べ方	
	第3回	コメの食文化：コメの栽培と伝播、炊飯の仕方	
	第4回	麺の食文化：中国・朝鮮・日本の麺、東南アジアのコメ麺、イタリアのパスタ	
	第5回	食法：手食、箸食、ナイフ・スプーン・フォーク食	
	第6回	食物禁忌と宗教：タブーとその理由	
	第7回	スープ：日本の出汁、中国の湯、西洋のフォン	
	第8回	日本の食文化1：縄文・弥生時代-狩猟、漁撈生活から農耕、稲作栽培	
	第9回	日本の食文化2：飛鳥・奈良・平安時代-貴族の食文化	
	第10回	日本の食文化3：鎌倉・室町時代-武士の食文化	
	第11回	日本の食文化4：安土桃山時代-南蛮食文化	
	第12回	日本の食文化5：江戸時代-庶民の食文化	
	第13回	日本の食文化6：行事食・郷土食	
	第14回	日本の食文化7：明治・大正・昭和-和洋折衷料理、肉食普及	
	第15回	現代の食：食文化の未来を考える	
準備学習 (予習・復習等)	<p>普段から食について、新聞やニュースなどのメディアを通して関心を高め、各自が関心ある内容の資料を収集しておくこと。</p>		
テキスト	<p>特に指定しない。教員が作成したプリントを毎回配布する。 プリントを整理するためのA4版クリアブックを各自用意すること。</p>		
参考文献	<p>講義中、適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>受講態度:30% 小レポート:20% 試験:50%</p>		

生活文化B		後期 2 単位	1・2年
食文化論		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	食文化と宗教や思想の関連を理解する。食文化を歴史の中で考える。 食文化と自然環境の関連を理解する。マナーや社交性について理解する。 現代における食文化の問題点を理解する。		
授業の概要	講義を中心とし、コメントを書いて提出する。 映画、絵画、文学などにふれて、考えたことを文章にする。		
授業計画	第1回	現代日本の食文化の特徴と問題	
	第2回	食文化の見方	
	第3回	神話と食文化	
	第4回	食のタブー	
	第5回	宗教と食文化～ユダヤ教とキリスト教	
	第6回	宗教と食文化～禅	
	第7回	宗教と食文化～イスラーム	
	第8回	風土と食文化	
	第9回	食文化の異文化交流	
	第10回	マナーと文明化	
	第11回	グルメの誕生	
	第12回	質素と贅沢、断食と飽食	
	第13回	食文化の身体性と精神性	
	第14回	酒とコーヒーと茶	
	第15回	現代の食の風景	
準備学習 (予習・復習等)	課題について予習・復習のレポートを提出する。		
テキスト	文章を配布する。画像や映画を鑑賞する。		
参考文献	図書館資料を紹介する。		
評価方法	授業コメント:40% レポート(複数回):30% 試験:30%		

生活文化C		後期 2 単位	1・2年
豊かに生きるために住空間を考える		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	多様化している現代の生活様式のもと、利便性や安全性を備え、健康的で快適な、かつ環境に配慮した住まいのあり方を学ぶ。人間生活のベースとなる住空間への意識を高め、問題を見出し、考える力を養うことが目標。「真の豊かさとは」をテーマに、豊かな人間社会の形成において住居が果たす役割を認識し、実現するために何をすべきかを問う。		
授業の概要	まず住まいの役割、構造の基本知識を共有し、インテリアの構成要素の中から特に光と空間の関わりをとり上げる。次に20世紀を代表する住宅建築を写真と図面により学ぶ。さらに日本の住まいの変遷をなぞり、住生活の今日的な諸問題について考える。最後に理想の住まいについて各人がプランを提示する。		
授業計画	第1回	住まいとは・住まいの役割：1. 住まいと風土／2. 住まいの機能／3. 生活と生活空間／4. 公私の空間	
	第2回	住まいの構成要素：1. 住要求と居住性／2. 住宅平面要素-居室と配置、住宅平面の考え方	
	第3回	インテリアとエクステリア：1. インテリア空間の構成／2. インテリアの構成要素／3. インテリア計画／4. エクステリア	
	第4回	住空間と光 1-自然光：1. 日照・日射と採光／2. 透光不透視／住宅における自然光の効果／建築空間と光（教会・礼拝堂）	
	第5回	住空間と光 2-照明／1. 照明／2. 住まいの照明計画／照明器具のデザイン	
	第6回	20世紀の住宅建築 1：チャールズ・レニー・マッキントッシュ／フランク・ロイド・ライト	
	第7回	20世紀の住宅建築 2：ヘリット・トーマス・リートフェルト／ル・コルビュジェ	
	第8回	20世紀の住宅建築 3：ヴァルター・グロピウス／ミース・ファン・デル・ローエ	
	第9回	20世紀の住宅建築 4：チャールズ&レイ・イームズ／アルヴァ・アアルト	
	第10回	日本の住まいの歴史：1. 原始／2. 古代／3. 中世／4. 近世／5. 中世・近世の民家（町家）／6. 中世・近世の民家（農家）／7. 近代	
	第11回	現代の住まいへ：1. 住宅の近代化／2. アパートの出現／3. 戦後の住まい／4. 集合の住まい／5. 分譲・建売りの促進／6. マンション・高層住宅	
	第12回	日本の住宅建築 1：吉村順三／中村好文	
	第13回	日本の住宅建築 2：安藤忠雄、他	
	第14回	理想の住まい：プレゼンテーション	
	第15回	理想の住まい：プレゼンテーション（続き）／まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	アンケート、授業に対するコメント提出を中間で3～4回課すので、次の週末までに書いて提出すること。最後に理想の住まいについて発表するため、資料などを調べて内容をまとめ、発表の準備をする。		
テキスト	資料を配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:20% 提出物:30% 定期試験:50%		

生活科学A		前期 2 単位	1・2年
皮膚・血管・免疫から生活を見る		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標 及びテーマ	人間と人間生活を皮膚からみて理解する。外界と接する皮膚はバリアーでもあり、また外界への情報を体内に伝えるセンサーでもある。この両方の働きを理解することで、人間の体を理解し、食を中心とした生活を良い方向へ結びつけることが出来るようにする。		
授業の概要	前半で皮膚の成り立ちと機能を学び、その後その働きが的確になされるにはどうすればよいのかを学んで、人間と生活の理解が出来ることとする。		
授業計画	第1回	皮膚に対する化粧品	
	第2回	皮膚の構造	
	第3回	表皮と垢	
	第4回	コラーゲンとエラスチン	
	第5回	真皮	
	第6回	老化防止	
	第7回	血管	
	第8回	筋肉	
	第9回	免疫の働き 一般的な機構と役割	
	第10回	免疫の働き 皮膚の持つ役割と働き	
	第11回	皮膚感覚	
	第12回	体内組織・器官とのクロストーク	
	第13回	皮膚組織を再生するための栄養素	
	第14回	皮膚組織を再生するための栄養素以外の条件	
	第15回	皮膚の手当て	
準備学習 (予習・復習等)	予習として、図書館の皮膚関連図書を1冊でも読んでおいてほしい。復習は、各授業ごとに配布するプリントを再度見て何を語っているのかを見つけるようにしてほしい。		
テキスト	全体を網羅するテキストが無く、特に指定なし		
参考文献	皮膚感覚と人間のこころ(新潮選書)、皮膚の事典(朝倉書店)、新しい皮膚科学(中山書店) スキンケアを科学する(南江堂)、スキンケアのすすめ(東海大出版会)、皮膚の薬のわかる本(地人書店)		
評価方法	到達度を期末試験で :70% 授業の積極的な参加 :30%		

生活科学B		後期 2 単位	1・2年
基礎化学		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	身近な衣食住に関わる物質の性質を化学の目で見られるよう、化学の基礎—元素の周期律、化学結合等—を分かりやすく解説します。また物質が異なっても共通にみられる気体・液体・固体の性質、さらに生活との関係が深く、極めて多種多様な化合物を包含する有機化学の基礎についてやさしく解説します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。原子の電子構造から元素の周期律を学び、さらに化学結合を学びます。物質の三態（気体・液体・固体）及び希薄溶液やコロイドの性質を学んだ後、簡単な有機化合物の構造や反応について学びます。		
授業計画	第1回	元素、原子	
	第2回	同位体	
	第3回	元素の周期表	
	第4回	原子の電子構造	
	第5回	化学結合—イオン結合	
	第6回	化学結合—共有結合	
	第7回	物質の三態—気体の状態方程式	
	第8回	物質の三態—液体の性質	
	第9回	物質の三態—稀薄溶液の性質	
	第10回	物質の三態—コロイド	
	第11回	物質の三態—固体・結晶	
	第12回	有機化合物—分類	
	第13回	有機化合物—構造・異性体	
	第14回	有機化合物—反応	
	第15回	低分子有機化合物	
準備学習 (予習・復習等)	高校の化学 I を復習しておいてください。あるいは、竹田淳一郎著「大人のための高校化学復習帳」(講談社、2013)等を読んでおいてください。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布します。		
参考文献	長島弘三・富田功著「一般化学(三訂版)」(裳華房)		
評価方法	時々の小テスト:40% 試験(2回行う):60%		

生活科学C I		後期 2 単位	1・2年
生鮮食品と加工食品、栄養素、食欲、安全安心の化学		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標 及びテーマ	栄養成分だけではなく非栄養素や危険な混入物まで含めた食品成分を理解し健康的なまた調理にも適した食品が選べるようにする。食品調理加工において、食品成分がどのように変化しどのような特性を得ているのかを理解し、理論を説明できるようにする。適切な貯蔵法も選べるようにする。関係法規も理解する。以上より安全で健康な食生活を提示できるようにすることが全体のテーマである。		
授業の概要	始めに食品別に構成成分を理解し、調理加工ではどのように変化し新しい特性を持つかを説明する。同時に流通加工における組成組織の変化をも学ぶ中で、商品の見分け方保存方法栄養学的に見た加工調理法も学びとる。最後に流通と表示を中心に、法律と政策を学び食生活の多方面な知識を得て総合的に食品を見据える。		
授業計画	第1回	穀類を扱う その1	米を中心
	第2回	穀類を扱う その2	麦、パン、パスタを中心
	第3回	豆類を扱う	大豆、豆腐を中心
	第4回	野菜を扱う	
	第5回	畜肉を扱う その1	牛豚肉を中心
	第6回	畜肉を扱う その2	鶏肉、卵を中心
	第7回	乳製品を扱う その1	牛乳を中心
	第8回	乳製品を扱う その2	チーズやヨーグルトを中心
	第9回	嗜好品を扱う その1	茶、紅茶、コーヒーを中心。味覚も扱う。
	第10回	嗜好品を扱う その2	アルコール発酵食品
	第11回	油脂食品を扱う その1	食用油。食品の劣化も扱う。
	第12回	油脂食品を扱う その2	食品の色や香りを扱う
	第13回	新しい食品	特定保健用食品を中心
	第14回	関連法規 その1	JASと食品衛生法を中心
	第15回	関連法規 その2	表記と消費者庁
準備学習 (予習・復習等)	予習は教科書の関連欄を見ることで十分である。復習は学んだ内容を食品の構成成分別に整理し結果としてトータルでその食品がどのような価値をもったかを理解できるようにする。関連して出来てきた不確かな専門用語は教科書の索引で検索するかネットで確認するとよい。		
テキスト	特に指定はない。図書館にも似たような教科書がいくつかある。購入するなら放送大学教材の「食と健康」が共立出版の「食品学」露木英男田島眞編が良いでしょう。		
参考文献	ヒューマンニュートリション (医歯薬出版)、食品安全ハンドブック (丸善)、食品技術総合辞典 (朝倉書店)、食品大百科事典 (朝倉書店)、栄養・食糧学データハンドブック (同文書院)、		
評価方法	到達度を期末試験で:70% 授業の積極的な参加:30%		

栄養健康学A		前期 2 単位	1・2年	
体の仕組みと食べたものが体にどう関わるかを学ぶ		谷本 信也 (たにもと しんや)		
授業の到達目標 及びテーマ	食事成分で何がどのように体内で利用され、結果として体がどのように保たれまた変化してゆくかを理解し、健全な食生活・日常の生活をおくることが出来るようにする。			
授業の概要	始めに体の成り立ちや役割を学ぶ。次いで毎日の活動に必須のエネルギー代謝について幅広く学ぶ。その後臓器・器官でのそれぞれの役割・代謝を学ぶ。次いで、その代謝を担うタンパク質やビタミン、ミネラルについて学び、最後に政策がわれわれにどのような生活を要望しているのかを見る。			
授業計画	第1回	体と代謝		
	第2回	エネルギー代謝 その1 脂質		
	第3回	エネルギー代謝 その2 脂質		
	第4回	エネルギー代謝 その3 糖質・タンパク質		
	第5回	エネルギー代謝 その4 食欲		
	第6回	組織・器官 その1 胃腸による消化を中心		
	第7回	組織・器官 その2 肝臓を中心		
	第8回	組織・器官 その3 脳を中心		
	第9回	体を作る その1	タンパク質合成と分解	
	第10回	体を作る その2	タンパク質の働き	
	第11回	体を作る その3	ビタミン類の働き	
	第12回	体を作る その4	ミネラル類の働き	
	第13回	体を作る その5	栄養素の必要量	
	第14回	体を作る その6	運動量などを中心	
	第15回	健康体 健康増進法などの政策を中心		
準備学習 (予習・復習等)	予習は教科書の関連欄を見ることで十分である。復習は学んだ内容を食品の構成成分別に整理し結果としてトータルでその食品がどのような価値をもったかを理解できるようにする。関連して出来てきた不確かな専門用語は教科書の索引で検索するかネットで確認するとよい。			
テキスト	指定はしない。似たような教科書が図書館にいくつかある。購入するなら、羊土社の「基礎栄養学」田地陽一編を勧める。			
参考文献	ヒューマンニュートリション (医歯薬出版)、食品大百科事典 (朝倉書店)、栄養・食糧学データハンドブック (同文書院)、健康長寿大事典 (西村書店)			
評価方法	到達度を期末試験で :70% 授業の積極的な参加:30%			

栄養健康学B		後期 2 単位	1・2年
栄養と健康		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	①日本人の健康水準の現状とその問題点について、生活習慣との関わりから把握する。 ②ライフステージによって、必要な栄養と健康状態が異なることを理解する。 ③より良い食生活習慣を身に付け、豊かで快適なライフスタイルを実践する力を養うことを目標とする。		
授業の概要	私たちは、食物を摂ることによって生命を維持し、健康を保持増進している。しかし、偏った食生活では、栄養素の欠乏あるいは過剰摂取によって健康を害することもある。 本講義では、まず栄養素を理解した上で、日本人の健康水準の現状とその問題点を把握する。次に、ライフステージによって必要な栄養が異なることを学ぶ。そして、健康で快適な生活がおくれるよう、より良い食生活習慣を身に付ける力を養う。		
授業計画	第1回	食生活と健康	
	第2回	身体のしくみと食べ物	
	第3回	栄養素の役割1 炭水化物	
	第4回	栄養素の役割2 脂質	
	第5回	栄養素の役割3 タンパク質	
	第6回	栄養素の役割4 ビタミン	
	第7回	栄養素の役割5 ミネラル	
	第8回	食事摂取基準と食事計画	
	第9回	ライフステージの健康と栄養1 妊娠期・授乳期	
	第10回	ライフステージの健康と栄養2 乳児・幼児期	
	第11回	ライフステージの健康と栄養3 学童期	
	第12回	ライフステージの健康と栄養4 思春期・青年期	
	第13回	ライフステージの健康と栄養5 壮年期	
	第14回	ライフステージの健康と栄養6 高齢期	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	適宜、課題を出す。		
テキスト	毎回、プリントを配布する。		
参考文献	『フードデザイン』実教出版、東愛子ほか著『応用栄養学実習ーライフステージ別の栄養管理』、堀口美恵子著『栄養学 食と栄養 第2版』		
評価方法	実習への意欲・態度:20% 小レポート:50% テスト:30%		

被服構成論		後期 2 単位	1・2年
被服構成論		茨木 裕子 (いばらぎ ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代生活における衣服がどのような形と構造を持ち、どのように作られ、そしてどのような役割と機能を持つのかを理解する。また流行や個性の問題を捉え直し、手作り時代とは全く異なるシステムである既製服産業(アパレル)についての知識を得て、既製服に囲まれた衣生活の課題をみつけることができるようになる。		
授業の概要	衣生活についての知識や理論を講義で学び、実践的課題により理論の検証と問題意識が求められる。被服造形の視点から原型作図法、更に型紙へのパターン展開などを学び、自身が描いたデザインからの具体的な立体化技法を1/2サイズの衣服製作を通して体験する。また毎回着装カードを記録し、レポートの資料とする。		
授業計画	第1回	ガイダンス、現代の衣生活	
	第2回	和服の構成	
	第3回	被服造形学	
	第4回	原型(1/4スカート)作図法	
	第5回	原型からの組み立て	
	第6回	原型からのパターン展開	
	第7回	素材選びとデザイン	
	第8回	1/2スカートのデザイン画	
	第9回	1/2スカートの型紙	
	第10回	1/2スカートの組み立て	
	第11回	1/2スカートの縫製	
	第12回	1/2スカート仕上げ	
	第13回	既製衣料品(1) 企画・設計・生産	
	第14回	既製衣料品(2) 縫製・販売・表示	
	第15回	衣生活の課題	
準備学習 (予習・復習等)	中間提出物、レポート等の授業課題提出日を守ること。		
テキスト	プリントを毎回配布する。		
参考文献	松山容子『衣服製作の科学』(建白社) 光野桃『おしゃれの視線』(新潮文庫)		
評価方法	中間提出物:30% レポート:50% 平常点:20%		

被服構成実習A		前期 1 単位	1・2年
服作りの基礎A (スカート)		茨木 裕子 (いばらぎ ゆうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	身体と衣服との関係理解を目的とした被服実習である。平面的な布を複雑な曲面を持つ立体である身体に合わせて構成する方法が理解できる。実習Aでは女性下衣の基本であるセミタイトスカート(裏布付)を製作することで、素材に応じた縫製技法が習得できる。		
授業の概要	実習であるため製作に必要な教材を揃えて出席し、提出日までに仕上げるのが求められる。自身の採寸結果を得て型紙を選択、作成し、基本スタイルの範囲内でデザインの工夫を試みる。好みの布地を選び、裁断、印付け、しつけやミシン縫い、ファスナー付けなどの基礎的技法を講義で学びながら、スカートを製作する。		
授業計画	第1回	実習計画の説明	
	第2回	採寸 型紙作成	
	第3回	裁断	
	第4回	印し付け	
	第5回	芯貼り、縫い代の始末	
	第6回	ダーツを縫う	
	第7回	脇を縫う	
	第8回	見返しをつける	
	第9回	コンシールファスナーをつける	
	第10回	裾の始末	
	第11回	裏スカートのダーツと脇を縫う	
	第12回	裏スカートの裾の始末	
	第13回	表スカートに裏スカートをつける	
	第14回	ファスナーまわりの始末	
	第15回	カギホックつけ、仕上げ 提出	
準備学習 (予習・復習等)	製作表に進度を記録し、遅れた場合は調整作業をする。		
テキスト	研究室作成のテキストを配布する。		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	作品評価:70% 平常点:30%		

被服構成実習B		後期 1 単位	1・2年
服作りの基礎B（ブラウス）		茨木 裕子（いばらぎ ゆうこ）	
授業の到達目標及びテーマ	実習Aと同様に身体と衣服との関係理解を目的とした被服実習である。平面的な布を複雑な曲面を持つ立体である身体に合わせて構成する方法が理解できる。実習Bでは女性上衣の基本であるブラウス（襟付き、半袖または長袖）を製作することで、素材に応じた縫製技法が習得できる。		
授業の概要	実習であるため製作に必要な教材を揃えて出席し、提出日までに仕上げるのが求められる。自身の採寸結果を得て型紙を作成し、基本スタイルの範囲内でデザインの工夫を試みる。好みの布地を選び、裁断、印付け、しつけやミシン縫い、ボタン付けなどの基礎的技法を講義で学びながら、ブラウスを製作する。		
授業計画	第1回	実習の計画と説明	
	第2回	採寸 型紙作成	
	第3回	裁断	
	第4回	印し付け	
	第5回	芯貼り、縫い代の始末	
	第6回	ミシン練習	
	第7回	肩を縫う	
	第8回	脇を縫う	
	第9回	裾の始末	
	第10回	衿を作る	
	第11回	衿を付ける	
	第12回	袖を作る	
	第13回	袖を付ける	
	第14回	ボタンホールとボタンを付ける	
	第15回	仕上げ 提出	
準備学習 (予習・復習等)	製作表に進度を記録し、遅れた場合は調整作業をする。		
テキスト	研究室作成のテキストを配布する。		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	作品評価:70% 平常点:30%		

調理学実習A		前期 1 単位	1・2年
食品の特性の理解と調理技術の習得		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	①食品と調理の基本的な技術と知識について実習を通して身につける。 ②おいしさと栄養に配慮した日常食の献立作成と調理ができるようにする。 ③食品の調理性や調理操作を科学的に理解するとともに、食文化やマナーの意義を認識し、実践・伝承できる力をつける。調理設備や器具の管理と扱い方を学び、衛生・安全に配慮して調理実習を指導する力を養う。		
授業の概要	調理実習を中心に行う。授業の前半は、実際に料理の作り方を示しながら、食品の適正な取り扱い方や調理操作のコツを説明する。後半は、講義の理解を深め技術を身につけるために、少人数のグループに分かれて調理実習を行う。実習後には、試食および評価を行う。 なお、実習内容は食材などの都合で変更することがある。実習用には所定の服装が必要である。		
授業計画	第1回	ガイダンス・調理の基本	
	第2回	調理実習①炊飯・みそ汁・青菜のごまあえ	
	第3回	献立作成と栄養価計算	
	第4回	調理実習②そばろ丼・すまし汁・即席漬け	
	第5回	調理実習③アフタヌーンティー（スコーン・サンドイッチ・紅茶）	
	第6回	調理実習④チキンマカロニサラダ・マヨネーズソース	
	第7回	調理実習⑤かゆ・茶碗蒸し	
	第8回	調理実習⑥ちらしずし・煎茶	
	第9回	調理実習⑦鯨のフライ・粉ふきいも・ゼリー	
	第10回	調理実習⑧あんかけ焼きそば・あんまん（豆沙包子）	
	第11回	調理実習⑨餃子・黄花湯	
	第12回	調理実習⑩滑溜肉（ファルウロウ）・奶豆腐（ナイトウフ）	
	第13回	調理実習⑪チキンカレー・バターライス・サラダ	
	第14回	調理実習⑫赤飯・豚肉のしょうが焼き・ゆで野菜のサラダ	
	第15回	まとめ・実習室整備・小テスト	
準備学習 (予習・復習等)	実習に際し所定の服装および、爪の装飾があれば取り、短く切るなど、衛生上の配慮が必要である。授業後は実習記録と、研究課題について参考文献などをもとに調べたレポートを次週に提出すること。		
テキスト	毎回プリントを配布する。		
参考文献	山崎清子他著「NEW調理と理論」同文書院 手持ちの食品成分表		
評価方法	レポート:50% 実習への意欲・態度:30% 小テスト:20%		

調理学実習A		前期 1 単位	1・2年
食品と調理の知識と技術を実践的に身につける。		田中 京子 (たなか きょうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	食品の成分と調理性及び献立・調理の基本的な知識と技術を実習を通して身につける。おいしさと栄養に配慮した日常食の献立作成と調理ができるようになる。食品の調理性や調理操作を科学的に理解するとともに、食文化やマナーの大切さを認識し、実践・伝承への意欲と力をつける。調理設備や器具の管理と扱い方を学び、衛生、安全に配慮して調理実習を指導できる力を養う。		
授業の概要	調理実習を中心に行う。示範により、食品の調理性や調理の科学、調理手順と留意点を理解した後、班に分かれて実習する。調理、盛り付け、配膳、試食、片付けを時間内に終える計画であるが昼休みにかかることが多い。毎回、実習記録と関連事項の研究レポートを作成し、次回授業時に提出する。実習内容は食材などの都合で変更することがある。実習用には所定の服装が必修である。		
授業計画	第1回	ガイダンス・調理の基本	
	第2回	調理実習①炊飯・みそ汁・青菜のごまあえ	
	第3回	レポート作成・献立の作成・栄養価計算	
	第4回	調理実習②そばろ丼・澄まし汁・即席漬け	
	第5回	調理実習③アフタヌーンティー (スコーン・サンドイッチ・紅茶)	
	第6回	調理実習④チキンマカロニサラダ・マヨネーズソース・コーヒーゼリー	
	第7回	調理実習⑤かゆ・茶碗蒸し (煮魚)	
	第8回	調理実習⑥ちらしずし・煎茶	
	第9回	調理実習⑦鯨のフライ・粉ふきいも・ミネストローネ	
	第10回	調理実習⑧あんかけ焼きそば・あんまん	
	第11回	調理実習⑨餃子・黄花湯	
	第12回	調理実習⑩酢豚・杏仁豆腐	
	第13回	調理実習⑪チキンカレー・バターライス	
	第14回	調理実習⑫赤飯・しょうが焼き	
	第15回	まとめ・実習室整備・小テスト	
準備学習 (予習・復習等)	予習は特に要求しない。実習に際し所定の服装および、爪の装飾があれば取り、短く切るなど、衛生上の配慮が必要である。授業後は実習記録と、研究課題について参考文献などをもとに調べたレポートを次週に提出する。		
テキスト	毎回、プリントを配布する。		
参考文献	山崎清子他著「NEW調理と理論」同文書院 手持ちの食品成分表		
評価方法	レポート:50% 実習への意欲・態度:30% 小テスト:20%		

調理学実習B		後期 1 単位	1・2年
食品の特性の理解と調理技術の習得		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標及びテーマ	<p>①食品と調理の基本的な技術と知識について実習を通して身につける。 ②おいしさと栄養に配慮した日常食の献立作成と調理ができるようにする。 ③食品の調理性や調理操作を科学的に理解するとともに、食文化やマナーの意義を認識し、実践・伝承できる力をつける。調理設備や器具の管理と扱い方を学び、衛生・安全に配慮して調理実習を指導する力を養う。</p>		
授業の概要	<p>調理実習を中心に行う。授業の前半は、実際に料理の作り方を示しながら、食品の適正な取り扱い方や調理操作のコツを説明する。後半は、講義の理解を深め技術を身につけるために、少人数のグループに分かれて調理実習を行う。実習後には、試食および評価を行う。 なお、実習内容は食材などの都合で変更することがある。実習用には所定の服装が必要である。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス・献立の基本・栄養価計算	
	第2回	調理実習①：いもご飯・けんちん汁・いわしの蒲焼	
	第3回	調理実習②：さばの味噌煮・きのこのおろし和え・けんちん汁・ご飯	
	第4回	調理実習③：弁当の調理	
	第5回	調理実習④：てんぷら・てんつゆ・ご飯	
	第6回	調理実習⑤：いかの中国風炒め物・蒸しカステラ	
	第7回	調理実習⑥：春巻き・杏仁クッキー	
	第8回	調理実習⑦：ハッシュドビーフ・カスタードプディング	
	第9回	調理実習⑧：豚肉のピカタ・サラダ・ラズベリームース	
	第10回	調理実習⑨クリスマスケーキ・チキンソテー	
	第11回	調理実習⑩正月料理Ⅰ（小鯛の柚庵焼き・富貴寄せ煮・果汁かん）	
	第12回	調理実習⑪正月料理Ⅱ（田作り・菊花小蕪・雑煮）	
	第13回	調理実習⑫酢豚・中華スープ・杏仁クッキー	
	第14回	調理実習⑬シュークリーム・ホワイトシチュー	
	第15回	まとめ・小テスト・実習室整備	
準備学習 (予習・復習等)	<p>毎回、実習記録と関連事項の研究レポートを作成し、次回の授業時に提出する。 実習に際し所定の服装および、爪の装飾があれば取り、短く切るなど、衛生上の配慮が必要である。</p>		
テキスト	毎回プリントを配布する。		
参考文献	山崎清子他著「NEW調理と理論」同文書院 手持ちの食品成分表		
評価方法	レポート:50% 実習への意欲・態度:30% 小テスト:20%		

調理学実習B		後期 1 単位	1・2年
食品と調理の知識と技術を実践的に身につける。		田中 京子 (たなか きょうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	食品の成分と調理性及び献立・調理の基本的な技術と知識を、実習を通して身につける。日常食に加えて、弁当や行事食の実習を通して食文化とその重要性を意識し、実践・伝承することの意義を認識する。食品の調理性や調理操作を科学的に理解するとともに、調理設備や器具の管理や扱い方を学び、衛生、安全に配慮した調理実習を指導できる力を養う。		
授業の概要	調理実習を中心に行う。示範により、食品の調理性、調理の科学、手順と留意点を理解した後、班に分かれて実習する。調理、盛り付け、配膳、試食、片付けを時間内に終える計画であるが昼休みにかかることが多い。実習記録と関連事項の研究レポートを次回授業時に提出する。実習内容は食材などの都合で変更することがある。実習用の服装が必須である。		
授業計画	第1回	ガイダンス・献立の基本・栄養価計算	
	第2回	調理実習①：いもご飯・けんちん汁・いわしの蒲焼	
	第3回	調理実習②：さばの味噌煮・みぞれあえ・吸い物	
	第4回	調理実習③：弁当の調理	
	第5回	日本型食生活・PFCバランス・献立作成	
	第6回	調理実習④：てんぷら・てんつゆ	
	第7回	調理実習⑤：いかの中国風炒め物・中国風カステラ	
	第8回	調理実習⑥：春巻き・杏仁クッキー	
	第9回	調理実習⑦：ハッシュドビーフ・カスタードプディング	
	第10回	調理実習⑧：豚肉のピカタ・ラズベリームース	
	第11回	調理実習⑨：クリスマスケーキ・テキンソテー	
	第12回	調理実習⑩：正月料理 I	
	第13回	調理実習⑪：正月料理 II	
	第14回	調理実習⑫：シュークリーム・ホワイトシチュー	
	第15回	まとめ・小テスト・実習室整備	
準備学習 (予習・復習等)	予習は特に要求しないが、常に食品や調理法、行事食の由来など食文化全般に興味を持ち、基本的な知識を身につける姿勢が望ましい。実習に際しては所定の服装を準備し、爪の装飾はとり、短く切るなど、清潔に留意する。実習後は記録とまとめ、研究課題については参考書などで調べレポートを提出する。		
テキスト	毎回、プリントを配布する。		
参考文献	山崎清子他著「NEW調理と理論」同文書院 手持ちの食品成分表		
評価方法	レポート:50% 実習への意欲・態度:30% 小テスト:20%		

学問入門演習	前期 2 単位	1年
大学での学び方を習得しよう		
<p>【担当教員】 植月 美希（うえつき みき）、宇田 美江（うだ みえ）、宇都宮 由佳（うつのみや ゆか）、清水 康幸（しみず やすゆき）、武田 美亜（たけだ みあ）、谷本 信也（たにもと しんや）、信澤 久美子（のぶさわ くみこ）、橋本 典子（はしもとのりこ）、廣田 道夫（ひろた みちお）、堀川 照代（ほりかわ てるよ）、宮田 雅智（みやた まさのり）、八耳 俊文（やつみみ としふみ）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 テーマ：大学での学び方を習得しよう 大学での学びは、学生自らの主体的な関心と意欲が基本になっています。この学びを実りあるものにするためには、一定の約束事やスキルを身につける必要があります。この演習では、大学での「学び方」の初歩を修得し、大学生生活のスタートを上手に切っただけを期待しています。具体的には、次のような力の修得をめざします。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①大学での学びの特徴を理解する。 ②基礎的な学習スキルを身につける。 ③基礎的な情報検索・文献探索能力を身につける。 ④基礎的な文章読解力を身につける。 ⑤基礎的な口頭発表能力と討論の仕方を身につける。 ⑥基礎的な文章作成能力を身につける。 <p>【授業の概要】 各グループ十数名の少人数による発表や討論が中心になります。授業の進め方は担当教員によって異なりますが、例えば、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○互いの関心を発表し合い、大学で何を学びたいか交流する、 ○共通のテキストを読み、レジュメを作り、発表し、討論する、 ○テーマを決め、関連する文献や資料を探し、まとめて発表する、 ○テーマにもとづき作品を完成させ、互いに批評し合う、 ○身体活動やロールプレイ、ワークショップなどを通じ、多様な自己表現を試みたり体験的認識を深める、 ○レポートを作成することを通じて、わかりやすく自分の考えを他人に伝えられるようにする、 <p>などを組み合わせたものとなるでしょう。 どのような形であれ、自ら問いを発し、自分と他人の関心や意見を突き合わせることから、物事の新しい見方が開かれてきます。</p> <p>【授業計画】 グループごとに授業計画は異なります。</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 演習では事前学習が決定的に重要です。とりわけ指定された文献やテーマに沿って十分な下調べをしておく必要があります。報告者はもちろんだが、報告に当たっていない回であっても、十分な事前学習なしに内容を理解することはできないと心得てください。</p> <p>【テキスト】 グループごとにテキストは異なります。</p> <p>【参考文献】 各教員より適宜指示。</p> <p>【評価方法】 平常点50%、提出課題50%</p>		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
専攻基礎演習（認知心理学）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標及びテーマ	心理学に関する文献を読み、心理学がどのような学問であるのかを把握する。 文献の内容を発表、ディスカッションすることを通して、文献への理解を深めるとともに、分かりやすく他者に説明する力を付ける。		
授業の概要	授業の前半では心理学はどのような学問であるかについて、文献講読を通じて学ぶ。後半では、自分の興味のあるテーマについて文献検索し、論文を読み、その内容を発表する。なお、授業の最後には卒業研究に向けて、研究計画書を作成する。 授業は主に演習形式で進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	心理学・入門1（1章） 発表とディスカッション	
	第3回	心理学・入門2（3, 4章） 発表とディスカッション	
	第4回	心理学・入門3（5, 6章） 発表とディスカッション	
	第5回	心理学・入門4（7章） 発表とディスカッション	
	第6回	文献検索1	
	第7回	文献検索2	
	第8回	論文精読1	
	第9回	論文精読2	
	第10回	興味のある論文について発表1	
	第11回	興味のある論文について発表2	
	第12回	興味のある論文について発表3	
	第13回	研究計画書作成1	
	第14回	研究計画書作成2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習 第3～5回は、事前にテキストの該当する章をよく読んでおくこと。 事後学習 第3～5回は、授業内容を振り返りながら、テキストやハンドアウトを熟読すること。 第6回以降は、自ら興味を持ったテーマについて積極的に文献を調べ、課題に取り組むこと。		
テキスト	サトウタツヤ・渡邊芳之 「心理学・入門 心理学はこんなに面白い」 有斐閣		
参考文献	山田剛史・林 創 「大学生のためのリサーチリテラシー入門」 ミネルヴァ書房		
評価方法	課題・発表:20% 授業参加態度:20% 最終課題:60%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
経営学の基礎、人的資源管理、従業員のキャリア形成		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	経営学とは、主に企業組織にスポットをあてた学問です。企業とはどのような存在か、現代企業はどのような問題を抱えているか、企業の具体的な活動や機能にはどのようなものがあるか、企業で働く人をどのようにマネジメントするか、または個人がどのようにキャリアを築くか等、討論しながら幅広い視点で考えられるようにします。		
授業の概要	毎回レポーターを決め、経営学に関するテーマを基に発表してもらいます。その後、講義をまじえて討論します。担当箇所に限らず、文献は全員読んでおくこと。参加者には、ディスカッションへの積極的参加を期待します。		
授業計画	第1回	ガイダンス・発表担当の決定	
	第2回	発表と討論 自由研究発表 グループ1	
	第3回	発表と討論 自由研究発表 グループ2	
	第4回	発表と討論 自由研究発表 グループ3	
	第5回	発表と討論 グループ1	
	第6回	発表と討論 グループ2	
	第7回	発表と討論 グループ3	
	第8回	発表と討論 グループ4	
	第9回	発表と討論 グループ5	
	第10回	発表と討論 グループ1	
	第11回	発表と討論 グループ2	
	第12回	発表と討論 グループ3	
	第13回	発表と討論 グループ4	
	第14回	発表と討論 グループ5	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、予習をしてあることを前提に行います。発表担当に関わらず、指定した本の該当部分を事前によく読み、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	開講時に指示する。		
参考文献	授業中に、適宜紹介する。		
評価方法	発表:40% 授業への参画度:60%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
食文化，食情報の研究手法		宇都宮 由佳（うつのみや ゆか）	
授業の到達目標 及びテーマ	①文献，資料の検索・収集，情報を整理，まとめる力を養う ②文献研究，実証的研究の手法を学ぶ ③プレゼンテーションで，自分の考えを他者に伝える力を身につける		
授業の概要	本演習では，食文化，食情報に関する多様な研究アプローチ手法を学ぶ。学問入門の成果を基に，文献・資料の収集，読み取り，情報を整理・まとめことが出来るようにする。プレゼンテーション用資料を作成し，自分の考えを他者へ伝えられるようにする。あわせて他者の研究内容についても関心を持ち，教養を広げる。2年次の卒業論文作成に向け，自分が1年という時間を費やして取り組めるテーマを模索する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	文献研究－文献・資料の検索と収集 1	
	第3回	文献研究－文献・資料の検索と収集 2	
	第4回	文献・論文を読む 1	
	第5回	文献・論文を読む 2	
	第6回	文献・論文を読む 3	
	第7回	文献・論文を読む 4	
	第8回	実証的研究手法を学ぶ 1	
	第9回	実証的研究手法を学ぶ 2	
	第10回	実証的研究手法を学ぶ 3	
	第11回	実証的研究手法を学ぶ 4	
	第12回	プレゼン資料作成 1	
	第13回	プレゼン資料作成 2	
	第14回	プレゼンテーション	
	第15回	まとめ，今後の計画について	
準備学習 (予習・復習等)	レポートを作成する		
テキスト	適宜，紹介する。		
参考文献	『食文化入門』石毛直道 講談社 1995 『くらべてみよう日本と世界の食べ物と文化』石毛直道監修 講談社 2004 『日本の食文化 その伝承と食の教育』江原絢子，石川尚子編集 アイ・ケイコーポレーション 2009		
評価方法	受講態度:30% プレゼン:20% レポート:50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
教育学入門		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標及びテーマ	①教育学という学問の対象や方法論について理解する。 ②具体的テーマにそった共通文献を読みあい、発表と討論ができるようにする。 ③各自の関心・テーマにそって文献・資料を探索し、発表できるようにする。		
授業の概要	①については、はじめに教員がレクチャーを行うが、その後も随時補足を行う。②については、分担に沿って全員が発表し、討論の仕方を实际的に学ぶ。 ③については、最後の段階で発表を行うので、日頃から自らの関心を深める努力が必要である。		
授業計画	第1回	オリエンテーションと自己紹介	
	第2回	教育学の対象と方法について①	
	第3回	文献探索の方法	
	第4回	共通文献の決定	
	第5回	学生による発表と討論①	
	第6回	学生による発表と討論②	
	第7回	学生による発表と討論③	
	第8回	討論のまとめ	
	第9回	学生による発表と討論④	
	第10回	学生による発表と討論⑤	
	第11回	学生による発表と討論⑥	
	第12回	討論のまとめ	
	第13回	各自の関心を発表①	
	第14回	各自の関心を発表②	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ共通文献を示すため、全員がそれを事前に熟読しておくことが必要となる。報告担当者は事前にレジュメを作成し、論点整理や問題提起を確認して置く必要がある。		
テキスト	学生の関心によって定める		
参考文献	随時、紹介する		
評価方法	発表／感想文など:30% 期末レポート:70%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
日常の現象を社会心理学の観点から理解する		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>(1) 社会心理学の様々なテーマのうち、自己や他者の認知および対人コミュニケーションに的を絞って、その研究知見についてより深く理解する。</p> <p>(2) 研究方法の特徴や長所・短所について実践的に理解する。</p> <p>(3) 自分の疑問を明確にし、研究可能な形にできるようになる。</p>		
授業の概要	<p>授業は主に演習形式で行なう。テキストの購読(担当を決めて発表)、ゼミ生全員でディスカッションなどを行なう。また、卒論に向けた練習として、実験の実施、分析、レポート(研究の報告)作成や、文献検索などの実習を行なう。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス、発表担当者決定	
	第2回	実験デモンストレーション	
	第3回	実験解説とレポート作成	
	第4回	文献調査のしかた	
	第5回	発表とディスカッション1: 感想の共有	
	第6回	発表とディスカッション2: 意見を明示する	
	第7回	発表とディスカッション3: 他者の意見を理解する	
	第8回	発表とディスカッション4: 他者の意見をまとめる	
	第9回	発表とディスカッション5: 対立する意見を統合する	
	第10回	発表とディスカッション6: 視点を変えて見る	
	第11回	実習用調査テーマの決定	
	第12回	実習用調査内容の検討	
	第13回	実習用調査材料の作成	
	第14回	調査実施の手順と注意点の確認	
	第15回	データ分析、レポート作成	
準備学習 (予習・復習等)	<p>自分で社会心理学の薄いテキストを1冊読み通してあるとよい。</p> <p>授業で扱うテキストの該当箇所は、全員が読んでおくこと。</p> <p>各授業後はリアクションペーパー(RP)を提出すること。</p>		
テキスト	<p>岡本真一郎(2013)『言語の社会心理学』中公新書 この他履修者と相談の上、この他に1~2冊のテキストを使用する予定。</p>		
参考文献	<p>吉田・元吉(2010)『体験で学ぶ社会心理学』ナカニシヤ出版/和田(2010)『ミニマムエッセンス社会心理学』北大路書房 など</p>		
評価方法	<p>担当回の発表:30% 授業への参加度, RP:20% レポート:50%</p>		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
論文作成までに至る過程の習得		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標及びテーマ	<p>学問入門演習の成果を基に、各自の課題に対し、資料の収集、読み取り、まとめと自身の意見を生み出すことが出来るようにする。さらに、各自がプレゼンテーション内容を作成できるように、また演習グループ内での討議をとおして、他の意見にも耳を傾け、自身ばかりでなく他の意見も高めることが出来るようにする。</p>		
授業の概要	<p>この演習では、学問入門演習の成果を基に各自が自身で課題を設定し資料検索・収集を行い、資料を読み解き討論資料の作成を行って発表する。それぞれの発表を聞いて必ず質問や意見を述べることも必要。それに答えられるべく予習も行ってもらおう。この一連の結果をレポートや論文の形に作成することも行います。出来れば、2サイクル行いたい。</p>		
授業計画	第1回	演習グループ各自の興味を持つ課題候補の紹介	
	第2回	各人の課題候補をまとめ、課題を決定する。	
	第3回	資料検索を行う。その1	
	第4回	資料検索を行う。その2と読み取りの練習	
	第5回	プレゼンテーション資料作成。その1	
	第6回	プレゼンテーション資料作成。その2と読み取りの練習	
	第7回	各自の発表と討論。その1	
	第8回	各自の発表と討論。その2とレポート作成	
	第9回	各自の発表と討論。その3とレポート作成	
	第10回	各自の発表と討論。その4とレポート作成	
	第11回	各自のレポートの発表とその検討。その1	
	第12回	各自のレポートの発表とその検討。その2	
	第13回	各自のレポートの発表とその検討。その3	
	第14回	卒業演習への取り組みを扱う	
	第15回	人間、社会、環境と生活をテーマとして討論	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習として、初回配布の全体の概要説明文に沿って毎回何を扱うのか考えておいてほしい。各回で学んだことは次回以降のホームワークに生かすことが復習となる。</p>		
テキスト	学問入門講座で使用したものを使ってください		
参考文献	<p>大学生のための基礎力養成ブック丸善、大学生学びのハンドブック世界思想社、改訂版知のツールボックス新入生援助集専修大出版局 参考書リストも参考に</p>		
評価方法	平常点 :60% レポートや論文 :40%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
法学を通して社会問題について考える		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちの社会にはいろいろな社会問題が起こっています。法学は社会問題に対して、法律を作ることによってこれを解決する学問です。本演習では、具体的な社会問題を取り上げて法的な解決方法を考えることで、法的な考え方の訓練をすることを目標にします。		
授業の概要	日頃気になる社会の問題というものがあると思いますが、それについて、法律ではどのように規定され、どのような解決がなされているか、それは果たして十分かどうか、不十分ならどのような法律改正が必要か、発表してもらいます。それについて、討論を行います。		
授業計画	第1回	イントロダクション 演習の進め方等について 1	
	第2回	イントロダクション 演習の進め方等について 2	
	第3回	イントロダクション 演習の進め方等について 3	
	第4回	レポーターによる報告と討論 グループ 1	
	第5回	レポーターによる報告と討論 グループ 2	
	第6回	レポーターによる報告と討論 グループ 3	
	第7回	レポーターによる報告と討論 グループ 4	
	第8回	レポーターによる報告と討論 グループ 5	
	第9回	レポーターによる報告と討論 グループ 6	
	第10回	レポーターによる報告と討論 グループ 7	
	第11回	レポーターによる報告と討論 グループ 7	
	第12回	レポーターによる報告と討論 グループ 8	
	第13回	レポーターによる報告と討論 グループ 9	
	第14回	まとめ 1	
	第15回	まとめ 2	
準備学習 (予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともに授業に興味深くなるであろう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	特に使用しません。必要な場合、適宜指示します。		
参考文献	法律の条文が必要になる場合、インターネットでダウンロードしてください。		
評価方法	ゼミへの積極的参加:50% レポーターの出来:50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
哲学・美学・芸術学演習		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	哲学、美学、個別芸術学及び法哲学などに関心のある学生と共にそれぞれの興味に相応しいテキストを選び読解する。テキスト選択の方法論の習得、読解力の育成、的確に内容を理解しまとめる。独自の視点を設定し新しい問を立てる。これらの過程を経ることで論理的思考を確立し、テキストを場として解釈の可能性を開く。この結果を発表する。		
授業の概要	テキスト読解及び解釈に積極的に参加することによってコミュニケーションの場を造り、他者の意見を聴き、さらに自分の言葉で表現する。発表の機会を多くし、必要に応じて講義も行う。それぞれの学生に個別的にアドバイスする。		
授業計画	第1回	大学に於ける研究そして演習とは何か	
	第2回	個別分野の特徴－哲学、美学、個別芸術学、法哲学等	
	第3回	テキスト選択の方法論	
	第4回	具体的課題の見つけ方－テーマ設定	
	第5回	テキストの位置－広い視野からの展望	
	第6回	比較研究の方法論－多視点の可能性	
	第7回	テキスト読解と解釈－哲学	
	第8回	テキスト読解と解釈－美学	
	第9回	テキスト読解と解釈－個別芸術論	
	第10回	テキスト読解と解釈－法哲学	
	第11回	テキスト読解と解釈－テーマの関係性	
	第12回	報告書作成の仕方	
	第13回	簡単な報告の実践	
	第14回	テーマを通してのコミュニケーションの実践	
	第15回	問題の更なる展開の可能性の発見	
準備学習 (予習・復習等)	事前に次の会の内容を説明するので、これについて考え、簡単なメモを準備すること。演習の後で「まとめ」を作成すること。提出を課することがある。		
テキスト	個別的に相談し決定する。共通テキストについてはプリントを使用する。		
参考文献	必要に応じて授業の時に指示する。参考文献はテーマごとに紹介する。		
評価方法	発表の成果:60% レポート等:20% コミュニケーション力:20%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
環境化学入門		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	暮らしと密接に関連する種々の環境問題について、主に化学的な観点から学習します。実験や文献調査をもとに、各人がレポートを作成し、発表する形式で、環境の理解を深めるとともに、レポートのまとめ方、発表の仕方等を身につけます。		
授業の概要	環境化学に関わる基礎的な実験を行いレポートを作成します。また入門書等を題材に、各自テーマを選択してレポートにまとめ、口頭発表を行います。		
授業計画	第1回	環境化学入門の講義 (ビデオによる)	
	第2回	環境化学入門の講義 (ビデオによる)	
	第3回	入門書を題材に各自テーマの選択	
	第4回	各自のテーマに関する調査 (継続)	
	第5回	化学実験の説明 (酸性・アルカリ性)	
	第6回	化学実験 (酸性・アルカリ性)	
	第7回	化学実験の説明 (プラスチックの性質)	
	第8回	化学実験 (プラスチックの性質)	
	第9回	化学実験 (プラスチックのリサイクル)	
	第10回	化学実験の説明 (石鹼)	
	第11回	化学実験の説明 (石鹼の働き-ビデオによる)	
	第12回	化学実験 (石鹼の働き・性質)	
	第13回	各自のテーマに関する調査、口頭発表 (グループ I)	
	第14回	口頭発表 (グループ II)	
	第15回	調査報告の取りまとめ・提出	
準備学習 (予習・復習等)	日本化学会編「暮らしと環境科学」(東京化学同人)を通読しておくこと。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	日本化学会編「暮らしと環境科学」(東京化学同人)		
評価方法	実験ごとのレポート:60% 文献調査のレポート:40%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
専攻基礎演習（経済学）		藤森 裕美（ふじもり ひろみ）	
授業の到達目標及びテーマ	「学問入門演習」で各人が達成できた成果を踏まえて、現実社会の問題解決に取り組む姿勢を学ぶことを目標とします。経済学、特に行動経済学の知見を用い、人間の不合理な行動のなどを解く楽しさを味わってください。演習参加者全員で力を合わせ、よりよい答えを導き出していきたいと思います。		
授業の概要	本演習では、経済学の中でも新しい分野である行動経済学の文献を扱います。その際、テキストの各章のポイントとなる箇所を、参加者みずからが実験を行う実践型の演習を行います。発表の分担はグループ毎とし、発表の形式はプレゼンテーションとします。参加者全員が関心を持つように、パワーポイントの資料をかわいくデザインする等、工夫して作成しましょう。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	行動経済学とは	
	第3回	プロスペクト理論1：価値関数と確率加重関数について	
	第4回	プロスペクト理論2：参照点について	
	第5回	プロスペクト理論3：損失回避について	
	第6回	プロスペクト理論4：感応度逓減について	
	第7回	プロスペクト理論5：重み付けについて	
	第8回	ケース1：初期保有効果	
	第9回	メンタルアカウンティング	
	第10回	メンタルアカウンティング：フレーミング	
	第11回	メンタルアカウンティング：予算と代替性	
	第12回	ケース2：雨の日のタクシー台数	
	第13回	行動経済学の今後1：意思決定のヒューリスティクス	
	第14回	行動経済学の今後2：意思決定における脳ダメージの影響	
	第15回	まとめ	
準備学習（予習・復習等）	この演習科目は、以下のテキストを主要文献とします。英文の理解はもちろんのこと、毎回の予習・復習をしてください。また、上智大学とのインターゼミナールを予定しています。社会見学（東証・日銀）や大学生ゼミ大会に興味のある方は、ぜひ参加してください。		
テキスト	Nick Wilkinson, An Introduction to Behavioral Economics, Palgrave Macmillan: London, 2008.		
参考文献	授業中に別途紹介します		
評価方法	平常点:50% レポート:50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
図書館の可能性を探る		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	図書館に関する文献を読み、レジュメを作り、発表し、ディスカッションするなかで、図書館に関する知識が蓄積されると同時に、読み・書き・話す力も高めていく。また、ひとつのテーマについて調べることを通して、検索能力を高め、レポートの書き方についても理解する。		
授業の概要	『つながる図書館』『未来をつくる図書館』等を輪読し、図書館の可能性についてディスカッションをする。その後、各自が選んだテーマについて文献等により調べてまとめ、卒業論文の足がかりとする。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	『つながる図書館』第1回。発表とディスカッション（グループ1）	
	第3回	『つながる図書館』第2回。発表とディスカッション（グループ2）	
	第4回	『つながる図書館』第3回。発表とディスカッション（グループ3）	
	第5回	『未来をつくる図書館』第1回。発表とディスカッション（グループ1）	
	第6回	『未来をつくる図書館』第2回。発表とディスカッション（グループ2）	
	第7回	『未来をつくる図書館』第3回。発表とディスカッション（グループ3）	
	第8回	『未来をつくる図書館』第4回。発表とディスカッション（グループ1）	
	第9回	『未来をつくる図書館』第5回。発表とディスカッション（グループ2）	
	第10回	『未来をつくる図書館』第6回。発表とディスカッション（グループ3）	
	第11回	情報検索第1回：自分のテーマを決める	
	第12回	情報検索第2回：データベース検索	
	第13回	文献の入手・利用	
	第14回	レポートの構造	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	自分の担当部分だけでなく、他の人の発表箇所もきちんと読んで、質問を用意しておく。		
テキスト	テキスト2冊はこちらで用意する『未来をつくる図書館』菅谷明子著 岩波書店 2003（岩波新書）、『つながる図書館』猪谷千香著 筑摩書房 2014（ちくま新書）		
参考文献	授業のなかで紹介する。		
評価方法	課題：50% レポート：50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
情報科学		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	情報科学に関する知見を深めるとともに、演習を通してアカデミックスキルの応用力を高め、卒業論文に繋がるテーマを探します。		
授業の概要	「情報」の意味、「情報科学」の考え方、情報技術、情報の通信技術等の解説をします。その中で、重要な事項については各自で、あるいはグループで調査し、レポートしていただき、知見を共有しつつ進めていきます。		
授業計画	第1回	ガイダンス (演習の進め方)	
	第2回	情報とは	
	第3回	情報科学とは	
	第4回	コンピューター概説 (ハードウェア)	
	第5回	コンピューター概説 (ソフトウェア)	
	第6回	情報のデジタル化	
	第7回	マルチメディア	
	第8回	コンピューター・ネットワーク	
	第9回	クラウド・コンピューティング	
	第10回	コミュニケーション・システム	
	第11回	インターネット	
	第12回	情報倫理	
	第13回	知的所有権とプライバシー	
	第14回	情報革命の光と影	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各自あるいはグループで調査したレポートはデジタルデータ化して各自の学習履歴として保存し、学びの振り返りに利用してください。		
テキスト	文献及び資料を配布します。		
参考文献	必要に応じて紹介します。		
評価方法	平常点:50% レポート:50%		

専攻基礎演習		後期 2 単位	1年
生命倫理の基礎		八耳 俊文 (やつみみ としふみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	科学技術の発展は社会を大きく動かし、社会は新しい科学技術にどのような対応をとるか常に迫られるようになってい る。この例を医療から考える。本授業では先端医療の内容を知り、これらの医療技術の社会的受容にあたってどのよう な議論が起きているか理解する。		
授業の概要	テキストを演習参加者間で分担して読み、担当者はレジュメを作成して、担当部分を発表します。参加者はその発表を もとに議論をおこないます。		
授業 計画	第1回	科学と社会の関係	
	第2回	生命倫理学の誕生	
	第3回	テキスト 第1章	
	第4回	テキスト 第2章(1) 生殖革命	
	第5回	テキスト 第2章(2) 脳死	
	第6回	テキスト 第2章(3) 安楽死	
	第7回	テキスト 第3章(1) クローン	
	第8回	テキスト 第3章(2) iPS細胞	
	第9回	テキスト 第4章(1) 脳科学	
	第10回	テキスト 第4章(2) 脳倫理	
	第11回	テキスト 第5章(1) 古代・中世の死生観	
	第12回	テキスト 第5章(2) 近世の死生観	
	第13回	テキスト 第5章(3) 近現代の死生観	
	第14回	テキスト 第6章(1) 脳死問題	
	第15回	テキスト 第6章(2) 臓器移植問題	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、テキストの当該ページと、関連新聞記事等を読んでくること。授業後にまとめとしてのレポートを提出する こと。		
テキスト	江川晃、嘉吉純夫、霞田光三『生命倫理について考える』(文眞堂、2010年)		
参考文献	玉井真理子・大谷いづみ編『はじめて出会う生命倫理』(有斐閣、2011年)、今井道夫『生命倫理学入門』第3版(産 業図書、2011年)、村上喜良『基礎から学ぶ生命倫理学』(勁草書房、2008年)		
評価方法	発表:40% レポート:40% 演習への参加度:20%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒業演習 I (心理学的手法を用いた研究)		植月 美希 (うえつき みき)	
授業の到達目標 及びテーマ	卒業論文の執筆に向けて、心理学に関わる課題について、先行研究を調べ、研究計画書を作成し、実験や調査を行う準備を行う。これらを通して、文献検索の仕方や、文献の読み方等を身につける。		
授業の概要	文献検索を行い、各自興味のある論文を読み、報告する。研究テーマを決定した後は、研究計画書を作成し、卒業論文執筆のために調査あるいは実験の準備を進める。 授業は主に演習形式で進めるが、個別指導を適宜交えながら進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	文献検索	
	第3回	文献の整理	
	第4回	文献の読解1	
	第5回	文献の読解2	
	第6回	文献の読解3	
	第7回	研究テーマの決定	
	第8回	研究法 (質問紙調査法・実験法)	
	第9回	研究計画書の作成1	
	第10回	研究計画書の作成2	
	第11回	研究計画書の作成3	
	第12回	調査・実験の準備1	
	第13回	目的の書き方	
	第14回	調査・実験の準備2	
	第15回	まとめ・今後の論文執筆の進め方	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習 自主的に文献検索を行い、興味のある論文を読んでおくこと。 事後学習 講義内容を踏まえ、出題される課題を着実に締切までに提出すること。		
テキスト	白井利明・高橋一郎 「よくわかる卒論の書き方 第2版」 ミネルヴァ書房		
参考文献	山田剛史・林 創 「大学生のためのリサーチリテラシー入門」 ミネルヴァ書房		
評価方法	発表・課題:20% 授業参加態度:20% 最終課題:60%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
経営学演習		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	経営学に関する文献を講読したり、事例研究をすることによって、経営学に関する理解を深める。最終的には、経営学に関するひとつのテーマを定め、卒業論文を執筆するため、自分の興味を見つけることができるようにする。		
授業の概要	毎回レポーターを決め、経営学に関する文献などを読みつつ、さまざまな企業や仕事、働く女性などを調査したり、それを基に発表や議論を中心に行う。担当箇所に限らず、文献は全員読んでおくこと。チームでの取り組みも模索する。参加者には、ディスカッションへの積極的参加を期待する。		
授業計画	第1回	ガイダンス・発表担当の決定	
	第2回	発表と討論 グループ1	
	第3回	発表と討論 グループ2	
	第4回	発表と討論 グループ3	
	第5回	発表と討論 グループ4	
	第6回	発表と討論 グループ5	
	第7回	発表と討論 グループ1	
	第8回	発表と討論 グループ2	
	第9回	発表と討論 グループ3	
	第10回	発表と討論 グループ4	
	第11回	発表と討論 グループ5	
	第12回	発表と討論 グループ1	
	第13回	発表と討論 グループ2	
	第14回	発表と討論 グループ3	
	第15回	前期のまとめ・卒論に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	議論を活発にするために、発表担当に関わらず、テーマについて、自分なりに調べ、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	開講時に指示する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	発表:40% 授業への参画度:60%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
食文化, 食情報の研究		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	①各自, 食に関する研究テーマを選択し, 研究計画をたて文献研究および実証的研究を実施する力を身につける。 ②得られた結果をもとに, 論文を執筆する。 ③プレゼンができるよう資料を作成する。		
授業の概要	本演習では, 食文化, 食情報に関する多様な研究手法を学び, 各自, 関心のあるテーマを選択する。文献・資料の検索・収集, 分析してまとめる。実証的研究を選択した場合は, 綿密な研究計画をたて実施する。得られた結果をもとに論文を執筆する。あわせてプレゼンテーション用資料を作成し, 自分の考えを他者へ伝えられるようにする。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	研究手法	
	第3回	論文構成	
	第4回	テーマの検討 1	
	第5回	テーマの検討 2	
	第6回	文献研究 1	
	第7回	文献研究 2	
	第8回	文献研究の中間発表	
	第9回	研究計画	
	第10回	個別指導 1	
	第11回	個別指導 2	
	第12回	個別指導 3	
	第13回	中間発表 1	
	第14回	中間発表 2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各自, 論文を作成する		
テキスト	各自, 卒論のために必要な文献・資料を用いる。		
参考文献	高崎みどり著「大学生のための論文執筆の手引き」秀和システム		
評価方法	受講態度:40% 課題発表:60%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒業演習 I (経済学)		小栗 誠治 (おぐり せいじ)	
授業の到達目標 及びテーマ	経済学や現代の金融経済に関する文献を講読することにより、経済や金融に関する理解を深め、経済学的な発想方法や「ものの見方」について学びます。併せて、後期の卒業演習 II に向けて、卒業論文のテーマについて検討し、題目を決定します。		
授業の概要	経済学や現代の金融経済に関する文献を輪読し、全員で議論を行います。卒業論文のテーマについて検討し、題目を決定します。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	文献の輪読・発表・討論 (1)	
	第3回	文献の輪読・発表・討論 (2)	
	第4回	文献の輪読・発表・討論 (3)	
	第5回	文献の輪読・発表・討論 (4)	
	第6回	文献の輪読・発表・討論 (5)	
	第7回	文献の輪読・発表・討論 (6)	
	第8回	文献の輪読・発表・討論 (7)	
	第9回	文献の輪読・発表・討論 (8)	
	第10回	文献の輪読・発表・討論 (9)	
	第11回	卒業論文のテーマ検討、題目決定 (1)	
	第12回	卒業論文のテーマ検討、題目決定 (2)	
	第13回	卒業論文のテーマ検討、題目決定 (3)	
	第14回	卒業論文のテーマ検討、題目決定 (4)	
	第15回	卒業論文のテーマ検討、題目決定 (5)	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・無断欠席は厳禁。 ・発表者は事前に十分な準備を行い、発表に当たっては全員にレジメを配付した上行うこと。 ・出席者は積極的に討論に参加し、意見を述べること。 		
テキスト	演習の中で指示します。		
参考文献	演習の中で言及します。		
評価方法	レポート:50% 平常点:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
現代教育の歴史的・原理的研究		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>テーマ：自らの関心に基づき、教育学的テーマを発見し吟味しよう 到達目標：①共通文献を読み、討論しつつ、学問研究の基礎を学ぶ。②卒業論文につながる自らのテーマを発見し、参考文献一覧を作る。③テーマに関わる論点を吟味し、卒業論文の章立てについて見通しをつける。</p>		
授業の概要	<p>前期の卒業演習 I では、これまでの学びや関心にもとづき、自らのテーマを確立することを課題とする。そのため、全体指導と個別指導を組み合わせ、共通文献の読みあい、個別発表、文献探索等を進めていく。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	図書館等、資料探索の方法	
	第3回	卒業論文の書き方	
	第4回	共通文献の購読（1）	
	第5回	共通文献の購読（2）	
	第6回	共通文献の購読（3）	
	第7回	共通文献の購読（4）	
	第8回	共通文献の購読（5）	
	第9回	共通文献の購読（6）	
	第10回	共通文献の購読（7）	
	第11回	各自の研究関心の発表（1）	
	第12回	各自の研究関心の発表（2）	
	第13回	各自の研究関心の発表（3）	
	第14回	各自の研究関心の発表（4）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○共通文献の学習については、報告担当者はもちろん全員が事前に文献を読み論点整理をしておく。 ○関連文献や資料の探索を事前に行っておく。特に報告担当者はきちんとやっておくこと。 ○自分のテーマに関しては、普段から文献整理や資料探索を行っておくこと。</p>		
テキスト	授業時に提示する		
参考文献	随時、授業時に提示する		
評価方法	授業への参加度:20% レポート発表:20% 期末レポート:60%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
実証研究を行なって論文にまとめる!		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) 社会心理学の論文の読み方を知り、概要をつかめるようになる。 (2) 先行研究に基づいた研究計画を立てられるようになる。 (3) 研究を行なう上で考慮しなければならない事項を理解する。		
授業の概要	授業形態は演習形式およびグループ・個人での活動である。 いくつかのテーマごとに、先行研究を調べながら実験または調査の研究計画を立て、準備を行う。研究は基本的にグループで行なうが、論文は各自で執筆する。 授業外の時間も大量に使って自主的に作業を進めることが必須である。 論文の執筆もできるところから順次進める。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	卒論テーマの検討	
	第3回	卒論テーマの決定、グループ分け	
	第4回	心理統計：導入	
	第5回	心理統計：基礎	
	第6回	文献探し	
	第7回	文献の検討	
	第8回	先行研究のまとめ	
	第9回	先行研究の発表	
	第10回	研究の方向性の検討	
	第11回	研究計画の立案	
	第12回	研究計画の吟味	
	第13回	研究計画の決定	
	第14回	実験・調査の準備	
	第15回	まとめ／夏の課題の確認	
準備学習 (予習・復習等)	授業中は発表とディスカッションを行なうので、発表の準備やディスカッションを踏まえて自分の研究を見直すことなどは授業の前後に必須である。 テキストは各自で必要箇所をよく読むこと。授業時に全員で参照することもあるが、輪読はしない。		
テキスト	都筑学 (2006) 『心理学論文の書き方 おいしい論文のレシピ』有斐閣		
参考文献	戸田山和久 (2012) 『論文の教室』NHK出版／向後千春・富永敦子 (2007) 『統計学がわかる』技術評論社／このほか適宜紹介する。		
評価方法	授業時の発表:30% 発表以外の授業参加度:20% レポート:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
食品学・食生活		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標 及びテーマ	食品・栄養・食生活の分野で各自がそれぞれ食に関するテーマを選び、資料検索・解読・報告とディスカッションをマスターし独立して研究を進められるようになること、本格的な論文を書けるようになることとその発表を行えるようになることを、目的とする。		
授業の概要	食品・栄養・食生活の分野で各自がそれぞれ食に関するテーマを選び、1年次に学んだ調査・研究方法をもとに、各自で資料を検索入手して読み解き、その内容を授業で報告し全員で議論を行い、より深いものへと高めて、論文作成へとつなげる。		
授業計画	第1回	研究の進め方、論文作成についてその1	
	第2回	研究の進め方、論文作成についてその2	
	第3回	研究の進め方、論文作成についてその3	
	第4回	研究テーマの決定その1	
	第5回	研究テーマの決定その2	
	第6回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその1	
	第7回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその2	
	第8回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその3	
	第9回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその4	
	第10回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその5	
	第11回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその6	
	第12回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその7	
	第13回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその8	
	第14回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその9	
	第15回	全員の中間報告と論文内容の概要報告	
準備学習 (予習・復習等)	毎週学んだことが次週の内容につながります。忘れずに生かすことが復習になります。		
テキスト	各自のテーマに沿って改めて決定する。		
参考文献	各自のテーマに沿って各自も見つけ出さねばならない。		
評価方法	資料検索・内容解読:50% 発表と討論:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
法学を学び卒業論文のテーマを見つける		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	各自、日頃気になっている社会問題に関して主体的に関心を持ち、それについて調査研究し、演習でレポーターとして発表し、議論をして意見交換を行うことを通じて、テーマに深く切り込み、最後には卒業論文として、一つの社会問題への解決方法を提案することを目標とする。		
授業の概要	主体的に決定したテーマについて、図書資料等を調べ、演習でレポーターとして発表してもらう。活発な意見交換を望む。最近の学生に不足しているプレゼンテーション能力が磨かれることと思う。必ず、全員が一回は発言すること。自分のテーマに対する愛情と他人のテーマに対する関心を持って欲しい。また、英語の文献を読む訓練も行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション 演習の進め方について	
	第2回	レポーターによる報告と討論 グループ1	
	第3回	レポーターによる報告と討論 グループ2	
	第4回	図書館での資料収集方法について	
	第5回	レポーターによる報告と討論 グループ3	
	第6回	レポーターによる報告と討論 グループ4	
	第7回	レポーターによる報告と討論 グループ5	
	第8回	レポーターによる報告と討論 グループ6	
	第9回	レポーターによる報告と討論 グループ7	
	第10回	レポーターによる報告と討論 グループ8	
	第11回	レポーターによる報告と討論 グループ9	
	第12回	レポーターによる報告と討論 グループ10	
	第13回	レポーターによる報告と討論 グループ11	
	第14回	裁判所見学	
	第15回	研究テーマについての総括	
準備学習 (予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともにさらに授業に興味深くなるであろう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	特に指定はしない。		
参考文献	特に指定はしない。必要な場合は、その都度、指示を行う。		
評価方法	レポーター発表の出来:50% 討論への積極的参加:50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒業研究・論文作成 I		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	現代教養学科人間社会専攻の卒業論文作成に向けて、それぞれ自分で選んだテーマについて、時代背景、問題設定の多視眼的接近を試みる。他の学生のテーマとの接点等、対話を通してそれぞれの学生が自己の問題を深め、他の問題を理解し、互いに影響し合うことを目標とする。良いノートを作る。		
授業の概要	自己のテーマについては資料を見つけ、読解し、まとめる力を育成する。他者の発表に際してはしっかり聞くこと、良いノートを取ることに、理解すること、的確な質問をすること、そして互いに刺激し合えるように工夫をする。時にはそれぞれのテーマについて教師が講義をする。		
授業計画	第1回	序論、卒業論文とは？ 良いノートを作るために	
	第2回	テーマ設定の試み（1） 前年の論文を参考にして	
	第3回	参考文献の選択方法（1）	
	第4回	テーマの発表（1）参考文献へのアドバイス	
	第5回	卒業論文作成までの日程設定について	
	第6回	テーマ設定の試み（2）全員の仮テーマの発表	
	第7回	参考文献の選択方法（2）簡単に手に入る文献の構造発表	
	第8回	文献表作成の例、引用の仕方、前年の論文を参考にして	
	第9回	テーマの発表（2）具体的例として教師自身のものを提示	
	第10回	参考文献の選択方法（3）テーマに即して発表 I	
	第11回	参考文献の選択方法（4）テーマに即して発表 II	
	第12回	テキスト読解と解釈、アドバイス（1）	
	第13回	テキスト読解と解釈、アドバイス（2）	
	第14回	テキスト読解と解釈、アドバイス（3）	
	第15回	題目決定、夏休みの課題提示	
準備学習 (予習・復習等)	事前に次回のテーマを発表するので、このテーマを考え「メモ」を作成する。そして授業後に「まとめ」、自分にとっての新しい問題、視点について簡単なノートを作成すること。時に提出を課する。		
テキスト	プリントを使用する		
参考文献	2014年度を含めてそれ以前の卒業論文をし紹介する。また参考文献は必要に応じて全体にまた個別に紹介する		
評価方法	発表:50% コミュニケーション力:30% レポート:20%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
人間活動と環境との関わり		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	産業革命以来、人間活動は際限なく拡大し、我々は環境に多大の負荷を与えることとなり、地球温暖化など様々な環境問題に直面しています。本研究では、種々の環境問題について文献調査やデータ解析を通して、変化の実態を見、メカニズムを理解するとともに、対応策等についても考察します。		
授業の概要	各種の環境問題について、ビデオ、解説、報道記事、研究論文、見学などをもとに学習します。また環境思想に関する本の輪講を行います。これらの学習を通して環境問題に関する理解を深めていきます。		
授業計画	第1回	環境科学入門	
	第2回	環境問題の概説（大気汚染・酸性雨）	
	第3回	環境問題の概説（水質汚濁・海洋汚染）	
	第4回	環境問題の概説（有害化学物質）	
	第5回	環境問題の概説（地球温暖化）	
	第6回	環境問題の概説（オゾン層破壊）	
	第7回	施設見学（水再生センター）	
	第8回	施設見学（気象科学館）	
	第9回	課題調査（課題提示・解説・選択） 環境思想に関する本の輪講Ⅰ	
	第10回	課題調査（個別指導－グループⅠ） 環境思想に関する本の輪講Ⅱ	
	第11回	課題調査（個別指導－グループⅡ） 環境思想に関する本の輪講Ⅲ	
	第12回	課題調査（個別指導－グループⅢ） 環境思想に関する本の輪講Ⅳ	
	第13回	課題調査（発表・質疑討論－グループⅠ） 環境思想に関する本の輪講Ⅴ	
	第14回	課題調査（発表・質疑討論－グループⅡ） 環境思想に関する本の輪講Ⅵ	
	第15回	課題調査（発表・質疑討論－グループⅢ） 環境思想に関する本の輪講Ⅶ	
準備学習 (予習・復習等)	日本化学会編「暮らしと環境科学」（東京化学同人）を通読しておくこと。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	日本化学会編「暮らしと環境科学」（東京化学同人）、及びテーマにより個別に紹介する。		
評価方法	課題ごとのレポート:60% 課題ごとの発表:40%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
図書館の可能性を探る		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標及びテーマ	図書館に関連したテーマを設定し、関連文献を探索・収集し、卒業論文の執筆にとりかかることができるようにする。この作業のプロセスで、ゼミ生同士のコミュニケーションや情報リテラシーの力が高まる。並行して子どもの読書や図書館に関する文献を輪読して基本となる知識を得る。		
授業の概要	まず、各自のテーマを決定するために、事前調査を行い先行研究を読み概略をつかむ。テーマがほぼ決定したら関連文献を探索し収集して、本格的に文献を読んでいく。同時に、ゼミ生に共通のテーマの文献を輪読し、考察を深める。		
授業計画	第1回	ガイダンス。本の紹介と分担	
	第2回	卒論テーマの検討。輪読とディスカッション（グループ1）	
	第3回	論文作成の方法。輪読とディスカッション（グループ2）	
	第4回	事前調査。輪読とディスカッション（グループ3）	
	第5回	関連文献の探索・収集。輪読とディスカッション（グループ4）	
	第6回	関連文献の探索・収集。テーマと関連文献の報告（グループ1）	
	第7回	関連文献の探索・収集。テーマと関連文献の報告（グループ2）	
	第8回	関連文献の探索・収集。テーマと関連文献の報告（グループ3）	
	第9回	関連文献の探索・収集。テーマと関連文献の報告（グループ4）	
	第10回	文献の読解（グループ1）	
	第11回	文献の読解（グループ2）	
	第12回	文献の読解（グループ3）	
	第13回	文献の読解（グループ4）	
	第14回	卒論構想報告（グループ1, 2）	
	第15回	卒論構想報告（グループ3, 4）	
準備学習 （予習・復習等）	先行研究の文献検索をしっかりと行うこと。		
テキスト	ゼミ生のテーマに応じて選択する。		
参考文献	必要に応じて紹介する。		
評価方法	論文作成への取り組み：50% 輪読への参加度：50%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
情報科学演習		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	テーマを決め、文献収集、調査、分析をとおして、卒業論文としてまとめるための準備をしていきます。		
授業の概要	各自で卒業論文のテーマを設定し、それに基づいて自ら文献収集、調査、分析をします。その過程を発表し、討論して研究を深化させていきます。必要に応じて全体指導・個別指導をします。		
授業計画	第1回	卒業論文作成に向けて全体指導	
	第2回	卒業論文のテーマ検討①	
	第3回	卒業論文のテーマ検討②	
	第4回	卒業論文のテーマ決定	
	第5回	文献調査の方法	
	第6回	個別発表・討論①	
	第7回	個別発表・討論②	
	第8回	個別発表・討論③	
	第9回	個別発表・討論④	
	第10回	個別発表・討論⑤	
	第11回	個別指導①	
	第12回	個別指導②	
	第13回	まとめ。卒業演習Ⅱに向けてのガイダンス	
	第14回	卒業論文Ⅰのまとめ発表①	
	第15回	卒業論文Ⅰのまとめ発表②	
準備学習 (予習・復習等)	収集した文献の分析結果は必ずレポートとしてまとめ、デジタルデータ化し、学習履歴として蓄積し、卒論執筆に利用できるよう準備してください。		
テキスト	使用しません。必要に応じて資料を準備します。		
参考文献	適宜紹介します。		
評価方法	論文作成の進捗:60% 演習での発表:40%		

卒業演習 I		前期 4 単位	2年
卒業論文（科学と社会）の準備と着手		八耳 俊文（やつみみ としふみ）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>本学の学修の集成として卒業論文の作成があります。これは自分の興味のあるテーマについて問いをたて、関連する文献を読み、あるときは調査をおこない、論理的展開を経て、自らの答えを導く作業です。その準備段階として、論文とは何かを知り、また卒論を意識する中でテーマを決め、それに従った文献を読み、どのようなことが論じられているかわかるようにします。</p>		
授業の概要	<p>1回目から5回目までは担当教員が説明、受講生が応答というかたちで授業を進めます。7回目以降はそれぞれの受講生がテーマに即して学修を深め、文献を読み、その内容を発表してもらいます。2グループに分けますので、隔週での発表となります。6回目と11回目は本演習に関連して生命倫理の内容をもつDVDを視聴して、討議をおこない、人間の根源を考える機会とします。14回目と15回目は文献紹介を終え、卒論の構想を発表する時間とします。</p>		
授業計画	第1回	卒業演習のガイダンス	
	第2回	卒論テーマを考えよう	
	第3回	論文を知る、2回目：生命倫理に関わる論文Aをもとに	
	第4回	論文を知る、1回目：生命倫理に関わる論文Bをもとに	
	第5回	情報の集め方（図書館でのオリエンテーション）	
	第6回	生命倫理に関わるDVD視聴および討議	
	第7回	卒論テーマに関わる文献紹介（グループ1、1回目）	
	第8回	卒論テーマに関わる文献紹介（グループ1、1回目）	
	第9回	卒論テーマに関わる文献紹介（グループ2、2回目）	
	第10回	卒論テーマに関わる文献紹介（グループ2、2回目）	
	第11回	生命倫理に関わるDVD視聴、討議	
	第12回	卒論テーマに関わる文献紹介（グループ1、3回目）	
	第13回	卒論テーマに関わる文献紹介（グループ2、3回目）	
	第14回	卒論テーマに関する発表（グループ1）	
	第15回	卒論テーマに関する発表（グループ2）	
準備学習 (予習・復習等)	<p>卒論の準備段階では、配付される論文をよく読み、論文の構成を知るようにする。 卒論の着手段階では、自らのテーマの即した文献を読み、その内容をレジュメにまとめる作業を重ねる。</p>		
テキスト	石井一成『ゼロからわかる 大学生のためのレポート・論文の書き方』（ナツメ社、2011年）		
参考文献	白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方』（ミネルヴァ書房、2008年）、栩木伸明『卒論を書こう』第二版（三修社、2006年）		
評価方法	卒論への取り組み度：25% 文献紹介の発表：75%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒業演習Ⅱ（心理学的手法を用いた研究）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	卒業論文の執筆に向けて、心理学に関わる課題について、実験や調査を行い、得られたデータに基づいて、論文執筆を行う。		
授業の概要	実験あるいは調査を行い、そのデータを整理・分析し、卒業論文にまとめる。 授業は主に演習形式で進めるが、個別指導を適宜交えながら進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	データの入力・整理	
	第3回	図表の作成	
	第4回	データの分析1	
	第5回	データの分析2	
	第6回	結果の書き方1	
	第7回	結果の書き方2	
	第8回	考察の書き方1	
	第9回	考察の書き方2	
	第10回	論文作成1	
	第11回	論文作成2	
	第12回	論文作成3	
	第13回	プレゼンテーションの作成	
	第14回	発表会の準備1	
	第15回	発表会の準備2・まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習 自主的に論文作成の作業を行うこと。 事後学習 講義内容を踏まえ、出題される課題を着実に締切までに提出すること。		
テキスト	白井利明・高橋一郎 「よくわかる卒論の書き方 第2版」 ミネルヴァ書房		
参考文献	山田剛史・林 創 「大学生のためのリサーチリテラシー入門」 ミネルヴァ書房		
評価方法	発表・課題:20% 授業参加態度:20% 卒業論文:60%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
経営学演習		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	経営学に関する文献を講読したり、事例研究をすることによって、経営学に関する理解を深める。最終的には、自分の興味によって、経営学に関するひとつのテーマを定め、卒業論文を執筆する。		
授業の概要	各自が興味のあるテーマを選び、卒業論文の作成を中心に行う。課題（文献を読んでくる、報告を用意する）を与えるため、その際は必ず準備して臨むこと		
授業計画	第1回	ガイダンス・卒業論文に向けて	
	第2回	発表と討論 グループ1	
	第3回	発表と討論 グループ2	
	第4回	発表と討論 グループ3	
	第5回	発表と討論 グループ4	
	第6回	発表と討論 グループ5	
	第7回	発表と討論 グループ1	
	第8回	発表と討論 グループ2	
	第9回	発表と討論 グループ3	
	第10回	発表と討論 グループ4	
	第11回	発表と討論 グループ5	
	第12回	論文仮提出と手直し	
	第13回	発表資料作成 効果的なプレゼンテーションとは	
	第14回	発表資料作成 パワーポイントの活用法	
	第15回	発表と論文提出	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、予習をしてあることを前提に行います。有意義な討論になるよう、発表担当に関わらず、テーマに基づいて、自分なりに調べ、専門用語等の意味を理解しておくこと。		
テキスト	開講時に指示する。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	発表:30% 授業への参画度:40% 卒業論文:30%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
食文化，食情報の研究		宇都宮 由佳（うつのみや ゆか）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>①各自，食に関する研究テーマを選択し，研究計画をたて文献研究および実証的研究を実施する力を身につける。 ②得られた結果をもとに，論文を執筆する。 ③プレゼンテーションで他者へ自分の意見を伝えると同時に，他者の意見に耳を傾け，対応できる力を養う。</p>		
授業の概要	<p>本演習では，食文化，食情報に関する多様な研究手法を学び，各自，関心のあるテーマを選択する。文献・資料の検索・収集，分析してまとめる。実証的研究を選択した場合は，綿密な研究計画をたて実施する。得られた結果をもとに論文を執筆する。あわせてプレゼンテーション用資料を作成し，自分の考えを他者へ伝えると同時に，他者の意見に耳を傾け，対応できる力を養う。</p>		
授業計画	第1回	論文執筆の中間報告1	
	第2回	論文執筆の中間報告2	
	第3回	個別指導1	
	第4回	個別指導2	
	第5回	個別指導3	
	第6回	論文構成の確認	
	第7回	中間発表1	
	第8回	中間発表2	
	第9回	中間発表3	
	第10回	論文執筆と報告1	
	第11回	論文執筆と報告2	
	第12回	論文執筆と報告3	
	第13回	論文執筆と報告4	
	第14回	卒論発表	
	第15回	卒業論文提出	
準備学習 (予習・復習等)	各自，論文を執筆する		
テキスト	各自，卒論のために必要な文献・資料を用いる。		
参考文献	高崎みどり著「大学生のための論文執筆の手引き」秀和システム。		
評価方法	受講態度：30% 論文：70%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒業演習Ⅱ（経済学）		小栗 誠治（おぐり せいじ）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期の卒業演習Ⅰで検討し決定した卒業論文テーマに沿って、各人が卒業論文を完成させることが目標です。		
授業の概要	卒業論文の完成に向けた指導を行います。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	卒業論文の中間報告（1）	
	第3回	卒業論文の中間報告（2）	
	第4回	卒業論文の中間報告（3）	
	第5回	卒業論文の中間報告（4）	
	第6回	卒業論文の中間報告（5）	
	第7回	卒業論文の中間報告（6）	
	第8回	卒業論文の中間報告（7）	
	第9回	卒業論文の中間報告（8）	
	第10回	卒業論文の完成（1）	
	第11回	卒業論文の完成（2）	
	第12回	卒業論文の完成（3）	
	第13回	卒業論文の完成（4）	
	第14回	卒業論文の完成（5）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・無断欠席は厳禁。 ・発表者は事前に十分な準備を行い、発表に当たっては全員にレジメを配付した上行うこと。 ・出席者は積極的に討論に参加し、意見を述べること。 		
テキスト	演習の中で個別に指示します。		
参考文献	演習の中で適宜言及します。		
評価方法	卒業論文:70% 平常点:30%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
現代教育の歴史的・原理的研究		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>テーマ：卒業論文を執筆し完成させよう 到達目標：①前期で構想した論文のテーマ、章立てにもとづき、2年間の学びの集大成として卒業論文を執筆し、完成させる。②卒論発表会において、卒業論文の要旨をまとめ、わかりやすく発表するプレゼンテーション能力を身につける。</p>		
授業の概要	<p>後期は卒業論文執筆が課題となるため、個別指導に重点が置かれる。各自計画的に作業を進め、そのつど状況に応じた指導を行う。またグループ会、全体会を持ち、中間発表、仮提出、卒論発表会という節目を設けて、お互いの成果を共有し合う。</p>		
授業計画	第1回	卒論執筆のスケジュールについて	
	第2回	各自の進捗状況について発表と討議（1）	
	第3回	各自の進捗状況について発表と討議（2）	
	第4回	各自の進捗状況について発表と討議（3）	
	第5回	各自の進捗状況について発表と討議（4）	
	第6回	グループごとの発表と討議（1）	
	第7回	グループごとの発表と討議（2）	
	第8回	グループごとの発表と討議（3）	
	第9回	グループごとの発表と討議（4）	
	第10回	個別指導（1）	
	第11回	個別指導（2）	
	第12回	個別指導（3）	
	第13回	卒論発表会にむけた準備（1）	
	第14回	卒論発表会にむけた準備（2）	
	第15回	卒論発表会にむけた準備（3）とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○論文構想に関わる文献・資料の探索・整理を常に行う ○論文の原稿執筆を計画的に進める ○疑問や迷いなど、教員への質問・相談事項をあらかじめ整理しておく</p>		
テキスト	特に定めない		
参考文献	随時、授業で紹介する		
評価方法	卒業論文:70% 授業時の発表:15% 卒論発表会:15%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
実証研究を行なって論文にまとめるII		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) 研究計画に基づいて、実験または調査の実施、分析を行ない、論文を完成させる。 (2) 研究内容を要約して伝える方法を身につける。 (3) 実験に参加してくれる人への倫理的配慮を理解する。		
授業の概要	授業形態は演習形式およびグループ・個人での活動である。 いくつかのテーマごとに、実験または調査の実施、Excelや統計ソフトを用いた分析も必要に応じて行う。論文は各自で執筆する。 授業外の時間も大量に使って自主的に作業を進めることが必須である。		
授業計画	第1回	進行状況と課題の確認	
	第2回	実験・調査の最終準備	
	第3回	実験の実施	
	第4回	調査の実施	
	第5回	分析手順の確認	
	第6回	データ入力	
	第7回	データ分析・基礎	
	第8回	データ分析・応用	
	第9回	結果の解釈	
	第10回	結果の解釈の吟味	
	第11回	結果の考察	
	第12回	考察の吟味	
	第13回	論文作成	
	第14回	研究参加者への報告の作成	
	第15回	研究成果の発表、総まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業中は発表とディスカッションを行なうので、発表の準備やディスカッションを踏まえて自分の研究を見直すことなどは授業の前後に必須である。個別相談も積極的に来てほしい。 テキストは各自で必要箇所をよく読むこと。授業時に全員で参照することもあるが、輪読はしない。		
テキスト	特に指定しない。各自卒論のために必要な文献を用いる。		
参考文献	松井豊 (2006) 『心理学論文の書き方』 河出書房新社／向後千春・富永敦子 (2007) 『統計学がわかる』 技術評論社／このほか適宜紹介する。		
評価方法	卒業論文:70% 課題への取り組み:30%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
食品学・食生活		谷本 信也（たにもと しんや）	
授業の到達目標 及びテーマ	食品・栄養・食生活等の分野で各自がそれぞれ食に関するテーマを選び、資料検索・解読・報告とディスカッションをマスターし、本格的な論文を書けるようになることとその発表が行えるようになることを、目標とする。		
授業の概要	食品・栄養・食生活等の分野で各自がそれぞれ食に関するテーマを選び、1年次に学んだ調査・研究方法をもとに各自で資料を検索入手して読み解き、その内容を授業で報告し全員で討論を行い、より深いものへと高めて、論文作成へとつなげる。		
授業計画	第1回	夏季休暇中に進んだ内容の報告と討論	
	第2回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその1	
	第3回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその2	
	第4回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその3	
	第5回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその4	
	第6回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその5	
	第7回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその6	
	第8回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその7	
	第9回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその8	
	第10回	資料の検索と資料の内容報告・ディスカッションその9	
	第11回	論文内容の報告とディスカッション1	
	第12回	論文内容の報告とディスカッション2	
	第13回	論文内容の報告とディスカッション3	
	第14回	論文内容の報告とディスカッション4	
	第15回	論文発表とディスカッション	
準備学習 (予習・復習等)	毎週の学びを必ず次週の学びにいかすことが復習につながります。忘れずに使いましょう。		
テキスト	各自のテーマに沿って改めて決定する。		
参考文献	テーマに沿って各自がそれぞれ見つけ出さねばならない。		
評価方法	検索解読・発表と討論:30% 論文:70%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
法学を学び卒業論文をしあげる		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	各自、日頃気になっている社会問題に関して調査研究し、卒業論文をしあげ、一つの社会問題への解決方法を提案することを目標とする。すでに、決定しているテーマに関して、夏休み中に調査研究してきたことを踏まえて、いよいよ卒業論文を仕上げることを目標とする。		
授業の概要	主体的に決定したテーマについて、演習でレポーターとして発表し、自分の考えと他人の考えの衝突から、テーマをさらに深く掘り下げる。卒業論文の執筆に早くからとりかかってもらう。卒業論文の内容を発表し、卒業論文指導を受けることが義務である。適宜、英書購読も行う。		
授業計画	第1回	卒業論文テーマと論文概要に関する報告会	
	第2回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ1	
	第3回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ2	
	第4回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ3	
	第5回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ4	
	第6回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ5	
	第7回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ6	
	第8回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ7	
	第9回	報告者による卒業論文途中経過報告と討論 グループ8	
	第10回	卒業論文指導 グループ1, 2	
	第11回	卒業論文指導 グループ3, 4	
	第12回	卒業論文指導 グループ5, 6	
	第13回	卒業論文指導 グループ7, 8	
	第14回	最終卒業論文指導および卒業論文提出1	
	第15回	最終卒業論文指導および卒業論文提出2	
準備学習(予習・復習等)	新聞などで関連する新しいニュースをチェックしておくとともにさらに授業に興味深くなるであろう。疑問点などがあれば、次の授業で質問すること。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	特に指定しない。その都度指示する。		
評価方法	卒業論文指導での出来:50% 卒業論文の出来:50%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
人間社会特別研究・卒業論文		橋本 典子（はしもと のりこ）	
授業の到達目標及びテーマ	各自、独自のテーマを決定し、複数の参考文献を読解し、それらを解釈することによって卒業論文（400字x50枚、20,000字）を完成する。途中経過（2回以上の発表）、レジュメ、論文作成のためのノート等を重要視する。他のメンバーとの対話を通してコミュニケーション力を養う。		
授業の概要	参考文献を選択し、それらを読解し、論文を立体的に構成する。参照すべき文献を個別的に紹介し部分的に一緒に読み解く。他のメンバーと互いに刺激し合いながら、自分自身のテーマを深める。ノートの作成、発表を中心に進めていく。		
授業計画	第1回	序論—卒業論文の完成のために	
	第2回	論文の全体構成（2013及び2014年度の具体例を示す）	
	第3回	夏休みに読解した参考文献の進捗状況	
	第4回	論文題目および副題の決定	
	第5回	論文の展開部の機能と位置付け	
	第6回	卒業論文のOriginality（独創性）とは？	
	第7回	各章のタイトルおよび論ずる内容	
	第8回	テキストの読解と解釈（1）発表	
	第9回	テキストの読解と解釈（2）発表	
	第10回	テキストの読解と解釈（3）発表	
	第11回	自分のテーマと他のメンバーのテーマとの関連性、発表	
	第12回	論文の序と結論との関係、発表	
	第13回	書いた論文の発表とそれに対するアドバイス	
	第14回	他の視点からの質疑応答 発表と対話力の育成	
	第15回	論文発表会への準備、レジュメの作成	
準備学習 (予習・復習等)	夏休みの提出論文を展開し、自分の発表の準備をする。授業後、他の論文のノートを取り、自分に参考になることを明記しておくこと。時に提出を課することがある。		
テキスト	必要に応じて配布する。		
参考文献	個別的にアドバイスする。		
評価方法	論文、途中経過:70% 発表とそのレジュメ:20% コミュニケーション力:10%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
人間活動と環境との関わり（続）		廣田 道夫（ひろた みちお）	
授業の到達目標 及びテーマ	産業革命以来、人間活動は際限なく拡大し、我々は環境に多大の負荷を与えることとなり、地球温暖化など様々な環境問題に直面しています。本研究では、種々の環境問題について文献調査やデータ解析を通して、変化の実態を見、メカニズムを理解するとともに、対応策等についても考察します。		
授業の概要	各人が選択した環境問題について、文献を調査し、質疑討論の中で理解を深め、報告書にまとめます。また発表会で報告します。		
授業計画	第1回	研究テーマの提示・解説	
	第2回	研究テーマの選択の個別指導	
	第3回	研究テーマの個別指導（グループⅠ）	
	第4回	研究テーマの個別指導（グループⅡ）	
	第5回	研究テーマの個別指導（グループⅢ）	
	第6回	研究報告の作成に関する指導	
	第7回	研究報告の作成一個別指導（グループⅠ）	
	第8回	研究報告の作成一個別指導（グループⅡ）	
	第9回	研究報告の作成一個別指導（グループⅢ）	
	第10回	研究報告の取りまとめ（グループⅠ）	
	第11回	研究報告の取りまとめ（グループⅡ）	
	第12回	研究報告の取りまとめ（グループⅢ）	
	第13回	研究報告の発表会（グループⅠ）	
	第14回	研究報告の発表会（グループⅡ）	
	第15回	研究報告の発表会（グループⅢ）	
準備学習 (予習・復習等)	テーマごとに参考文献を通読しておくこと。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	テーマにより個別に紹介する。		
評価方法	報告書:80% 報告会発表:20%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
図書館の可能性を探る		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	卒業論文を完成させる。論文のプロセスを振り返って、研究のプロセスと成果を自ら評価できる力を培いたい。ゼミ生同士の意見交換会をとおして分析的に物事を見る力を高める。		
授業の概要	各人個別のテーマのため、①進捗状況や疑問点などを出し合う意見交換会（中間報告）、②個別指導、③相互批評・卒論発表会準備、の3つに分けて進める。		
授業計画	第1回	卒論進捗状況報告	
	第2回	卒論中間報告（グループ1）	
	第3回	卒論中間報告（グループ2）	
	第4回	卒論中間報告（グループ3）	
	第5回	卒論中間報告（グループ4）	
	第6回	個別指導（グループ1, 2）	
	第7回	個別指導（グループ3, 4）	
	第8回	個別指導（グループ1, 2）	
	第9回	個別指導（グループ3, 4）	
	第10回	個別指導（グループ1, 2）	
	第11回	個別指導（グループ3, 4）	
	第12回	卒論相互批評（グループ1, 2）	
	第13回	卒論相互批評（グループ3, 4）	
	第14回	卒業論文発表会準備（グループ1, 2）	
	第15回	卒業論文発表会準備（グループ3, 4）	
準備学習 (予習・復習等)	ひとつひとつの積み上げが重要。手を抜かないことが大切である。		
テキスト	特になし。		
参考文献	必要に応じて紹介する。		
評価方法	授業への参加度:40% 卒業論文:60%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
情報科学演習		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	各自が設定したテーマで卒業論文を作成します。		
授業の概要	各自が設定したテーマに即して、演習での発表、個別指導とおして卒業論文を完成させます。		
授業計画	第1回	後期演習の進め方について	
	第2回	論文執筆要領	
	第3回	卒業論文概要発表と討論①	
	第4回	卒業論文概要発表と討論②	
	第5回	卒業論文概要発表と討論③	
	第6回	個別指導①	
	第7回	個別指導②	
	第8回	個別指導③	
	第9回	中間発表と討論①	
	第10回	中間発表と討論②	
	第11回	中間発表と討論③	
	第12回	個別指導①	
	第13回	個別指導②	
	第14回	卒業論文口頭発表①	
	第15回	卒業論文口頭発表②	
準備学習 (予習・復習等)	ゼミ内での討論やコメント、個別指導の内容をよく吟味し、論文作成の参考にしてください。		
テキスト	使用しません。必要に応じて資料を配布します。		
参考文献	適宜紹介します。		
評価方法	卒業論文:70% 発表と討議への参加:30%		

卒業演習Ⅱ		後期 4 単位	2年
卒業論文を作成しよう		八耳 俊文（やつみみ としふみ）	
授業の到達目標及びテーマ	卒業論文を作成することにより、どのテーマにも、多くの論議の蓄積と、さまざまな視点によるアプローチがあることを理解する。また関連文献を「読む」だけでなく、「まとめる」という作業を通じて、自らが選んだテーマについて体系的な知識を身につけることができるようにする。		
授業の概要	卒業論文のテーマにより、AとBの2グループに分けるので、論文の構想から論文執筆までの途中経過をグループごとに、個別に発表してもらう。この発表を重ね、最終的に卒論の完成に至るようにする。授業は基本的に演習参加者の発表とそれについての議論からなる。		
授業計画	第1回	卒業論文のガイダンス・卒業論文のテーマの確認	
	第2回	卒業論文に関する発表（Aグループ、1回目）	
	第3回	卒業論文に関する発表（Bグループ、1回目）	
	第4回	卒業論文に関する発表（Aグループ、2回目）	
	第5回	卒業論文に関する発表（Bグループ、2回目）	
	第6回	卒業論文に関する発表（Aグループ、3回目）	
	第7回	卒業論文に関する発表（Bグループ、3回目）	
	第8回	卒業論文に関する発表（Aグループ、4回目）	
	第9回	卒業論文に関する発表（Bグループ、4回目）	
	第10回	卒業論文の提出前指導（構成・目次案）	
	第11回	卒業論文の提出前指導（論文の形式、1回目）	
	第12回	卒業論文の提出前指導（論文の形式、12回目）	
	第13回	卒業論文一次稿の提出、卒業論文発表会の準備	
	第14回	卒業論文の完成稿の提出	
	第15回	卒業論文の発表会	
準備学習（予習・復習等）	授業ではそれぞれが準備した卒業論文の構想や草稿を指導するのが主であり、受講者はテーマの設定、関連文献の読解、卒業論文の執筆を、授業時間外におこなう必要がある。		
テキスト	特になし		
参考文献	白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方』（ミネルヴァ書房、2008年）、栩木伸明『卒論を書こう』第二版（三修社、2006年）		
評価方法	卒業論文：80% 演習への参加度：20%		

ワークショップ・人間と表現		前期 2 単位	1年
(子ども学コア科目) 出会いと発見 発見する身体、感受する身体 そして発信する身体へ		久保 制一 (くぼ せいいち) 廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	自由に感じ、考え、自らの問を発するという大学での学びの方法を確立する第一歩としてワークショップ形式のこの科目は、子ども学科コア科目として位置づけられている。多様な表現の可能性をさぐり、さまざまな表現の受容が出来るしなやかな身体性を獲得する。ワークショップを体験するなかでホンモノの表現との出会いを自己の頭脳と身体とところで感じ知覚し、心豊かなコミュニケーションマインドを体得することができる。		
授業の概要	第一線で活躍のゲスト講師によるオムニバス形式のワークショップ。多様な表現の基礎と方法に出会い、感性を研ぎ澄まし自らを発見し全身の感覚を駆使して身体を解放し頭脳とところの耕しをして、これからの大学での学びである耕しと種蒔きに備える。動きやすい服装を推奨。毎回ポートフォリオを作成し提出する。(講師・日程は変更となる場合がある)		
授業計画	第1回	イントロダクション 出会いと発見	久保 制一 (廣田)
	第2回	遊びとの出会いと発見	柏木 陽 (久保)
	第3回	五感との出会いと発見	和田 秀一 (久保)
	第4回	言葉との出会いと表現	小川Kenku郎 (久保)
	第5回	言葉との出会いと発見Ⅱ	小川Kenku郎 (久保)
	第6回	身体との出会いと発見	上村 なおか (久保)
	第7回	身体との出会いと表現 (身体技法)	上村 なおか (久保)
	第8回	自然との出会いと発見(別日程で学外授業)	新井 二郎 (久保)
	第9回	自然との出会いと表現(別日程で学外授業)	新井 二郎 (久保)
	第10回	ドラマとの出会いと発見	柏木 陽 (久保)
	第11回	ドラマとの出会いと発信	柏木 陽 (久保)
	第12回	空と雲との出会いと発見	廣田 道夫 (久保)
	第13回	身体と言葉との出会いと発見 (野口体操)	羽鳥 操 (久保)
	第14回	音とリズムとの出会いと発見	よしなか あつし (久保)
	第15回	アートとの出会いと発見	久保 制一 (廣田)
準備学習 (予習・復習等)	頭脳と身体とところを柔らかくしておく。		
テキスト	毎回ハンドアウトシート・ワークシートなどを配布。必ず保存しておく。 [ポートフォリオの編集と提出は試験期間中に行う]		
参考文献	適宜参考文献・ビデオなどを紹介する。		
評価方法	平常の授業への参加度:40% ポートフォリオ:60%		

子ども人間学概論		後期 2 単位	1年
子ども観の歴史的変遷 -西洋と日本-		伊藤 巳令 (いとう みれい) 鈴木 俊之 (すずき としゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義を履修した者は、1. 子どもに対するまなざしの変遷を歴史的に跡づけることによって子ども像の移り変わりとその時代背景を理解する、2. 人間的諸権利を根底にすえた現代子ども像についての多角的な考察を行い、子どもの人間的成長発達の意義を説明する、ことができるようになる。		
授業の概要	講義形式で行う。前半は伊藤が担当し、西洋絵画についての講義を行う。後半は鈴木が担当し、日本における子どもの歴史についての講義を行う。		
授業計画	第1回	オリエンテーション (鈴木・伊藤)	
	第2回	西洋美術に描かれた子ども①ギリシア・ローマ美術のなかの子ども (伊藤)	
	第3回	西洋美術に描かれた子ども②ブット (伊藤)	
	第4回	西洋美術に描かれた子ども③幼児キリストと天使 (伊藤)	
	第5回	西洋美術に描かれた子ども④ブリューゲルの「子供の遊び」 (伊藤)	
	第6回	西洋美術に描かれた子ども⑤オランダ市民社会と子ども (伊藤)	
	第7回	西洋美術に描かれた子ども⑥無垢なる子どもから普通の子どもへ (伊藤)	
	第8回	中間まとめ (鈴木)	
	第9回	日本の子ども① 古代から中世(1) (鈴木)	
	第10回	日本の子ども② 古代から中世(2) (鈴木)	
	第11回	日本の子ども③ 近世 寺子屋(1) (鈴木)	
	第12回	日本の子ども④ 近世 寺子屋(2) (鈴木)	
	第13回	日本の子ども⑤ 近世 藩校 (鈴木)	
	第14回	日本の子ども⑥ 近世 私塾 (鈴木)	
	第15回	まとめ (鈴木・伊藤)	
準備学習 (予習・復習等)	毎回次回内容に関する課題を提示する。授業後の振り返りとして小レポートの提出を求める。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:30% 試験あるいはレポート:70%		

子どもの文化と現在		前期 2 単位	2年
子どもたちは今、どのような状況を生きているのか—その豊かさ と貧しさ		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 日本ばかりでなく世界にも目を向け、子どもや若者がどんな状況に置かれ、どんなふう に生きているのかを理解できるようになる。 * 思考の幅や視野を広げ、さまざまな問題について考えるきっかけをつかむ。 * 子ども及び自分自身について、多角的にとらえることができるようになる。 		
授業の概要	絵本作家、科学の児童書専門家、シュタイナー学校の教員、詩人、新聞記者などそれぞれの分野で活躍している特別講師の方たちのお話を聞き、考える。質疑応答やミニレポートを通して、さらに理解を深める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	森山暁子 : 江戸の子どもと現代の子ども	
	第3回	池上理恵 : 子どもの好奇心がひらく世界	
	第4回	佐々波幸子 : 子どもを中心とした保育のために	
	第5回	鈴木のりたけ : 絵本作家はどうやって絵本をつくるか	
	第6回	池上理恵 : 科学の本っておもしろい!	
	第7回	アーサー・ビナード : 子どもにかかわる人の言葉	
	第8回	野坂悦子 : 紙芝居とはどういうものか。絵本との違いは何か	
	第9回	楠原彰 : 子どもとはだれか—子どもの悲しみ・怒り・喜び—	
	第10回	吉原美穂 : 雑誌「クーヨン」から見る子育てと女性	
	第11回	岩橋亜希菜 : シュタイナー教育は子どもをどう見ているか	
	第12回	おとなが子どもたちのためにできること	
	第13回	多文化社会に生きる子ども	
	第14回	世界の子どもを支えるのに必要なもの	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	ミニレポート。また各講師からテーマごとの入門書や参考文献を挙げていただくので、各自で問題意識をさらに深め、自分なりの探求をしてみることに。		
テキスト	適宜プリントを配布する。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
評価方法	平常点:20% ミニレポート:30% 定期試験:50%		

女性・環境・平和		後期 2 単位	2年
女性・環境・平和について過去から現在をふりかえり、世界に視野を広げて考える		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 地球環境が抱える諸問題を理解し、考えることができるようになる。 * 女性が生きること、働くことについて、考えることができるようになる。 * 世界の政治的・経済的状況についても把握できるようになる。 * 問題解決のためにできることを考えるきっかけにする。 		
授業の概要	<p>フォトジャーナリスト、建築家、環境活動家、江戸文化研究家、福島で子どものために働いている方など、それぞれの分野で活躍している特別講師の方たちを招き、お話を聞いて考える。質疑応答やミニレポートを通して、さらに理解を深める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	鳥居ヤス子：ソーラークッキングを楽しもう	
	第3回	落合由利子：生きること、表現すること	
	第4回	落合由利子：歴史を紡ぐ	
	第5回	楠原彰：他者・世界・宇宙—私が私になるということ—	
	第6回	アーサー・ビナード：だまされてはいけない	
	第7回	谷口由美子：アリスの奇跡	
	第8回	ウィリー・ルケパナ・トコ：アフリカへの支援と平和はどうかかわっているか	
	第9回	森山暁子：江戸の女性とエコロジー	
	第10回	吉野裕之：福島の現状と、環境から子どもを守る活動	
	第11回	山崎充哲：タマゾン川とおさかなポスト	
	第12回	岩橋亜希菜：子どもの環境として建築を考える	
	第13回	地球環境と平和	
	第14回	歴史から学ぶ姿勢	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>講義を聞きっぱなしにするのではなく、関係する本も読んでミニレポートを書く。各自で問題意識をさらに深め、自分なりの探求をしてみることに。</p>		
テキスト	適宜プリントを配布する		
参考文献	授業の中で随時紹介する		
評価方法	平常点:20% ミニレポート:30% 定期試験:50%		

いのちとケアの人間学		後期 2 単位	3年
いのちをめぐる諸問題とその本質～いのちを生かすケアを考える		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ) 横堀 昌子 (よこぼり まさこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちは単に生命を維持するだけでなく、人間らしく生きる (いのちを生かす・活かす) ことを望むが、他者とのかわりによって、かえっていのちが損なわれることもある。そこで、いのちを生かす (活かす) 他者とのかわり (「ケア」のかわり) とはどのようなものか、生・老・病・死をめぐる具体的な場面を題材にしながら根源的な問いに取り組み、探究する。		
授業の概要	菅野担当の前半 (パートⅠ) では、ケアの関係性を再検討する。横堀担当の授業の後半 (パートⅡ) では、いのちとケアをめぐる問題を再発見し、社会的な文脈で読み解く。講義・視聴覚教材視聴・演習・ディスカッションを活用し複合的に展開するため、3年次ならではの積極的な授業参加と教師へのフィードバックを求める。		
授業計画	第1回	イントロダクション～いのちとケアをめぐる問い (菅野・横堀)	
	第2回	ケアの二面性 (菅野)	
	第3回	ケアの関係性を問う (菅野)	
	第4回	ケアの関係性のなかにある権力性 (菅野)	
	第5回	ケアされるという経験 (菅野)	
	第6回	ケアするという経験 (菅野)	
	第7回	ケアする—される関係を越えて (菅野)	
	第8回	ケアの現場が抱える課題～ケア関係とケアの成り立ち (横堀)	
	第9回	いのちの起源をめぐる諸問題 (横堀)	
	第10回	いのちの価値をめぐる諸問題 (横堀)	
	第11回	人間の死と喪失体験、喪失と獲得 (横堀)	
	第12回	誕生と死をめぐるケア～喪失体験がもたらすグリーフ (横堀)	
	第13回	グリーフケア (グリーフワーク) の展開と、生への問い (横堀)	
	第14回	人間のいのちを生かすケアとは (横堀)	
	第15回	まとめ (横堀)	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、あらかじめ配布された資料を読みこんで、自分の意見を育てながら参加する。指示された場合には、授業の感想・考察レポートを提出する。参考文献を自分で読む努力をする。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に示す。		
参考文献	参考文献・参考資料とも、随時、授業にて紹介していく。		
評価方法	授業参加態度・感想:20% 提出物:30% レポート:50%		

教育学 I		前期 2 単位	1年
現代社会における教育とその問題		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を履修した者は、1. 教育に関する初歩的な幅広い知識を獲得する、2. その知識を用いて、現在の教育現象を簡潔に説明する、事ができるようになる。		
授業の概要	講義形式で行う。前半は教育の理論的・原理的な事柄について扱う。中間まとめではその内容を理解しているかをテストする。後半は教育の制度的・社会的事柄について扱う。毎回授業の終了後にミニツッパーパーにて授業の理解度を測る。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	教育とは何か I 教育の定義 自然環境と社会環境	
	第3回	教育とは何か II 発達 学習 社会の中の教育	
	第4回	教育の歴史 I 制度としての教育の発生	
	第5回	教育の歴史 II 公教育制度の歴史	
	第6回	教育内容 I 教育課程の歩み I (戦前～戦後初期)	
	第7回	教育内容 II 教育課程の歩み II (1960年代～2000年代)	
	第8回	教育内容 III ゆとり教育	
	第9回	中間まとめ(小テスト)	
	第10回	教育行政 I 学校教育制度	
	第11回	教育行政 II 教育を受ける権利	
	第12回	国際化と教育	
	第13回	宗教と教育	
	第14回	教育改革と現在	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回次回内容に関する課題を提示する。授業終了後は小レポートを提出してもらう。		
テキスト	特になし。		
参考文献	黒崎・大田編『学校をよりよく理解するための教育学』シリーズ、学事出版：江原・山崎編『基礎教育学』放送大学教育振興会、2007年ほか		
評価方法	試験：70% 中間まとめ：25% 平常点：5%		

教育学Ⅱ		前期 2 単位	2年
現代社会の変化と教育の課題		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を履修した者は、1. 教育社会学に関する基礎的な知識を獲得する、2. その知識を使用し、教育現象を社会的に説明する、3. ポスト工業化社会における教育問題について記述する、事ができるようになる。		
授業の概要	教育の社会的分析を通じて、現代社会における教育の諸問題について考える。内容的には教育学Ⅰよりも発展的になるため、教育と社会、経済の関係などに興味がないと履修は厳しい。講義では毎回スライドを使って講義し、ミニツ・ペーパーの提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	教育の発展と社会Ⅰ 近代国家と教育	
	第3回	教育の発展と社会Ⅱ 教育の社会的機能	
	第4回	階層と学歴	
	第5回	経済現象としての教育Ⅰ 人はなぜ学校へ行くのか	
	第6回	経済現象としての教育Ⅱ 社会的投資としての教育	
	第7回	カリキュラムと社会	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	教師はいかにして教育を行っているか	
	第10回	少年非行	
	第11回	学校の病理	
	第12回	多文化社会と教育	
	第13回	高等教育の社会学	
	第14回	教育改革の現在	
	第15回	前期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に該当テーマに関する文献を読むことが望ましい。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	天野他著『教育社会学』改訂版 放送大学教育振興会 1998年;金子・小林著 教育の政治経済学』 放送大学教育振興会 2000年など		
評価方法	試験:90% 平常点:10%		

世界の教育		後期 2 単位	2・3年
比較教育学を学ぶ		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	比較教育学とは「世界の国や文化圏における教育を、歴史的、現代的な視点から、比較し、また、それぞれのあいだのさまざまな関係や、国、文化圏における世界(地球)的な関係などを明らかにし、教育の本質的なあり方を究めようとする学問」である。本講義では様々な教育現象に対して比較教育的に考察するスキルを身につけてもらう。		
授業の概要	基本的に講義形式で行う。スライドを用いて行い、毎回ミニッツ・ペーパーの提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	日本の教育	
	第3回	アメリカの教育	
	第4回	イギリスの教育	
	第5回	韓国の教育	
	第6回	東南アジアの教育	
	第7回	中間まとめ 各国の教育制度から見えてくること	
	第8回	学力の国際比較Ⅰ PISA・TIMSSの結果より	
	第9回	学力の国際比較Ⅱ 各国の教育改革	
	第10回	いじめの国際比較Ⅰ いじめの定義 日本の現状	
	第11回	いじめの国際比較Ⅱ 英国・オランダ・ノルウェーとの比較	
	第12回	子育て支援の国際比較Ⅰ 日・米・英・韓・中の制度比較	
	第13回	子育て支援の国際比較Ⅱ 保育の質の国際比較	
	第14回	宗教教育の国際比較	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	次回に扱うテーマに関して文献を読むことが望ましい。授業終了後は小レポートを提出してもらう。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	試験あるいはレポート:90% 平常点:10%		

キリスト教と教育		前期 2 単位	2・3年
「魂の養育（はぐくみ）」としてのキリスト教幼児教育		野村 祐之（のむら ゆうし）	
授業の到達目標 及びテーマ	グローバルなスケールで既存の価値観の大転換が迫られている現代、教育の現場では人格を養い、魂を育む教育の必要性が切実に求められています。それはキリスト教教育の核心をなすものでもあります。偉大な教師イエス・キリストの「源像」を聖書にたずね、歴史を顧み、21世紀後半の世界を形づくることになる世代の子どもたちの「魂の育み」としてのキリスト教教育の現代的意義と方法論を幼児教育の現場を前提に具体的に考察します。		
授業の概要	基本的には講義あるいはプレゼンテーションで課題を提示し、ディスカッションで問題点を整理し、各自が自分なりの理解を得るようにします。この授業自体が豊かなイメージの提示をはじめ、「想像力と自由な発想をうながす創造的コミュニケーション」を「はぐくむ」時となることを願っています。		
授業計画	第1回	オリエンテーションと自己紹介。	
	第2回	復活祭（イースター）：カレンダーの日曜日はなぜ赤い	
	第3回	キリスト教の三大祝祭と降誕祭（クリスマス）	
	第4回	グレゴリオ暦＝教会暦とその一年間	
	第5回	聖書の歴史観とキリスト教：「B. C. / A. D.」	
	第6回	世界の三大宗教？ 三大世界宗教！	
	第7回	「エコ」の秘密：聖書の「世界観」と「平和」	
	第8回	聖書の「人間観」と「神の子たち」	
	第9回	「園」はパラダイス。フレーベルと「幼稚園」	
	第10回	聖母マリアとイエス。モンテッソーリと「聖母子」のイメージ。	
	第11回	イエスと子どもたち。（コミュニケーションをカギカッコでくる）	
	第12回	「教育」と「コミュニケーション」そして「コミュニティ」	
	第13回	「祈り」：神との「コミュニケーション」	
	第14回	「生命（いのち）」は「預かりもの」	
	第15回	「魂の育（はぐくみ）」としてのキリスト教教育	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の講義で自分なりに学習、獲得した内容を（疑問も含めて）復習整理し、翌週の授業開始時に提出してもらいます。		
テキスト	聖書（旧約、新約そろいのもの）は毎回必要。特定の教科書はありませんが、資料を配布あるいは指定します。		
参考文献	各回の主題に応じてプリントなどの資料を配布し、関連する参考資料等はそのつど紹介します。		
評価方法	ディスカッションへの積極的参与:30% レスポンスシート:30% レポート2回:40%		

幼児教育史		後期 2 単位	3年
歴史の中の子ども—教育と選抜		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受けた者は、1. 教育における選抜の歴史についての知識を獲得する、2. 現在の状況を歴史的観点、教育学的観点から説明する、事ができるようになる。		
授業の概要	「お受験」という言葉が定着して久しいが、そもそも教育システムは選抜機能を持っているからこそ社会システムの一部として発達したといえる。本講義ではそもそも教育がいかにして近代国家に取り込まれていったのか、そしてどのように選抜システムが日本社会で学歴社会を生み出したのかについて扱う。ゼミ形式のため、予習および発言を重視する。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	近代化と試験の時代	
	第3回	試験と選抜の伝統	
	第4回	教育と試験の制度化	
	第5回	小学校から中学校へ	
	第6回	高等教育と試験制度	
	第7回	資格試験制度の成立	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	官僚任用試験と学歴主義	
	第10回	帝国大学への道	
	第11回	受験の世界—一九〇〇年前後	
	第12回	試験と上昇移動の道	
	第13回	試験の近代・テストの現代	
	第14回	まとめ 1	
	第15回	まとめ 2	
準備学習 (予習・復習等)	A4一枚にこちらが指示したやり方でレポートを毎回作成してもらう。		
テキスト	『試験の社会史—近代日本の試験・教育・社会』 増補版、平凡社、2007年。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% レポートなど:30%		

保育原理 I		前期 2 単位	1年
乳幼児が育つということ、保育する（される）ということ		岸井 慶子（きしい けいこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	①子どもが育つ社会の現状や変化を知り、保育の意義について説明できる。 ②保育の歴史の変遷と現状、今後の課題について考え説明できる。 ③保育の基本原則について説明できる。		
授業の概要	この講義は、乳幼児が育つということ、保育する（される）ということについて考え、保育の本質や目的、基本原則などこれから保育者をめざす学生が理解しておくべき知識や考え方の修得を目指しています。講義が中心となりますが、視聴覚教材等も用いてできるだけ具体的に講義を進めて行くようにします。時にはグループで話し合ったりまとめたりする課題にも取り組んでいただきます。		
授業計画	第1回	保育の意義と目的	
	第2回	保育の基本・原理	
	第3回	子どもが育つさまざまな場、施設、制度 (予習課題：子どもが育つ場のレポート)	
	第4回	家庭・保育所・幼稚園における保育	
	第5回	保育内容と発達過程の理解（2，3歳児）	
	第6回	保育内容と発達過程の理解（4，5，6歳児）	
	第7回	環境を通して行う教育・保育	
	第8回	遊びを通して行う教育・保育	
	第9回	保育における「養護と教育」	
	第10回	保育における「個」と「集団」	
	第11回	保育思想と保育の歴史（ヨーロッパ）	
	第12回	保育思想と保育の歴史（日本、昭和以前）	
	第13回	保育思想と保育の歴史（日本、昭和以降現代まで）	
	第14回	保育と小学校教育（幼・保・小連携を考える）	
	第15回	保育の現状と課題	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業後に、学修内容を振り返り整理してください。 ・幼稚園教育要領解説、保育所保育指針解説の該当関連部分を事前に読んで授業に臨んでください。 ・新聞等のニュースで関連する内容をチェックし、ファイルしておいてください。 		
テキスト	『保育用語事典』（ミネルヴァ書房）『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館）、『保育所保育指針解説』（フレーベル館）		
参考文献	授業の中で適宜紹介します。		
評価方法	ミニテスト：20% 毎回授業振り返り提出：40% 課題提出（1回）：40%		

保育原理Ⅱ		後期 2 単位	1年
保育原理Ⅱ		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「乳幼児の変化と保育の公共性」をテーマとする本講義の到達目標は、保育の理念・歴史・思想の基本的な推移を理解し、保育に関する社会的・制度的・経営的事項をめぐる現代的課題について考察することである。		
授業の概要	前期の「保育原理Ⅰ」を踏まえ、講義の前半では乳幼児の成長・発達や保育の様子を実践記録にもとづいて検討し、保育の理念・歴史・思想の理解を深める。後半では「構造改革」のなかで大きく変化している保育の実態を主に社会的・制度的・経営的側面から分析する。最後に保育の公共性の現代的意義について考える。		
授業計画	第1回	講義のねらい・内容・進め方などの説明	
	第2回	近代欧米社会と保育	
	第3回	現代欧米社会と保育	
	第4回	戦前日本社会と保育	
	第5回	戦後日本社会と保育	
	第6回	乳児保育の変遷	
	第7回	幼児保育の変遷	
	第8回	中間まとめと小レポート	
	第9回	保育施設の性格と特徴	
	第10回	戦後日本の保育行政の変遷	
	第11回	現代日本の保育行政・経営の課題	
	第12回	乳児期の保育実践の特徴と課題	
	第13回	幼児前半期の保育実践の特徴と課題	
	第14回	幼児後半期の保育実践の特徴と課題	
	第15回	後半と全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前期の「保育原理Ⅰ」の内容をよく振り返っておく。		
テキスト	講義中で配布する資料など		
参考文献	講義中に提示		
評価方法	小レポート:30% 試験:70%		

保育者論		前期 2 単位	2年
よりよい保育者とは		荘司 紀子（しょうじ のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	①「保育者とは何か」について、仕事、資格・免許、社会的役割など、基礎的知識を理解する。 ②「保育者の専門性」について、よりよい保育者のあり方や、保育者の専門性や人間性などを考察し、自分自身の見解をもつことができる。 ③「保育者の成長と課題」について、自ら目指す保育者像を描き、それに基づく具体的な課題を設定することができる。		
授業の概要	保育者とは、子どもや家族のもっとも身近な存在であり、子どもの成長を支え、子どもの最善の利益を守る専門家である。この講義では、保育者にはどのような専門性が求められているのかを制度や法令、具体的な保育の実際から知るとともに、保育者として身につけておかなければならない必要な事柄について学ぶ。幼稚園実習や保育所実習などを念頭において行う。		
授業計画	第1回	保育者を目指すということ：自分が保育職を選んだ理由	
	第2回	保育者とは何か(1)：保育職の意義と使命、倫理（教職の意義）	
	第3回	保育者とは何か(2)：幼稚園教諭の仕事と役割（職務内容、服務、役割）	
	第4回	保育者とは何か(3)：保育士の仕事と役割（職務内容、服務、役割）	
	第5回	保育者とは何か(4)：幼稚園・保育所・認定こども園での一日	
	第6回	保育者の専門性とは(1)：子ども理解の専門性	
	第7回	保育者の専門性とは(2)：保育実践の専門性	
	第8回	保育者の専門性とは(3)：保育計画・振り返りの専門性	
	第9回	保育者の専門性とは(4)：保護者と向き合う専門性	
	第10回	保育者のネットワークと研修(1)：専門性の向上のための研修	
	第11回	保育者のネットワークと研修(2)：保育者同士の協働、地域や専門機関との連携	
	第12回	子どもや保育者を守る権利と支援：子どもの権利条約、保育者の職業生活（労働環境、身分保障）	
	第13回	保育者に求められる人間性、資質	
	第14回	保育者の成長と課題：自己の適性について、進路選択について	
	第15回	まとめ よりよい保育者になるために	
準備学習 (予習・復習等)	幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領に目を通しておくこと。 自分が保育職を選んだ理由、理想とする保育者像について、考えをまとめておくこと。		
テキスト	浅見均・田中正浩編著 『幼稚園教諭・保育士のための現代保育者論』大学図書出版 2011		
参考文献	『幼稚園教育要領』フレーベル館 『保育所保育指針』フレーベル館 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館 その他、授業内で適宜紹介する		
評価方法	授業への参加態度:20% 課題提出状況:20% 試験:60%		

保育課程論		後期 2 単位	1年
幼稚園教育課程、保育所保育課程の理解と実践		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標及びテーマ	①教育課程・保育課程の編成と指導計画の作成についてその原理を理解する。 ②実態把握、計画、実践、省察と評価、改善の関係を具体的に理解し説明できる。 ③簡単な部分実習指導案が作成できる。		
授業の概要	主に幼稚園教育における教育課程について理解を深めますが、保育所における保育課程もとりあげます。教育課程と指導計画の作成、環境構成と援助、幼児理解と保育者の役割、指導要録等の記録と評価・改善等について理解を深めます。この授業は1年次後期に実施される幼稚園教育実習を念頭に行います。講義に加え課題作業によって実践のための基礎力を養います。		
授業計画	第1回	保育における「計画」の意義とさまざまな計画	
	第2回	教育・保育課程と指導計画、週日案の関係、それぞれの枠組み	
	第3回	指導案の作成と検討 (1) 部分実習指導案の考え方と組み立て	
	第4回	指導案の作成と検討 (2) 部分実習指導案の作成	
	第5回	指導案の作成と検討 (3) 部分実習指導案の作成	
	第6回	指導案の作成と検討 (4) 部分実習指導案の作成とまとめ	
	第7回	教育・保育課程の編成における基本的考え方	
	第8回	長期指導計画の作成と留意点	
	第9回	短期指導計画の作成と留意点	
	第10回	保育の省察と保育記録	
	第11回	実態把握と指導の計画 (事例検討)	
	第12回	評価と計画の改善、再編成	
	第13回	幼稚園・保育所における自己評価・第三者評価	
	第14回	保育記録・幼稚園指導要録・保育所児童保育要録	
	第15回	省察と保育の質の向上、保育者の成長	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業後に行う振り返りで、学修内容を整理してください。 ・部分実習指導案を作成、修正し、提出してください。 		
テキスト	『保育課程・教育課程総論』（ミネルヴァ書房）『幼稚園教育要領解説』（フレーベル館）『保育所保育指針解説』（フレーベル館）		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	ミニテスト：60% 指導案作成（提出）：40%		

子どもと環境		前期 2 単位	1年
子どもにとっての環境とは		荘司 紀子（しょうじ のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○人間形成の基礎を築く幼児期において子どもがかかわる環境の意義を理解する。 ○子どもが自ら周囲の環境にかかわりながら発達に必要な経験を獲得しようとする心情や、意欲や、態度を育む環境について学ぶ。 ○保育者の環境への配慮や援助のあり方について理解する。 ○子どもの活動を支え一人一人の望ましい発達を促すための環境構成のあり方について 考察することができる。</p>		
授業の概要	<p>子どもが遊びを通して主体的に活動しながら、自然、ものや道具、文字や標識、遊びや生活の情報などとかかわり、様々な力が育つ望ましい保育や環境構成のあり方を考えるために、保育の現場における具体的な子どもの活動事例を取り上げながら学習する。</p>		
授業計画	第1回	保育の基本と保育内容「環境」 保育内容「環境」のねらいと内容	
	第2回	子どもの育ちと領域「環境」 子どもの発達と環境 保育環境の重要性	
	第3回	身近な自然と子ども① 自然の美しさや不思議さに触れる センス・オブ・ワンダー	
	第4回	身近な自然と子ども② 動植物に親しみをもって接し、命を大切に	
	第5回	身近な自然と子ども③ 季節の変化に気づく 自然を遊びや生活に取り入れる	
	第6回	身近な自然や子ども④ 自然探検をする フィールドワーク	
	第7回	身近なものや道具と子ども① 道具を使って遊ぶ 身近なものを使い工夫する	
	第8回	身近なものや道具と子ども② ものの性質や仕組みに気づく アフォーダンス理論	
	第9回	数・形・文字と子ども① 生活の中の数量・図形との出会い 数える・量をはかる・図形に親しむ	
	第10回	数・形・文字と子ども② 生活の中の文字・標識との出会い 文字を読む・書く・標識に親しむ	
	第11回	身近な地域の施設・行事と子ども① 身近な情報や出来事に興味をもち、遊びに取り入れる	
	第12回	身近な地域の施設・行事と子ども② 遊びと日本の文化	
	第13回	保育内容「環境」の課題と展望 現代社会における子どもと環境	
	第14回	様々な保育の展開から学ぶ 諸外国の保育環境・保育事情	
	第15回	地球環境の課題 持続可能な社会の実現に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	<p>自分の周囲にある自然をよく観察し、自然の変化に敏感になること。環境に対する子どもの興味、関心がどのような点にあるのかを考えてみる。新聞やニュースなどを見聞し、今、子どもたちがどのような環境に置かれているのか、問題意識をもって授業に臨むこと。</p>		
テキスト	<p>浅見 均編著 『子どもの育ちを支える 子どもと環境』大学図書出版</p>		
参考文献	<p>授業内で適宜紹介する</p>		
評価方法	<p>授業への参加態度:20% 課題提出状況:20% 試験:60%</p>		

子どもと人間関係		後期 2 単位	1年
保育における人間関係の探究		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「幼稚園教育要領」及び「保育所保育指針」における領域「人間関係」の目指す内容を具体例を通して理解する。 ○ 乳幼児期の人間関係の発達について理解する。 ○ 保育者として乳幼児にどうかかわることが望ましいのかを理解する。 		
授業の概要	<p>教育要領、保育指針における教育の基本を把握し、領域「人間関係」のねらいや、内容について、具体的な事例や映像を交えて考えていく。その際、人間関係の発達についても概観する。さらには、保育者同士の人間関係の重要性、保育者と保護者の人間関係の重要性についても学んでいく。</p>		
授業計画	第1回	はじめに 保育の基本とは何か	
	第2回	幼稚園教育要領、保育所保育指針の領域「人間関係」とは	
	第3回	子どもの人間関係を支える保育者の役割	
	第4回	乳幼児期の発達と領域「人間関係」	
	第5回	子どもの言葉と人間関係	
	第6回	子どもの遊びと人間関係	
	第7回	個と集団の育ち（集団化へのプロセス）	
	第8回	子どもの生活と人間関係	
	第9回	子どもの活動と人間関係	
	第10回	園行事と人間関係	
	第11回	地域とのかかわり他	
	第12回	小学校との連携	
	第13回	保育者同士の人間関係	
	第14回	保護者との人間関係	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容に対応した教科書部分を読み、関連資料などを調べておくこと。毎授業後には授業内容関連レポートを提出すること。</p>		
テキスト	浅見均 編著 『子どもと人間関係』 大学図書出版 2013年(改訂版)		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領解説』		
評価方法	授業への参加態度:10% 授業感想文:20% 試験:70%		

子どもと言葉		後期 2 単位	2年
子どもの豊かな言葉を育む保育の在り方を学び合う		生沼 晴美（おいぬま はるみ）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの言葉に注目し、深い関心をもつ ・子どもの言葉の育つ道筋と、言葉の育ちに関わる環境について理解する ・領域「言葉」のねらいや内容について理解する ・子どもの言葉を育む保育について学ぶ ・保育を豊かにする言語教材について学ぶ 		
授業の概要	乳幼児のことばに深い関心をもち、特に幼児のことばの発達過程や豊かなことばを育むための保育の在り方について、理論と実践事例を通して、また、グループでの話し合いや体験を通して学びを進めます。（授業内容は予定であり、多少の変更が生じる場合があります。）		
授業計画	第1回	イントロダクション 言葉とは？	
	第2回	子どもの言葉と援助、指導の変遷	
	第3回	『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』における言葉の捉え方	
	第4回	領域「言葉」のねらいと内容	
	第5回	言葉の育つ道筋（1）乳児期の言葉	
	第6回	言葉の育つ道筋（2）幼児期の言葉	
	第7回	言葉を育てる人的環境	
	第8回	言葉を育てる文化的環境	
	第9回	子どもの言葉を育む教材を知る（1）絵本など	
	第10回	子どもの言葉を育む教材を知る（2）遊具など	
	第11回	幼稚園や保育所での言葉の生活（1）環境と関わりながら	
	第12回	幼稚園や保育所での言葉の生活（2）遊びや生活の中で	
	第13回	言葉の楽しみ（絵本や素話などを通して体験する）	
	第14回	保育者の言葉と家庭連携、社会との関わり	
	第15回	まとめ 豊かな言葉を育む保育の実践とは	
準備学習 (予習・復習等)	日頃から自分自身の言葉を豊かにしよう心がけること 日常生活の中で子どもの言葉や親子の会話などに関心をもつこと 授業での課題準備（必要のある場合に提示します）		
テキスト	未定 *他に必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	文部科学省『幼稚園教育要領』 厚生労働省『保育所保育指針』 倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』 倉橋惣三著 フレーベル館 *その他、授業の中で随時紹介します		
評価方法	授業内レポート:30% 個人・グループ発表:20% 最終課題レポート:50%		

子どもと言葉	後期 2 単位	2年
<p>子どもの育ちにおける言葉について、保育の場をはじめ生活全般における言葉の多様性への理解を深める</p>	<p>森 眞理（もり まり）</p>	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子ども(乳幼児)の言葉の育つ道筋を理解する ・子どもの言葉の発達に影響する環境について理解する ・領域「言葉」の捉え方とその内容について理解する <p>【授業の概要】</p> <p>子どもの育ちにおける言葉について、①子どもの言葉の発達理論と保育内容「言葉」の理解を土台に、②子どもの生活(遊びと学び)にて繰り広げられる言葉の世界を探究する。さらに、③子どもの言葉の育ちの環境としての絵本やずばなしをはじめとする児童文化や④おとなの言葉の生活についても考える。</p> <p>【授業計画】</p> <p>第1回 インTRODクシヨン・言葉との出会い・「私」の言葉考察 第2回 「言葉」と子どもの育ち ①乳児期 第3回 「言葉」と子どもの育ち ②幼児期3～4歳児 第4回 「言葉」と子どもの育ち ③幼児期4～5歳児 第5回 「言葉」をめぐる課題 ①日本の国際化とバイリンガル 第6回 領域「言葉」：「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「認定こども園保育要領」と子どもの言葉 第7回 「言葉」と環境：ヒト・モノ・コトとの関係 第8回 「言葉」と環境：文化・諸外国との関係：レヅジョ・エミリア市の乳幼児教育との対話 第9回 「言葉」と児童文化財：①児童文化財の意味と意義 第10回 「言葉」と児童文化財：②児童文化財の種類と内容・グループ活動へ 第11回 「言葉」と児童文化財：③グループ活動 第12回 「言葉」と児童文化財：④グループ活動の分かち合い 第13回 「言葉」をめぐる課題 ②特別な権利(ニーズ)を持つ子ども 第14回 「言葉」をめぐる課題 ③現代の課題：幼保小連携・関係性 第15回 まとめとふりかえり・展望</p> <p>【準備学習(予習・復習等)】</p> <p>予習：授業時に出された課題について事前に学習し出席すること。 復習：授業で示された文献・研究論文・児童文化財・視聴覚教材について調べ、学ぶこと。</p> <p>【テキスト】</p> <p>授業にてプリントを配布する</p> <p>【参考文献】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小田豊・芦田宏共編『保育内容 言葉』北大路書房 2011年 ・『保育所保育指針』『幼稚園教育要領』、その他、授業にて提示・紹介。 <p>【評価方法】</p> <p>授業参加態度：40% (毎授業のふりかえり・グループ活動も配点対象となります) 期末試験：60% (テキストや授業時配布のプリントの持ち込み不可。担当教員配布のまとめ用紙(後日配布)の持ち込みは可)</p>		

子どもと表現		後期 2 単位	3年
保育実践における表現（総合的芸術表現）の在り方。		吉仲 淳（よしなか あつし）	
授業の到達目標及びテーマ	「保育は芸術なり」とも言われるが、子どもの日常そのものが芸術として捉えることができる。その子どもの生きる環境において幾重にもなった関係の中で繰り広げられる表現そのものが子どもの存在観やその宇宙を形成する。本講座では、人間としてまた保育する立場としてこれらの事柄を探索し、本来持つ根源的欲求としての表現の在り方を見つめなおす。		
授業の概要	テーマにしたがって保育実践でのエピソードなどを用いて進める。各単元での意見や考察を振り返りとして小レポートを提出する。なお保育だけに偏ることなく、今日の芸術表現にも焦点を当て、表現本来の意義を探る。講義形式で進められるが、「表現」という領域をテーマとするため、演習的な要素も導入し、表現世界を体感する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 他	
	第2回	子どもの世界と表現	
	第3回	環境と音 その表現1：秋の歌	
	第4回	環境と音 その表現2：サウンドスケープ	
	第5回	芸術表現とその教育	
	第6回	海外の表現教育について	
	第7回	芸術表現と身体の知：音からのアプローチ	
	第8回	芸術表現と身体の知：絵本を用いて	
	第9回	演習 1（制作）	
	第10回	演習 2（発表）	
	第11回	文化とその表現	
	第12回	文化とその表現 プレゼンテーション1	
	第13回	文化とその表現 プレゼンテーション2	
	第14回	まとめ	
	第15回	ディスカッション：課題レポートをもとに	
準備学習 (予習・復習等)	この授業での主なキーワードは「子ども」「音」「表現」「環境」「身体（からだ）」である。これらの事柄について、自分なりに定義づけておくこと。事前にテキストに目を通し、表現という領域の幅広さ、奥深さを感じ取っておくこと。		
テキスト	『子どもと表現』浅見均編著（日本文教出版）		
参考文献	授業時間内で紹介する。		
評価方法	レポート課題：40% コメント等の提出物：30% 取り組みや発言など：30%		

保育方法研究		後期 2 単位	2年
幼児期における保育方法の探究		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 保育方法の基本として、乳幼児の特性、保育の原理、方法などについて理解する。 ○ 様々な主義や保育形態について理解し、保育の中でどう生かしていくことが望ましいのかということについて理解する。 		
授業の概要	保育の方法について、主義、形態、環境等、様々な観点からその在り方を探る。授業展開としては、授業内講演者を招いたり、映像を見たりしながら具体的に考えていくことにより、幼児にふさわしい保育の方法のあり方について理解を深めることを中心とする。尚、保育実践者を招いて話を伺う予定である。		
授業計画	第1回	保育方法研究の意義	
	第2回	保育方法の基本	
	第3回	様々な主義に基づく保育 （1）キリスト教保育など	
	第4回	様々な主義に基づく保育 （2）モンテッソーリメソッド	
	第5回	様々な保育形態による保育 （1） 自由保育形態と一斉保育形態	
	第6回	様々な保育形態による保育 （2） 森の幼稚園など	
	第7回	様々な保育の方法 ティーム保育・統合保育など	
	第8回	保育方法と保育環境（1） レッジオエミリア市の保育に学ぶ	
	第9回	保育方法と保育環境（2） 森の幼稚園に学ぶ	
	第10回	保育における情報機器及び教材の活用	
	第11回	保育方法とカリキュラム	
	第12回	保育方法と保育記録	
	第13回	保育方法と園行事	
	第14回	新しい保育のあり方を目指して	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容に対応した教科書部分を読み、関連資料などを調べておくこと。毎授業後には授業内容関連レポートを提出すること。		
テキスト	浅見均・田中正浩 編著『保育方法の探究』 大学図書出版 2009		
参考文献	授業の中で指示		
評価方法	授業への参加態度:20% ミニレポート:10% 試験:70%		

保育内容総論		前期 2 単位	3年
保育内容について多様な視点から理解を深め、保育内容を創意工夫する		阿部 真美子 (あべ まみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	①保育内容について総合的に理解をする(レポート、プレゼンテーションで評価) ②保育内容を創意工夫することに関心を持つ(レポート、プレゼンテーションで評価) ③グループによる作業(ディスカッション、意見をまとめる、発表する)に積極的に参加する		
授業の概要	幼稚園教育、保育所保育の基本、子どもの発達、個と集団のバランス、環境を通して行う保育、遊びによる総合的な保育、乳児保育、長時間保育、多文化共生の保育などの視点から、保育内容について考え理解を深め、保育内容を創意工夫することへの関心を持つ		
授業計画	第1回	オリエンテーション(授業の進め方、評価の観点の説明。グループ分けとグループ毎の分担、その他)	
	第2回	テーマ; 保育内容と保育の基本—幼稚園教育要領と保育所保育指針	
	第3回	テーマ; 保育内容の歴史の変遷	
	第4回	テーマ; 子どもの発達の特性と保育内容	
	第5回	テーマ; 個と集団の発達と保育内容	
	第6回	テーマ; 保育における観察と記録	
	第7回	テーマ; 養護と教育が一体的に展開する保育	
	第8回	テーマ; 環境を通して行う保育	
	第9回	テーマ; 遊びによる総合的な保育	
	第10回	テーマ; 生活や発達の連続性に考慮した保育	
	第11回	テーマ; 家庭・地域・小学校との連携を踏まえた保育	
	第12回	テーマ; 乳児保育	
	第13回	テーマ; 長時間保育と保育の現代的な課題	
	第14回	テーマ; 特別な支援を必要とする子どもの保育	
	第15回	テーマ; 多文化共生の保育、いのちを大切にすることをはぐくむ保育	
準備学習(予習・復習等)	他グループからの質問や意見について次回までに調べる		
テキスト	鈴木昌世編『子どもの心によりそう保育内容総論』(福村出版)		
参考文献	授業内で随時紹介します		
評価方法	ミニ・レポート:30% グループの参加、発表:20% まとめのレポート:50%		

保育内容総論		後期 2 単位	3年
子どもの育ちと保育内容のかかわりを考える		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標及びテーマ	①幼稚園教育要領、保育所保育指針等に示されている保育の基本、領域の考え方を理解する。 ②保育内容の歴史の変遷を学び、保育内容と子ども観、社会の変化との関係を理解する。 ③多様な保育実践の展開例を知り、その特徴や課題について理解する。		
授業の概要	これまでの学修を土台にして、保育内容をさまざまな視点から考えてみましょう。具体的には、意見を出し合い考え合う方法を多く取り入れてすすめます。		
授業計画	第1回	子ども理解と保育内容	
	第2回	5領域と総合的指導、領域のなりたち、遊びの意義と保育内容	
	第3回	遊びの記録と読み取り	
	第4回	保育内容の歴史の変遷	
	第5回	幼稚園・保育所の一日と保育内容	
	第6回	0-2歳児の生活と保育内容	
	第7回	3歳児の園生活と保育内容	
	第8回	4、5歳児の園生活と保育内容	
	第9回	こども園の生活と保育内容	
	第10回	規範意識の芽生え、自己抑制と保育内容	
	第11回	感性の育ち、表現の多様性と保育内容（レジヨ・エミリア・アプローチなど）	
	第12回	知的な育ちと保育内容（科学する心など）	
	第13回	保育の多様な取り組みの現状と課題（グループ発表）6グループ	
	第14回	保育の多様な取り組みの現状と課題（グループ発表）6グループ	
	第15回	まとめと講評	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・準備学習については各授業の前に告知するので、テキストを読む、まとめるなどしておくこと。 ・グループ発表は事前に発表内容のレジュメを作成し、パワーポイントなどを準備すること。 		
テキスト	幼稚園教育要領解説（文部科学省、フレーベル館）、保育所保育指針解説（厚生労働省、フレーベル館）		
参考文献	授業内で紹介します。		
評価方法	レポート:60% グループ課題発表:40%		

保育・教職実践演習（幼稚園）	後期 2 単位	3年
<p>教養豊かで魅力あふれる大人としての保育者を目指して</p>		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 幼児の傍らに寄り添う大人としての保育者はどうあるべきかについて、様々な視点より考え、討論し、子どもにとって魅力的な存在とはどのようなものかについて気付いていく（保育者として最小限必要な資質、能力の確認）。</p> <p><授業の概要> 当該科目の意義を自覚し、保育職の意義、保育者の役割、人間関係構築、幼児理解、保育内容の検討、クラス経営などについて、教職担当教員、教科に関する科目担当教員、幼稚園現職教員、保育士科目担当教員などが協力して教養及び感性豊かで魅力ある保育者に向けて授業展開をしていく。</p> <p><授業計画> 第1回 オリエンテーション（演習の目的、計画等）（岸井） 第2回 乳幼児と音楽表現 講義・討議・レポート（小泉） 第3回 乳幼児の豊かな言語生活 講義・討議・レポート（さくま） 第4回 乳幼児の豊かな造形表現 講義と討議・レポート（久保） 第5回 乳幼児の豊かな身体表現 講義・討議・レポート（渡部） 第6回 幼児教育で大切にしたいこと パネルディスカッション・レポート（浅見、岸井・荘司・上村） 第7回 実践を通して学んだこと（1）ロールプレイ・討議・発表に向けて準備（各グループ） 第8回 実践を通して学んだこと（2）発表・レポート（浅見・岸井・荘司・上村） 第9回 保育で大切にしたいこと 講義・討議・レポート（村知） 第10回 幼児期における豊かな身体表現 講義・討議・レポート（渡部） 第11回 社会福祉の諸課題と保育 講義・討議・レポート（杉田） 第12回 児童福祉の諸課題と保育 講義・討議・レポート（横堀） 第13回 保育者になるということ1（災害から子どもの命を守る保育者 DVD視聴）（浅見、岸井・荘司・上村） 第14回 保育者になるということ2（保育の現場から 保育者との関係ほか）（和田） 第15回 まとめ 合同</p> <p><テキスト>特に指定しない <参考文献>必要に応じて適宜示す</p>		

メディアと子ども		前期 2 単位	2・3年
子どもとメディアのよりよい関係		向田 久美子（むかいだ くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代の子どもは、生後すぐからテレビやスマートフォン、ゲーム、DVD、PCなどの電子メディアに囲まれて育つ。これらのメディアは子どもの知的・情緒的・社会的発達にどのような影響を及ぼすのだろうか。また、子どもの発達を支える大人として、私たちに何ができるのだろうか。これらの点について、最新の研究成果や事例を基に、また実際に映像を視聴しながら理解を深める。		
授業の概要	毎回資料を配布し、エビデンス（データ）に基づいて、メディアのさまざまな影響力について概説する。また、関連する映像の視聴を通して、メディアの制作技法やその効果について説明する。ディスカッションやリアクション・ペーパーを通して、なるべく双方向的な形で授業を進めていきたい。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	メディア視聴の実態：乳幼児期	
	第3回	メディア視聴の実態：児童期	
	第4回	子どもがメディアに引きつけられる理由	
	第5回	メディアの影響を研究する方法	
	第6回	メディアと認知能力	
	第7回	メディアと暴力（1）短期的影響	
	第8回	メディアと暴力（2）長期的影響	
	第9回	メディアと不安心理	
	第10回	メディアと社会性	
	第11回	メディアとジェンダー	
	第12回	メディアと身体イメージ	
	第13回	メディアと健康	
	第14回	メディアとの付き合い方（1）レーティング	
	第15回	メディアとの付き合い方（2）メディア・リテラシー	
準備学習 (予習・復習等)	授業後に配布資料やノートを見直し、学んだ内容を確認しておくこと。次の授業の開始時に、何を学んだか答えられるようにしておくこと。		
テキスト	特に指定しない。資料を適宜配布する。		
参考文献	『メディアと人間の発達』（坂元章編，学文社）		
評価方法	レポート：55% 授業感想文：45%		

教育心理学 I		前期 2 単位	1年
人々との関係のなかで育つころ		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	乳幼児の心身の発達と学習について、“教え育てるー学び育つ”という関係性に注目して学ぶ。講義を通して、さまざまな人々との関係のなかで乳幼児の心身が育まれていくことを理解する。障害をもつ乳幼児の心身の発達についても同様に学び、“障害”や“遅れ”といった概念のとらえ方を考えるとともに、個々の発達障害についても具体的に理解する。		
授業の概要	講義形式で行う。まず生涯発達および関係性の観点から発達と学習をとらえ、続いて乳幼児期の人間関係がどのように形成されていくかについて明らかにする。障害に関しては、まず“障害”をどうとらえるかについて、自身の障害観を振り返りながら考えていく。具体的な子どものイメージを膨らませながら理解できるように事例を多くを用いる。		
授業計画	第1回	心理学とは、教育心理学とは	
	第2回	発達とは～生涯発達の観点から	
	第3回	生涯発達における乳幼児期	
	第4回	学習とは～関係性のなかでの学ぶ	
	第5回	関係の中で育つ（1）胎児期	
	第6回	関係の中で育つ（2）新生児期	
	第7回	関係の中で育つ（3）信頼関係の形成	
	第8回	関係の中で育つ（4）自我の芽生え	
	第9回	関係のなかで育つ（5）集団生活のはじまり	
	第10回	関係のなかで育つ（6）仲間とのかかわり	
	第11回	発達のつまづき（1）障害とは、発達の遅れとは	
	第12回	発達のつまづき（2）発達障害～自閉症スペクトラム	
	第13回	発達のつまづき（3）発達障害～ADHD、LD	
	第14回	発達のつまづき（5）障害をもつ子どもを育てること	
	第15回	まとめ：関係のなかで育つということ	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリアクションペーパーを提出する		
テキスト	岡本依子・菅野幸恵・塚田-城みちる「エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学」「エピソードで学ぶ赤ちゃんの発達と子育て」 新曜社		
参考文献	未定（授業内で随時紹介）		
評価方法	定期試験:80% 課題等の提出状況:20%		

教育心理学Ⅱ		後期 2 単位	1年
ひとりの子どもの育ちから子どもの発達を知る・考える		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	教科書に描かれる子どもの発達は、抽象的で一般的な子どもの姿である。しかし私たちが実際に会うのは、それぞれの”いま”を生きる、一人ひとりの具体的で特定の子どもの姿である。この授業ではある子どもの誕生から小学校入学前までを記録したテキストをてがかりにして、子どもが育つ／子どもを育てるということはどのようなことか理解する。		
授業の概要	テキストを順に読み進める。各自があらかじめテキストの指定された箇所を読み授業に臨む。毎回の授業ではテキストの内容について担当者が補足説明を行い、その後それぞれがテキストについて感じたこと、考えたことを発表する。授業でのディスカッションをふまえ、毎回最後にリアクションペーパーを提出する。		
授業 計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	具体的な子どもの姿から見えてくること	
	第3回	誕生、家族になること	
	第4回	1歳前半：ものやひととかかわる	
	第5回	1歳後半：“わたし”の芽生え	
	第6回	2歳前半：個性	
	第7回	2歳後半：自己主張の始まり、きょうだいの誕生	
	第8回	3歳前半：保育園に行くこと	
	第9回	3歳後半：知性のはじまり	
	第10回	4歳前半：競争心の芽生え	
	第11回	4歳後半：夢と死	
	第12回	5歳前半：友だち	
	第13回	5歳後半：家族	
	第14回	6歳：就学	
	第15回	まとめとふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	各自があらかじめテキストの指定された箇所を読み、投げかけられた問いに対する自分の考えをまとめて授業に臨む。毎授業後にリアクションペーパーを提出する。		
テキスト	矢野喜夫・矢野のり子「子どもの自然誌」ミネルヴァ書房		
参考文献	未定。授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への取り組み:50% 期末レポート:50%		

発達心理学 I		前期 2 単位	2年
子どもの生活世界の探究		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	乳幼児期の心身の発達および学習のプロセスについて、認知、感情、言葉、の各側面から学ぶ。授業を通して、乳幼児の認知、感情、言葉がどのようなプロセスを経て育まれるのかについて理解するとともにその世界への興味を深めていくことを目標とする。その上で、発達しつつある乳幼児を支えるおとなのかかわりについて理解を深めていく。		
授業の概要	演習形式で行う。毎回トピックに関わる事例を紹介し、具体的な保育場面での子どもの姿を通して子どもの生活世界についての理解を深める。認知に関しては他者視点の獲得のプロセスと幼児期独特の子どもの内的世界のありようを、感情に関しては表出と理解の双方について、言葉に関しては前言語期から会話が成立するまでのプロセスについて取り上げる。		
授業 計画	第1回	発達とは～年齢のなぞ	
	第2回	他者の心の理解（1）三項関係の成立	
	第3回	他者の心の理解（2）他者視点の獲得	
	第4回	想像力の発達	
	第5回	子どものうそ	
	第6回	子どもの記憶	
	第7回	時間概念の発達	
	第8回	感情の発達	
	第9回	感情の理解	
	第10回	言葉の発達（1）前言語期	
	第11回	言葉の発達（2）語彙の獲得	
	第12回	言葉の発達（3）会話の成立	
	第13回	言葉の発達（4）読み書きことばの獲得	
	第14回	言葉の発達（5）障害と言葉	
	第15回	まとめ：乳幼児の発達とおとなのかかわり	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリアクションペーパーを提出する		
テキスト	岡本依子・菅野幸恵・塚田-城みちる 「エピソードで学ぶ乳幼児の発達心理学」「エピソードで学ぶ赤ちゃんの発達と子育て」 新曜社		
参考文献	未定（授業内で随時紹介）		
評価方法	定期試験:60% 課題等の提出状況:20% 授業への取り組み方:20%		

発達心理学Ⅱ		後期 2 単位	2年
大人になるということ		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>”大人になる”とはどのようなことか。そもそも”大人”とは何か。”子ども”と”大人”の違いは？大人は”なる”ものなのか。”なる”ものだとしたら、自然に”なる”のか、なろうとして”なる”のか。大人に”なれない””ならない”ことはあるのか。今の私は”大人”なのか、”子ども”なのか。</p> <p>”大人になること”にかかわる問いは尽きない。この授業では”大人になること”にかかわる資料（文献および映像）を共通の素材としながら、ディスカッションを行い、受講者一人ひとりが”大人になること”について考え、そのイメージを豊かにすることを目標とする。</p>		
授業の概要	<p>演習形式で進める。まずはじめに、各自の”大人になること”のイメージを共有する。そのうえで指定されたテキストを読んだり、映像を観たりしてディスカッションを行う。授業の後半ではグループワークを通して”大人になること”について考えていく。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	大人になることとは～イメージの共有	
	第3回	学校と大人になること	
	第4回	家族と大人になること	
	第5回	働くことと大人になること	
	第6回	女にとって大人になること	
	第7回	男にとって大人になること	
	第8回	メディアと大人になること	
	第9回	サブカルチャーと大人になること	
	第10回	法律の視点から見た子どもと大人	
	第11回	お金と大人	
	第12回	グループワーク①	
	第13回	グループワーク②	
	第14回	発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回指定されたテキストを事前に読む		
テキスト	苅谷剛彦編『いまこの国で大人になるということ』紀伊國屋書店ほか		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	授業への取り組み方:50% レポート:50%		

生涯発達心理学		前期 2 単位	3年
親の発達心理学		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	親になることは人の生涯発達において重要な出来事の一つである。ただ生物学的に親になれば自動的に心理学的にも親になるわけではない。親としての振る舞いは一度身につければ済むものでもなく、親になるプロセスは一生続く。またそのプロセスは一筋縄ではいかず、予期せぬことに会うこともある。それは親になるプロセスが、子どもや周囲との関わりの中で進行するものだからである。 以上のことをふまえ、この授業では”親になるプロセス”を理解するとともに、”親になること”にかかわるさまざまな問題について理解していくことを目標とする。		
授業の概要	毎回「親の発達心理学」にかかわるテーマについて学ぶ。まず親になるプロセスはどのようなものであるかを学び、歴史的な観点から子育てをとらえる。さらに”親になること”にかかわるさまざまな現代の問題について取り上げる。毎回のテーマにかかわるテキストを読んでから授業に臨む。テーマにかかわる映像資料も積極的に取り入れる。授業では問題を共有したうえで、それぞれが感じ考えたことについて意見を交わす。積極的な参加を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション～親になるということ	
	第2回	子育ての担い手の歴史的変遷～誰が子育てをしてきたのか	
	第3回	今の子育てと昔の子育て	
	第4回	育児ノイローゼ、育児不安	
	第5回	モンスターペアレント	
	第6回	性役割と子育て①母性は本能か	
	第7回	性役割と子育て②”イクメン”について考える	
	第8回	不妊という経験	
	第9回	人工妊娠中絶という経験	
	第10回	子どもの死と向き合う	
	第11回	障がいをもつ子どもの親となること	
	第12回	血のつながらない子どもを育てるということ	
	第13回	障がい者が親になるということ	
	第14回	同性カップルの子育て	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめテキストの指定された箇所を読んで授業に臨む		
テキスト	授業内で適宜指定する。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:50% レポート:50%		

児童臨床心理学		前期 2 単位	3年 子ども学科
発達臨床の視座から子どもを理解する		太田 祐貴子（おおた ゆきこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	1. 臨床的に子どもの成長を捉える視点を理解する。 2. 子どもの成長に与える他者との関係性の意味を理解する。 3. 子どもへの心理臨床的かかわりを学ぶ。		
授業の概要	子どもは他者とのかかわりにおけるやりとりを通じて、成長していく。その背景となる理論や、子どもの自己の成長過程を学ぶ。また、親子の愛着形成など、親子関係について学ぶ。 一方、人生初期の段階で、子どもの心の成長が損なわれたり、停滞することもある。その場合には、どのような心理臨床的援助が考えられるのかを説明する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：発達臨床心理学の視座について	
	第2回	発達臨床心理学における自己と他者との関係性	
	第3回	子どもを迎える親の心	
	第4回	新生児期：赤ちゃんの生得的な力	
	第5回	乳児期：他者との間主観的かかわりによる自己体験	
	第6回	幼児期：言葉と歩行によって広がる新たな自己感	
	第7回	幼児期後期：遊びによって開かれる子どもの心	
	第8回	乳幼児期の心理的問題と病理	
	第9回	乳幼児期の発達的問題と病理	
	第10回	乳幼児期の親子への臨床的支援①—愛着	
	第11回	乳幼児期の親子への臨床的支援②—親乳幼児心理療法	
	第12回	自閉症スペクトラムとその臨床的支援	
	第13回	児童期の発達の課題と心の病理	
	第14回	発達臨床の視座から見た心理臨床活動	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：事前に授業内で知らせた箇所について、内容を読んだり、自分なりに考えて、授業に参加する。 復習：学んだことを整理し、振り返る。		
テキスト	未定		
参考文献	授業内で紹介する。		
評価方法	リアクションペーパー：20% レポート：80%		

臨床心理学		後期 2 単位	2年
臨床心理学		富田 貴代子（とみた きよこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	臨床心理学の視点からみた、心の健康と不適応、人生の各ステージにおける心の発達課題と危機、カウンセリングの理論と技法について、基本的な知識がわかる。 それによって、日常生活における自らの心の健康増進に役立てることができるようになる。 グループワークを通して、自己理解と同時に他者に対する理解も深めることができるようになる。		
授業の概要	心の健康を考える上で必要な臨床心理学の基本的な知識を網羅的に学べるように全体が構成されている。心の健康と病理、発達、ストレス、パーソナリティ、心理療法の5つの領域について概観する。授業は、講義形式を中心とし、心理テストやグループワークなども適宜取り入れる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	心の病 1	
	第3回	心の病 2	
	第4回	乳幼児期の発達と危機	
	第5回	児童期・思春期青年期の発達と危機	
	第6回	成人期・老年期の発達と危機	
	第7回	ストレスとは～自分の状態を振り返る	
	第8回	ストレスマネジメント	
	第9回	パーソナリティの理論	
	第10回	パーソナリティの測定	
	第11回	カウンセリングの理論・技法 1	
	第12回	カウンセリングの理論・技法 2	
	第13回	カウンセリングの理論・技法 3	
	第14回	グループワーク	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後に、短いアクションペーパーを提出する。それをもとに次回授業で振り返りを行う。		
テキスト	特に定めない。プリントを適宜授業内で配布する。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	平常点（リアクションペーパー等）:30% 試験:70%		

小児保健学 I		後期 2 単位	1年
子どもの発育・発達の特徴および心身の健康を医学的に学ぶ		白子 純子（しらこ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	小児の成長発達の過程および心身の健康が理解できる。子どもの一生に影響をおよぼす養育環境と保育の意義がわかる。小児の成長発達における身体的、精神的な変化を医学的・公衆衛生学的視点で考察できる。		
授業の概要	講義が中心となるが、積極的な授業参加を求める。場合によってはグループワークなども取り入れながら進める。理解を助けるため、視聴覚教材・プリントなどを取り入れて説明する。授業の進行管理と理解度を知るために質問や意見を所定の用紙に書いてもらうこともある。		
授業 計画	第1回	はじめに：小児保健学の概要	
	第2回	小児保健学の意義・小児期の特徴	
	第3回	小児の形態的变化と保育	
	第4回	小児の身体発育の評価と保育	
	第5回	小児の発育と影響因子	
	第6回	小児の生理機能の発達と保育	
	第7回	小児の臓器・知覚等の機能発達と保育	
	第8回	小児の免疫能の発達と獲得	
	第9回	小児の基本的生活習慣 ～睡眠～	
	第10回	小児の基本的生活習慣 ～排泄～	
	第11回	小児の基本的生活習慣 ～栄養～	
	第12回	小児の基本的生活習慣 まとめ	
	第13回	小児の急性症状とその対応 ～アレルギー反応～	
	第14回	小児の体調不良とそのケア	
	第15回	小児保健学 I のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	指定したテキストの本文および参考資料、配布物などを事前に読むよう指示された場合には読んでおくこと。指定されたテキストは毎回持参すること。		
テキスト	岸井 勇雄 他著「子どもの保健」—理論と実際— 同文書院		
参考文献	随時紹介する		
評価方法	定期試験:85% 課題提出状況など:15%		

小児保健学Ⅱ		前期 2 単位	2年
子どもの心身の健康管理と安全対策の重要性の理解		白子 純子（しらこ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもの心身の健康管理と安全対策の重要性を理解する。子どもの病気や症状を学び、子どもの体調の変化に気づく保育者の観察の視点や、役割、援助の具体策を知る。子どもの生活や育児環境、保護者の精神保健や母子保健行政についての基礎知識を養う。		
授業の概要	講義中心だが、授業には積極的に参加して欲しい。理解を助けるために、視聴覚教材・プリントなどを取り入れる。小児保健学Ⅰを基礎に進めるので復習をしておくこと。実習前に小レポートを課し、実習終了後初回授業時に提出する。子どもの病気や看護の方法を学ぶとともに、自分自身の健康管理を行える知識も同時に習得する。（その他トピックスとして重要なものについては適宜取り上げる）		
授業計画	第1回	小児保健学Ⅰのおさらいと小児保健学Ⅱの概要	
	第2回	免疫について、感染症予防と予防接種	
	第3回	感染症疾患の看護・保育	
	第4回	子どもがよくかかる感染症	
	第5回	消化器系の症状別看護と保育	
	第6回	呼吸器系の症状別看護と保育	
	第7回	小児の病気と看護Ⅰ 症状とその病気の種類	
	第8回	小児の病気と看護Ⅱ くすりの管理と基本	
	第9回	保育の中の保健指導	
	第10回	小児の成長発達の課題と心の発達	
	第11回	学童期・思春期の課題と支援	
	第12回	保育環境の整備 事故防止の原則と対応	
	第13回	事故防止と安全管理	
	第14回	母子保健行政と保育との連携	
	第15回	集団保育における健康管理	
準備学習 (予習・復習等)	指定したテキストの本文および参考資料、配布物などを事前に読むよう指示された場合には読んでおくこと。指定されたテキストは毎回持参すること。 場合によっては1年次に使用したテキストの持参を求めることもある。		
テキスト	兼松百合子他著「子どもの保健実習」すこやかな育ちをサポートするために（第2版） 同文書院		
参考文献	適宜紹介する		
評価方法	定期試験:85% 課題提出状況など:15%		

小児保健実習		後期 1 単位	2年
子どもの心身の成長発達を健やかに保つための技術とその実践方法		白子 純子（しらこ じゅんこ）	
授業の到達目標及びテーマ	小児保健学Ⅰ・Ⅱで習得した知識を基礎とし、保育現場において適切に実践できる養護技術がわかる。健康観察や看護の方法、応急処置の技術および応用力を高めることができる。		
授業の概要	基本的には講義および演習・実習を中心に進める。新生児の人形を使用したり、小グループに分かれ、グループごとに演習を行うこともある。小児保健学Ⅰ・Ⅱの知識を基礎に進めるので復習をしておくこと。現場で活用できるように真剣にかつ主体的な参加を望む。		
授業計画	第1回	小児保健実習の意義	
	第2回	養護技術演習Ⅰ 乳幼児の抱き方・寝かせ方などの基本的技術	
	第3回	養護技術演習Ⅰ 衣服の着脱・おむつの交換など（沐浴事前学習）	
	第4回	養護技術演習Ⅱ 沐浴実習 グループA	
	第5回	養護技術演習Ⅱ 沐浴実習 グループB	
	第6回	小児の身体発育の測定方法とその評価	
	第7回	小児の健康状態の観察と評価～生理的機能の観察と評価～	
	第8回	基本的看護技術Ⅰ 子どもとくすり ～基本的知識とその扱い～	
	第9回	基本的看護技術Ⅰ 子どもとくすり ～与薬の実際・まとめ～	
	第10回	子どもの成長と育児不安	
	第11回	乳幼児の事故の種類、事故防止の原則、事故にあいやすい子どもの特性	
	第12回	基本的看護技術Ⅱ 乳幼児の事故と応急処置 ～止血・包帯～	
	第13回	基本的看護技術Ⅱ 緊急時の救命技術 ～心肺蘇生・AED・エビペン～	
	第14回	子どもの成長支援と社会資源	
	第15回	および小児保健の総まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	指定したテキストの本文および参考資料、配布物などを事前に読むよう指示された場合には読んでおくこと。指定されたテキストは毎回持参すること。		
テキスト	基本的には「小児保健学Ⅱ」で使用したテキストを使用するが、内容によっては「小児保健学Ⅰ」のテキストを使用することもある。（その都度事前に説明する）		
参考文献	授業時に随時紹介する		
評価方法	定期試験:80% 実習参加・課題提出:20%		

子どもと健康		前期 2 単位	2年
小さな命と健康を守り育てる		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもの命と健康を守るために保育者として必要な知識と技術を修得し、保育・幼児教育の現場で実践できるようになる。また、子どもの健やかな育ちの支援に役立つ情報を保護者や園に発信できるようになる。		
授業の概要	子どもの健康的な生活と育ちの支援に必要な知識と技術を習得する。授業での学びを確かなものにするために園や家庭での実践を視野に入れたグループ学習・発表を重視する(1グループは3名前後)。また、救命救急や応急手当では心肺蘇生法や物周りにある物を使った傷の手当が実際にできるようになることを目指す。授業の集大成として、子どもが保護者や保育者と一緒に学ぶ命と健康のビジュアル教材を作成し、発表・相互評価を行う。		
授業 計画	第1回	ガイダンス：元気な頭と体を育てる／学習・発表グループの決定	
	第2回	健康な生活のリズムを身に付け、楽しんで食事をする。発表グループ：1・2	
	第3回	身の回りを清潔にし、衣類の脱着、食事、排せつなど生活に必要な活動を自分でする。発表グループ：3・4	
	第4回	自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。発表グループ：5・6	
	第5回	自分の健康に関心を持ち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。発表グループ：7・8	
	第6回	園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら、見通しを持って行動する。発表グループ：9・10	
	第7回	危険な場所や災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。発表グループ：11・12	
	第8回	進んで戸外で遊ぶ。発表グループ：13・14	
	第9回	いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。発表グループ：15・16	
	第10回	保育者や友達とふれあい、安定感を持って生活する。発表グループ：17・18	
	第11回	応急手当・心肺蘇生法	
	第12回	<実習の振替授業①>子どもの健康の教材①：テーマの決定と全体構成の検討	
	第13回	<実習の振替授業②>子どもの健康の教材②：教材作成	
	第14回	<実習の振替授業③>子どもの健康の教材③：教材の校正と完成	
	第15回	子どもの健康の教材④：プレゼンテーションと相互評価	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	子どもの育ちを支える 子どもと健康、編著：浅見均・渡部かなえ、大学図書出版		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	リフレクションシート:40% 子どもと健康の教材:50% 相互評価:10%		

子どものあそびと創造性		後期集中 2 単位	2・3年
<p>たくさんの遊びやゲームなど、さまざまなおもしろさに接します。すぐれた遊びを実際に体験し、おもしろさとはなにかについて考察し、人に教えられるようにもします。</p>		杉山 亮（すぎやま あきら）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>たくさんの遊びを実際に楽しみながらおぼえます。おもしろい遊びを知っていて、その場にあわせて伝えられる力があると、子どもの前に立ったとき、必ず喜ばれるし、自分も楽です。また、その幸福な実感のうちに、大人子ども共に新しい発見や成長に至るまでの時間をつなぐことができます。</p>		
授業の概要	<p>教室で少人数にわかれて、すべて実際に遊び、古今東西のたくさんの遊びが自分のレパートリーになるようにします。どうしたら、もっとおもしろくなるかということも考えます。鉛筆とノートはいつも必要。時間によっては色鉛筆と折り紙が必要。体を使う遊びではころげまわってもいい服装が必要です。</p>		
授業計画	第1回	総論。ことば遊び。文字遊びいろいろ。なぞなぞなど。	
	第2回	紙と鉛筆で机の上でするゲーム。マルバツなど。	
	第3回	紙と鉛筆で机の上でするゲーム。二人ビンゴなど。	
	第4回	紙と鉛筆で机の上でするゲーム。恋占いなど。	
	第5回	ことば遊び。文字遊びいろいろ。はやくちことばなど。	
	第6回	おえかき。ぬり絵など。	
	第7回	カードゲーム。（トランプゲーム 基礎）	
	第8回	カードゲーム。（トランプゲーム 応用）	
	第9回	体を使った二人あそび。じゃんけんなど。	
	第10回	体を使った二人あそび。手遊び指遊びなど。	
	第11回	伝統あそび。ずいずいずっころばしなど。	
	第12回	体を使って大勢でするゲームいろいろ。	
	第13回	折り紙。	
	第14回	あやとり。	
	第15回	テストとレポート書き	
準備学習 (予習・復習等)	<p>おぼえた遊びはすぐに家族や友人とやってみてください。自分ができるということと、それをじょうずに他人に教えられるというのは全然別の力ですから。</p>		
テキスト	<p>テキストは使いません。かって大きい子が小さい子に伝えたように、すべて、口伝です。ときにプリントを使用します。</p>		
参考文献	<p>なし。ただし、自分が子どもの頃、じっさいに遊んだ遊びを説明できるようにしててください。</p>		
評価方法	<p>テスト:40% レポート:60%</p>		

小児栄養学 I		後期 2 単位	2年
子どもの栄養と食生活を考える		高橋 恭子 (たかはし きょうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	1. 「食」のもつ意義を栄養摂取や精神的側面、社会的側面から考えて理解する。 2. 栄養や食品の基礎的な知識を習得して自らの食生活を改善することができる。 3. 子どもの発育・発達と食生活の関連を理解する。 4. 子どもを取り巻く日本の食の状況を知り、食育の必要性を理解する。		
授業の概要	子どもの栄養と食の体験は心身の発育・発達に大きな影響を及ぼし、生涯にわたる健康と健全な生活の基盤となるものである。「小児栄養学 I」では、まず栄養や食品についての基本的な事項を学び、望ましい食生活について考える。そのうえで、子どもの発育・発達と食生活の関連について学び、日本の食の状況について考え、3年次開講の「小児栄養学 II」と併せて発育・発達に応じた適切な食育と食を通した保護者への支援を行う力を養っていく。視聴覚教材なども用いながら講義を進める。「小児栄養学 I」では乳児期・乳汁栄養までを扱い、離乳以降は「小児栄養学 II」で扱う。		
授業計画	第1回	食生活の意義	
	第2回	栄養素の種類と機能 ①炭水化物	
	第3回	栄養素の種類と機能 ②脂質	
	第4回	栄養素の種類と機能 ③たんぱく質	
	第5回	栄養素の種類と機能 ④ミネラル	
	第6回	栄養素の種類と機能 ⑤ビタミン、水	
	第7回	望ましい食事、「日本人の食事摂取基準」とその活用	
	第8回	日本の食の現状	
	第9回	食育の基本	
	第10回	子どもの発育・発達と食生活 ①子どもの食生活の特徴	
	第11回	子どもの発育・発達と食生活 ②胎児期（妊娠期）	
	第12回	子どもの発育・発達と食生活 ③哺乳動作の発達	
	第13回	子どもの発育・発達と食生活 ④乳児期：母乳栄養	
	第14回	子どもの発育・発達と食生活 ⑤乳児期：人工乳栄養、混合栄養	
	第15回	子どもの食育と食を通した保護者への支援	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回復習し知識を確実なものとする。 ・子どもの食育を担当するという自覚を持ち、自らの食生活を見直す。 ・他教科で学んだ子どもの発育・発達について復習しておく。 ・保育実習や教育実習の際には子どもの食事の様子や各園での食育の取り組みをよく見てきていただきたい。 		
テキスト	飯塚美和子他『最新子どもの食と栄養』学建書院、石井克枝監修『新カラーチャート食品成分表』教育図書		
参考文献	二木武他『小児の発達栄養行動』医師薬出版、幼児食懇話会編『幼児食の基本』日本小児医事出版社、坂本元子編『子どもの栄養・食教育ガイド』医歯薬出版、中村丁次監修『からだに効く栄養成分バイブル』主婦と生活社		
評価方法	筆記試験:80% 提出物:10% 学習態度:10%		

小児栄養学Ⅱ		前期 2 単位	3年
食育を実践するために		高橋 恭子 (たかはし きょうこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ol style="list-style-type: none"> 1. 摂食機能や食行動の発達を理解する。 2. 子どもの発育・発達に応じた食事の支援ができる。 3. 家庭や児童福祉施設における食生活の現状と課題を理解する。 4. 食育の内容や環境について理解する。 5. 子どもの食育と食を通じた保護者の支援における保育士の役割を理解する。 		
授業の概要	<p>「小児栄養学Ⅰ」の単位取得者を対象とする。「小児栄養学Ⅰ」で学んだ内容を踏まえながら、子どもの発育・発達に応じた食のあり方や栄養特性、子どもを取り巻く社会的背景などを総合的に考え、保育士として子どもの食育と食を通じた保護者の支援を行う実践力を養っていく。実習により講義内容の理解を深める。調理実習の際にはエプロン、三角巾、ハンドタオル必携、長い爪やマニキュアは衛生の観点から禁止する。実習後にはレポート提出を課す。</p>		
授業計画	第1回	子どもの発育・発達と食生活 ①摂食機能の発達、離乳の基本	
	第2回	子どもの発育・発達と食生活 ②離乳の進め方、離乳の支援	
	第3回	子どもの発育・発達と食生活 ③幼児期の食生活の特徴	
	第4回	特別な配慮を要する子どもの食と栄養	
	第5回	乳児期の食生活：乳汁期 調乳（実習）	
	第6回	乳児期の食生活：離乳期 ①生後5～6か月頃の離乳食の調理（実習）	
	第7回	乳児期の食生活：離乳期 ②生後7～8、9～11か月頃の離乳食の調理（実習）	
	第8回	乳児期の食生活：離乳期 ③生後12～18か月頃の離乳食の調理（実習）	
	第9回	幼児期の食生活 ①1～2歳児の日常食の献立と調理（実習）	
	第10回	幼児期の食生活 ②3～5歳児の日常食の献立と調理（実習）	
	第11回	幼児期の食生活 ③間食（実習）	
	第12回	児童福祉施設における食事と栄養 行事食（実習）	
	第13回	子どもの食育 調理保育（実習）	
	第14回	学童期・思春期の食生活 学童期・思春期の日常食の献立と調理（実習）	
	第15回	まとめ・調理実習室の清掃	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・「小児栄養学Ⅰ」で学んだ事柄を復習しておく。 ・講義内容を復習し、問題意識を持って実習に臨む。 ・教育実習や保育実習で観察した子どもの活動を食育の観点で見直す。 		
テキスト	<p>「小児栄養学Ⅰ」で使用したテキスト（最新子どもの食と栄養、新カラーチャート食品成分表）や配布資料を活用する。これに加え毎回印刷教材を配布する。</p>		
参考文献	<p>保育所における食育研究会編「乳幼児の食育実践へのアプローチ」児童育成協会児童給食事業部、保育所における食育計画研究会編「保育所における食育の計画づくりガイド」児童育成協会児童給食事業部、「現代と保育」編集部・編「食事で気になる子の指導」ひとなる書房</p>		
評価方法	筆記試験：50% 実習レポート：40% 学習態度：10%		

精神保健論		前期 2 単位	3年
精神保健に関する考えの日常生活への役立て方		関 智雄（せき ともお）	
授業の到達目標及びテーマ	「精神保健」とは何か？ 具体的にどのようなことか？ 人間の精神を、精神医学的・臨床心理学的にはどうとらえ、どう考えていくか、を講義を通して理解してもらおう。そして、学生各自が自己理解を深め、精神的、肉体的に健康を保つことに対する対策を、各自で考えていけるようになることをめざす。		
授業の概要	精神保健（精神衛生・メンタルヘルス）に関する基本的な知識、精神障害への予防、精神障害にどう対応するか、精神障害者の社会復帰などについて講義する。また、自己理解、他者理解のための概念枠をいくつか講義する。		
授業計画	第1回	精神保健とは	
	第2回	精神健康の基準について	
	第3回	基本的知識1 精神症状とは何か	
	第4回	基本的知識2 妄想・幻覚	
	第5回	基本的知識3 うつ・不安	
	第6回	児童1 知的発達 発達症	
	第7回	児童2 情緒的発達 こどもの鬱病	
	第8回	青年期・成人期 統合失調症 鬱病 双極性障害 PTSD	
	第9回	老年期 認知症 譫妄 心気症 回想法	
	第10回	治療文化 社会復帰、社会との折り合い	
	第11回	自己・他者理解1 精神分析 自我心理学 超自我・自我・イド	
	第12回	自己・他者理解2 精神分析 対象関係論 妄想分裂ポジション 抑うつポジション	
	第13回	自己・他者理解3 ユング心理学 ペルソナ 影 アニマ・アニムス	
	第14回	自己・他者理解4 認知・知能・情報処理	
	第15回	自己・他者理解5 ライフヒストリー 人生設計のために	
準備学習 (予習・復習等)	参考文献を読む。授業で学んだことを日常生活においてどう役立てるかを考える。		
テキスト	特になし		
参考文献	山上敏子監修「お母さんの学習室」（二瓶社）		
評価方法	試験:40% レポート:30% 授業感想文の内容:30%		

社会福祉論		前期 2 単位	1年
社会福祉の基本概念を理解する。		杉田 穂子 (すぎた やすこ)	
授業の到達目標及びテーマ	21世紀を迎えて社会福祉の役割は、より身近で重要になってくる。「弱者に恵み与える福祉」から「権利としてサービスを利用する福祉」への流れについて理解する。さらに「中央が与える福祉」から「地方を軸に住民が創り出す福祉」へ転換しつつある流れについて理解する。		
授業の概要	まず学生同士で経験した差別・被差別経験を出し合い、学生と福祉との関係性を探る。さらに福祉概念の変遷、中でも貧困に対する社会の見方の変化に焦点をあて、社会の見方によって支援が変化することを学ぶ。さらに、公的扶助、高齢者、児童家庭、障害の各福祉分野について焦点をあて、現状と課題を理解する。		
授業計画	第1回	シラバスについて	
	第2回	差別とは何か(1) 自らの差別・被差別経験を出し合う	
	第3回	差別とは何か(2) 差別についてのまとめ	
	第4回	社会福祉とは何か(1) 基本的な考え方と構成要素	
	第5回	社会福祉とは何か(2) 問題の特徴と援助技術	
	第6回	社会福祉とは何か(3) 援助技術の原則	
	第7回	社会福祉概念の変遷(1) 相互扶助、慈善事業、社会事業	
	第8回	社会福祉概念の変遷(2) 厚生事業、社会福祉事業	
	第9回	社会福祉概念の変遷(3) 社会福祉基礎構造改革	
	第10回	公的扶助の現状と課題	
	第11回	高齢者福祉の現状と課題	
	第12回	児童家庭福祉の現状と課題	
	第13回	障害者福祉(1) 思想の変遷	
	第14回	障害者福祉(2) 日本の現状と課題	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習(予習・復習等)	次回の課題について記入すべき用紙を配布した場合はその課題を行うこと。毎回到授業内容をよく復習し、参考文献などを用いて内容の理解に努めること。		
テキスト	特になし		
参考文献	好井裕明「差別原論」平凡社新書 2007 山懸文治他「よくわかる社会福祉」ミネルヴァ書房 2002 厚生労働統計協会「国民の福祉と介護の動向」厚生労働統計協会2012/2013		
評価方法	授業後の感想:30% テスト:70%		

子ども家庭福祉論		後期 2 単位	1年
子ども家庭福祉（児童福祉）はなぜ必要か～子どもと家族への社会的支援のあり方を考える		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標及びテーマ	次代を担う子どもたちの福祉（しあわせ）とは何か、子どもの育ちの保障、家族の支援に社会的な取り組みがなぜ必要なのか理解する。子どもや家族が抱える福祉ニーズを社会的背景と文脈の中でとらえ、福祉支援のあり方、福祉サービスを支える福祉の思想を理解する。		
授業の概要	子ども家庭福祉の前提となる福祉観、子ども観、支援観に出会う。また、子どもの権利とは何か、子どもの権利保障の取り組みの意義は何かを理解する。また、さまざまな福祉ニーズを抱える子どもとその家庭を支援する仕組みについて体系的に理解する。		
授業計画	第1回	子どものいのちを守り、育ちを支えるとは	
	第2回	子ども家庭福祉の理念と、基盤となる子ども観	
	第3回	子ども家庭福祉のさまざまな取り組み	
	第4回	保育施策の現状と課題～子育て環境と福祉ニーズ	
	第5回	子ども虐待と社会的養護、家族支援の取り組み	
	第6回	子どもの権利条約の成立に至る歴史とコルチャックの思想	
	第7回	子どもの権利保障の実際と課題	
	第8回	子どものいのちをめぐる諸問題と母子保健、健全育成	
	第9回	ひとり親家庭の現状と課題	
	第10回	障がいをもつ子どもの社会的支援	
	第11回	非行問題と社会的背景、社会的支援	
	第12回	子ども家庭福祉の実施体制	
	第13回	諸外国における子ども家庭福祉の動向	
	第14回	子ども家庭福祉の今後の課題～子どもの権利条約の時代に	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、あらかじめ提示された教科書や資料を読んでから参加する。復習の意味でも、それらを読みこみ、理解を深める。提示された場合には授業への感想・考察レポートを提出する。参考文献を自分で読む努力をする。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に提示するので、確認のうえ、必ず購入のこと。		
参考文献	参考文献・参考資料とともに必要に応じ授業内で紹介する。		
評価方法	授業の感想文:10% 提出物:30% 試験:60%		

社会福祉方法論		後期 2 単位	2年
ソーシャルワーク（社会福祉援助・相談援助）の基礎を学ぶ		鈴木 敏彦（すずき としひこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) ソーシャルワーク（社会福祉援助・相談援助）に関する知識を理解する (2) 対人支援職としてのコミュニケーション技法を身につける (3) 子ども・家庭の権利擁護者としての保育士の自己覚知を図ることが出来るようになる (4) 事例検討を通して保育・児童福祉分野におけるソーシャルワークの実際を理解する		
授業の概要	児童福祉・保育実践に必要とされるソーシャルワーク（社会福祉援助・相談援助）の理論・技術等について、その基礎を演習形式により体験的に理解を深める。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス ソーシャルワークとは何か(1) 保育とソーシャルワークの関係	
	第2回	ソーシャルワークとは何か(2) ソーシャルワークの基礎理論①	
	第3回	ソーシャルワークとは何か(3) ソーシャルワークの基礎理論②	
	第4回	ソーシャルワークとは何か(4) ソーシャルワークの基礎理論③	
	第5回	対人支援の専門職をめざす私(1) 自己覚知・自己理解	
	第6回	対人支援の専門職をめざす私(2) 他者理解	
	第7回	対人支援の専門職をめざす私(3) 援助者の基本的態度	
	第8回	対人支援職のコミュニケーション技法(1) 基本スキル①	
	第9回	対人支援職のコミュニケーション技法(2) 基本スキル②	
	第10回	対人支援職のコミュニケーション技法(3) 支援すること・されること	
	第11回	ソーシャルワーク実践(1) 事例検討と発表①	
	第12回	ソーシャルワーク実践(2) 事例検討と発表②	
	第13回	ソーシャルワーク実践(3) 事例検討と発表③	
	第14回	ソーシャルワーク実践(4) 事例検討と発表④	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	【予習】 ・日頃より福祉に関する報道等に留意し、自ら福祉に関する情報を収集すること ・随時出題される事前課題に取り組むこと 【復習】 ・授業のポイントを整理すること		
テキスト	なし（授業時にプリントを配布する）		
参考文献	随時紹介する		
評価方法	平常点（小レポート等）：40% 期末レポート：60%		

社会福祉方法論		後期 2 単位	2年	
ソーシャルワーカーの力量を高める方法論		中島 洋（なかしま ひろし）		
授業の到達目標 及びテーマ	<p>老老介護の問題、社会的排除の問題、ニート・フリーターなどの就労支援問題、世代を問わない虐待問題、子育て困難の問題など、多様な社会福祉問題が今日散見されます。本授業では、対人援助専門職としての働きを堅実に遂行できるよう、実践の指針となる基本的な思考力・判断力の育成を旨とします。具体的な到達目標としては、講義で取り上げた基本的な社会福祉理論・アプローチ（10個）の各々を要約・説明できることです。</p>			
授業の概要	<p>本授業は原則、講義と演習を組み合わせた構成で展開します。学習内容としては、川村隆彦著『ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ』中央法規、2011年で取り上げられた社会福祉理論・アプローチ（10個）を分かり易く解説します。その他、適宜、グループ・ディスカッションやミニ・プレゼンテーションを取り入れたいと思います。さらに、毎回、リアクションペーパーを書くことで、内容理解の確認や質問にも応じられるように配慮します。</p>			
授業計画	第1回	オリエンテーション、クライアント中心理論・アプローチ		
	第2回	エコロジカル理論・アプローチ		
	第3回	行動理論・アプローチ		
	第4回	認知理論・アプローチ		
	第5回	危機介入理論・アプローチ		
	第6回	問題解決理論・アプローチ		
	第7回	課題中心理論・アプローチ		
	第8回	エンパワメント理論・アプローチ		
	第9回	システム（家族療法）理論・アプローチ		
	第10回	ナラティブ理論・アプローチ		
	第11回	理論・アプローチの組み合わせ——子育てに悩む母親へのアプローチ		
	第12回	理論・アプローチの組み合わせ——中途脊髄障害者へのアプローチ		
	第13回	様々な理論・アプローチⅠ——セルフエスティーム、神経言語プログラミング、経験学習		
	第14回	総まとめ——テスト対策、質疑応答		
	第15回	被災地復興支援策を保育の視点から考える		
準備学習 (予習・復習等)	<p>ニュース・新聞などから様々な社会福祉問題に対し関心をもち、主体的に理解を進めることが挙げられます。さらに、京極高宣著『社会福祉学小辞典』（ミネルヴァ書房）などにより、社会福祉の基本的用語について自主学習することをお勧めします。</p>			
テキスト	特に指定しない（毎回プリントを配布する予定）。			
参考文献	川村隆彦著『ソーシャルワーカーの力量を高める理論・アプローチ』中央法規、2011年。その他、随時紹介する。			
評価方法	試験:70% リアクションペーパー:30%			

現代社会と保育		前期 2 単位	2・3年
現代社会と保育		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「戦後日本社会における保育の位置」をテーマにする本講義では、20世紀後半の日本社会における家庭養育と施設保育の変遷を理解する。そのために家族史・女性史・労働史・人口史などの成果を積極的に摂取し、隣接諸科学と対話できる基礎的能力を身につける。		
授業の概要	本年度は、乳幼児を初めとする子どもの貧困問題に関する研究成果から多くを学ぶ。1990年代中頃以降の脱戦後期に拡大した経済的・社会的・文化的格差とその結果として顕著になった貧困は相当数の子どもや家族を直撃している。この問題に主に経済学から迫った下記の新書を手がかりに、問題の出現の経過を追い、その原因や背景を見たうえで、子どもの貧困と養育・保育などとの関係について考察する。		
授業計画	第1回	本講義のねらい・内容・進め方などの説明	
	第2回	現状と測定	
	第3回	戦後史における位置	
	第4回	要因と背景	
	第5回	対象者	
	第6回	母子世帯	
	第7回	中間まとめと確認問題	
	第8回	政策	
	第9回	現金給付	
	第10回	現物給付	
	第11回	貧困と養育	
	第12回	貧困と保育	
	第13回	貧困と教育	
	第14回	貧困と就労	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	阿部彩氏の2冊の岩波新書『子どもの貧困——日本の不公平を考える』(2008年)と『子どもの貧困——解決策を考える』(2014年)を事前に購読しておく。		
テキスト	上記の新書と講義中に配布する資料など		
参考文献	講義中に提示		
評価方法	確認問題:30% 試験:70%		

社会的養護論		前期 2 単位	2年
児童福祉施設における子どもたちの生活と権利～社会的養護の意義と方法の理解		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標及びテーマ	被虐待ほか多様な家庭の事情により家族と離れ、社会的な養護・養育を必要とする子どもたちにとって必要な理解・援助内容・援助方法論を、権利保障の意義やその価値とともに体系的に理解する。主に施設での援助内容を学びながら、専門的理解やケアを必要とする子どもの自立支援の意味を、自分自身の生活とも重ねながら考える。		
授業の概要	さまざまな児童福祉施設での支援のもつ意味を構造的に理解し、ケアの現場の持つ役割や機能、専門性を理解する。施設養護および家庭養護の具体的実践事例に出会い、施設職員や養育者に求められる子ども理解、支援のあり方、今後の課題の要点を獲得する。		
授業計画	第1回	社会的養護とは～その概念と基本理念、果たす役割	
	第2回	児童福祉施設の体系・機能とソーシャルワークの活用	
	第3回	信頼関係の形成と日常生活を通しての自立支援	
	第4回	子どもたちとの生活～施設職員の役割と働き	
	第5回	養護問題の変遷と家族危機、ホスピタリズム	
	第6回	日本および海外の児童養護と里親制度、養子縁組制度	
	第7回	ケア単位の小規模化と家庭的養護の推進をめぐる課題	
	第8回	児童福祉施設最低基準と施設の生活の質（QOL）の検討	
	第9回	子どもたちの理解と援助方法論～事例研究	
	第10回	家族関係の理解・調整とファミリーソーシャルワーク	
	第11回	障がいをもつ子どもへの支援、子ども虐待の理解とケア	
	第12回	非行・思春期の諸問題とそのケア、性教育と子どもの権利	
	第13回	先人の築いた児童養護の歴史とキリスト教児童養護	
	第14回	児童福祉施設実践をめぐる今後の課題	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業前に、あらかじめ提示された教科書や資料を読んでから参加する。復習の意味でも、それらを読みこみ、理解を深める。提示された場合には授業への感想・考察レポートを提出する。参考文献を自分で読む努力をする。提出課題に取り組む。自分の生活の身近にどのような児童福祉施設の働きがあるのか、調べたり出会ったりする努力をする。		
テキスト	開講時に提示する（必ず購入のこと）。		
参考文献	参考資料とともに授業の中で紹介していく。		
評価方法	授業感想文：10% 提出課題：30% 試験：60%		

里親養育論		後期 2 単位	2・3年
子ども支援から見る里親養育の形と家庭養護の現状を踏まえた里親家庭への支援方法の検討		長田 淳子（ちょうだ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	保育でも家庭的保育が重んじられているが、さまざまな家庭の事情から家族から離れて生活する子どもたちにとって、生活の場のもつ意味、そしてその現状を理解する。それらを踏まえて、子どもが血縁を超えて出会う里親家庭での養育の意義について検討する。また、子どもを中心とした支援の方法に着目しながら、里親家庭における養育に対するの援助方法や支援体制のあり方・展望について検討する。		
授業の概要	前提となる社会的養護への理解を深めながら、子どもにとって「生活」とは何かを、自身の「生活観」をふり返りながら考察する。また、多様なニーズと課題を持つ子どもたちの特徴やその支援の方法を学ぶ。その上で、中途養育となる里親養育の難しさ・よさを確認しながら、子どもにとって里親養育とは何か、里親養育の現状や課題、支援の実際を含め理解する。事例や文献、視聴覚教材などを利用予定。		
授業計画	第1回	子どもにとって「生活」とは何か ～乳児院での子どもたちの「生活」などをとおして～	
	第2回	家庭で生活することのもつ意味～「生活観」をとおして～	
	第3回	家庭養護・家庭的養護とは～里親家庭の種類と養育の形～	
	第4回	子どもを取り巻く環境について（保護者の状況など）	
	第5回	子どもの状況① 子ども虐待・親との分離体験とその影響	
	第6回	子どもの状況② 発達障がい等の発達の課題	
	第7回	子どもの状況③ 心理治療などの支援方法	
	第8回	里親の養育力とは何か ～中途養育の難しさと大切なこと～	
	第9回	養育の実際① 血縁のない子どもとの生活の開始にあたっての課題	
	第10回	養育の実際② 実親との関係（交流や家庭復帰、実親子関係など）	
	第11回	養育の実際③ 真実告知	
	第12回	養育の実際④ 子どもの成長にともなう課題（特に自立をめぐる）	
	第13回	里親とその家族への支援 ～各関係機関との連携と支援のあり方～	
	第14回	子どもにとっての「生活」をどう支えるか～里親が求められていることは～	
	第15回	「家庭」で育つこと、これからの子ども支援	
準備学習 (予習・復習等)	次回の授業のテーマとなる箇所について、テキストより指示し、事前に一読するよう提示する。また、授業の終わりに、その授業の振り返りとなるような感想文やミニレポートなどの課題を提示する場合がある。		
テキスト	開講時に提示する。		
参考文献	参考文献・資料ともに、必要に応じて紹介していく。		
評価方法	授業への参加状況:30% 提出課題:20% レポート:50%		

人間と障害		後期集中 2 単位	2・3年 子ども学科
多様な人々による共生の可能性を障害という切り口から検討する		角田 雅昭 (かくた まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	ノーマライゼーションという理念は、障害児・者も、生まれ育った地域で共に暮らしていくことを唱っている。その実現のために必要な支援が、本来相互的な営みであるということを理解する。		
授業の概要	本講義では、ディスカッションやグループワークを中心に展開する予定である。そのため、各自積極的な発言が求められる。また、必要に応じてレポート等の提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：福祉の目的	
	第2回	人間と障害について	
	第3回	健常児・者とは？	
	第4回	健常児・者と障害児・者との歴史	
	第5回	地域福祉の思想と運動（1）施設から地域へ	
	第6回	地域福祉の思想と運動（2）当事者という概念の隆盛	
	第7回	障害児・者支援の比較（1）日本と北欧	
	第8回	障害児・者支援の比較（2）日本と北欧	
	第9回	障害児・者の当事者活動：当事者とは？	
	第10回	重度重複障害児・者の支援：コミュニケーションの可能性とその事例	
	第11回	障害者の就労：就労移行支援の事例から	
	第12回	障害者の結婚と子育て：知的障害者・発達障害者の事例から	
	第13回	障害児・者による健常児・者の支援：支援という相互的営みの意味	
	第14回	共生に向けて：共生ケアの事例から	
	第15回	講義のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時課題が指示されるので、それを行ってから講義に臨むこと		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	適宜、講義の中で紹介する		
評価方法	レポートもしくは試験：50% 平常点（提出物等）：50%		

キリスト教保育 I		後期 2 単位	1年
見えないものに目をそそぐ		松浦 浩樹 (まつうら ひろき)	
授業の到達目標及びテーマ	キリスト教信仰に根差した保育の理念と実践を理解し、自分も生かされていることを知ることで子どもに関わる使命感を培う。また乳幼児を取り巻く社会や家庭の現状を踏まえつつ、キリスト教保育の実際を学び、子どもの心的・身体的な育ちに何が必要であるかを考察し、振り返ることと(省察)の重要性を理解する。		
授業の概要	毎回の講義で「幼児さんびか」を歌う。歌詞やメロディーに流れるキリスト教保育の世界観に触れる。講義の後、5名前後のグループディスカッションをし、その中で意見交換や自分なりの考えを述べ、理解できないことを明確にし、再度講義の中でまとめる。またテーマに沿って、自分で資料や教材を選んだり、収集し、学ぶ。その学んだものを発表し、共有し合う。また教会学校見学やキリスト教保育実践園での見学を通じて、キリスト教保育を理解する		
授業計画	第1回	キリスト教保育とは—キリスト教保育が大事にしてきたこと—	
	第2回	幼稚園・保育所・子ども園を取り巻く現状 —現代におけるキリスト教保育の使命—	
	第3回	子どもを取り巻く環境とキリスト教保育の使命	
	第4回	キリスト教保育の環境・保育者の役割(信頼関係)	
	第5回	見えないものに目をそそぐ —保育の実践と省察—	
	第6回	キリスト教保育の実際① 保育の理念と礼拝の意味と実際	
	第7回	キリスト教保育の実際② フレーベルの思想と恩物	
	第8回	キリスト教保育の実際③ 賛美歌と子ども	
	第9回	キリスト教保育の実際④ 遊び・生活 その1	
	第10回	キリスト教保育の実際⑤ 遊び・生活 その2	
	第11回	キリスト教保育の実際⑥ 絵本と子ども	
	第12回	キリスト教保育の実際⑦ キリスト教保育現場見学と学び	
	第13回	キリスト教保育の実際⑧ クリスマスの意味と準備	
	第14回	教会訪問・教会学校見学レポート	
	第15回	「共に歩む」「共に生きる」ということ・見えないものに目を注ぐ保育・保育者の役割 <レポート作成>	
準備学習(予習・復習等)	分担した「子どもさんびか」・「幼児さんびか」を数名のグループで練習し、発表する。 事前に提示する授業内容について、テキスト相当箇所を読んでおく。 内容によっては、哲学的解釈が必要になるため、復習として「自分の思いや考え」とノートに記しておく。		
テキスト	『新キリスト教保育指針』『キリスト教保育 50の質問 見えないものに目をそそぐ』『幼児さんびか I・II』		
参考文献	こどもさんびか 月刊『キリスト教保育』、その他 これらの資料を随時配布		
評価方法	意欲(実技課題):10% レポート2回分:30% 最終レポート:60%		

キリスト教保育Ⅱ		前期 2 単位	2・3年
希望への教育		松浦 浩樹（まつうら ひろき）	
授業の到達目標 及びテーマ	キリスト教信仰に根差した保育の理念と実践を理解し、自分も生かされていることを知ることで、子どもの育ちにかかわる使命感を培う。また乳幼児を取り巻く社会や家庭の現状を踏まえつつ、キリスト教保育の使命とは何かを学び、「育てる者へ」の意識の転換を喚起し、子どもの心的・身体的な育ちを促し、子どもの希望を培う大人のあり方を探究する。		
授業の概要	キリスト教保育の理念や実践の基本を理解する。また実践例や保育現場の見学を通じて、理解を深める。講義の後、5名前後のグループディスカッションをし、その中で意見交換や自分なりの考えを述べ、理解できないことを明確にし、再度講義の中でまとめる。またテーマに沿って、キリスト教保育の現場を観察し、自分で資料や教材・資料を収集し、実践的に学ぶ。学んだものを発表し、共有する。		
授業計画	第1回	キリスト教保育とは—キリスト教保育の現代的使命—	
	第2回	保育現場の動向と保育者・教育者のこれから	
	第3回	保育と祈り、省察	
	第4回	遊びを大切にする保育の理解	
	第5回	神・人のかかわりを大切にする保育の理解	
	第6回	キリスト教保育の環境の理解（歴史的取り組みの理解）	
	第7回	キリスト教保育の実際（1）ビデオ観察とカンファレンス	
	第8回	キリスト教保育の実際（2）保育現場報告	
	第9回	キリスト教保育の実際（3）保育現場報告	
	第10回	キリスト教保育の実際（4）保育現場報告	
	第11回	見えないものに目をそそぐ —保育の実践と省察の再考—	
	第12回	キリスト教保育の内容と展開	
	第13回	保育を共に創る —子ども・保護者と共に—	
	第14回	保育を共に創る —保育者と共に、地域と共に—	
	第15回	まとめ —保育者として、人として成長する—	
準備学習 (予習・復習等)	キリスト教保育Ⅰにおける基礎的な学習を復習しておくこと。 またキリスト教保育Ⅰを踏まえた上での実践的学びとディスカッションを授業の柱とする。復習として、板書されたことや授業で伝達したことのみではなく、自分なりの考えをノートに記しておくこと。		
テキスト	『新キリスト教保育指針』『キリスト教保育 50の質問 見えないものに目をそそぐ』		
参考文献	『幼児さんびか1.2』、『こどもさんびか』 月刊『キリスト教保育』、その他、これらの資料を随時配布		
評価方法	最終レポート:60% 中間レポート、発表:20% 意欲(討論):20%		

乳児保育演習		後期 2 単位	2年
乳児の発達の特徴と保育のあり方		韓 仁愛 (はん いんえい)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 乳児の成長発達に関する基礎的な知識を身に付ける。 ○ 子どもの月齢・年齢に相応しい保育の関わり方を工夫・探究する。 ○ 親の現況を理解し、サポートできる乳児保育への心構えを持てるようになる。 ○ 保育の専門性を自覚し、保育者同士の連携の必要性を認識できる。 ○ 乳児保育の歴史の変遷と現状を知り、今後の課題に気付く。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全授業はパワーポイントによるレジュメとテキストを中心に進めるが、必要に応じてDVDや参考資料を並行することで、授業内容がより深められるようにする。 ・ 実践事例や実際の映像を授業内容に取り入れ、実際の子どもの言葉や行動から乳児の成長発達について理解し、関わり方を学生自らが考える場にする。 ・ グループディスカッションでは、5～6人が1グループになり、年齢別のあそびの工夫とおもちゃ作りを行う。 		
授業計画	第1回	オリエンテーションと乳児保育の意義	
	第2回	0歳児の発達の特徴と保育	
	第3回	0歳児の生活とあそび ～実践映像を通して学ぶ～	
	第4回	1歳児の発達の特徴と保育	
	第5回	1歳児の対人関係と保育者の関わり方 ～実践事例を通して～	
	第6回	0歳児・1歳児のおもちゃづくり ～グループワーク～	
	第7回	2歳児の発達の特徴と保育	
	第8回	2歳児のあそびの理解と実践事例の検討	
	第9回	乳児保育と保育環境	
	第10回	「三歳児神話」と乳児保育のあり方	
	第11回	乳児保育の歴史と今後の課題 ～家庭的保育事業を含む～	
	第12回	記録と保育計画 ～月案・週案の作成を中心に～	
	第13回	保護者理解と子育て支援 ～実践事例検討と連絡帳の作成～	
	第14回	特別な支援が必要な子ども・家庭支援	
	第15回	保育者間の連携と保育者のあり方 乳児保育で大事にしたいこと	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 次週の授業内容は各自が事前に調べたりテキストに目を通すなど予習を行う。 2. グループワークを行う前には、学生同士の話し合いを通して、計画書を作成し、グループワークに必要な資料及び教材を用意して演習に臨む。 演習後には感想を含みミニレポートを提出する。 		
テキスト	乳児保育研究会編『改訂4版 資料でわかる乳児の保育新時代』ひとなる書房、2015年。		
参考文献	実践事例は随時プリントを使用する。		
評価方法	授業態度:20% 演習課題:30% 試験:50%		

障害児保育演習（2013年度以降入学者）		前期 2 単位	3年 子ども学科
障害児保育の理論と実践を考える		角田 雅昭（かくた まさあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、保育の原点としての障害児保育を実践的に学ぶ。そのためにも、（１）障害児やその保護者のニーズ、（２）そのニーズに応じた支援・ケアのあり方、以上の２点について理解する。その際、ただ専門性を深めるばかりではなく、その専門性自体を、実践の中で反省的に捉え直すことの必要性についても説明できるようになる。		
授業の概要	本講義では、視聴覚教材視聴、ディスカッション、あるいはグループワークを活用しながら展開するため、内容に応じてリアクションペーパーあるいはレポート等の提出を求める。		
授業計画	第1回	イントロダクション：障害児との出会い	
	第2回	障害という概念について（１）保育者として何を学ぶか	
	第3回	障害という概念について（２）ニーズを理解する	
	第4回	障害児保育とは（１）障害児と生活をともにすること	
	第5回	障害児保育とは（２）ノーマライゼーションとインクルージョン	
	第6回	障害児保育とは（３）ニーズに応じた支援・ケア	
	第7回	障害児保育の歴史と理念（１）戦前の障害児保育	
	第8回	障害児保育の歴史と理念（２）優生学の興隆	
	第9回	障害児保育の歴史と理念（３）石井亮一の実践から学ぶ	
	第10回	障害児保育の制度とその実際（１）制度の誕生と実際	
	第11回	障害児保育の制度とその実際（２）個別のニーズと支援計画	
	第12回	障害児の保護者の声から学ぶ：保護者のニーズ	
	第13回	重度重複障害児の「声」から学ぶ：遷延性意識障害児・者とのコミュニケーション	
	第14回	発展途上国における障害児保育実践：制度の無い地域の支援	
	第15回	まとめ：今後の障害児保育実践について	
準備学習 (予習・復習等)	予習：参考文献をはじめとした、障害児保育関連の事例を事前に読んでおくこと		
テキスト	特になし		
参考文献	武居光 2014 『子ども相談ノート』Sプランニング		
評価方法	試験：60% 平常点（提出物等）：40%		

障害児保育演習（2012年度入学者）		通年（前期）	4 単位	3年
障害児保育の理論と実践を考える		角田 雅昭（かくた まさあき）		
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、保育の原点としての障害児保育を実践的に学ぶ。そのためにも、（１）障害児やその保護者のニーズ、（２）そのニーズに応じた支援・ケアのあり方、以上の２点について理解する。その際、ただ専門性を深めるばかりではなく、その専門性自体を、実践の中で反省的に捉え直すことの必要性についても説明できるようになる。			
授業の概要	本講義では、視聴覚教材視聴、ディスカッション、あるいはグループワークを活用しながら展開するため、内容に応じてリアクションペーパーあるいはレポート等の提出を求める。			
授業計画	第1回	イントロダクション：障害児との出会い		
	第2回	障害という概念について（１）保育者として何を学ぶか		
	第3回	障害という概念について（２）ニーズを理解する		
	第4回	障害児保育とは（１）障害児と生活をともにすること		
	第5回	障害児保育とは（２）ノーマライゼーションとインクルージョン		
	第6回	障害児保育とは（３）ニーズに応じた支援・ケア		
	第7回	障害児保育の歴史と理念（１）戦前の障害児保育		
	第8回	障害児保育の歴史と理念（２）優生学の興隆		
	第9回	障害児保育の歴史と理念（３）石井亮一の実践から学ぶ		
	第10回	障害児保育の制度とその実際（１）制度の誕生と実際		
	第11回	障害児保育の制度とその実際（２）個別のニーズと支援計画		
	第12回	障害児の保護者の声から学ぶ：保護者のニーズ		
	第13回	重度重複障害児の「声」から学ぶ：遷延性意識障害児・者とのコミュニケーション		
	第14回	発展途上国における障害児保育実践：制度の無い地域の支援		
	第15回	まとめ：今後の障害児保育実践について		
準備学習 (予習・復習等)	予習：参考文献をはじめとした、障害児保育関連の事例を事前に読んでおくこと			
テキスト	特になし			
参考文献	武居光 2014 『子ども相談ノート』Sプランニング			
評価方法	試験：60% 平常点（提出物等）：40%			

障害児保育演習（2012年度入学者）		通年（後期）	3年
多様な人々による共生の可能性を障害という切り口から検討する		角田 雅昭（かくた まさあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	ノーマライゼーションという理念は、障害児・者も、生まれ育った地域で共に暮らしていくことを唱っている。その実現のために必要な支援が、本来相互的な営みであるということを理解する。		
授業の概要	本講義では、ディスカッションやグループワークを中心に展開する予定である。そのため、各自積極的な発言が求められる。また、必要に応じてレポート等の提出を求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：福祉の目的	
	第2回	人間と障害について	
	第3回	健常児・者とは？	
	第4回	健常児・者と障害児・者との歴史	
	第5回	地域福祉の思想と運動（1）施設から地域へ	
	第6回	地域福祉の思想と運動（2）当事者という概念の隆盛	
	第7回	障害児・者支援の比較（1）日本と北欧	
	第8回	障害児・者支援の比較（2）日本と北欧	
	第9回	障害児・者の当事者活動：当事者とは？	
	第10回	重度重複障害児・者の支援：コミュニケーションの可能性とその事例	
	第11回	障害者の就労：就労移行支援の事例から	
	第12回	障害者の結婚と子育て：知的障害者・発達障害者の事例から	
	第13回	障害児・者による健常児・者の支援：支援という相互的営みの意味	
	第14回	共生に向けて：共生ケアの事例から	
	第15回	講義のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時課題が指示されるので、それを行ってから講義に臨むこと		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	適宜、講義の中で紹介する		
評価方法	レポートもしくは試験：50% 平常点（提出物等）：50%		

保育所保育研究		前期 2 単位	3年
保育所における乳幼児の姿から、保育所の役割、おとなの関わりを考える。		菅野 和枝 (すがの かずえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	保育所の役割を知るとともに、乳幼児の発達を、生活の営み、人との関わり双方から理解する。 また、保育所の、地域における役割を理解し、乳幼児とそれを取り巻く社会、並びに保護者への支援について理解する。		
授業の概要	乳幼児の発達を、保育所保育指針を基に講義。少人数によるバズセッション形式を取り入れ、学生が積極的に発言することも求める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	保育所の生活について	
	第3回	子どもとあそび I グループワーク I	
	第4回	子どもとあそび II グループワーク II	
	第5回	子どもの姿 乳児期 (誕生～1歳3か月)	生活の営み
	第6回	子どもの姿 乳児期 (誕生～1歳3か月)	ひととの関わり
	第7回	子どもの姿 前幼児期 (1歳3か月～3歳)	生活の営み
	第8回	子どもの姿 前幼児期 (1歳3か月～3歳)	ひととの関わり
	第9回	子どもの姿 幼児期 (3歳～5歳)	生活の営み
	第10回	子どもの姿 幼児期 (3歳～5歳)	ひととの関わり
	第11回	子どもとあそび III 環境と行事	
	第12回	子どもの食を考える	
	第13回	保護者との関わり	
	第14回	子育て支援について	
	第15回	保育園の生活を考える	
準備学習 (予習・復習等)	予習、復習ともに、授業で指示するので、それを行うこと。 復習は、レポート提出を求める。		
テキスト	「実践 保育学」日本小児医事出版社 監修 帆足英一		
参考文献	講義時に提示		
評価方法	平常点 (提出課題など) :50% 期末レポート:50%		

保育臨床相談		前期 2 単位	3年
子どもの心の理解と保育者に必要なカウンセリングマインドについて学ぶ		井上 万理子 (いのうえ まりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	授業の目標は次の4点である①保育・幼児教育の中で求められるカウンセリングマインドを理解する②発達に問題を抱える子どもの理解や対処について学ぶ③保護者対応や家族の育児支援に必要な知識と地域における連携について学ぶ④対人援助職として自己理解を深め、コミュニケーション能力を身につける。		
授業の概要	この科目では、対人援助職としての保育者に求められる心の理解や援助について、発達臨床心理学的視点から学ぶ。カウンセリングやコミュニケーションスキルについて、エクソサイズやロールプレイなど実際に体験して身につけることをめざす。また、自己理解に係わる各種の心理テストをおこなうなど、主体的な授業参加に基づく演習形式で進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：カウンセリングについて	
	第2回	エクソサイズを通して対人コミュニケーションを学ぶ	
	第3回	ロールプレイを通して傾聴、共感を体験的に理解する	
	第4回	自分の感情状態に気づく、又、自己開示の体験をする	
	第5回	心理テストを体験しその結果をもとに自己理解を深める	
	第6回	基礎的な精神病理や心理療法について学ぶ	
	第7回	発達臨床的視点から子どもの心の問題について学ぶ	
	第8回	保育や教育の場で出会う子どもの問題について自己の体験から考える	
	第9回	子どもの問題への理解と対応を考える	
	第10回	育児支援の視点から保護者との連携について考える	
	第11回	地域における各種支援機関との連携について学ぶ	
	第12回	困難事例での模擬体験を通して保護者対応を学ぶ	
	第13回	特別な支援が必要な事例について具体的な支援を検討する	
	第14回	特別な支援が必要な事例について総合的にまとめ、支援のプランを立てる	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	参考文献やプリントをもとに学習内容の補充や定着をおこなう。		
テキスト	主としてプリントを用いる。参考文献を活用する。		
参考文献	馬場禮子・青木紀久代著『保育に生かす心理臨床』 ミネルヴァ書房 青木紀久代編『いっしょに考える家族支援』明石書店 青木紀久代・矢野由佳子編『実践・発達心理学ワークブック』みらい		
評価方法	平常点(課題提出など) :40% 試験:60%		

保育臨床相談		前期 2 単位	3年
子どもの育ちを支えるために		山口 美和（やまぐち みわ）	
授業の到達目標 及びテーマ	○保育の中で出会う子どもの様々な問題を多面的に理解する。 ○保育の中で出会う問題に対して様々な援助の方法を理解する。 ○自分自身で、援助方法を考えられるようになる。		
授業の概要	授業の前半では、子どもの発達や子どもを理解する方法を知る。 授業の後半では、様々な事例について、グループディスカッションなどしながら、仲間同士の関係も含めて、子どもを理解し、援助の方法を考えていく。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	保育における子どもの理解	
	第3回	カウンセリングマインド	
	第4回	子どもの心の発達	
	第5回	子どもの心の問題	
	第6回	子どもの発達の問題	
	第7回	他児とのトラブルが多い子どもの事例	
	第8回	1人遊びの多い子どもの事例	
	第9回	集団の活動に参加しない子どもの事例	
	第10回	場面の切り替えに時間がかかる子どもの事例	
	第11回	友達と話さない子どもの事例	
	第12回	保護者に対するカウンセリング的アプローチ	
	第13回	子育て支援	
	第14回	外部機関との連携	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に、予習・復習の課題については指示する。		
テキスト	浜谷直人「保育力 子どもと自分を好きになる」（新読書社）。 その他、必要に応じて、資料等を配布する。		
参考文献	浜谷直人編著『仲間とともに自己肯定感が育つ保育 安心のなかで挑戦する子どもたち』（かもがわ出版）/浜谷直人編著『発達障害児・気になる子の巡回相談 すべての子どもが「参加」する保育へ』（ミネルヴァ書房）/芦澤清音『発達障がい児の保育とインクルージョン』（大月書店）その他、随時紹介する。		
評価方法	授業感想文:45% 試験:55%		

家族支援論		後期 2 単位	3年
子育て家庭への家族支援の視点とそのアプローチ		宮本 和武 (みやもと かずむ)	
授業の到達目標 及びテーマ	家庭の意義とその機能について理解をする。子育て家庭を取り巻く社会的状況について理解をし、その支援体制及び子育て家庭のニーズに応じた多様な支援の理解と関係機関との連携について理解をする。		
授業の概要	家族とは何か、家庭の変容と地域社会の変化と同時に子どもの育つ環境が大きく変化をしてきていることに着目し、子育て家庭への家族支援に焦点を合わせて、実施の事例をもとに考察ができるように授業を進めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション、家庭支援の必要性	
	第2回	家族とは、家庭とは	
	第3回	少子化と現代の子育て家庭	
	第4回	家庭支援の原理	
	第5回	男女共同参画社会とワークライフバランス	
	第6回	地域社会の変化と家庭支援の必要性	
	第7回	次世代育成支援施策と保育所・幼稚園の役割	
	第8回	保育所における子育て支援サービス①保育所入所児童の場合	
	第9回	保育所における子育て支援サービス②地域の子育て家庭の場合	
	第10回	現代社会における虐待・DVの問題とその実態	
	第11回	要保護児童及びその家族に対する支援①	
	第12回	要保護児童及びその家族に対する支援②	
	第13回	障がいのある子どもとその家族に対する支援	
	第14回	関係機関との協働と保育者の役割	
	第15回	子育て支援サービスの課題	
準備学習 (予習・復習等)	事前に配布した資料は次回の授業までに読んでおく。特に、新聞やニュースに関心を持っておくように心がける。		
テキスト	『保育者養成シリーズ 家族支援論』林邦雄・谷田貝公昭監修 (一藝社)		
参考文献	必要に応じて紹介していく。		
評価方法	定期試験:50% 課題提出:30% 授業感想文:20%		

児童福祉療育論		後期 2 単位	3年
障害のある子どもと家族の幸せを支援する療育のあり方		厚坂 幸子（あつさか さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	幼児期における療育システムは整備されているが、障害のある子どもと家族の、地域生活における課題は山積している。幼児期に留まらず学齢期を含めて、関係機関が果たす役割を理解する。また具体的事例を通して、障害があっても一人の子どもとして、当たり前前に生活するための望ましい環境を考察し、本人と家族に寄り添った総合的支援のあり方を理解する。		
授業の概要	講義が中心となるが、毎回授業感想や考察を記し次回授業で振り返る。障害を自分自身に引き寄せ、多様な視点で捉えられるようグループワークも随時行う。教育を含めてさまざまな障害福祉課題を取り上げながら、障害児者の生きにくさ・障害とは何かの本質に近づき療育を検証する。		
授業 計画	第1回	はじめに：療育とは何か・障害とは何か	
	第2回	早期発見・早期療育—そのシステムと現状	
	第3回	障害の特性—見える障害と見えない障害	
	第4回	障害受容のプロセス—寄り添う支援のあり方	
	第5回	家族（母、父、兄弟児）の状況と求められる支援のあり方	
	第6回	幼稚園・保育園での受け止め方	
	第7回	就学期（学校選び）の対応	
	第8回	学齢期に求められる療育（学校教育編）	
	第9回	学齢期に求められる療育（放課後編）	
	第10回	障害児童入所施設の現状と課題	
	第11回	権利擁護の仕組みと福祉オンブズパーソン活動実践	
	第12回	市民活動の意義と役割—「ともいくクラブ」実践より	
	第13回	地域生活支援—暮らしを総合的に支える新たな取り組み	
	第14回	日本の障害者福祉—カンボジア知的障害者支援から学ぶ	
	第15回	特別視と配慮の違いを考察する	
準備学習 (予習・復習等)	毎学習後に資料を見直す。		
テキスト	特に定めず、随時資料を配布する。		
参考文献	必要に応じて、その都度紹介する。		
評価方法	授業感想・考察:60% 試験:40%		

養護内容演習		後期 2 単位	3年
保育者としての自分の価値観に気づき、支援内容が価値観の影響を受けていることを学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）	
授業の到達目標及びテーマ	保育や福祉の現場で利用者やその家族を支援するときには、保育者一人ひとりの価値観が、支援方法・内容を大きく左右する。一人ひとりが自分の持っている価値観を理解し、それぞれの価値観が支援のあり方にどのように影響するのかを理解する。		
授業の概要	設定されたテーマについての仲間とのディスカッションを通して、自分の価値観がどのようなものかを理解する。さらに基本的なかかわり方の技法を学んだうえで、利用者だけでなく、利用者の家族に対する対応の仕方を学ぶ。さらに実習で体験した具体的な対人援助場面を取り上げ、ロールプレーを通して、より実践的な対人援助について学ぶ。		
授業計画	第1回	シラバスの紹介、グループ分け	
	第2回	グループディスカッション1 専門性とは何か	
	第3回	グループディスカッション2 命の価値について	
	第4回	グループディスカッション3 しょうがいは個性か	
	第5回	グループディスカッション4 だれが悪かったのか	
	第6回	ディスカッションまとめ	
	第7回	かかわるための技法1 傾聴とは	
	第8回	かかわるための技法2 カウンセリングの技法	
	第9回	かかわるための技法3 葛藤場面への対応	
	第10回	かかわるための技法4 インリアル・アプローチ	
	第11回	施設実習・統合保育場面のレポートの話し合い	
	第12回	ロールプレーの発表1	
	第13回	ロールプレーでの発表2	
	第14回	統合保育についてのまとめ	
	第15回	手紙を書こう	
準備学習 (予習・復習等)	特に予習の必要はないが、毎回のグループでの話し合うという経験が大切になるので、できる限り遅刻や欠席はしないこと。また授業後は、グループのディスカッションで得た自分の意見や友達の見解、教員のまとめの意見を整理しておくこと。		
テキスト	特になし。		
参考文献	必要に応じて指示する。施設実習、保育所実習、幼稚園実習での実習ノート。		
評価方法	授業後の感想レポート:40% 施設実習・統合保育のレポート:30% まとめレポート :30%		

家族の社会学		前期 2 単位	2・3年
家族を社会的視点から分析してみる。		井田 瑞江 (いだ みずえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	わたしたちにとって「身近で」「当たり前」で「不変である」と思われている家族を、客観的にとらえ直し、日本における家族の変化や現代の特徴、問題について理解する。		
授業の概要	時代の流れや社会の変化によって変化し続けてきた家族について、夫婦、親子といった家族関係に焦点を当て、変化や現代の特徴、問題点について解説していく。		
授業計画	第1回	家族って何だろう (家族形態、家族と世帯、家族の機能)	
	第2回	若者にとっての結婚 その1 (日本における結婚の特徴と変化)	
	第3回	若者にとっての結婚 その2 (未婚者の結婚観の特徴と変化)	
	第4回	結婚後の人生 (家族周期論)	
	第5回	標準家族の誕生と大衆化	
	第6回	日本人の人生パターン (ライフサイクルの変化、ライフコース論)	
	第7回	家族の世話をすること その1 (家事は誰の仕事?)	
	第8回	家族の世話をすること その2 (家事は楽な仕事か?)	
	第9回	家族の世話をすること その3 (老親の世話、介護)	
	第10回	夫婦の力関係 その1 (家庭内で強いのは夫?、妻?)	
	第11回	夫婦の力関係 その2 (日本における変化)	
	第12回	家族であるための条件 その1 (離婚、再婚、ステップファミリー)	
	第13回	家族であるための条件 その2 (夫婦別姓、事実婚)	
	第14回	家族であるための条件 その3 (シングルという生き方、同性婚、家族ペット)	
	第15回	これからの家族 (標準家族からの解放)	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時、課題を出す。 復習：参考文献を読んだり、インターネットで調べたりして、授業で取り上げた内容について理解を深める。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	長津美代子・小澤千穂子編著『新しい家族関係学』建帛社		
評価方法	定期試験:60% ミニレポート:40%		

子どもと法		前期 2 単位	2・3年
日本国憲法と子どもをめぐる法		村元 宏行 (むらもと ひろゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本国憲法の全体像を把握する。 ○教職に就くにあたっての憲法の基本的な知見を身に付ける。 ○子どもをめぐる法体系とその問題を理解する。</p>		
授業の概要	<p>この講義ではまず、国家の最高法規である日本国憲法について学び、次いで子どもに関する法体系とその問題点について取り上げます。日本国憲法では基本的人権が保障され、その中で教育を受ける権利が保障されています。それらの基本的人権は子どもにも当然に保障されるはずですが、現実にはさまざまな問題が横たわっています。それらについての理解を深めてほしいです。</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス (受講に際しての諸注意など)	
	第2回	憲法とは何か	
	第3回	日本国憲法の誕生	
	第4回	国民主権と象徴天皇制	
	第5回	憲法9条と平和主義	
	第6回	憲法と基本的人権 (人権の種類)	
	第7回	憲法と基本的人権 (自由権・社会権・参政権)	
	第8回	憲法が定める統治の仕組み	
	第9回	憲法改正問題	
	第10回	子どもをめぐる法体系	
	第11回	子どもの権利をめぐる	
	第12回	幼稚園と法	
	第13回	幼稚園教諭に求められる法律知識	
	第14回	幼稚園教諭に求められる法律知識 (実際事例を通じて)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>憲法については、毎時限毎のテーマについて、高校社会科で学んだ内容は最低限復習しておいてください。さらに新聞等で、子ども・憲法をめぐる時事問題の状況について把握しておいてください。</p>		
テキスト	<p>レジュメを配布しますので、テキストは使用しません。予習・復習のための文献は授業で紹介します。</p>		
参考文献	<p>『解説教育六法 2015年版』(三省堂)を持参してください。</p>		
評価方法	<p>小レポート:10% テスト:90%</p>		

地域社会と子ども		後期集中 2 単位	2・3年
地域における子どもの豊かな遊びを保障するために～子育ては地域で、自分たちの手で		天野 智子（あまの ともこ）	
授業の到達目標及びテーマ	地域住民が運営する子どもの遊び場「プレーパーク（冒険遊び場）：以下、PP」の実践や親たちの手による共同の子育て「自主保育」の活動への参加（フィールドワーク：以下、FW）と考察を通して、子どもの生活と遊び環境、子どもと大人との関係、子育てと地域のつながりについて考える。		
授業の概要	9月7日（月）2～5限は学内で講義とワークショップを行う。9月9日（水）、10日（木）、11日（金）、12日（土）は午前中から夕方まで学外（世田谷区内のPP等）でのフィールドワーク（以下、FW）と現地でのふり返しを行うため、終日アルバイトなど他の予定を入れない。学内授業欠席の場合、FWへの参加は不可。履修人数は上限15名。		
授業計画	第1回	子ども時代をふり返る～ワークショップ1	
	第2回	子ども時代をふり返る～ワークショップ2	
	第3回	PPと自主保育（視覚教材視聴と講義）	
	第4回	PPと出会う～オリエンテーション	
	第5回	PPを体験する～触れる・遊ぶ・作業する	
	第6回	放課後をPPで遊ぶ子どもたち	
	第7回	活動参加のふり返しとディスカッション	
	第8回	幼児・その親たちの活動への参加	
	第9回	親たちを囲んで～子育て中の親の声を聴く	
	第10回	放課後をPPで遊ぶ子どもたち	
	第11回	活動参加のふり返しとディスカッション	
	第12回	地域社会と子ども～ふり返しとディスカッション	
	第13回	地域社会と子ども～ふり返しとディスカッション	
	第14回	私の感じる「遊び・地域・子ども・大人」	
	第15回	まとめ～地域での子どもの豊かな遊びを保障するために	
準備学習 （予習・復習等）	集中講義に向けての準備として、前期に事前レポートを提出してもらう予定。詳細は受講者に別途知らせる。		
テキスト	天野秀昭『子どもはおとなの育ての親』ゆじょんとブックレットシリーズ③, 2002年		
参考文献	遊びの価値と安全を考える会『もっと自由な遊び場を』大月書店、羽根木プレーパークの会『冒険遊び場がやってきた！』晶文社（その他は授業で紹介する）		
評価方法	授業・FWの参加態度:50% FWノート:30% 事前・事後のレポート:20%		

本・子ども・大人 I		前期 2 単位	1年
子どもの本の豊かさー絵本の世界		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 絵本の多様性や重要性を理解できるようになる。 * 絵本を子どもに手渡すときの注意点や問題点が理解できるようになる。 * 長く読み継がれてきた絵本の特徴が理解できるようになる。 * 子どもの心に届く読み聞かせができるようになる。 		
授業の概要	様々なジャンルの絵本の特徴や見るべきポイントについて実物を例に挙げながら講義する。学生には、絵本の読み聞かせを実践してもらう。		
授業計画	第1回	イントロダクション：絵本とは何か	
	第2回	絵本の歴史と現在（世界）	
	第3回	絵本の歴史と現在（日本）	
	第4回	絵本を読むとはどういうことか	
	第5回	赤ちゃん絵本と認識絵本	
	第6回	言葉の絵本（あいうえお絵本、ABC絵本、言葉あそび絵本）	
	第7回	日常の冒険を描く絵本	
	第8回	ファンタジー絵本	
	第9回	世界を知るための絵本	
	第10回	文字がない絵本	
	第11回	科学の絵本と知識の絵本	
	第12回	しかけ絵本の功罪	
	第13回	高齢者のための絵本とビブリオセラピー	
	第14回	バリアフリーの絵本	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	絵本リーディング・マラソンを行う。各テーマごとに質問や意見をミニレポート形式で提出する。		
テキスト	必要に応じてプリント配布		
参考文献	授業の中で紹介		
評価方法	平常点・授業参加度：20% ミニレポート：20% 定期試験：60%		

本・子ども・大人Ⅱ		後期 2 単位	1年
絵本について知り、絵本をつくる		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ) 那須田 淳 (なすだ じゅん)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 絵本を実際につくることによって、より深くその世界を理解できるようになる。 * すぐれた作品の特徴が理解できるようになる。 * 絵本の構成や作家の工夫に目を向けることができるようになる。 		
授業の概要	講義+ワークショップ。さくまが絵本を総合的に見る部分、那須田がストーリー作成の部分を担当し、美術の久保制一先生にも制作指導をしていただき、多方面から絵本を理解できるようにする。また絵本作家にもゲストとして来ていただき、実作の現場でのお話もうかがう。		
授業計画	第1回	イントロダクション (さくま)	
	第2回	絵本とは何か (さくま)	
	第3回	絵本の展開について：起承転結のつくり方 (那須田)	
	第4回	絵本の文章について (那須田)	
	第5回	絵本の構造・構成とダミーづくり (さくま)	
	第6回	製本：本文と扉の用紙を束ねて背固め (さくま・久保)	
	第7回	製本：本文を裁断し表紙をつくる (さくま・久保)	
	第8回	製本：本文を表紙でくるんで完成 (さくま・久保)	
	第9回	絵の展開の仕方と絵コンテ：向き、水平線の使い方、アクターとステージ、アップと引き、視点の使い方など (さくま)	
	第10回	絵本作家に聞く (さくま)	
	第11回	絵本の流れと作家の工夫 (さくま)	
	第12回	よい絵本とは何か (さくま)	
	第13回	仕上がった絵本の合評会 (さくま・那須田)	
	第14回	仕上がった絵本の合評会 (さくま・那須田)	
	第15回	各自が作った絵本のプレゼンテーションと講評。教員たちによるシンポジウム (さくま・那須田・久保)	
準備学習 (予習・復習等)	受講者は必ず絵本リーディングマラソンを少なくとも1級までは終わらせておくこと。(用紙はさくまの研究室の前に用意してある)		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	松岡享子著『えほんのせかい こどものせかい』（日本エディタースクール出版部）ほか。随時紹介する。		
評価方法	平常点・授業参加度:40% 絵本制作:60%		

子どもの文学 I		前期 2 単位	2年
子どもの文学の歴史と現在		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 児童文学の多様性や重要性について理解できるようになる。 * 子どもにとって物語や文学がどのような意味をもつかを理解できるようになる。 * 各ジャンルの著名な作品について知り、読んで、意義を把握できるようになる。 		
授業の概要	児童文学の特徴や問題点について、画像やデータを示しながら紹介する。		
授業計画	第1回	イントロダクション：児童文学とは何か？	
	第2回	子どもに本は必要か？	
	第3回	声の文化と文字の文化	
	第4回	児童文学の歴史的な変遷	
	第5回	神話・伝説・昔話	
	第6回	昔話は残酷だって？	
	第7回	ディズニーの功罪	
	第8回	児童文学と差別	
	第9回	マイノリティをめぐる児童文学	
	第10回	ハリー・ポッターは名作か？	
	第11回	ファンタジーと日常の物語	
	第12回	YA文学とタブーの消滅	
	第13回	すぐれた児童文学作品とは？	
	第14回	すぐれた作品を探す	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	紹介された児童文学作品をなるべくたくさん読む。作家と作品については、担当を決めて簡単な発表もする。		
テキスト	必要に応じてプリント配布		
参考文献	『児童文学論』（リリアン・スミス）、児童文学の教科書（川端有子）、『幼い子の文学』（瀬田貞二）ほか適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:30% 提出物・発表:30% 期末レポート:40%		

子どもの文学Ⅱ		後期 2 単位	2年
作家と作品の間、文学と映像の間		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 著名な作品を読み、作家の生涯を知る。 * 文学作品とそれを映像化した作品の違いとそれぞれの特徴を理解する。 * 作家の想像力とその背景にあるものを理解する。 		
授業の概要	英米の著名な児童文学作家の生涯と、その作品の関係を考察する。原作と映像化されたもののイメージの違いを理解し、それぞれの特徴を考える。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	『ピーターラビットのおはなし』シリーズの絵本を読む	
	第3回	ビアトリクス・ポターの生涯と創作への動機	
	第4回	映画「Miss Potter」を見て、映像と文学の違いを考える	
	第5回	バレエ表現による「ピーターラビット」シリーズ	
	第6回	『クマのプーさん』を読む	
	第7回	A. A. ミルンの生涯と創作への動機	
	第8回	ディズニー版のアニメ映画を見て、原作との違いを考える	
	第9回	『影との戦い』を読む	
	第10回	アーシュラ・K・ル＝グウィンの生涯と創作への動機	
	第11回	ジブリ映画「ゲド戦記」と原作の距離	
	第12回	『ホビットの冒険』を読む	
	第13回	トールキンの生涯と創作への動機	
	第14回	映画「ホビットの冒険」と原作の違い	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	それぞれの文学作品を、事前に読んでおく。作家と作品については、担当を決めて簡単な発表もする。		
テキスト	『ピーターラビットのおはなし』（ポター）、『クマのプーさん』（ミルン）、『影との戦い』（ル＝グウィン）、『ホビットの冒険』（トールキン）など。		
参考文献	授業の中で随時紹介する。		
評価方法	授業参加度:30% 提出物・発表:40% 期末レポート:30%		

文学		後期 2 単位	3年
ファンタジー文学を旅する		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * ファンタジー文学について、すぐれた作品を知り、その特徴を理解する。 * ファンタジー文学の楽しさを理解する。 * 心に届くファンタジーの特徴をつかむ。 		
授業の概要	<p>絵本と読み物の両方を取り上げる。作品を読みながらファンタジーの特徴やおもしろさをつかむ。ゼミ形式。受講生は必ず作品を読むこと。本好きな学生に受講してほしい。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ファンタジーとは何か？	
	第3回	『人魚姫』と先駆者アンデルセン	
	第4回	『赤い蠟燭と人魚』と小川未明の時代	
	第5回	『ドリトル先生アフリカ行き』と動物のファンタジー	
	第6回	『星の王子さま』とさまざまな再版本	
	第7回	『かいじゅうたちのいるところ』とセンダックの魔法	
	第8回	『モモ』とドイツのファンタジー	
	第9回	『モモ』の映画と原作を比較する	
	第10回	日常の魔法	
	第11回	『精霊の守り人』と異世界	
	第12回	『ローワンと魔法の地図』にみる作者像	
	第13回	異世界の作り方	
	第14回	ファンタジー文学の評価法	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で取り上げる作品は事前に読んでおく。		
テキスト	上記にあげた作品		
参考文献	授業の中で随時紹介する		
評価方法	授業参加度:30% リアクションペーパー:40% 期末レポート:30%		

音楽		前期 2 単位	1年
音楽の基礎指導		飯田 千夏 (いいだ ちなつ)	
授業の到達目標 及びテーマ	楽譜を読むために必要な音楽の基礎的な知識を学ぶ事で、音楽の仕組みを理解する。また、様々な音楽活動を通して、歌う楽しさや喜びを経験し、幼児教育の現場で扱われる「こどものうた」を自らも楽しく歌うことができるようにする。		
授業の概要	第1回～第7回：C 1 B / 第8回～第14回：C 1 A / 第15回：A B 合同 音楽の基礎的な知識を歌唱（こどものうた）を通して身につけていく。また、歌唱においては、手・指・身体を動かしながら歌うことを体験していく。		
授業計画	第1回	うたに親しむ (楽譜についての基礎知識)	
	第2回	生活のうたを中心に歌う (ハ長調)	
	第3回	動物のうたを中心に歌う (ト長調)	
	第4回	季節のうたを中心に歌う (ヘ長調)	
	第5回	リズムや歌詞を活かして歌う	
	第6回	歌唱実技試験	
	第7回	合唱を楽しむ	
	第8回	うたに親しむ (楽譜についての基礎知識)	
	第9回	生活のうたを中心に歌う (ハ長調)	
	第10回	動物のうたを中心に歌う (ト長調)	
	第11回	季節のうたを中心に歌う (ヘ長調)	
	第12回	リズムや歌詞を活かして歌う	
	第13回	歌唱実技試験	
	第14回	合唱を楽しむ	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業で演習したこどものうたについては、歌唱技術やピアノ伴奏などの技能向上に日々研鑽すること。		
テキスト	こどものうた200・続こどものうた200 (チャイルド本社)		
参考文献	特になし		
評価方法	演習姿勢:50% 試験(実技・筆記):50%		

音楽		前期 2 単位	1年
音楽の基礎		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	芸術としての音楽の基礎、理解、発表。 より良い発声のための呼吸法の理解と実践、楽譜を読みこなせるように、写譜をすることにより記譜法を学び、調の理解、移調譜に取り組む。歌詞を理解し暗譜で歌う音楽表現の発表をする。		
授業の概要	2クラスに分かれて授業を進めます。 C1A 第1回～第7回及び第15回 C1B 第8回～第14回及び第15回 授業内容は、状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方、発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（1）	
	第2回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（2）、読譜の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（1）	
	第3回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（3）、読譜の基礎（2）、	記譜法の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（2）
	第4回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（4）、読譜の基礎（3）、	記譜法の基礎（2）、歌詞を理解して歌唱（3）
	第5回	発声（呼吸法の理解と実践）（1）、記譜法の実践-写譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（4）、幼児のための音楽表現（1）
	第6回	発声（呼吸法の理解と実践）（2）、記譜法の実践-移調譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（5）。幼児のための音楽表現（2）
	第7回	発表（歌）-歌詞を理解し暗譜で歌う音楽表現の発表をする	
	第8回	授業の進め方、発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（1）	
	第9回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（2）、読譜の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（1）	
	第10回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（3）、読譜の基礎（2）、	記譜法の基礎（1）、歌詞を理解して歌唱（2）
	第11回	発声の基礎（呼吸法の理解と実践）（4）、読譜の基礎（3）、	記譜法の基礎（2）、歌詞を理解して歌唱（3）
	第12回	発声（呼吸法の理解と実践）（1）、記譜法の実践-写譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（4）、幼児のための音楽表現（1）
	第13回	発声（呼吸法の理解と実践）（2）、記譜法の実践-移調譜の実践、	歌詞を理解して歌唱（5）。幼児のための音楽表現（2）
	第14回	発表（歌）-歌詞を理解し暗譜で歌う音楽表現の発表をする	
	第15回	レポート試験（課題提出）	
準備学習（予習・復習等）	発声の基礎の呼吸法は毎日短時間でも実践し、歌詞についてはその歴史的背景等を調べ、歌詞を理解して歌唱する。読譜の基礎的な学びは日々の繰り返しの継続が望ましい。記譜法の基礎、記譜法の実践-写譜の実践、記譜法の実践-移調譜の実践は復習をし課題を提出。発表（歌）-歌詞を理解し暗譜で歌う、繰り返し練習し音楽表現の発表をする。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 『日本童謡名歌110曲集』1、2（全音楽譜出版社）		
参考文献	必要な場合は、指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% レポート、発表の内容:40%		

音楽表現 I		後期 1 単位	1年
「こどものうた」と「打楽器」		飯田 千夏 (いいた ちなつ) 二ツ木 千由紀 (ふたつぎ ちゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	幼児教育の現場に必要なうたのレパートリーを広げるとともに歌唱技術の向上と表現力を養う。また、打楽器の幅広く多彩で奥深い表現力を自らの演奏を通して深めていくとともに、楽器の特徴とその奏法を理解する。うたと打楽器によるアンサンブルを通して音楽表現が豊かになることを自らの演奏を通して習得する。		
授業の概要	授業は「打楽器」「うた」「うたと打楽器」の3形態を適宜対応していく。「打楽器」の授業では様々な打楽器の基本奏法を学び、実際に楽器に触れながら演習していく。「うた」の授業では前期に引き続き、こどものうたのレパートリーを広げ演習する。また、コードネームを活かしたオリジナル伴奏の創作や、リズム楽器などを加え、自分たちでこどものうたをアレンジできるよう指導していく。		
授業計画	第1回	小物打楽器の奏法 ～タンブリン・カスタネット・トライアングル・マラカス～	
	第2回	夏・秋のうた&生活のうた	
	第3回	大物・小物打楽器の奏法 ～スネア・バスドラム・シンバル～	
	第4回	手遊びうた&わらべうた	
	第5回	ことばのリズム&ボディ・パーカッション	
	第6回	コードネームを活かしたオリジナル伴奏	
	第7回	特殊打楽器の奏法 ～ウッドブロック・ホイッスル・アゴゴ 他～	
	第8回	ラテンリズムのこどもうた&日本を感じるこどもうた	
	第9回	鍵盤打楽器の奏法 ～マリンバ・ヴィブラフォン～	
	第10回	歌い継がれるこどもうた	
	第11回	打楽器アンサンブル演習 ～ディズニー&ジブリ～	
	第12回	冬のうた&行事のうた	
	第13回	打楽器アンサンブル発表会	
	第14回	カスタネットアンサンブル ～カスタネット・アコーディオン・ピアノ・トライアングル・マリンバ～	
	第15回	創作表現付きこどもうた&合唱	
準備学習 (予習・復習等)	授業で演習したこどもうたについては、歌唱技術やピアノ伴奏などの技能向上に日々研鑽すること。		
テキスト	こどものうた200・続こどものうた200 (チャイルド本社) その他、適宜、配布資料を用いる。		
参考文献	打楽器事典：網代景介、岡田知之 共著		
評価方法	演習姿勢:80% 実技試験:20%		

音楽表現 I		後期 1 単位	1年
音楽表現の基礎		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の基礎の理解。 基礎的な音楽表現の実践、発表。コードネームの基礎を学び実践する。楽器の製作、童謡の歴史、演奏家の人生を知り、理解を深める。		
授業の概要	音楽表現、障害と音楽、楽器の製作、楽器の製作者、日本の童謡の歴史、演奏家の人生、等の理解。手作り創作楽器を発表する。 授業内容は状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	幼児のための音楽表現（1）	
	第3回	幼児のための音楽表現（2）	
	第4回	幼児のための音楽表現（3）	
	第5回	幼児のための音楽表現（4）	
	第6回	幼児のための音楽表現（5）	
	第7回	障害と音楽	
	第8回	弦楽器	
	第9回	演奏家の人生	
	第10回	発表(手作り創作楽器)	
	第11回	発表(手作り創作楽器)	
	第12回	クリスマスの音楽	
	第13回	日本の童謡	
	第14回	子守歌	
	第15回	レポート試験(課題提出)	
準備学習 (予習・復習等)	芸術としての音楽の基礎の理解のため、基礎的な音楽表現として、コードネームの基礎を日々繰り返し実践、楽器の製作で創作の力を養い、童謡の歴史、演奏家の人生を知り、資料収集し復習し、理解を深める。 音楽表現、障害と音楽、楽器の製作、楽器の製作者、日本の童謡の歴史、演奏家の人生、等の理解の為、資料収集し理解を深める。授業以外の課外製作により手作り創作楽器を製作し発表する。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 『日本童謡名歌110曲集』1、2（全音楽譜出版社）		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 発表、提出物の内容:40%		

音楽表現Ⅱ		前期 1 単位	2年
子供たちの心をひきつける		飯田 千夏 (いいだ ちなつ)	
授業の到達目標 及びテーマ	幼児教育現場の中で取り扱われているこどものうた、あそび歌、手遊びを習得し、実習や現場に出た時に必要とされる指導力を身につける。および、それらを展開するために必要な知識と技能を習得する。		
授業の概要	実習前は幼児教育現場に活かすことのできるこどものうた、あそび歌、手遊びなどを演習し、それに伴うきれいな日本語の発音、表情豊かに歌うことを身につけていく。実習後には、こどものうた、あそび歌、手遊びなどに、自ら創意工夫を凝らし、子供と共に楽しむための音楽活動を展開し、実践していく。		
授業計画	第1回	遊びを取り入れたうたを楽しむ	
	第2回	みんなの好きなうた・こどもの好きなうた	
	第3回	リズムを活かした音楽活動	
	第4回	詩を活かした音楽活動	
	第5回	楽しさをふくらませる工夫(1) パネルシアター	
	第6回	楽しさをふくらませる工夫(2) 創作や替え歌	
	第7回	楽しさをふくらませる工夫(3) 表現と動き	
	第8回	実践的な活動(1) 幼児の嗜好を探る	
	第9回	実践的な活動(2) 幼児の表現活動の特性を探る	
	第10回	実践的な活動(3) 幼児との音楽活動	
	第11回	こどもと楽しむためのコンサート～企画と選曲	
	第12回	こどもと楽しむためのコンサート～表現や動き	
	第13回	こどもと楽しむためのコンサート～簡易楽器の挿入	
	第14回	こどもと楽しむためのコンサート～合唱	
	第15回	こどもと楽しむためのコンサート リハーサル	
準備学習 (予習・復習等)	授業で演習したこどものうたについては、歌唱技術やピアノ伴奏などの技能向上に日々研鑽すること。		
テキスト	配布資料を用いる		
参考文献	「手遊びうた」(学事出版) 「うたっておどっておもちゃ箱」(教育芸術社) 「音楽広場 特別編集 1-8巻」(クレヨンハウス)		
評価方法	演習姿勢:60% 発表:40%		

音楽表現Ⅱ		前期 1 単位	2年
音楽表現の基礎と実践		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の理解。 音楽表現の基礎の理解と実践。 様々な音楽表現を通して音楽の総合的理解。		
授業の概要	発声と美しい発音の為のエクササイズ、記譜、幼児のための歌、歌唱と身体的表現、歌唱と伴奏表現。楽器の使用、身体的表現、等の、音楽表現の基礎の総合的な理解と実践。 授業内容は状況に応じて適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方、発声の基礎	
	第2回	幼児のための歌唱と身体表現 (1)	
	第3回	幼児のための歌唱と身体表現 (2)	
	第4回	歌唱と身体表現 (1)	
	第5回	歌唱と身体表現 (2)	
	第6回	幼児のための音楽表現と実践 (1)	
	第7回	幼児のための音楽表現と実践 (2)	
	第8回	音楽表現と実践 (1)	
	第9回	音楽表現と実践 (2)	
	第10回	音楽表現と実践 (3)	
	第11回	音楽表現と実践 (4)	
	第12回	音楽表現と実践 (5)	
	第13回	音楽表現と実践 (6)	
	第14回	音楽表現と実践 (7)	
	第15回	レポート試験	
準備学習 (予習・復習等)	音楽表現の基礎の理解と実践の為、発声と美しい発音の為のエクササイズは日々繰り返し、歌唱と身体的表現を深める。 記譜、幼児のための歌、歌唱と伴奏表現、楽器の使用、身体的表現を身に着けるの為、日々繰り返し復習し、様々な音楽表現を通して音楽の総合的理解を深める。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 他、一年次使用のものと同じ、配布資料も用いる。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 提出物の内容:40%		

音楽表現Ⅲ		後期 1 単位	2年
合唱・合奏		飯田 千夏 (いいだ ちなつ)	
授業の到達目標及びテーマ	音楽表現Ⅰ・Ⅱにおいて培ってきた音楽的能力を一段と高める事を目標とし、声や音を合わせて演奏する合唱・合奏を演習することで、アンサンブルの魅力・充実感・達成感を自らが体験する。また、ミュージカル・オペラなどの舞台芸術作品を通して豊かな感性と表現する力を養い、創造性を豊かにしていく。		
授業の概要	授業での演習曲については、履修者の希望を優先とし、意欲と技能により曲目や曲数について適宜対応していく。学年末には授業で手掛けてきた曲（合唱、合奏など）を取り入れた演奏会を開催。自分たちで選曲から構成まで行い、皆で音楽を作り上げ、仕上げていく。 過去の演習曲：NHK合唱コンクール課題曲、情熱大陸、ルパン三世、サウンド・オブ・ミュージック、天使のラブソングなど。		
授業計画	第1回	合唱曲・合奏曲の選曲	
	第2回	合唱（1） ～音とり・パート練習～	
	第3回	合唱（2） ～復習～	
	第4回	合唱（3） ～曲想作り・まとめ～	
	第5回	合奏（1） ～音とり・パート練習～	
	第6回	合奏（2） ～復習～	
	第7回	合奏（3） ～曲想作り・まとめ～	
	第8回	ミュージカル（1） ～歌唱・演技指導～	
	第9回	ミュージカル（2） ～動き・表現の創作～	
	第10回	ミュージカル（3） ～まとめ～	
	第11回	演奏会を企画する	
	第12回	演奏会のためのステップアップ（1） 練習	
	第13回	演奏会のためのステップアップ（2） 復習	
	第14回	演奏会のためのステップアップ（3） 全体の仕上げ	
	第15回	演奏会	
準備学習 (予習・復習等)	演奏は日々の積み重ねが大切です。できる範囲で各自、練習時間を作り、授業での合唱・合奏に臨むこと。		
テキスト	配布資料を用いる		
参考文献	特になし		
評価方法	演習姿勢:80% 発表:20%		

音楽表現Ⅲ		後期 1 単位	2年
音楽表現の理解と実践		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の理解。 音楽表現についての実践。 様々な音楽表現を通して音楽の総合的な理解と実践。		
授業の概要	発声と美しい発音の為のエクササイズ、幼児のための歌、歌唱と創作表現、歌唱と楽器を使用した身体表現、音楽表現の総合的な理解と実践。 授業内容は状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方、音の表現	
	第2回	音の表現	
	第3回	歌唱と創作表現 (1)	
	第4回	歌唱と創作表現 (2)	
	第5回	歌唱と創作表現 (3)	
	第6回	身体表現(歌唱と楽器等) (1)	
	第7回	身体表現(歌唱と楽器等) (2)	
	第8回	幼児のための音楽表現と実践 (1)	
	第9回	幼児のための音楽表現と実践 (2)	
	第10回	音楽表現と実践 (1)	
	第11回	音楽表現と実践 (2)	
	第12回	音楽表現と実践 (3)	
	第13回	音楽表現と実践 (4)	
	第14回	音楽表現と実践 (5)	
	第15回	レポート試験	
準備学習 (予習・復習等)	芸術としての音楽の理解の為、音楽表現の実践は、発声と美しい発音の為のエクササイズは日々繰り返し、幼児のための歌、歌唱と創作表現、歌唱と楽器を使用した身体表現は継続して予習、復習として日々研鑽することにより、音楽表現の総合的な理解と実践を深める。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 他、一年次使用のものと同じ、配布資料も用いる。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 提出物の内容:40%		

音楽総合表現		前期 2 単位	3年
音楽表現の実践、音楽の総合的な理解。		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	芸術としての音楽の理解。 音楽表現についての理解と実践。 様々な音楽表現を通して音楽の総合的な理解。		
授業の概要	楽器の使用、身体的表現、ドキュメンタリーを通して、等、音楽表現の総合的な理解。 授業内容は状況に応じて、適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	音楽表現と実践 (1)	
	第3回	音楽表現と実践 (2)	
	第4回	幼児のための音楽表現と実践 (1)	
	第5回	幼児のための音楽表現と実践 (2)	
	第6回	音楽表現と実践 (1)	
	第7回	音楽表現と実践 (2)	
	第8回	ドキュメンタリーを通して研究、考察 (1)	
	第9回	ドキュメンタリーを通して研究、考察 (2)	
	第10回	ドキュメンタリーを通して研究、考察 (3)	
	第11回	音楽鑑賞を通して研究、考察 (1)	
	第12回	音楽鑑賞を通して研究、考察 (2)	
	第13回	音楽表現のまとめ (1)	
	第14回	音楽表現のまとめ (2)	
	第15回	レポート試験	
準備学習 (予習・復習等)	芸術としての音楽表現についての理解と実践の為、楽器を使用してそれを、身体的表現として日々繰り返し復習し、ドキュメンタリーを通して理解し、研鑽し様々な音楽表現を通して音楽表現の総合的な理解を深める。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ 子どもの音楽表現』（保育出版社） 他、一年次、二年次使用のものと同じ、配布資料も用いる。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	授業内での積極性:60% 提出物の内容:40%		

音楽総合表現		前期 2 単位	3年
THE SOUND EXPLORER:実験的音（音楽）表現とその実践		吉仲 淳（よしなか あつし）	
授業の到達目標 及びテーマ	オーセンティックなノーテーションを用いる音楽のみならず環境音などの生活に溢れている音や身体の動きや状態などにも注目し様々な音に対する表現の可能性を探求する。そこから見える芸術表現領域における最重要課題の発見（音楽テクニックやプラクティスの所在など）をテーマとする。それをもとに自らの音楽観の再構築を目指すこと。		
授業の概要	講義と実技の両面から進める。聴覚（Aural-Skill）が主体となる音楽的な材料だけでなく筋肉組織での音楽記憶（Musical Muscular-Memory）などの芸術表現における身体知（Kinesthetic-Skill）や空間の感覚（Spatial-Skill）などの間主観的共通感覚的な材料を検討し、聴覚だけに頼ることのない音の聴取（The Second Auditory Senses）を考える。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 他	
	第2回	音の自分史	
	第3回	音の自分史 その2	
	第4回	音環境	
	第5回	音環境 その2	
	第6回	音環境のノーテーション化	
	第7回	音にならない世界の音	
	第8回	Graphic Notation	
	第9回	Graphic Notation 2 : モーション化	
	第10回	作曲とインプロビゼーション	
	第11回	作曲とインプロビゼーション 2	
	第12回	子どものための作曲法	
	第13回	レポート課題および作品のデザイン発表	
	第14回	プレゼンテーション	
	第15回	プレゼンテーション 2 および総括	
準備学習 (予習・復習等)	本講座の名称である「音楽総合表現」を「音楽」「総合」「表現」と解体した上で、その一つ一つについて定義しておくことが望ましい。また、「総合」という意味、または「音楽」と「表現」を接続させている意義についても検討しておくこと。第一回の授業において発表してもらうことになっている。		
テキスト	マリー・シェーファー著『音さがしの本』（春秋社）		
参考文献	マリー・シェーファー著『サウンド・エデュケーション』（春秋社）ほか		
評価方法	積極的に関わる姿勢:50% 提出物その他:50%		

器楽 I	前期 1 単位	1年
楽器の演奏をする一楽器に親しむ・基礎技能を学ぶ		
<p>【担当教員】 青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、大家 百子（おおや ももこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐々木 順子（ささき じゅんこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 眞美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> ○ 音楽の表現を通して豊かな音楽性と芸術性を深めるような学びをする ○ 幼稚園・保育園をはじめとする、子どもの教育・保育にたずさわる人々に必要な「器楽の基礎技能」を習得する ○ ピアノ演奏を中心に、アコーディオン演奏も取り入れ自由に弾けるようにする</p> <p><授業概要> 幼児期から現在までの各学生における音楽経験等を配慮しながら、個々にふさわしい教材を通して音楽性と基礎技能をつけていく メトード・ローズ、バイエル、ブルグミュラー、ソナチネ、ソナタ等を通じてピアノの演奏技術を学ぶとともに、子どもの歌の伴奏、弾き歌いなどの経験を積む。保育の場で使用される比較的簡単な教材（行進曲、スキップの曲、子どもの歌の伴奏など）が演奏できるようになることが望ましい</p> <p><授業計画> 第 1回 オリエンテーション。授業の内容や進め方の説明。各学生の課題を決める 第 2回～第15回 ピアノ教則本・子どもの歌などを教材にした、個人レッスンおよび少人数制のグループレッスン 詳しい内容についてはそれぞれの進度により異なる 定期試験期間 実技試験</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は 8：45 から 19：45 まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール 2F の器楽室は 9：00 - 16：45 で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。</p> <p><進め方> 入学時に実施する「器楽履修調査票」と「自己申告票」に基づいて 13 クラスに分ける 各学生の進度に応じて原則として個人レッスンを行うが、グループレッスンを取り入れる場合もある</p> <p>※『アコーディオン・クラス』 「1クラス」だけピアノとアコーディオンの両方を学ぶクラスを設ける アコーディオンは、アンサンブルの楽しみもあり、また保育の場では子どもの状態をよく見ながら演奏できることと、園舎外で手軽に伴奏できる利点がある 前期では、ピアノの技術を身に付け音楽性を育てながら、コードの習得に努めアコーディオンの演奏能力を少しずつつけていく</p> <p><テキスト> マニアンテ アコーディオン教則本（1） トンボ アコーディオン教則本（初・中級） <参考文献> アコーディオンの本（春秋社）など</p> <p><共通テキスト> やさしく・たのしく・いきいきと弾ける『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社） 『こどものうた 200』（チャイルド本社） 『続こどものうた 200』（チャイルド本社） 『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社）</p> <p><評価方法> 担当教員が評価する。各段階に応じた課題曲が出題され実技試験を実施する 授業参加度 50%、実技試験 50% を基準とする</p>		

器楽Ⅱ	後期 1 単位	1年
楽器の演奏をする—基礎技能を学ぶ—		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、大家 百子（おおや ももこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐々木 順子（ささき じゅんこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 真美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 教科課程上は、選択科目であるが、幼稚園教諭や保育士の資格取得希望者は、実習や就職につながる点で履修することが望ましい実技科目である 11月には幼稚園実習もあるので「器楽Ⅰ」で習得した技術や弾き歌いなどの経験をさらに発展させ、より高い音楽性を養うとともに実践力を養う ○ 人前で演奏する力を身につけるとともに、お互いの演奏を聴きあうことを目標にした発表会を行う 		
<p><授業の概要></p> <p>クラス分けは、原則的には前期の「器楽Ⅰ」と同じにして継続学習を基本にする</p> <p>各学生の進度に応じた個人レッスンを中心に進めるが、グループレッスンも適宜取り入れる</p> <p>ピアノとアコーディオンの併用授業も「1クラス」開講する</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回～第4回 主に発表会準備を含む個人およびグループレッスン</p> <p>第5回 発表会（予定）</p> <p>第6回～第15回 ピアノ曲、子どもの歌などを教材にした個人およびグループレッスン</p> <p>定期試験期間 実技試験</p>		
<p><準備学習（予習・復習等）></p> <p>音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00～16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。</p>		
<p><テキスト></p> <p>* 共通テキスト</p> <p>やさしく・たのしく・いきいきと弾ける『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社）</p> <p>『こどものうた200』（チャイルド本社）</p> <p>『続こどものうた200』（チャイルド本社）</p> <p>『新・幼児の音楽教育』（朝日出版）</p>		
<p><参考文献></p> <p>必要に応じ、随時紹介していく</p>		
<p>※『アコーディオンクラス』</p> <p>「1クラス」だけピアノとアコーディオンの両方を学ぶ</p> <p>アコーディオンは、アンサンブルの楽しみもある</p> <p>また保育の場では子どもの状態をよく見ながら演奏できることと園舎の外で手軽に伴奏できる利点がある</p> <p>前期に引き続きアコーディオンの演奏能力をピアノの学びをしていく</p> <p>合奏にも取り組む。</p> <p>[テキスト]</p> <p>マニアンテ アコーディオン教則本（1）</p> <p>トンボ アコーディオン教則本（初・中級）</p> <p>[参考文献]</p> <p>アコーディオンの本（春秋社）など</p>		
<p><評価方法></p> <p>担当教員が評価する。各段階に応じた課題曲が出題され実技試験を実施する</p> <p>授業参加度50%、実技試験 50% が基準となる</p>		

器楽Ⅲ	前期 1 単位	2年
楽器の演奏をする—基礎技能の習得・音楽の理解—		
<p>【担当教員】 青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほ（ちば かほ）、藤城 眞美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> ○ 選択科目であるが、6月に幼稚園実習をひかえているので、初歩から始めた人は特に努めて履修することが望ましい ○ 1年次に習得した基礎技術や音楽への理解をより深め、豊かなものにしていく ○ 子どもの歌の伴奏や弾き歌いを多く経験することにより実践的な力も身に付けていく</p> <p><授業の内容> 2年次には、ピアノの他にアコーディオン、オルガンのクラスを設けている 短期間の学習であるから、あまり目先のことにとらわれず、各進度に応じて、音楽的に優れた曲を弾きこみながら実際の教材も併用し、土台づくりを中心としていく</p> <p><授業の概要> 1年次同様、基本的には個人レッスンであるがグループレッスンを併用しているクラスもある なお、初歩的な学びの中にある履修者に対してより丁寧な手ほどきを意図する『基礎クラス』（教員の判断を総合して決める）を設ける また、難易度の高い曲を弾ける人も、練習をかさねて、更なる展開や応用の力を培うことがのぞまれる</p> <p><授業計画> 第1回 オリエンテーション 第2回～第15回 個人およびグループレッスン 定期試験期間 実技試験</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00—16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。</p> <p><テキスト> 1年次の『共通テキスト』を続けて使用するが、進度に応じて新しい教材を加えることもある</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく</p> <p>※『アコーディオンクラス』</p> <p>[授業内容と進め方] 実技による授業が中心になる。 教則本を中心に、中級程度までの演奏能力をつける左手（ベース）の和音（コード）のメカニクを童謡の曲等で習得する</p> <p>[テキスト] 「マニアンテ アコーディオン教則本」（1） 「トンボ アコーディオン教則本」（初・中級）</p> <p>[参考文献] 「アコーディオンの本」（春秋社）ほか</p> <p>※『オルガンクラス』</p> <p>[授業内容と進め方] 礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ 手鍵盤だけではなく、足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする 同時にオルガンの構造等についての理解を深める</p> <p>[テキスト] 次の中から各自の進度に合わせて選ぶ 「オルガニスト・マニュアル」（バックスビジョン出版）、 「教会オルガン基礎教程」（ウルフオード）、 「J. S. Bachオルガン曲集」等</p> <p>[参考文献] 必要に応じ、随時紹介していく</p> <p><評価方法> 担当教員が評価する。授業参加度50%、実技試験50%を基準とする</p> <p>★付記 この「器楽Ⅲ」は、将来の幼稚園（保育園）等の就職に必要な基礎的技能であることを踏まえて、積極的に履修することが望まれる</p>		

器楽Ⅳ	後期 1 単位	2年
楽器を演奏する一演奏技能の習熟と音楽性の土台を築くー		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かほる）、藤城 眞美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ○選択科目であるが、11月に保育所実習もひかえているので、初歩から始めた人を中心になるべく履修することが望ましい ○2年前期に習得した基礎技術や音楽への理解をより深め、豊かなものにしていく ○子どもの歌の伴奏や弾き歌いを数多く経験することにより実践的な力も身に付けていく ○人前で演奏する力をつけるとともに、お互いの音楽を聴き合うことを目標にした小発表会を適宜行う 		
<p><授業の概要></p> <p>2年次には、ピアノの他にアコーディオン、オルガンクラスを開講している 短期間の学習であるから、あまり目先のことにとらわれず、各進度に応じて、音楽的に優れた曲を弾きこみながら 実際の教材も併用し、土台づくりを中心としていく</p>		
<p><進め方></p> <p>1年次同様、基本的には個人レッスンであるがグループレッスンを併用しているクラスもある なお、初歩的な学びの中にある履修者に対してより丁寧な手ほどきを意図した『基礎クラス』（教員の判断を総合して決める） を設ける また、難易度の高い曲を弾ける人も、さらに練習を重ねて、更なる展開や応用の力を培うことが望ましい 所属するクラス編成は原則として前期の「器楽Ⅲ」と同じにして継続学習を基本とする</p>		
<p><授業計画></p> <p>第1回～第4回 発表会準備を中心とした個人およびグループレッスン 第5回 発表会（予定） 第6回～第15回 個人およびグループレッスン 定期試験期間 実技試験</p>		
<p><準備学習（予習・復習等）></p>		
<p>音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の 学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけ て使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00ー16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵 を借りて使用すること。</p>		
<p><テキスト> 1年次の『共通テキスト』を続けて使用するが、進度に応じて新しい教材を加えることもある</p>		
<p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく</p>		
<p>※『アコーディオンクラス』</p>		
<p><授業の概要と進め方></p> <p>実技による授業が中心になる 後期なので、アンサンブル（合奏）の楽しさを体験学習する</p>		
<p><テキスト> マニアンテ アコーディオン教則本（1） トンボ アコーディオン教則本（初・中級）</p>		
<p><参考文献> アコーディオンの本（春秋社）ほか</p>		
<p>※『オルガンクラス』</p>		
<p><授業の概要と進め方></p> <p>礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ 手鍵盤だけではなく足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする 同時にオルガンの構造についての理解を深める</p>		
<p><テキスト></p> <p>次の中から各自の進度に合わせて選ぶ。</p> <p>『オルガニスト・マニアル』（バックスビジョン出版） 『教会オルガン基礎教程』（ウルフオード） 『J. S. Bachオルガン曲集』等</p>		
<p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく</p>		
<p><評価方法> 担当教員が評価する。授業参加度50%、実技試験50%を基準とする</p>		
<p>（付記）</p> <p>この「器楽Ⅳ」は、将来の幼稚園・保育所等の就職に必要な基礎的技能であることを踏まえて積極的な履修が望まれる</p>		

器楽Ⅴ	前期 1 単位	3年
楽器の演奏 — ピアノ・アコーディオン・オルガン・ギター —		
【担当教員】		
青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐藤 紀雄（さとう のりお）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 真美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）		
<授業の到達目標及びテーマ>		
○ 受講者の進度に応じて各楽器に親しんでいくと共に、演奏技術の向上や音楽性の涵養に努める ○ 3年次の保育所や施設での実習にも配慮し、また就職試験や現場で多く取り入れられている初見や移調などにも取り組む		
<授業の概要>		
原則として、個人指導によるピアノ・アコーディオン・オルガン・ギタークラスの授業を開講している		
特にギタークラスは3年次から開講する		
各進度に応じて、音楽的に優れた曲、実際の教材、受講生の希望なども取り入れながら、曲を弾きこみんでいきよりグレードアップに努める		
<進め方>		
受講者の進度に応じた個別指導を中心に進める		
3年次での器楽Ⅴでは、各進度の違いを踏まえた混合クラスを基本にした編成で相互に刺激しあいながら学ぶ		
保育士資格取得を希望する人は、保育現場で使用する教材を優先的に学ぶことができる		
また、ピアノ連弾によるアンサンブルの経験も持つようにしたいと考えている		
パイプオルガンは、礼拝堂で授業を行う		
<授業計画>		
第1回 オリエンテーション		
第2回～第15回 それぞれの進度に応じた個人およびグループレッスン		
定期試験期間 実技試験		
<準備学習（予習・復習等）>		
音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00—16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。		
<テキスト>		
やさしく・たのしく・いきいきと弾ける『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社）		
『幼児の音楽教育—音楽的表現の指導—』（音楽教育研究協会）その他		
<参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく		
※『アコーディオンクラス』		
<授業の概要と進め方>		
実技による授業が中心になる。		
教則本を中心に、演奏能力をつける。合奏の楽しさを体験学習することにも取り組む。		
<テキスト> マニアンテ アコーディオン教則本（1）		
トンボ アコーディオン教則本（初・中級）		
<参考文献> 「アコーディオンの本」（春秋社）ほか		
※『オルガンクラス』		
<授業の概要と進め方>		
礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ		
手鍵盤だけではなく、足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする		
オルガンの構造等についての理解も深める		
<テキスト>		
次の中から各自の進度に合わせて選ぶ		
『オルガニスト・マニアル』（バックスビジョン出版）		
『教会オルガン基礎教程』ウルフオード		
『J. S. Bachオルガン曲集』等		
<参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく		
※『ギタークラス』		
<授業の進め方>		
簡単な基礎を学び、易しい曲や伴奏を実践してみる		
<テキスト>		
小原安正監修『教室用ギター教本』ギタラ社		
<評価方法> 担当教師で行う。 授業参加度50%、実技試験 50% を基準とする		
【履修条件】		
3年次からの履修も可能である。		
なお、幼稚園や保育園等の就職に必要な基礎技能となることを踏まえて積極的な履修が望まれる		

器楽Ⅵ	後期 1 単位	3年
<p>ピアノ・アコーディオン・オルガン・ギターの演奏を学ぶ一更なる演奏技術の向上や音楽性の涵養に努める一</p>		
<p>【担当教員】</p>		
<p>青柳 志保（あおやぎ しほ）、飯島 まゆみ（いいじま まゆみ）、今泉 美由紀（いまいずみ みゆき）、大賀 久仁子（おおが くにこ）、北濱 美加（きたはま みか）、小高 まき子（こたか まきこ）、佐藤 紀雄（さとう のりお）、関 小百合（せき さゆり）、千葉 かほる（ちば かおる）、藤城 真美（ふじしろ まみ）、山岡 伸寛（やまおか のぶひろ）、湯口 依子（ゆぐち よりこ）</p>		
<p><授業の到達目標及びテーマ> ○ 受講者の進度に応じて各楽器により一層親しんでいくと共に、更なる演奏技術の向上や音楽性の涵養に努める ○ 3年次の保育所・施設実習のアフターケアにも配慮し、また就職試験や現場で多く取り入れられている初見や移調などができるようになる</p>		
<p><授業の概要> 原則として、個人指導によるピアノ・アコーディオン・オルガン・ギタークラスを開講している 各進度に応じて、音楽的に優れた曲を弾きこみながら実践的な教材も併用し、継続学習により更なるグレードアップに努める また、人前で演奏する力をつけるとともに、お互いの音楽を聴き合うことを目標にした発表会を実施する</p>		
<p><進め方> 受講者の進度に応じた個別指導を中心に進める なお、3年次「器楽Ⅵ」では各進度の混合グループで相互に刺激しあいながら学ぶ 所属するクラス編成は原則として前期の「器楽Ⅴ」と同じにして継続学習を基本とする 保育士資格取得を希望する人は、保育現場で使用する教材を優先的に学ぶことができる また、ピアノ連弾によるアンサンブルの経験も持つようにする パイプオルガンは、礼拝堂で授業を行う</p>		
<p><授業計画> 第 1回～第 7回 発表会準備を含む個人およびグループレッスン 第 8回 発表会（予定） 第 9回～第15回 個人およびグループレッスン 定期試験期間 実技試験</p>		
<p><準備学習（予習・復習）等> 音楽性と基礎技能の修得は日々の修練によるところが大きい。器楽室は授業時間以外は8：45から19：45まで子ども学科の学生は自由に各自の時間割の空き時間に練習が出来るので活用することが望ましい。音楽室も同様に音楽準備室の副手に声をかけて使うことができる。なお、ウェスレーホール2Fの器楽室は9：00ー16：45で、普段は施錠されているので音楽準備室で鍵を借りて使用すること。</p>		
<p><テキスト> 『子どもと遊ぶピアノ曲』（音楽之友社） 『幼児の音楽教育―音楽的表現の指導―』（音楽教育研究協会） その他 <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく</p>		
<p>※『アコーディオンクラス』 <授業の概要と進め方> 実技による授業が中心になる。教則本を中心に、演奏能力をつける 合奏の楽しさを体験学習することにも取り組む。 <テキスト> マニアンテ アコーディオン教則本（1） トンボ アコーディオン教則本（初・中級） <参考文献> 「アコーディオンの本」（春秋社） ほか</p>		
<p>※『オルガンクラス』 <授業の概要と進め方> 礼拝堂のパイプオルガンを使用して、オルガンの基礎的な奏法を学ぶ 手鍵盤だけでなく、足鍵盤のパートのついた曲も演奏できるようにする オルガンの構造等についての理解も深める <テキスト> 次の中から各自の進度に合わせて選ぶ 『オルガニスト・マニュアル』（バックスビジョン出版） 『教会オルガン基礎教程』ウルフオード 『J. S. Bachオルガン曲集』等 <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく</p>		
<p>※『ギタークラス』 <授業の概要と進め方> 基本の技術を学びながら易しい曲や歌の伴奏付けをする <テキスト> 小原安正監修『教室用ギター教本』ギタールラ社</p>		
<p><評価方法> 授業参加度50%、実技試験 50% を基準とする</p>		
<p>【履修条件】 3年次からの履修も可能である なお、幼稚園や保育園等の就職に必要な基礎的スキルとなることを踏まえて積極的に履修することが望まれる</p>		

図画工作 I		前期 1 単位	1年
芸術表現の原体験 part 1 ー平面造形の制作を主体にー		金子 智香 (かねこ ちか) 久保 制一 (くぼ せいいち)	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもたちは実に自由でのびやかに絵を描きながら自在に表現する世界をひろげていく。新鮮な出会いと彷徨、冒険と実験、破壊と創造をダイナミックに展開する。誰もがかつてはこの「小さな芸術家」であった。この「小さな芸術家」と共感できる感性と創造の魂の再構築をめざし、制作する中から自由に表現するすばらしさを実感することができる。		
授業の概要	油絵を2-3枚描く。描く途上で幼い頃の自由でのびやかな魂を呼び醒まし、自分の「形」自分の「色」を発見しながら、絵を描く楽しさや創造するよろこびを体感し学んでいく。学外授業で展覧会に出掛ける場合もある。作品にはタイトルをつけ期日までに提出。絵具で汚れてもいい「仕事着」を着用。油絵具の道具の購入については4月「履修ガイドンス」で説明する。		
授業計画	第1回	なぜ油絵を描くのか 道具の準備	
	第2回	油絵の楽しみ 絵具や筆のこと	
	第3回	油絵 イントロダクション 小さな絵を描く	
	第4回	油絵を描く 1 「art work 1」何を描くか決める	
	第5回	油絵を描く 2 「art work 1」F10号キャンバスに描く	
	第6回	油絵を描く 3 「art work 1」絵の具をたっぷりと	
	第7回	油絵を描く 4 「art work 1」サインをいれて完成	
	第8回	学外授業 美術展覧会 鑑賞 (予定)	
	第9回	油絵を描く 6 「art work 2」キャンバスに下塗り	
	第10回	油絵を描く 7 「art work 2」絵の具をたっぷりと	
	第11回	油絵を描く 8 「art work 2」色を混ぜる	
	第12回	油絵を描く 9 「art work 2」かたちを見つける	
	第13回	油絵を描く 10 「art work 2」サインをいれて完成	
	第14回	合評会 1 クラス全員の油絵を鑑賞し講評を聞く	
	第15回	合評会 2 クラス全員の油絵を鑑賞し講評を聞く	
準備学習 (予習・復習等)	特になし		
テキスト	テキストではないが、絵の具、筆などの油絵の道具が必要になる		
参考文献	展覧会の絵。短大図書館の美術書コーナーの画集。 通学の車窓からの景色。隣にいる人。散歩している犬・・・		
評価方法	授業への参加度:30% 作品・レポート:70%		

図画工作Ⅱ		後期 1 単位	1年
芸術表現の原体験 part2 ー平面造形の制作をさらにー		金子 智香 (かねこ ちか) 久保 制一 (くぼ せいいち)	
授業の到達目標 及びテーマ	筆を持つ手は思うようにのびやかに動いてくれない。感性は常識と固定概念でしなやかさを失いかけている。冒険するには勇気が足りない。でも子どものように自由でのびやかに絵を描くことができれば素敵だと想う。ここで、冒険心と勇気をもって絵を描いてみるなかからいつしか自由なartの世界の中にいる自分にふと気づく時が必ず訪れるであろう。		
授業の概要	油絵を2枚描く。主に人間をテーマに油絵を自由な発想で描いていく。幼い日の自由な魂を呼び醒まし、自分のフォルムやカラーを発見しながら、ダイナミックに個性豊かな造形表現の可能性を追求し、絵を描く楽しさ・創造するよろこびをさらに深めていく。「仕事着」を着用。油絵具の追加、キャンバスの購入は第1回の授業で説明する。		
授業計画	第1回	木炭で絵を描く 「ドローイング 1」	
	第2回	木炭で絵を描く 「ドローイング 2」	
	第3回	学外授業／美術館でArtを鑑賞する	
	第4回	油絵を描く1 「art work 3」F10号キャンバスに描く	
	第5回	油絵を描く2 「art work 3」絵の具をたっぷりと	
	第6回	油絵を描く3 「art work 3」絵の具を混ぜてみる	
	第7回	油絵を描く4 「art work 3」背景とのバランスをとる	
	第8回	油絵を描く5 「art work 3」 サインを入れて制作終了	
	第9回	「アートドキュメントムービー」とワークショップ	
	第10回	油絵を描く6 「art work 4」ドローイング	
	第11回	油絵を描く7 「art work 4」F10号キャンバスに描く	
	第12回	油絵を描く8 「art work 4」カタチを見つける	
	第13回	油絵を描く9 「art work 4」色の発見	
	第14回	油絵を描く10 「art work 4」サインを入れて制作終了	
	第15回	合評会 クラス全員の油絵作品を鑑賞し講評を聞く	
準備学習 (予習・復習等)	特になし		
テキスト	特になし		
参考文献	展覧会の絵。短大図書館の美術書コーナーの画集。 森羅万象、この世界のすべてがモチーフ。		
評価方法	授業への参加度:15% 作品・レポート:85%		

造形表現 I	前期 1 単位	2年
芸術表現の原体験 part3 ー立体造形の制作を主体にー		
<p>【担当教員】 久保 制一（くぼ せいいち）、長江 眞弥（ながえ なおや）、本田 悦久（ほんだ よしひさ）</p> <p><授業の到達目標およびテーマ> 1年次の図画工作 I・II では油絵を描き平面の芸術表現に取り組んだが、ひきつづいて2年次のこの授業では、立体の造形表現の可能性を探究する。奥行きを把握することで「もの」の形を全面的・立体的に洞察することができ、それを再構成するなかで「もの」の本質理解に一步近づけることを実感しつつ、視覚だけではなく五感のすべてを稼働させてフォルムの発見をしていく。素材との出会い、道具の用法・立体としての構造など多くのことを学びながら、自分のフォルムを見つけ出していく。この工作のプロセスを通じて「手と心で考える」という芸術表現のマインドを実践的に深く感じとり学ぶことができるであろう。</p> <p><授業の概要> 立体造形の作品制作の授業。素材は主に紙を使用予定。3名の教員によるチームティーチング。受講生は「仕事着」を着用。</p> <p><授業計画> 【前期】 第1回 立体の作品をつくるということ</p> <p>第2回 2015年度のテーマを提示 デッサンを描く 1</p> <p>第3回 デッサンを描く 2</p> <p>第4回 作品のイメージスケッチ 素材との出会い</p> <p>第5回 素材の研究 素材の選択 道具の用法</p> <p>第6回 art work 制作 1「素材選択」</p> <p>第7回 art work 制作 2「素材収集」</p> <p>第8回 art work 制作 3「かたち」</p> <p>第9回 art work 制作 4「構造」</p> <p>第10回 art work 制作 5「パーツ制作1」</p> <p>第11回 art work 制作 6「パーツ制作2」</p> <p>第12回 art work 制作 7「組み立て」</p> <p>第13回 art work 制作 8「仕上げ」</p> <p>第14回 art work 作品の提出</p> <p>第15回 art worksの発表＋講評の会</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 日常生活のなかでも感覚を研ぎすませていると見えてくる何かがある。 そんな瞬間をちょっとで持つことができるといい。</p> <p><テキスト><参考文献> 森羅万象、この地球上のあらゆるものの色や形やマチエールがモチーフとなる。</p> <p><評価方法> 授業への参加度:15% レポートと作品:85%</p>		

造形表現Ⅱ	後期 1 単位	2年
芸術表現の原体験 part 4 ー立体造形の制作の更なる深化ー		
<p>【担当教員】 久保 制一（くぼ せいいち）、長江 眞弥（ながえ なおや）、本田 悦久（ほんだ よしひさ）</p> <p>＜授業の到達目標およびテーマ＞ 造形表現Ⅱは造形表現Ⅰに引き続き立体の作品を制作する。五感のすべてを稼働させて形の発見をしていく。その中で立体的な形態の把握をし再構成することが徐々に実感できてくるとその存在感やなしとげた達成感に喜びを感じることができる。生命感のある素材との出会い、素材のマチエール、道具の用法、立体の構造など多くのことを探りながら、自分のフォルムを彫り刻み出していく。この創造を究めるプロセスを通じて「手と心で考える」という芸術表現のマインドを実践的に感じとり修得していくことができる。</p> <p>＜授業の概要＞ 立体造形の課題作品の制作が主体の実技の授業。 素材は、主に木材を使う。粘土も使用する予定。 12月実施のクリスマス研究では、フレッシュグリーンのリースの制作を予定。 3名の教員によるチームティーチング。「仕事着」「作業靴」を必ず着用。</p> <p>＜授業計画＞ 【後期】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第 1回 作品 2015 年度のテーマを提示 デッサンを描く 第 2回 形の研究 粘土によるテーマへの接近 第 3回 素材との出会い 素材の研究 第 4回 道具・工具の基本用法 接着の技法 第 5回 作品のイメージスケッチ 素材の選択 第 6回 art works 制作 1「素材」 第 7回 art works 制作 2「構成」 第 8回 art works 制作 3「彫る」 第 9回 art works 制作 4「刻む」 第10回 art works 制作 5「接合」 第11回 art works 制作 6「研磨」 第12回 art works 制作 7「組立」 第13回 art works 制作 8 提出 第14回 Art Works クリスマス研究 第15回 作品の発表＋講評の会 <p>＜授業計画（予習・復習等）＞ 日常生活のなかでも感覚を研ぎすませていると見えてくる何かがある。 そんな瞬間をちょっとで持つことができるといい。 作品の制作自体は、授業時間内にできる課題ではあるが、日によっては進み具合がゆっくりの日もある。そんな時は、空き時間に図工室で作業をしても構わないが、作業着に着替えることが望ましい。</p> <p>＜テキスト＞ <参考文献＞ 森羅万象、この宇宙のすべてがモチーフであり参考になる。</p> <p>＜評価方法＞ 授業への参加度:15% レポートと作品:85%</p>		

造形教育研究		前期 2 単位	3年
表現と素材・色彩と形態		原田 ロクゴー (はらだ ろくごー)	
授業の到達目標 及びテーマ	美術表現における素材のもたらす効果を考察し、多様な素材から適切なものを選択し表現できる力を養う。また、“色”を理論的に理解する。以上2点が到達目標である。 本科目は第11回～第14回の「衣の形式」「日本染織史概観」により、文化の多様性や独自性に触れることも含む講義である。		
授業の概要	造形表現に用いる素材は多種多様であるが、本講義は“繊維”と“顔料と染料”に焦点を絞って進めていく。理解を助けるために、色彩演習・紡糸/製織演習などを行う。		
授業計画	第1回	繊維とは何か 繊維の組成と歴史 絹/麻	
	第2回	繊維の組成と歴史 羊毛/綿	
	第3回	ショワの布	
	第4回	色 顔料と染料	
	第5回	演習【自分の色を作り色名をつける】	
	第6回	演習【自分の色を作り色名をつける】	
	第7回	繊維から糸に 演習【紡錘車による糸紡ぎ】	
	第8回	糸から布に 織機の構造 演習【枠機作り】	
	第9回	織物の組織 平織/綾織/縹子織	
	第10回	糸から布に 織り物の組織 演習【機織り】	
	第11回	衣の形式	
	第12回	日本の染織史概観1	
	第13回	日本の染織史概観2	
	第14回	小袖模様を読み解く	
	第15回	実習作品のポートフォリオ制作と提出	
準備学習 (予習・復習等)	復習に重きを置いてもらいたい。必要に応じて小テストを実施するが、初めて出会う基礎的な用語などはその意味も含めて覚えるのが望ましい。		
テキスト	特に定めない。適宜ハンドアウトを用いる。		
参考文献	図書館の書架にある美術/染織等の書籍すべて		
評価方法	小テスト:15% 提出物:70% 発表/質疑応答など:15%		

身体表現 I		後期 1 単位	1年
身体を自由にのびのびと使って、一人ひとりが自分の、動きの探求—表現の探求—作品の探求を行う		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標及びテーマ	子どもが身体表現を楽しむことを支援できるようになるために、まず自分達が楽しめるようになる。様々なリズムや動きを経験し、体を自由にのびのびと使って動き・表現することができるようになる。そして一人一人の創造性を高め、仲間と一緒に時間や思いを共有し、将来その創造と協力を子ども達と一緒に実現できるようになる。		
授業の概要	自分自身と将来向き合う子ども達の、自由で豊かな創造力と表現力を高めるために、既成のお遊戯や手遊びを覚えるのではなく、自分達で動きを作り出すことを目指す。実技中心で実際に動きながら学ぶ。学びのまとめとして創作と発表、その鑑賞と相互評価を行う。		
授業計画	第1回	動きの探求① 体ほぐし：自分の体と動きの再発見	
	第2回	動きの探求② クラシック：基本の動きと美しい姿勢	
	第3回	動きの探求③ モダン：身体の変現と動きの幅を広げる	
	第4回	動きの探求④ ラテン：陽気で情熱的なリズムと動き	
	第5回	動きの探求⑤ コンテンポラリー：現代的なダンス	
	第6回	表現の探求① 具象（自然現象など）を表現	
	第7回	表現の探求② 抽象（感情やイメージ）を表現	
	第8回	表現の探求③ 新聞紙を使って	
	第9回	作品の探求① 創作：グループ作り・テーマ決定と全体構想	
	第10回	作品の探求② 創作：イメージを広げる	
	第11回	作品の探求③ 創作：動きのモチーフ	
	第12回	作品の探求④ 創作：動きのモチーフからフレーズへ	
	第13回	作品の探求⑤ 創作：作品の完成	
	第14回	フォークロア・世界のダンス	
	第15回	作品の探求③ 創作：作品の発表・鑑賞	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業時に提示・配布する		
評価方法	リフレクションシート:40% 作品（創作）:50% 相互鑑賞・評価:10%		

身体表現Ⅱ		前期 1 単位	2年 子ども学科
世界と日本の踊りを楽しみながら身体づくりをするとともに、身体表現力や身体感覚を身につける		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現の基礎（声・表情・姿勢など）を学ぶことによって、身体表現できる体づくりをします。 ○ 世界には数えきれないほど多くの民族舞踊（フォークダンス）があります。日本でも各地域に特徴のある民俗舞踊（芸能）があります。それぞれ特徴のある舞踊を楽しむとともに、世界と日本の衣装、リズム、踊り方など表現力の違いについても知識と理解を深めます。 ○ 踊ることによって身体感覚を養い、より洗練された表現力や踊りを楽しめる心を培います。 		
授業の概要	<p>まず、基礎的な体づくり、身体表現力アップのためのレッスンをします。つぎに、世界の踊りと日本の民俗舞踊について楽しみながら基礎を学びます。その中で衣装（スカート・浴衣）・リズム（楽器）・踊り方の特徴や違いについての知識や理解を深めていきます。さらに、本授業で扱う型のある踊りのレッスンは、自分がイメージ通りに動くことのできる体や自己表現力の獲得に有効であり、基礎体力と身体感覚を磨き知性とともに関心の獲得を目指します。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション、シャトルラン：授業実施にあたってオリエンテーションを行います。新体力テストで実施できなかったシャトルランを行います。	
	第2回	身体表現の基礎：自己表現できる体づくりのための声の出し方、表情、姿勢についてレッスンします。	
	第3回	身体表現の基礎：自己紹介で発声練習、呼吸と姿勢についてのレッスン、歌いながら踊れる子どもの曲を使い表現力を養うレッスンをします。	
	第4回	民族舞踊の基礎（フォークダンスを中心に）：スカートを着用し基本のステップの練習と簡単な踊りの練習をします。	
	第5回	民族舞踊の基礎：1、体形、動作についての説明とそれを確認しながら踊りの練習をします（スカート着用）。	
	第6回	民族舞踊の基礎：2、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第7回	民族舞踊の基礎：3、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第8回	日本の民俗舞踊：浴衣の着方を練習します。日本の踊りの特徴について説明し簡単な民俗舞踊の踊りの練習をします。	
	第9回	日本の民俗舞踊：ルール（型）のある踊りの練習によって、自分の体の特徴を確認したり癖を修正できるように練習を重ねます（浴衣着用）。	
	第10回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって、自分のイメージ通りに動くことのできる体をつくっていきます。日本の楽器についても学びます（浴衣着用）。	
	第11回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって自分の感情やイメージをちゃんと表現できる体をつくっていきます（浴衣着用）。	
	第12回	日本の民俗舞踊：基礎体力と身体感覚を身につけ、踊っていて楽しさを感じるようにさらに踊りの練習をします（浴衣着用）。	
	第13回	民族舞踊：ワルツステップを使って踊る踊りを練習をします（スカート着用）。	
	第14回	民族舞踊：各国の踊りの特徴を感じながらワルツの踊りを踊ります（スカート着用）。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	世界や日本の踊りの特徴や衣装、楽器などを調べ発表してもらいます。身体表現の方法について調べてもらいます。		
テキスト	特に定めませんが、『健やかな身体をめざして』（森下編集）を参考にしたり、プリントを用います。		
参考文献	鴻上尚史『発声と身体のレッスン』ちくま文庫/日本フォークダンス連盟発行資料や音楽など。		
評価方法	授業への積極的な参加：60% 課題提出：20% まとめのレポート：20%		

身体表現Ⅱ		後期 1 単位	2年 子ども学科
世界と日本の踊りを楽しみながら身体づくりをするとともに、身体表現力や身体感覚を身につける		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 身体表現の基礎（声・表情・姿勢など）を学ぶことによって、身体表現できる体作りをめざします。</p> <p>○ 世界には数えきれないほど多くの民族舞踊（フォークダンス）があります。日本でも各地域に特徴のある民俗舞踊（芸能）があります。それぞれ特徴のある舞踊を楽しむとともに、世界と日本の衣装、リズム、踊り方など表現力の違いについても知識と理解を深めます。</p> <p>○ 踊ることによって身体感覚を養い、より洗練された表現力や踊りを楽しめる心を培います。</p>		
授業の概要	<p>まず、基礎的な体づくり、身体表現力アップのためのレッスンをします。つぎに、世界の踊りと日本の民俗舞踊について楽しみながら基礎を学びます。その中で衣装（スカート・浴衣）・リズム（楽器）・踊り方の特徴や違いについての知識や理解を深めていきます。さらに、本授業で扱う「型」のある踊りについてのレッスンは、自分がイメージ通りに動くことのできる体や自己表現力の獲得に有効であり、基礎体力と身体感覚を磨き、知性ととも体の教養の獲得をめざします。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション、シャトルラン：授業実施にあたってオリエンテーションを行います。新体力テストで実施できなかったシャトルランを行います。	
	第2回	身体表現の基礎：自己表現できる体づくりのための声の出し方、表情、姿勢についてレッスンします。	
	第3回	身体表現の基礎：自己紹介で発声練習、呼吸と姿勢についてのレッスン、歌いながら踊れる子どもの曲を使い表現力を養うレッスンをします。	
	第4回	民族舞踊の基礎（フォークダンスを中心に）：スカートを着用し基本のステップの練習と簡単な踊りの練習をします。	
	第5回	民族舞踊の基礎：1、体形、動作についての説明とそれを確認しながら踊りの練習をします（スカート着用）。	
	第6回	民族舞踊の基礎：2、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第7回	民族舞踊の基礎：3、世界各国の基本の踊りを楽しみます（スカート着用）。	
	第8回	日本の民俗舞踊：浴衣の着方を練習します。日本の踊りの特徴について説明し簡単な民俗舞踊の踊りの練習をします。	
	第9回	日本の民俗舞踊：ルール（型）のある踊りの練習によって、自分の体の特徴を確認したり癖を修正できるように練習を重ねます（浴衣着用）。	
	第10回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって、自分のイメージ通りに動くことのできる体をつくっていきます。日本の楽器についても学びます（浴衣着用）。	
	第11回	日本の民俗舞踊：型のある踊りの練習によって自分の感情やイメージをちゃんと表現できる体をつくっていきます（浴衣着用）。	
	第12回	日本の民俗舞踊：基礎体力と身体感覚を身につけ、踊っていて楽しさを感じるようにさらに踊りの練習をします（浴衣着用）。	
	第13回	民族舞踊：ワルツステップを使って踊る踊りを練習をします（スカート着用）。	
	第14回	民族舞踊：各国の踊りの特徴を感じながらワルツの踊りを踊ります（スカート着用）。	
	第15回	まとめ：総括を行います。	
準備学習 (予習・復習等)	世界や日本の踊りの特徴や衣装、楽器などを調べ発表してもらいます。身体表現の方法について調べてもらいます。		
テキスト	特に定めませんが、『健やかな身体をめざして』（森下編集）を参考にしたり、プリントを用います。		
参考文献	鴻上尚史『発声と身体のレッスン』ちくま文庫/日本フォークダンス連盟発行資料や音楽など。		
評価方法	授業への積極的な参加：60% 課題提出：20% まとめのレポート：20%		

身体表現Ⅱ		前期 1 単位	2年 子ども学科
ミュージカルを題材に、やって楽しむ・見て楽しむ身体表現を考え、実践する		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標及びテーマ	大人も子どもも楽しめるミュージカル作品を取り上げ、子どもと一緒に身体表現を楽しみ、身体表現力を楽しんで伸ばすことを目指してミュージカルの一場面を取り上げて、自分だったらどう表現するか、どういう風にオリジナリティを出すかを考え、二次創作にチャレンジする。		
授業の概要	実技と講義演習の両方を行う。大人も子どもも楽しめるミュージカル作品を複数見て、踊ること・演じること・歌うことによる総合的な身体表現の広がりを学ぶ。そして、自分たちで作品を1つ選んで、その中の一場面を再現してミュージカル表現の基本的なことを習得し、そこに自分たちのオリジナルのストーリーや動きを加えたミュージカルの一場面をグループで作成し、相互鑑賞・評価する。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス	
	第2回	身体表現の総合芸術（ミュージカル）の鑑賞と再現① 作品Aの前盤	
	第3回	身体表現の総合芸術（ミュージカル）の鑑賞と再現① 作品Aの中盤	
	第4回	身体表現の総合芸術（ミュージカル）の鑑賞と再現① 作品Aの終盤	
	第5回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ① 作品Bの前盤	
	第6回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ② 作品Bの中盤	
	第7回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ③ 作品Bの後盤	
	第8回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ④ 作品Cの前盤	
	第9回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ⑤ 作品Cの中盤	
	第10回	子どもと一緒にミュージカルの鑑賞と再現を楽しむ⑥ 作品Cの後盤	
	第11回	ミュージカルの創作① 全体構想、音楽を選ぶ	
	第12回	ミュージカルの創作② 動き・セリフのモチーフ作り	
	第13回	ミュージカルの創作③：動き・セリフをつなげてフレーズに	
	第14回	ミュージカルの創作④：作品の完成、歌って動く	
	第15回	ミュージカルの創作⑤：作品の発表、相互鑑賞	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。なお作品A・B・Cは「オペラ座の怪人」、「アイダ」、「夢から覚めた夢」、「美女と野獣」、「王様の耳はロバの耳」の中から、受講学生のキャラクターを見て授業担当教員が選んで決めます。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業時に提示・配布する		
評価方法	リフレクションシート:40% 作品（創作）:50% 相互鑑賞・評価:10%		

身体表現Ⅲ		後期 1 単位	2年
リトミックを通して幼児の音楽的表現の実際を学ぶ		伊藤 仁美 (いとう さとみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	実践的にリトミックを体験することでリズムや音楽に関わる様々な表現活動を理解する。		
授業の概要	乳幼児期の音楽的な成長や発達について理解を深め、音楽を通じた身体表現活動の実際について学習する。具体的には「ボディパーカッション」「幼児のための振り付け創作」「リトミック」「絵本・音楽・身体表現」等の様々な活動を取り上げていく。 また、幼児期の音楽的な表現を促すために必要な保育者の援助についても学んでいく。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	幼児のリトミック (1) 手を叩く	
	第3回	幼児のリトミック (2) 歩く	
	第4回	幼児のリトミック (3) ストップ&ゴー	
	第5回	幼児のリトミック (4) ギャロップ	
	第6回	幼児のリトミック (5) スキップ	
	第7回	幼児のリトミック (6) 様々なリズムパターン	
	第8回	わらべうたと身体表現 (1) 乳児編	
	第9回	わらべうたと身体表現 (2) 幼児編	
	第10回	ボディパーカッション (1) オルフ	
	第11回	ボディパーカッション (2) ロックトラップ	
	第12回	幼児のための振り付け創作	
	第13回	絵本・音楽・身体表現 (1) 乳児編	
	第14回	絵本・音楽・身体表現 (2) 幼児編	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業内容を復習し、次の授業に備えること。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	特になし。		
評価方法	授業に対する参加意欲度:70% 授業内発表:30%		

演劇表現 I		前期 1 単位	3年
演技について		松山 立 (まつやま りゅう)	
授業の到達目標 及びテーマ	演劇の基本的な構成要素、つまり俳優と観客の関係について考察する。とりわけ、演技することが両者をどう結びつけていくのかを理解、実践する。授業を通じて、自己と他者の関係について考える術を身につける。		
授業の概要	演技の仕組みについて、段階を追って理解していく。 授業の前半は実践的な演劇ワークショップで身体を動かし、後半では前半の実技から生まれたものについて理論的に考える。実技：講義＝7：3の割合で進める予定。 受講者の意欲や習熟度によって、小発表会の開催も視野に入れている。		
授業計画	第1回	ガイダンス／演技とは何か	
	第2回	演技の仕組み：舞台から客席へ	
	第3回	演技の仕組み：頭で考えることと、身体で考えること	
	第4回	演技の仕組み：感情か、理性か	
	第5回	演技のテクニック：演じることは怖いこと	
	第6回	演技のテクニック：錯覚を起こす	
	第7回	演技のテクニック：何もしない演技	
	第8回	演技のテクニック：「うまい」「へた」とは何か	
	第9回	演技の実践：「行為」について	
	第10回	演技の実践：「障害」と「目的」について	
	第11回	演技の実践：「行動」について	
	第12回	戯曲と演技：テキストを使った実践①	
	第13回	戯曲と演技：テキストを使った実践②	
	第14回	成果発表会	
	第15回	授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。動きやすい服装で臨んで下さい。		
テキスト	特になし		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	平常点：50% 課題点：50%		

演劇表現Ⅱ		後期 1 単位	3年
演劇ワークショップー演劇を作るところから考えてみるー		柏木 陽（かしわぎ あきら）	
授業の到達目標及びテーマ	演劇を作ることを通じて演劇表現、こどもの表現を考えてみる。 他の人がどう作るか、どう感じるか、自分ならどう作るかなど様々な感じる中から、自分自身がどう充足するか、自分の中にあるものをどうやったら他の人に伝えていくことが出来るかを実践してみる。		
授業の概要	集まった人たちと実際に演劇を作ってみます。 この授業は集まった人々によって進め方が異なっていきます。 その場での合意や探求が重要だと考えますのでこの授業計画も可変的な物だと思っていてください。		
授業計画	第1回	遊ぶ～遊びを通じて他者との関係を作る	
	第2回	アイデアを集める 表現方法の模索	
	第3回	題材を探す	
	第4回	一度作ってみる	
	第5回	検証	
	第6回	シナリオにしてみる 言葉以外の方法	
	第7回	シナリオにしてみる 言葉で	
	第8回	場面を作ってみる 短い場面を作る	
	第9回	場面を作ってみる 場면을工夫してみる	
	第10回	衣裳・小道具の計画を立てる	
	第11回	中間発表	
	第12回	作り直し1 全体を考えて構成を考え直す	
	第13回	作り直し2 表現方法を模索する	
	第14回	発表	
	第15回	まとめ それぞれの感想を話し合ってみる	
準備学習 (予習・復習等)	特に必要ではありません。必要な場合は授業中に提示します。		
テキスト	授業中にプリントを配布		
参考文献	必要に応じて授業中に提示		
評価方法	授業への参加:50% 発表などの内容:30% レポート:20%		

子ども学基礎論	前期 2 単位	1年
大学での学びの基礎・基本を身につける		
<p>【担当教員】 さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この科目は、子ども学科において、これから学習する内容の基礎・基本となるアカデミック・スキルの獲得を目指しています。 この授業を通して、学ぶことの真の意味である既成の概念を疑い、自らの心と頭と身体を駆使して感じ取り、考え、洞察し、頭脳と感性を耕していく自己変革の生活への一歩となる時間を、共に創造していく機会にしたいと願っています。</p> <p><授業の概要> 少人数のグループによる授業を主体にし、論文などの文章を読む、考える、論述する、発表する、討議する等を行っていきます。 本年度は6つのグループに分かれます。 また、途中で別のグループ分けによる学外見学が予定されています。</p> <p><授業計画> 第 1～7回 グループによる相互学習 第 8回 学外見学(幼稚園) 第 9～14回 グループによる相互学習／第15回 まとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回授業終了時に次回の授業内容についてお知らせしますので、テキストをよく読み授業に臨んでください。また、授業終了後授業を振り返りまとめておいてください。出された課題については期日を守って提出してください。</p> <p><テキスト> 佐藤望編著『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門 第2版』慶應義塾大学出版会 2012年</p> <p><参考文献> 各グループで必要に応じ、随時紹介して行きます。</p> <p><評価方法> 平常点70%、レポート・提出物など30%を基本として各教員が評価します。</p> <p>（付記）「子ども学基礎論」の学びの一環として、全クラスで午前中の半日、約10か所で幼稚園見学を予定していますが、これは幼稚園免許取得希望の有無にかかわらず、必ず全員が出席してください。</p>		

子ども学基礎演習	後期 2 単位	1年
大学での学びの基礎となる教養を深める		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この科目は、子ども学基礎論で培った学びをより深めることを目指す科目です。人間の原点である子どもを学ぶことの現代的な意義について、様々な角度から考察し、深めます。具体的には、子どもの発達、保育、教育、福祉、文化、芸術などの諸問題を中心にしなが、今日子どもがおかれている社会的・文化的状況についての理解をいっそう深めていきます。 あわせて、学ぶことの真の意味である、既成の概念を疑い、自らの心と頭と身体を駆使して感じ取り、考え、洞察し、頭脳と感性を耕していく自己変革の生活への第2段階となる時間を、共に創造していく機会にしたいと願っています。</p> <p><授業の概要> グループによる授業を主体にし、資料収集・討論・見学・ワークショップなど、グループやそのテーマごとに多様な方法で行われます。本年度は6グループに分かれます。また、途中で別のグループ分けによる学外見学が予定されています。</p> <p><授業計画> 第1～7回 グループによる相互学習 第8回 学外見学（保育所） 第9～14回 グループによる相互学習 第15回 まとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回授業終了時に次回の授業内容についてお知らせしますので、テキストをよく読み、資料を集めて授業に臨んでください。また、授業終了後授業を振り返りまとめておいてください。出された課題については期日を守って提出してください。</p> <p><テキスト> 佐藤望編著『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門 第2版』慶應義塾大学出版会 2012年</p> <p><参考文献> 各グループで必要に応じ、随時紹介して行きます。</p> <p><評価方法> 平常点70%、レポート・提出物など30%を基本として各教員が評価します。</p> <p>（付記）「子ども学基礎演習」の学びの一環として、全クラスで午前中の半日、約10か所で保育所見学を予定していますので、保育士資格取得の希望と関わりなく、必ず全員が出席してください。</p>		

子ども学特別研究Ⅰ	前期 2 単位	2年
特別研究への取り組み（その1）		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、大野 祥子（おおの さちこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、佐々木 竜太（ささき りゅうた）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）、渡辺 善忠（わたなべ よしただ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この授業は、学生が自らの知的関心と独自の視点にもとづいて研究テーマを設定し、本学科で学んでいる知見を手掛かりに、論文の作成、品の制作にとりくむもので、このことにより課題研究の体験学習を積む。 また、同じグループに属するメンバー相互の意見交換や討論により、研究テーマをできるだけ総合的に捉えることができるようにする。 これらを通して、大学教育で肝心な既成概念や先入観の再吟味、自発的で創造的な課業となることが期待される。 指導教員ならびにその指導の主要な分野・領域などは別記のとおりである。</p> <p><授業の概要> 原則として、個別テーマに即した研究内容についての助言や指導とともに、それを論文や制作として構成し、記述・表現する方法などについての個別指導やグループ指導が行なわれる。 グループ研究（制作）の場合もある。 同じグループ内での相互の意見交換や討論・批判などが次の特別研究の取り組みへとつながっていく。 この特別研究は、原則として、2年次後期「子ども学特別研究Ⅱ」、3年次前期「子ども学特別研究Ⅲ」、同後期「子ども学特別研究Ⅳ」を継続して履修するものとする。</p> <p><授業計画> 第1～15回 それぞれの研究テーマに即してその内容の深化に努め、資料収集や予備調査を行ない、後期の執筆や制作の準備を行なう。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 各教員より適宜指示。</p> <p><テキスト> それぞれのグループで適宜選択する。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく。</p> <p><評価方法> 平常点をもとにして、各種の提出物などを総合して評価される。</p>		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 I		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 論文作成の基礎・基本としての調べる、読む、討議する、書くことを身につける。 ○ 幼児及び保育における様々な課題について広範な視点より探究し、自分の言葉で発表することができる。 		
授業の概要	前半は論文作成にあたっての基礎・基本を身につけることを主眼に置き、その後、保育関連の文献を読み、ディスカッションをする。また、受講生の興味あるテーマでグループ研究をし、レポートを作成し、発表、討議する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 授業の進め方について他	
	第2回	各自の研究テーマ方向性発表	
	第3回	論文作成にあたっての資料収集の基礎（図書館）	
	第4回	論文作成の基礎 1 ワードの基礎	
	第5回	論文作成の基礎 3 エクセル及びパワーポイントの基礎	
	第6回	文献研究および討議 1	
	第7回	文献研究および討議 2	
	第8回	文献研究および討議 3	
	第9回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第10回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第11回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第12回	テーマに基づく調査研究（グループでの活動）	
	第13回	テーマに基づく報告・発表・討議	
	第14回	テーマに基づく報告・発表・討議	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容の関連資料などを調べておくこと。		
テキスト	授業の中で指示する。		
参考文献	なし		
評価方法	授業への参加度:50% レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
心理学とはなんだろう？		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「心理学」と聞くと、カウンセリングや犯罪心理学、心理テストであばかれる深層心理などを思い浮かべるかもしれませんが。実際には心理学とは「人が何を考え、どのように行動するか」を客観的な方法を使って確かめていく、思ったより地味な学問です。</p> <p>このゼミでは、世の中で起こる現象と関連の深い心理学の様々なトピックをとりあげていきます。心理学の基礎知識を学びながら、人間の心の働きについて考えます。同時に客観的に人の心を測定する心理学の方法についても理解を深めます。</p>		
授業の概要	<p>演習形式で進めます。文献講読、ディスカッション、実験など、色々な方法で、心理学のトピックと研究方法について学びます。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	心理学とは何だろう（心と行動の関係）	
	第3回	私たちは何を見ているのか（知覚）	
	第4回	記憶のしくみ	
	第5回	記憶の不思議	
	第6回	イメージの世界	
	第7回	対人関係の不思議	
	第8回	性格とは何か	
	第9回	性格を測る方法	
	第10回	性格は変わらないか	
	第11回	発達の可塑性	
	第12回	生涯発達	
	第13回	親子関係と発達	
	第14回	家族関係	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>文献講読の前には、事前に文献を読んで内容を理解してくること。 心理学用語を調べてくること。 授業時間内に行った実験について、レポートをまとめること。 各回の内容によってその都度指示します。</p>		
テキスト	特に使用しません。		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	プレゼンテーション:30% 授業に対する積極性:40% レポート:30%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
研究関心を広げる		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	2年間にわたる研究の最初の段階として、テーマと研究方法の関係について理解し、関心あるテーマについて考え、調べ、発表する。乳幼児の生活と発達、乳幼児の遊び、保育者について共に研究する。		
授業の概要	演習形式で進めます。各自が自分の課題やテーマを見つけ、考えたことをまとめ、発表し、話し合い、修正していくという方法で行います。		
授業計画	第1回	講義のねらい、進め方、参考文献、評価方法等の説明 (研究関心を広げる～子育て支援活動、子どもの生活と遊び、保育者像他～)	
	第2回	研究テーマ、研究目的、研究方法の関係について理解する	
	第3回	各自の関心について発表、討議	
	第4回	仮テーマ、計画について発表、討議	
	第5回	調査、検索について	
	第6回	テーマに関する資料収集	
	第7回	テーマに関する資料の発表、検討(1) 4名	
	第8回	テーマに関する資料の発表、検討(2) 4名	
	第9回	幼稚園における子どもの生活と子どもの姿(1) エピソード 作成	
	第10回	幼稚園における子どもの生活と子どもの姿(2) エピソード 発表	
	第11回	幼稚園における保育者の役割(1) エピソード 作成	
	第12回	幼稚園における保育者の役割(2) エピソード 発表	
	第13回	発表・討議(1)	
	第14回	「研究とは」(講義)	
	第15回	次の研究課題について発表・討議	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> 自分が関心のあるテーマについて、自分なりにまとめて来てください。はじめは簡単なメモ程度でかまいません。次第に、充実した内容になっていきます。頭の中で考えているだけでなく、文章だけでなくイメージ図でもかまいませんので「書いて」きてください。 先輩の卒業論文を何編か読んでみてください。 		
テキスト	特に使用しません。		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	授業への積極的参加:25% プレゼンテーション:25% レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
アート・コミュニケーション・出会い・省察・制作 ー素材の森に邂逅ー		久保 制一（くぼ せいいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	自分の中に発信したいコトはいくつもあるだろうが、どんな形でどのように表現したらいちばんその想いが人に伝わるか思い悩むことが多い。何でも良いわけではないし、いくつものイメージを編集して、何らかの素材のコトバをかりてつむぎ上げていくしかない。それには今の自分に最適な素材との出会いが決定的であとの視点を理解することができる。		
授業の概要	いくつかのタームに分けて、素材研究と表現手段のワークショップを実施していく。素材と表現する内容とがいかに関連するかを検討していく。また、素材自体の研究・調査も各自がとりくみ、研究内容はプレゼンし、レポートにまとめる。 夏期休暇期間（2015年8月）に2泊3日で3年生と合同の特研合宿を実施予定。		
授業計画	第1回	イントロダクション 特研の展開	
	第2回	考察「ものをつくるということからartにすること」	
	第3回	素材との出会い ワークショップ 1「柔らかなもの」	
	第4回	素材との出会い ワークショップ 2「うすいもの」	
	第5回	素材との出会い ワークショップ 3「かたいもの」	
	第6回	素材との出会い ワークショップ 4「大きいもの」	
	第7回	ワークショップの編集 プレゼンテーション1	
	第8回	表現の研究 ワークショップ 1「フォト」	
	第9回	表現の研究 ワークショップ 2「ドローイング」	
	第10回	表現の研究 ワークショップ 4「壁画」	
	第11回	表現の研究 ワークショップ 5「ムービー」	
	第12回	表現の研究 ワークショップ 6「アニメーション」	
	第13回	表現の研究 ワークショップ 7「コラボレーション」	
	第14回	ワークショップの編集 プレゼンテーション2	
	第15回	夏期休暇期間の合宿 オリエンテーション	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。		
テキスト	日々の生活の中で素敵だと思えた一瞬。		
参考文献	ワークシートの配布。適宜、文献、画集、作品、資料などを紹介する。		
評価方法	平常の取り組み:50% レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
論文に向けて		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、2年後の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、調査、研究、考察を進める。		
授業の概要	資料、情報の収集、グループディスカッション、個別相談等を通して、テーマを考え、自身で決めたテーマに基づいて、調査、研究に取り組む準備をする。 課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	図書館オリエンテーション	
	第3回	資料、情報の収集、グループディスカッション (1)	
	第4回	資料、情報の収集、グループディスカッション (2)	
	第5回	資料、情報の収集、グループディスカッション (3)	
	第6回	資料、情報の収集、グループディスカッション (4)	
	第7回	資料、情報の収集、グループディスカッション (5)	
	第8回	資料、情報の収集、グループディスカッション (6)	
	第9回	経過報告 (1)	
	第10回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (1)	
	第11回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (2)	
	第12回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (3)	
	第13回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (4)	
	第14回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて (5)	
	第15回	経過報告 (2)	
準備学習 (予習・復習等)	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、自身で調査、研究、考察を進める為、資料、情報の収集し準備をし、グループディスカッションに備える。個別相談等を通してテーマを考え、自身で決めたテーマに基づいて、調査、研究に取り組み執筆へ向けて準備をする。		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 発表内容を考慮:40%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
絵本を深く読む		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 長く読み継がれてきた絵本作品の成り立ちや背景について理解する。 * 文献を調べたり、自分らしい発表ができるようになる。 * 作品を総合的に評価することができるようになる。 		
授業の概要	ゼミ方式。『絵本のよろこび』についてはグループで発表したり、それについて議論したりする。それ以外に学生は児童書を取り上げたブックトークを一人ずつ行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	各自が好きな絵本を紹介しあう	
	第3回	『絵本のよろこび』を読んで具体的に考える	
	第4回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ1	
	第5回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ2	
	第6回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ3	
	第7回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ4	
	第8回	『絵本のよろこび』を読んで発表する：グループ5	
	第9回	作品の読み方、ブックトークのやり方について	
	第10回	資料の収集や検索方法について	
	第11回	客観的に読むとは	
	第12回	ブックトークのシナリオを書いてみる	
	第13回	ブックトークの実践	
	第14回	全体ディスカッション	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	担当する発表部分やブックトークについては、各自で事前に準備すること		
テキスト	松居直著『絵本のよろこび』（NHK出版）		
参考文献	授業時に紹介		
評価方法	授業参加度：30% ブックトークや発表：40% レポート：30%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
現代教育問題の歴史的・原理的研究 (1)		佐々木 竜太 (ささき りゅうた)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>今日の教育や子どもをめぐる諸問題を取り上げ、教育学的観点から歴史的・原理的に研究する。 具体的には、 ①諸問題に関する基礎的文献を読み、クリティカル・リーディングの手法を学ぶ ②教育問題に関して、自らの関心に基づいて具体的テーマを確定し、深める ③レポート・論文にまとめる際に必須となる資料探索の方法、研究方法を学ぶ という3点を目標とする。</p>		
授業の概要	<p>前期は、上記目標のうち、全員で共通の基礎的文献を精読することを通して、クリティカル・リーディングの手法を学び身につけること、各自の研究関心を深めていくこと、という2点に重点を置き、授業を展開する。</p>		
授業計画	第1回	ゼミの進め方について	
	第2回	図書館等、資料探索の方法	
	第3回	クリティカル・リーディングとは	
	第4回	文献研究 (1)	
	第5回	文献研究 (2)	
	第6回	文献研究 (3)	
	第7回	文献研究 (4)	
	第8回	文献研究 (5)	
	第9回	文献研究 (6)	
	第10回	文献研究 (7)	
	第11回	文献研究 (8)	
	第12回	各自の研究関心・テーマの発表 (1)	
	第13回	各自の研究関心・テーマの発表 (2)	
	第14回	各自の研究関心・テーマの発表 (3)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共通文献をあらかじめ読み、論点をまとめておく。 ・ 発表者においては、レジュメを作成し、報告する。 ・ 授業時のディスカッションで明らかになった論点を自身で調べ、まとめる。 		
テキスト	授業時に提示する		
参考文献	随時、授業時に提示する		
評価方法	学期末レポート:60% 授業での発表:20% 平常点:20%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
こころとその育ちについて現場（フィールド）から考える～あたりまえを疑う		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各自が日常生活のなかで感じ取った、こころとその育ちに関する問題について、論文にまとめることを目標とする。この授業では問いを立てる力を培う。具体的にはディスカッションを通して、他者の視点に気づき、自己の視点を理解する。また自らの考えを自分のことばで表現し伝える力、他者のことばに耳を傾けその考えを理解する力を培う。		
授業の概要	演習形式で進める。日常生活への素朴な問いをきっかけに、共通文献の購読やフィールドワークを通して、あたりまえと思っている日常の相対化、自己の視点の相対化を行う。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	”心理学”を問う	
	第3回	研究とは、論文とは	
	第4回	現場（フィールド）、日常生活から考えるということ	
	第5回	「人」や「こころ」に関する素朴な疑問をあげてみよう	
	第6回	血液型別性格判断や占いはあたるのか？	
	第7回	数字の落とし穴	
	第8回	相手の立場になることはできるのか？	
	第9回	映像資料視聴	
	第10回	映像資料についての振り返り	
	第11回	フィールドワークとは～みること、考えること	
	第12回	フィールドワーク①宇宙人が学食に降り立ったら？	
	第13回	フィールドワーク②自分で問いを立てる	
	第14回	フィールドワーク③報告会	
	第15回	まとめとふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	指定されたテキストを事前に読む		
テキスト	未定（授業内で指定）		
参考文献	未定（授業内で適宜紹介する）		
評価方法	授業への参加度:50% 期末レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
マイノリティ(少数派)の当事者から学ぶ。		杉田 穂子(すぎた やすこ)	
授業の到達目標及びテーマ	自分がマジョリティ(多数派)の中にいると、そのことに気付かないことがある。例えば皆さんの多くは現在「しょうがない人」が多いと思いますが、そのことにどれほど気付いているだろうか。マイノリティの人たちの語りから学び、自分たちの社会をみる視点を豊かにする。		
授業の概要	まずは、教員が提示した文献の中から購読したいものを選び、マイノリティの当事者に学ぶことの意味を理解する。さらに自分の関心あるテーマについての文献紹介をした後、論文作成に向けてテーマを設定し発表する。仲間同士の意見交換を大切にしながら、テーマを深めたり、絞ったりしていく。		
授業計画	第1回	シラバスの紹介、文献についての話し合い	
	第2回	自己紹介	
	第3回	文献購読(1)	
	第4回	文献購読(2)	
	第5回	文献購読(3)	
	第6回	文献購読(4)	
	第7回	文献購読(5)	
	第8回	関心のあるテーマの紹介	
	第9回	文献紹介(1)	
	第10回	文献紹介(2)	
	第11回	文献紹介(3)	
	第12回	関心あるテーマの発表(1)	
	第13回	関心あるテーマの発表(2)	
	第14回	関心あるテーマの発表(3)	
	第15回	まとめ	
準備学習(予習・復習等)	前半は、全員で決定した文献の購読を行う。毎回指定した章は、予め読んで考えをまとめておき、当番の場合は、その章についてのレジメを作成しておくこと。 後半は、卒業論文の作成に向けて自分のテーマを設定していくため、発表の前にはそのための文献を購読し、レジメを作成しておくこと。		
テキスト	ゼミ生と相談しながら決定する。		
参考文献	渡辺一史「こんな夜更けにバカかよ」北海道新聞社2003 浦河べてるの家「べてるの家の非援助論」医学書院2002など		
評価方法	授業後の感想レポート:50% 発表内容:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
現代における教育の諸問題の研究 I		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育的視点から考察するための基礎的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、初歩的な分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる。		
授業の概要	受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。		
授業計画	第1回	オリエンテーション 授業方針の説明	
	第2回	受講生による討論	
	第3回	受講生による討論 第一章	
	第4回	受講生による討論 第二章	
	第5回	受講生による討論 第三章	
	第6回	受講生による討論 第四章	
	第7回	受講生による討論 第五章	
	第8回	受講生による討論 第六章	
	第9回	受講生による討論 第七章	
	第10回	受講生による討論 第八章	
	第11回	受講生による討論 教育と格差(1)	
	第12回	受講生による討論 教育と格差(2)	
	第13回	受講生による討論 教育と格差(3)	
	第14回	受講生による討論 教育と格差(4)	
	第15回	前期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートを提出してもらう。		
テキスト	広田・伊藤著『教育問題はなぜまちがって語られるのか？—「わかったつもり」からの脱却』日本図書センター、2010。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% レポートなど:30%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
子ども学特別研究 I		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「世界の保育と日本の保育」をテーマとする本ゼミナールの到達目標は、近現代日本の保育の歴史と現状に関する理解を踏まえて、それをより深くするために幾つかの先進諸国の保育の歴史と現状についての知見を得ることである。		
授業の概要	現代日本の保育を広がりのなかで捉え、その長短とそれをもたらす要因などについて考えるため、世界の国々とりわけ主要国の保育の実態や歴史について学ぶ。同時に、それらを通して、ゼミナール員が個別の学習課題をもち、卒論テーマの発見に繋がるようにする。		
授業計画	第1回	本ゼミのねらい・進め方の説明と討議	
	第2回	現代日本の保育の現状と到達点	
	第3回	戦前日本における保育の推移－19世紀後半－	
	第4回	戦前日本における保育の推移－20世紀前半－	
	第5回	戦後日本における保育の推移－1970年代中頃まで－	
	第6回	戦後日本における保育の推移－1990年中頃代まで－	
	第7回	戦後日本における保育の推移－世紀転換期以降－	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(1)－	
	第10回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(2)－	
	第11回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(3)－	
	第12回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(4)－	
	第13回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(5)－	
	第14回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(6)－	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	1年後期の「保育原理Ⅱ」の内容をよく振り返っておく。		
テキスト	ゼミナール中に配布する資料など		
参考文献	ゼミナール中に提示		
評価方法	討論への関与など:30% 発表の内容など:70%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
社会的意識と知的好奇心を耕す～人間社会の探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子ども・家族の福祉の領域をベースとしながら、さまざまな状況を生きる子ども、大人、社会の諸問題に出会い、ともに検討・考察する。とくに、いわゆるマイノリティの側を生きる人たちの生活をめぐる諸問題に着目し、「問題」を探しながら深めあうことで、考える力、発信する力、書く力を育てあう機会とする。		
授業の概要	いずれ個人研究に挑む前提として、福祉領域や関連分野からいくつか共通の文献や資料を読みこむ。発題やディスカッション、論評を重ねながら諸問題を探究する観点や人への感受性を互いに育てる。ゼミの特性を活かした演習や個人指導・提出課題に出会いながら、主体性を育て、教員との対話により研究に向かう力を獲得する。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス～福祉研究とフィールドの広がり	
	第2回	身近な問題の再発見	
	第3回	社会的な問題の発見	
	第4回	文献・資料を用いてのディスカッション（グループ1）	
	第5回	文献・資料を用いてのディスカッション（グループ2）	
	第6回	文献・資料を用いてのディスカッション（グループ3）	
	第7回	社会的問題に関するリサーチと発題（グループ1）	
	第8回	社会的問題に関するリサーチと発題（グループ2）	
	第9回	社会的問題に関するリサーチと発題（グループ3）	
	第10回	研究論文との出会い～研究に求められる要素	
	第11回	研究することの意味を考える～研究の方向性	
	第12回	考察を深めたい課題をめぐる討論（グループ1）	
	第13回	考察を深めたい課題をめぐる討論（グループ2）	
	第14回	考察を深めたい課題をめぐる討論（グループ3）	
	第15回	まとめとレポート提出・シェアリング	
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読んで理解を深めながら参加する。自ら探究したいトピックスとその周辺について、自分で調べたり、文献を読んだり、実践（具体的な取り組み）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時発表できるよう努力する。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に示す。		
参考文献	必要に応じ参考資料とともに紹介していく。基本的な福祉関連の文献も紹介する。		
評価方法	平常点・授業参加態度:50% 提出課題・レポート:50%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
研究・身体表現の創作の基礎的知識と技術の修得と、研究レポートに繋がる小レポートの作成		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標及びテーマ	小児の健康または身体表現のいずれかの分野から、研究レポート・小作品に発展させることができるテーマ・モチーフを選び、そのトピックに関する文献や資料、作品を収集し、読むあるいは観て、プレゼンテーションができるようになる。また、その過程で、研究・創作を行う上で必要な知識と技術を修得できる。		
授業の概要	毎時間、課題テーマについて説明した後、学生同士で意見の発表やディスカッションを行います。毎回の授業の積み重ねの成果から選んだテーマで最終のプレゼンテーション（パワーポイント）を行う。		
授業計画	第1回	ガイダンス：子どもを学ぶ・子どもから学ぶ	
	第2回	小児の健康・子どもの身体表現の概観	
	第3回	聞き取り調査の練習①：トライアドインタビューとは	
	第4回	聞き取り調査の練習②：トライアドインタビュー実施	
	第5回	障害と認知されにくい障害：識字障害・学習障害	
	第6回	アレルギー、アトピー	
	第7回	小児がん	
	第8回	ミュージカルとオペラ	
	第9回	創造芸術としての身体表現	
	第10回	身体表現を科学する	
	第11回	プレゼンテーションの基本	
	第12回	文献の検索・収集方法	
	第13回	プレゼンテーション・ファイルの作成	
	第14回	プレゼンテーション・ファイルの完成	
	第15回	プレゼンテーション 発表と相互評価	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	授業時に提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介する		
評価方法	リフレクションシート:40% プレゼンテーション:50% 相互評価:10%		

子ども学特別研究 I		前期 2 単位	2年
子どもに関わる音楽についての基礎的な研究		渡辺 善忠 (わたなべ よしただ)	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を行いません。本年度は音楽の基本的な内容を学びます。制作発表・論文とも、半期ごとにレポートや制作（演奏）で研究をまとめる機会を設けて、一年間で研究の基礎的な能力を養うように学びを進めます。		
授業の概要	受講者と私の発表形式で進めます。子どもと音楽に関する音楽の基礎的な文献を読みながら、個々の研究テーマに展開する予定です。		
授業計画	第1回	ガイダンスと研究計画の相談	
	第2回	基礎文献講読①（渡辺が担当）	
	第3回	基礎文献講読②（学生が担当）	
	第4回	基礎文献講読③（学生が担当）	
	第5回	基礎文献講読④（学生が担当）	
	第6回	基礎文献講読⑤（学生が担当）	
	第7回	研究テーマの相談①	
	第8回	基礎文献講読⑥（学生が担当）	
	第9回	基礎文献講読⑦（学生が担当）	
	第10回	基礎文献講読⑧（学生が担当）	
	第11回	基礎文献講読⑨（学生が担当）	
	第12回	基礎文献講読⑩（学生が担当）	
	第13回	研究テーマの相談②	
	第14回	前期のまとめとレポート／演奏や制作の相談	
	第15回	夏休みと後期の研究計画の相談	
準備学習 (予習・復習等)	必要に応じて指示します。		
テキスト	開講時に相談して決めます。		
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。		
評価方法	発表を含む授業内評価:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅱ	後期 2 単位	2年
特別研究への取り組み（その2）		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、大野 祥子（おおの さちこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、佐々木 竜太（ささき りゅうた）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）、渡辺 善忠（わたなべ よしただ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この授業は前期の「子ども学特別研究Ⅰ」を引き継ぐものである。</p> <p>○ 学生自らの知的関心及び独自の視点に基づき研究テーマを設定し、本学科で学んでいる知見を手掛かりに、論文の作成や作品の制作にとりくむ。これにより課題研究の体験学習を引き続き積むこととなる。また、同じグループに属するメンバー相互の意見交換や討論、相互批判などにより、研究テーマを総合的に捉えられるようにする。</p> <p>○ 大学教育で肝心な既存概念や先入観の再吟味や自発的で創造的な課業とし、研究テーマについてどのように調べるか、どのような内容構成が必要かについての実践的な学びを積み重ねる。</p> <p>ここでの特研究は、原則として3年次の「子ども学特別研究Ⅲ・Ⅳ」に継承され、2年間にわたる継続学習になる。教員とその主な指導分野・領域などは別記のとおりである。</p> <p><授業の概要> 原則として、前期に引き続き履修学生の個別的な研究テーマに即した研究内容についての助言や指導とともに、それをいかに論文や制作として構成し、記述・表現するかの方法などについての個別指導やグループ指導が行われる。グループ研究（制作）の場合もある。</p> <p>また、同じグループメンバーにおける相互の意見交換や討論、相互批判などは引き続きここでの特研究の内容深化につながる。</p> <p>それぞれのグループにおいて、年度末には何らかの中間発表が考えられる。</p> <p>そして、これらの取り組みは3年次の学びへと継承される。</p> <p><授業計画> 第1～14回 前期の準備を受け、それぞれの研究テーマに即した論文の作成や作品の製作にとりくむ。 第15回 中間発表などを実施し、「子ども学特別研究Ⅲ」への準備とする。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 各教員より適宜指示。</p> <p><テキスト> それぞれのグループで適宜選択。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく。</p> <p><評価方法> 平常点をもとにして、各種の提出物や中間発表などを総合して評価する。</p> <p>（付記） 3年次「子ども学特別研究」の「論文発表会」「作品発表会」「卒展・ギャラリートーク」を2015年1月に予定しているので、必ず全員が出席のこと。</p>		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 Ⅱ		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 論文作成の基礎基本としての、資料収集、自分の考えを書く、発表する、討議する、研究テーマを深めるなどのことができるようになる。 ○ 幼児及び保育における様々な課題について多様な視点より探究する。 		
授業の概要	夏季休業中に幼児に関する課題テーマを設定して、小論文を作成し、授業の中で発表し、それに基づいて討議を中心として授業を進める。その中で、文献講読も適宜行っていく。		
授業計画	第1回	子ども学特別研究Ⅱについて	
	第2回	文献・資料収集について（図書館）	
	第3回	課題テーマに基づいての小論文発表・討議	
	第4回	課題テーマに基づいての小論文発表・討議	
	第5回	課題テーマに基づいての小論文発表・討議	
	第6回	新テーマ設定についての話し合い及びグループ分け	
	第7回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第8回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第9回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第10回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第11回	新テーマに基づいてグループでの資料収集及び論文作成	
	第12回	グループ別論文発表会	
	第13回	グループ別論文発表会	
	第14回	「子ども学特別研究Ⅲ」に向けて自己課題発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	準備学習として、前回授業の最後に告知された次回授業内容に対応した、関連資料などを調べておくこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	なし		
評価方法	授業への参加度:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
心理学とはなんだろう？		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期に引き続き、心理学の基本を学びます。後期は、心理学の研究方法について、実習をとおして理解を深めます。心理学の実証的研究の文献を講読し、各自の興味あるテーマを絞り込んでいきます。		
授業の概要	実際に、分析・調査等を体験して、心理学の研究方法を学びます。さらに心理学の学術書や学会誌論文から文献を選んで講読します。全員での議論を通して、その領域の今後の課題を認識し、卒業論文のテーマ選定の手掛かりを得ることを目指します。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	心を測るということ	
	第3回	「差がある」とはどういうことか	
	第4回	文献講読とディスカッション（検定の理解）	
	第5回	「関係がある」とはどういうことか	
	第6回	文献講読とディスカッション（相関の理解）	
	第7回	調査の体験（テーマの設定）	
	第8回	調査の体験（調査票の作成）	
	第9回	調査の体験（データ分析）	
	第10回	調査の体験（結果の解釈）	
	第11回	文献講読とディスカッション（学生の発表1）	
	第12回	文献講読とディスカッション（学生の発表2）	
	第13回	文献講読とディスカッション（学生の発表3）	
	第14回	文献講読とディスカッション（学生の発表4）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	調査や実験を行うために必要な、教室外での準備作業を各自で責任を持って行うこと。 講読する文献を読みこんで、疑問点を整理して授業に臨むこと。 卒業論文に向けて、日頃から関心のあるテーマについての本を読んだり情報収集などを心がけること。		
テキスト	特に定めません。必要な文献はその都度配布します。		
参考文献	各自の関心に合わせて適宜紹介します。		
評価方法	プレゼンテーション:30% 議論への積極性:40% 課題:30%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
「興味・関心」から「問い」へ。「問い」から「研究方法」、そして「まとめる」ことへ。		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標及びテーマ	①保育に関して、自分なりの「問い」を発見する。 ②研究テーマと研究方法の関係について理解を深める。 ③資料の検索方法について理解する。 ④調べた結果を整理し、考察し、発表することができる。		
授業の概要	子ども学特別研究Ⅰ（前期）での学びを継続、発展させ、演習形式で進めます。テーマと研究方法の関係についての理解を深め、関心あるテーマについて考え、調べ、発表するとともに成果を小冊子にまとめます。		
授業計画	第1回	講義のねらい、進め方、参考文献、評価方法等の説明 保育研究テーマのひろがりについて	
	第2回	夏期休暇中の観察研究について発表：エピソードと考察（7名）	
	第3回	夏期休暇中の観察研究について発表：エピソードと考察（6名）	
	第4回	夏期休暇中の各自の研究テーマについて発表（7名）	
	第5回	夏期休暇中の各自の研究テーマについて発表（6名）	
	第6回	各自のテーマをさらに深めるための検討、討議	
	第7回	共通資料、基礎文献を検討する（1）プリントで検討	
	第8回	共通資料、基礎文献を検討する（2）図書館で実施	
	第9回	保育所における子どもの生活と子どもの姿（観察研究）	
	第10回	保育所における保育者の役割（観察研究、インタビュー）	
	第11回	発表（保育所での子どもの姿のエピソード） 4名発表	
	第12回	発表（保育者の姿のエピソード） 4名発表	
	第13回	1年間の研究のまとめ（レポートづくり）作業	
	第14回	1年間の研究のまとめ（レポートづくり）作業	
	第15回	小冊子づくり（1年間の研究のまとめ）	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・特に夏季休暇中に、保育の場で子どもや保育者を観察し、それを簡単なエピソード記録に残して下さい。 ・授業での発表に際して、資料を作成して下さい。 		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業の中で随時紹介します。		
評価方法	討議への積極的な参加:20% プレゼンテーション:20% レポート:60%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
アート・コミュニケーション・実験・省察・制作 —素材の森を彷徨—		久保 制一（くぼ せいいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	自分の中の発信したいコト、伝えたい想いを編集する中で、自分に適した素材の選択をしていく。ここからの展開はまさに、自分自身と向き合うことなしには絞り込むことはできないだろう。手で思考するプロセスから、自らのアートプロジェクトのコンセプトと表現したい想いを「かたちになる」ように構築していくことができるようになる。		
授業の概要	作品のコンセプトをもとに、素材研究ワークショップ・技法講習の中から、素材のちがいが表現する内容とどのような関連性があるかをさらに検討していく。自分の表現に適した素材探しの実験、素材自体の研究・調査も各自とりくむ。学外での調査・見学も積極的に実施する。研究内容は進級制作作品としてまとめる。		
授業計画	第1回	夏期休暇期間の特研合宿の振り返り	
	第2回	イメージの編集ワークショップ	
	第3回	イメージの編集「テーマを考察」	
	第4回	イメージの編集「コンセプトを考察」	
	第5回	イメージの編集「テーマ・コンセプトを考察」 プレゼンテーション	
	第6回	アート ワークショップ 「素材研究1」	
	第7回	アート ワークショップ 「素材研究2」	
	第8回	アート ワークショップ 「素材研究3」	
	第9回	アート技法講習 「技法研究1」	
	第10回	アート技法講習 「技法研究2」	
	第11回	アート技法講習 「技法研究3」	
	第12回	進級制作作品 制作1	
	第13回	進級制作作品 制作2	
	第14回	プレゼンテーション 2 進級制作作品 仮提出	
	第15回	進級制作作品 提出	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。		
テキスト	適宜、技法講習ブック・ワークシートを配布する。		
参考文献	文献、作品、資料などを紹介する		
評価方法	平常の取り組み:40% 進級制作作品:60%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
論文作成に向けて		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、来年の学生生活の締めくくりとして論文執筆、発表に向けて、調査、研究、考察を進める。		
授業の概要	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、グループディスカッション、個別相談を通して、自身で決めたテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。 課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。		
授業計画	第1回	経過報告 (1)	
	第2回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (1)	
	第3回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (2)	
	第4回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (3)	
	第5回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (4)	
	第6回	資料、情報収集、テーマ設定に向けて グループディスカッション (5)	
	第7回	経過報告 (2)	
	第8回	分析、文章化に向けて 個別相談 (1)	
	第9回	分析、文章化に向けて 個別相談 (2)	
	第10回	分析、文章化に向けて 個別相談 (3)	
	第11回	分析、文章化に向けて 個別相談 (4)	
	第12回	分析、文章化に向けて 個別相談 (5)	
	第13回	分析、文章化に向けて 個別相談 (6)	
	第14回	分析、文章化に向けて 個別相談 (7)	
	第15回	経過報告 (3)	
準備学習 (予習・復習等)	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、資料、情報の収集し、執筆の為のテーマ設定に向けて、グループディスカッション、個別相談を通し、論文執筆に向けて、調査、研究、考察を進め、自身で決めたテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、執筆に向けて取り組む。		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 論文執筆への内容:40%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
作品を客観的に評価する		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 子どもの本に関するエッセイや、文学に関する評論を読み、理解する。 * 自分の意見をもって討論に臨むことができるようになる。 * 客観的な作品紹介（ブックトーク）や評論ができるようになる。 		
授業の概要	ゼミ形式。書評の発表やビブリオバトルなどを通して視野を広げ、自分の意見を持てるようにする。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	客観的に作品を見るポイント	
	第3回	すぐれた書評とは	
	第4回	文学作品の書評を読む：新聞、書評誌など	
	第5回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ1	
	第6回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ2	
	第7回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ3	
	第8回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ4	
	第9回	好きなテーマで文学作品を2冊以上選び、比較しながら書評を書き、発表する：グループ5	
	第10回	ビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループA	
	第11回	ビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループB	
	第12回	第二段階のビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループA	
	第13回	第二段階のビブリオバトルでたくさんの作品に触れ、発表する力や聞く力、質問する力を育てる：グループB	
	第14回	卒業論文への橋渡し	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	書評や発表の準備を各自行う		
テキスト	必要に応じて授業時にプリント配布		
参考文献	授業時に紹介		
評価方法	授業参加度：30% 書評や発表：30% レポート：40%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
現代教育問題の歴史的・原理的研究（2）		佐々木 竜太（ささき りゅうた）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>今日の教育や子どもをめぐる諸問題を取り上げ、教育学的观点から歴史的・原理的に研究する。 具体的には、 ①諸問題に関する基礎的文献を読み、クリティカル・リーディングの手法を学ぶ ②教育問題に関して、自らの関心に基づいて具体的テーマを確定し、深める ③レポート・論文にまとめる際に必須となる資料探索の方法、研究方法を学ぶ という3点を目標とする。</p>		
授業の概要	<p>後期は、上記目標のうち、①資料探索の方法や研究方法、論文作成法を学び深めること、②各自の研究テーマを絞り、より深めること、という2点に重点を置き、授業を展開する。</p>		
授業計画	第1回	ゼミの進め方について	
	第2回	資料探索の方法（1）	
	第3回	資料探索の方法（2）	
	第4回	教育学における研究方法	
	第5回	文献研究（1）	
	第6回	文献研究（2）	
	第7回	文献研究（3）	
	第8回	文献研究（4）	
	第9回	文献研究（5）	
	第10回	各自の研究テーマの発表（1）	
	第11回	各自の研究テーマの発表（2）	
	第12回	各自の研究テーマの発表（3）	
	第13回	各自の研究テーマの発表（4）	
	第14回	各自の研究テーマの発表（5）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・前期に学んだ資料探索の方法をふまえ、自身のテーマに即したより深い文献・資料探索を行い、文献リストにまとめる。 ・発表者は、自らの関心に即した文献を深く読み、レジュメにまとめ、論点と問題提起を整理する。 ・最終的に、自らのテーマを論文にまとめる際の構想（目次案、概要など）をまとめる。 		
テキスト	授業時に提示する		
参考文献	随時、授業時に提示する		
評価方法	学期末レポート:60% 授業時の発表:20% 平常点:20%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
こころとその育ちについて現場（フィールド）から考える～問いの発見		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
授業の到達目標及びテーマ	各自が日常生活のなかで感じ取った、こころとその育ちに関する問題について、論文にまとめることを目標とする。授業の前半では、実際の研究に触れながら、さまざまな研究方法を理解する。後半では自身のテーマについて探究し、学期末までに論文作成に向けての問いを立てることを目指す。		
授業の概要	演習形式で進める。前半は共通文献の講読から問いの立て方や研究方法について学ぶ。後半は各自の関心のあるテーマを探りつつ、それに関する文献を読み報告を行い、グループディスカッションをする。最終回の中間発表会では各自が次年度探究していくテーマを発表し、その後テーマについてのミニレポートを作成、提出する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	問いを探究するために	
	第3回	質問紙調査について学ぶ①質問紙の作り方、まとめ方	
	第4回	質問紙調査について学ぶ②質問紙調査の実際	
	第5回	質問紙調査について学ぶ③質問紙調査でわかること、わからないこと	
	第6回	インタビューについて学ぶ①インタビューのしかた、まとめ方	
	第7回	インタビューについて学ぶ②インタビューの実際	
	第8回	インタビューについて学ぶ③インタビューでわかること、わからないこと	
	第9回	各自の問いを探究する①テーマの探し方	
	第10回	各自の問いを探究する②文献の探し方	
	第11回	各自の問いを探究する③発表の仕方	
	第12回	各自の問いを探究する④研究報告	
	第13回	各自の問いを探究する⑤研究報告	
	第14回	各自の問いを探究する⑥研究報告	
	第15回	中間発表会	
準備学習 (予習・復習等)	研究報告の際は事前にレジュメを作成提出する		
テキスト	特になし		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	授業への取り組み方:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
マイノリティ（少数派）の当事者から学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各自が卒論のテーマを明確化させる。さらに論文作成に当たっての基本的な方法について理解する。具体的にいくつかのテーマを設定し、プレ調査を実施したり、試行的に論文を作成する。		
授業の概要	各自が関心あるテーマについて、文献研究の成果を発表する。さらに文献や先輩の論文の購読を通して、論文を作成するために必要な事柄について理解する。その後、必要に応じて調査のフィールドやインタビュー対象者を探し、プレ調査を実施したり、試行的に論文を作成する。		
授業計画	第1回	シラバスの説明	
	第2回	夏休みの成果発表（1）	
	第3回	夏休みの成果発表（2）	
	第4回	夏休みの成果発表（3）	
	第5回	論文作成方法の検討（1）	
	第6回	論文作成方法の検討（2）	
	第7回	論文作成方法の検討（3）	
	第8回	中間報告（1）	
	第9回	中間報告（2）	
	第10回	中間報告（3）	
	第11回	中間報告（4）	
	第12回	論文のテーマと関連文献の紹介（1）	
	第13回	論文テーマと関連文献の紹介（2）	
	第14回	論文テーマと関連文献の発表（3）	
	第15回	ふりかえり	
準備学習 （予習・復習等）	各自の発表に向けて、レジメを用意すること。		
テキスト	特になし。		
参考文献	必要に応じて紹介します。		
評価方法	授業後の感想レポート:50% 発表内容:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
現代における教育の諸問題の研究Ⅱ		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育的視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる。		
授業の概要	受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。		
授業計画	第1回	後期オリエンテーション	
	第2回	受講生による発表	
	第3回	受講生による発表	
	第4回	受講生による発表	
	第5回	受講生による発表	
	第6回	受講生による発表	
	第7回	受講生による発表	
	第8回	受講生による発表	
	第9回	受講生による発表	
	第10回	受講生による発表	
	第11回	受講生による発表	
	第12回	受講生による発表	
	第13回	受講生による発表	
	第14回	受講生による発表	
	第15回	後期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートを提出してもらう。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% レポートなど:30%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
子ども学特別研究Ⅱ		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「世界の保育と日本の保育」をテーマとする本ゼミナールの到達目標は、近現代日本の保育の歴史と現状に関する理解を踏まえて、それをより深くするために幾つかの先進諸国の保育の歴史と現状についての知見を得ることである。		
授業の概要	現代日本の保育を広がりのなかで捉え、その長短とそれをもたらす要因などについて考えるため、世界の国々とりわけ主要国の保育の実態や歴史について学ぶ。同時に、それらを通して、ゼミナール員が個別の学習課題をもち、卒論テーマの発見に繋がるようにする。		
授業計画	第1回	前期の反省と後期の課題	
	第2回	日本の保育に直接に影響した米国の保育	
	第3回	米国の保育の開始に影響を与えたドイツの保育	
	第4回	異なる経緯で始まったフランスの保育	
	第5回	独自の経過でスタートしたイギリスの保育	
	第6回	近年、世界的に注目されているイタリアの保育	
	第7回	ドイツの保育がその東側に影響したロシアの保育	
	第8回	中間まとめ	
	第9回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(1)－	
	第10回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(2)－	
	第11回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(3)－	
	第12回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(4)－	
	第13回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(5)－	
	第14回	個別の学習課題の発表－ゼミグループ(6)－	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前期の「子ども学特別研究Ⅰ」の内容をよく振り返っておく。		
テキスト	ゼミナール中に配布する資料など		
参考文献	ゼミナール中に提示		
評価方法	討論への関与など:30% 発表の内容など:70%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
人として育つこと・生きること・暮らすこと再発見～人間社会の探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標及びテーマ	研究の意義や研究の向かう先を考えながら、各自がテーマを設定し、構想を育て始める。福祉に連なる領域を主要な研究のフィールドとするため、さまざまな状況を生きる人たちと社会の諸問題、中でもとくに福祉的支援を必要としている子どもや大人・家族をめぐる諸問題、「私たち」の生活の内外にある課題をとらえ考察を深める。		
授業の概要	前期に続き、今こそ考えておきたい問題を探し、深めあう。個別に持ち寄る発題や共通課題による討論、論評を織りまぜて進める。個々の問題意識をふまえて研究テーマの焦点化を試み、あたためながら、研究方法論についても確認し、3年次に向けて少しずつ研究に着手する。分野の特性から実証的な研究と取り組みへの意欲を育てる。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス～夏休み中の取り組みの成果発表	
	第2回	共通素材を用いての討論と論評（グループ1）	
	第3回	共通素材を用いての討論と論評（グループ2）	
	第4回	共通素材を用いての討論と論評（グループ3）	
	第5回	先行研究に学ぶ	
	第6回	研究課題と焦点化のヒント	
	第7回	研究の意義を考える～研究に求められる視点	
	第8回	研究とは何か～研究に必要な枠組みとフィールド	
	第9回	研究方法～研究に必要な方法論と手順、留意点	
	第10回	文献を読みこむ・要約する～発題（グループ1）	
	第11回	文献を読みこむ・要約する～発題（グループ2）	
	第12回	文献を読みこむ・要約する～発題（グループ3）	
	第13回	研究課題の焦点化の発想と研究方法	
	第14回	研究計画をめぐるディスカッション	
	第15回	まとめとレポート提出・シェアリング	
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読んで理解を深めながら参加する。自ら探究したいトピックスとその周辺について、自分で調べたり、文献を読んだり、実践（具体的な取り組み）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時発表できるよう努力する。提出課題に取り組む。		
テキスト	開講時に示すか、受講生とともに選定して使用する。		
参考文献	必要に応じ個別に、あるいは受講生全体に、参考資料とともに紹介する。		
評価方法	平常点・授業参加態度:50% レポート提出課題:50%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
研究の応用・発展的な知識と技術の修得と、卒業研究につながる研究レポートの作成		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	前期の、小児の健康または身体表現について調べ、作成した報告を発展させて、将来の研究論文の作成・作品の創作に繋がる研究レポートが作成できるようになる。そして、研究のバックボーンとなる文献・映像資料の調査の成果の上に、自分自身で収集したデータの解析結果・自分自身の動きや音の素材を積み上げて、3年次にオリジナルの研究・作品作りを進めるための基礎を完成させる。		
授業の概要	毎時間、課題について説明した後、収集・分析・執筆・素材作り等の作業を指示する。毎回の授業の積み重ねの成果を研究報告（文章または音と映像ファイル）にまとめる。また研究報告の内容について発表し、仲間と相互評価を行って研鑽し合い、研究論文の作成・身体表現作品の創作ができる基礎力をつける。		
授業計画	第1回	研究計画書① 研究計画書の作成方法	
	第2回	研究計画書② 作成	
	第3回	研究計画書③ 改訂・完成	
	第4回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）収集① データ収集の方法の指導	
	第5回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）収集② データ収集の方法の指導	
	第6回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）収集③ 集めたデータの検証と補足	
	第7回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）解析① データの解析方法の指導	
	第8回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）解析② 各自でデータの解析	
	第9回	データ（文献・数値資料・映像や音の資料）解析③ 解析方法の再検討・データの再収集	
	第10回	研究報告作成① 研究報告（レポート）の書き方・音声・映像資料のまとめ方	
	第11回	研究報告作成② 初稿の指導	
	第12回	研究報告作成③ 改訂版の指導	
	第13回	研究報告の発表	
	第14回	研究報告の相互評価	
	第15回	研究報告から研究論文・作品創作へ（研究報告の発展）	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業後にリフレクション・シートを提出すること。シートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	授業時に提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介する		
評価方法	研究計画書:20% 研究レポート:40% プレゼンテーション:40%		

子ども学特別研究Ⅱ		後期 2 単位	2年
子どもに関わる音楽についての研究		渡辺 善忠（わたなべ よしただ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を発展させます。後期は前期で学んだ基礎的な内容を土台として各自のテーマについて学びを展開致します。制作発表・論文とも、年度末に研究をまとめる機会を設けることを目標に研究を進めます。		
授業の概要	個人でテーマを定めて個別に研究を進めます。テーマが絞り込めない場合は、グループで音楽に関わる文献を読みながら各自のテーマを考えつつ研究を進めます。		
授業計画	第1回	研究計画の相談	
	第2回	研究発表①	
	第3回	研究発表②	
	第4回	研究発表③	
	第5回	研究発表④	
	第6回	研究発表⑤	
	第7回	中間発表	
	第8回	研究の個別指導①	
	第9回	研究の個別指導②	
	第10回	研究の個別指導③	
	第11回	研究の個別指導④	
	第12回	研究の個別指導⑤	
	第13回	論文・製作発表の準備①	
	第14回	論文・製作発表の準備②	
	第15回	論文・製作発表	
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。		
テキスト	授業時に相談して決めます。		
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。		
評価方法	発表を含む授業内評価:50% レポート:50%		

子ども学特別研究Ⅲ	通年 4 単位	3年
特別研究への取り組み（その3）		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、大野 祥子（おおの さちこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、清水 康幸（しみず やすゆき）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）、渡辺 善忠（わたなべ よしただ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 本授業は、「子ども学特別研究Ⅱ」に続くもので、特別研究の最終段階として子ども学科での学びの集大成として位置づけられる。 具体的には、年度末の論文・作品発表会でその成果を明らかにし、大学教育の締めくくりの役割を果たす。 なお、グループの編成は2年後期「子ども学特別研究Ⅱ」が継承される。 教員とその主な指導分野・領域などは別記のとおりである。</p> <p><授業の概要> それぞれのテーマに即して個人（グループ）研究が継続される。論文中心の場合は年度末の「論文発表会」に向けて、また表現領域の場合は「作品発表会」や卒展での発表を前提とした終了制作に向けてとりくむ。</p> <p><授業計画> 第1～30回 各研究テーマに即して、その内容の深化に努め、論文の作成や作品の制作にとりくみ、まとめる。その成果は提出と発表が義務づけられている。／ 論文・作品発表会で発表する。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 各教員より適宜指示。</p> <p><テキスト> それぞれのグループで適宜選択する。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく</p> <p><評価方法> 基本的には論文や作品にもとづいて評価するが、最終的には取り組みの過程を含めた総合的な視点から各教員が評価する。</p> <p><論文・作品の提出日> 後日、掲示する。日時を厳守のこと（提出先は教務課）。</p> <p><論文・作品発表会> 2015年1月。全員が発表する。</p> <p>（付記） 論文・作品の要旨を編集した「研究誌」が年度内に発行され、配布される。</p>		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 Ⅲ		浅見 均（あさみ ひとし）		
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年間の「子ども学特別研究」の学びの集大成として、受講生各自のテーマに沿った論文を作成し、完成させる。 ・ 研究テーマに沿って資料収集し、それらをもとにしながら自分の言葉で論理的に論文を作成することができる。 			
授業の概要	前半は、論文のテーマの決定、資料収集し、それらの検討や論文の書き方などについて学び合う。後半は個別指導を中心にし、論文仮提出に向けて取り組む。後に論文発表会に向けてレジュメやプレゼンの準備、ゼミ内での論文発表、討議などを行う。			
授業計画	第1回	オリエンテーション（ゼミの持ち方、計画など）		
	第2回	テーマ別資料収集の方法を学ぶ（図書館利用）		
	第3回	PCを使つての論文作成1（ワードの使い方）		
	第4回	PCを使つての論文作成2（エクセル・パワーポイントの使い方）		
	第5回	論文テーマ発表及び研究動機発表		
	第6回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第7回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第8回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第9回	テーマに沿った資料収集及び個別指導		
	第10回	論文作成中間報告及び討議		
	第11回	論文作成中間報告及び討議		
	第12回	論文作成個別指導		
	第13回	論文作成個別指導		
	第14回	論文作成個別指導		
	第15回	夏期休暇に入るにあたり課題などの検討		
準備学習（予習・復習等）	それぞれのテーマに沿って資料収集を行い、まとめたものを授業に持ってくること。			
テキスト	論文作成のテキストを使用する。書名については授業内で指示する。			
参考文献	特になし			
評価方法	授業への参加度:40% 論文:60%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
幼児及び保育をとりまく諸課題についての探究 Ⅲ		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年間の「子ども学特別研究」の学びの集大成として、受講生各自のテーマに沿った論文を作成し、完成させる。 ・ 研究テーマに沿って資料収集し、それらをもとにしながら自分の言葉で論理的に論文を作成することができる。 		
授業の概要	前半は、論文のテーマの決定、資料収集し、それらの検討や論文の書き方などについて学び合う。後半は個別指導を中心にし、論文仮提出に向けて取り組む。後に論文発表会に向けてレジュメやプレゼンの準備、ゼミ内での論文発表、討議などを行う。		
授業計画	第1回	後期の授業計画及び夏期休暇中の成果発表	
	第2回	夏期休暇中の成果発表	
	第3回	夏期休暇中の成果発表	
	第4回	夏期休暇中の成果発表	
	第5回	論文作成個別指導	
	第6回	論文作成個別指導	
	第7回	論文作成個別指導	
	第8回	論文中間発表及び検討	
	第9回	論文中間発表及び検討	
	第10回	論文中間発表及び検討	
	第11回	論文仮提出	
	第12回	プレゼン準備	
	第13回	ゼミ内論文発表会	
	第14回	ゼミ内論文発表会	
	第15回	論文発表会	
準備学習 (予習・復習等)	それぞれのテーマに沿って資料収集を行い、まとめたものを授業に持ってくること。		
テキスト	論文作成のテキストを使用する。書名については授業内で指示する。		
参考文献	特になし		
評価方法	授業への参加度:40% 論文:60%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
心理学とは何だろうか？		大野 祥子（おおの さちこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	前年度に引き続き、心理学について発展的に学びながら、各自の興味のあるテーマについての学習を進めます。前期は、各自が関心のある資料を持ち寄り、順番に発表していきます。全員でのディスカッションを通して、卒業論文のテーマを決定します。実験や調査を行う人は、具体的な調査計画を立てていきます。			
授業の概要	演習形式で進めます。毎回の発表担当を決め、自分の選んだテーマについての学習成果を発表します。全員でディスカッションをしながら卒業論文のテーマを絞り込んでいきます。			
授業計画	第1回	イントロダクション		
	第2回	文献・資料の探し方		
	第3回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第4回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第5回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第6回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第7回	発表とディスカッション（テーマの絞り込み）		
	第8回	発表とディスカッション（リサーチクエスションの設定）		
	第9回	発表とディスカッション（リサーチクエスションの設定）		
	第10回	発表とディスカッション（リサーチクエスションの設定）		
	第11回	発表とディスカッション（リサーチクエスションの設定）		
	第12回	発表とディスカッション（リサーチクエスションの設定）		
	第13回	発表とディスカッション（研究計画の立案）		
	第14回	発表とディスカッション（研究計画の立案）		
	第15回	テーマ発表会		
準備学習 (予習・復習等)	教室では相談・指導を行うので、学習・研究のための作業は授業時間外で進めておくこと。			
テキスト	特に定めません。			
参考文献	各自の関心に応じて適宜紹介します。			
評価方法	担当の発表：20% 議論への貢献：20% 研究への取り組み：60%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
心理学とは何だろう？		大野 祥子（おおの さちこ）	
授業の到達目標及びテーマ	前期に引き続き、各自で設定したテーマのもと、卒業研究を進めます。実際に研究を行ってデータ分析・考察を進め、論文を作成します。各自が選んだテーマについて自分なりの意見やもの見方を構築するとともに、それを人に伝えるための学術的な表現形式・方法を学びます。		
授業の概要	演習形式で進めます。前半は順番に研究の進捗状況を発表しながら、各自の課題を明確にしていきます。後半は、論文の執筆のしかたを学び、実際に論文を完成させます。適宜、個別相談も取り入れていきます。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	発表とディスカッション	
	第3回	発表とディスカッション	
	第4回	発表とディスカッション	
	第5回	発表とディスカッション	
	第6回	発表とディスカッション	
	第7回	学術論文の書き方	
	第8回	論文作成指導	
	第9回	論文作成指導	
	第10回	論文作成指導	
	第11回	論文作成指導	
	第12回	論文作成指導	
	第13回	プレゼンテーションの技術（要旨をまとめる）	
	第14回	プレゼンテーションの技術（視覚的資料の活用）	
	第15回	まとめ	
準備学習（予習・復習等）	教室では相談・指導を行うので、研究のための学習・作業は授業時間外で進めておくこと。		
テキスト	特に定めません。		
参考文献	各自の関心に応じて適宜紹介します。		
評価方法	担当の発表：15% 議論への貢献：15% 研究への取り組み：35% 卒業論文：35%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
保育・子どもに関する「自分なりの素朴な問い」から「研究テーマ」へ		岸井 慶子（きしい けいこ）		
授業の到達目標及びテーマ	①自分の追求したい「研究テーマ」を特定する。 ②先行研究や関連文献を収集、講読し、各自の研究テーマと関連させて検討する。 ③研究計画を作成する。 ④研究論文を作成し発表する。			
授業の概要	2年次に引き続いて、自分なりに疑問に感じたり、気になったりしていることを整理し、各自が研究テーマを絞り込んでいきます。さらに研究方法を探り、研究計画の作成、論文の作成に取り組みます。学生各自の自発的な学びを積み重ね、それらを報告・発表し、討議しながら互いに刺激しあい学び合うことを大切にしていきます。			
授業計画	第1回	講義のねらい、進め方、参考文献、評価方法等の説明 論文の構想と作成について		
	第2回	研究課題の発表と討議（レジュメ作成）7名		
	第3回	研究課題の発表と討議（レジュメ作成）6名		
	第4回	資料収集の方法（講義、図書館）		
	第5回	先行研究の検討（レジュメ作成）7名		
	第6回	先行研究の検討（レジュメ作成）7名		
	第7回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第8回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第9回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第10回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第11回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第12回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第13回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第14回	研究課題・研究方法の発表と検討（レジュメ作成）		
	第15回	まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマを明確にしてください。レジュメ作成など、主体的に、準備してください。			
テキスト	特に指定しません			
参考文献	授業内で必要に応じて紹介します			
評価方法	論文:70% 発表（内容、準備）:20% 討議への参加状況:10%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
保育・子どもに関する「自分なりの素朴な問い」から「研究テーマ」へ		岸井 慶子（きしい けいこ）	
授業の到達目標及びテーマ	①自分の追求したい「研究テーマ」を特定する。 ②先行研究や関連文献を収集、講読し、各自の研究テーマと関連させて検討する。 ③研究計画を作成する。 ④研究論文を作成し発表する。		
授業の概要	2年次に引き続いて、自分なりに疑問に感じたり、気になったりしていることを整理し、各自が研究テーマを絞り込んでいきます。さらに研究方法を探り、研究計画の作成、論文の作成に取り組みます。学生各自の自発的な学びを積み重ね、それらを報告・発表し、討議しながら互いに刺激あひ学び合うことを大切にしていきます。		
授業計画	第1回	卒業論文の作成について	
	第2回	研究論文報告と検討	
	第3回	研究論文報告と検討	
	第4回	研究論文報告と検討	
	第5回	研究論文報告と検討	
	第6回	研究論文報告と検討	
	第7回	研究論文報告と検討	
	第8回	研究論文報告と検討	
	第9回	中間発表（レジュメ、パワーポイント使用）	
	第10回	中間発表（レジュメ、パワーポイント使用）	
	第11回	修正作業（個別指導）	
	第12回	修正作業（個別指導）	
	第13回	修正作業（個別指導）	
	第14回	論文発表会にむけての準備（発表用レジュメ作成）	
	第15回	報告書レジュメ作成	
準備学習（予習・復習等）	研究テーマを明確にしてください。レジュメ作成など、主体的に、準備してください。		
テキスト	特に指定しません		
参考文献	授業内で必要に応じて紹介します		
評価方法	論文：70% 発表（内容、準備）：20% 討議への参加状況：10%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
アートコミュニケーション・実験・省察・制作 ーイメージの泉を探検し、素材の森との融合をはかるー		久保 制一（くぼ せいいち）		
授業の到達目標 及びテーマ	前期にはアートプロジェクトを立ち上げ、作品のイメージとコンセプトを徐々に明確にしなが、最もフィットすると思われる素材を決定する。その素材の情報収集と技法の研究や多様な視点からの実験を展開する。アートプロジェクトを更に深化させ広がりを持たせる為にも、イメージとコンセプトの言語化をしていく。夏期休暇中に2年生と合同の合宿を行う。後期は、各自のプロジェクトを進めて、アート作品になるように創造的に制作を取り組み、発表方法の検討もあわせて展開する。			
授業の概要	前期 素材とイメージ、表現と素材、イメージとコンセプトの言語化・・・研究と制作ワークショップ 夏期休暇 合宿（2泊3日） 後期 自由制作・・・個別にアドバイス 卒業制作作品・制作ノートの提出・・・指定された提出日 発表方法の検討・・・卒展／作品発表会			
授業計画	第1回	素材の実験 ワークショップ		
	第2回	素材の実験 ワークショップ		
	第3回	イメージの実験 ワークショップ		
	第4回	イメージの実験 ワークショップ		
	第5回	素材とイメージの実験 ワークショップ		
	第6回	素材とイメージの実験 ワークショップ		
	第7回	素材とイメージの実験 ワークショップ		
	第8回	道具の実験 ワークショップ		
	第9回	道具の実験 ワークショップ		
	第10回	イメージの編集 ワークショップ		
	第11回	イメージの編集 ワークショップ		
	第12回	イメージの編集 ワークショップ		
	第13回	イメージの編集 ワークショップ		
	第14回	イメージの編集 プレゼンテーション		
	第15回	夏期休暇中の特研合宿オリエンテーション		
準備学習 (予習・復習等)	特になし。			
テキスト	特になし。			
参考文献	特になし。			
評価方法	作品:60% 平常点:40%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
アートコミュニケーション・実験・省察・制作 ーイメージの泉を探検し、素材の森との融合をはかるー		久保 制一（くぼ せいいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期にはアートプロジェクトを立ち上げ、作品のイメージとコンセプトを徐々に明確にしなが、最もフィットすると思われる素材を決定する。その素材の情報収集と技法の研究や多様な視点からの実験を展開する。アートプロジェクトを更に深化させ広がりを持たせる為にも、イメージとコンセプトの言語化をしていく。夏期休暇中に2年生と合同の合宿を行う。後期は、各自のプロジェクトを進めて、アート作品になるように創造的に制作を取り組み、発表方法の検討もあわせて展開する。		
授業の概要	前期 素材とイメージ、表現と素材、イメージとコンセプトの言語化・・・研究と制作ワークショップ 夏期休暇 合宿（2泊3日） 後期 自由制作・・・個別にアドバイス 卒業制作作品・制作ノートの提出・・・指定された提出日 発表方法の検討・・・卒業／作品発表会		
授業計画	第1回	自由制作 マケットの制作	
	第2回	自由制作 マケットの制作	
	第3回	自由制作 プレゼンテーション	
	第4回	自由制作 作品の制作	
	第5回	自由制作 作品の制作	
	第6回	自由制作 作品の制作	
	第7回	自由制作 作品の制作	
	第8回	自由制作 作品の制作	
	第9回	自由制作 作品の制作	
	第10回	自由制作 作品の制作	
	第11回	自由制作 作品の制作	
	第12回	自由制作 作品の制作	
	第13回	作品の仮提出 プレゼンテーション	
	第14回	制作ノートの仮提出 プレゼンテーション	
	第15回	卒業制作 作品・制作ノート 提出 卒展 展示作業	
準備学習 (予習・復習等)	特になし。		
テキスト	特になし。		
参考文献	特になし。		
評価方法	平常の取り組み:20% 作品:80%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
論文執筆 発表		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする。			
授業の概要	前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。			
授業計画	第1回	授業の進め方		
	第2回	図書館オリエンテーション		
	第3回	文章化に向けて ディスカッション (1)		
	第4回	文章化に向けて ディスカッション (2)		
	第5回	文章化に向けて ディスカッション (3)		
	第6回	文章化に向けて ディスカッション (4)		
	第7回	文章化に向けて ディスカッション (5)		
	第8回	文章化に向けて ディスカッション (6)		
	第9回	経過報告 (1)		
	第10回	文章化に向けて 個別相談 (1)		
	第11回	文章化に向けて 個別相談 (2)		
	第12回	文章化に向けて 個別相談 (3)		
	第13回	文章化に向けて 個別相談 (4)		
	第14回	文章化に向けて 個別相談 (5)		
	第15回	経過報告 (2)		
準備学習 (予習・復習等)	自身でテーマを決めた、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする為に、前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。			
テキスト	必要な場合は指示致します。			
参考文献	必要な場合は指示致します			
評価方法	論文執筆への積極性:60% 執筆論文の内容、発表:40%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
論文執筆 発表		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする。		
授業の概要	前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。課外授業として、前期と後期の間に、2日間の合宿、又は、2日間の集中講義の予定。		
授業計画	第1回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (1)	
	第2回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (2)	
	第3回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (3)	
	第4回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (4)	
	第5回	文章化に向けて内容検討 個別相談 (5)	
	第6回	経過報告 (3)	
	第7回	執筆に向けて 個別相談 (1)	
	第8回	執筆に向けて 個別相談 (2)	
	第9回	執筆に向けて 個別相談 (3)	
	第10回	論文仮提出	
	第11回	執筆内容検討 個別相談 (1)	
	第12回	執筆内容検討 個別相談 (2)	
	第13回	執筆内容検討 個別相談 (3)	
	第14回	論文提出 レジュメ提出	
	第15回	発表	
準備学習 (予習・復習等)	自身でテーマを決めた、学生生活の締めくくりとしての論文執筆、発表に向けて、前期は、調査、研究、考察を中心に執筆を進め、後期には論文を執筆完成させ、発表をする為に、前期は、資料、情報の収集、テーマ設定に向けて、個別相談を通して、自身で設定したテーマに基づいて、分析、文章化に向けて、取り組む。後期は、自身で決めたテーマで論文を完成させ、レジュメを完成させ、発表する。		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 執筆論文の内容、発表:40%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
問い続け、考え続ける		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 卒業論文提出に向けて、テーマをしぼりこみ、論文の柱を立てることができるようになる。 * 考えて書く技術を磨く。 * 論文を完成させるのに必要な技術を習得する。 * 文章を推敲するポイントを理解する。 			
授業の概要	ゼミ形式。ビブリオバトルや文献講読をしながら、ディスカッションやアドバイスを通して、考える力、書く力を養っていく。			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	気になっているテーマを短文にして持ち寄り、発表、討論		
	第3回	論文の書き方について：形式と約束事		
	第4回	論文の書き方について：文献や資料の探し方		
	第5回	卒業生の論文を読んでもみる		
	第6回	研究者の論文を読んでもみる		
	第7回	各自のテーマの発表とディスカッション：グループ1		
	第8回	各自のテーマの発表とディスカッション：グループ2		
	第9回	テーマを決めてのビブリオバトルあるいはブックトーク：グループ1		
	第10回	テーマを決めてのビブリオバトルあるいはブックトーク：グループ2		
	第11回	論文の柱や構成を考える		
	第12回	論文の引用の仕方、参考文献リストの書き方を考える		
	第13回	中間発表会：グループA		
	第14回	中間発表会：グループB		
	第15回	中間発表会：グループC		
準備学習 (予習・復習等)	各自で主体的に研究したいテーマを決め、文献を探し、論文を完成させていく。			
テキスト	必要に応じてプリント配布			
参考文献	授業時に紹介			
評価方法	レポート:40% 授業時の発表:40% 授業参加度:20%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
問い続け、考え続ける		さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> * 卒業論文提出に向けて、テーマをしぼりこみ、論文の柱を立てることができるようになる。 * 考えて書く技術を磨く。 * 論文を完成させるのに必要な技術を習得する。 * 文章を推敲するポイントを理解する。 		
授業の概要	ゼミ形式。各自の発表を中心に、ディスカッションやアドバイスを通して、考える力、書く力を養っていく。研究室での個人指導が中心だが、折に触れて全員で集まる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ1	
	第3回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ2	
	第4回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ3	
	第5回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ4	
	第6回	個別指導（各人のテーマと進度に応じて）：グループ5	
	第7回	中間発表：グループA	
	第8回	中間発表：グループB	
	第9回	論文仮提出	
	第10回	合評	
	第11回	個別指導（まとめ）：グループ1&2	
	第12回	個別指導（まとめ）：グループ3&4	
	第13回	個別指導（まとめ）：グループ5	
	第14回	論文提出、レジュメ提出	
	第15回	発表	
準備学習 (予習・復習等)	各自で主体的に研究したいテーマを決め、文献を探し、論文を完成させていく。		
テキスト	必要に応じてプリント配布		
参考文献	授業時に紹介		
評価方法	レポート:40% 授業時の発表:40% 授業参加度:20%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
現代教育問題の歴史的・原理的研究（3）		清水 康幸（しみず やすゆき）		
授業の到達目標及びテーマ	今日の教育や子どもをめぐる問題を取り上げ、教育学的観点から歴史的・原理的に研究する。具体的には、①基礎的文獻を読みつつ、学問研究の基礎を学ぶ、②自らの主体的関心に基づく具体的テーマを深めていく、③そのための資料探索、研究方法を学んでいく、④最終的にその成果を卒業論文としてまとめること、を目標とする。			
授業の概要	前期は、①卒業論文のテーマを決め、文献・資料目録を作成する、②それに基づき論文の章立てを決める、ところまで達成する。			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	各自の研究テーマの発表と交流①		
	第3回	各自の研究テーマの発表と交流②		
	第4回	各自の研究テーマの発表と交流③		
	第5回	各自の研究テーマの発表と交流④		
	第6回	論文の章立ての発表と交流①		
	第7回	論文の章立ての発表と交流②		
	第8回	論文の章立ての発表と交流③		
	第9回	論文の章立ての発表と交流④		
	第10回	論点整理の発表①		
	第11回	論点整理の発表②		
	第12回	論点整理の発表③		
	第13回	論点整理の発表④		
	第14回	論点整理の発表⑤		
	第15回	まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	前期は論文構想（テーマ・章立て）の確定に向け、毎週発表があるため、日々の継続的努力が必要とされる。			
テキスト	特に定めない			
参考文献	随時、授業時に提示する。			
評価方法	授業時における発表:60% レポート:40%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
現代教育問題の歴史的・原理的研究（3）		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標及びテーマ	今日の教育や子どもをめぐる問題を取り上げ、教育学的観点から歴史的・原理的に研究する。具体的には、①基礎的文獻を読みつつ、学問研究の基礎を学ぶ、②自らの主体的関心に基づく具体的テーマを深めていく、③そのための資料探索、研究方法を学んでいく、④最終的にその成果を卒業論文としてまとめること、を目標とする。		
授業の概要	後期は、卒業論文執筆が課題となるため、個別指導に重点が置かれる。前期に定めたテーマ・章立てに沿って、実際に論文を書き進め、個別指導を経て最終的に卒業論文を仕上げ、卒論発表会において発表できる水準まで研究を高めていく。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	論文テーマと章立ての確認①	
	第3回	論文テーマと章立ての確認②	
	第4回	論文テーマと章立ての確認③	
	第5回	論文テーマと章立ての確認④	
	第6回	原稿の検討①	
	第7回	原稿の検討②	
	第8回	原稿の検討③	
	第9回	原稿の検討④	
	第10回	原稿の検討⑤	
	第11回	論文の仮提出	
	第12回	手直しの確認	
	第13回	卒論発表会にむけての準備①	
	第14回	卒論発表会にむけての準備②	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	後期は、論文執筆の段階ごとの個別指導があるため、計画的に執筆していくことが求められる。		
テキスト	特に定めない		
参考文献	随時、授業時に提示する。		
評価方法	授業時における発表:15% 卒業論文:70% 卒論発表会:15%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
こころとその育ちにかかわる問題について現場（フィールド）から考える～論文の作成		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）		
授業の到達目標 及びテーマ	各自が2年間あたためて育てたテーマを論文にしていく。それぞれのテーマに沿った研究方法を用いながら考察を深める。文献研究から見えてきたこと、調査の結果明らかになったことを、自分のことばでまとめることを目指す。それぞれのテーマを探求しつつ、グループメンバーのテーマにも関心をむけ理解し、互いに刺激を受け与えることで学びあう。 さらに論文発表会では、自分がどんなテーマについて研究をし、何がわかったのかについて、初めて話しを聞く人に対しても分かるように伝えることを目標とする。			
授業の概要	＜前期＞2年次にあたためたテーマをもとに、研究計画を立てる。研究計画に基づき、文献研究、インタビューやアンケートなどの調査を行う。授業内での報告とディスカッションを通して、グループメンバーが互いのテーマについても共有し、意見交換をしながら、考察を深めていく。期末に2年次生と合同で中間報告会を行う。 ＜後期＞前半は論文を書くことについて具体的に学びながら、論文作成にむけて、各自の研究をまとめていく。後半は個別相談を中心に行いながら、論文を作成していく。論文提出後は発表会に向けての準備を行う。			
授業計画	第1回	オリエンテーションと春休みの報告		
	第2回	研究報告とディスカッション①テーマの検討		
	第3回	研究報告とディスカッション②テーマの検討		
	第4回	研究報告とディスカッション③方法の検討		
	第5回	研究報告とディスカッション④方法の検討		
	第6回	研究報告とディスカッション⑤先行研究の検討		
	第7回	研究報告とディスカッション⑥先行研究の検討		
	第8回	研究報告とディスカッション⑦先行研究の検討		
	第9回	研究報告とディスカッション⑧先行研究の検討		
	第10回	研究報告とディスカッション⑨調査を実施するにあたって		
	第11回	研究報告とディスカッション⑩調査結果の検討		
	第12回	研究報告とディスカッション⑪調査結果の検討		
	第13回	研究報告とディスカッション⑫調査結果の検討		
	第14回	研究報告とディスカッション⑬中間報告会に向けて		
	第15回	中間報告会		
準備学習 (予習・復習等)	研究報告の際には事前にレジュメを作成する			
テキスト	授業内で適宜紹介			
参考文献	授業内で適宜紹介			
評価方法	授業への取り組み:20% 論文作成状況:30% 論文:40% 発表会での発表内容:10%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
こころとその育ちにかかわる問題について現場（フィールド）から考える～論文の作成		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
授業の到達目標及びテーマ	各自が2年間あたためて育てたテーマを論文にしていく。それぞれのテーマに沿った研究方法を用いながら考察を深める。文献研究から見えてきたこと、調査の結果明らかになったことを、自分のことばでまとめることを目指す。それぞれのテーマを探求しつつ、グループメンバーのテーマにも関心をむけ理解し、互いに刺激を受け与えることで学びあう。さらに論文発表会では、自分がどんなテーマについて研究をし、何がわかったのかについて、初めて話しを聞く人に対しても分かるように伝えることを目標とする。		
授業の概要	<p><前期>2年次にあたためたテーマをもとに、研究計画を立てる。研究計画に基づき、文献研究、インタビューやアンケートなどの調査を行う。授業内での報告とディスカッションを通して、グループメンバーが互いのテーマについても共有し、意見交換をしながら、考察を深めていく。期末に2年次生と合同で中間報告会を行う。</p> <p><後期>前半は論文を書くことについて具体的に学びながら、論文作成にむけて、各自の研究をまとめていく。後半は個別相談を中心に行いながら、論文を作成していく。論文提出後は発表会に向けての準備を行う。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	研究報告とディスカッション①	
	第3回	研究報告とディスカッション②	
	第4回	研究報告とディスカッション③	
	第5回	研究報告とディスカッション④	
	第6回	個別相談①	
	第7回	個別相談②	
	第8回	個別相談③	
	第9回	個別相談④	
	第10回	仮提出	
	第11回	仮提出をふまえての個別相談①	
	第12回	仮提出をふまえての個別相談②	
	第13回	仮提出をふまえての個別相談③	
	第14回	論文提出についての最終確認	
	第15回	レジュメの書き方、発表についての注意	
準備学習 (予習・復習等)	研究報告の際には事前にレジュメを作成する		
テキスト	授業内で適宜紹介		
参考文献	授業内で適宜紹介		
評価方法	授業への取り組み:20% 論文作成状況:30% 論文:40% 発表会での発表内容:10%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
マイノリティ（少数派）の当事者から学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	通年を通して、各自が設定したテーマに沿って、文献を購読し、さらに必要な手続きを経て、卒業論文の作成を行う。			
授業の概要	前半は、各自のテーマを発表しあい、何をどこまで、どのような方法で明らかにしたいのかを確認しあう。 後半は、論文を執筆し、作成できた力所を相互に評価しあいながら、より質の高い論文作成を目指す。			
授業計画	第1回	テーマと概要の発表（1）		
	第2回	テーマと概要の発表（2）		
	第3回	テーマと概要の発表（3）		
	第4回	研究方法の確認（1）		
	第5回	研究方法の確認（2）		
	第6回	研究方法の確認（3）		
	第7回	論文の部分発表（1）		
	第8回	論文の部分発表（2）		
	第9回	論文の部分発表（3）		
	第10回	論文の部分発表（4）		
	第11回	論文の部分発表（5）		
	第12回	論文の部分発表（6）		
	第13回	論文の部分発表（7）		
	第14回	論文の部分発表（8）		
	第15回	論文の部分発表（9）		
準備学習 (予習・復習等)	卒業論文作成にむけて各自文献を購読し、調査をし、作成した論文を発表するための準備をする。			
テキスト	適宜指定する。			
参考文献	適宜指定する。			
評価方法	論文の完成度:70% 授業での発表態度:30%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
マイノリティ（少数派）の当事者から学ぶ。		杉田 穂子（すぎた やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	通年を通して、各自が設定したテーマに沿って、文献を購読し、さらに必要な手続きを経て、卒業論文の作成を行う。		
授業の概要	前半は、各自のテーマを発表しあい、何をどこまで、どのような方法で明らかにしたいのかを確認しあう。 後半は、論文を執筆し、作成できた力所を相互に評価しあいながら、より質の高い論文作成を目指す。		
授業計画	第1回	論文の全体概要の発表（1）	
	第2回	論文の全体概要の発表（2）	
	第3回	論文の全体概要の発表（3）	
	第4回	論文の全体概要の発表（4）	
	第5回	論文の全体概要の発表（5）	
	第6回	論文の全体発表（1）	
	第7回	論文の全体発表（2）	
	第8回	論文の全体発表（3）	
	第9回	論文の全体発表（4）	
	第10回	論文の全体発表（5）	
	第11回	論文の全体発表（6）	
	第12回	論文の全体発表（7）	
	第13回	論文発表に向けての準備（1）	
	第14回	論文発表に向けての準備（2）	
	第15回	論文発表に向けての準備（3）	
準備学習 (予習・復習等)	卒業論文作成にむけて各自文献を購読し、調査をし、作成した論文を発表するための準備をする。		
テキスト	適宜指定する。		
参考文献	適宜指定する。		
評価方法	論文の完成度:70% 授業での発表態度:30%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
現代における教育の諸問題の研究Ⅲ		鈴木 俊之（すずき としゆき）		
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育的視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる、4. 自らが設定したテーマについて、論文としてまとめることができる。			
授業の概要	前期：受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。また卒論に向けた個人指導も行う。 後期：主に個人指導になり、卒論の完成に向けて発表をしよう。			
授業計画	第1回	オリエンテーション		
	第2回	受講生による発表		
	第3回	受講生による発表		
	第4回	受講生による発表		
	第5回	受講生による発表		
	第6回	受講生による発表		
	第7回	受講生による発表		
	第8回	受講生による発表		
	第9回	受講生による発表		
	第10回	受講生による発表		
	第11回	受講生による発表		
	第12回	受講生による発表		
	第13回	受講生による発表		
	第14回	受講生による発表		
	第15回	前期まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートが必要である。			
テキスト	特になし。			
参考文献	授業中に指示する。			
評価方法	平常点:30% 卒業論文:70%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
現代における教育の諸問題の研究Ⅲ		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育的視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に他者に提示する、事ができるようになる、4. 自らが設定したテーマについて、論文としてまとめることができる。		
授業の概要	前期：受講生は全員、前週までに指定されたテキスト・論文などを読み、そのテキスト・論文の主張およびそれに対する批判的検討を加え、A4一枚程度にまとめてくる。授業ではそれにもとづき、少人数グループで討論をする。また卒論に向けた個人指導も行う。 後期：主に個人指導になり、卒論の完成に向けて発表をしてみよう。		
授業計画	第1回	後期オリエンテーション	
	第2回	受講生による発表	
	第3回	受講生による発表	
	第4回	受講生による発表	
	第5回	受講生による発表	
	第6回	受講生による発表	
	第7回	受講生による発表	
	第8回	受講生による発表	
	第9回	受講生による発表	
	第10回	受講生による発表	
	第11回	受講生による発表	
	第12回	受講生による発表	
	第13回	受講生による発表	
	第14回	受講生による発表	
	第15回	受講生による発表	
準備学習 (予習・復習等)	毎回A4一枚程度の予習レポートが必要である。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:30% 卒業論文:70%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
乳幼児の家庭での養育と施設での保育の関係		村知 稔三（むらち としみ）		
授業の到達目標 及びテーマ	1990年代から「少子化」や「児童虐待」が社会問題となるのに伴い、幼稚園や保育園での保育は改革が続き、家庭での養育は難しくなっている。そこで両者の関係を実態や歴史などにもとづいて考える。			
授業の概要	少人数が短大での学習を卒業論文にまとめるゼミナールなので、「ねらい」の枠内で決めた各自の研究課題がうまく進むようにする。具体的には、①自らが解きたい課題を明らかにする、②関係する代表的な論文や本を探し、読み、ノートをとる、③データや資料を入手する、④その成果を②と比較し、①の課題に照らしてまとめる、ということになる。			
授業計画	第1回	ねらい・内容などについての提案と討議		
	第2回	教員の研究課題と研究の進め方全般についての報告と討議		
	第3回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(1)		
	第4回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(2)		
	第5回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(3)		
	第6回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(4)		
	第7回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(5)		
	第8回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(6)		
	第9回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(7)		
	第10回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(8)		
	第11回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(9)		
	第12回	ゼミ員の研究課題についての報告と討議(10)		
	第13回	乳幼児の養育と保育の関係(1)		
	第14回	乳幼児の養育と保育の関係(2)		
	第15回	ゼミ員の研究課題をまとめた小論集の作成		
準備学習 (予習・復習等)	2年末の春季休暇の課題を着実に進める。			
テキスト	ゼミナールのため、特に決めない。			
参考文献	文献の探し方や調査法、論文の書き方について役立つようなものを推薦する。			
評価方法	報告:30% 卒論:70%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
乳幼児の家庭での養育と施設での保育の関係		村知 稔三（むらち としみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	1990年代から「少子化」や「児童虐待」が社会問題となるのに伴い、幼稚園や保育園での保育は改革が続き、家庭での養育は難しくなっている。そこで両者の関係を実態や歴史などにもとづいて考える。		
授業の概要	少人数が短大での学習を卒業論文にまとめるゼミナールなので、「ねらい」の枠内で決めた各自の研究課題がうまく進むようにする。具体的には、①自らが解きたい課題を明らかにする、②関係する代表的な論文や本を探し、読み、ノートをとる、③データや資料を入手する、④その成果を②と比較し、①の課題に照らしてまとめる、ということになる。		
授業計画	第1回	小論集にもとづいた休暇中の進展に関する各自の短報	
	第2回	教員の研究のまとめについての報告と討議	
	第3回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(1)	
	第4回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(2)	
	第5回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(3)	
	第6回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(4)	
	第7回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(5)	
	第8回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(6)	
	第9回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(7)	
	第10回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(8)	
	第11回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(9)	
	第12回	ゼミ員の研究のまとめについての報告と討議(10)	
	第13回	卒論の完成と発表の準備(1)	
	第14回	卒論の完成と発表の準備(2)	
	第15回	卒論の発表	
準備学習 (予習・復習等)	2年末の春季休暇の課題を着実に進める。		
テキスト	ゼミナールのため、特に決めない。		
参考文献	文献の探し方や調査法、論文の書き方について役立つようなものを推薦する。		
評価方法	報告:30% 卒論:70%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
人間らしく生きることの探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）		
授業の到達目標 及びテーマ	研究することの意義や目的を確認しながら、各自がテーマを設定し、主体的に内容を育てていく。福祉に連なる領域を主要な研究のフィールドとするため、さまざまな状況を生きる人たちの抱える課題、中でもとくに福祉的支援を必要としている子どもや大人・家族をめぐる諸問題、私たちの生活の内外にある社会的な課題を中心とした考察を行う。			
授業の概要	2年次の特別研究の成果をふまえ、各自がテーマ（研究課題）を構想し、研究計画を立てて深めていく。研究に求められる方法論や執筆手法については個別に助言する中で確認する。また、共通の文献・持ち寄るテーマやトピックスにそった発題・ディスカッションを重ね、仲間とともに学びあうことも重視する。論文作成とレジュメ作成、発表に至る過程において、自らの課題と向き合いながら多くの出会いや発見を重ねていくこと。			
授業計画	第1回	オリエンテーション・前期授業ガイダンス		
	第2回	研究課題に関するディスカッション		
	第3回	文献・資料活用の検討と討論		
	第4回	研究課題の検討、発表、討論		
	第5回	個別研究指導（グループ1）		
	第6回	個別研究指導（グループ2）		
	第7回	研究課題の精査、発表、討論（グループ1）		
	第8回	研究課題の精査、発表、討論（グループ2）		
	第9回	研究方法論の精査（グループ1）		
	第10回	研究方法論の精査（グループ2）		
	第11回	個人別研究指導（グループ1）		
	第12回	個人別研究指導（グループ2）		
	第13回	夏休み以後の研究計画の発表会（グループ1）		
	第14回	夏休み以後の研究計画の発表会（グループ2）		
	第15回	まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読み、理解を深めながら参加する。自ら設定したテーマとその周辺について調べたり、文献を読んだり、具体的な取り組み（実践）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時報告する努力をする。自ら主体的に研究を展開することが研究指導の前提である。行き詰ったときには必ず相談し助言を受けること。			
テキスト	開講時に指示する。			
参考文献	随時紹介する。			
評価方法	研究取り組み状況:20% 成果物（卒業論文）:50% レジュメ・発表成果:30%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
人間らしく生きることの探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	研究することの意義や目的を確認しながら、各自がテーマを設定し、主体的に内容を育てていく。福祉に連なる領域を主要な研究のフィールドとするため、さまざまな状況を生きる人たちの抱える課題、中でもとくに福祉的支援を必要としている子どもや大人・家族をめぐる諸問題、私たちの生活の内外にある社会的な課題を中心とした考察を行う。		
授業の概要	2年次の特別研究の成果をふまえ、各自がテーマ（研究課題）を構想し、研究計画を立てて深めていく。研究に求められる方法論や執筆手法については個別に助言する中で確認する。また、共通の文献・持ち寄るテーマやトピックスにそった発題・ディスカッションを重ね、仲間とともに学びあうことも重視する。論文作成とレジュメ作成、発表に至る過程において、自らの課題と向き合いながら多くの出会いや発見を重ねていくこと。		
授業計画	第1回	後期授業ガイダンス・研究の進展状況発表と課題提出	
	第2回	研究テーマと構成・研究方法に関する中間発表（グループ1）	
	第3回	研究テーマと構成・研究方法に関する中間発表（グループ2）	
	第4回	研究テーマと構成・研究方法に関する中間発表（グループ3）	
	第5回	個人別研究指導（グループ1）	
	第6回	個人別研究指導（グループ2）	
	第7回	個人別研究指導（グループ3）	
	第8回	個人別研究指導（グループ1）	
	第9回	個人別研究指導（グループ2）	
	第10回	個人別研究指導（グループ3）	
	第11回	論文仮提出	
	第12回	仮提出をふまえての助言・指導	
	第13回	論文のしあげにあたっての確認	
	第14回	レジュメ執筆・論文発表の確認	
	第15回	論文発表会における個人発表	
準備学習 (予習・復習等)	授業前後に、あらかじめ提示された研究方法論に関する文献や資料を読み、理解を深めながら参加する。自ら設定したテーマとその周辺について調べたり、文献を読んだり、具体的な取り組み（実践）にふれたり、学外の講座に参加したりしながら考えを育て、随時報告する努力をする。自ら主体的に研究を展開することが研究指導の前提である。行き詰ったときには必ず相談し助言を受けること。		
テキスト	開講時に指示する。		
参考文献	随時紹介する。		
評価方法	研究取り組み状況:20% 成果物（卒業論文）:50% レジュメ・発表成果:30%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年 子ども学科
子ども学特別研究Ⅲ		渡部 かなえ（わたなべ かなえ）		
授業の到達目標 及びテーマ	3年間の「子ども学」の学びの集大成として作成する卒業論文研究・身体表現作品の卒業制作を具体的に立ち上げ、明確な方向性を定めて推し進め、完成度の高い論文・作品の作成を目指して研究を進展させることができるようになる。			
授業の概要	子ども学特別研究Ⅱで選んだ研究・制作のテーマを吟味し確定する。1年後の卒業論文研究・身体表現作品の卒業制作の完成を目指し計画的に研究を進めていくられるようにする。報告・発表は受講学生の半数が行い、残りの半数がコメントやアドバイスをするという方法で、相互協力して進めていく。各自毎回レジュメを作成して授業にその写しを持ってくる。授業終了時に提出する。			
授業計画	第1回	研究・制作のテーマの吟味と確定		
	第2回	研究・制作の計画書の作成①		
	第3回	研究・制作の計画書の作成②		
	第4回	データ・素材の収集方法		
	第5回	各自がデータ・素材を収集		
	第6回	集めたデータ・素材の検証・吟味①		
	第7回	集めたデータ・素材の検証・吟味②		
	第8回	データの解析・素材の取捨選択・統合について		
	第9回	各自がデータの解析・素材の取捨選択・統合を行う		
	第10回	解析したデータ・取捨選択・統合した素材の検証①		
	第11回	解析したデータ・取捨選択・統合した素材の検証②		
	第12回	解析データに基づく研究レポート作成方法・取捨選択・統合した素材を用いて創作することについての説明・解説		
	第13回	各自が、解析データに基づく研究レポート作成・取捨選択・統合した素材を用いての創作に取り組む		
	第14回	研究レポート（卒論研究の核となる）の発表		
	第15回	身体表現の小作品（卒論制作の核となる）の発表		
準備学習 (予習・復習等)	毎時間の最初に、1週間の自分の研究・制作の成果を、卒論ノート・卒業制作ノートをもとに報告する。			
テキスト	授業時に資料を提示、配布。			
参考文献	授業時に紹介。			
評価方法	卒論・卒業制作ノート:50% 発表・報告:50%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年 子ども学科
子ども学特別研究Ⅲ		渡部 かなえ（わたなべ かなえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	卒業論文研究・身体表現作品の卒業制作の完成と発表		
授業の概要	子ども学特別研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの前期で学んできたレポートの書き方やデータの取り方・解析、文献収集と引用、分かりやすいプレゼンテーションの仕方、身体表現の作品作りのための素材の収集・取捨選択・統合等についての知識と技術を総合的に活用し、また多様な授業や実習で得た知見を生かして研究論文・身体表現の創作作品を完成することができる。また、研究論文・作品の作成だけでなく、その成果を人に伝える技術も習得できる。		
授業計画	第1回	研究論文・卒業制作の作成と発表に向けて：テーマ決定と全体構成（計画・企画）	
	第2回	研究の学術的背景・作品の創造的背景	
	第3回	研究目的・作品の意図	
	第4回	方法：・調査／実験／データ収集 ・身体表現の創作作品の素材の収集（音・映像）	
	第5回	研究論文：結果① データの分析 卒業制作：身体表現の創作作品の素材の取捨選択	
	第6回	研究論文：結果② データのインテグレーション 卒業制作：身体表現の創作作品の素材の統合	
	第7回	研究論文：考察・議論① 結果について 卒業制作：作品創作①	
	第8回	研究論文：考察・議論② 研究目的の達成と今後の展望 卒業制作：作品創作②	
	第9回	研究論文：本文全文の作成 卒業制作：作品創作③	
	第10回	研究論文：本文の推敲・改訂、完成 卒業制作：作品創作④	
	第11回	研究論文：成果発表① 抄録作成 卒業制作：成果発表① 抄録作成	
	第12回	研究論文：成果発表② 抄録の推敲・改訂、完成 卒業制作：成果発表② 制作ノートの完成	
	第13回	研究論文：成果発表③ プレゼンテーション原稿の推敲・改訂 卒業制作：成果発表③ 舞台上演の準備	
	第14回	研究論文：成果発表④ プレゼンテーション原稿の完成・発表のリハーサル	
	第15回	卒業制作：成果発表④ 舞台上演のリハーサル	
準備学習 （予習・復習等）	毎時間、1週間の自分の研究・創作の進捗状況を、卒論ノート・制作ノートに基づいて報告する。		
テキスト	授業時に資料を提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介。		
評価方法	研究論文・創作作品：70% 卒論・制作ノート：20% 抄録：10%		

子ども学特別研究Ⅲ		通年（前期）	4 単位	3年
子どもに関わる音楽についての専門的な研究 j		渡辺 善忠（わたなべ よしただ）		
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を発展させます。本年度は昨年度学んだ基礎的な研究方法を土台として、各自のテーマについて専門的に研究を展開致します。制作発表・論文とも、年度末の発表を目標に研究を進めます。			
授業の概要	個人やグループごとにテーマを定めて個別に研究を進めます。テーマが定まらない場合は、基礎的な学びを継続しながらテーマを絞り込んで研究を進めます。			
授業計画	第1回	研究計画の相談		
	第2回	研究発表①		
	第3回	研究発表②		
	第4回	研究発表③		
	第5回	研究発表④		
	第6回	研究発表⑤		
	第7回	中間発表		
	第8回	グループ指導①		
	第9回	グループ指導②		
	第10回	グループ指導③		
	第11回	グループ指導④		
	第12回	グループ指導⑤		
	第13回	グループ指導⑥		
	第14回	グループ指導⑦		
	第15回	中間発表と後半の研究についての相談		
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。			
テキスト	授業時に相談して決めます。			
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。			
評価方法	研究状況等の授業評価：50% 制作／論文発表：50%			

子ども学特別研究Ⅲ		通年（後期）	3年
子どもに関わる音楽についての専門的な研究 j		渡辺 善忠（わたなべ よしただ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもに関わる音楽分野の基礎的な研究を発展させます。本年度は昨年度学んだ基礎的な研究方法を土台として、各自のテーマについて専門的に研究を展開致します。制作発表・論文とも、年度末の発表を目標に研究を進めます。		
授業の概要	個人やグループごとにテーマを定めて個別に研究を進めます。テーマが定まらない場合は、基礎的な学びを継続しながらテーマを絞り込んで研究を進めます。		
授業計画	第1回	研究の進捗状況の確認と後半の計画	
	第2回	グループ指導①	
	第3回	グループ指導②	
	第4回	グループ指導③	
	第5回	グループ指導④	
	第6回	グループ指導⑤	
	第7回	グループ指導⑥	
	第8回	グループ指導⑦	
	第9回	グループ指導⑧	
	第10回	中間発表	
	第11回	グループ指導⑨	
	第12回	グループ指導⑩	
	第13回	グループ指導⑪	
	第14回	制作発表／論文発表	
	第15回	研究の総括と今後の課題	
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。		
テキスト	授業時に相談して決めます。		
参考文献	テーマに応じてその都度紹介します。		
評価方法	研究状況等の授業評価:50% 制作／論文発表:50%		

幼稚園実習ⅠA	後期 1 単位	1年
幼児理解をめざして		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、莊司 紀子（しょうじ のりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 「幼稚園実習ⅠA」は、幼稚園教諭2種免許状の取得を目指す人が、幼稚園教育の実態を知り、幼児理解を深めることをねらいとする。</p> <p><授業の概要> 幼稚園実習に向けての準備のための「事前授業」と、「幼稚園実習ⅠB」での1週間実習、そしてその成果を振り返る「事後授業」の3本立てで進めていく。 また、この授業の評価は3本を総合して行う。 なお授業は、基本的に4グループに分けて行う。</p> <p><授業計画> 後期 第1回 幼稚園実習のねらい・目的を知る 第2回 実習準備室を利用した学習 第3回 実習に向けて 幼稚園の1日を知る 第4回 実習に向けて 観察実習と参加実習その在り方 第5回 実習に向けて 実習日誌の書き方・実習の心構え等 第6回 実習に向けて1 簡単な指導案の書き方 第7回 実習に向けて2 具体的な実習準備・心構え確認 第8回 幼稚園実習（実習協力園での実習） 第9回 実習を終えて1（省察） 第10回 実習を終えて2 実習から学んだこと1（報告会） 第11回 実習を終えて3 実習から学んだこと2（報告会） 第12回 実習を終えて4 実習から学んだこと2（報告会） 第13回 「幼稚園実習Ⅱ」に向けての課題検討 第14回 「幼稚園実習Ⅱ」に向けての準備 第15回 まとめ * 幼稚園での実習は11月9日（月）～11月14日（土）の1週間行う。</p> <p>※履修上の注意： ・第1回目の授業より毎週必ず出席のこと（出席・受講態度重視）。 ・やむを得ないことでの欠席は事前に学科研究室に届け出、後日専任担当教員（浅見・岸井・莊司）を訪ねること。無断欠席者に対しては厳しい対応をとる。 ・本授業への欠席があると幼稚園での1週間の実習に行けない場合があるので注意すること。 ・「幼稚園実習ⅠA」「幼稚園実習ⅠB」の単位が取得できない場合は「幼稚園実習ⅡA」「幼稚園実習ⅡB」の履修ができない。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回次の授業で行うテキストの箇所を伝えるので必ず読んでおくこと。また、授業で行ったことに対して振り返ったり、調べたりして深めておくこと。</p> <p><テキスト> 浅見均・田中正浩編著『子どもの育ちを支える 幼稚園教育実習』 大学図書出版</p> <p><参考文献> 授業の中で適宜紹介する。</p> <p><評価方法> 授業への参加態度40%・実習日誌・評価40%・レポート20%</p>		

幼稚園実習 I B	後期集中 1 単位	1年
幼稚園実習を通して幼児理解をする		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ）</p> <p><実習の到達目標及びテーマ> 幼稚園での1週間の実習を通して、幼稚園教育や保育の実際を知り、幼児理解を深める。</p> <p><実習の概要> 実習期間：11月9日（月）～11月14日（土）</p> <p>内容：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、実習幼稚園の概要を知る。 2、配属クラスの1日の生活の流れを知る。 3、配属クラスの子どもの様子（発達・遊び・生活など）を知る。 4、保育者の子どもへのかかわり方などを知る。 5、簡単な部分保育実習（点呼・ピアノ・紙芝居・遊びへの参加など）。 6、保育を観察、記録し、日誌を書き、学んだことを省察する。 7、環境構成への参加（清掃、保育準備など）。 <p>※実習巡回指導には、浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、横堀昌子、村知稔三、渡部かなえの専任教員のほか、上村真理子の幼稚園実習担当講師があたる。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 翌日の実習に対して自己のねらい、目標を明確にし実習計画や指導案を作成しておくこと。また、その日の実習で学んだことや、実習担当者から指摘を受けたことなどを踏まえて、実習日誌を書き、必ず振り返っておくこと。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していく <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく <評価方法> 実習態度20%・実習日誌30%・実習評価表30%・レポート20%</p>		

幼稚園実習ⅡA	前期 1 単位	2年
幼児と保育について本質的理解を深める		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 「幼稚園実習ⅡA・B」は、幼稚園教諭2種免許状の取得をめざすが、幼稚園の現場で3週間の実習をする。特に2年生の実習は、幼児や幼稚園の実態についての理解を深めていくと同時に、具体的な経験を通して幼児教育の内容・方法や保育者の在り方などを学習し、保育者の職務についての理解を深めて、自己の適性についても考える機会とすることを目的としている。</p> <p><授業の概要> 幼稚園実習に向けて準備のために毎週行う「事前授業」、3週間の実習幼稚園における「幼稚園教育実習」、そして実習後に毎週行う「事後授業」の3本立てで進める。事前と事後の授業は、基本的に4グループの分級で行う。</p> <p><授業計画> 前期 第1回 幼稚園教育実習Ⅱの意義と目的 第2回 幼児理解を深めるために 第3回 幼児の発達と保育者のかかわり 第4回 幼児の生活と保育活動 第5回 6月実習をふまえた教材研究 第6回 保育の内容と方法 第7回 指導計画と保育方法 第8回 幼稚園における参加実習 第9回 幼稚園における参加実習と部分保育実習 第10回 幼稚園における責任実習 第11回 幼稚園実習の報告と検討 第12回 他園の保育状況を知る 第13回 合同報告会 第14回 幼児と保育の問題点を課題をさぐる 第15回 幼児と保育についての本質理解のまとめ</p> <p>◎幼稚園での実習は6月1日（月）～6月20日（土）の3週間です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回次の授業で行うテキストの箇所を伝えるので必ず読んでおくこと。また、授業で行ったことに対して振り返ったり、調べたりして深めておくこと。</p> <p><テキスト> 『子どもの育ちを支える 幼稚園教育実習』浅見均・田中正浩編著 大学図書出版</p> <p><参考文献> 『幼稚園教育要領解説』文部科学省</p> <p><評価方法> 平常点（授業への参加態度、課題レポートなど）50%、 実習点（実習評価票、実習録・提出レポートなどの総合評価）50%</p> <p>※履修上の注意： ・第1回目の授業より毎週必ず出席のこと（出席・受講態度重視）。 ・本授業への欠席があると幼稚園での3週間の実習に行けない場合があるので注意のこと。 ・やむを得ないことでの欠席は事前に学科研究室に届け出、後日担当教員（岸井・荘司・浅見）を訪ねること。無断欠席者に対しては厳しい対応をとる。 ※「幼稚園実習ⅡA・B」の履修条件 ・1年次の「幼稚園実習ⅠA・B」が履修済みであること。 ・1年次の基礎科目（1年次の教職科目）が原則として全科目履修できていること。</p>		

幼稚園実習ⅡB	前期集中 3 単位	2年
幼稚園実習を通して幼児・保育の本質理解を深める		
<p>【担当教員】 浅見 均（あさみ ひとし）、上村 真理子（かみむら まりこ）、岸井 慶子（きしい けいこ）、荘司 紀子（しょうじ のりこ） （教育実習時の幼稚園訪問指導の教員） 実習巡回指導には、浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、横堀昌子、村知稔三、渡部かなえの専任教員のほか、上村真理子の幼稚園実習担当講師があたる。</p> <p><実習の到達目標及びテーマ> 幼稚園での3週間の教育実習を通して、幼児と保育について、本質的理解を深める。</p> <p><実習授業の概要> 実習期間 2013年6月1日（月）～6月20日（土）</p> <p>（内容）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 園児の観察、保育の参観など、観察・参加実習 2. 幼児の理解を深める 3. 保育内容や保育方法の研究 4. 保育者の幼児へのかかわり方などの研究 5. 保育の計画と実践（部分実習・責任実習も含む） 6. 保育の展開と記録 7. 環境構成への参加（清掃・教材準備など） 8. 幼児・保育・自己への省察 9. 幼稚園教育の理解 <p><準備学習（予習・復習等）> 翌日の実習に対して自己のねらい、目標を明確にし実習計画や指導案を作成しておくこと。また、その日の実習で学んだことや、実習担当者から指摘を受けたことなどを踏まえて、実習日誌を書き、必ず振り返っておくこと。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していく <参考文献> 必要に応じ、随時紹介していく <評価方法> 実習評価票 25%・実習録 25%・実習後のレポート 25%・訪問指導教員の評価 25%</p>		

保育所実習 I A	後期 1 単位	2年
保育所保育の理解と保育士の役割の考察～保育所実習の準備とふり返し		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> 保育士資格の取得を希望する学生が、保育所における体験学習（保育所実習 I B）を通して、保育所の機能と役割、保育の実際、保育士の役割などについて学習します。 そのための準備を中心に行ないながら、実習後のふり返しをあわせて総合的に学内で学びます。</p> <p><授業の概要> 保育所実習 I Aは、保育所に約2週間出向き実習する保育所実習 I Bに向けて、学内にて実習計画作成と諸準備、実習後のふり返しを行ないます。 保育所実習 I Bの実習期間は2015年11月中の2週間です。（日程など詳細は保育実習ガイダンスや授業で伝達） 実習に出るためには本講義への出席が不可欠です。 講義は担当者による4分級での授業と合同のそれを併用します。 本講義は、原則として、1年次で保育士資格取得に必要な必修科目の単位を修得をした者にも履修を認めています。</p> <p><授業計画> 第1回 保育所実習の意義・目的・内容・方法 第2回 実習先配属と進め方・留意点の確認 第3回 必要書類の準備と文献研究・実習計画書の作成 第4回 実習の心構え（保育参加に際して求められる理解と倫理） 第5回 乳幼児の生活と遊びの理解（視聴覚教材を用いて） 第6回 保育所と利用者理解・子育て支援活動の理解 第7回 学外講師による実習事前指導 第8回 実習記録とは（記録の意味・とり方・記述の留意点） 第9回 保育所実習事前オリエンテーション 第10回 実習課題の明確化（実習計画書の仕上げと提出） 第11回 実習の具体的準備と留意点の確認 第12回 実習報告会・実習報告書等の提出 第13回 実習報告書に基づくディスカッション 第14回 検討課題の発表と考察 第15回 担当教員によるフィードバックとまとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 「保育実習のしおり」や授業で配布される資料を読みこみ、実習に向けての理解を深めます。テキストその他の文献を活用し、実習計画書の作成に取り組みましょう。関連する文献を読み、保育の営み、保育者の役割、保育所保育をめぐる社会的課題、乳幼児の発達の道すじ、遊びや生活について理解を深める努力をしてください。</p> <p><テキスト> 帆足英一監修『実践 保育学』（日本小児医事出版社、2014年）。実習の事前準備および実習中の活用のために、必ず購入のこと。</p> <p><参考文献> 民秋言ほか編著『保育ライブラリ 保育所実習』（北大路書房、2009年）。</p> <p><評価方法> 講義への参加度（30%）、計画書・報告書・感想文などを含めた実習の事前・事後のとりくみの状況（70%）を基準として総合的に評価します。</p>		

保育所実習 I B	後期集中 2 単位	2年
保育士の役割の体験学習と考察～保育所保育との出会い		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p><実習の概要とテーマ> 保育所で約2週間、園児や保育者とともに生活し保育に参加することを通して、保育所保育や保育の実際を学ぶとともに、保育所の果たす社会的役割や機能・保育士の役割とあり方を理解します。 人間として日々成長する乳幼児の姿にふれ、保育者として、人としての感受性を耕すとともに、保育ニーズを有する乳幼児とその家族の支援にあたって保育所に何が求められるかについても考察する機会とします。</p> <p><実習期間> 2015年11月中の2週間（日程など詳細は保育実習ガイダンスおよび授業で伝達）</p> <p><実習の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する保育所の概要と果たす機能を理解する。 2. 配属クラスの1日の生活の流れを理解する。 3. 配属クラスの子どもの様子（発達・遊び・生活状況など）を理解する。 4. 保育者の子どもとのかかわりの意味・保育内容を理解する。 5. 保育者の保護者（親）とのかかわりと連携のあり方を考察する。 6. 保育者のチームワークと連携のとり方を理解する。 7. 保育準備・環境設定への参加を通し、保育者の意図と配慮を知る。 8. 保育の観察・参加と日誌を通しての省察。 9. 部分実習・責任実習の体験と省察。 10. 実習全体のふり返りと、成果・課題の考察。 <p>実習中の巡回指導は専任教員の浅見均、岸井慶子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、荘司紀子、鈴木俊之、杉田穂子、菅野幸恵、村知稔三、横堀昌子、渡部かなえに加え、実習担当講師の武居光、菅野和枝が行なう予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 「保育実習ガイドブック（保育実習のしおり）」、テキストを活用しながら、実習体験のもつ意味を自ら考察する努力をしてください。実習録（実習ノート）を書くことで、その日の実習テーマ・観点についてふり返り、実習場面を省察し、自己の課題と向きあう営みを重ねていきます。実習ノートに実習のまとめ、反省を記入し、ノートをしあげるまで体験とそのもつ意味を深めることを積み重ねます。</p> <p><テキスト> ガイダンス等で提示します。必ず購入し授業時に持参するとともに、実習に活用することを求めます。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介します。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習へのとりくみ（60%）と実習先からの評価（40%）を基準として総合的に評価します。</p>		

保育所実習Ⅱ A	後期 1 単位	3年
保育所保育の理解と保育士の役割の考察の深化－保育所実習の（準備と）ふり返り－	菅野 和枝（すがの かずえ） 村知 稔三（むらち としみ）	
<p><講義の到達目標・テーマ> 保育士資格の取得を希望する学生が、保育所における体験学習（保育所実習Ⅱ B）を通して、保育所の機能と役割、保育実践の実際、保育士の役割について学びます。 そのための準備を中心としながら、実習後のふり返りをあわせて行ない総合的に学ぶ学内授業です。</p> <p><講義の概要> 保育所実習Ⅱ Aは、保育所に約2週間出向き実習する保育所実習Ⅱ Bに向けて、実習計画作成と準備、保育所実習Ⅱ Bのふり返りを学内で行ないます。 保育所実習Ⅱ Bの実習期間は原則として8月24日（月）～9月5日（土）です。ただし、多少前後する場合があります。 この実習に出るためには本講義への出席が不可欠です。 もち方としては、4名の担当者によるグループ別の授業と、合同で行なうそれとを組み合わせます。 また、保育所実習Ⅱ Aと施設実習Ⅱ Aの各講義時間を相互に活用し、同時に進めていきます。</p> <p><講義計画> 第1回 保育所実習の準備（実習の枠組み理解） 第2回 保育所実習の準備（実習配属確認と準備過程） 第3回 保育所実習の準備（保育所の役割・機能理解） 第4回 保育所実習の準備（保育問題と保育ニーズの理解） 第5回 保育所実習の準備（乳幼児の発達理解） 第6回 保育所実習の準備（乳幼児の遊びの理解） 第7回 保育所実習の準備（乳幼児の生活の理解） 第8回 保育所実習の準備（保育者の役割の理解） 第9回 保育所実習の準備（保育の留意点の理解） 第10回 保育所実習の準備（事前学習のまとめ） 第11回 保育所実習の準備（実習テーマの検討） 第12回 保育所実習の準備（実習計画の作成） 第13回 保育所実習の準備（実習計画への助言） 第14回 保育所実習の準備（実習の省察） 第15回 教員からのフィードバックと全体のまとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回、次の授業で行なう内容を伝えるので、関連するテキストの箇所を必ず読んでおくこと。また、授業内容に対して振り返ったり、調べたりして、理解を深めておくこと。</p> <p><テキスト> 帆足英一監修『実践保育学』（日本小児医事出版社、2014年）。</p> <p><参考文献> 民秋言ほか編著『保育ライブラリー－保育所実習』（北大路書房、2009年）。</p> <p><評価方法> 講義への積極的関与の度合い（30%）、計画書・報告書・感想文などを含めた実習の事前・事後のとりくみの状況（70%）を基準として総合的に評価します。</p>		

保育所実習ⅡB	後期集中 2 単位	3年
保育士の役割の体験学習と考察の深化－保育所保育との出会い－	菅野 和枝（すがの かずえ） 村知 稔三（むらち としみ）	
<p><実習の概要・テーマ> 保育所で約2週間、園児や保育者とともに生活し、保育に参加することを通して、保育所保育や保育の実際を学ぶとともに、保育所の果たす社会的役割や機能、保育士の役割とあり方を理解します。 人として日々成長する子どもの姿にふれ、保育者として、人としての感受性を耕すとともに、保育需要をもつ子どもと家族の支援にあたって保育所に今、何が求められるかについても考察します。</p> <p><実習期間> 原則として2015年8月24日（月）～9月5日（土）。ただし、多少前後する場合があります。</p> <p><実習の到達目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する保育所の概要と果たす機能を理解します。 2. 配属クラスの1日の生活の流れを理解します。 3. 配属クラスの子どもの様子（発達・遊び・生活状況など）を理解します。 4. 保育者の子どもとのかかわりの意味・保育内容を理解します。 5. 保育者の保護者（親）とのかかわりと連携のあり方を考察します。 6. 保育者のチームワークと連携のとり方を理解します。 7. 保育準備・環境設定への参加を通し、保育者の意図と配慮を知ります。 8. 保育の観察・参加と日誌を通しての省察を行ないます。 9. 部分実習・責任実習の体験と省察を行ないます。 10. 実習全体のふり返りと成果・課題の考察を行ないます。 <p>ただし、実習する保育所の状況により実習内容にちがいや変化があるので、臨機応変に対応することが求められます。 実習中の巡回指導は専任教員の浅見均、岸井慶子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、荘司紀子、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、村知稔三、横堀昌子、渡辺かなえに加え、実習担当講師の菅野和枝が行なう予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 毎回、次の授業で行なう内容を伝えるので、関連するテキストの箇所を必ず読んでおくこと。また、授業内容に対して振り返ったり、調べたりして、理解を深めておくこと。</p> <p><テキスト> 必要に応じて随時紹介します。</p> <p><参考文献> 必要に応じて随時紹介します。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習へのとりくみ（60%）と実習先からの評価（40%）をもとに、総合的に評価します。</p>		

施設実習 I A	前期 1 単位	3年
福祉施設実践の理解と施設職員の役割の考察～施設実習の準備とふり返し		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p>＜授業の到達目標及びテーマ＞ 保育士資格の取得を希望する学生が、福祉施設における体験学習（施設実習 I B）を通して、福祉施設の機能と役割・利用者を支援する生活実践の実際・（保育士を含む）施設職員の役割について学びます。 そのための準備を中心に行いながら、実習後のふり返しとをあわせて総合的に学ぶ学内授業です。</p> <p>＜授業の概要＞ 施設実習 I Aは、福祉施設に約2週間出向き実習する施設実習 I Bに向けて、学内にて実習計画作成と諸準備、実習後のふり返しを行います。 施設実習 I Bにおける実習は、各実習施設の受け入れ状況にあわせてあらかじめ設定した実習期間にそれぞれ出向くこととなります。 実習に出るためにはこの授業への出席が不可欠となります。原則として欠席および遅刻は認めていません。 授業のもち方としては、上記担当者による4グループまたは2グループに分かれて行う授業と、合同で行う授業とを活用していきます。加えて、適宜、施設現場からの学外講師にも出講を願う予定です。 なお、この科目は、原則として2年次に保育所実習 I A・I Bの履修をし、両科目の単位の修得ができた者のみ履修を認めるガイドラインを学科として設定し、実質運用しています。</p> <p>＜授業計画＞ 第1回 施設実習の意義・目的・内容・方法について 第2回 実習先理解と事前指導等の進め方・留意点等の確認 第3回 必要書類の準備と文献研究・実習計画書の作成について 第4回 実習の心構え（生活参加に際して求められる理解と倫理） 第5回 施設における実践内容と生活参加の理解 第6回 施設機能と利用者理解・支援の実際についての理解 第7回 学外講師による実習事前指導 第8回 実習記録とは（記録の意味・とり方・記述の留意点） 第9回 施設実習事前オリエンテーション 第10回 実習課題の明確化（実習計画書のしあげと提出） 第11回 実習報告書の提出と実習報告会 第12回 実習報告会 第13回 実習報告会 第14回 検討課題の発表と考察 第15回 担当教員によるフィードバックとまとめ</p> <p>＜準備学習（予習・復習等）＞ 「保育実習のしおり」や授業で配布される資料を読みこみ、実習に向けての理解を深めます。文献や関連資料を活用し、実習計画書の作成に取り組みましょう。施設の社会的役割、利用者のニーズや家族背景、施設職員の果たす役割、支援にあたっての留意点や配慮等について理解を深める努力をしてください。</p> <p>＜テキスト＞ 開講時に提示します。</p> <p>＜参考文献＞ 民秋言他編著『保育ライブラリ 施設実習』北大路書房ほか。 ※授業でも参考文献および資料を紹介していく予定です。</p> <p>＜評価方法＞ 平常点・授業参加態度（70%）、実習計画書・実習報告書作成を含めた実習事前事後の取り組み状況、実習報告、提出物（あわせて30%）を基準として総合評価します。</p>		

施設実習 I B	後期集中 2 単位	3年
施設職員の役割の体験学習と考察～施設利用者にとって必要な支援のあり方を考える		
<p>【担当教員】 菅野 和枝（すがの かずえ）、武居 光（たけい こう）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）</p> <p><実習の概要とテーマ> 福祉施設で約2週間の実習において利用者と施設職員とともに生活することを通して、施設における実践や利用者の人権保障、支援の実際を学ぶとともに、福祉施設の果たす社会的役割と機能・（保育士を含む）施設職員の役割とあり方・利用者やその背後にいる家族への支援の実際を考察します。</p> <p>実習体験を通して、人が人として成長すること・他者とかかわりながら社会に生きることを支える福祉の営みに今後何が求められるか、その本質についても考える機会としていきます。</p> <p><実習期間> 各自の配属された時期（約2週間）に、それぞれの実習施設に出向き、原則的に宿泊での実習を行います。</p> <p><実習の到達目標> （さまざまな実習先がありますが、モデルとして以下を示します）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する施設の概要と果たす機能を理解する。 2. 施設の1日の生活の流れとその意味を理解する。 3. 利用者の様子（デイリープログラム・生活の実際・施設での活動など）を知る。 4. 施設職員の利用者へのかかわり（個別・全体）と配慮している点を理解する。 5. 施設職員の保護者（親）へのかかわりと連携のあり方を考察する。 6. 施設職員のチームワークと連携のとり方を理解する。 7. 生活への参加を通し、環境設定上の配慮と特性を知る。 8. 人間らしい成長・社会参加・暮らしの実現に何が求められるか考察する。 9. 日々の生活参加・実習内容のふり返りと日誌による省察。 10. 実習全体のふり返りと、成果・課題の考察。 <p>（※ただし、実習する施設の特性や実習時期・個別の状況により実習内容プログラムのちがいや変更がありうるので、臨機応変に対応のこと）</p> <p>実習中の巡回指導は、専任教員の浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、村知稔三、横堀昌子、渡部かなえに加え実習担当講師の武居光、菅野和枝が行う予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 「保育実習ガイドブック（保育実習のしおり）」も手がかりにしながら、実習体験のもつ意味を自ら考察する努力をしてください。実習録（実習ノート）を書くことで、その日の実習テーマ・観点についてふり返り、実習場면을省察し、自己の課題と向きあう営みを重ねていきます。実習ノートに実習のまとめ、反省を記入し、ノートをしあげるまで体験とその意味を深めることを積み重ねます。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習そのものへの取り組み状況（60%）と実習先からの評価（40%）を基準として総合評価します。</p>		

施設実習Ⅱ A	後期 1 単位	3年
福祉施設における支援活動の理解と施設職員の役割の考察～施設実習の準備とふり返り	杉田 穂子（すぎた やすこ） 横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 保育士資格の取得を希望する学生が、福祉施設における体験学習（施設実習Ⅱ B）を通して、福祉施設の機能と役割・利用者を支援する生活実践の実際・（保育士を含む）施設職員の役割について学びます。 そのための準備を中心に行いながら、実習後のふり返りとをあわせて総合的に学ぶ学内授業です。</p> <p><授業の概要> 施設実習Ⅱ Aは、福祉施設に約2週間出向き実習する施設実習Ⅱ Bに向けて、学内にて実習計画作成と各施設の特性に即した諸準備、実習後のふり返りを行います。</p> <p>施設実習Ⅱ Bにおける実習は、各実習施設の受け入れ状況にあわせてあらかじめ設定した実習期間（原則として2015年8月から10月までのさまざまな時期の中から配属された約2週間）にそれぞれ出向くこととなります。 実習に出るためにはこの授業への出席が不可欠となります。原則として欠席および遅刻は認めていません。</p> <p>授業のもち方としては、施設実習Ⅱ A履修者の配属された実習先施設種別ごとに分かれて行う授業と履修者全員での授業とを活します。また、施設実習Ⅱ Aと保育所実習Ⅱ Aの各授業時間を相互に活用し同時併行的に進めていきます。 加えて、適宜、施設現場からの学外講師にも出講を願う予定です。</p> <p><授業内容> 第1回 施設実習の意義・目的・内容・方法について 第2回 実習先配属と進め方・留意点の確認 第3回 必要書類の準備と文献研究・実習計画書の作成について 第4回 実習の心構え（生活参加に際して求められる理解と倫理） 第5回 施設における実践内容と生活参加の理解 第6回 施設機能と利用者理解・支援の実際についての理解 第7回 実習記録とは（記録の意味・とり方・記述の留意点） 第8回 施設実習事前オリエンテーション 第9回 実習課題の明確化（実習計画書のしあげと提出） 第10回 実習報告書等の提出と実習報告会 第11回 実習報告会 第12回 実習報告会 第13回 実習報告書に基づくディスカッション 第14回 検討課題の発表と考察 第15回 担当教員によるフィードバックとまとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 自分が出向く実習施設における利用者・入院者のニーズや抱える状況を理解し、支援やケアにおける要点をおさえるため、文献や資料の研究・検討を行います。それらを実習計画書にまとめ、準備学習を進めます。また、実習後は、実習報告書や実習ノートを手がかりに、実習体験のもつ意味や自己の課題を考察していきます。実習報告にあたってはその準備をし、まとめます。</p> <p><テキスト> 開講時に提示します。</p> <p><参考文献> 民秋言他編著『保育ライブラリ 施設実習』北大路書房ほか。 ※なお、実習する施設種別に即した参考文献および実習事前準備のための各種資料を、適宜紹介していく予定です。</p> <p><評価方法> 平常点と授業参加態度（70%）、実習計画書・実習報告書作成を含めた実習事前事後の取り組み状況、実習報告、提出物（あわせて30%）を基準として総合評価します。</p>		

施設実習ⅡB	後期集中 2 単位	3年
施設職員の役割の体験学習と考察～施設利用者にとって必要な支援のあり方を考える	杉田 穂子（すぎた やすこ） 横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
<p><実習の概要及びテーマ> 福祉施設での約2週間の実習において利用者や施設職員とともに生活することを通して、施設実践や利用者の人権保障、支援の実際を学ぶとともに、各施設の果たす社会的役割と機能・（保育士を含む）施設職員の役割とあり方・利用者やその背後にいる家族への支援の実際を考察します。 実習体験を通して、人が人として成長すること・他者とかかわりながら社会に生きることを支える福祉の営みに今後何が求められるか、その本質についても考える機会とします。</p> <p><実習期間> 2014年5月～10月までの間の各自配属された時期（約2週間）に、それぞれの実習施設に出向き、宿泊または通いによる実習を行います。</p> <p><実習の到達目標> （さまざまな実習先があるが、モデルとして以下を示す）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実習する施設の概要と果たす機能を理解する。 2. 施設の1日の生活の流れを理解する。 3. 利用者の様子（デイリープログラム・生活の実際・施設での活動など）を知る。 4. 施設職員の利用者へのかかわり（個別・全体）と配慮している点を理解する。 5. 施設職員の保護者（親）へのかかわりと連携のあり方を考察する。 6. 施設職員のチームワークと連携のとり方を理解する。 7. 生活への参加を通し、環境設定上の配慮と特性を知る。 8. 人間らしい成長・社会参加・暮らしの実現に何が求められるか考察する。 9. 日々の生活参加・実習内容のふり返りと日誌による省察。 10. 実習全体のふり返りと、成果・課題の考察。 <p>（※ただし、実習する施設の特性や実習時期・個別の状況により実習内容プログラムのちがいや変更がありうるので、臨機応変に対応のこと）</p> <p>実習中の巡回指導は、専任教員の浅見均、岸井慶子、荘司紀子、久保制一、小泉由美子、さくまゆみこ、菅野幸恵、杉田穂子、鈴木俊之、村知稔三、横堀昌子、渡部かなえが行う予定です。</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 実習準備学習での成果を活かしながら、実習録を用いて実習体験を言語化し、考察していきます。記述にあたっては、その考察を深めていく努力を重ねてください。実習先から求められた場合は、実習前、実習後に課題やレポート等にも取り組みます。</p> <p><テキスト> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><参考文献> 必要に応じ、随時紹介していきます。</p> <p><評価方法> 実習ノートを含む実習そのものへの取り組み状況（60%）と実習先からの評価（40%）を基準として総合評価します。</p>		

フィールドワーク・子ども	後期集中 1 単位	1・2・3年
子どものくらしについて考える	菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
<p><授業の到達目標およびテーマ></p> <p>子どもは”いま”を生きる存在である。子どもたちのくらしは彼らの”いま”が保障されるものでなければならない。ただ、現在の状況を改めてみると、子どもたちの”いま”が十分に保障されているかどうかかわからない、あるいは脅かされている現状が見えてくる。この授業では、乳児期から学齢期の子どもに焦点をあて、子どもたちの生活の場に自ら赴き、直接見たり聞いたりすることを通して、子どものくらしについて考えることを目的とする。</p> <p>子どもの生活の場は多岐にわたるが、この授業では正規（法制度に基づいた）の保育施設や教育機関以外の場所に注目する。認可外の施設や普段あまりなじみのない子どもたちの生活の場は、現状への違和感からできたもの、正規な保育・教育では扱いきれない子どもの生活を支えるものなどがあり、子どものくらしを考えるためのヒントがたくさんあると考えるからである。たとえば、「森のようちえん」は、園庭園舎がなく自然（森）のなかで保育を行う。森（自然）には、子どもが育つ上で大切な要素（運動、情緒、五感、創造性、社会性、集中力、健康など）があるという考えのもとデンマークで始まり、近年日本でも広まりつつある。</p> <p>授業では、まず、認可外の保育施設や学童保育など、認可の保育施設や教育機関以外に子どもたちが過ごす場所にはどのようなものがあるのかについて理解する。そのうえで、自分の居住する地域にどのような子どもの居場所があるかを調べ、実際にその場に身をおき体感することを通して理解を深める。</p> <p><授業の概要></p> <p>フィールドワークに赴くための準備として、4月と7月に授業を行う（月曜6限を予定している）。前期のうちに各自がフィールドに入るための準備を進め、7月までにフィールドワーク先を探し先方に連絡日時などを決定する。フィールドワーク先の検討にあたっては個別相談をする。夏季休業中にフィールドワークを行い、後期に報告会を行う。</p> <p>互いのフィールドワークの体験を共有しながら、子どものくらしについて考えていく。可能であれば全員で学外施設の見学を行う。</p> <p>フィールドワークでは、どこに行き、何を見るか、交渉もふくめてすべて自分で調べて進めるため、受講者には積極的な参加を求める。フィールドで見たり聞いたりしたことをフィールドノーツにまとめ、期末レポートとともに提出する。</p> <p><授業計画></p> <p>1) フィールドを探するための準備 (4月13日、20日、27日を予定) オリエンテーション フィールドを探す：フィールドエントリーのしかた 子どもの居場所を知る（フリースクール、学童保育、自主保育、森のようちえん）</p> <p>2) フィールドワーク先を決める (5月～6月に個別相談を行う)</p> <p>3) フィールドに入るための準備 (6月29日、7月6日、13日を予定) フィールドワークの実際 フィールドノーツのまとめかた フィールドの去り方</p> <p>4) 報告会 (9月下旬を予定) まとめとふりかえり</p> <p><準備学習></p> <p>4月の事前準備の後、フィールド先を決めるにあたって、ブックレポートを提出する</p> <p><テキスト></p> <p>授業内で適宜プリントを配布</p> <p><参考文献></p> <p>授業内で適宜紹介する</p> <p><評価方法></p> <p>授業への参加度：40% フィールドノーツ：40% 期末レポート：20%</p>		

教師論	前期 2 単位	1年
教育とは何か、教師の「仕事」は何か。	渡辺 雅之（わたなべ まさゆき）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「教育とは何か」その本質を理解し、それに関わる教師の指導性を明らかにする。多角的なものの見方や考え方を学ぶ中で、教師の「役割」と「仕事」が具体的にイメージできる。</p> <p><授業の概要> 教育に関わる現代的な課題や社会的なトピックを積極的に取り上げ、教師に必要な多角的なものの見方と考え方を身につける。同時に教師を目指す学生にとってベースとなる基礎的な知識、社会的背景を分かりやすく学ぶ。ワンウェイの講義ではなく、具体的な資料提示などを通して対話形式（ツウエイ）の授業を基本とする中で具体的な教育手法を追求する。ワークショップやバズ・セッションなどを取り入れ、参加型の学びを追求する。テキストを読んでレポート提出など事前事後の学習も必要とされる。</p> <p><授業計画> 第1回 出会いのプロデュース（授業ガイダンス）「教育とは何か。その本質を考える」 第2回 教室と子どもの現実1「新自由主義と教育～自己責任論」 第3回 教室と子どもの現実2「階層分化と貧困の連鎖」 第4回 教室と子どもの現実3「人権問題としてのレイシズム～平和的に生きること」 第5回 子どもの発達と自立1「乳幼児期～少年期の課題」 第6回 子どもの発達と自立2「思春期～青年期の課題」 第7回 子どもの発達と自立3「発達障がい～自閉症スペクトラム」 第8回 関係性を学ぶ1「アサーティブコミュニケーション～実践的表現スキル」 第9回 関係性を学ぶ2「アサーティブコミュニケーション～同僚性、保護者との関係」 第10回 道徳心を育てる1「リテラシーの重要性」 第11回 道徳心を育てる2「ものの見方と考え方」 第12回 信頼と関係性1「体罰問題について考える」 第13回 信頼と関係性2「いじめ問題解決のために」 第14回 希望のベクトル「教育の可能性を探る」 第15回 まとめ（これまでの授業の振り返り）</p> <p><準備学習> 第1回の授業にて「私が出会った教師」のテーマで小論を書いて討論を行う。そのため、小中高いずれかの教師について想起できるようにしておくこと。また、授業内容によっては、予習レポートまたは発展的な内容のレポートを課すことがある。</p> <p><テキスト> 『いじめ・レイシズムを乗り越える「道徳教育」～暗闇（ダークサイド）から希望のベクトルへ』 渡辺雅之</p> <p><参考文献> 学習内容によって随時、紹介する。</p> <p><評価方法> ①授業内での学習への取り組み（発言や質問など）+授業後の感想・授業コメントを求め、理解度を評価する。50% ②単位修得レポート（講義に関連して2000文字程度のレポートを提出）+まとめテストをもって評価する。50%</p>		

教育原理		前期 2 単位	1年
教育観・学校観・子ども観を問い直す		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○教育の理念、歴史、思想に関して、大規模な教育制度改革期である明治中期、戦後初期に焦点を当てて学び、近代学校の生成展開 過程を俯瞰しながら理解を深める。</p> <p>また教育と社会、教育の制度と経営について、基礎的な事項を学びながら価値観の変化を理解する。</p> <p>○現代日本の学校教育をめぐる現状を、児童・生徒の様子だけでなく、親子関係や情報化社会の状況を含めて理解し、教育制度の変化の動向を、学力のとらえ方や指導のあり方、学校経営のあり方を含めて、多面的に把握する力を身に付ける。</p>		
授業の概要	<p>全体を「近代学校生成史と教育の現在」をテーマとし、大きく教育の歴史編と現状編にわけらる。</p> <p>前半の歴史編では、戦前期および戦後教育改革期に焦点を当て、日本の教育制度・理念の歴史的特質を整理する。また、近代学校の生成展開過程とその背景にある哲学や思想についても概説する。後半の現状編においては、学校教育をめぐる諸相を、児童・生徒だけでなく、保護者と教師の関係や情報化社会の進展等の社会的事項にも触れながら概説する。また現代の教育改革の動向を、学力、指導、経営の三つの層で整理する。全体を通じて、教育に関する基本的概念の概説や主要な思想、経営的事項の紹介を随時織り込みながら授業を展開する。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション 教育とは何か（教育体験のふり返り）	
	第2回	日本の教育の歴史・制度（1）近代学校の特質－近世教育から近代学校へ	
	第3回	日本の教育の歴史・制度（2）明治期公教育制度の成立	
	第4回	日本の教育の歴史・制度（3）大正期「教育する家族」の登場	
	第5回	日本の教育の歴史・制度（4）戦時下の教育	
	第6回	戦後教育の理念と思想（1）戦後教育改革のプロセス	
	第7回	戦後教育の理念と思想（2）新しい法制度と理念（教育基本法・学校教育法）	
	第8回	教育哲学と思想－子ども主体の教育を構想した主要な教育哲学と思想	
	第9回	現代社会と教育の諸相（1）現代の子ども・若者期の特徴	
	第10回	現代社会と教育の諸相（2）親子関係の変容と学校・家庭連携のあり方	
	第11回	現代社会と教育の諸相（3）情報化社会と教育問題	
	第12回	現代の教育改革（1）学力－生きる力と基礎的・基本的な知識と技能	
	第13回	現代の教育改革（2）指導－生活への多面的・支援的かかわりと学校	
	第14回	現代の教育改革（3）経営－学校種間の接続への配慮と学校経営	
	第15回	全体のまとめ－現代に求められる学校・教師の役割－	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○事前に配布した資料をよく読んでくること</p> <p>○授業後、感想をまとめること</p> <p>○レポート課題が決まったら、早めに文献・資料を読み論点整理を行うなど、レポート作成に万全を期すこと</p>		
テキスト	特に定めない。主としてプリントを用いる。		
参考文献	山住正巳『日本教育少史』岩波新書／尾木直樹『子どもの危機をどう見るか』岩波新書／片桐芳雄他編『教育から見る日本の社会と歴史』八千代出版／文部科学省『学習指導要領』／汐見稔幸・東宏行他編『よくわかる教育原理』ミネルヴァ書房など。その他、随時紹介する。		
評価方法	授業感想文:20% 試験:80%		

教育心理学	後期 2 単位	1年
教育心理学	植月 美希 (うえつき みき)	
<p>【授業の到達目標及びテーマ】 学習、動機づけ、発達、記憶のメカニズムや理論を説明することができる。そして、日常生活における様々な他者との関わりに関して、教育心理学的な考え方に基いて考え行動することができる。 また、教育心理学の理論的な知識・背景を理解し、実際の教育の場で実践的に活用するとともに、必要な場合にはそれについて保護者や生徒等に分かりやすい言葉で説明できる。</p> <p>【授業の概要】 教育・学習について、心理学的な見方、考え方について学ぶ授業である。人間はいくつになっても様々なことを学び成長して行くが、その発達プロセスや学習メカニズムといった教育実践に関わる心理学の基礎的知識を身に付け、教師としての関わり方についても知識を深めることを目指す。また、子どもの発達について理論的に把握すると共に、子どもが人との相互的にかかわりを通して発達していくこと、生涯発達の観点から発達のプロセスや初期経験の重要性について理解し、教育との関連を考察できるようになることを目指す。 主に講義形式で授業を進める。</p> <p>【授業計画】 第1回 オリエンテーション・心理学とは 第2回 学習1 古典的条件づけ 第3回 学習2 オペラント条件づけ・観察学習 第4回 動機づけ1 外発的動機づけ・内発的動機づけ 第5回 動機づけ2 学習性無力感・結果期待・原因帰属 第6回 知識・問題解決 第7回 記憶1 短期記憶 マジカルナンバー・自分の記憶容量は？ 第8回 記憶2 長期記憶 記憶力をアップするコツは？ 第9回 小テスト1 第10回 発達1 成熟か学習か？ 遺伝か環境か？ 初期経験の重要性 第11回 発達2 知能の発達・人格の発達 第12回 発達3 言語の発達 第13回 発達上の問題・障害 第14回 学級における教育 評価の種類と方法 知能テスト 第15回 これまでのまとめと復習・小テスト2</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所を読んでおくこと。 事後学習 講義内容を振り返りながら、プリントとテキストを熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。</p> <p>【テキスト】 鎌原雅彦・竹綱誠一郎 「やさしい教育心理学」 有斐閣 その他、講義の中でプリントを適宜配布</p> <p>【参考文献】 柳生崇志・梅崎高行（編著） 「保育の心理学Ⅰ」 大学図書出版</p> <p>【評価方法】 課題・小テスト 20% 授業参加態度 20% 定期試験 60%</p>		

教育課程論		後期集中 2 単位	2年
教育課程論		山田 恵吾（やまだ けいご）	
授業の到達目標 及びテーマ	教育課程に関する基本的知識を習得するとともに、その編成のあり方に関わる批判的視点を獲得する。教育課程編成の基本的類型についてその意義と問題点について説明できる。教育課程を成り立たせている社会的・歴史的条件について説明できる。地域素材の教材化、児童・生徒の主体的学習の観点から実際に単元構想を示すことができる。		
授業の概要	学校教育の活動の枠組みを規定する教育課程について、その概念や編成理論を検討する。特に近代学校の教育課程編成の経験を、その社会・政治・経済的背景と関連付けながら捉えることを通じて、学校教育の改善に向けた批判的視点や柔軟な教育課程の編成・活用の可能性などについて考察する。		
授業 計画	第1回	講義案内。	
	第2回	「教育」とは何か。	
	第3回	教育課程とは何か- 国家・学校・教師- 。	
	第4回	地方自治体の教育課程改革の試み。	
	第5回	教育課程に関わる法制と行政。	
	第6回	教育課程の成り立ち。	
	第7回	教育課程編成の基本類型。	
	第8回	教育課程編成の政治的・経済的・文化的背景-アメリカの教育課程改革を通して-。	
	第9回	近代日本における教育課程の展開。	
	第10回	教科書-制度・歴史・課題-。	
	第11回	教育課程の現代的課題(1)- 道徳教育の研究- 。	
	第12回	教育課程の現代的課題(2)- 特別活動の研究- 。	
	第13回	教育課程の現代的課題(3)- 「総合的な学習の時間」の研究- 。	
	第14回	学習指導案と教育評価。	
	第15回	講義のまとめ。	
準備学習 (予習・復習等)	予習としてテキストのページを指定するので、読んでから授業に参加すること。復習、または学習の展開のための関連文献を紹介しますので、できるだけ読むように努めること。		
テキスト	『新訂版 学校教育とカリキュラム』（文化書房博文社）		
参考文献	授業の中で紹介する。		
評価方法	授業小レポート:50% 小テスト:50%		

国語科教育法 I	前期 2 単位	1年
国語教育の基本的な事柄を身につける。	原 由来恵 (はら ゆきえ)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> ①国語教育の基本を学ぶ。②現代文・古典の教材研究の分析方法を身につける。③指導案作成を行い、作成した指導案をもとに模擬授業までの展開を確認する。④国語科教育における授業の方法と評価方法を体得する。</p> <p><授業の概要> 国語教育の基本的な事柄を実践できる力を身につける授業である。国語という教科の理念を踏まえたのち、国語教科に求められる事柄の実践的事項を学ぶ。また教科書に載る文学作品を教材に取り上げ、国語の教科における教材研究の分析方法を身につける。そこから指導計画・評価に則った指導案作成を行い、作成した指導案をもとに模擬授業までの流れを確認し、国語科教育における授業の方法の基礎を体得する。なお、学習指導案は必ずパソコンを使って作成するものとする。そのほかに、パソコン教室を使用し、ITおよびインターネットを活用した授業の方法についても修得する。</p> <p><授業計画> 第 1回 国語という教科について 第 2回 学習指導要領について 第 3回 単元学習の意味と方法 第 4回 『走れメロス』教材研究の仕方について（文学史的観点から） 第 5回 『走れメロス』教材研究の仕方について（作品内容の観点から） 第 6回 『走れメロス』の指導方法 教材分析から指導 第 7回 『走れメロス』指導案作成 第 8回 『走れメロス』板書と副教材について 第 9回 評価について 第10回 古典教材・古典文法について 第11回 『竹取物語』教材研究の仕方について 第12回 『竹取物語』の指導法 教材分析から指導 第13回 『竹取物語』指導案作成 第14回 『竹取物語』板書と副教材について 第15回 授業の展開について 指導案作成① 定期試験 レポート</p> <p><準備学習（予習・復習）> 予習 シラバスに提示されている作品を読み、先行研究を知る。 復習 授業内に出された課題を踏まえ自分なりのまとめを作成する。</p> <p><テキスト> 教材で使用する本文・学習指導要領（国語）他</p> <p><参考文献> 学習指導要領解説</p> <p><評価方法> 教材研究分析45% 指導案作成15% 評価基準作成15% 課題 25%</p>		

国語科教育法Ⅱ	後期 2 単位	1年
国語教育の基本を身につけ、実践する。	原 由来恵 (はら ゆきえ)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> ①国語の教科における教材研究の分析方法を身につける。②指導案作成を行い、作成した指導案をもとに模擬授業までを実践する。③国語科教育における授業の方法と評価方法を体得する。</p> <p><授業の概要> 国語教育の基本的事柄の実践力を身につける授業である。国語という教科の理念を踏まえたのち、国語教科に求められる事柄の実践的事柄を学ぶ。また教科書に載る文学作品を教材に取り上げ、国語の教科における教材研究の分析方法を身につける。またそこから指導案作成を行い、作成した指導案をもとに模擬授業までを実践し、国語科教育における授業の方法を体得する。なお、学習指導案は必ずパソコンを使って作成するものとする。そのほかに、パソコン教室を使用し、ITやインターネットを活用した授業の計画も立てる。</p> <p><授業計画> 第1回 書道について 第2回 表現の指導法 第3回 表現の指導と評価 第4回 日本文学史にみる文学作品の特徴について 第5回 日本伝統文化と享受について 教材への導入方法 第6回 『羅生門』の指導方法 教材分析から指導 第7回 『羅生門』指導方法 板書と副教材 第8回 『今昔物語集』 第9回 模擬授業実践 指導案作成 (映像資料、情報機器の活用を含む。) 第10回 模擬授業実践 導入と展開 第11回 模擬授業実践 展開とまとめ 第12回 模擬授業実践 ティベート方法 第13回 国語と総合学習について 第14回 国語と特別活動・言語活動と他科目について 第15回 教育実習について 定期試験 レポート</p> <p><準備学習(予習・復習)> 予習 シラバスに提示されている作品及び授業内で紹介した書籍を読み、先行研究を知る。 復習 授業内に出された課題を踏まえ自分なりのまとめを作成する。</p> <p><テキスト> 教材で使用する本文・学習指導要領(国語)他</p> <p><参考文献> 学習指導要領解説</p> <p><評価方法> 教材研究分析30% 指導案作成30% 模擬授業実践20% 課題 20%</p>		

英語科教育法 I		前期 2 単位	1年
英語教育の理論と実践 I		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	中学生に英語を教える際に必要となる知識と技能を習得することがこの科目の到達目標となる。具体的な内容は以下の <授業計画>の通り。		
授業の概要	テキストの内容を基に、講義形式で、英語教育に関する知識を習得する。また、実演や関連するビデオ・CDを通して、 実際に授業を行う際に必要となる技能について学ぶ。更に、望ましい英語教育のあり方について考える。		
授業計画	第1回	イントロダクション - 前期の授業内容について	
	第2回	英語教育の目的	
	第3回	英語教育の指導目標：学習指導要領	
	第4回	英語指導方法1：Listening and Speaking	
	第5回	英語指導方法2：Reading and Writing	
	第6回	英語指導方法3：語彙と文法	
	第7回	英語指導方法4：コミュニケーション能力の養成	
	第8回	英語教授法1：文法訳読法と直接教授法	
	第9回	英語教授法2：Audiolingual Method とCommunicative Approaches	
	第10回	英語教授法3：Natural Approach とタスク中心教授法	
	第11回	英語教授法4：内容中心教授法とコンピュータ支援教授法	
	第12回	第二言語習得理論	
	第13回	自律学習論	
	第14回	英語学習のストラテジー	
	第15回	試験、及びレポート課題の説明	
準備学習 (予習・復習等)	予習または復習として、課題としてだされた問題の解答を考えてくること。		
テキスト	村野井仁他著「総合的英語科教育法」成美堂、2012年		
参考文献	白畑知彦他著「改訂版 英語教育用語辞典」大修館書店、2009年		
評価方法	授業参加とreaction paper:20% レポート:40% 試験:40%		

英語科教育法Ⅱ		後期 2 単位	1年
英語教育の理論と実践 Ⅱ		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	中学生に英語を教える際に必要となる知識と技能を習得することがこの科目の到達目標となる。さらに、教育実習に向けて授業能力の習得と向上を図る。具体的な内容は以下の<授業計画>の通り。		
授業の概要	テキストの内容を基に、講義形式で、英語教育に関する知識を習得する。また、実演や関連するビデオ・CDを通して、実際に授業を行う際に必要となる技能について学ぶ。後期は指導案を基に4名の学生を選び、模擬授業を行ってもらう。		
授業計画	第1回	イントロダクション - 後期の授業内容について	
	第2回	指導案の作成1：4技能に関する活動	
	第3回	指導案の作成2：語彙・文法とハンドアウト	
	第4回	模擬授業の観察1：卒業生の模擬授業	
	第5回	模擬授業の観察2：現任教員の模擬授業	
	第6回	模擬授業1：グループ①	
	第7回	模擬授業2：グループ②	
	第8回	模擬授業：総括と感想	
	第9回	英語教師論	
	第10回	英語学習者論	
	第11回	評価とテスト	
	第12回	早期英語教育	
	第13回	国際理解と異文化理解	
	第14回	World Englishes の考え方	
	第15回	試験、及びレポート課題の説明	
準備学習 (予習・復習等)	予習または復習として、課題としてだされた問題の解答を考えてくること。		
テキスト	村野井仁他著、「総合的英語科教育法」成美堂、2012年		
参考文献	白畑知彦他著「改訂版 英語教育用語辞典」大修館書店、2009年		
評価方法	授業参加とreaction paper:20% レポート:40% 試験:40%		

社会科教育法 I	前期 2 単位	1年
社会科教育の理論と実践 I	倉持 重男 (くらもち しげお)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 社会科教育の使命と目標、教材研究のあり方と授業方法論等教科の基本理論を理解し、併せて教壇に立って実際の授業ができる実践的資質を身につける。</p> <p><授業の概要> 社会科の使命と目標、教科構造と教材研究のあり方等の基本理論を講義すると同時に指導案の作成と演習授業（模擬授業）を通して、社会科教員としての実践的資質を育成する。なお、学習指導案はできるだけパソコンを使って作成するものとする。また、インターネットや教育機器を活用した授業の計画も立て、実際に模擬授業を行う。</p> <p><授業計画> 【前期】 第 1回 社会科教育の意義と歴史および社会科教員の使命（講義） 第 2回 社会科教育の目標と学力について（講義）—ビデオ視聴を含む 第 3回 社会科教育の教科構造と授業方法—学習指導要領に学ぶ（講義） 第 4回 社会科教育の教材研究と指導案の作成（講義） 第 5回 演習授業のあり方「指導案の作成の仕方と授業例」から実際の指導案づくりへ 第 6回 授業研究「地理的分野の授業」—主に日本地理論 第 7回 授業研究「地理的分野の授業」—世界の諸地域の教材研究 第 8回 演習授業—模擬授業「地理的分野の授業」—導入の仕方を中心に発表 第 9回 演習授業—模擬授業「地理的分野の授業」—世界の諸地域の模擬授業 第10回 講義「歴史的分野の授業」—歴史授業の内容と方法（学習指導要領に学ぶ） 第11回 授業研究「歴史的分野の授業」—前近代のグループ教材研究 第12回 演習授業「歴史的分野の模擬授業」—古代の授業作りと実際 第13回 演習授業「歴史的分野の模擬授業」—中世の授業作りと実際 第14回 演習授業「歴史的分野の授業」—近世の授業作りと実際 第15回 身近な地域の教材発見と授業作り（地域教材論）</p> <p><準備学習（予習・復習）> 授業前には自分の担当分野とテーマに関する学習をすすめること。および日常的に歴史および現代に関するニュース（新聞等）に目を向け、記事の切り抜き等を行うこと。 授業後には授業記録と思考感想用紙および完成指導案を提出すること。</p> <p><テキスト> 中学社会科教科書</p> <p><参考文献> 中等社会諸教科教育法（学芸図書、森秀夫・山口幸男著）</p> <p><評価方法> 授業感想文の内容:20% 社会科基本理論の理解（テスト）:20% 授業演習:30% 論文:30%</p>		

社会科教育法Ⅱ	後期 2 単位	1年
社会科教育の理論と実践Ⅱ	倉持 重男（くらもち しげお）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 社会科教育の使命と目標、教材研究のあり方と授業方法論等教科の基本理論を理解し、併せて教壇に立って授業を行える実践的資質と技術を身につける。特に本講座では近現代の歴史と現代社会の課題をテーマに研究と実践を行う。</p> <p><授業の概要> 社会科の使命と目標、教科構造と教材研究のあり方等の基本理論を講義すると同時に指導案の作成と演習授業（模擬授業）を通して、社会科教員としての実践的資質を獲得する。なお、学習指導案はできるだけパソコンを使って作成するものとする。そのほかに、インターネット等教育機器を活用した授業の計画をたて、実際に授業も行う。</p> <p><授業計画> 【後期】 第1回 生徒に興味関心を持たせ学習効果を高める教材の発見と発表研究 第2回 同、その発表会（地理、公民的分野を中心に） 第3回 同、その発表会（歴史的分野を中心に） 第4回 歴史の授業研究—近現代の歴史の内容とその重視の意味を学習指導要領に学ぶ。 第5回 歴史の授業研究—近現代の実際の授業と教材研究。（ビデオ視聴を含む） 第6回 演習授業①—近現代の歴史（国民の自立と運動の視点から） 第7回 演習授業②—近現代の歴史（戦争—加害と被害の視点から） 第8回 演習授業③—近現代の歴史（近現代史を変えた重大事件の中から） 第9回 公民的分野の目標、内容と実際の授業（学習指導要領に学ぶ—ビデオ視聴を含） 第10回 学習指導案の作成と授業づくり—公民（現代社会）—討論を取り入れた授業 第11回 授業研究—公民（現代社会）の学習内容と指導方法（討論授業の仕方と実際） 第12回 公民（現代社会）の指導案作成 第13回 演習授業④「公民的分野の授業」討論授業—政治編 第14回 演習授業⑤「公民的分野の授業」—討論授業—経済・社会編 第15回 統括論文作成「社会科教育法を受講して—その目標と内容と方法」</p> <p><準備学習（予習・復習）> 授業前には特に近現代史と現代社会のついでにニュースに目を通し、かつ新聞の切り抜き等をおこなうこと。また自分の担当する分野とテーマに関する学習（教材研究）を事前にしっかりすること。授業後は感想と理解を中心にしたレポートを提出し、演習授業後は学習指導案と研究ノートを必ず提出すること。</p> <p><テキスト> 中学社会科教科書 「中学生と学ぶ近現代史の授業」（第2集）</p> <p><参考文献> 中等社会諸教科教育法（学芸図書、森秀夫・山口幸男著）</p> <p><評価方法> 授業感想文の内容:20% 社会科基本理論の理解（テスト）:20% 授業演習:30% 論文:30%</p>		

家庭科教育法 I	前期集中 2 単位	1年
家庭科教育の理論と実践 (理論編)	阿部 睦子 (あべ むつこ)	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 「技術・家庭」の家庭分野では、生活の自立に必要な衣食住に関する基礎的な知識と技術を習得するとともに家庭の機能について理解を深め、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てることを目標としている。本科目ではそれらの指導目標や指導内容をもとに指導案の書き方と、課題解決学習について学習し、教師としての資質を養う。(課題解決学習については高等学校のホームプロジェクト学習を参考にする)</p> <p><授業の概要> 中学校学習指導要領解説「技術・家庭編」、家庭分野の教科書、家庭科教育のテキストをもとに講義する。これまでの先輩たちの優れた模擬授業や教育実習中の研究授業の学習指導案を参考にし、また先輩の優れた模擬授業のビデオをみせて学生たちに学習指導案を作成させる。課題解決学習については、全国高等学校家庭クラブ研究発表大会のホームプロジェクトから全国大会のビデオを視聴させたり、実践例を配布し、各学生の家庭生活の改善向上を目指したホームプロジェクトを計画させる。夏休み中に実施させ、途中2～3回のメールで経過報告を義務付け、わからないところ・まとめかた・発表のし方を指導する。なお、学習指導案は必ずパソコンを使って作成するものとする。そのほかに、パソコン教室を使用し、インターネットを活用した授業の計画も立てる。</p> <p><授業計画> 第1回 家庭科教育法の授業の進め方、教師・学生の自己紹介、小・中・高校家庭科で学習した授業内容を記入する。 第2回 家庭科教育の目標、学習指導要領の読み方を学習する。 第3回 学習指導要領の記述と教科書の内容を照らし合わせ関連を理解させ、年間指導計画を作成させる。 第4回 家庭科教育のテキストをもとに家庭科の学習指導方法・評価方法・学習指導案の書き方を学習する。 第5回 課題解決学習について、高等学校家庭科のホームプロジェクトを参考に説明し、家庭生活の問題点を探させる。 第6回 教科書の家族・家庭と子どもの成長の学習をし、学習指導案例、ホームプロジェクト例を提示して理解させる。 第7回 教科書の食生活と調理の学習をし、学習指導案例、ホームプロジェクト例を提示して理解させる。 第8回 食生活と調理で学生が1日の栄養摂取基準を知り、1日の食事の献立について栄養計算をさせる。 第9回 教科書の衣生活の学習をし、学習指導案例、ホームプロジェクト例、繊維の種類と特徴を理解させる。 第10回 教科書の住生活の学習をし学習指導案例、ホームプロジェクト例、住まいの中の震災対策について話し合う。 第11回 教科書の消費生活と環境の学習をし、学習指導案例、ホームプロジェクト例、消費者問題や環境を話し合う。 第12回 先輩の優れた模擬授業のビデオを視聴させる。参考にさせて食生活と調理の学習指導案を作成させる。 第13回 全国高等学校家庭クラブ研究発表大会のホームプロジェクトのビデオを視聴し、学生の実施の参考にさせる。 第14回 家庭生活の問題点を見つけ、ホームプロジェクト実施の計画書を作成させる。家族に協力依頼書を配布する。 第15回 前期定期試験の問題について、食生活と衣生活の重要個所を明示し、塩分計算の計算方法を指導する。 前期定期試験は、試験用紙2枚に食生活と衣生活の領域についてテストする。</p> <p><準備学習(予習・復習等)> 授業後に講義の概要についてレポートを作成し、次の授業で提出すること。</p> <p><テキスト> ①「生きる力をつける学習」教育実務センター ②中学校学習指導要領解説 技術・家庭編 ③教科書 新しい技術・家庭 家庭分野 東京書籍 ④教科書 技術・家庭 家庭分野 開隆堂</p> <p><参考文献> 「食品の裏側」安部司 「家庭科からひろがる食の学び」日本家庭科教育学会 「食の教育QA事典」戸井和彦 「これからの被服」中橋美智子他 「子どもの心身の発達を促す手仕事のすすめ」柳澤澄子他 「これからの住生活」川崎衞子他など</p> <p><評価方法> 前期定期試験：40% ホームプロジェクト計画書：20% レポート：40%</p>		

家庭科教育法Ⅱ	後期集中 2 単位	1年
家庭科教育の理論と実践（実践編）	阿部 睦子（あべ むつこ）	
<p><授業の到達目標及びテーマ></p>		
<p>前期の理論編の目標をもとに実践力を養う。夏休み中実施したホームプロジェクトの発表会を実施し、実施方法の研究をする。次に家庭科教育のテキスト、学習指導要領、教科書をもとに、学生が独自の学習指導案・教材・教具を工夫した模擬授業を実施する。模擬授業をもとに自己・相互・教師の評価をし、意見交流をしてよりよい授業を研究する。2回模擬授業を実施して教育実習校で自信ある授業が展開できることを目的としている。学習指導案の作成や教材作成にあたっては情報機器を活用することに留意する。また家庭科教育の歴史を学び、今後の課題について学習する。</p>		
<p><授業の概要></p>		
<p>中学校学習指導要領解説「技術・家庭編」、家庭分野の教科書、家庭科教育のテキストをもとに講義する。これまでの先輩たちの優れた模擬授業や教育実習中の研究授業の学習指導案を参考にし、また先輩の優れた模擬授業のビデオをみせて学生たちに学習指導案を作成させる。課題解決学習については、全国高等学校家庭クラブ研究発表大会のホームプロジェクトから全国大会のビデオを視聴させたり、実践例を配布し、各学生の家庭生活の改善向上を目指したホームプロジェクトを計画させる。夏休み中に実施させ、途中2～3回のメールで経過報告を義務付け、わからないところ・まとめかた・発表のし方を指導する。なお、学習指導案は必ずパソコンを使って作成するものとする。そのほかに、パソコン教室を使用し、インターネットを活用した授業の計画も立てる。</p>		
<p><授業計画></p>		
<p>第1回 ホームプロジェクトの発表会 題目設定の理由、実施計画、実施状況、まとめと今後の課題について発表する。 第2回 ホームプロジェクトの発表会 相互評価、教師の評価をして意見交流をする。レポートと製作品を提出する。 第3回 第1回模擬授業 食生活領域 1人20分で3人実施する。自己評価・相互評価・教師の評価をする。 第4回 第1回模擬授業 食生活領域 1人20分で3人実施する。自己評価・相互評価・教師の評価をする。 第5回 第1回模擬授業 食生活領域 1人20分で3人実施する。自己評価・相互評価・教師の評価をする。 第6回 第1回模擬授業 食生活領域 1人20分で3人実施する。自己評価・相互評価・教師の評価をする。 第7回 第1回模擬授業 食生活領域 1人20分で3人実施する。自己評価・相互評価・教師の評価をする。 第8回 第1回模擬授業の反省をふまえ第2回模擬授業に向け留意点を述べ、学生も2回目の授業計画を立てる。 第9回 第2回模擬授業 興味のある領域 1人20分3人実施 自己・相互・教師の評価 教師がビデオを撮る。 第10回 第2回模擬授業 興味のある領域 1人20分3人実施 自己・相互・教師の評価 教師がビデオを撮る。 第11回 第2回模擬授業 興味のある領域 1人20分3人実施 自己・相互・教師の評価 教師がビデオを撮る。 第12回 第2回模擬授業 興味のある領域 1人20分3人実施 自己・相互・教師の評価 教師がビデオを撮る。 第13回 第2回模擬授業 興味のある領域 1人20分3人実施 自己・相互・教師の評価 教師がビデオを撮る。 第14回 模擬授業の総括、ビデオをDVDに作って配布する。学生はそれを見て感想を書く。後定期試験の説明をする。 第15回 家庭科教育の歴史を説明する。今後の課題について図書や新聞から紹介し、意見交流をする。 後定期試験は試験用紙2枚で、家族・家庭と子どもの成長、住生活、消費生活と環境の領域のテストをする。</p>		
<p><準備学習（予習・復習等）></p>		
<p>次週の授業内容の予告をするので、各自準備すること。</p>		
<p><テキスト></p>		
<p>前期と同様</p>		
<p><参考文献></p>		
<p>「教育方法学」佐藤学、「教育の方法」柴田義松、「授業を拓く」武藤八恵子、「家庭科の授業をよむ」鶴田敦子他、「家庭科わくわくワーク集」武藤八恵子他など</p>		
<p><評価方法></p>		
<p>後定期試験：30% ホームプロジェクト発表・レポート・製作品：30% 第1回模擬授業：20% 第2回模擬授業：20%</p>		

道徳教育指導論	後期集中 2 単位	1年
道徳教育の指導理念と指導方法	内海崎 貴子（うちみざき たかこ）	
<p><授業の到達目標及びテーマ> 授業のテーマは、中学校における道徳教育の指導理念と指導方法の習得である。授業の到達目標は、道徳と道徳教育に関する適切な理解、青年前期の道徳性の基礎的・基本的な知識の獲得、道徳の指導方法原理の理解と授業スキルの習得、異文化理解と国際的視野から主体的日本人を育成する視点の獲得である。</p> <p><授業の概要> 本授業では道徳教育の意義と目的、道徳教育の歴史と「道徳の時間」設置経緯、学習指導要領における道徳、道徳性の発達過程について学習する。さらに、様々な道徳教育の実践例とその授業方法を俯瞰しながら、学習指導案の作成、道徳の授業体験の実施により、学校教育現場において、実際に「道徳の時間」の授業ができる力を形成する。</p> <p><授業計画> 第1回 道徳とは何か？道徳教育とは何か？ 第2回 道徳教育の歴史と「道徳の時間」設置の経緯 第3回 学習指導要領における道徳―道徳の目標と全体計画― 第4回 道徳性の発達過程と青年前期の特徴 第5回 「道徳の時間」の学習指導案作成 ①. 学習指導案とは何か、学習指導案の書き方 第6回 「道徳の時間」の学習指導案作成 ②. 学級経営と指導計画の作成 第7回 「道徳の時間」の学習指導案作成 ③. 教材研究・資料選択と教材のタイプ 第8回 「道徳の時間」の学習指導案作成 ④. 授業方法の検討 第9回 さまざまな道徳の授業 ①. 道徳の授業体験「擬似差別体験案―ジェンダー平等と人権教育―」、授業分析と討論、授業目的、授業方法の解説 第10回 さまざまな道徳の授業 ②. NHK道徳ドキュメントモデル授業「人とつながる・いのちの大切さ」視聴、授業分析と討論、授業目的、授業方法の解説 第11回 さまざまな道徳の授業 ③. NHK道徳ドキュメントモデル授業「人生はチャレンジだ・使いやすさを広めたい」視聴、授業分析と討論、授業目的、授業方法の解説 第12回 さまざまな道徳の授業 ④. 道徳の授業体験「ワークショップ―子どもの権利条約と道徳―」授業分析と討論、授業目的、授業方法の解説 第13回 さまざまな道徳の授業 ⑤. 道徳の授業体験「参加型授業―セクシュアル・マイノリティを理解する―」授業分析と討論、授業目的、授業方法の解説 第14回 道徳教育における教師の役割を考える VTR「プロフェッショナル・仕事の流儀―京都市立堀川高校の奇跡―」視聴、リアクション・ペーパーの提出 第15回 授業全体のまとめ、道徳教育の可能性についての討論、学習指導案の提出</p> <p><準備学習> 毎回配布する資料を次回までに読んでおくこと。授業体験参加記録や映像視聴記録は、次回までに所定の様式に従い完成させ、必ず提出すること</p> <p><テキスト> 文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』平成20年9月</p> <p><参考文献> 『学習指導要領小学校道徳』『学習指導要領中学校道徳』道徳資料集他、毎回資料を提示する。</p> <p><評価方法> 学習指導案の作成と提出（50%）、授業体験参加記録の提出（30%）、VTR視聴記録の提出（20%）による総合評価。</p>		

特別活動論	後期 2 単位	2年
教職に関する科目 集団活動のよさや自己を生かす能力を問います	有村 久春（ありむら ひさはる）	
<p><授業の到達目標及びテーマ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別活動の意義や目標の理解、中学校で取り扱う特別活動の3つの内容の理解、実践事例等の分析と考察、学習指導案の作成（とくに学級活動・ホームルーム活動）とその活用、などを理解する。 ・教職にあつて不可欠な生徒とのかかわりや学級をまとめる力量など、教師としての指導力を幅広く実践的に学ぶことができる。 <p><授業の概要></p> <p>本講義で学ぶ特別活動は、学校教育における教育課程の一領域を構成する。生徒個々が実際の活動体験や生活経験を通して、「なすことによって学ぶ」ことを指導の基本理念としている。それゆえ、望ましい集団活動の実際を演習的に体験し、人間関係形成能力や自主性及び実践的な態度形成の力量を学生自らが学ぶ授業を構成する。この考えを基本に、学校教育において生徒が身に付けたい自発的・自治的な力、社会の一員としての自覚と態度、自己指導能力などについての研究を深める。具体的には、グループ体験や話し合い活動の実際、在り方生き方に関する事例研究等を行う。</p> <p>【後期】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回 オリエンテーション（出合いの体験）、特別活動の目標の理解 第2回 特別活動と教育課程の編成及び学校教育の課題 第3回 特別活動の目標と他の教育内容との関連 第4回 特別活動の内容構成の理解 … 学級活動・生徒会活動・学校行事（部活動） 第5回 各内容の特質と集団活動の原理（学習指導要領の内容など） 第6回 各内容の活動の授業の特質（その実際例、模擬授業等） 第7回 各内容の指導案の作成 … その内容、その方法 第8回 他の領域、生徒指導・学級経営、道徳教育との関連 第9回 特別活動を指導する教師 … その役割、組織的な思考と行動 第10回 生徒の実態把握と特別活動の指導 … 体験の不足、対人関係の不適応など 第11回 学校の特色を生かす特別活動 … 学校の自主性、自律性 第12回 地域との連携を図る特別活動 … ボランティア活動、社会奉仕体験活動など 第13回 特別活動における学校の指導体制 … 教職員の協力体制 第14回 特別活動の評価 … 個人的な資質、集団・社会的な資質 第15回 講義のまとめと全体評価 <p><準備学習（予習・復習等）></p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎回の授業において、次回の講義内容を指示する。その際、テキストをよく読み込んでおくこと、質問事項を整理することを指示する。 ・毎回の授業にて、小レポートを作成させる。 ・毎回の授業にて、自分の復習内容を発表させる。 <p><テキスト></p> <p>『改訂二版 キーワードで学ぶ特別活動 生徒指導・教育相談』有村久春著 金子書房2015年</p> <p><参考文献></p> <p>文部科学省『中学校学習指導要領解説・特別活動編』平成20年8月 その他の資料等は授業中に適宜指示する。</p> <p><評価方法></p> <p>授業感想文の内容などの平常点:20% 指導案等のレポート:20% 試験点:60%</p>		

生徒指導論		前期 2 単位	2年
一人ひとりの児童・生徒に寄り添った生徒指導・進路指導の理解のために		森 秀善（もり ひでよし）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>テーマ 「一人ひとりに応じた生徒指導・進路指導のできる教師とは」</p> <p>教師の指導には、大別すると学習指導と生徒指導がある。学習指導は、各教科領域を通して知識や技術の習得が主である。生徒指導は、日常の指導を通して自己教育力を育成し、児童・生徒の人格の完成を目指すことである。いずれも教師の人間性が問われる指導ではある。とりわけ、生徒指導・進路指導では、それが大きく問われる。また、今日キャリア教育の視点に立った進路指導のあり方が求められている。よって、生徒指導・進路指導を意欲的に取り組む教師を育成し、学校現場で即戦力としての教育活動ができる力を身につけることを到達目標とする。</p>		
授業の概要	<p>本講義は、生徒指導・進路指導の基本的な対応のあり方を解説し、これからの学校現場で如何に対応していくべきかを、具体的な実践事例や映像資料等を取り上げ考察し、即戦力になる教師を育てることを第一として進めていく。</p>		
授業計画	第1回	◎オリエンテーション 授業内容・講義の進め方・評価等 ◎生徒指導・進路指導の今日的課題	
	第2回	◎生徒指導 ○生徒指導の概要 1. 生徒指導とは 2. 課題と内容	
	第3回	○生徒指導の原理 1. 人間観 2. 自己指導力の育成 3. 集団指導 4. 援助指導の仕方	
	第4回	○生徒(児童)理解 1. 生徒理解の概要 2. 方法	
	第5回	○生徒指導の主体と組織 1. 生徒指導の主体 2. 生徒指導部 3. 他の校内組織との連携 4. 教師の共通理解	
	第6回	○さまざまな教育活動を通じての生徒指導 1. 教科教育(授業)・道徳の時間を通じての生徒指導 2. 特別活動中での生徒指導	
	第7回	○家庭・地域との連携 1. 家庭との連携のあり方 2. 地域との連携のあり方	
	第8回	○問題行動への理解とその対応 1. 問題行動とは何か 2. 問題行動の分類 3. 問題行動の早期発見	
	第9回	■進路指導 I. 進路指導とは 1. 日本における進路指導	
	第10回	2. 進路指導の定義と目的 3. 進路指導の意義と機能 4. 進路指導と教育課程・学習指導要領	
	第11回	5. キャリア教育と進路指導	
	第12回	II. 進路指導の実際 1. 進路指導の校内組織と管理運営 2. 進路指導の計画と実施	
	第13回	3. 進路指導における集団指導 4. 進路指導における個別指導	
	第14回	5. 進路指導の評価と活用	
	第15回	◎あなたが教師になった時の生徒指導？進路指導？	
準備学習(予習・復習等)	○特になし。		
テキスト	○講義内容及び今日的な教育課題を盛り込んだ自作教材を毎回配布。		
参考文献	<p>○「学習指導要領」文部科学省</p> <p>○「生徒指導提要」文部科学省</p> <p>※その他講義の中で適宜紹介する</p>		
評価方法	レポート:60% 毎回の講義感想文:40%		

教育相談の基礎		前期 2 単位	2年
教育相談の基礎		植月 美希 (うえつき みき)	
授業の到達目標 及びテーマ	教育相談に関わる基礎知識を身につけ、教育現場における生徒や保護者とのコミュニケーションを含め、教育相談状況に柔軟に対応できるようになることを目指す。		
授業の概要	不登校・いじめ・学級の荒れなど、中学・高校生が陥ることの多い学校不適應や心のつまずきについて学ぶとともに、教育相談の現代的課題や、望ましい教師の対応について理解する。保護者対応を含め、教育相談全般の基礎的能力を身につける。 主に講義形式で授業を進めるが、様々なワークやロールプレイを取り入れながら進めていくので、授業に積極的に参加することが望ましい。		
授業計画	第1回	オリエンテーション・教育相談とは	
	第2回	子ども理解	
	第3回	聴くスキル	
	第4回	子どもたちのサイン	
	第5回	教師の自己理解	
	第6回	不登校への対応1	
	第7回	不登校への対応2	
	第8回	いじめへの対応1	
	第9回	いじめへの対応2	
	第10回	発達障害のある生徒への対応1	
	第11回	発達障害のある生徒への対応2	
	第12回	保護者を対象とした教育相談1	
	第13回	保護者を対象とした教育相談2	
	第14回	教員のメンタルヘルス	
	第15回	これまでのまとめと復習	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所を読んでおくこと。 事後学習 講義内容を振り返りながら、プリントやテキストを熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。		
テキスト	文部科学省 「生徒指導提要」 教育図書		
参考文献	特に指定しない		
評価方法	課題・小テスト:20% 授業参加態度:20% 定期試験又は最終課題:60%		

教職実践演習（中学校）	後期 2 単位	2年
教職実践演習（中学校）		
<p>【担当教員】 植月 美希（うえつき みき）、清水 康幸（しみず やすゆき）、渡辺 雅之（わたなべ まさゆき）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 2年間にわたる、教科ならびに教職課程に関する科目の履修状況と教育実習の成果を踏まえ、各自の課題を明らかにし、改めて教員としての総合的な力量の形成とその確認を行うことを目標とする。授業はオムニバス形式である。</p> <p>【授業の概要】 3グループに分け、教員3名によるオムニバス形式で講義＋演習を行う。内容は、①教科教育の専門家としてのより洗練された技術を身につけるための授業研究（清水）、②生徒理解を深める。生徒指導、教育相談技術のスキルアップ（植月）、③現場の生活指導や学級経営に関する実践的指導力の育成（渡辺）。上記の順番はグループによって異なる。</p> <p>【授業計画】 第1回 清水 全体ガイダンス（演習の目的、計画について） 第2回 清水 現場の授業参観1 第3回 清水 現場の授業参観2 第4回 清水 教育実習時の指導案と模擬授業、意見交換1 第5回 清水 教育実習時の指導案と模擬授業、意見交換2 第6回 植月 教育相談における中学、高校生の最新の課題 第7回 植月 行動観察と対話による生徒理解を学ぶ 第8回 植月 教育実習時に課題となった個別対応ロールプレイ実習 第9回 植月 教育相談にかかわる事例検討 第10回 外部講師による講演 第11回 渡辺 学級経営案1 学級組織作り、ショートホームルーム 第12回 渡辺 学級経営案2 地域性や学校文化、教育目標づくり 第13回 渡辺 保護者や地域への対応 保護者会、家庭訪問 第14回 渡辺 教員の含むと権利、安全管理、危機管理、校務分掌 第15回 清水 まとめ</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 開講前に、教職課程での学びと教育実習をふまえて各自の成果と課題につき、事前レポートを課す。</p> <p>【テキスト】 特に定めないが授業中に各教員から指示する。</p> <p>【参考文献】 特に定めないが、授業中に各教員から指示する。</p> <p>【評価方法】 毎回の授業感想文（3割）と、各教員から出される課題（4割）と、最終レポートを課す（3割）。</p>		

教育実習 I	後期 1 単位	1年
教育実習に向けて		
<p>【担当教員】 植月 美希（うつき みき）、倉持 重男（くらもち しげお）、清水 康幸（しみず やすゆき）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 教育実習は、中学校教諭としての基礎的能力を養うとともに、教育についての実践的理解を深めることを目指している。この授業では、短大1年生の段階で教育実習における教壇実習に対応できるように、専門教科や前期の全ての教職科目の単位取得で得た知識と経験をもとに、授業を展開できるようにすることを目指す。</p> <p>【授業の概要】 教育実習の事前指導の一環である。目標は、（1）教育実習にあたって必要な知識や心構えを学身につける（指導案の書き方、教員の責務など）（2）グループに分かれて、学習指導案の作成した上で模擬授業を全員が30分ほど実施する力をつけ、互いに講評を行うことのできる力を養う、（3）実習経験者や本学のOGである現場教師の話聞き、各自教師になることへの心構えを醸成する。</p> <p>【授業計画】 第 1回 ガイダンス 教育実習とは（全体） 第 2回 教育実習の現場と実態（全体） 第 3回 2年生の教育実習体験談を聞く（全体） 第 4回 計画作り（グループ） 第 5回 模擬授業①（グループ） 第 6回 模擬授業②（ " ） 第 7回 模擬授業③（ " ） 第 8回 模擬授業④（ " ） 第 9回 模擬授業⑤（ " ） 第10回 模擬授業⑥（ " ） 第11回 模擬授業⑦（ " ） 第12回 模擬授業⑧（ " ） 第13回 模擬授業⑨（ " ） 第14回 模擬授業⑩（ " ） 第15回 OG（現職教員）の講話（全体）</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 模擬授業に向けて、十分な教材研究をふまえ学習指導案の作成を行うこと。</p> <p>【テキスト】 特になし</p> <p>【参考文献】 特にないが、教員ごとに紹介する</p> <p>【評価方法】 模擬授業の取り組み:80% 最終レポート:20%</p>		

教育実習Ⅱ	通年 4 単位	2年
教育実習Ⅱ（事前・事後指導）		
<p>【担当教員】 植月 美希（うえつき みき）、清水 康幸（しみず やすゆき）、東 宏行（ひがし ひろゆき）</p> <p>【授業の到達目標及びテーマ】 教育実習は、学校における教育実践（実習）参加することを通じて、中学校教諭としての基礎的能力を養うとともに、教育についての実践的理解を深めることを目標とする。大学で学んだ理論や知識をもとに、経験豊富な教諭の指導を受けて教壇実習を行うもので、教職課程の総仕上げともいべき位置づけをもつ。</p> <p>【実習の概要】 教育実習Ⅱは、教壇実習（3週間）を本体とし、直前の事前指導と事後指導を含む。 事前指導では学習指導案作成や教育実習本番に備え、模擬授業を各自必ず30分程度実施して実践的準備を行なう。教育実習終了後は、事後指導として経験交流や反省会を行う。それらは最終的に冊子『教育実習の記録』にまとめられる。</p> <p>【授業計画】 実習開始前にグループに分かれて「事前指導」が行われ、実習終了後は、同じくグループで反省・総括のための「事後指導」が行われる。本授業の欠席は認めない。</p> <p>【準備学習（予習・復習等）】 ①模擬授業に向けて、十分な教材研究をふまえて学習指導案の作成を行うこと。 ②教育実習に備え、担当箇所の教材研究と学習指導案の作成を念入りに行うこと。</p> <p>【テキスト】 特に指定しない。</p> <p>【参考文献】各教科学習指導要領</p> <p>【評価方法】模擬授業への取り組みと授業実施感想文・講評への取り組み50%，レポート20%，実習校による実習の評価30%</p> <p>※なお、実習直前であっても、欠席が多い者や意欲に欠ける者は、実習参加を認めないことがある。（その場合、単位は取得できない）</p> <p>【履修条件】 教育実習Ⅰを履修した者および1年次の教職専門科目をすべて修得した者のみ受講が認められる。</p>		

生涯学習概論		前期 2 単位	2年
生涯学習・社会教育の本質と意義を理解して、多様な人々の学習活動を支援する司書として必要な知識や基礎的能力を身につける。		本庄 陽子 (ほんじょう ようこ)	
授業の到達目標及びテーマ	<p>○学校教育に大きく偏りがちな「教育」や「学習」への意識を問い直し、「生涯学習概念」を正しく理解するとともに、生涯学習支援の中心となる社会教育の重要性を理解することをテーマとする。</p> <p>○授業では、背景となる社会の動き、人々の変化、時代の要請等、必要と思われる事柄を整理し、多様なものの見方を示していくので、1)人の生き方と社会のあり方が「学習」と切り離せないものとして考えられるようになった「生涯学習」の考え方を理解して、2)司書として、多様な人々の学習を支援するために必要な基礎知識を得て、3)本質的・多面的なものとらえ方ができるようになる。</p>		
授業の概要	<p>就学前の幼児や学校を卒業した成人も、学校外で「学習」していることは経験上多くの人が知っていることだろう。人々が学習する多様な機会・場面・課題等へ注目することを通して生涯学習の具体的展開を学び、その支援のあり方を、社会教育の領域を中心として考察する。授業は、教科書及びプリントを用いた講義形式で進めていくが、適宜コメント等の発言を求められることがある。また、授業終了時にはリアクションペーパーにより授業内容に関する考察・疑問等を提出してもらい、翌週以降の授業に反映させることで履修生の理解がより進むようにする。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション：司書にとっての「生涯学習概論」とは？ 授業の進め方・評価方法等についての解説	
	第2回	生涯学習概念の基礎的理解 (1) 「教育」「学習」「生涯教育」「生涯学習」という概念、学校教育・家庭教育・社会教育と生涯学習	
	第3回	生涯学習概念の基礎的理解 (2) 現代的意味と諸外国における経緯	
	第4回	学校と生涯学習 (1) 学校と地域の連携、教員・保護者・地域住民の連携という視点	
	第5回	学校と生涯学習 (2) 学校による生涯学習支援	
	第6回	家庭と生涯学習 (1) 家庭教育の定義と特徴、家庭教育をめぐる諸問題	
	第7回	家庭と生涯学習 (2) 家庭・家族の変遷	
	第8回	生涯学習と職業に関する諸問題 人材養成の視点と余暇活動	
	第9回	生涯学習と社会教育 (1) 社会教育の定義と特徴	
	第10回	生涯学習と社会教育 (2) 社会教育の歴史・意義・役割	
	第11回	生涯学習と社会教育 (3) これからの社会教育の可能性	
	第12回	教育に関する法律と生涯学習施策の推進	
	第13回	多様な学習の機会 (1) 図書館等の社会教育施設における学習—専門的職員の役割とボランティア	
	第14回	多様な学習の機会 (2) 新しいメディアや民間教育産業における学習	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>【予習】指定された教科書（および配布資料）の該当箇所を目を通してくる。不明な部分や疑問があれば、その「？」を大切に授業に臨むこと。</p> <p>【復習】授業の内容を振り返り、理解の不十分な箇所があれば放置せず、質問事項を用意するなどして積極的に次の授業に臨むこと。</p> <p>また、日頃から身の回りにあふれている学習活動（例えば、展覧会に行く・図書館で本を借りる・各種資格取得・お稽古事等）にも目を向けて、人々が営む教育や学習活動がもつ意味を深く考えることにも取り組んでほしい。</p>		
テキスト	鈴木真理・永井健夫・梨本雄太郎編著『生涯学習の基礎〈新版〉』（学文社, 2011年）/他にプリントも用いる。		
参考文献	鈴木真理著『学ばないこと・学ぶこと—とまれ・生涯学習の・ススメ』（学文社, 2006年）。その他、随時紹介する。		
評価方法	定期試験:70% 小テスト:10% 宿題レポート:10% 授業参加度:10%		

図書館概論		前期 2 単位	1年
図書館とは何か		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標及びテーマ	司書課程全体の入門として位置づけられる科目である。司書課程の科目構成や科目間の関連を知り、2年間で学ぶ司書課程の全体像を把握し、「図書館とは何か」という図書館情報学の基礎を培う。また、司書採用に関する現状や図書館界をとりまく人的状況についても把握し、自らのキャリア選択の判断材料を得ることも目的のひとつである。		
授業の概要	まず、図書館の歴史に触れながら、現代社会における図書館の意義について理解を図る。次に、図書館の法的基盤および図書館の自由について解説し、さらに、図書館の5館種、すなわち、公共図書館・学校図書館・大学図書館・国立図書館・専門図書館の制度と機能を解説する。最後に、図書館員の専門性と養成、図書館の課題と展望について考える。		
授業計画	第1回	司書課程ガイダンス	
	第2回	現代社会と図書館	
	第3回	図書館の法的基盤・図書館の自由	
	第4回	公共図書館の制度と機能 (1) 図書館法	
	第5回	公共図書館の制度と機能 (2) 公共図書館の機能	
	第6回	公共図書館の制度と機能 (3) 公共図書館の諸問題	
	第7回	学校図書館の制度と機能 (1) 学校図書館法と機能	
	第8回	学校図書館の制度と機能 (2) 学校図書館の諸問題	
	第9回	大学図書館の制度と機能 (1) 大学図書館に関する法律	
	第10回	大学図書館の制度と機能 (2) 大学図書館の諸問題	
	第11回	国立図書館の制度と機能	
	第12回	専門図書館・図書館類縁機関	
	第13回	図書館と著作権	
	第14回	図書館員の専門性と養成、図書館の課題と展望	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習では、テキストの該当ページを読んで、概略を理解し、初出の専門用語等をチェックしておく。復習では、理解を深めるためにテキストを再読する。また、課題がある場合は、速やかにとりかかること。		
テキスト	『図書館概論』塩見昇編著 日本図書館協会 2012 (JLA図書館情報学テキストシリーズⅢ)		
参考文献	授業のなかで紹介する。		
評価方法	課題:50% 試験:50%		

図書館情報技術論		前期 2 単位	2年
図書館業務と情報処理技術		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標及びテーマ	図書館業務を遂行するために必要なICTリテラシの修得を目標とする。まず、基礎となるコンピュータのハードウェア/ソフトウェア、コンピュータ・システム、情報のデジタル化について理解した後、図書館業務システム、電子資料、データベース、検索技術等の知識を修得する。		
授業の概要	コンピュータの基本構造、情報のデジタル化、ネットワーク等の基本的知識を解説する。その上で、図書館システム、図書館における情報通信技術活用の現状を学ぶ。次にデータベースの考え方、アルゴリズム、検索エンジンの仕組み等の理解に基づきデータベース用アプリケーションを使って実際にデータベースを作成し、検索の基礎を体験する。		
授業計画	第1回	コンピュータの基本構造、ハードウェア、ソフトウェア	
	第2回	コンピュータの利用形態	
	第3回	二進法、倍加法、逆倍加法、文字のデジタル化	
	第4回	画像・音声のデジタル化	
	第5回	データ形式とマルチメディア、電子資料の管理技術	
	第6回	デジタルアーカイブ ー現状と問題点	
	第7回	情報通信ネットワーク	
	第8回	情報技術と社会	
	第9回	コンピュータシステムの運用管理と情報のセキュリティ	
	第10回	図書館業務システムの仕組み ー管理・サービス	
	第11回	図書館における情報通信技術の活用と現状	
	第12回	データベース概論	
	第13回	検索エンジンの仕組み	
	第14回	データベース作成演習(1)	
	第15回	データベース検索演習(2)	
準備学習(予習・復習等)	講義を補足するためにレポートや演習課題を組み入れています。提出したレポートや演習結果はポートフォリオに蓄積し、学習の振り返りとしてください。		
テキスト	使用しない		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	平常点:60% レポート:20% 課題演習:20%		

図書館制度・経営論		後期 2 単位	2年
図書館制度・経営論		松本 直樹（まつもと なおき）	
授業の到達目標 及びテーマ	図書館の法制度と経営の概要を知る。		
授業の概要	公立図書館、大学図書館を中心に、その制度と経営について学ぶ。制度については、主に関連の法律、行政などについて学ぶ。また、経営については、組織、計画、予算等について学ぶ。これらの学修をととして、組織としての図書館の制度的環境を理解するとともに、経営的視点から図書館を学ぶ。		
授業計画	第1回	公立図書館関連の法律	
	第2回	図書館法	
	第3回	他館種の図書館に関連する法規	
	第4回	図書館サービスと法律（民法等）	
	第5回	図書館の行政	
	第6回	大学図書館と学術情報流通政策（1）	
	第7回	大学図書館と学術情報流通政策（2）	
	第8回	情報管理と法律	
	第9回	管理形態の多様化	
	第10回	図書館職員と人材育成（1）	
	第11回	図書館職員と人材育成（2）	
	第12回	計画	
	第13回	評価（1）	
	第14回	評価（2）	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：随時提出課題が指示されるので、それを行うこと。 復習：配布資料、参考文献を指示するので、それを読むこと		
テキスト	特に使用しない。プリントを配布する。		
参考文献	糸賀雅児・葉袋秀樹『図書館制度・経営論』樹村房		
評価方法	平常点，課題提出とその内容:40% 期末試験:60%		

図書館サービス概論		後期 2 単位	1年
利用者のための図書館サービス		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	図書館サービスの全体像を把握するための科目である。図書館サービスは、提供する情報・資料の内容や、サービス対象者、サービス目的など、さまざまな面から特化して考えることができる。こうしたさまざまな図書館サービスや図書館の文化活動について、具体的に理解するとともに、それらのサービスを企画・運営できる資質を図る。		
授業の概要	図書館の機能を確認し、図書館サービスの種類について理解したうえで、具体的なサービスを解説する。まず、資料提供サービスと情報提供サービスについて、次に、特に図書館利用に障害のある人々や高齢者、児童、在日外国人という利用対象に応じたサービスについて、そして図書館の文化活動や広報、図書館間の連携・協力についてみていく。		
授業 計画	第1回	図書館の機能とサービス	
	第2回	資料提供サービス (1) 閲覧, 貸出など	
	第3回	資料提供サービス (2) 読書案内など	
	第4回	情報提供サービス (1) レファレンスサービスなど	
	第5回	情報提供サービス (2) HPによる情報提供	
	第6回	サービスの展開 (1) 行政支援, ビジネス支援	
	第7回	サービスの展開 (2) 子育て支援, 学校支援	
	第8回	利用対象別サービス (1) 図書館利用に障害のある人へのサービス	
	第9回	利用対象別サービス (2) 高齢者, 乳幼児サービス	
	第10回	図書館の利用空間	
	第11回	図書館の文化活動・利用者との交流	
	第12回	図書館の広報	
	第13回	図書館サービスとマネージメント	
	第14回	図書館サービスの連携・協力	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習・復習において、テキストの該当ページを読むことは勿論だが、機会があれば、多くの図書館を利用して、実際にさまざまな図書館のサービスを体験することが望ましい。		
テキスト	『図書館サービス論』小田光宏編著 日本図書館協会 2010 (JLA図書館情報学テキストシリーズⅡ)		
参考文献	授業のなかで紹介する。		
評価方法	課題:50% 試験:50%		

情報サービス論		前期 2 単位	1年
利用者の情報要求への対応		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標及びテーマ	「図書館サービス概論」で解説する図書館の情報提供サービスについて、さらに詳しく学ぶための科目である。情報源について知り、情報サービスとくにレファレンスサービスの理論と実際を理解して、自ら情報提供サービスを行える資質を養う。また、情報リテラシーの理論を理解して、今後の新たな情報サービスを考える基盤を培う。		
授業の概要	図書館における情報サービスの歴史を振り返りながら、その意義と種類、新しい動向について解説する。次に、情報提供を行うために必要なツール（情報源）の種類と特性、およびその評価と構築について考える。さらに、レファレンスプロセスに沿って各要素について解説する。また、情報リテラシー教育について考える。		
授業計画	第1回	高度情報社会における図書館・情報サービス	
	第2回	図書館における情報サービスの意義と種類	
	第3回	情報サービスの展開	
	第4回	情報源の種類と選択	
	第5回	情報源の構築と評価	
	第6回	情報ニーズへの対応（1）情報探索行動	
	第7回	情報ニーズへの対応（2）レファレンスプロセス	
	第8回	情報ニーズへの対応（3）レファレンス質問	
	第9回	情報の検索と回答（1）検索の戦略と実行	
	第10回	情報の検索と回答（2）評価と記録	
	第11回	情報サービスの組織化・管理	
	第12回	大学図書館の学術情報サービス	
	第13回	情報リテラシーの理論	
	第14回	情報リテラシー教育の実際	
	第15回	まとめ	
準備学習（予習・復習等）	テキストの該当ページを読むことは勿論であるが、様々な機会をとらえて自らが情報探索を効率的に行えるように意識すること。		
テキスト	『情報サービス論』小田光宏編著 日本図書館協会 2012（JLA図書館情報学シリーズⅢ）		
参考文献	授業のなかで紹介する。		
評価方法	課題：50% 試験：50%		

児童サービス論		後期 2 単位	2年
子どものための図書館サービス		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子ども時代における読書の意義と必要性を理解し、乳幼児からヤングアダルト（YA）までの広義の「児童」のための図書館サービスについて、知識と技術を身につける。また、児童資料の種類や特性を理解し、子どもと資料を結びつける方法であるストーリーテリングやブックトークの技術を身につけ、子ども読書推進に関わることのできる資質を高める。		
授業の概要	子どもの読書力について関心が高まってきた背景を知り、子どもの読書における児童サービスの役割を学ぶ。まず児童資料、とくに絵本と児童文学、YA資料を読むことを課し、ストーリーテリングを演習する。また、乳幼児、YA、特別支援の必要な子どもたちへのサービスや、学校への支援、地域との連携について考える。		
授業計画	第1回	児童サービスの意義と歴史	
	第2回	子どもの生活と読書	
	第3回	児童資料の種類と特色（1）絵本	
	第4回	児童資料の種類と特色（1）児童文学	
	第5回	児童コレクションの形成と管理	
	第6回	児童サービスの諸活動（1）資料提供、フロアワーク	
	第7回	児童サービスの諸活動（2）プログラムの提供	
	第8回	児童サービスの運営（1）組織、計画	
	第9回	児童サービスの運営（2）広報、評価、施設	
	第10回	乳幼児サービス	
	第11回	ヤングアダルトサービス	
	第12回	ヤングアダルト資料	
	第13回	特別支援の必要な子どもたちへのサービス	
	第14回	学校・学校図書館への支援	
	第15回	地域との連携・協力	
準備学習 (予習・復習等)	ストーリーテリングと児童書の紹介（ビブリオバトル）を授業中に行うので、そのためにさまざまな児童書を読んでおく。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業中に紹介する。		
評価方法	課題：50% レポート：50%		

情報サービス演習		通年（前期）	2 単位	1年
情報や資料を提供するための知識と技術		堀川 照代（ほりかわ てるよ）		
授業の到達目標 及びテーマ	情報サービスを提供するために必要な知識や技術を、演習によって身につけることを目指す。前期は、印刷体の各種情報源について、その特徴を知り、利用の習熟を目指す。後期は、web上の各種情報源について知り情報検索能力を高める。また、図書館等のwebページの分析をととして、Web上の情報を選択・評価する実践的な力を身につける。			
授業の概要	前期は、まず、利用者からの質問を類型化することを学び、類型別の各種情報源について、本学図書館所蔵のもの（印刷体）から選択して紹介（発表）し、最後に発表者が作成した質問集に回答する。後期は、Web上の情報源を知り、図書館HPやWebページを評価し、最後に自ら設定したテーマのレポートのための情報検索を行い、その構成を考える。			
授業計画	第1回	レファレンス質問の類型化		
	第2回	レファレンスブックの情報源		
	第3回	図書・叢書の情報源（1）書誌		
	第4回	図書・叢書の情報源（2）目録		
	第5回	新聞・雑誌記事の情報源（1）逐次刊行物リスト		
	第6回	新聞・雑誌記事の情報源（2）雑誌記事索引		
	第7回	パスファインダーの作成		
	第8回	言語・文字の情報源		
	第9回	事物・事象の情報源		
	第10回	歴史・日時の情報源		
	第11回	地理・地名の情報源		
	第12回	人物・団体の情報源（1）人名事典		
	第13回	人物・団体の情報源（2）人名索引		
	第14回	レファレンス質問に関する探索・回答		
	第15回	まとめ		
準備学習 (予習・復習等)	前期では印刷物のレファレンスツールの利用について、後期ではWebにおける検索について演習する。課題が多いが、ひとつひとつきちんとこなしていくこと。			
テキスト	前期は特になし 後期は『インターネットで文献探索』伊藤民雄 日本図書館協会（JLA実践シリーズ）			
参考文献	授業のなかで紹介する。			
評価方法	課題：50% レポート：50%			

情報サービス演習		通年（後期）	1年
情報や資料を提供するための知識と技術		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	情報サービスを提供するために必要な知識や技術を、演習によって身につけることを目指す。前期は、印刷体の各種情報源について、その特徴を知り、利用の習熟を目指す。後期は、web上の各種情報源について知り情報検索能力を高める。また、図書館等のwebページの分析をととして、Web上の情報を選択・評価する実践的な力を身につける。		
授業の概要	前期は、まず、利用者からの質問を類型化することを学び、類型別の各種情報源について、本学図書館所蔵のもの（印刷体）から選択して紹介（発表）し、最後に発表者が作成した質問集に回答する。後期は、Web上の情報源を知り、図書館HPやWebページを評価し、最後に自ら設定したテーマのレポートのための情報検索を行い、その構成を考える。		
授業計画	第1回	検索エンジンの比較	
	第2回	『インターネットで文献探索』第1章	
	第3回	『インターネットで文献探索』第2章	
	第4回	『インターネットで文献探索』第3章	
	第5回	『インターネットで文献探索』第4章	
	第6回	『インターネットで文献探索』第5章	
	第7回	『インターネットで文献探索』第6章	
	第8回	レファレンス質問に関する探索・回答	
	第9回	大学図書館HP（検索ツールの提供）の比較・分析	
	第10回	大学図書館HP（検索ツールの提供）の分析・評価	
	第11回	webページの評価（1）国立国会図書館	
	第12回	webページの評価（2）市立図書館	
	第13回	テーマに即した情報検索と情報の分析	
	第14回	テーマに即した情報検索とレポートの構成	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前期では印刷物のレファレンスツールの利用について、後期ではWebにおける検索について演習する。課題が多いが、ひとつひとつきちんとこなしていくこと。		
テキスト	前期は特になし 後期は『インターネットで文献探索』伊藤民雄 日本図書館協会（JLA実践シリーズ）		
参考文献	授業のなかで紹介する。		
評価方法	課題：50% レポート：50%		

図書館情報資源概論		前期 2 単位	1年
図書館情報資源とコレクション構築		加藤 久枝 (かとう ひさえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館サービスの重要な要素の1つである図書館情報資源に関し、種類・特徴など基礎的知識を習得する。 ・図書館業務における情報資源収集の位置づけ・役割を理解する。 ・学問分野別情報資源の特徴を理解する。 ・日本の出版流通システム、図書館情報資源と著作権、「図書館の自由」の現状と動向および問題を理解する。 ・図書館のコレクション構築の意義とプロセスについて理解する。 		
授業の概要	<p>まず、印刷資料・非印刷資料・電子資料とネットワーク情報資源からなる図書館情報資源の種類と特徴を概観した後、学術研究分野の情報資源に焦点を当て、学問分野別情報資源の特徴について解説する。</p> <p>次に、図書館情報資源と深く関わりのある日本の出版流通システムの特徴と現状を説明する。また「図書館の自由」および図書館情報資源と著作権について事例を紹介しながら問題を考える。</p> <p>最後に図書館のコレクション形成（選択、収集、保存、評価）と資源共有について解説する。</p>		
授業計画	第1回	図書館情報資源概論について	
	第2回	図書館情報資源の意義・類別	
	第3回	図書館情報資源の種類と特質(1):印刷資料	
	第4回	図書館情報資源の種類と特質(2):非印刷資料	
	第5回	図書館情報資源の種類と特質(3):電子資料・ネットワーク情報資源	
	第6回	図書館情報資源の種類と特質(4):灰色文献・政府刊行物・地域資料	
	第7回	図書館情報資源の種類と特質(5):人文・社会・自然科学・技術分野の情報資源	
	第8回	出版流通システム	
	第9回	図書館の「知的自由」	
	第10回	図書館情報資源と著作権	
	第11回	コレクション構築とそのプロセス	
	第12回	選書論と資料選択・収集プロセス	
	第13回	資料の蓄積・保存プロセス	
	第14回	コレクションの評価・再編のプロセス	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習：テキストの該当ページを読み、要点や疑問点を整理しておくこと。</p> <p>復習：授業内容と感想を振り返りシートにまとめること。参考文献に目を通し理解を深めておく。</p>		
テキスト	馬場俊明『図書館情報資源概論』（JLA図書館情報学テキストシリーズ111：8）日本図書館協会，2012		
参考文献	第1回授業で参考文献リストを配布する。		
評価方法	試験：80% 平常点(提出課題など)：20%		

情報資源組織論		後期 2 単位	1年
図書館情報資源の組織化について学ぶ		加藤 久枝 (かとう ひさえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・図書館における情報資源組織化の意義や機能、理論を理解する。 ・書誌コントロール、書誌記述法、主題組織法、書誌情報の作成・提供、ネットワーク情報資源の組織化等を理解する。 ・主要な目録規則、分類法、件名標目表に関する基礎的知識を身につけ、図書館の蔵書目録(OPAC)検索時に活用できるようにする。 ・重要な専門用語を理解し、説明できるようにする。 		
授業の概要	<p>図書館が扱う情報資源を組織化する意義と理論、図書館業務との関わりを概説した後、書誌コントロール、書誌記述法(記述の標準化と目録規則)、主題分析と主題組織法について詳説し、情報資源組織化の主要ツールである『日本目録規則』『日本十進分類法』『基本件名標目表』を実際に使ってみる。</p> <p>書誌情報の作成・流通・提供について解説し、利用者が求めるOPACの機能について考える。</p> <p>図書館におけるネットワーク情報資源組織化の必要性和方法について解説する。</p>		
授業計画	第1回	情報資源組織化の意義と理論	
	第2回	書誌コントロールと標準化	
	第3回	書誌記述法(1)：目録、目録記入と構成要素	
	第4回	書誌記述法(2)：記述目録法、記述の標準化	
	第5回	日本目録規則(1)：概要、書誌階層と書誌単位	
	第6回	日本目録規則(2)：記述と標目	
	第7回	主題分析の意義と考え方	
	第8回	主題分析と索引法	
	第9回	基本件名標目表	
	第10回	主題分析と分類法	
	第11回	日本十進分類法	
	第12回	書誌情報の作成と流通 (MARC、書誌ユーティリティ)	
	第13回	書誌情報の提供 (OPACの管理と運用)	
	第14回	ネットワーク情報資源の組織化とメタデータ	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習：テキストの該当ページを読み、要点や疑問点を整理しておくこと。</p> <p>復習：授業内容と感想を振り返りシートにまとめること。参考文献に目を通し理解を深めておく。</p>		
テキスト	榎本裕希子, 石井大輔, 名城邦孝著『情報資源組織論』(ベーシック司書講座・図書館の基礎と展望 3)学文社, 2012		
参考文献	第1回授業で参考文献リストを配布する。		
評価方法	試験:80% 平常点(提出課題など):20%		

情報資源組織演習		通年（前期）	2 単位	2年
情報資源組織の具体的手法について学ぶ		嶋田 拓哉（ときた たくや）		
授業の到達目標 及びテーマ	<p>次の二点を到達目標とする。</p> <p>○情報資源組織業務を支える主要なツール（規則・マニュアル）の概要および使用方法を理解する。</p> <p>○ツールを利用した演習問題を通して、理論と実践の両側面から情報資源組織業務の具体的内容を理解する。</p>			
授業の概要	<p>科目全体を使用するツールの観点から主題組織法と目録法の2つに分ける。前期は主題検索を実現するための情報資源組織の業務および技法について説明する。具体的には、主題分析、分類作業、統制語彙の適用、件名作業に焦点を当て、演習問題を通してこれらに対する理解を深めてもらう。</p>			
授業計画	第1回	「情報資源組織論」の復習		
	第2回	主題分析と分類作業		
	第3回	『日本十進分類法（NDC）』（新訂9版）の概要と構成		
	第4回	関連索引の使用法		
	第5回	補助表の使用法：形式区分、地理区分、海洋区分		
	第6回	補助表の使用法：言語区分、言語共通区分、文学共通区分		
	第7回	分類規程と分類作業の実際		
	第8回	演習問題（分類記号の付与）		
	第9回	主題分析と統制語彙の適用		
	第10回	『基本件名標目表（BSH）』（第4版）の概要と構成		
	第11回	細目の使用法：一般細目、分野ごとの共通細目、言語細目		
	第12回	細目の使用法：地名のものと主題細目、地名細目、時代細目		
	第13回	件名規程と件名作業の実際		
	第14回	演習問題（件名の付与）		
	第15回	まとめ：主題組織法とは		
準備学習 (予習・復習等)	授業内で指示したテキストあるいはプリントの該当箇所を目を通すこと。			
テキスト	小西和信・田窪直規編『情報資源組織演習』（樹村房） テキストを補足するためのプリントも配布する。			
参考文献	未定			
評価方法	レポート:70% 小テスト:30%			

情報資源組織演習		通年（後期）	2年
情報資源組織の具体的手法について学ぶ		嶋田 拓哉（ときた たくや）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>次の二点を到達目標とする。</p> <p>○情報資源組織業務を支える主要なツール（規則・マニュアル）の概要および使用方法を理解する。</p> <p>○ツールを利用した演習問題を通して、理論と実践の両側面から情報資源組織業務の具体的内容を理解する。</p>		
授業の概要	<p>科目全体を使用するツールの観点から主題組織法と目録法の2つに分ける。後期は書誌データやメタデータの作成について説明を行う。具体的には『日本目録規則（NCR）』（1987年版改訂3版）に基づいた書誌データの作成を通して情報資源組織業務について理解を深めてもらう。また、共同目録作業や集中目録作業といった、情報資源組織業務にかかわるさまざまなことがらについても説明する。</p>		
授業計画	第1回	書誌データ作成の実際：前期の内容との関係	
	第2回	『日本目録規則（NCR）』（1987年版改訂3版）の概要と構成	
	第3回	記述総則の概要	
	第4回	書誌単位の構造：記述対象の把握	
	第5回	タイトルと責任表示に関する事項の記載方法	
	第6回	版に関する事項および出版・頒布等に関する事項の記載方法	
	第7回	形態に関する事項およびシリーズに関する事項の記載方法	
	第8回	注記に関する事項および標準番号、入手条件に関する事項の記載方法	
	第9回	演習問題（第5回から第8回の復習）	
	第10回	図書以外の資料に対する目録記入作成	
	第11回	タイトル標目および著者標目の付与	
	第12回	共同目録作業と集中目録作業	
	第13回	書誌データの管理と検索システムの構築の実際	
	第14回	ネットワーク情報資源のメタデータ	
	第15回	まとめ：目録法とは	
準備学習 (予習・復習等)	授業内で指示したテキストあるいはプリントの該当箇所を目を通すこと。		
テキスト	小西和信・田窪直規編『情報資源組織演習』（樹村房） テキストを補足するためのプリントも配布する。		
参考文献	未定		
評価方法	試験：70% 小テスト：30%		

図書館基礎特論		前前 1 単位	2年
図書館の実態を探る		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「図書館概論」で学んだ「図書館とは何か」についてさらに体験的に考える。実際に図書館を見学・調査して比較・分析することを通して、これまで学んできた図書館に関する知識を、自分の目で確認し検証し、さらに課題を検討する。調査結果を発表することで情報が共有され、プレゼンテーションの能力も高まることが期待される。		
授業の概要	まず、調査項目を決定し、グループごとに調査先の図書館3館を決める。それらの館についての文献があれば収集し、調査に行き、結果をまとめる。調査結果と各館の課題、それに対する提案について発表する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	調査先、関連文献について	
	第3回	調査・見学（各グループで見学）（比較・分析）	
	第4回	調査・見学（各グループで見学）（まとめ）	
	第5回	発表（1）（グループ1～4）	
	第6回	発表（2）（グループ5～8）	
	第7回	発表（3）（グループ9～12）	
	第8回		
	第9回		
	第10回		
	第11回		
	第12回		
	第13回		
	第14回		
	第15回		
準備学習 （予習・復習等）	図書館見学やその発表（資料作成）、報告書作成など、グループワークなので、日程調整を図りながら協力して行う。		
テキスト	特になし。		
参考文献	必要に応じて紹介する。		
評価方法	発表：30% レポート：70%		

図書館サービス特論		前後 1 単位	2年
子ども読書活動推進計画を考える		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子ども読書活動推進の我が国の動向を把握し、市町村で策定されている「子ども読書活動推進計画」の比較・分析を通して、子どもの読書活動を推進するために何が必要かを理解し、家庭・地域・学校・行政のそれぞれの立場において子ども読書推進について柔軟に考えることのできる資質を培う。		
授業の概要	国及び県レベルの子ども読書推進計画について概略を理解し、ある自治体の子ども読書推進計画をグループで分析する。そして、各自3つの自治体（市町）の「子ども読書活動推進計画」を比較分析して、それぞれの特徴を知り、推進計画の必要条件を検討する。最後に、子ども読書活動推進（計画）の望ましい計画を考える。		
授業計画	第1回		
	第2回		
	第3回		
	第4回		
	第5回		
	第6回		
	第7回		
	第8回	ガイダンス	
	第9回	全国的な子ども読書活動推進計画の動向	
	第10回	子ども読書活動推進計画の比較・分析（1）県レベル、市レベル	
	第11回	子ども読書活動推進計画の比較・分析（2）3市の子ども読書推進計画の比較のポイント	
	第12回	子ども読書活動推進計画の比較・分析（3）3市の子ども読書推進計画の分析	
	第13回	子ども読書活動推進計画の特徴と必要条件	
	第14回	望ましい子ども読書推進計画の作成	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	自分でよいと思う3つの自治体の「子ども読書活動推進計画」をプリントアウトして持参する。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	発表：30% レポート：70%		

文学理論 a		前期 2 単位	現代教養専攻
文学理論の歴史		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標 及びテーマ	文学を読むことの歴史は、同時に読む主体の歴史です。文学理論、批評理論について学ぶことは、読む主体が、自分自身の背後に回り込む技術を習得すること、と考えればよいでしょう。そんなことができるだろうか——。そうできれば、読むことが、飛躍的に自在になります。ぜひ、その技術を獲得してください。		
授業の概要	自らの読みを見つめ直すための批評理論は非常に多くあります。ここではそのうち主要なものを丁寧に読み、他の理論にもできるだけ触れていくようにします。なかでもジェンダーの視点は最も重要です。他の授業内容にもつなげて理解を発展させることが大切です。後半は実際に作品の中でそれらがどのように駆使されているのか研究し、発表・討議します。		
授業計画	第1回	導入	
	第2回	V・シクロフスキー「手法としての芸術」——「異化」とは何か	
	第3回	B・ブレヒト「実験的演劇について」——「異化効果」	
	第4回	M・パフテン——フォルマリズム批判	
	第5回	E・サイード『オリエンタリズム』——異者の眼差し	
	第6回	学生による発表とディスカッション (グループA)	
	第7回	学生による発表とディスカッション (グループB)	
	第8回	学生による発表とディスカッション (グループC)	
	第9回	学生による発表とディスカッション (グループD)	
	第10回	学生による発表とディスカッション (グループE)	
	第11回	学生による発表とディスカッション (グループF)	
	第12回	学生による発表とディスカッション (グループG)	
	第13回	学生による発表とディスカッション (グループH)	
	第14回	学生による発表とディスカッション (グループI)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各人の発表テーマに応じた必読文献を、各回ごとに教示します。		
テキスト	プリントで配布します (丁寧に説明しますが英語も使用します)。		
参考文献	David Lodge and Nigel Wood eds., <i>Modern Criticism and Theory: A Reader</i> 3rd ed. (Pearson Longman, 2008) は一生使えます。但し旧版の方が便利。		
評価方法	レポート:50% 発表内容:30% 授業中の討議:20%		

文学理論b		後期 2 単位	現代教養専攻
文学理論の歴史		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標 及びテーマ	文学を読むことの歴史は、同時に読む主体の歴史です。文学理論、批評理論について学ぶことは、読む主体が、自分自身の背後に回り込む技術を習得すること、と考えればよいでしょう。そんなことができるだろうか——。そうできれば、読むことが、飛躍的に自在になります。ぜひ、その技術を獲得してください。		
授業の概要	自らの読みを見つめ直すための批評理論は非常に多くあります。ここではそのうち主要なものを丁寧に読み、他の理論にもできるだけ触れていくようにします。なかでもジェンダーの視点は最も重要です。他の授業内容にもつなげて理解を発展させることが大切です。後半は実際に作品の中でそれらがどのように駆使されているのか研究し、発表・討議します。		
授業 計画	第1回	導入	
	第2回	ロラン・バルト1——「作者の死」を読む	
	第3回	ロラン・バルト2——「作者の死」の文が実現したこと	
	第4回	ジェンダー批評1——日本の文脈から	
	第5回	ジェンダー批評2——西洋の文脈から	
	第6回	学生による発表とディスカッション (グループA)	
	第7回	学生による発表とディスカッション (グループB)	
	第8回	学生による発表とディスカッション (グループC)	
	第9回	学生による発表とディスカッション (グループD)	
	第10回	学生による発表とディスカッション (グループE)	
	第11回	学生による発表とディスカッション (グループF)	
	第12回	学生による発表とディスカッション (グループG)	
	第13回	学生による発表とディスカッション (グループH)	
	第14回	学生による発表とディスカッション (グループI)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各人の発表テーマに応じた必読文献を、各回ごとに教示します。		
テキスト	プリントで配布します (丁寧に説明しますが英語も使用します)。		
参考文献	David Lodge and Nigel Wood eds., <i>Modern Criticism and Theory: A Reader</i> 3rd ed. (Pearson Longman, 2008) は一生使えます。但し旧版の方が便利。		
評価方法	レポート:50% 発表内容:30% 授業中の討議:20%		

日本語学演習 b		後期 2 単位	現代教養専攻
日本文化と読み解く言語科学		岡崎 和夫 (おかざき かずお)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>上記の研究題目にしたがい、下記の概要に沿って、つぎの到達目標を立てる。</p> <p>①言語を科学的にあつかう力量の養成。 ②言語dateの意義をたたく理解する力の養成。 ③その収集にあたる力量の養成。 ④該当のdateからあらたな知見を導き求める力量の養成。</p>		
授業の概要	<p>本科の2種の講義題目、「日本語学」及び「日本語論」の履修のうえに、その知見を前提として、日本語を対象に言語科学の応用領域をあつかう。日本語と、古代から近代・現代におよぶ日本文化を読み解くskillの獲得をめざし、上記4つの到達目標をたてる。初年度は、J-popの歌詞やわらべうた、おわらい、国会議員の言語、法律の言語、文豪の小説作品などをあつかい、そのなかで、これらに刺激されながらの、学生自身の発案、設定による自主的課題＝発展自由領域をあわせてあつかう。</p>		
授業計画	第1回	introduction ほんとうはとても不思議な表現・・・「テレビを消して出かけてね」「黒板消しといいてくませんか？」・・・テレビや黒板はどう消せるのか？	
	第2回	鉛筆が一本、二本、三本・・・と「本」の発音が変わるメカニズムを考える。	
	第3回	「電話いっほんよこさない！」・・・電話はなぜ「一本」か。そして、野球のヒットやホームランもなぜ「一本、二本、三本」か？そして「日本」はニホンかニッポンか？	
	第4回	学生の発想によるテーマの気づき（レポート化する）。	
	第5回	「とぼとぼ」「ぶらぶら」「よちよち」「とことこ」「てくてく」「つかつか」「よたよた」という歩行の語群。	
	第6回	「にやにや」「にこにこ」「にたにた」「くすくす」「げらげら」・・・という笑いの語群。	
	第7回	「安倍晋三の再投板！！」・・・野球でもないのに「投板」の不思議。類例を列挙し分析する。	
	第8回	言語の歴史的研究 現代語から父母・祖父母の言語へ	
	第9回	言語の歴史的研究 明治・大正の言語へ。語彙と文法。	
	第10回	言語の歴史的研究 近代語から近世語へ（江戸時代後期のことば）。文法という概念。	
	第11回	言語の歴史的研究 近代語から近世語へ（江戸時代前期のことば）。文法の歴史（文法史）。	
	第12回	言語の歴史的研究 近世語から中世語へ（室町時代のことば）。文法論という概念。	
	第13回	言語の歴史的研究 近世語から中世語へ（鎌倉時代のことば）。文法論の歴史（文法論史）。	
	第14回	言語の歴史的研究 中世語から平安時代のことばへ・漢語の摂取という文化も見つめる	
	第15回	言語の歴史的研究 平安時代から上代のことばへ・漢字の受容からの展開も見つめる	
準備学習 (予習・復習等)	各回Textの読み調べ		
テキスト	各回、各自、各自の教材を作成する		
参考文献	各回、指示。		
評価方法	文献を調べるちからとdateの収集のちから:50% 論理的に考えるちからと授業を推進するちから:50%		

日本文学特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
『源氏物語』夕顔巻—基礎篇として		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○『源氏物語』夕顔巻本文を理解することができる。 ○『源氏物語』を読むための古文語法・古典文法に習熟する。 ○『源氏物語』の世界を探究することができる。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ○『源氏物語』夕顔巻本文を読み進める。 ○必ずしも事前の知識は要らない。受講者の人数や学力によりけりだが、適宜、語法や文法などの確認にも気を配りたい。基礎篇ということ意識しながら、物語の流れの把握を損なわない範囲で、古註釈や引用などにも触れるつもりである。 ○期末試験、期末レポートは実施しない。 		
授業計画	第1回	『源氏物語』情報交換。テキスト配布。	
	第2回	五条の風景と夕顔の宿。解析・考察・意見交換。	
	第3回	惟光の家族。解析・考察・意見交換。	
	第4回	夕顔・光源氏の贈答歌。解析・考察・意見交換。	
	第5回	惟光の内偵。解析・考察・意見交換。	
	第6回	六条の女と朝の庭園。解析・考察・意見交換。	
	第7回	遠景の頭中将。解析・考察・意見交換。	
	第8回	8月15夜の風情。解析・考察・意見交換。	
	第9回	夕顔の宿の周辺。解析・考察・意見交換。	
	第10回	某院への逃避行。解析・考察・意見交換。	
	第11回	某院の怪異出現。解析・考察・意見交換。	
	第12回	惟光の活躍。解析・考察・意見交換。	
	第13回	東山の密事と二条院への帰還。解析・考察・意見交換。	
	第14回	右近の語りと夕顔の正体。	
	第15回	二つの離別。解析・考察・意見交換。	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ○毎回の授業にむけて『源氏物語』本文の事前下読み。 ○簡単なワークシートの事前記入。 		
テキスト	コピー配布。		
参考文献	適宜、紹介する。		
評価方法	ワークシート蓄積:40% 発言実績:60%		

日本文学特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
『源氏物語』玉鬘物語を読む—応用篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○『源氏物語』玉鬘巻の本文を理解することができる。 ○『源氏物語』の語法・文法に通暁することができる。 ○『源氏物語』の表現の諸相に習熟することができる。 		
授業の概要	<p>○『源氏物語』玉鬘巻を読み進める。夕顔の遺児玉鬘が、九州の地で長年さすらった後に京へもどってくる。これが玉鬘物語の始まりの設定である。玉鬘21歳、光源氏35歳、このふたりの数奇な出会いの行方はどうなるのか。</p> <p>○読み進める速度は、受講者の人数と古典習熟によりけりだが、初めはゆるやかに、そして徐々に加速していきたい。</p> <p>○後期の履修条件ではないが、『源氏物語』の本文になれるためには、基礎篇である前期の夕顔巻の授業も履修しておくことが望ましい。</p> <p>○期末試験、期末レポートは実施しない。</p>		
授業計画	第1回	『源氏物語』情報交換。テキスト配布。	
	第2回	玉鬘の流離。解析・考察・意見交換。	
	第3回	小貳一家の地方流転。解析・考察・意見交換。	
	第4回	大夫監の求婚。解析・考察・意見交換。	
	第5回	九州逃亡と京都への帰還。解析・考察・意見交換。	
	第6回	京域の流離と物詣で。解析・考察・意見交換。	
	第7回	玉鬘の初瀬詣、右近との再会。解析・考察・意見交換。	
	第8回	長谷寺にて。解析・考察・意見交換。	
	第9回	右近の注進。解析・考察・意見交換。	
	第10回	玉鬘の六条院入り、光源氏との初対面。解析・考察・意見交換。	
	第11回	玉鬘の処遇構想。解析・考察・意見交換。	
	第12回	六条院衣配り。解析・考察・意見交換。	
	第13回	貴種流離譚の探究。	
	第14回	玉鬘十帖の見通しと場面の探究。	
	第15回	六条院物語における玉鬘物語の総合探究。	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ○毎回分の『源氏物語』本文の下読み。 ○『源氏物語』ワークシートの記入。 		
テキスト	コピー配布。		
参考文献	適宜、紹介。		
評価方法	ワークシートの蓄積:40% 発言実績の蓄積:60%		

日本文学特講 c		前期 2 単位	現代教養専攻
日本の歌謡		大木 京子（おおき きょうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本における歌謡の歴史を概観し、研究に必要な知識を身につける。歌謡の詞章を文学として捉え、注釈・解釈を通して理解を深める。		
授業の概要	文学史という観点から歌謡の変遷を説明し、音声資料を用いて確認していく。古代歌謡から中世歌謡までの詞章を取り上げて注釈を行い、先行研究を参照しながら内容を理解する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	歌謡とは何か	
	第3回	古代歌謡解説	
	第4回	古事記歌謡	
	第5回	日本書紀歌謡	
	第6回	中古歌謡解説	
	第7回	神楽歌・催馬楽	
	第8回	今様の流行と梁塵秘抄	
	第9回	中世歌謡解説	
	第10回	閑吟集	
	第11回	宗安小歌集	
	第12回	隆達小歌集	
	第13回	資料・先行研究確認	
	第14回	近世歌謡解説	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に指示された参考書やプリントを読んでおく。		
テキスト	プリントを配付する。		
参考文献	『日本歌謡集成』（東京堂出版）、『日本歌謡辞典』（桜楓社）、『日本歌謡史』（五月書房）、『日本歌謡・芸能の周辺』（勉誠社）、『歌謡文学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『徳川文芸類聚』9・10巻など		
評価方法	授業への積極的参加:30% レポートとテスト:70%		

日本文学特講 d		後期 2 単位	現代教養専攻
近世歌謡を読む		大木 京子（おおき きょうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代の歌謡の流れを確認し、流行歌謡を取り込んだ散文作品を読むことで、近世の歌謡と散文との影響関係について理解する。		
授業の概要	江戸時代に流行した歌謡の詞章を実際に読んでいく。注釈を行いながら内容を捉え、歌に込められた情感を理解する。また、近世小説に引用された流行歌を確認するとともに、時代背景や小説への影響を考察する。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	歌謡史の確認	
	第3回	江戸時代歌謡の解説	
	第4回	隆達節と仮名草子	
	第5回	『松の葉』解説	
	第6回	『松の葉』序文	
	第7回	三味線と流派	
	第8回	巻一「組歌」と踊り	
	第9回	巻二「長歌」と遊里趣味	
	第10回	作詞者と近世小説	
	第11回	巻三「端歌」と浮世草子	
	第12回	巻四「吾妻浄瑠璃」	
	第13回	巻五「投節」	
	第14回	音曲と近世芸能	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に指示された参考書やプリントを読んでおく。		
テキスト	プリントを配付する。		
参考文献	『日本歌謡集成』（東京堂出版）、『日本歌謡辞典』（桜楓社）、『日本歌謡史』（五月書房）、『日本歌謡・芸能の周辺』（勉誠社）、『歌謡文学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『徳川文芸類聚』9・10巻など		
評価方法	授業への積極的参加:30% レポートとテスト:70%		

日本文学特講 e		前期 2 単位	現代教養専攻
日本近現代文学とジェンダー 1		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	ジェンダー・セクシュアリティに関する概念・歴史・理論などについて、基本的な文献をいくつか読みながら、ジェンダー理論の基礎を理解します。日本近代文学への新たな興味関心を開けるよう、身体・少女・母性・恋愛・セクシュアリティ・サブカルチャーなど多様なトピックを学びます。		
授業の概要	講読形式の授業です。参加者各自の問題関心に沿って、テーマとテキストを選び、文献を読んでレジュメを作り、発表します。参加者は、発表に基づくディスカッションを通じて、各テーマへの理解を深めます。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	講読ゼミでの発表の仕方を学ぶ	
	第3回	発表の準備をする	
	第4回	テキスト講読 女性身体とジェンダー	
	第5回	テキスト講読 恋愛論とジェンダー	
	第6回	テキスト講読 母性とジェンダー	
	第7回	テキスト講読 民族・国家とジェンダー	
	第8回	テキスト講読 ファンタジーとジェンダー	
	第9回	テキスト講読 ことばとジェンダー	
	第10回	テキスト講読 売買春とジェンダー	
	第11回	テキスト講読 セクシュアリティとジェンダー	
	第12回	テキスト講読 平和・暴力・戦争とジェンダー	
	第13回	テキスト講読 スポーツとジェンダー	
	第14回	まとめ 1	
	第15回	まとめ 2	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> 各自担当する文献を読み、発表レジュメを作成する。 配布された文献資料を読み、考えを深めておく。 ディスカッションを踏まえ、レポートを作成する。 		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	発表:40% ディスカッション:30% 期末レポート:30%		

日本文学特講 f		後期 2 単位	現代教養専攻
日本近現代文学とジェンダー 2		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本現代文学・文化およびサブカルチャーについて、ジェンダー批評を実戦しつつ、女性の表現と物語表象をめぐる多様なトピックを学びます。		
授業の概要	講読形式の授業です。参加者各自の問題関心に沿って、テーマとテキストを選び、文献を読んでレジュメを作り、発表します。参加者は、発表に基づくディスカッションを通じて、各テーマへの理解を深めます。できれば前期に「日本文学特講E・e」を受講して、ジェンダーについての理論と知識を学んでおいてください。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ジェンダー批評の理論	
	第3回	ジェンダー批評の方法	
	第4回	女性文学の表現	
	第5回	女性身体と表現	
	第6回	女性のライフコースと表現	
	第7回	少女文化と少女小説	
	第8回	少女漫画と異性装	
	第9回	闘う少女の表象	
	第10回	宝塚文化とジェンダー	
	第11回	源氏物語受容と女性文化	
	第12回	サブカルチャーと紅一点	
	第13回	ジブリ作品とジェンダー	
	第14回	異類・妖怪とジェンダー	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> 各自担当する文献を読み、発表レジュメを作成する。 配布された文献資料および作品を読み、考えを深めておく。 ディスカッションをふまえ、レポートを作成する。 		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業時に配布する。		
評価方法	発表:40% ディスカッション:30% 期末レポート:30%		

日本文学演習 a		前期 2 単位	現代教養専攻
源氏物語「御法」巻を読む		今井 俊哉 (いまい としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	物語文学は虚構です。しかしそれは単純な絵空事ではありません。現実の世界に根ざしつつ、そこから想像力の翼を広げているからこそ、物語文学には独自の「本物らしさ」があるのです。物語文学を味わうためには、まずそれを生み出したその時代の社会や習俗、宗教、常識といった知識を学ぶ必要があります。同時にそれらの知識をいかに調べ、いかに整理するかの方法を学びます。		
授業の概要	源氏物語「御法」巻の演習です。この「御法」巻では光源氏の最愛の妻、紫の上の死が描かれます。光源氏にとって紫の上はどのような存在だったのか、また紫の上にとって光源氏はどのような存在だったのか、それを理解するために、物語が書かれた時代背景や、出家、葬儀といった当時の宗教や風俗についてそれを調査する方法を学びます。また、物語文学の特質は「語り手」の視点を通して登場人物の行為や心情が描かれる点にあります。この「語り手」の存在に注目しつつ、物語を読んでゆきましょう。		
授業計画	第1回	ガイダンス・担当発表者割り振り	
	第2回	病重い紫の上	
	第3回	紫の上の法華經千部供養	
	第4回	紫の上と花散里との贈答	
	第5回	紫の上、明石中宮と対面	
	第6回	紫の上、匂宮に遺言	
	第7回	紫の上死去	
	第8回	光源氏、夕霧に紫の上落飾のことをはかる	
	第9回	夕霧、紫の上の死に顔を見る	
	第10回	紫の上の即日葬儀	
	第11回	夕霧の紫の上回想	
	第12回	光源氏の悲嘆、帝以下の弔問	
	第13回	致事大臣の弔問	
	第14回	世の人の紫の上追慕	
	第15回	秋好中宮の弔問	
準備学習 (予習・復習等)	発表者は発表内容・資料・レジメの準備 フロアの場合は次回内容の予習		
テキスト	小学館古典セレクション「源氏物語」11		
参考文献	『源氏物語の鑑賞と基礎知識19 御法・幻』至文堂 ほか		
評価方法	演習での発表内容:50% 資料・レジメの内容:20% 演習での発言:30%		

日本文学演習 b		後期 2 単位	現代教養専攻
源氏物語「幻」巻を読む		今井 俊哉 (いまい としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	物語文学は虚構です。しかしそれは単純な絵空事ではありません。現実の世界に根ざしつつ、そこから想像力の翼を広げているからこそ、物語文学には独自の「本物らしさ」があるのです。物語文学を味わうためには、まずそれを生み出したその時代の社会や習俗、宗教、常識といった知識を学ぶ必要があります。同時にそれらの知識をいかに調べ、いかに整理するかの方法を学びます。		
授業の概要	源氏物語「幻」巻の演習です。この巻は正編と呼ばれる光源氏物語最後の巻で、ここでは計二十六首の和歌が詠まれています。和歌は平安時代宮廷人の自己の心情を伝達する道具であり、同時に自己内省の装置でもあります。これらの平安和歌は古今和歌集を中心とするデータベース上に展開していますが、これらの和歌の調査法を学ぶことは平安時代宮廷人の心情を理解することであり、また源氏物語の登場人物を理解することへも繋がると言えます。物語の和歌を精査することで、最愛の妻、紫の上を喪った光源氏の心情を考えてみましょう。		
授業計画	第1回	ガイダンス・担当発表者割り振り	
	第2回	蛍兵部卿との贈答	
	第3回	光源氏の独詠	
	第4回	中將の君との対面	
	第5回	紫の上遺愛の桜と匂宮	
	第6回	女三宮訪問	
	第7回	明石君との対面	
	第8回	花散里、中將の君との対面	
	第9回	夕霧との対面	
	第10回	光源氏の独詠～夏から秋へ	
	第11回	命日の曼荼羅供養、	
	第12回	重陽の節句、五節	
	第13回	光源氏、紫の上の文殻を焼く	
	第14回	仏名の日はじめて人前に姿を現す光源氏	
	第15回	光源氏最後の歌	
準備学習 (予習・復習等)	発表者は発表内容・資料・レジメの準備 フロアの場合は次回内容の予習		
テキスト	小学館古典セレクション「源氏物語」11		
参考文献	『源氏物語の鑑賞と基礎知識19 御法・幻』至文堂		
評価方法	演習での発表内容:50% 資料・レジメの内容:20% 演習での発言:30%		

日本文学演習 c		前期 2 単位	現代教養専攻
明治文学を原稿で読む		宗像 和重 (むなかた かずしげ)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の近代文学のうち、おもに明治期の文学を対象とする演習。作家の島崎藤村が「新しき言葉はすなわち新しき生涯なり」と語っているように、自らの言葉を新しくすることで新しい生き方を模索することが、明治期の作家たちの最も大きな課題であった。時代の大きな変革期のなかで、彼らがどのように言葉と格闘し、新しい文体と表現を紡ぎだしていったかを、この演習では近代作家の原稿を通して読み解いていく。一般の活字のテキストとは異なって、作家の筆跡や推敲のあとが生々しく残されている原稿は、言葉が生み出される創作の現場へと私たちを導いてくれる。具体的には、森鷗外・樋口一葉・夏目漱石らの作品とその原稿をとりあげ、作家がどのように言葉と格闘して作品を紡ぎだすかを理解する。		
授業の概要	明治文学の原稿の写真版や複製などを使い、生々しい推敲の後をたどりながら、おおよそ時代順にいくつかの作品を読み解いていく。また、変体仮名ややくずし字の読み方も学ぶ。取り上げるのは、それぞれの作品の一部分だが、作品の内容だけでなく、作家の筆跡や原稿用紙の特色などにも目を向ければ、活字のテキストではわからないさまざまな発見と面白さに出会うだろう。受講生にも、関心のある原稿について報告してもらう予定。より学習効果を上げるために、下記の授業計画は変更することがある。		
授業計画	第1回	はじめにー授業の概要と進め方	
	第2回	近代の活版印刷と原稿について	
	第3回	表記の近代ー森鷗外「舞姫」の原稿(1)	
	第4回	見えない桁目との格闘ー森鷗外「舞姫」の原稿(2)	
	第5回	書くことのはじまりー北村透谷の原稿	
	第6回	女性の文章表現ー樋口一葉「たけくらべ」の原稿(1)	
	第7回	原稿用紙という媒体ー樋口一葉「たけくらべ」の原稿(2)	
	第8回	書くことと生きることー正岡子規の原稿	
	第9回	筆からペンへー夏目漱石「坊っちゃん」の原稿(1)	
	第10回	1枚の原稿が語るものー夏目漱石「坊っちゃん」の原稿(2)	
	第11回	草稿・清書・校正刷りー柳田國男「遠野物語」の原稿	
	第12回	受講生の報告(1)ー明治初期の原稿	
	第13回	受講生の報告(2)ー明治中期の原稿	
	第14回	受講生の報告(3)ー明治後期の原稿	
	第15回	まとめー明治の文学と原稿	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、その時間にとりあげた原稿についての感想を提出してもらう予定。また、その作品を実際に読んでくるなどの予習・復習を課すことがある。		
テキスト	毎時間、プリントを配布する予定。		
参考文献	その都度、教室で紹介する。		
評価方法	授業感想文や報告内容:30% 学期末レポート:70%		

日本文学演習 d		後期 2 単位	現代教養専攻
大正文学を原稿で読む		宗像 和重 (むなかた かずしげ)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の近代文学のうち、おもに大正期の文学（および昭和初期を含む）を対象とする演習。大正文学は、作家の多彩な個性がそれぞれに特色のある作品を生み出した時代で、筆から万年筆への筆記環境の変化とともに、自由闊達な口語文体が成熟していく。この時期の文学を、ここでは近代作家の原稿を通して読み解いていく。一般の活字のテキストとは異なって、作家の筆跡や推敲のあとが生々しく残されている原稿は、作品が生み出されてくる現場へと私たちを導き、作品への理解と共感をより深めてくれるだろう。具体的には、志賀直哉・芥川龍之介・宇野浩二らの作品とその原稿をとりあげ、新しい言葉と作品がどのようにして生み出されるのかを理解する。		
授業の概要	大正期（および昭和初期）の原稿の写真版や複製などを使い、生々しい推敲の後をたどりながら、おおよそ時代順にいくつかの作品を読み解いていく。取り上げるのは、それぞれの作品の一部分だが、作品の内容だけでなく、作家の筆跡や原稿用紙の特色などにも目を向ければ、活字のテキストではわからないさまざまな発見と面白さに出会うだろう。受講生にも、関心のある原稿について報告してもらう予定。より学習効果を上げるために、下記の授業計画は変更することがある。		
授業計画	第1回	はじめにー授業の概要と進め方	
	第2回	大正期の文学と原稿について	
	第3回	媒体と原稿ー夏目漱石「ころ」の原稿	
	第4回	友情としての文学ー志賀直哉「暗夜行路」(1)	
	第5回	書く、書く、書くー志賀直哉「暗夜行路」(2)	
	第6回	他者の添削ー芥川龍之介「蜘蛛の糸」の原稿	
	第7回	失われた原稿ー芥川龍之介「或る旧友へ送る手記」の原稿	
	第8回	歌から詩へー萩原朔太郎の原稿	
	第9回	変更された末尾ー有島武郎「或る女」の原稿	
	第10回	一変する作風ー宇野浩二の原稿	
	第11回	切り貼りされる原稿ー室生犀星の原稿	
	第12回	受講生の報告(1)ー大正初期の原稿	
	第13回	受講生の報告(2)ー大正後期の原稿	
	第14回	受講生の報告(3)ー昭和初期の原稿	
	第15回	まとめー大正・昭和初期の文学と原稿	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、その時間にとりあげた原稿についての感想を提出してもらう予定。また、その作品を実際に読んでくるなどの予習・復習を課すことがある。		
テキスト	毎時間、プリントを配布する予定。		
参考文献	その都度、教室で紹介する。		
評価方法	授業感想文や報告内容:30% 学期末レポート:70%		

日本文学演習 e		前期 2 単位	現代教養専攻
堀 辰雄の前・中期作品を読む		岡崎 直也（おかざき なおや）	
授業の到達目標 及びテーマ	非人称の客観的視点で各作中人物の深層心理を分析する「聖家族」で、堀は主語なし日本語構文の特徴を生かし、固定するはずの視点を〈婉曲表現〉の多用で各作中人物の傍らに寄り添わせつつ経験の切実さを掬い上げた。しかし、叙述主体による小説の全的な統御への不信から、堀は、『風立ちぬ』『美しい村』などで小説を書く行為自体を一人称の叙述で書く、いわゆる〈小説の小説〉の試みを繰り返す。こうした文学表現の特質と可能性とを理解できる。		
授業の概要	堀辰雄の前・中期作品の演習発表（本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞など）を想定しているが、受講者数によっては講読形式の授業とすることもある。どちらの場合も、昭和前期の文学表現の特質について探究しつつ近・現代文学の研究方法を修得し、活発な質疑応答のなかで多角的思考を養うものとする。		
授業計画	第1回	授業概説・演習形式か講読形式かの選択	
	第2回	近代文学史概説 1	
	第3回	近代文学史概説 2	
	第4回	堀 辰雄「聖家族」1 [研究史]	
	第5回	堀 辰雄「聖家族」2 [注釈]	
	第6回	堀 辰雄「聖家族」3 [分析]	
	第7回	堀 辰雄「聖家族」4 [鑑賞]	
	第8回	堀 辰雄『風立ちぬ』1 [研究史 1]	
	第9回	堀 辰雄『風立ちぬ』2 [研究史 2]	
	第10回	堀 辰雄『風立ちぬ』3 [注釈 1]	
	第11回	堀 辰雄『風立ちぬ』4 [注釈 2]	
	第12回	堀 辰雄『風立ちぬ』5 [分析 1]	
	第13回	堀 辰雄『風立ちぬ』6 [分析 2]	
	第14回	堀 辰雄『風立ちぬ』7 [鑑賞 1]	
	第15回	堀 辰雄『風立ちぬ』8 [鑑賞 2]	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う前に作品ごとに小レポートを作成する。演習の発表担当回は、本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞などを整理したレジュメも作成し、受講生に配付する。		
テキスト	堀 辰雄『風立ちぬ』集英社文庫/堀 辰雄『菜穂子』岩波文庫		
参考文献	竹内清己 編『堀 辰雄事典』勉誠出版/池内輝雄 編「解釈と鑑賞」別冊『堀辰雄とモダニズム』至文堂/「文学」第14巻第5号、岩波書店/奥野健男『日本文学史—近代から現代へ—』中公新書/廣野由美子『批評理論入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』中公新書		
評価方法	発表・小レポート:40% 単位レポート:40% 質疑応答:20%		

日本文学演習 f		後期 2 単位	現代教養専攻
堀 辰雄の後期作品を読む		岡崎 直也（おかざき なおや）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>多人物が交渉する社会を描くべく堀は「菜穂子」で三人称叙述を採用するが、叙述主体による作品の全的な統御を汎神論的な自然描写によって慎重に退ける。モダニズム文学の推進者でもあった堀は、一方で、古人の生活に学びながら王朝小説を書きつぎ、自然と照応する身体感覚によって〈生〉を実感する「曠野」を執筆した。日本文化を背景に模索されたこれらの〈小説の方法〉の特質と可能性とを理解できる。</p>		
授業の概要	<p>堀辰雄の後期作品の演習発表（本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞など）を想定しているが、受講者数によっては講読形式の授業とすることもある。どちらの場合も、昭和中期の文学表現の特質について探究しつつ近・現代文学の研究方法を修得し、活発な質疑応答のなかで多角的思考を養うものとする</p>		
授業計画	第1回	授業概説・演習形式か講読形式かの選択	
	第2回	昭和文学史概説	
	第3回	堀 辰雄文学概説	
	第4回	堀 辰雄『菜穂子』1 [研究史1]	
	第5回	堀 辰雄『菜穂子』2 [研究史2]	
	第6回	堀 辰雄『菜穂子』3 [注釈1]	
	第7回	堀 辰雄『菜穂子』4 [注釈2]	
	第8回	堀 辰雄『菜穂子』5 [分析1]	
	第9回	堀 辰雄『菜穂子』6 [分析2]	
	第10回	堀 辰雄『菜穂子』7 [鑑賞1]	
	第11回	堀 辰雄『菜穂子』8 [鑑賞2]	
	第12回	堀 辰雄「曠野」1 [研究史]	
	第13回	堀 辰雄「曠野」2 [注釈]	
	第14回	堀 辰雄「曠野」3 [分析]	
	第15回	堀 辰雄「曠野」4 [鑑賞]	
準備学習 (予習・復習等)	<p>授業で扱う前に作品ごとに小レポートを作成する。演習の発表担当回は、本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞などを整理したレジュメも作成し、受講生に配付する。</p>		
テキスト	堀 辰雄『風立ちぬ』集英社文庫/堀 辰雄『菜穂子』岩波文庫		
参考文献	<p>竹内清己 編『堀 辰雄事典』勉誠出版/池内輝雄 編「解釈と鑑賞」別冊『堀辰雄とモダニズム』至文堂/「文学」第14巻第5号、岩波書店/奥野健男『日本文学史一近代から現代へー』中公新書/廣野由美子『批評理論入門ー「フランケンシュタイン」解剖講義』中公新書</p>		
評価方法	発表・小レポート:40% 単位レポート:40% 質疑応答:20%		

日本史特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
女性の歴史と現代社会		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治期以降激変した近現代日本の歴史的経過について女性の生き方の変化として捉え直し、さらに現代女性をめぐる諸問題について理解を深める。様々な考察を通して、各自のテーマを発見し、それぞれ調査・分析・検証結果を報告する。最終目標は自分の生き方についての大きな見取り図を描くこと。		
授業の概要	男女格差や少子化、婚活といった身近なテーマをはじめ、差別と同化、戦争と平和、グローバリゼーションと日本社会など、様々な観点を提示している日本近現代史や女性史の代表的文献から学ぶ。担当者の報告を中心に全員で討議を重ねる中で、現代社会の諸問題とその歴史的背景を把握する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	現代社会の課題探求①「日本」を考える	
	第3回	現代社会の課題探求② 女性をめぐる諸問題	
	第4回	現代社会の課題探求③「世界」を知る	
	第5回	文献読解の方法論① 「言いたいこと」を読み取る	
	第6回	文献読解の方法論② 自己のテーマの発見	
	第7回	文献読解の方法論③ 視点を変えてみる	
	第8回	文献読解の方法論④ 読み解く楽しさを知る	
	第9回	文献の講読と討論①	
	第10回	文献の講読と討論②	
	第11回	文献の講読と討論③	
	第12回	文献の講読と討論④	
	第13回	研究報告会①	
	第14回	研究報告会②	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する記述シートに授業やテキストなどの概要・要点をまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	『講座差別と人権』、浜林正夫『人権の思想史』、鹿野政直『現代日本女性史』などの中から話し合いの上で決定する。		
参考文献	授業時に随時紹介する		
評価方法	記述シート、報告など:50% レポート:50%		

日本史特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代日本探求		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	戦後の日本社会について多面的に考察するため、毎回テーマを設定し問題の所在を確認する。文献や映像をはじめ様々な資料を駆使して問題を歴史的観点から検証すること、主体的に現状の課題を見つけ考察し分析する力を養うことが目標である。議論を重ねる中で、単なる感想ではなく事実の正確な理解に基づいた自己の見解の深化をはかる。		
授業の概要	1945年に敗戦をむかえ世界秩序の再編とともに大きく変動した戦後の日本社会の諸問題を検証する。生活者の視点から、国家と国民、日本とアジア、日米関係、グローバリゼーションにおけるこれからの日本のあり方など様々な問題を多面的に検討し、現代日本社会の今日的課題を考察する力を鍛える。		
授業計画	第1回	戦後日本とGHQの民主化政策	
	第2回	東京裁判	
	第3回	日本国憲法の制定とその特質	
	第4回	占領政策の転換	
	第5回	朝鮮戦争	
	第6回	講和条約～日本の独立と国際関係	
	第7回	日米安保条約と国際情勢	
	第8回	高度経済成長と公害問題	
	第9回	ベトナム戦争	
	第10回	沖縄の日本復帰	
	第11回	戦後補償問題	
	第12回	靖国神社をめぐる問題の所在	
	第13回	まとめ	
	第14回	まとめ	
	第15回	総論	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で配布する記述シートに授業やテキストなどの概要・要点、自己の見解をまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	毎回資料プリントを配布する		
参考文献	講義内容に即して随時紹介する。		
評価方法	記述シート、報告など:50% レポート:50%		

社会学特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
現代社会の構造と現代人の生き方について社会学の観点から考察する		渡邊 良智 (わたなべ よしとも)	
授業の到達目標及びテーマ	私たちの生きている現代社会とはいかなる社会なのかを、様々な見方を検討することによって理解する。また、近年目立ってきた、生殖医療や臓器移植、尊厳死など生と死をめぐる新しい問題について検討することによって現代人の生き方についても考える。現代社会および現代人について、多様な見方を学ぶことにより、学生は現代社会に対する主体的批判的な見方を学ぶことができる。		
授業の概要	現代社会は、産業主義と民主主義を主導力として、近代社会の中から生まれてきた。いつから現代社会とするかについては、完全な合意はないものの、1980年代以降、冷戦体制の終わりとグローバリゼーションによって、新しい時代の到来が主張されている。この授業では、現代社会に対する様々な見方を取り上げて検討する。さらに、現代社会の生をめぐる諸問題についても検討する。参加者の人数によっては、講義形式ではなく、演習形式に切り替えて授業を行う。		
授業計画	第1回	近代社会から現代社会へ	
	第2回	高度資本主義社会	
	第3回	高度産業社会	
	第4回	都市社会	
	第5回	大衆社会	
	第6回	情報化社会	
	第7回	消費社会	
	第8回	格差社会	
	第9回	個人化、無縁社会	
	第10回	リスク社会	
	第11回	グローバル化社会	
	第12回	現代社会と生(1) 生殖医療	
	第13回	現代社会と生(2) 脳死と臓器移植	
	第14回	現代社会と生(3) ホスピスと尊厳死	
	第15回	まとめ	
準備学習(予習・復習等)	現代社会の特徴について関心をもって調べることが期待される。演習形式になった場合は、関心あるテーマを分担して調べ、その結果を要約してレジュメを作成し、発表することが要求される。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	井上俊・伊藤公雄編『社会の構造と変動(社会学リーディングス2)』(世界思想社) A・ギデンズ(松尾精文・小幡正敏訳)『近代とはいかなる時代か?』(而立書房) 見田宗介『現代社会の理論』(岩波書店)		
評価方法	授業参加度:50% 発表:20% 最終レポート:30%		

社会学特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
コミュニケーションとメディアの社会学		渡邊 良智 (わたなべ よしとも)	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちはケータイ、スマホ、パソコン、インターネットなどを利用して毎日大量の情報を送受信して情報化社会の中で生活している。この授業では、コミュニケーションやメディアの基本を踏まえてから、情報化社会の中核であるマスコミュニケーションの特徴と影響について、報道、ニュースを中心に検討する。この授業では、マスメディアの報道について批判的に検討することによって、現代人にとって生きるための必須アイテムと考えられる情報リテラシーを身につけることができる。		
授業の概要	まず、コミュニケーション、メディア、記号と意味、といったメディア論の基本について検討し、ついでマスコミュニケーションの機能を、報道とニュースを中心に検討する。とくにマスコミ報道の影響とマスコミ報道による人権侵害の問題を取り上げて検討する予定である。授業は、講義形式で行うが、参加人数によっては演習に切り替えて、参加者のレポートを中心に授業を進める。		
授業計画	第1回	コミュニケーション、メディア、記号、情報	
	第2回	メディアの発達史	
	第3回	パーソナルコミュニケーションとマスコミュニケーション	
	第4回	マスコミュニケーション制度	
	第5回	日本のマスコミュニケーションの特徴	
	第6回	ニュースと報道（1）国際報道	
	第7回	ニュースと報道（2）災害報道	
	第8回	ニュースと報道（3）医療・健康報道	
	第9回	マスコミ報道の影響（1）限定効果が強力効果か	
	第10回	マスコミ報道の影響（2）宣伝と世論操作	
	第11回	ニュースと報道（4）犯罪報道	
	第12回	マスコミ報道と人権侵害（1）名誉棄損	
	第13回	マスコミ報道と人権侵害（2）プライバシー侵害	
	第14回	マスコミ報道と人権侵害（3）被害からの救済	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	参加者は、コミュニケーション、メディア、情報化社会などに興味をもつことが期待される。演習形式になった場合は、テーマを選択して調べ、その結果を要約したレジュメを作って、発表することが要求される。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	ジェイムズ・グリック（楡井浩一訳）『インフォメーション-情報技術の人類史』（新潮社）梓澤和幸『報道被害』（岩波新書）読売新聞社編『「人権」報道』（中央公論新社）松村光晃・中村秀一編『名誉毀損・プライバシー』（ぎょうせい）		
評価方法	授業参加度:50% 発表:20% 最終レポート:30%		

民俗学 a		前期 2 単位	現代教養専攻
折口信夫の民俗学と東アジアの祭りと芸能 1		伊藤 好英 (いとう よしひで)	
授業の到達目標 及びテーマ	祭りは人類のみが行なう特異な行動であり、芸能をはじめとするさまざまな文化の源泉です。本講義では、折口信夫の民俗学と「祭り」との関連を考えながら、その視座から東アジアの祭りと芸能を具体的に考察します。		
授業の概要	「民俗学A」（前期）では、折口信夫の生涯と学問を概観したあと、その祭り論の視座から、日本の祭り・沖縄諸島の祭り・韓国の祭りを映像や文献をとおして考察します。 この講義の内容は「民俗学B」（後期）に引き繋がれます。		
授業計画	第1回	折口信夫の人と学問	
	第2回	柳田國男の祭り論	
	第3回	折口信夫の祭り論	
	第4回	日本の祭り（神楽1）	
	第5回	日本の祭り（神楽2）	
	第6回	日本の祭り（神楽3）	
	第7回	沖縄諸島の祭り（女性司祭者と神の森）	
	第8回	沖縄諸島の祭り（久高島の神人誕生の儀礼）	
	第9回	八重山諸島の祭り（仮面神が出現する男性の秘祭）	
	第10回	八重山諸島の祭り（豊饒をもたらすミルク神）	
	第11回	韓国済州島の祭り（島のシャーマンたち）	
	第12回	韓国済州島の祭り（シャーマンの語りと舞）	
	第13回	韓国の法師による祭り	
	第14回	折口信夫の学問と祭り	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	フィードバックシートに、授業内容をどう受け止めたかを記して、毎時間提出してもらいます。		
テキスト	プリントを配布します。		
参考文献	伊藤好英『折口学が読み解く韓国芸能』慶應義塾大学出版会、2006年。		
評価方法	学期末レポート:50% フィードバックシート:20% 授業態度:30%		

民俗学 b		後期 2 単位	現代教養専攻
折口信夫の民俗学と東アジアの祭りと芸能 2		伊藤 好英 (いとう よしひで)	
授業の到達目標 及びテーマ	祭りは人類のみが行なう特異な行動であり、芸能をはじめとするさまざまな文化の源泉です。本講義では、折口信夫の民俗学と「祭り」との関連を考えながら、その視座から東アジアの祭りと芸能を具体的に考察します。		
授業の概要	「民俗学B」（後期）では、折口信夫の芸能学の輪郭を概観したあと、日本・沖縄・韓国の芸能を映像や文献をとおして考察します。 本講義の内容は、「民俗学A」（前期）の内容を引き継ぐものです。		
授業計画	第1回	柳田國男の民俗学と芸能 1	
	第2回	柳田國男の民俗学と芸能 2	
	第3回	折口信夫の芸能史 1	
	第4回	折口信夫の芸能史 2	
	第5回	日本の仮面劇	
	第6回	沖縄の仮面劇	
	第7回	韓国の仮面劇	
	第8回	日本の人形劇	
	第9回	沖縄の人形劇	
	第10回	韓国の人形劇	
	第11回	日本の語り物	
	第12回	沖縄の語り物	
	第13回	韓国の語り物	
	第14回	折口信夫の芸能史が目指したもの	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	フィードバックシートに、授業内容をどう受け止めたかを記して、毎時間提出してもらいます。		
テキスト	プリントを配布します。		
参考文献	伊藤好英『折口学が読み解く韓国芸能』慶應義塾大学出版会、2006年。		
評価方法	学期末レポート:50% フィードバックシート:20% 授業態度:30%		

比較社会特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
文化とアイデンティティの政治		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>言語、宗教、芸能、芸術といった人間の文化的営みは、いつの時代も国家と結合し、国家によって支配の道具として利用され、とくに近代においては植民地支配のために動員されてきた。しかしその半面、それは国家による支配への抵抗の拠点として、人々が民族や集団のアイデンティティを保持する役割も担ってきた。この講義では、「文化とアイデンティティ」の問題を、日本、沖縄、朝鮮、アメリカ、ハワイなど、いくつかの地域に即し、またそれらの地域を比較しながら取り上げ、グローバル社会における「支配と自立」について考察していく。</p>		
授業の概要	<p>前半はおもに「支配」の観点から、国家の統合や植民地支配に文化がどのように利用され、機能してきたかを考察する。 後半はおもに「自立」の観点から、植民地支配からの独立やマイノリティーのアイデンティティ維持のために、文化が果たしてきた役割について議論する。</p>		
授業計画	第1回	講義全体の概要説明	
	第2回	日本における皇民道徳の形成	
	第3回	日本における国語の形成	
	第4回	戦時体制下の「日本精神」の位相	
	第5回	文明と野蛮—キリスト教による植民地支配	
	第6回	アメリカの「文化帝国主義」	
	第7回	ハングルと民族意識	
	第8回	日本の「民芸運動」とそのイデオロギー性	
	第9回	沖縄における「方言論争」	
	第10回	ハワイにおける文芸復興運動	
	第11回	アイヌ文化保護法とその背景	
	第12回	抵抗運動としての文化運動	
	第13回	民族教育権と多文化教育	
	第14回	マイノリティー文化政策の世界的潮流	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	課題について調査してもらうことがあります。		
テキスト	授業中に配布します。		
参考文献	授業中に指示します。		
評価方法	平常点:50% 期末レポート:50%		

比較社会特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
民主主義の比較社会論的考察		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	民主主義について比較社会論的に考察する。比較社会論的な考察をとおして、民主主義の歴史と原理の多様な側面に光を当てながら、現代社会における民主主義の課題を明らかにしていく。		
授業の概要	。近代的な政治原理としての民主主義は近代ヨーロッパにおいて生まれ、ヨーロッパとアメリカを中心に、さまざまな形態をとりながら発展してきた。民主主義にはどのような種類や形態が存在し、それらがどのような課題を担ってきたか、また、現代において民主主義はどのような問題に直面しているか、という点を中心に、ヨーロッパ、アメリカ、日本の3極で比較しながら議論していきたい。		
授業計画	第1回	授業概要の説明	
	第2回	民主主義の条件（1）—ワークショップ	
	第3回	民主主義の条件（2）—理論的分析	
	第4回	民主主義と多数者	
	第5回	民主主義とメディア	
	第6回	戦後民主主義と日米安保体制	
	第7回	特定秘密保護法の問題点	
	第8回	代議制民主主義の課題	
	第9回	ヨーロッパにおける民主主義の原理とその変質	
	第10回	民主主義における市民参加	
	第11回	民主主義の正当性	
	第12回	民主主義とインターネット	
	第13回	民主主義の条件としての社会と人間（1）—ヨーロッパ	
	第14回	民主主義の条件としての社会と人間（2）—日本	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	授業中に指示する。		
テキスト	授業中に配布する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:50% 期末レポート:50%		

比較社会特講 c		前期 2 単位	現代教養専攻
比較法律家論ーアメリカ合衆国の法律家		荒井 真（あらい まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカにおける法曹養成制度を理解する。 ・アメリカにおいてなぜ訴訟が多発し、日本においてはなぜ訴訟が少ないのか、その理由を理解する。 ・アメリカの陪審制度の仕組みについて理解する。 ・アメリカの裁判官の選出方法および法曹一元制度について理解する。 		
授業の概要	<p>本講義の中心は、比較法律家論である。すなわち、各国において法律家が果たす役割は異なっており、法秩序の主導権を握る法律家層も違っている。法律家という視角からメスを入れ、そのような差異を生んだ歴史的・社会的な背景・原因を考察していく。本講義では、とくにアメリカ合衆国の法律家を取り上げる。アメリカにおける法律家養成の方法、弁護士のある方の違い、裁判官の選出方法、法曹一元、裁判への市民参加（陪審制度）等について講義する。また、訴訟大国であるアメリカと訴訟小国である日本との比較を行い、なぜ訴訟数に大きな違いがあるのか、その原因について考察していく。映画などの映像資料も適宜用いる予定である。是非とも比較社会特講Dと併せて履修して欲しい。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクションー法圏・法系とは何か 英米法圏と大陸法圏	
	第2回	アメリカの法曹養成制度ーロールスクール	
	第3回	なぜアメリカは訴訟大国なのか	
	第4回	アメリカの弁護士 民事事件関連	
	第5回	アメリカの弁護士 民事事件関連	
	第6回	アメリカの弁護士 刑事事件関連	
	第7回	アメリカの陪審制度 陪審制度の仕組み	
	第8回	アメリカの陪審制度 メリット・デメリット	
	第9回	アメリカの陪審制度の実際	
	第10回	アメリカの検察官	
	第11回	アメリカの裁判官ー裁判制度	
	第12回	アメリカの裁判官ー連邦と州の裁判官	
	第13回	アメリカの裁判官ー法曹一元	
	第14回	アメリカの法学教授	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業に関連する書籍や映画を適宜指示するので、それを読み、観てくること。		
テキスト	特になし。適宜プリントを配布する。		
参考文献	丸田隆『陪審裁判を考えるー法廷にみる日米文化比較』（中公新書、1990年）；丸山徹『入門・アメリカの司法制度ー陪審裁判の理解のために』（現代人文社、2007年）；樋口範雄『はじめてのアメリカ法 補訂版』（有斐閣、2013年）		
評価方法	期末試験:60% 課題等:40%		

比較社会特講 d		後期 2 単位	現代教養専攻
比較法律家論—イギリス・ドイツ・日本の法律家		荒井 真（あらい まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・イギリス、ドイツ、日本における法曹養成制度を理解する。 ・ドイツの参審制度および日本の裁判員制度について理解する。 ・ドイツ、日本の裁判官の選出方法について理解する。 ・日本における最高裁事務総局の裁判官コントロールについて知る。 		
授業の概要	<p>本講義の中心は、比較法律家論である。法律家という視角からメスを入れ、各社会における法律家の役割について考察していく。本講義では、英米法圏に属するイギリスおよび大陸法圏に属するドイツ、日本の法律家を取り上げる。各国における法律家養成の方法、弁護士・検察官の役割、裁判官の選出方法、裁判への市民参加（参審制度および裁判員制度）等について講義していく。その際、自主・独立性の高いドイツの裁判官と最高裁事務総局の隠然たる監督下にある日本の裁判官を比較し、あるべき裁判官像についても考察していく。映画などの映像資料も適宜用いる予定である。是非とも比較社会特講Dと併せて履修して欲しい。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション—法圏・法系とは何か。英米法圏と大陸法圏	
	第2回	イギリス法の歴史と特徴	
	第3回	イギリスにおける法曹養成制度	
	第4回	イギリスの弁護士—バリスタとソリシタ	
	第5回	弁護士二分制度のメリットとデメリット	
	第6回	イギリスの裁判官—イギリスの裁判制度	
	第7回	イギリスの裁判官—法曹一元	
	第8回	ドイツの統治制度概観	
	第9回	ドイツにおける法曹養成制度	
	第10回	ドイツの参審制度の仕組み	
	第11回	ドイツの参審制度とアメリカの陪審制度の比較	
	第12回	ドイツの裁判官—市民に開かれた親切的な裁判官	
	第13回	日本の裁判官と最高裁事務総局	
	第14回	日本の裁判員制度	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業に関連する書籍や映画を適宜指示するので、それを読み、観てくること。		
テキスト	特になし。適宜プリントを配布する。		
参考文献	<p>齋藤哲『市民裁判官の研究』（信山社出版、2001年）；木佐茂男『人間の尊厳と司法権—西ドイツ司法改革に学ぶ』（日本評論社、1990年）；西川伸一『日本司法の逆説』（五月書房、2005年）；新藤宗幸『司法官僚 裁判所の権力者たち』（岩波新書、2009年）；瀬木比呂志『絶望の裁判所』（講談社現代新書、2014年）</p>		
評価方法	期末試験:60% 課題等:40%		

日本文化史 a		前期 2 単位	現代教養専攻
日本美術と出会う—古代から中世へ—		成原 有貴 (なりはら ゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本の古代・中世美術の流れをたどり、代表的作品の意味や制作事情が理解できるようになる。</p> <p>○アジア世界の中での日本美術の歴史と動向をとらえ、自己と他者の文化について考える力を養う。</p> <p>○教室でのパワーポイントによる画像の映写(毎回)や、キャンパス近隣の美術館の展示見学(授業時間内を利用し、1~2回実施予定)を通して、日本美術に親しみ、作品に対する理解を深めることができる。</p> <p>○美術作品が、古代・中世の社会のなかで、身分や性差とどのように関わりながら生み出されたかを学ぶことで、作品の社会的意義や機能がよりよくわかる。</p>		
授業の概要	<p>縄文時代から平安時代までの美術の歴史について講義します。絵画・工芸・仏像などの、各時代の代表的作品を多様にとりあげ、主題や表現、作品に込められた意味を詳しく解説しながら、歴史的展開を辿ります。作品の意味や魅力を新たに発見し、日本美術がわかる楽しみを体験します。授業ではまた、個々の作品がどのような階級・性別・地域の人びとによって、なぜ制作されたのかを、作品がつくられた当時の社会・文化の状況を視野に入れ、考えていきます。</p>		
授業計画	第1回	はじめに 授業の進め方・作品との向き合い方	
	第2回	縄文・弥生・古墳時代—土器・土偶・壁画—	
	第3回	縄文・弥生・古墳時代—土器・土偶と現代アート—	
	第4回	美術館見学	
	第5回	美術館見学の感想とグループ学習	
	第6回	飛鳥・白鳳時代 仏教美術の展開①法隆寺と玉虫厨子	
	第7回	飛鳥・白鳳時代 美術の諸相—高松塚古墳壁画とキトラ古墳壁画—	
	第8回	奈良時代 仏教美術の展開②東大寺大仏と興福寺阿修羅像	
	第9回	奈良時代 アジア世界における日本—正倉院宝物—	
	第10回	平安時代 仏教美術の展開③密教美術	
	第11回	平安時代 仏教美術の展開④平等院鳳凰堂	
	第12回	平安時代 絵巻の魅力—「源氏物語絵巻」と「伴大納言絵巻」—	
	第13回	平安時代 華麗なるかざりの世界—装飾とその意味—	
	第14回	平安時代 和歌と絵画・工芸	
	第15回	まとめ 日本美術の特質について	
準備学習 (予習・復習等)	見学会の際には、作品鑑賞の感想を提出すること。授業時の配布プリントや参考文献の該当箇所などを読み、復習すること。		
テキスト	特に指定しません。毎回、授業の要点を記したプリントを配布します。		
参考文献	山岡泰造監修『日本美術史』昭和堂、1998年。 日高薫『日本美術のこぼれ』小学館、2003年。 辻惟雄・泉武夫・山下裕二・板倉聖哲編『日本美術全集』小学館、2012年～。		
評価方法	授業感想文:50% 期末試験:50%		

日本文化史 b		後期 2 単位	現代教養専攻
日本美術と出会う—中世から近世へ—		成原 有貴 (なりはら ゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本の中世・近世美術の流れをたどり、代表的作品の意味や制作事情が理解できるようになる。</p> <p>○アジアや西洋との関わりのなかで、日本美術の歴史と動向をとらえ、自己と他者の文化について考える力を養う。</p> <p>○教室でのパワーポイントによる画像の映写(毎回)や、キャンパス近隣の美術館の展示見学(授業時間内を利用し、1~2回実施予定)を通して、日本美術に親しみ、作品に対する理解を深めることができるようになる。</p> <p>○美術作品が、身分や性差とどのように関わりながら生み出されたかを学ぶことで、作品の社会的意義や機能がよりよくわかる。</p>		
授業の概要	<p>鎌倉時代から江戸時代までの美術の歴史について講義します。絵画・工芸・仏像などの、各時代の代表的作品を多様にとりあげ、主題や表現、作品に込められた意味を詳しく解説しながら、歴史的展開を辿ります。作品の意味や魅力を新たに発見し、日本美術がわかる楽しみを体験します。授業ではまた、個々の作品がどのような階級・性別・地域の人びとによって、なぜ制作されたのかを、作品がつくられた当時の社会・文化の状況を視野に入れ、考えていきます。</p>		
授業計画 美術	第1回	はじめに 授業の進め方・作品との向き合い方	
	第2回	鎌倉時代 肖像画—人の姿をめぐるさまざまな表現—	
	第3回	鎌倉時代 仏教美術の諸相—地獄絵と浄土図—	
	第4回	鎌倉時代 神道美術—宮曼荼羅と影向図—	
	第5回	鎌倉時代 物語絵巻と縁起絵巻	
	第6回	美術館見学	
	第7回	美術館見学の感想とグループ学習	
	第8回	室町時代 水墨画の世界	
	第9回	室町時代 やまと絵屏風と御伽草子絵	
	第10回	室町時代 狩野派と土佐派	
	第11回	安土桃山時代 西洋との出会い—「南蛮美術」—	
	第12回	江戸時代 琳派の系譜—俵屋宗達と尾形光琳—	
	第13回	江戸時代 風俗画と浮世絵	
	第14回	江戸時代 奇想と写生—伊藤若冲と円山応挙—	
	第15回	まとめ：日本美術の多面性について	
準備学習 (予習・復習等)	見学会の際には、作品鑑賞の感想を提出すること。授業時の配布プリントや参考文献の該当箇所などを読み、復習すること。		
テキスト	特に指定しません。毎回、授業の要点を記したプリントを配布します。		
参考文献	<p>山岡泰造監修『日本美術史』昭和堂、1998年。</p> <p>日高薫『日本美術のこぼれ』小学館、2003年。</p> <p>辻惟雄・泉武夫・山下裕二・板倉聖哲編『日本美術全集』小学館、2012年～。</p>		
評価方法	授業感想文：50% 期末試験：50%		

身体表現 a		前期 2 単位	現代教養専攻
日本の舞踊・民俗舞踊・子どもの身体表現		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現の基礎、舞踊の特徴、表現形式を比較しつつ、日本の舞踊文化と現代社会での表現形式や流行について探求します。 ○ 日本の地域社会の芸能や舞踊は、衰退の一途をたどってきていますが、地域社会は子どもの心と体を大いに育ててきました。現在、どのように取り組まがなされているのか、例をあげ、そこから学ぶことは何かを検証します。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現・身体活動について理解を深めるために、文献を読むとともに実践しながら体得していきます。 ○ 身体表現や身体活動についての取り組みや枠組みについて具体的事例を挙げながら検討します。 ○ 幼稚園における身体表現の事始は、保育唱歌と遊戯でした。その後ダンス（フォークダンス）も入り、子どもの心と体の育ちをはぐくんできました。現在に至るまでに子どものリズムと身体感覚、表現力をどう育ててきたのかを探ります。 		
授業計画	第1回	授業の概要	
	第2回	身体表現の基礎 1：文献の検討	
	第3回	身体表現の基礎 2：具体的事例の検討	
	第4回	身体表現の基礎 3：具体的事例の検討	
	第5回	日本の舞踊文化 1：日本の舞踊文化について	
	第6回	日本の舞踊文化 2：日本の舞踊文化について	
	第7回	日本の舞踊文化 3：日本の舞踊文化について	
	第8回	子どもの身体表現活動 1：子どもの豊かな身体表現や身体活動を導き出すために	
	第9回	子どもの身体表現活動 2：具体的事例に検討	
	第10回	子どもの身体表現活動 3：具体的事例の検討	
	第11回	民俗舞踊 1：民俗舞踊について	
	第12回	民俗舞踊 2：具体的事例の検討	
	第13回	民俗舞踊 3：具体的事例の検討	
	第14回	民俗舞踊 4：具体的事例の検討	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	身体表現についての具体的事例を調査したり、表現方法について実践したり、紹介し合ったりしてもらいます。		
テキスト	特に定めません。		
参考文献	授業内で紹介します。		
評価方法	積極的授業参加:50% 課題への取り組み:30% レポートなど課題提出:20%		

キリスト教学特講 a		後期 2 単位	現代教養専攻
キリスト教死生学		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	死を巡る諸問題についてキリスト教の立場を基本として考察し、死を学問し、死を見つめる姿勢と心を整えることが目標。他宗教、他文化における死の諸相、葬儀、死生学、震災、放射能等現代の課題をも考察し、さらに生命倫理、医療倫理なども課題として、多角的アプローチをとおして「死への準備教育」を行う。		
授業の概要	家庭・地域・文化的背景を基に、各自の死生観がどのようなものかを問うことから始め、講義のみならず、ディスカッション、ゲストスピーカーとの対話、フィールドワーク、サービ斯拉ーニング等をとおして豊かな死と豊かな生について考察を深める。		
授業計画	第1回	あなたの死生観	
	第2回	日本における死	
	第3回	旧約聖書における生と死	
	第4回	新約聖書における生と死	
	第5回	仏教死生観	
	第6回	イスラム死生観	
	第7回	ライフステージと死①子ども	
	第8回	ライフステージと死②青年期	
	第9回	ライフステージと死③壮年期	
	第10回	ライフステージと死④高齢期	
	第11回	死別体験①—癒しと看取り	
	第12回	死別体験②—グリーフワーク	
	第13回	「3.11」が問うもの	
	第14回	エンディング・ノート作成①	
	第15回	エンディング・ノート作成②	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の新聞朝刊(社は問わない)1面と社説を読んでくること。 各家庭の宗教的背景、特に冠婚葬祭について調べてくること。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会) 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』(日本キリスト教団出版局)		
参考文献	授業中に指示		
評価方法	授業への参加態度・授業感想文:50% 期末レポート:50%		

英語学演習 a		前期 2 単位	現代教養専攻
認知言語学入門		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「ことば」は人間のみが持っている高度はコミュニケーション手段であり、そのことばの分析は人間の“mind”の解明の一つの方法であると考え。本講座では「ことば」とは何かについて理論言語学の一つである「認知言語学」の枠組みに基づいて考えていく。多くの「なぜ」を無意識から意識上にのぼらせ、受講者と一緒に考えていくことを目標としている。		
授業の概要	日英語の言語事象を具体的に分析していくことにより、「認知言語学」の基本的な考え方そして分析手法を学ぶ。毎回ディスカッション“Food for thought”を行う。受講生の興味に基づき、さまざまな「寄り道」も楽しみたい。		
授業計画	第1回	Handout A: イントロダクション: なぜ言語研究?	
	第2回	認知言語学と生成文法における言語観	
	第3回	認知言語学の考え方	
	第4回	恣意性・有縁性: 日英語のオノマトペ	
	第5回	類似性・身体性: 日英語のメタファー	
	第6回	隣接性・参照点能力: 日英語のメトニミー	
	第7回	Handout B: プロトタイプカテゴリー	
	第8回	百科事典的意味論	
	第9回	ゲシュタルト	
	第10回	ベースとプロファイル・際立ち	
	第11回	事例研究①: 日英語のテンスとアスペクト(1)	
	第12回	日英語のテンスとアスペクト(2)	
	第13回	事例研究②: 日英語の移動動詞(1)	
	第14回	日英語の移動動詞(2)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題レポートの提出を数回求める		
テキスト	特定のテキストは用いず担当者のプレゼンテーションにて進める。プリントを配布する。英和辞書・A4サイズバインダーを必ず持参のこと。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	期末レポート:60% 課題・議論:40%		

英語学演習 b		後期 2 単位	現代教養専攻
認知言語学		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	「ことば」は人間のみが持っている高度はコミュニケーション手段であり、そのことばの分析は人間の“mind”の解明の一つの方法であると考え。本講座では「ことば」とは何かについて理論言語学の一つである「認知言語学」の枠組みに基づいて考えていく。多くの「なぜ」を無意識から意識上にのぼらせ、受講者と一緒に考えていくことを目標としている。		
授業の概要	日英語について「構文」をキーワードに日英語の言語事象を認知言語学の枠組みで分析していく。次いで、日英語の好みとは何かを考える。毎回ディスカッション“Food for thought”を行う。時間が許せば、認知言語学の分析手法を学んだあとは文献を輪読する。		
授業計画	第1回	Handout C: 認知言語学の言語観・用法基盤モデル	
	第2回	構文文法: 英語二重目的語構文①	
	第3回	構文文法: 英語二重目的語構文②	
	第4回	構文文法: 英語結果構文	
	第5回	構文文法: 日本語結果構文	
	第6回	Handout D: アクション・チェーン 英語自動詞文と英語中間構文①	
	第7回	アクション・チェーン 英語自動詞文と英語中間構文②	
	第8回	アクション・チェーン: 日本語中間構文	
	第9回	アクション・チェーン: 英語能動文と英語受動文①	
	第10回	アクション・チェーン: 英語能動文と英語受動文②	
	第11回	アクション・チェーン: 日本語受動文	
	第12回	日本語受動文・英語結果構文・使役構文の比較	
	第13回	Handout E: 言語と思考 サピアウオーフの仮説	
	第14回	日英語の好み 「するめ」英語と「なるめ」日本語	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題レポートの提出を数回求める。		
テキスト	特定のテキストは用いず担当者のプレゼンテーションを進める。プリントを配布する。英語辞書とA4サイズバインダーを必ず持参のこと。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	期末レポート:60% 課題・議論:40%		

英語学演習 c		前期 2 単位	現代教養専攻
第二言語習得入門		宮越 智子 (みやこし ともこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語教育の視点から第二言語習得研究を概観し、第二言語習得理論とそれに関する方法論について理解する。はじめに、第一言語獲得について学び、第一言語獲得と第二言語習得の類似点と相違点について考察する。次に、言語習得についての理論的アプローチについて理解し、第二言語習得研究の方法論、対照分析、誤り分析、言語運用分析等、最近の動向や、日本人の英語学習に示唆が得られる文献も扱いながら、学習者言語について検討する。更に、言語習得における個人差や、社会的要因等について理解し、今後の研究課題、効果的な英語教授法や言語運用能力を高める英語教材の開発について考察する。		
授業の概要	基本的に講義形式で授業を進めるが、受講生の積極的な授業参加を期待する。また、講義内容理解の確認と、クリティカルな思考を訓練するために、随時ショートエッセイを中心とした課題の提出を求める。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	First language acquisition	
	第3回	Behaviorist, innatist, and interactionist perspectives	
	第4回	Language disorders, delays, and childhood bilingualism	
	第5回	Contrastive analysis, error analysis, and interlanguage	
	第6回	Developmental sequences in second language learning	
	第7回	Vocabulary, pragmatics, and phonology	
	第8回	Research on learner characteristics: intelligence, language learning aptitude, learning styles, personality, motivation, etc.	
	第9回	Individual differences and classroom instruction	
	第10回	Age and second language instruction	
	第11回	Behaviorist, innatist, and cognitive perspectives on second language learning	
	第12回	Sociocultural perspective on second language learning	
	第13回	Natural and instructional settings	
	第14回	Classroom observation schemes	
	第15回	Wrap-up and Review	
準備学習 (予習・復習等)	配布プリントを元に、毎回授業の復習をしっかりと行うこと。		
テキスト	Lightbown, P. & N. Spada. (2013). How Languages are Learned (Fourth Edition). Oxford: Oxford University Press.		
参考文献	授業中に随時紹介する。		
評価方法	試験:50% 課題:40% 授業参加:10%		

英語学演習 d		後期 2 単位	現代教養専攻
心理言語学		宮越 智子 (みやこし ともこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	人はどのようにして言語を獲得するのか。動物は言語を獲得できるのか。言語と精神、文化はどうかかわるのか。第二言語習得はどうかされるのか。言語と脳はどう関係しているのか。言語心理学の立場から考察し、理解を深める。		
授業の概要	基本的に講義形式で授業を進めるが、受講生の積極的な授業参加を期待する。また、講義内容理解の確認のショートエッセイを中心とした課題の提出を求める。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	How Children Learn Language	
	第3回	The Deaf and Language: Sign, Oral, Written	
	第4回	Reading Principles and Teaching	
	第5回	Wild and Isolated Children and the Critical Age Issue for Language Learning	
	第6回	Animals and Language Learning	
	第7回	Children vs. Adults in Second Language Learning	
	第8回	Second Language Teaching Methods	
	第9回	Bilingualism and Intelligence	
	第10回	Transfer and Learning Strategies	
	第11回	Language, Thought and Culture	
	第12回	Where Does Language Knowledge Come From? Intelligence, Innate Language Ideas, Behavior?	
	第13回	Natural Grammar, Mind and Speaker Performance	
	第14回	Language and the Brain	
	第15回	Wrap-up and Review	
準備学習 (予習・復習等)	配布プリントを元に、毎回授業の復習をしっかりと行うこと。		
テキスト	初回授業で提示する。		
参考文献	授業中に随時紹介する。		
評価方法	試験:50% 課題:40% 授業参加:10%		

実用英語演習 a		前期 2 単位	現代教養専攻
CNNで学ぶリスニング		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>1) CNN News を教材として、英米や世界各地のauthentic な英語に触れて、実用的なリスニング能力を高めること。</p> <p>2) 時事英語を教材として、実用的な語彙力、表現力を高めること。</p> <p>3) 実用的なリスニング能力、語彙・表現力を高めることを通して、TOEICの得点力を伸ばすこと。</p>		
授業の概要	CNN News を使って穴埋めなどのリスニング活動を行う。さらにニュースで使われている重要な語彙、表現、文法について説明し、ニュースの背景についても解説する。毎回リスニングや単語の小テストを行い、着実な英語習得を図る。		
授業計画	第1回	Introduction: リスニングの学習方法について	
	第2回	Unit 1 Lessons to be learned	
	第3回	Unit 2 Staying Away	
	第4回	unit 4 No More Home Work	
	第5回	Unit 5 Looking for the Right Word	
	第6回	Unit 6 Think before You "Like"	
	第7回	最近のCNN News	
	第8回	前半のまとめと中間テスト	
	第9回	Unit 7 Setting a New Standard	
	第10回	Unit 8 Only Hillary Knows	
	第11回	Unit 9 A Truly Green Solution	
	第12回	Unit 10 A Hot Idea That' s Working	
	第13回	Unit 11 Java Comes to India	
	第14回	Unit 12 Filling a Need, Very Well	
	第15回	後半のまとめと期末テスト	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習として、次の授業で取り上げるUnit の語彙問題をやってくこと。</p> <p>授業後は、付属のCDを使って、授業で取り上げたニュースを3回以上聴き、授業で学んだ語彙・表現を復習し、小テストの準備をしておくこと。</p>		
テキスト	English for the Global Age with CNN Vol.15、朝日出版、2014年		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	小テスト:40% 中間テスト:30% 期末テスト:30%		

実用英語演習 b		後期 2 単位	現代教養専攻
英字新聞で学ぶ実用英語		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標及びテーマ	<p>1) 政治・経済・ビジネス・文化・教育・科学・歴史といった様々なジャンルの新聞記事を読み、実用的な読解能力、語彙力を高めること。</p> <p>2) 実用的な読解能力、語彙力を高めることを通して、TOEICの得点力を伸ばすこと。</p>		
授業の概要	<p>毎回1つの記事を取り上げ、その記事のポイントと背景を解説する。次に、記事の中で使われている重要な語彙・文法を説明しつつ、記事の内容を正確に把握する。毎回語彙や文法に関する小テストを行い、着実な英語習得を図る。</p>		
授業計画	第1回	Introduction 英語読解能力と語彙力を高める方法	
	第2回	Unit 1 日本の若者の間で留学熱再燃	
	第3回	Unit 2 TDL30周年、魅力の秘密	
	第4回	Unit 4 アジア系は賢すぎて米一流大学で入学者数制限？	
	第5回	Unit 6 「宝島」キプロスのトラウマ	
	第6回	Unit 7 インド対中国対エジプト	
	第7回	Unit 8 米国の収入格差拡大の背景	
	第8回	前半のまとめと中間テスト	
	第9回	Unit 14 「アベノミクス」始動	
	第10回	Unit 16 インドネシア女性のバイクの乗り方	
	第11回	Unit 17 米国の国境警備	
	第12回	Unit 19 地政学とシュールガス革命	
	第13回	Unit 21 古文書が語るイスラム帝国時代のユダヤ人	
	第14回	Unit 22 クローン技術と幹細胞でノーベル賞	
	第15回	後半のまとめと期末テスト	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習として、授業で取り上げる新聞記事を読み、語彙問題を解いておくこと。</p> <p>授業後は、授業で取り上げた新聞記事をもう一度読みなおし、語彙・文法を確認し、次回の小テストの準備をしておくこと。</p>		
テキスト	English through the News Media - 2014 Edition、朝日出版、2014年		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	課題:20% 中間テスト:40% 期末テスト:40%		

実用英語演習 c		前期 2 単位	現代教養専攻
日英／英日逐次通訳演習		梅 佳代（うめ かよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>日英語の逐次通訳演習を通じて英語の実践的運用能力を向上させる。 通訳の仕事に興味のある人、または仕事で使える基礎的に通訳スキルを獲得したい人向け。 これまでに勉強してきた英語を実際に使えるものにするための訓練。 言語運用能力以外にも、日英語の発想の違い、表現方法の違いに着目し、幅広いコミュニケーション能力の向上を目指す。</p>		
授業の概要	<p>日英語の逐次通訳演習。 音読、リストラクチャー、パラフレーズ、シャドーイング、サイトトランスレーション、ノートテイク。 本年度は英語の音読に力を入れ毎回音読を行う。 ニュース素材、プレゼンテーション素材などできるだけ生の音声／映像を教材として使用する。 授業のほとんどは講義ではなく演習。 試験は行わず授業中のパフォーマンスを重視する。</p>		
授業計画	第1回	イントロー通訳とは	
	第2回	音読	
	第3回	英語リプロダクション	
	第4回	英語パラフレーズ	
	第5回	英語サイトトランスレーション	
	第6回	英語ノートテイク	
	第7回	英日逐次通訳①	
	第8回	英日逐次通訳②	
	第9回	英日逐次通訳③	
	第10回	英日逐次通訳④	
	第11回	英日逐次通訳⑤	
	第12回	英日逐次通訳⑥	
	第13回	英日逐次通訳⑦	
	第14回	英日逐次通訳⑧	
	第15回	英語プレゼンテーション	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で出される1ページ程度の英文記事を読み込んでくること。		
テキスト	毎回プリントを配布		
参考文献	毎回プリントを配布		
評価方法	授業でのパフォーマンス:70% プレゼンテーション:20% 夏休み課題:10%		

実用英語演習 d		後期 2 単位	現代教養専攻
日英／英日逐次通訳演習		梅 佳代（うめ かよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>日英語の逐次通訳演習を通じて英語の実践的運用能力を向上させる。 通訳の仕事に興味のある人、または仕事で使える基礎的に通訳スキルを獲得したい人向け。 これまでに勉強してきた英語を実際に使えるものにするための訓練。 言語運用能力以外にも、日英語の発想の違い、表現方法の違いに着目し、幅広いコミュニケーション能力の向上を目指す。</p>		
授業の概要	<p>日英語の逐次通訳演習。 音読、リストラクチャー、パラフレージング、シャドーイング、サイトトランスレーション、ノートテキング。 本年度は英語の音読に力を入れ毎回音読を行う。 ニュース素材、プレゼンテーション素材などできるだけ生の音声／映像を教材として使用する。 授業のほとんどは講義ではなく演習。 試験は行わず授業中のパフォーマンスを重視する。</p>		
授業計画	第1回	イントロ	
	第2回	音読	
	第3回	日本語リプロダクション	
	第4回	日本語パラフレージング	
	第5回	日本語サイトトランスレーション	
	第6回	日本語ノートテキング	
	第7回	日英逐次通訳①	
	第8回	日英逐次通訳②	
	第9回	日英逐次通訳③	
	第10回	日英逐次通訳④	
	第11回	日英逐次通訳⑤	
	第12回	日英逐次通訳⑥	
	第13回	日英逐次通訳⑦	
	第14回	日英逐次通訳⑧	
	第15回	日本語プレゼンテーション	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で出される1ページ程度の英文記事を読み込んでくること。		
テキスト	毎回プリントを配布		
参考文献	毎回プリントを配布		
評価方法	授業でのパフォーマンス:70% プレゼンテーション:20% 冬休み課題:10%		

米文学演習 a		前期 2 単位	現代教養専攻
チカーノ研究入門：チカーノ(メキシコ系米国人)が語るアメリカ南西部/サウスウエストの物語		齋藤 修三 (さいとう しゅうぞう)	
授業の到達目標及びテーマ	21世紀米国のラテン化を推し進めるヒスパニック系(ラティーノ)。その中核をなすチカーノについて歴史・文学・映画等を通じて学ぶ。褐色の二級市民とされ米国史の闇に埋もれてきたチカーノマイノリティの資料を読みながら、豊かな「北」と貧しい「南」、英語とスペイン語、同化主義と多文化主義など支配と従属が内部でせめぎ合う「混血・雑種の声」を聴き取りつつ、それがどのような問題を現代日本社会に投げかけるか理解する。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・メールリポート講評 ・キーワード解説 ・テキスト資料(英語・日本語)をリポーターが分担、レジュメを用いて報告 ・自由討議 ・シネマ倶楽部プレゼンテーション(グループごとに担当映画について論じてもらう) 		
授業計画	第1回	導入～絵本に見るチカーノたち	
	第2回	絵本～歴史導入	
	第3回	歴史(～米墨戦争)	
	第4回	歴史(～現代)	
	第5回	映画『ミ・ファミリア』	
	第6回	同化主義の功罪(米国内ナショナリズム、racism, classism, sexism) 特に男性学の視点から	
	第7回	チカーノのマチズモ～中間レポート要項説明	
	第8回	公民権運動～多文化主義・エスニックナショナリズムの功罪	
	第9回	言語論争(AV資料)	
	第10回	言語論争～ポストコロナルな視点から	
	第11回	言語論争～自由討議	
	第12回	シネマ倶楽部	
	第13回	シネマ倶楽部～中間レポート講評	
	第14回	シネマ倶楽部～期末レポート要項説明	
	第15回	まとめ	
準備学習(予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習：次回読む資料を精読し質問やコメント準備 2. 復習：メールリポート 前回までの授業内容に関連した質問・コメント等、あるいはこちらで指定したテーマについて1パラグラフ(200~300字)で自由記述 3. リポーターはレジュメ含む報告準備 4. シネマ倶楽部 グループごとにレジュメとプレゼン準備 		
テキスト	プリントをこちらで準備		
参考文献	随時紹介		
評価方法	中間、期末レポート:50% 担当者レポート:10% プレゼンテーション:10% メールリポート:20% 討議貢献度など平常点:10%		

米文学演習 b		後期 2 単位	現代教養専攻
ラティーノ・ラティーナ表象文化研究入門		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期の米文学演習 a（チカーノ研究入門）を基礎とし、今日のアメリカ文化をますますラテン化するラティーノ表象文化の諸相を学ぶ。まずチカーノ・ラティーナ（女性）フェミニズムの展開を押さえる。それを踏まえつつ、次に文学、アート、音楽など表象文化を通じてラティーノ的自然観や死生観を考察。最後に国境に自閉する国民国家の論理を超えて、南北アメリカ大陸や第三世界をも視野に入れたラティーノ流「草の根」グローバリズムについて理解する。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・メールリポート講評 ・キーワード解説 ・テキスト資料（英語・日本語）をリポーターが分担、レジュメを用いて報告 ・自由討議 ・ブック倶楽部プレゼンテーション（個人・グループごとに担当資料について論じてもらう） 		
授業計画	第1回	導入～絵本にみるチカーナの少女	
	第2回	絵本～チカーノ公民権運動前後の女性たち	
	第3回	チカーノ女性学	
	第4回	チカーノフェミニズムと白人中流女性フェミニズム	
	第5回	第三世界（有色女性）フェミニズム	
	第6回	中間レポート要項説明	
	第7回	映画『ガール・ファイト』	
	第8回	自由討議～自然・風土	
	第9回	風土・死生観	
	第10回	ブック倶楽部プレゼン～チカーノ・アート	
	第11回	ブック倶楽部プレゼン～チカーノ・アート	
	第12回	ブック倶楽部プレゼン～チカーノ音楽	
	第13回	ブック倶楽部プレゼン～ラティーノ音楽	
	第14回	チカーノラティーノ・アート・アクティヴィズム	
	第15回	まとめ（絵本に戻りつつ）～期末レポート要項説明	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習：次回読む資料を精読し質問やコメント準備 2. 復習：メールリポート 前回までの授業内容に関連した質問・コメント、あるいはこちらで指定したテーマについて1パラグラフ（200～300字）で自由記述 3. リポーターはレジュメ含む報告準備 4. ブック倶楽部 個人・グループごとにレジュメとプレゼン準備 		
テキスト	プリントをこちらで準備		
参考文献	随時紹介		
評価方法	中間・期末レポート:50% 担当者レポート:10% プレゼンテーション:10% メールレポート:20% 討議貢献度など 平常点:10%		

米文学演習 c		前期 2 単位	現代教養専攻
アメリカ 1920年代 (Jazz Age) とフランス・スコット・フィッツジェラルド		宮内 華代子 (みやうち かよこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	『グレート・ギャツビー』(1925)の作者として知られるフィッツジェラルドの作家作品研究を行う。 作品の時代背景を学び、同じく「ロスト・ジェネレーション」の代表作家であるE・ヘミングウェイとの関連を知り、 作品のテーマを理解し、彼の文学の特質を学ぶ。		
授業の概要	講義と並行して学生による発表、質疑応答によって作品を読みすすめ、添削指導を行う。作品の重要テーマを探り、 創作技法を学んで、彼の文学の面白さを突きとめる。Jazz Age あるいはRoaring 20's と呼ばれる繁栄と狂乱の1920年 代、世界大恐慌の大打撃を被った30年代の時代の様相が作品にどのように取り込まれているかを考察する。ロスト・ ジェネレーションと呼ばれる一群の作家たちの中でもいち早く第一次世界大戦後の文壇に登場したために、この世代の 旗手となり、ヘミングウェイと共に、20世紀アメリカ文学を代表する作家となった所以を明確にする。		
授業 計画	第1回	イントロダクション 発表のためのレポート作成方法	
	第2回	フィッツジェラルドの生涯と作品との関連	
	第3回	Winter Dreams 作中人物と伝記上のモデル 作品のテーマ	
	第4回	生い立ち、結婚、一人娘スコッティー	
	第5回	作品の様々なテーマ 恋愛、上流社会、東西の対立、	
	第6回	時代背景 第一次世界大戦、Jazz Age、世界大恐慌	
	第7回	ロスト・ジェネレーション	
	第8回	娘への手紙集 学業、職業、結婚相手、母親ゼルダ	
	第9回	創作方法と技法	
	第10回	ヘミングウェイとの絆	
	第11回	スクリブナーズ編集者 M. パーキンス	
	第12回	S・ピーチとシェイクスピア書店	
	第13回	パリ時代・ハリウッド時代(シナリオライターとして)	
	第14回	『グレート・ギャツビー』DVD鑑賞	
	第15回	まとめ 残された課題	
準備学習 (予習・復習等)	読む面白さ、研究の楽しさがわかるようになるまで日ごろから作品を深く読むように心がける。 授業でとりあげる作品の該当箇所を前もって丁寧に予習して読んでから授業に出席すること。 発表者にたいして質問ができるように充分予習して授業に臨むこと。 レポート作成のためにテーマをさだめ、積極的に研究にとりくむこと。		
テキスト	Winter Dreams(研究社) Fitzgerald's Letters to his Daughter(三修社)		
参考文献	A. Turnbull, Scott Fitzgerald(Scribner's Sons) F. L. Allen, Only Yesterday(Harper)		
評価方法	平常点:40% 発表:20% レポート:40%		

米文学演習 d		後期 2 単位	現代教養専攻
アメリカ1920年代 (Jazz Age) と アーネスト・ヘミングウェイ		宮内 華代子 (みやうち かよこ)	
授業の到達目標及びテーマ	『老人と海』、『武器よさらば』などの作者として知られるヘミングウェイの作家・作品研究を行う。作品の時代背景を学び、同じくロスト・ジェネレーションの代表作家であるフィッツジェラルドとの関連を知り、作品のテーマを理解し、彼の文学の特質を学ぶ。		
授業の概要	講義と並行して学生による発表、質疑応答によって作品を読みすすめ、添削指導を行う。彼が生きた時代の様相が作品にどのように取り込まれているかを考察する。数々のエピソードに彩られた波瀾万丈の生涯と主要作品について講じる。小説と併行して研究書、伝記、手紙集も読み進めながら、作品の重要テーマを探り、「ハードボイルド・スタイル」、「冰山理論」を始め、駆使されている様々な技法について学ぶ。ロスト・ジェネレーションと呼ばれる一群の作家たちの中でも、アメリカ文学を世界的に通用する高い水準にひきあげるのにもっとも貢献したノーベル賞作家の文学の魅力を突き止める。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ヘミングウェイの生涯と作品との関連	
	第3回	Indian Camp	
	第4回	レポート作成のための様々なテーマ	
	第5回	ハードボイルド・スタイル、冰山理論	
	第6回	Cat in the Rain	
	第7回	ロスト・ジェネレーション	
	第8回	パリ時代 著名人たちとの交友、ヨーロッパの影響	
	第9回	The Undefeated	
	第10回	編集者M・パーキンズ S・ビーチとシェイクスピア書店	
	第11回	フィッツジェラルドとの絆 出会い、友情、創作への互いの影響	
	第12回	女性観 4人の妻をモデルにした作品	
	第13回	Soldier's Home 戦争体験と戦争観、『武器よさらば』『たがために鐘は鳴る』	
	第14回	『武器よさらば』DVD鑑賞	
	第15回	まとめ 今後の課題	
準備学習(予習・復習等)	読む面白さ、研究の楽しさがわかるようになるまで、ひごろから作品を深く読むように心がける。授業でとりあげる作品の該当箇所をまえもって丁寧に予習して読んでから、授業に出席すること。発表者にたいして質問ができるように充分予習して授業に臨むこと。レポート作成のためにテーマをさだめ、積極的に研究にとりくむこと。		
テキスト	The Killers & Other Stories (南雲堂) Letters between Fitzgerald & Hemingway (ダイナミックセラーズ)		
参考文献	C. Baker, Ernest Hemingway (Scribner's) S. Beach, Shakespeare & Company (Univ. of Neb.) F. L. Allen, Only Yesterday (Harper)		
評価方法	通常点:40% 発表:20% レポート:40%		

英文学演習 a		前期 2 単位	現代教養専攻
19世紀前半イギリス詩講読		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	19世紀前半のイギリス詩人とその作品について理解を深める。また、同時代の歴史的文化的背景について知識を深めると同時に、それらと詩との結びつきについて考える力を身につける。		
授業の概要	19世紀前半、すなわちロマン主義からヴィクトリア朝盛期にかけての時代を代表するイギリス詩人を、毎回ひとり取り上げ、受講者からその生涯と作品の特徴、および比較的読みやすい詩の訳読・解釈を発表してもらう一方、ほかの代表作について講読を行う。なお、後半にはイギリス詩に大きな影響を与えたアメリカ詩人も取り上げる。		
授業計画	第1回	イントロダクション：19世紀前半イギリス史概観	
	第2回	Romantic poets: William Blake	
	第3回	Romantic poets: William Wordsworth	
	第4回	Romantic poets: Samuel Taylor Coleridge	
	第5回	Romantic poets: George Gordon Byron	
	第6回	Romantic poets: Percy Bysshe Shelley	
	第7回	Romantic poets: John Keats	
	第8回	Major Victorian poets: Alfred Tennyson	
	第9回	Major Victorian poets: Robert Browning	
	第10回	Major Victorian poets: Elizabeth Browning	
	第11回	Major Victorian poets: Matthew Arnold	
	第12回	Novelist poet: Emily Bronte	
	第13回	American poets: Henry Wadsworth Longfellow	
	第14回	American poets: Edgar Allan Poe	
	第15回	American poets: Walt Whitman	
準備学習 (予習・復習等)	予習：文学事典などを利用してその回で取り上げる詩人の生涯と特徴を調べてくる。課題となる詩を自分なりに読解してみる。 復習：講義を参考に、各作品についてどのような批評的アプローチが可能かを考察し、メモを作る。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	『研究社英米文学事典』、磯田光一『イギリス・ロマン派詩人』、矢野峰人『ヴィクトリア朝の詩』、高橋裕子・高橋達史『ヴィクトリア朝万華鏡』、ほか随時紹介する。		
評価方法	発表：15% 平常点：15% 期末レポート：70%		

英文学演習 b		後期 2 単位	現代教養専攻
19世紀後半イギリス詩講読		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	19世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリス詩人とその作品について理解を深める。また、同時代の歴史的文化的背景について知識を深めると同時に、それらと詩との結びつきについて考える力を身につける。		
授業の概要	19世紀中頃から世紀末にかけて、唯美主義の系譜に位置づけられるイギリス詩人を中心に、その作品を取り上げ、受講者からその生涯と作品の特徴、および比較的読みやすい詩の訳読・解釈を発表してもらい一方、ほかの代表作について講読を行う。最後には、第一次大戦期の詩人を取り上げ、「長い19世紀」の詩の歴史について改めて考えたい。		
授業計画	第1回	イントロダクション：19世紀後期イギリス史概観	
	第2回	Pre-Raphaelite poets: Dante Gabriel Rossetti	
	第3回	Pre-Raphaelite poets: Christina Rossetti	
	第4回	Pre-Raphaelite poets: William Morris	
	第5回	Pre-Raphaelite poets: Algernon C. Swinburne	
	第6回	Nonsense poets: Lewis Carroll	
	第7回	Nonsense poets: Edward Lear	
	第8回	Fin-de-Siecle poets: Oscar Wilde, Aubrey Beardsley	
	第9回	Fin-de-Siecle poets: Ernest Dowson	
	第10回	Fin-de-Siecle poets: Arthur Symonds, Richard Le Gallienne, Alfred Douglas	
	第11回	Fin-de-Siecle poets: William Butler Yeats	
	第12回	New Women Writers: Olive Schreiner, Michael Field, Amy Levy	
	第13回	Edwardian and Georgian Poets: Rudyard Kipling, John Masefield, Walter de la Mare	
	第14回	War poets: Rupert Brooke, Wilfred Owen	
	第15回	まとめ：「長い19世紀」イギリス詩再考	
準備学習 (予習・復習等)	予習：文学事典などを利用してその回で取り上げる詩人の生涯と特徴を調べてくる。課題となる詩を自分なりに読解してみる。 復習：講義を参考に、各作品についてどのような批評的アプローチが可能かを考察し、メモを作る。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	『研究社英米文学事典』、矢野峰人『世紀末英文学史』、齋藤貴子『ラファエル前派の世界』、ほか随時紹介する。		
評価方法	発表：15% 平常点：15% 期末レポート：70%		

英文学演習 c		前期 2 単位	現代教養専攻
20世紀イギリス文学を読む 『ドリトル先生物語』		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	主にヒュー・ロフティングによる児童文学の傑作『ドリトル先生物語』（1922-）の精読を通じて、ヴィクトリア朝イギリス社会の諸問題を考察するとともに英語の読解力、文脈を補う想像力を養う。		
授業の概要	文化史に関する講義を積みながらテキストを輪読する。後半では各自が教員が指定する同ジャンルの作品群（①『ジャングル・ブック』、②『黒馬物語』、③『くまのプーさん』、④『たのしい川べ』）から任意の作品を選び担当発表を行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	講義1 ヴィクトリア朝イギリスの社会背景	
	第3回	講義2 ヴィクトリア朝イギリスの思想と文化	
	第4回	テキスト講読第1回 Chapter 1-4	
	第5回	テキスト講読第2回 Chapter 5-8	
	第6回	テキスト講読第3回 Chapter 9-12	
	第7回	テキスト講読第4回 Chapter 13-16	
	第8回	美術館訪問	
	第9回	テキスト講読第5回 Chapter 17-20	
	第10回	テキスト講読第6回 Foreword, Afterword	
	第11回	担当発表第1回 ①グループ	
	第12回	担当発表第2回 ②グループ	
	第13回	担当発表第3回 ③グループ	
	第14回	担当発表第4回 ④グループ	
	第15回	前期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の該当エピソードを各自読んで授業にのぞむこと。 また後半の担当発表では、各自任意の作品を選び、あらすじ・みどころ・疑問点などをレジュメにまとめ、プレゼンテーションを準備すること。		
テキスト	Hugh Lofting, <i>The Story of Dr. Dolittle</i> (Red Fox Classics)		
参考文献	南条竹則『ドリトル先生の英国』（文春新書、2001）		
評価方法	担当発表:40% 期末レポート:60%		

英文学演習 d		後期 2 単位	現代教養専攻
20世紀イギリス文学精読・続 『ドリトル先生物語』		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	主にヒュー・ロフティングによる児童文学の傑作『ドリトル先生物語』（1922-）の精読を通じて、ヴィクトリア朝イギリス社会の諸問題を考察するとともに英語の読解力、文脈を補う想像力を養う。		
授業の概要	文化史に関する講義を挿みながら『ドリトル先生物語』と同ジャンルのテキストを輪読する。学期末にはレポートを提出する必要があり、それに向けて各自が読みを深める。適宜論文作成指導を行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	テキスト講読第1回 『ジャングル・ブック』①	
	第3回	テキスト講読第2回 『ジャングル・ブック』②	
	第4回	テキスト講読第3回 『ジャングル・ブック』③	
	第5回	テキスト講読第4回 『黒馬物語』①	
	第6回	テキスト講読第5回 『黒馬物語』②	
	第7回	テキスト講読第6回 『黒馬物語』③	
	第8回	テキスト講読第7回 『たのしい川べ』①	
	第9回	テキスト講読第8回 『たのしい川べ』②	
	第10回	テキスト講読第9回 『たのしい川べ』③	
	第11回	論文作成指導第1回 アウトラインの確認	
	第12回	論文作成指導第2回 参考文献の引用・典拠記載方法他	
	第13回	論文作成指導第3回 内容についての質疑応答	
	第14回	期末レポート提出準備	
	第15回	期末レポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の該当エピソードを各自読んで授業にのぞむこと。 また後半では各自任意の作品を選び、期末課題に向けて読解を深めること。		
テキスト	Hugh Lofting, <i>The Story of Dr. Dolittle</i> (Red Fox Classics)		
参考文献	南条竹則『ドリトル先生の英国』（文春新書、2001）		
評価方法	講読担当:40% 期末課題提出:60%		

社会史（米国） a		前期 2 単位	現代教養専攻
アメリカ黒人の歴史から「人種」を考える		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標及びテーマ	植民地時代から、南北戦争や公民権運動を経て、現代にいたるまでのアメリカ黒人の歴史の大まかな流れを理解する。そのほかの人種／エスニック集団の経験も織り交ぜながら、「人種」は自明でも不変でもなく、特定の社会状況によって作り出され、作り変えられる社会構築物であることを理解する。		
授業の概要	テキストを輪読しながら、関連する一次資料を読み、分析する。プレゼンテーションやディスカッションへの参加を通じて、積極的に授業に貢献することが求められる。		
授業計画	第1回	はじめに	
	第2回	植民地時代の奴隷制度	
	第3回	独立革命	
	第4回	南部の綿花帝国	
	第5回	奴隷制廃止運動	
	第6回	南北戦争	
	第7回	南部再建からカラー・ラインへ	
	第8回	近代黒人解放運動	
	第9回	ハーレム・ルネサンス	
	第10回	大恐慌と第二次世界大戦	
	第11回	公民権闘争の開幕	
	第12回	黒人革命	
	第13回	白人保守革命の時代	
	第14回	多様化する黒人社会	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	テキストを予め読んでから講義に参加する。英語の史料を使用するので、わからない単語など辞書をひいて各自で復習すること。		
テキスト	本田創造『アメリカ黒人の歴史 新版』（岩波新書）、上杉忍『アメリカ黒人の歴史：奴隷貿易からオバマ大統領まで』（中公新書)		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% 期末試験:40%		

社会史（米国） b		後期 2 単位	現代教養専攻
セクシュアリティから見たアメリカ社会		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	植民地期から現代にいたるまでのアメリカ合衆国のセクシュアリティの歴史を扱う。性をめぐる考え方が、それぞれの歴史的状況においてどのように変化してきたのかを理解する。また、セクシュアリティの統制と、人種・階級・ジェンダーのヒエラルキー維持の結びつきを学ぶ。		
授業の概要	論文（英語、日本語）の講読を踏まえて、関連する一次資料を分析する。プレゼンテーションやディスカッションへの参加を通じて、授業に積極的に貢献することが求められる。		
授業計画	第1回	はじめに：社会構築物としてのセクシュアリティ	
	第2回	「新世界」における異なるセクシュアリティの出会い	
	第3回	植民地時代の性の統制	
	第4回	奴隷制下のセクシュアリティ	
	第5回	19世紀における同性間の愛情と親密性	
	第6回	フリー・ラブと検閲	
	第7回	異人種間結婚禁止法	
	第8回	デート文化の登場	
	第9回	再生産をめぐる政治	
	第10回	「異性愛」の創出	
	第11回	冷戦とセクシュアリティ	
	第12回	性革命	
	第13回	バックラッシュ	
	第14回	同性婚	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題テキストを予め読んで講義に参加すること。論文・史料ともに英語で書かれたものを使用することもあるため、わからない単語を辞書で引いて確認するなど、予習・復習を各自で行うこと。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	Kathy Peiss, ed., <i>Major Problems in the History of American Sexuality</i> (Houghton Mifflin, 2002); Elizabeth Reis, ed., <i>American Sexual Histories</i> (Wiley-Blackwell, 2012)		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% 期末試験:40%		

社会史（英国） a		前期 2 単位	現代教養専攻
近代イギリス女性史を学ぶ		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ジェンダーという切り口から近代イギリスの社会史をとらえ直す意義を理解する。</p> <p>○近代イギリスの女性たちがどのような生き方を求められ、どのようにして活動の幅を広げていったのかを具体的に理解する。</p> <p>○プレゼンテーションや自由な討論を通じて、アカデミックな思考力を鍛えるとともに豊かなコミュニケーションの力を身につける。</p>		
授業の概要	<p>18世紀から19世紀ごろまでのイギリス社会史を、女性史・ジェンダー史の側面から検討する。まず、女性史・ジェンダー史という比較的新しい視点からの歴史叙述の意義とその方法論について概説する。その上で、フェミニズム論の誕生、近代家族の形成、教育制度の進展、政治参加への道のりといったトピックスをとおして、近代イギリス女性史にたいする理解を深める。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	イギリス近代史概説	
	第3回	ジェンダーという視点からみたイギリス近代史	
	第4回	フェミニズム論の形成（1）メアリ・ウルストンクラフト	
	第5回	フェミニズム論の形成（2）J・S・ミルとハリエット・テイラー	
	第6回	『プライドと偏見』：19世紀初頭のイギリスと女性	
	第7回	家族と教育（1）ヴィクトリア時代の家族と女性	
	第8回	家族と教育（2）ガヴァネスとしての女性	
	第9回	家族と教育（3）女性の中等教育	
	第10回	『秘密の花園』：19世紀後半のイギリスと女性	
	第11回	家族と教育（4）女性の高等教育	
	第12回	女性と政治（1）チャーティスト運動と女性	
	第13回	女性と政治（2）ヴィクトリア女王	
	第14回	女性と政治（3）女性参政権運動の展開	
	第15回	『ヴィクトリア女王：世紀の愛』：若きヴィクトリア女王	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○全員が予習してくることを前提として、テキストの輪読を行う。レポーターによる発表やディスカッションなど、学生の積極的な参加が求められるので、事前にテキストの該当部分を熟読して、内容をよく理解しておくこと。</p> <p>○レポーターになった回では、各自が適宜、追加の説明や語句の解説を加えながら内容を要約し、論点を提示した上で、パワーポイントによるプレゼンテーションを行う。かなりの事前学習が求められるので、計画的に準備を進めておくこと。</p>		
テキスト	河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』（青木書店、2006年）		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% レポート:40%		

社会史（英国）b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代イギリス女性史を学ぶ		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ジェンダーという切り口から現代イギリスの社会史をとらえ直す意義を理解する。</p> <p>○現代イギリスの女性たちがどのような生き方を求められ、どのようにして活動の幅を広げていったのかを具体的に理解する。</p> <p>○プレゼンテーションや自由な討論を通じて、アカデミックな思考力を鍛えるとともに豊かなコミュニケーションの力を身につける。</p>		
授業の概要	<p>19世紀末から20世紀半ばごろまでのイギリス社会史を、女性史・ジェンダー史の側面から検討する。まず、女性史・ジェンダー史という比較的新しい視点からの歴史叙述の意義とその方法論について概説する。その上で、女性労働の変遷、慈善・福祉への関わり、帝国支配との関係といったトピックスをとおして、現代イギリス女性史にたいする理解を深める。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	イギリス現代史概説	
	第3回	ジェンダーという視点からみたイギリス現代史	
	第4回	女性と労働（1）既婚女性の労働	
	第5回	女性と労働（2）工場法の歴史とジェンダー	
	第6回	慈善と社会福祉（1）チャリティと女性	
	第7回	慈善と社会福祉（2）家族・中間団体・国家	
	第8回	慈善と社会福祉（3）オクタヴィア・ヒル	
	第9回	『カレンダー・ガールズ』：女性と慈善	
	第10回	大英帝国と女性（1）女性の帝国経験	
	第11回	大英帝国と女性（2）戦争と看護職の改革	
	第12回	『スカートの翼ひろげて』戦争と女性	
	第13回	大英帝国と女性（3）海を渡る女教師	
	第14回	第二次世界大戦・現代のイギリス女性	
	第15回	女性史からジェンダー史へ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○全員が予習してくることを前提として、テキストの輪読を行う。レポーターによる発表やディスカッションなど、学生の積極的な参加が求められるので、事前にテキストの該当部分を熟読して、内容をよく理解しておくこと。</p> <p>○レポーターになった回では、各自が適宜、追加の説明や語句の解説を加えながら内容を要約し、論点を提示した上で、パワーポイントによるプレゼンテーションを行う。かなりの事前学習が求められるので、計画的に準備を進めておくこと。</p>		
テキスト	河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』（青木書店、2006年）		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% レポート:40%		

比較文化特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
「愛」の比較思想史		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「愛」をテーマとして、日本における「恋」と「愛」、儒教の「仁」、プラトンの「エロース」、「雅歌」、新約聖書における「愛」などを理解し、比較する。		
授業の概要	和歌、「論語」、「饗宴」、新旧約聖書、「トリスタン・イーズー物語」などを読んできて、話し合う。		
授業計画	第1回	「愛」という言葉について	
	第2回	旧約聖書の「雅歌」の背景	
	第3回	「雅歌」についてのディスカッション	
	第4回	儒教の「仁」について	
	第5回	仏教の「慈悲」について	
	第6回	ソクラテスとプラトンについて	
	第7回	「饗宴」の構造	
	第8回	「饗宴」の登場人物	
	第9回	「饗宴」のなかの意見	
	第10回	「饗宴」におけるソクラテス	
	第11回	新約聖書における「愛」	
	第12回	中世ヨーロッパの騎士道と「愛」	
	第13回	「トリスタン・イーズー物語」の登場人物	
	第14回	「トリスタン・イーズー物語」における「愛」	
	第15回	「愛」についてのディスカッション	
準備学習 (予習・復習等)	予習：指定されているテキストを読んで出席する。 復習：課題についてレポートを書く。		
テキスト	新旧約聖書、プラトン「饗宴」、「トリスタン・イーズー物語」、その他。		
参考文献	図書館の蔵書のなかから紹介する。		
評価方法	議論参加:50% レポート:50%		

比較文化特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
欧米人の日本紀行をととしての比較文化		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	来日した欧米人の日本旅行記を読み、異文化間の理解の問題、世界の中の日本文化、日本文化の連続性と変化について考える。		
授業の概要	講義と演習形式を。 配布したテキストを読み、話し合う。		
授業計画	第1回	世界の中の日本について	
	第2回	フランシスコ・ザビエルの書簡を読む	
	第3回	ヴァリヤーノ「日本巡察記」	
	第4回	フロイス「ヨーロッパ文化と日本文化」	
	第5回	フロイス「日本史」	
	第6回	さまざまな来日宣教師の日本観	
	第7回	日本人とヨーロッパ文化	
	第8回	日本人とキリスト教	
	第9回	江戸時代の世界情勢	
	第10回	ケンペルの江戸参府旅行	
	第11回	ツェンペリーと日本人の交際	
	第12回	新井白石の西洋観	
	第13回	蘭学	
	第14回	シーボルト	
	第15回	朝鮮通信使と雨森芳州	
準備学習 (予習・復習等)	指定された文章を読んでくること。 課題について文章を書いてくること。		
テキスト	「フランシスコ・ザビエル全書簡」ほか、配布する。		
参考文献	図書館蔵書のなかから紹介する。		
評価方法	授業参加・議論:50% レポート、発表:50%		

比較文化特講 c		前期 2 単位	現代教養専攻
英文解釈と漢文訓読		古田島 洋介 (こたじま ようすけ)	
授業の到達目標及びテーマ	現代の日本人が実践している英文解釈は、実のところ、日本人が伝統的に実践してきた漢文訓読という外国語受容方法を歴史的・文化的な背景としている。両者の関係を具体的な知識として学び、明確に意識することにより、日本人の英文に対する理解の問題点を歴史的な脈絡のなかで認識できるようになる。		
授業の概要	日本人が本格的に英語を学び始めた明治初期の英語学習書を主たる素材として、日本人が漢文訓読を下敷きとして英語を学んだ事実を明らかにし、その各種の問題点を探究する。また、当時の英語学習の痕跡が今日の英和辞典などにも残存していることを確認してゆく。		
授業計画	第1回	日本人と外国語との接触：日本人の外国語学習略史	
	第2回	外国語学習システムとしての漢文訓読（1）語順の問題	
	第3回	外国語学習システムとしての漢文訓読（2）訳語の問題	
	第4回	江戸時代におけるオランダ語の学習：「蘭学」の一側面	
	第5回	明治期における英語学習（1）基盤としての「漢学」	
	第6回	明治期における英語学習（2）語順の問題：返り点と数字番号	
	第7回	明治期における英語学習（3）訳語の問題：漢文「句形」の応用	
	第8回	明治期における英語学習（4）置き字としての「冠詞」	
	第9回	明治期における英語学習（5）再読文字としての「関係代名詞」	
	第10回	まとめ（1）：明治期における英語学習と漢文訓読	
	第11回	現行の英和辞典に見る漢文訓読の痕跡（1）副詞の訳し方	
	第12回	現行の英和辞典に見る漢文訓読の痕跡（2）成句の訳し方	
	第13回	現行の英和辞典に見る漢文訓読の痕跡（3）関係代名詞の訳し方	
	第14回	まとめ（2）：現行の英文解釈と漢文訓読	
	第15回	最終まとめ＋質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	常日ごろ、あるいは授業が進行する過程で、英文解釈または漢文訓読について疑問に感ずることがあれば、確実にメモを取って授業中に質問し、積極的に疑問点の解消を図ること。つまらぬ質問ではないかと懸念する必要はまったくない。		
テキスト	特定のテキストは用いず。必要な教材は、すべてプリントで配付する。		
参考文献	古田島洋介・湯城吉信『漢文訓読入門』（明治書院）。その他は必要に応じて授業中に紹介する。		
評価方法	筆記試験：90% 積極性：10%		

比較文化特講 d		後期 2 単位	現代教養専攻
日本人と漢詩		古田島 洋介 (こたじま ようすけ)	
授業の到達目標及びテーマ	日本人にとって、漢詩は、中国という外国で誕生した詩の一形式であると同時に、自らの心情を吐露したり、実見した景物を詠じたりする自国の詩の一形式でもあった。その事実を十全に理解することにより、漢詩が日本文学および日本文化の一角を占める重要な詩の形式であったことを明確に認識できるようになる。		
授業の概要	中国の韻文の一たる漢詩の略史を講じ、次いで、常に日本の和歌・俳句などとの比較を念頭に置きながら、漢詩がどのような規則に従って作られているのかを丁寧に解説してゆく。最終的には、日本漢文学史についても知識を深めてもらい、日本人にとって漢詩はどのような存在であったのか、その歴史的な意義とともに、今日的な意義にも言及する。		
授業計画	第1回	中国韻文学略史：詩・詞・曲	
	第2回	日本韻文学略史：和歌・俳句・漢詩	
	第3回	漢詩（近体詩）の規則（1）詩形	
	第4回	漢詩（近体詩）の規則（2）句式	
	第5回	漢詩（近体詩）の規則（3）絶句・律詩の構成	
	第6回	漢詩（近体詩）の規則（4）平仄〈1〉平仄とは何か？	
	第7回	漢詩（近体詩）の規則（5）平仄〈2〉平仄式とは何か？	
	第8回	漢詩（近体詩）の規則（6）押韻〈1〉韻目とは何か？	
	第9回	漢詩（近体詩）の規則（7）押韻〈2〉韻字とは何か？	
	第10回	漢詩（近体詩）の規則（8）対句	
	第11回	漢詩（近体詩）の諸規則の確認（1）絶句	
	第12回	漢詩（近体詩）の諸規則の確認（2）律詩	
	第13回	漢詩（近体詩）の諸規則の確認（3）排律	
	第14回	日本人にとっての漢詩：日本文学における位置付け	
	第15回	まとめ＋質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	漢詩（近体詩）の規則を詳しく学ぶのは、一生のうち最初で最後の機会だと思って授業に臨んでほしい。したがって、授業後、少しでも理解の行き届かぬ場面があれば、確実にメモを取って、必ず次回の授業で質問し、積極的に疑問点の解消を図ること。つまらぬ質問ではないかと懸念する必要はまったくない。		
テキスト	特定のテキストは用いず。必要な教材は、すべてプリントで配付する。 ただし、必ず漢和辞典を用意せよ。〔例〕小川環樹ほか〔編〕『新字源』（角川書店） 初回の授業に自身の漢和辞典を持参し、その可否について教員の指示を受けること。		
参考文献	特に指定せず。必要に応じて授業中に紹介する。		
評価方法	筆記試験：90% 積極性：10%		

比較芸術特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
先史-17世紀のフランス美術		伊藤 巳令 (いとう みれい)	
授業の到達目標 及びテーマ	先史から17世紀までのフランス美術の代表的な作例に親しむ。フランス美術の特質を理解し、視覚芸術の研究方法を学ぶことで、他の領域との比較研究に役立つ知識を得る。		
授業の概要	前期は、先史時代から17世紀までのフランスの美術を扱います。(1) 南フランスに残る先史時代の洞窟壁画、ケルト美術、ガロ・ロマンの文化、(2) 中世のキリスト教美術、(3) ルネサンスとイタリア様式の吸収、(4) バロックと古典主義		
授業計画	第1回	ガイダンス 授業の概要、準備の仕方、展覧会の紹介など	
	第2回	先史時代の洞窟壁画	
	第3回	ケルト美術	
	第4回	ローマ美術とガロ・ロマン	
	第5回	中世の装飾写本	
	第6回	ロマネスク建築	
	第7回	ゴシック建築	
	第8回	後期ゴシックの絵画	
	第9回	イタリアルネサンスとフランス美術	
	第10回	フォンテーヌブロー派	
	第11回	フランス・バロックの絵画 1 自然主義的傾向	
	第12回	フランス・バロックの絵画 2 ポローニャ派の影響	
	第13回	フランス古典主義	
	第14回	ヴェルサイユ宮殿	
	第15回	試験	
準備学習 (予習・復習等)	美術館で作品を見たり、建築物を訪ねたりする経験を積んでください。予習・復習・レポート課題についてはCoursePowerを活用したいと考えています。		
テキスト	特になし		
参考文献	『世界美術大全集』小学館 『フランス近世美術叢書Ⅰ～Ⅳ』ありな書房 高階秀爾『フランス絵画史』講談社学術文庫		
評価方法	出席点:50% 試験:50%		

比較芸術特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
18-20世紀のフランス美術		伊藤 巳令 (いとう みれい)	
授業の到達目標 及びテーマ	18-20世紀のフランス美術の代表的な作例に親しむ。フランス美術の特質を理解し、視覚芸術の研究方法を学ぶことで、他の領域との比較研究に役立つ知識を得る。		
授業の概要	後期は、18世紀から20世紀のフランス美術の代表的な画家と、いくつかの特徴的なトピックスを扱います。(1) ロココ美術、(2) 近世・近代の複製文化、(3) 19-20世紀の絵画		
授業計画	第1回	ガイダンス 授業の概要、準備の仕方、展覧会の紹介など	
	第2回	ロココ美術 建築	
	第3回	アントワヌ・ヴァトー	
	第4回	フランソワ・ブーシェ	
	第5回	18世紀の風俗画	
	第6回	フランスの版画	
	第7回	革命期のカリカチュア	
	第8回	新古典主義	
	第9回	ロマン主義	
	第10回	エキゾチズム	
	第11回	19世紀の版画と写真	
	第12回	自然主義	
	第13回	マネと印象派	
	第14回	印象派以降	
	第15回	試験	
準備学習 (予習・復習等)	展覧会に行き作品を実際にみること。予習・復習・レポート課題にはCoursePowerを活用したいと考えています。		
テキスト	特になし		
参考文献	『世界美術大全集』小学館 『フランス近世美術叢書Ⅰ～Ⅳ』ありな書房 高階秀爾『フランス絵画史』講談社学術文庫		
評価方法	出席:50% 試験:50%		

比較言語論 a		前期 2 単位	現代教養専攻
日本語と英語の比較対照		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	まず語とその音声、意味、文字および語を構成する要素(形態素)に関する基本的な事柄を確認し、その上でそれらに関して日本語と英語がどのように異なっているかを、言語に関する情報の宝庫である日本と英語圏の辞書の記述内容を比較対照することによって検討します。それにより、語および形態素に関する日本語と英語の相違が理解できるようになり、さらには辞書を効果的に利用できるようになり、異文化間コミュニケーションの言語的側面も強化できるようになります。		
授業の概要	基本的にはこの授業で扱う様々なテーマごとにグループワークを行い、グループの代表者がその結果を発表し、担当教員が補足や解説・説明をする、という形式で授業をするようになります。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	語とは何か(グループワーク)	
	第3回	語とは何か(補足と解説)	
	第4回	形態素とは何か(グループワーク)	
	第5回	形態素とは何か(補足と解説)	
	第6回	語を表す音声(グループワーク)	
	第7回	語を表す音声(補足と解説)	
	第8回	語の意味(グループワーク)	
	第9回	語の意味(補足と解説)	
	第10回	語を表す文字(グループワーク)	
	第11回	語を表す文字(補足と解説)	
	第12回	語に見られるセクシズム	
	第13回	擬声語・擬態語	
	第14回	語の造り方	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく考えておいて下さい。		
テキスト	テキストは使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜、授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:30% 授業への参加度:30% レポート:40%		

比較言語論 b		後期 2 単位	現代教養専攻
日本語と英語の比較対照		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	文の構成要素としての語、語を組み合わせる文を作る基になる文法、文構造を決定する動詞、文を作る際の発想法、文の意味、文法上のセクシズムなどに関する日本語と英語の相違を、言語に関する情報の宝庫である日本と英語圏の辞書を参照しつつ、詳細に検討します。それにより、語およびそれよりも大きな単位に関する日本語と英語の相違が体系的に理解でき、さらに効果的な辞書の利用法を身に付け、異文化間コミュニケーションの言語的側面を強化することもできるようになります。		
授業の概要	この授業で扱う様々なテーマごとにグループワークを行い、各グループの代表者がその結果を発表し、担当教員が補足や解説・説明をする、という形式で授業を進めることとなります。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	文の構成要素としての語(グループワーク)	
	第3回	文の構成要素としての語(補足と解説)	
	第4回	文法(名詞と代名詞に関するグループワーク)	
	第5回	文法(名詞と代名詞に関する補足と解説)	
	第6回	文法(動詞に関するグループワーク)	
	第7回	文法(動詞に関する補足と解説)	
	第8回	発想法(グループワーク)	
	第9回	発想法(補足と解説)	
	第10回	文の意味(グループワーク)	
	第11回	文の意味(補足と解説)	
	第12回	文法上のセクシズム	
	第13回	辞書項目の執筆(執筆作業)	
	第14回	辞書項目の執筆(発表と講評)	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく考えておいて下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜、授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:30% 授業への参加度:30% レポート:40%		

比較宗教論 a		前期 2 単位	現代教養専攻
世界諸宗教の歴史と形成		豊川 慎（とよかわ しん）	
授業の到達目標 及びテーマ	今日の世界の諸文化を深く理解するためには、それらの基底にある諸宗教理解が不可欠です。歴史上、世界の様々な地域において多様な宗教が発生し、形成、展開されてきました。本講義では、世界の多様な宗教伝統を比較宗教および宗教史的観点から概観し、世界諸宗教の歴史的展開と形成に関する基本的知識を得ることによって、世界の諸文化を宗教的観点から深く理解することを授業の到達目標とします。		
授業の概要	ニニアン・スマート（阿部美哉訳）『世界の諸宗教1—秩序と伝統』（教文館、1999年）をテキストとして、その内容を一章ごとに、DVDやパワーポイントを用いながら講義・解説をしていきます。		
授業計画	第1回	イントロダクションー比較宗教学について	
	第2回	原始宗教	
	第3回	南アジアの宗教	
	第4回	中国の宗教	
	第5回	日本の宗教	
	第6回	東南アジアの宗教	
	第7回	太平洋地域の宗教	
	第8回	南北アメリカの宗教	
	第9回	古代近東の宗教	
	第10回	ペルシャと中央アジアの宗教	
	第11回	ギリシャ・ローマの宗教世界	
	第12回	古代・中世のキリスト教とユダヤ教	
	第13回	古代・中世のイスラーム	
	第14回	古代アフリカの諸宗教	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業毎に紹介する参考文献や配付資料をもとに各自授業内容を予習復習してください。		
テキスト	テキストとして、ニニアン・スマート（阿部美哉訳）『世界の諸宗教1—秩序と伝統』（教文館、1999年）を用いますが、高価なため、テキスト購入は求めません。講義レジメと資料を毎回配布します。		
参考文献	参考文献は授業毎に指示します。		
評価方法	リアクションペーパー:40% 期末レポート:60%		

比較宗教論 b		後期 2 単位	現代教養専攻
近現代の世界諸宗教		豊川 慎（とよかわ しん）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代世界における喫緊の問題の多くには宗教が深く関連しています。宗教原理主義（ファンダメンタリズム）や宗教的過激思想に基づくテロリズムなどは今日のグローバル社会の深刻な問題の一つです。今日の宗教的ファンダメンタリズムの問題を念頭に置きながら、世界の諸宗教がいかに共存・共生し得るのか、その道筋を探求し、地域ごとの現代における諸宗教の実状を深く理解することを授業の到達目標とします。		
授業の概要	前期の「比較宗教論A」においては、ニニアン・スマート『世界の諸宗教1』を用いて、地域ごとの宗教諸伝統を俯瞰しますが、本講義においては、スマート（石井研士訳）『世界の諸宗教II—変容と共生』（教文館、2002年）をテキストとして、その内容を一章ごとに、DVDやパワーポイントを用いながら講義・解説を行います。		
授業 計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ヨーロッパの爆発とキリスト教の改革(1)—プロテスタントの宗教改革	
	第3回	ヨーロッパの爆発とキリスト教の改革(2)—ローマ・カトリックの対抗改革	
	第4回	北アメリカ	
	第5回	南アジアと植民地侵略への抵抗	
	第6回	現代の中国と朝鮮半島	
	第7回	現代の東南アジア	
	第8回	現代の日本	
	第9回	闇を抜けるイスラーム	
	第10回	太平洋における植民地の影響	
	第11回	東欧とソ連	
	第12回	現代世界におけるアフリカ	
	第13回	ラテン・アメリカとカリブ海地域	
	第14回	20世紀の回顧	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業毎に紹介する参考文献や配布資料をもとに各自授業内容を予習復習して宇田歳。		
テキスト	テキストとして、ニニアン・スマート（石井研士訳）『世界の諸宗教II—変容と共生』（教文館、2002年）を用いますが、高価なため、テキスト購入は求めません。講義レジメと資料を毎回配布します。		
参考文献	参考文献は授業毎に指示します。		
評価方法	リアクションペーパー:40% 期末レポート:60%		

比較文学 a		前期 2 単位	現代教養専攻
比較文学a		井原 眞理子 (いはら まりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>この授業では、英米の文学作品と日本の文学作品を取り上げ、それぞれの特徴を紹介しながら比較する。私たち日本人にとり、英米文学を読むという行為はどのようなことなのか。また英語を母国語とする人々にとって日本文学を読むとはどのようなことなのか。具体的に作品を取り上げ比較して、日頃学生諸君があまり親しむことの少ないといわれる日英の文学作品について考察し、それぞれの文化についての理解を深めることを目標とする。</p> <p>そのためには、短い作品を注意深く読み、理解し、自分の考えを他の人に分かりやすく説明する能力が必要である。文章を書いたり、意見を述べたり、発表をしたりと積極的に授業に参加ができるようになることも目標である。</p>		
授業の概要	<p>前期は俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)、川柳とリメリック、和歌と五行詩、和歌と抒情詩などの比較的短い作品を、それぞれの主題、時代、社会文化的背景、修辭などについて紹介しながら、比較してゆく。</p> <p>まずは、作品をじっくりと読み、各自の作品に対する解釈を書いたり、発表したりする。次に比較対照する作品をじっくりと読み、各自の解釈、理解をまとめる。最後に二者を比較して、それぞれの共通点、相違点を割り出してゆく。授業中は、ペアワーク、グループワークを取り入れ、学生同士が互いの意見を述べたり、論じたりする機会を多く設ける。</p>		
授業計画	第1回	授業紹介。(講義概要、日程、評価方法等の説明)	
	第2回	俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)－1 授業前半：俳句とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第3回	俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)－2 授業前半：ビートジェネレーションとは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第4回	俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第5回	川柳とリメリック－1 授業前半：川柳とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第6回	川柳とリメリック－2 授業前半：リメリックとは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第7回	川柳とリメリック－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第8回	和歌と五行詩－1 授業前半：和歌とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第9回	和歌と五行詩－2 授業前半：五行詩とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第10回	和歌と五行詩－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第11回	和歌と抒情詩－1 和歌とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第12回	和歌と抒情詩－2 抒情詩とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第13回	和歌と抒情詩－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第14回	討論とまとめ－1、学期末小論文について	
	第15回	討論とまとめ－2、学期末小論文提出。	
準備学習 (予習・復習等)	授業で学んだ内容に関連した考察課題を課します。翌週はそれに基づいた授業を行い、内理解を深めてゆきます。		
テキスト	授業開始時に指示する。		
参考文献	辞書必携。(電子辞書も可)		
評価方法	平常点:50% 学期末小論文:50%		

比較文学 b		後期 2 単位	現代教養専攻
比較文学 b		井原 真理子 (いはら まりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、英米の文学作品と日本の文学作品を取り上げ、それぞれの特徴を紹介しながら比較する。私たち日本人にとり、英米文学を読むという行為はどのようなことなのか。また英語を母国語とする人々にとって日本文学を読むとはどのようなことなのか。具体的に作品を取り上げ比較することにより、日頃学生諸君があまり親しむことの少ないといわれる日英の文学作品について考察し、それぞれの文化についての理解を深めることを目標とする。 そのためには、作品を注意深く読み、理解して、自分の考えをほかの人に分かりやすく説明する能力が必要である。文章を書いたり、意見を述べたり、発表をしたりと積極的な参加ができるようになることも目標とする。		
授業の概要	後期は、小説や戯曲などの作品の少し長めの抜粋を取り上げ、作品の訳語を原典と比較してゆく。一つ一つの言葉について辞書の定義に始まり、背景となる文化、社会などを理解できるようにする。作品の筋立てを成立させている重要語について、比較をすることにより考え、全体としてどのような翻訳作品となっているのかを論じる。 まずは作品をじっくり読み、各自の作品に対する解釈を書いたり、発表したりする。次に比較対照する翻訳作品を読み、各自の解釈、理解をまとめる。最後に二者を比較して、それぞれの共通点、相違点を割り出してゆく。授業中は、ペアワーク、グループワークを取り入れ、学生同士が互いの意見を述べたり、論じたりする機会を多く設ける。		
授業 計画	第1回	講義日程、内容の紹介。(日程は、進捗状況等により変更する場合がある) 「風が吹く」(K. Mansfield) 講読、和訳比較。	
	第2回	『枕草子』(清少納言) 講読 英訳比較。	
	第3回	「風が吹く」『枕草子』比較、討論。	
	第4回	『赤毛のアン』(Lucy Maud Montgomery) 講読 和訳比較。	
	第5回	『枕草子』(清少納言) 講読 英訳比較。	
	第6回	『赤毛のアン』『枕草子』作者紹介。比較、討論。	
	第7回	『若草物語』(Louisa May Alcott) 講読 和訳比較。	
	第8回	「虫愛ずる姫君」(堤中納言物語) 講読 英訳比較。	
	第9回	『若草物語』「虫愛ずる姫君」作者紹介。比較、討論。	
	第10回	『エマ』(Jane Austen) 講読 和訳比較。	
	第11回	『源氏物語』(紫式部) 講読 英訳比較。	
	第12回	『エマ』『源氏物語』作者紹介。比較、討論。 発表、学期末小論文について。	
	第13回	‘The Demon Lover’ (Elizabeth Bowen) 講読。	
	第14回	『葵上』(世阿弥?) 講読。 ‘The Demon Lover’ 作者紹介。比較。 発表。	
	第15回	発表、討論及びまとめ。学期末小論文提出。	
準備学習 (予習・復習等)	授業で学んだ内容に関連した考察課題を課す。翌週はそれに基づいた授業を行い、内容を深める。		
テキスト	授業開始時に指示する。		
参考文献	辞書。(電子辞書も可)		
評価方法	平常点:50% 学期末小論文:50%		

造形演習 a		前期 2 単位	現代教養専攻
自然観察から織作品への展開、及び、オフルーム技法の研究		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	本科において卒業演習で「織」を履修していることが望ましい。繊維造形・織の作品制作を中心に授業を進める。デザインと技術の関わりにおける繊維造形表現研究とともに、何を表現したいのか - 自己を見つめ、どのようにそれを表現するのか、その過程を学び深めることに主眼を置く。		
授業の概要	この演習では今まで習得した織の表現に加え、染色技術（糸染め）の習得、織機を使わないフリーテクニック（オフルーム技法）など、新たな表現技法についても学ぶことで表現の幅を広げ、後期の修了制作に取り組む基盤をつくる。課題（1）では、自然を観察してそのイメージを織作品へと抽象表現することを学ぶ。本科では羊毛を中心に扱ってきたので、それ以外の繊維・多種素材を用いた表現研究を併せて行う。課題（2）では、繊維造形の表現の幅を広げるために、織以外のフリーテクニックを学び、素材と技法の関係による造形表現の可能性を研究する。		
授業計画	第1回	課題-1-a：自然観察 樹木の木肌をデッサンし、質感を取り入れた作品制作へと展開する。学内の樹木を探してデッサンする樹を決める。課題-1-b：多種素材を用いた表現研究の準備（木枠に経糸を張る。）	
	第2回	課題-1-a：樹木のデッサン／課題-1-b：素材表現研究	
	第3回	課題-1-a：イメージドローイング、デザインへ展開／課題-1-b 続き	
	第4回	課題-1-a：デザイン決定、サンプル織	
	第5回	課題-1-a：染色講義、糸染め実習	
	第6回	課題-1-a：経糸整経、幾ごしらえ、実寸下絵	
	第7回	課題-1-a：幾ごしらえ、織り出し	
	第8回	課題-1-a：製織	
	第9回	課題-1-a：製織	
	第10回	課題-1-a：織上がり、経糸始末、仕上げ	
	第11回	課題-1-a：講評／課題-2 オフルーム技法について解説と練習（マクラメ、コイリング、スブラングなど）	
	第12回	課題-2：オフルーム技法と表現について／実験小作品の制作	
	第13回	課題-2：続き	
	第14回	課題-2：仕上げ	
	第15回	講評会（課題1a、1b、課題2）	
準備学習 (予習・復習等)	作品制作には膨大な時間がかかる。授業時間だけでは作品は出来ないで、課題作品を完成させるために、空き時間を利用して制作時間を確保すること。次への展開に欠かせない「制作ノート」をつくり、制作の過程で生じたこと（制作に関わること、イメージ、内容、制作意図、表現についてなど）はすべてメモしておき、修了制作への参考とすること。		
テキスト	糸染め実習用プリント、オフルーム技法プリント等を配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題作品:50% レポート:20%		

造形演習 b		前期 2 単位	現代教養専攻
デザイン造形による表現演習		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標及びテーマ	デザインに求められる普遍的な造形美を、各自のテーマのもとに探求する。色彩、形体、素材・質感という造形の3要素の統合、色彩と形体の視覚効果の研究を掘り下げ、デザイン・造形表現の奥行きを深めることを目指す。また自らのテーマ設定、問題抽出と解決、計画的な制作というデザインプロセスの基本を学ぶ。		
授業の概要	造形の基本となる3要素（色彩、形体、素材・質感）に、光、運動という要素を加えた中から主として研究するものの一つ選び、参考作品資料を選定し、その研究、分析を行う。 それをもとにテーマを絞り、表現手法を考案して試作をくり返し、自らの表現スタイルを導き出す。 修了研究演習（デザイン造形）履修者は、修了制作のプロトタイプとなる平面または立体構成の作品を制作する。		
授業計画	第1回	ガイダンス：デザイン造形とは／研究テーマの提示／研究計画案作成	
	第2回	参考資料の研究、分析	
	第3回	作品のコンセプト、表現手法の決定	
	第4回	表現手法の試作、研究1	
	第5回	表現手法の試作、研究2	
	第6回	エスキース1	
	第7回	エスキース2（作品の構想の決定）	
	第8回	作品の試作1（部分またはスケールモデルなど）	
	第9回	作品の試作2（色彩などの決定）	
	第10回	作品制作1（下描きなど）	
	第11回	作品制作2（着彩など）	
	第12回	作品制作3（着彩など）	
	第13回	作品制作4（着彩など）	
	第14回	作品制作5（仕上げ）	
	第15回	講評会／修了制作に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ研究テーマを考えておくこと。 参考資料を図書館などで探しておく。 制作の進捗状況によっては時間外の制作が必要になる。 最後にレポートをまとめる。		
テキスト	必要に応じて配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:20% 作品:50%		

造形演習c		前期 2 単位	現代教養専攻
視覚効果を用いたデザイン制作		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	道具やシステムの目的にかなった視覚デザインと操作性について、評価を行なえるだけの素養を身につける。デザインの改善が望ましい箇所については提案できるような造形力を養う。		
授業の概要	数種類の課題を課す。各課題ごとに道具の原型や生活行為の基本に立ち返る考察が含まれる。道具やシステムの課題については、状況や目的に応じて各自が重要と考える要素を優先し、条件設定に基づいたデザインを構想する。 遊具のデザインについては、操作に応じた視覚効果をテーマとして制作する。		
授業計画	第1回	ガイダンス：デザインと生活の関係	
	第2回	個人用の空間のデザイン 施設内の個の空間	
	第3回	個人用の空間のデザイン：発表と講評	
	第4回	リフレッシュのデザイン 従来とは異なる色彩・形態の提案	
	第5回	リフレッシュのデザイン（続き）	
	第6回	リフレッシュのデザイン：発表と講評	
	第7回	対話するロボットのデザイン	
	第8回	対話するロボットのデザイン（続き）	
	第9回	対話するロボットのデザイン：発表と講評	
	第10回	形の変わる遊具のデザイン	
	第11回	形の変わる遊具のデザイン（続き）	
	第12回	形の変わる遊具のデザイン：発表と講評	
	第13回	図形の組み合わせパズルのデザイン	
	第14回	図形の組み合わせパズルのデザイン（続き）	
	第15回	図形の組み合わせパズルのデザイン：発表と講評	
準備学習 (予習・復習等)	ヒトがモノと関わる際に面白いと感じる状況について、できるだけくわしく観察・考察していくこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 課題制作物:70%		

造形特講 a	後期 2 単位	現代教養専攻
染織文化について、繊維造形概論として総合的に考察する	阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちの生活環境に不可欠な繊維という存在について、人間と繊維の関わりを人類誕生まで遡り、自然からどのように学び創造してきたのか、衣食住における繊維構成物である生活用品からファッション、そして現代の繊維造形表現、現代美術まで様々な事例を示し比較検討する。また、講義だけでなく学生発表により他者と情報を共有しながら、染織文化と繊維造形について様々な資料を分析・考察する力、そして他者へ発信する力を養う。	
授業の概要	染織の歴史・文様・色料などについて基本となる事柄を学びつつ、さらに「繊維と構造・色彩・形」などの造形要素を軸に、人類が創造してきた世界の民族芸術や技術と道具の関係を知り、人間の手の仕事と現代における先端技術の融合についてなど、その創造の過程と周縁について総合的に考察する。例えば、色料の分類や天然染料の成分など科学的側面と、色名に表わされる文化的背景や、また手と道具の関係における紋織物とコンピュータ誕生の技術の連関など多角的に捉える。さらに人間にとって繊維とは何か、造形表現とは何かについて考察する。講義だけでなく、天然染料を用いた染色体験も予定している。	
授業計画	第1回	授業ガイダンス／自己紹介／講義：繊維とは何か。染織とは。
	第2回	繊維と形体：繊維による構造物、織物の誕生、技術と表現
	第3回	織物の原料：繊維素材の分類（サンプル帳作成）
	第4回	世界の織物文化：古代～近代
	第5回	日本の織物文化：古代～近代
	第6回	DVD鑑賞：染織家「志村ふくみ」
	第7回	学生発表：「色名と文様」について調査、発表する
	第8回	繊維と色彩：織物と染色／色料：天然染料と合成染料／染色方法
	第9回	天然染料による染色体験（染織室にて）
	第10回	DVD鑑賞：世界遺産・富岡製糸工場
	第11回	繊維とデザイン：パウハウスの織物工房、他
	第12回	染織品にみる戦争柄：パワーポイントによる講義の他、DVD鑑賞
	第13回	縫うという表現
	第14回	手と道具、紋織物とコンピュータ
	第15回	授業のまとめ
準備学習 (予習・復習等)	授業の復習を勧める。それぞれの回で紹介した資料を含め、自分で調べて内容を理解し深めることが必要。他に、展覧会なども紹介するので、合わせて個別に鑑賞することを勧める。	
テキスト	特になし。授業の中で適宜、資料プリントを配付する。	
参考文献	授業の中で適宜紹介する。参考資料として染織品、作品や染料、繊維材料の見本など授業の中で紹介する。	
評価方法	平常点:50% 発表:20% 期末レポート:30%	

造形特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
環境と芸術・芸術の社会性		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	人間は自らをとりまく環境から様々な刺激を受けて芸術表現を行い、また芸術によって社会環境を変えてきた。「環境」は現代を生きる私たちにとって重要なキーワードになっている。本講ではファインアートから建築、デザインまで、芸術を環境との関わりにおいてとらえ、その社会性について考える視座を得ることを目標とする。		
授業の概要	まず人間が自らをとりまく環境から様々な刺激を受けて造形表現を行い、また芸術によって社会環境を変えてきた事例を学ぶ。さらにそこから、個人の自己表現にとどまらない芸術の社会性とは何かを考える。特に社会環境への関わりにおいて重要となる「パブリックアート」についてその意義を考え、求められる表現のあり方を、表現者と受容する社会、両方の立場から模索する。 パブリックアートの実例を鑑賞するフィールドワーク、学生による調査・発表などをとり入れる。		
授業 計画	第1回	導入：環境と芸術について 講師の環境アート作品の紹介	
	第2回	自然環境と芸術 1：芸術の歴史の中で／自然の要素と芸術表現	
	第3回	自然環境と芸術 2：自然の要素と芸術表現（続き）／ランドアート	
	第4回	都市環境と芸術 1：駅空間のアート（国内の事例）	
	第5回	見学会 1（駅空間のアート）	
	第6回	見学会 1 の意見交換 都市環境と芸術 2：駅空間のアート（海外の事例）	
	第7回	『都市環境と芸術-地下鉄駅空間のアート-』を読む	
	第8回	日本の環境芸術の系譜 1：自治体による彫刻設置事業	
	第9回	日本の環境芸術の系譜 2：アートプロデューサーの登場／アートプロジェクト	
	第10回	日本のパブリックアート 1：彫刻公園／地域おこし	
	第11回	見学会 2（都市空間のパブリックアート）	
	第12回	見学会 2 の意見交換 日本のパブリックアート 2：都市の再開発	
	第13回	海外のパブリックアート	
	第14回	学生によるパブリックアート調査報告	
	第15回	まとめ：芸術と社会	
準備学習 (予習・復習等)	見学会にあたっては、あらかじめ資料に目を通しておき、終了後にレポートにまとめる。 授業時間外に各自がパブリックアートを調査し、報告発表を行なう。またレポートを提出する。		
テキスト	必要に応じて配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 報告・発表:20% レポート:50%		

造形特講 c		後期 2 単位	現代教養専攻
色彩と形態の観察		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	色の三属性を把握した上で、目的に応じた色彩計画の方法を理解する。 視覚的なデザインに見られる様々な傾向を比較し、デザインの方針を理解する。		
授業の概要	対象の傾向を絞り、事例を集めて紹介し合う。 集まった事例について、色彩と形態の用い方、全体の傾向と細部の特徴の両面からの比較考察をしていく。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	統一感のための色彩計画と形態の組み合わせ	
	第3回	多彩さのための色彩計画と形態の組み合わせ	
	第4回	印象的な表示	
	第5回	気にならないデザイン	
	第6回	特徴的な色使いについて	
	第7回	北欧風の色調	
	第8回	トロピカルの色調	
	第9回	自然の中にあるグラデーションとデザインに用いられるグラデーション	
	第10回	表示について：店と店名の表示	
	第11回	表示について：コンピュータの画面表示	
	第12回	表示について：ランドスケープ	
	第13回	表示について：なつかしさ	
	第14回	色彩計画について：独自性の強いデザイン	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	よく知っている対象（動植物、持ち物、環境など）について、そこに含まれる色彩と形態の組み合わせを覚えておき、他の対象と比較ができるようになることが望ましい。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 授業感想文:10% 期末レポート:60%		

多元文化特講 a	前期 2 単位	現代教養専攻
文化の多元的理解		
<p>【担当教員】 河見 誠（かわみ まこと）、齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）、八耳 俊文（やつみみ としふみ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この授業では、文化を多元的視座から把握する学びの例示・導入を行う。すなわち、人間の営みとしての文化を多元的視座から捉えることを通して、文化の抱える問題点を掘り下げると同時に、文化のより豊かな展開を展望する。3名の講師は二つのキーワードを共有している。すなわち「多様性(diversity)」、および普遍的視点とローカルな視点を併せ持つ「グローバル」である。</p> <p><授業の概要> 切り口を立体的に提示するため、三つの観点（自然科学、社会科学、人文科学）からのオムニバス形式を取る。中間討論、総括討論は、学生との対話で進められる。</p> <p><授業計画></p> <p>－第1回 インTRODクシヨン－（河見・八耳）</p> <p>－人間の自然との関わりからの観点から－ 第2回 人と植物の歴史（八耳） 第3回 日本の自然観の展開（八耳） 第4回 津波災害と復興の歴史（八耳） 第5回 普遍的視点とローカルな視点（八耳）</p> <p>－社会と国家の観点から－ 第6回 在日韓国・朝鮮人の歴史と現在（河見） 第7回 平等と差異（河見） 第8回 狭間に生きる生き方と三つの多元主義（河見） 第9回 国家と参政権（河見）</p> <p>－第10回 中間討論－（河見・齋藤）</p> <p>－そもそも文化とは？－ 第11回 日米文化研究（カルチュラル・スタディーズ）の観点から（齋藤） 第12回 メルティングポット（るつぼ）論／同化主義の功罪（齋藤） 第13回 サラダボウル論／多文化主義の功罪（齋藤） 第14回 雑種化・混血化／自らの周縁性を外部と出会える<境域(borderlands)>へと読み替え、異文化混淆から新たな価値を生み出すカテゴリー越境的なクリエイターたち（齋藤）</p> <p>－第15回 総括討論－ 二つのキーワードをめぐって21世紀文化を展望する： 「多様性・多層性」 「グローバル」“Think globally, act locally!”（河見・八耳・齋藤）</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 文化の多元的視座からの把握がどのように広がったか、授業各回ごとに振り返ってまとめた上で、次の授業に臨むこと。そして中間討論、総括討論で自らの見解を述べられるように準備すること。</p> <p><テキスト> 指定しない。</p> <p><参考文献> テーマに即して提示する。</p> <p><評価方法> 期末レポート：75% 授業参加（討論等）25%</p>		

多元文化特講 b	後期 2 単位	現代教養専攻
ワークショップで学ぶ多元文化実践		
<p>【担当教員】 菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、鈴木 直子（すずき なおこ）、趙 慶姫（ちょう きょんひ） <授業の到達目標及びテーマ> 多様なものの見方を実践的に学ぶ。 異なる価値観を理解する知恵と方法を学ぶ。 様々な人々と連携・協力して社会に関わる方法を学ぶ。</p> <p><授業の概要> 私たちは、多様な価値観のなかに生きています。しかし異なる価値観を持った人々どうしが理解しあい、連携・協力して人間関係を築き上げることは、なかなか難しいことです。様々な社会活動やボランティアなど、社会に積極的に関わる方法を学ぶため、この授業では様々なゲストスピーカーとともに、ワークショップ形式で、多様な価値観を体感し、「言葉」「身体」「モノ」をめぐる自分の関わり方を、体験的に変化させていきます。 また、授業の後半には、グループワークによってワークショップを計画し、実行します。自ら実践することで、ワークショップという手法の意味と有用性を学びます。 担当者全員がメインファシリテータまたはサブファシリテータになって、授業を進行していきます。</p> <p><授業計画> 第1回 導入1 多様な価値観のなかで生きるということ 第2回 導入2 「私」の「思い」をどう実現するか 第3回 言葉の変革1 言葉がつなぐ人と人 第4回 言葉の変革2 「私」の価値観を知る 第5回 モノの変革1 デザインが社会をつくる 第6回 モノの変革2 モノのかたちがつなぐ社会 第7回 身体の変革1 身体が変わると心が変わる 第8回 身体の変革2 「私」の身体と心を知る 第9回 変革の現場に学ぶ1 社会と私 第10回 変革の現場に学ぶ2 教育と成長 第11回 変革の現場に学ぶ3 地域と連携 第12回 ワークショップ実践1 伝えたいことを形にする 第13回 ワークショップ実践2 繋がりをデザインする 第14回 ワークショップ実践3 多様性のなかに生きる 第15回 まとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> ・グループ活動やグループ発表の準備をする。 ・授業内容全体をふまえ、期末にふりかえりを行い、体験を自己に定着させる。</p> <p><テキスト> とくになし</p> <p><参考文献> 中野民夫『ワークショップ 新しい学びと創造の場』岩波新書、2001年</p> <p><評価方法> 授業への積極的参加:70% 期末ふりかえり:30% グループワークで進むため、欠席すると他の受講者に迷惑がかかります。できるだけ欠席しないようにしてください。 とくに初回、最終回は必ず出席してください。</p>		

比較思想 a		前期 2 単位	現代教養専攻
比較思想の諸問題		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	比較研究のためには比較対象のそれぞれの思想への多角的視点が前提となる。比較思想の具体例を論じながら、比較研究の歴史、「比較」の方法論を論理的に明らかにする。思想の表れとしての文学、芸術、建築、法等、更に概念を中心とした東洋と西洋の比較、文化の精華としての思想を考察する。		
授業の概要	講義形式で行うが、ユダヤ思想とキリスト教思想、古代ギリシア思想とローマ思想、中国思想の日本の思想への影響、東西の思想研究、新しい比較研究の可能性を論じる。時代的には古代、中世、ルネサンス、を扱う。それぞれの比較方法が違うので、注意深くしかし簡潔に論じていく。		
授業計画	第1回	ロゼッタ石—文字を中心とした比較	
	第2回	ユダヤ思想とギリシア哲学—歴史の記述と西欧の学問	
	第3回	墳墓の構造—死の概念、エジプト、ギリシア、古代中国	
	第4回	「創世記」と『古事記』—創造概念の相違	
	第5回	古代ギリシアから古代ローマへ—翻訳の問題、エトルスクの文化	
	第6回	ギリシア神話と海洋文明—神像とクノッソスの迷宮	
	第7回	古代ローマの演説—韻文と散文、『ジュリアス・シーザー』を題材に	
	第8回	典礼に具現化した思想—キリスト教思想と儒教	
	第9回	モーゼ[神との対面]の解釈の相違—フィロンとニュッサのグレゴリウス	
	第10回	大学の問題—アペラールと孔子の『論語・大学』	
	第11回	トマスとアウグスティヌス—永遠と時間	
	第12回	垂直的超越と水平的超越—トマス・アクイナス	
	第13回	無の問題—エックハルトと禅	
	第14回	レオナルド—『絵の本』 絵画科学	
	第15回	比較論の総括と近世・近代・現代への展望	
準備学習 (予習・復習等)	事前にプリントを配布したり、次回の課題を紹介するので、それを予め読み調べをすること。更に授業後に「まとめ」を作成すること。時に提出を課することがある。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	時宜に応じて参考図書を紹介し、そのプリントを配ることもある。		
評価方法	試験:70% コミュニケーション力:20% レポート:10%		

比較思想 b		後期 2 単位	現代教養専攻
思想の比較研究、その現実		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	思想の比較研究は様々な成果を上げている。その中から概念を中心として様々な国での問題を論じていきたい。そして現在、現実の問題を論じる時に国際的な視野そしてグローバル化の立場から考察しなくてはならない。現代における新しい比較研究の可能性を探る。これらの視野を考えながら、全体としては比較の方法論、具体的問題を論じていく。		
授業の概要	殆どは講義形式で行うが、問題によっては対話形式を導入する。対話への参加が不可欠である。テーマとしては言語の問題、芸術表現の問題そして宗教の比較、自然観、死生観、社会の問題、最終的にはコスモポリタンの考えにまで及ぶ。		
授業計画	第1回	サンスクリットの発見—比較研究の始まり	
	第2回	言語学—イエラムスレーブ—アルティキュレーションの問題	
	第3回	自由意志と奴隷意志—エラスムスとルター	
	第4回	法の原理—ホブズとルソー	
	第5回	理性と経験—デカルトとロック	
	第6回	パスカル—幾何学的精神と繊細の精神	
	第7回	理性と想像力—デカルトとヴィーコ	
	第8回	フランス革命前夜—トックヴィルの見たアメリカ	
	第9回	イスラム思想—井筒俊彦の研究成果	
	第10回	道の思想—老荘思想と「旅する人間」、松尾芭蕉の自然との一致、	
	第11回	間の問題—西洋建築と日本の茶室	
	第12回	フェヌロンの『死者の対話』—ソクラテスと孔子の対話	
	第13回	カントの『自然地理学』和辻哲郎の鎖国論	
	第14回	カントの『永遠平和のために』—コスモポリタンの思想	
	第15回	死の問題—臓器移植と日本人の死生観	
準備学習 (予習・復習等)	事前にテキストのプリントを配布し、次回の課題を出すのでテキストを読んだりして予習をすること。授業後は必ず「まとめ」を作成すること。時にその提出を課する。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	必要に応じて紹介し、プリントを配る。また何度かレポート課題として読むことを要求する。		
評価方法	試験:60% レポート:20% コミュニケーション力:20%		

西洋史特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
古代ギリシアの都市と民主政		原 賢治 (はら けんじ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、古代ギリシアの都市（ポリス）はどのような性格をもつ共同体であったのかを知るとともに、古代の民主政の特徴について現代の民主政と違いを含めて理解することを目標とします。		
授業の概要	本講義では、西洋古代において中心要素のひとつである都市（ポリス）に焦点を置きます。ギリシヤ的な都市がどのように生まれ、いかなる政治的・社会的な特質を確立していったのかを古典期のアテナイを中心に説明する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	青銅器時代	
	第3回	「暗黒時代」と都市（ポリス）の誕生	
	第4回	アテナイの民主政の進展とその背景	
	第5回	ペルシア戦争	
	第6回	アテナイの民主政の完成	
	第7回	アテナイの政治制度と政治家	
	第8回	アテナイの地方	
	第9回	アテナイの社会	
	第10回	ギリシアの文化	
	第11回	スパルタの政治と社会	
	第12回	諸ポリスの制度と民主政	
	第13回	前4世紀のギリシア世界とマケドニアの台頭	
	第14回	ギリシアの「衰退」	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：特になし 復習：毎回の講義の内容をまとめる		
テキスト	毎回プリントを配布する		
参考文献	特になし		
評価方法	定期試験:80% 受講態度:20%		

西洋史特講 b		後期 2 単位
ヘレニズム時代の都市		原 賢治 (はら けんじ)
授業の到達目標 及びテーマ	ヘレニズム時代（前334年-前30年）の都市の特徴を内外の状況や前後の時代との関係の中で理解する。	
授業の概要	本講義では、西洋古代において中心要素のひとつである都市に焦点を置きます。ヘレニズム時代において、古代ギリシア的な政治制度・社会慣習をもった諸都市が、ヘレニズム諸王国や共和政ローマと関わり、さらに後にはローマ帝国の支配下に置かれる中で、いつ、どのような形で変化を遂げていったのかを論じてゆきます。	
授業計画	第1回	ガイダンス：「ヘレニズム」とは
	第2回	アレクサンドロスの東方遠征
	第3回	ディアドコイ戦争
	第4回	諸王国の制度（プトレマイオス朝）
	第5回	諸王国の制度（セレウコス朝）
	第6回	諸王国の制度（アンティゴノス朝）および王権の特徴
	第7回	ヘレニズム諸王国と都市との関係
	第8回	共和政ローマと都市との関係
	第9回	都市の再評価：都市景観と民主政
	第10回	都市の政治と社会：継続と変質
	第11回	ヘレニズム世界の外国人と都市
	第12回	ヘレニズム時代の思想
	第13回	ヘレニズム時代の文化・宗教
	第14回	ヘレニズム時代の経済活動
	第15回	ローマ帝政下のギリシア都市およびまとめ
準備学習 (予習・復習等)	予習：特になし 復習：毎回の講義の内容をまとめる	
テキスト	毎回プリントを配布する	
参考文献	特になし	
評価方法	定期試験：80% 受講態度：20%	

西洋文化史 a		前期 2 単位	現代教養専攻
『オデュッセイア』を読む		水島 陽子 (みずしま ようこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>到達目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『オデュッセイア』を日本語訳で読破し、物語を理解する。 ・文学を通して古代ギリシアを理解し、また現代における受容の意味を理解する。 <p>テーマ：</p> <p>オデュッセウスという英雄の魅力に触れながら、第一級の古典を読む醍醐味を味わい、現在も多くの文学、哲学などに影響を与え続ける理由を考える。</p>		
授業の概要	『オデュッセイア』を読み進むために知っておきたい事項を確認したのち、テキストを実際に読んでいく。講義も行うが、学生が発表する機会を多く持ちたい。その際、いくつかの場面に着目して、学説にとらわれない自由な議論、解釈を試みたい。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：古代ギリシアとは。現代人としてギリシア古典に向かうこのとの意味は何か。	
	第2回	序論① トロイア伝説と『オデュッセイア』	
	第3回	序論② 『イリアス』と『オデュッセイア』	
	第4回	『オデュッセイア』第1歌：始まりと全体像	
	第5回	" 第2～3歌：息子テレマコス、神々①	
	第6回	" 第4～5歌：女神カリュプソ、神々②	
	第7回	" 第6～8歌：ナウシカアの国	
	第8回	" 第9～10歌：民話の宝庫	
	第9回	" 第11～12歌：冥府くだり	
	第10回	" 第13～15歌：帰国・高貴な豚飼い？	
	第11回	" 第16～18歌：父と子	
	第12回	" 第19～21歌：求婚者、乳母、乞食	
	第13回	" 第22～24歌：夫と妻、復讐と和解	
	第14回	総括① 『オデュッセイア』と現代	
	第15回	総括② ディスカッション	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・早めにテキストを購入し、授業で扱う箇所を必ず読んでおくこと。 ・「ギリシア神話」に興味を持ち、積極的に調べること。 		
テキスト	ホメロス『オデュッセイア』上・下（松平千秋訳）岩波文庫、1994		
参考文献	必要に応じて授業内で紹介する。		
評価方法	試験またはレポート：50% 平常点（発表など）：50%		

西洋文化史 b		後期 2 単位	現代教養専攻
ヘラクレスと現代		水島 陽子 (みずしま ようこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>到達目標： <ul style="list-style-type: none"> ・古代ギリシアの英雄ヘラクレスを理解する。 ・ヘラクレスに関する伝承、作品などに触れ、古代ギリシアを理解する。 ・ヘラクレス像を通して、現代社会を理解する。 </p> <p>テーマ： ヘラクレスとは何者か。ギリシア神話とは何か。古代ギリシアとはどんな世界か。</p>		
授業の概要	<p>ディズニー映画『ヘラクレス』、ヘラクレスオオカブト虫、心の病「ヘラクレス・コンプレックス」など、意外にも私たちの身近にいるヘラクレスの、元来の姿とは何か。ギリシア神話を確認しながら、なぜヘラクレスが現代に名を伝えているのか、議論する。また、一般論としての神話や民話の意味、文学作品の可能性についても考えたい。講義も行うが、学生間で分担してテキストのレジュメを作り、発表し合って理解を深めたい。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション：古代ギリシアとは	
	第2回	ヘラクレス神話概要①	
	第3回	ヘラクレス神話概要②	
	第4回	「出世する英雄」①	
	第5回	「出世する英雄」②	
	第6回	「死の克服への執念」①	
	第7回	「死の克服への執念」②	
	第8回	ギリシア悲劇とは	
	第9回	エウリピデス作『ヘラクレス』①	
	第10回	エウリピデス作『ヘラクレス』②	
	第11回	「繰り返し現われるヘラクレス」	
	第12回	「異なる顔のヘラクレス」	
	第13回	「現代のヘラクレス」	
	第14回	総括：ヘラクレスとは何者か。	
	第15回	ディスカッション	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストの授業で扱う箇所を必ず読んでくること。 ・ヘラクレスをはじめとして、多くのギリシア神話に親しみ、調べること。 		
テキスト	内田次信『ヘラクレスは繰り返し現われる——夢と不安のギリシア神話』大阪大学出版会、2014		
参考文献	アポロドーロス『ギリシア神話』岩波文庫、1953、 西村賀子『ギリシア神話：神々と英雄に会う』中公新書2005、他授業内で紹介する。		
評価方法	試験またはレポート:50% 平常点(発表など):50%		

東洋文化史 a		前期 2 単位	現代教養専攻
東洋を知ろう		原田 理恵 (はらだ りえ)	
授業の到達目標及びテーマ	新石器時代から近現代までの中国を中心とする東アジア世界の文化を、美術工芸など目に見える文物を手がかりとして概観し、それぞれの時代や地域の文化の特徴を理解する。そして、それらの美術品・工芸品を生み出した社会を主導した思想のうちの主要なものについて、史料に触れながら理解を深める。		
授業の概要	講義が中心となります。「東洋の歴史」の広大な時間と空間の中から、中国世界を中心として人々の生活や思想あるいは社会のあり方など様々な観点で切り取ったいくつかのテーマを紹介します。一つのテーマを三週間程度の講義で修了し、その区切り毎に講義に関する質問・感想・意見等を書いていただき、次の授業で紹介しします。		
授業計画	第1回	陶磁器から時代を見る 1	新石器時代～周
	第2回	陶磁器から時代を見る 2	秦・漢～南北朝
	第3回	陶磁器から時代を見る 3	隋・唐～宋
	第4回	陶磁器から時代を見る 4	元～現代
	第5回	古代中国世界の形成 1	聖人伝説と考古学的アプローチ
	第6回	古代中国世界の形成 2	周の建国と封建制
	第7回	古代中国世界の形成 3	王国から帝国へ
	第8回	孔子の生涯とその思想 1	孔子の生涯
	第9回	孔子の生涯とその思想 2	孔子の思想
	第10回	孔子の生涯とその思想 3	孔子の残したもの
	第11回	法家の思想家たち 1	商鞅
	第12回	法家の思想家たち 2	韓非
	第13回	法家の思想 1	法と術
	第14回	法家の思想 2	勢
	第15回	性悪の思想と性善の思想	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配ったプリント類は次週までに一読しておいて下さい。 前期の授業中に2～3回の小テストを実施予定です。一週前に告知します。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	授業で紹介しします。		
評価方法	レポート:30% 定期試験:30% 平常点(小テスト含):40%		

東洋文化史 b		後期 2 単位	現代教養専攻
東洋から世界を考えよう		原田 理恵 (はらだ りえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	今、中国はいろいろな意味で巨大な存在であると同時に、日本にとっては千年以上も前から政治・経済、そして何よりも文化的に深く関わってきた隣国です。その巨大な隣国の多様な文化について知り、考え、理解し、そして自らの社会や文化について再び問い直すことが、この授業の目標です。		
授業の概要	新石器時代から近現代までの中国を中心とする東アジア世界の文化につて、思想・生産形態（農耕と牧畜）・制度など異なった切り口でそれぞれの時代や地域の文化にアプローチする。そして個々の事象に関する理解を孤立させることなく、多面体としての社会の姿を構築し、内陸アジアや北アジア、そして日本が中華世界と如何に関わり、相互に影響しあったかを考察する。		
授業 計画	第1回	官僚—最も中国的なもの— 1	郷挙里選と九品官人法
	第2回	官僚—最も中国的なもの— 2	科学沿革① 隋～唐
	第3回	官僚—最も中国的なもの— 3	科学沿革① 宋～清
	第4回	官僚—最も中国的なもの— 4	科学の実際
	第5回	宋という国家 1	宋の建国と文治主義
	第6回	宋という国家 2	宋の社会と経済
	第7回	宋という国家 3	宋の遺産
	第8回	遊牧の世界	
	第9回	元朝秘史の世界	
	第10回	チンギス・ハンのモンゴル帝国	
	第11回	征服王朝—元	
	第12回	狩猟の世界 1	狩猟社会とは何か
	第13回	狩猟の世界 2	農耕民・遊牧民と狩猟民はいかに関わったか
	第14回	“東洋文化”の視点からもう一度日本を見る 1 日本は東洋とどのように関わってきたか	
	第15回	“東洋文化”の視点からもう一度日本を見る 2 日本が東洋から得たもの	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配布したプリント類は次週までに一読しておいて下さい。 後期の授業中に2～3回の小テストを実施する予定です。一週前に告知します。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	授業で紹介します。		
評価方法	レポート:30% 定期試験:30% 平常点(小テスト含):40%		

現代社会特講（心理） a		前期 2 単位	現代教養専攻
現代社会特講（心理学）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	心理学の主要な概念について説明できるようになるとともに、心理学的なものごとの見方や考え方を身につける。		
授業の概要	<p>発達、学習、記憶、性格、知覚等の心理学における重要な知見について知識を深める。そして、心理学という学問の根本にある考え方を理解できるようになることを目指す。後半の研究報告では、受講生の興味のある分野について、どのような研究が行われているのかについて、論文を読み、報告することを通じて、実際の研究の方法論についても理解を深める。</p> <p>なお、授業は基本的には演習形式で進める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション・心理学の方法	
	第2回	行動の基本様式	
	第3回	発達	
	第4回	学習・記憶1	
	第5回	学習・記憶2	
	第6回	感覚・知覚1	
	第7回	感覚・知覚2	
	第8回	思考・言語1	
	第9回	思考・言語2	
	第10回	動機づけ・情動	
	第11回	個人差	
	第12回	社会行動	
	第13回	研究報告1	
	第14回	研究報告2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所を読んでおくこと。</p> <p>事後学習 授業内容を振り返りながら、テキストを熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。</p>		
テキスト	鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃 「心理学 第3版」 東京大学出版会		
参考文献	特に指定しない		
評価方法	課題・小テスト:20% 授業参加態度:20% 定期試験又は最終課題:60%		

現代社会特講（心理）b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代社会特講（認知心理学）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	言語を中心とした認知心理学の主要な概念について説明できるようになるとともに、認知心理学的にものごとを捉えられるようになることを目指す。		
授業の概要	<p>普段何気なく行っている言語処理は、非常に複雑なメカニズムによって支えられている。前半では、言語に関わる認知処理メカニズムについて、心理学の領域で行われている様々な研究・知見を概観する。後半の研究報告では、受講生の興味のあるトピックスについて、どのような研究が行われているのかを、論文を読み、報告することを通じて、実際の研究の方法論についても理解を深める。</p> <p>なお、授業は基本的には演習形式で進める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	音声	
	第3回	語と文字	
	第4回	文と文章の理解	
	第5回	母語の獲得	
	第6回	外国語の習得・学習	
	第7回	言語と脳・思考・文化	
	第8回	文理解を支える脳神経メカニズム	
	第9回	ことばと教育の関わり・失語症	
	第10回	研究報告1	
	第11回	研究報告2	
	第12回	研究報告3	
	第13回	研究報告4	
	第14回	研究報告5	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所を読んでおくこと。</p> <p>事後学習 授業内容を振り返りながら、テキストを熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。</p>		
テキスト	石川圭一 「ことばと心理 言語の認知メカニズムを探る」 くろしお出版		
参考文献	大津由紀雄編 「認知心理学3 言語」 東京大学出版会		
評価方法	課題・小テスト:20% 授業参加態度:20% 定期試験又は最終課題:60%		

現代社会特講（教育） a		前期 2 単位	現代教養専攻
現代教育の歴史的・思想的背景を知ろう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代教育のさまざまな論点を考える上で、その前提となる幕末維新期から戦前期までの歴史的・思想的背景を明らかにしたい。特に、①学校観の史的展開、②知識教育と道徳教育の関係の捉え方と実態、③第二次世界大戦期の教育の実態と理念、④戦後教育改革の理念と実態、という4期に分けて論じ、戦後から現代Ⅱいたる「教育問題」の背景とその複雑な構造を知ることが目的とする。		
授業の概要	授業は、講義と学生の発表を組み合わせる形で進めていく。学生の発表は、講義の区切りごとに論点となる論題に即して発表を行い、討論を行う形で進める。最終的には、学生各自の関心に基づき、設定したテーマに即したレポートを作成する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	講義：学校観の史的展開①	
	第3回	講義：学校観の史的展開②	
	第4回	学生の発表①……学校観の史的展開（明治・大正期）	
	第5回	学生の発表②……学校観の史的展開（昭和期）	
	第6回	講義：知識教育と道徳教育①	
	第7回	講義：知識教育と道徳教育②	
	第8回	学生の発表……知徳関係論	
	第9回	講義：戦時下の教育①	
	第10回	講義：戦時下の教育②	
	第11回	学生の発表……戦争と教育	
	第12回	講義：戦後教育改革①	
	第13回	講義：戦後教育改革②	
	第14回	学生の発表……戦後教育改革	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	講義および学生の発表のために、あらかじめ資料を提示するので、事前にきちんとそれらの文献・資料を読み込んでおくことが必要である。特に発表担当者は、レジュメを作成した上で発表を行うため、入念な準備が求められる。		
テキスト	特に定めない。必要な資料を配付する。		
参考文献	授業中に提示する。		
評価方法	感想:10% 発表:20% 期末レポート:70%		

現代社会特講（教育）b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代教育問題をくわしく知ろう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代はさまざまな「教育問題」にあふれている。だが、そもそも「教育問題」とは自然に生ずるものというより、作られるものである。さらにそれぞれの問題は互いに関連し合っている。この講義では、こうした「教育問題」の具体的な姿を明らかにしつつ、それを生み出した社会的構造を明らかにすることを目的とする。		
授業の概要	授業は、講義と学生の発表を組み合わせる形で進めていく。学生の発表は、講義の区切りごとに論点となるテーマに即して発表を行い、討論を行う形で進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	講義：「教育問題」とは何か	
	第3回	講義：学歴主義と「教育格差」	
	第4回	学生の発表と討論	
	第5回	講義：「いじめ」問題	
	第6回	学生の発表と討論	
	第7回	講義：学級崩壊	
	第8回	学生の発表と討論	
	第9回	講義：早期教育	
	第10回	学生の発表と討論	
	第11回	講義：児童虐待	
	第12回	学生の発表と討論	
	第13回	講義：少年犯罪	
	第14回	学生の発表と討論	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	講義と学生の発表・討論を繰り返す形にするため、事前の準備は不可欠である。あらかじめ講義計画と参考文献一覧を配付し、分担を決めるので、各自は十分な準備を行うこと。		
テキスト	特に定めない。必要な資料を配付する。		
参考文献	授業中に提示する。		
評価方法	授業時の感想文:10% 発表:20% 期末レポート:70%		

現代社会特講（法律） a		前期 2 単位	現代教養専攻
現代社会の問題を法的な視点から考察する		信澤 久美子（のぶさわ くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会では様々な社会問題が生じている。おのおの、様々な背景があって問題が起こるのであるが、その社会的背景を分析し、どのように解決するのが妥当か、法的な視点から考察する。		
授業の概要	おのおのの興味に応じて、テーマを絞り、発表者には問題についての発表と報告をしてもらう。それについて、討論を通じて、あるべき解決方法について、考える。発表者は欠席をしないで欲しい。全員が、質問をし、討論に加わること。テーマは、民事法・刑事法・憲法・環境・情報・消費・その他、話し合いによって決める。		
授業計画	第1回	イントロダクション 調べ物、報告の仕方等	
	第2回	テーマに沿っての発表と討論 社会問題一般 1	
	第3回	テーマに沿っての発表と討論 社会問題一般 2	
	第4回	テーマに沿っての発表と討論 社会問題一般 3	
	第5回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 民法 1	
	第6回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 民法 2	
	第7回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 民法 3	
	第8回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 家族法 1	
	第9回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 家族法 2	
	第10回	テーマに沿っての発表と討論 刑事法 1	
	第11回	テーマに沿っての発表と討論 刑事法 2	
	第12回	テーマに沿っての発表と討論 憲法 1	
	第13回	テーマに沿っての発表と討論 憲法 2	
	第14回	テーマに沿っての発表と討論 憲法 3	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	日頃、新聞を読んで、社会問題への関心を深めておくこと。発表に当たったら、文献・ネット等をしっかりと調べて、まとめあげる。他の人のテーマへの関心を持つこと。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	特に指定しない。 条文はインターネットでダウンロード可能。		
評価方法	発表の出来:50% 討論への積極的参加:50%		

現代社会特講（法律）b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代社会の問題を法的な視点から考察する		信澤 久美子（のぶさわ くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会では様々な社会問題が生じている。おのおの、様々な背景があって問題が起こるのであるが、その社会的背景を分析し、どのように解決するのが妥当か、法的な視点から考察する。		
授業の概要	おのおのの興味に応じて、テーマを絞り、発表者には問題についての発表と報告をしてもらう。それについて、討論を通じて、あるべき解決方法について、考える。発表者は欠席をしないで欲しい。全員が、質問をし、討論に加わること。テーマは、民事法・刑事法・憲法・環境・情報・消費・その他、話し合いによって決める。		
授業計画	第1回	イントロダクション 調べ物、報告の仕方等	
	第2回	テーマに沿っての発表と討論 国際法	
	第3回	テーマに沿っての発表と討論 比較法 1	
	第4回	テーマに沿っての発表と討論 比較法 2	
	第5回	テーマに沿っての発表と討論 環境法 1	
	第6回	テーマに沿っての発表と討論 環境法 2	
	第7回	テーマに沿っての発表と討論 環境法 3	
	第8回	テーマに沿っての発表と討論 情報法 1	
	第9回	テーマに沿っての発表と討論 情報法 2	
	第10回	テーマに沿っての発表と討論 情報法 3	
	第11回	テーマに沿っての発表と討論 消費者法 1	
	第12回	テーマに沿っての発表と討論 消費者法 2	
	第13回	テーマに沿っての発表と討論 消費者法 3	
	第14回	テーマに沿っての発表と討論 その他諸法	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	日頃、新聞を読んで、社会問題への関心を深めておくこと。発表に当たったら、文献・ネット等をしっかりと調べて、まとめあげる。他の人のテーマへの関心を持つこと。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	特に指定しない。条文はインターネットでダウンロードできる。		
評価方法	発表の出来:50% 討論への積極的参加:50%		

社会学理論 a		前期 2 単位	現代教養専攻
社会学理論の知識を理解する		徳久 美生子（とくひさ みおこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、過去から現在へと至る社会学理論の基礎知識を身につけることで、「社会」という曖昧で捉えどころのないものについて考える思考力の取得を目指します。		
授業の概要	はじめに社会学の歴史を概説します。その上で、過去から現在へと至る社会学理論を、原典を読み解きながら理解していきます。テキストを配布し、まず疑問に思ったところを取り出していきます。社会学理論を理解するために大切なのは、何が分からないかを明らかにすることなのです。分からないことを明らかにし、そこからテキストが何を言おうとしているのかをゆっくり理解していきます。テキストを読み解いていくなかで、社会学理論の基礎知識を身につけ、「社会」について考えるし思考力を養っていきます。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション：社会学と社会学理論	
	第2回	社会学を知る 1：西洋近代社会の成立と社会学	
	第3回	社会学を知る 2：西洋近代社会の展開と社会学	
	第4回	社会学を知る 3：西洋近代社会の凋落と社会学	
	第5回	社会学を知る 4：日本の近代化と社会学	
	第6回	社会学理論を学ぶ 1：現代社会学第一世代の社会学 1	
	第7回	社会学理論を学ぶ 2：現代社会学第一世代の社会学 2	
	第8回	社会学理論を学ぶ 3：シカゴ学派の社会学	
	第9回	社会学理論を学ぶ 4：主観と客観の対立	
	第10回	社会学理論を学ぶ 5：社会学理論と構造主義	
	第11回	社会学理論を学ぶ 6：権力論	
	第12回	社会学理論を学ぶ 7：大衆社会論	
	第13回	社会学理論を学ぶ 8：社会システム論	
	第14回	社会学理論を学ぶ 9：グローバル化論	
	第15回	まとめのディスカッション：社会学理論の現在・未来	
準備学習 (予習・復習等)	社会学理論を学ぶ授業では、社会学理論のテキストと一緒に読み解いていきます。個人発表や分担はありませんが、事前にテキストのコピーを配布しますので、読んでから授業に参加して下さい。		
テキスト	授業の中で紹介します。必要に応じて事前にコピーを配布します。		
参考文献	授業の中で紹介します。		
評価方法	コメントペーパー：20% 学期末レポート：80%		

社会学理論 b		後期 2 単位	現代教養専攻
自分と「社会」とのつながりを論理的に考える		徳久 美生子（とくひさ みおこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちは、今、どのような「社会」に生きているのでしょうか。この授業では、曖昧化し多様化している現在「社会」のあり方を社会学理論がどのように分析してきたのかを学ぶことで、自分たちが生きる「社会」の現在を見通す眼力と、見通したものについて深く考える思考力の取得を目指します。		
授業の概要	はじめに、それぞれが日常に感じた疑問、納得出来ないことを洗い出し、議論します。その上で、社会学理論を参照し、自分たちが感じた疑問、納得出来ないことが「社会」とどのような関係をもっているのかを考えていきます。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：個人・関係性・「社会」	
	第2回	ディスカッション1：日常の疑問の洗い出し	
	第3回	ディスカッション2：日常の疑問に関するブレインストーミング	
	第4回	社会現象と社会学理論1：個別テーマに関する検討	
	第5回	社会現象と社会学理論2：個別テーマに関する検討	
	第6回	社会現象と社会学理論3：個別テーマに関する検討	
	第7回	社会問題と社会学理論1：個別テーマに関する検討	
	第8回	社会問題と社会学理論2：個別テーマに関する検討	
	第9回	社会問題と社会学理論3：個別テーマに関する検討	
	第10回	社会問題と社会学理論4：個別テーマに関する検討	
	第11回	社会問題と社会学理論5：個別テーマに関する検討	
	第12回	「社会」の現在と個人1：自分と「社会」とのつながりと断絶を考える	
	第13回	「社会」の現在と個人2：自分と「社会」とのつながりと断絶を考える	
	第14回	「社会」の現在と個人3：自分と「社会」とのつながりと断絶を考える	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業でとりあげる社会現象、社会問題は、履修生の興味・関心のあるものを選んでいきます。自分が関心のある社会問題、社会現象、日常生活を送る中で疑問に思ったことを考えてきて下さい。		
テキスト	授業の中で紹介します。必要に応じて事前にコピーを配布します。		
参考文献	授業の中で紹介します。		
評価方法	個人発表:20% 学期末レポート:80%		

社会調査法演習 a		前期 2 単位	現代教養専攻
女性が働くことの意味を探る I		三具 淳子 (さんぐ じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「女性が働くことの意味を探る II」と合わせて、社会調査の一連の作業を行う。この科目では、社会調査を自ら企画し実施するまでのプロセスを学び、必要な作業スキルを身に着ける。女性を対象として、働くことの意味づけを質的な調査から明らかにするための準備作業となる。		
授業の概要	演習として「女性が働くことの意味を探る」をテーマに社会調査を行う。調査を企画・設計するにあたって、実際に資料を収集し整理する。履修者同士の意見交換を行い調査の方向性を決めて作業を進めていくため、主体的取り組みが重視される。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	なぜ、いま、女性が働くことを考えるのか	
	第3回	先行研究講読(1) ライフコース	
	第4回	先行研究講読(2) 女性のキャリア	
	第5回	先行研究講読(3) ワーク・ライフ・バランス	
	第6回	既存調査データ、官庁統計等の収集と検討(1)	
	第7回	既存調査データ、官庁統計等の収集と検討(2)	
	第8回	調査の方向性の検討 調査企画のブレインストーミング	
	第9回	リサーチ・QUESTIONの明確化	
	第10回	調査対象者の検討	
	第11回	先行研究講読(4) 質的調査法	
	第12回	調査項目の選定とディスカッション	
	第13回	インタビュー・ガイド作成・検討	
	第14回	実査	
	第15回	実査	
準備学習 (予習・復習等)	事前に提示する参考文献を読んで授業に臨む。		
テキスト	使用しない。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加態度:50% 課題:50%		

社会調査法演習 b		後期 2 単位	現代教養専攻
女性が働くことの意味を探る II		三具 淳子 (さんぐ じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「女性が働くことの意味を探る I」と合わせて、社会調査の一連の作業を行う。この科目では、収集したデータを整理・分析し、報告書を作成するまでのプロセスを学び、必要な作業スキルを習得する。社会調査の難しさと同時に、面白さにも触れる。		
授業の概要	演習として「女性が働くことの意味を探る」をテーマに社会調査を行う。調査や調査データの整理・分析には多くの時間を要するので、授業時間以外にも作業を行う場合がある。		
授業計画	第1回	調査データの整理・分析・報告書作成の進め方	
	第2回	トランスクリプト作成(1)	
	第3回	トランスクリプト作成(2)	
	第4回	トランスクリプト作成(3)	
	第5回	インタビュー結果分析の報告と質疑応答(1)	
	第6回	インタビュー結果分析の報告と質疑応答(2)	
	第7回	分析結果の検討(1) 結果の集約方法	
	第8回	分析結果の検討(2) 既存研究からの知見を踏まえた批判的検討	
	第9回	分析結果の検討と示し方	
	第10回	履修者各人の調査報告レポートの執筆上の注意	
	第11回	調査報告書の構成案	
	第12回	調査報告書の作成(1) 調査概要の書き方	
	第13回	調査報告書の作成(2) ケース・スタディの書き方	
	第14回	調査報告書の作成(3) 分析・考察の書き方	
	第15回	調査報告書の完成 反省会	
準備学習 (予習・復習等)	事前に提示する参考文献を読んで授業に臨む。		
テキスト	使用しない。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加態度:50% 課題:50%		

社会学研究法 a		前期 2 単位	現代教養専攻
社会調査の方法を学ぶ I		三具 淳子 (さんぐ じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	この科目では、社会学的探求に不可欠な社会調査に関する基礎的事項を学ぶ。具体的には、社会調査史や調査倫理をふまえながら、社会調査の意義、調査方法の種類等を理解する。さまざまな官庁統計、学術調査などの実例に触れて調査データを読み解く力をつけるとともに、社会調査実施の手順および各ステップにおける作業を把握する。		
授業の概要	基本的に講義科目であるが、既存の調査研究や調査データを入手するスキルを身に着けるために図書館やインターネットを利用した作業も行う。		
授業計画	第1回	社会調査とは何か	
	第2回	社会調査の歴史	
	第3回	国勢調査や官庁統計、学術統計の意義を学ぶ	
	第4回	調査方法の種類と調査倫理	
	第5回	社会調査実施の諸段階	
	第6回	調査の企画(1) 調査研究の着想・先行研究のフォローと課題の鮮明化	
	第7回	調査の企画(2) 既存の統計データの分析・過去の調査のフォロー	
	第8回	調査の設計(1) 調査方法の選定	
	第9回	調査の設計(2) 仮説構成	
	第10回	調査の設計(3) 質問票の作り方	
	第11回	実査(1) サンプルング	
	第12回	実査(2) 郵送調査の流れ	
	第13回	データ化	
	第14回	分析・公表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	社会への関心がなければ、矛盾や問題に気付くことはできない。日ごろから、新聞等に目をとおす習慣を身に着けよう。		
テキスト	『新・社会調査へのアプローチ』 ミネルヴァ書房		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	コメントカード、課題:20% 期末レポート:80%		

社会学研究法 b		後期 2 単位	現代教養専攻
社会調査の方法を学ぶⅡ		三具 淳子 (さんぐ じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	社会のある問題に関心をもち、それを研究課題として自ら課題や仮説を設定し探求しようとする際、その目的に適合する調査方法を選択して調査を行い、収集したデータを整理・分析する必要がある。この科目では、そのために必要な基本的知識とスキルをマスターする。		
授業の概要	基本的に講義科目であるが、調査票作成、データ整理などの作業も授業内で行う。		
授業計画	第1回	調査の目的を達成するには	
	第2回	調査の構想と調査方法	
	第3回	仮説の設定	
	第4回	調査の設計と実施準備	
	第5回	調査対象の決定と標本抽出	
	第6回	質問票の作り方(1)質問文の作り方	
	第7回	質問票の作り方(2)選択肢の作り方・質問票の構成	
	第8回	調査の実施方法	
	第9回	量的調査データの整理(1)データ整理の流れ	
	第10回	量的調査データの整理(2)エディティング・コーディング	
	第11回	量的調査データの分析	
	第12回	インタビュー調査の企画と質問項目の明確化	
	第13回	質的調査データの整理	
	第14回	質的調査データの分析	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	社会調査に基づいたすぐれた作品を読むことも重要である。授業で取り上げた文献等をじっくり読んで社会調査の醍醐味を味わってほしい。		
テキスト	『新・社会調査へのアプローチ』 ミネルヴァ書房		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	コメントカード、課題:20% 期末レポート:80%		

家族社会学特講 a		後期 2 単位	現代教養専攻
ライフコースと家族		原 葉子 (はら ようこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>(1) 現代のライフコースの変容について、その社会的背景を含めて理解する。</p> <p>(2) 家族を考えるための視座を習得し、具体的なテーマについて自ら議論を組み立てることができるようになる。</p>		
授業の概要	<p>家族は、その成員（メンバー）が年を重ねていくに従って、直面する課題が変化する。この授業では、現代社会におけるライフコースの変容を考察するとともに、ライフコース中盤以降に位置づく家族成員が抱える問題、とくに女性の役割や親子関係を中心的なテーマとして考えていく。授業形式は講義が中心だが、できるだけグループディスカッションを取り入れる。また、リアクションペーパーへの記入を通じて、考察力を養っていく。</p>		
授業 計画	第1回	個人化する家族	
	第2回	家族と近代	
	第3回	ライフコースの変容 (1) 配偶者選択	
	第4回	ライフコースの変容 (2) 少子化	
	第5回	ライフコースの変容 (3) 高齢化	
	第6回	女性と主婦役割	
	第7回	専業主婦の現在	
	第8回	既婚女性と仕事	
	第9回	家事労働の配分	
	第10回	成人子との関係	
	第11回	親子関係の葛藤	
	第12回	高齢期の家族関係	
	第13回	家族のオルタナティブ	
	第14回	家族を再考する	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>テーマへの理解を深めるため、参考文献の予習や、課題の提出を求めることがあります。詳細は授業のなかで説明します。また普段から新聞等に目を通し、家族をめぐる問題が社会でどのように議論されているのか、知識を得ておきましょう。</p>		
テキスト	なし。毎回プリントを配布する。		
参考文献	講義のなかで適宜紹介する。		
評価方法	平常点（課題など）:50% テスト:50%		

女性学 a		前期 2 単位	現代教養専攻
ジェンダー規範の形成と変容		藤田 和美 (ふじた かずみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・近代以降の女性解放運動から現代のジェンダー論・女性学まで、学問研究の理論的枠組みや方法論など学際的な研究成果を学び、ジェンダー研究の概念を理解する。 ・ジェンダー平等に向けた諸外国の取り組みと日本の現状を学び、現代社会が直面している課題を理解する。 		
授業の概要	全体を①ジェンダー研究②ジェンダー平等に向けた諸外国の取り組みに分ける。①では、ジェンダー研究の歴史的経緯とその成果を学ぶ。②では、ジェンダー平等が進んでいる北欧をはじめとして、欧米やアジアなど諸外国のジェンダー平等に向けた取り組みを学び、日本が直面している問題の解決策を検討する。		
授業 計画	第1回	現代日本のジェンダー問題	
	第2回	女性解放運動の歴史	
	第3回	ジェンダー研究の今	
	第4回	ジェンダー研究の概念	
	第5回	ジェンダー規範の形成と変容	
	第6回	北欧の結婚と子育て	
	第7回	北欧のクォータ制	
	第8回	欧米のフェミニズム運動史	
	第9回	欧米のフェミニスト研究	
	第10回	欧米の男女平等政策	
	第11回	欧米のセクシュアリティと家族	
	第12回	アジアの女性労働	
	第13回	アジアにおける女性への暴力	
	第14回	日本の男女平等政策	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業後に感想文を提出する。月一回、課題のレポートを提出する。		
テキスト	特に定めない。資料を配布する。		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	レポート:50% 授業感想文:30% 宿題:20%		

女性学 b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代社会とジェンダー		藤田 和美 (ふじた かずみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・男女平等社会の実現に向けた、国や地方自治体の施策や企業の取り組みを学び、現代社会が直面しているジェンダー問題を理解する。 ・私たちを取り巻く文化現象において重層的に形成されているジェンダーを学び、現代日本社会のジェンダー構造や問題解決に向けた取り組みを理解する。 		
授業の概要	<p>全体を①国や地方自治体の施策と企業の取り組み②文化現象におけるジェンダーに分ける。①では、現代の国や地方自治体における男女平等に関する法や政策や、各企業で展開している取り組みを学ぶ。②では、学生にとって身近な、恋愛・結婚・美・ファッション・メディア・趣味・娯楽・スポーツなど生活習慣・文化現象におけるジェンダーを分析し、それぞれの関係性の検討を通じてジェンダーの多様性を探る。</p>		
授業計画	第1回	ジェンダーとは何か	
	第2回	法律とジェンダー	
	第3回	男女共同参画の施策	
	第4回	地方自治体における取組み	
	第5回	男女共同参画センターとは	
	第6回	企業における女性活用	
	第7回	ワーク・ライフ・バランス	
	第8回	美、ファッション、化粧におけるジェンダー	
	第9回	女性とダイエット	
	第10回	メディアにおける女性像	
	第11回	スポーツとジェンダー	
	第12回	趣味・娯楽とジェンダー	
	第13回	芸術表現とジェンダー	
	第14回	コミックとジェンダー	
	第15回	発表とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、授業後に感想文を提出する。月一回、レポート課題を提出。		
テキスト	特に定めない。資料を配布する。		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	学期末レポート:50% 発表:10% 課題レポート:15% 授業感想文:25%		

現代社会特講（経済） a		前期 2 単位	現代教養専攻
現代社会における法と経済分析とその基礎知識		藤森 裕美（ふじもり ひろみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、経済学の理解を深めるとともに、現代社会における法と経済分析の知識を習得することが目標です。		
授業の概要	法と経済学は、主にゲーム理論のパラダイム上に構築されており、それに基づく社会問題に対する解決策を提案する分野です。この授業では、まず、マイクロ経済学の考え方を概観し、次にゲーム理論について学びます。最後に、法と経済学の重要テーマである、効率と公平について学びます。ゲーム理論を学んだことがなくとも、また、法と経済学の初学者でも、各回の学習を積み重ねることで、自然と理解できるように一緒に取り組んでいきましょう。		
授業 計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	マイクロ経済学の基礎1：合理性	
	第3回	マイクロ経済学の基礎2：パレート効率性	
	第4回	マイクロ経済学の基礎3：コースの定理	
	第5回	マイクロ経済学の基礎4：取引費用	
	第6回	マイクロ経済学の基礎5：外部性	
	第7回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用1：ナッシュ均衡	
	第8回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用2：囚人のジレンマ	
	第9回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用3：プリンシパル・エージェント	
	第10回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用4：バックワードインダクション	
	第11回	法と経済学における効率性と公平性1：市場の効率的資源配分	
	第12回	法と経済学における効率性と公平性2：独占禁止法	
	第13回	法と経済学における効率性と公平性3：費用便益分析	
	第14回	法と経済学における効率性と公平性4：カルドア・ヒックス基準	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	この演習科目は、以下のテキストを主要文献とします。次回授業で扱う項目に必ず目を通し、準備学習をしてください。事後学習については授業中に言及します。なお、7月6日～7月18日の2週間は、担当者がシカゴ大学法と経済学サマープログラムに参加予定であるため、2回分の補講を行います。補講実施日時については、受講者と相談の上、決定します。		
テキスト	宍戸善一・常木淳『法と経済学：企業関連法のマイクロ経済学的考察』有斐閣、2004年。		
参考文献	ロバート・クーター、トーマス・ユーレン 『新版 法と経済学』 商事法務研究会、1997年。		
評価方法	平常点:30% 期末試験又はレポート:70%		

現代社会特講（経済）b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代社会と「法と経済学」		藤森 裕美（ふじもり ひろみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、複雑化し多様化する現代社会のしくみを理解するにあたり、法と経済学への関心を喚起し、法の隠れた機能を学ぶことを目標とします。		
授業の概要	この授業では、法や判例がもたらす社会経済的な影響を分析する「法と経済学」という分野を扱います。法や判例が、ひとびとの行動や豊かさにとどのような影響を及ぼすのかという論点から、法律や政策の効果を、実践的に分析していきます。この科目を履修予定の方は、「現代社会特講（経済）a」あるいは「現代社会特講（経済）A」の履修をおすすめします。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	法と経済学とは	
	第3回	金利に対する市場介入はどうあるべきか	
	第4回	判例と法と経済学による考察	
	第5回	解雇規制はだれを保護するのか	
	第6回	判例と法と経済学による考察	
	第7回	河川の流水はどのように配分すべきか	
	第8回	判例と法と経済学による考察	
	第9回	担保不動産からの債権回収はなぜ進まないのか	
	第10回	判例と法と経済学による考察	
	第11回	犯罪抑止にとって刑罰とはなにか	
	第12回	判例と法と経済学による考察	
	第13回	企業規律に責任を持つのはだれか	
	第14回	判例と法と経済学による考察	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	この演習科目は、以下のテキストを主要文献とします。授業は、2回で1セットのテーマを扱いますので、2回とも出席するようにしてください。また、次回授業で扱う項目に必ず目を通し、準備学習をしてください。事後学習については授業中に言及します。		
テキスト	福井秀夫 『ケースからはじめよう法と経済学—法の隠れた機能を知る』 日本評論社 2007年		
参考文献	授業中に別途紹介します。		
評価方法	平常点:30% 期末試験又はレポート:70%		

現代社会特講（経営） a		前期 2 単位	現代教養専攻
経営学の基礎概念、国際経営		宇田 美江（うだ みえ）	
授業の到達目標及びテーマ	①日本企業が直面してきた外部環境を歴史的にみて理解する ②グローバルに活動する日本企業の事例から、経営戦略、組織構造、人的資源管理等の実際を理解し、成果と課題を考察する		
授業の概要	現代社会における企業が直面している課題と対応づけながら、企業の役割や機能、経営の意味等、経営学の基礎的概念を解説する。まず、日本企業が戦前、戦後、高度経済成長期、バブル経済期、失われた20年と、どのような特徴を持ち、どのようにマネジメントが変容してきたかに触れる。その上で、さまざまな企業の事例を基に、日本企業の国際経営における経営戦略・組織構造・生産・マーケティング・人的資源管理等の現代的課題についての考察を試みる。最終的に企業が置かれている現状と現代企業に求められている要因を理解し、現代の日本企業のあり方を模索する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	日本企業のマネジメントの変容、国際経営とは	
	第3回	国際経営戦略	
	第4回	国際経営組織	
	第5回	国際マーケティング	
	第6回	海外生産	
	第7回	国際研究開発とイノベーション	
	第8回	国際人的資源組織	
	第9回	国際経営の現在① 自動車産業	
	第10回	国際経営の現在② エレクトロニクス産業	
	第11回	国際経営の現在③ IT産業	
	第12回	国際経営の現在④ 流通	
	第13回	国際経営の現在⑤ 生活文化財産業	
	第14回	国際経営マネジメントの変革	
	第15回	国際経営の将来像 修了論文に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、一方的に講義する形ではなく、担当者を決め、発表したり、全体で討論したりして主体的に取り組み、相互に学習をするスタイルをとります。何かをあらかじめ調べてくる等、課題を与えることも多くあります。テキストに基づいて授業を進めます。		
テキスト	開講時に指示する。		
参考文献	吉原英樹、白木三秀、新宅純二郎、浅川和宏編（2013）『ケースに学ぶ国際経営』有斐閣ブックス ハーバード・ビジネス・スクール（2010）『ケース・スタディ 日本企業事例集』ダイヤモンド社		
評価方法	課題提出や発表:50% 授業への参画:30% 期末レポート:20%		

現代社会特講（経営）b		後期 2 単位	現代教養専攻
経営学、経営管理史の理解、管理ツール・問題解決手法の修得		奈良 堂史（なら たかし）	
授業の到達目標及びテーマ	本講義では、現代社会を生きる企業人（組織人）に求められる教養としての「経営理論」および「管理手法（管理ツール、問題解決手法）」の基礎的理解・修得を講義目標とする。具体的には、次の次項に示す2点を講義内容とし、15回実施する講義を2部構成とする。		
授業の概要	まず、第1部では「経営管理に関する理論の基礎的理解」を目指した講義を行う。なお、受動的な理論学習とならないよう、ケーススタディやグループワーク、課題提出や作業学習などを通じて、現代社会と経営理論との関連性理論と現実の経営問題の関連性を強調しながら講義を進めていく。 次に第2部では、「経営管理に関する手法・ツールの修得」を目指した講義を行う。これらを通じて、現代社会の企業人（組織人）に求められる重要な素養の1つである「問題解決力」を養成する。		
授業計画	第1回	ガイダンス（本講義の進め方、履修上の注意、受講者アンケートなど）	
	第2回	受講者との問題意識の共有——いま、社会で何が起きているのか？	
	第3回	経営学はどのような学問か？（経営学を学ぶ意義、研究領域と研究課題）	
	第4回	現代企業の特徴	
	第5回	経営管理の歴史(1)——科学的管理法と経営学のパイオニア	
	第6回	経営管理の歴史(2)——管理における人間性への配慮	
	第7回	経営管理の歴史(3)——管理への科学的アプローチ	
	第8回	経営管理の歴史(4)——環境・資源と管理組織（経営戦略論の生成と発展）	
	第9回	経営管理の歴史(5)——情報・知識と経営管理	
	第10回	管理ツール・問題解決技法の修得(1)——系統図（因果関係分析）	
	第11回	管理ツール・問題解決技法の修得(2)——プロセス図（過程分析）	
	第12回	管理ツール・問題解決技法の修得(3)——パレート図（ABC分析）	
	第13回	管理ツール・問題解決技法の修得(4)——特性要因図（要因分析）	
	第14回	管理ツール・問題解決技法の修得(5)——KJ法（クラスター分析）	
	第15回	半期のまとめと期末試験について	
準備学習（予習・復習等）	毎回、講義の最後に課される宿題（予習・復習を含む）に取り組み、次回の講義で提出する。なお、宿題の内容について講義内で発表させることもある。		
テキスト	特になし（毎回の講義内にて担当者作成のプリント等を配布する） その他、必要に応じて講義内にて支持・紹介する。		
参考文献	■片岡信之・齊藤毅憲・佐々木恒男・高橋由明・渡辺俊編著（2010）『アドバンスト経営学』中央経済社。 ■坂下昭宣（2007）『経営学への招待（第3版）』白桃書房		
評価方法	期末テスト:50% 平常点:30% レポート等の課題提出:20%		

現代社会特講（生活） a		前期 2 単位	現代教養専攻
現代日本の食糧事情		谷本 信也（たにもと しんや）	
授業の到達目標 及びテーマ	他国からの食糧調達、調理加工食品の利用に大きく依存している中での飽食の実態を理解する。さらに、健康面、経済面や品質など幅広くどのような利益、不利益を我々は受けているのかを理解できるようにする。食に関して、今どのように行動しなければならないのかを、一人ひとりそれぞれが異なった結論であっても、答えを洞察できるようにしてゆく。		
授業の概要	他国からの食糧調達、調理加工食品の利用に大きく依存している実態を説明。それが健康面、経済面や品質など幅広くどのような利益、不利益を我々は受けているのかを学ぶ。他国への食糧依存にどのような問題があるのかも検討する。		
授業 計画	第1回	世界の食糧生産様式	
	第2回	世界と日本の食糧生産と輸出入 先進国と開発途上国	
	第3回	世界と日本の食糧生産と輸出入 日本の過去と現状	
	第4回	世界と日本の食糧生産と輸出入 これからの日本	
	第5回	生鮮食料品	
	第6回	貯蔵方法の進化と利益、不利益	
	第7回	加工食品	
	第8回	加工上の副反応	
	第9回	中食と外食	
	第10回	飽食と生活習慣病1 エネルギー	
	第11回	飽食と生活習慣病2 その他の栄養素	
	第12回	稲作	
	第13回	各国の政策	
	第14回	日本の政策	
	第15回	今どのように行動しなければならないのか	
準備学習 (予習・復習等)	毎週の各授業項目にあうものを、参考文献などで目を通し、概要を簡単に学んでおくこと。授業後は授業で使われた専門用語を辞書・字書などで理解しておくこと。		
テキスト	適当なものが無く指定しません		
参考文献	食品大百科事典（朝倉）、ヒューマンニュートリション（医歯薬出版）、世界の農業と食糧問題のすべてがわかる本（ナツメ社）、食糧自給率の罫（朝日新聞出版）、食糧の世界地図（丸善）、新たな食糧・農業・農村基本計画の検討課題と具体化に向けて（大成出版）、栄養・食糧学データハンドブック（同文書院）		
評価方法	授業の積極的取り組み:40% 試験評価:60%		

現代社会特講（生活）b		後期 2 単位	現代教養専攻
食を中心とする健康寿命の延伸と生活の改善		谷本 信也（たにもと しんや）	
授業の到達目標 及びテーマ	健康に影響する因子を理解し、どのように改善するべきかを理解することが目標であり、食を中心とした因子、その具体的な影響がテーマとなる。		
授業の概要	どのようなものごとが身体に影響を与えどのような結果になるのかを学ぶ。不健康に傾く場合にはどのようにして改善を図るのかもまなんでゆく。		
授業計画	第1回	体の成り立ち	
	第2回	細胞や組織、器官間のクロストーク	
	第3回	栄養素と体の関係	
	第4回	栄養素必須量	
	第5回	エネルギー摂取と消費	
	第6回	現代の病と生活習慣病	
	第7回	アレルギー	
	第8回	腸内微生物	
	第9回	腸内微生物と機能性食品	
	第10回	特定保健用食品と機能性食品	
	第11回	高血圧や脳血管障害	
	第12回	糖尿病	
	第13回	筋肉、骨、	
	第14回	がんその他の病と食品	
	第15回	健康寿命	
準備学習 (予習・復習等)	毎週の各授業項目にあうものを、参考文献などで目を通し、概要を簡単に学んでおくこと。授業後は授業で使われた専門用語を辞書・字書などで理解しておくこと。		
テキスト	適当なものが無く指定しません。		
参考文献	神経・内分泌・免疫系のクロストーク（学会出版センター）、ヒューマンニュートリション（医歯薬出版）、栄養・食糧学データハンドブック（同文書院）、機能性食品の事典（朝倉書店）、食品と体（朝倉書店）、		
評価方法	授業の積極的取り組み:40% 試験の評価:60%		

現代社会特講（技術） a		前期 2 単位	現代教養専攻
現代の科学技術とその問題点		松村 紀明（まつむら のりあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	さまざまな意味で巨大化した現代の科学技術は、社会に大きな影響を与えており、色々な問題を引き起こしている。この授業では、科学技術に関する具体的な事例を学生とともに検討しながら、科学技術のありかたについて客観的に再検討し、そのあるべき姿を探求する。学生にとっては、現在の科学技術のありようが「唯一無二」のものでもなければ「上から与えられるブラックボックス」でもないということを理解することが目標となる。後期に開講される「現代社会特講（技術） b」とあわせて受講することが望ましい。なお、授業計画における各回の内容は一例である。		
授業の概要	先端医療の問題や原発事故の問題など、科学技術は現代社会に大きな影響を与えており、様々な問題を引き起こしている。この授業では、まず現代の科学技術が歴史的にどのように形成されてきたのかを講義や画像・映像資料などをもとに概観する。その上で、現代の科学技術の全体的な特徴について講義をおこない、社会と科学技術の関係について個別事例を検討するための基礎知識を身につけさせる。以上の後、学生の興味関心を念頭に、具体的な事例をセレクトし（輪読図書を選定）学生に発表させ議論を行う。講義中心の授業から議論中心の授業へと連続的に行っていくことによって、学生に、科学技術のあり方や社会と科学技術の関係を主体的に考える力を身につけさせることを目指す。		
授業計画	第1回	ガイダンス：授業の進め方、発表の仕方などについての説明	
	第2回	近代の科学技術がどのように形成されたのか？（講義あるいは映像資料）	
	第3回	なぜ現代の科学技術が問題なのか？（講義あるいは映像資料）	
	第4回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・脳死臓器移植 1）	
	第5回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・脳死臓器移植 2）	
	第6回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・脳死臓器移植 3）	
	第7回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・再生医療 1）	
	第8回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・再生医療 2）	
	第9回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・再生医療 3）	
	第10回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・医療のIT化とプライバシー 1）	
	第11回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・医療のIT化とプライバシー 2）	
	第12回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・医療のIT化とプライバシー 3）	
	第13回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・地球温暖化 1）	
	第14回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・地球温暖化 2）	
	第15回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・地球温暖化 3）	
準備学習 (予習・復習等)	輪読対象のテキストは、発表者以外の学生も購入し事前に読んでおくこと。これは授業に参加するための必須条件である。		
テキスト	開講時に受講者と相談して決めるが、以下にテキストの例を挙げておく。2～3冊程度を読む予定である。 ・松尾瑞穂『インドにおける代理出産の文化論-出産の商品化のゆくえ』 ・柴田鉄治『科学事件』		
参考文献	選定するテキストによって異なるので、授業時に随時紹介する。		
評価方法	担当時の発表内容:70% 授業（議論）への参加:30%		

現代社会特講（技術）b		後期 2 単位	現代教養専攻
現代の科学技術とその問題点		松村 紀明（まつむら のりあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	さまざまな意味で巨大化した現代の科学技術は、社会に大きな影響を与えており、色々な問題を引き起こしている。この授業では、科学技術に関する具体的な事例を学生とともに検討しながら、科学技術のありかたについて客観的に再検討し、そのあるべき姿を探求する。学生にとっては、現在の科学技術のありようが「唯一無二」のものでもなければ「上から与えられるブラックボックス」でもないということを理解することが目標となる。前期に開講される「現代社会特講（技術）a」とあわせて受講することが望ましい。なお、授業計画における各回の内容は一例である。		
授業の概要	先端医療の問題や原発事故の問題など、科学技術は現代社会に大きな影響を与えており、様々な問題を引き起こしている。この授業では、まず現代の科学技術が歴史的にどのように形成されてきたのかを講義や画像・映像資料などをもとに概観する。その上で、現代の科学技術の全体的な特徴について講義をおこない、社会と科学技術の関係について個別事例を検討するための基礎知識を身につけさせる。以上の後、学生の興味関心を念頭に、具体的な事例をセレクトし（輪読図書を選定）学生に発表させ議論を行う。講義中心の授業から議論中心の授業へと連続的に行っていくことによって、学生に、科学技術のあり方や社会と科学技術の関係を主体的に考える力を身につけさせることを目指す。		
授業計画	第1回	ガイダンス：授業の進め方、発表の仕方などについての説明	
	第2回	近代の科学技術がどのように形成されたのか？（講義あるいは映像資料）	
	第3回	なぜ現代の科学技術が問題なのか？（講義あるいは映像資料）	
	第4回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・オゾン層破壊1）	
	第5回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・オゾン層破壊2）	
	第6回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・オゾン層破壊3）	
	第7回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・砂漠化と農業1）	
	第8回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・砂漠化と農業2）	
	第9回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・砂漠化と農業3）	
	第10回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・Google革命1）	
	第11回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・Google革命2）	
	第12回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・Google革命3）	
	第13回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・ビッグデータ1）	
	第14回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・ビッグデータ2）	
	第15回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・ビッグデータ3）	
準備学習 (予習・復習等)	輪読対象のテキストは、発表者以外の学生も購入し事前に読んでおくこと。これは授業に参加するための必須条件である。		
テキスト	開講時に受講者と相談して決めるが、以下にテキストの例を挙げておく。2～3冊程度を読む予定である。 ・松尾瑞穂『インドにおける代理出産の文化論-出産の商品化のゆくえ』 ・柴田鉄治『科学事件』		
参考文献	選定するテキストによって異なるので、授業時に随時紹介する。		
評価方法	担当時の発表内容:70% 授業（議論）への参加:30%		

現代社会特講（環境） a		前期 2 単位	現代教養専攻
環境科学		廣田 道夫（ひろた みちお）	
授業の到達目標 及びテーマ	環境問題の背景には、急速な人口増加や、それに伴う食糧や資源・エネルギーの確保といった問題が横たわっています。物質的な豊かさを求めるだけでなく、環境と調和した社会を構築することは、現代社会に生きる我々にとって大きな課題の1つですが、そのためには環境問題の科学的理解が不可欠です。ここでは環境の諸問題について、その科学的基礎を理解できるように講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。我が国の公害・環境問題を具体例として、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染の化学的メカニズム、健康被害、浄化対策、また一般廃棄物、産業廃棄物、特に有害化学物質の処理、リサイクル等について説明します。		
授業計画	第1回	環境科学入門	
	第2回	人口問題、食糧問題	
	第3回	資源・エネルギー問題の現状	
	第4回	新しいエネルギー	
	第5回	自然の浄化作用	
	第6回	環境汚染物質	
	第7回	有害化学物質	
	第8回	大気汚染（ガス）	
	第9回	大気汚染（エアロゾル）	
	第10回	大気汚染（光化学スモッグ）	
	第11回	水質汚濁（河川・湖沼）	
	第12回	水質汚濁（海洋）	
	第13回	下水処理	
	第14回	廃棄物と処理の現状	
	第15回	廃棄物のリサイクル	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	世良力「環境科学要論」（第三版）（東京化学同人）		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

現代社会特講（環境）b		後期 2 単位	現代教養専攻
地球環境問題		廣田 道夫（ひろた みちお）	
授業の到達目標 及びテーマ	産業革命以後、人間活動は際限なく拡大し、地球全体に影響を及ぼすようになってきました。地球が有限であるということ、そしてその中で持続可能な発展を展開していくことは、現代社会に生きる我々に課せられた大きな課題です。この講義では個々の地球環境問題に関するメカニズム、影響、対策、将来予測等について、その基礎を理解できるように講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。地球大気の構造・組成、地球温暖化、オゾン層破壊、熱帯雨林の減少、PM2.5問題等について説明します。		
授業計画	第1回	大気の鉛直構造	
	第2回	大気の組成、鉛直分布	
	第3回	地球温暖化（現状）	
	第4回	地球温暖化（将来予測）	
	第5回	温室効果ガスの監視-CO2	
	第6回	温室効果ガスの監視-CH4, N2O	
	第7回	オゾン層破壊（オゾンの生成・消滅）	
	第8回	オゾン層破壊（フロンガスの影響、オゾンホール）	
	第9回	酸性雨	
	第10回	PM2.5問題	
	第11回	熱帯雨林の減少	
	第12回	生物多様性の保全	
	第13回	持続可能な発展	
	第14回	新しいエネルギー—太陽光発電・風力発電	
	第15回	新しいエネルギー—地熱発電・その他	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	小島次雄、川平浩二、藤倉良「これからの環境科学」（化学同人）		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

情報社会論 a		前期 2 単位	現代教養専攻
情報と社会		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	情報化によって社会がどのように進展してきているのかを理解し、大量の情報に振り回されずに建設的に情報を活用できる力を身につけることを目的としている。		
授業の概要	情報及び情報化とは何かを押さえ、インターネットにおける新しいコミュニケーションの方法の特徴について知り、自己の情報行動について考える。また、報道や図書館、教育、生活の領域における情報化について具体的に検討し著作権や個人情報保護について考える。最後に国の情報政策に触れてまとめる。		
授業 計画	第1回	情報化とは何か	
	第2回	産業社会から情報社会へ	
	第3回	情報社会の進展	
	第4回	メディアと情報行動	
	第5回	インターネット社会（1）インターネットコミュニケーション	
	第6回	インターネット社会（2）ビッグデータの活用	
	第7回	インターネット社会（3）インターネットと政治	
	第8回	情報と報道（1）マスメディアと報道	
	第9回	情報と報道（2）メディアとジェンダー	
	第10回	文化と情報化	
	第11回	教育と情報化	
	第12回	生活と情報化（1）医療・福祉等	
	第13回	生活と情報化（2）ビックデータ時代のプライバシー	
	第14回	著作権，個人情報保護	
	第15回	まとめ：我が国の情報関連政策	
準備学習 (予習・復習等)	情報をインプットする，情報をアウトプットする，ことを常に意識して授業に参加してもらいたい。事前に参考文献を紹介するので，その個所をよんでくること。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	課題:70% 授業への取り組み:30%		

生活文化特講 a		前期 2 単位	現代教養専攻
“住”生活の文化と伝統を知る 《住宅、神社、寺、城、工芸》のデザインとつくり ー 日本人の美の基本：日本建築と伝統工芸 ー		山田 岳晴（やまだ たけはる）	
授業の到達目標 及びテーマ	○ 日本の生活を縁の下で支えるのは“住”文化です。現在の和風住宅にもつながる日本の建物と工芸品について、“デザイン”と“つくり”を理解します。 ○ それらがどのように変化したか・発展したかを理解します。「モノ」のもつ意味が、時代を超えて共感が持てる“デザイン”や“美しさ”となることを学び、生活のなかに生かせる知識を習得します。 ○ 見学を含めた、ビジュアル的な最新の研究成果の講義によって、現在流布している諸説を見直し、生活文化の本当のすがたを理解します。		
授業の概要	最初に、日本建築の基本を確認します。 前半は、日本住宅について、全体的な特色を理解した後に、“つくり”をとり上げて、現代にも生かされている特質を明らかにしていきます。 後半は、神社建築・寺院建築・城郭建築について、全体的な知識の習得と、実例をもとにして本質の理解を進めます。 最後に、伝統工芸品について、女性と男性の生活に注目し、美しさのうしろにある実態をわかりやすく講義します。 毎回、図面や写真、絵画など、多くのビジュアル資料を配付し、各回完結での講義を基本とします。		
授業計画	第1回	日本の建築 つくり、かたち、デザインの変化／ 日本住宅1 日本住宅の特徴	
	第2回	日本住宅2 竪穴式住居・高床式住居(たてあなしき・たかゆかしきじゅうきょ)／寝殿造(しんでんづくり)	
	第3回	日本住宅3 書院造(しょいんづくり)	
	第4回	日本の建築 文化財建造物の現地調査(見学・小レポート)	
	第5回	日本住宅4 茶室(ちゃしつ)	
	第6回	日本住宅5 農家建築・町家建築(のうかけんちく・まちやけんちく)	
	第7回	神社建築1 本殿(ほんでん)の形式、神社のデザインと変化	
	第8回	神社建築2 厳島神社(いつくしまじんじゃ)〔海上社殿と寝殿造〕	
	第9回	寺院建築1 本堂(ほんどう)の形式、寺院のデザインと変化	
	第10回	寺院建築2 塔(とう)〔五重塔と耐震性〕	
	第11回	城郭建築1 城の施設とデザイン、石垣	
	第12回	城郭建築2 天守(てんしゅ)〔望楼型と層塔型〕	
	第13回	伝統工芸1 化粧(けしょう)と浮世絵(うきよえ)	
	第14回	伝統工芸2 甲冑(よろいかぶと)	
	第15回	日本の建築と伝統工芸 総括(記述試験)	
準備学習 (予習・復習等)	授業に登場する建物などをインターネットなどで見ておくと、より理解がしやすくなります。		
テキスト	テキストは不要です。毎回、授業に使う資料を配布します。 (最新の研究成果に基づく講義ですので、一般的な住宅史等の教科書の内容とは異なることが多くあります。)		
参考文献	特になし。 (日本建築史、文化財学の授業ですので、それらに関する図書一般の図面など資料部分は参考になります。)		
評価方法	受講姿勢と小レポート:20% 記述試験:80%		

生活文化特講 b		後期 2 単位	現代教養専攻
近代の服飾文化		根本 由香 (ねもと ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	西洋文化の影響を受け洋装を受容していった明治から昭和にかけて、人々が西洋趣味に日本的感覚や伝統的価値を融合させ、新しい服飾のあり方を模索していたことを理解する。 また、絵画や文学に描写された服飾に注目し、それらを解釈することができるようになる。		
授業の概要	明治期にもたらされた西洋文化は日本人の衣生活を大きく変化させる契機となった。このような事例を洋装と和装の両面からとり上げ解説する。 さらに、近代の世相や心情がうかがえる絵画や文学の中の服飾が何を語っているか、画像資料・文献資料を用いて読み取っていく。		
授業計画	第1回	イントロダクション 服飾をとりまくもの	
	第2回	文明開化期の洋装	
	第3回	明治の「ハイカラ」	
	第4回	衣服改良運動	
	第5回	和洋折衷一和装に採り入れられた洋装	
	第6回	断髪と女性	
	第7回	絵画・小説に描写された服飾の見方	
	第8回	新聞小説の挿絵と服飾① 明治の女学生	
	第9回	新聞小説の挿絵と服飾② 家庭小説のヒロイン	
	第10回	描かれた女性① 竹久夢二と大正ロマン	
	第11回	描かれた女性② 高島華宵とモダンガール	
	第12回	絵画の服飾をよみとく① 暮らしの中の歌舞伎	
	第13回	絵画の服飾をよみとく② 季節の暮らし	
	第14回	人と「おしゃれ」	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業内で課題を指示した場合には、期限までに取り組んで提出する。 プリント・ノートの整理・復習をする。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	授業で随時紹介する。		
評価方法	授業感想文・課題:40% レポート:60%		

比較生活文化 a		前期 2 単位	現代教養専攻
比較食文化		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>①人々が何を食糧として選択してきたのか、その背景を理解する。 ②異文化との交流により、食文化が変容し、それが現在進行形であることを認識する。 ③自らも食文化の継承者であり、同時に創造者であることを認識する。</p>		
授業の概要	<p>本講義では、生活文化の中でも「食」に焦点をあてる。異なった自然環境や社会環境において、人は何を食糧として選択してきたのか、食物の起源や発祥、伝播、調理方法、食べ方などを比較分析することで、なぜ多様な食文化が存在するのかを考える。 また、国や地域の人々の「食物」に込めた思い、マナーやタブー（食物禁忌）など文化的背景について学ぶ。</p>		
授業計画	第1回	授業のすすめ方 主食とは何か？世界の主食を考える	
	第2回	コメの食文化	
	第3回	ムギ、トウモロコシの食文化	
	第4回	麵の食文化	
	第5回	食法と食事マナー	
	第6回	食物禁忌と宗教 1—ユダヤ教, キリスト教, イスラム教	
	第7回	食物禁忌と宗教 2—上座部仏教, 大乘仏教	
	第8回	大豆食品の食文化	
	第9回	肉食の変遷	
	第10回	出汁の食文化	
	第11回	卵の食文化	
	第12回	酒と飲料の食文化	
	第13回	食と儀礼	
	第14回	行事食	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	適宜課題を出す。		
テキスト	毎回、プリントを配布する。		
参考文献	授業中、適宜紹介する。		
評価方法	レポート:30% 受講態度:20% 試験:50%		

比較生活文化 b		後期 2 単位	現代教養専攻
食文化の時代変遷		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の食文化を歴史の変遷から理解する。日本の食の成り立ち、すなわち過去の食スタイルが現在に至るまでの過程を学ぶことで、現時点から将来の食を考える力を身につける。		
授業の概要	日本の食文化は、様々な国・地域の影響を受けながら形成してきた。そこで、どの外来文化を受容し、どのように融合させ、変容、発展していったのか、あるいはどのように衰退したのかについて、時代ごとに現代の食と比較しながら、日本の食文化の成り立ちを紐解いていく。各時代の自然環境および政治、経済、宗教、文化などの社会情勢を背景に、食スタイルの過去から現在に至るまでの過程を学ぶ。そして現時点から将来の食を考える力を身につける。		
授業 計画	第1回	授業の進め方の説明、食文化の成り立ち	
	第2回	旧石器時代・縄文・弥生時代—厳しい自然環境下での食物、稲の伝播	
	第3回	古墳時代から飛鳥時代—唐の影響、米と律令国家（政治）、古代チーズ	
	第4回	奈良時代から平安時代—貴族食の発達、大饗料理	
	第5回	鎌倉時代—武士の食事、携帯・保存食、市の発達	
	第6回	精進料理—禅風食の普及、仏教の一般大衆化	
	第7回	室町時代から戦国時代—本膳料理、庖丁流派の成立	
	第8回	懐石料理と会席料理	
	第9回	安土・桃山時代—南蛮文化の流入、南蛮菓子、卵料理の登場	
	第10回	江戸時代—発達した庶民の料理	
	第11回	卓袱料理と普茶料理	
	第12回	行事食と郷土食	
	第13回	明治・大正・昭和（戦前）—西洋化と肉食、和洋折衷	
	第14回	昭和から現代—家電製品の普及、技術の発展	
	第15回	将来の食を考える—国際化と伝統食	
準備学習 (予習・復習等)	適宜、課題を出す。		
テキスト	毎回、プリントを配布する。		
参考文献	適宜、参考文献を紹介する。		
評価方法	レポート:30% 受講態度:20% 試験:50%		

比較デザイン a		前期 2 単位	現代教養専攻
ものづくりの源泉と現代生活への展開		椎原 晶子 (しいはら あきこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	〈少し、目利きになろう、身の回りを豊かにしよう〉 工業製品に囲まれて育った世代の人々が、人間が自然環境の中で工夫を重ねて道具や住まいをつくり、よりよい生活環境を築いて来た過程を理解できるようにする。スライドや展覧会等の見学により各地・各時代のものづくりの特徴や価値観を知る。実物の道具類を手に触って比較検討する体験を通して、自分の身近な生活の改善や見通しに役立てる。		
授業の概要	日本の伝統的な手工芸の源泉と現代的展開の比較、近代以降の世界の住まいとものづくりの比較を行い、現代の我々の生活環境づくり、持続的な地域社会形成と暮らす人々のライフデザインについて、課題や展望、自分でできる一歩について考察する。		
授業計画	第1回	はじめに：くらしとデザイン：生活と道具、社会の関わり	
	第2回	日本のデザインの源泉と発展(1) 日本の文化、絵画・工芸の様式と価値観の変遷	
	第3回	見学会：日本の絵画・工芸の造形（根津美術館等）	
	第4回	日本のデザインの源泉と発展(2)琳派のデザイン：宗達・光琳・抱一・基一から現代へ	
	第5回	日本のデザインの源泉と発展(3)漆芸：技法と機能、装飾、現代への展開	
	第6回	日本のデザインの源泉と発展(4)陶芸：陶磁器の種類と技法、文人陶工	
	第7回	日本のデザインの源泉と発展(5)陶芸：各産地の特徴と現代への展開	
	第8回	見学会：生活の中の工芸・デザイン（日本民芸館等）	
	第9回	世界と日本のデザイン(1)：西洋・中東・アフリカ・東洋の文様デザインと相互の影響	
	第10回	世界と日本のデザイン(2)：染織：染と織の技法と文様	
	第11回	世界と日本のデザイン(3)：文様を活かしたデザイン（唐紙、壁紙、千代紙、ガラス等）	
	第12回	世界と日本のデザイン(4) 生活改善運動と民芸運動：庶民の生活道具の中の美から	
	第13回	世界と日本のデザイン(5) 近代工業デザインの展開：機能と美の両立、大量生産からユーザーの個性を活かす、価値を掘り起こすデザインへ	
	第14回	世界と日本のデザイン(6) 手仕事の再評価、地方からのものづくり	
	第15回	まとめ：地域性と伝統を活かす現代のものづくり（レポート発表）	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃から、日常の生活道具、生活空間にあるもののデザイン意図、効果を意識して、確認する。 ・気になるデザインやものづくりについての記事などをスクラップし、感想をメモしていく。 ・授業と並行して、「地域性と伝統をふまえた現代のものづくり」について自分でテーマを探し、調査を行い、最終的にレポートとして発表する。見学会の入場料・交通費等は各自負担とする。 		
テキスト	阿部公正監修『世界デザイン史』美術出版社		
参考文献	竹原あきこ+森山明子『日本デザイン史』美術出版社、喜多俊之『地場産業+デザイン』学芸出版社、藤田治彦『現代デザイン論』昭和堂		
評価方法	レポート:50% 授業中の提出物:30% 授業態度・平常点:20%		

比較デザインb		後期 2 単位	現代教養専攻
くらしの環境デザイン		椎原 晶子 (しいはら あきこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	くまちづくりはライフデザイン、自分の生きる土台をつくろう) 現代に生きるわたしたちの暮しの環境はどのような背景、しくみから成り立っているのか、身の回りの事物のデザインを通して、地域の生活文化や社会構造を読み解く視点を身につける。その上で、各人が自分たちの生活環境を見直し、今後の自分たちの暮しの場、すまいづくり、まちづくりに取組む土台をつくる。		
授業の概要	身近な東京のまちや、近現代の建築と環境のデザインを題材に、その背景にある風土と形成史、住文化を読み込む手法を身につけ、現代の少子高齢化社会における環境との共生や持続性あるまちづくりのとりくみを学ぶ。並行して、自分たちが学ぶ南青山・渋谷周辺や自分の関わるのまちの成り立ちや課題を調べ、改善策を出し合い、ともに考えていく。		
授業計画	第1回	はじめに：風土と生活文化：海外と日本の街並み・まちづくりの例 ふるさとになれるまち：自発的な地域住民の連携	
	第2回	日本の暮しのルーツ(1) 江戸の生活文化：江戸城下町の形成、武家と町人のくらし	
	第3回	日本の暮しのルーツ(2) 東京の生活文化：明治～昭和、山の手と下町のくらし	
	第4回	見学会：アートによるまちの価値発見からまちの再生へ（アートルック上野谷中・芸工展・古民家シェア、カフェ活用など）	
	第5回	日本の暮しのルーツ(3) 町家と商家の暮らし：京都・江戸東京の町家と現代への継承	
	第6回	日本の暮しのルーツ(4) 武家屋敷から戸建て住宅へ	
	第7回	工業生産時代の課題(1) 産業革命と近代の都市づくり 大量生産・大量流通のはじまり、歴史主義と機能主義のデザイン	
	第8回	工業生産時代の課題(2) 生活の芸術化とデザイン、ウィリアム・モリスの思想と実践	
	第9回	工業生産時代の課題(3) 新しいライフスタイルとしてのデザイン：アールヌーヴォー、マッキントッシュ、ゼツェーション、デ・ステール、アールデコ等	
	第10回	工業生産時代の課題(4) 機能と空間によるデザイン：インダストリアルデザインと近代建築：バウハウス、コルビュジェから、モダンデザインの世界への普及	
	第11回	見学ワークショップ：わたしたちの学ぶまち、青山・表参道のまちを知る（現地見学） 商業としてのデザイン：戦後の生活空間・道具の商品化・ブランディング	
	第12回	自分たちでつくるまち(1) 人口減少時代、少子高齢化社会の都市づくり： 空き家活用、団地再生、多世代・多業種混在、シェア居住などのとりくみ	
	第13回	自分たちでつくるまち(2) はじめの一步のまちづくり： 住みひろき、まち掃除、子育てネットワーク、水と緑の観察、等	
	第14回	自分たちでつくるまち(3) 地域資源の発見・再生とエリアマネジメント まち会議・DIY・リノベーション・各地のエリアマネジメント	
	第15回	自分たちでつくるまち(4) 調査のまとめ発表：私の好きな場所、住みたい町、自分ができること、やりたいこと	
準備学習 (予習・復習等)	まちや住まいについて、自分が住むまち、学ぶまち、関わるまちについて背景にある風土と形成史、住文化について読み込む練習を重ねる。青山・表参道については、分担して背景を調べてからまちを歩き、課題抽出を行う。最終レポートにむけて、自分で選んだまちの背景や課題を調べ、提案を考えていく。手順については授業中に指示をする。期間中に、現地見学、美術館等見学を行う。入場料・交通費については各自負担とする。		
テキスト	平井聖『対訳日本人のすまい』市ヶ谷出版社、木下斉『まちづくりの「経営力」養成講座』学陽書房		
参考文献	和辻哲郎『風土』岩波書店、エドワード・S・モース【日本のすまい・内と外】、阿部公正監修『世界デザイン史』美術出版社、藤浩志他『地域を変えるソフトパワー』青幻社、等。		
評価方法	レポート:50% 授業中の提出物:30% 授業態度・平常点:20%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
各自のテーマに添った織による造形表現を、修了制作作品として結実・完成させる		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各自のテーマに添った織の造形表現研究を深め、修了制作に結実、作品として完成させる。作品・制作について自分の言葉で表現し、制作を裏付ける。学生自身による主体的・総合的・専門的な研究実践の過程と、その成果としての織作品を修了研究演習の目的とする。さらに現代教養学科発表会（修了作品展）に展示し、他者に発信し伝達するための方法：作品展示、展覧会案内、ギャラリートーク・プレゼンテーションなどを通して、総合的な力を養うことを目指す。		
授業の概要	今まで学んできたことを基にすべて一人でまず組み立てることで、学生の総合力を確認しながら個別指導を進める。短い時間を有効に制作に当てるために、テーマ、作品制作のコンセプトとデッサン、デザイン画をしっかり検討して準備しておく必要がある。制作には時間配分が大切なので、工程表を組み、時間の管理をすることも重要となる。授業ごとに確認、相談しながら進めて行く。		
授業計画	第1回	各自の修了制作のテーマ・デザイン画・工程表などを発表。内容、作業工程、必要事項を確認し具体的なアドバイスをするので、それを基に再度計画を見直して進める。	
	第2回	修了制作：各自の工程表に沿って制作をすすめる。以下、個別指導。	
	第3回	修了制作：続き	
	第4回	修了制作：続き	
	第5回	修了制作：続き	
	第6回	修了制作：続き	
	第7回	修了制作：続き	
	第8回	修了制作：続き	
	第9回	修了制作：続き	
	第10回	修了制作：続き	
	第11回	修了制作：続き	
	第12回	経系始末、作品仕上げ	
	第13回	完成／修了制作・作品提出／作品撮影	
	第14回	講評会／授業のまとめ	
	第15回	修了展の展示	
準備学習 (予習・復習等)	後期授業が始まるまでに、各自のテーマ、作品制作のコンセプトとデッサン、デザイン画をしっかり検討して準備しておくこと。作品制作には膨大な時間がかかる。授業時間だけでは作品は出来ないので、悔いのない修了制作作品を完成させるために、空き時間を利用して制作時間を確保・充填すること。「制作ノート」をつくり、制作の過程で生じたこと（制作に関わること、イメージ、内容、制作意図、表現についてなど）はすべてメモしておくこと。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 修了制作作品:50% 期末レポート:20%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
江戸時代文芸の研究		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代の文芸作品(小説・演劇・韻文など)を研究対象にして「修了論文」を作成します。本科の卒業論文よりも、さらに高度な、奥深い内容を目指しましょう。		
授業の概要	自ら学ぶ姿勢を強く持って下さい。アドバイスは、適宜。時に応じて行います。原典資料の所在、その資料の読解方法、先行必読研究などに関する質問は、いつでも可能。しかし「修了論文」の作成に必要なのは、あなた自身の努力と感性、それに好奇心です。新しい「発見」を期待します。		
授業計画	第1回	研究テーマ設定	
	第2回	調査準備	
	第3回	テーマ1の資料調査	
	第4回	テーマ1の研究報告	
	第5回	テーマ2の資料調査	
	第6回	テーマ2の研究報告	
	第7回	テーマ3の資料調査	
	第8回	テーマ3の研究報告	
	第9回	下書き作成	
	第10回	下書き提出・添削	
	第11回	補完調査その1	
	第12回	補完調査その2	
	第13回	提出原稿整備	
	第14回	口頭試問	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、資料調査、対象研究。		
テキスト	各自のテーマに応じて指示します。		
参考文献	少々厚めの「研究ノート」、あるいは「研究用FD」を作成すること。それが、あなた自身の「参考文献」となります。		
評価方法	過程報告:40% 論文内容:60%		

修了研究演習		後期 2 単位
修了研究演習（認知心理学）		植月 美希（うえつき みき）
授業の到達目標 及びテーマ	認知心理学に関わるテーマを取り上げ、それについて調査あるいは実験を行って検討し、論文にまとめる。これらの作業を通じて、文献を読み、データに基づいて考える力を身につける。	
授業の概要	修了論文の執筆に向けて、認知心理学に関わるテーマについて、実験や調査を行い、得られたデータに基づいて、論文執筆を行う。授業の前半では、発表やディスカッションを行い、テーマへの理解を深める。授業の後半では、個別指導を中心に、より良い論文を作成する。 なお、授業は基本的には演習形式で進める。	
授業計画	第1回	オリエンテーション
	第2回	研究テーマの発表・決定
	第3回	文献の読解
	第4回	研究計画書の作成
	第5回	調査・実験の準備
	第6回	調査・実験の実施
	第7回	データの整理
	第8回	論文指導1（目的・方法）
	第9回	論文指導1（結果）
	第10回	論文指導3（考察）
	第11回	論文指導4（全体）
	第12回	論文指導5（全体）
	第13回	プレゼンテーションの準備
	第14回	プレゼンテーションの指導
	第15回	まとめ
準備学習 (予習・復習等)	事前学習 （前期から、）関心のあるテーマや問題について文献検索を行い、論文を読み、まとめておくこと。 事後学習 講義内容を踏まえ、出題される課題を着実に締切までに提出すること。	
テキスト	特に指定しない	
参考文献	山田剛史・林 創 「大学生のためのリサーチリテラシー入門」 ミネルヴァ書房 白井利明・高橋一郎 「よくわかる卒論の書き方 第2版」 ミネルヴァ書房	
評価方法	課題:20% 授業参加態度:20% 修了論文:60%	

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
経営学演習		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「経営学」に関するテーマ（人的資源管理、従業員のキャリア形成から、企業構造、経営戦略、経営文化、国際経営、起業等に関するテーマまで、広く経営や企業、キャリア形成に関するテーマ）で修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。学生各人が関心を持つ現代日本社会の企業経営や従業員の雇用・管理の課題について、経営学の観点からそれらがどのように位置づけられるかについて討議する。その際、現代社会における経営や企業の観点、また、グローバル化に伴い、企業経営における、日本以外の多文化における企業や経営との比較を考慮に入れて検討を加えていく。そして、専攻科の講義科目で得た知見と結びつけつつ、さらに修了論文のテーマを絞り込んでいく。</p>		
授業の概要	<p>各自が興味のあるテーマを選び、修了論文の作成を中心に行う。課題（文献を読んでくる、報告を用意する）を与えるため、その際は必ず準備して臨むこと</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	発表と討議 グループ①	
	第3回	発表と討議 グループ②	
	第4回	発表と討議 グループ③	
	第5回	発表と討議 グループ①	
	第6回	発表と討議 グループ②	
	第7回	発表と討議 グループ③	
	第8回	発表と討議 グループ①	
	第9回	発表と討議 グループ②	
	第10回	発表と討議 グループ③	
	第11回	論文仮提出と手直し	
	第12回	発表と討議、論文手直し グループ①	
	第13回	発表と討議、論文手直し グループ②	
	第14回	発表と討議、論文手直し グループ③	
	第15回	発表と論文提出	
準備学習 (予習・復習等)	<p>議論を活発に進めるために、テーマに基づいて、自分なりに調べ、専門用語等をよく理解しておくこと。</p>		
テキスト	<p>特に使用しない。</p>		
参考文献	<p>授業内で適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>発表:30% 授業への参画度:40% 修了論文:30%</p>		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
食文化研究		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	①食文化に関連する文献、資料の収集の方法を習得する。 ②論文の構成、執筆の仕方、引用文献や図表作成について学ぶ。 ③プレゼン、話す力、聞く力を養う。		
授業の概要	生活文化のなかで「食文化」に関するテーマで修了論文を書く学生を対象に論文作成に向けた授業を実施する。 具体的には、学生各人が関心を持つ主題について、文献・資料の検索・収集の仕方を身につけ、これまで専攻科の講義科目で学んだ知識を生かしつつ、論文となりうるテーマか否かを検討する。テーマ決定後、論文の構成、執筆の仕方、引用文献の扱い方、図表の作成、まとめ方等について具体的に学ぶ。		
授業計画	第1回	食文化研究の手法について	
	第2回	食文化に関連する文献、資料の収集 1	
	第3回	食文化に関連する文献、資料の収集 2	
	第4回	研究テーマの選定 1	
	第5回	研究テーマの選定 2	
	第6回	論文の構成・引用文献の扱い方	
	第7回	図表の作成の方法	
	第8回	要旨の作成の方法	
	第9回	論文の中間報告とディスカッション 1	
	第10回	論文の中間報告とディスカッション 2	
	第11回	論文の中間報告とディスカッション 3	
	第12回	論文の中間報告とディスカッション 4	
	第13回	論文の中間報告とディスカッション 5	
	第14回	研究発表とディスカッション 1	
	第15回	研究発表とディスカッション 2	
準備学習 (予習・復習等)	各人がテーマに沿って論文を書く。		
テキスト	必要に応じて、プリントを配布する。		
参考文献	高崎みどり著「大学生のための論文執筆の手引き」秀和システム 適宜、紹介する。		
評価方法	発表と討論:30% 論文:70%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
修了論文の完成にむけて		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>○イギリスの文化や歴史について、アカデミックなレベルで議論を組み立てることができるようになる。</p> <p>○イギリスの文化や歴史について学んだことをもとに、自分自身にとっての「問題」をつかみとる。</p> <p>○自分自身が設定した「問題」を探求し、文献を用いて調査を進め、自身の考えを的確に文章化し、修了論文を完成させる。</p>		
授業の概要	<p>イギリスの文化や歴史にかんするテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成にむけた指導を行う。まず学生各人に関心のあるテーマを提示させ、イギリス史やイギリス文化の研究史においてそれらがどのような位置にあるのか討議する。その上で、専攻科の講義科目で学んだ内容と関わらせながら、さらにテーマを絞り込み、修了論文の課題を決定する。その後、論文の構成と内容、文献の読み方とまとめ方などについて具体的に指導する。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	論文を書くための文献調査法	
	第3回	論文作成にむけた個別指導（1）	
	第4回	論文作成にむけた個別指導（2）	
	第5回	論文作成にむけた個別指導（3）	
	第6回	論文作成にむけた個別指導（4）	
	第7回	中間発表（1）	
	第8回	中間発表（2）	
	第9回	中間発表（3）	
	第10回	中間発表（4）	
	第11回	論文執筆における個別指導（1）	
	第12回	論文執筆における個別指導（2）	
	第13回	論文の形式の確認	
	第14回	論文個別リライト指導（1）	
	第15回	論文個別リライト指導（2）	
準備学習 (予習・復習等)	<p>修了論文を完成させるには、対象についての調査だけでなく、適切な方法や史料の確定、先行研究の吟味、自分のとるべき立場の検討など、さまざまなプロセスが必要とされる。テーマ設定の段階から、これらの作業をひとつずつ進める必要があるが、基本的には授業時間外での学習の厚みによって修了論文の出来が決まってくるので、自主的に取り組んでいくこと。</p>		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	中間発表:30% 論文作成過程:30% 修了論文:40%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
プロダクトデザインを提案する		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	道具やシステムとかかわる操作感覚や生活感覚についてより深く理解する。 目標設定を行ない、プロダクトデザインを構想・試作あるいは比較評価しながら、ものづくりの基本をより深く理解する。		
授業の概要	各自がプロダクトデザインに係わるテーマを設定する。 テーマに応じて比較観察、原型の試作、実現した際の効果予測、デザインの具体化または最も注目すべき点を中心とした考察などを適宜進めていく。		
授業計画	第1回	ガイダンス：各自の日常感覚から	
	第2回	テーマの決定	
	第3回	テーマに基づくアプローチ：調査または構想の開始	
	第4回	テーマに基づくアプローチ：経過と方針検討、選択肢の確認	
	第5回	テーマに基づくアプローチ：経過と方針の再確認、選択肢の再確認	
	第6回	テーマに基づくアプローチ：中間報告	
	第7回	考察・制作：目標設定と実現方法の確認	
	第8回	考察・制作：続き	
	第9回	考察・制作：目標の絞り込み	
	第10回	考察・制作：続き	
	第11回	考察・制作：目標実現に至る残りの部分の確認	
	第12回	考察・制作：続き	
	第13回	最終チェック	
	第14回	各自のまとめ	
	第15回	発表・講評会	
準備学習 (予習・復習等)	道具やシステムの中からテーマを見つけるためには、日頃の生活行動に伴う身体感覚も重要である。テーマの実現については常識にとらわれることなく、基本からの発想力と技術的な制約にとらわれない目標設定が求められる。日常観察を研ぎ澄ませることがこれらに対応する必要条件となる。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:40% 最終提出物:60%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
法と社会倫理：社会比較の観点から		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	「法と社会倫理」に関するテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。		
授業の概要	まず学生各人が関心を持つ現代日本社会の課題について、法と社会倫理の観点からその課題がどのように位置づけられるかについて検討・討議する。その際、日本以外の社会との比較の観点も考慮に入れて検討を加えていく。そして専攻科の講義科目で得た知見と結びつけつつ、さらにテーマを絞り、修了論文の主題を決定する。その後、論文の構成と内容、文献の読み方とまとめ方等について具体的に指導する。		
授業計画	第1回	現代日本社会の課題を列挙	
	第2回	現代日本社会の課題の理解	
	第3回	現代日本社会の課題と法	
	第4回	現代日本社会の課題と倫理	
	第5回	現代日本社会の課題の社会比較	
	第6回	論文テーマの絞り込み	
	第7回	テーマの論点整理（法と社会倫理、社会比較の観点から）	
	第8回	一つ目の論点に関する文献のまとめ	
	第9回	一つ目の論点に関する報告と討論	
	第10回	二つ目の論点に関する文献のまとめ	
	第11回	二つ目の論点に関する報告と討論	
	第12回	三つ目の論点に関する文献のまとめ	
	第13回	三つ目の論点に関する報告と討論	
	第14回	修了論文仮提出とブリーフィング	
	第15回	修了論文提出と振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	予め指示された課題(文献を読んでくる、報告を用意する、修了論文原稿を指示されたところまで書いてくる、など)を準備して授業に臨むこと。授業後は、質問されたり指摘された点について、より詳しく調べ、より深く考えていくこと。		
テキスト	適宜指示する。		
参考文献	葛生・河見・伊佐『新・いのちの法と倫理』（法律文化社） 河見『自然法論の必要性和可能性』（成文堂）		
評価方法	修了論文:75% 授業への参加度合い:25%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
英語教育と英語社会論		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) 講義と論文講読を通して、英語教育と英語社会論の分野に関する専門知識を習得すること。 2) これらの分野の中から研究テーマを一つ選び、修了論文を書きあげること。		
授業の概要	教員による講義と学生による論文紹介を交互に行う。講義で取り上げるテーマは以下の授業計画の通り。学生は、短大・大学や学会の紀要から論文を一つ選び、授業で紹介する。論文紹介の際、教員は論文の内容や発表に関する補足説明を行う。ただし論文紹介の順序は必ずしも授業計画の通りでなくても構わない。		
授業計画	第1回	Introduction : 英語教育と英語社会論の研究テーマ、修了論文について	
	第2回	英語教育の目的 : 実用主義と教養主義、道具的動機と統一的動機	
	第3回	論文講読 1 英語社会論の論文①	
	第4回	英語帝国主義とWorld Englishes	
	第5回	論文講読 2 英語社会論の論文②	
	第6回	英語習得 = 英語学習 + 英語使用	
	第7回	論文講読 3 英語習得理論に関する論文	
	第8回	英語教授法 : 文法訳読法と直接教授法	
	第9回	論文講読 4 英語教授法に関する論文①	
	第10回	英語教授法 : communicative approaches、natural approach、他	
	第11回	論文講読 5 英語教授法に関する論文②	
	第12回	早期英語教育	
	第13回	論文講読 6 早期英語教育に関する論文	
	第14回	望ましい英語教育とは？	
	第15回	振り返りとまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	受講者は授業で取り上げる論文を事前に読んで、内容を把握しておくこと。 発表者は、論文の内容を簡潔に分かりやすくまとめたハンドアウトを作成すること。		
テキスト	特に定めない。プリントを使用する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業参加:20% 中間報告:20% 論文:60%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
アメリカ史・アメリカ研究の修了論文を書く		後藤 千織 (ごとう ちおり)	
授業の到達目標及びテーマ	自分が関心を抱いているテーマに関連する文献・資料を収集し、論文の問いを設定する。文献や資料の検索・収集方法、先行研究のレビュー、資料の読み方、議論の組み立て方など、論文作成に必要な技術を学び、修了論文を完成させる。		
授業の概要	研究報告・参加者とのディスカッション・個別指導を中心に進めます。		
授業計画	第1回	はじめに：これまでの調査・研究の成果	
	第2回	文献・資料検索、文献リスト作成	
	第3回	研究報告（1）	
	第4回	研究報告（2）	
	第5回	研究報告（3）	
	第6回	問題設定・先行研究のレビュー・章立て案	
	第7回	草稿作成・個別指導（1）	
	第8回	草稿作成・個別指導（2）	
	第9回	草稿作成・個別指導（3）	
	第10回	草稿へのコメント会	
	第11回	論文執筆・個別指導（1）	
	第12回	論文執筆・個別指導（2）	
	第13回	論文執筆・個別指導（3）	
	第14回	修了論文提出	
	第15回	修了論文報告会	
準備学習 (予習・復習等)	前期から自分の関心のあるテーマについて文献を収集し、文献リスト作成・先行研究のレビュー・論文の問いの設定に取り組んでおくこと。最初の授業でその成果を発表してもらう。		
テキスト	なし。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% 修了論文:60%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
修了研究演習—古典文学篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○修了論文を完成して、正式に提出することができる。 ○夏期事前草稿を用意することができる。 ○全体発表における質疑・討論の知見を完成稿に織り込むことができる。 ○自己の創見を求めて作品・テーマに取り組むことができる。 		
授業の概要	<p>修了論文の完成を必達の課題とする授業である。レポーターは古典文学の全領域。後期科目だが、秋の彼岸過ぎからの着手では修了論文の完成は至難のワザ。1年間の枠組で取り組むために、遅くとも4月初旬までには担当予定教員と相談することが不可欠である。授業形態は、個人面談と全体授業とを併用。個人面談では、進捗・方法・論点等の相談に充てる。全体授業のばあい、受講者の人数によりけりだが、レポーターは進捗中の草稿に立脚した発表を担当、質疑応答・意見交換には全員が参加する。なお、専攻科現代教養専攻と多元文化専攻の合併クラスの形となる。切磋琢磨によって各自の修了論文が格上げされることを期待する。</p>		
授業計画	第1回	全体授業(前半) 発表会①、情報交換と既存草稿の要旨発言。／個人面談(後半)、既存草稿・後期計画書を提出。	
	第2回	個人面談。既存草稿・後期計画書の検討と修正相談。	
	第3回	個人面談。全体授業むけ発表資料草稿の提出。計画進捗の軌道化を点検。	
	第4回	全体授業、発表会②。レポーター発表と全員による相互検討。持ち帰り課題の確認。	
	第5回	全体授業。第4回の持ち帰り課題についてのフォローアップ③。	
	第6回	個人面談。小中項目着眼カードの提出と吟味。	
	第7回	個人面談。小中項目着眼カードの追加提出。カード分類練習と予定目次の試作。	
	第8回	個人面談。完成目次の提出と既存草稿の提示。	
	第9回	個人面談。第1次草稿の仮提出。	
	第10回	個人面談。仮提出1次草稿の修正相談。	
	第11回	個人面談。2次草稿の提示と正式提出の可否確認。	
	第12回	個人面談。全体発表会むけ発表資料の提出と修正相談。	
	第13回	個人面談。全体発表会用の資料提出。	
	第14回	全体授業。最終・全体発表会④。	
	第15回	個人面談。総括、今後の研究展望・相談。	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ○[事前準備としての夏期草稿]後期開始前に草稿(400字詰換算15枚)を作成。 ○[本文読書]立論の前提として、作品の本文を多読する(解説書・梗概・インターネットに依存した文学論は下策)。 ○[全体発表会]①から④まで計4回。発表資料の作成と発表準備が必要。 ○[個人面談]適宜、指示に従って、書式記入や提出物のリクエストがある。 		
テキスト	共通テキストなし。各自のテーマ・作品により異なる。本文テキストは自前の文庫本を必ず購入する(手元常備や書き込みのため)。		
参考文献	個人別に適宜紹介の予定。		
評価方法	修了論文の水準:25% 事前夏期草稿の水準:15% 本文進捗と書式蓄積:25% 個人面談の活用・成果:25% 全体会の参加・発言:10%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
歴史学の方法論とその実践		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標及びテーマ	各自の問題関心に基づいた研究テーマを決め、その歴史的経過と現代的意味を探る。研究の現状と課題をふまえながら調査・検証を進め、独自の視点に基づいた修了論文を執筆し、最新研究に挑むようなレベルの高い論文を完成させる。		
授業の概要	研究テーマの決定、先行研究の調査、研究課題の分析・検討、史料の読解など、論文作成に関する総合的な指導を行う。毎回、各自は研究の進行状況の報告を行い、全員による活発な討論を通じて研究を深め、客観的な観点を培いながら修了論文を完成する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	準備作業①「問題」の所在	
	第3回	準備作業②テーマの決定	
	第4回	準備作業③調査・研究の方法論について	
	第5回	準備作業④文献目録の作成	
	第6回	研究報告①	
	第7回	研究報告②	
	第8回	研究報告③	
	第9回	研究報告④	
	第10回	論文中間報告	
	第11回	研究報告⑤	
	第12回	研究報告⑥	
	第13回	研究報告⑦	
	第14回	研究報告⑧	
	第15回	修了論文完成報告会	
準備学習(予習・復習等)	毎回授業後に配布する研究調査報告シートに研究結果や今後の課題、問題点などをまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	研究テーマに応じて適宜指示する		
評価方法	報告、シート記述など:50% 修了論文:50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
修了研究論文実践指導		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標 及びテーマ	「米文学」「英語詩」「アメリカ研究」「平和学」等に関するテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 領域やテーマの絞り込み ・ リサーチ指導 ・ 書式指導 ・ レジюмеを用いた資料報告 ・ 引用や要約の仕方を含むパラグラフ作文指導 ・ 論文構想 		
授業計画	第1回	導入～テーマ候補、ブレインストーミング、資料リスト作成、情報カードについて	
	第2回	メールレポート（パラグラフ作文）講評、リサーチ指導、資料研究、カード作成	
	第3回	メールレポート講評、リサーチ指導、資料研究、ブレインストーミング、カード作成・報告	
	第4回	メールレポート講評、マインドマップ、テーマ絞り込み、リサーチ報告、カード報告、資料研究	
	第5回	メールレポート講評、マインドマップ、テーマ決定、リサーチ報告、資料研究、書式指導	
	第6回	メールレポート講評、リサーチ・カード報告、資料研究、書式指導	
	第7回	メールレポート講評、資料研究、書式指導	
	第8回	構想指導 1	
	第9回	構想指導 2	
	第10回	序文指導	
	第11回	中間報告 1	
	第12回	中間報告 2	
	第13回	中間報告 3	
	第14回	推敲・仕上げ	
	第15回	提出指導	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. メールレポートによるパラグラフ作文&推敲 2. 資料リスト作成・資料報告準備 3. 中間報告用レジюмеと報告準備 4. 修了論文推敲と提出 		
テキスト	こちらでプリントする		
参考文献	随時紹介		
評価方法	修了論文:60% メールレポート:10% 中間報告:20% 他、提出物:10%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
修了論文を仕上げよう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期までの学びをふまえ、修了論文を書き上げるための授業である。自らの関心を深め、論文の形にするまでの具体的な指導を行う。		
授業の概要	手順としては、①各人が関心を持つ主題について、教育学的観点からの位置づけを明らかにし、②関連する文献資料目録を作成しつつテーマを絞り、終了論文の題目を決定し、③論文の構成、内容を決定し書き進めていく。このうち①と②は、できるだけ前期のうちに準備しておくことが望まれる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	各自の研究テーマの発表と交流①	
	第3回	各自の研究テーマの発表と交流②	
	第4回	学生による個別発表①	
	第5回	学生による個別発表②	
	第6回	学生による個別発表③	
	第7回	学生による個別発表④	
	第8回	論文執筆内容の個別指導①	
	第9回	論文執筆内容の個別指導②	
	第10回	論文執筆内容の個別指導③	
	第11回	論文執筆内容の個別指導④	
	第12回	論文執筆内容の個別指導⑤	
	第13回	修了論文発表会に向けた指導①	
	第14回	修了論文発表会に向けた指導②	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前期の段階から、自らの関心・テーマを定め、文献一覧の作成や題目の決定、章立て案の作成を進める必要があり、個別の指導が必要となる。後期はそれらを発表し確定した後、具体的な論文執筆作業に入る。最後は論文の中味に関する個別指導を行うことになる。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	そのつど提示する。		
評価方法	発表:30% 論文:70%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
近現代文学研究		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・近現代の文学を対象とし、各自の問題関心に沿って調査・研究をすすめ、修了論文を作成します。 ・諸作業を通じて、作品を取り巻く状況に理解を深め、文学作品を丁寧に読み解きます。 ・また長い文章を論理的に構築し、わかりやすく適切に表現する技術を身につけます。 		
授業の概要	各自研究テーマ・問題設定をします。それに基づいて文献調査・分析をし、自分なりの独自の結論を導き出す作業を各自行い、口頭発表と討論をします。		
授業計画	第1回	研究テーマの設定	
	第2回	文献調査法指導	
	第3回	テーマ1についての文献調査	
	第4回	テーマ1についての研究報告	
	第5回	テーマ2についての文献調査	
	第6回	テーマ2についての研究報告	
	第7回	テーマ3についての文献調査	
	第8回	テーマ3についての研究報告	
	第9回	下書き作成	
	第10回	下書き提出・添削	
	第11回	補完調査・研究その1	
	第12回	補完調査・研究その2	
	第13回	論文提出準備	
	第14回	口頭試問	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、文献調査、対象研究。		
テキスト	その都度指示します。		
参考文献	その都度指示します。		
評価方法	論文執筆の過程:50% 論文内容:50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
日英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善提案などをテーマとする修了論文の作成		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標及びテーマ	音声、文字、意味、文法・語法、発想などの様々な側面に関する日本語と英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善への提案などをテーマとして修了論文を作成しようとする学生を対象に、その論文を作成するための基本的事項を確認し、論文作成のための指導を行います。		
授業の概要	論文作成のための基本的事項の確認については、各授業テーマに関する知識を基にしたディスカッションが中心となります。論文作成に関しては、課外の時間帯に必要なに応じて適宜行われる個人指導での、修了論文のテーマの絞り込み、テーマの決定、参考文献の探し方・扱い方、論文の執筆内容・作成方法などの検討・確認が中心となります。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	日英語の音声	
	第3回	日英語の文字	
	第4回	日英語の語と意味	
	第5回	日英語の文法・語法	
	第6回	日英語の発想	
	第7回	英和・和英辞典の音声の記述方法	
	第8回	英和・和英辞典の語の扱い方	
	第9回	英和・和英辞典の意味の記述方法	
	第10回	修了論文の中間発表と講評	
	第11回	英和・和英辞典の文法・語法の記述方法	
	第12回	英和・和英辞典の発想の扱い方	
	第13回	英和・和英辞典の限界	
	第14回	修了論文の発表と講評	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく調べて考えてきて下さい。また、修了論文作成に向けては定期的に相談し、指導を受けるようにして下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業への参加度:25% 修了論文:50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
社会心理学の先行研究を調べて論文にまとめる		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) 社会心理学の研究知見を理解する。 (2) 社会心理学の論文の読み方を知り、概要をつかめるようになる。 (3) 先行研究を調べ、修了論文としてまとめる。		
授業の概要	基本的に演習形式で進めるが、必要に応じて個別指導も行なう。社会心理学の実証研究論文を用いて、論文の読み方や研究の実際を理解し、実証研究を行なって修了論文を作成する。 授業外の時間も大量に使うことによって自主的に作業を進めることが必須である。授業としては後期開講だが、前期のうちに相談に来ること。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	社会心理学の研究テーマ概説	
	第3回	研究テーマの設定	
	第4回	先行研究の理解	
	第5回	先行研究の吟味と研究計画の作成	
	第6回	研究計画の吟味	
	第7回	研究の準備	
	第8回	研究の実施	
	第9回	研究の実施と分析	
	第10回	研究のまとめと修了論文の執筆	
	第11回	修了論文草稿の検討	
	第12回	修了論文の修正	
	第13回	修了論文の完成	
	第14回	研究参加者への報告の作成	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	本科で社会心理学の授業を受講していればその復習を、していなければ自分で社会心理学の薄いテキストを読み通しておくこと。 (参考として、吉田・元吉(2010)『体験で学ぶ社会心理学』ナカニシヤ出版/和田(2010)『ミニマムエッセンス社会心理学』北大路書房 など) 授業中は発表とディスカッションを行なうので、発表の準備やディスカッションを踏まえて自分の研究を見直すことなどは授業の前後に必須である。		
テキスト	都筑学(2006)『心理学論文の書き方 おいしい論文のレシピ』有斐閣		
参考文献	松井豊(2006)『心理学論文の書き方』河出書房新社/戸田山和久(2012)『新版 論文の教室』NHK出版/このほか適宜紹介する。		
評価方法	修了論文:70% 課題への取り組み:30%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
学生自身のテーマの研究と修了論文作成		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標 及びテーマ	データや諸論を研究し独自の視点をもった内容の修了論文作成を目標とする。テーマは食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関して学生が関心を持つ領域を選び相談の上で決定する。		
授業の概要	食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関するテーマで修了論文作成に向けた指導を行う。まず、学生が関心を持つ主題について、食品科学、栄養学、食品開発や法律、政治、経済の観点からどのように位置づけられるかについて討議し、これまでの学習や専攻科の講義課目の学習で得た知見とを結びつけつつ、更にテーマを絞り、修了論文の課題を決定する。その後課題に対する学生の研究の進み方をチェックしより高い内容の研究へと導き、論文の構成と内容、まとめについての指導を行い、論文を完成させる。		
授業計画	第1回	研究テーマの選定	
	第2回	テーマ関連事項の研究 1	
	第3回	テーマ関連事項の研究 2	
	第4回	テーマ関連事項の研究 3	
	第5回	テーマ関連事項の研究 4 ならびにテーマの決定	
	第6回	テーマ関連事項の研究 5	
	第7回	テーマ関連事項の研究 6	
	第8回	テーマ関連事項の研究 7	
	第9回	テーマ関連事項の研究 8	
	第10回	テーマ関連事項の研究 9	
	第11回	テーマ関連事項の研究 10	
	第12回	論文執筆 1	
	第13回	論文執筆 2	
	第14回	論文執筆 3	
	第15回	論文完成	
準備学習 (予習・復習等)	毎回のディスカッションをスムーズに進めるため、自身の研究を進展させ報告の準備を行う。		
テキスト	特に指定はしない		
参考文献	毎回の授業の中で示します。		
評価方法	授業への積極的な参加:40% 論文:60%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
デザイン造形による作品制作		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	デザインに求められる普遍的な造形美の探求により、本科で目標とした他者とコミュニケーションする段階から、さらに他者の精神に働きかけ共感を得る域に達する表現力を身につけることを目標とする。また修了作品の制作のプロセスを通してデザインの思考方法を体得する。		
授業の概要	まず本科の学び、前期の造形演習を通して絞り込んだテーマのもとに作品の構想を練る。次にその構想にもっとも適した表現手法を決定し、制作手順を計画する。十分な試作を経て、修了作品として完成度を高め、展示発表を行う。		
授業計画	第1回	ガイダンス／修了制作テーマの提示／作品制作計画案作成	
	第2回	作品のコンセプト、表現手法の提示	
	第3回	作品のコンセプト、表現手法の決定	
	第4回	作品の構想1	
	第5回	作品の構想2／サイズの決定	
	第6回	作品の試作1	
	第7回	作品の試作2	
	第8回	作品の試作3／中間発表、試作の確認・決定	
	第9回	作品制作1 (下描きなど)	
	第10回	作品制作2 (下描きなど)	
	第11回	作品制作3 (着彩など)	
	第12回	作品制作4 (着彩など)	
	第13回	作品制作5 (着彩など)	
	第14回	講評会／修了展展示準備および発表会準備	
	第15回	修了展展示	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ決めた研究テーマのもとに、作品のプランをイメージしておくこと。 中間発表のために構想図、試作などを整理する。 授業時間は経過の確認と指導にあてるので、時間外に制作を進めることが必要になる。 最後に作品についてのレポートをまとめる、発表のレジュメを作成し、準備する。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:30% レポート:20% 作品:50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
近代文学研究		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標及びテーマ	明治期以降の文学、批評、メディアを対象として研究を深めます。過去の著名な作家はほとんど、書く作業の苦しみを呪うように日記に書き付けています。にもかかわらず「書く」のは、そこに「こだわり」があるからなのでしょう。テキストと対峙しながら「みずから自身のなかのこだわり」をいっそう深く掘りすすめてください。論文の完成が到達目標です。		
授業の概要	みずからの問題意識がなにより大切です。そこから対象となるテキストに問いかけ、解決と同時に新たな問いを得るというプロセスのくり返しから、ノートをふくらませていきます。(各国)文献の所在、資料調査の仕方については、どの時点でも案内します。読み続け、書き続け、早い時期に10枚、秋に25枚までは到達させます。		
授業計画	第1回	論文作成の方向性、問題設定について	
	第2回	問題意識を固めるⅠ(序)	
	第3回	問題意識を固めるⅡ(図書館の利用)	
	第4回	テキストの確定	
	第5回	調査研究・論文作成1—先行研究を収集・系統化する	
	第6回	調査研究・論文作成2—テーマの追究・深化	
	第7回	調査研究・論文作成3—概要の発表Ⅰ(グループA)	
	第8回	調査研究・論文作成4—概要の発表Ⅱ(グループB)	
	第9回	草稿を提出、課題の修正・追補	
	第10回	調査研究・論文作成5—論文推敲Ⅰ(テーマ・構成について)	
	第11回	調査研究・論文作成6—論文推敲Ⅱ(章ごとの内容について)	
	第12回	調査研究・論文作成7—論文推敲Ⅲ(部分と全体の関係について)	
	第13回	調査研究・論文作成8—論文推敲Ⅳ(序論と結論について)	
	第14回	調査研究・論文作成9—論文推敲Ⅴ(注について)	
	第15回	論文講評	
準備学習(予習・復習等)	個別に指示します		
テキスト	個別に指示します		
参考文献	個別に指示します		
評価方法	論文内容:70% 中間報告など作成過程における達成:30%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
修了論文を書く		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	論文について確認したのち、各人のテーマにもとづき、研究し、発表する。		
授業の概要	講義と発表をとりまぜる。 前期からテーマについては相談する。		
授業計画	第1回	修了論文について	
	第2回	文献調査について	
	第3回	図書館の利用法	
	第4回	インターネットの利用	
	第5回	論文の書き方	
	第6回	目次を作る	
	第7回	論文テーマについての発表	
	第8回	論文の一部の提出	
	第9回	註のつけかた	
	第10回	論文執筆	
	第11回	中間発表	
	第12回	論文の仕上げ	
	第13回	論文の仮提出	
	第14回	論文についてのディスカッション	
	第15回	論文についての口頭発表	
準備学習 (予習・復習等)	論文に関する調査、執筆		
テキスト	各人のテーマに応じて定める		
参考文献	各人のテーマに応じてリストアップする		
評価方法	演習参加、発表:50% 修了論文:50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
法学の修了論文を書く		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	法学の修了論文を書くのが到達目標である。テーマの選定から、文献の検索・調査、考えること、文章にまとめること、仕上げまで、頑張ってやって頂く。もちろん、各段階において、相談にのり、指導を行う。		
授業の概要	テーマの選定から、調べ物の途中経過、関連する問題などの調査、文章によるまとめまで、寄り添って指導することになる。厳しめの指導になることが予想されるので、覚悟を決めて履修していただきたい。		
授業計画	第1回	テーマの選定 個人の興味などの相談	
	第2回	テーマの選定 いくつかの候補の選定	
	第3回	文献の調査報告レポートと指導	
	第4回	文献の調査報告レポートと指導	
	第5回	文献の調査報告レポートと指導	
	第6回	文献の調査報告レポートと指導	
	第7回	文献の調査報告レポートと指導	
	第8回	論文の途中報告と論文指導	
	第9回	論文の途中報告と論文指導	
	第10回	論文の途中報告と論文指導	
	第11回	論文の途中報告と論文指導	
	第12回	論文の途中報告と論文指導	
	第13回	論文の途中報告と論文指導	
	第14回	論文提出と最後のしあげ	
	第15回	論文提出とチェック	
準備学習 (予習・復習等)	論文を書くためには、入念な下調べと、テーマに対する深い愛情が必要。この問題については自分が一番よく知っており、考え抜いていると言うところまで悩んで欲しい。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	特に指定しません。おりにふれて、指示します。		
評価方法	論文指導の途中経過:50% 論文の出来:50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
比較思想・比較芸術論・現代の諸問題		橋本 典子（はしもと のりこ）	
授業の到達目標及びテーマ	「自然」「技術」「人間社会」「芸術」等思想の根底となる概念を中心に日本、中国を含めたアジア的考察と西洋の思想との比較、更に新しい比較研究の可能性を追求する。思想は、哲学、社会思想、政治思想、宗教思想、芸術思想などいろいろあるが、現代を考察するために最も特徴的な思想を時代現象の中から取出しこれを主として扱う。修了論文を書く学生を対象として論文の完成を目指す。		
授業の概要	修了論文の完成[400字×50枚]を目指してテーマを決定し、参考文献を読解して論文を完成する。論文の構成、形式、内容等を議論しながら、また他の学生との対話を介して論点を明確にする。専攻科の他の講義科目との連関を考えながら比較及び多視眼的な視点で論じるように指導する。		
授業計画	第1回	修了論文完成までの過程の確認	
	第2回	テーマの決定を目指しての参考文献の検索	
	第3回	論文テーマの検討と決定	
	第4回	テーマの周縁問題の検討	
	第5回	論文テーマの絞り込み	
	第6回	テーマを中心とした文献の検索と読解、資料収集。	
	第7回	テーマについての文献の体系的位置づけ	
	第8回	文献の読解と報告	
	第9回	文献の読解及び発表（1）	
	第10回	文献の読解及び発表（2）	
	第11回	文献の読解及び発表（3）	
	第12回	論文の全体構成と執筆計画	
	第13回	専攻研究論文の検索及び収集	
	第14回	論文の発表と批判的考察	
	第15回	修了論文の完成と新たな視点への展開	
準備学習 (予習・復習等)	論文執筆の途中経過で質問に充分答えられるように準備する。そのために質の高いノートを作る。特に発表については他の学生からの質問にも答えられるように課題を想定して準備する。授業後は「まとめ」を作成してノートを充実させる。時に中間報告や「まとめ」を提出することも課する。		
テキスト	適宜紹介し必要な時にプリントを配布する。		
参考文献	論文の発表に即して適宜紹介する。		
評価方法	終了論文:75% レポート及び発表:15% コミュニケーション力:10%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
人間活動と環境との関わり		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	暮らしと密接に関連する環境の諸問題 ―エネルギー、廃棄物、有害化学物質、温室効果ガス等― について、講義、文献調査あるいはデータ解析などを通して理解を深めます。		
授業の概要	種々の環境問題の中から、文献調査や意見交換を通して修了論文の課題を決めます。文献調査の段階でまず簡単なレポートを作成し、その後関心を持った個別課題について調査研究を行い、レポートにまとめるとともに、レポートの発表会を行います。		
授業計画	第1回	環境問題の概説(大気)	
	第2回	環境問題の概説(水質)	
	第3回	環境問題の概説(温暖化)	
	第4回	環境問題の概説(エネルギー)	
	第5回	文献調査の課題の選択	
	第6回	文献調査の指導	
	第7回	文献調査の報告	
	第8回	修了研究課題の選択	
	第9回	修了研究課題の指導 I	
	第10回	修了研究課題の指導 II	
	第11回	修了研究課題の指導 III	
	第12回	修了研究課題のとりまとめ I	
	第13回	修了研究課題のとりまとめ II	
	第14回	修了研究課題の発表の準備	
	第15回	修了研究課題の発表会	
準備学習 (予習・復習等)	テーマごとに参考文献を通読しておくこと。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	テーマにより個別に紹介する。		
評価方法	文献調査のレポート:40% 修了研究課題レポート:60%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
情報と社会		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「情報と社会」に関して、各自テーマを決めて論文を執筆する。そのプロセスの中で、分析的に見る力、批判的に読む力、考察する力、表現する力等を身につけることを目的とする。		
授業の概要	前期の「情報社会論」の講義内容をふまえ、情報社会学に関する幅広い領域のなかから各自、関心のあるテーマを見つけ、概論的文献により概略を把握し、先行研究を網羅的に検索・収集する。収集した文献を読みながらディスカッションすることで、問題を深め自分なりの考察をしていく。執筆後の推敲の時間を充分にとり、よりよいものに仕上げていく体験をする。		
授業計画	第1回	テーマの設定	
	第2回	先行研究の調査	
	第3回	文献検索	
	第4回	文献収集	
	第5回	文献を読む（1）論点をさぐる	
	第6回	文献を読む（2）考察を深める	
	第7回	文献を読む（3）自分の考えを成立させる	
	第8回	論文の構成を考える	
	第9回	論文を執筆する（1）導入部分について	
	第10回	論文を執筆する（2）本論	
	第11回	論文を執筆する（3）本論・まとめ	
	第12回	論文を執筆する（4）まとめ・参考文献等	
	第13回	原稿の推敲（1）構成	
	第14回	原稿の推敲（2）論点	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	先行研究を読みながら、どのようにまとめたらよいか、どのように記録していくとよいか、自分なりの方法を見つけること。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	論文作成への取り組み:30% 論文の内容:70%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
修了論文作成指導		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文を完成させる。		
授業の概要	イギリス文学（主に19世紀以前の作品）に関わるテーマでの論文執筆を希望する者を受け入れたい。基本的に、個別指導もしくは類似テーマでのグループ指導。履修予定者は、授業開始前までに仮の参考文献リストと読書ノートを作成しておくこと。授業期間中には、論文メモを提出し、コメントを受けて書き直すという作業をくり返す。当然ながら、そのような過程を経たものでなければ、修了論文として受理しない。なお、余裕があれば、並行して、英語文献の読解指導も行う。		
授業 計画	第1回	参考文献リストと読書ノートについての報告と検討	
	第2回	論文テーマの検討（テーマの焦点と広がりを確認）	
	第3回	論文テーマの検討（参考文献リスト再検討）	
	第4回	論文メモの提出とコメント（主要文献の全体要約）	
	第5回	論文メモの提出とコメント（主要文献の部分要約）	
	第6回	論文メモの提出とコメント（主要文献についての批評メモ）	
	第7回	論文メモの提出とコメント（論旨の骨格と章立て検討）	
	第8回	論文メモの提出とコメント（引用箇所を検討とパラフレーズ基礎）	
	第9回	論文メモの提出とコメント（引用箇所を検討とパラフレーズ練習）	
	第10回	論文メモの提出とコメント（引用箇所を検討とパラフレーズ発展）	
	第11回	論文メモの提出とコメント（論旨の骨格と章立て再検討）	
	第12回	論文メモの提出とコメント（本文再検討、注の付け方などを検討）	
	第13回	論文メモの提出とコメント（本文再検討、表記統一などの確認）	
	第14回	本文最終チェックと要約の作成	
	第15回	修了論文および要約の完成	
準備学習 (予習・復習等)	予習：文献リストの作成・見直し。論文メモの作成と提出。 復習：論文メモの書き直し。授業時に紹介された文献などの読解。		
テキスト	プリント		
参考文献	随時指示する		
評価方法	平常点（提出課題）：50% 修了論文：50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
情報科学		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	「情報処理技術」「情報通信技術」は社会全般に大きなインパクトを与えるものになってきています。技術に関する課題に対しては当然、工学的なアプローチでの研究が中心になりますが、技術の進歩が及ぼす影響に関しては「情報社会」「情報倫理」「知的所有権」など社会科学的な視点でのアプローチが必要です。この演習は広義の情報科学分野の課題をテーマに修了論文を執筆します。		
授業の概要	各自が設定したテーマに即して、演習での発表、個別指導とおして修了論文を完成させます。		
授業計画	第1回	演習の進め方、論文執筆要領確認	
	第2回	修了論文概要発表と討論①	
	第3回	修了論文概要発表と討論②	
	第4回	個別指導①	
	第5回	個別指導②	
	第6回	個別指導③	
	第7回	個別指導④	
	第8回	中間発表と討論①	
	第9回	中間発表と討論②	
	第10回	個別指導⑤	
	第11回	個別指導⑥	
	第12回	個別指導⑦	
	第13回	個別指導⑧	
	第14回	修了論文まとめ	
	第15回	修了論文口頭発表	
準備学習 (予習・復習等)	各自が設定したテーマに即して、演習での発表、個別指導とおして修了論文を完成させます。ゼミ内での討論やコメント、個別指導の内容をよく吟味し、論文作成の参考にしてください。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	適宜紹介します。		
評価方法	修了論文:70% 発表と討論への参加:30%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
身体表現・身体文化・舞踊文化に関するテーマで調査研究を行う		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 身体表現・身体文化・舞踊文化に関するテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。</p> <p>○ 日本と西洋の身体表現・身体文化・舞踊文化の歴史や、現代社会における位置づけをめぐって討論する。それらの結果と専攻科の演習において体得した経験とを結びつける中で、自分のテーマを絞り論文の作成に向けて指導を行う。</p>		
授業の概要	<p>○ それぞれの関心に沿って具体的なテーマを決め、論文作成のために各自作業を行っていく。その中で、論文の構成と内容、文献の読み方とまとめ方等について具体的に指導していく。</p> <p>○ 途中経過報告を行い、それに対する質疑応答やミニレクチャーを行う。自らの必要な作業は何なのかを明確にし、独自性や妥当性を論証する具体的な方法を身につけていく。最終的には、修了論文を完成させる。</p>		
授業計画	第1回	本演習の進め方の解説を行う。自己紹介をし合い、信頼関係を築けるようにする。	
	第2回	テーマの絞り込み1：西洋と日本の身体表現・身体文化や民俗芸能・舞踊の歴史や特徴などの理解を深める。	
	第3回	テーマの絞り込み2：現代社会における現状と課題について調べたり討論をする。	
	第4回	テーマの絞り込み3：演習で体得した経験を結びつけながら修了論文のテーマを絞り込んでいく。	
	第5回	研究テーマを紹介し合い、アドバイスし合う。	
	第6回	研究計画の発表1：テーマに沿って各人の内容報告に基づいて討論を行う。	
	第7回	研究計画の発表2：身体表現、身体文化、舞踊文化の諸問題について理解を深める。	
	第8回	研究計画の発表3：西洋と日本という視点だけではなく、ローカルに伝承されてきた舞踊にも注目することで、多角的な視野を身につけていく。	
	第9回	個別指導1：主張内容とともに、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説への言及、表現の適切性、等々の観点において確認し、論文の完成へ向けていく。	
	第10回	個別指導2：主張内容とともに、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説への言及、表現の適切性、等々の観点において確認し、論文の完成へ向けていく。	
	第11回	個別指導3：主張内容とともに、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説への言及、表現の適切性、等々の観点において確認し、論文の完成へ向けていく。	
	第12回	発表とディスカッション1：自らの考えを他者に適切かつ効果的に表現し伝達する力を身につけるため、研究発表会に向けた指導を行う。	
	第13回	発表とディスカッション2：自らの考えを他者に適切かつ効果的に表現し伝達する力を身につけるため、研究発表会に向けた指導を行う。	
	第14回	論文提出前の指導1：論文の最終確認を行う。	
	第15回	論文提出前の指導2：論文の最終確認を行う。	
準備学習 (予習・復習等)	書籍選びと参考資料集めを行う。調査（インタビュー、アンケート、市場調査、観劇などによる検討など）が必要な場合には、その準備を行う。		
テキスト	テーマに沿って、その都度紹介する。		
参考文献	テーマに沿ってその都度紹介する。		
評価方法	論文:50% 論文に向けたレポート:50%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
科学と社会の関係をテーマとする修了論文		八耳 俊文（やつみみ としふみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	科学に関する知識を学び、科学や技術が社会とかがわる問題で修了論文作成を考えている学生向け。専攻科生としてふさわしい水準の修了論文となるよう指導をおこなう。		
授業の概要	すでに卒業論文執筆体験のある学生の場合は、修了論文はその発展であり、受講生が進める作業の確認、指導が主となる。執筆体験のない学生の場合、論文指導をはじめの数回の授業でおこなう。		
授業計画	第1回	イントロダクション 修了研究演習の位置づけ	
	第2回	修了論文のテーマ及び全体の構成についての指導	
	第3回	修了論文のテーマに関する文献指導	
	第4回	第1章相当部分の先行研究の確認	
	第5回	第1章相当部分の構想の指導	
	第6回	第2章相当部分の先行研究の確認	
	第7回	第2章相当部分の構想の指導	
	第8回	第3章相当部分の先行研究の確認	
	第9回	第3章相当部分の構想の指導	
	第10回	第4章相当部分の先行研究の確認	
	第11回	第4章相当部分の構想の指導	
	第12回	修了論文の一次稿の提出	
	第13回	改稿作業	
	第14回	修了論文の完成稿の提出	
	第15回	修了論文の発表会	
準備学習 (予習・復習等)	「先行研究の確認」では授業前に関連文献を読み、レジメにまとめてくること。「構想の指導」では授業前に相当部分の構想をレジメにまとめてくること。授業後はこの指導を受け、順次、執筆を進めること。		
テキスト	特になし		
参考文献	白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方』（ミネルヴァ書房、2008年）、栩木伸明『卒論を書こう』第二版（三修社、2006年）		
評価方法	修了論文:80% 授業への参加度:20%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
イギリス文学研究		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各人の関心・テーマにあわせて参考文献の収集と選択、修了論文執筆への準備を行う。		
授業の概要	個人指導（チュートリアル）と中間報告を交互に繰り返し、期末には修了論文を提出する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 論文提出スケジュール確認	
	第2回	個人指導 1	
	第3回	ドラフト 1 提出	
	第4回	個人指導 2	
	第5回	ドラフト 2 提出	
	第6回	個人指導 3	
	第7回	ドラフト 3 提出	
	第8回	個人指導 4	
	第9回	ドラフト 4 提出	
	第10回	個人指導 5	
	第11回	論文作成方法指導 1	
	第12回	論文作成方法指導 2	
	第13回	論文作成方法指導 3	
	第14回	修了論文提出	
	第15回	修了論文講評会	
準備学習 (予習・復習等)	各自で隔週のチュートリアルに一定量のドラフトを準備してのぞみ、年度末の修了論文の提出に備える。		
テキスト	各自の関心・テーマに合わせて適宜選定。		
参考文献	授業内にて適宜指導。		
評価方法	修了論文の提出:60% 個人指導の充実:40%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
修了研究：言語学		湯本 久美子（ゆもと くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了研究論文の指導。本演習では英語意味論・英語語用論・日英語対照言語学・日英語認知言語学の分野における論文を指導する。		
授業の概要	論文執筆に関する全般的な指導はクラス単位で行うが、各自の論文については個別指導を行う予定。①論文題目選択、②研究計画書、③中間報告、④最終報告を経て、⑤論文提出、⑥発表のプロセスをとる。①～④は⑤の必須要件。		
授業計画	第1回	①論文演題選択・参照文献	
	第2回	論文執筆要領	
	第3回	②研究計画書	
	第4回	引用方法指導	
	第5回	各自への個別指導	
	第6回	グループディスカッション	
	第7回	③中間報告	
	第8回	各自への個別指導	
	第9回	各自への個別指導	
	第10回	各自への個別指導	
	第11回	各自への個別指導	
	第12回	グループディスカッション	
	第13回	④最終報告	
	第14回	⑤論文提出	
	第15回	発表	
準備学習 (予習・復習等)	修了論文執筆		
テキスト	特定のテキストは用いない		
参考文献	受講生各自の論文題目に沿って個別に指導する		
評価方法	クラス貢献：20% 修了論文①～⑥：80%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
キリスト教死生学—死をとおしていのちの意味を問う		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「キリスト教死生学」に関するテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。		
授業の概要	学生各自が関心を持つ主題について、キリスト教神学の観点からどのように位置づけられるかについて討議、指導する。そして専攻科の講義科目等で得た知見を統合して、テーマ設定を行い、修了論文課題を決定する。その後、論文の構成と内容、文献等との取り組み方等について具体的に指導する。医療現場、ホスピス、被災地、福祉施設、宗教施設等でのフィールドワーク等も実施する。		
授業計画	第1回	あなたの死生観	
	第2回	日本の死生観	
	第3回	「3大宗教」の死生観	
	第4回	医療現場と死生観	
	第5回	「3.11」後の死生観	
	第6回	論文テーマ決定に向けて	
	第7回	テーマによる報告と討議	
	第8回	テーマによる報告と討議	
	第9回	テーマによる報告と討議	
	第10回	フィールドワーク①	
	第11回	テーマによる報告と討議	
	第12回	テーマによる報告と討議	
	第13回	フィールドワーク②	
	第14回	修了論文仮提出	
	第15回	修了論文提出と省察	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の新聞朝刊(社は問わない)1面と社説を読んでもらうこと。 授業時に指示された課題の遂行と授業後の省察を確実にすること。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会) 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』(日本キリスト教団出版局)		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	修了論文:70% 授業への参加態度:30%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
比較社会・政治学・社会思想・沖縄学にかんする修了論文の作成		輪島 達郎（わじま たつろう）	
授業の到達目標 及びテーマ	比較社会・政治学、社会・政治思想、沖縄学のいずれかの領域について各自の研究課題を設定し、文献を探索して先行研究をふまえた上でオリジナルな議論を構築する方法を学び、修了論文を作成します。		
授業の概要	研究課題の設定、研究の進捗報告、論文作成指導の順に進めていきます。		
授業計画	第1回	研究発表と論文作成指導(1)	
	第2回	研究発表と論文作成指導(2)	
	第3回	研究発表と論文作成指導(3)	
	第4回	研究発表と論文作成指導(4)	
	第5回	研究発表と論文作成指導(5)	
	第6回	研究発表と論文作成指導(6)	
	第7回	研究発表と論文作成指導(7)	
	第8回	研究発表と論文作成指導(8)	
	第9回	研究発表と論文作成指導(9)	
	第10回	研究発表と論文作成指導(10)	
	第11回	研究発表と論文作成指導(11)	
	第12回	研究発表と論文作成指導(12)	
	第13回	研究発表と論文作成指導(13)	
	第14回	研究発表と論文作成指導(14)	
	第15回	研究発表と論文作成指導(15)	
準備学習 (予習・復習等)	進捗状況によって、文献調査、研究報告などの準備が必要である。		
テキスト	特になし。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:30% 修了論文:70%		

修了研究演習		後期 2 単位	現代教養専攻
社会学、メディア論のテーマで修了論文を書く		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標 及びテーマ	この演習では専攻科における学習の集大成として、社会学ないしメディア論のテーマで修了論文を書く。現代日本社会の直面している諸問題を追求し、私たちの生きている現代社会に対する幅広い視野や判断力を養い、さらに日本だけでなく他の社会との比較の視点を考慮しつつ論文を書く。最終的には、大学の卒業論文レベルの修了論文が作成できるようになる。		
授業の概要	それぞれの学生がテーマを選択し、調査研究を行い、進行状況について中間報告する。それに基づいて参加者全員で討論を行うとともに、各人のそれから先への進め方、参考文献、関連データの収集法、データの分析法などについては、個人別に指導する。		
授業計画	第1回	導入と今後の予定	
	第2回	テーマの設定	
	第3回	論文の構想	
	第4回	これまでの研究のレビュー（1）	
	第5回	これまでの研究のレビュー（2）	
	第6回	仮説・概要の設定	
	第7回	データの収集（1）	
	第8回	データの収集（2）	
	第9回	中間報告	
	第10回	データの分析（1）	
	第11回	データの分析（2）	
	第12回	仮説・概要の再検討	
	第13回	論文の作成（1）	
	第14回	論文の作成（2）	
	第15回	論文の完成	
準備学習 (予習・復習等)	学生は、自らの問題意識に基づいてテーマを選択し修了論文を書く。論文作成に必要な一連の作業は、学生が自主的に行うことが要求される。具体的には、これまでの研究のレビュー、関連データの収集、それらデータの分析、要約、これらの作業は、教員の助言を受けつつ、学生が自主的に行う必要がある。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	個人別のテーマに合わせて適宜指示する。		
評価方法	授業参加度:30% 中間報告:20% 修了論文:50%		

多元文化特講 A	前期 2 単位	1年 多元文化専攻
文化の多元的理解		
<p>【担当教員】 河見 誠（かわみ まこと）、齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）、八耳 俊文（やつみみ としふみ）</p> <p><授業の到達目標及びテーマ> この授業では、文化を多元的視座から把握する学びの例示・導入を行う。すなわち、人間の営みとしての文化を多元的視座から捉えることを通して、文化の抱える問題点を掘り下げると同時に、文化のより豊かな展開を展望する。3名の講師は二つのキーワードを共有している。すなわち「多様性(diversity)」、および普遍的視点とローカルな視点を併せ持つ「グローバル」である。</p> <p><授業の概要> 切り口を立体的に提示するため、三つの観点（自然科学、社会科学、人文科学）からのオムニバス形式を取る。中間討論、総括討論は、学生との対話で進められる。</p> <p><授業計画></p> <p>ー第1回 インTRODクシヨンー（河見・八耳）</p> <p>ー人間の自然との関わりからの観点からー</p> <p>第2回 人と植物の歴史（八耳） 第3回 日本の自然観の展開（八耳） 第4回 津波災害と復興の歴史（八耳） 第5回 普遍的視点とローカルな視点（八耳）</p> <p>ー社会と国家の観点からー</p> <p>第6回 在日韓国・朝鮮人の歴史と現在（河見） 第7回 平等と差異（河見） 第8回 狭間に生きる生き方と三つの多元主義（河見） 第9回 国家と参政権（河見）</p> <p>ー第10回 中間討論ー（河見・齋藤）</p> <p>ーそもそも文化とは？ー</p> <p>第11回 日米文化研究（カルチュラル・スタディーズ）の観点から（齋藤） 第12回 メルティングポット（るつぼ）論／同化主義の功罪（齋藤） 第13回 サラダボウル論／多文化主義の功罪（齋藤） 第14回 雑種化・混血化／自らの周縁性を外部と出会える<境域(borderlands)>へと読み替え、異文化混淆から新たな価値を生み出すカテゴリー越境的なクリエイターたち（齋藤）</p> <p>ー第15回 総括討論ー 二つのキーワードをめぐって21世紀文化を展望する： 「多様性・多層性」 「グローバル」“Think globally, act locally!”（河見・八耳・齋藤）</p> <p><準備学習（予習・復習等）> 文化の多元的視座からの把握がどのように広がったか、授業各回ごとに振り返ってまとめた上で、次の授業に臨むこと。そして中間討論、総括討論で自らの見解を述べられるように準備すること。</p> <p><テキスト> 指定しない。</p> <p><参考文献> テーマに即して提示する。</p> <p><評価方法> 期末レポート：75% 授業参加（討論等）25%</p>		

多元文化特講B	後期 2 単位	1年 多元文化専攻
ワークショップで学ぶ多元文化実践		
<p>【担当教員】 菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、鈴木 直子（すずき なおこ）、趙 慶姫（ちよう きょんひ） <授業の到達目標及びテーマ> 多様なものの見方を実践的に学ぶ。 異なる価値観を理解する知恵と方法を学ぶ。 様々な人々と連携・協力して社会に関わる方法を学ぶ。</p> <p><授業の概要> 私たちは、多様な価値観のなかに生きています。しかし異なる価値観を持った人々どうしが理解しあい、連携・協力して人間関係を築き上げることは、なかなか難しいことです。様々な社会活動やボランティアなど、社会に積極的に関わる方法を学ぶため、この授業では様々なゲストスピーカーとともに、ワークショップ形式で、多様な価値観を体感し、「言葉」「身体」「モノ」をめぐる自分の関わり方を、体験的に変化させていきます。 また、授業の後半には、グループワークによってワークショップを計画し、実行します。自ら実践することで、ワークショップという手法の意味と有用性を学びます。 担当者全員がメインファシリテータまたはサブファシリテータになって、授業を進行していきます。</p> <p><授業計画> 第1回 導入1 多様な価値観のなかで生きるということ 第2回 導入2 「私」の「思い」をどう実現するか 第3回 言葉の変革1 言葉がつなぐ人と人 第4回 言葉の変革2 「私」の価値観を知る 第5回 モノの変革1 デザインが社会をつくる 第6回 モノの変革2 モノのかたちがつなぐ社会 第7回 身体の変革1 身体が変わると心が変わる 第8回 身体の変革2 「私」の身体と心を知る 第9回 変革の現場に学ぶ1 社会と私 第10回 変革の現場に学ぶ2 教育と成長 第11回 変革の現場に学ぶ3 地域と連携 第12回 ワークショップ実践1 伝えたいことを形にする 第13回 ワークショップ実践2 繋がりをデザインする 第14回 ワークショップ実践3 多様性のなかに生きる 第15回 まとめ</p> <p><準備学習（予習・復習等）> ・グループ活動やグループ発表の準備をする。 ・授業内容全体をふまえ、期末にふりかえりを行い、体験を自己に定着させる。</p> <p><テキスト> とくになし</p> <p><参考文献> 中野民夫『ワークショップ 新しい学びと創造の場』岩波新書、2001年</p> <p><評価方法> 授業への積極的参加:70% 期末ふりかえり:30% グループワークで進むため、欠席すると他の受講者に迷惑がかかります。できるだけ欠席しないようにしてください。 とくに初回、最終回は必ず出席してください。</p>		

文学理論A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
文学理論の歴史		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標 及びテーマ	文学を読むことの歴史は、同時に読む主体の歴史です。文学理論、批評理論について学ぶことは、読む主体が、自分自身の背後に回り込む技術を習得すること、と考えればよいでしょう。そんなことができるだろうか——。そうできれば、読むことが、飛躍的に自在になります。ぜひ、その技術を獲得してください。		
授業の概要	自らの読みを見つめ直すための批評理論は非常に多くあります。ここではそのうち主要なものを丁寧に読み、他の理論にもできるだけ触れていくようにします。なかでもジェンダーの視点は最も重要です。他の授業内容にもつなげて理解を発展させることが大切です。後半は実際に作品の中でそれらがどのように駆使されているのか研究し、発表・討議します。		
授業計画	第1回	導入	
	第2回	V・シクロフスキー「手法としての芸術」——「異化」とは何か	
	第3回	B・ブレヒト「実験的演劇について」——「異化効果」	
	第4回	M・パフテン——フォルマリズム批判	
	第5回	E・サイード『オリエンタリズム』——異者の眼差し	
	第6回	学生による発表とディスカッション (グループA)	
	第7回	学生による発表とディスカッション (グループB)	
	第8回	学生による発表とディスカッション (グループC)	
	第9回	学生による発表とディスカッション (グループD)	
	第10回	学生による発表とディスカッション (グループE)	
	第11回	学生による発表とディスカッション (グループF)	
	第12回	学生による発表とディスカッション (グループG)	
	第13回	学生による発表とディスカッション (グループH)	
	第14回	学生による発表とディスカッション (グループI)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各人の発表テーマに応じた必読文献を、各回ごとに教示します。		
テキスト	プリントで配布します (丁寧に説明しますが英語も使用します)。		
参考文献	David Lodge and Nigel Wood eds., <i>Modern Criticism and Theory: A Reader</i> 3rd ed. (Pearson Longman, 2008) は一生使えます。但し旧版の方が便利。		
評価方法	レポート:50% 発表内容:30% 授業中の討議:20%		

文学理論B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
文学理論の歴史		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標 及びテーマ	文学を読むことの歴史は、同時に読む主体の歴史です。文学理論、批評理論について学ぶことは、読む主体が、自分自身の背後に回り込む技術を習得すること、と考えればよいでしょう。そんなことができるだろうか——。そうできれば、読むことが、飛躍的に自在になります。ぜひ、その技術を獲得してください。		
授業の概要	自らの読みを見つめ直すための批評理論は非常に多くあります。ここではそのうち主要なものを丁寧に読み、他の理論にもできるだけ触れていくようにします。なかでもジェンダーの視点は最も重要です。他の授業内容にもつなげて理解を発展させることが大切です。後半は実際に作品の中でそれらがどのように駆使されているのか研究し、発表・討議します。		
授業計画	第1回	導入	
	第2回	ロラン・バルト1——「作者の死」を読む	
	第3回	ロラン・バルト2——「作者の死」の文が実現したこと	
	第4回	ジェンダー批評1——日本の文脈から	
	第5回	ジェンダー批評2——西洋の文脈から	
	第6回	学生による発表とディスカッション (グループA)	
	第7回	学生による発表とディスカッション (グループB)	
	第8回	学生による発表とディスカッション (グループC)	
	第9回	学生による発表とディスカッション (グループD)	
	第10回	学生による発表とディスカッション (グループE)	
	第11回	学生による発表とディスカッション (グループF)	
	第12回	学生による発表とディスカッション (グループG)	
	第13回	学生による発表とディスカッション (グループH)	
	第14回	学生による発表とディスカッション (グループI)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各人の発表テーマに応じた必読文献を、各回ごとに教示します。		
テキスト	プリントで配布します (丁寧に説明しますが英語も使用します)。		
参考文献	David Lodge and Nigel Wood eds., <i>Modern Criticism and Theory: A Reader</i> 3rd ed. (Pearson Longman, 2008) は一生使えます。但し旧版の方が便利。		
評価方法	レポート:50% 発表内容:30% 授業中の討議:20%		

日本語学演習B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本文化と読み解く言語科学		岡崎 和夫（おかざき かずお）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>上記の研究題目にしたがい、下記の概要に沿って、つぎの到達目標を立てる。</p> <p>①言語を科学的にあつかう力量の養成。 ②言語dateの意義をたたく理解する力の養成。 ③その収集にあたる力量の養成。 ④該当のdateからあらたな知見を導き求める力量の養成。</p>		
授業の概要	<p>本科の2種の講義題目、「日本語学」及び「日本語論」の履修のうえに、その知見を前提として、日本語を対象に言語科学の応用領域をあつかう。日本語と、古代から近代・現代におよぶ日本文化を読み解くskillの獲得をめざし、上記4つの到達目標をたてる。初年度は、J-popの歌詞やわらべうた、おわらい、国会議員の言語、法律の言語、文豪の小説作品などをあつかい、そのなかで、これらに刺激されながらの、学生自身の発案、設定による自主的課題＝発展自由領域をあわせてあつかう。</p>		
授業計画	第1回	introduction ほんとうはとても不思議な表現・・・「テレビを消して出かけてね」「黒板消しといいてくませんか？」・・・テレビや黒板はどう消せるのか？	
	第2回	鉛筆が一本、二本、三本・・・と「本」の発音が変わるメカニズムを考える。	
	第3回	「電話いっほんよこさない！」・・・電話はなぜ「一本」か。そして、野球のヒットやホームランもなぜ「一本、二本、三本」か？そして「日本」はニホンかニッポンか？	
	第4回	学生の発想によるテーマの気づき（レポート化する）。	
	第5回	「とぼとぼ」「ぶらぶら」「よちよち」「とことこ」「てくてく」「つかつか」「よたよた」という歩行の語群。	
	第6回	「にやにや」「にこにこ」「にたにた」「くすくす」「げらげら」・・・という笑いの語群。	
	第7回	「安倍晋三の再投板！！」・・・野球でもないのに「投板」の不思議。類例を列挙し分析する。	
	第8回	言語の歴史的研究 現代語から父母・祖父母の言語へ	
	第9回	言語の歴史的研究 明治・大正の言語へ。語彙と文法。	
	第10回	言語の歴史的研究 近代語から近世語へ（江戸時代後期のことば）。文法という概念。	
	第11回	言語の歴史的研究 近代語から近世語へ（江戸時代前期のことば）。文法の歴史（文法史）。	
	第12回	言語の歴史的研究 近世語から中世語へ（室町時代のことば）。文法論という概念。	
	第13回	言語の歴史的研究 近世語から中世語へ（鎌倉時代のことば）。文法論の歴史（文法論史）。	
	第14回	言語の歴史的研究 中世語から平安時代のことばへ・漢語の摂取という文化も見つめる	
	第15回	言語の歴史的研究 平安時代から上代のことばへ・漢字の受容からの展開も見つめる	
準備学習 (予習・復習等)	各回Textの読み調べ		
テキスト	各回、各自、各自の教材を作成する		
参考文献	各回、指示。		
評価方法	文献を調べるちからとdateの収集のちから:50% 論理的に考えるちからと授業を推進するちから:50%		

日本文学特講 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
『源氏物語』夕顔巻—基礎篇として		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○『源氏物語』夕顔巻本文を理解することができる。 ○『源氏物語』を読むための古文語法・古典文法に習熟する。 ○『源氏物語』の世界を探究することができる。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ○『源氏物語』夕顔巻本文を読み進める。 ○必ずしも事前の知識は要らない。受講者の人数や学力によりけりだが、適宜、語法や文法などの確認にも気を配りたい。基礎篇ということ意識しながら、物語の流れの把握を損なわない範囲で、古註釈や引用などにも触れるつもりである。 ○期末試験、期末レポートは実施しない。 		
授業計画	第1回	『源氏物語』情報交換。テキスト配布。	
	第2回	五条の風景と夕顔の宿。解析・考察・意見交換。	
	第3回	惟光の家族。解析・考察・意見交換。	
	第4回	夕顔・光源氏の贈答歌。解析・考察・意見交換。	
	第5回	惟光の内偵。解析・考察・意見交換。	
	第6回	六条の女と朝の庭園。解析・考察・意見交換。	
	第7回	遠景の頭中将。解析・考察・意見交換。	
	第8回	8月15夜の風情。解析・考察・意見交換。	
	第9回	夕顔の宿の周辺。解析・考察・意見交換。	
	第10回	某院への逃避行。解析・考察・意見交換。	
	第11回	某院の怪異出現。解析・考察・意見交換。	
	第12回	惟光の活躍。解析・考察・意見交換。	
	第13回	東山の密事と二条院への帰還。解析・考察・意見交換。	
	第14回	右近の語りと夕顔の正体。	
	第15回	二つの離別。解析・考察・意見交換。	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ○毎回の授業にむけて『源氏物語』本文の事前下読み。 ○簡単なワークシートの事前記入。 		
テキスト	コピー配布。		
参考文献	適宜、紹介する。		
評価方法	ワークシート蓄積:40% 発言実績:60%		

日本文学特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
『源氏物語』玉鬘物語を読む—応用篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○『源氏物語』玉鬘巻の本文を理解することができる。 ○『源氏物語』の語法・文法に通暁することができる。 ○『源氏物語』の表現の諸相に習熟することができる。 		
授業の概要	<p>○『源氏物語』玉鬘巻を読み進める。夕顔の遺児玉鬘が、九州の地で長年さすらった後に京へもどってくる。これが玉鬘物語の始まりの設定である。玉鬘21歳、光源氏35歳、このふたりの数奇な出会いの行方はどうなるのか。</p> <p>○読み進める速度は、受講者の人数と古典習熟によりけりだが、初めはゆるやかに、そして徐々に加速していきたい。</p> <p>○後期の履修条件ではないが、『源氏物語』の本文になれるためには、基礎篇である前期の夕顔巻の授業も履修しておくことが望ましい。</p> <p>○期末試験、期末レポートは実施しない。</p>		
授業計画	第1回	『源氏物語』情報交換。テキスト配布。	
	第2回	玉鬘の流離。解析・考察・意見交換。	
	第3回	小貳一家の地方流転。解析・考察・意見交換。	
	第4回	大夫監の求婚。解析・考察・意見交換。	
	第5回	九州逃亡と京都への帰還。解析・考察・意見交換。	
	第6回	京域の流離と物詣で。解析・考察・意見交換。	
	第7回	玉鬘の初瀬詣、右近との再会。解析・考察・意見交換。	
	第8回	長谷寺にて。解析・考察・意見交換。	
	第9回	右近の注進。解析・考察・意見交換。	
	第10回	玉鬘の六条院入り、光源氏との初対面。解析・考察・意見交換。	
	第11回	玉鬘の処遇構想。解析・考察・意見交換。	
	第12回	六条院衣配り。解析・考察・意見交換。	
	第13回	貴種流離譚の探究。	
	第14回	玉鬘十帖の見通しと場面の探究。	
	第15回	六条院物語における玉鬘物語の総合探究。	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ○毎回分の『源氏物語』本文の下読み。 ○『源氏物語』ワークシートの記入。 		
テキスト	コピー配布。		
参考文献	適宜、紹介。		
評価方法	ワークシートの蓄積:40% 発言実績の蓄積:60%		

日本文学特講 C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本の歌謡		大木 京子（おおき きょうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本における歌謡の歴史を概観し、研究に必要な知識を身につける。歌謡の詞章を文学として捉え、注釈・解釈を通して理解を深める。		
授業の概要	文学史という観点から歌謡の変遷を説明し、音声資料を用いて確認していく。古代歌謡から中世歌謡までの詞章を取り上げて注釈を行い、先行研究を参照しながら内容を理解する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	歌謡とは何か	
	第3回	古代歌謡解説	
	第4回	古事記歌謡	
	第5回	日本書紀歌謡	
	第6回	中古歌謡解説	
	第7回	神楽歌・催馬楽	
	第8回	今様の流行と梁塵秘抄	
	第9回	中世歌謡解説	
	第10回	閑吟集	
	第11回	宗安小歌集	
	第12回	隆達小歌集	
	第13回	資料・先行研究確認	
	第14回	近世歌謡解説	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に指示された参考書やプリントを読んでおく。		
テキスト	プリントを配付する。		
参考文献	『日本歌謡集成』（東京堂出版）、『日本歌謡辞典』（桜楓社）、『日本歌謡史』（五月書房）、『日本歌謡・芸能の周辺』（勉誠社）、『歌謡文学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『徳川文芸類聚』9・10巻など		
評価方法	授業への積極的参加:30% レポートとテスト:70%		

日本文学特講D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
近世歌謡を読む		大木 京子（おおき きょうこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代の歌謡の流れを確認し、流行歌謡を取り込んだ散文作品を読むことで、近世の歌謡と散文との影響関係について理解する。		
授業の概要	江戸時代に流行した歌謡の詞章を実際に読んでいく。注釈を行いながら内容を捉え、歌に込められた情感を理解する。また、近世小説に引用された流行歌を確認するとともに、時代背景や小説への影響を考察する。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	歌謡史の確認	
	第3回	江戸時代歌謡の解説	
	第4回	隆達節と仮名草子	
	第5回	『松の葉』解説	
	第6回	『松の葉』序文	
	第7回	三味線と流派	
	第8回	巻一「組歌」と踊り	
	第9回	巻二「長歌」と遊里趣味	
	第10回	作詞者と近世小説	
	第11回	巻三「端歌」と浮世草子	
	第12回	巻四「吾妻浄瑠璃」	
	第13回	巻五「投節」	
	第14回	音曲と近世芸能	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前に指示された参考書やプリントを読んでおく。		
テキスト	プリントを配付する。		
参考文献	『日本歌謡集成』（東京堂出版）、『日本歌謡辞典』（桜楓社）、『日本歌謡史』（五月書房）、『日本歌謡・芸能の周辺』（勉誠社）、『歌謡文学を学ぶ人のために』（世界思想社）、『徳川文芸類聚』9・10巻など		
評価方法	授業への積極的参加:30% レポートとテスト:70%		

日本文学特講E		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本近現代文学とジェンダー 1		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	ジェンダー・セクシュアリティに関する概念・歴史・理論などについて、基本的な文献をいくつか読みながら、ジェンダー理論の基礎を理解します。日本近代文学への新たな興味関心を開けるよう、身体・少女・母性・恋愛・セクシュアリティ・サブカルチャーなど多様なトピックを学びます。		
授業の概要	講読形式の授業です。参加者各自の問題関心に沿って、テーマとテキストを選び、文献を読んでレジュメを作り、発表します。参加者は、発表に基づくディスカッションを通じて、各テーマへの理解を深めます。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	講読ゼミでの発表の仕方を学ぶ	
	第3回	発表の準備をする	
	第4回	テキスト講読 女性身体とジェンダー	
	第5回	テキスト講読 恋愛論とジェンダー	
	第6回	テキスト講読 母性とジェンダー	
	第7回	テキスト講読 民族・国家とジェンダー	
	第8回	テキスト講読 ファンタジーとジェンダー	
	第9回	テキスト講読 ことばとジェンダー	
	第10回	テキスト講読 売買春とジェンダー	
	第11回	テキスト講読 セクシュアリティとジェンダー	
	第12回	テキスト講読 平和・暴力・戦争とジェンダー	
	第13回	テキスト講読 スポーツとジェンダー	
	第14回	まとめ 1	
	第15回	まとめ 2	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> 各自担当する文献を読み、発表レジュメを作成する。 配布された文献資料を読み、考えを深めておく。 ディスカッションを踏まえ、レポートを作成する。 		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	発表:40% ディスカッション:30% 期末レポート:30%		

日本文学特講 F		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本近現代文学とジェンダー 2		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本現代文学・文化およびサブカルチャーについて、ジェンダー批評を実戦しつつ、女性の表現と物語表象をめぐる多様なトピックを学びます。		
授業の概要	講読形式の授業です。参加者各自の問題関心に沿って、テーマとテキストを選び、文献を読んでレジュメを作り、発表します。参加者は、発表に基づくディスカッションを通じて、各テーマへの理解を深めます。できれば前期に「日本文学特講E・e」を受講して、ジェンダーについての理論と知識を学んでおいてください。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ジェンダー批評の理論	
	第3回	ジェンダー批評の方法	
	第4回	女性文学の表現	
	第5回	女性身体と表現	
	第6回	女性のライフコースと表現	
	第7回	少女文化と少女小説	
	第8回	少女漫画と異性装	
	第9回	闘う少女の表象	
	第10回	宝塚文化とジェンダー	
	第11回	源氏物語受容と女性文化	
	第12回	サブカルチャーと紅一点	
	第13回	ジブリ作品とジェンダー	
	第14回	異類・妖怪とジェンダー	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> 各自担当する文献を読み、発表レジュメを作成する。 配布された文献資料および作品を読み、考えを深めておく。 ディスカッションをふまえ、レポートを作成する。 		
テキスト	授業時に配布する。		
参考文献	授業時に配布する。		
評価方法	発表:40% ディスカッション:30% 期末レポート:30%		

日本文学演習 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
源氏物語「御法」巻を読む		今井 俊哉 (いまい としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	物語文学は虚構です。しかしそれは単純な絵空事ではありません。現実の世界に根ざしつつ、そこから想像力の翼を広げているからこそ、物語文学には独自の「本物らしさ」があるのです。物語文学を味わうためには、まずそれを生み出したその時代の社会や習俗、宗教、常識といった知識を学ぶ必要があります。同時にそれらの知識をいかに調べ、いかに整理するかの方法を学びます。		
授業の概要	源氏物語「御法」巻の演習です。この「御法」巻では光源氏の最愛の妻、紫の上の死が描かれます。光源氏にとって紫の上はどのような存在だったのか、また紫の上にとって光源氏はどのような存在だったのか、それを理解するために、物語が書かれた時代背景や、出家、葬儀といった当時の宗教や風俗についてそれを調査する方法を学びます。また、物語文学の特質は「語り手」の視点を通して登場人物の行為や心情が描かれる点にあります。この「語り手」の存在に注目しつつ、物語を読んでゆきましょう。		
授業計画	第1回	ガイダンス・担当発表者割り振り	
	第2回	病重い紫の上	
	第3回	紫の上の法華經千部供養	
	第4回	紫の上と花散里との贈答	
	第5回	紫の上、明石中宮と対面	
	第6回	紫の上、匂宮に遺言	
	第7回	紫の上死去	
	第8回	光源氏、夕霧に紫の上落飾のことをはかる	
	第9回	夕霧、紫の上の死に顔を見る	
	第10回	紫の上の即日葬儀	
	第11回	夕霧の紫の上回想	
	第12回	光源氏の悲嘆、帝以下の弔問	
	第13回	致事大臣の弔問	
	第14回	世の人の紫の上追慕	
	第15回	秋好中宮の弔問	
準備学習 (予習・復習等)	発表者は発表内容・資料・レジメの準備 フロアの場合は次回内容の予習		
テキスト	小学館古典セレクション「源氏物語」11		
参考文献	『源氏物語の鑑賞と基礎知識19 御法・幻』至文堂 ほか		
評価方法	演習での発表内容:50% 資料・レジメの内容:20% 演習での発言:30%		

日本文学演習B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
源氏物語「幻」巻を読む		今井 俊哉 (いまい としや)	
授業の到達目標 及びテーマ	物語文学は虚構です。しかしそれは単純な絵空事ではありません。現実の世界に根ざしつつ、そこから想像力の翼を広げているからこそ、物語文学には独自の「本物らしさ」があるのです。物語文学を味わうためには、まずそれを生み出したその時代の社会や習俗、宗教、常識といった知識を学ぶ必要があります。同時にそれらの知識をいかに調べ、いかに整理するかの方法を学びます。		
授業の概要	源氏物語「幻」巻の演習です。この巻は正編と呼ばれる光源氏物語最後の巻で、ここでは計二十六首の和歌が詠まれています。和歌は平安時代宮廷人の自己の心情を伝達する道具であり、同時に自己内省の装置でもあります。これらの平安和歌は古今和歌集を中心とするデータベース上に展開していますが、これらの和歌の調査法を学ぶことは平安時代宮廷人の心情を理解することであり、また源氏物語の登場人物を理解することへも繋がると言えます。物語の和歌を精査することで、最愛の妻、紫の上を喪った光源氏の心情を考えてみましょう。		
授業計画	第1回	ガイダンス・担当発表者割り振り	
	第2回	蛍兵部卿との贈答	
	第3回	光源氏の独詠	
	第4回	中將の君との対面	
	第5回	紫の上遺愛の桜と匂宮	
	第6回	女三宮訪問	
	第7回	明石君との対面	
	第8回	花散里、中將の君との対面	
	第9回	夕霧との対面	
	第10回	光源氏の独詠～夏から秋へ	
	第11回	命日の曼荼羅供養、	
	第12回	重陽の節句、五節	
	第13回	光源氏、紫の上の文殻を焼く	
	第14回	仏名の日はじめて人前に姿を現す光源氏	
	第15回	光源氏最後の歌	
準備学習 (予習・復習等)	発表者は発表内容・資料・レジメの準備 フロアの場合は次回内容の予習		
テキスト	小学館古典セレクション「源氏物語」11		
参考文献	『源氏物語の鑑賞と基礎知識19 御法・幻』至文堂		
評価方法	演習での発表内容:50% 資料・レジメの内容:20% 演習での発言:30%		

日本文学演習 C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
明治文学を原稿で読む		宗像 和重 (むなかた かずしげ)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の近代文学のうち、おもに明治期の文学を対象とする演習。作家の島崎藤村が「新しき言葉はすなわち新しき生涯なり」と語っているように、自らの言葉を新しくすることで新しい生き方を模索することが、明治期の作家たちの最も大きな課題であった。時代の大きな変革期のなかで、彼らがどのように言葉と格闘し、新しい文体と表現を紡ぎだしていったかを、この演習では近代作家の原稿を通して読み解いていく。一般の活字のテキストとは異なって、作家の筆跡や推敲のあとが生々しく残されている原稿は、言葉が生み出される創作の現場へと私たちを導いてくれる。具体的には、森鷗外・樋口一葉・夏目漱石らの作品とその原稿をとりあげ、作家がどのように言葉と格闘して作品を紡ぎだすかを理解する。		
授業の概要	明治文学の原稿の写真版や複製などを使い、生々しい推敲の後をたどりながら、おおそ時代順にいくつかの作品を読み解いていく。また、変体仮名やくずし字の読み方も学ぶ。取り上げるのは、それぞれの作品の一部分だが、作品の内容だけでなく、作家の筆跡や原稿用紙の特色などにも目を向ければ、活字のテキストではわからないさまざまな発見と面白さに出会えるだろう。受講生にも、関心のある原稿について報告してもらう予定。より学習効果を上げるために、下記の授業計画は変更することがある。		
授業計画	第1回	はじめにー授業の概要と進め方	
	第2回	近代の活版印刷と原稿について	
	第3回	表記の近代ー森鷗外「舞姫」の原稿(1)	
	第4回	見えない桁目との格闘ー森鷗外「舞姫」の原稿(2)	
	第5回	書くことのはじまりー北村透谷の原稿	
	第6回	女性の文章表現ー樋口一葉「たけくらべ」の原稿(1)	
	第7回	原稿用紙という媒体ー樋口一葉「たけくらべ」の原稿(2)	
	第8回	書くことと生きることー正岡子規の原稿	
	第9回	筆からペンへー夏目漱石「坊っちゃん」の原稿(1)	
	第10回	1枚の原稿が語るものー夏目漱石「坊っちゃん」の原稿(2)	
	第11回	草稿・清書・校正刷りー柳田國男「遠野物語」の原稿	
	第12回	受講生の報告(1)ー明治初期の原稿	
	第13回	受講生の報告(2)ー明治中期の原稿	
	第14回	受講生の報告(3)ー明治後期の原稿	
	第15回	まとめー明治の文学と原稿	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、その時間にとりあげた原稿についての感想を提出してもらう予定。また、その作品を実際に読んでくるなどの予習・復習を課すことがある。		
テキスト	毎時間、プリントを配布する予定。		
参考文献	その都度、教室で紹介する。		
評価方法	授業感想文や報告内容:30% 学期末レポート:70%		

日本文学演習D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
大正文学を原稿で読む		宗像 和重 (むなかた かずしげ)	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の近代文学のうち、おもに大正期の文学（および昭和初期を含む）を対象とする演習。大正文学は、作家の多彩な個性がそれぞれに特色のある作品を生み出した時代で、筆から万年筆への筆記環境の変化とともに、自由闊達な口語文体が成熟していく。この時期の文学を、ここでは近代作家の原稿を通して読み解いていく。一般の活字のテキストとは異なって、作家の筆跡や推敲のあとが生々しく残されている原稿は、作品が生み出されてくる現場へと私たちを導き、作品への理解と共感をより深めてくれるだろう。具体的には、志賀直哉・芥川龍之介・宇野浩二らの作品とその原稿をとりあげ、新しい言葉と作品がどのようにして生み出されるのかを理解する。		
授業の概要	大正期（および昭和初期）の原稿の写真版や複製などを使い、生々しい推敲の後をたどりながら、おおそ時代順にいくつかの作品を読み解いていく。取り上げるのは、それぞれの作品の一部分だが、作品の内容だけでなく、作家の筆跡や原稿用紙の特色などにも目を向ければ、活字のテキストではわからないさまざまな発見と面白さに出会うだろう。受講生にも、関心のある原稿について報告してもらう予定。より学習効果を上げるために、下記の授業計画は変更することがある。		
授業計画	第1回	はじめにー授業の概要と進め方	
	第2回	大正期の文学と原稿について	
	第3回	媒体と原稿ー夏目漱石「ころ」の原稿	
	第4回	友情としての文学ー志賀直哉「暗夜行路」（1）	
	第5回	書く、書く、書くー志賀直哉「暗夜行路」（2）	
	第6回	他者の添削ー芥川龍之介「蜘蛛の糸」の原稿	
	第7回	失われた原稿ー芥川龍之介「或る旧友へ送る手記」の原稿	
	第8回	歌から詩へー萩原朔太郎の原稿	
	第9回	変更された末尾ー有島武郎「或る女」の原稿	
	第10回	一変する作風ー宇野浩二の原稿	
	第11回	切り貼りされる原稿ー室生犀星の原稿	
	第12回	受講生の報告（1）ー大正初期の原稿	
	第13回	受講生の報告（2）ー大正後期の原稿	
	第14回	受講生の報告（3）ー昭和初期の原稿	
	第15回	まとめー大正・昭和初期の文学と原稿	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、その時間にとりあげた原稿についての感想を提出してもらう予定。また、その作品を実際に読んでくるなどの予習・復習を課すことがある。		
テキスト	毎時間、プリントを配布する予定。		
参考文献	その都度、教室で紹介する。		
評価方法	授業感想文や報告内容:30% 学期末レポート:70%		

日本文学演習 E		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
堀 辰雄の前・中期作品を読む		岡崎 直也 (おかざき なおや)	
授業の到達目標 及びテーマ	非人称の客観的視点で各作中人物の深層心理を分析する「聖家族」で、堀は主語なし日本語構文の特徴を生かし、固定するはずの視点を〈婉曲表現〉の多用で各作中人物の傍らに寄り添わせつつ経験の切実さを掬い上げた。しかし、叙述主体による小説の全的な統御への不信から、堀は、『風立ちぬ』『美しい村』などで小説を書く行為自体を一人称の叙述で書く、いわゆる〈小説の小説〉の試みを繰り返す。こうした文学表現の特質と可能性とを理解できる。		
授業の概要	堀辰雄の前・中期作品の演習発表(本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞など)を想定しているが、受講者数によっては講読形式の授業とすることもある。どちらの場合も、昭和前期の文学表現の特質について探究しつつ近・現代文学の研究方法を修得し、活発な質疑応答のなかで多角的思考を養うものとする。		
授業 計画	第1回	授業概説・演習形式か講読形式かの選択	
	第2回	近代文学史概説 1	
	第3回	近代文学史概説 2	
	第4回	堀 辰雄「聖家族」1 [研究史]	
	第5回	堀 辰雄「聖家族」2 [注釈]	
	第6回	堀 辰雄「聖家族」3 [分析]	
	第7回	堀 辰雄「聖家族」4 [鑑賞]	
	第8回	堀 辰雄『風立ちぬ』1 [研究史 1]	
	第9回	堀 辰雄『風立ちぬ』2 [研究史 2]	
	第10回	堀 辰雄『風立ちぬ』3 [注釈 1]	
	第11回	堀 辰雄『風立ちぬ』4 [注釈 2]	
	第12回	堀 辰雄『風立ちぬ』5 [分析 1]	
	第13回	堀 辰雄『風立ちぬ』6 [分析 2]	
	第14回	堀 辰雄『風立ちぬ』7 [鑑賞 1]	
	第15回	堀 辰雄『風立ちぬ』8 [鑑賞 2]	
準備学習 (予習・復習等)	授業で扱う前に作品ごとに小レポートを作成する。演習の発表担当回は、本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞などを整理したレジュメも作成し、受講生に配付する。		
テキスト	堀 辰雄『風立ちぬ』集英社文庫/堀 辰雄『菜穂子』岩波文庫		
参考文献	竹内清己 編『堀 辰雄事典』勉誠出版/池内輝雄 編「解釈と鑑賞」別冊『堀辰雄とモダニズム』至文堂/「文学」第14巻第5号、岩波書店/奥野健男『日本文学史—近代から現代へ—』中公新書/廣野由美子『批評理論入門—「フランケンシュタイン」解剖講義』中公新書		
評価方法	発表・小レポート:40% 単位レポート:40% 質疑応答:20%		

日本文学演習 F		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
堀 辰雄の後期作品を読む		岡崎 直也（おかざき なおや）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>多人物が交渉する社会を描くべく堀は「菜穂子」で三人称叙述を採用するが、叙述主体による作品の全的な統御を汎神論的な自然描写によって慎重に退ける。モダニズム文学の推進者でもあった堀は、一方で、古人の生活に学びながら王朝小説を書きつぎ、自然と照応する身体感覚によって〈生〉を実感する「曠野」を執筆した。日本文化を背景に模索されたこれらの〈小説の方法〉の特質と可能性とを理解できる。</p>		
授業の概要	<p>堀辰雄の後期作品の演習発表（本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞など）を想定しているが、受講者数によっては講読形式の授業とすることもある。どちらの場合も、昭和中期の文学表現の特質について探究しつつ近・現代文学の研究方法を修得し、活発な質疑応答のなかで多角的思考を養うものとする</p>		
授業計画	第1回	授業概説・演習形式か講読形式かの選択	
	第2回	昭和文学史概説	
	第3回	堀 辰雄文学概説	
	第4回	堀 辰雄『菜穂子』1 [研究史 1]	
	第5回	堀 辰雄『菜穂子』2 [研究史 2]	
	第6回	堀 辰雄『菜穂子』3 [注釈 1]	
	第7回	堀 辰雄『菜穂子』4 [注釈 2]	
	第8回	堀 辰雄『菜穂子』5 [分析 1]	
	第9回	堀 辰雄『菜穂子』6 [分析 2]	
	第10回	堀 辰雄『菜穂子』7 [鑑賞 1]	
	第11回	堀 辰雄『菜穂子』8 [鑑賞 2]	
	第12回	堀 辰雄「曠 野」1 [研究史]	
	第13回	堀 辰雄「曠 野」2 [注釈]	
	第14回	堀 辰雄「曠 野」3 [分析]	
	第15回	堀 辰雄「曠 野」4 [鑑賞]	
準備学習 (予習・復習等)	<p>授業で扱う前に作品ごとに小レポートを作成する。演習の発表担当回は、本文批評・研究史・注釈・分析・鑑賞などを整理したレジュメも作成し、受講生に配付する。</p>		
テキスト	堀 辰雄『風立ちぬ』集英社文庫/堀 辰雄『菜穂子』岩波文庫		
参考文献	<p>竹内清己 編『堀 辰雄事典』勉誠出版/池内輝雄 編「解釈と鑑賞」別冊『堀辰雄とモダニズム』至文堂/「文学」第14巻第5号、岩波書店/奥野健男『日本文学史一近代から現代へー』中公新書/廣野由美子『批評理論入門ー「フランケンシュタイン」解剖講義』中公新書</p>		
評価方法	発表・小レポート:40% 単位レポート:40% 質疑応答:20%		

日本史特講 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
女性の歴史と現代社会		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治期以降激変した近現代日本の歴史的経過について女性の生き方の変化として捉え直し、さらに現代女性をめぐる諸問題について理解を深める。様々な考察を通して、各自のテーマを発見し、それぞれ調査・分析・検証結果を報告する。最終目標は自分の生き方についての大きな見取り図を描くこと。		
授業の概要	男女格差や少子化、婚活といった身近なテーマをはじめ、差別と同化、戦争と平和、グローバリゼーションと日本社会など、様々な観点を提示している日本近現代史や女性史の代表的文献から学ぶ。担当者の報告を中心に全員で討議を重ねる中で、現代社会の諸問題とその歴史的背景を把握する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	現代社会の課題探求①「日本」を考える	
	第3回	現代社会の課題探求② 女性をめぐる諸問題	
	第4回	現代社会の課題探求③「世界」を知る	
	第5回	文献読解の方法論① 「言いたいこと」を読み取る	
	第6回	文献読解の方法論② 自己のテーマの発見	
	第7回	文献読解の方法論③ 視点を変えてみる	
	第8回	文献読解の方法論④ 読み解く楽しさを知る	
	第9回	文献の講読と討論①	
	第10回	文献の講読と討論②	
	第11回	文献の講読と討論③	
	第12回	文献の講読と討論④	
	第13回	研究報告会①	
	第14回	研究報告会②	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する記述シートに授業やテキストなどの概要・要点をまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	『講座差別と人権』、浜林正夫『人権の思想史』、鹿野政直『現代日本女性史』などの中から話し合いの上で決定する。		
参考文献	授業時に随時紹介する		
評価方法	記述シート、報告など:50% レポート:50%		

日本史特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代日本探求		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標 及びテーマ	戦後の日本社会について多面的に考察するため、毎回テーマを設定し問題の所在を確認する。文献や映像をはじめ様々な資料を駆使して問題を歴史的観点から検証すること、主体的に現状の課題を見つけ考察し分析する力を養うことが目標である。議論を重ねる中で、単なる感想ではなく事実の正確な理解に基づいた自己の見解の深化をはかる。		
授業の概要	1945年に敗戦をむかえ世界秩序の再編とともに大きく変動した戦後の日本社会の諸問題を検証する。生活者の視点から、国家と国民、日本とアジア、日米関係、グローバリゼーションにおけるこれからの日本のあり方など様々な問題を多面的に検討し、現代日本社会の今日的課題を考察する力を鍛える。		
授業計画	第1回	戦後日本とGHQの民主化政策	
	第2回	東京裁判	
	第3回	日本国憲法の制定とその特質	
	第4回	占領政策の転換	
	第5回	朝鮮戦争	
	第6回	講和条約～日本の独立と国際関係	
	第7回	日米安保条約と国際情勢	
	第8回	高度経済成長と公害問題	
	第9回	ベトナム戦争	
	第10回	沖縄の日本復帰	
	第11回	戦後補償問題	
	第12回	靖国神社をめぐる問題の所在	
	第13回	まとめ	
	第14回	まとめ	
	第15回	総論	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で配布する記述シートに授業やテキストなどの概要・要点、自己の見解をまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	毎回資料プリントを配布する		
参考文献	講義内容に即して随時紹介する。		
評価方法	記述シート、報告など:50% レポート:50%		

民俗学A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
折口信夫の民俗学と東アジアの祭りと芸能 1		伊藤 好英 (いとう よしひで)	
授業の到達目標 及びテーマ	祭りは人類のみが行なう特異な行動であり、芸能をはじめとするさまざまな文化の源泉です。本講義では、折口信夫の民俗学と「祭り」との関連を考えながら、その視座から東アジアの祭りと芸能を具体的に考察します。		
授業の概要	「民俗学A」（前期）では、折口信夫の生涯と学問を概観したあと、その祭り論の視座から、日本の祭り・沖縄諸島の祭り・韓国の祭りを映像や文献をとおして考察します。 この講義の内容は「民俗学B」（後期）に引き繋がれます。		
授業計画	第1回	折口信夫の人と学問	
	第2回	柳田國男の祭り論	
	第3回	折口信夫の祭り論	
	第4回	日本の祭り（神楽1）	
	第5回	日本の祭り（神楽2）	
	第6回	日本の祭り（神楽3）	
	第7回	沖縄諸島の祭り（女性司祭者と神の森）	
	第8回	沖縄諸島の祭り（久高島の神人誕生の儀礼）	
	第9回	八重山諸島の祭り（仮面神が出現する男性の秘祭）	
	第10回	八重山諸島の祭り（豊饒をもたらすミルク神）	
	第11回	韓国済州島の祭り（島のシャーマンたち）	
	第12回	韓国済州島の祭り（シャーマンの語りと舞）	
	第13回	韓国の法師による祭り	
	第14回	折口信夫の学問と祭り	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	フィードバックシートに、授業内容をどう受け止めたかを記して、毎時間提出してもらいます。		
テキスト	プリントを配布します。		
参考文献	伊藤好英『折口学が読み解く韓国芸能』慶應義塾大学出版会、2006年。		
評価方法	学期末レポート:50% フィードバックシート:20% 授業態度:30%		

民俗学B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
折口信夫の民俗学と東アジアの祭りと芸能 2		伊藤 好英 (いとう よしひで)	
授業の到達目標 及びテーマ	祭りは人類のみが行なう特異な行動であり、芸能をはじめとするさまざまな文化の源泉です。本講義では、折口信夫の民俗学と「祭り」との関連を考えながら、その視座から東アジアの祭りと芸能を具体的に考察します。		
授業の概要	「民俗学B」（後期）では、折口信夫の芸能学の輪郭を概観したあと、日本・沖縄・韓国の芸能を映像や文献をとおして考察します。 本講義の内容は、「民俗学A」（前期）の内容を引き継ぐものです。		
授業計画	第1回	柳田國男の民俗学と芸能 1	
	第2回	柳田國男の民俗学と芸能 2	
	第3回	折口信夫の芸能史 1	
	第4回	折口信夫の芸能史 2	
	第5回	日本の仮面劇	
	第6回	沖縄の仮面劇	
	第7回	韓国の仮面劇	
	第8回	日本の人形劇	
	第9回	沖縄の人形劇	
	第10回	韓国の人形劇	
	第11回	日本の語り物	
	第12回	沖縄の語り物	
	第13回	韓国の語り物	
	第14回	折口信夫の芸能史が目指したもの	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	フィードバックシートに、授業内容をどう受け止めたかを記して、毎時間提出してもらいます。		
テキスト	プリントを配布します。		
参考文献	伊藤好英『折口学が読み解く韓国芸能』慶應義塾大学出版会、2006年。		
評価方法	学期末レポート:50% フィードバックシート:20% 授業態度:30%		

生活文化特講 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
“住”生活の文化と伝統を知る 《住宅、神社、寺、城、工芸》のデザインとつくり ー 日本人の美の基本：日本建築と伝統工芸 ー		山田 岳晴（やまだ たけはる）	
授業の到達目標 及びテーマ	○ 日本の生活を縁の下で支えるのは“住”文化です。現在の和風住宅にもつながる日本の建物と工芸品について、“デザイン”と“つくり”を理解します。 ○ それらがどのように変化したか・発展したかを理解します。「モノ」のもつ意味が、時代を超えて共感が持てる“デザイン”や“美しさ”となることを学び、生活のなかに生かせる知識を習得します。 ○ 見学を含めた、ビジュアル的な最新の研究成果の講義によって、現在流布している諸説を見直し、生活文化の本当のすがたを理解します。		
授業の概要	最初に、日本建築の基本を確認します。 前半は、日本住宅について、全体的な特色を理解した後に、“つくり”をとり上げて、現代にも生かされている特質を明らかにしていきます。 後半は、神社建築・寺院建築・城郭建築について、全体的な知識の習得と、実例をもとにして本質の理解を進めます。 最後に、伝統工芸品について、女性と男性の生活に注目し、美しさのうしろにある実態をわかりやすく講義します。 毎回、図面や写真、絵画など、多くのビジュアル資料を配付し、各回完結での講義を基本とします。		
授業計画	第1回	日本の建築 つくり、かたち、デザインの変化／ 日本住宅1 日本住宅の特徴	
	第2回	日本住宅2 竪穴式住居・高床式住居(たてあなしき・たかゆかしきじゅうきょ)／寝殿造(しんでんづくり)	
	第3回	日本住宅3 書院造(しょいんづくり)	
	第4回	日本の建築 文化財建造物の現地調査(見学・小レポート)	
	第5回	日本住宅4 茶室(ちゃしつ)	
	第6回	日本住宅5 農家建築・町家建築(のうかけんちく・まちやけんちく)	
	第7回	神社建築1 本殿(ほんでん)の形式、神社のデザインと変化	
	第8回	神社建築2 厳島神社(いつくしまじんじゃ)〔海上社殿と寝殿造〕	
	第9回	寺院建築1 本堂(ほんどう)の形式、寺院のデザインと変化	
	第10回	寺院建築2 塔(とう)〔五重塔と耐震性〕	
	第11回	城郭建築1 城の施設とデザイン、石垣	
	第12回	城郭建築2 天守(てんしゅ)〔望楼型と層塔型〕	
	第13回	伝統工芸1 化粧(けしょう)と浮世絵(うきよえ)	
	第14回	伝統工芸2 甲冑(よろいかぶと)	
	第15回	日本の建築と伝統工芸 総括(記述試験)	
準備学習 (予習・復習等)	授業に登場する建物などをインターネットなどで見ておくと、より理解がしやすくなります。		
テキスト	テキストは不要です。毎回、授業に使う資料を配布します。 (最新の研究成果に基づく講義ですので、一般的な住宅史等の教科書の内容とは異なることが多くなっています。)		
参考文献	特になし。 (日本建築史、文化財学の授業ですので、それらに関する図書一般の図面など資料部分は参考になります。)		
評価方法	受講姿勢と小レポート:20% 記述試験:80%		

生活文化特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
近代の服飾文化		根本 由香 (ねもと ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	西洋文化の影響を受け洋装を受容していった明治から昭和にかけて、人々が西洋趣味に日本的感覚や伝統的価値を融合させ、新しい服飾のあり方を模索していたことを理解する。 また、絵画や文学に描写された服飾に注目し、それらを解釈することができるようになる。		
授業の概要	明治期にもたらされた西洋文化は日本人の衣生活を大きく変化させる契機となった。このような事例を洋装と和装の両面からとり上げ解説する。 さらに、近代の世相や心情がうかがえる絵画や文学の中の服飾が何を語っているか、画像資料・文献資料を用いて読み取っていく。		
授業計画	第1回	イントロダクション 服飾をとりまくもの	
	第2回	文明開化期の洋装	
	第3回	明治の「ハイカラ」	
	第4回	衣服改良運動	
	第5回	和洋折衷一和装に採り入れられた洋装	
	第6回	断髪と女性	
	第7回	絵画・小説に描写された服飾の見方	
	第8回	新聞小説の挿絵と服飾① 明治の女学生	
	第9回	新聞小説の挿絵と服飾② 家庭小説のヒロイン	
	第10回	描かれた女性① 竹久夢二と大正ロマン	
	第11回	描かれた女性② 高島華宵とモダンガール	
	第12回	絵画の服飾をよみとく① 暮らしの中の歌舞伎	
	第13回	絵画の服飾をよみとく② 季節の暮らし	
	第14回	人と「おしゃれ」	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業内で課題を指示した場合には、期限までに取り組んで提出する。 プリント・ノートの整理・復習をする。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	授業で随時紹介する。		
評価方法	授業感想文・課題:40% レポート:60%		

日本文化史 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本美術と出会う—古代から中世へ—		成原 有貴 (なりはら ゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本の古代・中世美術の流れをたどり、代表的作品の意味や制作事情が理解できるようになる。</p> <p>○アジア世界の中での日本美術の歴史と動向をとらえ、自己と他者の文化について考える力を養う。</p> <p>○教室でのパワーポイントによる画像の映写(毎回)や、キャンパス近隣の美術館の展示見学(授業時間内を利用し、1~2回実施予定)を通して、日本美術に親しみ、作品に対する理解を深めることができる。</p> <p>○美術作品が、古代・中世の社会のなかで、身分や性差とどのように関わりながら生み出されたかを学ぶことで、作品の社会的意義や機能がよりよくわかる。</p>		
授業の概要	<p>縄文時代から平安時代までの美術の歴史について講義します。絵画・工芸・仏像などの、各時代の代表的作品を多様にとりあげ、主題や表現、作品に込められた意味を詳しく解説しながら、歴史的展開を辿ります。作品の意味や魅力を新たに発見し、日本美術がわかる楽しみを体験します。授業ではまた、個々の作品がどのような階級・性別・地域の人びとによって、なぜ制作されたのかを、作品がつくられた当時の社会・文化の状況を視野に入れ、考えていきます。</p>		
授業計画	第1回	はじめに 授業の進め方・作品との向き合い方	
	第2回	縄文・弥生・古墳時代—土器・土偶・壁画—	
	第3回	縄文・弥生・古墳時代—土器・土偶と現代アート—	
	第4回	美術館見学	
	第5回	美術館見学の感想とグループ学習	
	第6回	飛鳥・白鳳時代 仏教美術の展開①法隆寺と玉虫厨子	
	第7回	飛鳥・白鳳時代 美術の諸相—高松塚古墳壁画とキトラ古墳壁画—	
	第8回	奈良時代 仏教美術の展開②東大寺大仏と興福寺阿修羅像	
	第9回	奈良時代 アジア世界における日本—正倉院宝物—	
	第10回	平安時代 仏教美術の展開③密教美術	
	第11回	平安時代 仏教美術の展開④平等院鳳凰堂	
	第12回	平安時代 絵巻の魅力—「源氏物語絵巻」と「伴大納言絵巻」—	
	第13回	平安時代 華麗なるかざりの世界—装飾とその意味—	
	第14回	平安時代 和歌と絵画・工芸	
	第15回	まとめ 日本美術の特質について	
準備学習 (予習・復習等)	見学会の際には、作品鑑賞の感想を提出すること。授業時の配布プリントや参考文献の該当箇所などを読み、復習すること。		
テキスト	特に指定しません。毎回、授業の要点を記したプリントを配布します。		
参考文献	<p>山岡泰造監修『日本美術史』昭和堂、1998年。</p> <p>日高薫『日本美術のこぼれ』小学館、2003年。</p> <p>辻惟雄・泉武夫・山下裕二・板倉聖哲編『日本美術全集』小学館、2012年～。</p>		
評価方法	授業感想文:50% 期末試験:50%		

日本文化史B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本美術と出会う—中世から近世へ—		成原 有貴 (なりはら ゆき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○日本の中世・近世美術の流れをたどり、代表的作品の意味や制作事情が理解できるようになる。</p> <p>○アジアや西洋との関わりのなかで、日本美術の歴史と動向をとらえ、自己と他者の文化について考える力を養う。</p> <p>○教室でのパワーポイントによる画像の映写(毎回)や、キャンパス近隣の美術館の展示見学(授業時間内を利用し、1~2回実施予定)を通して、日本美術に親しみ、作品に対する理解を深めることができるようになる。</p> <p>○美術作品が、身分や性差とどのように関わりながら生み出されたかを学ぶことで、作品の社会的意義や機能がよりよくわかる。</p>		
授業の概要	<p>鎌倉時代から江戸時代までの美術の歴史について講義します。絵画・工芸・仏像などの、各時代の代表的作品を多様にとりあげ、主題や表現、作品に込められた意味を詳しく解説しながら、歴史的展開を辿ります。作品の意味や魅力を新たに発見し、日本美術がわかる楽しみを体験します。授業ではまた、個々の作品がどのような階級・性別・地域の人びとによって、なぜ制作されたのかを、作品がつくられた当時の社会・文化の状況を視野に入れ、考えていきます。</p>		
授業計画	第1回	はじめに 授業の進め方・作品との向き合い方	
	第2回	鎌倉時代 肖像画—人の姿をめぐるさまざまな表現—	
	第3回	鎌倉時代 仏教美術の諸相—地獄絵と浄土図—	
	第4回	鎌倉時代 神道美術—宮曼荼羅と影向図—	
	第5回	鎌倉時代 物語絵巻と縁起絵巻	
	第6回	美術館見学	
	第7回	美術館見学の感想とグループ学習	
	第8回	室町時代 水墨画の世界	
	第9回	室町時代 やまと絵屏風と御伽草子絵	
	第10回	室町時代 狩野派と土佐派	
	第11回	安土桃山時代 西洋との出会い—「南蛮美術」—	
	第12回	江戸時代 琳派の系譜—俵屋宗達と尾形光琳—	
	第13回	江戸時代 風俗画と浮世絵	
	第14回	江戸時代 奇想と写生—伊藤若冲と円山応挙—	
	第15回	まとめ：日本美術の多面性について	
準備学習 (予習・復習等)	見学会の際には、作品鑑賞の感想を提出すること。授業時の配布プリントや参考文献の該当箇所などを読み、復習すること。		
テキスト	特に指定しません。毎回、授業の要点を記したプリントを配布します。		
参考文献	<p>山岡泰造監修『日本美術史』昭和堂、1998年。</p> <p>日高薫『日本美術のこぼれ』小学館、2003年。</p> <p>辻惟雄・泉武夫・山下裕二・板倉聖哲編『日本美術全集』小学館、2012年～。</p>		
評価方法	授業感想文:50% 期末試験:50%		

身体表現A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本の舞踊・民俗舞踊・子どもの身体表現		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現の基礎、舞踊の特徴、表現形式を比較しつつ、日本の舞踊文化と現代社会での表現形式や流行について探求します。 ○ 日本の地域社会の芸能や舞踊は、衰退の一途をたどってきていますが、地域社会は子どもの心と体を大いに育ててきました。現在、どのように取り組みがなされているのか、例をあげ、そこから学ぶことは何かを検証します。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現・身体活動について理解を深めるために、文献を読むとともに実践しながら体得していきます。 ○ 身体表現や身体活動についての取り組みや枠組みについて具体的事例を挙げながら検討します。 ○ 幼稚園における身体表現の事始は、保育唱歌と遊戯でした。その後ダンス（フォークダンス）も入り、子どもの心と体の育ちをはぐくんできました。現在に至るまでに子どものリズムと身体感覚、表現力をどう育ててきたのかを探ります。 		
授業計画	第1回	授業の概要	
	第2回	身体表現の基礎 1：文献の検討	
	第3回	身体表現の基礎 2：具体的事例の検討	
	第4回	身体表現の基礎 3：具体的事例の検討	
	第5回	日本の舞踊文化 1：日本の舞踊文化について	
	第6回	日本の舞踊文化 2：日本の舞踊文化について	
	第7回	日本の舞踊文化 3：日本の舞踊文化について	
	第8回	子どもの身体表現活動 1：子どもの豊かな身体表現や身体活動を導き出すために	
	第9回	子どもの身体表現活動 2：具体的事例に検討	
	第10回	子どもの身体表現活動 3：具体的事例の検討	
	第11回	民俗舞踊 1：民俗舞踊について	
	第12回	民俗舞踊 2：具体的事例の検討	
	第13回	民俗舞踊 3：具体的事例の検討	
	第14回	民俗舞踊 4：具体的事例の検討	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	身体表現についての具体的事例を調査したり、表現方法について実践したり、紹介し合ったりしてもらいます。		
テキスト	特に定めません。		
参考文献	授業内で紹介します。		
評価方法	積極的授業参加:50% 課題への取り組み:30% レポートなど課題提出:20%		

キリスト教学特講A		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
キリスト教死生学		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	死を巡る諸問題についてキリスト教の立場を基本として考察し、死を学問し、死を見つめる姿勢と心を整えることが目標。他宗教、他文化における死の諸相、葬儀、死生学、震災、放射能等現代の課題をも考察し、さらに生命倫理、医療倫理なども課題として、多角的アプローチをとおして「死への準備教育」を行う。		
授業の概要	家庭・地域・文化的背景を基に、各自の死生観がどのようなものかを問うことから始め、講義のみならず、ディスカッション、ゲストスピーカーとの対話、フィールドワーク、サービ斯拉ーニング等をとおして豊かな死と豊かな生について考察を深める。		
授業計画	第1回	あなたの死生観	
	第2回	日本における死	
	第3回	旧約聖書における生と死	
	第4回	新約聖書における生と死	
	第5回	仏教死生観	
	第6回	イスラム死生観	
	第7回	ライフステージと死①子ども	
	第8回	ライフステージと死②青年期	
	第9回	ライフステージと死③壮年期	
	第10回	ライフステージと死④高齢期	
	第11回	死別体験①—癒しと看取り	
	第12回	死別体験②—グリーフワーク	
	第13回	「3.11」が問うもの	
	第14回	エンディング・ノート作成①	
	第15回	エンディング・ノート作成②	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の新聞朝刊(社は問わない)1面と社説を読んでくること。 各家庭の宗教的背景、特に冠婚葬祭について調べてくること。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』（日本聖書協会） 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』（日本キリスト教団出版局）		
参考文献	授業中に指示		
評価方法	授業への参加態度・授業感想文:50% 期末レポート:50%		

米文学演習 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
チカーノ研究入門：チカーノ(メキシコ系米国人)が語るアメリカ南西部/サウスウエストの物語		齋藤 修三 (さいとう しゅうぞう)	
授業の到達目標及びテーマ	21世紀米国のラテン化を推し進めるヒスパニック系(ラティーノ)。その中核をなすチカーノについて歴史・文学・映画等を通じて学ぶ。褐色の二級市民とされ米国史の闇に埋もれてきたチカーノマイノリティの資料を読みながら、豊かな「北」と貧しい「南」、英語とスペイン語、同化主義と多文化主義など支配と従属が内部でせめぎ合う「混血・雑種の声」を聴き取りつつ、それがどのような問題を現代日本社会に投げかけるか理解する。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・メールリポート講評 ・キーワード解説 ・テキスト資料(英語・日本語)をリポーターが分担、レジュメを用いて報告 ・自由討議 ・シネマ倶楽部プレゼンテーション(グループごとに担当映画について論じてもらう) 		
授業計画	第1回	導入～絵本に見るチカーノたち	
	第2回	絵本～歴史導入	
	第3回	歴史(～米墨戦争)	
	第4回	歴史(～現代)	
	第5回	映画『ミ・ファミリア』	
	第6回	同化主義の功罪(米国ナショナリズム、racism, classism, sexism) 特に男性学の視点から	
	第7回	チカーノのマチズモ～中間レポート要項説明	
	第8回	公民権運動～多文化主義・エスニックナショナリズムの功罪	
	第9回	言語論争(AV資料)	
	第10回	言語論争～ポストコロナルな視点から	
	第11回	言語論争～自由討議	
	第12回	シネマ倶楽部	
	第13回	シネマ倶楽部～中間レポート講評	
	第14回	シネマ倶楽部～期末レポート要項説明	
	第15回	まとめ	
準備学習(予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習：次回読む資料を精読し質問やコメント準備 2. 復習：メールリポート 前回までの授業内容に関連した質問・コメント等、あるいはこちらで指定したテーマについて1パラグラフ(200～300字)で自由記述 3. リポーターはレジュメ含む報告準備 4. シネマ倶楽部 グループごとにレジュメとプレゼン準備 		
テキスト	プリントをこちらで準備		
参考文献	随時紹介		
評価方法	中間、期末レポート:50% 担当者レポート:10% プレゼンテーション:10% メールリポート:20% 討議貢献度など平常点:10%		

米文学演習B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
ラティーノ・ラティーナ表象文化研究入門		齋藤 修三（さいとう しゅうぞう）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期の米文学演習 a（チカーノ研究入門）を基礎とし、今日のアメリカ文化をますますラテン化するラティーノ表象文化の諸相を学ぶ。まずチカーノ・ラティーナ（女性）フェミニズムの展開を押さえる。それを踏まえつつ、次に文学、アート、音楽など表象文化を通じてラティーノ的自然観や死生観を考察。最後に国境に自閉する国民国家の論理を超えて、南北アメリカ大陸や第三世界をも視野に入れたラティーノ流「草の根」グローバリズムについて理解する。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・メールリポート講評 ・キーワード解説 ・テキスト資料（英語・日本語）をリポーターが分担、レジュメを用いて報告 ・自由討議 ・ブック倶楽部プレゼンテーション（個人・グループごとに担当資料について論じてもらう） 		
授業計画	第1回	導入～絵本にみるチカーナの少女	
	第2回	絵本～チカーノ公民権運動前後の女性たち	
	第3回	チカーノ女性学	
	第4回	チカーノフェミニズムと白人中流女性フェミニズム	
	第5回	第三世界（有色女性）フェミニズム	
	第6回	中間レポート要項説明	
	第7回	映画『ガール・ファイト』	
	第8回	自由討議～自然・風土	
	第9回	風土・死生観	
	第10回	ブック倶楽部プレゼン～チカーノ・アート	
	第11回	ブック倶楽部プレゼン～チカーノ・アート	
	第12回	ブック倶楽部プレゼン～チカーノ音楽	
	第13回	ブック倶楽部プレゼン～ラティーノ音楽	
	第14回	チカーノラティーノ・アート・アクティヴィズム	
	第15回	まとめ（絵本に戻りつつ）～期末レポート要項説明	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. 予習：次回読む資料を精読し質問やコメント準備 2. 復習：メールリポート 前回までの授業内容に関連した質問・コメント、あるいはこちらで指定したテーマについて1パラグラフ（200～300字）で自由記述 3. リポーターはレジュメ含む報告準備 4. ブック倶楽部 個人・グループごとにレジュメとプレゼン準備 		
テキスト	プリントをこちらで準備		
参考文献	随時紹介		
評価方法	中間・期末レポート:50% 担当者レポート:10% プレゼンテーション:10% メールリポート:20% 討議貢献度など 平常点:10%		

米文学演習 C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
アメリカ 1920年代 (Jazz Age) とフランシス・スコット・フィッツジェラルド		宮内 華代子 (みやうち かよこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	『グレート・ギャツビー』(1925)の作者として知られるフィッツジェラルドの作家作品研究を行う。 作品の時代背景を学び、同じく「ロスト・ジェネレーション」の代表作家であるE・ヘミングウェイとの関連を知り、 作品のテーマを理解し、彼の文学の特質を学ぶ。		
授業の概要	講義と並行して学生による発表、質疑応答によって作品を読みすすめ、添削指導を行う。作品の重要テーマを探り、 創作技法を学んで、彼の文学の面白さを突きとめる。Jazz Age あるいはRoaring 20's と呼ばれる繁栄と狂乱の1920年 代、世界大恐慌の大打撃を被った30年代の時代の様相が作品にどのように取り込まれているかを考察する。ロスト・ ジェネレーションと呼ばれる一群の作家たちの中でもいち早く第一次世界大戦後の文壇に登場したために、この世代の 旗手となり、ヘミングウェイと共に、20世紀アメリカ文学を代表する作家となった所以を明確にする。		
授業 計画	第1回	イントロダクション 発表のためのレポート作成方法	
	第2回	フィッツジェラルドの生涯と作品との関連	
	第3回	Winter Dreams 作中人物と伝記上のモデル 作品のテーマ	
	第4回	生い立ち、結婚、一人娘スコッティー	
	第5回	作品の様々なテーマ 恋愛、上流社会、東西の対立、	
	第6回	時代背景 第一次世界大戦、Jazz Age、世界大恐慌	
	第7回	ロスト・ジェネレーション	
	第8回	娘への手紙集 学業、職業、結婚相手、母親ゼルダ	
	第9回	創作方法と技法	
	第10回	ヘミングウェイとの絆	
	第11回	スクリブナーズ編集者 M. パーキンス	
	第12回	S・ピーチとシェイクスピア書店	
	第13回	パリ時代・ハリウッド時代(シナリオライターとして)	
	第14回	『グレート・ギャツビー』DVD鑑賞	
	第15回	まとめ 残された課題	
準備学習 (予習・復習等)	読む面白さ、研究の楽しさがわかるようになるまで日ごろから作品を深く読むように心がける。 授業でとりあげる作品の該当箇所を前もって丁寧に予習して読んでから授業に出席すること。 発表者にたいして質問ができるように充分予習して授業に臨むこと。 レポート作成のためにテーマをさだめ、積極的に研究にとりくむこと。		
テキスト	Winter Dreams(研究社) Fitzgerald's Letters to his Daughter(三修社)		
参考文献	A. Turnbull, Scott Fitzgerald(Scribner's Sons) F. L. Allen, Only Yesterday(Harper)		
評価方法	平常点:40% 発表:20% レポート:40%		

米文学演習D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
アメリカ1920年代 (Jazz Age) と アーネスト・ヘミングウェイ		宮内 華代子 (みやうち かよこ)	
授業の到達目標及びテーマ	『老人と海』、『武器よさらば』などの作者として知られるヘミングウェイの作家・作品研究を行う。作品の時代背景を学び、同じくロスト・ジェネレーションの代表作家であるフィッツジェラルドとの関連を知り、作品のテーマを理解し、彼の文学の特質を学ぶ。		
授業の概要	講義と並行して学生による発表、質疑応答によって作品を読みすすめ、添削指導を行う。彼が生きた時代の様相が作品にどのように取り込まれているかを考察する。数々のエピソードに彩られた波瀾万丈の生涯と主要作品について講じる。小説と併行して研究書、伝記、手紙集も読み進めながら、作品の重要テーマを探り、「ハードボイルド・スタイル」、「冰山理論」を始め、駆使されている様々な技法について学ぶ。ロスト・ジェネレーションと呼ばれる一群の作家たちの中でも、アメリカ文学を世界的に通用する高い水準にひきあげるのにもっとも貢献したノーベル賞作家の文学の魅力を突き止める。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ヘミングウェイの生涯と作品との関連	
	第3回	Indian Camp	
	第4回	レポート作成のための様々なテーマ	
	第5回	ハードボイルド・スタイル、冰山理論	
	第6回	Cat in the Rain	
	第7回	ロスト・ジェネレーション	
	第8回	パリ時代 著名人たちとの交友、ヨーロッパの影響	
	第9回	The Undefeated	
	第10回	編集者M・パーキンズ S・ビーチとシェイクスピア書店	
	第11回	フィッツジェラルドとの絆 出会い、友情、創作への互いの影響	
	第12回	女性観 4人の妻をモデルにした作品	
	第13回	Soldier's Home 戦争体験と戦争観、『武器よさらば』『たがために鐘は鳴る』	
	第14回	『武器よさらば』DVD鑑賞	
	第15回	まとめ 今後の課題	
準備学習(予習・復習等)	読む面白さ、研究の楽しさがわかるようになるまで、ひごろから作品を深く読むように心がける。授業でとりあげる作品の該当箇所をまえもって丁寧に予習して読んでから、授業に出席すること。発表者にたいして質問ができるように充分予習して授業に臨むこと。レポート作成のためにテーマをさだめ、積極的に研究にとりくむこと。		
テキスト	The Killers & Other Stories (南雲堂) Letters between Fitzgerald & Hemingway (ダイナミックセラーズ)		
参考文献	C. Baker, Ernest Hemingway (Scribner's) S. Beach, Shakespeare & Company (Univ. of Neb.) F. L. Allen, Only Yesterday (Harper)		
評価方法	通常点:40% 発表:20% レポート:40%		

英文学演習 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
19世紀前半イギリス詩講読		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	19世紀前半のイギリス詩人とその作品について理解を深める。また、同時代の歴史的・文化的背景について知識を深めると同時に、それらと詩との結びつきについて考える力を身につける。		
授業の概要	19世紀前半、すなわちロマン主義からヴィクトリア朝盛期にかけての時代を代表するイギリス詩人を、毎回ひとり取り上げ、受講者からその生涯と作品の特徴、および比較的読みやすい詩の訳読・解釈を発表してもらう一方、ほかの代表作について講読を行う。なお、後半にはイギリス詩に大きな影響を与えたアメリカ詩人も取り上げる。		
授業計画	第1回	イントロダクション：19世紀前半イギリス史概観	
	第2回	Romantic poets: William Blake	
	第3回	Romantic poets: William Wordsworth	
	第4回	Romantic poets: Samuel Taylor Coleridge	
	第5回	Romantic poets: George Gordon Byron	
	第6回	Romantic poets: Percy Bysshe Shelley	
	第7回	Romantic poets: John Keats	
	第8回	Major Victorian poets: Alfred Tennyson	
	第9回	Major Victorian poets: Robert Browning	
	第10回	Major Victorian poets: Elizabeth Browning	
	第11回	Major Victorian poets: Matthew Arnold	
	第12回	Novelist poet: Emily Bronte	
	第13回	American poets: Henry Wadsworth Longfellow	
	第14回	American poets: Edgar Allan Poe	
	第15回	American poets: Walt Whitman	
準備学習 (予習・復習等)	予習：文学事典などを利用してその回で取り上げる詩人の生涯と特徴を調べてくる。課題となる詩を自分なりに読解してみる。 復習：講義を参考に、各作品についてどのような批評的アプローチが可能かを考察し、メモを作る。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	『研究社英米文学事典』、磯田光一『イギリス・ロマン派詩人』、矢野峰人『ヴィクトリア朝の詩』、高橋裕子・高橋達史『ヴィクトリア朝万華鏡』、ほか随時紹介する。		
評価方法	発表：15% 平常点：15% 期末レポート：70%		

英文学演習B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
19世紀後半イギリス詩講読		松村 伸一（まつむら しんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	19世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリス詩人とその作品について理解を深める。また、同時代の歴史的文化的背景について知識を深めると同時に、それらと詩との結びつきについて考える力を身につける。		
授業の概要	19世紀中頃から世紀末にかけて、唯美主義の系譜に位置づけられるイギリス詩人を中心に、その作品を取り上げ、受講者からその生涯と作品の特徴、および比較的読みやすい詩の訳読・解釈を発表してもらう一方、ほかの代表作について講読を行う。最後には、第一次大戦期の詩人を取り上げ、「長い19世紀」の詩の歴史について改めて考えたい。		
授業計画	第1回	イントロダクション：19世紀後期イギリス史概観	
	第2回	Pre-Raphaelite poets: Dante Gabriel Rossetti	
	第3回	Pre-Raphaelite poets: Christina Rossetti	
	第4回	Pre-Raphaelite poets: William Morris	
	第5回	Pre-Raphaelite poets: Algernon C. Swinburne	
	第6回	Nonsense poets: Lewis Carroll	
	第7回	Nonsense poets: Edward Lear	
	第8回	Fin-de-Siecle poets: Oscar Wilde, Aubrey Beardsley	
	第9回	Fin-de-Siecle poets: Ernest Dowson	
	第10回	Fin-de-Siecle poets: Arthur Symonds, Richard Le Gallienne, Alfred Douglas	
	第11回	Fin-de-Siecle poets: William Butler Yeats	
	第12回	New Women Writers: Olive Schreiner, Michael Field, Amy Levy	
	第13回	Edwardian and Georgian Poets: Rudyard Kipling, John Masefield, Walter de la Mare	
	第14回	War poets: Rupert Brooke, Wilfred Owen	
	第15回	まとめ：「長い19世紀」イギリス詩再考	
準備学習 (予習・復習等)	予習：文学事典などを利用してその回で取り上げる詩人の生涯と特徴を調べてくる。課題となる詩を自分なりに読解してみる。 復習：講義を参考に、各作品についてどのような批評的アプローチが可能かを考察し、メモを作る。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	『研究社英米文学事典』、矢野峰人『世紀末英文学史』、齋藤貴子『ラファエル前派の世界』、ほか随時紹介する。		
評価方法	発表：15% 平常点：15% 期末レポート：70%		

英文学演習C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
20世紀イギリス文学を読む 『ドリトル先生物語』		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	主にヒュー・ロフティングによる児童文学の傑作『ドリトル先生物語』（1922-）の精読を通じて、ヴィクトリア朝イギリス社会の諸問題を考察するとともに英語の読解力、文脈を補う想像力を養う。		
授業の概要	文化史に関する講義を積みながらテキストを輪読する。後半では各自が教員が指定する同ジャンルの作品群（①『ジャングル・ブック』、②『黒馬物語』、③『くまのプーさん』、④『たのしい川べ』）から任意の作品を選び担当発表を行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	講義1 ヴィクトリア朝イギリスの社会背景	
	第3回	講義2 ヴィクトリア朝イギリスの思想と文化	
	第4回	テキスト講読第1回 Chapter 1-4	
	第5回	テキスト講読第2回 Chapter 5-8	
	第6回	テキスト講読第3回 Chapter 9-12	
	第7回	テキスト講読第4回 Chapter 13-16	
	第8回	美術館訪問	
	第9回	テキスト講読第5回 Chapter 17-20	
	第10回	テキスト講読第6回 Foreword, Afterword	
	第11回	担当発表第1回 ①グループ	
	第12回	担当発表第2回 ②グループ	
	第13回	担当発表第3回 ③グループ	
	第14回	担当発表第4回 ④グループ	
	第15回	前期まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の該当エピソードを各自読んで授業にのぞむこと。 また後半の担当発表では、各自任意の作品を選び、あらすじ・みどころ・疑問点などをレジュメにまとめ、プレゼンテーションを準備すること。		
テキスト	Hugh Lofting, <i>The Story of Dr. Dolittle</i> (Red Fox Classics)		
参考文献	南条竹則『ドリトル先生の英国』（文春新書、2001）		
評価方法	担当発表:40% 期末レポート:60%		

英文学演習D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
20世紀イギリス文学精読・続 『ドリトル先生物語』		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	主にヒュー・ロフティングによる児童文学の傑作『ドリトル先生物語』（1922-）の精読を通じて、ヴィクトリア朝イギリス社会の諸問題を考察するとともに英語の読解力、文脈を補う想像力を養う。		
授業の概要	文化史に関する講義を挿みながら『ドリトル先生物語』と同ジャンルのテキストを輪読する。学期末にはレポートを提出する必要があり、それに向けて各自が読みを深める。適宜論文作成指導を行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	テキスト講読第1回 『ジャングル・ブック』①	
	第3回	テキスト講読第2回 『ジャングル・ブック』②	
	第4回	テキスト講読第3回 『ジャングル・ブック』③	
	第5回	テキスト講読第4回 『黒馬物語』①	
	第6回	テキスト講読第5回 『黒馬物語』②	
	第7回	テキスト講読第6回 『黒馬物語』③	
	第8回	テキスト講読第7回 『たのしい川べ』①	
	第9回	テキスト講読第8回 『たのしい川べ』②	
	第10回	テキスト講読第9回 『たのしい川べ』③	
	第11回	論文作成指導第1回 アウトラインの確認	
	第12回	論文作成指導第2回 参考文献の引用・典拠記載方法他	
	第13回	論文作成指導第3回 内容についての質疑応答	
	第14回	期末レポート提出準備	
	第15回	期末レポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の該当エピソードを各自読んで授業にのぞむこと。 また後半では各自任意の作品を選び、期末課題に向けて読解を深めること。		
テキスト	Hugh Lofting, <i>The Story of Dr. Dolittle</i> (Red Fox Classics)		
参考文献	南条竹則『ドリトル先生の英国』（文春新書、2001）		
評価方法	講読担当:40% 期末課題提出:60%		

英語学演習 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
認知言語学入門		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「ことば」は人間のみが持っている高度はコミュニケーション手段であり、そのことばの分析は人間の“mind”の解明の一つの方法であると考え。本講座では「ことば」とは何かについて理論言語学の一つである「認知言語学」の枠組みに基づいて考えていく。多くの「なぜ」を無意識から意識上にのぼらせ、受講者と一緒に考えていくことを目標としている。		
授業の概要	日英語の言語事象を具体的に分析していくことにより、「認知言語学」の基本的な考え方そして分析手法を学ぶ。毎回ディスカッション“Food for thought”を行う。受講生の興味に基づき、さまざまな「寄り道」も楽しみたい。		
授業計画	第1回	Handout A: イントロダクション: なぜ言語研究?	
	第2回	認知言語学と生成文法における言語観	
	第3回	認知言語学の考え方	
	第4回	恣意性・有縁性: 日英語のオノマトペ	
	第5回	類似性・身体性: 日英語のメタファー	
	第6回	隣接性・参照点能力: 日英語のメトニミー	
	第7回	Handout B: プロトタイプカテゴリー	
	第8回	百科事典的意味論	
	第9回	ゲシュタルト	
	第10回	ベースとプロファイル・際立ち	
	第11回	事例研究①: 日英語のテンスとアスペクト(1)	
	第12回	日英語のテンスとアスペクト(2)	
	第13回	事例研究②: 日英語の移動動詞(1)	
	第14回	日英語の移動動詞(2)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題レポートの提出を数回求める		
テキスト	特定のテキストは用いず担当者のプレゼンテーションにて進める。プリントを配布する。英和辞書・A4サイズバインダーを必ず持参のこと。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	期末レポート:60% 課題・議論:40%		

英語学演習B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
認知言語学		湯本 久美子 (ゆもと くみこ)	
授業の到達目標及びテーマ	「ことば」は人間のみが持っている高度はコミュニケーション手段であり、そのことばの分析は人間の“mind”の解明の一つの方法であると考え。本講座では「ことば」とは何かについて理論言語学の一つである「認知言語学」の枠組みに基づいて考えていく。多くの「なぜ」を無意識から意識上にのぼらせ、受講者と一緒に考えていくことを目標としている。		
授業の概要	日英語について「構文」をキーワードに日英語の言語事象を認知言語学の枠組みで分析していく。次いで、日英語の好みとは何かを考える。毎回ディスカッション“Food for thought”を行う。時間が許せば、認知言語学の分析手法を学んだあとは文献を輪読する。		
授業計画	第1回	Handout C: 認知言語学の言語観・用法基盤モデル	
	第2回	構文文法：英語二重目的語構文①	
	第3回	構文文法：英語二重目的語構文②	
	第4回	構文文法：英語結果構文	
	第5回	構文文法：日本語結果構文	
	第6回	Handout D: アクション・チェーン 英語自動詞文と英語中間構文①	
	第7回	アクション・チェーン 英語自動詞文と英語中間構文②	
	第8回	アクション・チェーン：日本語中間構文	
	第9回	アクション・チェーン：英語能動文と英語受動文①	
	第10回	アクション・チェーン：英語能動文と英語受動文②	
	第11回	アクション・チェーン：日本語受動文	
	第12回	日本語受動文・英語結果構文・使役構文の比較	
	第13回	Handout E: 言語と思考 サピアウオーフの仮説	
	第14回	日英語の好み 「するめ」英語と「なるめ」日本語	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題レポートの提出を数回求める。		
テキスト	特定のテキストは用いず担当者のプレゼンテーションを進める。プリントを配布する。英語辞書とA4サイズバインダーを必ず持参のこと。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	期末レポート:60% 課題・議論:40%		

英語学演習 C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
第二言語習得入門		宮越 智子 (みやこし ともこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	英語教育の視点から第二言語習得研究を概観し、第二言語習得理論とそれに関する方法論について理解する。はじめに、第一言語獲得について学び、第一言語獲得と第二言語習得の類似点と相違点について考察する。次に、言語習得についての理論的アプローチについて理解し、第二言語習得研究の方法論、対照分析、誤り分析、言語運用分析等、最近の動向や、日本人の英語学習に示唆が得られる文献も扱いながら、学習者言語について検討する。更に、言語習得における個人差や、社会的要因等について理解し、今後の研究課題、効果的な英語教授法や言語運用能力を高める英語教材の開発について考察する。		
授業の概要	基本的に講義形式で授業を進めるが、受講生の積極的な授業参加を期待する。また、講義内容理解の確認と、クリティカルな思考を訓練するために、随時ショートエッセイを中心とした課題の提出を求める。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	First language acquisition	
	第3回	Behaviorist, innatist, and interactionist perspectives	
	第4回	Language disorders, delays, and childhood bilingualism	
	第5回	Contrastive analysis, error analysis, and interlanguage	
	第6回	Developmental sequences in second language learning	
	第7回	Vocabulary, pragmatics, and phonology	
	第8回	Research on learner characteristics: intelligence, language learning aptitude, learning styles, personality, motivation, etc.	
	第9回	Individual differences and classroom instruction	
	第10回	Age and second language instruction	
	第11回	Behaviorist, innatist, and cognitive perspectives on second language learning	
	第12回	Sociocultural perspective on second language learning	
	第13回	Natural and instructional settings	
	第14回	Classroom observation schemes	
	第15回	Wrap-up and Review	
準備学習 (予習・復習等)	配布プリントを元に、毎回授業の復習をしっかりと行うこと。		
テキスト	Lightbown, P. & N. Spada. (2013). How Languages are Learned (Fourth Edition). Oxford: Oxford University Press.		
参考文献	授業中に随時紹介する。		
評価方法	試験:50% 課題:40% 授業参加:10%		

英語学演習D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
心理言語学		宮越 智子 (みやこし ともこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	人はどのようにして言語を獲得するのか。動物は言語を獲得できるのか。言語と精神、文化はどうかかわるのか。第二言語習得はどうかされるのか。言語と脳はどう関係しているのか。言語心理学の立場から考察し、理解を深める。		
授業の概要	基本的に講義形式で授業を進めるが、受講生の積極的な授業参加を期待する。また、講義内容理解の確認のショートエッセイを中心とした課題の提出を求める。		
授業計画	第1回	Introduction	
	第2回	How Children Learn Language	
	第3回	The Deaf and Language: Sign, Oral, Written	
	第4回	Reading Principles and Teaching	
	第5回	Wild and Isolated Children and the Critical Age Issue for Language Learning	
	第6回	Animals and Language Learning	
	第7回	Children vs. Adults in Second Language Learning	
	第8回	Second Language Teaching Methods	
	第9回	Bilingualism and Intelligence	
	第10回	Transfer and Learning Strategies	
	第11回	Language, Thought and Culture	
	第12回	Where Does Language Knowledge Come From? Intelligence, Innate Language Ideas, Behavior?	
	第13回	Natural Grammar, Mind and Speaker Performance	
	第14回	Language and the Brain	
	第15回	Wrap-up and Review	
準備学習 (予習・復習等)	配布プリントを元に、毎回授業の復習をしっかりと行うこと。		
テキスト	初回授業で提示する。		
参考文献	授業中に随時紹介する。		
評価方法	試験:50% 課題:40% 授業参加:10%		

実用英語演習 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
CNNで学ぶリスニング		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>1) CNN News を教材として、英米や世界各地のauthentic な英語に触れて、実用的なリスニング能力を高めること。 2) 時事英語を教材として、実用的な語彙力、表現力を高めること。 3) 実用的なリスニング能力、語彙・表現力を高めることを通して、TOEICの得点力を伸ばすこと。</p>		
授業の概要	CNN News を使って穴埋めなどのリスニング活動を行う。さらにニュースで使われている重要な語彙、表現、文法について説明し、ニュースの背景についても解説する。毎回リスニングや単語の小テストを行い、着実な英語習得を図る。		
授業計画	第1回	Introduction: リスニングの学習方法について	
	第2回	Unit 1 Lessons to be learned	
	第3回	Unit 2 Staying Away	
	第4回	unit 4 No More Home Work	
	第5回	Unit 5 Looking for the Right Word	
	第6回	Unit 6 Think before You "Like"	
	第7回	最近のCNN News	
	第8回	前半のまとめと中間テスト	
	第9回	Unit 7 Setting a New Standard	
	第10回	Unit 8 Only Hillary Knows	
	第11回	Unit 9 A Truly Green Solution	
	第12回	Unit 10 A Hot Idea That' s Working	
	第13回	Unit 11 Java Comes to India	
	第14回	Unit 12 Filling a Need, Very Well	
	第15回	後半のまとめと期末テスト	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習として、次の授業で取り上げるUnit の語彙問題をやってくこと。 授業後は、付属のCDを使って、授業で取り上げたニュースを3回以上聴き、授業で学んだ語彙・表現を復習し、小テストの準備をしておくこと。</p>		
テキスト	English for the Global Age with CNN Vol.15、朝日出版、2014年		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	小テスト:40% 中間テスト:30% 期末テスト:30%		

実用英語演習B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
英字新聞で学ぶ実用英語		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>1) 政治・経済・ビジネス・文化・教育・科学・歴史といった様々なジャンルの新聞記事を読み、実用的な読解能力、語彙力を高めること。</p> <p>2) 実用的な読解能力、語彙力を高めることを通して、TOEICの得点を伸ばすこと。</p>		
授業の概要	<p>毎回1つの記事を取り上げ、その記事のポイントと背景を解説する。次に、記事の中で使われている重要な語彙・文法を説明しつつ、記事の内容を正確に把握する。毎回語彙や文法に関する小テストを行い、着実な英語習得を図る。</p>		
授業計画	第1回	Introduction 英語読解能力と語彙力を高める方法	
	第2回	Unit 1 日本の若者の間で留学熱再燃	
	第3回	Unit 2 TDL30周年、魅力の秘密	
	第4回	Unit 4 アジア系は賢すぎて米一流大学で入学者数制限？	
	第5回	Unit 6 「宝島」キプロスのトラウマ	
	第6回	Unit 7 インド対中国対エジプト	
	第7回	Unit 8 米国の収入格差拡大の背景	
	第8回	前半のまとめと中間テスト	
	第9回	Unit 14 「アベノミクス」始動	
	第10回	Unit 16 インドネシア女性のバイクの乗り方	
	第11回	Unit 17 米国の国境警備	
	第12回	Unit 19 地政学とシュールガス革命	
	第13回	Unit 21 古文書が語るイスラム帝国時代のユダヤ人	
	第14回	Unit 22 クローン技術と幹細胞でノーベル賞	
	第15回	後半のまとめと期末テスト	
準備学習 (予習・復習等)	<p>予習として、授業で取り上げる新聞記事を読み、語彙問題を解いておくこと。</p> <p>授業後は、授業で取り上げた新聞記事をもう一度読みなおし、語彙・文法を確認し、次回の小テストの準備をしておくこと。</p>		
テキスト	English through the News Media - 2014 Edition、朝日出版、2014年		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	課題:20% 中間テスト:40% 期末テスト:40%		

実用英語演習 C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日英／英日逐次通訳演習		梅 佳代（うめ かよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>日英語の逐次通訳演習を通じて英語の実践的運用能力を向上させる。 通訳の仕事に興味のある人、または仕事で使える基礎的に通訳スキルを獲得したい人向け。 これまでに勉強してきた英語を実際に使えるものにするための訓練。 言語運用能力以外にも、日英語の発想の違い、表現方法の違いに着目し、幅広いコミュニケーション能力の向上を目指す。</p>		
授業の概要	<p>日英語の逐次通訳演習。 音読、リストラクチャー、パラフレーズ、シャドーイング、サイトトランスレーション、ノートテイク。 本年度は英語の音読に力を入れ毎回音読を行う。 ニュース素材、プレゼンテーション素材などできるだけ生の音声／映像を教材として使用する。 授業のほとんどは講義ではなく演習。 試験は行わず授業中のパフォーマンスを重視する。</p>		
授業計画	第1回	イントロー通訳とは	
	第2回	音読	
	第3回	英語リプロダクション	
	第4回	英語パラフレーズ	
	第5回	英語サイトトランスレーション	
	第6回	英語ノートテイク	
	第7回	英日逐次通訳①	
	第8回	英日逐次通訳②	
	第9回	英日逐次通訳③	
	第10回	英日逐次通訳④	
	第11回	英日逐次通訳⑤	
	第12回	英日逐次通訳⑥	
	第13回	英日逐次通訳⑦	
	第14回	英日逐次通訳⑧	
	第15回	英語プレゼンテーション	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で出される1ページ程度の英文記事を読み込んでくること。		
テキスト	毎回プリントを配布		
参考文献	毎回プリントを配布		
評価方法	授業でのパフォーマンス:70% プレゼンテーション:20% 夏休み課題:10%		

実用英語演習D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日英／英日逐次通訳演習		梅 佳代（うめ かよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>日英語の逐次通訳演習を通じて英語の実践的運用能力を向上させる。 通訳の仕事に興味のある人、または仕事で使える基礎的に通訳スキルを獲得したい人向け。 これまでに勉強してきた英語を実際に使えるものにするための訓練。 言語運用能力以外にも、日英語の発想の違い、表現方法の違いに着目し、幅広いコミュニケーション能力の向上を目指す。</p>		
授業の概要	<p>日英語の逐次通訳演習。 音読、リストラクチャー、パラフレーズ、シャドーイング、サイトトランスレーション、ノートテイク。 本年度は英語の音読に力を入れ毎回音読を行う。 ニュース素材、プレゼンテーション素材などできるだけ生の音声／映像を教材として使用する。 授業のほとんどは講義ではなく演習。 試験は行わず授業中のパフォーマンスを重視する。</p>		
授業計画	第1回	イントロ	
	第2回	音読	
	第3回	日本語リプロダクション	
	第4回	日本語パラフレーズ	
	第5回	日本語サイトトランスレーション	
	第6回	日本語ノートテイク	
	第7回	日英逐次通訳①	
	第8回	日英逐次通訳②	
	第9回	日英逐次通訳③	
	第10回	日英逐次通訳④	
	第11回	日英逐次通訳⑤	
	第12回	日英逐次通訳⑥	
	第13回	日英逐次通訳⑦	
	第14回	日英逐次通訳⑧	
	第15回	日本語プレゼンテーション	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業で出される1ページ程度の英文記事を読み込んでくること。		
テキスト	毎回プリントを配布		
参考文献	毎回プリントを配布		
評価方法	授業でのパフォーマンス:70% プレゼンテーション:20% 冬休み課題:10%		

西洋史特講 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
古代ギリシアの都市と民主政		原 賢治 (はら けんじ)	
授業の到達目標 及びテーマ	本講義では、古代ギリシアの都市（ポリス）はどのような性格をもつ共同体であったのかを知るとともに、古代の民主政の特徴について現代の民主政と違いを含めて理解することを目標とします。		
授業の概要	本講義では、西洋古代において中心要素のひとつである都市（ポリス）に焦点を置きます。ギリシヤ的な都市がどのように生まれ、いかなる政治的・社会的な特質を確立していったのかを古典期のアテナイを中心に説明する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	青銅器時代	
	第3回	「暗黒時代」と都市（ポリス）の誕生	
	第4回	アテナイの民主政の進展とその背景	
	第5回	ペルシア戦争	
	第6回	アテナイの民主政の完成	
	第7回	アテナイの政治制度と政治家	
	第8回	アテナイの地方	
	第9回	アテナイの社会	
	第10回	ギリシアの文化	
	第11回	スパルタの政治と社会	
	第12回	諸ポリスの制度と民主政	
	第13回	前4世紀のギリシア世界とマケドニアの台頭	
	第14回	ギリシアの「衰退」	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：特になし 復習：毎回の講義の内容をまとめる		
テキスト	毎回プリントを配布する		
参考文献	特になし		
評価方法	定期試験:80% 受講態度:20%		

西洋史特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
ヘレニズム時代の都市		原 賢治 (はら けんじ)	
授業の到達目標 及びテーマ	ヘレニズム時代（前334年-前30年）の都市の特徴を内外の状況や前後の時代との関係の中で理解する。		
授業の概要	本講義では、西洋古代において中心要素のひとつである都市に焦点を置きます。ヘレニズム時代において、古代ギリシア的な政治制度・社会慣習をもった諸都市が、ヘレニズム諸王国や共和政ローマと関わり、さらに後にはローマ帝国の支配下に置かれる中で、いつ、どのような形で変化を遂げていったのかを論じてゆきます。		
授業計画	第1回	ガイダンス：「ヘレニズム」とは	
	第2回	アレクサンドロスの東方遠征	
	第3回	ディアドコイ戦争	
	第4回	諸王国の制度（プトレマイオス朝）	
	第5回	諸王国の制度（セレウコス朝）	
	第6回	諸王国の制度（アンティゴノス朝）および王権の特徴	
	第7回	ヘレニズム諸王国と都市との関係	
	第8回	共和政ローマと都市との関係	
	第9回	都市の再評価：都市景観と民主政	
	第10回	都市の政治と社会：継続と変質	
	第11回	ヘレニズム世界の外国人と都市	
	第12回	ヘレニズム時代の思想	
	第13回	ヘレニズム時代の文化・宗教	
	第14回	ヘレニズム時代の経済活動	
	第15回	ローマ帝政下のギリシア都市およびまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	予習：特になし 復習：毎回の講義の内容をまとめる		
テキスト	毎回プリントを配布する		
参考文献	特になし		
評価方法	定期試験：80% 受講態度：20%		

西洋文化史 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
『オデュッセイア』を読む		水島 陽子 (みずしま ようこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>到達目標：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・『オデュッセイア』を日本語訳で読破し、物語を理解する。 ・文学を通して古代ギリシアを理解し、また現代における受容の意味を理解する。 <p>テーマ：</p> <p>オデュッセウスという英雄の魅力に触れながら、第一級の古典を読む醍醐味を味わい、現在も多くの文学、哲学などに影響を与え続ける理由を考える。</p>		
授業の概要	『オデュッセイア』を読み進むために知っておきたい事項を確認したのち、テキストを実際に読んでいく。講義も行うが、学生が発表する機会を多く持ちたい。その際、いくつかの場面に着目して、学説にとらわれない自由な議論、解釈を試みたい。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：古代ギリシアとは。現代人としてギリシア古典に向かうこのとの意味は何か。	
	第2回	序論① トロイア伝説と『オデュッセイア』	
	第3回	序論② 『イリアス』と『オデュッセイア』	
	第4回	『オデュッセイア』第1歌：始まりと全体像	
	第5回	" 第2～3歌：息子テレマコス、神々①	
	第6回	" 第4～5歌：女神カリュプソ、神々②	
	第7回	" 第6～8歌：ナウシカアの国	
	第8回	" 第9～10歌：民話の宝庫	
	第9回	" 第11～12歌：冥府くだり	
	第10回	" 第13～15歌：帰国・高貴な豚飼い？	
	第11回	" 第16～18歌：父と子	
	第12回	" 第19～21歌：求婚者、乳母、乞食	
	第13回	" 第22～24歌：夫と妻、復讐と和解	
	第14回	総括① 『オデュッセイア』と現代	
	第15回	総括② ディスカッション	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・早めにテキストを購入し、授業で扱う箇所を必ず読んでおくこと。 ・「ギリシア神話」に興味を持ち、積極的に調べること。 		
テキスト	ホメロス『オデュッセイア』上・下（松平千秋訳）岩波文庫、1994		
参考文献	必要に応じて授業内で紹介する。		
評価方法	試験またはレポート：50% 平常点（発表など）：50%		

西洋文化史B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
ヘラクレスと現代		水島 陽子 (みずしま ようこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>到達目標： ・古代ギリシアの英雄ヘラクレスを理解する。 ・ヘラクレスに関する伝承、作品などに触れ、古代ギリシアを理解する。 ・ヘラクレス像を通して、現代社会を理解する。</p> <p>テーマ： ヘラクレスとは何者か。ギリシア神話とは何か。古代ギリシアとはどんな世界か。</p>		
授業の概要	<p>ディズニー映画『ヘラクレス』、ヘラクレスオオカブト虫、心の病「ヘラクレス・コンプレックス」など、意外にも私たちの身近にいるヘラクレスの、元来の姿とは何か。ギリシア神話を確認しながら、なぜヘラクレスが現代に名を伝えているのか、議論する。また、一般論としての神話や民話の意味、文学作品の可能性についても考えたい。講義も行うが、学生間で分担してテキストのレジュメを作り、発表し合って理解を深めたい。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション：古代ギリシアとは	
	第2回	ヘラクレス神話概要①	
	第3回	ヘラクレス神話概要②	
	第4回	「出世する英雄」①	
	第5回	「出世する英雄」②	
	第6回	「死の克服への執念」①	
	第7回	「死の克服への執念」②	
	第8回	ギリシア悲劇とは	
	第9回	エウリピデス作『ヘラクレス』①	
	第10回	エウリピデス作『ヘラクレス』②	
	第11回	「繰り返し現われるヘラクレス」	
	第12回	「異なる顔のヘラクレス」	
	第13回	「現代のヘラクレス」	
	第14回	総括：ヘラクレスとは何者か。	
	第15回	ディスカッション	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストの授業で扱う箇所を必ず読んでくること。 ・ヘラクレスをはじめとして、多くのギリシア神話に親しみ、調べること。 		
テキスト	内田次信『ヘラクレスは繰り返し現われる——夢と不安のギリシア神話』大阪大学出版会、2014		
参考文献	アポロドーロス『ギリシア神話』岩波文庫、1953、 西村賀子『ギリシア神話：神々と英雄に会う』中公新書2005、他授業内で紹介する。		
評価方法	試験またはレポート：50% 平常点（発表など）：50%		

東洋文化史 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
東洋を知ろう		原田 理恵 (はらだ りえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	新石器時代から近現代までの中国を中心とする東アジア世界の文化を、美術工芸など目に見える文物を手がかりとして概観し、それぞれの時代や地域の文化の特徴を理解する。そして、それらの美術品・工芸品を生み出した社会を主導した思想のうちの主要なものについて、史料に触れながら理解を深める。		
授業の概要	講義が中心となります。「東洋の歴史」の広大な時間と空間の中から、中国世界を中心として人々の生活や思想あるいは社会のあり方など様々な観点で切り取ったいくつかのテーマを紹介します。一つのテーマを三週間程度の講義で修了し、その区切り毎に講義に関する質問・感想・意見等を書いていただき、次の授業で紹介しします。		
授業 計画	第1回	陶磁器から時代を見る 1	新石器時代～周
	第2回	陶磁器から時代を見る 2	秦・漢～南北朝
	第3回	陶磁器から時代を見る 3	隋・唐～宋
	第4回	陶磁器から時代を見る 4	元～現代
	第5回	古代中国世界の形成 1	聖人伝説と考古学的アプローチ
	第6回	古代中国世界の形成 2	周の建国と封建制
	第7回	古代中国世界の形成 3	王国から帝国へ
	第8回	孔子の生涯とその思想 1	孔子の生涯
	第9回	孔子の生涯とその思想 2	孔子の思想
	第10回	孔子の生涯とその思想 3	孔子の残したもの
	第11回	法家の思想家たち 1	商鞅
	第12回	法家の思想家たち 2	韓非
	第13回	法家の思想 1	法と術
	第14回	法家の思想 2	勢
	第15回	性悪の思想と性善の思想	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配ったプリント類は次週までに一読しておいて下さい。 前期の授業中に2～3回の小テストを実施予定です。一週前に告知します。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	授業で紹介しします。		
評価方法	レポート:30% 定期試験:30% 平常点(小テスト含):40%		

東洋文化史B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
東洋から世界を考えよう		原田 理恵 (はらだ りえ)	
授業の到達目標及びテーマ	今、中国はいろいろな意味で巨大な存在であると同時に、日本にとっては千年以上も前から政治・経済、そして何よりも文化的に深く関わってきた隣国です。その巨大な隣国の多様な文化について知り、考え、理解し、そして自らの社会や文化について再び問い直すことが、この授業の目標です。		
授業の概要	新石器時代から近現代までの中国を中心とする東アジア世界の文化につて、思想・生産形態（農耕と牧畜）・制度など異なった切り口でそれぞれの時代や地域の文化にアプローチする。そして個々の事象に関する理解を孤立させることなく、多面体としての社会の姿を構築し、内陸アジアや北アジア、そして日本が中華世界と如何に関わり、相互に影響しあったかを考察する。		
授業計画	第1回	官僚—最も中国的なもの— 1 郷挙里選と九品官人法	
	第2回	官僚—最も中国的なもの— 2 科挙沿革① 隋～唐	
	第3回	官僚—最も中国的なもの— 3 科挙沿革① 宋～清	
	第4回	官僚—最も中国的なもの— 4 科挙の実際	
	第5回	宋という国家 1 宋の建国と文治主義	
	第6回	宋という国家 2 宋の社会と経済	
	第7回	宋という国家 3 宋の遺産	
	第8回	遊牧の世界	
	第9回	元朝秘史の世界	
	第10回	チンギス・ハンのモンゴル帝国	
	第11回	征服王朝—元	
	第12回	狩猟の世界 1 狩猟社会とは何か	
	第13回	狩猟の世界 2 農耕民・遊牧民と狩猟民はいかに関わったか	
	第14回	“東洋文化”の視点からもう一度日本を見る 1 日本は東洋とどのように関わってきたか	
	第15回	“東洋文化”の視点からもう一度日本を見る 2 日本が東洋から得たもの	
準備学習 (予習・復習等)	授業で配布したプリント類は次週までに一読しておいて下さい。 後期の授業中に2～3回の小テストを実施する予定です。一週前に告知します。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	授業で紹介します。		
評価方法	レポート:30% 定期試験:30% 平常点(小テスト含):40%		

造形演習 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
自然観察から織作品への展開、及び、オフルーム技法の研究		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	本科において卒業演習で「織」を履修していることが望ましい。繊維造形・織の作品制作を中心に授業を進める。デザインと技術の関わりにおける繊維造形表現研究とともに、何を表現したいのか - 自己を見つめ、どのようにそれを表現するのか、その過程を学び深めることに主眼を置く。		
授業の概要	この演習では今まで習得した織の表現に加え、染色技術（糸染め）の習得、織機を使わないフリーテクニック（オフルーム技法）など、新たな表現技法についても学ぶことで表現の幅を広げ、後期の修了制作に取り組む基盤をつくる。課題（1）では、自然を観察してそのイメージを織作品へと抽象表現することを学ぶ。本科では羊毛を中心に扱ってきたので、それ以外の繊維・多種素材を用いた表現研究を併せて行う。課題（2）では、繊維造形の表現の幅を広げるために、織以外のフリーテクニックを学び、素材と技法の関係による造形表現の可能性を研究する。		
授業計画	第1回	課題-1-a：自然観察 樹木の木肌をデッサンし、質感を取り入れた作品制作へと展開する。学内の樹木を探してデッサンする樹を決める。課題-1-b：多種素材を用いた表現研究の準備（木枠に経糸を張る。）	
	第2回	課題-1-a：樹木のデッサン／課題-1-b：素材表現研究	
	第3回	課題-1-a：イメージドローイング、デザインへ展開／課題-1-b 続き	
	第4回	課題-1-a：デザイン決定、サンプル織	
	第5回	課題-1-a：染色講義、糸染め実習	
	第6回	課題-1-a：経糸整経、幾ごしらえ、実寸下絵	
	第7回	課題-1-a：幾ごしらえ、織り出し	
	第8回	課題-1-a：製織	
	第9回	課題-1-a：製織	
	第10回	課題-1-a：織上がり、経糸始末、仕上げ	
	第11回	課題-1-a：講評／課題-2 オフルーム技法について解説と練習（マクラメ、コイリング、スブラングなど）	
	第12回	課題-2：オフルーム技法と表現について／実験小作品の制作	
	第13回	課題-2：続き	
	第14回	課題-2：仕上げ	
	第15回	講評会（課題1a、1b、課題2）	
準備学習 (予習・復習等)	作品制作には膨大な時間がかかる。授業時間だけでは作品は出来ないで、課題作品を完成させるために、空き時間を利用して制作時間を確保すること。次への展開に欠かせない「制作ノート」をつくり、制作の過程で生じたこと（制作に関わること、イメージ、内容、制作意図、表現についてなど）はすべてメモしておき、修了制作への参考とすること。		
テキスト	糸染め実習用プリント、オフルーム技法プリント等を配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題作品:50% レポート:20%		

造形演習B		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
デザイン造形による表現演習		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標及びテーマ	デザインに求められる普遍的な造形美を、各自のテーマのもとに探求する。色彩、形体、素材・質感という造形の3要素の統合、色彩と形体の視覚効果の研究を掘り下げ、デザイン・造形表現の奥行きを深めることを目指す。また自らのテーマ設定、問題抽出と解決、計画的な制作というデザインプロセスの基本を学ぶ。		
授業の概要	造形の基本となる3要素（色彩、形体、素材・質感）に、光、運動という要素を加えた中から主として研究するもの一つを選び、参考作品資料を選定し、その研究、分析を行う。 それをもとにテーマを絞り、表現手法を考案して試作をくり返し、自らの表現スタイルを導き出す。 修了研究演習（デザイン造形）履修者は、修了制作のプロトタイプとなる平面または立体構成の作品を制作する。		
授業計画	第1回	ガイダンス：デザイン造形とは／研究テーマの提示／研究計画案作成	
	第2回	参考資料の研究、分析	
	第3回	作品のコンセプト、表現手法の決定	
	第4回	表現手法の試作、研究1	
	第5回	表現手法の試作、研究2	
	第6回	エスキース1	
	第7回	エスキース2（作品の構想の決定）	
	第8回	作品の試作1（部分またはスケールモデルなど）	
	第9回	作品の試作2（色彩などの決定）	
	第10回	作品制作1（下描きなど）	
	第11回	作品制作2（着彩など）	
	第12回	作品制作3（着彩など）	
	第13回	作品制作4（着彩など）	
	第14回	作品制作5（仕上げ）	
	第15回	講評会／修了制作に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ研究テーマを考えておくこと。 参考資料を図書館などで探しておく。 制作の進捗状況によっては時間外の制作が必要になる。 最後にレポートをまとめる。		
テキスト	必要に応じて配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:20% 作品:50%		

造形演習 C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
視覚効果を用いたデザイン制作		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	道具やシステムの目的にかなった視覚デザインと操作性について、評価を行なえるだけの素養を身につける。デザインの改善が望ましい箇所については提案できるような造形力を養う。		
授業の概要	数種類の課題を課す。各課題ごとに道具の原型や生活行為の基本に立ち返る考察が含まれる。道具やシステムの課題については、状況や目的に応じて各自が重要と考える要素を優先し、条件設定に基づいたデザインを構想する。 遊具のデザインについては、操作に応じた視覚効果をテーマとして制作する。		
授業計画	第1回	ガイダンス：デザインと生活の関係	
	第2回	個人用の空間のデザイン 施設内の個の空間	
	第3回	個人用の空間のデザイン：発表と講評	
	第4回	リフレッシュのデザイン 従来とは異なる色彩・形態の提案	
	第5回	リフレッシュのデザイン（続き）	
	第6回	リフレッシュのデザイン：発表と講評	
	第7回	対話するロボットのデザイン	
	第8回	対話するロボットのデザイン（続き）	
	第9回	対話するロボットのデザイン：発表と講評	
	第10回	形の変わる遊具のデザイン	
	第11回	形の変わる遊具のデザイン（続き）	
	第12回	形の変わる遊具のデザイン：発表と講評	
	第13回	図形の組み合わせパズルのデザイン	
	第14回	図形の組み合わせパズルのデザイン（続き）	
	第15回	図形の組み合わせパズルのデザイン：発表と講評	
準備学習 (予習・復習等)	ヒトがモノと関わる際に面白いと感じる状況について、できるだけくわしく観察・考察していくこと。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 課題制作物:70%		

造形特講 A		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
染織文化について、繊維造形概論として総合的に考察する		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちの生活環境に不可欠な繊維という存在について、人間と繊維の関わりを人類誕生まで遡り、自然からどのように学び創造してきたのか、衣食住における繊維構成物である生活用品からファッション、そして現代の繊維造形表現、現代美術まで様々な事例を示し比較検討する。また、講義だけでなく学生発表により他者と情報を共有しながら、染織文化と繊維造形について様々な資料を分析・考察する力、そして他者へ発信する力を養う。		
授業の概要	染織の歴史・文様・色料などについて基本となる事柄を学びつつ、さらに「繊維と構造・色彩・形」などの造形要素を軸に、人類が創造してきた世界の民族芸術や技術と道具の関係を知り、人間の手の仕事と現代における先端技術の融合についてなど、その創造の過程と周縁について総合的に考察する。例えば、色料の分類や天然染料の成分など科学的側面と、色名に表わされる文化的背景や、また手と道具の関係における紋織物とコンピュータ誕生の技術の連関など多角的に捉える。さらに人間にとって繊維とは何か、造形表現とは何かについて考察する。講義だけでなく、天然染料を用いた染色体験も予定している。		
授業計画	第1回	授業ガイダンス／自己紹介／講義：繊維とは何か。染織とは。	
	第2回	繊維と形体：繊維による構造物、織物の誕生、技術と表現	
	第3回	織物の原料：繊維素材の分類（サンプル帳作成）	
	第4回	世界の織物文化：古代～近代	
	第5回	日本の織物文化：古代～近代	
	第6回	DVD鑑賞：染織家「志村ふくみ」	
	第7回	学生発表：「色名と文様」について調査、発表する	
	第8回	繊維と色彩：織物と染色／色料：天然染料と合成染料／染色方法	
	第9回	天然染料による染色体験（染織室にて）	
	第10回	DVD鑑賞：世界遺産・富岡製糸工場	
	第11回	繊維とデザイン：パウハウスの織物工房、他	
	第12回	染織品にみる戦争柄：パワーポイントによる講義の他、DVD鑑賞	
	第13回	縫うという表現	
	第14回	手と道具、紋織物とコンピュータ	
	第15回	授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業の復習を勧める。それぞれの回で紹介した資料を含め、自分で調べて内容を理解し深めることが必要。他に、展覧会なども紹介するので、合わせて個別に鑑賞することを勧める。		
テキスト	特になし。授業の中で適宜、資料プリントを配付する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。参考資料として染織品、作品や染料、繊維材料の見本など授業の中で紹介する。		
評価方法	平常点:50% 発表:20% 期末レポート:30%		

造形特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
環境と芸術・芸術の社会性		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	人間は自らをとりまく環境から様々な刺激を受けて芸術表現を行い、また芸術によって社会環境を変えてきた。「環境」は現代を生きる私たちにとって重要なキーワードになっている。本講ではファインアートから建築、デザインまで、芸術を環境との関わりにおいてとらえ、その社会性について考える視座を得ることを目標とする。		
授業の概要	まず人間が自らをとりまく環境から様々な刺激を受けて造形表現を行い、また芸術によって社会環境を変えてきた事例を学ぶ。さらにそこから、個人の自己表現にとどまらない芸術の社会性とは何かを考える。特に社会環境への関わりにおいて重要となる「パブリックアート」についてその意義を考え、求められる表現のあり方を、表現者と受容する社会、両方の立場から模索する。 パブリックアートの実例を鑑賞するフィールドワーク、学生による調査・発表などをとり入れる。		
授業 計画	第1回	導入：環境と芸術について 講師の環境アート作品の紹介	
	第2回	自然環境と芸術 1：芸術の歴史の中で／自然の要素と芸術表現	
	第3回	自然環境と芸術 2：自然の要素と芸術表現（続き）／ランドアート	
	第4回	都市環境と芸術 1：駅空間のアート（国内の事例）	
	第5回	見学会 1（駅空間のアート）	
	第6回	見学会 1 の意見交換 都市環境と芸術 2：駅空間のアート（海外の事例）	
	第7回	『都市環境と芸術-地下鉄駅空間のアート-』を読む	
	第8回	日本の環境芸術の系譜 1：自治体による彫刻設置事業	
	第9回	日本の環境芸術の系譜 2：アートプロデューサーの登場／アートプロジェクト	
	第10回	日本のパブリックアート 1：彫刻公園／地域おこし	
	第11回	見学会 2（都市空間のパブリックアート）	
	第12回	見学会 2 の意見交換 日本のパブリックアート 2：都市の再開発	
	第13回	海外のパブリックアート	
	第14回	学生によるパブリックアート調査報告	
	第15回	まとめ：芸術と社会	
準備学習 (予習・復習等)	見学会にあたっては、あらかじめ資料に目を通しておき、終了後にレポートにまとめる。 授業時間外に各自がパブリックアートを調査し、報告発表を行なう。またレポートを提出する。		
テキスト	必要に応じて配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 報告・発表:20% レポート:50%		

造形特講C		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
色彩と形態の観察		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	色の三属性を把握した上で、目的に応じた色彩計画の方法を理解する。 視覚的なデザインに見られる様々な傾向を比較し、デザインの方針を理解する。		
授業の概要	対象の傾向を絞り、事例を集めて紹介し合う。 集まった事例について、色彩と形態の用い方、全体の傾向と細部の特徴の両面からの比較考察をしていく。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	統一感のための色彩計画と形態の組み合わせ	
	第3回	多彩さのための色彩計画と形態の組み合わせ	
	第4回	印象的な表示	
	第5回	気にならないデザイン	
	第6回	特徴的な色使いについて	
	第7回	北欧風の色調	
	第8回	トロピカルの色調	
	第9回	自然の中にあるグラデーションとデザインに用いられるグラデーション	
	第10回	表示について：店と店名の表示	
	第11回	表示について：コンピュータの画面表示	
	第12回	表示について：ランドスケープ	
	第13回	表示について：なつかしさ	
	第14回	色彩計画について：独自性の強いデザイン	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	よく知っている対象（動植物、持ち物、環境など）について、そこに含まれる色彩と形態の組み合わせを覚えておき、他の対象と比較ができるようになることが望ましい。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:30% 授業感想文:10% 期末レポート:60%		

比較社会特講 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
文化とアイデンティティの政治		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>言語、宗教、芸能、芸術といった人間の文化的営みは、いつの時代も国家と結合し、国家によって支配の道具として利用され、とくに近代においては植民地支配のために動員されてきた。しかしその半面、それは国家による支配への抵抗の拠点として、人々が民族や集団のアイデンティティを保持する役割も担ってきた。この講義では、「文化とアイデンティティ」の問題を、日本、沖縄、朝鮮、アメリカ、ハワイなど、いくつかの地域に即し、またそれらの地域を比較しながら取り上げ、グローバル社会における「支配と自立」について考察していく。</p>		
授業の概要	<p>前半はおもに「支配」の観点から、国家の統合や植民地支配に文化がどのように利用され、機能してきたかを考察する。 後半はおもに「自立」の観点から、植民地支配からの独立やマイノリティーのアイデンティティ維持のために、文化が果たしてきた役割について議論する。</p>		
授業計画	第1回	講義全体の概要説明	
	第2回	日本における皇民道徳の形成	
	第3回	日本における国語の形成	
	第4回	戦時体制下の「日本精神」の位相	
	第5回	文明と野蛮—キリスト教による植民地支配	
	第6回	アメリカの「文化帝国主義」	
	第7回	ハングルと民族意識	
	第8回	日本の「民芸運動」とそのイデオロギー性	
	第9回	沖縄における「方言論争」	
	第10回	ハワイにおける文芸復興運動	
	第11回	アイヌ文化保護法とその背景	
	第12回	抵抗運動としての文化運動	
	第13回	民族教育権と多文化教育	
	第14回	マイノリティー文化政策の世界的潮流	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	課題について調査してもらうことがあります。		
テキスト	授業中に配布します。		
参考文献	授業中に指示します。		
評価方法	平常点:50% 期末レポート:50%		

比較社会特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
民主主義の比較社会論的考察		輪島 達郎 (わじま たつろう)	
授業の到達目標 及びテーマ	民主主義について比較社会論的に考察する。比較社会論的な考察をとおして、民主主義の歴史と原理の多様な側面に光を当てながら、現代社会における民主主義の課題を明らかにしていく。		
授業の概要	。近代的な政治原理としての民主主義は近代ヨーロッパにおいて生まれ、ヨーロッパとアメリカを中心に、さまざまな形態をとりながら発展してきた。民主主義にはどのような種類や形態が存在し、それらがどのような課題を担ってきたか、また、現代において民主主義はどのような問題に直面しているか、という点を中心に、ヨーロッパ、アメリカ、日本の3極で比較しながら議論していきたい。		
授業計画	第1回	授業概要の説明	
	第2回	民主主義の条件（1）—ワークショップ	
	第3回	民主主義の条件（2）—理論的分析	
	第4回	民主主義と多数者	
	第5回	民主主義とメディア	
	第6回	戦後民主主義と日米安保体制	
	第7回	特定秘密保護法の問題点	
	第8回	代議制民主主義の課題	
	第9回	ヨーロッパにおける民主主義の原理とその変質	
	第10回	民主主義における市民参加	
	第11回	民主主義の正当性	
	第12回	民主主義とインターネット	
	第13回	民主主義の条件としての社会と人間（1）—ヨーロッパ	
	第14回	民主主義の条件としての社会と人間（2）—日本	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	授業中に指示する。		
テキスト	授業中に配布する。		
参考文献	授業中に指示する。		
評価方法	平常点:50% 期末レポート:50%		

比較社会特講C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
比較法律家論ーアメリカ合衆国の法律家		荒井 真（あらい まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・アメリカにおける法曹養成制度を理解する。 ・アメリカにおいてなぜ訴訟が多発し、日本においてはなぜ訴訟が少ないのか、その理由を理解する。 ・アメリカの陪審制度の仕組みについて理解する。 ・アメリカの裁判官の選出方法および法曹一元制度について理解する。 		
授業の概要	<p>本講義の中心は、比較法律家論である。すなわち、各国において法律家が果たす役割は異なっており、法秩序の主導権を握る法律家層も違っている。法律家という視角からメスを入れ、そのような差異を生んだ歴史的・社会的な背景・原因を考察していく。本講義では、とくにアメリカ合衆国の法律家を取り上げる。アメリカにおける法律家養成の方法、弁護士のある方の違い、裁判官の選出方法、法曹一元、裁判への市民参加（陪審制度）等について講義する。また、訴訟大国であるアメリカと訴訟小国である日本との比較を行い、なぜ訴訟数に大きな違いがあるのか、その原因について考察していく。映画などの映像資料も適宜用いる予定である。是非とも比較社会特講Dと併せて履修して欲しい。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクションー法圏・法系とは何か 英米法圏と大陸法圏	
	第2回	アメリカの法曹養成制度ーロールスクール	
	第3回	なぜアメリカは訴訟大国なのか	
	第4回	アメリカの弁護士 民事事件関連	
	第5回	アメリカの弁護士 民事事件関連	
	第6回	アメリカの弁護士 刑事事件関連	
	第7回	アメリカの陪審制度 陪審制度の仕組み	
	第8回	アメリカの陪審制度 メリット・デメリット	
	第9回	アメリカの陪審制度の実際	
	第10回	アメリカの検察官	
	第11回	アメリカの裁判官ー裁判制度	
	第12回	アメリカの裁判官ー連邦と州の裁判官	
	第13回	アメリカの裁判官ー法曹一元	
	第14回	アメリカの法学教授	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業に関連する書籍や映画を適宜指示するので、それを読み、観てくること。		
テキスト	特になし。適宜プリントを配布する。		
参考文献	丸田隆『陪審裁判を考えるー法廷にみる日米文化比較』（中公新書、1990年）；丸山徹『入門・アメリカの司法制度ー陪審裁判の理解のために』（現代人文社、2007年）；樋口範雄『はじめてのアメリカ法 補訂版』（有斐閣、2013年）		
評価方法	期末試験:60% 課題等:40%		

比較社会特講D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
比較法律家論—イギリス・ドイツ・日本の法律家		荒井 真（あらい まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・イギリス、ドイツ、日本における法曹養成制度を理解する。 ・ドイツの参審制度および日本の裁判員制度について理解する。 ・ドイツ、日本の裁判官の選出方法について理解する。 ・日本における最高裁事務総局の裁判官コントロールについて知る。 		
授業の概要	<p>本講義の中心は、比較法律家論である。法律家という視角からメスを入れ、各社会における法律家の役割について考察していく。本講義では、英米法圏に属するイギリスおよび大陸法圏に属するドイツ、日本の法律家を取り上げる。各国における法律家養成の方法、弁護士・検察官の役割、裁判官の選出方法、裁判への市民参加（参審制度および裁判員制度）等について講義していく。その際、自主・独立性の高いドイツの裁判官と最高裁事務総局の隠然たる監督下にある日本の裁判官を比較し、あるべき裁判官像についても考察していく。映画などの映像資料も適宜用いる予定である。是非とも比較社会特講Cと併せて履修して欲しい。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション—法圏・法系とは何か。英米法圏と大陸法圏	
	第2回	イギリス法の歴史と特徴	
	第3回	イギリスにおける法曹養成制度	
	第4回	イギリスの弁護士—バリスタとソリシタ	
	第5回	弁護士二分制度のメリットとデメリット	
	第6回	イギリスの裁判官—イギリスの裁判制度	
	第7回	イギリスの裁判官—法曹一元	
	第8回	ドイツの統治制度概観	
	第9回	ドイツにおける法曹養成制度	
	第10回	ドイツの参審制度の仕組み	
	第11回	ドイツの参審制度とアメリカの陪審制度の比較	
	第12回	ドイツの裁判官—市民に開かれた親切的な裁判官	
	第13回	日本の裁判官と最高裁事務総局	
	第14回	日本の裁判員制度	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業に関連する書籍や映画を適宜指示するので、それを読み、観てくること。		
テキスト	特になし。適宜プリントを配布する。		
参考文献	齋藤哲『市民裁判官の研究』（信山社出版、2001年）；木佐茂男『人間の尊厳と司法権—西ドイツ司法改革に学ぶ』（日本評論社、1990年）；西川伸一『日本司法の逆説』（五月書房、2005年）；新藤宗幸『司法官僚 裁判所の権力者たち』（岩波新書、2009年）；瀬木比呂志『絶望の裁判所』（講談社現代新書、2014年）		
評価方法	期末試験:60% 課題等:40%		

比較文化特講A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
「愛」の比較思想史		中井 章子（なかい あやこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「愛」をテーマとして、日本における「恋」と「愛」、儒教の「仁」、プラトンの「エロース」、「雅歌」、新約聖書における「愛」などを理解し、比較する。		
授業の概要	和歌、「論語」、「饗宴」、新旧約聖書、「トリスタン・イーズー物語」などを読んできて、話し合う。		
授業計画	第1回	「愛」という言葉について	
	第2回	旧約聖書の「雅歌」の背景	
	第3回	「雅歌」についてのディスカッション	
	第4回	儒教の「仁」について	
	第5回	仏教の「慈悲」について	
	第6回	ソクラテスとプラトンについて	
	第7回	「饗宴」の構造	
	第8回	「饗宴」の登場人物	
	第9回	「饗宴」のなかの意見	
	第10回	「饗宴」におけるソクラテス	
	第11回	新約聖書における「愛」	
	第12回	中世ヨーロッパの騎士道と「愛」	
	第13回	「トリスタン・イーズー物語」の登場人物	
	第14回	「トリスタン・イーズー物語」における「愛」	
	第15回	「愛」についてのディスカッション	
準備学習 (予習・復習等)	予習：指定されているテキストを読んで出席する。 復習：課題についてレポートを書く。		
テキスト	新旧約聖書、プラトン「饗宴」、「トリスタン・イーズー物語」、その他。		
参考文献	図書館の蔵書のなかから紹介する。		
評価方法	議論参加:50% レポート:50%		

比較文化特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
欧米人の日本紀行をととしての比較文化		中井 章子（なかい あやこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	来日した欧米人の日本旅行記を読み、異文化間の理解の問題、世界の中の日本文化、日本文化の連続性と変化について考える。		
授業の概要	講義と演習形式を。 配布したテキストを読み、話し合う。		
授業計画	第1回	世界の中の日本について	
	第2回	フランシスコ・ザビエルの書簡を読む	
	第3回	ヴァリヤーノ「日本巡察記」	
	第4回	フロイス「ヨーロッパ文化と日本文化」	
	第5回	フロイス「日本史」	
	第6回	さまざまな来日宣教師の日本観	
	第7回	日本人とヨーロッパ文化	
	第8回	日本人とキリスト教	
	第9回	江戸時代の世界情勢	
	第10回	ケンペルの江戸参府旅行	
	第11回	ツェンペリーと日本人の交際	
	第12回	新井白石の西洋観	
	第13回	蘭学	
	第14回	シーボルト	
	第15回	朝鮮通信使と雨森芳州	
準備学習 (予習・復習等)	指定された文章を読んでくること。 課題について文章を書いてくること。		
テキスト	「フランシスコ・ザビエル全書簡」ほか、配布する。		
参考文献	図書館蔵書のなかから紹介する。		
評価方法	授業参加・議論:50% レポート、発表:50%		

比較文化特講C		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
英文解釈と漢文訓読		古田島 洋介 (こたじま ようすけ)	
授業の到達目標及びテーマ	現代の日本人が実践している英文解釈は、実のところ、日本人が伝統的に実践してきた漢文訓読という外国語受容方法を歴史的・文化的な背景としている。両者の関係を具体的な知識として学び、明確に意識することにより、日本人の英文に対する理解の問題点を歴史的な脈絡のなかで認識できるようになる。		
授業の概要	日本人が本格的に英語を学び始めた明治初期の英語学習書を主たる素材として、日本人が漢文訓読を下敷きとして英語を学んだ事実を明らかにし、その各種の問題点を探究する。また、当時の英語学習の痕跡が今日の英和辞典などにも残存していることを確認してゆく。		
授業計画	第1回	日本人と外国語との接触：日本人の外国語学習略史	
	第2回	外国語学習システムとしての漢文訓読（1）語順の問題	
	第3回	外国語学習システムとしての漢文訓読（2）訳語の問題	
	第4回	江戸時代におけるオランダ語の学習：「蘭学」の一側面	
	第5回	明治期における英語学習（1）基盤としての「漢学」	
	第6回	明治期における英語学習（2）語順の問題：返り点と数字番号	
	第7回	明治期における英語学習（3）訳語の問題：漢文「句形」の応用	
	第8回	明治期における英語学習（4）置き字としての「冠詞」	
	第9回	明治期における英語学習（5）再読文字としての「関係代名詞」	
	第10回	まとめ（1）：明治期における英語学習と漢文訓読	
	第11回	現行の英和辞典に見る漢文訓読の痕跡（1）副詞の訳し方	
	第12回	現行の英和辞典に見る漢文訓読の痕跡（2）成句の訳し方	
	第13回	現行の英和辞典に見る漢文訓読の痕跡（3）関係代名詞の訳し方	
	第14回	まとめ（2）：現行の英文解釈と漢文訓読	
	第15回	最終まとめ＋質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	常日ごろ、あるいは授業が進行する過程で、英文解釈または漢文訓読について疑問に感ずることがあれば、確実にメモを取って授業中に質問し、積極的に疑問点の解消を図ること。つまらぬ質問ではないかと懸念する必要はまったくない。		
テキスト	特定のテキストは用いず。必要な教材は、すべてプリントで配付する。		
参考文献	古田島洋介・湯城吉信『漢文訓読入門』（明治書院）。その他は必要に応じて授業中に紹介する。		
評価方法	筆記試験：90% 積極性：10%		

比較文化特講D		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本人と漢詩		古田島 洋介（こたじま ようすけ）	
授業の到達目標及びテーマ	日本人にとって、漢詩は、中国という外国で誕生した詩の一形式であると同時に、自らの心情を吐露したり、実見した景物を詠じたりする自国の詩の一形式でもあった。その事実を十全に理解することにより、漢詩が日本文学および日本文化の一角を占める重要な詩の形式であったことを明確に認識できるようになる。		
授業の概要	中国の韻文の一たる漢詩の略史を講じ、次いで、常に日本の和歌・俳句などとの比較を念頭に置きながら、漢詩がどのような規則に従って作られているのかを丁寧に解説してゆく。最終的には、日本漢文学史についても知識を深めてもらい、日本人にとって漢詩はどのような存在であったのか、その歴史的な意義とともに、今日的な意義にも言及する。		
授業計画	第1回	中国韻文学略史：詩・詞・曲	
	第2回	日本韻文学略史：和歌・俳句・漢詩	
	第3回	漢詩（近体詩）の規則（1）詩形	
	第4回	漢詩（近体詩）の規則（2）句式	
	第5回	漢詩（近体詩）の規則（3）絶句・律詩の構成	
	第6回	漢詩（近体詩）の規則（4）平仄〈1〉平仄とは何か？	
	第7回	漢詩（近体詩）の規則（5）平仄〈2〉平仄式とは何か？	
	第8回	漢詩（近体詩）の規則（6）押韻〈1〉韻目とは何か？	
	第9回	漢詩（近体詩）の規則（7）押韻〈2〉韻字とは何か？	
	第10回	漢詩（近体詩）の規則（8）対句	
	第11回	漢詩（近体詩）の諸規則の確認（1）絶句	
	第12回	漢詩（近体詩）の諸規則の確認（2）律詩	
	第13回	漢詩（近体詩）の諸規則の確認（3）排律	
	第14回	日本人にとっての漢詩：日本文学における位置付け	
	第15回	まとめ＋質疑応答	
準備学習 (予習・復習等)	漢詩（近体詩）の規則を詳しく学ぶのは、一生のうち最初で最後の機会だと思って授業に臨んでほしい。したがって、授業後、少しでも理解の行き届かぬ場面があれば、確実にメモを取って、必ず次回の授業で質問し、積極的に疑問点の解消を図ること。つまらぬ質問ではないかと懸念する必要はまったくない。		
テキスト	特定のテキストは用いず。必要な教材は、すべてプリントで配付する。 ただし、必ず漢和辞典を用意せよ。〔例〕小川環樹ほか〔編〕『新字源』（角川書店） 初回の授業に自身の漢和辞典を持参し、その可否について教員の指示を受けること。		
参考文献	特に指定せず。必要に応じて授業中に紹介する。		
評価方法	筆記試験：90% 積極性：10%		

比較芸術特講 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
先史-17世紀のフランス美術		伊藤 巳令 (いとう みれい)	
授業の到達目標 及びテーマ	先史から17世紀までのフランス美術の代表的な作例に親しむ。フランス美術の特質を理解し、視覚芸術の研究方法を学ぶことで、他の領域との比較研究に役立つ知識を得る。		
授業の概要	前期は、先史時代から17世紀までのフランスの美術を扱います。(1) 南フランスに残る先史時代の洞窟壁画、ケルト美術、ガロ・ロマンの文化、(2) 中世のキリスト教美術、(3) ルネサンスとイタリア様式の吸収、(4) バロックと古典主義		
授業計画	第1回	ガイダンス 授業の概要、準備の仕方、展覧会の紹介など	
	第2回	先史時代の洞窟壁画	
	第3回	ケルト美術	
	第4回	ローマ美術とガロ・ロマン	
	第5回	中世の装飾写本	
	第6回	ロマネスク建築	
	第7回	ゴシック建築	
	第8回	後期ゴシックの絵画	
	第9回	イタリアルネサンスとフランス美術	
	第10回	フォンテーヌブロー派	
	第11回	フランス・バロックの絵画 1 自然主義的傾向	
	第12回	フランス・バロックの絵画 2 ポローニャ派の影響	
	第13回	フランス古典主義	
	第14回	ヴェルサイユ宮殿	
	第15回	試験	
準備学習 (予習・復習等)	美術館で作品を見たり、建築物を訪ねたりする経験を積んでください。予習・復習・レポート課題についてはCoursePowerを活用したいと考えています。		
テキスト	特になし		
参考文献	『世界美術大全集』小学館 『フランス近世美術叢書Ⅰ～Ⅳ』ありな書房 高階秀爾『フランス絵画史』講談社学術文庫		
評価方法	出席点:50% 試験:50%		

比較芸術特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
18-20世紀のフランス美術		伊藤 巳令 (いとう みれい)	
授業の到達目標 及びテーマ	18-20世紀のフランス美術の代表的な作例に親しむ。フランス美術の特質を理解し、視覚芸術の研究方法を学ぶことで、他の領域との比較研究に役立つ知識を得る。		
授業の概要	後期は、18世紀から20世紀のフランス美術の代表的な画家と、いくつかの特徴的なトピックスを扱います。(1) ロココ美術、(2) 近世・近代の複製文化、(3) 19-20世紀の絵画		
授業計画	第1回	ガイダンス 授業の概要、準備の仕方、展覧会の紹介など	
	第2回	ロココ美術 建築	
	第3回	アントワヌ・ヴァトー	
	第4回	フランソワ・ブーシェ	
	第5回	18世紀の風俗画	
	第6回	フランスの版画	
	第7回	革命期のカリカチュア	
	第8回	新古典主義	
	第9回	ロマン主義	
	第10回	エキゾチズム	
	第11回	19世紀の版画と写真	
	第12回	自然主義	
	第13回	マネと印象派	
	第14回	印象派以降	
	第15回	試験	
準備学習 (予習・復習等)	展覧会に行き作品を実際にみること。予習・復習・レポート課題にはCoursePowerを活用したいと考えています。		
テキスト	特になし		
参考文献	『世界美術大全集』小学館 『フランス近世美術叢書Ⅰ～Ⅳ』ありな書房 高階秀爾『フランス絵画史』講談社学術文庫		
評価方法	出席:50% 試験:50%		

比較言語論 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本語と英語の比較対照		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	まず語とその音声、意味、文字および語を構成する要素(形態素)に関する基本的な事柄を確認し、その上でそれらに関して日本語と英語がどのように異なっているかを、言語に関する情報の宝庫である日本と英語圏の辞書の記述内容を比較対照することによって検討します。それにより、語および形態素に関する日本語と英語の相違が理解できるようになり、さらには辞書を効果的に利用できるようになり、異文化間コミュニケーションの言語的側面も強化できるようになります。		
授業の概要	基本的にはこの授業で扱う様々なテーマごとにグループワークを行い、グループの代表者がその結果を発表し、担当教員が補足や解説・説明をする、という形式で授業をするようになります。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	語とは何か(グループワーク)	
	第3回	語とは何か(補足と解説)	
	第4回	形態素とは何か(グループワーク)	
	第5回	形態素とは何か(補足と解説)	
	第6回	語を表す音声(グループワーク)	
	第7回	語を表す音声(補足と解説)	
	第8回	語の意味(グループワーク)	
	第9回	語の意味(補足と解説)	
	第10回	語を表す文字(グループワーク)	
	第11回	語を表す文字(補足と解説)	
	第12回	語に見られるセクシズム	
	第13回	擬声語・擬態語	
	第14回	語の造り方	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく考えておいて下さい。		
テキスト	テキストは使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜、授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:30% 授業への参加度:30% レポート:40%		

比較言語論B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
日本語と英語の比較対照		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	文の構成要素としての語、語を組み合わせる文を作る基になる文法、文構造を決定する動詞、文を作る際の発想法、文の意味、文法上のセクシズムなどに関する日本語と英語の相違を、言語に関する情報の宝庫である日本と英語圏の辞書を参照しつつ、詳細に検討します。それにより、語およびそれよりも大きな単位に関する日本語と英語の相違が体系的に理解でき、さらに効果的な辞書の利用法を身に付け、異文化間コミュニケーションの言語的側面を強化することもできるようになります。		
授業の概要	この授業で扱う様々なテーマごとにグループワークを行い、各グループの代表者がその結果を発表し、担当教員が補足や解説・説明をする、という形式で授業を進めることとなります。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	文の構成要素としての語(グループワーク)	
	第3回	文の構成要素としての語(補足と解説)	
	第4回	文法(名詞と代名詞に関するグループワーク)	
	第5回	文法(名詞と代名詞に関する補足と解説)	
	第6回	文法(動詞に関するグループワーク)	
	第7回	文法(動詞に関する補足と解説)	
	第8回	発想法(グループワーク)	
	第9回	発想法(補足と解説)	
	第10回	文の意味(グループワーク)	
	第11回	文の意味(補足と解説)	
	第12回	文法上のセクシズム	
	第13回	辞書項目の執筆(執筆作業)	
	第14回	辞書項目の執筆(発表と講評)	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく考えておいて下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜、授業中に紹介します。		
評価方法	平常点:30% 授業への参加度:30% レポート:40%		

比較生活文化 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
比較食文化		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>①人々が何を食糧として選択してきたのか、その背景を理解する。 ②異文化との交流により、食文化が変容し、それが現在進行形であることを認識する。 ③自らも食文化の継承者であり、同時に創造者であることを認識する。</p>		
授業の概要	<p>本講義では、生活文化の中でも「食」に焦点をあてる。異なった自然環境や社会環境において、人は何を食糧として選択してきたのか、食物の起源や発祥、伝播、調理方法、食べ方などを比較分析することで、なぜ多様な食文化が存在するのかを考える。 また、国や地域の人々の「食物」に込めた思い、マナーやタブー（食物禁忌）など文化的背景について学ぶ。</p>		
授業計画	第1回	授業のすすめ方 主食とは何か？世界の主食を考える	
	第2回	コメの食文化	
	第3回	ムギ、トウモロコシの食文化	
	第4回	麵の食文化	
	第5回	食法と食事マナー	
	第6回	食物禁忌と宗教 1—ユダヤ教、キリスト教、イスラム教	
	第7回	食物禁忌と宗教 2—上座部仏教、大乘仏教	
	第8回	大豆食品の食文化	
	第9回	肉食の変遷	
	第10回	出汁の食文化	
	第11回	卵の食文化	
	第12回	酒と飲料の食文化	
	第13回	食と儀礼	
	第14回	行事食	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	適宜課題を出す。		
テキスト	毎回、プリントを配布する。		
参考文献	授業中、適宜紹介する。		
評価方法	レポート:30% 受講態度:20% 試験:50%		

比較生活文化B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
食文化の時代変遷		宇都宮 由佳（うつのみや ゆか）	
授業の到達目標 及びテーマ	日本の食文化を歴史の変遷から理解する。日本の食の成り立ち、すなわち過去の食スタイルが現在に至るまでの過程を学ぶことで、現時点から将来の食を考える力を身につける。		
授業の概要	日本の食文化は、様々な国・地域の影響を受けながら形成してきた。そこで、どの外来文化を受容し、どのように融合させ、変容、発展していったのか、あるいはどのように衰退したのかについて、時代ごとに現代の食と比較しながら、日本の食文化の成り立ちを紐解いていく。各時代の自然環境および政治、経済、宗教、文化などの社会情勢を背景に、食スタイルの過去から現在に至るまでの過程を学ぶ。そして現時点から将来の食を考える力を身につける。		
授業計画	第1回	授業の進め方の説明、食文化の成り立ち	
	第2回	旧石器時代・縄文・弥生時代—厳しい自然環境下での食物、稲の伝播	
	第3回	古墳時代から飛鳥時代—唐の影響、米と律令国家（政治）、古代チーズ	
	第4回	奈良時代から平安時代—貴族食の発達、大饗料理	
	第5回	鎌倉時代—武士の食事、携帯・保存食、市の発達	
	第6回	精進料理—禅風食の普及、仏教の一般大衆化	
	第7回	室町時代から戦国時代—本膳料理、庖丁流派の成立	
	第8回	懐石料理と会席料理	
	第9回	安土・桃山時代—南蛮文化の流入、南蛮菓子、卵料理の登場	
	第10回	江戸時代—発達した庶民の料理	
	第11回	卓袱料理と普茶料理	
	第12回	行事食と郷土食	
	第13回	明治・大正・昭和（戦前）—西洋化と肉食、和洋折衷	
	第14回	昭和から現代—家電製品の普及、技術の発展	
	第15回	将来の食を考える—国際化と伝統食	
準備学習 (予習・復習等)	適宜、課題を出す。		
テキスト	毎回、プリントを配布する。		
参考文献	適宜、参考文献を紹介する。		
評価方法	レポート:30% 受講態度:20% 試験:50%		

比較デザインA		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
ものづくりの源泉と現代生活への展開		椎原 晶子（しいはら あきこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>〈少し、目利きになろう、身の回りを豊かにしよう〉 工業製品に囲まれて育った世代の人々が、人間が自然環境の中で工夫を重ねて道具や住まいをつくり、よりよい生活環境を築いて来た過程を理解できるようにする。スライドや展覧会等の見学により各地・各時代のものづくりの特徴や価値観を知る。実物の道具類を手にとって比較検討する体験を通して、自分の身近な生活の改善や見通しに役立てる。</p>		
授業の概要	日本の伝統的な手工芸の源泉と現代的展開の比較、近代以降の世界の住まいとものづくりの比較を行い、現代の我々の生活環境づくり、持続的な地域社会形成と暮らす人々のライフデザインについて、課題や展望、自分でできる一歩について考察する。		
授業計画	第1回	はじめに：くらしとデザイン：生活と道具、社会の関わり	
	第2回	日本のデザインの源泉と発展(1) 日本の文化、絵画・工芸の様式と価値観の変遷	
	第3回	見学会：日本の絵画・工芸の造形（根津美術館等）	
	第4回	日本のデザインの源泉と発展(2)琳派のデザイン：宗達・光琳・抱一・基一から現代へ	
	第5回	日本のデザインの源泉と発展(3)漆芸：技法と機能、装飾、現代への展開	
	第6回	日本のデザインの源泉と発展(4)陶芸：陶磁器の種類と技法、文人陶工	
	第7回	日本のデザインの源泉と発展(5)陶芸：各産地の特徴と現代への展開	
	第8回	見学会：生活の中の工芸・デザイン（日本民芸館等）	
	第9回	世界と日本のデザイン(1)：西洋・中東・アフリカ・東洋の文様デザインと相互の影響	
	第10回	世界と日本のデザイン(2)：染織：染と織の技法と文様	
	第11回	世界と日本のデザイン(3)：文様を活かしたデザイン（唐紙、壁紙、千代紙、ガラス等）	
	第12回	世界と日本のデザイン(4) 生活改善運動と民芸運動：庶民の生活道具の中の美から	
	第13回	世界と日本のデザイン(5) 近代工業デザインの展開：機能と美の両立、大量生産からユーザーの個性を活かす、価値を掘り起こすデザインへ	
	第14回	世界と日本のデザイン(6) 手仕事の再評価、地方からのものづくり	
	第15回	まとめ：地域性と伝統を活かす現代のものづくり（レポート発表）	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃から、日常の生活道具、生活空間にあるもののデザイン意図、効果を意識して、確認する。 ・気になるデザインやものづくりについての記事などをスクラップし、感想をメモしていく。 ・授業と並行して、「地域性と伝統をふまえた現代のものづくり」について自分でテーマを探し、調査を行い、最終的にレポートとして発表する。見学会の入場料・交通費等は各自負担とする。 		
テキスト	阿部公正監修『世界デザイン史』美術出版社		
参考文献	竹原あきこ＋森山明子『日本デザイン史』美術出版社、喜多俊之『地場産業＋デザイン』学芸出版社、藤田治彦『現代デザイン論』昭和堂		
評価方法	レポート:50% 授業中の提出物:30% 授業態度・平常点:20%		

比較デザインB		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
くらしの環境デザイン		椎原 晶子 (しいはら あきこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	〈まちづくりはライフデザイン、自分の生きる土台をつくろう〉 現代に生きるわたしたちの暮しの環境はどのような背景、しくみから成り立っているのか、身の回りの事物のデザインを通して、地域の生活文化や社会構造を読み解く視点を身につける。その上で、各人が自分たちの生活環境を見直し、今後の自分たちの暮しの場、すまいづくり、まちづくりに取組む土台をつくる。		
授業の概要	身近な東京のまちや、近現代の建築と環境のデザインを題材に、その背景にある風土と形成史、住文化を読み込む手法を身につけ、現代の少子高齢化社会における環境との共生や持続性あるまちづくりのとりくみを学ぶ。並行して、自分たちが学ぶ南青山・渋谷周辺や自分の関わるのまちの成り立ちや課題を調べ、改善策を出し合い、ともに考えていく。		
授業計画	第1回	はじめに：風土と生活文化：海外と日本の街並み・まちづくりの例 ふるさとになれるまち：自発的な地域住民の連携	
	第2回	日本の暮しのルーツ(1) 江戸の生活文化：江戸城下町の形成、武家と町人のくらし	
	第3回	日本の暮しのルーツ(2) 東京の生活文化：明治～昭和、山の手と下町のくらし	
	第4回	見学会：アートによるまちの価値発見からまちの再生へ（アートルック上野谷中・芸工展・古民家シェア、カフェ活用など）	
	第5回	日本の暮しのルーツ(3) 町家と商家の暮らし：京都・江戸東京の町家と現代への継承	
	第6回	日本の暮しのルーツ(4) 武家屋敷から戸建て住宅へ	
	第7回	工業生産時代の課題(1) 産業革命と近代の都市づくり 大量生産・大量流通のはじまり、歴史主義と機能主義のデザイン	
	第8回	工業生産時代の課題(2) 生活の芸術化とデザイン、ウィリアム・モリスの思想と実践	
	第9回	工業生産時代の課題(3) 新しいライフスタイルとしてのデザイン：アールヌーヴォー、マッキントッシュ、ゼツェーション、デ・ステール、アールデコ等	
	第10回	工業生産時代の課題(4) 機能と空間によるデザイン：インダストリアルデザインと近代建築：バウハウス、コルビュジェから、モダンデザインの世界への普及	
	第11回	見学ワークショップ：わたしたちの学ぶまち、青山・表参道のまちを知る（現地見学） 商業としてのデザイン：戦後の生活空間・道具の商品化・ブランディング	
	第12回	自分たちでつくるまち(1) 人口減少時代、少子高齢化社会の都市づくり： 空き家活用、団地再生、多世代・多業種混在、シェア居住などのとりくみ	
	第13回	自分たちでつくるまち(2) はじめの一步のまちづくり： 住みひろき、まち掃除、子育てネットワーク、水と緑の観察、等	
	第14回	自分たちでつくるまち(3) 地域資源の発見・再生とエリアマネジメント まち会議・DIY・リノベーション・各地のエリアマネジメント	
	第15回	自分たちでつくるまち(4) 調査のまとめ発表：私の好きな場所、住みたい町、自分ができると、やりたいこと	
準備学習 (予習・復習等)	まちや住まいについて、自分が住むまち、学ぶまち、関わるまちについて背景にある風土と形成史、住文化について読み込む練習を重ねる。青山・表参道については、分担して背景を調べてからまちを歩き、課題抽出を行う。最終レポートにむけて、自分で選んだまちの背景や課題を調べ、提案を考えていく。手順については授業中に指示をする。期間中に、現地見学、美術館等見学を行う。入場料・交通費については各自負担とする。		
テキスト	平井聖『対訳日本人のすまい』市ヶ谷出版社、木下斉『まちづくりの「経営力」養成講座』学陽書房		
参考文献	和辻哲郎『風土』岩波書店、エドワード・S・モース【日本のすまい・内と外】、阿部公正監修『世界デザイン史』美術出版社、藤浩志他『地域を変えるソフトパワー』青幻社、等。		
評価方法	レポート:50% 授業中の提出物:30% 授業態度・平常点:20%		

比較宗教論 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
世界諸宗教の歴史と形成		豊川 慎（とよかわ しん）	
授業の到達目標 及びテーマ	今日の世界の諸文化を深く理解するためには、それらの基底にある諸宗教理解が不可欠です。歴史上、世界の様々な地域において多様な宗教が発生し、形成、展開されてきました。本講義では、世界の多様な宗教伝統を比較宗教および宗教史的観点から概観し、世界諸宗教の歴史的展開と形成に関する基本的知識を得ることによって、世界の諸文化を宗教的観点から深く理解することを授業の到達目標とします。		
授業の概要	ニニアン・スマート（阿部美哉訳）『世界の諸宗教1—秩序と伝統』（教文館、1999年）をテキストとして、その内容を一章ごとに、DVDやパワーポイントを用いながら講義・解説をしていきます。		
授業計画	第1回	イントロダクションー比較宗教学について	
	第2回	原始宗教	
	第3回	南アジアの宗教	
	第4回	中国の宗教	
	第5回	日本の宗教	
	第6回	東南アジアの宗教	
	第7回	太平洋地域の宗教	
	第8回	南北アメリカの宗教	
	第9回	古代近東の宗教	
	第10回	ペルシャと中央アジアの宗教	
	第11回	ギリシャ・ローマの宗教世界	
	第12回	古代・中世のキリスト教とユダヤ教	
	第13回	古代・中世のイスラーム	
	第14回	古代アフリカの諸宗教	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業毎に紹介する参考文献や配付資料をもとに各自授業内容を予習復習してください。		
テキスト	テキストとして、ニニアン・スマート（阿部美哉訳）『世界の諸宗教1—秩序と伝統』（教文館、1999年）を用いますが、高価なため、テキスト購入は求めません。講義レジメと資料を毎回配布します。		
参考文献	参考文献は授業毎に指示します。		
評価方法	リアクションペーパー:40% 期末レポート:60%		

比較宗教論B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
近現代の世界諸宗教		豊川 慎（とよかわ しん）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代世界における喫緊の問題の多くには宗教が深く関連しています。宗教原理主義（ファンダメンタリズム）や宗教的過激思想に基づくテロリズムなどは今日のグローバル社会の深刻な問題の一つです。今日の宗教的ファンダメンタリズムの問題を念頭に置きながら、世界の諸宗教がいかに共存・共生し得るのか、その道筋を探求し、地域ごとの現代における諸宗教の実状を深く理解することを授業の到達目標とします。		
授業の概要	前期の「比較宗教論A」においては、ニニアン・スマート『世界の諸宗教1』を用いて、地域ごとの宗教諸伝統を俯瞰しますが、本講義においては、スマート（石井研士訳）『世界の諸宗教II—変容と共生』（教文館、2002年）をテキストとして、その内容を一章ごとに、DVDやパワーポイントを用いながら講義・解説を行います。		
授業 計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	ヨーロッパの爆発とキリスト教の改革(1)—プロテスタントの宗教改革	
	第3回	ヨーロッパの爆発とキリスト教の改革(2)—ローマ・カトリックの対抗改革	
	第4回	北アメリカ	
	第5回	南アジアと植民地侵略への抵抗	
	第6回	現代の中国と朝鮮半島	
	第7回	現代の東南アジア	
	第8回	現代の日本	
	第9回	闇を抜けるイスラーム	
	第10回	太平洋における植民地の影響	
	第11回	東欧とソ連	
	第12回	現代世界におけるアフリカ	
	第13回	ラテン・アメリカとカリブ海地域	
	第14回	20世紀の回顧	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業毎に紹介する参考文献や配布資料をもとに各自授業内容を予習復習して宇田歳。		
テキスト	テキストとして、ニニアン・スマート（石井研士訳）『世界の諸宗教II—変容と共生』（教文館、2002年）を用いますが、高価なため、テキスト購入は求めません。講義レジメと資料を毎回配布します。		
参考文献	参考文献は授業毎に指示します。		
評価方法	リアクションペーパー:40% 期末レポート:60%		

比較思想 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
比較思想の諸問題		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	比較研究のためには比較対象のそれぞれの思想への多角的視点が前提となる。比較思想の具体例を論じながら、比較研究の歴史、「比較」の方法論を論理的に明らかにする。思想の表れとしての文学、芸術、建築、法等、更に概念を中心とした東洋と西洋の比較、文化の精華としての思想を考察する。		
授業の概要	講義形式で行うが、ユダヤ思想とキリスト教思想、古代ギリシア思想とローマ思想、中国思想の日本の思想への影響、東西の思想研究、新しい比較研究の可能性を論じる。時代的には古代、中世、ルネサンス、を扱う。それぞれの比較方法が違うので、注意深くしかし簡潔に論じていく。		
授業計画	第1回	ロゼッタ石—文字を中心とした比較	
	第2回	ユダヤ思想とギリシア哲学—歴史の記述と西欧の学問	
	第3回	墳墓の構造—死の概念、エジプト、ギリシア、古代中国	
	第4回	「創世記」と『古事記』—創造概念の相違	
	第5回	古代ギリシアから古代ローマへ—翻訳の問題、エトルスクの文化	
	第6回	ギリシア神話と海洋文明—神像とクノッソスの迷宮	
	第7回	古代ローマの演説—韻文と散文、『ジュリアス・シーザー』を題材に	
	第8回	典礼に具現化した思想—キリスト教思想と儒教	
	第9回	モーゼ[神との対面]の解釈の相違—フィロンとニュッサのグレゴリウス	
	第10回	大学の問題—アペラールと孔子の『論語・大学』	
	第11回	トマスとアウグスティヌス—永遠と時間	
	第12回	垂直的超越と水平的超越—トマス・アクイナス	
	第13回	無の問題—エックハルトと禅	
	第14回	レオナルド—『絵の本』 絵画科学	
	第15回	比較論の総括と近世・近代・現代への展望	
準備学習 (予習・復習等)	事前にプリントを配布したり、次回の課題を紹介するので、それを予め読み調べをすること。更に授業後に「まとめ」を作成すること。時に提出を課することがある。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	時宜に応じて参考図書を紹介し、そのプリントを配ることもある。		
評価方法	試験:70% コミュニケーション力:20% レポート:10%		

比較思想B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
思想の比較研究、その現実		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標及びテーマ	思想の比較研究は様々な成果を上げている。その中から概念を中心として様々な国での問題を論じていきたい。そして現在、現実の問題を論じる時に国際的な視野そしてグローバリゼーションの立場から考察しなくてはならない。現代における新しい比較研究の可能性を探る。これらの視野を考えながら、全体としては比較の方法論、具体的問題を論じていく。		
授業の概要	殆どは講義形式で行うが、問題によっては対話形式を導入する。対話への参加が不可欠である。テーマとしては言語の問題、芸術表現の問題そして宗教の比較、自然観、死生観、社会の問題、最終的にはコスモポリタンの考えにまで及ぶ。		
授業計画	第1回	サンスクリットの発見—比較研究の始まり	
	第2回	言語学—イエラムスレーブ—アルティキュレーションの問題	
	第3回	自由意志と奴隷意志—エラスムスとルター	
	第4回	法の原理—ホブズとルソー	
	第5回	理性と経験—デカルトとロック	
	第6回	パスカル—幾何学的精神と繊細の精神	
	第7回	理性と想像力—デカルトとヴィーコ	
	第8回	フランス革命前夜—トックヴィルの見たアメリカ	
	第9回	イスラム思想—井筒俊彦の研究成果	
	第10回	道の思想—老荘思想と「旅する人間」、松尾芭蕉の自然との一致、	
	第11回	間の問題—西洋建築と日本の茶室	
	第12回	フェュロンの『死者の対話』—ソクラテスと孔子の対話	
	第13回	カントの『自然地理学』和辻哲郎の鎖国論	
	第14回	カントの『永遠平和のために』—コスモポリタンの思想	
	第15回	死の問題—臓器移植と日本人の死生観	
準備学習 (予習・復習等)	事前にテキストのプリントを配布し、次回の課題を出すのでテキストを読んだりして予習をすること。授業後は必ず「まとめ」を作成すること。時にその提出を課する。		
テキスト	プリントを配布する。		
参考文献	必要に応じて紹介し、プリントを配る。また何度かレポート課題として読むことを要求する。		
評価方法	試験:60% レポート:20% コミュニケーション力:20%		

比較文学A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
比較文学a		井原 眞理子 (いはら まりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>この授業では、英米の文学作品と日本の文学作品を取り上げ、それぞれの特徴を紹介しながら比較する。私たち日本人にとり、英米文学を読むという行為はどのようなことなのか。また英語を母国語とする人々にとって日本文学を読むとはどのようなことなのか。具体的に作品を取り上げ比較して、日頃学生諸君があまり親しむことの少ないといわれる日英の文学作品について考察し、それぞれの文化についての理解を深めることを目標とする。</p> <p>そのためには、短い作品を注意深く読み、理解し、自分の考えを他の人に分かりやすく説明する能力が必要である。文章を書いたり、意見を述べたり、発表をしたりと積極的に授業に参加ができるようになることも目標である。</p>		
授業の概要	<p>前期は俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)、川柳とリメリック、和歌と五行詩、和歌と抒情詩などの比較的短い作品を、それぞれの主題、時代、社会文化的背景、修辭などについて紹介しながら、比較してゆく。</p> <p>まずは、作品をじっくりと読み、各自の作品に対する解釈を書いたり、発表したりする。次に比較対照する作品をじっくりと読み、各自の解釈、理解をまとめる。最後に二者を比較して、それぞれの共通点、相違点を割り出してゆく。授業中は、ペアワーク、グループワークを取り入れ、学生同士が互いの意見を述べたり、論じたりする機会を多く設ける。</p>		
授業計画	第1回	授業紹介。(講義概要、日程、評価方法等の説明)	
	第2回	俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)－1 授業前半：俳句とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第3回	俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)－2 授業前半：ビートジェネレーションとは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第4回	俳句とアメリカ現代詩(ビート・ジェネレーション)－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第5回	川柳とリメリック－1 授業前半：川柳とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第6回	川柳とリメリック－2 授業前半：リメリックとは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第7回	川柳とリメリック－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第8回	和歌と五行詩－1 授業前半：和歌とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第9回	和歌と五行詩－2 授業前半：五行詩とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第10回	和歌と五行詩－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第11回	和歌と抒情詩－1 和歌とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第12回	和歌と抒情詩－2 抒情詩とは何か 授業後半：作品鑑賞。	
	第13回	和歌と抒情詩－3 授業前半：両者比較考察 授業後半：討論	
	第14回	討論とまとめ－1、学期末小論文について	
	第15回	討論とまとめ－2、学期末小論文提出。	
準備学習 (予習・復習等)	授業で学んだ内容に関連した考察課題を課します。翌週はそれに基づいた授業を行い、内理解を深めてゆきます。		
テキスト	授業開始時に指示する。		
参考文献	辞書必携。(電子辞書も可)		
評価方法	平常点:50% 学期末小論文:50%		

比較文学B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
比較文学 b		井原 真理子 (いはら まりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>この授業では、英米の文学作品と日本の文学作品を取り上げ、それぞれの特徴を紹介しながら比較する。私たち日本人にとり、英米文学を読むという行為はどのようなことなのか。また英語を母国語とする人々にとって日本文学を読むとはどのようなことなのか。具体的に作品を取り上げ比較することにより、日頃学生諸君があまり親しむことの少ないといわれる日英の文学作品について考察し、それぞれの文化についての理解を深めることを目標とする。</p> <p>そのためには、作品を注意深く読み、理解して、自分の考えをほかの人に分かりやすく説明する能力が必要である。文章を書いたり、意見を述べたり、発表をしたりと積極的な参加ができるようになることも目標とする。</p>		
授業の概要	<p>後期は、小説や戯曲などの作品の少し長めの抜粋を取り上げ、作品の訳語を原典と比較してゆく。一つ一つの言葉について辞書の定義に始まり、背景となる文化、社会などを理解できるようにする。作品の筋立てを成立させている重要語について、比較をすることにより考え、全体としてどのような翻訳作品となっているのかを論じる。</p> <p>まずは作品をじっくり読み、各自の作品に対する解釈を書いたり、発表したりする。次に比較対照する翻訳作品を読み、各自の解釈、理解をまとめる。最後に二者を比較して、それぞれの共通点、相違点を割り出してゆく。授業中は、ペアワーク、グループワークを取り入れ、学生同士が互いの意見を述べたり、論じたりする機会を多く設ける。</p>		
授業計画	第1回	講義日程、内容の紹介。(日程は、進捗状況等により変更する場合がある) 「風が吹く」(K. Mansfield) 講読、和訳比較。	
	第2回	『枕草子』(清少納言) 講読 英訳比較。	
	第3回	「風が吹く」『枕草子』比較、討論。	
	第4回	『赤毛のアン』(Lucy Maud Montgomery) 講読 和訳比較。	
	第5回	『枕草子』(清少納言) 講読 英訳比較。	
	第6回	『赤毛のアン』『枕草子』作者紹介。比較、討論。	
	第7回	『若草物語』(Louisa May Alcott) 講読 和訳比較。	
	第8回	「虫愛ずる姫君」(堤中納言物語) 講読 英訳比較。	
	第9回	『若草物語』『虫愛ずる姫君』作者紹介。比較、討論。	
	第10回	『エマ』(Jane Austen) 講読 和訳比較。	
	第11回	『源氏物語』(紫式部) 講読 英訳比較。	
	第12回	『エマ』『源氏物語』作者紹介。比較、討論。 発表、学期末小論文について。	
	第13回	‘The Demon Lover’ (Elizabeth Bowen) 講読。	
	第14回	『葵上』(世阿弥?) 講読。 ‘The Demon Lover’ 作者紹介。比較。 発表。	
	第15回	発表、討論及びまとめ。学期末小論文提出。	
準備学習 (予習・復習等)	授業で学んだ内容に関連した考察課題を課す。翌週はそれに基づいた授業を行い、内容を深める。		
テキスト	授業開始時に指示する。		
参考文献	辞書。(電子辞書も可)		
評価方法	平常点:50% 学期末小論文:50%		

社会学特講 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会の構造と現代人の生き方について社会学の観点から考察する		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標及びテーマ	私たちの生きている現代社会とはいかなる社会なのかを、様々な見方を検討することによって理解する。また、近年目立ってきた、生殖医療や臓器移植、尊厳死など生と死をめぐる新しい問題について検討することによって現代人の生き方についても考える。現代社会および現代人について、多様な見方を学ぶことにより、学生は現代社会に対する主体的批判的な見方を学ぶことができる。		
授業の概要	現代社会は、産業主義と民主主義を主導力として、近代社会の中から生まれてきた。いつから現代社会とするかについては、完全な合意はないものの、1980年代以降、冷戦体制の終わりとグローバリゼーションによって、新しい時代の到来が主張されている。この授業では、現代社会に対する様々な見方を取り上げて検討する。さらに、現代社会の生をめぐる諸問題についても検討する。参加者の人数によっては、講義形式ではなく、演習形式に切り替えて授業を行う。		
授業計画	第1回	近代社会から現代社会へ	
	第2回	高度資本主義社会	
	第3回	高度産業社会	
	第4回	都市社会	
	第5回	大衆社会	
	第6回	情報化社会	
	第7回	消費社会	
	第8回	格差社会	
	第9回	個人化、無縁社会	
	第10回	リスク社会	
	第11回	グローバル化社会	
	第12回	現代社会と生（1）生殖医療	
	第13回	現代社会と生（2）脳死と臓器移植	
	第14回	現代社会と生（3）ホスピスと尊厳死	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	現代社会の特徴について関心をもって調べることが期待される。演習形式になった場合は、関心あるテーマを分担して調べ、その結果を要約してレジュメを作成し、発表することが要求される。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	井上俊・伊藤公雄編『社会の構造と変動（社会学リーディングス2）』（世界思想社）A・ギデンズ（松尾精文・小幡正敏訳）『近代とはいかなる時代か？』（而立書房）見田宗介『現代社会の理論』（岩波書店）		
評価方法	授業参加度:50% 発表:20% 最終レポート:30%		

社会学特講B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
コミュニケーションとメディアの社会学		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちはケータイ、スマホ、パソコン、インターネットなどを利用して毎日大量の情報を送受信して情報化社会の中で生活している。この授業では、コミュニケーションやメディアの基本を踏まえてから、情報化社会の中核であるマスコミュニケーションの特徴と影響について、報道、ニュースを中心に検討する。この授業では、マスメディアの報道について批判的に検討することによって、現代人にとって生きるための必須アイテムと考えられる情報リテラシーを身につけることができる。		
授業の概要	まず、コミュニケーション、メディア、記号と意味、といったメディア論の基本について検討し、ついでマスコミュニケーションの機能を、報道とニュースを中心に検討する。とくにマスコミ報道の影響とマスコミ報道による人権侵害の問題を取り上げて検討する予定である。授業は、講義形式で行うが、参加人数によっては演習に切り替えて、参加者のレポートを中心に授業を進める。		
授業 計画	第1回	コミュニケーション、メディア、記号、情報	
	第2回	メディアの発達史	
	第3回	パーソナルコミュニケーションとマスコミュニケーション	
	第4回	マスコミュニケーション制度	
	第5回	日本のマスコミュニケーションの特徴	
	第6回	ニュースと報道（1）国際報道	
	第7回	ニュースと報道（2）災害報道	
	第8回	ニュースと報道（3）医療・健康報道	
	第9回	マスコミ報道の影響（1）限定効果が強力効果か	
	第10回	マスコミ報道の影響（2）宣伝と世論操作	
	第11回	ニュースと報道（4）犯罪報道	
	第12回	マスコミ報道と人権侵害（1）名誉棄損	
	第13回	マスコミ報道と人権侵害（2）プライバシー侵害	
	第14回	マスコミ報道と人権侵害（3）被害からの救済	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	参加者は、コミュニケーション、メディア、情報化社会などに興味をもつことが期待される。演習形式になった場合は、テーマを選択して調べ、その結果を要約したレジュメを作って、発表することが要求される。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	ジェイムズ・グリック（楡井浩一訳）『インフォメーション-情報技術の人類史』（新潮社）梓澤和幸『報道被害』（岩波新書）読売新聞社編『「人権」報道』（中央公論新社）松村光晃・中村秀一編『名誉毀損・プライバシー』（ぎょうせい）		
評価方法	授業参加度:50% 発表:20% 最終レポート:30%		

社会学理論 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
社会学理論の知識を理解する		徳久 美生子（とくひさ みおこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、過去から現在へと至る社会学理論の基礎知識を身につけることで、「社会」という曖昧で捉えどころのないものについて考える思考力の取得を目指します。		
授業の概要	はじめに社会学の歴史を概説します。その上で、過去から現在へと至る社会学理論を、原典を読み解きながら理解していきます。テキストを配布し、まず疑問に思ったところを取り出していきます。社会学理論を理解するために大切なのは、何が分からないかを明らかにすることなのです。分からないことを明らかにし、そこからテキストが何を言おうとしているのかをゆっくり理解していきます。テキストを読み解いていくなかで、社会学理論の基礎知識を身につけ、「社会」について考えるし思考力を養っていきます。		
授業 計画	第1回	オリエンテーション：社会学と社会学理論	
	第2回	社会学を知る 1：西洋近代社会の成立と社会学	
	第3回	社会学を知る 2：西洋近代社会の展開と社会学	
	第4回	社会学を知る 3：西洋近代社会の凋落と社会学	
	第5回	社会学を知る 4：日本の近代化と社会学	
	第6回	社会学理論を学ぶ 1：現代社会学第一世代の社会学 1	
	第7回	社会学理論を学ぶ 2：現代社会学第一世代の社会学 2	
	第8回	社会学理論を学ぶ 3：シカゴ学派の社会学	
	第9回	社会学理論を学ぶ 4：主観と客観の対立	
	第10回	社会学理論を学ぶ 5：社会学理論と構造主義	
	第11回	社会学理論を学ぶ 6：権力論	
	第12回	社会学理論を学ぶ 7：大衆社会論	
	第13回	社会学理論を学ぶ 8：社会システム論	
	第14回	社会学理論を学ぶ 9：グローバル化論	
	第15回	まとめのディスカッション：社会学理論の現在・未来	
準備学習 (予習・復習等)	社会学理論を学ぶ授業では、社会学理論のテキストを一緒に読み解いていきます。個人発表や分担はありませんが、事前にテキストのコピーを配布しますので、読んでから授業に参加して下さい。		
テキスト	授業の中で紹介します。必要に応じて事前にコピーを配布します。		
参考文献	授業の中で紹介します。		
評価方法	コメントペーパー：20% 学期末レポート：80%		

社会学理論B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
自分と「社会」とのつながりを論理的に考える		徳久 美生子（とくひさ みおこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	私たちは、今、どのような「社会」に生きているのでしょうか。この授業では、曖昧化し多様化している現在「社会」のあり方を社会学理論がどのように分析してきたのかを学ぶことで、自分たちが生きる「社会」の現在を見通す眼力と、見通したものについて深く考える思考力の取得を目指します。		
授業の概要	はじめに、それぞれが日常に感じた疑問、納得出来ないことを洗い出し、議論します。その上で、社会学理論を参照し、自分たちが感じた疑問、納得出来ないことが「社会」とどのような関係をもっているのかを考えていきます。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：個人・関係性・「社会」	
	第2回	ディスカッション1：日常の疑問の洗い出し	
	第3回	ディスカッション2：日常の疑問に関するブレインストーミング	
	第4回	社会現象と社会学理論1：個別テーマに関する検討	
	第5回	社会現象と社会学理論2：個別テーマに関する検討	
	第6回	社会現象と社会学理論3：個別テーマに関する検討	
	第7回	社会問題と社会学理論1：個別テーマに関する検討	
	第8回	社会問題と社会学理論2：個別テーマに関する検討	
	第9回	社会問題と社会学理論3：個別テーマに関する検討	
	第10回	社会問題と社会学理論4：個別テーマに関する検討	
	第11回	社会問題と社会学理論5：個別テーマに関する検討	
	第12回	「社会」の現在と個人1：自分と「社会」とのつながりと断絶を考える	
	第13回	「社会」の現在と個人2：自分と「社会」とのつながりと断絶を考える	
	第14回	「社会」の現在と個人3：自分と「社会」とのつながりと断絶を考える	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業でとりあげる社会現象、社会問題は、履修生の興味・関心のあるものを選んでいきます。自分が関心のある社会問題、社会現象、日常生活を送る中で疑問に思ったことを考えてきて下さい。		
テキスト	授業の中で紹介します。必要に応じて事前にコピーを配布します。		
参考文献	授業の中で紹介します。		
評価方法	個人発表:20% 学期末レポート:80%		

社会調査法演習 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
女性が働くことの意味を探る I		三具 淳子 (さんぐ じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「女性が働くことの意味を探る II」と合わせて、社会調査の一連の作業を行う。この科目では、社会調査を自ら企画し実施するまでのプロセスを学び、必要な作業スキルを身に着ける。女性を対象として、働くことの意味づけを質的な調査から明らかにするための準備作業となる。		
授業の概要	演習として「女性が働くことの意味を探る」をテーマに社会調査を行う。調査を企画・設計するにあたって、実際に資料を収集し整理する。履修者同士の意見交換を行い調査の方向性を決めて作業を進めていくため、主体的取り組みが重視される。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	なぜ、いま、女性が働くことを考えるのか	
	第3回	先行研究講読(1) ライフコース	
	第4回	先行研究講読(2) 女性のキャリア	
	第5回	先行研究講読(3) ワーク・ライフ・バランス	
	第6回	既存調査データ、官庁統計等の収集と検討(1)	
	第7回	既存調査データ、官庁統計等の収集と検討(2)	
	第8回	調査の方向性の検討 調査企画のブレインストーミング	
	第9回	リサーチ・クエスションの明確化	
	第10回	調査対象者の検討	
	第11回	先行研究講読(4) 質的調査法	
	第12回	調査項目の選定とディスカッション	
	第13回	インタビュー・ガイド作成・検討	
	第14回	実査	
	第15回	実査	
準備学習 (予習・復習等)	事前に提示する参考文献を読んで授業に臨む。		
テキスト	使用しない。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加態度:50% 課題:50%		

社会調査法演習B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
女性が働くことの意味を探るⅡ		三具 淳子（さんぐ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「女性が働くことの意味を探るⅠ」と合わせて、社会調査の一連の作業を行う。この科目では、収集したデータを整理・分析し、報告書を作成するまでのプロセスを学び、必要な作業スキルを習得する。社会調査の難しさと同時に、面白さにも触れる。		
授業の概要	演習として「女性が働くことの意味を探る」をテーマに社会調査を行う。調査や調査データの整理・分析には多くの時間を要するので、授業時間以外にも作業を行う場合がある。		
授業計画	第1回	調査データの整理・分析・報告書作成の進め方	
	第2回	トランスクリプト作成(1)	
	第3回	トランスクリプト作成(2)	
	第4回	トランスクリプト作成(3)	
	第5回	インタビュー結果分析の報告と質疑応答(1)	
	第6回	インタビュー結果分析の報告と質疑応答(2)	
	第7回	分析結果の検討(1) 結果の集約方法	
	第8回	分析結果の検討(2) 既存研究からの知見を踏まえた批判的検討	
	第9回	分析結果の検討と示し方	
	第10回	履修者各人の調査報告レポートの執筆上の注意	
	第11回	調査報告書の構成案	
	第12回	調査報告書の作成(1) 調査概要の書き方	
	第13回	調査報告書の作成(2) ケース・スタディの書き方	
	第14回	調査報告書の作成(3) 分析・考察の書き方	
	第15回	調査報告書の完成 反省会	
準備学習 (予習・復習等)	事前に提示する参考文献を読んで授業に臨む。		
テキスト	使用しない。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加態度:50% 課題:50%		

社会学研究法 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
社会調査の方法を学ぶ I		三具 淳子 (さんぐ じゅんこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	この科目では、社会学的探求に不可欠な社会調査に関する基礎的事項を学ぶ。具体的には、社会調査史や調査倫理をふまえながら、社会調査の意義、調査方法の種類等を理解する。さまざまな官庁統計、学術調査などの実例に触れて調査データを読み解く力をつけるとともに、社会調査実施の手順および各ステップにおける作業を把握する。		
授業の概要	基本的に講義科目であるが、既存の調査研究や調査データを入手するスキルを身に着けるために図書館やインターネットを利用した作業も行う。		
授業計画	第1回	社会調査とは何か	
	第2回	社会調査の歴史	
	第3回	国勢調査や官庁統計、学術統計の意義を学ぶ	
	第4回	調査方法の種類と調査倫理	
	第5回	社会調査実施の諸段階	
	第6回	調査の企画(1) 調査研究の着想・先行研究のフォローと課題の鮮明化	
	第7回	調査の企画(2) 既存の統計データの分析・過去の調査のフォロー	
	第8回	調査の設計(1) 調査方法の選定	
	第9回	調査の設計(2) 仮説構成	
	第10回	調査の設計(3) 質問票の作り方	
	第11回	実査(1) サンプルング	
	第12回	実査(2) 郵送調査の流れ	
	第13回	データ化	
	第14回	分析・公表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	社会への関心がなければ、矛盾や問題に気付くことはできない。日ごろから、新聞等に目をとおす習慣を身に着けよう。		
テキスト	『新・社会調査へのアプローチ』 ミネルヴァ書房		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	コメントカード、課題:20% 期末レポート:80%		

社会学研究法B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
社会調査の方法を学ぶⅡ		三具 淳子（さんぐ じゅんこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	社会のある問題に関心をもち、それを研究課題として自ら課題や仮説を設定し探求しようとする際、その目的に適合する調査方法を選択して調査を行い、収集したデータを整理・分析する必要がある。この科目では、そのために必要な基本的知識とスキルをマスターする。		
授業の概要	基本的に講義科目であるが、調査票作成、データ整理などの作業も授業内で行う。		
授業計画	第1回	調査の目的を達成するには	
	第2回	調査の構想と調査方法	
	第3回	仮説の設定	
	第4回	調査の設計と実施準備	
	第5回	調査対象の決定と標本抽出	
	第6回	質問票の作り方(1)質問文の作り方	
	第7回	質問票の作り方(2)選択肢の作り方・質問票の構成	
	第8回	調査の実施方法	
	第9回	量的調査データの整理(1)データ整理の流れ	
	第10回	量的調査データの整理(2)エディティング・コーディング	
	第11回	量的調査データの分析	
	第12回	インタビュー調査の企画と質問項目の明確化	
	第13回	質的調査データの整理	
	第14回	質的調査データの分析	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	社会調査に基づいたすぐれた作品を読むことも重要である。授業で取り上げた文献等をじっくり読んで社会調査の醍醐味を味わってほしい。		
テキスト	『新・社会調査へのアプローチ』 ミネルヴァ書房		
参考文献	授業内で適宜紹介する		
評価方法	コメントカード、課題:20% 期末レポート:80%		

社会史（米国）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
アメリカ黒人の歴史から「人種」を考える		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	植民地時代から、南北戦争や公民権運動を経て、現代にいたるまでのアメリカ黒人の歴史の大まかな流れを理解する。そのほかの人種／エスニック集団の経験も織り交ぜながら、「人種」は自明でも不変でもなく、特定の社会状況によって作り出され、作り変えられる社会構築物であることを理解する。		
授業の概要	テキストを輪読しながら、関連する一次資料を読み、分析する。プレゼンテーションやディスカッションへの参加を通じて、積極的に授業に貢献することが求められる。		
授業計画	第1回	はじめに	
	第2回	植民地時代の奴隷制度	
	第3回	独立革命	
	第4回	南部の綿花帝国	
	第5回	奴隷制廃止運動	
	第6回	南北戦争	
	第7回	南部再建からカラー・ラインへ	
	第8回	近代黒人解放運動	
	第9回	ハーレム・ルネサンス	
	第10回	大恐慌と第二次世界大戦	
	第11回	公民権闘争の開幕	
	第12回	黒人革命	
	第13回	白人保守革命の時代	
	第14回	多様化する黒人社会	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	テキストを予め読んでから講義に参加する。英語の史料を使用するので、わからない単語など辞書をひいて各自で復習すること。		
テキスト	本田創造『アメリカ黒人の歴史 新版』（岩波新書）、上杉忍『アメリカ黒人の歴史：奴隷貿易からオバマ大統領まで』（中公新書)		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% 期末試験:40%		

社会史（米国）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
セクシュアリティから見たアメリカ社会		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	植民地期から現代にいたるまでのアメリカ合衆国のセクシュアリティの歴史を扱う。性をめぐる考え方が、それぞれの歴史的状況においてどのように変化してきたのかを理解する。また、セクシュアリティの統制と、人種・階級・ジェンダーのヒエラルキー維持の結びつきを学ぶ。		
授業の概要	論文（英語、日本語）の講読を踏まえて、関連する一次資料を分析する。プレゼンテーションやディスカッションへの参加を通じて、授業に積極的に貢献することが求められる。		
授業計画	第1回	はじめに：社会構築物としてのセクシュアリティ	
	第2回	「新世界」における異なるセクシュアリティの出会い	
	第3回	植民地時代の性の統制	
	第4回	奴隷制下のセクシュアリティ	
	第5回	19世紀における同性間の愛情と親密性	
	第6回	フリー・ラブと検閲	
	第7回	異人種間結婚禁止法	
	第8回	デート文化の登場	
	第9回	再生産をめぐる政治	
	第10回	「異性愛」の創出	
	第11回	冷戦とセクシュアリティ	
	第12回	性革命	
	第13回	バックラッシュ	
	第14回	同性婚	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	課題テキストを予め読んで講義に参加すること。論文・史料ともに英語で書かれたものを使用することもあるため、わからない単語を辞書で引いて確認するなど、予習・復習を各自で行うこと。		
テキスト	授業中に指示する。		
参考文献	Kathy Peiss, ed., <i>Major Problems in the History of American Sexuality</i> (Houghton Mifflin, 2002); Elizabeth Reis, ed., <i>American Sexual Histories</i> (Wiley-Blackwell, 2012)		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% 期末試験:40%		

社会史（英国）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
近代イギリス女性史を学ぶ		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ジェンダーという切り口から近代イギリスの社会史をとらえ直す意義を理解する。</p> <p>○近代イギリスの女性たちがどのような生き方を求められ、どのようにして活動の幅を広げていったのかを具体的に理解する。</p> <p>○プレゼンテーションや自由な討論を通じて、アカデミックな思考力を鍛えるとともに豊かなコミュニケーションの力を身につける。</p>		
授業の概要	<p>18世紀から19世紀ごろまでのイギリス社会史を、女性史・ジェンダー史の側面から検討する。まず、女性史・ジェンダー史という比較的新しい視点からの歴史叙述の意義とその方法論について概説する。その上で、フェミニズム論の誕生、近代家族の形成、教育制度の進展、政治参加への道のりといったトピックスをとおして、近代イギリス女性史にたいする理解を深める。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	イギリス近代史概説	
	第3回	ジェンダーという視点からみたイギリス近代史	
	第4回	フェミニズム論の形成（1）メアリ・ウルストンクラフト	
	第5回	フェミニズム論の形成（2）J・S・ミルとハリエット・テイラー	
	第6回	『プライドと偏見』：19世紀初頭のイギリスと女性	
	第7回	家族と教育（1）ヴィクトリア時代の家族と女性	
	第8回	家族と教育（2）ガヴァネスとしての女性	
	第9回	家族と教育（3）女性の中等教育	
	第10回	『秘密の花園』：19世紀後半のイギリスと女性	
	第11回	家族と教育（4）女性の高等教育	
	第12回	女性と政治（1）チャーティスト運動と女性	
	第13回	女性と政治（2）ヴィクトリア女王	
	第14回	女性と政治（3）女性参政権運動の展開	
	第15回	『ヴィクトリア女王：世紀の愛』：若きヴィクトリア女王	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○全員が予習してくることを前提として、テキストの輪読を行う。レポーターによる発表やディスカッションなど、学生の積極的な参加が求められるので、事前にテキストの該当部分を熟読して、内容をよく理解しておくこと。</p> <p>○レポーターになった回では、各自が適宜、追加の説明や語句の解説を加えながら内容を要約し、論点を提示した上で、パワーポイントによるプレゼンテーションを行う。かなりの事前学習が求められるので、計画的に準備を進めておくこと。</p>		
テキスト	河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』（青木書店、2006年）		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% レポート:40%		

社会史（英国）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代イギリス女性史を学ぶ		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ジェンダーという切り口から現代イギリスの社会史をとらえ直す意義を理解する。</p> <p>○現代イギリスの女性たちがどのような生き方を求められ、どのようにして活動の幅を広げていったのかを具体的に理解する。</p> <p>○プレゼンテーションや自由な討論を通じて、アカデミックな思考力を鍛えるとともに豊かなコミュニケーションの力を身につける。</p>		
授業の概要	<p>19世紀末から20世紀半ばごろまでのイギリス社会史を、女性史・ジェンダー史の側面から検討する。まず、女性史・ジェンダー史という比較的新しい視点からの歴史叙述の意義とその方法論について概説する。その上で、女性労働の変遷、慈善・福祉への関わり、帝国支配との関係といったトピックスをとおして、現代イギリス女性史にたいする理解を深める。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	イギリス現代史概説	
	第3回	ジェンダーという視点からみたイギリス現代史	
	第4回	女性と労働（1）既婚女性の労働	
	第5回	女性と労働（2）工場法の歴史とジェンダー	
	第6回	慈善と社会福祉（1）チャリティと女性	
	第7回	慈善と社会福祉（2）家族・中間団体・国家	
	第8回	慈善と社会福祉（3）オクタヴィア・ヒル	
	第9回	『カレンダー・ガールズ』：女性と慈善	
	第10回	大英帝国と女性（1）女性の帝国経験	
	第11回	大英帝国と女性（2）戦争と看護職の改革	
	第12回	『スカートの翼ひろげて』戦争と女性	
	第13回	大英帝国と女性（3）海を渡る女教師	
	第14回	第二次世界大戦・現代のイギリス女性	
	第15回	女性史からジェンダー史へ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○全員が予習してくることを前提として、テキストの輪読を行う。レポーターによる発表やディスカッションなど、学生の積極的な参加が求められるので、事前にテキストの該当部分を熟読して、内容をよく理解しておくこと。</p> <p>○レポーターになった回では、各自が適宜、追加の説明や語句の解説を加えながら内容を要約し、論点を提示した上で、パワーポイントによるプレゼンテーションを行う。かなりの事前学習が求められるので、計画的に準備を進めておくこと。</p>		
テキスト	河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』（青木書店、2006年）		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加姿勢:30% プレゼンテーション:30% レポート:40%		

情報社会論 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
情報と社会		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	情報化によって社会がどのように進展してきているのかを理解し、大量の情報に振り回されずに建設的に情報を活用できる力を身につけることを目的としている。		
授業の概要	情報及び情報化とは何かを押さえ、インターネットにおける新しいコミュニケーションの方法の特徴について知り、自己の情報行動について考える。また、報道や図書館、教育、生活の領域における情報化について具体的に検討し著作権や個人情報保護について考える。最後に国の情報政策に触れてまとめる。		
授業計画	第1回	情報化とは何か	
	第2回	産業社会から情報社会へ	
	第3回	情報社会の進展	
	第4回	メディアと情報行動	
	第5回	インターネット社会（1）インターネットコミュニケーション	
	第6回	インターネット社会（2）ビッグデータの活用	
	第7回	インターネット社会（3）インターネットと政治	
	第8回	情報と報道（1）マスメディアと報道	
	第9回	情報と報道（2）メディアとジェンダー	
	第10回	文化と情報化	
	第11回	教育と情報化	
	第12回	生活と情報化（1）医療・福祉等	
	第13回	生活と情報化（2）ビックデータ時代のプライバシー	
	第14回	著作権，個人情報保護	
	第15回	まとめ：我が国の情報関連政策	
準備学習 (予習・復習等)	情報をインプットする，情報をアウトプットする，ことを常に意識して授業に参加してもらいたい。事前に参考文献を紹介するので，その個所をよんでくること。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	課題:70% 授業への取り組み:30%		

家族社会学特講 A		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
ライフコースと家族		原 葉子（はら ようこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>(1) 現代のライフコースの変容について、その社会的背景を含めて理解する。</p> <p>(2) 家族を考えるための視座を習得し、具体的なテーマについて自ら議論を組み立てることができるようになる。</p>		
授業の概要	<p>家族は、その成員（メンバー）が年を重ねていくに従って、直面する課題が変化する。この授業では、現代社会におけるライフコースの変容を考察するとともに、ライフコース中盤以降に位置づく家族成員が抱える問題、とくに女性の役割や親子関係を中心的なテーマとして考えていく。授業形式は講義が中心だが、できるだけグループディスカッションを取り入れる。また、リアクションペーパーへの記入を通じて、考察力を養っていく。</p>		
授業 計画	第1回	個人化する家族	
	第2回	家族と近代	
	第3回	ライフコースの変容（1）配偶者選択	
	第4回	ライフコースの変容（2）少子化	
	第5回	ライフコースの変容（3）高齢化	
	第6回	女性と主婦役割	
	第7回	専業主婦の現在	
	第8回	既婚女性と仕事	
	第9回	家事労働の配分	
	第10回	成人子との関係	
	第11回	親子関係の葛藤	
	第12回	高齢期の家族関係	
	第13回	家族のオルタナティブ	
	第14回	家族を再考する	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>テーマへの理解を深めるため、参考文献の予習や、課題の提出を求めています。詳細は授業のなかで説明します。また普段から新聞等に目を通し、家族をめぐる問題が社会でどのように議論されているのか、知識を得ておきましょう。</p>		
テキスト	なし。毎回プリントを配布する。		
参考文献	講義のなかで適宜紹介する。		
評価方法	平常点（課題など）:50% テスト:50%		

女性学 A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
ジェンダー規範の形成と変容		藤田 和美 (ふじた かずみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・近代以降の女性解放運動から現代のジェンダー論・女性学まで、学問研究の理論的枠組みや方法論など学際的な研究成果を学び、ジェンダー研究の概念を理解する。 ・ジェンダー平等に向けた諸外国の取り組みと日本の現状を学び、現代社会が直面している課題を理解する。 		
授業の概要	全体を①ジェンダー研究②ジェンダー平等に向けた諸外国の取り組みに分ける。①では、ジェンダー研究の歴史的経緯とその成果を学ぶ。②では、ジェンダー平等が進んでいる北欧をはじめとして、欧米やアジアなど諸外国のジェンダー平等に向けた取り組みを学び、日本が直面している問題の解決策を検討する。		
授業 計画	第1回	現代日本のジェンダー問題	
	第2回	女性解放運動の歴史	
	第3回	ジェンダー研究の今	
	第4回	ジェンダー研究の概念	
	第5回	ジェンダー規範の形成と変容	
	第6回	北欧の結婚と子育て	
	第7回	北欧のクォータ制	
	第8回	欧米のフェミニズム運動史	
	第9回	欧米のフェミニスト研究	
	第10回	欧米の男女平等政策	
	第11回	欧米のセクシュアリティと家族	
	第12回	アジアの女性労働	
	第13回	アジアにおける女性への暴力	
	第14回	日本の男女平等政策	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業後に感想文を提出する。月一回、課題のレポートを提出する。		
テキスト	特に定めない。資料を配布する。		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	レポート:50% 授業感想文:30% 宿題:20%		

女性学B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会とジェンダー		藤田 和美 (ふじた かずみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・男女平等社会の実現に向けた、国や地方自治体の施策や企業の取り組みを学び、現代社会が直面しているジェンダー問題を理解する。 ・私たちを取り巻く文化現象において重層的に形成されているジェンダーを学び、現代日本社会のジェンダー構造や問題解決に向けた取り組みを理解する。 		
授業の概要	<p>全体を①国や地方自治体の施策と企業の取り組み②文化現象におけるジェンダーに分ける。①では、現代の国や地方自治体における男女平等に関する法や政策や、各企業で展開している取り組みを学ぶ。②では、学生にとって身近な、恋愛・結婚・美・ファッション・メディア・趣味・娯楽・スポーツなど生活習慣・文化現象におけるジェンダーを分析し、それぞれの関係性の検討を通じてジェンダーの多様性を探る。</p>		
授業計画	第1回	ジェンダーとは何か	
	第2回	法律とジェンダー	
	第3回	男女共同参画の施策	
	第4回	地方自治体における取り組み	
	第5回	男女共同参画センターとは	
	第6回	企業における女性活用	
	第7回	ワーク・ライフ・バランス	
	第8回	美、ファッション、化粧におけるジェンダー	
	第9回	女性とダイエット	
	第10回	メディアにおける女性像	
	第11回	スポーツとジェンダー	
	第12回	趣味・娯楽とジェンダー	
	第13回	芸術表現とジェンダー	
	第14回	コミックとジェンダー	
	第15回	発表とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回、授業後に感想文を提出する。月一回、レポート課題を提出。		
テキスト	特に定めない。資料を配布する。		
参考文献	授業時に紹介する。		
評価方法	学期末レポート:50% 発表:10% 課題レポート:15% 授業感想文:25%		

現代社会特講（法律）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会の問題を法的な視点から考察する		信澤 久美子（のぶさわ くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会では様々な社会問題が生じている。おのおの、様々な背景があって問題が起こるのであるが、その社会的背景を分析し、どのように解決するのが妥当か、法的な視点から考察する。		
授業の概要	おのおのの興味に応じて、テーマを絞り、発表者には問題についての発表と報告をしてもらう。それについて、討論を通じて、あるべき解決方法について、考える。発表者は欠席をしないで欲しい。全員が、質問をし、討論に加わること。テーマは、民事法・刑事法・憲法・環境・情報・消費・その他、話し合いによって決める。		
授業計画	第1回	イントロダクション 調べ物、報告の仕方等	
	第2回	テーマに沿っての発表と討論 社会問題一般 1	
	第3回	テーマに沿っての発表と討論 社会問題一般 2	
	第4回	テーマに沿っての発表と討論 社会問題一般 3	
	第5回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 民法 1	
	第6回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 民法 2	
	第7回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 民法 3	
	第8回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 家族法 1	
	第9回	テーマに沿っての発表と討論 民事法 家族法 2	
	第10回	テーマに沿っての発表と討論 刑事法 1	
	第11回	テーマに沿っての発表と討論 刑事法 2	
	第12回	テーマに沿っての発表と討論 憲法 1	
	第13回	テーマに沿っての発表と討論 憲法 2	
	第14回	テーマに沿っての発表と討論 憲法 3	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	日頃、新聞を読んで、社会問題への関心を深めておくこと。発表に当たったら、文献・ネット等をしっかりと調べて、まとめあげる。他の人のテーマへの関心を持つこと。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	特に指定しない。 条文はインターネットでダウンロード可能。		
評価方法	発表の出来:50% 討論への積極的参加:50%		

現代社会特講（法律）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会の問題を法的な視点から考察する		信澤 久美子（のぶさわ くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代社会では様々な社会問題が生じている。おのおの、様々な背景があって問題が起こるのであるが、その社会的背景を分析し、どのように解決するのが妥当か、法的な視点から考察する。		
授業の概要	おのおのの興味に応じて、テーマを絞り、発表者には問題についての発表と報告をしてもらう。それについて、討論を通じて、あるべき解決方法について、考える。発表者は欠席をしないで欲しい。全員が、質問をし、討論に加わること。テーマは、民事法・刑事法・憲法・環境・情報・消費・その他、話し合いによって決める。		
授業計画	第1回	イントロダクション 調べ物、報告の仕方等	
	第2回	テーマに沿ったの発表と討論 国際法	
	第3回	テーマに沿ったの発表と討論 比較法 1	
	第4回	テーマに沿ったの発表と討論 比較法 2	
	第5回	テーマに沿ったの発表と討論 環境法 1	
	第6回	テーマに沿ったの発表と討論 環境法 2	
	第7回	テーマに沿ったの発表と討論 環境法 3	
	第8回	テーマに沿ったの発表と討論 情報法 1	
	第9回	テーマに沿ったの発表と討論 情報法 2	
	第10回	テーマに沿ったの発表と討論 情報法 3	
	第11回	テーマに沿ったの発表と討論 消費者法 1	
	第12回	テーマに沿ったの発表と討論 消費者法 2	
	第13回	テーマに沿ったの発表と討論 消費者法 3	
	第14回	テーマに沿ったの発表と討論 その他諸法	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	日頃、新聞を読んで、社会問題への関心を深めておくこと。発表に当たったら、文献・ネット等をしっかりと調べて、まとめあげる。他の人のテーマへの関心を持つこと。		
テキスト	特に指定しない。		
参考文献	特に指定しない。条文はインターネットでダウンロードできる。		
評価方法	発表の出来:50% 討論への積極的参加:50%		

現代社会特講（経済）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会における法と経済分析とその基礎知識		藤森 裕美（ふじもり ひろみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、経済学の理解を深めるとともに、現代社会における法と経済分析の知識を習得することが目標です。		
授業の概要	法と経済学は、主にゲーム理論のパラダイム上に構築されており、それに基づく社会問題に対する解決策を提案する分野です。この授業では、まず、マイクロ経済学の考え方を概観し、次にゲーム理論について学びます。最後に、法と経済学の重要テーマである、効率と公平について学びます。ゲーム理論を学んだことがなくとも、また、法と経済学の初学者でも、各回の学習を積み重ねることで、自然と理解できるように一緒に取り組んでいきましょう。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	マイクロ経済学の基礎1：合理性	
	第3回	マイクロ経済学の基礎2：パレート効率性	
	第4回	マイクロ経済学の基礎3：コースの定理	
	第5回	マイクロ経済学の基礎4：取引費用	
	第6回	マイクロ経済学の基礎5：外部性	
	第7回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用1：ナッシュ均衡	
	第8回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用2：囚人のジレンマ	
	第9回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用3：プリンシパル・エージェント	
	第10回	ゲーム理論の「法と経済学」への応用4：バックワードインダクション	
	第11回	法と経済学における効率性と公平性1：市場の効率的資源配分	
	第12回	法と経済学における効率性と公平性2：独占禁止法	
	第13回	法と経済学における効率性と公平性3：費用便益分析	
	第14回	法と経済学における効率性と公平性4：カルドア・ヒックス基準	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	この演習科目は、以下のテキストを主要文献とします。次回授業で扱う項目に必ず目を通し、準備学習をしてください。事後学習については授業中に言及します。なお、7月6日～7月18日の2週間は、担当者がシカゴ大学法と経済学サマープログラムに参加予定であるため、2回分の補講を行います。補講実施日時については、受講者と相談の上、決定します。		
テキスト	宍戸善一・常木淳『法と経済学：企業関連法のマイクロ経済学的考察』有斐閣、2004年。		
参考文献	ロバート・クーター、トーマス・ユーレン 『新版 法と経済学』 商事法務研究会、1997年。		
評価方法	平常点:30% 期末試験又はレポート:70%		

現代社会特講（経済）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会と「法と経済学」		藤森 裕美（ふじもり ひろみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業では、複雑化し多様化する現代社会のしくみを理解するにあたり、法と経済学への関心を喚起し、法の隠れた機能を学ぶことを目標とします。		
授業の概要	この授業では、法や判例がもたらす社会経済的な影響を分析する「法と経済学」という分野を扱います。法や判例が、ひとびとの行動や豊かさによどのような影響を及ぼすのかという論点から、法律や政策の効果を、実践的に分析していきます。この科目を履修予定の方は、「現代社会特講（経済）a」あるいは「現代社会特講（経済）A」の履修をおすすめします。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	法と経済学とは	
	第3回	金利に対する市場介入はどうあるべきか	
	第4回	判例と法と経済学による考察	
	第5回	解雇規制はだれを保護するのか	
	第6回	判例と法と経済学による考察	
	第7回	河川の流水はどのように配分すべきか	
	第8回	判例と法と経済学による考察	
	第9回	担保不動産からの債権回収はなぜ進まないのか	
	第10回	判例と法と経済学による考察	
	第11回	犯罪抑止にとって刑罰とはなにか	
	第12回	判例と法と経済学による考察	
	第13回	企業規律に責任を持つのはだれか	
	第14回	判例と法と経済学による考察	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	この演習科目は、以下のテキストを主要文献とします。授業は、2回で1セットのテーマを扱いますので、2回とも出席するようにしてください。また、次回授業で扱う項目に必ず目を通し、準備学習をしてください。事後学習については授業中に言及します。		
テキスト	福井秀夫 『ケースからはじめよう法と経済学—法の隠れた機能を知る』 日本評論社 2007年		
参考文献	授業中に別途紹介します。		
評価方法	平常点:30% 期末試験又はレポート:70%		

現代社会特講（経営）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
経営学の基礎概念、国際経営		宇田 美江（うだ みえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	①日本企業が直面してきた外部環境を歴史的にみて理解する ②グローバルに活動する日本企業の事例から、経営戦略、組織構造、人的資源管理等の実際を理解し、成果と課題を考察する		
授業の概要	現代社会における企業が直面している課題と対応づけながら、企業の役割や機能、経営の意味等、経営学の基礎的概念を解説する。まず、日本企業が戦前、戦後、高度経済成長期、バブル経済期、失われた20年と、どのような特徴を持ち、どのようにマネジメントが変容してきたかに触れる。その上で、さまざまな企業の事例を基に、日本企業の国際経営における経営戦略・組織構造・生産・マーケティング・人的資源管理等の現代的課題についての考察を試みる。最終的に企業が置かれている現状と現代企業に求められている要因を理解し、現代の日本企業のあり方を模索する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	日本企業のマネジメントの変容、国際経営とは	
	第3回	国際経営戦略	
	第4回	国際経営組織	
	第5回	国際マーケティング	
	第6回	海外生産	
	第7回	国際研究開発とイノベーション	
	第8回	国際人的資源組織	
	第9回	国際経営の現在① 自動車産業	
	第10回	国際経営の現在② エレクトロニクス産業	
	第11回	国際経営の現在③ IT産業	
	第12回	国際経営の現在④ 流通	
	第13回	国際経営の現在⑤ 生活文化財産業	
	第14回	国際経営マネジメントの変革	
	第15回	国際経営の将来像 修了論文に向けて	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の授業は、一方的に講義する形ではなく、担当者を決め、発表したり、全体で討論したりして主体的に取り組み、相互に学習をするスタイルをとります。何かをあらかじめ調べてくる等、課題を与えることも多くあります。テキストに基づいて授業を進めます。		
テキスト	開講時に指示する。		
参考文献	吉原英樹、白木三秀、新宅純二郎、浅川和宏編（2013）『ケースに学ぶ国際経営』有斐閣ブックス ハーバード・ビジネス・スクール（2010）『ケース・スタディ 日本企業事例集』ダイヤモンド社		
評価方法	課題提出や発表:50% 授業への参画:30% 期末レポート:20%		

現代社会特講（経営）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
経営学、経営管理史の理解、管理ツール・問題解決手法の修得		奈良 堂史（なら たかし）	
授業の到達目標及びテーマ	本講義では、現代社会を生きる企業人（組織人）に求められる教養としての「経営理論」および「管理手法（管理ツール、問題解決手法）」の基礎的理解・修得を講義目標とする。具体的には、次の次項に示す2点を講義内容とし、15回実施する講義を2部構成とする。		
授業の概要	まず、第1部では「経営管理に関する理論の基礎的理解」を目指した講義を行う。なお、受動的な理論学習とならないよう、ケーススタディやグループワーク、課題提出や作業学習などを通じて、現代社会と経営理論との関連性理論と現実の経営問題の関連性を強調しながら講義を進めていく。 次に第2部では、「経営管理に関する手法・ツールの修得」を目指した講義を行う。これらを通じて、現代社会の企業人（組織人）に求められる重要な素養の1つである「問題解決力」を養成する。		
授業計画	第1回	ガイダンス（本講義の進め方、履修上の注意、受講者アンケートなど）	
	第2回	受講者との問題意識の共有——いま、社会で何が起きているのか？	
	第3回	経営学はどのような学問か？（経営学を学ぶ意義、研究領域と研究課題）	
	第4回	現代企業の特徴	
	第5回	経営管理の歴史(1)——科学的管理法と経営学のパイオニア	
	第6回	経営管理の歴史(2)——管理における人間性への配慮	
	第7回	経営管理の歴史(3)——管理への科学的アプローチ	
	第8回	経営管理の歴史(4)——環境・資源と管理組織（経営戦略論の生成と発展）	
	第9回	経営管理の歴史(5)——情報・知識と経営管理	
	第10回	管理ツール・問題解決技法の修得(1)——系統図（因果関係分析）	
	第11回	管理ツール・問題解決技法の修得(2)——プロセス図（過程分析）	
	第12回	管理ツール・問題解決技法の修得(3)——パレート図（ABC分析）	
	第13回	管理ツール・問題解決技法の修得(4)——特性要因図（要因分析）	
	第14回	管理ツール・問題解決技法の修得(5)——KJ法（クラスター分析）	
	第15回	半期のまとめと期末試験について	
準備学習（予習・復習等）	毎回、講義の最後に課される宿題（予習・復習を含む）に取り組み、次回の講義で提出する。なお、宿題の内容について講義内で発表させることもある。		
テキスト	特になし（毎回の講義内にて担当者作成のプリント等を配布する） その他、必要に応じて講義内にて支持・紹介する。		
参考文献	■片岡信之・齊藤毅憲・佐々木恒男・高橋由明・渡辺俊編著（2010）『アドバンスト経営学』中央経済社。 ■坂下昭宣（2007）『経営学への招待（第3版）』白桃書房		
評価方法	期末テスト:50% 平常点:30% レポート等の課題提出:20%		

現代社会特講（教育）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代教育の歴史的・思想的背景を知ろう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代教育のさまざまな論点を考える上で、その前提となる幕末維新期から戦前期までの歴史的・思想的背景を明らかにしたい。特に、①学校観の史的展開、②知識教育と道徳教育の関係の捉え方と実態、③第二次世界大戦期の教育の実態と理念、④戦後教育改革の理念と実態、という4期に分けて論じ、戦後から現代Ⅱいたる「教育問題」の背景とその複雑な構造を知ることが目的とする。		
授業の概要	授業は、講義と学生の発表を組み合わせる形で進めていく。学生の発表は、講義の区切りごとに論点となる論題に即して発表を行い、討論を行う形で進める。最終的には、学生各自の関心に基づき、設定したテーマに即したレポートを作成する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	講義：学校観の史的展開①	
	第3回	講義：学校観の史的展開②	
	第4回	学生の発表①……学校観の史的展開（明治・大正期）	
	第5回	学生の発表②……学校観の史的展開（昭和期）	
	第6回	講義：知識教育と道徳教育①	
	第7回	講義：知識教育と道徳教育②	
	第8回	学生の発表……知徳関係論	
	第9回	講義：戦時下の教育①	
	第10回	講義：戦時下の教育②	
	第11回	学生の発表……戦争と教育	
	第12回	講義：戦後教育改革①	
	第13回	講義：戦後教育改革②	
	第14回	学生の発表……戦後教育改革	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	講義および学生の発表のために、あらかじめ資料を提示するので、事前にきちんとそれらの文献・資料を読み込んでおく必要がある。特に発表担当者は、レジュメを作成した上で発表を行うため、入念な準備が求められる。		
テキスト	特に定めない。必要な資料を配付する。		
参考文献	授業中に提示する。		
評価方法	感想:10% 発表:20% 期末レポート:70%		

現代社会特講（教育）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代教育問題をくわしく知ろう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	現代はさまざまな「教育問題」にあふれている。だが、そもそも「教育問題」とは自然に生ずるものというより、作られるものである。さらにそれぞれの問題は互いに関連し合っている。この講義では、こうした「教育問題」の具体的な姿を明らかにしつつ、それを生み出した社会的構造を明らかにすることを目的とする。		
授業の概要	授業は、講義と学生の発表を組み合わせる形で進めていく。学生の発表は、講義の区切りごとに論点となるテーマに即して発表を行い、討論を行う形で進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	講義：「教育問題」とは何か	
	第3回	講義：学歴主義と「教育格差」	
	第4回	学生の発表と討論	
	第5回	講義：「いじめ」問題	
	第6回	学生の発表と討論	
	第7回	講義：学級崩壊	
	第8回	学生の発表と討論	
	第9回	講義：早期教育	
	第10回	学生の発表と討論	
	第11回	講義：児童虐待	
	第12回	学生の発表と討論	
	第13回	講義：少年犯罪	
	第14回	学生の発表と討論	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	講義と学生の発表・討論を繰り返す形にするため、事前の準備は不可欠である。あらかじめ講義計画と参考文献一覧を配付し、分担を決めるので、各自は十分な準備を行うこと。		
テキスト	特に定めない。必要な資料を配付する。		
参考文献	授業中に提示する。		
評価方法	授業時の感想文:10% 発表:20% 期末レポート:70%		

現代社会特講（心理）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会特講（心理学）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	心理学の主要な概念について説明できるようになるとともに、心理学的なものごとの見方や考え方を身につける。		
授業の概要	<p>発達、学習、記憶、性格、知覚等の心理学における重要な知見について知識を深める。そして、心理学という学問の根本にある考え方を理解できるようになることを目指す。後半の研究報告では、受講生の興味のある分野について、どのような研究が行われているのかについて、論文を読み、報告することを通じて、実際の研究の方法論についても理解を深める。</p> <p>なお、授業は基本的には演習形式で進める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション・心理学の方法	
	第2回	行動の基本様式	
	第3回	発達	
	第4回	学習・記憶1	
	第5回	学習・記憶2	
	第6回	感覚・知覚1	
	第7回	感覚・知覚2	
	第8回	思考・言語1	
	第9回	思考・言語2	
	第10回	動機づけ・情動	
	第11回	個人差	
	第12回	社会行動	
	第13回	研究報告1	
	第14回	研究報告2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所を読んでおくこと。</p> <p>事後学習 授業内容を振り返りながら、テキストを熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。</p>		
テキスト	鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃 「心理学 第3版」 東京大学出版会		
参考文献	特に指定しない		
評価方法	課題・小テスト:20% 授業参加態度:20% 定期試験又は最終課題:60%		

現代社会特講（心理）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代社会特講（認知心理学）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	言語を中心とした認知心理学の主要な概念について説明できるようになるとともに、認知心理学的にものごとを捉えられるようになることを目指す。		
授業の概要	<p>普段何気なく行っている言語処理は、非常に複雑なメカニズムによって支えられている。前半では、言語に関わる認知処理メカニズムについて、心理学の領域で行われている様々な研究・知見を概観する。後半の研究報告では、受講生の興味のあるトピックスについて、どのような研究が行われているのかを、論文を読み、報告することを通じて、実際の研究の方法論についても理解を深める。</p> <p>なお、授業は基本的には演習形式で進める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	音声	
	第3回	語と文字	
	第4回	文と文章の理解	
	第5回	母語の獲得	
	第6回	外国語の習得・学習	
	第7回	言語と脳・思考・文化	
	第8回	文理解を支える脳神経メカニズム	
	第9回	ことばと教育の関わり・失語症	
	第10回	研究報告1	
	第11回	研究報告2	
	第12回	研究報告3	
	第13回	研究報告4	
	第14回	研究報告5	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>事前学習 次回の講義内容を確認し、テキストの該当する箇所を読んでおくこと。</p> <p>事後学習 授業内容を振り返りながら、テキストを熟読し、重要な専門用語を覚えておくこと。 疑問点については、関連図書を調べるなどして、解決するようにすること。</p>		
テキスト	石川圭一 「ことばと心理 言語の認知メカニズムを探る」 くろしお出版		
参考文献	大津由紀雄編 「認知心理学3 言語」 東京大学出版会		
評価方法	課題・小テスト:20% 授業参加態度:20% 定期試験又は最終課題:60%		

現代社会特講（生活）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代日本の食糧事情		谷本 信也（たにもと しんや）	
授業の到達目標 及びテーマ	他国からの食糧調達、調理加工食品の利用に大きく依存している中での飽食の実態を理解する。さらに、健康面、経済面や品質など幅広くどのような利益、不利益を我々は受けているのかを理解できるようにする。食に関して、今どのように行動しなければならないのかを、一人ひとりそれぞれが異なった結論であっても、答えを洞察できるようにしてゆく。		
授業の概要	他国からの食糧調達、調理加工食品の利用に大きく依存している実態を説明。それが健康面、経済面や品質など幅広くどのような利益、不利益を我々は受けているのかを学ぶ。他国への食糧依存にどのような問題があるのかも検討する。		
授業計画	第1回	世界の食糧生産様式	
	第2回	世界と日本の食糧生産と輸出入 先進国と開発途上国	
	第3回	世界と日本の食糧生産と輸出入 日本の過去と現状	
	第4回	世界と日本の食糧生産と輸出入 これからの日本	
	第5回	生鮮食料品	
	第6回	貯蔵方法の進化と利益、不利益	
	第7回	加工食品	
	第8回	加工上の副反応	
	第9回	中食と外食	
	第10回	飽食と生活習慣病1 エネルギー	
	第11回	飽食と生活習慣病2 その他の栄養素	
	第12回	稲作	
	第13回	各国の政策	
	第14回	日本の政策	
	第15回	今どのように行動しなければならないのか	
準備学習 (予習・復習等)	毎週の各授業項目にあうものを、参考文献などで目を通し、概要を簡単に学んでおくこと。授業後は授業で使われた専門用語を辞書・字書などで理解しておくこと。		
テキスト	適当なものが無く指定しません		
参考文献	食品大百科事典（朝倉）、ヒューマンニュートリション（医歯薬出版）、世界の農業と食糧問題のすべてがわかる本（ナツメ社）、食糧自給率の罫（朝日新聞出版）、食糧の世界地図（丸善）、新たな食糧・農業・農村基本計画の検討課題と具体化に向けて（大成出版）、栄養・食糧学データハンドブック（同文書院）		
評価方法	授業の積極的取り組み:40% 試験評価:60%		

現代社会特講（生活）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
食を中心とする健康寿命の延伸と生活の改善		谷本 信也（たにもと しんや）	
授業の到達目標 及びテーマ	健康に影響する因子を理解し、どのように改善するべきかを理解することが目標であり、食を中心とした因子、その具体的な影響がテーマとなる。		
授業の概要	どのようなものごとが身体に影響を与えどのような結果になるのかを学ぶ。不健康に傾く場合にはどのようにして改善を図るのかもまなんでゆく。		
授業計画	第1回	体の成り立ち	
	第2回	細胞や組織、器官間のクロストーク	
	第3回	栄養素と体の関係	
	第4回	栄養素必須量	
	第5回	エネルギー摂取と消費	
	第6回	現代の病と生活習慣病	
	第7回	アレルギー	
	第8回	腸内微生物	
	第9回	腸内微生物と機能性食品	
	第10回	特定保健用食品と機能性食品	
	第11回	高血圧や脳血管障害	
	第12回	糖尿病	
	第13回	筋肉、骨、	
	第14回	がんその他の病と食品	
	第15回	健康寿命	
準備学習 (予習・復習等)	毎週の各授業項目にあうものを、参考文献などで目を通し、概要を簡単に学んでおくこと。授業後は授業で使われた専門用語を辞書・字書などで理解しておくこと。		
テキスト	適当なものが無く指定しません。		
参考文献	神経・内分泌・免疫系のクロストーク（学会出版センター）、ヒューマンニュートリション（医歯薬出版）、栄養・食糧学データハンドブック（同文書院）、機能性食品の事典（朝倉書店）、食品と体（朝倉書店）、		
評価方法	授業の積極的取り組み:40% 試験の評価:60%		

現代社会特講（技術）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代の科学技術とその問題点		松村 紀明（まつむら のりあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	さまざまな意味で巨大化した現代の科学技術は、社会に大きな影響を与えており、色々な問題を引き起こしている。この授業では、科学技術に関する具体的な事例を学生とともに検討しながら、科学技術のありかたについて客観的に再検討し、そのあるべき姿を探求する。学生にとっては、現在の科学技術のありようが「唯一無二」のものでもなければ「上から与えられるブラックボックス」でもないということを理解することが目標となる。後期に開講される「現代社会特講（技術）b」とあわせて受講することが望ましい。なお、授業計画における各回の内容は一例である。		
授業の概要	先端医療の問題や原発事故の問題など、科学技術は現代社会に大きな影響を与えており、様々な問題を引き起こしている。この授業では、まず現代の科学技術が歴史的にどのように形成されてきたのかを講義や画像・映像資料などをもとに概観する。その上で、現代の科学技術の全体的な特徴について講義をおこない、社会と科学技術の関係について個別事例を検討するための基礎知識を身につけさせる。以上の後、学生の興味関心を念頭に、具体的な事例をセレクトし（輪読図書を選定）学生に発表させ議論を行う。講義中心の授業から議論中心の授業へと連続的に行っていくことによって、学生に、科学技術のあり方や社会と科学技術の関係を主体的に考える力を身につけさせることを目指す。		
授業計画	第1回	ガイダンス：授業の進め方、発表の仕方などについての説明	
	第2回	近代の科学技術がどのように形成されたのか？（講義あるいは映像資料）	
	第3回	なぜ現代の科学技術が問題なのか？（講義あるいは映像資料）	
	第4回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・脳死臓器移植1）	
	第5回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・脳死臓器移植2）	
	第6回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・脳死臓器移植3）	
	第7回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・再生医療1）	
	第8回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・再生医療2）	
	第9回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・再生医療3）	
	第10回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・医療のIT化とプライバシー1）	
	第11回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・医療のIT化とプライバシー2）	
	第12回	選定した具体的事例の検討（現代医療の抱える諸問題・医療のIT化とプライバシー3）	
	第13回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・地球温暖化1）	
	第14回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・地球温暖化2）	
	第15回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・地球温暖化3）	
準備学習 (予習・復習等)	輪読対象のテキストは、発表者以外の学生も購入し事前に読んでおくこと。これは授業に参加するための必須条件である。		
テキスト	開講時に受講者と相談して決めるが、以下にテキストの例を挙げておく。2～3冊程度を読む予定である。 ・松尾瑞穂『インドにおける代理出産の文化論-出産の商品化のゆくえ』 ・柴田鉄治『科学事件』		
参考文献	選定するテキストによって異なるので、授業時に随時紹介する。		
評価方法	担当時の発表内容:70% 授業（議論）への参加:30%		

現代社会特講（技術）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
現代の科学技術とその問題点		松村 紀明（まつむら のりあき）	
授業の到達目標 及びテーマ	さまざまな意味で巨大化した現代の科学技術は、社会に大きな影響を与えており、色々な問題を引き起こしている。この授業では、科学技術に関する具体的な事例を学生とともに検討しながら、科学技術のありかたについて客観的に再検討し、そのあるべき姿を探求する。学生にとっては、現在の科学技術のありようが「唯一無二」のものでもなければ「上から与えられるブラックボックス」でもないということを理解することが目標となる。前期に開講される「現代社会特講（技術）a」とあわせて受講することが望ましい。なお、授業計画における各回の内容は一例である。		
授業の概要	先端医療の問題や原発事故の問題など、科学技術は現代社会に大きな影響を与えており、様々な問題を引き起こしている。この授業では、まず現代の科学技術が歴史的にどのように形成されてきたのかを講義や画像・映像資料などをもとに概観する。その上で、現代の科学技術の全体的な特徴について講義をおこない、社会と科学技術の関係について個別事例を検討するための基礎知識を身につけさせる。以上の後、学生の興味関心を念頭に、具体的な事例をセレクトし（輪読図書を選定）学生に発表させ議論を行う。講義中心の授業から議論中心の授業へと連続的に行っていくことによって、学生に、科学技術のあり方や社会と科学技術の関係を主体的に考える力を身につけさせることを目指す。		
授業計画	第1回	ガイダンス：授業の進め方、発表の仕方などについての説明	
	第2回	近代の科学技術がどのように形成されたのか？（講義あるいは映像資料）	
	第3回	なぜ現代の科学技術が問題なのか？（講義あるいは映像資料）	
	第4回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・オゾン層破壊1）	
	第5回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・オゾン層破壊2）	
	第6回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・オゾン層破壊3）	
	第7回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・砂漠化と農業1）	
	第8回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・砂漠化と農業2）	
	第9回	選定した具体的事例の検討（現代の科学技術と環境・砂漠化と農業3）	
	第10回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・Google革命1）	
	第11回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・Google革命2）	
	第12回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・Google革命3）	
	第13回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・ビッグデータ1）	
	第14回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・ビッグデータ2）	
	第15回	選定した具体的事例の検討（ITと私達の生活・ビッグデータ3）	
準備学習 (予習・復習等)	輪読対象のテキストは、発表者以外の学生も購入し事前に読んでおくこと。これは授業に参加するための必須条件である。		
テキスト	開講時に受講者と相談して決めるが、以下にテキストの例を挙げておく。2～3冊程度を読む予定である。 ・松尾瑞穂『インドにおける代理出産の文化論-出産の商品化のゆくえ』 ・柴田鉄治『科学事件』		
参考文献	選定するテキストによって異なるので、授業時に随時紹介する。		
評価方法	担当時の発表内容:70% 授業（議論）への参加:30%		

現代社会特講（環境）A		前期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
環境科学		廣田 道夫（ひろた みちお）	
授業の到達目標 及びテーマ	環境問題の背景には、急速な人口増加や、それに伴う食糧や資源・エネルギーの確保といった問題が横たわっています。物質的な豊かさを求めるだけでなく、環境と調和した社会を構築することは、現代社会に生きる我々にとって大きな課題の1つですが、そのためには環境問題の科学的理解が不可欠です。ここでは環境の諸問題について、その科学的基礎を理解できるように講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。我が国の公害・環境問題を具体例として、大気汚染、水質汚濁、土壌汚染の化学的メカニズム、健康被害、浄化対策、また一般廃棄物、産業廃棄物、特に有害化学物質の処理、リサイクル等について説明します。		
授業計画	第1回	環境科学入門	
	第2回	人口問題、食糧問題	
	第3回	資源・エネルギー問題の現状	
	第4回	新しいエネルギー	
	第5回	自然の浄化作用	
	第6回	環境汚染物質	
	第7回	有害化学物質	
	第8回	大気汚染（ガス）	
	第9回	大気汚染（エアロゾル）	
	第10回	大気汚染（光化学スモッグ）	
	第11回	水質汚濁（河川・湖沼）	
	第12回	水質汚濁（海洋）	
	第13回	下水処理	
	第14回	廃棄物と処理の現状	
	第15回	廃棄物のリサイクル	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	世良力「環境科学要論」（第三版）（東京化学同人）		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

現代社会特講（環境）B		後期 2 単位	1・2年 多元文化専攻
地球環境問題		廣田 道夫（ひろた みちお）	
授業の到達目標 及びテーマ	産業革命以後、人間活動は際限なく拡大し、地球全体に影響を及ぼすようになってきました。地球が有限であるということ、そしてその中で持続可能な発展を展開していくことは、現代社会に生きる我々に課せられた大きな課題です。この講義では個々の地球環境問題に関するメカニズム、影響、対策、将来予測等について、その基礎を理解できるように講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。地球大気の構造・組成、地球温暖化、オゾン層破壊、熱帯雨林の減少、PM2.5問題等について説明します。		
授業計画	第1回	大気の鉛直構造	
	第2回	大気の組成、鉛直分布	
	第3回	地球温暖化（現状）	
	第4回	地球温暖化（将来予測）	
	第5回	温室効果ガスの監視-CO2	
	第6回	温室効果ガスの監視-CH4, N2O	
	第7回	オゾン層破壊（オゾンの生成・消滅）	
	第8回	オゾン層破壊（フロンガスの影響、オゾンホール）	
	第9回	酸性雨	
	第10回	PM2.5問題	
	第11回	熱帯雨林の減少	
	第12回	生物多様性の保全	
	第13回	持続可能な発展	
	第14回	新しいエネルギー—太陽光発電・風力発電	
	第15回	新しいエネルギー—地熱発電・その他	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	小島次雄、川平浩二、藤倉良「これからの環境科学」（化学同人）		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
プレ修了制作として織作品を制作し、研究の成果をまとめる		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「造形演習A」を履修した学生を対象として、前期に模索した各自のテーマに添った造形表現の研究を深め、課題作品（プレ修了制作）として完成させる。作品・制作について自分の言葉で表現し、制作を裏付ける。学生自身による主体的・総合的・専門的な研究実践の過程と成果として作品を完成させ、修了研究演習Ⅱ、Ⅲへと展開できる力をつけることを目的とする。		
授業の概要	今まで学んできたことを基にすべて一人でまず組み立てることで、学生の総合力を確認しながら個別指導を進める。短い時間を有効に制作に当てるために、テーマ、作品制作のコンセプトとデッサン、デザイン画をしっかり検討して準備しておく必要がある。制作には時間配分が大切なので、工程表を組み、時間の管理をすることも重要となる。授業ごとに確認、相談しながら進めて行く。		
授業計画	第1回	各自の制作テーマ・デザイン画・工程表などを発表。内容、作業工程、必要事項を確認し具体的なアドバイスをすることで、それを基に再度計画を見なおして進める。	
	第2回	課題作品制作（プレ修了制作）：各自の工程表に沿って制作をすすめる。以下、個別指導。	
	第3回	課題作品制作：1	
	第4回	課題作品制作：2	
	第5回	課題作品制作：3	
	第6回	課題作品制作：4	
	第7回	課題作品制作：5	
	第8回	課題作品制作：6	
	第9回	課題作品制作：7	
	第10回	課題作品制作：8	
	第11回	課題作品制作：9	
	第12回	経系始末、作品仕上げ	
	第13回	作品完成	
	第14回	講評会	
	第15回	授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	作品制作には膨大な時間がかかる。授業時間だけでは作品は出来ないなので、空き時間を利用して制作時間を確保・充填すること。次への展開に欠かせない「制作ノート」をつくり、制作の過程で生じたこと（制作に関わること、イメージ、内容、制作意図、表現についてなど）はすべてメモしておくこと。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題作品:50% 期末レポート:20%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
江戸時代文芸の研究		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標 及びテーマ	江戸時代の文芸作品(小説・演劇・韻文など)を研究対象にして「修了論文」を作成します。本科の卒業論文よりも、さらに高度な、奥深い内容を目指しましょう。		
授業の概要	自ら学ぶ姿勢を強く持って下さい。アドバイスは、適宜。時に応じて行います。原典資料の所在、その資料の読解方法、先行必読研究などに関する質問は、いつでも可能。しかし「修了論文」の作成に必要なのは、あなた自身の努力と感性、それに好奇心です。新しい「発見」を期待します。		
授業計画	第1回	研究テーマ設定	
	第2回	調査準備	
	第3回	テーマ1の資料調査	
	第4回	テーマ1の研究報告	
	第5回	テーマ2の資料調査	
	第6回	テーマ2の研究報告	
	第7回	テーマ3の資料調査	
	第8回	テーマ3の研究報告	
	第9回	下書き作成	
	第10回	下書き提出・添削	
	第11回	補完調査その1	
	第12回	補完調査その2	
	第13回	提出原稿整備	
	第14回	口頭試問	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、資料調査、対象研究。		
テキスト	各自のテーマに応じて指示します。		
参考文献	少々厚めの「研究ノート」、あるいは「研究用FD」を作成すること。それが、あなた自身の「参考文献」となります。		
評価方法	過程報告:40% 論文内容:60%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
修了研究演習 I (認知心理学)		植月 美希 (うえつき みき)	
授業の到達目標 及びテーマ	認知心理学に関わるテーマを取り上げ、それについて文献検索を行い、自分の興味のある論文を探し出し、読み解くことを目指す。また、その内容を分かりやすく要約し、伝える力を身につける。		
授業の概要	修了論文の執筆の第一歩として、自分の興味のある論文を探し、それを読み、発表することを繰り返し行う。そのことを通じて、論文の読解力や発表する力を身につけるとともに、自分の関心のあるテーマについての理解を深める。 なお、授業は基本的には演習形式で進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	文献講読 発表とディスカッション1	
	第3回	文献講読 発表とディスカッション2	
	第4回	文献講読 発表とディスカッション3	
	第5回	文献講読 発表とディスカッション4	
	第6回	文献講読 発表とディスカッション5	
	第7回	文献講読 発表とディスカッション6	
	第8回	文献講読 発表とディスカッション7	
	第9回	文献講読 発表とディスカッション8	
	第10回	文献講読 発表とディスカッション9	
	第11回	文献講読 発表とディスカッション10	
	第12回	研究計画書 作成	
	第13回	研究計画 発表とディスカッション1	
	第14回	研究計画 発表とディスカッション2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	事前学習 関心のあるテーマや問題について文献検索を行い、論文を読み、まとめておくこと。 事後学習 講義内容を踏まえ、出題される課題を着実に締切までに提出すること。		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	山田剛史・林 創 「大学生のためのリサーチリテラシー入門」 ミネルヴァ書房 白井利明・高橋一郎 「よくわかる卒論の書き方 第2版」 ミネルヴァ書房		
評価方法	課題:20% 授業参加態度:20% 最終課題:60%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
経営学演習		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「経営学」に関するテーマ（人的資源管理、従業員のキャリア形成から、企業構造、経営戦略、経営文化、国際経営、起業等に関するテーマまで、広く経営や企業、キャリア形成に関するテーマ）で修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。学生各人が関心を持つ現代日本社会の企業経営や従業員の雇用・管理の課題について、経営学の観点からそれらがどのように位置づけられるかについて討議する。その際、現代社会における経営や企業の観点、また、グローバル化に伴い、企業経営における、日本以外の多文化における企業や経営との比較を考慮に入れて検討を加えていく。そして、専攻科の講義科目で得た知見と結びつけつつ、さらに修了論文のテーマを絞り込んでいく。</p>		
授業の概要	<p>各自が興味のあるテーマを選び、修了論文に向けたレポートの作成を中心に行う。課題（文献を読んでくる、報告を用意する）を与えるため、その際は必ず準備して臨むこと</p>		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	発表と討議 グループ①	
	第3回	発表と討議 グループ②	
	第4回	発表と討議 グループ③	
	第5回	発表と討議 グループ①	
	第6回	発表と討議 グループ②	
	第7回	発表と討議 グループ③	
	第8回	発表と討議 グループ①	
	第9回	発表と討議 グループ②	
	第10回	発表と討議 グループ③	
	第11回	レポート仮提出と手直し	
	第12回	発表と討議、レポート手直し グループ①	
	第13回	発表と討議、レポート手直し グループ②	
	第14回	発表と討議、レポート手直し グループ③	
	第15回	まとめ 発表と修了論文に向けたレポートの提出	
準備学習 (予習・復習等)	<p>議論を活発に進めるために、テーマに基づいて、自分なりに調べ、専門用語等をよく理解しておくこと。</p>		
テキスト	<p>特に使用しない。</p>		
参考文献	<p>授業内で適宜紹介する。</p>		
評価方法	<p>発表:30% 授業への参画度:40% 期末レポート:30%</p>		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
食文化研究		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	①食文化に関連する文献、資料の収集の方法を習得する。 ②論文の構成、執筆の仕方、引用文献や図表作成について学ぶ。 ③プレゼン、話す力、聞く力を養う。		
授業の概要	生活文化のなかで「食文化」に関するテーマで修了論文を書く学生を対象に論文作成に向けた授業を実施する。 具体的には、学生各人が関心を持つ主題について、文献・資料の検索・収集の仕方を身につけ、これまで専攻科の講義科目で学んだ知識を生かしつつ、論文となりうるテーマか否かを検討する。テーマ決定後、論文の構成、執筆の仕方、引用文献の扱い方、図表の作成、まとめ方等について具体的に学ぶ。		
授業計画	第1回	食文化の研究手法について	
	第2回	食文化に関連する文献、資料の収集 1	
	第3回	食文化に関連する文献、資料の収集 2	
	第4回	研究テーマの選定 1	
	第5回	研究テーマの選定 2	
	第6回	論文の構成・引用文献の扱い方	
	第7回	図表の作成の方法	
	第8回	要旨の作成の方法	
	第9回	論文の中間報告とディスカッション 1	
	第10回	論文の中間報告とディスカッション 2	
	第11回	論文の中間報告とディスカッション 3	
	第12回	論文の中間報告とディスカッション 4	
	第13回	論文の中間報告とディスカッション 5	
	第14回	研究発表とディスカッション 1	
	第15回	研究発表とディスカッション 2	
準備学習 (予習・復習等)	各人がテーマに沿って論文を書く。		
テキスト	必要に応じて、プリントを配布する。		
参考文献	高崎みどり著「大学生のための論文執筆の手引き」秀和システム 各人のテーマにあった文献。		
評価方法	発表と討論:30% レポート:70%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
修了論文にむけたレポート作成		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○イギリスの文化や歴史について、アカデミックなレベルで議論を組み立てることができるようになる。</p> <p>○イギリスの文化や歴史について学んだことをもとに、自分自身にとっての「問題」をつかみとる。</p> <p>○自分自身が設定した「問題」を探求し、文献を用いて調査を進める。</p> <p>○修了論文にむけた準備として、テーマ設定の内容を明確に文章化してレポートを作成する。</p>		
授業の概要	<p>イギリスの文化や歴史にかんするテーマで修了論文を書く学生を対象として、次年度の論文作成にむけた指導を行う。まず学生各人に関心のあるテーマを提示させ、イギリス史やイギリス文化の研究史においてそれらがどのような位置にあるのか、従来の解釈にたいしてどのように新たな視点を加えることができるのかについて討議する。その上で、専攻科の講義科目で学んだ内容と関わらせながら、さらにテーマを絞り込み、課題を決定し、修了論文にむけた準備としてレポートを完成させる。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	論文を書くための文献調査法	
	第3回	論文作成にむけた個別指導（1）	
	第4回	論文作成にむけた個別指導（2）	
	第5回	論文作成にむけた個別指導（3）	
	第6回	論文作成にむけた個別指導（4）	
	第7回	中間発表（1）	
	第8回	中間発表（2）	
	第9回	中間発表（3）	
	第10回	中間発表（4）	
	第11回	論文執筆における個別指導（1）	
	第12回	論文執筆における個別指導（2）	
	第13回	論文の形式の確認	
	第14回	論文個別リライト指導（1）	
	第15回	論文個別リライト指導（2）	
準備学習 (予習・復習等)	<p>修了論文を完成させるには、対象についての調査だけでなく、適切な方法や史料の確定、先行研究の吟味、自分のとるべき立場の検討など、さまざまなプロセスが必要とされる。テーマ設定の段階から、これらの作業をひとつずつ進める必要があるが、基本的には授業時間外での学習の厚みによって最終的な修了論文の出来が決まってくるので、自主的に取り組んでいくこと。</p>		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	中間発表:30% 論文作成過程:30% 修了論文準備レポート:40%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
プロダクトデザインを提案する		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	デザインに目を向けることにより、ヒトとモノとコトの関係をより深く理解する。 道具やシステムに内在する問題点や可能性の中からデザインの目標を設定し、構想・試作あるいは比較評価をしながら、ものづくりの基本をより深く理解する。		
授業の概要	各自がプロダクトデザインに関連するテーマを設定する。 テーマに応じて比較観察、原型の試作、実現した際の効果予測、デザインの具体化または最も注目すべき点を中心とした考察などを適宜進めていく。		
授業計画	第1回	ガイダンス：各自の日常感覚から	
	第2回	テーマの決定	
	第3回	テーマに基づくアプローチ：調査または構想の開始	
	第4回	テーマに基づくアプローチ：経過と方針検討、選択肢の確認	
	第5回	テーマに基づくアプローチ：経過と方針の再確認、選択肢の再確認	
	第6回	テーマに基づくアプローチ：中間報告	
	第7回	考察・制作：必要な修正に基づく実現方法の確認	
	第8回	考察・制作：修正後の状況報告	
	第9回	考察・制作：重点の絞り込み	
	第10回	考察・制作：重点についての状況報告	
	第11回	考察・制作：完成予想と不足部分の確認	
	第12回	考察・制作：不足部分の補いと完成度を上げる	
	第13回	最終チェック	
	第14回	現在までのまとめ	
	第15回	発表・講評会	
準備学習 (予習・復習等)	道具やシステムの中からテーマを見つけるためには、日頃の生活行動に伴う身体感覚も重要である。テーマの実現については常識にとらわれることなく、基本からの発想力と現状の技術的な制約にとらわれない目標設定が求められる。日常観察を研ぎ澄ませることがこれらに対応する必要条件となる。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:40% 期末提出物:60%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
法と社会倫理：社会比較の観点から		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	「法と社会倫理」に関するテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。		
授業の概要	まず学生各人が関心を持つ現代日本社会の課題について、法と社会倫理の観点からその課題がどのように位置づけられるかについて検討・討議する。その際、日本以外の社会との比較の観点も考慮に入れて検討を加えていく。そして専攻科の講義科目で得た知見と結びつけつつ、さらにテーマを絞り、修了論文の主題を仮決定する。その後、論文の構成と内容、文献の読み方とまとめ方等について具体的に指導し、修了論文に向けた中間報告レポートを作成する。		
授業計画	第1回	現代日本社会の課題を列挙	
	第2回	現代日本社会の課題の理解	
	第3回	現代日本社会の課題と法	
	第4回	現代日本社会の課題と倫理	
	第5回	現代日本社会の課題の社会比較	
	第6回	論文テーマの絞り込み	
	第7回	テーマの論点整理(法と社会倫理、社会比較の観点から)	
	第8回	一つ目の論点に関する文献のまとめ	
	第9回	一つ目の論点に関する報告と討論	
	第10回	二つ目の論点に関する文献のまとめ	
	第11回	二つ目の論点に関する報告と討論	
	第12回	三つ目の論点に関する文献のまとめ	
	第13回	三つ目の論点に関する報告と討論	
	第14回	レポート仮提出とブリーフィング	
	第15回	レポート提出と振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	予め指示された課題(文献を読んでくる、報告を用意する、レポート原稿を指示されたところまで書いてくる、など)を準備して授業に臨むこと。授業後は、質問されたり指摘された点について、より詳しく調べ、より深く考えていくこと。		
テキスト	適宜指示する。		
参考文献	葛生・河見・伊佐『新・いのちの法と倫理』（法律文化社） 河見『自然法論の必要性和可能性』（成文堂）		
評価方法	レポート:75% 授業への参加度合い:25%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
英語教育と英語社会論		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>1) 講義と論文講読を通して、英語教育と英語社会論の分野に関する専門知識を習得すること。</p> <p>2) これらの分野の中から修了論文のテーマを探すこと。</p>		
授業の概要	<p>教員による講義と学生による論文紹介を交互に行う。講義で取り上げるテーマは以下の授業計画の通り。学生は、短大・大学や学会の紀要から論文を一つ選び、授業で紹介する。論文紹介の際、教員は論文の内容や発表に関する補足説明を行う。ただし論文紹介の順序は必ずしも授業計画の通りでなくても構わない。</p>		
授業計画	第1回	Introduction : 英語教育と英語社会論の研究テーマ、修了論文について	
	第2回	英語教育の目的 : 実用主義と教養主義、道具的動機と統合的動機	
	第3回	論文講読 1 英語社会論の論文①	
	第4回	英語帝国主義とWorld Englishes	
	第5回	論文講読 2 英語社会論の論文②	
	第6回	英語習得理論 : 英語習得 = 英語学習 + 英語使用	
	第7回	論文講読 3 英語習得理論に関する論文	
	第8回	英語教授法 : 文法訳読法と直接教授法	
	第9回	論文講読 4 英語教授法に関する論文①	
	第10回	英語教授法 : communicative approaches、natural approach、他	
	第11回	論文講読 5 英語教授法に関する論文②	
	第12回	早期英語教育	
	第13回	論文講読 6 早期英語教育に関する論文	
	第14回	望ましい英語教育とは？	
	第15回	振り返りとまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>受講者は授業で取り上げる論文を事前に読んで、内容を把握しておくこと。</p> <p>発表者は、論文の内容を簡潔に分かりやすくまとめたハンドアウトを作成すること。</p>		
テキスト	特に定めない。プリントを使用する。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業参加:20% 中間レポート:40% 期末レポート:40%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
アメリカ史・アメリカ研究の修了論文にむけて		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	自分が関心を抱いているテーマに関連する文献・資料を収集し、論文の問いを設定する。文献や資料の検索・収集方法、先行研究のレビュー、資料の読み方、議論の組み立て方など、論文作成に必要な技術を学び、修了論文にむけたレポートを完成させる。		
授業の概要	研究報告・参加者とのディスカッション・個別指導を中心に進めます。		
授業計画	第1回	はじめに：これまでの研究成果の報告	
	第2回	文献・資料の検索、文献リストの作成	
	第3回	研究報告（1）	
	第4回	研究報告（2）	
	第5回	研究報告（3）	
	第6回	先行研究のレビュー、問題設定、章立て案	
	第7回	草稿作成・個別指導（1）	
	第8回	草稿作成・個別指導（2）	
	第9回	草稿作成・個別指導（3）	
	第10回	草稿へのコメント会	
	第11回	レポート執筆・個別指導（1）	
	第12回	レポート執筆・個別指導（2）	
	第13回	レポート執筆・個別指導（3）	
	第14回	修了論文にむけたレポート提出	
	第15回	研究成果報告会	
準備学習 (予習・復習等)	前期から自分の関心のあるテーマについて文献を収集し、文献リスト作成・先行研究のレビュー・論文の問いの設定に取り組んでおくこと。最初の授業でその成果を発表してもらう。		
テキスト	なし。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% 修了論文レポート:60%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
修了研究演習 I ―古典文学篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○2年次の修了論文にむけて、年度末中間レポートを提出することができる。 ○後期開始に夏期草稿を用意することができる。 ○全体発表における質疑・討論の知見を完成稿に織り込むことができる。 ○自己の創見を求めて作品・テーマに取り組むことができる。 		
授業の概要	<p>2年間による修了論文の完成を最終課題とする予備授業である。対象作品の範囲は古典文学の全領域。後期科目だが、年度末の中間レポート提出から逆算して、遅くとも4月初旬までには担当予定教員と相談することが必要。授業形態は、個人面談と全体授業とを併用。個人面談では、進捗・方法・論点等の相談に充てる。全体授業のばあい、全員の意見交換を中心とする形態をとる。なお、専攻科現代教養専攻と多元文化専攻の合併クラスの形となる。切磋琢磨によって各自の修了論文が格上げされることを期待する。</p>		
授業計画	第1回	全体授業(前半) 発表会①、情報交換と既存草稿の要旨発言。／個人面談(後半)、既存草稿・後期計画書を提出。ワーク・シート配布。	
	第2回	個人面談。既存草稿・後期計画書の検討と修正相談。ワークシート点検。	
	第3回	個人面談。全体授業むけ発表資料草稿の提出。計画進捗の軌道化を点検。ワークシート点検。	
	第4回	全体授業、発表会②。レポーター発表と全員による相互検討。持ち帰り課題の確認。ワークシート点検。	
	第5回	全体授業。第4回の持ち帰り課題についてのフォローアップ③。	
	第6回	個人面談。小中項目着眼カードの提出と吟味。ワークシート点検。	
	第7回	個人面談。小中項目着眼カードの追加提出。カード分類練習と予定目次の試作。	
	第8回	全体会、進捗発表と情報交換。個人面談。レポート目次の提出と既存草稿の提示。	
	第9回	個人面談。レポート第1次草稿の仮提出。	
	第10回	個人面談。レポート仮提出1次草稿の修正相談。	
	第11回	個人面談。レポート2次草稿の提示と正式提出の可否確認。	
	第12回	個人面談。全体発表会むけ発表資料の提出と修正相談。	
	第13回	個人面談。全体発表会用の資料提出。	
	第14回	全体授業。最終全体発表会④。	
	第15回	個人面談。総括、多元文化2年目の研究展望・相談。	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ○[事前準備としての夏期草稿]後期開始前に草稿(400字詰換算15枚)を作成。 ○[本文読書]立論の前提として、作品の本文を多読する(解説書・梗概・インターネットに依存した文学論は下策)。 ○[ワークシート]本文読書に連動して記入作成。 ○[全体発表会]①から④まで計4回。発表資料の作成と発表準備が必要。 ○[個人面談]適宜、指示に従って、書式記入や提出物のリクエストがある。 		
テキスト	共通テキストなし。各自のテーマ・作品により異なる。本文テキストは自前の文庫本を必ず購入する(手元常備や書き込みのため)。		
参考文献	個人別に適宜紹介の予定。		
評価方法	年度末中間レポート:20% 夏期事前草稿:10% 進捗本文の蓄積:30% 個人面談の活用・成果:30% 全体会の参加・発言:10%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
歴史の方法論とその実践		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標及びテーマ	各自の問題関心に基づいた研究テーマを決め、その歴史的経過と現代的意味を探る。研究の現状と課題をふまえながら調査・検証を進め、独創的な研究へと発展させるための基礎的作業を積み重ね、研究・調査の成果をレポートにまとめる。		
授業の概要	研究テーマの決定、先行研究の調査、研究課題の分析・検討、史料の読解など、論文作成に関する総合的な指導を行う。毎回、各自は研究の進行状況の報告を行い、全員による活発な討論を通じて研究を深め、客観的な観点を培いながら研究レポートを完成する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	準備作業① テーマの発見	
	第3回	準備作業② テーマを絞る	
	第4回	準備作業③ 調査・研究の方法論について	
	第5回	準備作業④ 文献目録の作成	
	第6回	研究報告：グループ①	
	第7回	研究報告：グループ②	
	第8回	研究報告：グループ③	
	第9回	研究報告：グループ④	
	第10回	中間報告	
	第11回	研究報告：グループ①	
	第12回	研究報告：グループ②	
	第13回	研究報告：グループ③	
	第14回	研究報告：グループ④	
	第15回	研究レポート完成発表会	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する研究調査報告シートに研究結果や今後の課題、問題点などをまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	研究テーマに応じて適宜指示する		
評価方法	報告、シート記述など:50% 研究レポート:50%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
修了論文作成に向けて (1)		齋藤 修三 (さいとう しゅうぞう)	
授業の到達目標 及びテーマ	「米文学」「英語詩」「アメリカ研究」「平和学」等に関するテーマで修了論文を書く予定の学生を対象として、レポート・論文作成に向けた指導を行う。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・領域やテーマの絞り込み ・リサーチ指導 ・書式指導 ・レジュメを用いた資料報告 ・引用や要約の仕方を含むパラグラフ作文指導 ・論文構想 		
授業計画	第1回	導入～テーマ候補、ブレインストーミング、資料リスト作成、情報カードについて	
	第2回	メールレポート (パラグラフ作文) 講評、リサーチ指導、資料研究、カード作成	
	第3回	メールレポート講評、リサーチ指導、資料研究、ブレインストーミング、カード作成・報告	
	第4回	メールレポート講評、マインドマップ、テーマ絞り込み、リサーチ報告、カード報告、資料研究	
	第5回	メールレポート講評、マインドマップ、テーマ決定、リサーチ報告、カード報告、資料研究、書式指導	
	第6回	メールレポート講評、リサーチ・カード報告、資料研究、書式指導	
	第7回	メールレポート講評、資料研究、書式指導	
	第8回	構想指導 1	
	第9回	構想指導 2	
	第10回	序文指導	
	第11回	中間報告 1	
	第12回	中間報告 2	
	第13回	中間報告 3	
	第14回	推敲、仕上げ	
	第15回	修了論文に向けたレポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. メールレポートによるパラグラフ作文&推敲 2. 資料リスト作成・資料報告準備 3. 中間報告用レジュメと報告準備 4. 修了論文に向けたレポート提出 		
テキスト	こちらでプリントする		
参考文献	随時紹介		
評価方法	修了論文中間レポート:60% メールレポート:10% 中間報告:20% 他、提出物:10%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
修了論文を書こう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文作成に向けたゼミである。自らの研究関心を深め、具体的なテーマを定めることが最大の課題となる。期末段階では、テーマに即した中間レポートを課す。		
授業の概要	具体的には、①各人が関心を持つ主題について、教育学的観点からの位置づけを明らかにし、②関連する文献資料目録を作成しつつテーマを絞り、修了論文の題目を決定し、③論文の構成、内容を決定し、そのアウトラインを書けるところまで到達することが目標となる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	各自の研究関心の交流①	
	第3回	各自の研究関心の交流②	
	第4回	学生による個別発表①	
	第5回	学生による個別発表②	
	第6回	学生による個別発表③	
	第7回	学生による個別発表④	
	第8回	論点別の講義①	
	第9回	論点別の講義②	
	第10回	論点別の講義③	
	第11回	学生による個別発表⑤	
	第12回	学生による個別発表⑥	
	第13回	学生による個別発表⑦	
	第14回	学生による個別発表⑧	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	授業のほとんどが学生による発表であるため、事前の準備が決定的に重要である。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	そのつど提示する。		
評価方法	発表:30% レポート:70%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
近現代文学研究		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・近現代の文学を対象とし、各自の問題関心に沿って調査・研究をすすめ、修了論文を作成します。 ・諸作業を通じて、作品を取り巻く状況に理解を深め、文学作品を丁寧に読み解きます。 ・また長い文章を論理的に構築し、わかりやすく適切に表現する技術を身につけます。 		
授業の概要	各自研究テーマ・問題設定をします。それに基づいて文献調査・分析をし、自分なりの独自の結論を導き出す作業を各自行い、口頭発表と討論をします。		
授業計画	第1回	研究テーマの設定	
	第2回	文献調査法指導	
	第3回	テーマ1についての文献調査	
	第4回	テーマ1についての成果報告	
	第5回	テーマ2についての文献調査	
	第6回	テーマ2についての成果報告	
	第7回	テーマ3についての文献調査	
	第8回	テーマ3についての成果報告	
	第9回	テーマ4についての文献調査	
	第10回	テーマ4についての成果報告	
	第11回	補完調査・研究その1	
	第12回	補完調査・研究その2	
	第13回	成果をレポートにまとめる1	
	第14回	成果をレポートにまとめる2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、文献調査、対象研究。		
テキスト	その都度指示します。		
参考文献	その都度指示します。		
評価方法	調査・研究:40% 発表・報告:20% 期末レポート:40%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
日英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善提案などをテーマとする修了論文の作成		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標及びテーマ	音声、文字、意味、文法・語法、発想などの様々な側面に関する日本語と英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善への提案などをテーマとして修了論文を作成しようとする学生を対象に、その論文を作成するための基本的事項を確認し、論文作成の準備のための指導を行います。		
授業の概要	論文作成のための基本的事項の確認については、各授業テーマに関する知識を基にしたディスカッションが中心となります。論文作成の準備に関しては、課外の時間帯に必要に応じて適宜行われる個人指導での、修了論文のテーマの絞り込み、研究方針の確認、参考文献の特定方法・扱い方・まとめ方の確認などが中心となります。また、修了論文作成を念頭に置いて、その中間報告的な期末レポートを書いてもらいます。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	日英語の音声	
	第3回	日英語の文字	
	第4回	日英語の語と意味	
	第5回	日英語の文法・語法	
	第6回	日英語の発想	
	第7回	英和・和英辞典の音声の記述方法	
	第8回	英和・和英辞典の語の扱い方	
	第9回	英和・和英辞典の意味の記述方法	
	第10回	期末レポートの中間発表と講評	
	第11回	英和・和英辞典の文法・語法の記述方法	
	第12回	英和・和英辞典の発想の扱い方	
	第13回	英和・和英辞典の限界	
	第14回	期末レポートの発表と講評	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく調べて考えてきて下さい。また、修了論文またはその基になる期末レポートの作成に向けては定期的に相談し、指導を受けるようにして下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業への参加度:25% 期末レポート:50%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
社会心理学の先行研究を調べてレビューをまとめる		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) 社会心理学の研究知見を理解する。 (2) 社会心理学の論文の読み方を知り、概要をつかめるようになる。 (3) 先行研究を調べてレビューをまとめられるようになる。		
授業の概要	基本的に演習形式で行なう。社会心理学の実証研究論文を用いて、論文の読み方や研究の実際を理解する。その後は各自のテーマに沿って調べたものを発表し、全員でディスカッションを行なう。 お互いにコメントしあうことで各自の研究を深める。 授業外の時間も大量に使って自主的に作業を進めることが必須である。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	社会心理学の研究テーマ概説	
	第3回	研究テーマ候補の設定	
	第4回	関連研究の検索	
	第5回	関連研究の理解	
	第6回	関連研究の検討	
	第7回	研究テーマの設定	
	第8回	先行研究の検索	
	第9回	先行研究の理解	
	第10回	先行研究をまとめる視点の検討	
	第11回	先行研究の吟味	
	第12回	先行研究をまとめる視点の決定	
	第13回	先行研究のさらなる検索	
	第14回	先行研究のさらなる理解	
	第15回	研究の方向性の検討	
準備学習 (予習・復習等)	本科で社会心理学の授業を受講していればその復習を、していなければ自分で社会心理学の薄いテキストを読み通しておくこと。 (参考として、吉田・元吉 (2010) 『体験で学ぶ社会心理学』ナカニシヤ出版/和田 (2010) 『ミニマムエッセンス社会心理学』北大路書房 など) 授業中は発表とディスカッションを行なうので、発表の準備やディスカッションを踏まえて自分の研究を見直すことなどは授業の前後に必須である。		
テキスト	都筑学 (2006) 『心理学論文の書き方 おいしい論文のレシピ』有斐閣		
参考文献	松井豊 (2006) 『心理学論文の書き方』河出書房新社/戸田山和久 (2012) 『新版 論文の教室』NHK出版/このほか適宜紹介する。		
評価方法	レポート:50% 課題への取り組み:50%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
学生自身のテーマの研究と修了論文作成		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標 及びテーマ	データや諸論を研究し独自の視点をもった内容の修了論文作成を目標とする。テーマは食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関して学生が関心を持つ領域を選び相談の上で決定する。		
授業の概要	食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関するテーマで修了論文作成に向けた指導を行う。まず、学生が関心を持つ主題について、食品科学、栄養学、食品開発や法律、政治、経済の観点からどのように位置づけられるかについて討議し、これまでの学習や専攻科の講義課目の学習で得た知見とを結びつけつつ、更にテーマを絞り、修了論文の課題を決定する。その後課題に対する学生の研究の進み方をチェックしより高い内容の研究へと導き、論文の構成と内容、まとめについての指導を行い、論文を完成させる。		
授業計画	第1回	研究テーマの選定	
	第2回	テーマ関連事項の研究 1	
	第3回	テーマ関連事項の研究 2	
	第4回	テーマ関連事項の研究 3	
	第5回	テーマ関連事項の研究 4 ならびにテーマの決定	
	第6回	テーマ関連事項の研究 5	
	第7回	テーマ関連事項の研究 6	
	第8回	テーマ関連事項の研究 7	
	第9回	テーマ関連事項の研究 8	
	第10回	テーマ関連事項の研究 9	
	第11回	テーマ関連事項の研究 10	
	第12回	論文執筆 1	
	第13回	論文執筆 2	
	第14回	論文執筆 3	
	第15回	中間提出	
準備学習 (予習・復習等)	毎回のディスカッションをスムーズに進めるため、自身の研究を進展させ報告の準備を行う。		
テキスト	特に指定はしない		
参考文献	毎回の授業の中で示します。		
評価方法	授業への積極的な参加:40% 論文:60%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
デザイン造形による作品制作		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標及びテーマ	デザインに求められる普遍的な造形美の探求により、本科で目標とした他者とのコミュニケーションする段階から、さらに他者の精神に働きかけ共感を得る域に達する表現力を身につけることを目標とする。I ではプレ修了制作として小作品を制作し、そのプロセスを通してデザインの思考方法を体得する。		
授業の概要	まず本科の学び、前期の造形演習を通して絞り込んだテーマのもとにプレ修了制作としての作品の構想を練る。次にその構想にもっとも適した表現手法を決定し、制作手順を計画し、十分な試作を経て作品としての完成度を高める。		
授業計画	第1回	ガイダンス／プレ修了制作テーマの提示／作品制作計画案作成	
	第2回	作品のコンセプト、表現手法の提示	
	第3回	作品のコンセプト、表現手法の決定	
	第4回	作品の構想 1	
	第5回	作品の構想 2／サイズの決定	
	第6回	作品の試作 1	
	第7回	作品の試作 2	
	第8回	作品の試作 3／中間発表、試作の確認・決定	
	第9回	作品制作 1 (下描きなど)	
	第10回	作品制作 2 (下描きなど)	
	第11回	作品制作 3 (着彩など)	
	第12回	作品制作 4 (着彩など)	
	第13回	作品制作 5 (着彩など)	
	第14回	講評会	
	第15回	まとめ／修了制作テーマの提示	
準備学習 (予習・復習等)	あらかじめ決めた研究テーマの元に、作品のプランをイメージしておくこと。 中間発表のために構想図、試作などを整理する。 授業時間は経過の確認と指導にあてるので、時間外に制作を進めることが必要になる。 最後に作品についてのレポートをまとめる。		
テキスト	必要に応じて配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% レポート:20% 作品:50%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
近現代文学研究		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治期以降の文学、批評、メディアを対象として研究を深めます。過去の著名な作家はほとんど、書く作業の苦しみを呪うように日記に書き付けています。にもかかわらず「書く」のは、そこに「こだわり」があるからなのでしょう。テキストと対峙しながら「みずから自身のなかのこだわり」をいっそう深く掘りすすめてください。論文の完成が最終的な到達目標です。		
授業の概要	みずからの問題意識がなにより大切です。そこから対象となるテキストに問いかけ、解決と同時に新たな問いを得るというプロセスのくり返しから、ノートをふくらませていきます。(各国)文献の所在、資料調査の仕方については、どの時点でも案内します。読み続け、書き続け、早い時期に10枚、晩秋に25枚までは到達させます。		
授業計画	第1回	はじめに	
	第2回	研究課題に先立つ動機付けについて	
	第3回	動機付けの意識化と社会化	
	第4回	テーマの選定—問題意識を固めるI (図書館の活用)	
	第5回	テーマの選定—問題意識を固めるII (図書館の活用)	
	第6回	テキストの確定	
	第7回	論文作成の方向づけ、課題設定について	
	第8回	調査研究・論文作成1—先行研究を収集・系統化する (図書館)	
	第9回	調査研究・論文作成2—先行研究を収集・系統化する (古書店)	
	第10回	調査研究・論文作成3—テーマの追究・深化 I	
	第11回	調査研究・論文作成4—テーマの追究・深化 II	
	第12回	調査研究・論文作成5—各論の展開I	
	第13回	調査研究・論文作成6—各論の展開II	
	第14回	草稿の提出・検討	
	第15回	論文講評	
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。		
テキスト	個別に指示します。		
参考文献	個別に指示します。		
評価方法	論文内容:70% 中間報告など作成過程における達成:30%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
論文を書く		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	論文のテーマに応じ、文献調査し、研究し、考察し、執筆する。 前期からテーマについては相談する。		
授業の概要	演習形式で行う。		
授業計画	第1回	比較文化研究法について	
	第2回	大まかなテーマを決め文献調査	
	第3回	文献を読み、検討する	
	第4回	論文のテーマの絞り込み	
	第5回	さらに文献を集める	
	第6回	方法について検討する	
	第7回	目次を確定する	
	第8回	論文の一部を書き下ろし提出する	
	第9回	提出した部分についてのディスカッション	
	第10回	論文についての中間発表	
	第11回	註について	
	第12回	論文の仮提出	
	第13回	論文についてのディスカッション	
	第14回	論文の完成版の提出	
	第15回	論文についての口頭発表	
準備学習 (予習・復習等)	文献調査、論文執筆など、自立して研究を進めること。		
テキスト	論文テーマに応じて定める。		
参考文献	論文テーマに応じてリストアップする		
評価方法	議論参加:30% 論文:70%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
法学の修了論文作成へ向けて		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	法学の修了論文を書くための準備のレポートをしあげることが到達目標である。テーマの選定から、文献の検索・調査、考えること、文章にまとめること、仕上げまで、頑張ってやって頂く。もちろん、各段階において、相談にのり、指導を行う。		
授業の概要	テーマの選定から、調べ物の途中経過、関連する問題などの調査、文章によるまとめまで、寄り添って指導することになる。厳しめの指導になることが予想されるので、覚悟を決めて履修していただきたい。		
授業計画	第1回	テーマの選定 個人の興味などの相談	
	第2回	テーマの選定 いくつかの候補の選定	
	第3回	文献の調査報告レポートと指導 グループ1	
	第4回	文献の調査報告レポートと指導 グループ2	
	第5回	文献の調査報告レポートと指導 グループ3	
	第6回	文献の調査報告レポートと指導 グループ4	
	第7回	文献の調査報告レポートと指導 グループ5	
	第8回	論文の途中報告と論文指導	
	第9回	論文の途中報告と論文指導 グループ1	
	第10回	論文の途中報告と論文指導 グループ2	
	第11回	論文の途中報告と論文指導 グループ3	
	第12回	論文の途中報告と論文指導 グループ4	
	第13回	論文の途中報告と論文指導 グループ5	
	第14回	レポートの提出としあげ	
	第15回	レポートとチェック	
準備学習 (予習・復習等)	論文を書くためには、入念な下調べ(単にネットなどで検索するだけでなく、図書館で資料にあたること)と、テーマに対する深い愛情が必要。この問題については自分が一番よく知っており、考え抜いていると言うところまで悩んで欲しい。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	特に指定しません。おりにふれて、指示します。		
評価方法	論文指導の途中経過:50% レポートの出来:50%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
現代文化の特質とその重層的構造		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「自然」「技術」「人間社会」「表現」などを中心に様々な文化を重層的に見て、そこに現れた現代現象から問題を探っていく。先ず現代をどう見るかが出発点として重要であろう。現代の様々な現象から日本現代社会の特徴を提示し、自己が場とする文化的思想に注目する。そこを場として比較すべき他の文化や他の考え方を書物、知的情報から探し出し、中心とすべき概念を絞って論文のテーマを見つけていく。修了論文の完成に向けて準備をする。		
授業の概要	修了論文の完成を目指して1年目に行うべき研究を計画的に行う。広い視野から文献検索をし、多様な視点からの該当文献を見つけ、読解、内容検討をする。議論を重ねながら他の学生と対話をして、他の文化圏でのその問題の広がりを見つけ、これらをカバーする問題領域を新しい視点で論じる。論理的展開を構造的に構築する。		
授業計画	第1回	論文テーマ決定のために多様な視点での文献検索	
	第2回	テーマの複数の可能性とその広がり検討	
	第3回	論文テーマを複数のグループに分け、その内的連関の発見	
	第4回	中心的テーマと周辺の副次的テーマとの分類と検索	
	第5回	論文執筆の年間日程の検討と決定	
	第6回	文献の読解と解釈の可能性	
	第7回	論文テーマの絞り込みと決定	
	第8回	文献の読解と報告(1)	
	第9回	文献の読解と報告、発表(2)	
	第10回	文献の読解と報告、発表(3)	
	第11回	論文の構造の検討(1)	
	第12回	論文の構造の検討(2)	
	第13回	他の問題領域との接点の明確化—批判的考察に向けて	
	第14回	新たな文献の検討—重層的な展開を求めて	
	第15回	1年間の研究の「まとめ」と次年度に向けての新たな展開の可能性	
準備学習 (予習・復習等)	必ず出席すること。論文テーマの研究を深めるために毎回研究計画に沿って文献を事前に読んでくること。文献の解釈を必ずノートに記録して、質の高いノートを作成する。授業後は毎回「まとめ」を作成する。時としてこのノート或いは「まとめ」の提出を求める。		
テキスト	適宜プリントを配布する。必要に応じてテーマに即して講義することもある。		
参考文献	適宜紹介し、その解釈のレポートの報告を求める。		
評価方法	論文及びレポート:80% コミュニケーション力:20%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
人間活動と環境との関わり		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標及びテーマ	暮らしと密接に関連する環境の諸問題 –エネルギー、廃棄物、有害化学物質、温室効果ガス等– について、講義、文献調査あるいはデータ解析などを通して理解を深めます。		
授業の概要	種々の環境問題の中から、文献調査や意見交換を通して修了論文に向けたレポートの課題を決めます。文献調査の段階でまず簡単なレポートを作成し、その後関心を持った個別課題について調査研究を行い、レポートにまとめるとともに、レポートの発表会を行います。		
授業計画	第1回	環境問題の概説(大気)	
	第2回	環境問題の概説(水質)	
	第3回	環境問題の概説(温暖化)	
	第4回	環境問題の概説(エネルギー)	
	第5回	文献調査の課題の選択	
	第6回	文献調査の指導	
	第7回	文献調査の報告	
	第8回	修了論文に向けたレポートの課題の選択	
	第9回	修了論文に向けたレポート課題の指導 I	
	第10回	修了論文に向けたレポート課題の指導 II	
	第11回	修了論文に向けたレポート課題の指導 III	
	第12回	修了論文に向けたレポートのとりまとめ I	
	第13回	修了論文に向けたレポートのとりまとめ II	
	第14回	修了論文に向けたレポートの発表の準備	
	第15回	修了論文に向けたレポートの発表会	
準備学習(予習・復習等)	テーマごとに参考文献を通読しておくこと。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	テーマにより個別に紹介する。		
評価方法	文献調査のレポート:40% 修了論文向けレポート:60%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
社会と情報		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「社会と情報」に関して、各自テーマを決めて論文を執筆する。そのプロセスのなかで、分析的に見る力、批判的に読む力、考察する力、表現する力等を身につけることを目的とする。		
授業の概要	前期の「情報社会論」の講義内容を踏まえ、情報社会学に関する幅広い領域のなかから、各自、関心のあるテーマを見つけ、概論的文献により概略を把握し、先行研究を網羅的に検索・収集する。収集した文献を読みながらディスカッションすることを通して、考察を深めていく。		
授業計画	第1回	テーマの設定	
	第2回	先行研究をさぐる	
	第3回	文献検索	
	第4回	文献収集	
	第5回	文献を読む（1）論点をさぐる	
	第6回	文献を読む（2）他者の考えを理解する	
	第7回	文献を読む（3）自分の考えを成立させる	
	第8回	論文の構成を考える	
	第9回	論文を執筆する（1）導入部分について	
	第10回	論文を執筆する（2）本論	
	第11回	論文を執筆する（3）本論・まとめ	
	第12回	論文を執筆する（4）まとめ・参考文献等	
	第13回	原稿の推敲（1）構成	
	第14回	原稿の推敲（2）論点	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	先行研究を読みながら、どのように記録してどのようにまとめていくとよいか、自分なりのスタイルを確立すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	論文作成への取り組み:30% 論文の内容:70%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
修了論文作成に向けて (1)		松村 伸一 (まつむら しんいち)	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文作成に向けた準備を進め、中間報告を作成する。より多く・より良く「読む」力を身につける。		
授業の概要	イギリス文学（主に19世紀以前の作品）に関わるテーマでの論文執筆を希望する者を受け入れたい。基本的に、個別もしくは類似テーマでのグループ指導。履修予定者は、授業開始時までに仮の参考文献リストと読書ノートを作成しておくこと。授業期間中には、指定された文献（文学作品と批評書）などの読書メモを提出し、コメントを受けるという作業をくり返す。必要に応じて、英語文献の読解チェックも行う。		
授業計画	第1回	テーマの焦点と広がり（知っていること・知るべきことの確認）	
	第2回	テーマの焦点と広がり（課題図書候補の検討）	
	第3回	文学作品読書メモの提出とコメント：全体要約	
	第4回	文学作品読書メモの提出とコメント：部分要約	
	第5回	文学作品読書メモの提出とコメント：細部を掘り下げる（事項調べ）	
	第6回	文学作品読書メモの提出とコメント：細部を掘り下げる（パラフレーズ）	
	第7回	文学作品読書メモの提出とコメント：批評的アプローチの試み	
	第8回	批評書読書メモの提出とコメント：全体要約	
	第9回	批評書読書メモの提出とコメント：部分要約	
	第10回	批評書読書メモの提出とコメント：細部を掘り下げる（事項調べ）	
	第11回	批評書読書メモの提出とコメント：細部を掘り下げる（パラフレーズ）	
	第12回	批評書読書メモの提出とコメント：批評的アプローチの試み	
	第13回	関連分野読書メモの提出とコメント：テーマを広げる	
	第14回	関連分野読書メモの提出とコメント：テーマを掘り下げる	
	第15回	修了論文に向けた中間報告と文献リストの作成	
準備学習 (予習・復習等)	予習：指定文献を読み、指示を参考に読書メモを作成する。 復習：コメントを参考に読書メモを見直す。		
テキスト	プリントなど		
参考文献	随時指示する。		
評価方法	平常点（提出課題）：75% 中間報告（期末レポート）：25%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
情報科学		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	「情報処理技術」「情報通信技術」は社会全般に大きなインパクトを与えるものになってきています。技術に関する課題に対しては当然、工学的なアプローチでの研究が中心になりますが、技術の進歩が及ぼす影響に関しては「情報社会」「情報倫理」「知的所有権」など社会科学的な視点でのアプローチが必要です。この演習は広義の情報科学分野の課題をテーマに修了論文を執筆します。		
授業の概要	各自が設定したテーマに即して、演習での発表、個別指導とおして修了論文の骨子をまとめます。		
授業計画	第1回	演習の進め方、論文執筆要領確認	
	第2回	修了論文概要発表と討論①	
	第3回	修了論文概要発表と討論②	
	第4回	個別指導①	
	第5回	個別指導②	
	第6回	個別指導③	
	第7回	個別指導④	
	第8回	中間発表と討論①	
	第9回	中間発表と討論②	
	第10回	個別指導⑤	
	第11回	個別指導⑥	
	第12回	個別指導⑦	
	第13回	個別指導⑧	
	第14回	修了論文まとめ	
	第15回	修了論文口頭発表	
準備学習 (予習・復習等)	各自が設定したテーマに即して、演習での発表、個別指導とおして卒業論文を完成させます。ゼミ内での討論やコメント、個別指導の内容をよく吟味し、論文作成の参考にしてください。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	適宜紹介します。		
評価方法	修了論文:70% 発表と討論への参加:30%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
身体表現・身体文化・舞踊文化に関するテーマで調査研究を行う		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○ 身体表現・身体文化・舞踊文化に関するテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。</p> <p>○ 日本と西洋の身体表現・身体文化・舞踊文化の歴史や、現代社会における位置づけをめぐって討論する。それらの結果と専攻科の演習において体得した経験とを結びつける中で、自分のテーマを絞り修了論文に向けたレポートの作成に向けて指導を行う。</p>		
授業の概要	<p>○ それぞれの関心に沿って具体的なテーマを決め、論文作成のために各自作業を行っていく。その中で、論文の構成と内容、文献の読み方とまとめ方等について具体的に指導していく。</p> <p>○ 途中経過報告を行い、それに対する質疑応答やミニレクチャーを行う。自らの必要な作業は何なのかを明確にし、独自性や妥当性を論証する具体的な方法を身につけていく。最終的には、修了論文に向けたレポートを提出する。</p>		
授業計画	第1回	本演習の進め方の解説を行う。自己紹介をし合い、信頼関係を築けるようにする。	
	第2回	テーマの絞り込み1：西洋と日本の身体表現・身体文化や民俗芸能・舞踊の歴史や特徴などの理解を深める。	
	第3回	テーマの絞り込み2：現代社会における現状と課題について調べたり討論をする。	
	第4回	テーマの絞り込み3：演習で体得した経験を結びつけながら修了論文のテーマを絞り込んでいく。	
	第5回	研究テーマを紹介し合い、アドバイスし合う。	
	第6回	研究計画の発表1：テーマに沿って各人の内容報告に基づいて討論を行う。	
	第7回	研究計画の発表2：身体表現、身体文化、舞踊文化の諸問題について理解を深める。	
	第8回	研究計画の発表3：西洋と日本という視点だけではなく、ローカルに伝承されてきた舞踊にも注目することで、多角的な視野を身につけていく。	
	第9回	個別指導1：主張内容とともに、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説への言及、表現の適切性、等々の観点において確認し、論文の完成へ向けていく。	
	第10回	個別指導2：主張内容とともに、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説への言及、表現の適切性、等々の観点において確認し、論文の完成へ向けていく。	
	第11回	個別指導3：主張内容とともに、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説への言及、表現の適切性、等々の観点において確認し、論文の完成へ向けていく。	
	第12回	発表とディスカッション1：自らの考えを他者に適切かつ効果的に表現し伝達する力を身につけるため、研究発表会に向けた指導を行う。	
	第13回	発表とディスカッション2：自らの考えを他者に適切かつ効果的に表現し伝達する力を身につけるため、研究発表会に向けた指導を行う。	
	第14回	論文提出前の指導1：修了論文のレポートの最終確認を行う。	
	第15回	論文提出前の指導2：修了論文のレポートの最終確認を行う。	
準備学習 (予習・復習等)	書籍選びと参考資料集めを行う。調査（インタビュー、アンケート、市場調査、観劇などによる検討など）が必要な場合には、その準備を行う。		
テキスト	テーマに沿って、その都度紹介する。		
参考文献	テーマに沿ってその都度紹介する。		
評価方法	論文:50% 論文に向けたレポート:50%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
科学と社会の関係をテーマとする修了論文完成に向けて		八耳 俊文（やつみみ としふみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「科学と社会」ないし「科学の近現代史」に関するテーマで修了論文作成を考えている学生向け。専攻科生としてふさわしい水準の修了論文となるよう指導をおこなう。		
授業の概要	すでに卒業論文執筆の体験のある学生の場合、修了論文はその発展であり、受講生が進める作業と、それに対する指導が主となる。執筆体験のない学生の場合、論文指導をはじめの数回の授業でおこなう。		
授業計画	第1回	イントロダクション 修了研究演習 I の位置づけ	
	第2回	修了論文のテーマおよび全体の構成についての指導	
	第3回	修了論文のテーマに関する文献指導	
	第4回	修了論文に向けてのレポート（以下同様）第1章相当部分の先行研究の確認	
	第5回	第1章相当部分の構想の指導	
	第6回	第2章相当部分の先行研究の確認	
	第7回	第2章相当部分の構想の指導	
	第8回	第3章相当部分の先行研究の確認	
	第9回	第3章相当部分の構想の指導	
	第10回	第4章相当部分の先行研究の確認	
	第11回	第4章相当部分の構想の指導	
	第12回	レポートの一次稿の提出	
	第13回	改稿作業	
	第14回	レポートの完成稿の提出	
	第15回	レポートの発表会	
準備学習 (予習・復習等)	「先行研究の確認」では授業前に関連文献を読み、レジメにまとめてくること。「構想の指導」では授業前に相当部分の構想をレジメにまとめてくること。授業後はこの指導を受け、順次、執筆を進めること。		
テキスト	特になし		
参考文献	白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方』（ミネルヴァ書房、2008年）、栩木伸明『卒論を書こう』第二版（三修社、2006年）		
評価方法	レポート:80% 授業への参加度:20%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
イギリス文学研究		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	イギリス文学研究における研究方法や先行する理論・批評動向などを指導するとともに、各人の関心に合わせて修了論文で扱う具体的テーマを絞ってゆく。		
授業の概要	個人指導（チュートリアル）と草稿（ドラフト）提出を交互に繰り返す、各学期末には一定量の期末レポートを提出する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 修了論文に向けたレポート作成スケジュール確認	
	第2回	個人指導（チュートリアル） 1	
	第3回	ドラフト提出 1	
	第4回	チュートリアル 2	
	第5回	ドラフト提出 2	
	第6回	チュートリアル 3	
	第7回	ドラフト提出 3	
	第8回	チュートリアル 4	
	第9回	ドラフト提出 4	
	第10回	チュートリアル 5	
	第11回	ドラフト提出 5	
	第12回	論文作成方法指導 1	
	第13回	論文作成指導 2	
	第14回	修了論文に向けたレポート提出	
	第15回	レポート講評	
準備学習 (予習・復習等)	各自で隔週のチュートリアルに準備してのぞみ、修了論文に向けたレポート提出に備える。		
テキスト	各自の関心に合わせ、年次ごとに適宜選定。		
参考文献	授業内にて適宜指導。		
評価方法	学期末レポートの提出:60% 草稿の定期的提出:40%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
修了研究：言語学		湯本 久美子（ゆもと くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了研究論文の指導。本演習では英語意味論・英語語用論・日英語対照言語学・日英語認知言語学の分野における論文を指導する。		
授業の概要	論文執筆に関する全般的な指導はクラス単位で行うが、各自の論文については個別指導を行う予定。修了研究論文は①論文題目提出、②研究計画書、③中間報告、④最終報告を経て、⑤論文提出、⑥発表のプロセスをとる。①～④は⑤の必須要件。本演習では①、②そして③に向けての準備を行う。		
授業計画	第1回	論文演題選択に関する指導	
	第2回	論文執筆要領指導	
	第3回	①論文演題提出	
	第4回	参考文献指導	
	第5回	各自への個別指導	
	第6回	②研究計画書提出	
	第7回	研究計画発表	
	第8回	各自への個別指導	
	第9回	各自への個別指導	
	第10回	各自への個別指導	
	第11回	各自への個別指導	
	第12回	各自への個別指導	
	第13回	各自への個別指導	
	第14回	各自への個別指導	
	第15回	中間報告に向けてのレポート提出	
準備学習 (予習・復習等)	修了論文執筆準備①～②そして③への準備		
テキスト	特定のテキストは用いない		
参考文献	受講生各自の論文題目に沿って個別に指導する		
評価方法	クラス貢献：20% 中間報告：80%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
キリスト教死生学—死をとおしていのちの意味を問う		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「キリスト教死生学」に関するテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。		
授業の概要	学生各自の体験を踏まえて、死生学的課題、倫理的課題と向き合い、それらがキリスト教神学的観点からどのように位置づけられるかを考察する。その際、他宗教との比較の観点を考慮に入れ、検討を加え、専攻科の講義科目で得た知見と結び付けつつ修了論文のテーマを絞り込み、中間報告レポートを作成する。医療現場、ホスピス、被災地、福祉施設、宗教施設等でのフィールドワーク等も実施する。		
授業計画	第1回	あなたの死生観	
	第2回	日本の死生観	
	第3回	「3大宗教」の死生観	
	第4回	「医療現場」の死生観	
	第5回	「3.11」後の死生観	
	第6回	論文テーマ決定に向けて	
	第7回	テーマによる報告と討議	
	第8回	テーマによる報告と討議	
	第9回	テーマによる報告と討議	
	第10回	フィールドワーク①	
	第11回	テーマによる報告と討議	
	第12回	テーマによる報告と討議	
	第13回	フィールドワーク②	
	第14回	中間報告レポート仮提出	
	第15回	中間報告レポート提出と省察	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の新聞朝刊(社は問わない)1面と社説を読んでもらうこと。 授業時に指示された課題の遂行と授業後の省察を確実にすること。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会) 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』(日本キリスト教団出版局)		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	レポート:70% 授業への参加態度:30%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
比較社会・政治学・社会思想・沖縄学にかんする修了論文の作成のための論文執筆準備		輪島 達郎（わじま たつろう）	
授業の到達目標及びテーマ	比較社会・政治学、社会・政治思想、沖縄学のいずれかの領域について各自の研究課題を設定し、文献を探索して先行研究をふまえた上でオリジナルな議論を構築する方法を学び、修了論文の作成準備を進めます。		
授業の概要	研究課題の設定、研究の進捗報告、論文作成方法の指導の順に進めていきます。		
授業計画	第1回	社会科学におけるテーマ設定の方法	
	第2回	テーマ設定のためのワーク	
	第3回	文献調査の方法	
	第4回	文献調査のためのワーク	
	第5回	文献一覧作成	
	第6回	文献と資料の整理	
	第7回	文献と資料の読み込み	
	第8回	論文作成の方法（1）—全体の構成	
	第9回	論文作成の方法（2）—タイトルの付け方	
	第10回	論文作成の方法（3）—序論の構成	
	第11回	論文作成の方法（4）—本論の構成	
	第12回	論文作成の方法（5）—脚注の作成	
	第13回	論文作成の方法（6）—トライポッド・メソッド	
	第14回	論文作成の方法（7）—結論の導き方	
	第15回	各自のテーマ固有の論文構成方法と中間報告の作成	
準備学習 (予習・復習等)	進捗状況によって、文献調査、研究報告などの準備が必要である。		
テキスト	特になし。		
参考文献	必要に応じて指示する。		
評価方法	平常点:70% 中間報告:30%		

修了研究演習 I		後期 2 単位	1年 多元文化専攻
社会学、メディア論のテーマで修了論文を書く		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標 及びテーマ	この演習では専攻科における学習の集大成として、社会学ないしメディア論のテーマで修了論文を書く。現代日本社会の直面している諸問題を追求し、私たちの生きている現代社会に対する幅広い視野や判断力を養い、さらに日本だけでなく他の社会との比較の視点を考慮しつつ論文を書く。最終的には、大学評価・学位授与機構に提出して大学の卒業論文同等の評価を得られるような量的質的に高いレベルの論文が作成できるようになる。		
授業の概要	それぞれの学生がテーマを選択し、調査研究を行い、進行状況について中間報告する。それに基づいて参加者全員で討論を行うとともに、各人のそれから先への進め方、参考文献、関連データの収集法、データの分析法などについては、個人別に指導する。		
授業計画	第1回	導入と今後の予定	
	第2回	テーマの設定	
	第3回	論文の構想	
	第4回	これまでの研究のレビュー（1）	
	第5回	これまでの研究のレビュー（2）	
	第6回	仮説・概要の設定	
	第7回	データの収集（1）	
	第8回	データの収集（2）	
	第9回	中間報告	
	第10回	データの分析（1）	
	第11回	データの分析（2）	
	第12回	仮説・概要の再検討	
	第13回	論文の作成（1）	
	第14回	論文の作成（2）	
	第15回	論文の完成	
準備学習 (予習・復習等)	学生は、自らの関心に基づいて主体的にテーマを選択し修了論文にまとめる。修了論文作成のために必要な一連の作業も、自主的に行う必要がある。具体的には、論文の構想、仮説の設定、これまでの研究のレビュー、関連データの収集、それらデータの分析、要約などの作業を、教員の指導を受けつつ、学生が自主的に行う必要がある。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	個人別のテーマに合わせて適宜指示する。		
評価方法	授業参加度:30% 中間報告:20% 修了論文:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
造形演習A、修了研究演習Ⅰで学んだ織表現をもとに、修了作品を目指してさらに研究を深める		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各自のテーマに添った織の造形表現研究を深め、修了制作作品のテーマを決めた上で、課題作品（プレ修了制作）として取り組む。作品・制作について自分の言葉で表現し、制作を裏付ける。学生自身による主体的・総合的・専門的な研究実践の過程として織作品を制作し、修了研究演習Ⅲへと展開できる力をつけることを目指す。必要な糸は染色することも可能。		
授業の概要	今まで学んできたことを基にすべて一人でまず組み立てることで、学生の総合力を確認しながら個別指導を進める。短い時間を有効に制作に当てるために、テーマ、作品制作のコンセプトとデッサン、デザイン画をしっかり検討して準備しておく必要がある。制作には時間配分が大切なので、工程表を組み、時間の管理をすることも重要となる。授業ごとに確認、相談しながら進めて行く。		
授業計画	第1回	各自の制作テーマ・デザイン画・工程表などを発表。内容、作業工程、必要事項を確認し具体的なアドバイスをするので、それを基に再度計画を見なおして進める。	
	第2回	課題作品制作（プレ修了制作）：各自の工程表に沿って織の制作をすすめる。以下、個別指導。	
	第3回	課題作品制作：1	
	第4回	課題作品制作：2	
	第5回	課題作品制作：3	
	第6回	課題作品制作：4	
	第7回	課題作品制作：5	
	第8回	課題作品制作：6	
	第9回	課題作品制作：7	
	第10回	課題作品制作：8	
	第11回	課題作品制作：9	
	第12回	経糸始末、仕上げ	
	第13回	作品完成	
	第14回	講評会	
	第15回	授業のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	織の作品制作には膨大な時間がかかる。授業時間だけでは作品は出来ないなので、空き時間を利用して制作時間を確保すること。特に糸染めは時間外に行う必要があるので注意。「制作ノート」をつくり、制作の過程で生じたこと（制作に関わること、イメージ、内容、制作意図、表現について、糸染めデータなど）はすべてメモしておくこと。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 課題作品:50% レポート:20%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
江戸文学・文化研究		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標及びテーマ	江戸時代の文学・文化を対象とし、各自の問題関心に沿って調査・研究をすすめ、修了論文を作成します。諸作業を通じて、作品を取り巻く状況に理解を深め、文学作品を丁寧に読み解きます。また長い文章を論理的に構築し、わかりやすく適切に表現する技術を身につけます。		
授業の概要	各自研究テーマ・問題設定をします。それに基づいて文献調査・分析をし、自分なりの独自の結論を導き出す作業を各自行い、口頭発表と討論をします。		
授業計画	第1回	研究テーマの設定	
	第2回	文献調査法指導	
	第3回	テーマ1についての文献調査	
	第4回	テーマ1についての研究報告	
	第5回	テーマ2についての文献調査	
	第6回	テーマ2についての研究報告	
	第7回	テーマ3についての文献調査	
	第8回	テーマ3についての研究報告	
	第9回	下書き作成	
	第10回	下書き提出・添削	
	第11回	補完調査・研究その1	
	第12回	補完調査・研究その2	
	第13回	論文提出準備	
	第14回	口頭試問	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、文献調査、対象研究。		
テキスト	その都度指示します。		
参考文献	その都度指示します。		
評価方法	論文執筆の過程 :50% 論文内容:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了研究演習Ⅱ（認知心理学）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標 及びテーマ	自分の問題意識に基づいた実験・調査を計画し、実施する。 得られた結果を図表に整理し、統計的に分析することができる。		
授業の概要	修了研究演習Ⅰを踏まえ、修了論文の執筆に向け、自分の興味のある問題・課題について実験あるいは調査を計画・実施する。その結果得られたデータを整理し、統計的に分析する。 授業は基本的には演習形式で進めるが、論文指導については、個別指導を中心に進める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	研究計画の決定・論文指導1（目的と方法）	
	第3回	実験・調査の準備1	
	第4回	実験・調査の準備2	
	第5回	実験・調査の準備3	
	第6回	実験・調査の実施1	
	第7回	実験・調査の実施2	
	第8回	実験・調査の実施3	
	第9回	データの整理	
	第10回	データの分析1	
	第11回	データの分析2	
	第12回	論文指導2（結果1）	
	第13回	論文指導3（結果2）	
	第14回	論文指導4（結果3）	
	第15回	まとめ	
準備学習 （予習・復習等）	事前学習 関心のあるテーマや問題について文献検索を行い、論文を読み、まとめておくこと。 事後学習 講義内容を踏まえ、出題される課題を着実に締切までに提出すること。		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	山田剛史・林 創 「大学生のためのリサーチリテラシー入門」 ミネルヴァ書房 白井利明・高橋一郎 「よくわかる卒論の書き方 第2版」 ミネルヴァ書房		
評価方法	課題:20% 授業参加態度:20% 最終課題:60%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
経営学に関する修了論文の作成		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「経営学」に関するテーマ（人的資源管理、従業員のキャリア形成から、企業構造、経営戦略、経営文化、国際経営、起業等に関するテーマまで、広く経営や企業、キャリア形成に関するテーマ）で修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。学生各人が関心を持つ企業経営や従業員の雇用・管理の課題について、経営学の観点からそれらがどのように位置づけられるかについて討議する。その際、現代社会における経営や企業の観点、また、グローバル化に伴い、企業経営における日本以外の多文化における企業や経営との比較を考慮に入れて検討を加えていく。そして、専攻科の講義科目で得た知見と結びつけつつ、修了論文のテーマを絞り込み、修了論文を作成にとりかかる。</p>		
授業の概要	各自が興味のあるテーマを選び、修了論文の作成を中心に行う。課題（文献を読んでくる、報告を用意する）を与えるため、その際は必ず準備して臨むこと		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	発表と討議 グループ①	
	第3回	発表と討議 グループ②	
	第4回	発表と討議 グループ③	
	第5回	発表と討議 グループ①	
	第6回	発表と討議 グループ②	
	第7回	発表と討議 グループ③	
	第8回	発表と討議 グループ①	
	第9回	発表と討議 グループ②	
	第10回	発表と討議 グループ③	
	第11回	発表と討議 グループ①	
	第12回	発表と討議 グループ②	
	第13回	発表と討議 グループ③	
	第14回	発表と論文作成指導①	
	第15回	後期に向けて 発表と論文作成指導②	
準備学習 (予習・復習等)	議論を活発に進めるために、テーマに基づいて、自分なりに調べ、専門用語等をよく理解しておくこと。		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	開講時に指示する。		
評価方法	発表:30% 授業への参画度:40% 期末レポート:30%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
食文化研究		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	①食に関する研究テーマを選択し、研究計画をたて文献研究・実証的研究を実施する力を養う。 ②収集した資料を整理・分析して論文を執筆する。		
授業の概要	本演習では、食文化関する多様な研究手法を学び、各自、関心のあるテーマを選択する。文献・資料の検索・収集、分析してまとめる。実証的研究を選択した場合は、綿密な研究計画をたて実施する。得られた結果をもとに論文を執筆する。あわせて自分の考えを他者へ伝えられるようにする。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	研究手法	
	第3回	論文構成	
	第4回	テーマの検討1	
	第5回	テーマの検討2	
	第6回	文献研究1	
	第7回	文献研究2	
	第8回	文献研究の中間発表	
	第9回	研究計画	
	第10回	個別指導1	
	第11回	個別指導2	
	第12回	個別指導3	
	第13回	個別指導4	
	第14回	個別指導5	
	第15回	中間発表	
準備学習 (予習・復習等)	中間発表・個別指導の際には、事前にレジメなど資料を準備すること。		
テキスト	適宜、紹介する。		
参考文献	各自の研究に必要な文献・資料を用いる。		
評価方法	受講態度:40% 課題発表:60%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
学修成果レポート作成にむけた論文指導		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○イギリスの文化や歴史について、先行研究の蓄積を踏まえて、アカデミックなレベルで精緻な議論を組み立てることができるようになる。</p> <p>○設定した問題に即した史料を渉猟し、適切な史料批判の方法やテキストの分析的読解方法を理解する。</p> <p>○形式・内容ともに申し分のない学修成果レポートを書き上げる。</p>		
授業の概要	イギリスの文化や歴史にかんするテーマで修了論文を書く学生を対象として、学修成果レポート作成にむけた論文指導を行う。前年度に提出した修了論文準備レポートの批判的検討をもとに、具体的な史料の扱い方や研究史上の位置についての理解を深めつつ、全体の構成・章立てを固め、各章の内容を充実させて、学修成果レポートをまとめ上げていくよう指導する。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	修了論文準備レポートの批判的検討	
	第3回	学修成果レポート執筆にむけた個別指導（1）	
	第4回	学修成果レポート執筆にむけた個別指導（2）	
	第5回	学修成果レポート執筆にむけた個別指導（3）	
	第6回	史料の探し方	
	第7回	史料批判の方法	
	第8回	テキストの分析的読解方法	
	第9回	論文の構成・章立ての決め方	
	第10回	学修成果レポート中間発表（1）	
	第11回	学修成果レポート中間発表（2）	
	第12回	学修成果レポート中間発表（3）	
	第13回	学修成果レポートの形式の確認	
	第14回	学修成果レポートの個別リライト指導（1）	
	第15回	学修成果レポートの個別リライト指導（2）	
準備学習 (予習・復習等)	学修成果レポートを完成させるには、対象についての調査だけでなく、適切な方法や史料の確定、先行研究の吟味、自分のとるべき立場の検討など、さまざまなプロセスが必要とされる。基本的には授業時間外での学習の厚みによって最終的なレポートの出来が決まってくるので、自主的に取り組んでいくこと。		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	学修成果レポート:50% 中間発表:25% レポート制作過程:25%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
プロダクトデザインを提案する		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	デザインに目を向けることにより、ヒトとモノとコトの関係をより深く理解する。 道具やシステムに内在する問題点や可能性の中からデザインの目標を設定し、構想・試作あるいは比較評価をしながら、ものづくりの基本をより深く理解する。		
授業の概要	修了研究演習Ⅰのテーマを継続するか、別の角度からのアプローチを行なうかを各自が検討する。 テーマに応じて比較観察、原型の試作、実現した際の効果予測、デザインの具体化または最も注目すべき点を中心とした考察などを十分に掘り下げていく。		
授業計画	第1回	ガイダンス：テーマの進め方について	
	第2回	テーマの確認と目標設定	
	第3回	テーマに基づくアプローチ：調査、構想または試作の開始	
	第4回	テーマに基づくアプローチ：続き	
	第5回	テーマに基づくアプローチ：続き	
	第6回	中間報告：目標設定と実現方法の確認	
	第7回	考察・制作：調査、考察または試作の続き	
	第8回	考察・制作：続き	
	第9回	考察・制作：重点の確認	
	第10回	中間報告：研究の重点と目標実現までの残りの部分	
	第11回	考察・制作：続き	
	第12回	考察・制作：不足部分の補いと完成度を上げる	
	第13回	最終チェック	
	第14回	現在までのまとめ	
	第15回	発表・講評会	
準備学習 (予習・復習等)	道具やシステムの中からテーマを見つけるためには、日頃の生活行動に伴う身体感覚も重要である。テーマの実現については常識にとらわれることなく、基本からの発想力と現状の技術的な制約にとらわれない目標設定が求められる。日常観察を研ぎ澄ませることがこれらに対応する必要条件となる。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:40% 期末提出物:60%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
法と社会倫理：社会比較の観点から		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標及びテーマ	修了研究演習Ⅱでは、修了論文のテーマを決定し、「社会倫理」「法倫理」の諸問題に関する理解を深める。その際、比較社会・比較文化の観点からの考察を組み込むことで、「社会倫理」「法倫理」の諸問題の多角的で広がりのあるとらえ方も身につけていく。その中で、修了論文全体の構成・章立てを固め、論文をまとめ上げていくよう指導していく。		
授業の概要	修了研究演習Ⅰにおいて作成された中間報告レポートの各論点について、学生による報告と討議を中心にして、専門的観点（法的観点、社会倫理的観点、社会比較の観点）から内容を深めていく。そのようにして草稿を作成しつつ、修了論文全体の章立てを定めていく。		
授業計画	第1回	法的観点からの中間報告レポートの検討	
	第2回	法的観点からの中間報告レポートに関する討論	
	第3回	社会倫理的観点からの中間報告レポートの検討	
	第4回	社会倫理的観点からの中間報告レポートに関する討論	
	第5回	社会比較の観点からの中間報告レポートの検討	
	第6回	社会比較の観点からの中間報告レポートに関する討論	
	第7回	一つ目の論点に関する専門的観点からの文献のまとめ	
	第8回	一つ目の論点に関する専門的観点からの報告と討論	
	第9回	二つ目の論点に関する専門的観点からの文献のまとめ	
	第10回	二つ目の論点に関する専門的観点からの報告と討論	
	第11回	三つ目の論点に関する専門的観点からの文献のまとめ	
	第12回	三つ目の論点に関する専門的観点からの報告と討論	
	第13回	論文構成(章立て)の報告と討論	
	第14回	論文草稿の報告と討論	
	第15回	論文完成に向けた課題の確認	
準備学習 (予習・復習等)	予め指示された課題(定められた観点からの検討、文献を読んできると、報告を用意する、など)を準備して授業に臨むこと。専門的観点からの報告は、修了論文の草稿作成に結びつくものと位置づけられる。草稿作成の上、報告に臨むこと。授業後は、授業で指摘された点を、論文の草稿、構成に反映させていくこと。		
テキスト	適宜指示する。		
参考文献	葛生・河見・伊佐『新・いのちの法と倫理』（法律文化社） 河見『自然法論の必要性和可能性』（成文堂）		
評価方法	論文草稿:75% 授業への参加度合い:25%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
英語教育と英語社会論		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) 講義と論文の紹介・講読を通して、英語教育、英語社会論の分野に関する専門知識を習得すること。 2) これらの分野の中から修了論文のテーマを探すこと。		
授業の概要	教員による講義と学生による論文紹介を交互に行う。講義で取り上げるテーマは以下の授業計画の通り。学生は、短大・大学や学会の紀要から論文を一つ選び、授業で紹介する。論文紹介の際、教員は論文の内容や発表に関する補足説明を行う。ただし論文紹介の順序は必ずしも授業計画の通りでなくても構わない。		
授業計画	第1回	Introduction 前期の授業のテーマと概要	
	第2回	アメリカの英語事情① マイノリティの言語と英語	
	第3回	論文紹介① マイノリティの言語と英語	
	第4回	アメリカの英語事情② 移民の言語移行	
	第5回	論文紹介② 移民の言語移行	
	第6回	アメリカの英語事情③ バイリンガル教育	
	第7回	論文紹介③ バイリンガル教育	
	第8回	アメリカの英語事情④ 英語公用語化運動	
	第9回	論文紹介④ 英語公用語化運動	
	第10回	ヨーロッパの英語事情	
	第11回	論文紹介⑤ ヨーロッパの英語事情	
	第12回	ヨーロッパの英語教育	
	第13回	論文紹介⑥ ヨーロッパの英語教育	
	第14回	多言語社会と多言語主義	
	第15回	振り返りとまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	1) 受講生は事前に論文を読んで、その内容を正確に理解しておくこと。 2) 論文紹介の担当者は、論文の内容を分かりやすく簡潔にまとめたハンドアウトを用意しておくこと。 3) 修了論文のテーマ探しを行うこと。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	授業参加:20% 論文紹介1:40% 論文紹介2:40%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
アメリカ史・アメリカ研究の修了論文にむけて		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	「学修成果」レポートの作成に向けて、資料の検索・収集、資料の読み方、先行研究のレビュー、議論の組み立て方など、レポート作成に必要な技術を身につけます。アメリカ史・アメリカ研究の学修成果レポートを完成させます。		
授業の概要	参加者の研究テーマに関連する文献を読み、ディスカッションします。並行して、個人の研究発表やレポート執筆の個別指導を行います。		
授業計画	第1回	はじめに	
	第2回	研究テーマの発表	
	第3回	参考文献リストの作成	
	第4回	共通文献を読んでディスカッション1	
	第5回	共通文献を読んでディスカッション2	
	第6回	共通文献を読んでディスカッション3	
	第7回	共通文献を読んでディスカッション4	
	第8回	レポート中間報告	
	第9回	共通文献を読んでディスカッション5	
	第10回	共通文献を読んでディスカッション6	
	第11回	参加者で草稿を読んでコメント	
	第12回	レポート提出前の個別指導1	
	第13回	レポート提出前の個別指導2	
	第14回	レポート提出前の個別指導3	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	文献を読んで、論点や疑問点をまとめて授業にのぞむ。レポート執筆をすすめ、定期的に提出する。		
テキスト	授業時に指示する。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% 学修成果レポート:60%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了研究演習Ⅱ ー古典文学篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○前期段階で学位申請にむけたレポート草稿を仕上げるができる。</p> <p>○各自のテーマとする作品の本文・研究文献に通暁することができる。</p>		
授業の概要	<p>学位授与機構への申請レポートを強く意識した授業である。多元文化専攻1年後期の中間レポートをタタキ台にして、さらに論点の強化と内容の補充を指導したい。</p>		
授業計画	第1回	面接授業。多元文化1年次修了研究演習中間レポートの総括検討および中間レポート以降の進境確認。改善課題の探究計画。	
	第2回	面接授業。改善課題の進捗検討。	
	第3回	面接授業。文学理論的な観点での問題検討。	
	第4回	面接授業。文学理論的な学習の吟味と意見交換。	
	第5回	面接授業。研究文献リサーチ報告。	
	第6回	面接授業。研究文献の批判的な吟味。	
	第7回	面接授業。文学理論と研究文献との総合的な構築。	
	第8回	面接授業。論文草稿にむけての目次検討。	
	第9回	面接授業。論文草稿にむけての構成・論旨の検討。	
	第10回	面接授業。論文草稿の	
	第11回	面接授業。論文草稿の仮提出。	
	第12回	面接授業。論文草稿の返却と修正箇所指示。	
	第13回	面接授業。修正論文草稿の様式等の点検。同、教員受理。	
	第14回	面接授業。教員受理の論文草稿の講評と論文草稿の最終検討。	
	第15回	面接授業。論文草稿についての口頭試問。	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○多元専攻1年次修了論文中間レポートの検討書式記入。</p> <p>○論文草稿の段階的な蓄積。</p> <p>○論文草稿の段階的な修正。</p> <p>○論文草稿の完成。</p>		
テキスト	各自のテーマによる。		
参考文献	適宜、授業中に指示する。		
評価方法	授与機構提出草稿水準:30% 進捗本文の蓄積:30% 個人面談の実績:40%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
歴史の方法論とその実践		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標及びテーマ	各自の問題関心に基づいた研究テーマを決め、その歴史的経過と現代的意味を探る。研究の現状と課題をふまえながら調査・検証を進め、独創的な研究へと発展させるための基礎的作業を積み重ね、研究・調査の成果を修了論文の中間報告書としてまとめる。		
授業の概要	研究テーマの決定、先行研究の調査、研究課題の分析・検討、史料の読解など、論文作成に関する総合的な指導を行う。毎回、各自は研究の進行状況の報告を行い、全員による活発な討論を通じて研究を深め、客観的な観点を培いながら研究レポートを完成する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	準備作業① テーマの発見	
	第3回	準備作業② テーマを絞る	
	第4回	準備作業③ 調査・研究の方法論について	
	第5回	準備作業④ 文献目録の作成	
	第6回	研究報告：グループ①	
	第7回	研究報告：グループ②	
	第8回	研究報告：グループ③	
	第9回	研究報告：グループ④	
	第10回	中間報告	
	第11回	研究報告：グループ①	
	第12回	研究報告：グループ②	
	第13回	研究報告：グループ③	
	第14回	研究報告：グループ④	
	第15回	中間報告書完成発表会	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する研究調査報告シートに研究結果や今後の課題、問題点などをまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	研究テーマに応じて適宜指示する		
評価方法	報告、シート記述など:50% 研究レポート:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文作成に向けて (2)		齋藤 修三 (さいとう しゅうぞう)	
授業の到達目標 及びテーマ	「米文学」「英語詩」「アメリカ研究」「平和学」等に関する領域で学士号取得を目指す学生のために、学位授与機構に提出する学修成果(レポート)の執筆をサポートとする。基本的に、個別指導もしくは類似テーマでのグループ指導。履修予定者は授業開始時に、中間報告および基本文献・参考文献のリストと読書ノートを提出すること。授業期間中には、引用や要約を含むパラグラフ単位のメールレポートを提出し、コメントを受けてリライトという作業を繰り返す。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・領域やテーマの絞り込み ・リサーチ指導 ・書式指導 ・レジュメを用いた資料報告 ・引用や要約を含むパラグラフ作文指導 ・論文構想指導 		
授業計画	第1回	導入～中間報告・基本文献・参考文献リスト・読書ノートについての報告と検討	
	第2回	メールレポート(パラグラフ作文)講評、テーマの焦点と広がりを確認	
	第3回	メールレポート講評、リサーチ指導、ブレインストーミング	
	第4回	メールレポート講評、マインドマップ、テーマ絞り込み、リサーチ報告、	
	第5回	メールレポート講評、リサーチ報告、書式指導、論旨の骨格と章立て検討1	
	第6回	メールレポート講評、書式指導、論旨の骨格と章立て検討2	
	第7回	メールレポート講評、書式指導、引用箇所の検討とパラフレーズ基礎	
	第8回	メールレポート講評、引用箇所の検討とパラフレーズ練習	
	第9回	メールレポート講評、引用箇所の検討とパラフレーズ発展	
	第10回	序文指導、章立て再検討	
	第11回	本文再検討、注の付け方など	
	第12回	本文再検討、表記統一の確認	
	第13回	本文最終チェックと要約の作成1	
	第14回	本文最終チェックと要約の作成2	
	第15回	学修成果レポートと要約の完成	
準備学習 (予習・復習等)	<ol style="list-style-type: none"> 1. メールレポートによるパラグラフ作文&推敲 2. 各種課題の提出とリライト 3. 文献読解と内容報告 		
テキスト	こちらでプリントする		
参考文献	随時紹介		
評価方法	学修成果レポート:50% メールレポート提出物:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文に着手しよう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	前年の学びをふまえ、本格的に修了論文の作成に着手する。論文題目を定め、参考文献・資料をそろえ、論文構成を計画することが課題となる。		
授業の概要	手順としては、前年度までに、①自らの関心を整理し、論文題目を確定する、②関連する文献資料目録を作成する、③論文の構成、内容の大筋を決定することをふまえ、④論文執筆に着手する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	各自の研究テーマの発表と交流①	
	第3回	各自の研究テーマの発表と交流②	
	第4回	修了論文の書き方について（講義）	
	第5回	学生による発表①	
	第6回	学生による発表②	
	第7回	学生による発表③	
	第8回	論文題目と構成に関する個別指導①	
	第9回	論文題目と構成に関する個別指導②	
	第10回	論文題目と構成に関する個別指導②	
	第11回	論文題目と構成に関する個別指導④	
	第12回	学生による発表④	
	第13回	学生による発表⑤	
	第14回	学生による発表⑤	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前年からあためてきた各自の関心を具体的な論文題目として確定するためには、関連文献の収集と読み込みが重要となる。また論文構成は何度も吟味しながら確定する必要がある、そのためには個別の指導が重要となる。		
テキスト	特に定めない		
参考文献	そのつど指示する。		
評価方法	発表：30% レポート：70%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
近現代文学研究 2		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・近現代の文学を対象とし、各自の問題関心に沿って調査・研究をすすめ、修了論文を作成します。 ・諸作業を通じて、作品を取り巻く状況に理解を深め、文学作品を丁寧に読み解きます。 ・また長い文章を論理的に構築し、わかりやすく適切に表現する技術を身につけます。 		
授業の概要	修了論文演習Ⅰの成果をふまえ、各自、研究テーマ・問題設定をし、研究をすすめます。学位審査論文の提出にそなえ、研究成果をわかりやすく文章にまとめます。		
授業計画	第1回	研究テーマの設定・確認	
	第2回	テーマ1についての文献調査	
	第3回	テーマ1についての成果報告	
	第4回	テーマ2についての文献調査	
	第5回	テーマ2についての成果報告	
	第6回	テーマ3についての文献調査	
	第7回	テーマ3についての成果報告	
	第8回	学位論文の構成確認 1	
	第9回	論文の執筆と添削 1	
	第10回	論文の執筆と添削 2	
	第11回	論文の執筆と添削 3	
	第12回	論文の執筆と添削 4	
	第13回	論文の構成確認 2	
	第14回	口頭試問	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、文献調査、対象研究。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	とくになし。		
評価方法	調査・研究:40% 発表・報告:20% 期末レポート:40%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
日英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善提案などをテーマとする修了論文の作成		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標及びテーマ	音声、文字、意味、文法・語法、発想などの様々な側面に関する日本語と英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善への提案などをテーマとして修了論文を作成しようとする学生を対象に、その論文を作成するための基本的事項を確認し、論文作成の準備のための指導を行います。		
授業の概要	論文作成のための基本的事項の確認については、2種類の英英辞典、すなわち成人母語話者用の一般英語辞書(GED)と外国人学習者用の英語辞書(ESLD)、の記載項目や記述特徴などに関する基本的な知識を習得し、ディスカッションを通じて英和・和英辞典とGED・ESLDの相違を観察し、さらにはそれを基にして日本語と英語の言語的相違に関する新たな視点を養うことになります。論文作成の準備に関しては、課外の時間帯に必要に応じて適宜行われる個人指導において、修了論文のテーマの最終的な決定、作成方法の詳細な確認を行い、論文執筆の準備作業が終わり次第、執筆作業に移ります。また、修了論文を念頭に置いた期末レポートも書いてもらいます。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	ESLDの発音表記	
	第3回	GEDの発音表記	
	第4回	ESLDの語の扱い方	
	第5回	GEDの語の扱い方	
	第6回	ESLDの語義記述	
	第7回	GEDの語義記述	
	第8回	ESLDの文法・語法の扱い方	
	第9回	GEDの文法・語法の扱い方	
	第10回	期末レポートの中間発表と講評	
	第11回	ESLDとGEDの比較	
	第12回	英和・和英辞典と英英辞典の比較	
	第13回	辞書比較から見える日英語の相違	
	第14回	期末レポートの発表と講評	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習 (予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく調べて考えてきて下さい。また、修了論文またはその基になる期末レポートの作成に向けては定期的に相談し、指導を受けるようにして下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業への参加度:25% 期末レポート:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
実証研究を実施し成果をまとめる		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) 社会心理学の研究の実施方法を理解する。 (2) 研究結果の分析方法を理解する。 (3) 研究成果をまとめて他者に適切に伝わるレポートを作成する。		
授業の概要	基本的に演習形式で進めるが、必要に応じて個別指導も行なう。先行研究を調べながら実験または調査の研究計画を立て、準備、実施、Excelや統計ソフトを用いた分析も必要に応じて行い、学習成果レポートを完成させる。 授業外の時間も大量に使って自主的に作業を進めることが必須である。		
授業計画	第1回	年間見通しの確認	
	第2回	研究計画の立案	
	第3回	心理統計：導入	
	第4回	心理統計：基礎	
	第5回	研究計画の吟味	
	第6回	研究計画の決定	
	第7回	実験・調査の準備	
	第8回	実験・調査の最終確認	
	第9回	実験・調査の実施	
	第10回	実験・調査結果の整理	
	第11回	実験・調査結果の分析	
	第12回	実験・調査結果の考察	
	第13回	レポート執筆	
	第14回	レポートの吟味と修正	
	第15回	夏の課題の確認	
準備学習 (予習・復習等)	授業中は発表とディスカッションを行なうので、発表の準備やディスカッションを踏まえて自分の研究を見直すことなどは授業の前後に必須である。 必要に応じて論文の書き方、研究法、分析法などに関する書籍等も各自参照すること。		
テキスト	特に指定しない。各自必要な文献を用いる。		
参考文献	松井豊 (2006) 『心理学論文の書き方』河出書房新社／戸田山和久 (2012) 『新版 論文の教室』NHK出版／このほか適宜紹介する。		
評価方法	レポート:50% 課題への取り組み:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
学生自身のテーマの研究と修了論文作成		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標 及びテーマ	データや緒論を研究し独自の視点を持った内容の修了論文作成を目標とする。テーマは食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関して学生が関心を持つ領域を選んでいる。		
授業の概要	食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関するテーマで修了論文作成に向けた指導を行う。学生が関心を持つ主題の研究途中の問題点を、食品化学、栄養学、食品開発や法律、政治、経済の観点からどのように位置づけられるかについて討議し、これまでの学習や専攻科の講義科目の学習で得た知見とを結びつけつつ、更に深く学んでゆく。		
授業 計画	第1回	修了論文検討事項の研究 1	
	第2回	修了論文検討事項の研究 2	
	第3回	修了論文検討事項の研究 3	
	第4回	修了論文検討事項の研究 4	
	第5回	修了論文検討事項の研究 5	
	第6回	修了論文検討事項の研究 6	
	第7回	修了論文検討事項の研究 7	
	第8回	修了論文検討事項の研究 8	
	第9回	修了論文検討事項の研究 9	
	第10回	修了論文検討事項の研究 10	
	第11回	論文構成を検討 1	
	第12回	論文構成を検討 2	
	第13回	論文構成を検討 3	
	第14回	論文構成を検討 4	
	第15回	論文構成を検討 5	
準備学習 (予習・復習等)	自身で研究を進展させ報告の準備を毎回行う		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	毎回の授業の中で示します		
評価方法	授業への積極的な参加:40% 論文:60%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
デザイン造形による作品制作		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	デザインに求められる普遍的な造形美の探求により、本科で目標とした他者とコミュニケーションする段階から、さらに他者の精神に働きかけ共感を得る域に達する表現力を身につけることを目標とする。ⅡではPCのドローソフトの基本的な使い方をマスターし、修了作品のエスキース制作のプロセスを通してデザインの思考方法を体得する。		
授業の概要	修了研究演習Ⅰでのプレ修了制作をふまえて、修了制作のテーマを決定し、作品の構想を練る。並行してPCのドローソフトの使い方を学び、それを用いて修了作品のエスキースを制作する。		
授業計画	第1回	修了制作テーマの決定	
	第2回	作品のコンセプト、表現手法の提示	
	第3回	作品のコンセプト、表現手法の決定	
	第4回	ドローソフトトレーニング1	
	第5回	ドローソフトトレーニング2	
	第6回	ドローソフトトレーニング3	
	第7回	作品の構想1	
	第8回	作品の構想2	
	第9回	作品の構想3／構図プランの決定	
	第10回	ドローソフトによる作品エスキース制作1	
	第11回	ドローソフトによる作品エスキース制作2	
	第12回	ドローソフトによる作品エスキース制作3	
	第13回	ドローソフトによる作品エスキース制作4	
	第14回	中間発表／エスキース講評会	
	第15回	まとめ／修了制作計画案作成	
準備学習 (予習・復習等)	プレ修了制作をふまえて、修了作品のプランをイメージしておくこと。 作品の構想のため、資料収集を行う。 授業時間は経過の確認と指導にあてるので、時間外に制作を進めることが必要になる。 最後にエスキース制作についてのレポートをまとめる。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:30% レポート:20% 作品エスキース:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
近現代文学研究		辻 吉祥 (つじ よしひろ)	
授業の到達目標 及びテーマ	明治期以降の文学、批評、メディアを対象として研究を深めます。過去の著名な作家はほとんど、書く作業の苦しみを呪うように日記に書き付けています。にもかかわらず「書く」のは、そこに「こだわり」があるからなのでしょう。テクストと対峙しながら「みずから自身のなかのこだわり」をいっそう深く掘りすずめてください。論文の完成が最終的な到達目標です。		
授業の概要	Ⅱでは、修了論文の中核に据えるべきテーマを展開、個々の書くことの苦しみとその克服の過程が、そのまま社会的な問題と共鳴するようなあり方に課題を整えていく。そのことを確実にしてゆくための、図書館での沈潜、古書店、各大学機関の活用などを難なく習慣化する態度を伝授する。数度の研究報告と協同的な討議は思考の反照化を常態にするための重要な機縁とする。理論化と検証、これらを重ねる中で、独自、無二の論考が創発されるよう導いていく。		
授業計画	第1回	調査研究・論文作成1—概要の発表Ⅰ (グループA)	
	第2回	調査研究・論文作成2—概要の発表Ⅱ (グループB)	
	第3回	調査研究・論文作成3—概要の発表Ⅲ (グループC)	
	第4回	調査研究・論文作成4—概要の発表Ⅳ (グループD)	
	第5回	調査研究・論文作成5—概要の発表Ⅴ (グループE)	
	第6回	調査研究・論文作成6—概要の発表Ⅵ (グループF)	
	第7回	中間成果の提出	
	第8回	内容の修正・追補	
	第9回	追補内容の調査研究1—先行研究を収集・系統化する	
	第10回	追補内容の調査研究2—先行研究を収集・系統化する	
	第11回	追補内容の調査研究・論文作成1—追補テーマの追究・深化	
	第12回	追補内容の調査研究・論文作成2—追補テーマの追究・深化	
	第13回	中間成果の提出 (二回目)	
	第14回	論文講評 (グループⅠ)	
	第15回	論文講評 (グループⅡ)	
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。		
テキスト	個別に指示します。		
参考文献	個別に指示します。		
評価方法	論文内容:70% 中間報告など作成過程における達成:30%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
論文を書く		中井 章子（なかい あやこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各人のテーマに関する論文を作成する。		
授業の概要	基本的な文献を読み、報告する。 報告を聴いて、参加者同士で学び合い、議論する。 論文を執筆する。		
授業計画	第1回	比較文化について	
	第2回	比較宗教について（1）	
	第3回	比較宗教について（2）	
	第4回	比較宗教について（3）	
	第5回	比較宗教について（4）	
	第6回	比較美術について（1）	
	第7回	食文化の比較について（1）	
	第8回	比較美術について（2）	
	第9回	食文化の比較について（2）	
	第10回	絵巻物について	
	第11回	食文化の共通性と多様性	
	第12回	論文中間発表（1）	
	第13回	論文中間発表（2）	
	第14回	論文について（1）	
	第15回	論文について（2）	
準備学習 (予習・復習等)	各自の研究を進める。		
テキスト	テーマに応じた文献を読む。一遍聖絵、典座教訓など。		
参考文献	論文テーマに応じた文献を読む。		
評価方法	発表・討論:50% 論文レポート:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
法学の修了論文作成へ向けて		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	法学の修了論文作成へ向けて、さらに自分のテーマを絞り込み、文献を検索し、それらを読み込んでいき、思考を深め、論文作成ができるようになることを目標とする。		
授業の概要	基本、少人数での論文指導が中心となる。毎回、レポーターが自分のテーマについて発表する。その他の者も、自分の論文がどこまで進んだか、毎回、報告をし、それに対するきめ細かい指導が行われる。		
授業計画	第1回	テーマの選定 個人の興味などの相談	
	第2回	テーマの選定 いくつかの候補の選定	
	第3回	文献の調査報告レポートと指導 グループ1	
	第4回	文献の調査報告レポートと指導 グループ2	
	第5回	文献の調査報告レポートと指導 グループ3	
	第6回	文献の調査報告レポートと指導 グループ4	
	第7回	文献の調査報告レポートと指導 グループ5	
	第8回	文献の調査報告レポートと指導 グループ6	
	第9回	文献の調査報告レポートと指導 グループ1	
	第10回	文献の調査報告レポートと指導 グループ2	
	第11回	文献の調査報告レポートと指導 グループ3	
	第12回	文献の調査報告レポートと指導 グループ4	
	第13回	文献の調査報告レポートと指導 グループ5	
	第14回	文献の調査報告レポートと指導 グループ6	
	第15回	夏休みの論文作成準備へ向けての指導	
準備学習 (予習・復習等)	論文を書くためには、入念な下調べと、テーマに対する深い愛情が必要です。この問題については自分が一番よく知っており、考え抜いていると言うところまで悩んで欲しい。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	特に指定しません。指導の中で折にふれて指示します。		
評価方法	レポート報告:50% レポートの出来:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
現代文化の特質とその重層的構造		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	現代の特徴は技術と技術とが体系的に結び合わさって技術連関を形成し我々の環境となっていることである。しかし我々の環境は従来からの自然ばかりでなく、人間が歴史的に創造し続けている文化も独自の環境である。その重層的構造の中で人間はいかに生き、どのような社会を形成するのか、このことを考える。		
授業の概要	現代をどのように考えるのか、特に人間の知的営みの結果としての技術や芸術、更に人間もその一部である自然、言語を中心とした表現としての文化、それらのものを相互の影響関係、人間の存在との関わりなど多視眼的に考察する。最終的には30枚以上の論文を書く。		
授業計画	第1回	序論：現代文化の特徴、技術連関	
	第2回	論文作成の基礎：テーマの決定に向けて	
	第3回	文献表の作成：文献検索の方法と実践	
	第4回	テキスト選び：必須テキストの決定と読みの実践	
	第5回	発表Ⅰ：文献の読み方の実践、具体的テキストを使用して現代を考える	
	第6回	論文作成のための独自のノートの取り方の実践：テキスト読解	
	第7回	周辺的文献の検索：内容を深化させるために、先立つ時代の研究	
	第8回	人間の根本問題を考える：人間とは何か、現代の人間の特徴	
	第9回	人間論の系譜：人間の位置づけ、人間中心主義の検討	
	第10回	発表Ⅱ：自然と人間、東日本大震災後の現代の自然観	
	第11回	対話：他の視点からの人間の在り方-人間学	
	第12回	発表Ⅲ：naturaの概念—Mikel Dufrenne を手掛かりに	
	第13回	発表Ⅳ：人間の表現と現代芸術—建築、彫刻、絵画	
	第14回	発表Ⅴ：像とメディア—映像論の可能性—ベンヤミンを手掛かりに	
	第15回	未来の文化への提言：参加型芸術の可能性	
準備学習 (予習・復習等)	質の高いノートを作るために問題を積極的に考察する。予めの計画、報告書そして授業を終えて新たに考えたことをその都度明記する。リアクションペーパーを大事に考え、次の授業への準備をする。		
テキスト	必要に応じて授業中に指示する。プリントを配る。		
参考文献	現代の芸術論、技術論、文化論を積極的に読んでくること。		
評価方法	発表5回:75% レポート:15% コミュニケーション力:10%		

修士研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
人間活動と環境との関わり（続）		廣田 道夫（ひろた みちお）	
授業の到達目標 及びテーマ	暮らしと密接に関連する環境の諸問題 ―エネルギー、廃棄物、有害化学物質、温室効果ガス等―について、講義、文献調査あるいはデータ解析などを通して理解を深めます。		
授業の概要	修士論文のテーマに関係する種々の文献調査やデータ解析を進め、修士研究演習Ⅰでまとめたレポートの内容を深化させ、修士論文の中間報告書を作成すると共に、その発表会を行います。		
授業計画	第1回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅰ	
	第2回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅱ	
	第3回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅲ	
	第4回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅳ	
	第5回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅴ	
	第6回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅵ	
	第7回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅶ	
	第8回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅷ	
	第9回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅸ	
	第10回	修士論文に関係する種々の文献調査やデータ解析Ⅹ	
	第11回	修士論文の中間報告のとりまとめⅠ	
	第12回	修士論文の中間報告のとりまとめⅡ	
	第13回	修士論文の中間報告のとりまとめⅢ	
	第14回	修士論文の中間報告会の準備	
	第15回	修士論文の中間報告会	
準備学習 (予習・復習等)	テーマごとに参考文献を通読しておくこと。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	テーマにより個別に紹介する。		
評価方法	修士論文の中間報告：80% 中間報告の発表会：20%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
社会と情報		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「社会と情報」に関して、各自テーマを決めて関連論文を読みディスカッションする。そのなかで、比較・分析的に見る力、批判的に読む力、考察する力、表現する力等を身に付けることを目的とする。		
授業の概要	情報社会学に関する幅広い領域のなかから、各自、関心のあるテーマを見つけ、予備調査によりテーマの概略を知り、先行研究を網羅的に検索・収集する。収集した文献を読みながらディスカッションすることを通して考察を深めていく。		
授業計画	第1回	テーマについて考える	
	第2回	テーマの設定（1）関連文献を探る	
	第3回	テーマの設定（2）概論書やレビュー論文を読む	
	第4回	先行研究を探る	
	第5回	論文の構成を考える	
	第6回	文献検索	
	第7回	文献検索・収集	
	第8回	文献収集	
	第9回	文献を読む（1）	
	第10回	文献を読む（2）	
	第11回	文献を読む（3）	
	第12回	文献を読む（4）	
	第13回	論文を執筆する	
	第14回	論文を執筆する	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	先行研究を読みながら、どのようにメモをとり、どのようにまとめていくか、自分なりのスタイルを確立すること。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて紹介する。		
評価方法	論文作成への取り組み:50% 文献検索及び文献収集:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文作成に向けて (2)		松村 伸一 (まつむら しんいち)	
授業の到達目標 及びテーマ	学位授与機構に提出する学修成果 (レポート) を完成させる。		
授業の概要	文学 (英米文学) の領域で学士号取得を目指す者のために、学位授与機構に提出する学修成果 (レポート) の執筆をサポートする。基本的に、個別指導もしくは類似テーマでのグループ指導。履修予定者は授業開始時に、中間報告およびそれまでに読んだ文献のリストと読書ノートを持参し、提出すること。授業期間中には、論文メモを提出し、コメントを受けて書き直すという作業をくり返す。		
授業計画	第1回	中間報告・文献リスト・読書ノートについての報告と検討	
	第2回	論文メモの提出とコメント (テーマの焦点と広がりを確認)	
	第3回	論文メモの提出とコメント (参考文献リスト再検討)	
	第4回	論文メモの提出とコメント (主要文献の全体要約)	
	第5回	論文メモの提出とコメント (主要文献の部分要約)	
	第6回	論文メモの提出とコメント (主要文献に関する批評メモ)	
	第7回	論文メモの提出とコメント (論旨の骨格と章立て検討)	
	第8回	論文メモの提出とコメント (引用箇所を検討とパラフレース基礎)	
	第9回	論文メモの提出とコメント (引用箇所を検討とパラフレース練習)	
	第10回	論文メモの提出とコメント (引用箇所を検討とパラフレース発展)	
	第11回	論文メモの提出とコメント (論旨の骨格と章立て再検討)	
	第12回	論文メモの提出とコメント (本文再検討、注の付け方などを検討)	
	第13回	論文メモの提出とコメント (本文再検討、表記統一などの確認)	
	第14回	本文最終チェックと要約の作成	
	第15回	学修成果レポートと要約の完成	
準備学習 (予習・復習等)	予習：文献の読解と読書ノートの作成。論文メモの作成。 復習：論文メモの書き直し。授業時に紹介された文献などの読解。		
テキスト	プリントなど		
参考文献	執筆の進行状況に合わせて随時指示する。		
評価方法	平常点 (提出課題) :50% 学修成果レポート:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
情報科学		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	「情報処理技術」「情報通信技術」は社会全般に大きなインパクトを与えるものになってきています。技術に関する課題に対しては当然、工学的なアプローチでの研究が中心になりますが、技術の進歩が及ぼす影響に関しては「情報社会」「情報倫理」「知的所有権」など社会科学的な視点でのアプローチが必要です。この演習は広義の情報科学分野の課題をテーマに修了論文を執筆します。		
授業の概要	各自が設定したテーマに沿って、演習での発表、個別指導とおして論文を執筆し、学士認定審査に向けての「学習成果」レポートを完成させます。		
授業計画	第1回	演習の進め方、論文執筆要領の確認	
	第2回	修了演習研究Ⅰで執筆した論文口頭発表	
	第3回	修了演習研究Ⅰで執筆した論文の検討①	
	第4回	修了演習研究Ⅰで執筆した論文の検討②	
	第5回	修了演習研究Ⅰで執筆した論文の検討③	
	第6回	個別指導①	
	第7回	個別指導②	
	第8回	個別指導③	
	第9回	中間発表と討論①	
	第10回	中間発表と討論②	
	第11回	個別指導④	
	第12回	個別指導⑤	
	第13回	個別指導⑥	
	第14回	修了論文まとめ	
	第15回	修了論文口頭発表	
準備学習 (予習・復習等)	各自が設定したテーマに即して、演習での発表、個別指導とおして修了論文を完成させます。ゼミ内での討論やコメント、個別指導の内容をよく吟味し、論文作成の参考にしてください。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	適宜紹介します。		
評価方法	修了論文:70% 発表と討論への参加:30%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
身体表現・舞踊文化に関するテーマのレポート指導		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	大学評価・学位授与機構の学位申請に必要な学修成果（レポート）の作成を行います。本演習は、身体表現、身体文化、舞踊文化（民俗舞踊含）に関するテーマを中心としてレポート執筆を考えている学生を対象とします。		
授業の概要	本科・専攻科の学修の成果であるレポート完成のための執筆をサポートします。テーマの確認、関連文献、実地調査などによる中間報告をし、コメントを受けて論理展開と構成の確認を行います。		
授業計画	第1回	修了研究演習Ⅱのガイダンス	
	第2回	修了論文とレポート関係の確認	
	第3回	レポートの題目確認	
	第4回	レポートの構成の確認	
	第5回	テーマによる報告と討議（1回目）	
	第6回	テーマによる報告と討議（2回目）	
	第7回	テーマによる報告と討議（3回目）	
	第8回	テーマによる報告と討議（4回目）	
	第9回	レポート作成指導（1回目）	
	第10回	レポート作成指導（2回目）	
	第11回	レポート作成指導（3回目）	
	第12回	レポート作成指導（4回目）	
	第13回	レポート初稿の提出と概要の発表	
	第14回	レポートの推敲	
	第15回	レポートの提出	
準備学習 (予習・復習等)	実地調査が必要な場合がある。レポートのテーマに関連した学修の継続が予習や復習として必要である。		
テキスト	特になし		
参考文献	授業時に指示します。		
評価方法	レポート:70% 積極的な授業への参加:30%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
科学と社会の関係をテーマとするレポート指導		八耳 俊文（やつみみ としふみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	大学評価・学位授与機構の学位申請に必要な学修成果（レポート）の作成。本演習は、科学と社会、あるいは科学の近現代史に関するテーマでレポート執筆を考えている学生を、対象とします。		
授業の概要	本科・専攻科の学修の成果であるレポート完成のための指導が、授業の主体です。テーマの確認、関連文献の読み直し、論理展開と構成の確認の順で進めます。		
授業計画	第1回	修了研究演習Ⅱのガイダンス	
	第2回	修了論文とレポートの関係の確認	
	第3回	レポートの題目確認	
	第4回	レポートの構成の確認	
	第5回	レポート作成のための講読（1回目）	
	第6回	レポート作成のための講読（2回目）	
	第7回	レポート作成のための講読（3回目）	
	第8回	レポート作成のための講読（4回目）	
	第9回	レポート作成指導（1回目）	
	第10回	レポート作成指導（2回目）	
	第11回	レポート作成指導（3回目）	
	第12回	レポート作成指導（4回目）	
	第13回	レポート初稿の提出と概要の発表	
	第14回	レポートの推敲	
	第15回	レポートの提出	
準備学習 (予習・復習等)	授業はレポートの進行に応じての指導のかたちをとるため、執筆の準備から完成まで、レポートのテーマに関連した学修の継続が予習・復習として必要である。		
テキスト	特になし。		
参考文献	石井一成『ゼロからわかる 大学生のためのレポート・論文の書き方』（ナツメ社、2011年）、白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方』（ミネルヴァ書房、2008年）		
評価方法	レポート:80% 授業での発表:20%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
イギリス文学研究		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	各人の関心に合わせて修了論文のテーマを確定し、必要な参考文献の収集やアウトラインの推敲などに助言を行い、論文をまとめ上げていく指導をする。		
授業の概要	個人指導（チュートリアル）と草稿（ドラフト）提出を交互に繰り返し、各期末には一定量のレポートを提出する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 修了論文に向けたレポート作成スケジュール確認	
	第2回	チュートリアル1	
	第3回	ドラフト提出1	
	第4回	チュートリアル2	
	第5回	ドラフト提出2	
	第6回	チュートリアル3	
	第7回	ドラフト提出3	
	第8回	チュートリアル4	
	第9回	ドラフト提出4	
	第10回	チュートリアル5	
	第11回	ドラフト提出5	
	第12回	論文作成指導1	
	第13回	論文作成指導2	
	第14回	期末レポートの提出	
	第15回	期末レポートの講評	
準備学習 (予習・復習等)	草稿（ドラフト）の準備と個人指導（チュートリアル）への定期的な参加を要する。		
テキスト	学生の関心によって、年次ごとに適宜選定。		
参考文献	授業内で適宜指導。		
評価方法	期末レポートの提出:60% 個人指導の充実:40%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了研究：言語学		湯本 久美子（ゆもと くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	本講座では言語学（意味論・日英語対照言語学・認知言語学）に関する論文執筆を目標とする。		
授業の概要	論文執筆に関する全般的な指導はクラス単位で行うが、各自の論文については個別指導を行う予定。修了研究論文は①論文題目提出、②研究計画書、③中間報告、④最終報告を経て、⑤論文提出、⑥発表のプロセスをとる。①～④は⑤の必須要件。本演習では③までを目標とする。		
授業計画	第1回	中間報告についてのガイダンス	
	第2回	個別指導（1）	
	第3回	個別指導（2）	
	第4回	個別指導（3）	
	第5回	個別指導（4）	
	第6回	個別指導（5）	
	第7回	個別指導（6）	
	第8回	個別指導（7）	
	第9回	個別指導（8）	
	第10回	個別指導（9）	
	第11回	個別指導（10）	
	第12回	個別指導（11）	
	第13回	中間報告ドラフト提出	
	第14回	中間報告提出	
	第15回	中間報告発表	
準備学習 （予習・復習等）	論文の中間報告までを行う。		
テキスト	特定のテキストは用いない。		
参考文献	参考文献は適宜指導する。		
評価方法	平常クラス貢献度：20% 論文中間報告：80%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
キリスト教死生学—死をとおしていのちの意味を問う		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「キリスト教死生学」に関する学修成果レポート作成に向けた論文指導。		
授業の概要	学生各自の体験を踏まえて、死生学的課題、倫理的課題と向き合い、それらが神学的観点からどのように位置付けられるかを考察する。その際、他宗教との比較の観点、現代的課題などを考慮に入れ、検討を加えて専攻科の講義科目、修了研究演習Ⅰで得た知見等と結び付けつつ、学修レポートのテーマを絞り込み、作成する。		
授業計画	第1回	あなたの死生観	
	第2回	日本の死生観の課題	
	第3回	フィールドワーク①	
	第4回	学修成果レポートテーマ決定に向けて	
	第5回	テーマによる報告と討議	
	第6回	テーマによる報告と討議	
	第7回	フィールドワーク②	
	第8回	テーマによる報告と討議	
	第9回	テーマによる報告と討議	
	第10回	レポート指導	
	第11回	レポート中間報告	
	第12回	レポート指導	
	第13回	レポート仮提出	
	第14回	レポート提出と省察	
	第15回	レポート提出と省察	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の新聞朝刊(社は問わない)1面と社説を読んでくること。 授業時に指示された課題の遂行と授業後の省察を確実にすること。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会) 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』(日本キリスト教団出版局)		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	学修成果レポート:70% 授業への参加態度:30%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
比較社会・政治学・社会思想・沖縄学にかんする「学修成果」および修了論文の作成		輪島 達郎（わじま たつろう）	
授業の到達目標 及びテーマ	比較社会・政治学、社会・政治思想、沖縄学のいずれかの領域について各自の研究課題についての研究を深めて修了論文を作成し、それをいったん大学評価・学位授与機構に提出する「学修成果」（レポート）としてまとめていく。		
授業の概要	修了論文演習Ⅰにおいて設定したテーマと、習得した論文構成方法にしたがい、文献資料の読み込みについても継続しながら、実際に論文を執筆していく。毎回の授業では、文献資料の読解指導と論文の執筆指導を行う。		
授業計画	第1回	文献読解と論文執筆指導（1）	
	第2回	文献読解と論文執筆指導（2）	
	第3回	文献読解と論文執筆指導（3）	
	第4回	文献読解と論文執筆指導（4）	
	第5回	文献読解と論文執筆指導（5）	
	第6回	文献読解と論文執筆指導（6）	
	第7回	文献読解と論文執筆指導（7）	
	第8回	文献読解と論文執筆指導（8）	
	第9回	文献読解と論文執筆指導（9）	
	第10回	文献読解と論文執筆指導（10）	
	第11回	学修成果執筆指導（1）	
	第12回	学修成果執筆指導（2）	
	第13回	学修成果執筆指導（3）	
	第14回	学修成果執筆指導（4）	
	第15回	学修成果執筆指導（5）	
準備学習 (予習・復習等)	文献の読み込み、論文の執筆、学習成果の執筆を行っておく必要がある。		
テキスト	なし。		
参考文献	各自の研究テーマに応じて指示する。		
評価方法	平常点:50% 学修成果:50%		

修了研究演習Ⅱ		前期 2 単位	2年 多元文化専攻
社会学のテーマで、「学修成果」レポートを書く		渡邊 良智（わたなべ よしとも）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業は、大学評価・学位授与機構へ学位授与を申請する際に必要とされる「学修成果」としてのレポート作成の指導を行い、申請に合格することを目標とする。具体的には、レポートのテーマの設定、先行研究のレビュー、仮説の設定、関連資料の収集、それらの分析、仮説の検証、結論の確認、これらの作業を行い、その成果を15000字以上のレポートにまとめる。		
授業の概要	大学評価・学位授与機構へ学位授与を申請する際に要求される「学修成果」レポートの内容をふまえてレポート作成を行う。具体的には、各人の問題意識に合わせてテーマを選択し、先行研究をレビューして自分の検証する仮説を立てて、関連データを収集する。それらを分析して仮説が証明されるか否か検討して結論とする。これらの過程を文章にして「学修成果」レポートとして完成する。		
授業計画	第1回	テーマの選択	
	第2回	テーマの設定	
	第3回	先行研究の学習（1）	
	第4回	先行研究の学習（2）	
	第5回	先行研究の学習（3）	
	第6回	仮説の設定	
	第7回	関連資料の収集（1）	
	第8回	関連資料の収集（2）	
	第9回	関連資料の分析	
	第10回	仮説の検証	
	第11回	中間報告	
	第12回	「学習成果」レポートの作成	
	第13回	「学修成果」レポートの修正	
	第14回	「学習成果」レポートの完成	
	第15回	「学修成果」要旨の作成	
準備学習 (予習・復習等)	学位授与の申請は、受講者個人がするものなので、「学習成果」レポートの作成も個人の責任で行うことになる。受講者が自発的に調査研究することが期待される。		
テキスト	とくになし		
参考文献	とくになし。必要に応じて適宜指示する。		
評価方法	授業参加度:40% 論文:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
2年間の研究の成果として、織作品を制作、修了制作作品として結実させる		阿久津 光子（あくつ みつこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了研究演習Ⅱで研究・制作した織の造形表現研究を深め、修了制作に結実、修了作品として完成させる。学生自身による主体的・総合的・専門的な研究実践の過程と、その成果としての作品を修了研究演習の目的とする。さらに現代教養学科発表会（修了作品展）において、他者に発信し伝達するための方法：作品展示、展覧会案内、ギャラリートーク・プレゼンテーションなどを通して、総合的な力を養うことを目指す。		
授業の概要	今まで学んできたことを基にすべて一人でまず組み立てることで、学生の総合力を確認しながら個別指導を進める。短い時間を有効に制作に当てるために、テーマ、作品制作のコンセプトとデッサン、デザイン画をしっかりと検討して準備しておく必要がある。制作には時間配分が大切なので、工程表を組み、時間の管理をすることも重要となる。授業ごとに確認、相談しながら進めて行く。		
授業計画	第1回	各自の修了制作のテーマ・デザイン画・工程表などを発表。内容、作業工程、必要事項を確認し具体的なアドバイスをするので、それを基に再度計画を見直して進める。	
	第2回	修了制作：各自の工程表に沿って織の制作をすすめる。以下、個別指導。	
	第3回	修了制作：1	
	第4回	修了制作：2	
	第5回	修了制作：3	
	第6回	修了制作：4	
	第7回	修了制作：5	
	第8回	修了制作：6	
	第9回	修了制作：7	
	第10回	修了制作：8	
	第11回	経糸始末・作品仕上げ	
	第12回	作品仕上げ	
	第13回	完成／修了制作作品提出／作品撮影	
	第14回	講評会	
	第15回	修了展の作品展示	
準備学習 (予習・復習等)	後期授業が始まるまでに、各自のテーマ、作品制作のコンセプトとデッサン、デザイン画をしっかりと検討して準備しておくこと。織の作品制作には膨大な時間がかかる。授業時間だけでは作品は出来ないので、悔いのない修了制作作品を完成させるために、空き時間を利用して制作時間を確保すること。「制作ノート」をつくり、制作の過程で生じたこと（制作に関わること、イメージ、内容、制作意図、表現についてなど）はすべてメモしておくこと。		
テキスト	特に定めず、必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:30% 修了制作作品:50% 期末レポート:20%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了研究演習Ⅲ		井上 泰至 (いのうえ やすし)	
授業の到達目標及びテーマ	江戸時代の文学・文化を対象とし、各自の問題関心に沿って調査・研究をすすめ、修了論文を作成します。諸作業を通じて、作品を取り巻く状況に理解を深め、文学作品を丁寧に読み解きます。また長い文章を論理的に構築し、わかりやすく適切に表現する技術を身につけます。		
授業の概要	各自研究テーマ・問題設定をします。それに基づいて文献調査・分析をし、自分なりの独自の結論を導き出す作業を各自行い、口頭発表と討論をします。		
授業計画	第1回	研究テーマの設定	
	第2回	文献調査法指導	
	第3回	テーマ1についての文献調査	
	第4回	テーマ1についての研究報告	
	第5回	テーマ2についての文献調査	
	第6回	テーマ2についての研究報告	
	第7回	テーマ3についての文献調査	
	第8回	テーマ3についての研究報告	
	第9回	下書き作成	
	第10回	下書き提出・添削	
	第11回	補完調査・研究その1	
	第12回	補完調査・研究その2	
	第13回	論文提出準備	
	第14回	口頭試問	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、文献調査、対象研究。		
テキスト	その都度指示します。		
参考文献	その都度指示します。		
評価方法	論文執筆の過程:50% 論文内容:50%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了研究演習Ⅲ（認知心理学）		植月 美希（うえつき みき）	
授業の到達目標及びテーマ	<p>自分の問題意識に基づいた実験・調査から得られたデータに基づいて考察することができる。 自分の問題意識や実験・調査の内容、データについて、論文やプレゼンテーションを通じて周囲に分かりやすく説明することができる。</p>		
授業の概要	<p>修了研究演習Ⅰ、Ⅱを踏まえ、修了論文の執筆に向け、実験・調査で得られたデータを整理し、統計的に分析し、考察する。 授業は基本的には演習形式で進めるが、論文指導については、個別指導を中心に進める。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	進捗状況の報告・考察について	
	第3回	論文指導1（考察1）	
	第4回	論文指導2（考察2）	
	第5回	論文指導3（考察3）	
	第6回	論文指導4（全体1）	
	第7回	論文指導5（全体2）	
	第8回	論文指導6（全体3）	
	第9回	要旨の作成1	
	第10回	要旨の作成2	
	第11回	プレゼンテーションの準備	
	第12回	プレゼンテーション指導1	
	第13回	プレゼンテーション指導2	
	第14回	プレゼンテーション指導3	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>事前学習 関心のあるテーマや問題について文献検索を行い、論文を読み、まとめておくこと。 事後学習 講義内容を踏まえ、出題される課題を着実に締切までに提出すること。</p>		
テキスト	特に指定しない		
参考文献	山田剛史・林 創 「大学生のためのリサーチリテラシー入門」 ミネルヴァ書房 白井利明・高橋一郎 「よくわかる卒論の書き方 第2版」 ミネルヴァ書房		
評価方法	課題:20% 授業参加態度:20% 修了論文:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
経営学に関する修了論文の作成		宇田 美江 (うだ みえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>「経営学」に関するテーマ（人的資源管理、従業員のキャリア形成から、企業構造、経営戦略、経営文化、国際経営、起業等に関するテーマまで、広く経営や企業、キャリア形成に関するテーマ）で修了論文を書く学生を対象として、論文作成に向けた指導を行う。学生各人が関心を持つ企業経営や従業員の雇用・管理の課題について、経営学の観点からそれらがどのように位置づけられるかについて討議する。その際、現代社会における経営や企業の観点、また、グローバル化に伴い、企業経営における日本以外の多文化における企業や経営との比較を考慮に入れて検討を加えていく。そして、専攻科の講義科目で得た知見と結びつけつつ、修了論文のテーマを絞り込み、修了論文を作成する。</p>		
授業の概要	各自が興味のあるテーマを選び、修了論文の作成を中心に行う。課題（文献を読んでくる、報告を用意する）を与えるため、その際は必ず準備して臨むこと		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	発表と討議 グループ①	
	第3回	発表と討議 グループ②	
	第4回	発表と討議 グループ③	
	第5回	発表と討議 グループ①	
	第6回	発表と討議 グループ②	
	第7回	発表と討議 グループ③	
	第8回	発表と討議 グループ①	
	第9回	発表と討議 グループ②	
	第10回	発表と討議 グループ③	
	第11回	論文仮提出と手直し	
	第12回	発表と討議、論文 手直し グループ①	
	第13回	発表と討議、論文 手直し グループ②	
	第14回	発表と討議、論文 手直し グループ③	
	第15回	発表と論文提出	
準備学習 (予習・復習等)	議論を活発に進めるために、テーマに基づいて、自分なりに調べ、専門用語等をよく理解しておくこと。		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	開講時に指示する。		
評価方法	発表:30% 授業への参画度:40% 修了論文:30%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
食文化研究		宇都宮 由佳 (うつのみや ゆか)	
授業の到達目標 及びテーマ	①食に関する研究について、文献研究・実証的研究を実施し、得られた結果をもとに、論文を執筆する。 ②プレゼンテーション資料を作成し、他者へ自分の意見を伝えると同時に、他者の意見に耳を傾け、対応できる力を養う。		
授業の概要	本演習では、食文化に関する文献・資料の検索・収集、分析の仕方、論文執筆の方法を学ぶ。実証的研究を選択した場合は、質問紙調査票作成から対象者募集、実施期間の設定、集計・解析等、綿密な研究計画をたてて実施する。得られた結果をもとに論文を執筆する。あわせてプレゼンテーション用資料を作成し、自分の考えを他者へ伝えると同時に、他者の意見に耳を傾け、対応できる力を養う		
授業計画	第1回	論文執筆の中間報告 1	
	第2回	論文執筆の中間報告 2	
	第3回	個別指導 1	
	第4回	個別指導 2	
	第5回	個別指導 3	
	第6回	論文構成の確認	
	第7回	中間発表Ⅱ - 1	
	第8回	中間発表Ⅱ - 2	
	第9回	中間発表Ⅱ - 3	
	第10回	個別指導 4	
	第11回	個別指導 5	
	第12回	個別指導 6	
	第13回	個別指導 7	
	第14回	論文発表 1	
	第15回	論文発表 2	
準備学習 (予習・復習等)	個別指導及び中間発表等は、事前にppt、レジメ等を準備しておく。		
テキスト	適時、紹介する。		
参考文献	各自の研究テーマにそった文献・資料を用いる。		
評価方法	受講態度:30% 論文:70%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文の完成にむけて		梅垣 千尋（うめがき ちひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○イギリスの文化や歴史について、先行研究の蓄積を踏まえて、アカデミックなレベルで精緻な議論を組み立てることができるようになる。</p> <p>○設定した問題に即した史料を渉猟し、適切な史料批判の方法やテキストの分析的な読解方法を理解する。</p> <p>○論理性と説得性の面で形式・内容ともに申し分のない修了論文を完成させる。</p>		
授業の概要	<p>イギリスの文化や歴史にかんするテーマで修了論文を書く学生を対象として、論文作成にむけた指導を行う。論理性、説得性、史料の扱い方、研究史上の位置づけなどの観点から、すでに提出された学修成果レポートの内容を批判的に検討し、問題点をあげる。それらの問題点を改善しながら、より完成された修了論文を書き上げる。</p>		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	論文を書くための文献調査法	
	第3回	論文作成にむけた個別指導（1）	
	第4回	論文作成にむけた個別指導（2）	
	第5回	論文作成にむけた個別指導（3）	
	第6回	論文作成にむけた個別指導（4）	
	第7回	中間発表（1）	
	第8回	中間発表（2）	
	第9回	中間発表（3）	
	第10回	中間発表（4）	
	第11回	論文執筆における個別指導（1）	
	第12回	論文執筆における個別指導（2）	
	第13回	論文の形式の確認	
	第14回	論文個別リライト指導（1）	
	第15回	論文個別リライト指導（2）	
準備学習 (予習・復習等)	<p>より完成度の高い修了論文を仕上げるには、それまでに書き上げてきたレポートの内容をみずから批判的にとらえ返すプロセスが必要とされる。完成度を高めるためには、授業時間外での粘り強い学習姿勢が求められるので、主体的に取り組んでいくこと。</p>		
テキスト	特に使用しない。		
参考文献	必要に応じて、授業中に適宜紹介する。		
評価方法	中間発表:30% 論文作成過程:30% 修了論文:40%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
プロダクトデザインを提案する		奥村 健一（おくむら けんいち）	
授業の到達目標 及びテーマ	デザインに目を向けることにより、ヒトとモノとコトの関係をより深く理解する。 道具やシステムに内在する問題点や可能性の中からデザインの目標を設定し、構想・試作あるいは比較評価をしながら、ものづくりの基本をより深く理解する。		
授業の概要	各自がテーマを再確認して、プロダクトデザインに関連する到達目標を絞り込む。 目標に応じたアプローチをさらに工夫し、可能性と制約を把握しながら具体化を適宜進めていく。		
授業計画	第1回	各自のテーマの振り返り	
	第2回	構想の確認と到達目標の設定	
	第3回	構想から具体化へ：具体化の方法と構想の広がりのおき合わせ	
	第4回	構想から具体化へ：具体化の方法の選択	
	第5回	構想から具体化へ：考察の要点の把握、または具体化の試行錯誤	
	第6回	構想から具体化へ：到達目標と実現方法の確認	
	第7回	考察・制作	
	第8回	考察・制作の続行	
	第9回	考察・制作の続行	
	第10回	考察・制作の続行	
	第11回	考察・制作：完成予想と不足部分の確認	
	第12回	考察・制作：不足部分の補いと完成度を上げる	
	第13回	最終チェック	
	第14回	まとめ	
	第15回	発表・講評会	
準備学習 (予習・復習等)	デザイン上の目標実現や問題解決のためには、具体的な生活のシーンからヒトとモノの関係をさまざまに取り出して異なる場面と比較できることが必要である。いろいろな視点をもつことがデザインを評価する必要条件となる。		
テキスト	特になし		
参考文献	特になし		
評価方法	平常点:40% 期末提出物:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
法と社会倫理：社会比較の観点から		河見 誠（かわみ まこと）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了研究演習Ⅲでは、修了論文を完成させ、研究発表会に向けた指導を行う。		
授業の概要	修了研究演習ⅠⅡの成果を元に、修了研究演習Ⅲでは、修了論文を、その内容とともに、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説への言及、表現の適切性、等々の観点において確認し、完成させる。と同時に、自らの考えを他者に適切かつ効果的に表現し伝達する力を身につけるため、研究発表会に向けた指導を行う。		
授業計画	第1回	論文の構成の確認	
	第2回	一つ目の論点に関する章の報告と討論	
	第3回	一つ目の論点に関する章の再報告と討論	
	第4回	二つ目の論点に関する章の報告と討論	
	第5回	二つ目の論点に関する章の再報告と討論	
	第6回	三つ目の論点に関する章の報告と討論	
	第7回	三つ目の論点に関する章の再報告と討論	
	第8回	論文の一貫性、論理性の確認	
	第9回	論文の説得性の確認	
	第10回	論文の先行研究や学説への言及の確認	
	第11回	論文の表現の適切性の確認	
	第12回	論文全体の内容と構成の最終確認	
	第13回	論文要旨の検討	
	第14回	研究発表会原稿の検討	
	第15回	論文提出と振り返り	
準備学習 (予習・復習等)	予め指示された課題(定められた観点からの検討、文献を読んでくる、報告を用意する、要旨や研究発表会原稿を作成してくる、など)を準備して授業に臨むこと。報告・再報告は、修了論文の原稿完成に結びつくものと位置づけられる。原稿作成の上、報告・再報告に臨むこと。授業後は、授業で指摘された点を、原稿、論文構成に反映させていくこと。		
テキスト	適宜指示する。		
参考文献	葛生・河見・伊佐『新・いのちの法と倫理』（法律文化社） 河見『自然法論の必要性和可能性』（成文堂）		
評価方法	修了論文:75% 授業への参加度合い:25%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
英語教育と英語社会論		黒岩 裕 (くろいわ ゆたか)	
授業の到達目標 及びテーマ	1) 講義と論文紹介を通して、英語教育、英語社会論に関する専門知識を習得すること。 2) 教員の指導を受けながら修了論文を書き進め、完成させること。		
授業の概要	教員による講義と学生による論文紹介を交互に行う。講義で取り上げるテーマは以下の授業計画の通り。学生は、短大・大学や学会の紀要から論文を一つ選び、授業で紹介する。論文紹介の際、教員は論文の内容や発表に関する補足説明を行う。 受講生は教員の指導を受けながら修了論文を書き進め、完成させる。		
授業計画	第1回	Introduction 後期の授業のテーマ、修了論文の書き方について	
	第2回	アジアの英語① シンガポール	
	第3回	論文紹介① シンガポールの英語事情	
	第4回	アジアの英語② タイ	
	第5回	論文紹介② タイの英語事情	
	第6回	アジアの英語③ 中国・台湾	
	第7回	論文紹介③ 中国・台湾の英語事情	
	第8回	アジアの英語④ 韓国	
	第9回	論文紹介④ 韓国の英語事情	
	第10回	アジアの英語⑤ 日本	
	第11回	論文紹介⑤ 日本の英語事情	
	第12回	修了論文経過報告① グループ1	
	第13回	修了論文経過報告② グループ2	
	第14回	修了論文経過報告③ グループ3	
	第15回	振り返りとまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	1) 受講生は事前に論文を読んで、その内容を正確に理解しておくこと。 2) 論文紹介の担当者は、論文の内容を分かりやすく簡潔にまとめたハンドアウトを用意しておくこと。 3) 教員の指導を受けながら、修了論文を書き進めること。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	適宜紹介する。		
評価方法	論文紹介:20% 修了論文経過報告:20% 修了論文:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
アメリカ史・アメリカ研究の修了論文にむけて		後藤 千織（ごとう ちおり）	
授業の到達目標 及びテーマ	資料の検索・収集、資料の読み方、先行研究のレビュー、議論の組み立て方など、修了論文作成に必要な技術を身につけます。アメリカ史・アメリカ研究の主要トピックを文献講読やディスカッションを通じて学びます。		
授業の概要	参加者の研究テーマに関連した共通文献を読み、ディスカッションする。並行して、「小論試験」や修了論文完成に向けた個別指導を行う。		
授業計画	第1回	はじめに	
	第2回	研究発表 1	
	第3回	研究発表 2	
	第4回	共通文献を読んでディスカッション 1	
	第5回	共通文献を読んでディスカッション 2	
	第6回	共通文献を読んでディスカッション 3	
	第7回	共通文献を読んでディスカッション 4	
	第8回	修了論文の中間報告	
	第9回	小論試験対策 1	
	第10回	小論試験対策 2	
	第11回	修了論文の個別指導 1	
	第12回	修了論文の個別指導 2	
	第13回	提出前の個別指導	
	第14回	修了論文発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	文献を読んで、論点・疑問点を整理して授業にのぞむ。修了論文の執筆を進め、定期的に成果を提出すること。		
テキスト	授業時に指示する。		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	授業への参加姿勢:40% 修了論文:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了研究演習 Ⅲ —古典文学篇		小林 正明 (こばやし まさあき)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>○学位申請レポートを発展させた修了論文を完成し提出することができる。</p> <p>○修了論文にむけてテーマに関連する古典文学作品まで読書を拡大できる。</p>		
授業の概要	<p>学位申請以降に仕上げる修了論文を意識した授業である。全体授業と面接授業とを併用する。教養専攻と多元文化専攻1年との3種合併授業であるが、各自が相互に特性を活かして、生産的に取り組めるよう、指導に留意したい。</p>		
授業計画	第1回	全体授業（前半）発表会①申請論文趣旨発表。／個人面談（後半）学習計画書書式渡し。	
	第2回	個人面談。後期学習計画書の修正相談。	
	第3回	個人面談。全体会発表資料の相談。	
	第4回	全体会。発表②。持ち帰り課題の確認。	
	第5回	全体会。第4回持ち帰り課題のフォロー・アップ。	
	第6回	個人面談。草稿の要点カード、再整理。	
	第7回	個人面談。要点カードの追加提出。修了論文の予定目次1次案。	
	第8回	全体会。予定目次と構想の発表。学生相互の検討。	
	第9回	個人面接。全体会（第8回）問題解決案の検討。	
	第10回	個人面接。修了論文草稿の第1次提出。	
	第11回	個人面談。第1次提出草稿の修正指示と提出可否の確認。	
	第12回	全体会、発表資料の作成説明。個人面談。修正の確認、その後に提出許可。	
	第13回	全体会。発表資料原稿の集約。雑誌入稿の受理。	
	第14回	全体会。発表会。	
	第15回	個人面接。総括と今後の展望、相談。	
準備学習 (予習・復習等)	<p>○修了論文の完成と提出</p> <p>○各種発表の資料作成</p> <p>○最終発表会の資料作成</p>		
テキスト	各自のテーマによる。		
参考文献	各自のテーマにより随時紹介。		
評価方法	修了論文の水準:30% 個人面談の活用・成果:30% 全体会の参加・発言:20% 進捗本文の補充:20%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
歴史の方法論とその実践		小林 瑞乃 (こばやし みずの)	
授業の到達目標及びテーマ	各自の問題関心に基づいた研究テーマを決め、その歴史的経過と現代的意味を探る。研究の現状と課題をふまえながら調査・検証を進め、独創的な研究へと発展させるための基礎的作業を積み重ね、研究・調査の成果をレポートにまとめる。		
授業の概要	研究テーマの決定、先行研究の調査、研究課題の分析・検討、史料の読解など、論文作成に関する総合的な指導を行う。毎回、各自は研究の進行状況の報告を行い、全員による活発な討論を通じて研究を深め、客観的な観点を培いながら研究レポートを完成する。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	準備作業① テーマの発見	
	第3回	準備作業② テーマを絞る	
	第4回	準備作業③ 調査・研究の方法論について	
	第5回	準備作業④ 文献目録の作成と今後の作業	
	第6回	研究報告：グループ①	
	第7回	研究報告：グループ②	
	第8回	研究報告：グループ③	
	第9回	研究報告：グループ④	
	第10回	中間報告	
	第11回	研究報告：グループ①	
	第12回	研究報告：グループ②	
	第13回	研究報告：グループ③	
	第14回	研究報告：グループ④	
	第15回	修了論文完成発表会	
準備学習 (予習・復習等)	毎回授業後に配布する研究調査報告シートに研究結果や今後の課題、問題点などをまとめ、次回授業時に提出すること。		
テキスト	特に指定しない。必要に応じて資料を配付する。		
参考文献	研究テーマに応じて適宜指示する		
評価方法	報告、シート記述など:50% 修了論文:50%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文作成に向けて (3)		齋藤 修三 (さいとう しゅうぞう)	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文を完成させる。学位授与機構の小論試験に向けた準備をする。		
授業の概要	学位授与機構に提出した学修成果 (レポート) に基づき、それをさらに推敲し練り上げた修了論文を完成させる。10月期に学位申請した者は提出した学修成果を (未申請者は学修成果に相当するレポートを) 授業開始時に持参すること。まずはそれを客観的に見直す作業を出発点とし、修了論文作成にとりかかる。授業期間中は資料精読とパラグラフ単位の文章を提出し、コメントを受けてリライトするという作業を繰り返す。		
授業計画	第1回	学修成果 (レポート) についての報告と検討	
	第2回	学修成果に関わる小論課題1 (論文テーマに関するもの)	
	第3回	学修成果に関わる小論課題2 (論文テーマに関するもの)	
	第4回	学修成果に関わる小論課題3 (引用文献に関するもの)	
	第5回	学修成果に関わる小論課題4 (引用文献に関するもの)	
	第6回	資料精読とパラグラフ作文の提出・コメント (引用文献リスト再検討)	
	第7回	資料精読とパラグラフ作文の提出・コメント・リライト (論旨の骨格と章立て検討)	
	第8回	資料精読とパラグラフ作文の提出・コメント・リライト (新規書き起こし分1)	
	第9回	資料精読とパラグラフ作文の提出・コメント・リライト (新規書き起こし分2)	
	第10回	資料精読とパラグラフ作文の提出・コメント・リライト (新規書き起こし分3)	
	第11回	資料精読とパラグラフ作文の提出・コメント・リライト (論旨の整合性他)	
	第12回	資料精読とパラグラフ作文の提出・コメント・リライト (注の付け方他書式確認)	
	第13回	資料精読とパラグラフ作文の提出とコメント・リライト (表記の統一他)	
	第14回	本文最終チェックと要約の作成	
	第15回	修了論文と要約の完成	
準備学習 (予習・復習等)	予習: 資料を精読しパラグラフ作文を重ねる。 復習: 作文を推敲・リライトを重ね、更に資料を読む。		
テキスト	プリントなど		
参考文献	随時指示する		
評価方法	平常点 (提出課題) : 30% 修了論文: 70%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文を仕上げよう		清水 康幸（しみず やすゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期までの学びをふまえ、修了論文を書き上げるための授業である。自らの関心を深め、論文の形にするまでの具体的な指導を行う。		
授業の概要	手順としては、①各人が関心を持つ主題について、教育学的観点からの位置づけを明らかにし、②関連する文献資料目録を作成しつつテーマを絞り、終了論文の題目を決定し、③論文の構成、内容を決定し書き進めていく。このうち①と②は、できるだけ前期のうちに準備しておくことが望まれる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	各自の研究テーマの発表と交流①	
	第3回	各自の研究テーマの発表と交流②	
	第4回	学生による個別発表①	
	第5回	学生による個別発表②	
	第6回	学生による個別発表③	
	第7回	学生による個別発表④	
	第8回	論文執筆内容の個別指導①	
	第9回	論文執筆内容の個別指導②	
	第10回	論文執筆内容の個別指導③	
	第11回	論文執筆内容の個別指導④	
	第12回	論文執筆内容の個別指導⑤	
	第13回	修了論文発表会に向けた指導①	
	第14回	修了論文発表会に向けた指導②	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	前期の段階から、自らの関心・テーマを定め、文献一覧の作成や題目の決定、章立て案の作成を進める必要があり、個別の指導が必要となる。後期はそれらを発表し確定した後、具体的な論文執筆作業に入る。最後は論文の中味に関する個別指導を行うことになる。		
テキスト	特に定めない。		
参考文献	そのつど提示する。		
評価方法	発表:30% 論文:70%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
近現代文学研究 3		鈴木 直子 (すずき なおこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・近現代の文学を対象とし、各自の問題関心に沿って調査・研究をすすめ、修了論文を作成します。 ・諸作業を通じて、作品を取り巻く状況に理解を深め、文学作品を丁寧に読み解きます。 ・また長い文章を論理的に構築し、わかりやすく適切に表現する技術を身につけます。 		
授業の概要	修了論文演習ⅠおよびⅡの成果を踏まえ、さらに研究をすすめ、修了論文を提出します。		
授業計画	第1回	研究テーマの設定・確認	
	第2回	テーマ1についての文献調査	
	第3回	テーマ1についての成果報告	
	第4回	テーマ2についての文献調査	
	第5回	テーマ2についての成果報告	
	第6回	テーマ3についての文献調査	
	第7回	テーマ3についての成果報告	
	第8回	論文執筆と添削1	
	第9回	論文執筆と添削2	
	第10回	論文の構成を確認する	
	第11回	論文執筆と添削3	
	第12回	修了論文仕上げと提出	
	第13回	口頭試問1	
	第14回	口頭試問2	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの設定、文献調査、対象研究。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	とくになし。		
評価方法	調査・研究:40% 発表・報告:20% 修了論文:40%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
日英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善提案などをテーマとする修了論文の作成		高野 嘉明 (たかの よしあき)	
授業の到達目標及びテーマ	音声、文字、意味、文法・語法、発想などの様々な側面に関する日本語と英語の相違、または英和・和英辞典の批評や改善への提案などをテーマとした修了論文を作成しようとする学生を対象に、その論文を作成するための基本的事項を確認し、論文作成のための指導および研究発表会のための準備を行います。		
授業の概要	論文作成のための基本的事項の確認については、「修了論文演習Ⅰ・Ⅱ」で扱った各授業テーマと(ほぼ)同内容の事柄に関する英語の文献を読むことにより、さらなる知識を身に付け、それを基にディスカッションを行うことによって、考え方をより広く、より深くしていくことになります。また、論文作成に関しては、課外の時間帯に必要に応じて適宜行われる個人指導において、修了論文の内容を先行文献の妥当性、論理性、独自性などの観点から再確認し、必要があればそれを再検討した上で論文を完成させ、さらにはそれを基にした研究発表会の準備作業を行います。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	日英語の音声	
	第3回	日英語の文字	
	第4回	日英語の語と意味	
	第5回	日英語の文法・語法	
	第6回	日英語の発想	
	第7回	英和・和英辞典の音声の記述方法	
	第8回	英和・和英辞典の語の扱い方	
	第9回	英和・和英辞典の意味の記述方法	
	第10回	修了論文の中間発表と講評	
	第11回	英和・和英辞典の文法・語法の記述方法	
	第12回	英和・和英辞典の発想の扱い方	
	第13回	英和・和英辞典の限界	
	第14回	修了論文の発表と講評	
	第15回	全体のまとめと補足	
準備学習(予習・復習等)	各授業の終了時に次回授業のテーマと課題を提示しますので、それについてよく調べて考えてきて下さい。また、修了論文作成に向けては定期的に相談し、指導を受けるようにして下さい。		
テキスト	特には使用せず、必要な資料はプリントにして配布します。		
参考文献	必要に応じて適宜紹介します。		
評価方法	平常点:25% 授業への参加度:25% 修了論文:50%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
実証研究論文を仕上げる		武田 美亜 (たけだ みあ)	
授業の到達目標 及びテーマ	(1) 社会心理学の研究論文の形式を理解する。 (2) 研究成果を研究論文の形式に則した形でまとめる(修了論文)。 (3) 研究成果の内容を要約して伝える方法を身につける。		
授業の概要	基本的に演習形式で進めるが、必要に応じて個別指導も行なう。社会心理学の実証研究論文の形式に沿った修了論文を執筆する。 お互いにコメントしあうことで各自の研究を深める。 授業外の時間も大量に使って自主的に作業を進めることが必須である。		
授業計画	第1回	進行状況と課題の確認	
	第2回	レポートの見直し	
	第3回	レポートの再吟味	
	第4回	レポートの報告と質疑応答	
	第5回	修了論文の構成	
	第6回	修了論文の執筆	
	第7回	修了論文の進捗状況確認	
	第8回	修了論文の継続執筆	
	第9回	修了論文の経過報告	
	第10回	修了論文の草稿完成	
	第11回	修了論文の検討	
	第12回	修了論文の修正	
	第13回	修了論文の整形	
	第14回	研究参加者への報告の作成	
	第15回	総括	
準備学習 (予習・復習等)	授業中は発表とディスカッションを行なうので、発表の準備やディスカッションを踏まえて自分の研究を見直すことなどは授業の前後に必須である。個別相談も積極的に来てほしい。 必要に応じて論文の書き方、研究法、分析法などに関する書籍等も各自参照すること。		
テキスト	特に指定しない。各自必要な文献を用いる。		
参考文献	松井豊(2006)『心理学論文の書き方』河出書房新社／戸田山和久(2012)『新版 論文の教室』NHK出版／このほか適宜紹介する。		
評価方法	修了論文:70% 課題への取り組み:30%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
学生自身のテーマの研究と修了論文作成		谷本 信也 (たにもと しんや)	
授業の到達目標 及びテーマ	データや緒論を研究し独自の視点を持った内容の修了論文作成を目標とする。テーマは食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関して学生が関心を持つ領域を選んでいる。		
授業の概要	食生活や健康問題、添加物や食品開発を中心とした食関連問題に関するテーマで修了論文作成に向けた指導を行う。学生が関心を持つ主題の研究途中の問題点を、食品化学、栄養学、食品開発や法律、政治、経済の観点からどのように置つけられるかについて討議し、これまでの学習や専攻科の講義科目の学習で得た知見とを結びつけつつ、更に深く学んでゆき、修了論文に結実させる。		
授業計画	第1回	論文作成	1
	第2回	論文作成	2
	第3回	論文作成	3
	第4回	論文作成	4
	第5回	論文作成	5
	第6回	論文作成	6
	第7回	論文作成	7
	第8回	論文作成	8
	第9回	論文作成	9
	第10回	論文作成	10
	第11回	論文作成、発表練習	1
	第12回	論文作成、発表練習	2
	第13回	論文作成、発表練習	3
	第14回	論文作成、発表練習	4
	第15回	論文作成、発表練習	5
準備学習 (予習・復習等)	自身で研究を進展させ報告の準備を毎回行う		
テキスト	特に指定はしない		
参考文献	毎回の授業の中で示します		
評価方法	授業への積極的な参加:40% 論文:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
デザイン造形による作品制作		趙 慶姫 (ちょう きょんひ)	
授業の到達目標 及びテーマ	デザインに求められる普遍的な造形美の探求により、本科で目標とした他者とコミュニケーションする段階から、さらに他者の精神に働きかけ共感を得る域に達する表現力を身につけることを目標とする。Ⅲでは高度な表現による修了作品を完成し、その制作のプロセスを通してデザインの思考方法を体得する。		
授業の概要	修了研究演習Ⅱで制作したエスキースをもとに、修了作品の構想を固める。最終エスキースを制作し、全ての要素、ディテールを決定、制作手順を計画する。修了作品としての完成度を高め、展示発表を行う。		
授業計画	第1回	エスキースの検証、作品の構想ブラッシュアップ	
	第2回	ドローソフトによる最終エスキース制作1	
	第3回	ドローソフトによる最終エスキース制作2	
	第4回	ドローソフトによる最終エスキース制作3	
	第5回	作品の試作1	
	第6回	作品の試作2 / 中間発表、試作の確認・決定	
	第7回	作品制作1 (下描きなど)	
	第8回	作品制作2 (下描きなど)	
	第9回	作品制作3 (着彩など)	
	第10回	作品制作4 (着彩など)	
	第11回	作品制作5 (着彩など)	
	第12回	作品制作6 (着彩など)	
	第13回	作品制作7 (仕上げ)	
	第14回	講評会 / 修了展展示準備および発表会準備	
	第15回	修了展展示	
準備学習 (予習・復習等)	授業時間は経過の確認と指導にあてるので、時間外に制作を進めることが必要になる。最後に作品についてのレポートをまとめ、発表のレジュメを作成し、準備する。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する。		
参考文献	授業中に適宜紹介する。		
評価方法	授業への参加度:30% レポート:20% 作品:50%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
近現代文学研究		辻 吉祥（つじ よしひろ）	
授業の到達目標 及びテーマ	明治期以降の文学、批評、メディアを対象として研究を深めます。過去の著名な作家はほとんど、書く作業の苦しみを呪うように日記に書き付けています。にもかかわらず「書く」のは、そこに「こだわり」があるからなのでしょう。テキストと対峙しながら「みずから自身のなかのこだわり」をいっそう深く掘りすすめてください。論文の完成が到達目標です。		
授業の概要	Ⅲでは、修了論文の核心について、論争的にして自己批評的であるよう、同時にそれにふさわしい文体に整えていくなかで、議論を重ねてゆく。先行研究を再度見直し、論考の意義について確認し、完遂に近づける。また思考の社会性とその意義付けのための各回の研究において、自らのアイデアと論考を通して示されるビジョンが、どの程度社会性を獲得できるものか、プレゼンテーションを通して自覚できるようにする。全ての指導において必要となるアカデミック・ライティングの手法に関しては、通俗的一般化を避け、個々の研究内容にふさわしい形式としてのそれになるよう、具体的、創造的に指導する。		
授業計画	第1回	調査研究・論文作成1—論文推敲Ⅰ（テーマ・構成について）	
	第2回	調査研究・論文作成2—論文推敲Ⅱ（テーマ・構成について）	
	第3回	調査研究・論文作成3—論文推敲Ⅲ（章ごとの内容について）	
	第4回	調査研究・論文作成4—論文推敲Ⅳ（章ごとの内容について）	
	第5回	調査研究・論文作成5—論文推敲Ⅴ（部分と全体の関係について）	
	第6回	調査研究・論文作成6—論文推敲Ⅵ（部分と全体の関係について）	
	第7回	調査研究・論文作成7—論文推敲Ⅶ（序論と結論について）	
	第8回	調査研究・論文作成8—論文推敲Ⅷ（序論と結論について）	
	第9回	調査研究・論文作成9—論文推敲Ⅸ（注について）	
	第10回	調査研究・論文作成10—論文推敲Ⅹ（注について）	
	第11回	論文講評（グループⅠ）	
	第12回	論文講評（グループⅡ）	
	第13回	論文を生涯の課題に開く	
	第14回	論文を生涯の課題につなげる	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	個別に指示します。		
テキスト	個別に指示します。		
参考文献	個別に指示します。		
評価方法	論文内容:70% テーマごとのプレゼンテーション:30%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
論文を書く		中井 章子 (なかい あやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	論文を執筆、完成させる。		
授業の概要	書いたものをあらかじめ提出し、それに基づき議論する。		
授業計画	第1回	9月までに執筆した論文についての話し合い(1)	
	第2回	9月までに執筆した論文についての話し合い(2)	
	第3回	文献について(1)	
	第4回	文献について(2)	
	第5回	中間報告(1)	
	第6回	中間報告(2)	
	第7回	論文草稿についての話し合い(1)	
	第8回	論文草稿についての話し合い(2)	
	第9回	論文の執筆(1)	
	第10回	論文の執筆(2)	
	第11回	論文の推敲	
	第12回	論文の完成(1)	
	第13回	論文の完成(2)	
	第14回	論文の口頭発表(1)	
	第15回	論文の口頭発表(2)	
準備学習 (予習・復習等)	各自で研究をすすめ、論文草稿を準備する。		
テキスト	論文に必要な文献。		
参考文献	論文に応じた参考文献。		
評価方法	レポート、議論:40% 論文:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
法学の修了論文最終作成へ向けて		信澤 久美子 (のぶさわ くみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>いよいよ、法学の修了論文の最終作成へ向けて、論文を執筆し、仕上げていく段階に至ることになる。論文の内容をさらに深化させ、思考を深め、それと同時に、他者が読んだ時に、理解可能な表現、論述の順番を工夫し、適切な注のつけ方などを指導し、学術論文として批判に耐えられる論文を完成させることができるようになることを目標とする。</p>		
授業の概要	<p>毎回、論文の表現や内容について、きめ細かい指導を行う。レポーターは論文を毎回発表してもらい、あたらな知見について、述べてもらう。レポーターに当たっていない者も、論文がどこまで進んだか、その内容と表現について、指導を行う。お互い、お互いの論文について意見を出し合って、切磋琢磨する。</p>		
授業計画	第1回	夏休みに進めた論文についての報告とそのチェック 1	
	第2回	夏休みに進めた論文についての報告とそのチェック 2	
	第3回	論文の途中報告と論文指導 グループ 1	
	第4回	論文の途中報告と論文指導 グループ 2	
	第5回	論文の途中報告と論文指導 グループ 3	
	第6回	論文の途中報告と論文指導 グループ 4	
	第7回	論文の途中報告と論文指導 グループ 5	
	第8回	論文の途中報告と論文指導 グループ 1	
	第9回	論文の途中報告と論文指導 グループ 2	
	第10回	論文の途中報告と論文指導 グループ 3	
	第11回	論文の途中報告と論文指導 グループ 4	
	第12回	論文の途中報告と論文指導 グループ 5	
	第13回	論文提出と最後のしあげ	
	第14回	論文提出と最後のしあげ	
	第15回	論文提出とチェック	
準備学習 (予習・復習等)	<p>最後の仕上げに入るなので、内容的に、落としてはいけない文献や資料の検証を忘れていないか、初見の人にもわかりやすい表現で論文が書けているか、注が適切にふってあるか、文献引用は適正にされているか、特に、他人のものを引用する際の適切な注のつけ方について、注のつけ方の資料も配るので気をつけて欲しい。</p>		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	折にふれて指示します。		
評価方法	論文途中報告:40% 論文の出来:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
現代文化の特質とその重層的構造		橋本 典子 (はしもと のりこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	21世紀の現代における文化の問題を、1) 技術連関、2) 自然、3) 個別文化の視点から論じる。20世紀後半に技術連関の世界が我々の環境になった。従来の自然だけが我々の環境であった時代とは異なる行為の原理が求められなければならない。現代に即した新しい倫理の追究である。他方、自然との関わりから宗教は成立してきた。我々は個人として固有の文化をもって生きている。これらの複雑な構造を認識し、自分の立つ位置を確認し客観的に事物を見て論文を書くことである。論文指導を並行して行う。		
授業の概要	技術連関、自然、文化を取り上げ、自分の環境について認識するための資料を与え、それぞれが自分の問題を発見することをまず第一の課題とする。更に様々な文献を参照しながら、歴史的にいかにして文化を形成してきたか、を論じる。参加者に発表をしてもらい、対話を行う。新たに提起された問題について授業の中で講義もする。		
授業計画	第1回	序論：技術連関とは何か？その中で現代の行為の問題—エコエティカ	
	第2回	20世紀の技術論：高度に組織化された技術—ハイデガー	
	第3回	技術によって提起された徳目：punctuality（定刻性）、正確であることの価値	
	第4回	人間と自然との関係：世界の諸宗教の自然観—キリスト教、禅—植物との関わり	
	第5回	自然との関わり委から生まれる風土論：デュボス、テーヌ、和辻哲郎	
	第6回	芸術と自然：ドイツロマン主義の芸術観—フリードリッヒ	
	第7回	自然のメタモルフォーゼ：カンジンスキー、抽象芸術への努力	
	第8回	想像力の問題：ペルクソン『物質と記憶』について	
	第9回	イスラム哲学：井筒俊彦の研究を手掛かりに	
	第10回	自然と宗教：ニュッサのグレゴリウスとキリスト教、聖フランシスコの思索	
	第11回	仏教と自然：西田幾多郎の実践的考察、庭園術と宗教、	
	第12回	都市論：技術連関と自然—丹下健三、自然と個人—ガウディ、	
	第13回	発表Ⅰ：参加者による論文発表（それぞれの課題に即して）	
	第14回	発表Ⅱ：本科と専攻科との完成論文	
	第15回	未来の文化の可能性：時間の結晶としての表現の可能性	
準備学習 (予習・復習等)	授業のために良いノートを作ること。論文作成のために選んだテキストを読み込んでくること。論文試験に備えて広い視野から考察し、その結果を文章化しておくこと。ノートを提出してもらうこともある。		
テキスト	授業の際に指示する。主としてプリントを配布する。		
参考文献	今道友信『エコエティカ』必要に応じて紹介する。		
評価方法	論文:80% 発表2回、レジュメ等:15% コミュニケーション力:5%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
人間活動と環境との関わり		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	暮らしと密接に関連する環境の諸問題 –エネルギー、廃棄物、有害化学物質、温室効果ガス等–について、講義、文献調査あるいはデータ解析などを通して理解を深めます。		
授業の概要	修了論文を完成させ、さらに文献調査等により、その理解を深めます。そして最終的な発表会を行います。		
授業計画	第1回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅰ	
	第2回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅱ	
	第3回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅲ	
	第4回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅳ	
	第5回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅴ	
	第6回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅵ	
	第7回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅶ	
	第8回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅷ	
	第9回	修了論文作成のための文献調査やデータ解析Ⅸ	
	第10回	修了論文のとりまとめⅠ	
	第11回	修了論文のとりまとめⅡ	
	第12回	修了論文のとりまとめⅢ	
	第13回	修了論文の発表会の準備Ⅰ	
	第14回	修了論文の発表会の準備Ⅱ	
	第15回	修了論文の発表会	
準備学習 (予習・復習等)	テーマごとに参考文献を通読しておくこと。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	テーマにより個別に紹介する。		
評価方法	修了論文の発表:20% 修了論文:80%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
社会と情報		堀川 照代（ほりかわ てるよ）	
授業の到達目標 及びテーマ	自分の書いた第一段階の論文をもとに、さらに比較・分析したり統合したりして思考を深める体験をすること、完成した論文をふりかえて客観的にみて、その構造を概要図として表すことができることを目標とする。		
授業の概要	論文を一応最後まで書いたのちに、その内容について検討しながら思考を深めていく。自分の論文の構造を把握して概要図を書き、最後にプレゼン用のファイルを作成する。		
授業 計画	第1回	論文の執筆（1）	
	第2回	論文の執筆（2）	
	第3回	論文の執筆（3）	
	第4回	内容についてディスカッション・論文の推敲（1）	
	第5回	内容についてディスカッション・論文の推敲（2）	
	第6回	内容についてディスカッション・論文の推敲（3）	
	第7回	内容についてのディスカッション・論文の推敲（4）	
	第8回	論文の概要図の作成	
	第9回	論文の概要図の作成	
	第10回	プレゼン用スライド作成（1）	
	第11回	プレゼン用スライド作成（2）	
	第12回	プレゼン用スライド作成（3）	
	第13回	模擬発表	
	第14回	情報リテラシーの理解	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	後期開始までに、本文の半分を書きあげてくること。		
テキスト	特になし		
参考文献	必要に応じて紹介する		
評価方法	論文作成への取り組み:30% 論文の内容:70%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文作成に向けて (3)		松村 伸一 (まつむら しんいち)	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文を完成させる。学位授与機構の小論文試験に向けた準備をする。		
授業の概要	学位授与機構に提出した学修成果（レポート）に基づいて、それをさらにブラッシュアップした修了論文を完成させる。基本的に、個別指導もしくは類似テーマでのグループ指導。10月期に学位申請をした者は提出した学修成果を（未申請の者は学修成果に相当するレポートを）授業開始時に持参すること。まずはそれを客観的に見直す作業を出発点として、修了論文作成に取りかかりたい。授業期間中は、論文メモを提出し、コメントを受けて書き直すという作業をくり返す。当然ながら、そのような過程を経たものでなければ、修了論文として受理しない。		
授業計画	第1回	学修成果（レポート）についての報告と検討	
	第2回	学修成果に関わる小論文課題1（論文テーマに関するもの）	
	第3回	学修成果に関わる小論文課題2（論文テーマに関するもの）	
	第4回	学修成果に関わる小論文課題3（引用文献に関するもの）	
	第5回	学修成果に関わる小論文課題4（引用文献に関するもの）	
	第6回	論文メモの提出とコメント（参考文献リスト再検討）	
	第7回	論文メモの提出とコメント（論旨の骨格と章立て検討）	
	第8回	論文メモの提出とコメント（新規書き起こし分1）	
	第9回	論文メモの提出とコメント（新規書き起こし分2）	
	第10回	論文メモの提出とコメント（新規書き起こし分3）	
	第11回	論文草稿の提出とコメント（論旨の整合性など）	
	第12回	論文草稿の提出とコメント（注の付け方など）	
	第13回	論文草稿の提出とコメント（表記の統一など）	
	第14回	本文最終チェックと要約の作成	
	第15回	修了論文と要約の完成	
準備学習 (予習・復習等)	予習：文献を読み、ノートをとる。論文メモの作成と提出。 復習：論文メモの書き直し。授業時に紹介された文献などを読む。		
テキスト	プリントなど		
参考文献	執筆の進行状況に合わせて随時指示する。		
評価方法	平常点（提出課題）：30% 修了論文：70%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
情報科学		宮田 雅智 (みやた まさのり)	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文を完成させる。		
授業の概要	「修了研究演習Ⅱ」で執筆した学習成果レポートにさらに検討を加え、内容の充実を図り、修了論文を完成させます。		
授業計画	第1回	演習の進め方、論文執筆要領確認	
	第2回	学習成果レポート発表と討論①	
	第3回	学習成果レポート発表と討論②	
	第4回	個別指導①	
	第5回	個別指導②	
	第6回	個別指導③	
	第7回	個別指導④	
	第8回	中間発表と討論①	
	第9回	中間発表と討論②	
	第10回	個別指導⑤	
	第11回	個別指導⑥	
	第12回	個別指導⑦	
	第13回	個別指導⑧	
	第14回	修了論文まとめ	
	第15回	修了論文口頭発表	
準備学習 (予習・復習等)	演習での討論やコメント、個別指導の内容をよく吟味し、論文作成の参考にしてください。		
テキスト	使用しません。		
参考文献	適宜紹介します		
評価方法	修了論文:70% 発表と討論への参加:30%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了論文完成に向けて		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文完成に向けた指導を行います。学位授与機構の学位申請に向けた小論試験の準備を行います。		
授業の概要	テーマを精査しつつ、専攻科学修の成果にふさわしい修了論文のための作業を行っていきます。		
授業計画	第1回	修了研究演習Ⅲのガイダンス	
	第2回	作成レポートの確認	
	第3回	テーマに関する小論課題 1	
	第4回	テーマに関する小論課題 2	
	第5回	テーマに関する小論課題 3	
	第6回	修了論文中間報告	
	第7回	修了論文指導 1	
	第8回	修了論文指導 2	
	第9回	修了論文の発表（1回目）	
	第10回	修了論文の発表（2回目）	
	第11回	修了論文の発表（3回目）	
	第12回	修了論文初稿の提出と確認作業（論旨の整合性など）	
	第13回	修了論文初稿の提出と確認作業（表記の統一など）	
	第14回	修了論文最終チェックと要約の作成	
	第15回	修了論文提出	
準備学習 (予習・復習等)	論文作成にあたり、主張の一貫性、論理性、説得性、先行研究や学説の言及、表現の適切性、等々の観点において確認しながら執筆作業を進めていきます。		
テキスト	特になし		
参考文献	授業時に指示します。		
評価方法	修了論文:70% 授業への取り組み:30%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
科学と社会の関係をテーマとする修了論文完成に向けて		八耳 俊文（やつみみ としふみ）	
授業の到達目標 及びテーマ	大学評価・学位授与機構に学位申請する学生を対象に指導を行います。申請しない場合でも、短期大学の専攻科の学修の成果にふさわしい修了論文の作成をめざします。		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ 修了論文の作成 ・ 学位取得を希望する場合の試験対策 		
授業計画	第1回	修了研究演習Ⅲのガイダンス	
	第2回	作成レポートの確認	
	第3回	修了論文のための講読（1回目）	
	第4回	修了論文のための講読（2回目）	
	第5回	修了論文のための講読（3回目）	
	第6回	修了論文のための講読（4回目）	
	第7回	修了論文のための講読（5回目）	
	第8回	レポート内容に即した試験対策指導（1回目）	
	第9回	レポート内容に即した試験対策指導（2回目）	
	第10回	レポート内容に即した試験対策指導（3回目）	
	第11回	修了論文の発表（1回目）	
	第12回	修了論文の発表（2回目）	
	第13回	修了論文初稿提出	
	第14回	修了論文推敲	
	第15回	修了論文提出	
準備学習 (予習・復習等)	授業を進めるにあたり、授業外における修了論文執筆の準備と執筆が前提となります。		
テキスト	特になし		
参考文献	石井一成『ゼロからわかる 大学生のためのレポート・論文の書き方』（ナツメ社、2011年）、白井利明・高橋一郎『よくわかる卒論の書き方』（ミネルヴァ書房、2008年）		
評価方法	授業への取り組み:20% 修了論文:80%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
イギリス文学研究		山田 美穂子（やまだ みほこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	修了論文の完成とともに、専攻科での学び全体の中に論文をどう位置づけるかを総括し、研究発表会に向けて指導する。その過程において、単に自らが発信するのみならず、他者の考えを受け止め、自らの考えとの共通点・相違点を見だし、相互に新たな考えを産みだしてゆくといった受容と理解・対話を通じた多元文化的アプローチを身につけることを目指す。		
授業の概要	個人指導（チュートリアル）と草稿（ドラフト）の提出を交互に繰り返し、学期末には修了論文を完成させる。		
授業計画	第1回	イントロダクション 修了論文完成に向けたスケジュール確認	
	第2回	チュートリアル1	
	第3回	ドラフト提出1	
	第4回	チュートリアル2	
	第5回	ドラフト提出2	
	第6回	チュートリアル3	
	第7回	ドラフト提出3	
	第8回	研究発表会での発表準備1	
	第9回	研究発表会での発表準備2	
	第10回	研究発表会	
	第11回	大学評価・学位授与機構への論文提出と試験の準備1	
	第12回	大学評価・学位授与機構への論文提出と試験の準備2	
	第13回	大学評価・学位授与機構への論文提出	
	第14回	修了論文の再考と改善	
	第15回	修了論文の自己総括	
準備学習 (予習・復習等)	草稿の準備と、個人指導への定期的な参加を要する。		
テキスト	学生の関心によって、年次ごとに適宜選定。		
参考文献	授業内で適宜指導。		
評価方法	個人指導の充実:40% 修了論文の提出:60%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
修了研究：言語学		湯本 久美子（ゆもと くみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	本講座では言語学（意味論・日英語対照言語学・認知言語学）に関する論文執筆の指導を行う。		
授業の概要	論文執筆に関する全般的な指導はクラス単位で行うが、各自の論文については個別指導を行う予定。修了研究論文は①論文題目提出、②研究計画書、③中間報告、④最終報告を経て、⑤論文提出、⑥発表のプロセスをとる。①～④は⑤の必須要件。本演習では④～⑥までを目標とする。		
授業計画	第1回	プロセス説明	
	第2回	個別指導（1）	
	第3回	個別指導（2）	
	第4回	個別指導（3）	
	第5回	個別指導（4）	
	第6回	個別指導（5）	
	第7回	個別指導（6）	
	第8回	個別指導（7）	
	第9回	個別指導（8）	
	第10回	個別指導（9）	
	第11回	個別指導（10）	
	第12回	最終報告	
	第13回	個別指導（11）	
	第14回	論文提出	
	第15回	発表	
準備学習 (予習・復習等)	論文最終報告・提出・発表		
テキスト	特定のテキストは用いない		
参考文献	参考文献は適宜指導する		
評価方法	クラス貢献度:10% 最終報告・論文・発表:90%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
キリスト教死生学—死をとおしていのちの意味を問う		吉岡 康子（よしおか やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	「キリスト教死生学」に関する修了論文作成に向けた論文指導および、小論試験に向けての学び。		
授業の概要	学生各自の体験を踏まえて、死生学的課題、倫理的課題と向き合い、それらが神学的観点からどのように位置づけられるかを考察する、その際、他宗教との比較の観点、現代的課題などを考慮に入れ、検討を加えて、専攻科の講義科目および修了研究演習Ⅰ・Ⅱで得た知見等と結び付けつつ、修了論文のテーマを絞り込み、完成させる。		
授業計画	第1回	あなたの死生観	
	第2回	現代の死生観	
	第3回	フィールドワーク①	
	第4回	修了論文テーマ決定に向けて	
	第5回	テーマによる報告と討議	
	第6回	テーマによる報告と討議	
	第7回	フィールドワーク②	
	第8回	テーマによる報告と討議	
	第9回	テーマによる報告と討議	
	第10回	論文指導	
	第11回	論文中間報告	
	第12回	論文指導	
	第13回	論文仮提出	
	第14回	論文提出と省察	
	第15回	論文提出と省察	
準備学習 (予習・復習等)	授業日の新聞朝刊(社は問わない)1面と社説を読んてくること。 授業時に指示された課題の遂行と授業後の省察を確実にすること。		
テキスト	新共同訳聖書『中型ハンディバイブル』(日本聖書協会) 吉岡康子『旧約聖書の人間模様』(日本キリスト教団出版局)		
参考文献	授業時に指示する。		
評価方法	修了論文:70% 授業への参加態度:30%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
比較社会・政治学・社会思想・沖縄学にかんする修了論文の作成		輪島 達郎（わじま たつろう）	
授業の到達目標 及びテーマ	比較社会・政治学、社会・政治思想、沖縄学のいずれかの領域について各自の研究課題についての研究を、修了論文演習Ⅱで執筆した「学修成果」をふまえて最終的に修了論文として完成させていく。		
授業の概要	引き続き文献の読み込みと、論文の構成を行いながら、細部にわたって論理のスキがないように、完成度の高い論文を仕上げていくための指導を行う。		
授業計画	第1回	修了論文作成指導（1）	
	第2回	修了論文作成指導（2）	
	第3回	修了論文作成指導（3）	
	第4回	修了論文作成指導（4）	
	第5回	修了論文作成指導（5）	
	第6回	修了論文作成指導（6）	
	第7回	修了論文作成指導（7）	
	第8回	修了論文作成指導（8）	
	第9回	修了論文作成指導（9）	
	第10回	修了論文作成指導（10）	
	第11回	修了論文作成指導（11）	
	第12回	修了論文作成指導（12）	
	第13回	修了論文作成指導（13）	
	第14回	修了論文作成指導（14）	
	第15回	修了論文作成指導（15）	
準備学習 (予習・復習等)	修了論文の執筆とそのために必要な調査を日頃から行っておく必要がある。		
テキスト	なし。		
参考文献	各自の研究テーマに応じて指示する。		
評価方法	平常点:30% 修了論文:70%		

修了研究演習Ⅲ		後期 2 単位	2年 多元文化専攻
社会学のテーマで修了論文を書く		渡邊 良智 (わたなべ よしとも)	
授業の到達目標 及びテーマ	専攻科における学びの集大成として、修了論文をまとめる。すでに修了研究演習Ⅱで書いた「学修成果」レポートを踏まえて、さらに高い水準の論文を仕上げることを目標とする。また、専攻分野「社会学」で学士の認定を申請する学生を対象として、社会的アプローチをあらためて学び、事例研究を行い、社会学に特徴的なものの見方を身につけることを目標とする。		
授業の概要	修了論文作成に先立ち、社会学で学士認定を申請する際に要求される、社会的なものを見方を補強するため、社会的アプローチおよび事例研究の授業を行う。つづいて、修了論文の作成を行う。受講者の問題意識に合わせてテーマを設定し、先行研究をレビューし、仮説を設定する。さらに関連資料・データを収集し、分析し、仮説を検証して、結論とする。これらの作業を文章化して修了論文にまとめる。		
授業計画	第1回	導入と今後の予定	
	第2回	社会的アプローチ（1）脱常識	
	第3回	社会的アプローチ（2）社会的存在	
	第4回	社会的アプローチ（3）人間関係	
	第5回	社会的アプローチ（4）比較	
	第6回	事例研究（1）個人の利益と全体の利益	
	第7回	事例研究（2）少年犯罪は増加しているのか	
	第8回	事例研究（3）災害時にパニックは発生するのか	
	第9回	修了論文の構想（1）テーマの設定	
	第10回	修了論文の構想（2）仮説の設定	
	第11回	関連資料の収集	
	第12回	関連資料の分析	
	第13回	修了論文の作成	
	第14回	修了論文の修正	
	第15回	修了論文の完成	
準備学習 (予習・復習等)	受講者は、自らの問題意識に合わせて、テーマの設定、先行研究のレビュー、仮説の設定、関連資料の収集、データの分析、仮説の検証、結論の確認、これらの作業を行い、修了論文にまとめることが要求される。指示される前にこれらの作業を主体的に進めることが期待される。		
テキスト	とくになし。		
参考文献	とくになし。必要に合わせて適宜指示する。		
評価方法	授業参加度:40% 修了論文:60%		

総合科目「子ども」	後期 2 単位	子ども学専攻
変動する社会と子ども		
<p>【担当教員】</p>		
<p>久保 制一（くぼ せいいち）、小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）、さくま ゆみこ（さくま ゆみこ）、菅野 幸恵（すがの ゆきえ）、杉田 穂子（すぎた やすこ）、鈴木 俊之（すずき としゆき）、村知 稔三（むらち としみ）、横堀 昌子（よこぼり まさこ）、渡部 かなえ（わたなべ かなえ）</p>		
<p>【授業の到達目標及びテーマ】</p>		
<p>この授業を受講したものは、1. 「変動する社会と子ども」について各専門分野において何が問題になっているかを理解する、2. 特に関心のある分野に関しては、その問題点について詳しく説明する、事ができるようになる。</p>		
<p>【授業の概要】</p>		
<p>オムニバス形式(12回講義、3回シンポジウム形式)で行う。本科目は、本科および専攻科で積み重ねてきた見聞や体験、学習すべてを締めくくる総括的な授業である。「変動する社会と子ども」というテーマに沿って、子どもを取り巻きさまざまな社会状況や諸問題について、毎回各教員が各自の専門分野から語り、その問題提起をもとに、対話や議論を通じてテーマを深めていく。子どもをめぐる諸問題の本質を探究しながら、各自のこれまで培ってきた経験を重ね、そこから現在の、またこれからの生活につながるなかを見いだしていくことを目指す。最後の3回は教員（4人一組）で講義テーマについてシンポジウム形式で議論する。</p>		
<p>【授業計画】</p>		
<p>第 1回 保育の状況は変革期にあり、保育制度も複雑化している。そのような中において「子どもの最善の利益」をどう保障したらよいか。子どもの視点に立った保育のあり方について考える。(鈴木)</p>		
<p>第 2回 社会の変化によって、保育内容にもさまざまな期待や課題が投げかけられている。この回では幼保小の連携、早期知的教育、規範意識の涵養などをとりあげ、保育現場での具体的事例をもとに「子どもにとって」の視点から考察する。(横堀)</p>		
<p>第 3回 子どもの造形表現はあそびのなかから創造的に発展していく。子どものあそびと造形表現の関連性など子ども・芸術・あそびについて様々な角度からの考察をしていく。(久保)</p>		
<p>第 4回 多文化が進む社会の中で異質な他者を理解することの重要性が増している。この回では絵本や児童文学がこうした問題とどう取り組んでいるかなどについて、多様な作品や作家を紹介しながら考察を深める。(鈴木)</p>		
<p>第 5回 近年しょうがいのある子どもの周囲の環境を変化させ、楽しい関係を作り上げる環境調整の視点が注目されている。このようなしょうがいのある子どもとない子どもが共に育つ保育の重要性と課題について考える。(鈴木)</p>		
<p>第 6回 戦後社会の終焉と少子化の進展により幼児教育を含む広義の保育の社会的位置づけも変化し、それに応じて保育の改革が不断に進められてきた。この回ではそうした保育の対象である乳幼児の暮らしの変化と連続の両面について考える。(村知)</p>		
<p>第 7回 社会が大きく変わる中で、血縁、非血縁を生きる様々な家族の姿と家族を支援しようとする関係専門職の取り組みを通して、子どもにとって家庭のもつ意味、自立に向かって社会に参加して生きることを意味を福祉の観点から考える。(小泉)</p>		
<p>第 8回 社会の情勢や環境の変化によって健康観や子どもの健康のあり方も変容する。格差社会が子どもの健康に及ぼす影響、自然体験活動の効果と環境の悪化による危険性について国内外の事例から学ぶ。また小児救命救急についても考える。(杉田)</p>		
<p>第 9回 戦後の社会変動、産業構造の変化、都市化、少子化は子どもをめぐる価値観を大きく変えた。この回では、子どもをめぐる価値観の変遷について考えながら、現代において子どもの育ちをどうとらえていくのか議論する。(杉田)</p>		
<p>第10回 子どもの教育を取り巻く環境は大きく変化しており、高等教育の全入化や働く女性をサポートする体制の不備などを引き起こしている。この回ではそうした子どもと教育・保育のこれからについて議論をする。(さくま)</p>		
<p>第11回 子どもの音楽環境は、社会環境、生活環境によって可能性が大きく変化している。子どもの持つ可能性を、海外で実際に行われている子どもの音楽教育の実例から、音楽によって将来の子どもに残せることについて、議論をする。(渡部)</p>		
<p>第12回 「遊び」は自分から主体的・自発的に行うものである。子どもにとっての「遊び」の重要性を再確認した上で、保育現場における「遊び」をはぐくむ環境、「遊び」をはぐくむ保育者の援助の方向性はどのようにあるべきか考える。(菅野)</p>		
<p>第13回</p>		
<p>シンポジウム①(菅野)</p>		
<p>第14回</p>		
<p>シンポジウム②(杉田)</p>		
<p>第15回</p>		
<p>シンポジウム③(鈴木)</p>		
<p>【準備学習】</p>		
<p>講義の前には、その講義内容に関して本科・専攻科でこれまで学んできたことを復習し臨むこと。各回終了後には小レポートを提出してもらう。</p>		
<p>【テキスト】</p>		
<p>特になし。</p>		
<p>【参考文献】</p>		
<p>特になし。</p>		
<p>【評価方法】</p>		
<p>平常点:70% レポート:30%</p>		

幼児教育学特講		前期 2 単位	子ども学専攻
幼児教育学特講		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児教育の目的、意義、歴史と思想、社会との関係などの視点から幼児教育の全体像をとらえ、説明できる。 ・ 幼児教育の現状と課題について理解し、求められる幼児教育像を展望し説明できる。 		
授業の概要	<p>学科における教育学・保育原理などの学修を踏まえながら、各授業のテーマに対して、自分なりの課題を見つけ議論し探求していくことを奨励する。幼児教育の実践現場にかかわり、授業との往還の中で学修を確かなものとすることを奨励する。</p>		
授業計画	第1回	幼児教育とは何か (1) (幼児教育の意義と目的、就学前教育としての幼児教育)	
	第2回	幼児教育とは何か (2) (保育の独自性、家庭教育、小学校以上の教育と幼児教育)	
	第3回	「子ども観」と幼児教育 (様々な発達観、発達と育ち、子どもらしさ)	
	第4回	保育の歴史から学ぶ (1) (西欧における集団保育施設の誕生と発展、幼児教育思想家)	
	第5回	保育の歴史から学ぶ (2) (日本における集団保育施設の誕生と発展)	
	第6回	保育の歴史から学ぶ (3) (日本における幼児教育実践者の思想と実践)	
	第7回	社会の中で子どもが育つ場、施設、制度	
	第8回	現代におけるさまざまな保育実践 (プロジェクト学習、〇〇式保育、ほか)	
	第9回	社会の変化と子どもが育つ環境変化 (親子関係、家庭の教育力、地域・友達関係など)	
	第10回	社会の変化と幼児教育に求められるもの (小学校教育との連携、地域との連携)	
	第11回	社会の変化と幼児教育に求められるもの (規範意識の芽生え、知的好奇心、思いやり)	
	第12回	保育内容と子どもの生活・遊び (1) (子どもの興味・欲求をとらえる)	
	第13回	保育内容と子どもの生活・遊び (2) (学ぶことと教えること、環境を整えること)	
	第14回	成長する教師と研修	
	第15回	幼児教育の今日的課題	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学科で学んだ「保育原理」「教育原理」等の教科書、ノートに目を通しておいて下さい。 ・ 日々の新聞記事等で、幼児教育に関する記事に目を留め、自分の考えをまとめて下さい。 ・ 幼稚園・保育所等でのボランティアや観察を行い、学修と関連させて考えて下さい。 		
テキスト	特に指定しません。授業内で必要に応じて資料を配布します。		
参考文献	「幼稚園教育要領、保育所保育指針」、その他授業内で、適宜紹介します。		
評価方法	課題提出:60% 発表の内容:20% 毎授業ごとの学修整理:20%		

教育制度特講		後期 2 単位	子ども学専攻
現代における教育の諸問題の研究		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を履修した者は、1. 比較福祉レジーム論に関する基礎的な知識を獲得する、2. 現代における女性の役割について理解する、3. 就学前教育の重要性について説明する、事ができるようになる。		
授業の概要	発表者はテキストを要約、レジュメを作成し、そのレジュメに基づき発表をする。受講生はその発表について発表者に質問したり、その内容について討論する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	受講生による発表 『平等と効率の福祉革命』第1章前半	
	第3回	受講生による発表 第1章後半	
	第4回	受講生による発表 第2章前半	
	第5回	受講生による発表 第3章後半	
	第6回	受講生による発表 第4章前半	
	第7回	受講生による発表 第4章後半	
	第8回	受講生による発表 第5章前半	
	第9回	受講生による発表 解題	
	第10回	受講生による発表 『OECD保育白書』1章	
	第11回	受講生による発表 2章	
	第12回	受講生による発表 3章	
	第13回	受講生による発表 4章	
	第14回	まとめ1	
	第15回	まとめ2	
準備学習 (予習・復習等)	毎回課題のテキストを読み込み、A4一枚程度の予習レポートを作成してもらう。		
テキスト	エスピン＝アンデルセン(2011)『平等と効率の福祉革命 新しい女性の役割』岩波書店。		
参考文献	OECD編(2011)『OECD保育白書：人生の始まりこそ力強く：乳幼児期の教育とケア(ECEC)の国際比較』明石書店、など。		
評価方法	授業への積極的な参加:70% 期末レポート:30%		

保育内容特講 I		前期 2 単位	子ども学専攻
保育内容の柔軟で多面的な理解		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 幼稚園教育要領の基本を踏まえ、幼児期における表現を軸に様々な観点より考えを深めていく。 ・ 保育内容「表現」の目指すものの理解を深める。 ・ 感性を豊かにするという事について理解を深める。 		
授業の概要	<p>人間は表現する存在である。幼児期の生活を見ても描画、音楽、身体、ことば等様々な手段を用いて幼児は表現している。本講では、人間とりわけ幼児にとって表現とは何か、幼児期にふさわしい表現の考え方はどうあるべきか。子どもの感性を豊かにするにはどのような事か等について保育内容の観点より考えていく。また、戸外活動や表現活動、様々な映像の使用、ゲストスピーカーを招くなどを通して様々な観点より表現についての理解を深める予定である。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション・授業の進め方	
	第2回	人間にとって表現とは何か	
	第3回	世界の表現教育	
	第4回	乳幼児期の発達と表現	
	第5回	幼稚園教育要領における「表現」	
	第6回	表現に至る子どもの気持ち	
	第7回	子どもの感性と表現を育むための環境と保育者の援助	
	第8回	わくわく・ときどき心が動き表現したくなるとは（戸外での活動）	
	第9回	子どもの感性と表現を育むための環境と保育者の援助	
	第10回	子どもの感性と表現を育むための環境と保育者の援助	
	第11回	行事と表現	
	第12回	子どもの福祉の世界と表現・障害と表現	
	第13回	発達の連続性（児童期の表現について映像を通して考える）1	
	第14回	発達の連続性（児童期の表現について映像を通して考える）2	
	第15回	まとめと試験	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業において指示されたことを基にテキストを読んだり、資料収集などを行っておくこと。 ・ ノート及びファイルをつくり、授業を振り返っておくこと。 		
テキスト	浅見均 編著『子どもと表現』日本文教出版 2009年		
参考文献	必要に応じて授業内で紹介		
評価方法	授業への参加度:50% 試験:50%		

保育内容特講Ⅱ		前期 2 単位	子ども学専攻
子どもの育ちと環境を考える		荘司 紀子（しょうじ のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもが身近な自然環境や社会環境に好奇心と探究心をもってかかわり、それらを遊びや生活に取り入れるための望ましい保育環境のあり方や援助方法について実践的に学び理解する。		
授業の概要	保育者自身の体験不足が指摘されている。子どもが身近な環境に親しみ、興味や関心をもつためには、まず保育者自身がそれらの環境についてどれだけ関心をもち、どの程度体験しているかが影響する。この授業では「環境を通して行う保育」の意味を改めて考え、自然環境や社会環境を保育に取り入れるためにフィールドワークなど実践的な方法で学ぶ。		
授業計画	第1回	はじめに：子どもにとっての環境とは	
	第2回	子どもと植物とのかかわり①：保育現場での栽培活動の意義・実践事例	
	第3回	子どもと植物とのかかわり②：体験から学ぶ	
	第4回	子どもと動物とのかかわり①：保育現場での飼育活動の意義・実践事例	
	第5回	子どもと動物とのかかわり②：体験から学ぶ	
	第6回	自然現象とのかかわり：天候・気象・四季の変化 センスオブワンダー	
	第7回	ものとのかかわり：アフォーダンス理論について	
	第8回	園外保育（遠足）を計画する：計画立案	
	第9回	園外保育（遠足）を実践する：フィールドワーク	
	第10回	森のようちえんの取り組みについて	
	第11回	ある幼児施設の取り組みについて	
	第12回	海外の保育環境から学ぶ①：北欧の保育所	
	第13回	海外の保育環境から学ぶ②：カナダ・オーストラリアの保育所	
	第14回	子どもと環境教育	
	第15回	まとめ 望ましい保育環境のあり方考える	
準備学習 (予習・復習等)	日頃から、自分の周囲の環境に興味、関心をもち、よく観察すること。グループワークやフィールドワークを取り入れるので、授業時間以外にも集まって自主的に調べたり、準備をしたりすること。		
テキスト	特に定めない。主としてプリント資料を用いる。		
参考文献	授業の中で適宜紹介する		
評価方法	授業への参加態度:20% 課題提出状況:40% レポート:40%		

保育内容特講Ⅲ		後期 2 単位	子ども学専攻
保育内容特講Ⅲ（幼児の理解と言葉）		岸井 慶子（きしい けいこ）	
授業の到達目標及びテーマ	①乳幼児の言葉の発達や特徴、課題について説明できる。 ②乳幼児の生活や遊びの姿から、興味・欲求を読み取る視点を獲得する。 ③絵本・素話などの児童文化財についての知識と保育展開の中で取り扱う基礎的技能を習得する。		
授業の概要	言葉はコミュニケーションだけでなく思考や自己形成にもかかわる重要なものあり、保育の場や保育者が果たす役割は極めて大きいことを理解する。毎回の授業で行う振り返りやミニテスト、課題提出や発表により知識、実践力の獲得を促す。		
授業計画	第1回	保育の基本と領域「言葉」（遊びを中心とした環境を通して行う保育の基本や、領域の考え方）	
	第2回	乳幼児の生活や遊びの姿（1）ビデオの事例から読み取り、記録、討議	
	第3回	乳幼児の生活や遊びの姿（2）ビデオの事例から読み取り、記録、討議	
	第4回	乳幼児の生活や遊びの姿（3）ビデオの事例から読み取り、記録、討議	
	第5回	ミニテスト 教師の役割と援助（1）（信頼関係を基盤としての教師のかかわり）	
	第6回	教師の役割と援助（2）（聞き手としての保育者、伝え手としての保育者）	
	第7回	保育環境と言葉（1）（記号・文字との出会い）	
	第8回	保育環境と言葉（2）（絵本、素話との出会い）	
	第9回	保育環境と言葉（3）（歌、詩、言葉遊びとの出会い）	
	第10回	園生活の中の言葉（挨拶、唱え言葉などと園文化）	
	第11回	遊びの中の言葉（1）（ごっこ遊びなどでイメージを表現する言葉）	
	第12回	遊びの中の言葉（2）（説明する、考える、質問する言葉）	
	第13回	教師の役割と援助（1）（言葉に込められた思いを理解する）	
	第14回	教師の役割と援助（2）（素話、絵本、ペープサートなどの指導計画と環境構成）	
	第15回	就学前教育の現代的課題と領域「言葉」	
準備学習 (予習・復習等)	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な子どもの言葉に目を向けて、耳を傾けてください。 ・1分～3分くらいの間の子どものことばや表情、行動などをメモして考えてみてください。 ・参考文献のうち1冊以上を手に取り、読んでおきましょう。 ・毎回の授業振り返りシートで、学修内容を確認しましょう。 		
テキスト	特に指定しません。授業内で必要に応じて資料を配布します。		
参考文献	やまだようこ「ことばの前のことば」新曜社、中沢和子「イメージの誕生」NHK出版、岡本夏木「子どものことば」岩波新書		
評価方法	課題提出:50% 発表:30% ミニテスト:20%		

保育方法特講		後期 2 単位	子ども学専攻
保育方法を探究する		莊司 紀子（しょうじ のりこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	実際の保育場面で起きた事例を通して、様々な保育方法について探求し、子どもが主体となる保育方法を実践的に理解する。		
授業の概要	保育はマニュアルではできない。なぜなら、保育は一人一人異なる子どもたちの様々な生活の中で営まれるものであるため、まったく同じ状況が存在せず、保育の中で起こる現象は見方を変えることで様々な見方ができるという多面性をもつからである。この授業では、幼稚園や保育所などの保育現場における具体的な事例をもとにしたディスカッションを通して、子どもが主体となる保育方法とは何かを学ぶ。		
授業計画	第1回	はじめに：保育方法とは	
	第2回	子どもと遊びの楽しさを共有する方法を探る①：仲間として 提案者として	
	第3回	子どもと遊びの楽しさを共有する方法を探る②：遊びの中で起こる葛藤	
	第4回	子どもが育つ環境をつくる方法を探る①：環境を通しての教育とは	
	第5回	子どもが育つ環境をつくる方法を探る②：環境をデザインする	
	第6回	子どもと充実した遊びや活動を組み立てる方法を探る①：遊びを援助するとは	
	第7回	子どもと充実した遊びや活動を組み立てる方法を探る②：保育の形態を考える	
	第8回	子どもと充実した生活をつくる方法を探る①：園での一日の流れを考える	
	第9回	子どもと充実した生活をつくる方法を探る②：子どもが主体的に生活するには	
	第10回	子どもの育ちに即した援助の方法を探る	
	第11回	行事を子どもとともに作りあげる方法を探る①：行事がもたらす意味と子どもの育ち	
	第12回	行事を子どもとともに作りあげる方法を探る②：子ども主体の行事とは	
	第13回	記録から方法を探る	
	第14回	連携という方法を探る	
	第15回	まとめ 子どもが主体となる保育方法を探究するために	
準備学習 (予習・復習等)	授業時に指示された課題を次回授業までに取り組んでおくこと。それぞれの実習を振り返り、保育方法について考察できるようにしておくこと。		
テキスト	特に定めない。主としてプリント資料を用いる。		
参考文献	久富陽子・梅田優子著『保育方法の実践的理解』 萌文書林 授業の中で適宜紹介する		
評価方法	授業への参加態度:20% 課題提出状況:40% レポート:40%		

キリスト教教育特講		前期 2 単位	子ども学専攻
21世紀を支える教育ビジョンとキリスト教		野村 祐之 (のむら ゆうし)	
授業の到達目標 及びテーマ	21世紀を生き抜く世代の「魂の教育」の意義と可能性をキリスト教の観点からとらえ、自分なりの理解の獲得をめざします。今世紀、人類は歴史上かつてない大変動の時期を迎えています。IT革命・人口問題・温暖化と環境問題、宗教を背景にもつ紛争などグローバルなパラダイムシフト(考え方の根底的転換)が迫られています。その全体像をキリスト教の世界観、歴史観の視点から整理し、そのような時代にこそ求められる「魂の教育」のビジョンをキリスト教幼児教育の現場を前提に提示します。		
授業の概要	毎回、始めに講義形式で課題を提示しディスカッションで問題点を整理してその本質に迫ります。こうして得られた自分なりの理解、意見、疑問点などはレスポンスシートに記入してまとめます。		
授業計画	第1回	オリエンテーションと自己紹介。	
	第2回	キリスト教の暦の特徴と、その中心をなす復活日(イースター)とは。	
	第3回	21世紀とは: 現代日本の歴史観 VS キリスト教の歴史観	
	第4回	人間とは: 「心身」VS 「霊性・知性・身体性」。	
	第5回	世界とは: 「創世記1章の世界観」VS 現代世界	
	第6回	平和とは: 「パックス」VS 「シャローム」	
	第7回	愛とは: 「エロース、フィリア」そして「アガペー」	
	第8回	「聖霊」降臨日(ペンテコステ)・キリスト教会誕生の出来事。	
	第9回	世界の宗教とキリスト教、イスラーム、ユダヤ教。	
	第10回	聖書に見る「教育者イエス」と「幼な子」。	
	第11回	キリスト教幼児教育の歴史を訪ねて。	
	第12回	家族とは: 衝撃的なイエスの「家族観」と現代。	
	第13回	健康とは: 「生命(いのち)」と「癒し」。生命倫理と聖書。	
	第14回	共に生きる: 「インフォメーション」VS 「コミュニケーション」	
	第15回	まとめ: キリスト教教育の現代的課題と未来のビジョン。	
準備学習 (予習・復習等)	毎回の講義で自分なりに学習、獲得した内容を(疑問も含めて)復習整理し、翌週の授業開始時に提出してもらいます。		
テキスト	聖書(旧約、新約そろいのもの)は毎回必要。特定の教科書はありませんが教室で資料を配布あるいは指定します。		
参考文献	各回の主題に応じてプリントなどの資料を配布し、関連する参考資料等はそのつど紹介します。		
評価方法	ディスカッションへの積極的参与:30% レスポンスシート:30% レポート2回:40%		

乳幼児心理学特講		後期 2 単位	子ども学専攻
乳幼児の発達と野外遊び		菅野 幸恵（すがの ゆきえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	乳幼児期は、人間の発達において重要な時期である。乳幼児期の豊かな育ちのためには野外での遊びが欠かせない。子どもは野外で自分の身体と心を動かすことで成長し、仲間との交わりの中で様々なことを学ぶ。また野外では人間の力の及ばない自然との出会いもある。この授業では乳幼児にとっての野外遊びの意味を理解することを目標とする。同時に野外遊びの問題点や課題についても理解する。そのことが乳幼児の豊かな育ちの環境を理解することにつながる。		
授業の概要	授業ではまず、受講生自らの経験を振り返りながら、野外遊びの現状について学び、乳幼児にとっての野外遊びの意味について考えていく。さらに乳幼児の外遊びの現場に足を運んだり、そこに関わる大人に話を聞いたりすることを通して理解を深める。授業の後半では、グループワークを通して乳幼児にとっての外遊びについて考えていく予定である。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	私たちの野外遊び～自分たちの経験をふりかえる	
	第3回	乳幼児にとっての野外遊び①～発達心理学の立場から	
	第4回	乳幼児にとっての野外遊び②～森のようちえんの実際から	
	第5回	乳幼児にとっての野外遊び③～福島的事例から	
	第6回	野外遊びの現場に出かけよう①	
	第7回	野外遊びの現場に出かけよう②	
	第8回	野外遊びと事故・怪我	
	第9回	乳幼児の野外遊びに関わる大人に話を聞こう①	
	第10回	乳幼児の野外遊びに関わる大人に話を聞こう②	
	第11回	グループワーク①	
	第12回	グループワーク②	
	第13回	グループワーク③	
	第14回	発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	毎回準備が異なるため、必要に応じて授業中に指示する。		
テキスト	特に定めない。必要に応じて配布、紹介していく。		
参考文献	授業内で適宜紹介する。		
評価方法	平常点:15% 期末レポート:85%		

臨床保育学特講		後期集中 2 単位	子ども学専攻
子どもとその環境を異なるまなざしで見つめ直す		宮内 洋 (みやうち ひろし)	
授業の到達目標 及びテーマ	子どもとその養育者等に対する際に必要な知識を、医学的および臨床心理学的な知見も含めて、現実即して理解する。		
授業の概要	本科目では、担当教員の実際の臨床活動に基づき、子どもたちの具体的な支援に向けての講義がなされる。子ども自身が現実社会で生きていく上で実際に直面する可能性のある、そして子どもたちを保育していく上でも実際に出会い、当事者となる可能性のある種々の問題について、現実即して詳細に解説がなされ、受講者はそれらを他人事ではなく、当事者と地続きの関係として学ぶことになるだろう。そして、その際には、臨床に関する講義にありがちな「密室」に決して閉じることなく、地域社会に開かれた支援を視野に入れた説明がなされる。このことは、これまでの担当教員自身による北海道から沖縄県までのフィールドワークと、群馬県内の自治体における活動の経験が背後にある。		
授業計画	第1回	ガイダンス	
	第2回	臨床とは何か	
	第3回	自己理解と他者理解	
	第4回	自らの〈ものの見方〉の理解	
	第5回	子どものいざこざ	
	第6回	子どもの人間関係の発達	
	第7回	子どもの身体	
	第8回	地域社会の中の子ども	
	第9回	子どもの〈生活-文脈〉	
	第10回	子どもとその環境の理解	
	第11回	養育者との関係性	
	第12回	子どもと貧困	
	第13回	ロールプレイングを通しての理解	
	第14回	臨床とは何か：再論	
	第15回	まとめ：諸機関との連携	
準備学習 (予習・復習等)	集中講義のため、毎回の準備学習をおこなうことは物理的に難しいと思われるが、この点については各回に講義の中で指示する。		
テキスト	なし		
参考文献	宮内洋2005『体験と経験のフィールドワーク』北大路書房 日本子ども社会学会研究刊行委員会編2013『子ども問題事典』ハーベスト社 *文献のみに限らず、講義内では学習に有用となる小説、漫画、映画等も適宜紹介していく予定。		
評価方法	平常点:20% 筆記試験:80%		

発達心理学特講		前期 2 単位	子ども学専攻
生涯発達と文化-世代継承性という視点から-		亀井 美弥子 (かめい みやこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	1人の人間の発達を説明する時に文化的な背景を無視できないことは誰もが認める場所であろう。しかし特定の文化的コミュニティのなかに生まれた個人はただその文化を吸収するだけではなく、積極的にそれを改編し、次世代に向けて伝えていく存在でもある。この授業では、このように、世代継承という視点から、発達と文化について考えていく。到達目標は、人間の多様な発達の姿を知り、それら発達の姿をとらえるための諸理論について理解すること、また、現代社会の子育てに対して、授業で得た視点から自分なりの考えを表明することができるようになることである。		
授業の概要	文化心理学の視点から、トピックや研究者の理論を一つのテーマとした講義を行う。毎回意見交換の時間をとる。また、子育てや発達に関連する資料をともに授業で講義したテーマにもとづきディスカッションを行う機会を設ける。		
授業計画	第1回	生涯発達と文化(1) 授業の受講についての説明および本授業のテーマの解説を行う	
	第2回	生涯発達と文化(2) 生涯発達理論における世代継承性や文化について概説する	
	第3回	生物学的なヒトと文化 マイケル・トマセロの理論を軸に文化的存在である人間について概説する	
	第4回	文化心理学というアプローチ 文化心理学というアプローチを紹介する	
	第5回	ディスカッション：テーマ「人間と文化」 前3回の授業にもとづき、資料をもとにディスカッションを行う	
	第6回	文化と育ちの理論(1) 文化と育ちについての研究の歴史的流れについて概説する	
	第7回	文化と育ちの理論(2) 文化と育ちについてのさまざまな研究例を紹介する	
	第8回	文化と育ちの理論(3) ヴィゴツキーの研究理論を紹介する	
	第9回	文化と育ちの理論(4) 主に現代の文化と育ちに関連する研究理論を紹介する	
	第10回	ディスカッション：テーマ「子育てと文化」 前3回の授業にもとづき、資料をもとにディスカッションを行う	
	第11回	育ちとコミュニティ(1) コミュニティと文化的継承という視点について理論的な概説を行う	
	第12回	育ちとコミュニティ(2) コミュニティと文化的継承について事例や研究例を紹介する	
	第13回	育ちとコミュニティ(3) 日本の子育てコミュニティとその継承という視点から事例や研究例を紹介する	
	第14回	ディスカッション：テーマ「日本の子育てコミュニティ」前3回の授業にもとづき、資料をもとにディスカッションを行う	
	第15回	まとめ 15回のまとめを行い、改めて発達、世代継承性、文化について考える	
準備学習 (予習・復習等)	予習：標準的な発達心理学のテキストを読み、理解しておく。 復習：授業の内容について整理して自分なりの見解を述べられるようにする。		
テキスト	プリント等を配布する		
参考文献	授業で示す		
評価方法	授業への取り組み:40% レポート:60%		

社会福祉特講		前期 2 単位	子ども学専攻
差別、しょうがい、命について考える。		杉田 穂子（すぎた やすこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	差別について、自分自身が、被害者としても、加害者としても日常的に関わっているということに気付く。とりわけ、しょうがいについての差別、命についての差別について考えていく。		
授業の概要	前半は、日常的に感じた差別の場面をレポートし、グループで話し合っ、ロールプレーにして発表する。後半は、グループで「しょうがい、差別、命」に関わるテーマ、例えば出生前診断、臓器移植、死刑制度、分離教育、統合教育などを選び、発表をしてディスカッションをする。		
授業 計画	第1回	シラバス、グループ分け	
	第2回	差別について	
	第3回	発表のテーマについての話し合い	
	第4回	日常的な差別の経験についての話し合い	
	第5回	ロールプレーの発表 1	
	第6回	ロールプレーの発表 2	
	第7回	グループ発表の準備 1	
	第8回	グループ発表の準備 2	
	第9回	グループ発表 1	
	第10回	グループ発表 2	
	第11回	グループ発表 3	
	第12回	グループ発表 4	
	第13回	グループ発表 5	
	第14回	グループ発表まとめ	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	差別に関するレポートでは日常の体験をふまえて書くこと。 グループ発表ではその内容についての文献を調べ、発表までにグループの仲間と発表内容の打ち合わせをすること。		
テキスト	好井裕明・桜井厚編 フィールドワークの経験、せりか書房2000 その他		
参考文献	適宜指示する。		
評価方法	授業への感想:30% レジメ・レポートの作成状況:40% 授業での発表態度:30%		

児童福祉特講		前期 2 単位	子ども学専攻
親子、家族を生きる～子どものしあわせ、家族のしあわせ		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	子ども家庭福祉、社会的養護、ソーシャルワークの専門性の観点から、国内外の資料や実践事例を通し、親子分離や多様な喪失・困難を体験している子どもの権利保障・自立支援のあり方を考える。具体的には、医療や福祉等「ケア」の現場、中でも児童養護施設等の施設養護や里親等の家庭養護の課題、里親・養子縁組を含む家庭への支援の課題、多様な専門職に求められる支援のあり方を検討する。人を活かしたいのちを支えるとはどういうことか、価値の問題・方法論とともに考察する。		
授業の概要	授業のテーマに沿って受講生が関心を寄せるトピックスを確認し、可能なものは授業内容に反映し、ともに検討していく。レクチャーのみならず、受講生による発表やディスカッション、演習、ワークショップの要素を盛りこんで進める。専攻科生ならではの積極的な授業参加と担当者へのフィードバックを期待する。		
授業計画	第1回	授業オリエンテーション	
	第2回	子どもにとって家族、家庭のもつ意味～血縁の家族・非血縁の家族	
	第3回	今、子どもや家族に何が起きているか	
	第4回	子育て支援と社会的な課題～保育現場での事例から	
	第5回	今、ここにいるということ～存在の安定と安心（支援構造の原理）	
	第6回	子ども・家族支援に活かす原理と方法論（1）	
	第7回	子ども・家族支援に活かす原理と方法論（2）	
	第8回	子ども・家族支援に活かす原理と方法論（3）	
	第9回	さまざまな家族への支援事例の研究	
	第10回	さまざまな家族への支援事例の考察	
	第11回	自分と家族のストレングス～演習とディスカッション	
	第12回	いくつかの事例検討およびグループによる発表	
	第13回	家族とは何か～課題作品の発表とシェアリング	
	第14回	喪失と獲得～移行期、「ターミネーション」を支えるために	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	提示された資料や文献等を読み、自分の意見をもって参加する。発表がある場合はプレゼンテーションの準備をする。参考文献は自分でも読む努力をする。提出課題（授業の感想レポートや個別ワークその他）があれば取り組む。		
テキスト	開講時に示す。		
参考文献	参考文献・参考資料とも、随時、授業にて紹介していく。		
評価方法	授業参加態度:20% 提出物:30% まとめのレポート:50%		

保育学特講		後期 2 単位	子ども学専攻
近現代日欧の保育の変遷と現状——保育の公共性の比較史——		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	ヨーロッパ主要国と日本の近現代社会における保育史研究の成果を振り返ることで、保育の公共性について考える。		
授業の概要	前半では日本保育史に関する重要な単著・共著を、後半では西の英国から東のロシアに至る諸国の保育史に関する主な先行研究を輪読する。ともに日本語文献を使用するので、各回に数冊の文献を、参加者の報告を参考にして、読み進める予定である。		
授業計画	第1回	本講義の目的・内容・進め方など	
	第2回	前近代日本社会の保育に関する歴史的研究	
	第3回	近代日本社会の保育に関する歴史的研究：明治初期	
	第4回	近代日本社会の保育に関する歴史的研究：明治中期	
	第5回	近代日本社会の保育に関する歴史的研究：明治後期	
	第6回	近代日本社会の保育に関する歴史的研究：大正期	
	第7回	近代日本社会の保育に関する歴史的研究：昭和戦前期	
	第8回	近代日本社会の保育に関する歴史的研究：戦時下	
	第9回	現代日本社会の保育に関する歴史的研究：戦後改革期	
	第10回	現代日本社会の保育に関する歴史的研究：高度経済成長期	
	第11回	近現代ドイツの保育に関する歴史的研究	
	第12回	近現代フランスの保育に関する歴史的研究	
	第13回	近現代英国の保育に関する歴史的研究	
	第14回	近現代ロシアの保育に関する歴史的研究	
	第15回	全体のまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	小山哲ほか編著『大学で学ぶ西洋史 近現代』（ミネルヴァ書房、2011年）と『シリーズ日本近現代史』全10冊（岩波新書、2006～2010年）などを購読し、近現代の日本史とヨーロッパ史に関する基本的知識を習得しておく。		
テキスト	各回で使う数冊の文献を初回に挙げるので、事前に必ず購読して参加すること。なお、報告者は内容の要約と論点を示したレジメを報告の前日までに参加者に手渡すこと。		
参考文献	講義の中で提示する。		
評価方法	担当の報告：30% まとめレポート：70%		

保健体育学特講		前期 2 単位	子ども学専攻
海辺の自然体験活動を通しての子ども達の心と体の健やかな育ちの支援		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	子ども達に海辺の素晴らしさや楽しさを伝えるために、まず保育者がそれらを知る必要がある。保育者自身、海辺の生き物とのふれあいや海遊びの経験が少なくなっている。本授業では、事前・事後学習で、海辺の自然体験活動の意義や引率指導上の諸注意をしっかりと理解すること、月に1度の神奈川県葉山海岸での体験活動を通して、海の楽しさ・素晴らしさを体験し、子ども達に伝えられるようになる。		
授業の概要	5/10(日)・5/24(日)・6/21(日) 9:00逗子駅集合、神奈川県葉山海岸での9:30-16:00(1時間の昼休みを含む)の学習(海辺とセミナーハウスで)を通して、海辺の生き物との出会い、砂浜での遊びを経験する。また、潮の干満や潮流、波のうねり、天気の変化等の海辺の基礎知識や、安全管理についても学ぶ。全15回の授業の構成は、海辺での学習(授業3.6回分×3に相当)と、学校での講義5回となる。また屋外での活動を実施する上で不可欠な安全管理と救命救急・応急手当についても学ぶ。		
授業計画	第1回	4/13(月:短大での講義) ガイダンス:子どもと海へ行こう	
	第2回	5/10(日:葉山) 9:30-12:00 海辺の学習「体験」①	
	第3回	5/10(日:葉山) 13:00-15:00 海辺の学習「体験」②	
	第4回	5/10(日:葉山) 15:00-16:00 海辺の学習「体験」の振り返り	
	第5回	5/11(月:短大での講義) 海辺の活動「体験」のまとめとレポート作成	
	第6回	5/24(日:葉山) 9:30-12:00 海辺の学習「参観」 専門家による幼稚園児・保育園児の指導の参観①	
	第7回	5/24(日:葉山) 13:00-15:00 海辺の学習「参観」 専門家による幼稚園児・保育園児の指導の参観②	
	第8回	5/24(日:葉山) 15:00-16:00 海辺の学習「参観」の振り返り	
	第9回	5/25(月:短大での講義) 海辺の活動「参観」のまとめとレポート作成	
	第10回	6/1(月:短大での講義) 安全管理・救命救急・応急手当 *各自、バンスト1枚と大判のハンカチ(バンダナ等)1枚を用意してくること。	
	第11回	6/21(日:葉山) 9:30-12:00 海辺の学習「指導実践」 幼稚園児・保育園児とその保護者を対象に、自分達が海辺の自然体験活動の指導を行う①	
	第12回	6/21(日:葉山) 13:00-15:00 海辺の学習「指導実践」 幼稚園児・保育園児とその保護者を対象に、自分達が海辺の自然体験活動の指導を行う②	
	第13回	6/21(日:葉山) 15:00-16:00 海辺の学習「指導実践」の振り返り	
	第14回	6/22(月:短大での講義) 海辺の活動「指導実践」のまとめとレポート作成	
	第15回	7/20(月:短大での講義) 自然体験活動からみた幼児教育・保育における保健体育領域の指導(授業全体のまとめ)	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業日ごとに、授業後、リフレクションシートまたはレポートを提出する。シート・レポートのフォーマットは授業時に指示します。		
テキスト	子どもと海へ行こう 幼児教育者のための海辺の自然体験教本 発行・編集:NPO法人オーシャンファミリー海洋自然体験センター *非売品なので受講者数が確定したら授業担当者が発行者に連絡して用意します。(受講学生には無料で配布(差し上げます)。履修を途中で取り消した場合は返却していただきます。)		
参考文献	適宜指示・配布する		
評価方法	リフレクションシート:30% レポート:70%		

身体表現特別演習		前期 2 単位	子ども学専攻
日本の舞踊・民俗舞踊・子どもの身体表現		森下 春枝（もりした はるえ）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現の基礎、舞踊の特徴、表現形式を比較しつつ、日本の舞踊文化と現代社会での表現形式や流行について探求します。 ○ 日本の地域社会の芸能や舞踊は、衰退の一途をたどってきていますが、地域社会は子どもの心と体を大いに育ててきました。現在、どのように取り組まがなされているのか、例をあげ、そこから学ぶことは何かを検証します。 		
授業の概要	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身体表現・身体活動について理解を深めるために、文献を読むとともに実践しながら体得していきます。 ○ 身体表現や身体活動についての取り組みや枠組みについて具体的事例を挙げながら検討します。 ○ 幼稚園における身体表現の事始は、保育唱歌と遊戯でした。その後ダンス（フォークダンス）も入り、子どもの心と体の育ちをはぐくんできました。現在に至るまでに子どものリズムと身体感覚、表現力をどう育ててきたのかを探ります。 		
授業計画	第1回	授業の概要	
	第2回	身体表現の基礎 1：文献の検討	
	第3回	身体表現の基礎 2：具体的事例の検討	
	第4回	身体表現の基礎 3：具体的事例の検討	
	第5回	日本の舞踊文化 1：日本の舞踊文化について	
	第6回	日本の舞踊文化 2：日本の舞踊文化について	
	第7回	日本の舞踊文化 3：日本の舞踊文化について	
	第8回	子どもの身体表現活動 1：子どもの豊かな身体表現や身体活動を導き出すために	
	第9回	子どもの身体表現活動 2：具体的事例に検討	
	第10回	子どもの身体表現活動 3：具体的事例の検討	
	第11回	民俗舞踊 1：民俗舞踊について	
	第12回	民俗舞踊 2：具体的事例の検討	
	第13回	民俗舞踊 3：具体的事例の検討	
	第14回	民俗舞踊 4：具体的事例の検討	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	身体表現についての具体的事例を調査したり、表現方法について実践したり、紹介し合ったりしてもらいます。		
テキスト	特に定めません。		
参考文献	授業内で紹介します。		
評価方法	積極的授業参加:50% 課題への取り組み:30% レポートなど課題提出:20%		

児童文学特講		後期 2 単位	子ども学専攻
子どもの文学にみる家族のかたち		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本やYA小説を含む児童文学の重要性が理解できるようになる。 ・ 視野を広くもって自分も読書をし、子どもにも本を手渡すことができるようになる。 ・ 現在変わりつつある社会や家族のかたちが、将来はどうなっていくかについて意見をもてるようになる。 		
授業の概要	絵本や児童文学が次世代の子どもにとってどういう意味をもつかを考察したうえで、「家族」をテーマにした作品を取り上げ、鑑賞すると同時に、家族のかたちの変遷や今後あるべき姿についても思索をめぐらせる。ゼミ形式で学生も発表を行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	子どもの育ちにとって文学がもつ意味	
	第3回	子どもに本を手渡す時のポイント	
	第4回	ファンタジーとリアルな物語	
	第5回	子どもの文学における家族像の変遷	
	第6回	子どもの文学が描く「親に守られる子どもと子どもに守られる親」	
	第7回	子どもの文学が描く「大人になれない親、問題を抱える親」	
	第8回	子どもの文学が描く「外からやってきた家族」	
	第9回	子どもの文学が描く「親の離婚・再婚に揺れる子ども」	
	第10回	子どもの文学が描く「ひとり親の家庭」	
	第11回	子どもの文学が描く「家出」	
	第12回	子どもの文学が描く「きょうだいとの軋轢」	
	第13回	子どもの文学が描く「祖父母と子どもの共生関係」	
	第14回	新しい家族像	
	第15回	子どもの文学と未来の家族	
準備学習 (予習・復習等)	各回の授業で取り上げる作品をあらかじめ読んでおく。担当の作品については、事前に詳しく読んでテーマごとの問題点をクラスでディスカッションできるようにしておく。授業後のミニレポートもあり。		
テキスト	適宜プリントを配布		
参考文献	カーペンター&ブリチャード著『世界児童文学百科』神宮輝夫編『世界児童文学百科 現代篇』（原書房）、ハント著『子どもの本の歴史』（柏書房）ほか適宜授業時に紹介する。		
評価方法	授業参加度:20% ミニレポート:40% 期末レポート:40%		

音楽特別演習		後期 2 単位	子ども学専攻
音楽表現の実践、音楽の総合的実践演習		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標及びテーマ	コードネームを学び、ピアノ演奏で伴奏弾き語りの実践。日本の童謡の歴史を学び、ピアノ演奏で伴奏弾き語りの実践。記譜法を学び楽譜に慣れる。海外の幼稚園の試みを学ぶ。劇場での鑑賞のマナーを学ぶ。手話をつけて歌唱の実践。子守唄、楽器の歴史、製作などを知る。講義と実践演習。		
授業の概要	コードネームの実践、弾き語りの実践、記譜法の実践。海外の幼稚園の試み、楽器の歴史、製作のドキュメンタリーや、子守唄を鑑賞、実際に劇場でのコンサート鑑賞。講義と実践演習し、レポート試験として、講義、実践、鑑賞を研究しまとめる。授業内容は状況に応じて適宜調整する場合があります。		
授業計画	第1回	オリエンテーション及びコードネームを読む	
	第2回	コードネーム（1） コードネームを学び、曲の伴奏を和音でピアノ演奏	
	第3回	コードネーム（2） コードネームを学び、曲の伴奏を和音でピアノ演奏し歌唱を試みる	
	第4回	弾き語り実践 : 曲の伴奏を和音でピアノ演奏し歌唱法及び呼吸法を実践し、弾き語り実践	
	第5回	日本の童謡（1） 日本の童謡の歴史を学ぶ	
	第6回	日本の童謡（2） 日本の童謡の歴史を学び歌唱法及び呼吸法を実践	
	第7回	日本の童謡（3） 日本の童謡を歌唱法及び呼吸法を実践し弾き語り実践	
	第8回	記譜法（1） 歌曲の記譜法（写譜）の実践	
	第9回	記譜法（2） 歌曲の記譜法（移調譜）の実践	
	第10回	海外の幼稚園（1） 海外（イタリア）の幼稚園の試みを学ぶ	
	第11回	海外の幼稚園（2） 海外（イタリア）の幼稚園の試みを学び実践を試みる	
	第12回	楽器を知る : 楽器の歴史、製作過程などを知る	
	第13回	劇場で鑑賞すること : 海外の劇場での鑑賞時のマナーから学ぶ	
	第14回	クリスマスの音楽 : クリスマスの音楽を鑑賞し、クリスマスの歌を手話で実践	
	第15回	子守唄:世界各国の子守唄を鑑賞し、子守唄を学ぶ	
準備学習 (予習・復習等)	コードネームを学び、ピアノ演奏で伴奏する、日々弾き語りの実践。日本の童謡の歴史を学び、ピアノ演奏で伴奏弾き語りの実践を日々深める。記譜法を学び日々楽譜に慣れる。海外の幼稚園の試み、劇場での鑑賞のマナーを学び手話をつけて歌唱の実践を日々深める。楽器の歴史、製作のドキュメンタリーで製作を学び、子守唄、楽器の歴史、などを知り、子守唄を鑑賞、出来れば、実際に劇場等に足を運び、コンサート鑑賞で研鑽を深める。		
テキスト	『新・幼児の音楽教育』（朝日出版社） 『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』（保育出版社） 『子どもと表現』（日本文教出版）		
参考文献	必要な場合は指示致します		
評価方法	授業内での積極性:60% 発表、提出物の内容:40%		

美術特別演習		後期 2 単位	子ども学専攻
表現原論 -アートとイメージの森から-		久保 制一 (くぼ せいいち)	
授業の到達目標及びテーマ	造形表現の原理的理解を深めて、素材によって異なる表現のコアを実験と調査の中から探っていく。後半は、それぞれが選択した素材での表現の可能性を探究する。このプロセスの中からイメージを定着する為の方法と技法の理解をすることができ、このプロセスの言語化も積極的に進めることにより更なる深まりが得られる。		
授業の概要	ワークショップ 自由制作 プレゼンテーション レポート作成 上記4点を主体に授業展開する。		
授業計画	第1回	イントロダクション 考察 モノを作るということ、絵を描くということ	
	第2回	ワークショップ 実験 モノを作るということ、絵を描くということの準備	
	第3回	ワークショップ 実験 モノを作るということ、絵を描くということの制作開始	
	第4回	ワークショップ 実験 モノを作るということ、絵を描くということの継続	
	第5回	ワークショップ 実験 モノを作るということ、絵を描くということをつづける	
	第6回	プレゼンテーション 作品の制作途上の発表	
	第7回	ワークショップ モノを作る、絵を描く基本の再確認	
	第8回	ワークショップ モノを作るということ、絵を描くということを楽しむ	
	第9回	ワークショップ モノを作るということ、絵を描くということを深める	
	第10回	ワークショップ モノを作るということ、絵を描くということをもっと深める	
	第11回	ワークショップ モノを作るということ、絵を描くということをさらに展開する	
	第12回	ワークショップ モノを作るということ、絵を描くということにこだわる	
	第13回	ワークショップ 子どもの表現① モノを作るということ、絵を描くことへの検討	
	第14回	ワークショップ 子どもの表現② モノを作るということ、絵を描くことへの検討	
	第15回	表現と素材の研究 まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	特にない。		
テキスト	特にない。		
参考文献	特にない。		
評価方法	授業への参加度:20% 作品:40% レポート :40%		

器楽特別演習		前期 2 単位	子ども学専攻
Creative Music Laboratory : キーボード (鍵盤) およびフィジカルコントローラーなどのアンサンブル		吉仲 淳 (よしなか あつし)	
授業の到達目標及びテーマ	幼児教育 (表現) および初等教育 (音楽科) に必要とされる即興演奏などの音楽の実践的表現法や技術、そしてそれを支える音楽理論やソルフェージュなどの音楽エクリチュール、パロールの習得およびその応用的使用法 (マルチメディア関連 : コンピューターアシストの楽器の間領域的使用法) の模索する。		
授業の概要	教育・保育を志す私たちは、様々な領域の中で子どもと関わることにより、子どもについての見識を深めていきます。獲得された見識は、状況によっては 正しくもありそうでない場合もあるのでしょうか。しかし子どもやその環境を理解する上で、様々な視点を持っていることが保育者・教育者としては賢明であると考えます。器楽は、音 (音楽) を媒介として子どもの世界での知的活動を共有したり、お互いの表現をぶつけあう創造的な場を構成する道具となります。器楽という概念を広げることににより、より教育的導引力も高くファンタジックな場を創造するための優れた方法となるのです。その道具としての楽器を再認識するとともに、豊かに子どもと関わる術を模索していきましょう。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	鍵盤上の伴奏法 その1: 音楽語彙 (モードほか)	
	第3回	鍵盤上の伴奏法 その2: コードと様々な伴奏形	
	第4回	アレンジ その1: 楽器、その他	
	第5回	アレンジ その2: 環境音・生活音	
	第6回	アレンジ その3: 効果的な楽器選びとオーケストレーション	
	第7回	即興演奏 実践1: DTM、マルチメディア関連の楽器	
	第8回	即興演奏 実践2: スマートフォン、タブレット端末のアプリケーション	
	第9回	プレゼンテーション (発表会)	
	第10回	歌曲制作 その1: 歌詞づくりとその背景	
	第11回	歌曲制作 その2: セットアップとメロディーメイキング	
	第12回	歌曲制作 その3: 具体的使用 (指導) 方法	
	第13回	絵本を用いて その1: 題材およびその構成	
	第14回	絵本を用いて その2: 制作	
	第15回	プレゼンテーションおよび総括	
準備学習 (予習・復習等)	参考文献に記載されたものを読んでおくことが望ましいです。目標及びテーマに掲げられているように、音楽の応用的な用法について検討していきます。授業時間内に繰り広げられる音楽談義 (芸術・音楽・文化用語などを用いて) を理解するため、特に授業内で紹介された事柄については、当事者意識を持って自主的に取り組むようにしてください。		
テキスト	初回レッスン (オリエンテーション) にて指示する。		
参考文献	・北大路書房『遊び・生活・学びを培う教育保育の方法と技術: 実践力の向上をめざして』荒木紫乃ほか編著 ・ナカニシヤ出版『音楽文化のすすめ』小西潤子ほか編 ・音楽之友社『この音でいいかな? : 創造的音楽学習の試み』山本文茂ほか著 ・音楽之友社『音楽と心と教育』キース・スワンウィック著		
評価方法	授業への前向きな姿勢: 40% グループでの取り組み: 30% レポートなどの提出物: 30%		

現代社会特講(環境)		後期 2 単位	子ども学専攻
地球環境問題		廣田 道夫 (ひろた みちお)	
授業の到達目標 及びテーマ	産業革命以後、人間活動は際限なく拡大し、地球全体に影響を及ぼすようになってきました。地球が有限であるということ、そしてその中で持続可能な発展を展開していくことは、現代社会に生きる我々に課せられた大きな課題です。この講義では個々の地球環境問題に関するメカニズム、影響、対策、将来予測等について、その基礎を理解できるように講義します。		
授業の概要	講義を中心に進めます。地球大気の構造・組成、地球温暖化、オゾン層破壊、熱帯雨林の減少、PM2.5問題等について説明します。		
授業計画	第1回	大気の鉛直構造	
	第2回	大気の組成、鉛直分布	
	第3回	地球温暖化(現状)	
	第4回	地球温暖化(将来予測)	
	第5回	温室効果ガスの監視-CO2	
	第6回	温室効果ガスの監視-CH4, N2O	
	第7回	オゾン層破壊(オゾンの生成・消滅)	
	第8回	オゾン層破壊(フロンガスの影響、オゾンホール)	
	第9回	酸性雨	
	第10回	PM2.5問題	
	第11回	熱帯雨林の減少	
	第12回	生物多様性の保全	
	第13回	持続可能な発展	
	第14回	新しいエネルギー—太陽光発電・風力発電	
	第15回	新しいエネルギー—地熱発電・その他	
準備学習 (予習・復習等)	前回の内容について、簡単な小テストを行う。		
テキスト	必要に応じてプリントを配布する		
参考文献	小島次雄、川平浩二、藤倉良「これからの環境科学」(化学同人)		
評価方法	小テスト:40% 試験:60%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
幼児・幼児教育における諸課題の探求 I		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・短期大学3年間での学びをさらに深め、学位授与機構に提出する論文を完成させる。 ・専攻科に来てから論文を書く、あるいは1年かけて論文を仕上げる人は、テーマを決定し、資料収集を行い、論文作成の準備をする。 		
授業の概要	<p>幼児教育学分野を研究領域として、特に幼児教育、保育、保育内容、幼児など幼児に関する様々な課題について学生の興味関心あるテーマをもって、短大での学びをさらに深め、文献を調べたり、調査をしたりしてまとめその成果を発表し、討議する。</p>		
授業計画	第1回	オリエンテーション（授業の進め方、計画等）	
	第2回	論文の書き方、作成の仕方確認	
	第3回	PCを使つての論文作成の方法（ワードの使い方など）	
	第4回	資料収集の方法（サイニーを使つての先行研究の調べ方など）	
	第5回	論文テーマ及び研究動機など発表及び検討1	
	第6回	論文テーマ及び研究動機など発表及び検討2	
	第7回	個別指導 グループ①	
	第8回	個別指導 グループ②	
	第9回	論文中間発表	
	第10回	個別指導 グループ①	
	第11回	個別指導 グループ②	
	第12回	前期論文提出者仮提出・通年作成者はその成果の提出	
	第13回	個別指導 グループ①	
	第14回	個別指導 グループ②	
	第15回	論文発表会	
準備学習 (予習・復習等)	各自のテーマに沿つた資料収集などを行い必ず毎回その成果を持ってくること。		
テキスト	河野哲也『レポート・論文の書き方入門第3版』慶應義塾大学出版会		
参考文献	必要に応じて指示する		
評価方法	授業への参加態度:40% 論文:60%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
さまざまな保育の場、子どもの現状と課題をとらえる		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	短期大学3年間で学修、実習体験、卒業論文の作成、などをふまえ、論文作成にむかって、 ①研究テーマ・問題の所在を特定する ②テーマに関して資料を収集・講読し、内容をまとめる ことを目標とします。		
授業の概要	各自が追求したいテーマに積極的に取り組み、報告・発表すること、それをもとに討議しあい互いに学び合うことが基本になります。		
授業計画	第1回	講義の進め方、方針、計画についての説明	
	第2回	保育施設見学①（見学内容についてレポート作成）	
	第3回	見学内容報告・検討、次回への課題確認	
	第4回	保育施設見学②（見学内容についてレポート作成）	
	第5回	課題に基づいてグループ発表・検討（レジュメ作成）	
	第6回	研究テーマの選定（仮）と研究構想の検討 ①	
	第7回	研究テーマの選定（仮）と研究構想の検討 ②	
	第8回	研究テーマに関して必要な文献・先行研究収集①	
	第9回	研究テーマに関して必要な文献・先行研究収集②	
	第10回	先行研究の検討①（レジュメ作成）	
	第11回	先行研究の検討②（レジュメ作成）	
	第12回	先行研究の検討③（レジュメ作成）	
	第13回	問題の所在を明らかにする	
	第14回	研究方法の検討	
	第15回	研究テーマ・問題の所在・研究方法について発表	
準備学習 (予習・復習等)	関心のある研究テーマに関する文献、先行研究を収集し、講読を進めてください。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	研究テーマに応じて、随時紹介します。		
評価方法	レポート:70% 討議参加:30%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位
美術表現の多様性		久保 制一（くぼ せいいち）
授業の到達目標 及びテーマ	子どもの造形活動を研究対象として実際に調査しながら、課題を発見して研究を深めていくことで感性と知性の磨きがかけられる。	
授業の概要	子どもと保育という環境での美術教育という側面から、諸問題を考察し、探究することをねらいとする。前期にて論文を完成させる受講生は説得的で論理的な論文の執筆を目指す。後期の提出を目指す受講生は、論文作成に向けて、文献検索、テーマに対する基礎的な理解、仮説の構築までを目指し個別に検討、研究をすすめる。	
授業計画	第1回	発表と討議 テーマの検討
	第2回	発表と討議 情報収集 先行研究調査
	第3回	発表と討議 調査の方法の検討
	第4回	発表と討議 調査項目の検討
	第5回	発表と討議 調査シート作成
	第6回	発表と討議 実地調査
	第7回	発表と討議 集計作業
	第8回	発表と討議 分析・検討
	第9回	発表と討議 論文作成①
	第10回	発表と討議 論文作成②
	第11回	発表と討議 論文作成③
	第12回	発表と討議 論文作成④
	第13回	発表と討議 論文作成⑤
	第14回	発表と討議 論文作成⑥
	第15回	発表と討議 論文作成⑦
準備学習 (予習・復習等)	特になし	
テキスト	特になし	
参考文献	特になし	
評価方法	提出物:90% 参加度:10%	

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
論文執筆に向けて		小泉 由美子 (こいずみ ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	音楽領域を中心に、音と社会に関する問題、等、自身の関心事から、自身でテーマを決め、論文執筆に向けて、調査、研究、考察を進める。		
授業の概要	資料、情報の収集、グループディスカッション、個別相談等を通して、テーマを考え、自身で決めたテーマに基づいて、調査、研究に取り組む準備をする。		
授業計画	第1回	授業の進め方	
	第2回	図書館オリエンテーション	
	第3回	資料、情報の収集、グループディスカッション (1)	
	第4回	資料、情報の収集、グループディスカッション (2)	
	第5回	資料、情報の収集、グループディスカッション (3)	
	第6回	資料、情報の収集、グループディスカッション (4)	
	第7回	資料、情報の収集、グループディスカッション (5)	
	第8回	資料、情報の収集、グループディスカッション (6)	
	第9回	経過報告 (1)	
	第10回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて 個別相談 (1)	
	第11回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて 個別相談 (2)	
	第12回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて 個別相談 (3)	
	第13回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて 個別相談 (4)	
	第14回	資料、情報の収集、テーマ設定に向けて 個別相談 (5)	
	第15回	経過報告 (2)	
準備学習 (予習・復習等)	自身でテーマを決め、論文執筆に向けて、自身で調査、研究、考察を進める為の準備として、資料、情報の収集は個々に、テーマによるグループディスカッションは調査をして望む、個別相談等を通して、テーマを考え、自身で決めたテーマに基づいて、調査、研究に取り組む準備をする		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 発表内容を考慮:40%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
論文指導		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	各自のテーマに沿って、きちんとした論文が書けるようになる		
授業の概要	各自のテーマに沿って、アドバイス、文献の紹介、書き方の指導などを行う。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	各自のテーマについて紹介	
	第3回	論文の構成法について	
	第4回	具体的な論文をサンプルとして研究	
	第5回	図書館の利用法と参照文献の探し方	
	第6回	わかる文章と質の高い文章の書き方	
	第7回	論文における主観性と客観性	
	第8回	各自がこの時点で書いたものを発表	
	第9回	前回の発表に基づくディスカッション	
	第10回	個別指導：グループ1	
	第11回	個別指導：グループ2	
	第12回	個別指導：グループ3	
	第13回	論文のブラッシュアップについて	
	第14回	この時点での論文発表	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各自が自分のテーマに沿って主体的に研究を進める。教員はアドバイス役なのでアドバイスもできないことを承知して、自分でどんどん書いていくこと。		
テキスト	適宜プリントする。		
参考文献	授業内で紹介する。		
評価方法	授業参加度：30% 論文：70%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
” ころとそその育ち” に関する論文を作成する		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	各自が日常生活のなかで感じとった、ころとそその育ちにかかわる問題について、論文にまとめることをめざす。それぞれのテーマに沿った研究方法を用いながら考察を深め、学術論文としてふさわしい内容に仕上げていくことを目標とする。		
授業の概要	個別指導が中心となるが、必要に応じてグループメンバーが集い、互いのテーマを共有する機会を設ける。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	研究テーマの共有①	
	第3回	個別指導①	
	第4回	個別指導②	
	第5回	個別指導③	
	第6回	個別指導④	
	第7回	個別指導⑤	
	第8回	研究テーマの共有②	
	第9回	個別指導⑥	
	第10回	個別指導⑦	
	第11回	個別指導⑧	
	第12回	個別指導⑨	
	第13回	個別指導⑩	
	第14回	個別指導⑪	
	第15回	まとめとふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	研究テーマの共有時にはレジュメを作成する		
テキスト	授業内で紹介する		
参考文献	授業内で紹介する		
評価方法	論文への取り組み方:20% 論文:80%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
マイノリティの生き方への支援		杉田 穂子 (すぎた やすこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	マイノリティ (少数派) の生き方を学んだ上で、支援できることは何か、具体的な方法について考えていく。そのことを修了論文としてまとめていく準備をする。		
授業の概要	前半は、共通の文献を購読していく。 後半は、それぞれの論文のテーマの設定、関連文献について発表をしてもらう。		
授業計画	第1回	シラバス紹介	
	第2回	文献購読 (1)	
	第3回	文献購読 (2)	
	第4回	文献購読 (3)	
	第5回	文献購読 (4)	
	第6回	文献購読 (5)	
	第7回	文献購読 (6)	
	第8回	各自の論文のテーマの発表 (1)	
	第9回	各自の論文のテーマの発表 (2)	
	第10回	各自の論文のテーマの発表 (3)	
	第11回	各自の論文のテーマの発表 (4)	
	第12回	テーマに沿った文献の紹介 (1)	
	第13回	テーマに沿った文献の紹介 (2)	
	第14回	テーマに沿った文献の紹介 (3)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	文献の購読の場合は予め読んでくること、さらに当番の時は、レジメを作成すること。 後半の発表の場合は、各自レジメを用意すること。		
テキスト	適宜指示する。		
参考文献	適宜指示する。		
評価方法	授業への感想:30% レジメの作成状況:40% 授業での発表態度:30%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
現代社会における教育の諸問題の検討		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育学の視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に論理的な文章として他者に提示する、事ができるようになる。		
授業の概要	現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育学的立場から考察し、究明することをねらいとする。前期にて論文を完成させる受講生は説得的で論理的な論文の執筆を目指す。後期の提出を目指す受講生は、論文作成に向けて、文献検索、テーマに対する基礎的な理解、仮説の構築までを目指す。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	受講生による発表1	
	第3回	受講生による発表2	
	第4回	受講生による発表3	
	第5回	受講生による発表4	
	第6回	受講生による発表5	
	第7回	受講生による発表6	
	第8回	受講生による発表7	
	第9回	受講生による発表8	
	第10回	受講生による発表9	
	第11回	受講生による発表10	
	第12回	受講生による発表11	
	第13回	受講生による発表12	
	第14回	受講生による発表13	
	第15回	受講生による発表14	
準備学習 (予習・復習等)	論文作成に向けて毎回自身のテーマに関する論文などを読んでくる。		
テキスト	特になし		
参考文献	別途指示する。		
評価方法	平常点:30% 論文あるいはレポート:70%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
保育学の論文技法		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	保育学の論文を書くために不可欠な技法を身につけ、論文を執筆する。		
授業の概要	上記目標に沿った通常の内容を受講生の課題に応じて具体化する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：演習の目的・内容・進め方の説明、参考文献の紹介など	
	第2回	学術論文とは何か(1)	
	第3回	学術論文とは何か(2)	
	第4回	テーマの設定(1)	
	第5回	テーマの設定(2)	
	第6回	先行研究の検討(1)	
	第7回	先行研究の検討(2)	
	第8回	資料の蒐集と記録(1)	
	第9回	資料の蒐集と記録(2)	
	第10回	論文の構成と体裁(1)	
	第11回	論文の構成と体裁(2)	
	第12回	論文の文章と註(1)	
	第13回	論文の文章と註(2)	
	第14回	原稿の作成	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	学術論文の技法について概論を読んでおく。		
テキスト	初回時に推薦する。		
参考文献	斉藤孝・西岡達裕『学術論文の技法』新訂版(日本エディタースクール出版部、2005年)。		
評価方法	論文:90% 発表:10%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
人間らしく生きることの探求		横堀 昌子 (よこぼり まさこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	<p>本科で取り組んだ成果と体験をふまえ、さらに自らの研究を育てるために、改めて研究方法論・内容等を精査し、執筆力を高める。各自がテーマ（研究課題）を構想し、研究計画を立てて深めていく。研究課題の設定には社会性が問われ、執筆レベルではたしかで客観的な論述が求められる。自身の課題と向き合いながら多くの新たな出会いや発見を重ね、成果を改めて論文として実らせることを期待する。各自が切り取る社会的なテーマを通して、人が人として、生活の中で、あるいは社会との接点の中で、より活かされることの本質にともにせまりたい。</p>		
授業の概要	<p>研究に関する個別指導が中心となる。研究に求められる方法論や執筆手法については個別に助言する中で確認する。また、共通の文献・持ち寄るテーマやトピックスにそった発題・ディスカッションを試み、仲間とともに学びあうことも試みる。</p>		
授業計画	第1回	授業オリエンテーション	
	第2回	研究テーマの検討と確認	
	第3回	研究方法論の検討と確認	
	第4回	研究内容・構成の検討と確認	
	第5回	個別指導（グループ1）	
	第6回	個別指導（グループ2）	
	第7回	個別指導（グループ1）	
	第8回	個別指導（グループ2）	
	第9回	個別指導（グループ1）	
	第10回	個別指導（グループ2）	
	第11回	個別指導（グループ1）	
	第12回	個別指導（グループ2）	
	第13回	研究成果のとりまとめと確認（グループ1）	
	第14回	研究成果のとりまとめと確認（グループ2）	
	第15回	発表とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	<p>研究が成り立つための枠組みや方法論を助言を通して確認し、自分で研究を展開し、指導を受けに来るルーティンが基本となる。そこで、研究テーマ・内容・構成・論拠として扱う素材を確認し、論述の精度（何を通して、何についてどこまで言えるのか）を高めていく努力を重ねること。文献・資料を読み、データや論拠を活用する力を、より意識的に獲得すること。</p>		
テキスト	開講時に提示する。		
参考文献	必要に応じ、紹介していく。		
評価方法	研究への取り組み状況:30% 成果物（論文）:70%		

子ども学修了研究 I		前期 2 単位	子ども学専攻
修了論文研究の立ち上げ・推進		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	「子ども学」の学びの集大成として作成する修了論文研究を具体的に立ち上げ、明確な方向性を定めて推し進め、完成度の高い論文作成を目指して研究を進展させることができるようになる。(1) 半期で論文を作成して提出し、後期は学位授与機構での試験に備える、(2) 1年間かけて論文を完成させ、専攻科修了後に学位授与機構で試験を受ける、のどちらのスケジュールで行くのかを、初回授業時に相談します。		
授業の概要	論文研究の完成と学位授与を目指し計画的に研究を進めていくられるようにする。受講学生の半数が研究内容の報告を行い、残りの半数がコメントやアドバイスをするという方法で、相互協力して進めていく。		
授業計画	第1回	研究テーマの吟味と確定	
	第2回	研究計画書の作成	
	第3回	研究計画書の改訂・完成	
	第4回	緒言①研究の学術的背景	
	第5回	緒言②研究動機	
	第6回	緒言②研究目的	
	第7回	方法①調査・実験・データ収集・文献収集について	
	第8回	方法②分析・解析方法について	
	第9回	結果①データの分析	
	第10回	結果②データのインテグレーション	
	第11回	考察・議論①結果の解釈	
	第12回	考察・議論②複数の結果の相関・整合性	
	第13回	考察・議論②研究目的の達成と今後の展望	
	第14回	研究論文：本文全体の推敲・改訂、完成	
	第15回	研究発表	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、1週間の研究の進捗状況を、各自の修了論文研究ノートをもとに報告して頂きます。		
テキスト	授業時に提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介する		
評価方法	進捗状況の報告:20% 修了論文:80%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
幼児・幼児教育における諸課題の探求Ⅱ		浅見 均（あさみ ひとし）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期に積み上げた研究及び資料収集を基に修了論文を完成させる。		
授業の概要	幼児教育分野を研究領域として「子ども学修了研究Ⅰ」での学びや研究の成果をもとに、幼児教育や保育、保育内容など学生の興味や関心あるテーマについて、さらに深く掘り下げ、吟味し、最終的に論文にまとめ上げていく。まとめ上げた論文は発表の場において、発表することによって終了し、さらに学位授与機構に提出する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション（授業の進め方・計画など）	
	第2回	夏期休暇中の論文作成の成果について発表及び討議	
	第3回	夏期休暇中の論文作成の成果について発表及び討議	
	第4回	個別指導 グループ①	
	第5回	個別指導 グループ②	
	第6回	個別指導 グループ③	
	第7回	中間発表及び内容の検討、討議	
	第8回	中間発表及び内容の検討、討議	
	第9回	中間発表及び内容の検討、討議	
	第10回	個別指導 グループ①	
	第11回	個別指導 グループ②	
	第12回	個別指導 グループ③	
	第13回	仮提出	
	第14回	個別指導 全グループ	
	第15回	論文発表会	
準備学習 (予習・復習等)	各自自分のテーマに沿った資料収集を行い、それを基に考えたことを文章化して持ってくること。		
テキスト	特に定めない		
参考文献	授業の中で指示する		
評価方法	授業への参加度:40% 論文:60%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
研究内容を深め、論文を作成する		岸井 慶子 (きしい けいこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	I で進めてきた研究を、さらに深め論文を作成し発表すること。		
授業の概要	各自の研究を着実にすすめていきます。途中で、内容をまとめ、報告・発表し、検討・修正を繰り返しながら、次第に論文の完成度が高まるようにすすめます。		
授業計画	第1回	研究中間報告、検討（課題の確認、レジュメ作成）	
	第2回	研究課題の報告・発表①、検討	
	第3回	研究課題の報告・発表②、検討	
	第4回	研究課題の報告・発表③、検討	
	第5回	研究課題の報告・発表④、検討	
	第6回	研究課題の報告・発表⑤、検討	
	第7回	研究課題の報告・発表⑥、検討	
	第8回	研究課題の報告・発表、検討（個別指導にむけて①）	
	第9回	研究課題の報告・発表、検討（個別指導にむけて②）	
	第10回	中間報告（レジュメ作成）	
	第11回	論文執筆（個別指導1）	
	第12回	論文執筆（個別指導2）	
	第13回	論文執筆（個別指導3）	
	第14回	要約・発表レジュメ作成・検討	
	第15回	発表	
準備学習 (予習・復習等)	各自が積極的に研究に取り組み、進行状況を報告・発表してください。		
テキスト	特に指定しません。		
参考文献	研究テーマによって、随時紹介します。		
評価方法	論文:80% 討議参加・準備:20%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位
保育の環境における美術教育の諸問題の検討		久保 制一（くぼ せいいち）
授業の到達目標 及びテーマ	子どもの造形活動を研究対象として実際に調査しながら、課題を発見して研究を深めていくことで感性と知性の磨きがかけられる。	
授業の概要	子どもと保育という環境での美術教育という側面から、諸問題を考察し、探究することをねらいとする。後期の提出を目指す受講生は、論文作成に向けて、文献検索、テーマに対する基礎的な理解、仮説の構築までを目指し個別に検討、研究をすすめる。	
授業計画	第1回	オリエンテーション
	第2回	受講生による発表①
	第3回	受講生による発表②
	第4回	受講生による発表③
	第5回	受講生による発表④
	第6回	受講生による発表⑤
	第7回	受講生による発表⑥
	第8回	受講生による発表⑦
	第9回	受講生による発表⑧
	第10回	受講生による発表⑨
	第11回	受講生による発表⑩
	第12回	受講生による発表⑪
	第13回	受講生による発表⑫
	第14回	受講生による発表⑬
	第15回	受講生による発表⑭
準備学習 (予習・復習等)	特になし	
テキスト	特になし	
参考文献	特になし	
評価方法	レポート:90% 参加度:10%	

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
論文執筆、完成		小泉 由美子（こいずみ ゆみこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	自身で決めたテーマで論文を執筆し完成させる。		
授業の概要	子ども学修了研究Ⅰに於いて、自身が決めた、テーマを資料収集、調査研究を深め、論文を執筆し完成させる。		
授業計画	第1回	文章化内容検討 個別相談（1）	
	第2回	文章化内容検討 個別相談（2）	
	第3回	文章化内容検討 個別相談（3）	
	第4回	文章化内容検討 個別相談（4）	
	第5回	文章化内容検討 個別相談（5）	
	第6回	文章化内容検討 個別相談（6）	
	第7回	文章化内容検討 個別相談（7）	
	第8回	経過報告	
	第9回	執筆内容検討 個別相談（1）	
	第10回	執筆内容検討 個別相談（2）	
	第11回	執筆内容検討 個別相談（3）	
	第12回	執筆内容検討 個別相談（4）	
	第13回	執筆内容検討 個別相談（5）	
	第14回	執筆内容検討 個別相談（6）	
	第15回	執筆完成	
準備学習 (予習・復習等)	資料収集、調査研究し、論文執筆の為、準備復習を日々継続し、完成する。		
テキスト	必要な場合は指示致します。		
参考文献	必要な場合は指示致します。		
評価方法	論文執筆への積極性:60% 執筆論文の内容:40%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
YA小説研究		さくま ゆみこ (さくま ゆみこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	児童文学の中では比較的新しいYA小説を読み、内容を精査し評価できるようになる		
授業の概要	作品を読んだでのディスカッション。学生はそれぞれ担当する作品について発表する。この時期に論文を書く学生については、それを指導する。		
授業計画	第1回	イントロダクション	
	第2回	YA小説とは何か	
	第3回	YA小説の歴史と現在	
	第4回	各自の論文の現段階での研究発表(1)	
	第5回	アメリカのYA小説	
	第6回	イギリスのYA小説	
	第7回	ドイツのYA小説	
	第8回	各自の論文の現段階での研究発表(2)	
	第9回	日本のYA小説	
	第10回	北欧のYA小説	
	第11回	YA小説とケータイ小説	
	第12回	発表とディスカッション(1)	
	第13回	発表とディスカッション(2)	
	第14回	発表とディスカッション(3)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	それぞれの授業で取り上げる作品を読んでおく。研究の分担部分は各自で事前に準備し発表する。ミニレポートあり。講義より作品をみんなで読んでディスカッションする形式を主体にする。この時期に論文を書く学生が多い場合は、そちらを中心に指導する。		
テキスト	適宜プリントする		
参考文献	授業内で紹介する		
評価方法	授業参加度:20% ミニレポート:40% 期末レポート:40%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
” ころとそその育ち” に関する論文を執筆する		菅野 幸恵 (すがの ゆきえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	各自が日常生活のなかで感じとった、ころとそその育ちにかかわる問題について、論文にまとめることをめざす。それぞれのテーマに沿った研究方法を用いながら考察を深め、学術論文としてふさわしい内容に仕上げていくことを目標とする。		
授業の概要	個別指導が中心となる。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	個別指導①	
	第3回	個別指導②	
	第4回	個別指導③	
	第5回	個別指導④	
	第6回	個別指導⑤	
	第7回	個別指導⑥	
	第8回	個別指導⑦	
	第9回	個別指導⑧	
	第10回	個別指導⑨	
	第11回	個別指導⑩	
	第12回	個別指導⑪	
	第13回	個別指導⑫	
	第14回	個別指導⑬	
	第15回	まとめとふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	論文に関係する文献を読み進める。個別指導の際は進行状況を簡潔にまとめてくる。		
テキスト	未定		
参考文献	個別に紹介する		
評価方法	論文への取り組みかた:20% 論文:80%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
マイノリティの生き方への支援		杉田 穂子 (すぎた やすこ)	
授業の到達目標 及びテーマ	マイノリティ (少数派) の生き方を学んだ上で、支援できることは何か、具体的な方法について考えていく。そのことを修了論文としてまとめていく。		
授業の概要	半期を通して、各自のテーマについての文献を購読し、必要な手続きを経て、修了論文を作成する。		
授業計画	第1回	テーマ・概要についての発表(1)	
	第2回	テーマ・概要についての発表(2)	
	第3回	テーマ・概要についての発表(3)	
	第4回	テーマ・概要についての発表(4)	
	第5回	論文の部分発表(1)	
	第6回	論文の部分発表(2)	
	第7回	論文の部分発表(3)	
	第8回	論文の部分発表(4)	
	第9回	論文の全体発表(1)	
	第10回	論文の全体発表(2)	
	第11回	論文の全体発表(3)	
	第12回	論文発表に向けての準備(1)	
	第13回	論文発表に向けての準備(2)	
	第14回	論文発表に向けての準備(3)	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	各自発表の前には必要文献を購読し、レジメを作成する。		
テキスト	適宜提示する。		
参考文献	適宜提示する。		
評価方法	授業への感想文:30% レジメの作成状況:40% 授業での発表態度:30%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
現代社会における教育の諸問題の検討		鈴木 俊之（すずき としゆき）	
授業の到達目標 及びテーマ	この授業を受講した者は、1. 現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育学的視点から考察するための応用的な知識を獲得する、2. その知識を教育現象に適用し、深い分析を行う、3. 分析した内容を説得的に論文として他者に提示する、事ができるようになる。		
授業の概要	現代社会における様々な教育問題に対して、主に比較教育学的立場から考察し、究明することをねらいとする。論文執筆に向けて前期で行った作業を前提に、説得的で論理的な論文を執筆してもらう。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	受講生による発表1	
	第3回	受講生による発表2	
	第4回	受講生による発表3	
	第5回	受講生による発表4	
	第6回	受講生による発表5	
	第7回	受講生による発表6	
	第8回	受講生による発表7	
	第9回	受講生による発表8	
	第10回	受講生による発表9	
	第11回	受講生による発表10	
	第12回	受講生による発表11	
	第13回	受講生による発表12	
	第14回	受講生による発表13	
	第15回	受講生による発表14	
準備学習 (予習・復習等)	自身のテーマに関する論文などを読んできてもらう。		
テキスト	特になし。		
参考文献	別途指示する。		
評価方法	平常点:30% 論文:70%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
保育学の論文技法		村知 稔三 (むらち としみ)	
授業の到達目標 及びテーマ	保育学の論文を書くために不可欠な技法を身につけ、論文を執筆する。		
授業の概要	上記目標に沿った通常の内容を受講生の課題に応じて具体化する。		
授業計画	第1回	オリエンテーション：演習の目的・内容・進め方の説明、参考文献の紹介など	
	第2回	学術論文とは何か(1)	
	第3回	学術論文とは何か(2)	
	第4回	テーマの設定(1)	
	第5回	テーマの設定(2)	
	第6回	先行研究の検討(1)	
	第7回	先行研究の検討(2)	
	第8回	資料の蒐集と記録(1)	
	第9回	資料の蒐集と記録(2)	
	第10回	論文の構成と体裁(1)	
	第11回	論文の構成と体裁(2)	
	第12回	論文の文章と註(1)	
	第13回	論文の文章と註(2)	
	第14回	原稿の作成	
	第15回	まとめ	
準備学習 (予習・復習等)	学術論文の技法について概論を読んでおく。		
テキスト	初回時に推薦する。		
参考文献	斉藤孝・西岡達裕『学術論文の技法』新訂版(日本エディタースクール出版部、2005年)。		
評価方法	論文:90% 発表:10%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
人間らしく生きることの探求		横堀 昌子（よこぼり まさこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	前期に引き続き、自らの研究に向かう力をさらに育て、研究方法論・内容・論述等を精査し、論文の完成度を高める。		
授業の概要	研究に関する個別指導が中心となる。研究に求められる方法論や執筆手法については個別に助言する。研究のしあげにあたって仲間とともに要点を確認していく。		
授業計画	第1回	授業オリエンテーション	
	第2回	研究テーマ・研究方法・研究内容・構成の確認	
	第3回	個別指導(グループ1)	
	第4回	個別指導(グループ2)	
	第5回	個別指導(グループ1)	
	第6回	個別指導(グループ2)	
	第7回	個別指導(グループ1)	
	第8回	個別指導(グループ2)	
	第9回	個別指導(グループ1)	
	第10回	個別指導(グループ2)	
	第11回	個別指導(グループ1)	
	第12回	個別指導(グループ2)	
	第13回	研究成果のとりまとめと確認(グループ1)	
	第14回	研究成果のとりまとめと確認(グループ2)	
	第15回	発表とまとめ	
準備学習 (予習・復習等)	研究が成り立つための枠組みや方法論を助言を通して確認し、自分で研究を展開し、指導を受けに来るルーティンが基本となる。そこで、研究テーマ・内容・構成・論拠として扱う素材を確認し、論述の精度（何を通して、何についてどこまで言えるのか）を高めていく努力を重ねること。文献・資料を読み、データや論拠を活用する力を、より意識的に獲得すること。		
テキスト	開講時に提示する。		
参考文献	必要に応じ、紹介していく。		
評価方法	研究への取り組み状況:30% 成果物（論文）:70%		

子ども学修了研究Ⅱ		後期 2 単位	子ども学専攻
修了論文研究と子ども学の学びの集大成		渡部 かなえ (わたなべ かなえ)	
授業の到達目標 及びテーマ	子ども学修了研究Ⅰから引き続いて自分の論文と自分の研究テーマについての理解を深める。		
授業の概要	自分の論文を客観的に見直し、また研究テーマに関係する事柄の知識を確実なものとし、関連領域の重要事項にもこたえられるよう学びを深める。		
授業計画	第1回	オリエンテーション	
	第2回	個別指導①	
	第3回	個別指導②	
	第4回	個別指導③	
	第5回	個別指導④	
	第6回	個別指導⑤	
	第7回	個別指導⑥	
	第8回	個別指導⑦	
	第9回	個別指導⑧	
	第10回	個別指導⑨	
	第11回	個別指導⑩	
	第12回	個別指導⑪	
	第13回	個別指導⑫	
	第14回	個別指導⑬	
	第15回	まとめとふりかえり	
準備学習 (予習・復習等)	毎授業時に、1週間の研究の進捗状況を、各自の修了論文研究ノートをもとに報告して頂きます。		
テキスト	授業時に提示・配布。		
参考文献	授業時に紹介する		
評価方法	レポート:60% 進捗状況の報告:40%		

フィールドワーク演習		前期 2 単位	子ども学専攻
聴く、見る、記録する、考える		浅見 均（あさみ ひとし） 岸井 慶子（きしい けいこ）	
授業の到達目標 及びテーマ	①観察者としてフィールドに入る時の身の置き方、倫理を身に付ける。 ②さまざまな観察の方法と観察記録のとり方を理解し、記録することができる。 ③問いを立て、観察記録をもとに考察することを学ぶ。		
授業の概要	本科での保育原理をはじめとする理論学修と幼稚園実習の体験を踏まえ、幼稚園・小学校での短期観察実習を行う。その中で、観察者としての倫理、フィールドにおける身の置き方、さまざまな観察の方法と観察記録のとり方、問いを立てることと考察、について学修する。なお、観察実習の日は授業時間を超えての実習になるので時間を空けておくこと。		
授業計画	第1回	オリエンテーション（授業の目的、進め方、観察場面や対象について） 保育のビデオを詳細に検討する（行動描写記録の作成）（浅見・岸井）	
	第2回	参与観察体験①と振り返り（観察レポート作成）（岸井）	
	第3回	レポート記録をもとにディスカッションと次回の目的、対象の確認について（岸井）	
	第4回	参与観察体験②と記録（エピソード記録の作成）（岸井）	
	第5回	観察記録をもとにディスカッション（読み取り、考察、問題のくくりだし）（岸井）	
	第6回	参与観察体験③と記録（目的に応じた観察対象・場面・方法）（岸井）	
	第7回	観察体験と記録の発表と検討（岸井）	
	第8回	幼児期から児童期の発達の様（岸井）	
	第9回	幼稚園見学 アプローチ・カリキュラムの現状（浅見）	
	第10回	報告及び討議（浅見）	
	第11回	小学校見学 小学校での児童の生活の実際（浅見）	
	第12回	小学校見学 小学校での児童の生活の実際（浅見）	
	第13回	報告会及び討議（浅見）	
	第14回	報告会及び討議（浅見）	
	第15回	まとめ（浅見・岸井）	
準備学習 (予習・復習等)	・観察体験をした時には必ずレポートまたは指定された方法で記録を作成してください。 次回の授業はその記録をもとに行います。		
テキスト	特に定めない		
参考文献	授業内で適宜紹介します。		
評価方法	レポート・記録:60% 討議への積極的参加:20% 発表:20%		